文學博士　井上頼圀
熱田宮々司　角田忠行　監修

平田盛胤
三木五百枝　校訂

平田篤胤全集

東京
一致堂書店

天覽

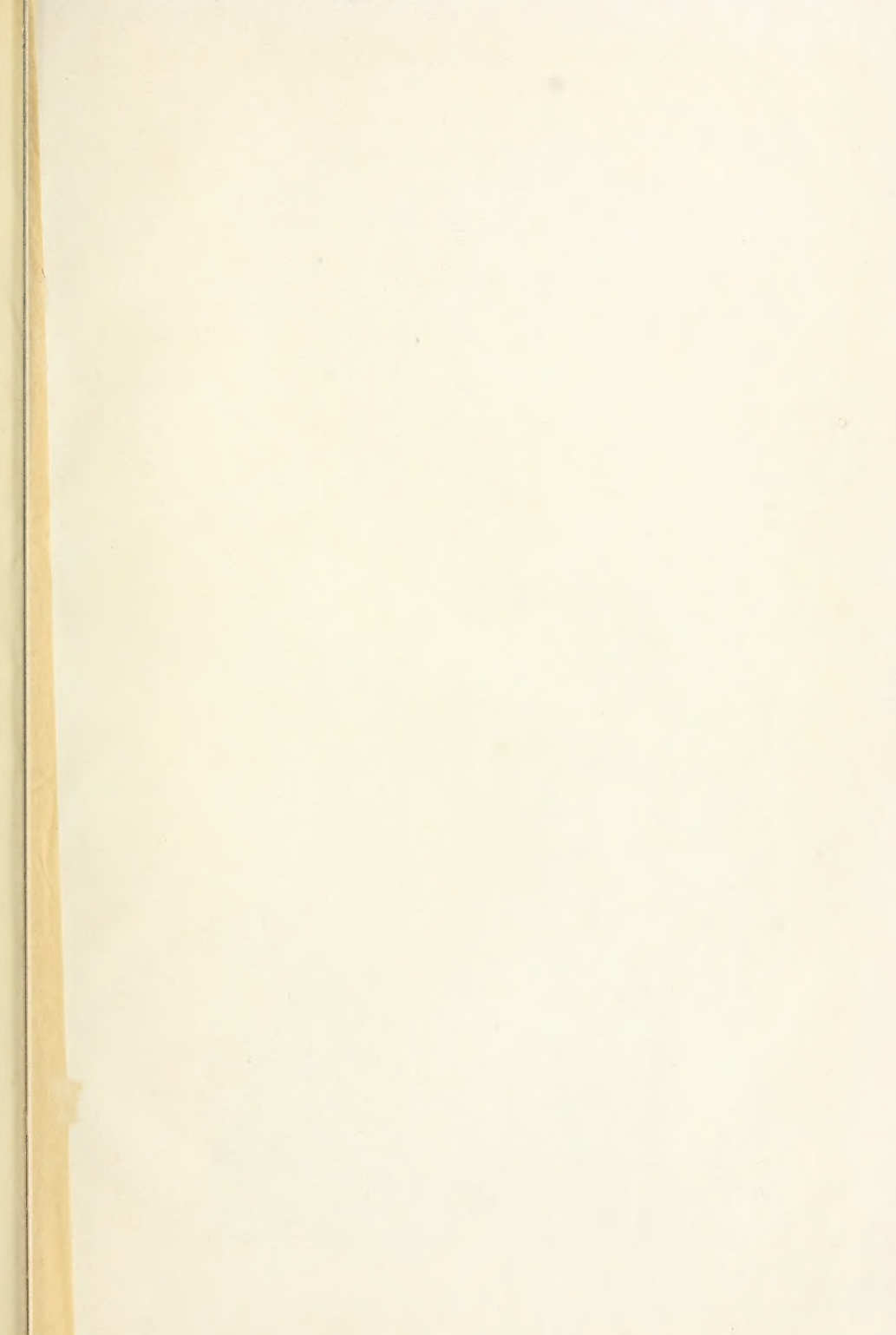
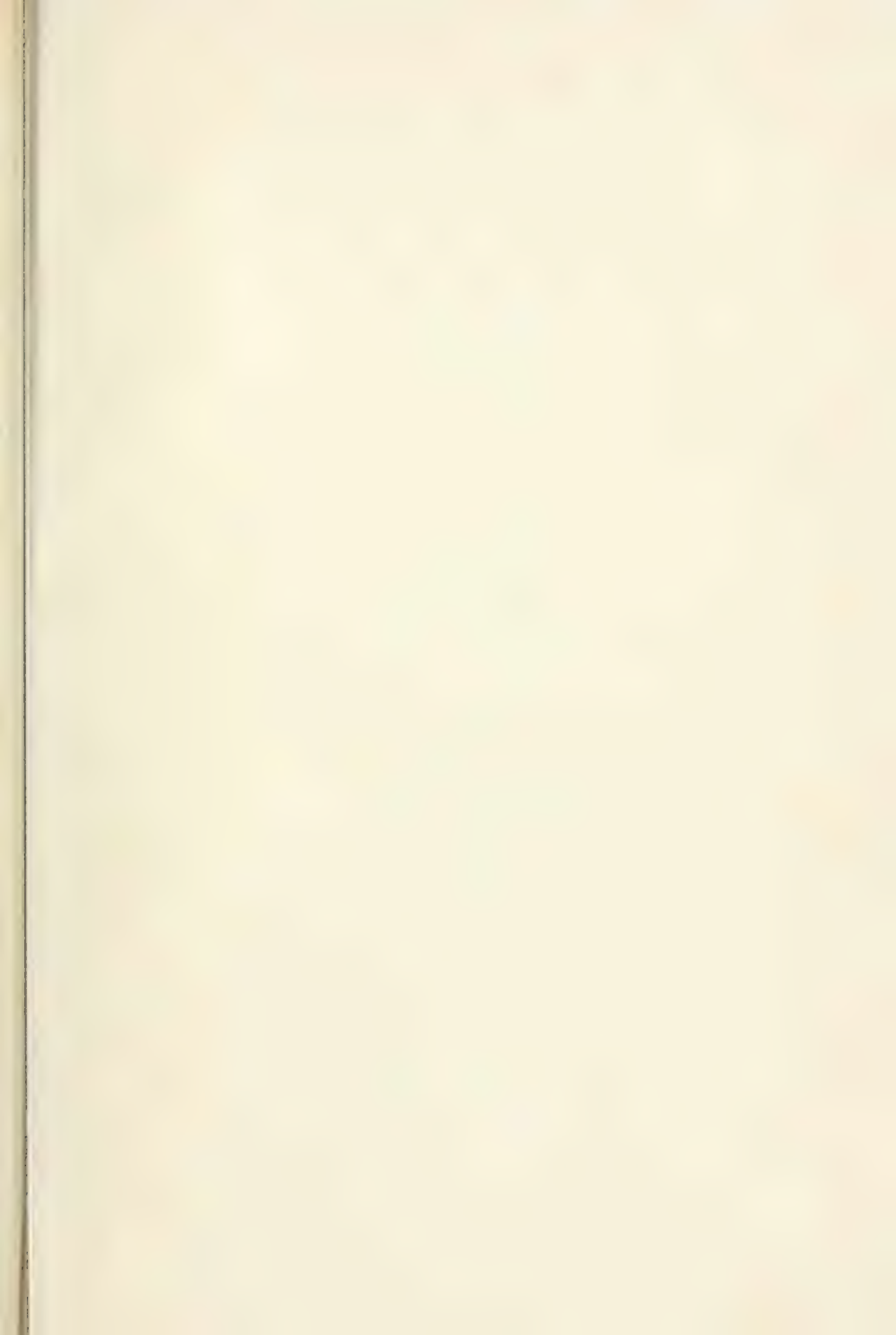
台覽

鐵胤翁肖像

尊朝愛国

勅語

平朝臣鐵胤齋謹書

目次

以上

靈の眞はしら序

たまちはふ。神の大御代の。まなびごとはしも。萬のまなびの。本つ學びにしあれば。かきなすや。玉の小琴の。ことさらに。いそしみまなばずては。學びの道の。本つ柱のたゝざめるを。その學びよ。何のふみをよみてばえけむ。石の上。ふることぶみ(古事記)のしるべぶみ(傳)なも。奥つ藻の、もとも尊きかぎりのふみなる。こを。しづたまき。くりかへしよむぞ。ふることまなびの。本つまなびなりける。しかはあれど。師木島の。大倭心をかたむるふみのいちはやくよむべきふみは。ひらたの我兄が。この靈の眞柱のふみに。しくものぞなき。さるは此ぬし。いまだよそぢにもたらぬよはひながら。そのいと若きほどより。世のいにしへまなびすとふ人々の。おほくは哥ものがたりのあそびごとにのみふけりて。その學びのおやとます。縣居大人。鈴屋大人のさるすぢのことゞもをも。何くれと。あきらめおかれしは。玉鉾の道の。高きにのぼらしむる。あしひきの山口にとて。

ものせられしことゝしも思ひたらぬをうれたみて。我その大人たちの御心を。樛の木の。つぎてあまねく。世にひろめむと。その學びを。わがわざとして。世の哥人どちの。まじらひだにせず。さしこもりいそしみつゝ。本つ學びの古ことゞもを。あきらめられしいさをは。さらにもいはず。からぶみ。佛書。なほにしのはてなるえみしの國のふみをさへに。しら玉つばき。つばら〳〵によみあきらめ。そのよきあしき。一葉二葉のかき葉まで。そのかた人の言やむべく。あげつらひ定めて。くさ〴〵の書をつくりまし。高山の末。みじか山の末より。おちたぎつ速瀬の水戸を。せきとめしことのごとく。たゝへませる。年ごろのいたづきはも。世のものまなぶともの。たまだすき。かけても及ぶべくはあらずなむ。かくいそしみ竟(をへ)て。さきつ年の夏のころより。はじ弓のはじめて。かのおちたぎつ。速瀬の水戸を。せきあくることのごとく。さしこもる金戸おしはり。その學び得られしおもぶきを。人にも。ときさとさるゝことゝなもなりにたる。そは。世にひろごれる道々の。蟹がゆくなすよこさまごとの。そのかりばねに足

ふませじと。根ながらにとき直し。きため直して。年ごろいそしまれしいさをもしるく。そのをしへをうくる人の。日にけにくはゝりて。いま眞盛となりゆくべき。時になもあへりける。そのふみのあるが中に。これの眞はしらはしも。本つふみとえらびたる。いにしへぶみの。神代のまきの。あらましとはいへど。外つ國々の説どもをも。御食のかむかへ。考へあはせて。世の人みなの。しらではえあるまじき。ことのかぎりをときあかし。名たゝるものしり人たちも。いまだいひたらぬことをし。くすしくもおもひ得られて。かみごとの中に。うまこりの。あやにしらえぬ幽事の。かの百たらず八十のくまぐ〵。かき見さぐり見。さとりえまして。本つ學びの柱にとて。突立られしふみになもありける。その八百會の。うしほのそこの。眞白玉の。ひりひがてなる。たまの行へのしづまりの。妙なるかむかへをはじめて。そのこまやかなる説どもは。ふみ見てしらるべく。そは。心さとく。こゝろなほからむ人は。たちまちに。おどろきさとりて。かをりみてる雲霧を。しな戸のかぜの。いぶきはらふことのごとく。むらきものこゝろのをろの。まさやかにはれわたりて。名にしおふ。浦安國のうらやすく。寝もやすくなりなむものぞ。あはれ。このぬしのときごとゞもよ。八意思兼大神の。ここさらに御霊を幸ひたまはずは。いかでかくはと。いとあやしきにつけて。鈴屋大人の。後の世ははづかし。といひおかれつるは。このことにやと。うち出らるゝまでになむ。さはあれ。こは眞玉ぞとをしふるをば　えひろはで　なほいぎたなく。かひやいさごを。玉とひろふぞ。心おそく。こゝろ直からぬ。おほよそ人の常なれば。飛驒人の。うつすみなはの。すむやけくはうけひかで。ひろはぬもまたおほかるべく。はた中には。そのあげつらひのいみじきを。ものにくるへりなど。云ひのゝしるもありぬべし。そはその。いにしへぶみ。また。わくもむのふみを見たらむには。疑ひ思ふふしぐ〵も。春の氷とゝけゆかまし。おのれ。年久しき。學びの友にしあれば。まづこの玉をひろひそめて。よろこびうれしみ思ふあまりに。おもほえず。こゝろ打あげて。うたひけらく。天の下。たひらのあそゞ。いそしくも。玉のみはしら。つきかためける。あない

みじきかも。これのみはしらよ。あないそしきかも。ひらたの我兄が。このふみよ。文化九年といふ年のしはす。つごもりのころ。かくいふは。大江戸なる。遠の朝廷に仕奉る。

堤三五郎源朝風

靈能眞柱序

掛卷母畏支。我皇大御國廼道波。久堅乃。天地能隨。大浪可爾。直支物西阿遣婆。古學須流徒毛。大浪可爾。直支心阿浪坐連婆。皇大御國乃道乎。熟明可爾熟曉禮留事牟。最毛難加流倍志。然乎。烏之鳴東國廼。平田篤胤翁波。大浪可爾。直支心毛氐。菅根之。根毛一向三伏期呂二。古學芝氐。天地之隨。大浪加爾。直支道乎。熟明可仁。熟曉利得士登曾。厥熟明可爾　熟曉利得志隨。靈能眞柱云書乎著旨氐。此築立流柱波毛。古學守留徒乃。大倭心廼鎭也登。導起嚶雞。天地泉乃。三廼差別乎。辭二母與久述。圖爾毛與久畫。靡靈能行方波左々麻々二氐。盡爾。夜見爾歸登波定賀多支。自廼案乎毛。新二解辨氐。彼教能父。學乃兄廼說乎母。捨倍支波捨氐。泥事毛名久。私須流事毛名久。梶音之委曲二。教閉喩志多利。如斯阿禮婆。內日刺京乎初米。天離夷二至麻傳。今與理後波。古學須流徒毛。此靈能眞柱乎。本止築立氐。御床都比能。佐夜伎奈支賀五止。平氣久安氣久。大

倭心乎鎮留。我皇大御國乃道乎。熟明可爾。熟曉利得氐。此翁趣。此書乃功乎。安名尊止。不稱米夜。不仰米夜。

正三位藤原貞直

靈能眞柱上都卷

平田篤胤著

この築立る柱はも。古學する徒の大倭心の鎮なり。然るは。この柱の固は。底磐根に築立て。千引の石の堅固ずては。その言と言ひ。爲と爲す。言にさへ事にさへ柱なくて。術。梁。戸。牖の錯鳴動き。引結べる葛目の緩び。取葺ける草も噪ぎつゝ。夜目のいすゝき。いつゝしき事なも。これに因て出來める。然のみならず。その靈の行方をだに鎮得ずて潮沫の成れる國々。いな醜目。穢き底の國方の國より。荒び疎び來し說に。相率り。相口會むとするも多かるを。見るに得堪ねば。いかでその心の柱を。太高く。磐根の極み築立させ。鎮てまし。幸せじと。思ふまに〳〵。屋船神の幸坐て。築立させし此の柱よ。はたその因に。彼處や此處へ遊行く。靈の行方も尋おきて。鎮に立しこれの柱ぞも。

眞木柱。太心乎。將幸登。進心者。鎮兼都母

古學する徒は。まづ主と大倭心を堅むべく。この固の堅在では。眞道の知がたき由は。吾師翁の。山菅の根の丁寧に。教悟しおかれつる。此は磐根の極み突立る。嚴柱の。動まじき教へなりけり。斯てその大倭心を。太高く固まく欲するには。その靈の行方の安定を。知ることなも先なりける（靈の行方のことは、第十圖の下なる、終の論ひに、委くいへり、）さて。その靈の行方の。安定を知まくするには。まづ天地泉の三つの成初。またその有象を。委細に考察て。また。その天地泉を。天地泉たらしめ幸賜ふ。神の功德を熟知り。また我が皇大御國は。萬國の。本つ御柱たる御國にして。萬物萬事の。萬國に卓越たる元因。また掛まくも畏き。我が天皇命は。萬國の大君に坐すことの。眞理を熟に知得て。後に魂の行方は知るべきものになむ有りける。（その由は圖ごとの下に次々いへるを見て知るべし、）さて。その天地泉の有狀を。古の傳へに因て知べき論ひは。吾が學びの兄なる。服部中庸が三大考に。天地國土の有象。その成れる初の狀など。外國の說どもは。いはゆる佛にもあれ。聖人にもあれ。皆己が心を以て。智の及ぶだけ考度て。必ず如此あるべき理ぞと。おしあてに定て。造りいへるものなり。そが中に。天竺の國の說などは。たゞ。世の女童を欺くが如き。妄說なれば論ふにも足らず。また漢國の說などは。何もやゝ。物の理を深く考へて。造れるなれば。打聞には。げにもと信らるゝが如くなれども。熟く思へば。是も亦みな妄說なり。（然るは、その所謂、大極、無極、陰陽、五行、八卦など云ふ理は、もと無きことなるを、此方より、その名どもを作設て、何事にも是を當て、天地萬物みな、是らの理によりて成れる如く、これらの理を離るゝことなきが如く、云ひなせども、すべて物の理は極りなきことにて、更に、人の智の、度り盡すべき限に非れば、理を以ていふ說は信られず、人の考へて知るべきは、たゞ目の及ぶ限り、心の及ぶ限り測算の及ぶ限りこそあれ、その及ばぬ所に至ては、いかに考へても知るべき由なし、然れば、この天地の成れる初、また、かくの如く成竟たる、次々の狀なども、八百萬、千萬歲の後に生れたる人の、いかでか、その初をよく知ることの有らむ、）こゝに吾が皇大御國は

殊に。伊邪那岐伊邪那美二柱の大神の。生成賜へる御國。天照大御神の生坐る御國。皇御孫命の。天地とゝもに。遠長に所知看御國にして。萬の國に秀で勝れて。四海の宗國たるが故に。人の心も直く正しくして。外國の如く。さくじり僞ることなかりし故にや。天地の初の事なども。正しき實の說有て。少も。私のさかしらを加ふることなく。有のまに〳〵。神代より傳はり來にける。これぞ。虛僞なき眞の說には有りける。(そも〳〵、かの漢國の說などは、これを聞に、理深く聞えて、信に然有べしと思はれ、皇國の傳は、いと淺はかに、何の理も無きが如く聞ゆれども、彼は妄說、此は眞實なる故に、後の世に至り、もろ〳〵の考へ精くなるに隨ひて、かの虛妄說どもは、やう〳〵にその非の顯れゆくを、この眞の傳へは違ふことなし、然云ふ故は、近き代になりて、遙に西なる國々の人どもは、海路を心にまかせて普く廻りありくによりて、この大地のありかたを、よく見究て地は圓にして、虛空に浮べることなど考へ得たるに、かの漢國の舊き說どもは、皆いたく違へることの多きを以て、すべて理を以て、おしあてに定むることの、信がたきを知るべし)さて。その古の傳への趣は。初に。虛中に一物の成れりしより次々。その云へることゞも。凡て。今の現の有狀に合せ考ふるに。少も違ふことなし。(これを以ても、古の傳への眞なることは知るべきなり、さて、かの遙西の國人は、右の如く、此の大地の有象をよく見究め、また大虛空なることゝもをもなほくさ〴〵精密に考へ得て、漢人の說とは、はるかに勝れることども多けれども、それもなほ、測筭の及ぶ限りにこそあれ、その及ばぬ所は、今の現の事だに、なほ知り盡すこと能ざること多ければ、まして、大地日月などの、かくの如く成れる初は、知るべきやうなし、思ふに、その國々にも、各々その說は有るべけれども、それもまた、皆例の後の人のおしはかりにて、かの天竺或は漢國の說どもの類にぞあるべき。皇國の傳へは、さらにその類に非ず、(○篤胤云、御國の古の傳へは、かしこくも、天地をすら造り坐し、神魯企神魯美命の、大御口づから、傳賜へる天詔事なること、予たしかに考へ出たり、そは第十圖の下にいへり、斯在ば、正實にして違ひなきこと、實に

しか有るべきことなり、)そはまづ皇國は。神ながら言擧せぬ國と云ひて。萬の事外つ國の如く。かしこげに。言痛く論ひさだすることなく。たゞ大らかなる御國ぶりなるが故に。天地の初の說なども。外つ國の說どもの如く。これは此の故にかくの如し。それは云々の理によりて。かくの如しなどやうに。細に言痛く。說諭したる物には非ず。たゞ有りしさまのまゝを。大らかに語り傳へたるのみにて。上代にいまだ外つ國の說ども。來り雜らざりしほどは。世の人みな古への傳へ說を守りて。更に異なる論ひもなかりしかば。また殊に論ふべきこともなかりしに後に外つ國の。小ざかしく言痛き說ども。入り來りまじりては。人みなその說どもの。うはべの言美きに惑ひて。古への傳說の趣きをば忘れはてゝ。ひたぶるに。外つ國の說にのみ。依ることゝぞなりにける。されば。神の御典を說く人も。みな。その外つ國の說にのみまつはれて。古への趣きを得たる人。世々に一人もなかりけり。こゝに。吾が本居の大人。はやくその非なることを悟りて。少も外つ國の意をまじへず。もはら皇國の古の傳へに依りて。その趣きを委曲に考へ得て。古事記傳を著し給へるにぞ。神代よりの傳への趣きは。ふたゝび。世に明けくなりにける。中庸をぢなき身なれども。この天地の初めのさま。またその有狀など。かの古事記傳によりて。古傳說のおもむきを見るに。さらに人の造りいへる。かの外つ國の妄說どもの及ぶところにあらず。眞にかぎりなく。深く妙なる味ありて。(篤胤云、眞に然在、眞にしかり、さるは、予この書を、如此作るばかりに深く考へつれど、なほ、千重の一重にやこそ思はるゝ、)神代の傳說の。世に卓越れて尊きことを悟りぬ。如此して。また己が思ひよれることゞもの有る。その次第の趣きを十箇の圖にかき著し。そのことわりを書き添へつ。さてその有やう。かの生さかしき理もて云へる。外つ國ざまの說はすべて取らず。もはら皇國の傳へに隨ひぬるを。日ごろただ漢意の說にのみなれたる人。いぶかることなかれ。(此は三大考の始に記せるなるを、その云得て、この書にもことわらでは、えあるまじきことの限を摘出つるなり、此の以下にも、考に云くとて擧たるみなしかり、さて中庸とは、いまだ相見ぬなかなれど、

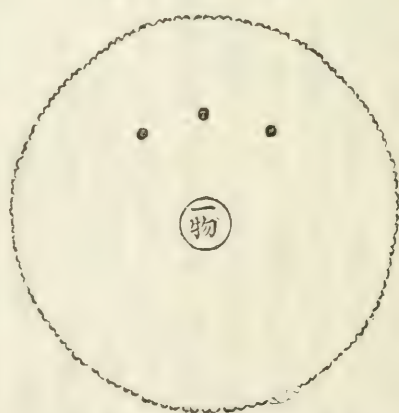
その著はせる三大考のふみは、師の翁の、めづらかにも考へ出たるかも、くすしくも考へ出たるかも、と稱たまへる如く、いともめでたく、比類なき考へを。發明出たる書なれども、なほ古の傳にも、くさくさ混たる說のあるを辨へねば、いまだ考へ及ばざりしことの多かるを、予新に古史を撰たるにつけて、その非どもを悟り得て。またこの書を著すになむ、そは予が著せる圖どもの、多くは、考に著せる圖どもと異なるをもて、その相違を知べし、また考なる說の云ひ得たる限は洩さず取りて、その非なる由もいはでは人の惑ふべく、默止がたきことのみを舉辨へて、准へてその非の灼然ことゞもはすべて洩しつ、抑かのぬしはも、學問の道には吾が兄なれど、道の爲には師父にも讓らぬを、まして兄をや、はた、彼の考の說の半をすぎて惡く、予がこたびの考への、半すぎ考へ得たらむも、實は中庸の、既くかの圖を著し置れたるに因てこそ　予が此の圖も出來つるなれば、彼のぬしの功の、おほはるべくもあらじかし、よしさばれ、甚かしこくなむ、)といへる。眞に動まじき論ひにて。予いま新にいはむも斯在べければ。中庸の論を。其儘に記たるになむ。

此圖の內は大虛空なり、圖は假りに圖るのみぞ、實に此の物ありとにはあらず、次々なるも皆然り、

○三柱の神の座位は、古の傳への次第に依て、假りに如此書るのみなり、必ずしも拘るべからず、

古傳曰。古天地未ㇾ生之時。於二天御虛空一所二成坐一神之御名者。天之御中主神。次高皇產靈神。次神皇產靈神。此三柱之神者。並獨神成坐而。隱二御身一矣（ここに、古傳曰とて舉たるは。予諸古典に見えたる傳どもを通考へて、新に撰びたる古史の文なり。其を古史曰とて舉むは、古書めきて、中々に、人の論ひいはむことのいかゞなれば、如此は記しつ、次々に

古傳曰と擧たるみなこれに傚ふべし、さて如此古傳を撰び定めたるよしは、古史の或問と云ふを著はして、それに委くいへり、またその古史の傳をも著せるなれば、多くはそれにゆづりて、此の書には、その大意をのみいへり、次々に古史傳といへるはそれなり〕〇此の時いまだ天も地も有ることなく。たゞ大虛空なり。〔天と地との初めは、この次の傳へを見て知るべし〕さてその大虛空に。この三柱の神の坐ませる也。〇隱二御身一矣とは。この三柱の神は大虛空に成坐て。天に坐ましつれば。この國土に成坐し神々とは別に坐し。はたこの國土よりは。その御形の見え坐さねば。如此語り傳へたるなり。〔下これに傚ふべし〕〇高皇產靈神皇產靈神は。いはゆる。神魯企神魯美命に坐て。高皇產靈神は男神に坐し。神皇產靈神は女神に坐しはたこの二柱神の御上を熟に察奉れば。高皇產靈神は神事の中の顯事を掌坐し。神皇產靈神は。神事の中の幽事を掌坐すこと。古史傳に委くいへるが如し。

第二圖

〇圓の中なる●●●は第一圖に擧たる三柱神なり

古傳曰。爾於二大虛空之中一。一物生而。其狀貌難レ言。如三浮雲之無二根係之處一而。海月成漂蕩之時云々。〇この生れる一つの物は。天地泉の三つに分りたる物なり。〔そは、次々の圖を見て知るべし〕さて考に云へる如く。この一の物の虛空に生初めしも。其が分りて天地泉と成りて。第十圖の如く成了り、またこの次々の神等の生坐るも。悉くかの二柱の產靈大神の產靈によりて生成るなり。その產靈は。いともいとも靈く奇く。妙なるものにして。更に尋常の理りを以て。測知る限りにあらず。〔然るを漢人など、この天地の始めを、かの大極陰陽など云ふ小理を以て、かしこげに說作は、皆こ

の産靈の神靈によりて、生ることを知らざる故の妄說なり、○或人吾師に問けらく、世にあらゆる萬の事は、その本みな、産靈神の神靈に生出るといはゞ、その産靈神は、また何神の御靈によりて、生坐ることぞ、師曰く、この神等は、何れの御靈によりて、生り坐せるといふことは、傳へなければ知りがたし、是のみならず、神代のこと、また常の世間の事の中に、その理りもその事も、量知がたきはなほ多かり、然るに、その知りがたきことを、强て知らむと思ひまた知りがほにとかく推量て云ふは、みな異國の道のさだなり、異國の道は、もとより佛聖人などは、おの〳〵萬の物萬の事の理りを、悉に知盡したる物と立たる道なれば、何事にても、知りがたしといひては、其の道立がたきを、神の道はさらに然らぬことにて、神といへども、え知りたまはぬ事は有て、伊邪那岐大神すら、天つ神の御心を問給ふなれば、まして凡人は、もはら古傳を守りて、少もさかしらをまじへぬ道なれば、傳へなき事は、たゞ知がたしとして有るぞ、もとより道の體なりけるといはれしは實に然る事にて、またその天つ神すら大御心と定かね給へることは、太占して卜問ひ給ひつ、なほこの神等、成坐すとはいひ傳へぬれども、此は天地をすら造り出給へる神に坐せば、その初めは、何神の御靈に因て成り坐せるとなく、かぎりなき前より、坐しけむと思はるゝ由あり、そは次の圖の下にいへるを合せ考ふべし（何を以て。此の神の天地を造り給へることを知るぞなれば。日神月神の御託言によりて知らるゝなり。そは顯宗天皇の御紀に。三年二月。阿閉臣事代。任那に使されしとき。月神、人に着て詔く。我祖高皇産靈神は。天地を造りましゝ御功あり。民地を奉るべし。我は月神なり。もし請しのまゝに獻らば。成福へてむと詔り給ひき。事代これに由りて。京に還り。具に奏しき。歌の荒樔田（山背國葛野郡にあり）を奉り給ひて。壹伎縣主先祖押見宿禰をして。侍祠らしめきと見え。また。四月に。日神人に着て。阿閉臣事代に詔く。磐余の田を。我祖高皇産靈神に獻れと詔給ひき。（日の神の、この御託宣に、産靈神の、天地を造り給へる、御功のことを、詔へることのなきは、月神の御さとし言にゆづりて、省かれたるものなり、）事代かくと奏しゝかば。

神の乞しのまゝに。田四十町を獻り給ひて、對島下縣直をして。侍祠らしめき。とあるを以て知るべく。(師云く、此の時の由縁と見えて、山城國葛野郡に、葛野坐月讀神社、名神大月次新嘗、木嶋坐天照御魂神社、名神大月次相嘗新嘗、大和國十市郡に、目原坐高御魂神社二坐、並大月次新嘗、磐余は十市郡なり、對馬下縣郡に高御魂神社、名神大、阿麻氐留神社など式に見えたり、抑、如此後世まで、その處々に、重く祭祠り給ふを以て、彼神着の詔言の、おぼろげならざりしほどをも、産靈神の御功の大なるほどをも、思ひはかるべし、○篤胤案に、目原坐高御魂神社二坐とある一坐は、神皇産靈神に坐すなるべしこれにつけてなほ思ふに、月神の御さとし詔に、高皇産靈神とのみ宣へるは、もと高皇産靈神皇産靈神と宣ひけむをその一柱を畧きて、傳へたるなるべし、書紀には、かゝる類のこと、をり〳〵見えたり、)

また。この二柱の神の御名の義と。神代の事實の上にて。著明し。(なほ、漢土、天竺、その餘の國々にも、訛ながらに、その傳への片端は存りて、其が中に思ひ合さるゝこともまゝあり、そは、鬼神新論に記せる事どもを察て知るべし、但し、その外つ國どもの傳への訛れる故はいかにといふに、此は、皇國は萬國の祖國なるが故に傳へ正しく、外つ國どもは、すべて末國の枝國なるが故に、正説の傳はらざればなり、此は譬へば宮處に有りけることを、遠き田舍にいひ傳へて、そは元の都の說とは違ひて、詳ならぬとおなじことわりなり、また皇國の古傳を訛りながらにいひ傳へて、其國々の事の如く云ふは、此も都にて有りし事を、遠き田舍に聞き傳へて、本をば失ひ、其地にて有りける事の如く、語傳ふるとおなじ事なり、)○或人問。その始めて成れる物の質はいかなるものぞ。答。其は傳へなき故知りがたし。然れども。此は天地泉の三つに分りたる物なれば、其が混成れる質なるとは知られたり。

古傳曰。於二大虛空之中一一物生而。云々漂蕩之時。自二其中一有下狀如二葦牙初生一於二泥中一而崩騰之物上。因二其物一而始所二成坐一神之御名者。宇麻志葦牙比古遲神。次天之底立神。此二柱神亦獨神成坐而。隱二御身一矣。

○かの初めて成れる一つの物の浮雲の如く。虛空に漂蕩る其の中より。葦牙の如くにして。萌上れる物

第三圖

宇麻志葦牙比古遲神

天之底立神

一物

圖の中の上頭なる●●●は、第一圖に擧たる、三柱神なること上の如し、〇卷に、此圖に根の國のや、萠初たる狀にかけるは非なり、其は、次圖の下に云へるを見るべし、

に因りて成坐るを以て。宇麻志葦牙と御名に負賜へるなり。（葦牙とは、葦のかつ〴〵生初たるを云ふ名なり、此は、その物の形の葦牙に似たるなり、たゞ萠上るさまの似たるのみにはあらず、此に因りて成坐る神の御名にしも、負せ奉しを以て、その甚よく似たりけむことを知るべし」と師のいはれつる、眞に然ることなり、また、この神を、始所成坐としも語り傳へたるは、案に、上に擧たる三柱の神も、成り坐とは有れども、天地の、いまだなかりし前より坐つれば、その成坐し始を知るよしのなきを、此神をば、既に、三柱の神の坐て、その成始を知看けむこと灼然し、故、此の神を、始所成坐とは語り傳へしなるべし此によりて思ふにカミとはカビモエといふ言の轉畧りたるにはあらざるか、さるは此の神は成り初めの神に坐すが故にカミとは、うちまかせて此の神を申せるが廣く餘の神々にも申すことになりけむと思はるればなり、陸奥國のはてにては、今も神をば、カムイまたカモエともいふとぞ、此は、古言のたま〳〵殘れるにもあるべし、）さて。その萠上れる物は。天と成べき物なり。何を以て知るぞなれば。此に因りて成坐る神は。比古遲神と。天之底立神と二柱に坐すを。その天之底立と稱す御名によりて。その物の天と成れること灼然し。そは天之底立とは。其物の天と成れる。その底に成坐る故。かく御名に負給へるなり。さて阿米と云ふ言のよしは。もと葦牙の如くして萠上り。成れるものゆゑ。阿志母延といふ言の。約れる言なるべし」と。師のいはれつる眞に然るべし。さて。この阿米は。（第五圖に著せるごとく。）後に地と斷離れて今見放る目。やがてこれなり。其は漢國にても。古く天といへるは。

即「日のこと、見ゆれば。阿米に天の字をあてたるは。熟くあたれり。然るを。はやくより。天つ日。やがて天なることの。本義をうしなひて。虚空を阿米と心得あやまり。萬葉集にも「久方の。天ゆく月を云云」また「天原。振放け見れば。度日の陰も隱ろひ。照月の。光も見えず。」などやうに詠るは誤なり。(さるはこの哥ごもは、虚空を天と詠るにて、古の義には背へればなり、この類なほ多かり、殊に、天の原とは、天上にて、その御國のことを、いふ時にのみいふ言なること師翁の委く辨へられたるが如し、)おなじ、萬葉集の歌にても。「三空往く。月讀壯士。と詠るなどぞ。古の義にかなひて。正かりける。(但し漢國にても右にいへるごとく、天とはやがて日のことなるを、漸に心得ひがめて、虚空と天とを、一つ

第四圖

天

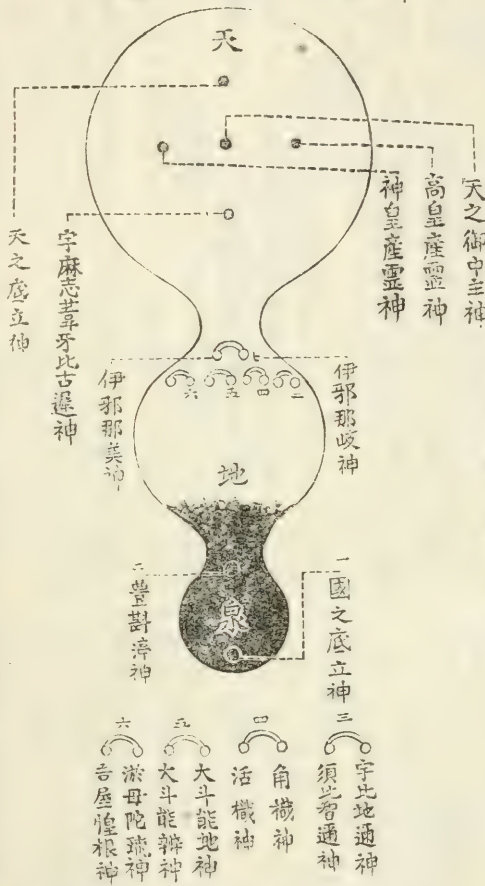
天之御中主神
高皇産靈神
神皇産靈神
宇麻志葦牙比古遲神
天之底立神

以上五柱稱二別天神一

伊邪那岐神
伊邪那美神

地

泉

一 國之底立神
二 豊斟渟神
三 宇比地邇神 須比智邇神
四 角杙神 活杙神
五 大斗能地神 大斗能辨神
六 淤母陀琉神 吾屋惶根神

○是より次々の圖、皆外圍を畧けり。紙の地を虚空と見るべし、○地と泉とに成坐る神々の座位、三大考と異なり、
○黒白に分たる、黒なるは、隱二御身一矣とある神等なり、
○よみには、夜見と書より餘に、あつべき字なし、泉の字は更によしなし、然れども、つかひなれたるまゝに、借てかけるなり、拘はるべからず、

に混らし來れりと思はるゝを、世々に一人も、こゝに心つけるものゝ、なかりしはいかにぞや、其は、鬼神新論に、具に論へり、倭、漢、おなじことの同じ謬になむ有りける）なほ。天のことは。第十圖の下にいへるを見るべし。（一或人問。天の質はいかなるものぞ。答清明して。譬へば。水晶などの如き質と見えたり。其は第六圖の下に擧たる古傳に。徴となすべきことあり。なほ。彼處にいふを見よ。（二大考に、天つ日の質は火の精きものぞといへるは、いみじき非言なり）

古傳曰。次。(於)(其如)(浮雲)(漂)(在)(物)(之)(根)亦生一物矣。因其物而所成坐神之御名者。國之底立神。次豐斟渟神。此二柱神亦獨神成坐而隱御身矣。次國地稚在之時。所成坐神之御名者。宇比地邇神。次妹須比智邇神。次角樴神。次妹活樴神。次大斗能地神。次妹大斗乃辨神。次淤母陀琉神。次妹吾屋惶根神。次伊邪那岐神。次妹伊邪那美神（上件、自國之底立神、至伊邪那美神並稱神代七代、上二柱者、獨神各云一代、次雙坐十柱者、各合二柱而云一代也）○かの漂へる一の物の中より。かの葦牙の如く萠上る物の。漸に騰り漸に天と成り。その跡に殘れる地となるべき物は。未堅まらず在し時。その底にもまた一の物の芽生て。それ即泉國となれるを。後に地と斷離れて。いま見放る月即これなり。（この事なほ第十圖に著して、其下に委く論へり）此を夜見國ともいへる由は。圖に著せる如く下方に成て。大地に隔てられて天の光りを受ざりし故に。その成始より闇かりしゆゑに。夜見國とはいふなり（さてこの夜見といふに、黄泉の字をあてたるより、いたく混謬れる説のある、そは第十圖の下に、具に辨へたるを見るべし）かく始は。地の根底に成たる國なるゆゑに。根國底國とも。下津國とも。根之堅洲國とも云ふなり。さて豐斟渟神は、その芽下る物に因りて。成り坐せる神なり。（そは、葦牙の如く萠上る物に因りて、宇麻志葦牙比古遲神の、成坐ると同例なり）御名の豐は美稱なり。斟渟とは。字はともに借字にて。斟は物の集り凝る意と。芽す意とを兼たる言にて。そは根底國の。下方に凝成る狀より。負給へる御名なり。さて渟とは主てふ言を略きていへるにて尊稱なり。（この神の御名の、葦牙比古遲神と

まをす御名に似たるを思ふべく、またこの御名の義によりて、彼の神と相對て、上と下とに成り坐せることをも思ひ定むべし）さて。夜見國は。かの一の物の底に凝成りて。國之底立神は。その底に成り坐せるなり。（此は國之底立とまをすにて著明が上に。天之底立と相對へるを思ふべし、古事記傳、三大考の說、ともに非なり、そは或問にいへり）さてこの件の結にも。隱ニ御身ー矣といひ傳へたるは。この二柱の神は根の國に成坐しつれば。この國土に成坐しし神々とは別に坐し。はたこの國土より。その御形の見え坐さねばなり。（そは五柱の天神の、件々の結結に、隱ニ御身ー矣と語り傳へたると同じ例しなり、もし、考に著せる坐位のごとくならむには、この隱ニ御身ー矣といふことは、吾屋惶根神の下にあるべきことなるをや、是につけても、古事記の傳の、おごそかに正しきこと、仰ぐべし尊むべし）〇この國土に始めて成り坐るは。宇比地邇神須比智邇神に坐すなり。然るは。宇比地とは。初土の義にて。（然るを宇比地とまをすは、同音の二つ重なるをば、約めて一つにいふ古言の格なり、宇比地の說、師說と異なり、合考ふべし）かの其狀言ひがたかりし一の物の。混成れる中より、天は萠上り。泉は垂下りて。跡に殘れる物の。始て土の象を成して。なほ稚々しきほどに成坐つれば。かく御名に負給へるなり、須比智とは。沙土の意にて。かの一の物の。やゝ土の象を成せるが。漸に沙土の形の分れたるより。負給へる御名なるべし。（師說と少く異なり、合せ考ふべし）邇とは。この二柱神を。亦傳に。埿土根命。沙土根命ともあれば。泥と通ひて。ともに尊稱なり。（角樴神より、伊邪那美神まで、八柱の神の御名は、この圖に、さしも用ふることなければ、その御名の解はもらしつ）〇さて。國之底立神より以下。伊邪那美神までを。俗に。天神七代といふの非なる由は。師說に委く見えたり。〇或人問ふ。夜見國の質はいかなる物ぞ。答ふ。これまた傳へなければ。知がたし。然れども。天に比べては。重濁れる。この大地の底に凝り成れるなれば。彌々益々重濁れる質とはおもはるゝなり（三大考に、月泉は水の精きものぞといへるは、いみじき非なり）また伊邪那岐大神の。いな醜目穢き國ぞと宣へるをおもへば。いとも汚穢き

國なりけり、

第五圖

○是より次々の圖には、天に成坐る神、地に成坐る神たち、其圖に用あるたのみ擧て、餘は略けり、○すには天と地と、此時なほ連きたる状に圖るは非なり、辯は下に申せり、

古傳曰。爾。其天神諸之命以而。詔命伊邪那岐命伊邪那美命二柱神。可修理固成此漂在之國而。賜天之瓊矛而事依矣。故二柱神。立天之浮橋而。指下其瓊矛而。畫青海原則。潮滷々然畫成而。引上之時。垂落於其矛鋒之潮。自凝積而成嶋矣。是於能碁呂嶋也。二柱之神天降坐于其嶋而。以其天神之所賜之天之瓊矛。衝立于其嶋而爲國之御柱而化作八尋殿矣。故其瓊矛後者化爲于小山矣○この天神諸の命もちて二柱神にこの國土を固成せと詔命給へる時は、天と地とは既に斷離れたるほどのことなり。其は、何を以て知るぞなれば。天神の此の言に依て知らるゝなり。然るは。天神もろ〱高く天上に坐て見下し賜へば。この國土の漂在がよく見え坐し趣きの御言なること。此と指し詔へるにて著明なり。もし此の時もなほ。天と地と斷離れざらましかば。その根と在る國土の漂蕩たらむには。天も共に漂ふべき理なるを。いかで此國土をさして。此漂在國とは詔ふべき。さて。しか天と地とは斷離れたりし故に。二柱神は。天之浮橋に御橋發して。畫探り給へるなり（浮橋のこと。考の說と甚く異なりそは第十圖の下に委くいへり）○青海原とは。やがて天神の此漂在國と指し詔へる物のことにて。其はこの國土の稚在しほどの稱なる由も、また青海原といふ言の義をも、古史の傳にいへるが如し、○二

柱神に。諸々天神の賜へりし瓊矛といふは。玉鉾と云ふ如く。玉もて飾れる矛なるべしと師のいはれたるが如し。(但し、古へはかゝる物にも玉をかざれる常のことなりといひて、たゞ何となき飾とのみ思はれしは、いまだ委からず)さて、その玉を飾れることは。妙なる由あり。其は五柱の天神ことには產靈神の。產靈の御靈を。二柱の神に幸ひ依し賜ひ。國土を功しみ成させ賜はむとて。其御靈の祝の飾に飾りたまへる物なり。(此は、予たしかに考へ得たる說の有て。そは、第八圖の下に擧たる、伊邪那岐命の天照大御神に、御頸珠を依し賜へるところに、委く云へるを合せ考ふべし)但し此は。瓊を飾れる謂由なるを。その御矛を賜へることは。この矛を以て浮雲なす堅まらざりし青海原を畫成し衝立て、中心の固柱とせよとの御量なるべし。然在ばこそ二柱の神の。畫探り賜ひて。自然に凝成れる。淤能碁呂嶋に衝立て。國中の御柱とは爲賜へるなれ。然在ば。この大地の中心は。この賜しゝ。御矛の鋒になも有りける。(如此て、その柄の方は、小山となれるなり)かの、天となるべき物は萌上り去り、泉となるべき物は垂下り。その中間に殘りて。大地となるべき物の。なほふは〳〵として。固まらざりしが。この御矛を衝立賜へるによりて。締り固りつるなり。天神の。賜はるべき物も多在む中に。矛を賜へること。甚も妙なる。深き理のなくてあらめや。(古へには、軍發などの時に、矛を賜へることも、この謂れに因るなるべし)かゝれば。この大地の廣大なる中に皇御國はこれ國土の元本。また淤能碁呂嶋は。この大地の固たる。御柱たる地になむ有ける。(一の傳に以㆓淤能碁呂嶋㆒、爲㆓國中之御柱㆒、とあるも、これにてきこえたり、漢籍にも天柱坤軸などいへるも、この古傳の訛りと思はるゝなり、○磤馭盧嶋日記といふものに、この嶋は、淡路洲の西北の隅に在る胞の嶋これなり、俗常には胞嶋と呼び。また磤馭盧嶋の名を存す、此の島の岩に、圓く玉のごとく湧出したる石、幾千といふ數をしらず、其の形表は金氣を以て包み、土砂を含む、まことに、金輪を以て、地輪を縮鎭たる形なり、その外、產盥、釜、杓子などいふ、世帶道具の形、みな自然石に具はり、島の風景樹木の葉色、岩の滑澤なること、畫にも書にもあら

はしがたし、その地方に[illegible]島あり、二神交道を見そなはし賜ふ跡を殘せり、その邊に、式なる岩屋の神社あり、この島を昔より魔所なりと云ひ傳へ、恐れて登る人なきよし申傳ふ」と見えたり、此は近頃遠江人の許より得たるを、此に要とある所々を摘て記せるなり、その玉の如く、湧出したる物ぞ、彼の御矛に飾りたる、御親玉の化れるなるべし、また昔より魔所のよしをいひて、人の登らぬは、神の御威のいみじきを。俗人は然云ひつべきことぞかし「大地の大眞柱ぞ。世の人よ、おほにな思ひそ、おのごろ島を「この柱かため坐ずは。世にありと、ある事物の成出めやも、」うべ皇大御國の地勢の堅固く。また生れ出る人も何も。萬國に卓越たることを。熟思ふべし。よく考ふべし。(なほこの瓊矛のことにつきては、いひも得がたき妙なることを悟得たるを、そは古史傳にいへり、)

古傳曰。於是伊邪那岐命。問伊邪那美命曰汝之身者如何所成乎。則。答曰吾身者成々而不成合之處一處在也。伊邪那岐命詔曰。我身者成々而成餘之處一處在也。故以此吾身之成餘之處。刺塞汝身之不成合之處而。思將生成國者如何乎。詔則。伊邪那美命答曰然將善哉。云々。而後御合坐而至其御産之時。而。先以淡路之穗之狹別島為胞而。生御子大倭豐秋津島。云々。故此八島。因先所生之國。而。稱大八島國也。(一傳無伊伎島津島、有越島大島而云、即壹岐島、津島、及處々之小島者

第六圖

○此圖は、二柱の神、國を生成し給ひ、又外國どもゝ、成て、國土と淨と分れたるうへの有狀なり、
○外國どもの在り處、また大小其の數など、此の圖に拘はるべからず、たゞ假にたかたの狀を著せるのみなり、但し皇國の在處は圖の如し、

皆此潮沫之凝成者矣。)云々。爾二柱神。既生覓國。而後。云々。伊邪那岐命詔曰。吾所生之國。有狹霧而。薫滿哉。而於吹撥之御氣所生坐神之御名者。志那都比古神。次志那斤辨神。此者風之神也。○考云二柱の神の此の大八洲國を産給へること。世の人漢意を以て見る故にこれを信ずして。種々なまさかしき說あれども。そはみな私ごとなれば取るにたらず。たゞ古の傳への隨に心得べし。たゞ人の兒を産が如く。御腹より生給へるもの也。但し。その委曲き狀はいかに有りけむ。傳へなければ知りがたけれども。今これを思ふに。まづ天より降り坐す時に。天の浮橋に立して。瓊矛を以て。かのたゞよへる物を掻成し給ひて。引き上げ給ふ時。其矛の鋒より滴り落る物。凝て淤能碁呂島となれる。その矛の滴りは微なる物なれども。其の物に因て。漂へる物聚り。凝堅りて廣く大きになりて。一つの島とは成れるなれば。大八洲を産給へるもその如くにて。まづ二柱の神の交合の滴り。女神の御腹の內に合凝成りて。さて。御腹より産出し給ふところは。微小き物なれども。其の物にかの漂へる物寄聚り。凝て國土

とは成れるなり。近くは人の身の成る初めにても知るべし。父母の交合の時に。滴る物は微なれども。月を經て兒の形となるにあらずや。(また、人も鳥獸魚虫なども、生れ出たる時はなほ小けれども、漸に大になる、其の中にも殊に蛇などは、生れたるほどは尋常の小き虫なるが、年久しく經て、大蛇となるに至りては、ことの外に大きなる形ならずや、また草木もおなじことにて、生初たる二た葉の時はいと小さけれど、年を經ては、雲ゐをしのぐ大木となるなどをも思ふべし、○篤胤云ふ、中庸の此の說の、實に然ることなるにつけて、國土の、漸に大きになれる理をなほさとさば、今試に小き山を築たらむに、天つ日の蒸して、おのつからに草木の生出て、その枯たる枝、また落葉などのつもりて土と化り、また蒸生してはかく有りつゝ、年にけに、その小山の漸に大きになりゆくめる、國土の漸に大きになれるも、實はかゝる理りのものにぞ有りける、なほ巨細に考へたることのあれども、こゝにはそをいさゝか云ふになむ、)神代のほどの年序は。いと〳〵久しきことなれば。此の國土も産出し賜へるより。また全く國土と成

了るまでは。幾萬づ歲をか經けむ。其の間にはいかほども大きになるべし。ここに國土の初などは。産靈神の殊なる産靈によりて。成れることなれば。女神の御腹より。兒を産むごとく。産出し給へること。さらに疑ふべきにあらず。さて國を産成し給ひて。國土と海水と分れて。漸に大地は堅まりぬるなり。（篤胤云ふ、二柱の神の、國土を産給へるといふこと、生漢意の徒は更にもいはず、生倭心の徒も不審み思ふことなるを、師の翁の記傳に、明なる論ひのあるに、まして中庸の說の、さとし得て甚妙へなり、これにつけて思ふに、遙西の極なる國々の古き傳へに、世の初發、天神既に天地を造了りて後に、土塊を二つ丸めて、これを男女の神と化し、その男神の名を安太牟といひ、女神の名を延波といへるが、此の二人の神して、國土を生りといふ說の存るは、全く、皇國の古傳の訛りと聞えたり。）○またいはく。外つ國どもの初めは。二柱の神大八洲を生給ひて國土と海水と漸に分るゝに隨ひて。其處彼處こ潮沫の。おのづからに凝堅まり合たるどもの。大きにも小さくも成れるものなり（篤胤云、實に中庸の論ひの如く、萬つの外つ國どもは、皇國に比べては、こよなく劣りて卑かるべきことは、一傳に壹岐島津島及處々之小島者、皆此潮沫之凝成者矣、とあるを熟思ふべし、さるは、皇國は萬國の東頭に位するなれば、此より西にあたる國々は、三韓を初め、凡これ潮沫の凝り成れるものぞといふの傳へなること壹岐島津島及とある及の字を以て曉るべし、）これはた。産靈神の産靈によりて。成れることはひさしけれども。外國は。二柱の神の産給へる國に非ず。これ皇國と。初めより尊卑美惡き差別の分るゝところなり。（篤胤云ふ、遙西の國人の、萬國の風土を委曲く記せる書の中に、皇國のことをも記して、諸國土の肥澤て樂き地は、北緯三十度より、四十度の間に、及ことなく、日本は其間に位して、且萬の國の極東方の境なるに。天神のいかなる御心にか、彼の國を殊に德惠まして、周廻には、嶮く烈き荒海を廻らして、外つ國の侵し仇なむを防ぎ、またその地形をこゝかしこに斷放して、諸の島を合せたるがごとくならしめたるは、其の國々の產物を異に生て、その總國に通用ゐしめ、日本一國外國の產物

を望まず、その國に產出る物にて滿足らしめむとてなり。さて大きならず小さからず造りたるは。國を實せしめ强からしめむとてなり。故に人民おびたゞしく家居立つゞき、產物豊饒にして。殊に稻穀萬國に卓越て美く。人の氣の勇烈强盛なること。これまた萬の國にならぶ國なきは。すべて。天地を造れる神の。日本に殊なる德惠を給はる徵なり。と委く〳〵長長と記しあるなり。この西洋人の。神の御心として、皇國をことさらに德ますと云ふを。漢土人の託言に、天意天命などいふと、一義にな思ひそよ。さるは、彼の國人の俗に、天地の間なる事物を、測算術を以て。考への及ばむかぎりは推考へて。その及ばぬさきのところは。闕てこれを論はず、すべて神の御心なることを辨へて。信に古へを好み。厚く古傳を尊む國風なれば。さらに漢土のさかしら說とひとしなみならず。てそ〳〵、遙に西とも西なる國人すら、如此皇大御國の尊き謂を辨へをるを。など此方の學問する徒の。然る尊きもとの所以をば尋ねざるらむと、篤胤はいとも歎息しく慨くなむ。外つ國人ごもの、かゝる謂れを辨へ居るによりてこそ。强に

親び奉りて。その大御蔭を蒙らむとはすなれ、然ることゝしも知らずやも。)さて後に。外つ國はみな。少彦名神の天降らして。經營給へるなり。(篤胤云、少彦名神のみならず、大國主神も渡りまして造りましゝなり。これらの事、なほ第九第十圖の下に、委くいへり。披き見て。然る所以を知るべし。)○またいはく。皇國の在處は。圖のごとく大地の頂上なり、その故は。初め葦牙の如き物の。萠上り初し與の處にして。その末斷離れず續きてありしほご。正しく天と上下相對へる蔕の處。皇國なればなり。(○或人問ふ、皇國は。萬國の元國にして。天と地との斷たりし蔕の地なりといふこと、然もありげに聞ゆれども、こゝに疑ふべきことあり。さるはまづ、本つ國なるとしては。國土の小さくまた末國とある西の國々よりは。事のひらけも遲かるはいかゞ。元國ならむには然は有るまじきことなり、篤胤答ふ、皇國をさしも大きからず造りましゝは、西の國人の考への如き謂ありて、神のかく御量ませるなるべく。殊に國のみならず、物の尊卑美惡は、形の大小にはよらず、そは師の翁のいはれたる如く、數丈の大石も方寸の玉

にしかず。また牛馬は大きなれども人にしかず。國もいかほど廣く大きなるとて。悪國は悪く。狭小なりとて美國は美なり。近く萬國の圖を見るに。南極の下方に當り。甚大きなる國ありて、この大地にあらゆる國を三つにわりて。その一つにゐるばかり大きく。それには人も住ず。草木さへに生ぬまでなるを。大小を以て國の美悪をいはむとならば。これをしも美國といはむや。また西なる國々よりは。事のひらけの遲しとは。皇國人の大らかにて。何事にもさかし立たる事を、爲出ることのなきをしかいふなれど。これはた思慮の至らぬものゝ云ひぐさになむ。さるは。皇國は萬の國の祖國元國にして。近く草木の實にてたとへば。その蔕のところなるを以て、いはゆる地氣の厚きがゆゑに。何事も大らかにてさかし立ざりしなり。彼の瓜の實桃の實も。その漸くに大きになるは、蔕のところよりかしらの方へ成ゆけども。その熟ることは。成終たるさきの方より熟りて蔕のところは。後に熟るものなり。此はその蔕のところは　成初むる本なるが故に。その氣の盛に厚かればなり。凡て天地の間のことは、日の東に見え初る時は。さしも熱からぬを。西に見えゆくまにまに熱きが如く。東に起りて西より變化るものぞ。此は熱く天地の間の理りを探窮めて後に曉つべし。また鳥獸などは。生れて直にみづから物を食ひ、二月三月も立つか立ざるに、交合などもするは。これ卑き物なるが故なり。それに比べては。人はその爲すことの甚遲かるも。即鳥獸よりは尊きところなり、また鳥獸の人に比べては。こよなく命の短きも。かく早く事を爲し出る故にもあるべし。諸外つ國々の早くわろかしこくなれるも。皇國の久しく神代の隨に大らかなりしも。これに准へて知るべし。漢籍にも、大器晩成といへるは、實に然る語なり。さて諸々外つ國どもは。早くよりさかし立て。種々の事物を考へ爲出るを。皇國は今もなほ大らかにて。強にさかしくはものせぬを、彼の外つ國人どもの。うめきすめきして考へものせる事物を、餘あるまで貢奉りて。皇國の要となることの多かる。其を案ふに、君たる人は高枕して。手を拱き居るに。民たる者の、向股に泥かき寄せ、手肱に水沫かき垂れ取作れる物を。御調奉るに似たるは。これも。奇靈に妙なる神

神の大御心と、かく尊卑き別を定賜へるに因てなり。そは第十圖の下合せ考ふべし。然るを外つ國學びする徒のかゝる謂をばえしも知らず、その外つ國より參來し事物の、皇國に要を爲すを見て、弱肩はり出で、樹靈なす鼻高やかに、ほこり居るこそかたはら痛けれ。其は儒者のみならず、近頃始りたる、蘭學といふ學問する徒、ここに然るは、甚うるさくなむ。）そも〳〵大地は虚空に懸りて。圓體なる物なれば。何方を上とも下とも。側とも云ふべきにあらず。此方より下とする方は。其方にてはまた此方を下とす。側の方にても。何方にても同じことなりと心得るは。一とわたりのことにて。其は天と地と離れて。今の如くなれるうへをのみ知りて。元の狀を知らざるものなり。（なほ大地は上下もあり、前後もあること、第十圖の下に委く論へるがごとし。）さて國を生竟たまひて。その稚々しきほどは狹霧ぐもれりしこと、こは然在べきことわり也。故。風神を吹生し給へるなり（古傳曰。爾伊邪那美命。於麻奈弟子爲將生火產靈神而石隱坐而告伊邪那岐命曰夜七夜日七日勿見吾吾名妹命矣。不滿此七日而。其隱坐事奇哉而見行之時。生火而。御保登被燒而病臥坐矣。其悶熱懊惱之時。於吐所成坐神之御名者金山毘古神。次金山毘賣神。於是伊邪那美命白曰吾名妹命之。勿見賜吾爲白然。見阿波多志賜吾爲白而。吾名妹命者可知食上津國。吾者將知下津國爲白而。往至于黃泉平坂而所思食者、於吾名妹命之知食之上津國。生置惡子而來爲宣而。返坐而。更生御子矣。故於屎所成坐神之御名者。埴夜須毘古神。次埴夜須毘賣神。此者土之神也。次於尿所成坐神之御名者。彌都波能賣神。此者水之神也。亦生賜天吉葛川菜而、此惡子之所荒則、水之神匏土之神持川菜而可奉鎭也事教悟矣。）此火產靈神（亦御名者、火之迦具土神、亦御名者云云。）御合子埴山毘賣神而。所生坐神之御名者。稚產靈神。此神之御子謂豐宇氣毘賣神（亦御名者、宇氣母智神、亦御名者、大宜都比賣神。）云々。故其伊邪那美命者。因生坐火產靈神而。遂神避坐矣。○伊邪那美命の。火の神を生むと爲賜ふとき。石隱坐しぬるは。その御產の狀のいみじからむことを。豫て知看て。そを妹神に見せ給はじとての御所爲な

り。(なほこの事は、人の甚く心得謬れることの有れば或問に具に辨へおけり。披見るべし。)さて此の時はいまだ火の神も。大日孁命も生坐さぬほどのことなるに。夜七夜日七日と宣ひ。はた此の七日には滿ずてとも有れば。既く晝夜の有りしこと灼然し。故是を以て。彼の萠上りて天と成れる物の質の。澄明かりし物なることをも。また天地の斷離れたりしことをもおもひ定むべし。そは(第三圖の下にいへるごとく。)天とはやがて日のことなるを。疾く斷離れて上つ方に位し。大地はその初めより漂ひつれば。斷れ離れて後も。其の初めよりの儘に漂ひ旋り。その天に對へる時は晝をなし。天に背ける時は夜をなしゝかば。斯在御言のありしなり。もし此の時もなほ。天地の斷離れざらましかば。ぬば玉の夜は出べくもあらぬをや。(されば。予がこの動くまじき考へを以て。師翁の葛花に記されし。鼠翩の。闇中といへども。物を見るの譬などをば。はり覆すべくなむ。)○生火とは。ここにみえたる如く。火はこの時に。伊邪那美命の始めて生坐る爲にて。是より前に火は有ることなし。さて。その產給へる火に俱ひて。火

產靈神の生坐るなるべし。また生火とある火は。やがて火產靈神のことにて。この神の御體は。やがて火にて坐ましけむも知るべからず。(生漢意、生倭心の人ども。後の世の心を以て。な異み思ひそ。火產靈神にませば。然在むも何か疑はむ。)さて火の出たる處なるに因りて。火處とは云ふなり(縣居大人の。陰處ならむとの考へは。いさゝかきゝ苦く。俗たる考へにこそ。)また此によりて考ふるに。女の經水となるを。火になるといひ。月水の經來ぬを。火の止ると云ふも。この御謂に因ることなるべし。(下の文に。火の神を斬給へる血の。磐群草木に激越る故に。草木砂石もおのづからに火を含む。と傳へたるにても。伊邪那美命の。此の時生賜へる火。やがて血にて。その血やがて火なりけむことを。思ひ定むべし。)また。此に七日七夜とあるは彼の五百八百などの類ひ大概をいふと違ひて。正しき日數を宣ひけむと思はる。もし然もあらば。女の月水の日數の。大概は七日なるも。この御謂に因ることにも有るべし。(なほ思得たることのあるを。そは古史傳にいへり。)○金山毘古金山毘賣神の金山は。金枯

惱といふ言の約りたる言なること。師說の如し。さて加禰はこの悶熱まして。枯惱しゝ時の御吐物の。やがてそれなりし故。加禰と云ひ。またそれに因りて生出坐し、その加禰を掌給ふ神に坐すゆゑ。金山毘古金山毘賣とは申すなり。さて。この二柱の神は。伊邪那美命の御吐には生坐つれども。實は火の神の枯惱し給へるに因りて。生坐したるなれば。火の神のかたに屬坐す謂なり。(其は天之香山は。火の神の御體の化れるなるを、岩屋戸の段に彼の山より金を取り給へるを以て、この理りを知るべし。そも〳〵加禰は。火もて枯惱し鍛へずては。用ひがたき物なること。この御謂に因ることなりけり。)○上津國とは即この國土を云ひ。下津國とはそれに對へて。根底なる夜見國を宣へるなり。さて彼の國に往坐ししは、火を生給へる御有狀のいみじきを、妹神の見賜はむことをやさしみ給ひて。勿見賜ひそと宣へるを。妹神の見そなはしゝを。恥恨まして。妹神と此おなじ國土に坐さむことを恥給ひて。己命は下津國に離り給はむと思ほしてなり。(そは豐玉毘賣命の御產の狀を、その妹神の見そなはしゝを恥給ひて、海坂をせきて海宮に還坐し、また比賣碁曾神のその妹を避て、御國の地へ渡り坐しゝと同例なり。)さて黃泉平坂。(此の坂のことは、次の圖に著して、其の下にいへり。)までは往坐しかど。この上津國に。火の神を生置給ひつれば。その災事あらむことを。御心苦く思ほして。途なる黃泉平坂より立還坐て。彼の神の荒びを鎭め坐すべき料に。土の神と水の神とを生坐るなり。(水と土の火を制ぐは、全この御謂れに因ることなり。)その大御心を量り奉るに。此は。天つ神の御言依によりて生坐る國を。重みし給ひてのことになむ有りける。(なほ其の大御心のほどは、次の圖の下に委くいへるを見るべし。)さて。御屎やがて埴。御尿やがて水にて。水の神。土の神は。其に因りて生坐し。其を掌賜ふこと。上なる火の神。金の神の例を以て准知るべし。斯在ば水も埴も。此の時より始めて成出たる物になむ有りける。(或人問、火の此の時より始めて有りけるといふは、此れより以前に火の有げにも見えねば然も有らむを、水と埴とは、此れより前に既く有ける物と見えたり。其は第五圖の下に擧たる傳へに、潮凝々然畫成し賜へる

とある、其潮はこれ水に非ずして何ぞ、また埴は此に始めて、成出ぬといふは、前に宇比地邇神の比地を泥なりといへるにかなはず、然るはその比地やがて埴に非ずして何ぞ、答ふ、そは潮と水とを混らし埿と埴と土とを、一つに混らしたる問ひなり、潮と水とは、其の狀の似てはあれども、其の質は甚く異なる物なるを、そは海なる潮は、水の流れまじりて有れども、世ににがりといふ物は、潮の純なる物なり、そを水とくらべ見てその異を知るべし、また埿と埴とは、これまた同じ類ひに見ゆる物から、其の異をいはゞ、埴は甕など造るばかりの密にねばりある物なるを、埿はねばりなく、麁きものなり、其は手に持りて、その差別を見別つべし、また都知とは埴、埿、砂を統たる、名にて、大に云ふときは、この國土全をさへに云ふなり、さて、埴は伊邪那美命の御屎に始めて成て、それに因りて生坐る神の、土を統掌り賜ふこと、固より然る謂あるべきことまるを何か疑はむ、)○さて伊邪那美神の、神避まさゞりしほどに、○二柱して、その御心と生賜へる神々は、風神。火神。水神。土神の四柱のみこそあれ。此餘に。その大御心と生賜へる神の坐すことなし。あなたふと〻妙なるかも。奇しきかも。この生坐る四柱の神々の。各々その產靈の御功をよく思ふべし。天地の間なる萬の物。何物かはこの四柱の神の產靈に洩たる。また何物かは。この四柱の神の產靈の理を以て知られざらむ。此は。神の御所爲なる故に、適然るげに思はるれど。その元を想ひ奉れば二柱の大御神の。天神祖命の國造らせと詔はし〻。大御依を畏まり賜ひて。その御命の如く。國堅め生成し賜ひ。さて後に。この神々を生坐しゝこと。その妙なる理りは。いはむとするに云ひも得がたく。甚も畏く尊かるを。熟想ふべし。よく想ふべし。(これにつけて思ふに、西の極なる國々の人どもの、萬の物の理りを考へ窮めむと、深く心をくだくけにや、然すがに悟得て、世に有る萬の物、すべて風火水土の理りに洩たる事なしとて、此を四元と號て、いみじき物にいふなるは、實に然ることなり、然は有れど古への正しき傳說の無ければ、その四元の元の謂を知らず、たゞに其の物をとらへて、理りをのみ云ふめるは、なほ未しきことなりけり、)○遂神避坐矣とは、

上の謂によりて。下津國に。神避坐むとは爲賜ひつつも。途より還坐て。上件の神々をさへに生坐しゝかど。かの恥思ほす御心の止み賜はで。遂に妹神の御許を。下津國に神避坐るとのことなり。（遂の字、

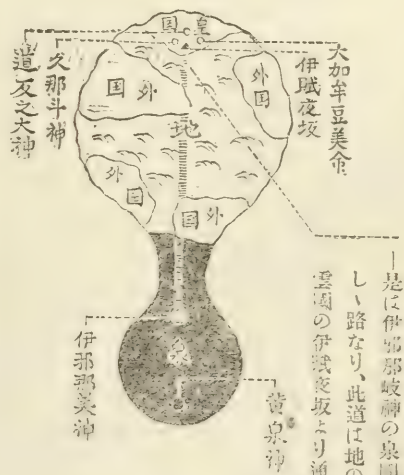
第七圖

天日
天之香山
天山津見神
布都主神

此は火産靈の神の血の、天之安河原なる、五百箇石村、と化れる狀を、假に圖るのみなり、拘るべからず、

古傳曰。故於是伊邪那岐命詔曰。愛哉我汝妹命耶。

かるく勿見過しそ。）さてこの往坐しは。その現御身ながら往坐るにて。死坐て御靈のみ往坐るにはあらざるなり。（そは古史の成文に、委曲に辨へたり、披見るべし、）

皇国
外国
外国
地
外国
外国
泉
大加牟豆美命
伊賦夜坂
久那斗神
道反之大神
伊邪那美神
黄泉神

是は伊邪那岐神の泉國に、往還り坐しゝ路なり、此道は地の中にあり、出雲國の伊賦夜坂より通ふなり、

替子之一木哉宜而。云々。拔所御佩之十拳

刺上而斬二其御子迦具土神一而。爲二三段一矣。爾垂二落於二其御刀之刄一血。化下爲在二天之安之河原一五百箇磐群上矣。此者布都主神之御祖也。云々。此時之血。激二越手二箸群草木一之故。草木沙石亦自含レ火也。云々。爾其所レ殺坐之迦具土神之御體之。於二其一段一所二成坐一神之御名者。伊加豆智神。次於二其一段一所二成坐一神之御名者。大山津見神。次於二其一段一所二成坐一神之御名者。高淤加美神。○火產靈神を斬賜へる御刀の刄の血は。天上に激上りて。まづ五百箇石村と化り。またその御鐔御鋒の血。また御手上に集れる血も。こゝ〴〵にその石村に激越て。多くの神々の成坐ること。火は加此生出し初より。上に昇る勢ある物にて。今も然在は。深き謂有ることなるべし。天つ日を日のあたり見放け奉るに。火の盛に燃て見ゆるは。この始めの謂によりて。火の寄憑て有るゆゑに。この國土よりは燃る火に見ゆるなるべし。然在ば。天はその萠上れる初めより。淸明き質なるが上に。火の寄憑るがゆゑにます〳〵明く。この後日の神の知看すことゝなりて。その大御光の照徹坐て彌々益々明きにそ有りける。(外つ國人など斯在謂の元因を知らず。唯にこの國土より見放るまゝに。日は火の凝集れる物ぞと云ひ或は火の精ぞなどのみいふめるは、神代の古傳の傳はらざればなりけり。)さて然國土より打見ては。火に見ゆるを以て。神の御代より。比とは云ひけるなるべし。(然るは、沼河比賣神の哥に。「青山に比がかくらば、ぬばたまの夜は出なむ」と詠る比は天日を指していへるなり。またこの哥によりても。皇御孫命の天降坐さゞりし前に、既に天地の斷放れて晝夜の有りけること灼然し。さるは天地の疾く斷放れて旋らざらましかば。哥に青山に日が隱らばと詠むべくもあらぬをや。三大考の說非なり)然在ば燃る火と。言の義も異なることなきを。漢字渡りて後。天つ比には日の字をあて。燃る比には火の字をあてたるを以て。言の義の異なるがごとく思はるゝは。其は元の謂を深く考へざればなり。(さて比とは。奇く妙なることのかぎりを云ふ言となれるも、世に火ばかり奇靈なる物のなければ。その名を借て。弘くいひならへるなるべし。)さて此に。草木砂石亦自含レ火也とあるは。その一端を云ひ傳へたるにて。實はものとして火を含まぬ物の

なく、水底に生出る物さへに。火は含まり有るになも。(そは櫛八玉神の海底なる海布海蓴を咋出て火を鑽出たるを以て知るべし)(火神の御體に成り坐せる三柱の神の中に。伊加豆智神のまづ成り坐せること伊邪那岐命の。甚く御怒ましての御所爲なるが上に御祖神すら。惡子と宣へるばかりの猛烈き火産靈神の殺さえ賜ふ。その御怒も有るべければ。始めにこの神の生出たまひけむこと。然在るべきことなり。また高淤加美神。これもいと猛かる神にて。その高としもまをすは。くさぐさの禍神のあるが中に。この神は初發に生出坐て、其のすべてを掌賜ふ故に高とは稱ふなるべし。(さて甚く怒りて死たる人の靈の、雷また蛇に化ることも有るは、この謂れに因るなるべし。其は上毛野君田道の靈の大蛇と化て蝦夷どもを殺し、藤原廣嗣の靈の雷と化て、元防法師が首を拔たるなどいふ類を見て知るべし。なほ多かるを今はその古きを擧つるなり)さて。大山津見神の生坐るにつきて考るに。火の神の御體なり。これもまた天上に上趍て山となり、大山津見神は、それに因りて生坐ると思はる。其の山は天之香山なり。

迦具土神の御體の化れる山なる故に。香山とは云ふなるべし。(師の翁も、少は心つかれしと見ゆれど、古傳の混れを正されざりしゆゑに唯に其名のみ擧されしは、惜しきことなり)岩屋戸の段に、彼の山より招禱奉りの品を取たるも。その謂れあることなり。(なほこの山のことに就ては、いひも得がたき、妙なる謂れどもの有るを、そは古史傳にいへり)かくて。伊加豆智神。淤加美神ともに山に住む神なるも。この謂れに因るなるべく。また山の始めは、火の神の御體の化れる謂れに因りて。諸高き山の頂上より火の燃るなるべし。(考に、富士山、淺間山、霧嶋山など、天地の帶の斷離れたるあとの蔕にもやあらむ、また今に火の出るも、初めに昇りゆきし氣のなごりのなほ殘りて、騰るにやあらむ—といへるは、然も有りげにきこゆれど、甚き非說なり。さるは、天の崩上れるは、かの一つの物の成初たるほどのことにて、其の時はいまだ山の有るべくもあらず、山は二柱の神の國生坐て後に、成出たる物にこそあれ、中庸の說の如くは、本末たがひて、二柱の神の國生坐せりといふも、すべて空言となるをや)○さて。こ

こにいさゝか天神地祇の。この國土を幸賜ふ御功德を悟してむとす。然るは。二柱の産靈大神はやく天御虛空に坐し。かの一つの物を造成し賜ひ。それやがて天と地とに分り。その地のなほふはくと在りしほどに。宇比地邇神より次々。伊邪那美神までを成出たまひ。その伊邪那岐伊邪那美神に御矛を賜ひて。國土を固成しめたまひ。さて、この二柱の神は。その大詔命を畏み賜ひて。そのいそしみたまふ事每に。國土を固成し賜はむとの御所爲ならぬはなし(さるは淤能碁呂島にかの御矛を衝立て。國中の御柱と爲賜へるを始め。御處の廉具波比を初め給へるも國生成さむとての御事なること。その時の御言にてしるく。また國生賜ひて後に。風の神を生坐しゝも、國土の狹霧を掃賜はむとおぼしての御事なり。また、伊邪那美神の火の神を生坐しゝも、此は國土になくてはえあらぬ物ゆゑ。生ませるなるべく。またその火の神の荒びを鎭めますべき。土の神水の神を生賜へるも、國土を大切おもほしての、ことなること。彼處にいへるが如く。なほいはゞ。伊邪那岐命。妹神の御後を追て。泉の國に往坐る時の御言に。吾與レ汝所レ作之國。未二作竟一則可二還坐一と宣ひ。また。伊邪那美命。妹神を泉つ平坂まで追及たまひて。その御離の節の御言に。吾與レ汝已生レ國矣、奈何更求レ生乎と宣へるなどにて。その始終の御所爲ども、悉く。國土を尊といそしみ給ひての御事なること灼然し。其はすべて。その御祖と坐す。産靈神の大詔命を畏み重みし賜ふ故なりかし、あな尊あなかしこ)故その生坐し御子神等。彼の謂れによりてこの神の生れ坐し。此の謂れに因りてかの神の生れ坐せると。その生れ坐せる御謂こそ異なれども。みな二柱の神の。國土をいそしみ思ほす大御心より。生出たまへるなれば。その神々の。今の現に國土に。幸ひ賜ふ御功の迹を。つらつらに察もてゆけば。またこの御謂れに少も違ふことなし。然るは。近く稻種を土に植るを。天つ日の蒸生し登らすことは。かの火の神の埴山毘賣神に御合坐て。稚産靈神の生坐ると全く同じ理りにて。火の神。土の神。水の神の御靈に因るなり。さて。火の土に照入ることの烈ければ。惡虫も多く生出て。稻も枯なむとするを。その烈く照入る火氣に蒸されて。山に含める水の。天の狹霧と立昇

りて雨と降るは。これ山の神。土の神。水の神の幸ひ賜ふところなり。（たゞし。此をほどよく分り賜ふが水分神、久比奢母智神の掌給ふ御事なり。）如此。火の氣と水の氣と互に爭ふはしに。雷神のおどろおどろと鳴出て。龗神の氷雨をさへに降らし給ひ。（萬葉集に。我が崗の龗にいひて。ふらせつる。雪の摧けし。そこにちりけむ。）人すらにおびえ魂ぎるばかりに畏めば。まして虫などは。深く穴に隱れ。死もすめり。さて天霧ひ雨の過れば風の吹出て吹撥ひ。風の過れば雨の降り來て風を和め。如此神々の御所爲の互に相助け相備て國土を幸ひ賜ふ。其の元の理りをおし窮れば。天つ神の此の國土を作り固成せと依給へる大詔命を。二柱の神の重しみたまふ大御心に生成給へる神々に坐すが故なり。（然るを外つ國人ども。物の理を窮むとはすれど。しかすがに神國の人ならねば。其の元の謂れをば知得ずて。火の土を蒸によりて雨は降り。火と水と爭ふはしに雷は鳴る。など窮もてつけて。其の象を器に造りなどして。自然なる物とのみ思ひて。如此神々の掌分け坐す御功としらで居るは。譬へば。人の闇處より礫を打出るを。此方に居る人の然ることゝは知らで。礫の自に飛來ると思ひ居るが如く。いと淺ましくこそ。祈て雨降り。祈て晴るにても。神の御心によることなるを熟く思ひて。あなかしこ古へ學びの徒は。ゆめ外つ國の說になまどひそね。かのさひづるや戎人すら心あるは、光神鳴り。また風烈き時などは。甚く畏めるもあるをや。）さて上件いへる神々の。その生坐し元の謂れは。多くは火の神の由縁なるにつけてなほ思ふに。そもそも火は。萬の物を害ひ亡して。甚く世の災事をなす畏き物なるを。また有りと有る萬の物を幸ひ生す。止事なき物なること。此の古傳をよく味ふべし。（なほ。古史傳に委くいへり。）

〇古傳曰。爾伊邪那岐命。欲將相見其妹伊邪那美命。追往于黄泉國矣。故其伊邪那美命。自殿戶出向之時。伊邪那岐命相語曰。愛哉吾汝妹命。吾與汝所作之國未作竟在。故可還坐也宣矣。爾伊邪那美命白曰。悔哉不速來坐而。吾者爲黄泉戶喫焉。雖然在愛哉吾汝兄命之。入來坐之恐故欲還然。於且具與黄泉神將相論。莫視吾我汝兄命耶白而。還入于其殿內之間甚久而難待矣。云々。燭

一火而。入見坐之時。蛆沸膿流而。云々。八色之雷神成居矣。於是伊邪那岐命見畏而。逃還之時盟言曰。將族離焉宣而。乃爲御唾矣。於其御唾所成坐神之御名者。速玉之男神。次掃坐之時所成坐神之御名者。泉津事解之男神。於是伊邪那美命白曰。何故哉。背于吾約言而令恥見于吾耶白而。云々。令追矣。云々。至于黃泉平坂之坂本之時。在其坂本桃子三箇取而。待擊之則。雷神悉逃返矣。於是伊邪那岐命詔桃曰。云々。賜大加牟豆美命云名矣。云云。故最後其妹伊邪那美命。御自身追及坐矣。於是伊邪那岐命。乃引塞千引石于其黃泉平坂而置其石于中而相對立而。度言戸之時。伊邪那岐命宣曰自此處勿來而。乃投棄其御杖矣。故於其御杖所成坐神之御名者。久那斗神。於是伊邪那美命白曰。愛哉吾汝兄命如此爲則吾者汝國之人草於一日將絞殺千頭焉白矣。爾伊邪那岐命宣曰。愛哉我汝妹命。汝然爲則。吾者哉於一日將立千五百之產屋焉宣矣。云々。復宣曰。始悲思汝而。往坐于其國者。吾怯在也宣矣。云々。於是伊邪那美命訖于黃泉道守者及菊理媛神而白曰。吾與汝已生國矣奈何更求生乎。吾者留于此國而將居焉白矣。伊邪那岐命聞此白事善賜而。乃散去矣。故號其伊邪那美命謂黃泉津大神。云々。又所塞于其黃泉平坂之石者。號道反之大神。云云。故其所謂黃泉平坂者。今謂出雲國之伊賦夜坂焉。

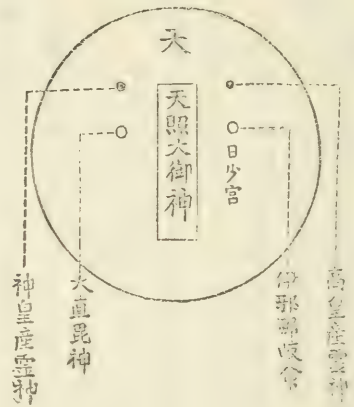
○伊邪那美命の。吾者爲黃泉戸喫焉と宣へるは。妹神の迎來坐るに。族離がたき御心は坐まして。また此の國に還坐まほしくおもほしめすものから。黃泉國の竈にて煮炊たる物をきこし看つれば。還坐しがたくおもほしめすよしなり。さ師のいはれたるがごとし。さてその還坐がたき所以はいかにといふに。かの火の神を斬給へる血の。磐群草木に激越る故に。草木砂石も自らに火を含むとありて。海底に成出る物すらに。火を含むを以て考るに。かの火は底つ根の國までに及びて。彼の國にも此の時よりこそ火は有初けめ。さて彼の國は。いとも穢き繁國なる故に。彼處に及べる火の汚たらむこと推察ふべく。伊邪那美命はその汚火の戸喫し給ひて。御身の汚れ給へば。還坐がたくおもほしゝなるべし。さるは。彼の國の火に汚坐して還り給へば。かの惡御

子の荒坐て。この國に災事有らむことを憚おぼして
の御事なるべし。(是はた、姨神の所知看す上津國に、
禍事あらせじとの御心なることゝ、上に云々いへる趣
きと合せ考ふべし。)さて泉の國なる火も、この國な
る火と。元は一つ火なるに。火の神の其を殊さらに
忌惡み給ふことはいかにと申すに。たゞに。彼の國の
汚穢に牽れる火なるに依て惡みたまふのみならず。
御母神は己命を産給へるに因りて。下津國に神避
まし。その神避り坐せるに依りて。己れ命は殺さえ
給ひつれば。彼の國をば。甚く惡み賜ふべき謂なり。
故に彼の國の火を忌て荒び給ふと見えたり。此をお
しひろめて。此の國なる火も、汚穢にふれたるは。
火の神の幸給はぬに依りて。事物の成らず。また唯
に成らぬのみならず。御怒坐て。災事さへに起る理
りをも悟るべし。(然るは。世にあらゆる物は、盡に
火の神の御靈を幸ひ給はでは成らぬ理りなるに、汚
穢たる物は、悉く泉の國に屬く理りのあれば、火神
は幸ひ給はぬなり。そは近く鑄物を造るか、もしく
は藍や紅などの色にて物を染るにも、火に穢ありて
は、かつて成らざるを以て、火の汚を忌むべきことゝ

の爭ひがたく、おしがたきことを悟るべし、此は其
の事は人の爲れども、成ると成らぬは、神の御心に
依ることなればなり。かゝることの徴を察ても、吾
師の言に、人は譬へば人形の如く、神は人形をつか
ふ人の如し、といはれつることの、味ひあるを思ふ
べし。○或人問、火の汚を忌ざれば、物の成らぬこ
とは、誰も見ることにておしがたければ、漢說す
る儒者をおきては信はぬものゝなきを、近頃蘭學と
いふ學問する徒の云ふを聞くに、西の極なる國々に
ては、火を忌むことなけれど、物の成らぬといふこ
となし、されば、吾が國にて火忌のことをいふは、
甚俗たることなりといへり、此の說はいかゞ。答ふ、
何事も末の穢き國々の例を引て、吾が神の御國の、
神の御定を議らむとするは、すべて外つ國學びする
者どものならひなれば、論ふに足らねど、いと近き
ことにて悟してむ、さるは、法師の徒また乞食ども
も、世にある人の眞似はするを、紅染を爲し、また
蒸飯などをするにも、死人の穢にふれたるもの、ま
た拾ひあつめたるどもの、穢きかぎりのものを火に
焚けども、事故なく其の物の成るを、必得過りて、

神にも奉らむなどかまへ、火を忌み淨めなどすることは。かへりて其の物成らずとか聞けば。西の極なる國々にて。火を忌むことなくて。物の成るも。これに准へて思ふべし。外つ國の物を神に奉らずといふなるも、かゝる謂より云ひ出たることなるべし。火忌のことを俗なりといふ徒。こゝろみに汚き火にて物を造り見よ。まさに其の物成らめやも。さてもなほ强言せむとするか、師の翁の說に。禍事の起るは。悉に。禍津日神の靈とのみいはれしは。未だ委しからず(なほ。火忌の事につきては。いはまほしきことの多かるを。そは古史傳にいへり。)○これより黃泉の國に坐す大神は伊邪那美命なり。さて此段に此の神の御言に與二黃泉神一相論とある。そは旣く其國の成初し時に。國之底立神。また豐斟渟神の成坐しつれば。彼の國にも。神の坐ける。其の始めは詳なれど。この段りにいはゆる黃泉神は。誰神なりけむ知るべからず。(菊理媛神。黃泉道守。黃泉醜女も准へ思ふべし。)然在ども。伊邪那美命の大神と爲り給はざりしほどは。此の神ぞ大神には坐しけむ。故此の神と相論はむとは宜へるなるべし。(記傳。また考の說。ともに非なり。)○黃泉平坂は考にいへる如く。此國土と泉國との堺なり。その在處は此國土より大地に入る際か。または大地の中心にあるか。または大地と泉との間に在るか。詳ならず古傳の趣きは。出雲國の伊賦夜坂(すなはち其の處の如く聞ゆ。もし然在ば。大地の中に入らむとする際なり。故その義を以て圖に著せるなり(然れども。此はたゞ黃泉平坂に通ひし處は。伊賦夜坂なりといふ意にて語り傳へたるにもあるべし。)○さて此の段りは。二柱の神の置坐て。彼の國此の國の往來を止め定め賜へるいとも妙なる謂有る傳へなるを。其は意ありて此處にいはず。(第十圖の下なる、終の條に委くいひつ。)

古傳曰。於是伊邪那岐命宣曰。吾者致レ到二于伊那醜目汚穢之國一而在矣。故吾者將レ爲二御身之禊一而宣。云云。往二坐于日向之橘之小戸之檍原一而。禊祓矣。云云。於下降二潛於中瀨一而滌之時上。所二吹生坐一神之御名者八十禍津日神。次大禍津日神。此二柱神者。因下所レ往二于其穢繁國一時之汚垢上而。所二成坐一之神也。云々。次爲レ將レ直二其禍一而。所二吹生坐一神之御名者

第八圖

神直毘神。次大直毘神。云々。然後。於洗左之御目之時。所成坐神之御名者。天照大御神。亦御名者天照大日孁命。次於洗右之御目之時。所成坐神之御名者。月夜見命。亦御名者建速須佐之男命。此時伊邪那岐命大歡喜而宣曰。吾者生々御子而。於生之終。得二柱之貴御子哉宣矣。故其天照大御神。御身之光華明彩坐而。照徹于天地之裡矣。故

伊邪那岐命宣曰。吾御子雖多有。不有知此靈異之御子。非可留于此國也宜而。即其御頸珠之玉緒玲々然令取振而。賜于天照大御神而詔曰。汝命者所知高天原。事依而賜矣。此時天地之間未遠之故。以天之御柱而。奉送上于天矣。云々。次詔建速須佐之男命曰。汝命者。所知青海原潮之八百重焉。事依賜矣。爾建速須佐之男命。不知其所

命之國而。云々、哭泣矣。云々。故伊邪那岐大御神。
問曰何由故汝者。不治事依之國而哭泣耶。則。答
白吾者欲將罷羅母之國根之堅洲國之故哭也矣。
於是伊邪那岐大御神大忿怒而。然在則汝者勿住子
此國。隨意而。可往於根國也詔矣。尒速須佐之
男命白曰。然在則。請子天照大御神而。將罷爲
白而。乃參上于天矣。於是伊邪那岐大御神者。
成竟大功德而。昇坐于天而。報命子天神而。仍
留宅於日之少宮矣。○禍津日神。直毘神は（古史
或問に委くいへる如く。）天照大御神。速須佐之男命
の荒魂和魂の神に坐すを。その和魂に坐す直毘神は
天照大御神に屬坐し。荒魂に坐す禍津日神は。速須
佐之男命に屬坐す妙なる謂れあり。故その義を以て
圖に著せり。（次の圖の下に擧たる岩屋戸段に、速須
佐之男命は、禍津日神の屬副坐すが故に荒坐すを、
大御神の見直し聞直し給ふを見て、予が言の強ひ說
ならぬことを悟るべし。）さて。この二柱の神の生坐
る謂は。伊邪那岐命。黃泉國の甚も穢き有狀を見そ
なはし惡まして。そのふれ坐し汚穢を疾くはらひ捨
むと。甚く所念し入坐しゝ御靈に。かの汚穢の大御

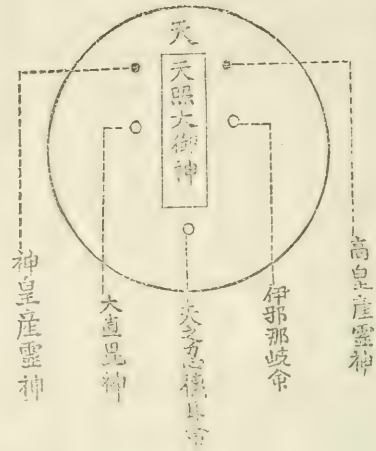
體をはらひ出る驗とて。最初に禍津日神は生坐るな
り。故此の神は穢き事を甚く惡み賜ひて。汚穢の有
れば。荒び賜ふなり。（さるは。伊邪那岐伊邪那美二
柱の神の、神々を生給へる御跡を、熟察奉るに。
すべて、その大御靈を一偏に所念し遊らし給ふ時に
神々は生坐て、其生れ坐せる神々の其の事に幸坐す
なり、その一つ二つをいはゞ、國土の修營を擬はむ
と御心を凝らしたまへば、風の神の生れ坐し、また
女神の神避り坐せるを歎かしゝその御淚に生れ坐る
泣澤女神の、此世なる人を、他界に避らせじと幸
ひ給ふなどを以て、この理りを悟るべし、師の翁の
說に、禍津日の神は、黃泉の國の穢れに因りて生れ
坐る故に、火に汚穢の有れば、此神ところ得て荒ぶ
る故に、萬つの禍おこるなり、といはれしは未だ委
しからず、ところ得てにはあらず、伊邪那岐命の、
穢を惡賜ふ御靈に因りて生れ坐る神に坐す故、穢の
あれば怒荒び坐て、理りの如くならぬ曲事をさへに
爲給ふを、汚穢たる事のなければ、荒び給ふことも
なく、幸ひをさへに賜ふなり、此神を、ひたすらに
惡く邪なる神とのみ思はむは、あなかしこ甚き非こ

とぞ、なほ、第九圖の下に擧たる、速須佐之男命の御荒びのところに、徵とすべきことあり、合せ考ふべし。)さて。伊邪那岐大神。かの穢をはらひ賜ひて。禍津日神を吹生し給ひつゝも。その禍津日神の荒ぶる神に坐て。その御心にふさはしからず思ほし看すことのあれば。直に怒荒び坐て、甚く國土の禍害となる神に坐すゆゑに。そこ憚おもほし坐て。その禍津日の荒び坐む禍事を。直さむと思ほし凝らしゝ大御心に。直日神を吹生し賜へるなり。(そは伊邪那美神の、火の神の荒びを鎭坐さむ料に、土の神、水の神を生坐しゝ由緣と、合せ考へて其理りを悟るべし)故此の神は。世に有る禍を直して、吉善に和め還し給ふ神に坐すなり。さて此の二柱の神の正身は。天と泉とに分坐つゝも。この國土に靈幸ひますこと。風火の處として至らぬことなきと同じきなり。故世には。吉善ことに凶惡こといつぎ。禍事に吉事のいつぐぞかし。其は國土のみならず、神も人も各々某某に。この二柱の神の御靈は賜り有るなり。(此は神も人も、其の本は國產坐しゝ二柱の神の御靈に依りて、生出たるなれば、然在るべき理りなり。)故人として。穢き事惡き事を惡み怒らぬものなく、怒りては荒ぶる事をも爲ぞかし。これ禍津日の神の御靈を賜有ればなり。然在に。その惡み怒る心を和め忍びて思ひ直すは。これ直毘神の御靈を賜り有ればなり。然るに其を思直さで。荒ぶる事の彌進に進みゆくを禍津日神の爲す禍事に。相率り相口會ふとはいふなり。(大殿祭の祝詞は、屋船神に稱申す文なるに、云云、言壽伎鎭奉事能、漏落武事乎波、神直日命、大直日命、聞直志見直志氐、といへるを熟考べし、此は各々神々にも、漏落たる事を怒り給ふ禍津日の御靈も有り、また其を聞直し見直し給ふ直毘の御靈も有れば、如此はいへるなり、此に准へて人も各々然在べき理りを悟ねかし、師說は未だ委しからず、說誤められしことさへぞ有なる。)但し。この二柱の神の御靈は。譬ば車に兩輪あるが如く。人ごとに誰もなくてはえあるまじき御靈なる。妙なる謂のあるを。そは古史傳にいへり。○高天原とは。即天なる御國を云ふなり。(そは、記傳に委く辨へられたるがごとし。)さて。天照大御神は。伊邪那岐大神の。槻賢木。伊豆の御靈に生坐て。その大御體のいみじく

光華明彩く。天地の裡に照徹坐しゝ故に。父大御神の御心に。天の清明かる御國には。相應くおもほしゝかば　その君とは定め賜へるなるべし（第三第四の圖に擧たる如く、高天原には、五柱の天つ神坐まし、また此の時より、伊邪那岐命も留坐せども、考にもいへる如く、その高天原を所知看す、君たる神は、たゞ天照大御神なり。但し君に非ずとて、餘神等を、臣なりと思はむは淺慮なり、君に非ずといへども、臣にも非ず、皆至て尊き神等に坐すなり。）その御頸珠を賜へることは。伊邪那岐大神。既に國は生竟たまひて。その國土に幸ひ坐すべき神々をも生給ひ、生の御終にこの大御神を生たまへれば。その御功の立ぬることを歡坐て。是より以後は。世に靈幸ひたまふべき御功徳を。悉に大御神に禪賜ふ御璽に。その御頸珠をば給へるなるべし（日之少宮に留宅しゝも、然在げに思はるゝなり）その玉緒瑲々に。取振かして給へるは。大御神の御壽を長く天足し賜へと、祝坐ての御事なり、（此は御鎭魂祭の御故事に、天つ神の十種御寶を依賜ひて、その御詔に、布留部、由良由良止布留部、如此爲之者死人返生矣、と詔へるを以て、然る所以を知るべし。すべて、古に珠を帶たるを、たゞ何となき飾りとのみ思ふは。いまだ委しからず、此は壽命眞幸くと、祝の飾りに帶たるものになむ、其は大殿祭の詞に、瑞八尺瓊能御吹支乃五百都御統乃玉と見え、また臨時祭式に、出雲國所レ進御富岐玉六十連と見え、また出雲國造の神賀詞にも、玉以て壽をしたるなどを、考へ通して、古へに玉を帶たるは。祝の飾りにせしものなることを悟るべし、また萬葉集に、正月三日に、群臣に玉箒をたまひける時、大伴家持卿の手にとるからに、ゆらぐ玉の緒と詠れしも。天皇命の祝て賜ふ大御心をうけて、この賜ふ玉箒を手に執るが隨に、體の活動に、榮て壽命の眞幸く延ぶると詠れし哥なり。また歌詞に、死ることを、玉の緒の絶るといふも。古に命眞幸くと、うなげる玉は。五百箇の玉を緒に統とほして、頸にかけたりし故に。その緒の絶るをば。死る祥としていへるなり。上件のことゞもを思ふにも。伊邪那岐命の、大御神に。御頸珠を賜へることは、その御魂の幸を。悉に禪りたまはむとの御所爲なることをさとるべく。又天つ神の。二柱の神に瓊矛を給へる

も、また大國主神の、須佐之男大神の、天之沼琴を取て逃還ましゝも、悉にこの謂によることなり、さて師說に、凡て多麻布といふことは、此の、御頸珠の故事よりぞ出つらむ、故その物を玉物とは云ふならむ」といはれしは實に然る說にて、そは物のみならず人の魂も、神の賦賜へる物なる故に、多麻とは云ふなり、神の幸ひの漸に加ゆくを、みたまのふゆといふにても、この義の言なること知るべし、なほ云ふべきことの多かるを、其は古史傳にいへり、）斯在止事なき、御靈幸りの御實なるが故に、御倉板擧之神と稱へて、齋坐るなるべし、（なほ古史傳に委くいへり）さて。天照大御神は御依の隨に高天原の君と坐て。普く御照し坐すを以て。天照大御神とは申し奉るなり。また上に次々いへるごとく。天とはやがて日のことなるを其しろし看す神に坐すゆゑ。また日の神とも申し奉るなり。さて師のいはれたる如く。天にも。この國土の如く國の有て。高天原とは其を云ふなるを、この大地にある國は。みな地の外表方に屬たるを、天にある國は。內裡方に屬たりとおもはる。そのゆゑは。天若日子が、雉を射上たりし矢の高天原に坐す、高木神の御許に至れるを。初に射上つる矢の穴より。衝返し降し給ふ。とあればなり。（內裡方に國あることこの大地なる國の例に泥みて、疑ふべきにあらず、物の理りは、窮りなく、妙なる物なればなり、」と考にいへる、實に然ることなり、）〇青海原とは（第五圖の下にいへる如く、）この國土至く、を云ふ古言なるを。潮之八百重とこそへ云ふことは猶廣く。八百重の潮の至り極る極みを云ひて。祝詞の文に。潮沫能留限と云ふにおなじきなり。（なほ著せる圖を察て、この國土の狀の潮の八百重と、いひつべきものなることを知るべし、）然れば。速須佐之男命に。所レ知二青海原潮之八百重一と依賜へるは。この國土を幷所知看せと詔へるにて。此は天照大御神に。所レ知二高天原一と依し賜へるに對へて。天と地とを依し別け給ふこと二たつの御目より生坐る。二た柱の珍子に坐ば。然有るべきことゝ。理りの至極と云ふべし。然在に。その御依しに背ひ給ひて。父大御神の。甚く穢み惡みおもほす。根堅州國に罷らまく欲し。哭泣たまへる故に。父大御神の。大く忿り坐しゝこと眞に然在べき御事になむ。（古事記に、欲レ

罷とある、欲の字を中庸の説ることの、非なる由は或問にいへり）然はあれど。熟く思へば。この速須佐之男命の。御母の坐す根の國に罷坐さまく欲し〻もまた止む事なき御謂なも坐ける。さるは伊邪那岐伊邪那美命。はじめ天つ神の大御命を承賜ひて。國を生成し給ひ。妋妹の大御ちなみの甚深かりしを。伊邪那岐命。彼の泉國の穢きを。見畏み坐て。族離れむと宣ひ。御唾爲て撥ひまし。また御身滌賜へるそのしるしに因りて。かの深く親び給へるその御親みの。御身に受け知看し〻が。此の時に大御身を祓ひ終ぬる驗とて。須佐之男命は生坐し〻なるべし。故この神は。依し賜へる國を治さずて根堅洲國なる、御母がり。往坐さむと欲して。遂に彼の國には往坐しけむ。（よく思ふべし、熟く思ふべし、天照大御神は比賣神に坐を、伊邪那岐命の方に屬坐て、天つ日を所知看し、速須佐之男命は比古神に坐を、伊邪那美命の方に屬坐て、月夜見國を所知し看すこと、妙なりとも妙へなる謂れの、また妙なる御事にて、此はみな、然有ではえあらぬ、妙なる理りの備はりためることなるべく、また神祖産靈大神の、御靈によりてなることは云ふも更なり、）さてしか御母の國に入りまさまく欲しつ〻も。然すがに。大御父の大神の御依し坐せる御詔を畏み賜ひて。ひたぶるには往坐さず。久しくこの國土に在て。いみじき御功ども立賜ひ。さて終には。理りの如く根の國に入り坐て。月夜見神とはなり賜へるになむ。（そは次の圖の下にいへるを見るべし、）〇伊邪那岐命。はじめに天つ神の依し賜へるその御詔のまに〳〵國かため功を成竟たまひつれば。その天つ神に報命まをし給はむこと。その御終までを全く爲賜へるにて。如此在べき御事にこそ。さて日之少宮とは。天上なること、仍留の字にて論ひなしと中庸のいへる、實に然ることなり。此は思ふに。天照大御神の。大宮の有るに對へて。その長く寂然に隱坐す宮をまをすなるべし。（是につけてなほ思ふに、伊邪那岐命は、御頸珠をさへに大日女命に給ひて、天上を知しめ賜ひ、御自身も天に鎮り坐し伊邪那美命は、泉の國に鎮り坐て、月夜見命は其の國を所知看すことやがて伊邪那岐伊邪那美二柱の神の御功德を、日の神月の神を繼坐す理りあり、またその日の神月の神の御子命の、この國土の大君と坐すこと、悉に深き謂あることなるべし）

第九圖

古傳曰。爾速須佐之男命參上于天之時。山川悉動國土皆震矣。此則神性之雄健而使然也。故天照大御神所聞驚而。云々。於是速須佐之男命白曰。與姉命各誓而。於其誓之中將生御子。吾所生之御子男子在則。可以爲無異心。如女子在則。可以爲有異心焉白矣。云々。乞度天照大御神之。云々。五百箇之御統之珠而。云々。於所吹棄氣吹之狹霧男御子生坐矣。於是速須佐之男命興言而。正哉吾勝焉白矣。故其御子之御名謂正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命。云々。於是天照大御神。云々。詔曰。此於後所生坐之五柱之男御子者。物實因于我物而所生坐也。故自吾御子也。云々。詔別矣。云々。爾速須佐之男命白天照大御神曰。我心清明之故。我所生之御子得男子焉。因此而言則。自我勝焉云而。於勝進所荒矣。爾天照大御神之命以而。詔於葦原中國有宇氣母智神云者。汝速須佐之男命宜就而候之時。速須佐之男命降坐于其宇氣母智神之許矣。云々。於是速須佐之男命忿然而宣曰。穢哉鄙哉

以自口所吐之物將奉進乎我乎宣而、即拔劍而。擊殺其守氣母智神而。云々。於其被殺坐之御體所成之物者。云々。天照大御神喜而詔曰。此物等者。顯見蒼人草之可食而活之物也詔而。云々。令殖于天狹田及長田而。云々。爾速須佐之男命。春則毀天照大御神之御營田之畔。云々。天照大御神見畏而。閉天之石屋戶而。幽居坐矣。故是以高天原皆闇。葦原中國悉闇焉。因此而常夜往焉。云々。故於是八百萬之神甚憂而。於天之安河原。神集々而。議將奉招禱之方矣。云々。於是天照大御神出坐天石屋戶之時。高天原及葦原中國自照明矣。云々。於是八百萬之神共議而。於速須佐之男命令負千座置戶之祓具。云々。八百萬之神曰汝之所行甚無頼也。故勿往于天原。急可適於底根國而。神逐令逐降矣。云々。爾速須佐之男命。自天上帥其御子五十猛神降坐而。天之壁立極廻坐而。到于新羅國而。云々。渡于東而。云云。爾宣曰韓國之嶋者有金銀。於吾御子之所治之國不有浮寶則不佳也而。云々。御眉之毛者化于樟矣。於是宣曰。杉及樟者可爲于浮寶。云云。宣而。云々。其五十猛神亦。云々。成于青山矣。故稱其御名而。謂有勇之神也。云々。爾速須佐之男命。到坐于出雲國簸之川上鳥上之地時。云云。切散其大蛇則。云々。在都牟刈之大刀。故所取其大刀而。所思奇異物哉而。安置于御許矣。云々。故以其櫛稻田比賣。於久美處爲起而。所生坐神之御名者八島士奴美神。此神之御子布波能母遲久奴須奴神。此神之御子深淵之水夜禮花神。此神之御子八束水濱美豆奴神。此神之御子天之冬衣神。此神之御子大國主神（上件。六代之神々之亦御名、及御祖神等、姑畧之。）於是速須佐之男命。以其天之叢雲之劍此者靈劍也。吾何敢可安於私乎宣而。遣五世之御孫天之葺根神參上于天而。奉于天照大御神而後。居坐于熊成峯而。遂入於根國而所知看其夜食國矣。云々。此大國主神之御兄弟八十神坐矣。云々。爾大屋毘古神議曰。可參向于須佐之男命所坐之根堅洲國。必其大神將議焉宣矣。故隨御言而。參到于須佐之男命之御所則。云々。大神追至于黃泉平坂而。遙望而。呼大名牟遲神而宣曰。云々。於是大國主神。

云々。作始國矣。云々。此大國主神。坐于出雲之美保之岬之時。自波穗乘天之羅摩船而全剝鵝之皮爲衣服而有歸來之神。故雖問其名不答。云々。於是白上于神皇産靈御祖命則。詔曰此者實我御子也。云々。故與汝葦原醜男命爲兄弟而可作堅其國矣。云々。故自爾大名持與少彦名二柱之神相並而作堅此國矣。此二柱之神巡國之時。熊野大神櫛御氣野命。所取五百箇之鉏々而。奉依于二柱之神矣。云々。大國主神謂少彦名神曰吾等所造之國。豈謂善成乎。宜則少彦名神答曰。或有所成處或有不成處白矣。其後少彦名神。行至于熊野之御崎而。遂往於常世國矣。〕速須之男命の。天照大御神に御暇まをなし賜はむとして。天上に參上坐しゝは。然坐すべき御事なるを。御子生坐の後に。その勝進の御所爲とはいへど。如此いみじく荒びましゝはいかにと云ふに。その荒魂と坐す禍津日神。(すなはち五十猛神これなり。此の神を。須佐之男命の御子とまをすゆゑは。或問に委くいへるが如し。またその帥て上り坐しことは。傳へに洩たれど。帥而降坐すとあるにて。帥て上らしゝことは灼然し。)の屬坐すが故に。その御心によりて荒坐るなり。其は其神のいたく穢きことを惡み賜ふゆゑに。宇氣母智神の。口より尻より出したる物を。奉進らしゝによりて。如此荒びましゝなり。(故その荒び賜へる御所爲ども。悉に。宇氣母智神の御靈に因て成ることゞもを。妨げむとは爲たまへるなり。よく〳〵心をつけて考ふべし。)しかれども。祓の驗によりて。須佐之男命の御心も。和坐るのみならず。かの五十猛神さへに。有功之神となり給ひぬるは。祓の德のいとも妙なるものならずや。(なほ古史傳に委くいへり。)さて。天上より降り坐て天之堅洲國を廻ましゝは。始めに伊邪那岐大神の。青海原潮之八百重を所知看と。依給へる御命に因りての外つ國もろ〳〵を。八百重の潮の至る限り。見行し廻らしゝなるべし。さて御國の地に還渡坐て。韓國之嶋者有金銀。於吾御子所治之國。不有浮寶則不佳。と宣りたまひて。船に作るべき樟を生し給へる事。いとも〳〵妙なる御心の妙なる謂ありて。この事の結は。息長足日賣命の御代に至りて。始てそれとしらるゝなり。(それは。古史傳の其の段に委く

いへり。」さて。諸々神を殖生したまひ。大蛇を斬て叢雲之御劔を得たまひ。其より生の御子孫の次々。五つ代のほど出雲國に坐て。その御子神等の國作らしゝを見たてたまひ。六世の御孫大國主神の生坐て後。遂に御欲のごとく。根の國には入り坐せるなり。（遂の字かるく見過すべからず。其は伊邪那美命を遂に神避り坐さある。遂の字の意なればなり。」その入り坐さむとする際に。かの御劔をば。五つ世の御孫と坐す。天之葺根神して。（上に。天之冬衣神とある同神なり。」天照大御神に奉上賜へるも。深き御心のこもれることゝ見えたり。（そは。第十圖の下にいへるを合せ考ふべし。」熊成峯に坐しゝことある。その熊成峯は。師翁の考へに。熊野のことならむといはれたる。實に然ることにて。その夜見國に入坐す時。其處に御靈を留置たまへる。それやがて。熊野神祖櫛御氣野命にましく〳〵て大國主神。少彦名神の國作り賜ふ時に。五百箇の鉏を依賜へるも。國土をいそしみ成させ賜はむとてなり。そも〳〵この大神よ。止事なき御謂によりて。遂には御母の坐す下津國に罷坐しつれど。その始終の御行状を。熟に見奉れば。すべて大御父の大神の。御依しを重みし賜ふ。御心のほど見えて。たふとしなどまをすもさらなる御事なり。斯在御心になりたまへるも。その御身の祓を爲賜へる驗になむありける。大祓詞に。速佐須良比咩云神。持佐須良比失氐牟とある。佐須良比咩は。即この神のことにて。さすらひ遂は禮賜へるゆゑに。如此御名に負給へるなり。（師の翁の説に佐須良比咩を。須勢理毘賣のことなりといはれしは非なり。たゞし須佐之男命は。男神に坐すを女神と傳へたること。此は餘神にも例多かることにて。甚も妙なる謂あり。其は古史傳に委くいへり。」この神の始め終りの事實と。祓の旨とを合せ考へて。其の妙なる理りを曉べし。さて夜倉國とは。すなはち夜見國のことなり。そは大地の下方に在ること。上の件りの圖どもの如し。速須佐之男命はその月夜見國を所知看が故に月夜見命と御名に負たまへるなり。（速須佐之男命月夜見命と同神に坐すこと、記傳、また考の說。萬づ世にわたりて動まじき考なりなほ第十圖の下考へ合すべし。」〇宇氣母智神。大宜

都比賣神。豐宇氣毘賣神はおなし神に坐まして。この神の。木に幸ひ賜ふ御靈を。久々能智神と申し。草に幸ひたまふ御靈を。萱野比賣神と申して。其草木に幸ひたまふ御靈を統ては。屋船神と稱し奉れば。豐宇氣毘賣神は。飮食。住處。衣服の神に坐ますこと。古史傳(また或問)に委く辨へたるがごとし。あなかしこ片時もこの大神の。御恩賴を勿忘れそよ○

或人問。前に天つ日は萠上れる初めより。清明く透たる質なるがうへに。火の寄つきて在るゆゑに。いよ〳〵明く。且天照大御神の所知看してより。彌々益々明きなりといへる。此は古傳の趣きの然聞えたれば。さもあらむを。大御神の幽居せるとき高天原も葦原の中つ國も悉闇く。常夜往までなりしはいかに。答ふ。この時の事は。禍津日神の甚く荒び坐て。その高天原の君と坐ます。大御神すら堪たまはず幽居しかば餘もろ〳〵の神々も。幸ひあへ賜はざりけむこと知るべし。然るは。天の萠上れる初めより清明かる質なるは。此は產靈大神の造り出たまへるなれば。その御靈に因り。其に火の寄つきて輝るは。火產靈神の御靈に因ることなるを其の神なの。各々その御功の止み賜ひぬれば。闇かりしこと何か疑はむ。是によりても。天照大御神の御德の大きなることを想像り奉るべし。八百萬之神甚く憂とあり。高皇產靈神さへに。大御神を出し奉らむと。千ぢに御心を碎きたまへるをや。伊邪那岐大神の。不レ有二如此靈異之御子一也と宣へるを熟く思ふべし。また此の時の傳へによりて。速須佐之男命。またその荒魂八十禍津日神の。畏く坐すことをも想像り奉るべし。さばかり尊く靈異に坐す。大御神すらしばしは堪たまはざりしをや。然はあれ。しかすがに。其の禍を直さむとして生坐し。大直毘神。やがて天照大御神の和魂に坐て。終にはその禍を直し賜ひ。有功之神となしたまひぬるは。いとも妙へなる御謂ならずや。(大祓の詞に遺罪波不レ在止、祓給比淸給事乎、云云、氣吹戸主止云神根國底之國爾、氣吹放弖牟、とある氣吹戸主は、やがてこの大直日神のことなるを熟く思ひ、なほ第八圖の下にいへる、禍津日神、直毘神の生れ坐せる所以とを合せ考ふべし、)斯て。その五十猛神は。所謂木國大神に坐て。その木の國に留置たまへる。有功の御靈を。大屋毘古神とは申な

り（そは速須佐之男命の、熊野に留め賜へる御靈を櫛御氣野の命と稱すと同じ例しなり。すべて神は、その功によりて幾柱にも御靈を分ち御名を異にしたまふこと、別に委しき考へあり。そは古史傳にいへり）大國主神を根堅洲國に參向はしめ賜へるも。有功の御靈に坐すがゆゑなり。（大祓の詞に、遺罪波不在止、祓給清給事乎。云々、瀨織津比咩止云神、大海原爾持出奈武。とある瀨織津比咩に、やがて禍津日神の別御名なるを、この罪穢を持出給ふことの有功の御靈の大國主神を根の國に向はしめたまひて、その禍を亡し賜へること、相おなじきを熟考ふべし、なほ古史傳にいへり）さて。その本つ御靈なる禍津日神は。速須佐之男命の帥て。根の國に入り坐せることは。論ひなきものから　彼處に坐しつゝも。なほ世に汚穢事のあれば。その御靈を通はし賜ひて。世に禍事は爲たまふなり。然在に。それ此方に來らせじと守衛たまふが。道反之大神。久那斗神に坐すなり。故道饗祭りの祝詞に。大八衢爾。湯津磐群之如久塞坐。云々。八衢比古。八衢比賣。（すなはち道反之大神これなり師說は非なり、其は或問にいへり）

久那斗止御名者申氐。云々。根國底國與利。麁備疎備來物爾。（この根の國より麁び來る禍事は、すなはち禍津日神の御心なることは、御門祭の祝詞と合せ考へて悟るべし）相率、相口會事無氐。下往者下乎守理。上往者上乎守理。夜之守。日之守爾。守奉齋奉禮止。進幣者。云々と稱へて。祭り賜ふことなり。（道反之大神久那斗神の泉國より來る禍事を、來らせじと守り賜ふこと、第七圖の下に舉たるこの神等の成り坐せる所以と、第八圖の下にいへる、伊邪那岐伊邪那美命の、一偏に御靈を壽したまへば、その生り坐せる神の、其の方に幸ふ功をなし賜ふ所以とを、合せ考へて悟るべし）但し此の神等の御守衞にも守あへ賜はで。この國土に麁び來ること有る。其を御屋に入れじと防守たまふが天之石戸別神に坐すなり。（そは、此の神を祭る祝詞を見て、知るべし）さて。その禍事の世にひろごれる時は。國の大祓して。その禍を本つ根の國に還遣たまふ。（如此云ふ謂は、大祓詞を熟く讀て悟るべし）此即。天皇命の天下を政たまふ大道にして。其は神魯企神魯美命の天祝詞の。大詔事以て傳へ坐しゝ神隨なる古の

道なり。(天神祖命の、天詔事以て、神隨なる道を依したまへること、次の圖に擧て其の下にいへり、古道といふことの見えたるは。皇極天皇の御紀に、天皇順ニ考古道一而爲レ政也。とあるこれ始めなり、その古の道に考へて、御政を爲たまへるは、佛法にて入鹿等が雨を祈れるに、驗なかりしかば、停めさせたまひて、御みづから、南淵河上に幸坐て、祈り賜ひしかば、五つ日がほど大雨降りて五穀よく登り、天の下の百姓みな萬歳を稱へて、至德天皇とまをし奉れるなどなり。)○諸外つ國どもは。すべて少彥名神の作堅たまへるならむと師翁のいはれつる。實に然ることにて。その常世國に。(師云く、常世國とは、如此名けたる國の一つあるにはあらず、たゞ何方にまれ、この御國を隔り離れてたやすく往還がたき處を泛く云ふ名なり、されば常世の字は借字にて、名義は底依國にて、たゞ絕遠き國なるよしなり、故皇國の外は、萬國みな常世國なり。)渡坐ししは。其の御言に有ニ不レ成處一と宣へる。その國々を修固に往坐るなるを。それはた。速須佐之男命の。此の神に鉏を依したまへるを以て考ふるに。彼の神の天之壁立極廻坐しゝ時に。その見行し置かしゝ。未レ成の國々を。固めよと依し賜へることゝ知られたり。然れば。少彥名神の。外つ國々を固め坐しゝは。神皇產靈御祖命の。御命を承たまへる謂のみにはあらざる也。この後に。大國主神も此の神の御後を追て常世國に渡り坐し。(もとも其は御靈なること、次の圖の下にいへるが如し。)二柱の神して。その常世の國々を皇國によりて。仕奉らしめむと靈幸ひ賜ふと見ゆるなり。其は何を以て云ふぞなれば。彼の神の避奉らしゝ時に。隱レ於ニ八十隈手一而侍焉。と白したまへる八十隈手は。常世國といふに言義かよひ。(この言の意は、次の圖の下に委くいへり、)その侍と申したまへるも。遙隱坐しつゝも。心をつけて。仰せ賜ふ事のあらば、奉らむと伺居る意なるが上に。齋衡三年十二月に常陸國に歸來坐て、我是大奈母知少比古奈神也。昔造ニ此國一訖。去ニ往東海一。今爲レ濟レ民更亦來歸。と宣へるにて灼然し。さるはその爲レ濟レ民來歸とはその御靈の。常世國に坐しつゝも。なほ皇國を守衞ます趣きの御言にて。かの隱レ於ニ八十隈手一而侍焉。と白したまへると。相應ふをもて曉

るべく。また昔し造二此國一訖。去二往東海一と宣へるにて。少彦名神の御後を追ひて。常世國に渡坐ること論ひなし。(これにつけて案に少彦名神の、常世國に渡り坐せることは、千萬づ歳の神の御代より語り傳へ來て、それを古事記に記されしは、和銅五年正月なるに、其より百四十五年後なる齋衡三年に、ゆくりなく、斯在事の有しを察て、神代の古傳の正實におぼろげならぬことを曉るべく、また齋衡三年より、この文化九年までは、わづかに九百五十七年になるを、凡人の上にては、多くの年を經ると思へど、常世なる神の御上にてはいさゝかの間なるべければ、この一事をもても、神代の神々の、常磐に、今もその社々に鎮り坐すことを曉るべし、また外つ國もろもろにも訛ながらに古傳の片端の殘れるも、この二柱の神の、かく往還し賜へるによりてなることをも悟るべし、○或人問、皇國の人草の初めは、神の御末胤の、漸々にふえひろごれるなることは、いふもさらなれば問はじを、外つ國々の人の初めは、いかにして成れるぞ、大名持少彦名神の御末なるか、もし然もあらば、神の御末胤の、いかで御國の人にかぎらむや、答ふ外つ國の人の初めは皇國の古へに、その傳へなければ知りがたし、然れども、すべて外つ國々の人どもの、皇國の人に比べては、形貌も異に、こよなく卑賤く見ゆるにつけて考ふるに、まづ漢國の古傳に、女媧と云ひける女、黃土を摶めて人と爲し、また繩絙を泥中に引て擧て人と爲せるが貴人はその黃土の化れるなり、賤者は絙を泥に引て爲れる人なりと云ひ、その西の國にても、人の初めは、天つ神の塊を摶めて爲れる、なども語り傳ふれば、實に常世の國々の人草の初めは、斯在ことにて成りけむも知るべからず、さて、その天つ神といひ、また女媧氏など云ひ傳ふるが、やがて、大名持少彦名神の、御群の神に坐すを、如此異なる名に、云ひ傳へたるにも有るべし、速須佐之男命の御言に、皇國を殊さらに、吾御子之所治之國と宣へるにても、外つ國もろもろの人草は、神の御末胤ならぬことは論らひなし、然はあれど、假令塊を摶めて爲れるにもあれ、產靈神の產靈によりて成れることは、これまた論ひなしなほ、次の圖の下にいへるを見るべし、)つばらつばらに此を思へば。うべしこそもろもろ

常世の國々より。その產物多に獻りて。親び奉らむとはするよ。此はその元因みな。大名持少彥名神の御靈の。彼の國々に坐まして。其を悉に。よりて仕へ奉らしめむと幸ひ賜ふなれば。彼の二柱の神の御貢と奉りたまふ謂にて。外つ國もろ〳〵の參來る事を。二柱の神して所掌看す故になもありける。（そはもろ〳〵外つ國の參來し初めは。崇神天皇の御世十一年といふ年なるを。その參來ざるまだきに。大國主神の幸魂奇魂に坐す。大物主神の其の事を悟し奉られたるも。此に思ひ合せて。深き由あることを悟るべく。殊に大物主神の。初めに海を光して歸來たまへるも。外つ國を修固て坐しゝが。還來たまへるにもあるべし。また神功皇后の大御歌に。此御酒は吾御酒ならず。くしのかみ常世に坐す。石立す。少名御神の云々壽廻らし。獻來し御酒ぞ。と詠み坐るをも考へて。常世の國々より獻り來す事物は。二柱の神の領知ぞ。獻り來したまふに依ることなるを悟るべし。此をたゞに。少彥名神は。酒を掌賜ふ故に。かくは詠ましゝなど。淺らに心得たらむは。いまだ古の意を知らざるものぞ。○さて。異國々より貢奉る事物の中に、醫の法術の。殊に皇國の要をなし驗有るも。醫の道はかの二柱の神の創たまへるなれば。此の道の常世の國々に委く傳はり。その國人どもの。この法に委きは。末の枝國には。惡病の多かる理りなれば。二柱の神の殊に御靈を幸ひたまひて。此は實に然在るべき理りなり。されば。大倭心になり堅まりたらむ人も、この理りを辨へて。異し國々の醫の法をも。學び取るべき事になむ。然はあれど。其の中には。惡き事もまた多かるは。かの二柱の神ともに。速須佐之男命に隨坐す神等にて。殊に少彥名神は、御祖神の。御手俣より漏坐しゝ神に坐し。はた常世の國々は。御國の下方に有りて。根の國の成りし跡のなごりに。なほ穢き事の往留て。惡き事の多かるべきと謂れの國々故。その參來る事物は。もとより惡き事の交らでは。えあるまじき理りなれば。此もよく擇び捨べきことになむ。なほ醫の道にあづかることゞもは。志都能石屋てふ書を著して。それに委くいへり。）

靈能眞柱下都卷

平田篤胤著

古傳曰。天照大御神之命以而。豐葦原之千秋長五百秋之水穗國者。我御子正哉吾勝々速日天忍穗耳命之所知國焉言依賜而。云々。於是武甕槌神。降到于出雲國五十田狹之小濱而。云々。問其大國主神曰云々。對曰云々。此葦原中國者隨命而既將獻焉云々。吾者隱於百不足八十隈手而侍焉白矣云々。於是武甕槌神云々。大國主神白曰。天神之命慇懃如此也。何將不奉違于御言。吾所治顯事者天神之御子可治也。吾者隱而將治幽事焉報命白矣。云々。以其平國之時所杖之廣矛授于武甕槌神而白曰。吾以此矛成功竟而在也。天神之御子。用此矛治國則。必當平安焉。又吾子等百八十神者。八重事代主神。爲神之御尾前而。奉仕則不有違神也。云々。八雲立出雲國者。我靜坐國。命廻青垣山而。玉置而守也白矣。云々。遂於八百丹杵築之宮長鎮坐矣。所造此宮之時。諸神等参集

（第十圖）

高皇産靈神

天之忍穗耳命

神皇産靈神

日

天照大御神

天

○天と地と月との大きさ小さたゞ、必ずしも圖に拘ることなし、また其行あひさることの遠さ近きは、深に拘はらず、此はいたく縮めて圖せり、實は遠西の人の測れる、測算の器を以て精くこれを量るに、日の徑三十二萬九千五百里餘り、月の徑九百三十八里餘り、地の徑三千四百三十里餘り、さて地より日の遠きこと二千六萬九千六百里餘り、月の地を離るゝこと六十萬三千百里餘り、と見ゆる也、然れば日の徑は地の徑より大きなること九十六倍餘り、月の徑より大きなること三百五十一倍餘り、さて地徑は月の徑より大なること三倍半餘にあたるなり、抑かゝる事どもなさへに云ふを、世の古學者等のいかにぞやと云ふべけれど、こは先年或人と共にかの器を以て自ら測り見たりしに、爭ひがたきことなれば記せるなり、異むことなかれ。

○是は天地泉の連たるがみな斷れ離れて泉も旋るところの圖なり、さてかくのごとく圖したるさまは假りに、十五日ごろの正午時に、西の方より見たるところの大かたの狀なり。

上
南
前
皇御孫命
地
外国
外国
外国
外国
北
後
下

月夜見命
月
泉

月夜見命は即速須佐之男命なり、夜見國を所知看て如此御名に負ひ給へるなり、

于宮處而。杵築矣。故云杵築也。云々。然而武甕槌神云々。神還昇于天而。復奏白言向和訖。爾其太子正哉吾勝々速日天忍穗耳命白曰。吾於爲將降裝束之間。所生之御子。彥穗瓊々杵命。應降此御子也。白賜矣。故是以如請白而。令科詔于皇御孫命而。令坐于天都高御座而云々。以其招禱之八咫鏡及天叢雲之劒二種之神寶。永令爲天日嗣之御璽而。亦副賜其招禱之八尺勾璁。其平國之廣矛云々而。天照大御神。御手捧持八咫鏡而。言壽曰。豐葦原水穗國者。吾御子之嗣々可治國也。汝皇御孫命。就坐而。爲安國平然。安然。所知看於此之天日嗣之高御座而。云々詔賜矣。云々。爾神魯企神魯美命。奉依天祝詞之大詔事而。詔曰云々。汝天兒屋根命。太玉命。云々。率諸部緒之神而。供奉于其職而可如天上之儀也。詔賜而云々。於是詔命天日高彥穗瓊々杵命而。離天之磐座而云々。於天浮橋浮渚在曾理發而。排分天之八重棚雲而稜威之道別道別而。果然天降坐于筑紫日向之高千穗之久士振峯矣云々。如此而皇御孫命。幸行自襲之槵日之二上峯之天浮橋而。自頓丘膂肉之空國覓國行去而。到坐於吾田笠狹之御崎而云々。故於底津石根宮柱太知。於高天原氷木高知而坐矣。

○前の圖の下に擧たる如く。この御國は大國主神の、國主と所知看し坐すを。此の天照大御神の御詔に。豐葦原之水穗國者。吾御子之所知國焉。と御詔依し賜へること。誰も心得がてにすることとなるにつけて。熟考ふるに。深き謂の有ることとなりけり。いでその謂れは。そも〳〵この國土は伊邪那岐大神の。畏き御依に因て。建速須佐之男命の。廣く永く所知看

すべき國土なるを。その大御母の坐す。根堅洲國に罷らまく欲けるも。いと止事なき御謂れの坐して。(この謂れのことは、第八圖の下にいへり)彼の國に罷坐しゝを。その罷り坐さむとする時。天上に參上坐て。天照大御神と御誓の中に御子生坐し。さてこの國土に降坐して。種々の大功を爲給ひ。遂に根の國に入り坐しゝかど。その御後をば。大國主神の繼たまひて國成したまひ。さて皇御孫命の天降坐す時。大國主神は隱り賜ひぬ。斯在事どもはこびに因りて考ふるに。かの御誓の中に生坐しゝ御子は。師の翁のいはれたるごとく。天照大御神は御父の如く。速須佐之男命は御母の如くの謂にて。この御國を知看すことは。始めに。伊邪那岐命の。速須佐之男命に。依たまへりし國土を。承續ぎしろし看す理りになむ有りける。かの、韓國之島者、有二金銀一、於二吾御子所レ治之國一不レ有二浮寶一則不レ佳。と速須佐之男命の宣はしゝ御言の結の。帶中日子天皇の御代に至りて知られたるにて。此の理りの妙へなることを悟るべし)斯在ば。大御神の。豐葦原之水穗國者。吾御子之所レ知國焉。と宣へる御言も。こゝを以て詔たまへる御言と。畏けれど量奉らるゝなり。この理りに因らずば。吾御子之所レ治國。と詔り賜へること。その謂の詳ならず。(なほおもふに速須佐之男命の、夜見國に入り坐さむとする際にかの御劔を天上に奉上たまへるを、八咫鏡にならべて、天つ日嗣しろし看す御璽の神寶に賜へること、上の件りの御謂れによれることゝも思ひ合され、はたかの二種の中に一つは、伊邪那岐命に屬坐す、日の神の御璽、一とつは伊邪那美の命に屬坐す、月の神の御璽たる理りにて。やがて伊邪那岐伊邪那美命の御正統を所知看す御謂れに相契ふ理りもあるを、よく思ふべく、また伊邪那岐命に屬坐す日の神は御父のごとく、伊邪那美命に屬坐す月の神は御母の如くに坐すも、悉に深き由あることとなるべし)然れば大御神の御言に。豐葦原之水穗國とのみ詔へるはその都し坐す地を以て宣へるにこそあれ。實は速須佐之男命に。青海原潮之八百重を知らせと。伊邪那岐命の依たまへる御言もこもりて。畏しなど申すもさらなる大御詔にぞありける。此を思ふにも。我が天皇命はしも。産靈大神。天照大御神の御孫に坐すが上に。かゝる御詔の

坐すなれば。青海原潮之八百重の留る限り。この國土に有りとある百八十の國々を。悉に所知看すべき大君に坐すこと。彌々益々灼然し。見よ〳〵今はなほ外つ國々の酋長ども。王がほにうしはき居れども。上件の謂れもありて。大名持少御神の。その國々を。皇國によりて仕へ奉らしめむと。侍伺ひ幸ひたまふなれば。終には理りの如く。千萬國の夷狄の酋長ども。殘らず臣と稱して。い這ひをろがみ歸命奉り。百八十船の棹梶干さず。滿つらなめて貢物献り。畏み仕へ奉るべき理り明かなるものぞ。あなあはれ。樂しきかも。歡ばしきかも。時の往ければ。その芽の既に萌來ぬるを。あなあはれ人は知らずも。(そも〳〵世には、五月蠅なす學者どもの甚多く、それら悉、外つ國々の妄說どもに惑ひ溺れて、皇大御國のかばかり尊き謂を諦むとはせず、たま〳〵もかゝる說をきゝては、驚き怪むのみならず、かへりて云破らむとのみ心は進むめる。此はそもいかなる曲心ぞも、されば、予かく云ふとも、信がふ人も、今はをさ〳〵有るまじけれど今より千歲の後の世人の、既くも、文化の頃に。先見して云ひ置けるよと思ひ合せて、其の時なむ始めて驚きてむ、吾は其を、冥府に待見むかし。)○大國主神の。この顯世の事避たまひて。何處に隱坐るぞなれば。常磐に杵築宮に隱り鎭り坐せるなり。然るはその隱レ於二八十隈手一而侍焉。と白したまへる八十隈手は。何處を許と指し定めむ處なき言なり。其は杵築宮に鎭り坐しつゝも。その御形を顯世に現し給はで。何處に坐とも知られず。隱り坐す狀を宣へる形容言にて。常世國といふに言意通へり。(師說にこの隱レ於二八十隈手一而侍焉、と白し給へるは、速須佐之男命の御末は、此の國に殘り留りたまふまじき謂れのあれば、泉國に往坐る、其を如此いへるなり、と解れしは非說なり。萬葉集に、百足らず、八十の隈路に手向せず、過去し人に、けだし相むかも、と詠る哥を引ていはれつれど、此の哥の意も、死人の魂は、何處をはかと、その往方の知られねば、其處、彼處の、八十隈路に手向けを爲てば、その過去し人に逢ふこととの有なむかと詠めるにて、泉の國に往く路をいへるに非ず、その泉路は、伊邪那岐命、また大國主神も、前に往還したまへれど隈路の有りける狀にも見えず、直路な

りけに見ゆるをや、但し書紀の一書に、海宮に往く路のことを、雖レ隔二八重之隈一と海つ神の宣へることのあるを、一つ義に、想よりもすべけれど、八十と、八重とは、言の義いたく異也、然るは、八十とは、八十伴緒、八十島などの類に、たゞに數の多きを云ひ、八重とは、八重疊、八重棚雲などの類ひに、重なる類の多きを云ふなれば、思ひ混ふべからず、夜見國に往坐ることならむには、隔二於八重之隈路一而、隱侍焉、などこそ白し給ふべきことなれ、なほこの事、終の條にいへり、)さて侍焉と白し給へるは。師説に、何事にまれ心をつけて。仰せ給ふ事などあらば奉らむと伺居る意なり。といはれつるごとく。今この神の如是白し賜ふもその意にて。八十隈手に隱りたる如く御身を現はし給はで。杵築宮に隱り坐すものから。なほ皇御孫命の。大御前に伺候居る心ばへにて。守衛仕へ奉らむとの御言なる事。下の文に。玉置而守と宣へるにても知られたり。(續紀十七詔に、御々世々爾當天、天下奏賜比、國家護仕奉流事乃、勝在臣多知乃、侍所爾波、置表氐、與二天地一共人爾不レ令レ侮、不レ令レ穢、治賜部止宣、とある侍所

は、その墓をいふにて、此も意ばへ同じ、と師のいはれつるも實に然ることなり、)さて、己命の望ましゝまに〳〵。宮は造りたまひて。天神祖命の。幽事を治らせと依し賜へる。大詔命を畏み承給りまして。顯明事は。皇御孫命に禪まをして。彼の宮に鎭り坐まし。今に至るまで幽冥事を治し看坐すなり。鎭り坐すとは、他處に遷往坐ずて、其の處に留り給ふ意に云ふ言にて、志豆麻理と、登杼麻理と通ふ言にて。祝詞の文どもに、高天原爾神留座とあるも、皇御孫命の、此の國に降たまふに對へて、天つ神の降らずして、天に留り坐すよしなれば、鎭り坐すと云ふと通へり、伊邪那岐命の、日少宮に留宅とあるも同じ義なり、と師のいはれたるが如し、また、須勢理毘賣命の、大國主神と、爲二盞結一宇那賀氣理而、至レ今鎭坐也、とある、至レ今は、古事記を記されしときをいへる今にて、この比賣命は、御嫡后に坐すなれば、共に杵築宮に、今に至るまで鎭り坐すとのことなるを以て、大國主神の他處に遷り往坐ず、今に至るまで杵築宮に鎭り坐すことを思ひ定むべしなほ此神のみならず、すべて神代の神々の、常石にその

御身ながら、今に至るまで、その社々に鎭り坐すこと、終の條に論らへり。）その幽冥事とは師の云く。皇御孫命の。天下所治看す萬の御政は。現人の顯に行ふ事なるに對ひて。顯に目にも見えず。誰爲すともなく。神の爲し賜ふ政なり。凡て此の世にあらゆる事は。みな神の御心もて爲たまふなれども。其の中に姑く、現人の爲すことに對へて。分て神事とはいふなり。今此の大神の。その神事を掌り治めすも。即皇朝の大政を幽に助け奉り給ふなれば。侍はむと云ふに。其の意はこもれり」といはれたるが如し〕但し此は、兼長公の纂疏にも、人爲ニ惡於顯明之地一則、帝皇誅レ之、爲ニ惡於幽冥之中一則、鬼神罰レ之、爲レ善獲レ福、亦同レ之神事則冥府之事也、と云へる如く、大國主神は、杵築宮に鎭り坐して、いはゆる冥府の事を掌りしろし看すなり、但しその御手に代りて、事執り奏したまふは。事代主神に坐すとおもはるゝ、其は、息長帶比賣命の、韓を征伐たまへる時、また天武天皇の大友皇子と御軍の時も、大國主神はものし給はで、彼の神の助け奉り給へることなどを思ひ合せて曉べし、此は其の父大神の御言に、吾子等百八十神者、八重事代主神、爲ニ神之御尾前一而、奉仕則不レ有ニ違神一也、と宣へるを以て考ふるに、此の神の御尾前と坐て助け奉り給ふ上は、かの十七代の神神の御子御子のうからやからの神々、また其百八十神の御子々々の神等の親族の神々も、悉に助け奉り賜ひけむ事知るべし、此狀を今の顯世のことにあはせ考ふるに、天皇命は、山城國に御座まして顯事の本を治看し、將軍家は、その大御手に代りて、天の下の御政を執奏したまひ、八十諸の大名がたを御てその御尾前となりて、仕へ奉りたまふ狀にいとよく似たり、此もまた幽き謂れあることなるべし、さて事代主神は、かくいみじき御靈幸ひの神に坐すが故に、彼のやむごとなき八柱の神の列に祭り給へるなるべし、またもしくは、幽冥事を執り奏し給ふ神に坐す故に、生靈、足靈、玉留靈、神の並に、天皇命の御魂を鎭め給ふ謂れに因りて、祭り賜へるにもあるべし、天武天皇を助け奉りたまへる時に、生靈の神と供なりしも思ひ合すべし、なほ八神のことは、師說は誤あり、その委しきことは古史傳にいへり、
○さて顯明事と、幽冥事との差別を熟想ふに、凡人

も如此生て現世に在るほどは、顯明事にて、天皇命の御民とあるを、死ては、その魂やがて神にて、かの幽靈、冥魂などもいふ如く、すでにいはゆる幽冥に歸けるなれば、さては、その冥府を掌り治めす大神は、大國主の神に坐せば、彼の神に歸命奉り、その御制を承賜はることなり、さてありつゝこの顯世なる君親また子孫に幸ふこと、大國主神の、隱り坐しつゝも、世に幸ひたまふが如し、なほ終の條りに云へるを見るべし。）さて。杵築宮を、常磐に坐す處と定めたまひ。鎭り坐しつゝも。少彥名神の渡り坐しゝ。常世國に御靈を通はしたまひて。彼の國々をも修堅ましゝなり。（そは前の圖の下にいへり。）さるは。諸常世の國々は。潮沫の凝成れる隨に。海を隔て離在れども。悉この潮之八百重の內つ國にて。そは上（第八第九圖の下）に云る如く。速須佐之男命の。所知看すべき國々なるに。彼の神は。上の件りの謂れに因りて。根の國に入り坐しつれば。その巡見そなはしゝ常世の國々は。その御子神等の。さしつぎ造り堅めまして。須佐之男命の御功を終し給ふべき謂れなればなり。（此は大國主神の、須佐之男大神の沼琴を取りて還へりましゝこと、また其の時の大神の御言を合せ考へ、また前の圖の下に記せる櫛御氣野命の、大國主神、少彥名神に、五百箇の鉏を依したまへること、また少彥名神の、常世の國に、わたり坐しゝことをいへるところと、合せ考へて、その妙へなることわりを悟るべし。）さてかの八十隈手に隱り坐しつゝも。その御魂を宮に留置賜へるは。己れ命のみならず。八十諸の御子神等の。御魂をも留置たまひて。その現身は。共に帥て隱り坐しゝなり。其は事代主神。味鉏高彥根神。賀夜奈流美神の御魂を。皇御孫命の御守神と。奉置たまへるを以て。餘の御子神等の上をもなぞらへ曉るべし。（これにつけて案に、かの齋衡三年に、常陸國に歸來坐る神石の中に、二つの大きなるは、大名持少彥名神の御靈石なるべく。餘に二十餘りのちひさなる石神ありて、その二つの神石の左右に在りて、侍坐る狀に似たるとあるは、その帥坐しゝ神々の、御靈の神石に坐ましけむかし。）さてその鎭坐る宮を造りたまへる時に。諸神等の參集て造りましゝは。幽冥の首渠神と坐すによりてなるべし。斯在事は。餘神にはたえ

て例なき事なればなり。かの倭迹々比賣命の御墓所を、晝は人の造り。夜は神の造り賜へるも。この比賣命は。大物主神の御妻となり給へるに依りてなると思ひ合すべし。（かゝる事實によりて案に、世の諺に、十月には、諸國の神々の、みな大社に、參集給ふと云ふことの在るを、生ものじりの徒など、何くれと小ざかしく論らひ譏ふめれど、此はいと古くより云ひならへることにて、決めて然る所以ありていへる說ならむと思はるゝ、其は上の件りいへる事どもを考へ合せて然るべき所以の元を悟るべし、○或人顯事と、幽事との別を問へるに、近き事にて悟しけらく、家にまれ、處にまれ、災事ある時は、そのまだきに、其の邊りに住む鳥獸などの、他へ避往くを思ふに、此はその災事は、人の過りて爲出たるにまれ、盜する穢き奴の放たるにまれ、實は神の御心と爲たまふが故に、鳥獸は疾く知りて避り往くになむ、此を其の氣の立現はるゝによりてぞ、などいはむはなほ末の說ぞも、實に其の氣の立現はるゝ故ならむにも、それやがて、神の立しめ給ふにて、ことに、其を人は知らぬを、鳥獸のまだきに知るこそ甚怪けれ、案ふに、實は然るべき所以ありて、鳥獸は、幽冥に屬たるものと見ゆれば、神の御心を間傳ふなるべし、○また問ふ、大國主神をはじめ、その隱り坐しゝ諸々神等のこの御國に、その御形の見え坐さぬは然ることなれども、外つ國々にも、かの神々の御形を現はして、其と正しき事實も、今に見えざるはいかに、答ふ、その御形を今も隱坐すことは、かの隱り而侍焉、と白したまへるは、御國にかぎりてのことにはあらず、何の國に坐すとも、その御形は隱したまひて、その幽事を掌り治めすことも、萬の國の幽冥事を治めす也、御國にかぎる如く、狹くな思ひそよ、但し、その御形の見え坐さぬを、凡人の上を以て、怪しみ思ふめれど、鳥獸の上にても考へ見よ、人の畜へるは顯明に屬く體なると見えて、その骸の見ゆるを、然らぬは、その骸とては見えぬを思へば、彼等もその終りには、何處にか身を隱すと見ゆるを、かゝる微き物すらに、かゝる怪きことの有るなれば、まして、神の上をや、またこれによりても、上に鳥獸を幽冥に屬くならむ、といへる說の强說ならぬことを味ふべし、また鳥獸を神々の使者

と為給ふなども、いひて現にその御託宣を、鳥獸より開くことも有る、其は、秦大津父が助たりし狼の、欽明天皇にさとし奉りて、大津父に官位を賜はしめたるなどを思ふべし。また人の死て後に、異物と化ることもあるは、異物は幽冥に屬く故にもあるべし、そは掛まくもかしこき、倭建ノ命の御魂の、白鳥と化り給ひ、田道の靈の、大蛇と化れるなどを考ふべし、かゝれば、神代に鳥獸の神々にもの云ひけむも怪しむべきことにあらず、また生ながら幽冥に入ることあり、さるは世に木靈といふものに、伴なはるゝものゝまゝあるを、その伴なはるゝほどは、顯世にありつゝも、人の眼に見えざることいと怪し、かの白鳥の御陵守が白鹿に化れるも、生ながら幽冥に入りたるなり、すべて斯在たぐひの事どもは、心狹き儒者などの え知らぬは然るものにて、古へ學する徒さへに、心得がてにする事なるにつけて、如此委く云ふを、此説をきゝつゝも、なほ密々に論ひ云ふ人もあらむ、それきかまほし〳〵。始めに伊邪那岐大神と。伊邪那美大神と。國堅め生成し給ひ。さて分れて。天上と夜見とに神留坐し。其御子天照大御神と。須佐之男大神とも。また天と泉とに相分れ給ひ。今また各その御子孫相分れて。終にこの顯國の。幽冥と。顯明とを所治看し別給ふこと、永く定まりし。かの青海原潮之八百重を治らせと依給へる神敕の幽にしるし有ること。その元はみな。二柱の産靈大神の産靈の御靈に因ることにて。深き所以あることなるべし。妙なるかも。奇しきかも。奇しきかも。妙なるかも。なほ、幽冥の事は、終の條にいへると、合せ考ふべし〳〵○大國主神の避坐さむとする時。その平國の廣矛を授奉給へることは。此の神の亦御名を。八千矛神とも。葦原醜男神とも稱して、猛く勇める神に坐て。かの八十神を追伏せ給へるより始めて。越の八口を平給へる。その間にも。國作らむとしては。多くの荒ぶる神を。この御矛を以て盡に平罰め給ひけむ。故これを授奉りて。用二此矛一治レ國則。必當平安焉。とは白し給へるなるべし。斯在やむごとなき謂ある御矛なる故に。天つ神の二種の御璽に副へて。依給へるなるべし。(夏目甕麻呂云、この御矛は、彼の神の授け給へる時の御語を思ふに、皇御孫命の、國しろし食す御璽は、鏡劒なれども、

荒神を鎭め給ふには、この御矛ぞ並なき國の御寶なりける、且その代の狀を想像るにやうやくにして和奉りたる、大國主神の、用二此矛一治レ國則、必當二平安一焉、と宣へる矛なれば、この國土に降り給はむには、必ず天つ御璽とゝもに、持降り給ふべきものなり、と云へる、實に然ることとなり、かの倭建ノ命に東國を征しめ給へる時に、柊木の八廣矛を賜ひて、依し給へるも思ひ合すべし。）さて、往古には。この御矛を授奉たまへるを大御心と爲給へるか。縣居の翁の。上つ代の天皇命。内には皇神を崇め給ひ。外には嚴き大御稜威を振起まして。服はぬ國を平け。千劔破人を和しまし。天地に合ひて。とほしろき道をなしたまひ治めたまひ。内ゆふの狹きことをば。見し直しきこし直し坐しかば。（時有りて、文を外にし、武を内にすと云ふは、他國の、理屈ぶみのさだなり、皇朝はしからず、常に武をかゞやかすを本とすよりて古への御代はますゝゝ榮えましたり。）青人草も皇神をゐやまひて。心に穢きくまをおかず。天皇命を畏みて。身に犯せる罪もなく。況て臣等は。海ゆかば水漬かばね。山ゆかば草むす屍。大君の邊にこそ死なめ。のどには有らじと言たてゝ。雄々しき眞心をもて仕へ奉れる。」といはれしごとく。世の人の心本は。武く勇めりしを。外國說の入交りて。人心わろ賢しく。女々しくなりもて來しなり。然るを。今また古へ學のかく眞盛なるにつきては。漸に人心も。古への雄々しきにかへり往くべき時になむなりにたる。さてこの御矛は。いま紀伊國に鎭り坐して。國懸神と申は。即この御矛になも坐ましける。（此は、夏目甕麿いとよく辨へて、記せるものあり、なほこの御矛につきては、いはまほしきことの多かるを、こは古史傳にいへり。）○大國主神の皇御孫命を。天神之御子と白し給へることは。師の翁のいはれたる如く。皇御孫瓊々杵命は。天照大御神の御子。天ノ忍穗耳ノ命の御子に坐せば。大凡の國つ神と同等からざる由に事を分けて。崇み奉りて。如此は白し給へるなり。さて御々代々の天皇命をもしか申し奉ることは。我が天皇命の高御座は。天照大御神の。萬千秋之長五百秋に。所知看せと依し給へる御座なる故に。その高御座に位すをば。御孫ながらに。御々代々。天つ神の御子とは申し奉ることなり。此はそ

の高御座に位すは。即天照大御神の御子に坐せばなり。（子とは、子孫末々までにわたる名なること、師說に、具にいはれたるがごとし。）然在ば。この御稱は。天地の際に。わが天皇命一柱に限りてまをす御稱になむ有りける。（然在に漢土の酋長どもの、代々に、天子と名稱居ることこそ心得ね、さるは、彼の國にて、古く天といへるは、即日のことにて、其の神を天神といふべきを、その坐處を以て、たゞに天と云ふなれば、その天子と稱ふは、やがて天ッ神之御子とまをすに義異ならず、此は何と云ふ酋長か、人ごろひ名稱り初けると考ふるに、彼の國籍に、帝王之稱天子自炎帝始也、とあるに依れば、かの神農といひける酋長が名稱り初めて、代々の酋長どもゝ、此をまねび稱へるなれど、甚じき僭稱なり。此は、古の傳へのほの〴〵彼の國にも、訛傳はるを以て案ふに、わが天皇命を、天つ神之御子とまをす御稱の、かの國の古へにもほの〴〵聞え有りて、其を、神農が何の辨へもなく、一國も領居るものは、天つ神之子といふべきことゝ非心得して、おのが國語を以て、天子と名稱れるものなり、いみじき僭稱ならじやは外つ國の酋長ども何の璽ありてか、天子とはいはむ、かつて其謂なきことゆゑ、彼國の古へ籍に、しか稱ふべき、證は更になきぞかし、遙後の世に記せる、白虎通などに、所以稱天子者何、王者父天母地爲天之子也、と云ひ、また援神契といふ書の說とて、天覆地載、謂之天子、など見えたれどもいかで此を天子と稱ふの本說と云ふべき、もし強に、上の件二書の說を立て、漢土の酋長どもゝ、天つ神の、産靈の御璽によりて、生れるゆゑに、しかいふとならば、鳥獸草木、活とし活るもの、生とし生るもの、盡に、天は覆ひ地は載せざるものゝなければ、此れ等も天子と云ひて可からめや、かにかくに彼の天子といふ稱は、もと天皇命の御稱の、彼の國にほの〴〵聞えありしを、偷稱へること疑ひなし、もし然らずは、いはゆる杜撰になむ有りける、然るを、漢學に耽り居る輩など、彼れが人ごろひ稱へる天子と云ふ號の、御國に、遷り來れることを辨へず、かへらまに天つ神之御子と申す御稱は、天子と書ける文字に設けたる和訓ぞ、などいへるもあれど、すべて世に、漢學者ばかりつたなきものなく、その本末を辨へざる

によりて、斯る狂說をば放つなりけり、あなかしこ眞の天子の御民と有りながら、外つ國々の酋長どもを、天子などいはむは、反逆にひとしき罪ぞも其を王といはむだに、既に、親王の御子を、王と稱す御令の有る上は、憚なしといふべからず、此の頃は儒者のみならず、西極なる國の、學びをする輩も、また彼の國々の酋長どもを禮まひ云ひて、天子よ大尊よなど云ひもし、書きもするを、聞くごとに見るごとにむねわろく、ほと〳〵物をつき出むとするぞかし、此の輩も後には、儒者の西戎を尊む如く、紅毛人を尊むべきその芽の既に見ゆれば、かくいちはやく曉し置になむ。)○神魯企神魯美命とは。(第一圖の下にいへる如く、)高皇產靈神皇產靈神を。天皇命の稱し給ふ御稱なり。さて。その御依し坐る。天祝詞之太詔事とまをすは。世の初發よりの故事を。神魯企神魯美命の。大御口づから傳へ坐して。その故事の謂の隨に、政給はむ狀をも依し給へるを云ふなり。(この事、なほ古史傳に委くいへり。)さて皇御孫命の御々代々。その神祖命の。御依し坐るまに〳〵。己命の御さかしらを交給はず。政給ふなる。惟神なる道とは云ふなり。(孝德天皇の御紀に、惟神謂下隨二神道一亦自有中神道上也と見え、又、萬葉集の哥にも、神代より、云ひ傳けらく、虛見つ、倭國は、皇祖のいつくしき國、言靈の、幸ふ國とかたり繼ぎ、いひつがひけり、今の世の人もこと〴〵、目の前に、見まし知りまし—と詠るなどを熟思ふべし、)うべな〳〵我が皇大御國の。古の傳への正實にして。眞の道の傳はり、また古語の麗く。世の人の聲音も言語も雅にして。萬の國に比類なきことよ。其はもはら。神魯企神魯美命の御言を伊邪那岐伊邪那美神の御代より云繼來り。はた此の時の御依しの謂に因る事になむ有りける。(但しその萬の國の言語も、上の件云る如く、すべて、常世の國々は、大名持少名御神の、固め給へるなる故、皇國と同じ言語の傳はるべきに、たま〳〵同じきも有れどすべては、甚異ひ古語にもさへつるやからといへるごとく、唐戎をはじめ、もろ〳〵外つ國々の言語は、いはゆる侏離鴃舌にして師翁の三音考に、具に辨へられたる如くその音あるは、息漏す鼻にかゝり、また然らぬは、舌と齶にふるゝ音の多く言語の體用本末をあやまりなどして、

言靈の正實にかなはねば、活用にうとく、いと〳〵混亂なることそ心得ね、此は然る由ありて、神の御心と、かく爲給へることとは、論らひなきものから、その由いまだ思ひ得ず、天竺の古傳に、梵天といへるは、全く、產靈神の御事を訛りていへりと思はるゝを、其の國の聲音は、その梵天の、天降りて傳へたるなるによりて、梵音と云ふと云へるが、此は產靈神の、末々の神して、傳へませることなどの有りしを、さがく語り傳へたるか、または大名持少彥名神の傳へ坐るを、如此いへるならむも知るべからず、然いふ故は、彼の國は、遠く漢土の地を隔りて離居るにかへりて、漢國の音聲よりは、皇國の正音に、親しき音のあればなり、また西の極なる國々の古傳に、太古の世は、言語たゞ一種のみなりしに、漸に人心傲りわろさかしくなり、その國々の酋長ども會集ひて虛空の際を窮めむなど機工けるを、天つ神のそを憎みて、その諸人の語音を、種々に別ち亂したるによりて、諸人の言語を通しがたく、その機作ける事の成らずて、是より始めて、諸邦の語音を異になせり、と云ひ傳ふること、山村氏の雜記に見えたり、もろもろ常世の國々の言語の、其の國ごとに異なるは、實にかゝる謂によりけむも知るべからず、なほよく考ふべく、實は、萬の國の言語元は、一つなるべき理にてこそ〕○天之浮橋のこと。古書どもを熟考るに。波志とはいへども。今存る橋の。此方の岸より。彼方の岸に掛れる如く。天と地との、中間にかゝれる物にもあらず。また天と地と連續する帶にも非ず。神の御量もて造り出給ひて。事と有る節は。それに乘て。虛空を乘り給ふ物にて。此の世なる物にては、水を乘る船の如き物なり。かく虛空に。浮漂はし。乘て往來する物ゆゑ。浮橋とは云ふなり。〔もし考にいへるごとく、天地の連續たる帶ならむには、いかでこれを浮橋といはむ〕初めに。伊邪那岐伊邪那美命の立して。國土を書成し給へるも。此の物に乘りてなれど。〔その書成し給へる時は、既に天地の斷離れたりしことは、第五圖の下にいへるが如し、〕彼處にては。其の狀の詳に知られざるを。此の御天降の段にては。其の狀のさだかに知らるゝなり。さるは。皇御孫ノ命の。於二天之浮橋一浮渚在曾理發而とある浮渚在は。曾理の發語にて。〔其の由は下にいへり〕曾

理發すとは。萬葉集の哥に御輿立してといへる意に。浮橋に乘發して、天降坐す御稜威のいみじきを云ひて。その曾理てふ言は。萬葉集に。越の立山を詠る歌に。「白雲の。千重をおしわけ。天曾々理。たかき立山」とある。曾々理と同言にて。彼は。彼の山の高くそびえたる勢の曾々理かなるをいひ。此の曾理發は。天よりこの國に。稜威の道別き道別給ひて。降坐す御稜威の、曾々理かに。烈しかりし狀をいへるなり。(雪深き國にて乘る、橇てふものあり、此は、予、出羽の秋田に居たりしとき乘りて見しに、此の物に乘りて雪の積れる道を、道別き雪別け推行く狀の、いかにも、稜威の道々別々と云ふに、よくかなひて、烈く進なる物なり、されば、かの曾理てふ名は、その雪道かき別け行く、勢ひの烈しきより、負せたる名なるべし、さて、此の浮渚在を、曾理の發語なりと云ふ故は、浮橋に乘りて、曾理發ち行く狀の、浮渚に乘りたるが如くにもあれば、その發語におけるなるべし、在の義いまだ思ひ得ず、なほよく考ふべし。)さてこの浮橋は。今存る船のごとく。其に乘りながら。心ざす處に泊るものゆゑ。また磐船とも云ふなり。(磐とは、其の物、實に磐にて造れる故にしか云ふか、またはその堅固を稱て、しかいふか、今定めてはいひがたし。)そは舊事紀に。饒速日命。乘天磐船而。天降坐於河內國河上哮峯。則遷坐於大倭國鳥見白庭山。所謂乘天磐船而。翔行於大虛空。巡睨是鄉而。天降坐矣。虛空見日本國是歟。とあるを思ふべし。(書紀神武の卷にも如此見えたり、今はその委きに依て、舊事紀を擧げたる也、)また萬葉集に。「久方の、天之探女が、石船の、泊し高津は、淺にけるかも」とある哥によれば、天稚彥の降られし時も、此の物に乘りてなるべし、)また此を今有る船のごとき物なりと云ふを。異みおもふめれど。この饒速日命の。供奉の部緖の中に。船長。跡部首等祖。天津羽原といふ見え。また梶取船子など云ふも有るを見て。船と同じ狀の物なること知るべし。また浮橋と磐船と一つ物ぞといふを。怪まむ人になほいはゞ。皇御孫命。幸行自襲之槵日之二上峯之天浮橋而。自頓丘膂肉之空國。覓國行去而。とあるを考ふべし、此は浮橋に乘り給ひながら。二上峯に泊給ひて。(神々の浮橋に乘りて、天降坐し

し跡を、つら〳〵考ふるに、凡高き山の頂なるは、その降り坐すに、便よきによりてなるべし、また此によりて思へば、播磨の國、また、丹後の國などに存る橋立は、その磐船に乘りたまふまでの要に、造り給へるなるべし、「橋立といふ名もしかきこえたり、かの光神の神降したる時なども、高き木の梢より、雲には乘るなどを以て、此の理りを悟るべし、また天より降りたまふ、その降口にも橋立はあり、然るは、外つ宮の古書どもに天村雲命の、天上に參上らしゝ時の言に、大橋は、皇大神並、皇御孫命の天降坐るを畏みて、後の方の小橋より參上りき、と白し給へることの、見ゆればなり」その浮橋より出坐て國覓ぎ給へるにて。今有る船を。大津邊に重石おろして。さてそれに乘れる人の。陸に上りたると。全く同じ狀なるを以て　磐船と浮橋と。一つ物なることを思ひ定むべし。（此考へをかき竟て、また萬葉集を見れば、家持卿の哥に「蜻島、山跡國を、天雲に磐船浮て、ともにへに、眞櫂繁貫き、いこぎつゝ、國看しせして、天降まし、掃ひ平げ、千代累ね、彌嗣繼にしらし來る、天の日繼と神ながら、吾皇の天の下、治給へば云々」とあり、此は、皇御孫命の、天降坐ることを詠るなるに、浮橋といはで、磐船といへり、此哥に依りて、予が考への、あたれることを悟るべし、あはれ世の萬葉集を學ぶ徒、その古言のことをばあら〳〵辨へつれど、眞實の學びは、なほ未しきぞ、）然れば天穗日命の、天翔國翔りて。見巡らしゝも。此の物に乘りてなるべく。また天忍雲根命の（皇御孫命の御天降の後に）天之二上に上らしゝとき。天浮雲に乘りてとあるも。この磐船に乘りて。乘られしなるべく。また鴨武角見命の（神武天皇の御世に）二上峯に降られしもこの物に乘りてなるべし。（然るを考に天の浮橋は、天と地と相連續ける帶にて天地の漸々に相遠ざかりゆくに隨ひて、この帶も漸々に細く微くなりて、皇御孫命の天降坐すまでこの帶ありしが、既に天降坐て終に斷離て、永く天と地との往來止ぬるなり、）といへる、理りはさることにも聞ゆれども、もし中庸の說の如くならむには、皇御孫命の天降坐て後も、かく神々の上り下り坐ることの有るをば、いかにとかいはむ、殊に武角見命の降られしなどは、皇御孫命の天降坐て、

千萬歳の後なるをや、考には、をり〳〵かゝる誤りのあるは、かの大船を榜の進に岩に觸り、鹿追ふ獵人、山を見ざるの類ひなるべし〕これによりておもへば。この行末の後の世に。事とありて。天上に坐す神祖命より。天皇命に。大御使を降し給ふことの有らむも知るべからず。あなかしこ。〇天地泉の三つ。〔第四の圖に著せるごとく〕初發は球を貫きたる如く。帶つゞきて。天は地の頂上にあり。泉は地の下つ方に在しが。天は疾く斷離れて。〔そは第五の圖に著はせるが如し〕地と泉とは。なほ久しく連續き在りしこと。上の件の圖どものごとくなりしに。その斷離れたるは。何時のほどなりけむ知るべからねど。古傳の趣きによりて。その大概を推度るに大國主神の。現身ながらに。往還給ひしこと。第九の圖の下に擧たる傳への如くなれば。其の時はなほ連けりしこと論らひなし。されば其の斷れ離れたるは。皇御孫命の天降坐る、前後の間にや有りけむ。然るは。二柱の神の生成し給ひ。天照大御神の生坐る。この御國の君の定まり給ひて。天降來坐て天の下を所知看し。また、速須佐之男命の御末の神々は。大國主神を始め。悉に八十隈手に隱坐て。此の時ぞ天地泉の事の、全く成竟たるなれば。斷れ離るゝこと。元より然在べき理の具りたることとなるべし。さて。しか正しく三つと成りて。天つ日は。高く上に位を定めて。動き轉ることなく。地は元よりのまゝに漂旋り。月泉は地の底に成て。もと地につきて。漂ひ旋れる物なるけにや。斷れ離れて後もその如く。地に屬て旋ること。今の現に見るが如し。〔たゞし、此は古傳に因り現に見るところの、事實に測考へていふなれども、事實にうとき人は今見るに、日は東に出て西に沒ると見ゆるを以て、地の旋ると云ふを、異み思ふめれど、其は、その身の微少ことを思はざればなり、地は虛空に漂ひ、日に屬て轉旋るを、人のしらで、日の旋ると思ふことは、譬へば舟に乘りて川を行くに、舟は其の儘にありて、岸の移ると見ゆるが如し、其は實は岸の移るにはあらずて、舟の行くなるを以て、この理を悟るべし、此は事舊たる譬なれどせめて云ふなり、また、予がこの天つ日は動かで、地と月とは、旋るといふ說を、外つ國人の說に因れりなどな思ひそよ、此は、古傳の趣きに灼然

く見えたる事實によりて、考へ出たるなるを、その適に外つ國人の説に似たるは、彼が強に考へたる説の、古傳に合るにこそあれ、わが説の、彼れに似たるには、非ずなむ。）これらのことすべて神の産靈の。奇く妙なる理によりて。然るなれば。更に人の小き智をもて。とかく測識るべき限にあらず。さて。天とは即日のこと。夜見とは即月のことなるを。世の人然しも思はざるは。考にもいへる如く。そのいまだ斷離れざりしほど。阿米は頂上にあり。夜見は下の方に在しならひにて。頂上を阿米と心得。夜見ノ國は。地の下にありと心得來れるから。斷離れて後も。なほその心にて。現に見ゆる物をば。比と云ひ都伎といひて。阿米夜見とは。別物の如くなれるなり。日すなはち天なることは。天照大御神は天に坐すを。日の神とまをすにて灼然く。また神武天皇の御兄彦五瀬命の御言に。吾者爲日神之御子向日而戰不良。と宣へるに依りて考ふるに。天皇を。天つ神の御子とまをすは常なるに。此御言に。日ノ神之御子と宣へるにて。天即日なることをおもひ定むべし。（また萬葉集に、人の死ては、その魂の天に往として

天所知奴禮、また、天原、石門乎開而、神上上坐奴、など詠なせるを、また、吾王者、高日所知奴、とも詠るなどを考へわたして、其頃なほ、天と日と、一つなることを、心得あやまらざる人も、ありしことを知るべく、また、天即日なりといふ考への、強言ならぬことをも悟ねかし。）また。夜見すなはち月なることは。速須佐之男命は。夜見ノ國に入坐るを。月夜見命とまをし。（須佐之男命月夜見命おなじ神に坐すこと、具に或問にいへるが如し。）その月夜見命の。吾は月の神なりと。御名告坐るにて論らひなし。（此事第二の圖の下に記せり、なほいはゞ、萬葉集に、月を月讀、また、月讀壯士など詠るは、月やがて夜見なる徵にて、此は神代に、夜見ノ國の斷れ離れて、月と見え初しほどより云る、古言の存りて、云ひならへるなるべし、此を月は、夜に見ゆるもの故にしか云ふなど思はむは、元を知らざる、未しき心ぞもまた案に、都伎といふ言の義は、夜見はもと、地につきて有し故に、都久夜見といへりしを、略きて、都伎とのみ、いへるにもあるべし。）さて。考にもいへる如く。月夜見國は。もと地の下に在りしかば。

其に隔てられて。日の光はあたらで。いつも闇かりしこと。夜見と云ふにて論ひなし。(そは、地の下半に着たる國々のことは、今の世にすら、夜國と云ひて、夜がちなる國もあれば、そのかみ、夜見國の闇かりしこと、准て知るべし。)斯て。晝夜と定まり有しことは。斷離れて後なること、これまた論らひなし。さて。天の國は。上にいへるごとく內裡方にあるを。月夜見の國は。大地なる國の如く。外表方に有ると見ゆるなり。そは。遠目鏡をあてゝこれを見るに。白く光りて見ゆるところは。此の地の海と同じく。荒波の起さへ見え。彼のむら〳〵と見ゆる物は。陸のごとく。山さへに見ゆればなり。(古歌に、月の桂といへる、即これなり。)さて。かの國には。國之底立神。豐斟渟神。また。伊邪那美命の坐せども。其の國を所知看す君たる神は。月夜見命に坐すなり。(そは、高天原には、五つ柱の天つ神、また伊邪那岐命も坐ませども、其の君たる神は、天照大御神に坐すと、同じきなり。)〇さて。日月は。彼の一の物の中より萌上り。垂下り。成れるなるを。書紀の一書に。日月既に生と見え。また。今の世にも。二柱の神の。直に今見放る日月を生給へると心得たるも間々あり。(外つ國々にもかの盤古氏の兩眼、日月となれるといひ、また、羲和といひけるもの、始めて、日月を生めるなど云ふ類ひ多かり。)此は實は。日月を所知看す神を。生給へるとの事なるをその坐ます國を以て語れるが。後に心得ひがめて。如此は語り傳へたるものなり。(すべてその坐處を以て、神にも人にもいふこと、古へ今に例多かることなり、其は、鬼神新論にいへるを考ふべし。)天照大御神は日には坐まさず。日を所知看す神なること上に擧たる。彦五瀨命の御言にて灼然く。また月夜見命は。月には坐さず。月を所知看す神なること萬葉集にも「天海月船浮。桂梶懸而榜所見。月人壯子」(この哥正しく、月と月の神とを異に、よく詠分ちたり。)と詠ると。上の件次々いへる趣とを。考へ合せて悟るべし。(日は即天、月は即夜見なりとの考へは、中庸が始めていひ出たることにて、萬世に通りて、動くまじき說なれば、其をこたび、予委くせるになむ、

〇或人問。皇國は大地の頂上に在りて。正しく天に對へりし國なりと云ふこと心得ず。若然らば。春分

秋分の時。日を。直頂上に見るべきことわりなるに。恒も。南の方にかたよりて。斜に見るを以て考ふれば。地の頂上とはいひがたし。いかゞ。答ふ此は人の面の。頭頂には着かずして。目も鼻も口も。前の方にかたよりてあると同じ理なり。抑。地は圓にして。その形には。上下。前後などのけぢめなきがごとくなれども。實には。その差別なきにあらず。さるは。地は恒も東西とのみ旋りて。南北とは旋ることなし。故。日をつねに。横にのみ見る國もあり。然れば。これまのあたり。東西と。南北との差ありて。何方も同じきには非るにあらずや。これに准へて。上下も前後も有ことを悟るべし。かくて。その上の方の正中は皇國にして。南の方は前なり。北の方は後なり。東の方は左なり。西の方は右なり。故日月をやゝ南の方にうくるは。人面の。前の方にあると同じことにて。前の方にうくるなれば。皇國の大地の頂上なることいよゝ著明し。(こは、實は師の考へにて、三大考に記しあるを、其は地を動かぬものとし、日の旋るとしていはれつれば、今いさゝか、論らひ直して、答へつるなり、合せ讀て、その異を知るべし)また問ふ。もし然らば。日月をやゝ南のそらに望む國々は。皆大地の頂上と云ふべくや。されば頂上いかでか皇國に限らむ。答ふ。皇國の地の頂上なることは。日月を南にうくる故に。然りとするにはあらず。もとより頂上なるが故に。日月をその前の方にうくるなり。されば。皇國とおなじ狀に。日月を南の空に望む國もあるは。たま〳〵皇國の東西にあたるすぢに近きが故なり。(此も實は、中庸の答へなるを、また論らひ直して記したるなり、○何事も、外つ國の說ならでは、信がはぬ、俗の學者どものならひなるにつけて、その外つ國の事實によりて、皇大御國の、萬の國の頂上に、位することの、憒なる謂を論すべきことあり、然るは唐戎の、堯といひける酋長が時に、その國中、いみじき洪水の有りて、尙書や史記に、天に滔り、浩々として山を懷ね、陵に襄ると云ひ、また、下民皆服㆓於水㆒など見えて、そは、三十年ほどの苦みと見ゆるを、またこの時代にあたりて、西の極なる國々にも洪水有て中には、地面全く水に沒りたる國さへありて、人悉く、水に溺れて死けるが中に、能安玖と云ひけるものと、

餘に一人二人、高き山に登りて生殘り、洪水をさまりて後に、その子孫ふえひろごりて、諸國にちりぼひ、西の國々なる今の人種は、この能安玖か末なりとぞ、此は、漢籍物理小識と云ふものにも見えて、在二堯時一といへり、さて、この外つ國々の洪水の時代は、皇國にては、神代の末にあたるを、いさゝかも、然ることの有りける狀に、思ひ合さるゝこともなし、是を考へて、皇國の位處の、異に高く尊きことも、また漢土をはじめ、西にあたる國々の、下く卑きことをも思ひ定むべし、其の中に漢土は、いささかも、皇國に近き故か、西の極なる國々よりは水も少く、人種の絕るまでには、有らざりしなり、また朝鮮の古代の事を記せるものにも、此の洪水のことの見えぬは、漢土よりも殊に、皇國に近き國なる故に、實に洪水のなかりけむかし、いかに、皇國を萬の國の頂上なりと云ふ說の、公平なる論らひにあらずや、)〇また問。天地月三つの成初またその有象は。上の件に。次々論らへるにて聞えたれど。皇國の古傳に。星のことの詳ならぬはいかに。答ふ。天地泉はもと一つに混成れる物の。分成れるにて。其を造り坐し、神々の往來坐し。はたその天泉に坐す神の。常磐に。この國に靈幸ひ給ふなれば。この國土にあらむ人のかぎり。明らめ知らではあるまじく。故古傳の趣きに依りて。熟尋ぬべきことなれども。星の事は。古傳にたゞ。星の神香々背男といふ名のみ見えて。其は武甕槌神の後取神に。事もなく。罰られたるばかりの。微き神なり。されば日月とならべて。こと〴〵しくさだすべき物にあらず。さるは星のいかなるものぞといふことを。詳に辨たらむも道の學問には。然しも要なき事なればなり。(然るを、外つ國人どもの、なき手を出して測考へ、日月にならべていみじきものに云ひさわぐは、をかしきことなれども、其は外つ國人どもは、その產物の少くて、普く、萬の國に交易せでは、その國用も乏しき故に、交易の爲に諸國に渡るを、海つ路を知らざれば、他の國に往くことあたはず、故その海つ路を知るを專とするなり、さてその海つ路を知らまくするには、虛空なる星を目標とせざれば、海つ路を渡ること心儘ならず、故、星のことをば、こと〴〵しく論することになむ、然るに皇國は、萬の國の本つ祖國なる

が故に、萬の物滿足て、其が上に望まねども外つ國國の產物をば、餘りあるまで貢來る、四海の宗國なる故に、外つ國人も鎖する國と稱せる如く、異國に船出を禁たまへば、星のさわぎは要となき論なり、殊に、異國々に論する星の說をきくに、所謂五星は各々一つの國土なりと云ふばかりは、然もありげなれど、是も實は空論なるが上に、所謂恒天に見ゆる、微なる星どもを、並、天つ日の如き物ぞなどいふを始め、その說まち〱にて、考究ることあたはず、よし考へ得たらむも益なきわざなれば、所謂二十八宿の位處、またその轉旋る狀などを心得たらむには、古へぶりの大らかに、知らずともなてふことか有らむ、また漢土にも星の上にて、世の吉凶治亂を云へるなどの、〆稚くつたなき妄說なることは、旣く其の國の人すら看破りたるものあるをまして、皇國の人の論すべきことにあらず、然はあれど、かの星翁の人々の、うめきすめき、この學びに勞き居るを見れば、外に故由あることなるか、其はとまれかくまれ、吾なみ古への大道を尋る徒の、さしもなづみて、論すべきことゝはおぼえず、たゞ其の大本たる天地泉の、旋り幸ふ有狀をよく知りて、星の學問は末のことなれば、彼の星翁に委ね置くべきことになむ、但し此は、吾が徒にのみ云ふことぞ。）〇さて。天地泉のあるやう。また幽冥の妙なる有狀を、なほ委曲に考ふるに。抑。天は、上に次々云へるごとく。その萠上れる初めより。澄明なる質にて。その國からの勝れてうるはしきけにや。五つ柱の別天神。また伊邪那岐命。天照大御神を始め奉り、八百萬の善き神神の神留坐て。（そは天にて生坐る神々のみならず、この國土にて生れ坐せるも、善き神は、彼處に集ひたまふことにて、そは岩屋戸の段には、この國土にて生れ坐せる神々も、多く集給へるを以て悟るべし、）たま〱も荒ぶる神をば。根の國に神逐ひにさすらひ遣りて。善事のかぎりある御國なり。また泉の國はこの國土の重く濁れる。其底に成れる國なれば。なほ殊に。重く濁れる物の凝て成れること知るべく。かゝる謂によりてか。師の翁のいはれし如く。萬づの禍事惡事の行留る國なり。（こは、古への事實の上に明に見えて第九圖の下に、委くいへるが如し、）故其處には。千劍破神の神留坐すべき國なることも。

因より然る謂あることなるべし。（異國の說に、この國土の下に、那落といふいと畏き處の有りて、そはこの國土なる惡人の靈の往く處なるを、其處にそを罰むる、種々の神ありと云ふも、此方の古傳の訛りて傳はれるに、をそ說そへていふにぞありける。）また此の國土は。天の澄明なると。底の國の重く濁れるとが分去りて。中間に殘在る物の凝成れるなれば。澄める物の萌上れるなごりと。濁れる物の下に凝れるそのなごりとが。相混りて成れるなる故。天の善と根の國の惡きとを相兼ぬべき謂の灼然なり。（但し上にも云へる如く、この國土にも、おのづからに上下ありて、その上つ方は皇國にて、人の體にてたとへば額の如し、されば皇國は、この國土のあるが中に、美地のかぎりなること、始め、天の萌上れる地なるにて著明く、また此の下方に在る島々は、もと根の國の凝成れる方なれば、穢く惡き事の多かるべき謂れをも思ふべし、○因にいふ、西戎の古き說に世の初めは、天地混成て、雞子の如くなりしが、其淸る物は上りて天となり、濁れる物は下に凝て地となれると云ふは、古傳の殘れるなり、此を一向に、

漢國人のさかしら說と云ひくたすは、甚あぢきなく片落とやいはまし。）さてかくの如く。天地泉と三つに分り竟て後も。天と地とは。神々の往來したまへる事實の多在ども。（そは、上の條々に擧たる、古傳を見て知るべし。）地と泉とは。大國主神の往て還り坐しゝ後は。神々の現身ながらは更にもいはず。その御靈さへに往來したりし事の實も。傳へも更に見えざるは。此は伊邪那岐大神の。彼の國を甚く惡みおもほす御心に。彼の國此の國の往還を止め定給へる。御謂に因ることゝ見えて。いとも畏き御定になむありける。（但し、禍津日神の彼の國に坐て、此方に禍事を爲し給ふことは、事異なり。）然るを古くも今も。人の死れば。其の魂は盡に。夜見國に歸といふ說のあるは。あなかしこ。伊邪那岐大神の。いみじくもおもほし定給へる其神御慮をおもひ奉らず。（この定め給へる、神御慮のことは、下に具にいへり）また大國主神の。幽冥を掌り治し看す。幽契の妙なる謂れをも順考へず。いとも忌々しき曲說にて。慨ことのかぎりになむ有りける。いでその曲說を委細に辨へてむ。そも〳〵この曲說の發れる因を。つら

つらに考ふれば。夜見と云ふに。黄泉の字をあてたるより。起れる說になむありける。(そは、既く古事記に、この字を書れたるを見れば、いと古きことにて、此は漢籍まゐ渡りて、皇國言に、彼の國の字をあて初め給へるほどより、書ならへることゝ見えたり、如此久しきならひにそみては、いつとなく、眞の古傳の如く思はれて、千年にあまる世々の人の惑ひ來にけるは諾なることとなり、すべて外つ國說によりて、眞の古傳を誤り混らしたることの多き中に、其の一つをいはゞ、豐玉毘賣命の、御產まし〻時、和邇に變り給へることを、書紀に龍と書れしが根ざしとなりて、萬葉集なる家持卿の哥に「雨降らす、日のかさなれば云々、あまのしら雲、わたつみの、おきつ宮べに立わたり、とのぐもりあひて、雨もたまはね」と詠れたり、そも〳〵、龍神を海に住て雨を掌るものとせるは、佛書の說なるを、和邇をば龍に劣りて、卑と思はれしにや、書紀に右の如く記れしより、家持卿さへに如此詠れ、師の翁も、古事記の海神の御言に、吾掌レ水故とあるところの傳に、この哥を引て海の神は水を掌給ふ故に、雨を乞へるなり、といはれしは、深く考へられざりしなり、古傳の趣きにては、海神は海を所治看て潮を掌たまふ神にこそあれ、雨を掌る神には坐ぬをや、まして後の世に「八大龍王、あめ止めたまへ」など詠める類ひは云ふにもたらず。人の魂は、すべて黄泉に歸てふ說も、このたぐひの謬りにぞありける。)そはまづ孝德天皇の御紀に、蘇我倉山田臣の自死らるゝ時いはれし言に。今我見レ譖ニ身刺一而恐ニ横誅一聊望ニ黄泉一尙懷レ忠。といへるとある。此は倉山田の其時の言には。死てもなほ忠を懷はむ。とやうにいひけむを。記者の。例の漢籍ぶりに文らむとて。かくは記されしなるべし、然云ふ故は。尙懷レ忠とは。死て後の心を。いへるなることは。論らひなきものから。この記されし趣きにては。其の魂の黄泉に往てもなほ。忠を懷はむといへる義にて。皇國の古へ意に非ざればなり。(さるは、人死て、その魂も骸とともにいはゆる黄泉に歸とせるは、漢籍の說にて、その黄泉てふことの見えたる多き中に、古くは春秋左氏傳に、鄭の莊公と云ふもの、その母の、邪なる所爲しけることを恨み、誓言して、不レ及ニ黄泉一無ニ相見一也

といへりしが、後に相見ほしく思ひしかど、前に誓へることのあればとて、地に大隧を闕て黄泉になぞらへ、其の隧にて相見しことあり、また傷寒雑病論の序に、厥身已斃云々、幽潛重泉、徒爲啼泣と有る重泉も黄泉のことにて、これらすべて、人の靈魂も屍とゝもに、黄泉に歸として云へるものなり、さてその黄泉、と云ふは、杜預が註に、地中之泉、故曰黄泉といへる如く、地に隧を掘れば、水の出るよりいへるにて、孟子に、夫蚓上食槁壤、下飮黄泉。といへる黄泉におなじきを、屍を地に埋むことにあやなし云へる漢土の文章辭なるを、夜見國にあてたるは、いたく相違ることにあらずや、實は夜見國とは、上に委くいへるごときの謂れにて、其はもろこしには、更に、古傳の片端もなきことなれば、夜見國と書くより、餘にあつべき字のなきぞかし、もし、予が此の説を疑はむ人は、漢籍のいまだ渡來ざりし前に、哥か事實に、魂の夜見に往くてふことのあるか、考へ觀るべし。)然るを世々の人。もとの意をよくもたどらず。漸々に。斯狀に云ひなれ來て、萬葉集にも。(またかへり來ぬ、遠つ國、黄泉の界に、はふつたの、おのがむきむき、天雲の、別れし往けば」など詠める類ひは、その屍を地に葬むることを、何となくいへるにて、其の魂をも、黄泉に往くとして詠めるならねば、さしも難むることのなけれども)「いやし吾故。ますらをの。爭ひ見れは。生りとも。あふべくあれや。宍くしろ。黄泉に待むと。隱沼のしたばえ置て。うち嘆き。妹が去れば」などやうに其の魂をさへに。夜見國に去るとして詠めるは。全く。漢籍なる黄泉を心として詠めるなれば。夜見國の古傳とは。甚く背へる意ぞも。斯在あやまりの有るに。加て佛籍なる。那落の説をさへに混らして。「稚ければ。道行きしらに。まひはせむ。下方の使おひてとほらせ。」と詠める類ひは。佛籍に。冥途の使といふことのある。そを心として詠めるなり(なほ、物語ぶみにも「よみぢのいそぎ」また「よみづとにしはべらむ、」などやうにいへる類ひ、多く、世の云ひぐさにも、よみ路がへり、よみがへり、など云ひ弘めいひなれて、終には、實の古傳の如くなも誤り來にける、)如此傳への混れし故に。世の人みなの。惑ひ來しは然るものにて。吾が師の翁さへに心つか

れず。上の件の歌どもを擧て。神も人も。善も惡きも。死れば。皆この黃泉國へ往くことぞ。といはれしは。委く考へられざりしゆゑの非說なり。(また縣居の大人も、人の死れるをいたみて、「我道も、さそはむ人を、ぬば玉の、夜見におくりて、まどふころ哉」と詠れしを思へば、この混れはさとられざりしなり、但し如此いはゞ、哥はすべて、正なきことをも詠出るならひなれば、さても有りなむ、など云ふもあるべけれど、其は、なみ〳〵の學問する人こそあれ、わなみ古へ學びする徒は、何事も、古への正しきに徵考へて、その正說を、世に傳へむとするのわざなるを、とりはづしたる過りは、せむすべなけれど、知りつゝ我れより、さる正なきことをもいひたらむには、誰かこの學びを信がふべき、そは中々の人惑はしなるを、いかでかさるを古學といはむ、古學とは、熟く古への眞を尋ね明らめ、そを規則として、後を糺すをこそいふべけれ、然れば、萬葉集を例として、哥詠むにも、其の心して、ならひとるべきわざになむ、無常といふこと、また七夕の哥をさへに、「天地のとほき初めゆ」なども詠み、この餘にも、古の意を混らしたる哥いと多し、よく辨へて古へ學する徒は、かゝる類ひのことゞもは、哥に詠むべくもあらずなむ、此はついでなれば云ふなり)然るを。世の古へ學する人々。何事も。師の翁の說を。信とするならひに。誰も然ることゝ決めたるか。ここに心とめて。考へざるはいかにぞや。(そは、我がおなじ學びの、はらからなる人々のみ、然るにあらず、別に一つの金戶をはりて、古學者と名稱る輩、その云ふ說のよきかぎりは、多くは、吾が師の說によりて云ひ出ながら、その恩賴を思はず、われはがほにもの云て、吾が師の說を、くじかむとのみすれども、魂はしも、黃泉に徃てふ說をば、もどきあへずて、皆信ひをるめり、さるは、村田春海などかにかくに吾が師の說を云ひ破らむとする心に、禍津日神のことを說れし、正しき明徵ある考へをさへに、もどきて、人に誂へて靈の行方てふ狂方を記しめたれど、魂は黃泉に行くといはれし說をば得破らで、翁の說のまゝに、魂は黃泉に行くものとして、かの文は記しめ、荒木田久老も、その漫錄を見れば、吾が師の身まかられし後は、強ちにその上へを說はむ

と爲たるげにて、本居が垣内を出よなど、しば〳〵人に云ひしかど、このまぎれをば正さゞりしはいかにぞや。)さて。如此。人の死て。其の魂の黃泉に歸てふ說は、外つ國より混れ渡りの傳へにて古へには。跡も傳へもなきことなるを。かの伊邪那美命の。國土と夜見と。いまだ斷離れざりしほどに。神避り往坐ることを。誰も例に引出て。云ふめれど。かの往坐しの謂は。(第六圖の下にいへるごとく)火を產たまへる。いみじき御有狀を。妹神の見そなはしたまへることを恥おもほし。其の後は。妹神に相見えたまはじと。おぼし決めて。その現御身ながらに。妹神の御許を離り。往坐るにこそあれその御魂のみ。往坐るに非ざるを。いかでこの故事を。この國土なる人の魂の。なべて黃泉に歸てふ理の。例とは定むべき。(この往坐を、その御魂のみの往坐しと思ふは、一向に、古事記書紀なる傳へをのみ正說として、それよりは、祝詞文の傳へのまさりて、古く正しく尊き謂を思ひ明らめざるによれる、非心得なるよしは古史の或問に委しく云へり、またよしや、伊邪那美命は、死坐て、その御魂のみ往坐せるにもあれ、その往坐る謂れは、妹神の御所爲を慚恨みまし、その御許を離避りての往坐しなれば、例とはなしがたきをまして、その現御身ながらなるをいかにせむ、伊邪那岐伊邪那美命二た柱の中に一と柱も死坐しなばこの天地の、豈一日もかくて有らめや、あな畏、あな畏、あはれこの妙なる理りまでに、深く思ひ入らむ人もがな。)さてまた伊邪那岐命は。妹神の下津國に神避り往坐しゝを歎きおもほす大御心の忍びあへ給はず。したひ往坐しては有なれども。彼の國の。しこめき穢き國なるを見畏み坐し。そのしたひおはしゝ御心の失せたまひて。疾く還り坐し。さて泉つ平坂にて。言戶を度し給ふときに至て。伊邪那美命は。始こそ。妹神の二度までも。吾をな見給ひそ。と申し給へるを聽給はで。見あはたし給へることを。恨怒まして。追及たまひ。一日に千頭くびり殺さむ。とさへ宣へれど。妹神はそれに言勝たまひて。千五百の產屋を建てむと宣直し給ひ。(師の云、世に、日日に死る人よりも、生るゝが多かるは、今此御言に由れり、大祓の詞に、國中爾成出武、天之益人等と見え、また青人草と云ふも、此の意にて、草の彌益

益に生茂、はびこるに譬たる稱なり、凡て人の死るは、泉つ神の御所爲、生出るは、伊邪那岐大神の、御恩頼ぞかし）はた言戸を渡し給へる御言と。その御所爲の驗によりて。（その御言とは、將族離焉、また自此處勿來、また悲思汝而往坐于其國者、吾怯在也、と宣へるなどなり、また、その御所爲とは、御唾爲て掃ひ給ひ、また。御杖を投棄給ひ、また、泉つ平坂に千引磐を引塞たまへるなどなり）終には、妹神の御心も和たまひて、吾與汝已生國矣、奈何更求生乎吾者留于此國而將居焉、と白し給ひて離別まし。はた是より前にも、吾汝妹命者可知看上津國吾者將知下津國と宣へるその御言のごとく。また御心のおもほすまに〱。下津國の大神となり給ひて。常磐に彼の國に鎮り坐しまし。さて伊邪那岐命は。彼の國より荒び疎び來るものを。此方に入れじと、いみじく所念入りたる御心に。彼の國此の國の往還を止め給ひて。かの泉津戸に突立たまひ。引塞まし、久那斗神、道反之大神、はた五百箇磐群の如く塞坐て守衛坐まし。（この皇神等の、此處をいみじく守衛坐すこと大國主神を追行坐しゝ

大神の、その室屋を、引仆し坐しゝばかりの御稜威なるも、此處の坂をば越給はで大國主神を遙望て呼び宣へるをもて曉るべし、然らば、その大國主神の往還し給へるはいかにと云ふに、此は祓の旨と相應ふ、妙なる謂れありて、その御身の禍を、彼の國に祓ひ棄しめ賜はむとの、木の國の大神の神御慮なれば事異なり）かく。上津國知らしゝ神と。下津國知らする神と。二た柱誓坐て定め賜ひ。且伊邪那岐命の彼の國を汚穢みおもほす御心に。そのふれ坐しし穢をば。御滌ぎ坐まし。その大御體の清まり終たる伊豆の御靈に生坐しゝ大御神は。天つ日を所治看し。また伊邪那美命に。由緣ありて生坐しゝ。速須佐之男命は。理りの如く。御母の國へ往坐して。彼の國此の國の往來ふべき謂の絶竟て。天に次ては。清々しき國なる故に。日の神。産靈神の大御孫に坐ます。天日高彥穗瓊々杵命の。その日の神、産靈神の。いとも畏こき御依に因りて。天降坐し。所知看初め給ひ。清きと穢きと。きはやかならでは。えあるまじき謂れなるに。まして。世に生出る天之益人等は。悉に。伊邪那岐命の。彼の國を穢みにくみ給

ふ。御靈をたばり生出ることとなるを。いかで。此の國土の人草の。魂てふ魂ハ。悉に。彼の國に歸べき由のあらめやは。其の謂れのなきによりて。然る事實も見えぬなむあり。(但しその御天降の時に、日の神の大詔命に、豐葦原の水穗の國をしろし看せと宣へるは、即、この國土を悉しろし看せと詔へるにひとしき由は、彼處に云へるが如くなれば、世の人の魂の、夜見に歸かずと云ふことわりも、皇國にかぎりての說には非ず、此の大地にある、大島小島のあらゆる人草もみなしかり、そは准へて思ふべし、すべて古へ學する徒は、何事も、神代の事實より及ぼして、今を考へ、人の上をも知ることとなるに、神代の神に一柱だに、その御魂の泉の國に往坐る例のなければ、其據と爲すべきことのなきを、いかにかはせむ、また伊邪那美命の、一と日に千頭くびり殺さむ、と宣へることを、魂の黃泉の國に往くことゝ、思ひよりもすべけれど、此は、妖神の御所爲を恨まして、その知らする國の、青人草を殺さむと宣へる、のみにて、その魂を、夜見に召取りたまはむ、と宣へるならねば、思ひ混ふべからず、○或人問ふ齋明紀に、狗嚙ニ置死人手臂於言屋社ニ天子崩兆と見え、また出雲風土記に、黃泉の穴と云ふ窟ありてこの窟の邊に至ると夢に見れば、必ず死ぬといふことの見えたる、此は亡魂の夜見に往くことの、徵となすべきことゞもなりいかゞ答ふ、そは人死ぬればその屍は、上もなく穢きものとなりて、さては、夜見國のものに屬く謂れなれば、死ては其の骸を地に埋むるよりかゝる兆あり、其の魂の、夜見に歸によりての兆には非ざるなり、但し此は、黃泉大神の、於ニ一日ニ將ニ絞ニ殺千頭ニと宣へる驗によりて屍を、土に埋むることゝなり、其所由に因りてかゝる兆の有るなるべし、神代の事ども、すべて幽に、其の謂れにかなふものなればなり。なほいはゞ。人の魂の。すべては。夜見に歸まじき理りは。神代の事實によりて知るのみならず。人の生出る所由。また死て後の事の實を察てぞ曉るべきは。まづ人の生れ出ることは。父母の賜物なれども。その成出る元因は。神の產靈の。奇しく妙なる御靈によりて。風と火と水と土。四種の物をむすび成し給ひ。それに心魂を幸賦りて。生しめ賜ふこととなるを。(但し、そは、いかにして結成た

まふと云ふことは、知るべからねど、こは、現在に見たる、有りのまゝをもて云ふのみぞ、怪むことなかれ〕死ては、水と土とは骸となりて、顯に存在るを見れば。神魂は風と火とに。供ひて。放去ることと見えたり。〔是につけて案ふに、タマシヒは、玉奇火と云ふことなるか、また萬葉集に、「人魂の佐青なる」と詠る如く、人魂の、青げに光りて見ゆるも、風と火に由ありげなり、また、いかにおごそかなる固すれども、魂は入り來るも、風と火の、魂の體と有る故にも有るべし、なほ、思ひ得たることのくさぐさあるを、意ありて今はいはず〕此は、風と火とは天に屬き。土と水とは地に屬へる理の有るによりてなるべし。〔篤胤が、かく論へるにつけて、或人の此は、異國の説に似たりといひて、あざみ云ふ由をきゝて、云へらく、よし似たらむも、同からむも、事實に徵して、正しく、その理りの見えたることならむには、などかいはざらむ、然るは人活て居るときの、呼吸は、これ風に非ずして何ぞ、伊邪那岐命の御氣に、風の神は生坐るを思ふべし、また人の體のかく、溫煖なるは、火に非ずして何ぞ、また、體の濕潤は、これ水に非ずして何ぞ、骸を埋みて何物にかはなる、土に化るに非ずや、すべて言痛く理りをいふは惡かれども、現に見えたる理りをば、などかいはざらむ、此は師の翁もしか云ひおかれたりき、篤胤は何事も、神代の傳へと、事實とに徵考へて、理の灼然ことは、えしも默止さず、考への及ばむかぎりは、いはむとするなり、然るを、それ惡しとて、いはじとのみするは、道に心の厚からぬ人か、然らぬは、理りを尋ていふべき智力なき人なるべし、此の風火水土を以て、人の體の理りをいふを、異國の説に似たりと云ふも、其は、彼が吾に似たるにて吾が説の、彼れに似たるには非ざることを辨へず、實は熟く、神代の事實を、明め知らざる故の非言なり、そは、第六圖の下に記せる、風火水土の神々のことをいへると合せ考ふべし〕然在ば。これも。人の神魂のなべては。夜見に歸まじき一つの理りなり。然るは。神魂はもと。産靈神の賦たまへるなれば。その元因をもて云ふときは、天に歸べき理りなればなり。然れども。おしなべて然在べき。たしかなる事實も。古傳もいまだ見あたらず。〔但し、仲哀天皇

の御紀に、天皇の、速狹騰といふ言を、開惡事と宣へることあり、此は師の說に、早く騰ると云ふことを忌てなり、人の死を阿賀理といふ故ぞ、さて、その阿賀理といふ言の意は、萬葉集の哥どもに、皇子等などの死坐せることを、天所知などまをし、凡人にも、然るさまに云へることある、皆おなじければ死し時の事をも、天に上るをりの事と云ふ意にて、阿賀理とは云ふなり、縣居の大人の、遠江人は、今も、人の死て、第三日の事するを、三日アガリ、と云ふといはれたる、京などにては、是れを志阿宜と云へり、此も、天へ送り上る事を云ふ意にて同じ」といはれたる如く、上つ代より、死ては其の魂の天へ歸ことにいへれば、實に然在むも知るべからず、さるは、大宜都比賣神は、殺され給ひつれど、その幸魂と坐す野椎神は、岩屋戸の段に集給ひ、また、大國主神、事代主神ともに、八十隈手に隱坐しかど、その御魂の、天高市に集ひまし、はたこの神々を、天上にて祭祀りたまひ、また人の代となりても、倭建命の御靈の、翔レ天飛行とも、また上レ天などともあるを想へば、神魂の天へ上れる例なしとは云ひがたきを、夜見の國へ、神の御魂の往坐る事の實は斷て例のなきこととなるをや、また、中古の物語書などに、死たる人の靈の、此の世に物することを、天かけりて云々」といへり、そはうつぼの物語にあまかけりてもいかにかひなく見給ふらむ、などあるたぐひなり、此は天に上り居たる靈の、翔り降りてものするよしの、言なるをも思ふべし、なほ、漢土にも思ひ合すべき古傳のありて、そは鬼神新論にいへり、さて、如此魂の天へ上れる例は、これかれ見ゆれど現に觀るところの、事實によりて考ふるに、魂は正しく、此の國土に存りて、靈異を現はすなれば、此の書には、その事跡に就て徵し論らへるなり、按に魂は、この國土に在りつゝも、天上に往來する由の有げに思はるゝ也、師の說に、倭建命の御靈の、上レ天と云ひ、また翔レ天、などあるを解れしやう、強に魂は夜見國へ往くてふ說を立むとして說れし狀にて穩ならず、天翔と翔レ天とは差別ある言にて天翔るは翔り下るなり翔レ天は翔り上ることを、云へるなるをも思はれざりしはくはしからず。」さて人死て、神魂と亡骸と二つに別たる上にては、骸は汚穢きもの

の限りとなり、さては夜見の國の物に屬く理なればその骸に觸たる火に。汚の出來るなり。（故その骸を葬すを、ハフルとは云ふなり、これにつけて案に、上つ代には、貴人などをば、その屍は埋みはふりてその魂を、別に祠に齋ひたりと思ふよしあり、其は古史傳にいへり）また神魂は。骸と分りては。なほ清潔かる謂れの有りと見えて火の汚穢をいみじく忌み。その祭祀を爲すにも。汚のありては。その享を受ざるなり、（但しかく云ふは、今の世の、佛法の祭祀を爲す上をもていふに非ず、古風のまことの祭りを爲す上を以て云ふなり、佛法の祭祀には、いと穢らはしきことの多かる）現に見たる。事實に試考へたるも。淨と不淨とその差別の灼然を。かく汚穢を忌み惡む靈のその穢の本つ國また汚穢の行留る處なる夜見に歸く由のいかで。あらめや。（すべて人の穢れを忌み惡むことは、伊邪那岐命の、穢繁國を惡み給ふ御靈を、おの／＼某々に賜り有るに因りてなり、其は第八圖の下にいへる、禍津日神のところ考へ合すべし、また、人生て居るほどは、火の穢れを、しらで居ることもあるを、神靈となりては、忽に汚れをも知り、また、奇異なる驗をみすることも、いかに妙なるものならずや、戎人も死は生にまさりて靈異なりといへるは、實に然ることなりけり）もし黄泉に歸居る靈魂の。祭祀するごとに招かれて。此の國土に來り享るとならば。然おごそかに。火の汚穢は忌み惡むべからぬ理りなり。さるは。此の國土の火。たとひいさゝか汚れたらむも。彼の國の火にくらべては。何ばかりの穢れも有るまじければ也。（但しかくいはゞ、伊邪那美命、また、速須佐之男命は正しく夜見に坐すを、その祭祀に火を忌むはいかになども云ふべけれど、この神々は、此の國土をいそしみ給へる、その幸魂は、常磐に留り坐して、その御靈を祭るなれば、夜見より來り坐て、祭祀を享たまふ謂れにはあらざるなり）また。一度な。彼の國の戸喫をすれば。この國土へは來りがたき謂れは。是こそは。伊邪那美命の。避坐がたくおもほしゝにて。慥なる例もあるを。此方に招かれ來て。祭りの饗を享ることも。また。靈異なる所爲のあるもいぶかしく。此はもしくは。その時々に。具に黄泉神と相論ひて。來り享るといはむか。然はあるまじくて

そおぼゆれ。(但し師翁の說に靈を此處彼處に祭りて各々驗あることを、一箇の火を、こゝかしこに移し燈せど本の火も滅ることなく、減ることなく、有りしまゝにて、その移し取りたる火も、おの／＼其の光りの熾なるにたとへられたる、實に然ることなれば、例に引き出もすべけれど、此は、この國土なる神靈を、こゝかしこに祀りて、勝劣なく靈異あるには、よく當れる譬なれど、黃泉より招かれ來る例しには、云ひがたくなむ、さるは、人の死期に、黃泉に往く魂はいまだ祀らぬほどのことなれば、さし翔りて黃泉に居着くべければ、さては、此の國土に來りがたき由なること、上に云へるが如くなれば、この國にて祀るはいはゆる虛飾にして、眞のしわざならず、いかで皇國の古へに、然る信實ならぬ爲事の有らめやは、また、師說に、夜見の國へ去れる魂の、此の世にも殘るは、如何なる狀ぞと云ふに、彼の本の火を、他處へ轉去往に、其の光りは、なほ本の跡へも及びて、しましは明きが如し、然れども、將去る火の遠ざかるまゝに、及べる本の跡の光りは、やう／＼に微になりて、消行ごとく、數多の年を經て、久しくなれば殘れる靈は滅ゆくを、尊き神などは、黃泉國に去り坐せるも、此の世に殘り坐す御魂の、恒常に衰ることなく熾なるは、火大きなるが故に、持去て、他處に到着ての後も、本の跡へ及ぶ光も、なほ盛にして、かはることなきが如し」といはれたる、理りはさもありげに聞ゆれども、非說なり、そは、予がこの書に論らへることゞもを、熟く讀み熟考へて、なほ曉りがたくは、古史傳の出るを待て見るべし、○因に云ふ、世にはまゝ、死て多くの日數を經て、蘇生る者あれども、其等いはゆる、地獄極樂の有狀を、見つるとはいへども、夜見國に往きて見たるもの、一人だに有りしことをきかず、この地獄極樂を見つることは、或る女の然ること有りしとき、予それに藥を與へて、親く試見たるが、實は佛法の妄り說を、信ひ居るをうかゞひて、然ることする、微き妖鬼の見するわざなり、此は、別に委しく記し、辨へおきつ、かゝれば、彼の夜見國へ往くてふ說を、信ひ居る人々も、後々は、然る妖鬼の爲に誑かされ、蛇の室屋に苦められし、夢見む人のあらむもしるべからず、)然在ば。亡靈の。黃泉國へ歸

てふ古說は。かにかくに立ちがたくなむ。さもあらば。此の國土の人の死て。その魂の行方は。何處ぞと云ふに。常磐にこの國土に居ること。古傳の趣きと。今の現の事實とを考へわたして。明に知らるれども。萬葉集の哥にも。「百足らず、八十の隈路に手向せば。過去し人にけだし相むかも。」（此の哥、今の本に、八十隈坂とあるを、古本によりて改め、坂の字は、縣居の翁の說によりて改めたる、此は、吾が師の翁もしかいはれし說にて實に然ることなれば、今はそれに隨ひつ、さて、哥の意は上にいへり。）と詠める如く。此顯明の世に居る人の。たやすくは、さし定め云がたきことになむ。（故、外つ國の說の入り來らざりし前の世人は、大らかなりし故に、かつても、魂の行方などのことは、さだせざりしことになむ。）そはいかにと云ふに。遠つ神代に。天神祖命の。御定ましゝ大詔命のまに〳〵。その八十隈手に隱坐ます。大國主神の治する。冥府に歸命まつればなり。（此は、上の件、大國主神の、幽事を治すること云へるところと合せ考ふべし。）抑。その冥府と云ふは。此顯國をおきて別に一處あるにもあらず。直にこの顯國の內いづこにも有なれども。幽冥にして。現世とは隔り見えず。故もろこし人も。幽冥また冥府とは云へるなり。さて。其冥府よりは。人のしわざのよく見ゆめるを（此は、古今の事實の上にて、明にしか知らるゝことなれば、今例を舉ていはずとも誰も知らなむ。）顯世よりは。その幽冥を見ることあたはず。そを譬へば。燈火の籠を。白きと黑きとの紙もて。中間よりはり分ち。そを一間におきたらむが如く。その闇方よりは。明方のよく見ゆれど。明き方よりは。闇き方の見えぬを以て。此差別を曉り。はた幽冥の畏きことをも曉りねかし。（但し此はたゞに、顯明と、幽冥の別をたとへたるのみぞ、その冥府は闇く、顯し世のみ、明きとのことにはあらず、な思ひ混へそよ、實は、幽冥も、各々某々に、衣食住の道もそなはりて、この顯し世の狀ぞかし、そは古くは、海宮の故事をおもふべく、また、諸夷にも大倭にも、たま〳〵は現身ながらに幽冥に往還せるものもあるを、然る事の實を、つら〳〵に糺し考へてその狀を曉るべし、その幽冥を見むとするに、世の生々しき學びの徒、

見えぬものから、なしと思ふは、いと愚なることなり、此を熟く、心得わきまへざらむかぎりは、いかほど事は泛く知るとも、なほ青々しきものしりぞも〕さて。人の死れば。その幽冥に歸くからに。八十の隈路に隱りし如く。何處に手向して。逢ふべくとも知りがたかるを。神代の學びを委く爲て。その神代の神等の。現世人に見えまさねど。今もなほ。其社社に。御身ながらに。隱鎭坐すことをよく辨へ。さて人の上をも考ふれば。其の理りの知らるめり。さるはまづ。龍田の立野に。鎭坐ます大神。こは。伊邪那岐ノ命の。御氣に生坐ると云ふ傳へのみ存り。その御社もなく。祭賜へることもなかりしを。崇神天皇の御代に御さとし坐て。始めて。その宮處を定め鎭り坐しまし。また住吉の大神。これも。伊邪那岐命の。檍原にて。御禊まし〻時に。生坐ると云ふ。傳へのみ存りて。神功皇后の御世までは。御社も御祭りもなかりしを。かの御託宣に因りて始めて。その望まし〻處に。宮を定め。鎭坐しめ賜ひぬるを熟思ふべし。抑。この二所の大神よ。久方の遠き神代に生れ坐せるを。かく。人の代となりて現れ給へるを想ふに。住吉の神は。橘小門の。水底に居る神と宣へれば。彼御禊の時に生れ坐せるま〻に。彼處に坐けむこと灼然きを。風の神はしも。何處を御坐處と定て坐ましけむ。しるべからねど上の件の御代々に。その宮處を定め賜へる後は。その御身ながらに。彼處に移り。今に至るまで。鎭り坐すこと。まをすもさらなり。(さるは、この神々、しか遠き神代に生れ坐して、幾萬歳か存在まし〻を、その現れ給へる時よりは、わづかに、二千歳たらずの歳を經しなれば、そのいまだ、現れたまはざりし前の、年の數にくらべては、唯しましのほどなるべければ、こ〻を考へて、その常磐に、宮々に、今も鎭り坐ますことを曉るべし、然るを、彼の神々は、もとより御靈のみこそあれ、現御身の在すにはあらず、など云ふもあれど、そは、俗の神道者どものいはゆる、心化の神とかいふ妄説を、き〻なれたる汚耳を、いまだそそぎ終ぬに因りてなり、よく、その汚穢を、洗て考ふべし、住吉の神は、現人神とさへまをし、その御形を顯して、御軍を導き奉り。また、その鎭り坐すべき地をも、御自身巡見たまへるをや。)そは。この

二た柱の神等のみ。然るにあらず。神代の神々の。某處に鎭り坐すとあるは。盡に然在ことにて。唯その御形を。人に見せ給はぬのみこそあれ。天地と共に坐すこと論ひなし。（なほ上に云へる、大國主神の下、合せ考ふべし、）然るを、師翁の説に、天に坐す神は、死といふことなく常なり、國に坐す神は、皆死ぬといはれしは、あなかしこ、何の據ありて、かゝる説をば宣ひけむ、死り坐せるとならば、上の件二た所の大神のその御墓の存べきに、たゞ其の時祠たまへる、宮のみありて、墓所とてはなきを以て、一向に、師説をのみ信とする徒も、さる漫説ないひそ思ひそ、たゞ常石に、隱れて坐にこそあれ、今も某々の宮々に、鎭り坐すこと疑ひなし、此を疑はむ人は、なほ生倭心ぞも。）故。時としてその御形を現し。神御所爲の著明ことあり。（そは大物主神の、しばしばその御形を現し給ひて、奇異なる御所爲ましまし、また、履中天皇の御世に、宮中に、筑紫に坐す三柱の神の、御形を現したまひて、何ぞ我が民を奪ふ、吾れ今汝に慚見せむ、と宣ひて、羽田皇妃を、葬立往せたまへる、また、葛城の一言主神の、御形を現し給ひて、雄略天皇と共に、山遊したまへる、また齊明天皇、朝倉社の木を斮除ひて、宮を造り坐しゝ時に神の忿り坐して、その殿を壞り、はた此の御祟に因りて、崩御ましゝに、その御喪の儀を朝倉山の上に、神の御形を現しまして、見そなはし、また、淳和天皇の御紀に、伊豆國の三島の神、伊古奈比咩ノ神のことを、此の神塞二深谷一摧二高巖一平造之地二十町許、作二神宮二院池三處一神異之事、不レ可二勝計一と記させたまへるなとの類ひを考ふべし、此を師説に、既に死たまへれど、その御靈の留りてある故に、御形を現し給へるなりといはれしは、いまだ委からず、實は、神代の神々の死給ひぬるとしからぬとの差別は、皇御孫ノ命の、天降坐さゞりし前の神神は、國に坐ませるも、すべて、大國主神に屬坐て、今に至るまで隱坐まし、皇御孫ノ命に屬坐る神々は、顯明なる故に、死ましぬと思はるゝなり、なほ古史傳にいへるを見るべし。）さてまた。現身の世の人も世に居るほどこそ如此て在ども。死て幽冥に歸きては。その靈魂やがて神にて。その靈異なること。その量々に。貴き賤き。善き惡き。剛き柔きの違こそ

あれ。中に卓越たるは。神代の神の、靈異なるにも。をさ〳〵劣らず功をなし。また。事の發らぬ豫より。其の事を人に悟すなど神代の神に異なることなく。(さるは、菅原の神の御稜威などを、見て知るべし、この神の御上を俗の生心なる輩など、何くれと論云ふは、すべて信るに足らず。)其は。かの大國主ノ神の隱坐しつゝも。侍居たまふ心ばへにて。顯世を幸ひ賜ふ理りにひとしく。君親妻子に幸ふことなり。そは黃泉へ往かずは。何處に安在てしかると云ふに。社また祠などを建て祭たるは。其處に鎮坐れども。然在ぬは。其墓の上に鎮り居り。これはた。天地と共に。窮盡る期なきこと。神々の常磐に。その社々に坐すとおなじきなり。さて。墓所に葬すをも。鎮り坐すと云へる例は。倭建命の崩坐て。伊勢の能煩野に葬奉しを。白鳥に化て。飛翔行て河内の志幾に留り給ひしかば。其處にも御陵を作りて。鎮坐しめきとある。(書紀には、能褒野の御陵より飛出まして、大和の琴彈原に停たまひしかば、其處に御陵を造り給ひしに、また飛び翔り行して、河内の舊市邑に留り賜へるゆゑ、また其處にも御陵を作れる故、時の人、この三陵を號けて、白鳥陵と云ふとあり、)此は御靈を其處に留め奉しにて。すべて。古への墓所をかまふるは。その魂を其處に留めむとの事なることこの倭建ノ命を。始め能煩野に葬奉しが。その御靈の飛行し故。またその行留給へる處々に。御陵を作れるにて曉べし。(また、この御子の后、弟橘比賣命の、海に入り坐しゝを、その御櫛をとりて、御墓を作り、納めたりしも、その御櫛を神體として、その御魂を留めむとてなり、また、萬葉集に、高市皇子命を、葬奉りしことを、「言さへく、百濟の原ゆ、神葬々いまして、あさもよし、木上宮を、常宮と、定めまつりて、神ながら、安定坐ぬ」と詠めるも、墓に葬むるを、安定るといへる例にて、古の意にかなへり、此の類ひの哥、萬葉集にいと多かるを、今はその一つを擧つるなり、)さて。如此上つ代より墓處は。その骸を隱しはた。その魂を鎮めむ科にかまふるもの故。吾も人も。死れば其の魂は。骸を離れつゝも。其上に鎮坐るなり。さてこそ。諸夷も大倭も。上古にも今の世にも。人の靈魂の。墓上にて靈異を現したること。數へも盡されず。(その古きを一つい

はゞ、仁德天皇の御紀に、上毛野君田道、蝦夷のために、軍を敗られて、死けるが蝦夷人どもの、其の墓を掘りけるとき、大蛇と化て、出て、目を瞋らし、蝦夷人どもを咋ひ、毒氣を被らせけるゆゑ、時の人の、田道雖既亡遂報讐、何死人之無知耶、といへるとあるを思ふべし）抑人の死て。魂の行方の安定は。今も古へも世に有りとある人の。心にかゝる事と見えて。何れの國にも。取々に論することなれども。凡いにしへの傳を知らぬ。國人どもの。おのおの心の趣く限りに作り出ていへるなれば。打聽くとところは。然事らしく聞ゆるも。其元の謂を知らずて。作れる說どもなる故。事實に徵し考へ。元を推て論ひ究れば。はたと窮りて苦むめり。（その漢土人の說どもの、非說なるよしは、鬼神新論に、具に云へればこゝにいはず）中に。「天竺の國の說どもは。師ノ翁の歌に。「釋迦といふ。大をそ人の。をそ言に。をそ言そへて。人まどはすも」と詠れたる。實に然ることにて。その初發は。少ばかり存れる。古傳の片端を種として。釋迦法師が妄に作れる說になむ。（その古傳の片端とは、天堂、梵天、帝釋、那落、龍宮、

四大、などの說これなり、但し此は實は、釋迦よりも遙前なりし、所謂、婆羅門の徒が、これに、治心輪廻の說を交へて、となひ居り、此はさしも、惡むべき說もなきを、釋迦法師は最後に出て、かの僞も、似つきてせずては、人の信ねば、そを竊して我が物となし、過去七佛の妄り說を作り出て、それに加上し、幻術を以て人を誑かし、前の婆羅門どもの立たる旨を誣破り、つひに佛法と云ふ、左道をおし弘めたるものなり、なほ下に云ふを見よ）然るを。後々の法師ども。蛇に足を添ふる譬の如く。彌益に。妄說ども作り添つゝ。重くるしく。床しげに說爲し。人の情の歸依るべき狀に造立て。此處を按へむとすれば。彼處に漏逃げ。かしこに追迫れば。こゝへ潜きて。俗の諺に。匏もて。鰻を捕へむとするに。捕へがたしとか云ふ如く。その說を作れる故に。西土も大倭も。貴き賤き。戈あるも戈なきも。皆この妄り說に。陷溺れたりしこそ。甚はかなけれ。（さるは、かの佛籍なる說どもの、妄なるは、さらにもいはず、そのいへるさまのいとつたなく、譬說などの、をさなく迂遠く、見るにかたはら痛くのみ有りて、師の

翁が「佛ぶめよめばをかしきことゝおほみ、ひとりわらひもせられける哉、」と詠れし哥の、げに然ることとうち出らるゝを、人はいかに讀なして、此を信がふらむと、いと〳〵いぶかしきを、よく思へば、かかる妄言におぼれ惑ふも、實は道の學びの、本建の堅固からざればぞかし、そは法師の徒は、よくもあしくも、その說にしたがはでは、えあるまじければ今いふかぎりにあらねど、世に居る人の、この說に惑ひ居るこそ心得ね、さるは、如此、何の學問ごとも、委くひらくるにつけて、この學問にも、古學めかしき徒にありて、江戶にも二人三人はあるを、それら、佛經の古譯の惡きなどいひて、うめきすめき其の事に勞くめる、あはれその人々よ、相見てともに語へば、さしもいたく、癡なりげにも見えぬものから、いかにちふ、妖鬼のためにはかられ居るらむ、いとも哀く、憫むべきことにこそ、かの道は既く、富永仲基、服部天游がために、筋も骨も拔きとられて腰たゝず、いさゝか皮の存りて、立すくめるなるを、なほゐぎたなく、云ひさわぐは何事ぞや、さる徒を、服部らが說を聞知らでかゝるかとおもひて、その書どもを見するに、よく讀み、よく辨へつつも服はず、なほ大乘法華經、また眞言秘密の旨こそあれなど云ひて、陀羅尼てふものなど、高らかに咒ふめるは、かへす〳〵、妖鬼の爲に、はかられ居ること疑ひなし、ことにかの法華經は、藥を失ひたる能書のごときものにて、更にいふかひなきものなるを、然云ふは、譬へば、足痿て、立ことを忘ずとか云ふ如く、近頃江戶に見ゆる、跌蹶といふ病をやみをる者の、元の剛かりし意氣のなほやまで、其の足のよろぼひながらに、人を見ては蹶倒さなゝど、いきまき云ふが如くにて、頑愚のかぎりとやいはまし。)其が中にも。かの鬼を欺く。古への。ますらを等さへに。佛風のきたなげなる名などつきて。かの地獄に行くてふ噓言を畏めること。古き書等を讀み見るごとに。かたはらいたく。思ほえず。髮も逆だち。こぶしも握られ。いとも惜しくこそ思ふなれ。(さるは、古事談に、伊與入道賴義は、壯年の時より殺生を業とす、然れども、出家遁世の後に、堂を建て佛を造り、件の堂に於て過を悔ひ、悲泣のなみだ、板敷より椽に傳流れて、地に落けりと見えたる類ひ、

古き記に多く見え、また近くは、加藤清正ぬし、あはれ神なる大將なりしに、かの髭題目とか云ふを書る、旌さし立て、異國までひらめかされしは、いともあかず口をしゝ、近頃、白川の殿の集められたる集古十種といふ書を見るに、古人の旌さし物を集めたる卷に、其の數の甚多かる中に、明石家に藏たる旗に、燒鎌農敏鎌平以天、打拂事乃如久、とかけるばかり雄々しきはなく、餘は大かた、佛くさく、漢くさきことのみぞ多かりける、あはれ當時は、いみじき武士たちさへに、斯在けるかと思へば、我しらず、涙さへにこぼるゝかし〳〵さてまた。世の古へ學びする徒。うはべこそは、大倭魂がほに、佛法をばつれなくもてなし。屎まり散せるが如く。云ひ居れども。師翁も。人の生れ來る初め。また死て後は。いかなるものぞと云ふことは。誰も心にかけて明らめ知らまほしくするならひなる」とも。また。死て後には。いかになる物ぞといふことは。人ごとに心にかかるものなり。人情實に。然在べきことなり、」ともいはれたる如く。此は。人とあるものゝ。遁れがたき情なれば。誰もよく。明らめまく欲するものから。かの黃泉へ歸てふ古說は。混ひもて來し。例なし說と辨へずさる醜め穢き國に往くことかと。心がゝりの面もちにて。百人に百人が。何ぞの因につけては。まづ此の事を云ひ出るぞかし。（其が中に、この國土は、今をいにしへとくらべ思ふに、如此うるはしく成りもて來つるを、黃泉の國も、これに准へて想像るに、うるはしく成りやしつらむ、などなぐさめ云ひ、或は、夜見ノ國を、穢しとて然しもな忌そ、何處のいかなる處も、住めば都てふ諺の如く、それそれの樂みは有るものぞ、など云ひとり、此の外にもなほくさ〴〵いひて、然云ふそこの情をおし考ふれば、誰も夜見國へ往くてふことの、常に憂はしく心にかゝるより、云ひ出ることぞかし、抑、人の死て、魂の行方の安心を、言痛くいふなどは、實は、外つ國ぶりのさだなる故に、御國の古へ人はかゝることの言擧せず、たゞ大らかにのみ有りしかど、今はかく外つ國說のひろごりて、何の道にも、それ〳〵に、安心のことを、云ひさわぐ世となりては、古へ學びする徒も、心にかけて、明らめまく欲すること實は諾なることになむ、師の翁は、その安心のなき

ぞ、吾が古道の安心なる、とやうにいはれつれど、よく古への傳へと、今の現に見ゆるところの、事實に徴して考ふるに、然すがに、萬の國の祖國と有る御國なる故に、その安心すべき旨も、また萬の國の安心の旨にまさりて、いとも妙なる旨あることをなむ曉り得たる、古人もかつていはず、師もいまだ考へられざりし說なるを、世の古へ學する徒の、此のことにたど〱しきを、見るに心ぐるしく、おのれ一人秘藏たらむも、心ぎたなく、友に信ならぬこゝちすれば、かくは論ふを、人は然る信情とは知らて、憎みいはむかも、そはいかにせむ。」あはれ然る人々よ。その若く壯なるほどこそ。佛の法などをば。態とつれなくも云ひけため。或は年老。または。いみじく煩ひなどもして。その際にも及びたらむには。大概は。心のうちにて。佛が名號をば。稱へやすらむと。篤胤はあやぶみ思ふぞかし。〔さるは。師翁もいはれし如く、古も今も、平常は佛を信まぬ者も、最期の際に及ては、心細きまゝに動もすれば、かの道に歸くこと多く、其の一つをいはゞ、續古事談に從二位家隆卿は、若きより、後世のつとめなかりけるに、嘉禎二年、十二月、二十三日、病に犯されて出家、七十九にてなられける、やがて天王寺へ下りて、次の年、或人のをしへによりて、にはかに彌陀の本願に歸して、他事なく念佛を申されけり、」としるして、その時に詠れたる歌、七首を擧たるそが中に「ふたつなく、賴むちかひは九品の、蓮の上のうべもたがはず、」また「斯ばかり、契まします阿彌陀佛を、しらでかなしき、年は經にけり」と詠れたる哥あり、家隆卿ばかりの人の、其の世には、おしなべて、尊みあへる、阿彌陀が本願なるを、人のすゝめずとも、いかで、若きより知られざるべき、とく知りおはしつゝも、その壯なりしほどは、尊む心のなかりし故に、その道には歸られざりしなるべし、然るを、年老て、病におかされなどせられしかば、始めて、心ぼそさやるかたなくて、佛の道には入られしと見えたり、いと惜しくこそ、漢人にも、かゝる類ひ多かり、是につけて、おなじ類のことにていさぎよきこと故、近頃のことなれど記す、さるは伊勢貞丈ぬしは、いはゆる、有職故實の學びに委きは、更にもいはず、其の心の雄々しくて、眞の道をも、

且々は心得られし人なるが、その齢七十近くなりける時に、或人の、年老たれば、念佛して、後の世をたすかりねと勸けるにこたへて、哥七首を詠れたる其の中に、「昔しより、佛の道を尊むは、心おろかに慾ふかき人、」また、「彌陀佛むかひ來るとはむらさきの、雲をつかむのたぐひなるらむ、」また「常ならぬ世をなげくこそ愚なれ、「うつりかはるは、天地の道、」といふ哥あり、この人、魂に柱の、いかめしく立ざらましかば、まさにかうはいはめやも、家隆卿の、二つなく頼む、など詠れしと、何れかこゝろよき、世の古學者と名告る徒、おほくは、歌と物語ふみにのみ耽り居れば、あはれしる〳〵、佛が哀にふみなづみ、その最期にも及びなば、「斯ばかり、契まします阿彌陀佛、などいはむかも、此を思へば、世に、神道者といはるゝ輩などは、其の心の安定は、かへりていさぎよし、さるは、かの妄作神道を弘めし輩、さる人情をはやく慮りて、かの陰陽五行、佛説をもとり合せて、神道を信ずるものは、日之少宮に生るるなど、然もありげに云ひおけるを、堅く信み居る故に、最期の際まで、その思ひつめたる心の、變ることなく、いさぎよきもの、神道者には多かるなり然るを、わなみ古へ學びする徒は、この心の安定におきては、かへりて、彼等に劣て、怯きもの、有らむと、かへす〳〵口惜し、あはれ然る人々よ。大船の。ゆたに徐然におもひ憑みて。黄泉國の。穢き國に往かむかの。心しらびは止みねかし。さるは上にいへる如く。人の靈魂の。すべて彼の國へ往てふ。傳へも例も見えざればなり。師の翁も。ふと誤りてこそ、魂の往方は。彼處ぞといはれつれと、老翁の御魂も。黄泉國には往坐さず。その坐す處は。篤胤たしかにとめおきつ。しづけく泰然に坐まして。先だてる學兄たちを。御前に侍らはせ。歌を詠み文など作て。前に考へもらし。解誤れることもあるを。新に考へ出つ。こは何某が。道にこゝろの篤かれば。渠に幸ひて悟らせてむなど。神議々まして座すること。現に見るが如く更に疑ふべくもあらぬをや。（然るは、すべて親魂あへる徒どち、またおなじ道ゆく人どちは、死て後も、その魂は、一處に群集ひ、互に助成すことにて、そは和漢のもろ〳〵の書に、記しつたへたる事實の中に、古事談に、中院右府は、

左馬權頭顯定朝臣と、常に會合して、多年隔心なし、右府契約して云く夢後といへども、願ふところは、墓を並べて、談話かはることなからむ、是によりて顯定逝去のとき、右府の墓所の傍にこれを埋む、よりて雨夜の深更などには、物語して、笑はるゝ聲あり、人おほくこれを聞くと見え、また、一條天皇の正曆四年、五月二十日に、菅原神に、贈位を賜はむとして、築紫に勅使を下し賜へる時、その御位記に、道風の手跡して、忽驚朝使排二荊棘一云々の詩を、神の書しめ給へること、また圓融天皇の永觀二年、六月、二十九日、同じ神の御託宣に、我隨身伴黨十六萬八千百餘人也、總含レ恨背レ世貴賤靈鬼、皆悉集來但無レ理含レ恨之輩、不二相供一と宣へるなどを想ふべし、此等のこと、正しき記かず〴〵に見えて、さらに浮たる說にあらず、かゝる類ひの事には、疑ふべきもあれど、そは事實の學びを委く爲て、よく考ふれば、見分らるゝものなり、心をとめて事實を考へ悉くは、さしも疑ふべきことに非ず、なほ下にいへる說どもを合せ考ふべし、)然在ば、老翁の御魂の座する處は、何處ぞと云ふに、山室山に鎭坐すなり。

さるは。人の靈魂の。黃泉に歸てふ混說をば。いそしみ坐る事の多なりし故に。ふと正しあへたまはざりしかど。然すがに。上古より墓處は。魂を鎭留むる料に。かまふる物なることを。思はれしかば。その墓所は。かねて造りおかして。詠ませる歌に。「山室に。ちとせの春の。宿しめて。風にしられぬ花をこそ見め。」また「今よりは。はかなき身とは。なげかじよ。千世のすみかを。もとめ得つれば」と詠れたる。此はすべて。神靈はこゝぞ住處と。まだき定めたる處に。鎭り居るものなることを。悟らしゝ趣なるを。ましてかの山は。老翁の世に坐しほど。此處ぞ。吾が常磐に。鎭坐るべきうまし山と。定置き給へれば。彼處に坐すこと。何か疑はむ。その御心の清々しきことは。「師木島の。大倭心を。人とはゞ朝日ににほふ山さくら花。」その花なす。御心の翁なるを。いかでかも。かの穢き。黃泉國には往ますべき。(これにつけて、心有らむ人は、亡後の住處をば疾く見定め置くべきものぞ、さるは、凡人の死たる夜に、その魂の、我が寺へ、うかれ行くことの多かるは、此は世に在りしほど、寺は、死て後の往方

ぞと思ひ居るならひによりて、斯在ぞかし、世の古へ學びする徒の他の生漢心はよくとがむれども、然る人々の、おのれ〳〵は、なほ、生倭心にて在ることをばえしも悟らず、翁のまだきに、基所を見定められしを、古へに例なきことぞなど、密々もの云ひて、その八百會の潮の底の眞清水の、汲て知られぬ、御心のそこひなさを、思ひもよらぬ、人のみ多きはいかにぞや、まだきに墓を造れるためし、古へにもこれかれ見えたり、○因に云ふ、世の古へ學びする徒、多くはなほいまだ生倭心ぞも、生倭心の人、かならず生漢意あり、から人にも、眞の心なるは、眞の倭心にかなへるあり、さるは、師の哥に、「聖人と人はいへども聖人の、たぐひならめや、孔子はよき人」と詠れし如く、孔子は漢人ながらに、大倭心の人ぞも、世の生倭心の人々この戎人にも慚よかし。）さてまた。斯云ふ篤胤も。思ふがまゝに書を著し。その名をば。千名の五百名に負持て。世にも。いみじと。感らるゝばかりの功績をなし。（古歌に、「わりなしや、人こそ人と、いはすとも、みづから身をや、おもひすつべき、」また「仕へこし、身は下ながら、

我か道の、名をや雲井の、世々にとゞめむ、」また西戎人も、君子疾ニ役レ世而名不レ稱焉とも、また、名を後の世に揚て、父母を顯すは、孝の終りなりとも云ひ、また太上は德を立て、其の次は功を立て、其の次は言を立る、といへるもあり、我徒は、その、言を立つべき人なるぞ、また、紅夷人の言に、たび行くに、旅人屋の物を食ても、そは償ひ行くを、かく天つ神の御靈に因りて生れ出ながら、その恩賴を思はず、世に功を立ざらむは、人とあるものゝ、道に非ずと云ひて、いそしむとぞ、いかに慚べきことならずや。）さて。此の身死りたらむ後に。わが魂の往方は。疾く定めおけり。そは何處にといふに。「なきがらは。何處の土に。なりぬとも。魂は翁の。もとに往かなむ。」今年先たてる妻をも供ひ。（かくいふをあやしむ人の、有るべかむめれど、あはれ此の女よ、予が道の學びを、助成せる功の、こゝらありて、その勞より病發りて死ぬれば、如此は云ふなり、そは別に委く記せるものあり。）直に翔りものして。翁の御前に侍居り。世に居るほどはおこたらむ歌のをしへを承賜はり。春は翁の植おかし。花をとも〳〵

見たのしみ。夏は青山。秋は黃葉も月も見む。冬は雪見て徐然に。いや常磐に侍らなむ。かくて。後の古へ學する徒に。翁の多を幸坐さば。篤胤するゑのをしへ子なれば。兄等をばわづらはさず。翁の御言をうけて申つぎ。漢說に醜法師。その餘あらゆる邪の道を。說弘めむと五月蠅なす。穢き徒。かたはしより。磐根木根をも蹈さくみ。さくむが如く言向しめ。また。たま〱も。大御國へ。射向ひ奉る夷のありて。翁の御心いためまさば。この篤胤がまかり向ひ見て參り候はむと。しばしの暇をこひ請し。山室山の。日蔭のかつらを襷にかけ。比々羅木の八尋の矛を右手に持ち。眞弓の弓を左手に執り。千箭入の靫をそびらに負ひ。八握の大刀を取佩て。虛空かけり神軍に集ひ入り。元より尊き神々の。いかに汝はいやしきを。など集へぬに。つどひたるなど宣ふとも。おのれ更にうけひき奉らず。この平篤胤も。神の御末胤にさむらふを。など。然しも卑めたまふぞと。曾丹がさまには。追離られず。強て。神軍の中に加はり。その御先鋒を仕へ奉りて。風日祈神宮より。かの神風を。いぶき吹なびけたまはむ圖をうかゞひ。

やをれ。夷の頑たぶれ。辛き目見せむと雄建つゝ。賊の軍中に翔入りて。蟻の集へる奴原を。八尋の矛をふりかざし。かの燒鎌の敏鎌を以て。打掃ふことの如く。追しき追伏せ。犬と家猪とのものつかせ或はしや頭ひき拔きすて蹴散かしうち罰め。山室山にかへり來て。老翁の命に。復命まをしてなまし。あな愉快かも。此は。篤胤が常の志なり。あはれこの予が言擧よ。然こそや人の。こと〱しとや見るらむかし。然はあれど。ずべて人は。心の安定をば。太くいかめしく。底磐根に突かため。雄々しく潔くとのみ。力べきものぞ。これにつけて、予つねに、人に諭す言あり、さるは、古への僧どもよ、邪さの道にもあれ、かたく其の道を守り、志しを立て、弘く世に傳へむとするにつけては、その辛苦の極みには、命をさへに失はむとしゝを、倘こりずまにいそしみつゝ、終にはその道を世に傳へたる、その邪說を、ひろめしはにくかれども、しか志を立てたるは、しほらしく稱むべきことになむ、其の僧どもの中にも、日蓮と云ひける僧など、殊に然有りき、また空海法師など、此は、師の翁もいはれし如く、

彼れが靈の、今の世までに、奇異き事あることは、その本は、禍神の御心に因れるといへども、石臼の日をきりあるくなどのたぐひ、その所爲どもは、實に神なり、蠻の行なす、邪說する、僧の徒さへかゝるを、まして、神の道をいそしむ徒の、など其の志を尙く大きには力めざるらむ、かの徒にもはづべきことぞかし、然るは、すべて人の魂よ、その元は、神の賦たまへるものなるけにや、堅むれば固く、大きにすれば大きにもなる物にて、その心の定のまにまになるものぞ、そは、人生れて、月に日に異に、知ることの多くなりゆく、それやがて、魂の大きになるなるを、その彌ましに、知りもて往くことを、正事に力むれば、それなりに加まさり、邪事にいそしめば、邪意の增り往くなる、さて、然まさり往けども、その體を小ともせず、其はみな、各々いそしむまに／＼、邪事は邪まなる神の幸ひ、正き事は、正しき神の幸ひまし、その幸ひ賜れる上にては、終に我物とむすはりて、此を譬へば、草木の實は、微少なれども、其を植て、土養ひ水をそゝげば、漸に大きになりて、花もさき實もなる、さて、しか大きになりたる上にては、それ／＼の草木の、各々なるが如し、故、神の御靈を幸ひたまふを、ミタマノフユとは云ふなり、此は、神の御靈の、加增るこゝろの言なることを、熟考ふべし、また、人の上を案ふに、吾が知りたることのかぎりを、露も殘さず、あらゆる人に傳敎ふといへども、吾が知れることの滅るてふことなし、こゝを以て、師の翁の、神の御靈を火もて譬られしことの、よく當れるを曉るべし、この、魂の漸に大きになることは、篤胤が身に、おぼえ有りて云ふことぞ、さるは、予弱かりし時は、いはゆる性理の學をまなび、それより進みて古學といふ漢學をなし、また進みて、世に、名たかき儒者どもの書を讀みわたり、また進み進みて、故翁の敎へましゝ古の道に入り、初めて、これに勝れる、正道なきことを知り、さてもなほ、餘の學びの道々をも、なるべきたけは明らめずは、事に當りて固陋ならむと、その道々を、學べば學ぶまに／＼、その書等を、讀めばよむまに／＼、わが古の道の、似なく尊ことを覺りぬる、かく進入しも、前に學びし道々またその敎へたる人々を、そを學びしほどは、かけ

ても及びがたし、と畏かりしも、見くだし卑むるばかりに、我が魂の大きに成り往きしかばなり、斯在ば、この行末も、なほ、大きく成ぬべく、さて今試に、外つ國々の物識どもを、我が文机の前に集はせ、人數ならぬ篤胤なれどもこの學び得し、天神祖命の大詔命もて傳へまし丶、神隨なる大き道を規矩として、いかに汝等、と云ひおけるは未し、如此いへるはひがめり、と斷りたらむに、いかで一言や、もどき得めやも、豈いはさめやもとぞ思ふを、況て、其の下にかゞみ居る輩をや、いかに魂は、いやましに大きになり往くものならずや、さて、上にいへる法師どもは、邪ごとを弘めむと、勤めし魂の大きなる神なるをなどわなみ、古へ學びする徒の、よく勤めて、その魂を大きにして、死れる後も、この道に幸ふ神と、ならましとは力ざる、但し、石臼の目を切るばかりの、微き神とはななりそよ、抑、か丶る事の理りまでを、巨細に云ふをば、生倭心なる人々の、言痛しなど密言いふめれど、其は、予がか丶る理りを曉しいふも、魄の眞柱つき立しめ、幸ひ賜ふ神々の、御靈の加なることを、熟思はぬによりてなり「我魂よ、人はしらずも知らずともよし、靈幸ふ神の知らせば、知らずともよし」然るは。其の心の女々しく怯くては。何事にわたりても。怯くのみ成行て。その靈の往方も。儒者の云ふごとく。散失るかとさへ想ひなされ。はた上にもいへる如く。其の靈の。猛きは。猛き徒どち寄集ひ、邪めるは。邪める徒どち群集ふものぞ。そは。世に。疫病の神。また疱瘡の神。また首絞の神。など云ふたぐひの。古へに聞知らぬ。禍々しきもの丶多在を人はいかに思ふらむ。此は。元は。禍神の御心によりて。然る病のおこり。さて。其に依て死けるもの丶心邪める。また家もなくて。吟行ふばかりなるものどもの。然ることにて死り。魂の歸處さへなきが。その死れることの。口惜くなど有りて。己が見し目を。他にも見せむとて。斯在鬼とはなると見えたり。さるは。世に適は、疫病の神と云ふを、現に見る人も有るを、そは凡きたなけにて、俗に宿なしとかいふ乞食の類ひなり、といふを察れば、予がこの考への、いたく違ふことはあらじ、また、疱瘡の神、こをなきものぞとて、生漢意の輩など、何くれと、小ざかしく云

ふめれど、實にこの鬼あり、然るは、師の翁もいはれし如く、此の病、もとは異國より傳染來つる病なれば、この鬼、元は外つ國より來しなるべけれど、其によりて死れる者の、歸處なきが、此鬼の群とならむこと、何か疑はむ、わづかに、二歳三歳ばかりなる稚子の、この病にやみつく節、その母なるものなどの目に、かゝる卑げなる、老婆の見えつるよりなどいふには、果して、その病める稚子は、老婆の所爲をなすものなり、また、斯在きたなげなる、乞食らしきものゝ見えつるより、病つきぬといふは、その二歳ばかりなる稚子の、ものなどいひて、然るものゝ所爲などするものぞ、此は、予、醫の業を爲れば、年來、たしかに試たるところなり、但しその所爲の、現にそれと知らるゝと、顯ならぬとが有る此はいかなるゆゑにかはかりがたし、なほかゝる類ひのことは、志都能石屋に委くその事實を擧ていへれば、こゝにいはず、○因に云ふ、世の蘭學する徒、その學びの正意を非心得して、その窮理家など名告る輩、すべて理を以ておし考へて、知られざることなしと云ふなるは、西洋人の事物の理を窮極めて、その知れざるところは、ゴットの所爲なりと云ひて、厚くその天神を尊む學意に背へり、此は、かの蘭學する徒、もろこしのまなびなどをば怯きものゝ極にいへども、いまだ己々も漢意の去り終ぬによりてなるぞ、其はいかにと云ふに、鬼神新論にいへる如く、漢土も上つ代はしからねど、後の世の生意に、天帝の古傳、また、幽冥のことなどをば、信ざる惡風俗となり、その說どもの皇國に渡りて、世にひろごり、いま蘭學する徒も、その黄口の時には、まづ、漢籍より讀覺ゆる故に、その先入の生さかしらの、障となりて斯在ぞかし、如此て、己を省ず、漢學びの狹きを罵るはかのいはゆる、五十步にして、百步を笑ふたぐひなり、いかに、蘭學の正意に背へるにあらずや、疫神、幽魂、狐妖の類ひも、四元の理、また神經の謂を知り、蘭書によりて考ふるにかつてなき理りぞ、など強言すめれど、現に然ること有るをいかにせむ、あな狹き窮理學かも、かく云ひても、なほ西洋の窮理によりて、知られざることなし、といはむ人のあらば、篤胤が、問ふべきことの多かるを、それ悉に答へなむか、然る人の豈あらめやも、）此は

みな。其の心の安定よろしからずて。かゝる鬼とはなるにこそ。楠正成ぬしの。湊川にて討死せらるゝ時、その弟正季にむかひて。最期の一念に因ては、善惡の生を引くと云ふを。そこの心はいかにといはれしに。正季打笑ひて。いつまでも。同じ人と生れて。朝廷に射向ひ奉るものを。滅さばやとこそ思ひ侍れと云ひしかば。正成 世にうれしげなる面もちにて、吾も然こそは思ふなれ。いざゝらば。生を替て。この本懐を遂てむと。二人さし違へて終られたる。武士とあらむものは。別に斯こそ有りたけれ。（この、楠ぬしのいはれし言を儒者など小智をふるひて何くれと論ひ、或は佛書の意ぞ、など云へるも有れど、假令、佛書に見えたる意ならむからに、楠ぬしの、然ることに、思ひ定められしなれば、やがて、楠の心なるをや。）さて。其の世には。天狗てふものゝ。ことに多在し狀なるを。其は、心わろ高く。或は。いたく恨を含みなどして。死れるものゝ。彼群には入れると。古くより。いひ傳ふめる。かゝる事も。一向に。僧どもの空言とのみ。人は見過し居れども。予は然る由ありげなる說と。疾より思ひたりぬ。（道

春先生の神社考に、我國、自古、稱天狗者多矣、皆靈鬼之中、其較著者相稱曰天狗、其類中鞍馬僧正爲巨魁云々、此等類甚夥、或爲童、或爲鴟、飛行、或爲僧、爲山伏、出于人間、或爲鬼神貌、或爲佛菩薩、時々出現、其說曰、見人福則轉爲禍、過世治則復爲亂、或發火災、或起鬪諍云々、又沙門之有漫心及怨怒者、多入于天狗之中、所謂傳教、弘法、慈覺、智證等是也、とある、此に、古き記の事實に據り、僧どもの、自說ふところを以て、記れしにて、其說曰とは、やがて法師どものいへる說なり、なほ本書を見るべし、かの、地獄極樂の有狀を夢に見せ、また、くさ〴〵奇怪き跡を見せて、佛法に、惑ひをる徒を、たぶらかすなどはみなかゝる妖鬼どものなす事になむありける、○或人問ふ然る妖々しき物も、すべては、幽冥に屬るものなることとは、論ひなきを、その幽冥をば、大國主神の、知り治看すならむには、さる類ひのものをば、いかにも、罰給ふべきに、彼等がまゝに捨おき給ふことはいかに、答ふ、そは、神の御心なれば知りがたけれど、祟神天皇の御世に、大物主神の、疫を時行し

給へるなどに拵ふことに、疫病の神、また疱瘡の神などは、然る道に用給ふにもあるべし、後のものながら、今昔物語などに、伴善雄の靈魂の、疫病の神となれるが、人に告て、今年、いみじき疫病の、流行べきことに有りけるを、咳病に申かへたりといへることなどの類ひを、熟く糺し考ふべし、また、餘もろ／＼の妖鬼どもの有ることは、顯世にも、いかに制たまへども、しぬび／＼盜を爲し火を放つ奴も有るなれば、その類ひと見てあるべし、前に幽冥も、顯し世にかはることとなしといへるは、かゝる事にもわたる言ぞ。）然在ば、人は。心を尙く雄々しく。直く淸々しくして。及はぬまでも世にも幸へむと。心を持たらむには。などか功績しき神と成ざらむ。師の翁の古事記傳に。倭建命の崩坐す時に。「孃女の。床の邊に。吾が置し。つるぎの大刀。その大刀はや。」と詠ませる。御歌の下にいはれしは。御病。今々となり坐る際にも　なほ。此大刀（草薙の御劒のことなり）の事をしも忘れ賜はず。如此まで。深く所念入たる。御心勇める。御氣のたゆみ坐ざるほど。また。此御子の御心の。永世までに。此の大刀に。留まり坐すほど知られて。いとも／＼。あはれに難有き御歌なりかし。武士とあらむ人などは。殊に。恒にこの御心を憶ひて。臨終のきはに至るとも。要なくあぢきなき。儒佛の意を思はず。深くこの御歌を憶ひて。亡らむ世まで。天翔ても。子孫の勇を助け。護らむことをぞ思ふべかりける。といはれたる。いと有難き敎語なり。（鬼神新論にも記る、蚊にくはれて死ける、女の廟に蚊を入れづ、また、江戸の淺草に、痔の神と云ふ有りて、こは、世に居りしほど、痔の病を甚く苦みたりしが、その死期に至りていへるは、世に、痔の病ばかり苦しきはなし、吾死て後は、人の、此の病に苦むを、助くる神となりてむと、雄建して死けるが是も今に、其の言の如く驗を見はすなど、しほらしき事ならずや、かゝる類なほ多在めり是れにつけても、精しの言に、最期の一念によりて、善惡の生を引く、といはれし語を味ふべし、おなじく病にて死つゝも、己が見し目を、人にも見せむとすると、己が見し目の苦しさを、人に見せじとするとにて、正と邪とに別るめり、いかで病にて死るとも、この痔の神の一念の如くにこそ

あらまほしけれ〕腐儒者等が云ふ如く、その魂の消失て。知ることなからむなどは、怯きことのかぎりにて。壯夫と有むもの丶心にあらず。〔さるは蟲すらも、好みて血を吸ふ水蛭、また虻などいふむしは、灰に燒ても、瘀血の病に服めば、なほその血を破るこの類ひのこと、甚多し、まして人は、俗にも、萬の物の長とさへいふを、いかで〳〵、心を猛く潔く持て、死ての後も、功の有らむこそ、神の眞の道にはかなふべけれ〕さて如此。靈魂の往方はさま〴〵にて。盡に夜見へ歸とは定がたきを。〔然はあれど、こ丶に由々しき事なむ有りける、そは、神の御教言を信はず、神の道を蔑如に思ひ奉るは、かの神逐ひの理にひとしく黄泉の國に逐ひ給ふと思はる丶由あり、其はいとも可畏きことなれば此にいはず、これにつけて思ふに、外つ國說の、渡り參來しこのかた人心生さかしくなりて、神を蔑如に思ひ奉るもの丶、世々に多在るを、其をすべて、夜見の國に、逐ひやり給ふかと察るに、然る御祟も見えざるは、按に、邪說の參渡て、如此行はる丶ことは、師の翁のいはれたる如く、禍つ神の御心によることにて、その

禍事のさかりなるほどは、正しき神々も、しばし堪たまはで、そのま丶に、すておきたまふことなれば、さてこそ、御罰もなきなるべし、斯在ば時の來て本の如くの御稜威を現したまひなば、其の時なむ、世の神を麁略に思ひ奉る徒の、彼の國に逐はれてむ、物部尾輿大連の議に、我國家、恒、以二天地社稷祭拜一爲レ事、方今改拜二蕃神一恐致二國神之怒一といはれし如く、世の、佛聖人に諂ひ仕へて、神を蔑如し奉る徒を、豈怒坐さゞらめや、あなゆ丶し〕師の翁の。人は死れば。その魂は。善きも惡きも。みな黄泉國に往く、といはれし說の、いかに非說ならじやは、〔篤胤は、末とも末なる弟子なるに、畏くも、如此、翁の說とて、道の爲にはえしも讓らで、辨へいふを、さこそや人の憎み云ふらめ、然はあれど、其は、かへりて、翁の御心を心とせざるにこそあれもし強にも、予がこの說を云破らまく欲する人は、正しき古の傳と、事の實とをよく考へ定め、動かぬ說もて、根なからに論ひ直してよ、枝葉とある小瑕をものしてなとがめそ、然らぬかぎりは、予そのおしなべて、黄泉に歸てふ混說には、えしも服はずな

む）抑世の古へ學する徒。おほかたは。たゞに我が師の翁のいはれつる說をのみ信として。更に外つ國々の說は辨へねば。その。己が聞知らぬ。外國說をきては。驚き惑ひ。相口會ひ。相率りなむとするもの多く。また。その率られぬ徒は。所見いと狹くて。吾師を尊むと。老婆が佛をたふとむ如く。その實に。吾が師は。潮の八百重の留まるかぎりに。唯一人と坐す。學びの大人におはすることを。熟辨へて尊むならねば。これも亦、ともすれば。魂に柱なきことをもひいひ出づめるは。いとも慨くかなしくこそ。また爾には。猛男めかして。餘の道々を論ふものも有れど。それはた。我が立る道の意をさへに熟くも知らず。まして向の說をば。生々に聞はつり。たゞ。聲大きくいふのみなれば。身方より見るにいと心苦く。ほと〳〵汗も出ぬめり。（さるは、すべて學びごとの論ひは彼をも己をもよく知りて、後に云べきものなるを、世の學者ども、彼を知れるは己を知らず己を知れるは彼れを知らで、唯まけじ心のすゝむがまに〳〵いふゆゑに、その論ひの末しきぞかし）爰に篤胤をぢなき身なれども、如此難有き御代に生れ

且に。青海原。潮の八百重ノ留る限を鎭め坐す。征夷大將軍の。御府内に住居る幸ひに。外つ國もろ〳〵の說どもの。古の道の學びに。知らではえあらぬ說のかぎりは。學びとりて。この靈の柱は築立るを。今より後の。古へ學びする徒よ。さひづるや西戎人すら。無レ固無レ我と云ひつれば。負じ心を投棄て。この靈の柱を本と突立て。八尋の殿を作り出て。外國說を考へ見ば。皇大御國の。萬の國の祖國にして。天皇命は。萬の國の大君に坐まし。吾が師の考翁は。萬の國に一人と坐す。學びの大人に。おはすることを曉つべく。また。外國々のものしりどもは。みな。五月蠅なしさわげるのみにて。その取るべきところは。凡。末の事なる由をも曉りてむ。さて後にこそ。道の學びは成べけれ。あないみじ。あな愉快きかも。（師の古事記傳に、古事記の本を起し給ひし、天武天皇の元年、申の年なりしに、其撰錄れし、元明天皇の和銅元年も申の年なり、かくて、おほけなく、宣長、此傳を著し初むる、今の大御代の、明和元年しも、また申の年にあたれることをなむ、竊に奇しみ思ふ、といはれたる、實に奇しきこととなるにつけて思ふに、

おほけなく、篤胤、師の説を本として、この靈能眞柱の書を著したる、この、文化九年も、また中年なることをなむ、また竊に奇み思ふ）

十二月五日に記しをへぬ。

この書を。如此板にゑらしめて。世に弘むることを。よろこび思ひて。

負けなく。世の人草に。幸ふかも。吾が築立る。靈能眞柱。

また。この書よまむ人にとて。

青海原。潮の八百重の。八十國に。つぎて弘めよ。この正道を。

こは。おのがはじめて書る草稿の。いと〳〵亂がはしきを。大野廣則が校正して。如此人にも見すべく勞なしゝなり、さていさゝか思ふよしありて。板にゑることをいそぎつれば。なほ正しあへぬことも。多からむを。そは。追つきて改むべくなむ。

靈の眞柱をうつしをへてしりへにしるす

鈴能屋大人の。よろづよりも。手はよくかゝまほしきわざなり。哥よみもの學ぶ人は。ことに手あしくては。心おとりのせらるゝを。それ何かはくるしからむといふも。一わたりことわりはさることながら。なほあかずうちあはぬこゝちぞするや。と宣ひおかれたる。まことにさることにて。よろづよりも。よくかゝまほしきわざなるを。おのれはしも。かひなに鬼もすまぬものから。よろづよりも。ことにこのわざのつたなくて。常にかきかはすせをそこすらも思ふまゝには得かゝて。心ぐるしくのみありへぬるを。我が師の大人の。このふみつくらして。そのしたがきの。青き赤きすみしてかきいれ。白きすみしてかきけしなど。かりこもの亂れとはなく。葦のわかめのはつ〳〵にかきとらして。かりほのいほの。かりそめには見もわきがたかるを。こを人にも見すべく。ものしてよとのたまはすに。そは手あしくとも。けしうはあらじと。いなみもまをさで。かきてまゐらせしを。こたびゑりまきにして。世にひろめ給ふとて。それまたうつしてよとあるに。身におは

ぬわざと思へば。背に汗いでゝ。いかで〳〵といなみまをせど。ゆるしたまはず。いましが手のあしかるを。吾はよくしれゝど。心ありておふするを。ただねもごろにかきてよと。しひたまふことの。かしこくいなみがたくて。汗おしぬぐひつゝ。うつしをへつ。さはあれ。われながらだに。この見ぐるしさはや。をしへ子とある。我かともがらの心には。大人のこのふみはも。あゐよりいでゝあゐより青く。そは青玉の水のをたまの行あひに。赤たまのあきらけく。白玉のしらげまして。玉の御矛の。たぐひはあらじと。尊く思ふを。わが手はしにもつかずかたはなるを。人いかに見るらむとはづかしくて。むねいたけれど。まなびのおやの。おふせごとの。かしこきをいかにせむは。こゝに。そのよしを一くだり。うひ學びのぬえかきに。かくなむ。

常陸國下館殿人大野廣則

三大考辯々

平田篤胤辯

ことし文化十一年二月の始つかた。我がをしへ子なる。森川匡雄といふもの。醫の業をならふとして。西の國々をめぐりこの九月に歸り來て。何くれとめづらしき事ども。きゝ記し來つる中より。三大考辯といふ書を出して。こは藤の垣内翁の著されたるふみなり。或人のもたりしを。借りてうつし來つるなりと云ふに。いとめづらしくおぼえて。こは三大考を辯へられたるなれば。きはめてよき說のあらむといひつゝ。二たひら三ひら讀むまに〳〵。忽に思ひ得つることありて。書を下におきていひけらくは。これいかなるをこのものか。彼のぬしの名を僞りてかける妄書なり。いましこればかりのことを見わかずて。うつし來つることのつたなさよといへば。匡雄がいへるは。旅のいそぎに。さるえらびもなく。たゞ彼の翁のふみときけるに。めづらしくおぼえて。寫し來つるなり。いかでその僞書なる證をさとしたまひねといふに。おのれ云ひけらくは。まづ彼のぬしの學問の力のいみじきことは。故大人の跡をつぎて。その氏を稱るを以て知べく。我なみ鈴の屋ぶりのものまなひする徒の。をさとある人なる故に。篤胤等がつたなき心に。決がたく思ふことは。このぬしに問てさだむべき人なること。常にいひきかすが如くなるを。いかでかくをさなき說はいひ出らるべき。殊に文辭のつたなくて。とゝのはざることさへあるを思ふに。いかでかのぬしの書れしふみに。さることあるべき。なほいはゞ。こは文化八年に。かの僻ことを見出ては。しばらくも默しあることを得ずて。論へるとあるを思ふべし。これもし信にかのぬしの著せるならむには。此の言の如く。はやく世にひろめ。またをしへ子ども見たまへと。せうそこのたよりにつけて。慕ひよるわが輩には。とく示せらるべきに。四年さきの著述なるに。わか知れる人たち。誰もかのぬしの。かゝる書をあらはされしとだに聞る人なきは。これこの書の僞りなるいちじるき證なりといへば。匡雄またいへらく。此書たとへ僞りふみにもあれ。かく本居大平といふ名の記し

あれば。さることの情を深くもわきまへぬ徒は。信にかのぬしの說と思ひあやまりなむ。いかで此書の非說を。さる徒のためにわきまへ賜ひねといふにぞ。げにさる言におぼえて。やがて筆とりて。あたらいとまを四日ばかりつひやして。かくは辯へつ。さてかの辯を。また辯へたるなれば。三大考辯々と名づけ。そのおのが辯は。今辯云の字をかしらにおきてわかちつ。彼が辯は。三大考に。月讀命と須佐之男命と。一つ神なりときこゆる。といへるを非なりとわきまへ。予が辯は。三大考の說と同く。一神なりと論ひ直せる辯なり。見む人まづその意を得て。

三大考辯云。神代の御典の天地の始の事はまことに傳へなきこと共のみにて知れざることなれば必知ずてあるべきことなるを外國共に量術してさまざま言擧し又理ごともて強說せることもあるに准へて古學の輩も何くれと考へ著せるはよきことにやあらむいかゞあらむ

今辯して云く。外國人にならふとしもなけれど。量術にもあれ何にもあれ。熟々古傳の趣に照し。今の現に事實に合せ考へて知るゝかぎりは知べきなり。古書に記し傳へずとも。現にその事のあるをも。捨て言ざらむは。道に心の厚からぬわざならし。

こゝに古事記傳の第十七の卷に附たる三大考といふ書めづらしき書にて天地の始を考へ量りて云る中に高天原の說はよろしく考へて珍重べき說なりそは天は虛空の上にある國也その在る所を曲に傳へ云ざるは神代の人はよく知れゝばかはた傳の漏れたるか例をいはゞ海の宮豫美等をも云々の所に在りとはいはず天のことも海の宮のことも豫美のことも記されたる樣同し樣也そが中に豫美と海宮とは人の目に見ゆべき國ならねばともかくもありなむ

今辯云。天は虛空上に。豫美の國は。大地の下つ方に。海つ宮は海底に在ること。古書にいと明に見えたり。其の中より。只一ッ二ッをいはゞ。天より此の國土にものするを。天降るといひ。此の國より天にものするを。上るといふにて。天は虛空の上に在ると云へるあることも著明く。豫美の國をば。極遠之根の國とも。底の國とも。また下津國とも云るにて。もと國土の下に在しことしるく。海宮のことは。書

紀に内火々出見尊於籠中。沈之于海。云々。忽至海神之宮。(なほあるを、今は一ツを擧て證とし つ、)といひ。また海宮よりこの大地を。上つ國といへるにて。其海中なる事さだかなり。然るに却て。この大地なる國のことは。筑紫大島韓郷之島など記されて。其處は。何處と云ることなきを思ふに。こは現に知らるゝ國なる故に。その在所をいはず。海つ宮豫美などは。現に知ること能ざる國なるによりて。おのづからその心しらびして語り傳へたるを。書にも其心してかき記されたらむこと決く。この差別知られざれば。神代の御典は。いかにともよみわきまへがたきことなれば。ふかく考證したゞめずては。古學のわざともなきを。豫美と海つ宮とは。人の目に見ゆべき國ならねば。ともかくも有りなむ。と云てあるべき事かは。

天は虚空の上に在る國なれば人の目に見えざることはあるまじき也アノ(アノメヅラシキ詞也、頼函云和泉式部集吹風モノドケカルラムアノ見ユル島ノ下ヨリ船ノボルナリ)蒼々と見ゆる高遠なる上に在て人の目力の及ざることかされども虚の上は日の光しあれば幾量遠く高き所に在とも物あらむに翳ることはあるまじくまして國とも有む物の微少にても何樣にも人の目に掛らざることは有るまじきもの也されば此三大考に日即天也高天原と云はあの日ぞと謂る說實に適當れる考也日は日神の知食國なること月は月讀命の知食國なること諾ひ信べき說なりけり

今辯云。こは三大考の說に從ひて。譽擧つる說なれば。さても有るべけれど。いひざまよろしからず。かく言ては。三大考の作者の心に違へり。さるは彼の考の趣意は。天津日の御國はそらの上に有る趣なれば。見えざることは有るまじ。然れば日ぞ即これなめりと。おしはかりに定めたる說にはあらず。古傳をくさぐさに考へ證して。日即天なりと決めたるなり。然るを虚の上は。日の光しあれば。いかほど遠く高き所に在りとも。人の目にかゝらざることは有るまじきものなりと云ふは。いはゆる蛇に足をそふるたぐひの說なり。そは日の光あればいかに遠き所と目の力の及ぶことにて。いはゆる恒天より上も見ゆべく思へるにや。實に虚空ははてしも知られぬ

ことなるを。高天原もしかの恒天より上に在て。微なる星ごもに入交りたらむには。いかにして見わかつべき。かれ蛇足の說なりとはいふなり。

かくて今論らはむとするは別事ならず月讀命と須佐之男命とを一神也とせること甚しき強說也いともいとも恐く忌はしき邪しま說にて古學の輩の神代の御典を解喩す者の掛ても云まじきこと也

今辯云。月讀命と須佐之男命とを。一神ならむといふ說は。三大考に始ていひ出たることにはあらず。古事記傳にまづ其端を考へおかれつるを本として。中庸それに考へをそへて決めたるを。師の翁のうべなひて。(此事末にも云ふ)跋に稱辭をかきて。記傳の附錄とせられたるなれば。中庸が言出たる說にもあれ。師說といはむも強言にあらず。然れば彼書を論ふには。まづ此意を下にふくみて。論ふべきものなるを。古學の輩の云々と云へるはこの書を記せる人も。鈴の屋風の學に從る人と見えたるに。こはいとも禮なき失言といふべし。これもし信に大平ぬしの書ならましかば。學の師家の父なる人に對ひて。まさにかうはいはめやも。

さて又月讀命の夜見と云ふ言と黃泉國の豫美と云ふ言とを附會せて月を黃泉國也とせることもいたく僻說也これの僻說の僻說なることに心つきては暫も默しがたくて故此二ッの邪說を露はし出てすが〳〵しく論ひ直すものぞ

今辯云。こゝに引き出て言むもことふりたれど。三大考の言ひ得たる說をつみて記さば。古事記に月讀命に。汝命者。所レ知ニ夜之食國一と詔ひ。建速須佐之男命には。汝命は所知ニ海原一とあるを論ひて。夜之食國は。中庸おもふに。即泉國のことなり。泉は根の國底の國ともいひて。大地の下の方に在り。さてその泉は即これ月にして。月讀命の所知看國なり。如此云ふ故は。まづ夜之食國と云ふを。たゞ月は夜を照し給ふことゝのみ見ては。食國といふにかなはず。かならず別にその國無くはあるべからず。黃泉の國は夜の國にて。其國をしろし看す神なるが故に。月讀命とは申すなり。國の名の黃泉と。御名の讀と同きを思ふべし。或人問けらく。夜の食國を月のこと也といふはさもあるべし。然れどもこれを。根國泉國と一つにいふは心得ず。根國は須佐之男命の罷

坐る國あり。月讀命のしろし看す國には非ずいかゞ。
答。まづ伊邪那美命は泉の國に坐ますを。須佐之男命の妣の國根之堅洲國と詔へれば。泉と根國と一つなることは論なし。かくてその根國すなはち夜食國なる由は。まづ師の古事記傳に。月讀命と須佐之男命とは。一神かと思はるゝこと多しとて。其由を擧られたる。中庸つら〳〵これを思ふに。書紀に月讀命は。可ニ以治ニ滄海原潮之八百重ニ也。と見えたるに。古事記及び書紀の一書には。須佐之男命に。海原を所知べしとあり。これ須佐之男命と申すは。月讀命の亦の名にて。信に一神あるべし。また書紀の傳傳を見るに。何れの傳にも。須佐之男命の惡き行を擧たるに。かの保食神の一書にのみは。須佐之男命の事はなくて。月讀命の惡行を擧たる。その事即ち古事記にては。須佐之男命の事なる。これら全く一神とこそ聞ゆれ。さて月讀の讀と。黄泉と名同く。夜の食國に由あり。思ひ合せてさとるべし。さればもと須佐之男命と申すは。月讀命の一名なるが。まぎれて別神の如く傳はりたるから。御事依のことも何も。彼れと此れと二つになりたるにて。書紀に。月神可ニ以配ㇾ日治ニ。故亦送ニ之于天ニなどあるは。月日の旋轉る世になりて後に。その見るところによりていへる傳あるべし。月讀命。須佐之男命を一神として見るときは。その本の紛いちじるく。何事も明らかにして。夜の食國といふはすなはち泉の國。根の國なること疑なきものなり。と云へる。信にさることにて。この考證せる說のいひ得て。文の勢のつよく雄々しく。かのいはゆる。英氣勃々八面無ㇾ敵といふさまにて。此を記るときは。いかに故大人の御心をそへ給ひけむと。いとおむかしく。これにくらべては。辯者たちの說どもは。よわく女々しく。さらに此の論ひのそばへもよるべき狀には有ずなむ。此をしも忌しき强說なりといひ。附會の邪說なりといはむには。古書の紛亂を正す學びは。かつて爲まじきことにこそ。此にしもかく淸々しく論ひ直すものぞ。などいへれども。その言の如く。すが〳〵しく論ひ直したることの。一つもなきは。いふかひなきわざならずや。次々に辯ふを見て知るべし。
そも〳〵古事記に曰く是以伊邪那岐大神云々於是洗ニ左御目ニ時所成神名天照大御神次洗ニ右御目ニ時

所成神名月讀命次洗御鼻時所成神名建速須佐之男命こゝの文にかく左の御目右の御目御鼻とありて三柱の大神の成出ませる其の始かく顯然なるものをや

今辯云。中庸三大考を著すに。もとよりこの文に。かく三柱の神の生坐るとあることを知らずてわきまへ。また師翁もこの文にかく有るを知りたまはで。三大考の說を諾はれしと思へるにや。そは此の文のみならず。次々に三柱神を生坐る。傳々を擧たるもみなしかり。そは悉によく讀よく知りたる上にて。それみな紛亂たる傳なることを證し曉りて。上の件に擧たる考は出來つるなり。然ればそを言ひ破らむとするには。其上を立こえて。外に正しき證を擧て。論ひ直すべきことなるに。このたぐひの文を抄出たるのみにて。何のわきまへたる考へもなきは。いともをさなき事なりかし。但し此文に。大御神と月讀命の。左右の御目より生坐るとある傳は。いとも尊く正しき傳なるを。洗御鼻時所成神名。建速須佐之男命。と云へる傳へは誤りにて。中庸の云へる如く。須佐之男命と申すは。月讀命の亦の名なるが。まぎれて別神の如く傳はりたるなること決なし。然らば洗御鼻時に。神の生坐るといふ故事は。もとより無き事ならむかといふに。此も實に有りしことなれども。かの祓戸神たち三柱の生れ坐ののち。（祓戸の神三柱とは。瀨織津比咩神。伊吹戸主神。速秋津比咩神にて。この三柱は。やがて。枉津日神。直毘神。伊豆能賣神なり。）天照大御神。月讀命（すなはち須佐之男命なり。）の生坐の前に。御鼻を洗ひて。速佐須良比賣神の生坐る傳說を。御名の似たるによりて。既くより混じたる傳のありて。そを記紀ともに。とり記されたりと見ゆることあり。此はおのれ正しき古傳の明文を得て。古史傳また或問に。具に辯へたるを。心を平にしてよく讀み。よく思ふべし。また事實より言はむも。御鼻を洗ひたもふことは。必ず御目を洗ひたまふよりは。前なるべき由あり。そは物の穢は。まづ鼻よりうくるもの故に。鼻の穢はここに深ければなり。然るに大御神の生坐しのこと。その深き汚穢の除こらぬ前にありては。かの御自ら撞賢木嚴之御魂と。御名告ませるにもかなはず。いひもてゆけば。いとも忌しきことなるをや。

さてその速佐須良比賣は。よそここは須佐之男命の分御魂に坐まして。大御神。須佐之男命の生坐るよりは前に。御鼻を洗たまふ時に生坐して。祓戸神三柱の功をすべ持ち。萬づの穢氣を持さすらひて。根の國に失ひ給ふ。いとも／＼深く妙なる謂のあるを。そは古史傳に具にいへり。此等の由縁までを。よく思ひ辯へて。月讀命と。須佐之男命は。一神に坐すこと。また洗御鼻時に。須佐之男命の生坐るといふ傳の。まぎれなりといふ說の。いよゝます／＼正しく聞ゆることを曉るべし。

さて此の次に此時伊邪那岐命大歡喜詔吾者生生子而於生終得三貴子即其御頸珠之玉緒母由良邇取由良迦志而賜天照大御神而詔之汝命者所知高天原矣事依而賜也云々次詔月讀命汝命者所知夜之食國矣事依也次詔建速須佐之男命汝命者所知海原矣事依也故各隨依賜之命所知看之中速須佐之男命不知所命之國而八拳須至于心前啼伊佐知伎也云々こゝの文大神の大なる御歡なることなればなほざりに見過すべからず高天原夜之食國海原とその依たまへる國々三ケ所なることも混疑しきことなく天照大御神と月讀命と二柱の大神はその所命所々知食たるに須佐之男命一柱は所命所知し看す有しことは故隨各依賜之命所知看之中とある語よくよく意を付べし各と云語また中と云ふ語はまさしく三柱の大神の内三柱の大神にかゝりて一柱の大神を語り別ちたる語也かゝる語どもを見ながら二神を一神あらむとしも思ひあやまることはいかなることにか

令辯云。これまたいとをさなき論ひ也。そは中庸も師の翁も。こをなほざりに見すぐして。かくさだかに二神とあるを。一神と思ひ誤れると思へるにや。熟讀みよく辯へて。一神を二神と混亂たる傳なることを曉りて。三大考の說は出來しこと。須佐之男命と申すは。月讀命の亦の名なるが。まぎれて別神のことゝ傳はりたるから。御事依のことも何も。彼と此と二つになりたるなり。と云へるにてしるきものをや。此を二神を。一神と思ひあやまれるとしも云へるは。三大考を讀むことの麁き故か。またはしひて言くたさむとするひがみ心か。

さて夜之食國とあるも海原とあるも月讀命一柱の大神のしろしめす所なれば月讀命と須佐之男命とを一つに混へて思ひゝがむる端とも云べけれごその又次下の文に其泣狀者云々故伊邪那岐大御神詔速須佐之男命何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流爾答白僕者欲罷妣國根之堅洲國故哭爾伊邪那岐大御神大忿怒詔然汝不可住此國乃神夜良比爾夜良比賜也これ初に海原をと勅任玉へるをその大御神の勅命に隨ひ玉はずて遂に此國にさへ坐せ奉り玉はず神逐に降し玉へることゝ大御神大なる御忿怒あることかゝる重き事どもありてたやすく以てまぎらはすべきことならず此時にいたりて海原の勅任は離れたまへることはいちじるきものをや

今辯云。この條はことに。文のさまあやしくて。ききとりがたきを。次々云へる說ともを合せて。その意を考るに。始めは須佐之男命に海原を任賜へりしが。その詔の旨に隨ひたまはず。根之堅洲國に罷らむと欲しつるに依て。その依賜へる海原をまた月讀命に任して。彼の命に夜之食國と。海原を兼もたして給へるとの意ときこゆ。かくて次々いふ說の。うち合ざる強說なること。下に辯ふを見るべし。

さて此海原潮八百重を月讀命に授け玉ひて夜之食國にして海原の事をも兼玉ふことは古事記には漏脫て傳はらねども日本紀の文面に滄海原潮之八百重をとあれば是又等閑に見過すべきことならず須佐之男命に天の下をとある事も由緣あることなれば次々引出て論ふべしそも又三神なることと勅任し玉へる所々の各由緣あることゝに意をとごめて味ふべし

今辯云。古事記に。詔建速須佐之男命。汝命者所知海原とあると。書紀に。月讀尊者。可以治滄海原潮之八百重也とあるは。同じ傳なるを。たゞ別名を以てかたり傳たるなること。三大考の說にて明なり。また古事記に。詔月讀命。汝命者所知夜之食國。とあるは。須佐之男命の。後に夜之食國（即夜見國なり）を知看して。月讀命とあり給へる後の事を。始に混亂たる傳へなり。然るを辯者。古事記の傳へに。書紀の傳へをしひて引つけ。月讀命は夜之食國にして。海原の事をも兼給ふと云へるは。彼

と此と傳に本末の混亂あることを。辯へざるより云ひ出たる强說にて。すべて古傳のまぎれを。正しく證し考ふる事をも。えせざる人々の說は。かゝることなむ多かる。そはしかせでは。彼と此とうち合ざる事のあるが苦しさにする事ぞ。これに漏たる傳の。かれに存といふことは。かゝることには非ずかし。

日本紀に曰次生海次生川次生山次生木祖云々次生草祖云々既而伊弉諾尊伊弉冉尊共議曰吾已生大八洲國及山川草木何不生天下之主者歟この本書の文はいかゞある所々あれども三柱の大神は元來天下の主とせんと御思てありけることはこゝの文にて知べし

今辯云。古事記の傳の趣は。檍原にて御禊し給ひ竟て。御目を洗たまひ。淸々しき伊都の御魂に。天照大御神と。月讀神の生坐る由にて。これ信に正しく妙ある傳あるを。それ漢めかぬ傳ある故に。書紀のこの本文は。撰者の新意をもて。作出られたる文なること決し。そは師翁の髻華山蔭に。この何不生天下之主者歟。とある文を論ひて。そも〳〵天照大御神。月讀命。須佐之男命は。泉國の汚穢を。滌き淸め給へるに依て生り坐ること。古事記また一書の如くにて。これ道のむねとある事なるに。その正しき傳說をばとらずして。かく異さまなる說をしも。本書にし給へるはいかにぞや。思ふにかの泉國段。また此の神たちの。御禊に生坐る事のさまなどの。漢籍ざまにうときを嫌ひて。撰者の新意をもて。かくは紀し給へるにもやあらむ。といひおかれし恩賴をかゞふりて。眞の古意を得たらむ人は。さらに惑ふべくもあらぬを。なほこゝろおそく。惑へる人のあるは。いとも歎息しくあやしくこそ。さて辯者この文をとりて。三柱の神は元來天下の主とせむと御思して有りけると云ふときは。御禊の時に生坐るとある。古事記の傳を信ざるならむかと思ふに。上には彼の傳をもとれる狀なるは。いかなる心にか。此を信ずるときは。彼は誤傳となり。彼を信ずるときは。此は誤說となることに心著ざるにこそ。

於是共生日神號大日孁貴(大日云々)此子光華明彩照徹於六合之內故二神喜曰吾息雖多未有若此靈異之兒不宜久留此國これは初の程三柱の大神共に此國にまし〳〵たるさま也さてつひ

に天に送り登せ奉り玉へる也自當下早送二于天一而授以二天上之事一上是時天地相去未レ遠故以二天柱一擧二於天上一也次生二月神一（一書曰云々）其光彩亞レ日可三以配レ日而治一故亦送二之于天一この亞日云々とあること月讀命なること著るし須佐之男命をかくは申さじをや

今辯云。この文に。伊弉諾伊弉冉尊二柱して。生給へることあるのみは。誤れる傳なれど。全はとるべき傳なり。さて亞レ日云々とあるを以て。須佐之男命と。月讀命と。一神には非じといふこと。これまた委く思はで云へる說なり。そは須佐之男命ならむには。かならず光彩は坐まさじといふこと。何を以て決めたるにか。いといぶかし。此の神より下に立たまふ神たちの。光りませるも多かるを。まして須佐之男命は。父大御神の。珍子と詔へるばかりの貴き神に坐まし。信に月讀命と同神に坐ませば。かの御目より生れ坐る由緣によりて。ここに光り彩く坐けむこと何か疑はむ。

次生二蛭兒一云々次生二素戔嗚尊一（一書曰云々）此神者勇悍以安忍且常以二哭泣一爲レ行故令二國内人草多以天折一復使二青山變二枯山一故其父母二神勅二素戔嗚尊一汝甚無レ道不レ可三以君二臨宇宙一固當三遠適二之於根國一矣遂之この文は髻華山蔭にも云れたる如く撰者の新意をもて紀し玉へるかとも思はるれば證としがたけれどもこれらの事は考へ合すべきこと也元來傳なきことにはあらざるべし文のかきざまこそあながちに漢めかし玉へりとは見ゆれどもかへすがへすひたすら傳なきことにはあらざるべければ一書とも考へ合すべし

今辯云。髻華山蔭に。撰者の新意を以て紀し給へるにや。といはれしは。此文のことにはあらず。何不レ生二天下之主者一歟。とある文を論れしなること。上に擧たるが如し。さて此文と。とるべき語はまゝ有れど。（そは古史にとりて或問に辨へたり。）父母二神云々は。上に云へる如く誤傳なり。

猶此次の一書の文もいかゞなれども是はた一つの傳なるべしそは伊弉諾尊云々乃以左手云々右手云云又廻首顧眄之間云々とありこれはた三柱なること著るし

今辯云。あなうるさきかも。神の御典を讀むばかり

の人の。誰か古事記書紀共に。三柱生れ坐るとある文どもを知らざらむ。まして三大考を著る中庸。またそを諾はれし故翁の。此を知れざることのあるべきか。何れの傳もみな。三柱生れ坐る趣なることはあくまて知れる上にて。そは誤れる傳なり。月讀命。須佐之男命は。一神なりと考へ證したる。これ三大考の功の大きなる所なり。さるをめづらしからぬ一書どもの文を。めづらしげに。のこらず引出たるは。いかにうるさくをさなきわざならずや。

次に一書曰日月既生次云々次生素戔嗚尊云々故其父母勅曰假使汝治此國必多所殘傷故汝可以馭極遠之根國云々一書曰云々一書曰云々一書曰云々一書曰云々然後洗左眼因以生神號曰天照大神復洗右眼因以生神號曰月讀尊復洗鼻因以生神號曰素戔嗚尊凡三神矣已而伊奘諾尊勅任三子曰天照大神者可以治高天原也月讀尊者可以治滄海原潮之八百重也素戔嗚尊者可以治天下也是時素戔嗚尊云々故伊奘諾尊惡之曰可任情行矣乃逐之とありこの文大かた古事記と同じ月讀尊に滄海原潮之八百重を治しめせとあること前にも云る如く古事記には漏れたれども此文に有ればかの大神の勅任ありしこと慥なりこれ重きこと也等閑に見過くすべからず又前にも云る如く素戔嗚尊に天下を治しめせとあることも重きこと也そはこの三柱の貴子は共に尊き神にまし〳〵て三柱共に天下知食すべき大神等なれども日神と月神とは既に天を知食せと勅任ありければ素戔嗚尊一柱に天下をと詔玉へる也然はあれども素戔嗚尊は母の尊の跡を慕ひて根國へ行ま欲く申し玉へるに依て父の大御神怒まして任情行くべしと詔玉へることあるもて月讀尊と素戔嗚尊とは混らはすべからざることをも思ふべし

今辯云。此引る文。大かた古事記と同くて。彼記には。須佐之男命に依賜へるとある海原を。此には月讀尊に依賜へるとある。これ月讀命。須佐之男命同神なる一證なるを。辯者飜案へて。前にも海原は。始め須佐之男命に任賜へりしを。その御依に隨ひたまはざりしかば。改めて月讀命に兼持しめ給へる傳の。古事記に漏脱て。此にあるなりと云へる。此もその論なり。もしこの説の如くは。此の文に。素戔

鳴尊者。可三以治二根國一也とあるべきに。可三以治二天下一也。とあるはいかにぞや。辯者もとく其の事に心著る狀なるを。そを論ひ明らむべき說に窮りたる故に。素戔鳴尊に。天下を治しめせとあることも重きことなり。そはこの三柱の貴子は。共に天下知食すべき大神たちなれども。日神月神とは。既に天下を知食せと勅任ありければ。素戔鳴尊一柱に。天下をと詔へるなりと辭を遁れたれど。此の傳も泣いさちのこと。御任の後にありて。其說つゞまらざる故に。また說を作りて。然はあれども素戔鳴尊は。母の尊の跡を慕ひて。根國へ行まく欲く申し給へるによりて。父の大御神御怒まして。任レ情行くべしと詔へると云へるものなり。この說によるときは。かの哭いさちのことは。二度ありしと云にや。いともおほつかなき定ありかし。此は實はこの傳も。たゞ御依の御言の異なるのみにて。すべては古事記と同し趣の傳なるを。その御依しの異なるを。漏脫たる傳にとりなして。附會せむとしつる故に。かゝる强言の出來しものなり。また姑く辯者の說につきて、いはゞ。泉國に往まく欲して。哭坐るまに〳〵。前には不レ可三往二此國一と詔ひ。神逐ひにやらひ給ひつゝも。また天下を任したまへるはいかにぞや。此は三柱共に。天下を治しめ給む料に生坐るなるを。天照大御神と。月讀命とは。かねておほし置給へるより。卓たる珍子に坐しかば。天下を知看さむ神と爲たまはむことを。あたらしく思食まして。天を知食せと勅任し給へりしかば。かねておほし置給へる天ノ下を。知看すべき神のなき故に。前には根國へ往けと逐ひ給ひしかど。またかさねて。天下をと依し給へるとにや。さては國生み坐る大御神の。御依ともなき御惑ひならずや。この三柱の神を書紀に。何不レ生二天下之主者一歟と詔ひて。生坐るとある傳をとりていへる說の。いみじき僻ことなること。これにて曉るべし。師翁の彼傳の信がたき謂を。きびしく論しおかれたるはこの由なり。然るをこの師說に從らず。彼の文をこの論辯の本つ據としたるは。いかなる僻心ぞも。さて上にいへる說どもは。論者の非說を辯へ言へるなるを。まことはこの書紀の傳に。二神とあるは。古事記と同く誤にて。中庸の云へる如く。もと須佐之男命と申すは。月讀命の一名なるが。まぎれ

て別神のごとく傳はりたるから。御事依しのことも何も。彼と此と二つにありて。かく誤り來つるなること疑なきものぞ。さてまた此の傳に。可ニ以治ニ天下一とあれど。天下てふ語は。漢語にあてたる後の訓にて古言にあらず。(このこと委くは古史、或問に云へり、)此は書紀にとられし本つ書には。決めて所知此國とか。所レ知ニ大八島國一とか有けむを。漢文に書れしものとこそおほゆれ。(そはまたの一書に、汝甚無道、不レ可ニ君臨宇宙一、とも見えたる宇宙も漢語なるを、思ひ合せて辨ふべし、天下の字もこれに同じ、)かくて此國とあらむを。大八島國とあらむも。意は漢文の天下。また宇宙と云に同くて。古言にいふときは。青海原潮之八百重といふに等しければ。(この事委は古史傳に云へり、)これまた須佐之男命といふ一名を。まぎらして別神と為たるより。かくも任し賜へるといふ誤傳の出來つるにて。まことは所レ知ニ海原一と有を。可レ治ニ滄海原潮之八百重一と有も。可レ治ニ天下一とあるも。傳への本の異なるにはあらずなむ。かれこれ思ひ合せて月讀命。須佐之男命一神にて。洗ニ御鼻一時に。須佐之男命の生坐るといふ傳は、速佐須良比賣神を生坐る傳の。混亂なることを思ひさだむべし。

さて又一書曰云々一書云々一書云々一書伊弉諾尊追ニ至伊弉冉尊所在處一便語之曰云々一書曰伊弉諾尊勅ニ任三子一曰天照大御神者可ニ以御ニ高天原一也月夜見尊者可ニ以配レ日知ニ天事一也素盞嗚尊者可三以御ニ滄海之原一也既而天照大御神在ニ於天上一曰聞ニ葦原中國有ニ保食神一宜爾月夜見尊云々是時月夜見尊云々時天照大神怒甚之曰汝是惡神不レ須ニ相見一乃與ニ月夜見尊一一日一夜隔離而住云々とあり

この一書に月夜見尊は配日天事知食とあるこれかの光彩亞日云々とあると同し事也素盞嗚尊に滄海之原可知食とあるは初は天下を任したるに後に海原をも兼て任し玉へるなるべしされど其後此大神の御所行あしくてつひに根國に逐はれ玉へる也此海原のことは月讀命に夜食國と海原とを兼て任し玉へるなるべしかの二神を一神なるべしと思ひ誤れるは此文に由れることなれどもそも一日一夜を隔つなど有ることは月讀命のみに係れることなれば須佐之男命にはいさゝかもまぎらはしきことあ

らじをや

今辯云。この段に云へる說どもは殊にをさなし。そはまつ素盞嗚尊に。滄海之原可知食とあるは。初は天下を任したるに。後に滄海をも兼て任し給へるなるべしと云へるは。前に古事記の哭伊佐知段を引て。これ初に海原をと勅任給へるを。その大御神の勅命に隨ひ給はず。此時にいたりて。海原の勅任は離れ給へることいちじるしといひ。また書紀一書を引て。海原をば月讀命に兼もたしめ。素盞嗚尊には。改めて天下を任給へるとやうに云へりしを。此にまたかく初は天下を任したるに。後に海原をも兼て任給へるなるべしといふは。何といふ說ぞや。思ふにこの辯者の立たるすぢは。古事記書紀。またその一書どもの。彼此うち合ざる傳どもをみなすてず。合せかなへて解とおぼえたり。また是より及ぼして。論者の神代の事實を說やうを想像るに。たとへば。天照大御神の生坐ることをば。彼書紀の本書なる。伊弉諾尊。伊弉冊尊共議曰。吾已生大八洲國及山川草木。何不生天下之主者歟。於是生日神。とある傳を本として。始はかく二柱して生給へりしを。次の一書に。伊弉諾尊曰。吾欲生御宙之珍子。乃以左手持白銅鏡。則有化出之神。是謂大日孁尊とある傳をば。二柱して日神を生み給へる後に。又日神伊弉諾尊の御體にこもり坐し。また後に鏡によりて化出給ひ。またこもらして。橘原の御禊の度に。左の御目を洗ひ給ひし時に。化り出坐るなり。とやうに解やらむと思はれたり。すべてこの辯者のごとく解むには。古書にあらゆる傳ともに。混亂たる傳といふは。さらになくなりて。いかやうにもいはるべけれど。古意しりたらむ人の。諾なりと思はめや。いと傍いたし。また辯に。されど其の後。この大御神の御所行あしくてと云るより。兼て任し給へるなるべしと云へるまでば。中にも甚しき强說なるを。次の文にかの二神を。一神なるべしと思ひ誤れるは。此の文に由れることなりといへれど。三大考に。二神を一神と定めたることは。此文にのみよれることにはあらず。くさ〴〵其證どものあることを辯へて。彼の書に悉く論へるが如くなるを。論者その說どもをば。しらぬかほにてさらに辯へず。たゞ古書に二神とある文をのみ引出て。しひて思ひ誤れるとのみいひく

たすは。いかにぞや。また一日一夜を隔つるなどあることは。月讀命のみに係れることなれば。須佐之男命には。いさゝかもまきらはしきことあらむや。と云へる文の意。いひざまおぼつかなくてきこえがたきを。其の意をたすけておもふに。此は日神は晝を持ち給ひ。月神は夜をもち給ふ故に。保食神を殺せる神を。須佐之男命としては叶はざるを。月讀命にては。事實にかなふとの意にや。さらば此もいとおろかなる說也。そは月讀命と。須佐之男命を別神として。たゞ保食神を殺せる事のみを。須佐之男命としたらむには。一日一夜といふ文にかなはざることも有るべけれど。三大考に。一神の事實と考へ證しつれば。御名は須佐之男とあらむも。月讀とあらむも。もとより同神に坐せば。かつて事實に難なし。さるを辯者は。御名にあづかることゝおもへるにや。(たとへば一記錄に。足利殿とあるを。一書には。源尊氏と記し。又一書には。治部大輔とあるを。こと〴〵く別人也と心得るがごとし)をさなし〳〵。但しこは姑く。辯者のいふにつきて。三大考の作者に代りて辯へ言へり。此事につきて篤胤が說は。古史傳にいへるを見るべし。

かくて既く享和二年の頃山田人渡會正淳神主三大考說辯と云一卷あり此正淳今の名は正兌と云此人は道に志深く家職を重みする人にて繁き神事のいとまには古書を見考へなど萬にまめやかなる人にて過し文化三年より大平が弟子となり古風の歌をも作りていよ〳〵厚くいそしめる人也說辯はいまだ十八歲の初學のほどに書記してさる秀才のほど思ひやるべしされど其書の内には取がたき說ども多かりしかば久しく打置てとり出ざりつるを今此論文を書たるに依て又取出て見にもとよりよくあげつらひたる說どもゝあればこゝに引出ていさゝかことわれり

今辯云　この言へるさまを思ふに。此の辯書は。まことに藤垣内ぬしの記されしにやとも思はるれど。猶熟々視るに。文辭のつたなきなど決めて彼の翁の書にはあらざりけり。さるは此文のさまにては。その正兌てふ人は。既にこの世になき人のごときこゆ。そは此に要となきほめ辭を記して。其傳を記せるさまと。いそしめる人なりなどいふ辭をつかひたる

にて。しか思はるゝを。其の事を言ざるは。忌てならむもしるべからねど。言たらでつたなし。もしなほ此世にある人ならむには。いそしめる人なりとは記まじく。いそしむ人なりといふべき語の定りなればなり。されど今の名はと云へるを見るに。なほ世にある人ともきこゆるは。かにかくにあやしき文なり。また初學のほどに書記して。さる秀才のほど思ひやるべし。と書る辭もかけ合ず。此は書記したる秀才のほど。云々といふべき格ならむか。さて思ひやるべしと云へるなども。今は此の世になき人めきてきこゆ。また書の內といふことも少しいかゞにきこゆ。書外書內といふ熟語もあれど。なほ其の書の中にはといはむかた耳にたゝず。これらを思ふに。彼ぬしのかゝれしものに。いかでかくつたなき語ごものあらむ。彼ぬしは。いと若きほどより故大人のをしへを受て。歌みやび文などのことはよく辯へ居らるゝ由なれば。とりはづし一つ二つの誤りはありとも初より終まで。かゝるつたなき文はかゝるべくもあらず。かゝる誤りは。篤胤が徒のごとく。歌文のことにうとき人にこそあるべけれ。さればこの辯書。かのぬしの名をいつはりて書るなること。いよいよ疑なし。

說辯云まづ第十の圖を見るに天地泉の成竟たるさまを書あらはして天を大に地を小さく泉をやゝ小さく圖したるも漢意の甚しきものにして彼の天文書に地は月より大なること三百六十一倍云々日は地に倍すること云々と云るによりて記せるものなりその心をかくさむとして天地泉の大小圖にかゝはらず遠近は殊にかゝはらずと傍書に云へりしまここに大小遠近圖にかゝはらずとならば天地泉を同じ程に書て其大小はあるべけれどそは今考へられずなどやうにこそ記すべき物なれとあり大平云この說さることと也

今辯云。此は天文書に云ることと。その謂あることゆゑ。それによりたらむも。なでふことかあらむ。その心をかくさむとして云々といへれども。さるかだましき心なしとも。天地泉を分間のわりをもて記すときは。大小遠近殊の外のたがひ有て。圖がたき故に。姑くたゞ大かたに。大小あることを知しめむとして圖るものなり。天文說の信にさる理を知りたら

む上にも。なほ其說によらで。說辯者のいふごとく書むは。僻心なるべきを。中庸よくも其說によれり。こは故大人の諾はれしを思ふに。中庸もその公平なる御心にならへるなるべし。さるを世の心陋き學者たちの。外國の說としいへば。その善き惡きをえらぶこととなくとり上ぬを。見たかきことにおぼえて。一向に上つ代の大らかなる傳にのみよりて。世の初發のこと。天地の有狀をもいふ故に。その說つたなく。事實に符すて。みるにかたはらいたき說のみ多きなり。そも／＼今の世となりて。古の事實を辯へむとするには。さる見陋く思ひおきてゝあらむものかは。すべて外國の說ともは。かの道々といふことの。敎訓めけること。神の由緣を云へるなどにこそ。さかしら說の信まじきこと多かれども。餘にはまゝ諾なることも有りて。中にも天文の說などは。世々に窺測りぬる有狀などは。古傳に照し事實に證し辯ふる時は。皇國の古傳の證となりて。いともたふとくめでたきことの多かるを。それひたすらにとらじとするは。かへす／＼も心陋し。たゞし此はいと弱き人の。初學のほどに云へる言なれば。さても有りなむを。大平ぬしの名を僞りて。翁さびする人の。この說さることなりと云へるはいかなる心にか。すべて古學する人の。善き惡きをいはず。外國の說をば信じとするは。かへりて直からぬことにて。もろこしの人の。己が國のことをのみ信として。餘國のことをばいやしめ貶し。夷狄の道ぞなどいふ。偏心のうつれるになむ有りける

又天即日泉即月といへるも古傳を疑ふより出來たる强說なり或人も日は行燈の中に火を燈したる如くにて行燈は卽高天原中なる火ぞ大御神の光なる月も又此の如しといへれどもそれはたおしはかりなりかくて一とわたり聞えたるに似たれど猶ふかく考ふれば理は愜はぬものぞたゞ日ぞ大御神月ぞ月夜見命と仰奉るべしこれぞ邪なき古傳の趣には有ける大平云この或人の說とていへる說もむげにすつべき說にはあらずさて辯者のたゞ日ぞ大御神月ぞ月夜見命と云々こは古傳說のまゝにて古事記傳の說もしか也しかれども大平が思ふ所は初にいへるが如し

今辯云、三大考の說は。いかにも古傳を疑ふより出

たる考なり。すべて學問の道は。疑はしきことは疑ひて深く考ふるより。その疑のはれて。明なる考の出來ることなるを。その疑はしく思ふ心を捨て疑はずあることは。もの學びにあつく心を用ふる人はさはありがたきものぞ。然れば疑ひの出來るは。學問の力のいでくるしるしにて。いとよきことなり。この辯者三大考に。天即日。泉即月といへるは強說なりといひ。猶深く考ふれば。理は協はぬものぞといへる。然らばなどその強說なる由。またその理に協はぬ事は云々と。委曲に辯へて。自が深く考へて。理に協ふ說を記し出ざりけむ。漫に口をあきて。強說なりと云へるばかりにては。誰かそを諾なりといはむ。辯者たゞ日ぞ大御神。月ぞ月夜見命と仰ぎ奉るべし。これぞ邪なき古傳の趣にはありけるといへる。こは齋藤彥麿が三大考辯にも。かく云ひて。高天原といふは。即日のことならましかば。古言に。高天原に千木高知てとあるをば何とかいはむ。日はややよこの方にこそ見ゆれ。これもし天ならむには。高天原に千木横知てとこそいふべけれ。といへりしを。いとをかしとのみ思ひて見過しおきつるを。かく思ひとれる人のまたも出來たるは。かたはらいたくこそ。さてかく云へるを思ふに。この人は。書紀の一書たゞ一所に。日月既生とあるをのみとりて。餘の傳どもにはみな。日神月神とあるをばとらざるにや。多きにつき。はた事實にかなふ傳によるときは。日神月神とある傳によるべきなり。そは日神月神といふときは。海神川神といふ如く。その所々を知る神といふことなればなり。かの日月既生といふ說は。かの書紀の本書に。生海生川とある類として。中庸はとらぬなるべく。故翁もそを諾はれしなるべし。然るを辯者。この生海生川と云へる類の。おぼつかなき書ざまの傳を信じて。人にもしか仰ぎ奉れと誣るとも。人の信ひかむことおぼつかなし。またそを邪なき古傳の趣にはありけると云へるは。三大考に日を知る神。月を知る神と說たるを。邪なりと云へるなれど。此は過言といふべし。古傳には。大かた日神月神とあるによれるを。いかで邪說とはいはむ。さて大平云の說に。日ぞ大御神。月ぞ月夜見命と云は。古事記傳の說もしかなりと云へれども。此は師の始の考にて。後に捨られたる說なるをや。

そは三大考を附錄にして。その跋に云々。かくてこそ高天原も夜之食國も。いぶかしきくまなくあからひぬれ云々。とめてられたるにてしるきをや。さるを辯者たち。この由をかつてもいはず、たゞ陽に中庸をのみいひくたすは。陰に故翁をいひくたす意にや。これも大平ぬしあらぬ證とすべし。諺に凹き所に水たまるといへるにたとへつべくや

又須佐之男命を月夜見命の亦の御名と定めたるも強て合せしものなりその二神の御所爲のいさゝかまがふ傳のあればとて一神となし奉らば出雲國と紀伊國は神代に似たる事のあれば一國とせむかいとも尊き神の御うへを心にまかせてかにかくにいひ枉るは辱く恐きわざならずやもしまことに一神にましまさば伊邪那岐命の檍原御滌の御時御鼻を洗ひ給ひし重き神事はいたづらごとあるをや大平云この辯はここによろしき說也出雲と紀の國とのたとへよく云れたり

今辯云。須佐之男命を。月讀命の亦名と定たるは。強て合せたるにあらず。種々證どもの有て。三大考に論へるが如くあるに。その說たがへりとあらば。云々の由しによりて非ありと。證を擧ていふべきに。然らぬはいかにぞや。かくさまにもの論ふこと。强に他說を云けさむとする。大かたの學者の常あり。いかで中庸。いさゝか似たる傳ばかりを以て定むべき。よく彼書をよみて後に言べき事なりかし。また心にまかせて。かにかくにいひ枉るとは。これまた言過なり。心にまかせたるにはあらず。古實を考證したるなり。そは彼書に云へる說どもを。熟見て知らるゝことなるを。生々に讀てたゞ氣にかなはずとて。一向にいひくたさむとせしは。若氣の進び心にや。又一神に坐ませばとて。御鼻を洗ひ給ひし御事の。いたづらになるにはあらず。こは上にもいさゝか云へる如く。かへりて深く妙なる事蹟の具れること。予が古史傳に委く辯へたるが如し。さて大平云の說に。この辯ことによろしき說也。出雲と紀の國とのたとへ。よく云れたりと稱あげたれど。こは唯氣にかなはざることを。かなはずと云へるまでのことにて。辯へ得たりといふものにはあらず。さてこの出雲と紀伊國のたとへをいひ出たるに就て。序なればいふ。此は古事記傳五の卷に。出雲と木國とは。遙

に隔りながら。神代には近く通ひて聞ゆること多し。妙といひおかれたるを。人のいたくめづらしがり。此は十の卷に。出雲なることにいふことなれども。此は十の卷に。出雲と木國と同く。通へることと多しとて。同じ地名。同じ神社のあることをいひて。此は五十猛命。大屋津姫命。抓津姫命三神の。出雲國より遷り渡り坐し時の由縁なるべし。といひおかれたるごとくにて。こは此二々國のみならず。同じ地の名。同じ神社などのありて其事蹟の近く通へるげにきこゆる國は。いかほどもあるを師はたま〳〵出雲と木國の。通ひてきこゆる事をのみいはれしなり。これ何のめづらしく妙なることのあらむ。この論者の。出雲國と木國は。神代に似たる事のあれば。一國とせむかといひ出たるを思ふに。此人もこを妙なることに思へるならむかし。

又日本紀に一書とて擧られたるが多き中にも左右の御手より日月の神の成まして次に素盞嗚尊の顧眄之間に生ませる由は見えたれども日月の二神のみ成ましゝ傳は一つたになき物をや大平云此の論もよろし

今辯云。さる傳の一つだになきに。一神なりと云へる。これ三大考の第一の卓見なり。上にも言へるごとく。二神とある文のまに〳〵。二神と心得むは。水とあるを氷といふに同じければ事もなきを。水とはあれど水にあらず。實は氷ぞ。かくて水と氷は一つ物なりといふは。よく識り辯へざれば云出がたきが如し。例をいはゞ。佛聖人をやごとなきものにいひはやすは。世の常なるを。それよからぬものぞといはむに。心得なくて云ひ出めや。さてこの說辯をかける人。その時は十八歲なりし由。その說はいまだしけれど。すべての文のさまもよくとゝのひて。一書曰云々を。いくつもかさぬるたぐひにはあらで。中々に大平ぬしの名を僞れる人の文よりは勝りたるは誠に奇童なりけり。或人の言に奇童のきこえある人。奇翁になれることはいまだきかず。といへるはさることながら。あはれ此の人は。奇翁にもなるべき人とおぼゆるを。今は世にありやなしや。

又月日のめぐる事をさへあげつらひて强て古書を說まげ我心にかなはざればとてかの沼河比賣の歌をしもこゝろえずといへるはいかなるまが心ぞや

大平云此說もよし

今辯云。これまた過言なり。そは月日はうつゝに旋ると見ゆるものを。その月日の初を說く書あれば。などかその旋るよしを論はであるべき。さてその旋ることを云へる中には。中庸いまだ考の及ばざることもあれど。そはこの辯者たちの知らざることなれば。その說まげたりと云へるは何ごとならむ。よし違へる說のあるにもあれ。たゞ說まげたりとのみにて。己が說を云ざるは。例のみだりなり。沼河比賣の歌を心得がたしとのみ云ひて。其說なきは。中庸のいまだ考得ざりしまゝなり。(こは篤胤考ありて、眞柱に云り。)此を誤れりとも何とも言ざるを。說まげたりといひ。いかなるまが心ぞやなど云へるは。いかに過言ならじやは。然るをこの說もよしとは。これまたいかなることにか。

此の大平が說はこの頃神代のことを人に說きかすとて三大考を委く見て疑がはしく思ひて古事記のも日本紀のもよく考たるよりかの僻ことを僻事と見出てはしばらくも默あることを得ずてかくあげつらふになもある

文化八年　　本居大平

今辯云。此文をもてこの辯書は。大平ぬしの記るにあらざることを知るべきこと。初に云へるが如し。さてこの人の神代の事を人に說きかすさまは。いかにあるらむきかまほし。この頃三大考を委く見て云云といひ。又古事記のも日本紀のも。よく考たるより云々といへるを思ふに。文化八年の頃始て古事記傳に心とゞめて見たる由なり。此を以て大平ぬしの說にあらざる事も。又淺學なるほども知れたり。かゝる人に。神代の事の說をきくらむ弟子のありもやしけむ。あはれむべし。

文化十一年九月　　平田篤胤花押

かく書き竟て。匡雄にさづけたるまでにて。人に見すべくも非ずとすておけりしを。去年の夏伴信友が京より歸り來れるに。此の事を語りつれば。それ信に大平ぬしの著されたるなり。我にも示せられしを寫しおけりとて。取いでたるを見れば。同じ書なるにいとゆゝしくおぼえて。早く反故になさましと心さわぎすれど。匡雄がとく人にも見せたる由云ふに。せむすべなく。思ひわづらひつ

つあるほどに。このこと彼翁のもとへとく聞えて。信友がり篤胤が辯々を見まほしといひおこされたるに。こはいかにせむといさゝか思ひわづらひて。一と日二た日と過せしを。またこの頃。遠江の甕麿がもとより。垣内翁の三大考辯は見たるや。尾張の鈴木朗ぬしなども。彼の說をうべなひて。なほつよくいひ破りて。天の說をもうち排ひたまへよなど。翁のもとへいひおくれるよし。云ひ遣されたりと云ひおこせたるに。また思へるやう。然もあらば此も反故にはなしがたし。道の爲めには。師にだもゆづるまじき由は。師のをしへなれば。垣内翁の言とて。もだあるべきにあらず。そはおのが言のひがことならむには。彼翁のあげつらひ直し。をしへ給ふべし。もしとるべきことあらば捨たまはじ。されば此を翁の許へたゞにおくりて。よしともあしとも。その公平なる論言にまかせめと。翁の六十ぢの賀に。木によする祝ひといふ事を。我にもよめと。かねてあとらひおかれしを。「木の國の有功の神の神奈備の。五百枝賢木のさかえませ君。又。「大八嶋くぬちことごと殖し木の。五百枝八百枝にさかえませ君。とほぎ申す便につけておくらむと。前にあだし人なるべく思ひて。論へることばをそのまゝにあらためず。しひて利心ふりおこして。木國のたよりもがなと待になむ。

文化十三年二月　　阿都多爾

天說辨々上卷

平田篤胤辨

ことし文化十三年と云ふ年の十二月。月立の末つ方に遠つ淡海の白須賀驛なる。夏目甕麿が許より。小林茂岳と云ふ人の。天說辨と云ふ書と。同じ人の予が靈能眞柱を論へる物とを贈りて。外に消息も無く。答論あらば聞まほし。と包紙に書附て遣せたるが怪くて。其を披き見るに都て未たしき說どもにて。辨ふる迄も無き說なれば。傍に差置きたりしを。敎へ子どもの見て。とりどりに論めいふを。書かき記しつゝ聞居れば。學びの長たる輩は。此は答論を著すまでも非ずと云ひ。心速き輩は。いと憎き事也。打きため給へと云ひ。中にいと未たしき輩は。師說のよきか。此の說の善きか。我が徒には。いまだ辨へ難しと云ふを。已れたゞ打笑てのみ在りつるに。一人二人この天說の此の論ひ。實に然る說とも聞ゆと云へるに。已れ筆さし置て言ひけらくは。汝等は何てしか心遲きやらむ。此は去年太平に贈れる三大考辨々を見て。答ふべき辭なく。負惜みと云ふ禍心の立添ひて。諺に云ふ疫病の神を傭ひて。敵を討むとすと云ふ如く。彼を以て負たらば。此をもて勝てむと攝へて記せる書にて。皆非說也。鈴屋大人の言に。心聰く心直き人は。よき事きけば速けく赴くを。心遲くこゝろ直からぬ人は。善事聞けども得悟らず。悟れども。人にまけむ事をし嫌て得移らず。え赴かずて。生のかぎり。枯野の草の。こぞの古から舊きに泥みて。淺みどり。春の若葉のうらぐはしきをば。摘こと知らずて朽果めり。」と言はれしは。かゝる事になむと云へば。其の二人また云へらく。其は然も有るべけれど。此は太平翁すら。正しく直き考へにて。穩なる論なり。と譽られたるに。況て拙き已等が心には。此の書に。古書の事實と。古言を擧て。徵し辨へたる說の。尤々しく聞え侍るを。只に非說と言へるばかりにては。師の言と云へども諾ひ難しと云ふに。予居なほりて其の書を採り。此に左いへるは。此謂によりて非なり。右云へるは。云々の由あれば違へりといひ敎ふるに。猶その二人は。たゞ口授のみを聞ては。水に數かく心ちして。猶辨へ叵し。い

かて記して見せ給はなむと請ふに。爲方なく。又おのが弟子をも。はや惑はしけるよと思へば。腹立しくもなりて。歳の暮の望の末にて。今年は殊に心急がしき事の多かれど。然もあらば。次々に辨へてむと。筆とり始めたるは。十八日といふ日なり。さて彼れが說は。師の古事記傳また三大考。予が靈の眞柱に。天地は產靈大神の成坐るより。始まれりと云ふを破りて。天地は天之御中主神よりも以前に。早く在りし物ぞといふ說なるを。予が辨は。そを非說と論ひ直せる辨なり。但しかく辨へたれど。此の論者に贈らむとには非ず。たゞ其の惑へる弟子どもに。覺さむとの態なれば。文語も何も。其の趣をもて記せり。偖この茂岳と云人は。予いまゝで名をだに知らぬ人なるが。太平の弟子と聞ゆるを。學問のなほ〳〵しきと。論へる狀の。わかく誇かなるなどに依て思ふに。此は決めていまだ。二十歳をこし越さずの。いと弱く乳くさき人なるべく所思るなり。故わが教子の若き徒に。斯さし出たる事は。さすまじき心得にもと。因に記したる事も多かり。もし見む人も有らば。其の心を得て。

天說辨に云く天地泉の事はしも。古事記傳にていと易らかに聞えて。さしも疑ひも出來まじきを。却りて疑ひの彼記傳の附錄なる三大考の說にて。却りて疑ひの出來める。然るは三大考といふ書。かの記傳の附卷ならずて。何となき一つの書ならむには。取見る人もをさ〳〵有るまじく。初學者の迷ひを發す端とも成まじきを。古學する輩の戴き持て。文机放たず。古事記傳の附卷としも爲られたれば。是も棄られぬ考とぞ思ふめる。然思ふにつけては。記傳の說とは甚く異なれば。容易く定めかねて。友どち集ひては。この論ひを專にすなるは然ることぞかし。故また近き頃。玉の御柱てふ書を著せるあり。その書を見るに。凡て神代のことも。ふかく考へたる中には。彼是珍しく考へ得たること少からず。本づく所は三大考にして。天地泉の有象も。猶深く考へわたして。凡て此の書にて解得たる如く聞ゆれども。日即天。月即泉と云ふ說は。左右に古傳に合ざる強事なれば。其を今論はむとす。まづ三大考を諾ふ輩は。記傳の附卷とせられたることゝ。跋に甚く譽詞を書れたるとに依て。

彼の大人も。記傳の說を後には棄て。專に三大考に依れたりとぞ思ふめる。そも一とわたり聞えたれど。信にかの大人の。三大考の考へを信用ひ果られたらむには。自らも別に其の由を。委曲に記さるべきを。さる事もなく。唯一とわたり珍しきを譽られたりとも見ゆれば。左右に古學する人の。疑惑となるべき事なりかし。

今辨云。この論に。予が靈能眞柱の說を論ふとて。「まづ三大考を諾ふ輩は。記傳の附卷とせられたることと。跋にいたく譽詞を書れたるとに依りて。かの大人も。記傳の說を後には棄て。專に三大考に依れたりとぞ思ふめる。」と云へるは。先頃太平に贈れる三大考辨々に。三大考を。師翁の諾はれし事は。跋に稱辭を記て。記傳の附錄とせられたれば。中庸が言ひ出たる說にもあれ。師說といはむも强言にあらずと記し。また太平說に。日ぞ大御神。月ぞ月夜見命と云ふは。古事記傳の說も然なり。と云へるを論ひて。此は師の始めの考へにて。後に棄られたる說なり。其は三大考を附錄として。其跋に。かくてこそ高天原も。夜之食國もいぶかしき隈なく。明らびぬれ。と感られたるにて著きをや。と云へるを心に含みて。云へる言なれど。故鈴屋大人の。三大考を稱譽られたるは。唯一とわたり珍しきを譽られたるには非ず。記傳に著されたる自らの說を棄て。專に三大考の說に依られたる事。彼の跋文にて。聊かも論ふべき事なきを。かく云へるは。彼の跋文を讀む事の麁き故かと思ふに。然はあらで。負じ魂に。何とか曲ても。云ひ破らむと爲たる稚心の進にて。その言まげむとする中に。奸意を含みて。人の心目を誑惑せむとする心なも見えける。其は「唯一とわたり。珍しきを譽られたりとも。見ゆれば」と云へるもてふ辭に。心を付て見るべし。彼の跋文の趣にては。唯一とわたり珍しきを譽られたりとは。言ひ放ち難き故に。しか言ひては。人の難めむ事を思ひて。言ひ放たず。左右に人の心目を。惑はしめむと爲たる心の見ゆる辭なるをや。「彼の大人の。三大考の考へを信用ひ果られたらむには。自らも別に其の由を委曲に記さるべきを。さる事もなく。」と云へれども。其は三大考に記せる說の餘に。又別に委曲に記すべき說を。思ひ得られざりし故に。たゞ彼の跋文に。「此のあめつちよみの

考へはも。智深く物よく考ふなる。西の國々の人どもも。古へより。未え考へ出ざりし事をし。珍かにも考へ出たるかも。奇くもかむかへ出たるかも。斯てこそ。高天原も。夜の食國も。詳しき隈なくは明らびぬれ。是れに因りても。古への傳說は。いよゝますます尊かりけり。須賣良御國のゆゑよしは。いよゝ倍々たふとかりけり。」と稱て。御自の信用ひ果られたる由を證し。記傳の附錄と爲て。己かく信ひたれば。信ひてよと。物妬みして。信はざらむ人に。示されたる文なる事論ひなし。然るを。「唯一」とわたり。珍しきを譽られたりとも見ゆ。」と云へるを。稚心の過言也。其は故大人の記傳を著はされたる御心定は。いともいとも。深く思ひ固られたる業にて。かゝる稚き人などの。伺ひ知るべき事にあらず。然ばかり大切くおぼし定たまへる。記傳の附錄に。かばかりの稚子すら。取り見る人も。をさ／＼有るまじく所思るばかりの書を。唯一過り珍しと見給へる道にて。其をいたく譽て添給ふべき物かは。此の書を記傳に附たらむには。古へ學する人の。疑ひ惑ふべき事を知りつゝ。さる浮氣事をせらるべきかは。故大人の記傳を著はされたる。御心定のいみじく深きことをば。かつても伺ひ知らぬ妄言なり。然れども。此は稚子の進心に云へるなれば。思ひ宥めむ方も有るを。太平を始め。學びに長たる人たち。鈴木朗なども。猶強くいひ破りて。天の說をも打拂ひ給へなど腰おして。何なればかく。故大人の。記傳の盛業を深くも思はず。三大考を附られし事を。云ひ腐し見腐し。師に忠ならぬやらむと。故大人の。幽冥より見行す御心を想像られて。ほと／＼淚も落ることなり。故また思ふに。三大考を誹る徒から。唯に歌文の小事にのみ心を入れて。道のことには。何の爲出たる事もなきを。同じ席の中より。中庸が。大き功を立たる事の妬ましく。左右にいひ破らむとするにて。其やがて大人の御心に違ひ。却りて大人を云ひ腐す事なるをも心著ざるになむ有りける。さて論者の言に。「天地泉の事はしも。古事記傳にて。いと易らかに聞えて。さしも疑ひも出來まじきを。附錄なる三大考の說にて。却りて疑ひの出くめる。」と云へる。此の言の如くは。唯に古事記傳の說。やすらに聞えて。疑ひ無しとのみ云て。下に論へる天說は。いひ出まじき事なるを。

生ざかしく。記傳の説とは甚く異なる。新しき僻説をいひ出て。記傳の説をも。いたく難たるは。何にぞや。また予が靈能眞柱に記せる說を論ひて。「日即天。月即泉と云ふ説は。左右に古傳に合はざる强事なり」と云へれども。其は下に辨へたる如く。自らの學問の力足らずて。古傳の趣をよく辨へざる。稚心にしか思ふにこそ有れ。予が强言に非ざるを。師の三大考を譽られたるに惑ひて。云へる説の如くいへるも。黄口の失言と云ふべし。其は篤胤をも。人の言を恃みて。善と譽れば善と思ひ。惡しといへば惡しと思ふ屬の。浮華心と思へるにや。善とも惡しとも。我が心と思ひ決めて。たとひ故大人の説にもあれ。更に孰々考へ見て。我が心によしと思はざる限りは信はず。また善と信ひたらむには。世人擧りて惡と云ふとも。其れに惑ふ屬ひの。うつけ心は持らずなむ。然れども。人には過失といふことも有れば。覺えず非説と知らで。諾ふまじきにも有らねば。其を人の諭したらむには。我なく意なく。速に改めて。恥ることと無く。生得たる篤胤が性にて。其は人は知るまじけれど。神はいと孰く知し食ものをや。

其は左まれ右まれ。己々が思ひよらむ説は。力の限り論ひて。定むべき事ならむとぞ思ふ。かくて天地の初發のこと。己が思ひ寄れることあれば。まづ此れを始めに論はむとす。「天地の成れる初は。葦牙の如くなる物萠騰りて成れりと云へるは。記傳に初て見れたる説にて。三大考。玉の御柱ともに其の説を用ひたり。其は誰も諾へりと見えて疑へることと未だ聞かず。

今辨云。この論書の初發には。「天地泉の事はしも。古事記傳にていと易らかに聞えて。さしも疑ひも出來まじきを。」と云ひつゝ。此れより後の論ひは。其を疑へる説なるはいかにぞや。さて「誰も諾へりと見えて。疑へることいまだ聞ず」と不審みたれど。此は實によく考へられたる説にて。更に疑ふべき事の無き故に。心さとく心直き人は。誰も疑はざるなり。其を疑はずとて。不審く思へるは。自の心おそく心直からぬ事を思はざるなり。斯て其のおそき心に。疑ふまじき説を疑ひて。力の限り論ひて。定むべき事ぞと云ひ。其の思ひ寄れる事とて。論へる説の非説なること。次々にわきまふるを見るべし。

こゝに茂岳古傳の記を熟考ふるに。先「古事記ニ云天地初發之時。於高天原成神名云々」。如此あるを以て思へば。此時既に高天原は成有しことゝ見えたり。然るを記傳に。於高天原と有るは。後に天地成りては。其の成坐せりし處。高天原になりて。後まで其の高天原に坐しましたるが故なり云云。」と云はれたれど。高天原に坐しますことは。天神五柱の緒に。上件五柱神者別天神。と有るにても炳く。成坐し處が。高天原になりしと云むも。聊いかゞとぞ思ふ。猶云はゞ。宇麻志阿志訶備比古遲神。天之常立神の成坐る初めに。次に如浮脂而云々とあるも。寔に此の物に因りて成坐るなれば。此れに對へて見むにも。於高天原成神とあるは。寔に高天原と云ふ處有て。其處に成坐りと聞ゆ。

今辨云。此は古事記の文の儘に見たるなり。かく見むことは。孰考ふる迄も無く。なにはづ。あさかやまを習ひたる許の。小兒なりとも。己がじゝおもひ寄るべきものをや。天神五柱の下に。上件五柱神者別天神とあるを。高天原の元來有りし證と爲たることと。證にいたく窮れると見えて。爲かた無げなり。其は此の文はたゞ。上件五柱神の。別天神なるよしを謂れるのみなるを。天てふ言の有りとて。いかで。高天原の元來ありし證となるべき。また此古遲神。天之常立神の成りませる段に。次國稚如浮脂而云。とある次は。記傳に。下の成神へ係れり。（國稚云々へ係て云にはあらず）前後みな次某神と有る例なるを。此は其の生坐る由縁より云ふゆゑに。文の隔れるなり。と云はれたるごとくにて。高天原の有るに對へて。次國と云ひて。天地を對へたる文にはあらざるを。強て天地の元來有りし證文に爲むとして。稚心の進びにもあれ。畏くも記傳の正しき考へを。「イカヾトゾ思フ」。など云へるは。天に向ひて吐く唾の。己が面を汙すとは思はざるにこそ。扨。「高天原と云ふ處有りて。其處に二柱神の成坐りと聞ゆ。」と云へるは。穴かしこ。神の御言を僞りと爲たる。甚も忌々しき邪言なるを。一向る心の進めるからに。然る太じき罪を。犯したりとは思はざりけむを。下に辨へたる說を聞たらむには。此の子もし實の心あらば。驚きて魂上るべきものぞ。

さて葦牙の如く萠騰りし物は。鈴木朗云。葦牙の如くなる物は。たゞ神に成べき料の物と思はる。と云ふが如く。天に成れる物とは思はれず。然るは書紀にも。于時天地之中生二一物一。狀如二葦牙一。便化爲レ神とありて。此の物の天に成れりと云ふ傳は。一書共の內にも。一つも有ることとなし。此を髣華山陰に云。天地之中生二一物一。此の一物は。かの浮膏の如くなる物の中より。萠上れる物にて。これ即ち天と成るべき物なり。古事記。また此の紀の一書どもの趣も然り。云々。と有れど。一書ともの趣も。同じく神の成坐すべき料の物の如く聞えたるをや。其も中には。聊か紛らはしく異なる傳もあれど。猶天に成るべき物と云ふ傳はなくなむ。

今辨云。古事記書紀ともに。如二葦牙一萠騰之物。便爲レ天と云ふ文は無れども。密に思ひを潛めて。傳々を考ふれば。其の趣のいと著明に見ゆる故に。故大人の始めて說明されたるにて。其は玉鉾百首に。「傳へはし無とも似たる類あらば。外になぞへて知ることも有らむ。」と詠れたる如く。準へ考へて。知らるる事なる故に。考へ知りて。萠騰れる物の。天と成れる由を著されたるにて。其の說の前後照應して。妙なる事は。實に神の秘を顯はしたりとも云ふべき。千古未發の明說なるを。黃口の小兒輩などの。負氣なくも言ひ破らむとするは。かの蟷螂むしの肱を擧て。立車に向ひたりとか云ふにも類へつべく。甚も嗚呼がましき事なりかし。其は引出たる傳文どもを。下に次々辨ふるをよく見て後に。うつけ心なほし給へと。大直毘神のなほびを祈のみ奉り。心を平にして。記傳の說を熟く讀たらむには。悟るべけれど。少かも負じ心を蓄へて。讀たらんには。老舌いてゝよどむまで。眞の旨を得まじきものぞ。其はまづ。此に書紀にも于時天地之中云々と引るは。神代紀の本書の文なるが。かく半分より。文を約めて引きたらむにこそ。天地は元より有りて。その中間に葦牙の如き物の生出て。其便神と化れりとは見ゆれ。全文を見通せば。其の趣いたく違ひて。天地と成るべき一物の中より。天と成るべき物の。葦牙の如く生れる由なり。其の全文は。天地開闢之初。洲壤浮漂。譬猶三遊魚之浮二水上一也。于時天地之中生二一物一。狀如二葦牙一。便化二爲神一。云々と有て。釋紀に引る私

記に、或る本開の字の上に、有二天地二字一、と云へるに依りて補へり、此は必有るべき文字なればなり〕天地開闢之初とは。天と地と判るゝ初を。まづ語り出たる文にて。其の分れたる状は。洲壤と云ふより以下の文なり。さて洲壤浮漂云々。浮二水上一也。とある。洲壤は。元來今の如く。國土の成就ひて在しと云ふには非ず。次の一書に。一つの物と云へると同く。たゞ潮に泥の滞りたる物にて。其れ大空に浮漂へる由なり。〔次の一書には、たゞ一つの物と云へるを、其れやがて大地と成れる物なれば、此の傳にはやがて洲壤と云へるなり〕さて于時天地之中生二一物一。狀如二葦牙一と云へる。天地之中は。彼の漂へる洲壤の中を云へるなり。〔天と地と判りて、其の中と云へるには非ざるなり〕其は次の一書に。一の物とあるは。此の洲壤にあたり。其の中とあるは。此に天地之中とあるに當るを以て知るべし。〔猶いはゞ、下に論へる如く、第二の一書に、國中とあるも、此なる天地の中と云に當るをも思ひ合すべし〕さて次の一書に。其の中と云へるは。一の物の中といへるなれば。事もなく通ゆるを。此に天地之中といへるは。紛はしきに似たれども　此に洲壤と云へるは。やがて次の一書に所レ謂一の物にて。それ後に天地と判たる物なる故に。其いまだ分らで。混成れる中より。大空に生出たるを。やがて天地之中生と語り傳へたるなり。髻華山蔭に。天地之中とある文を。此の言心得ずと言れしは。此の旨を思ひ脱されたるなり。さて其の葦牙の如き物を。便化二爲神一と書れたるは。漢風に文るとて。謬られたるなり。此は古事記に。如二葦牙一因二萠騰之物一而成神名。宇麻志阿斯訶備比古遲神。次天之常立神と有るに依りて糺し辨へ。葦牙の如き物の。天と成れるものなる由は。眞柱に論へる如く。此に因て天之常立神の成坐せるを以て辨へ知るべし。然るを論者。爭ふ心の熾なる故に。天地之中とある文に。一向に惑ひて。天地を元より有りし物といひ。葦牙の如き物を。たゞ神に成るべき料の物と思はる。など云ひて。漢風に書れたる。便化爲神と有文をさへに。其の證と引出たるは。憐むべき事なり。其は此の論者も。少か古學を爲たりと見ゆれば。此等の文字づかひは。漢風に文られし非事と云ふことは。故大人の御魂によりて。辨へ

居らむを。強て我意を立むとする心に。推て此の文をも。證とせむと搆へたるなり。
故一書どもの趣を悉く論はむとす。一書曰。天地初判一物在於虛中。狀貌難言。其中自在化生之神云々。この一物。記傳にも。天地となるべき物の如く云はれたれど。此の外一書ども。又本書。また古事記の趣どもと合せ考ふるに。猶天地と成べき物には非ずなむ。然るは本書にも。天地之中生一物。狀如葦牙云々。次の一書にも。國中生物。狀如葦牙抽出也云々。また一書曰云々。其中生一物。如葦牙之生泥中也云々。又一書云。有物若葦牙。生於空中云々。古事記云。如葦牙因萌騰之物而云々。此れ等に一物。又たゞ物とあるは。皆葦牙の如くなる物にして。天地と成べき物に非ざるを以て。こゝに一の物とあるも。猶葦牙の如くなる物と云ふ事を知るべし。云々。今辨云。この一物を天地と成べき物に非ずと思へるは。學問の力の足らざる故なり。其は此の文は。本書の次に。第一に載せられたる一書なるが。天地初判とは。本書に。天地開闢之初。と書れたる文を。

なほ文簡に書れしにて。文の意は本書に。天地開闢之初とあると同じ事なり。さて本書に。一つの物と云へるは。文に明かに見えたる如く。葦牙の如き物を云へるなれど。此の傳に一の物といへるは。彼の葦牙の如き物の成れるを云へるに非ず。然るを。一の物と云へる稱の同きを以て。彼これ同じ物と思ひ混へたるは。未しき事なり。然らば此の傳に。一の物といへるは。何を云へるならむと云ふに。本書に謂ゆる洲壤を云へり。其は此の傳に。一物在於虛中。狀貌難言と云へるは。本書に洲壤浮漂云々と云へる文に當り。自有化生之神云々と有は。本書なる于時天地之中生一物。狀如葦牙。便化爲神云々。といへる文に當るを。よく比校て辨ふべし。彼の傳に洲壤といへるは。國土と成れる後の名を以て語り。此の傳に一の物と云へるは。廣く云へるにて。語の異なるのみにて。此こそ彼此同じ物なれ。然るを同じ物にして。稱の異なるをば。異物と思ひ。異物の同じ稱なるを。同じ物と思へるは。未しきに非ずや。然る未しき學問にて在りながら。己が才のほどを知らず。古事記。書紀。また一書の文どもをみな引て。

「此れ等に一の物。また物とあるは、皆葦牙の如くなる物にして、天地と成べき物に非ざるを以て、ここに一の物とあるも。猶葦牙の如くなる物と云ふことを知るべし」と云ひて。記傳の說を擊むと爲たるは蟷螂むしの所業にあらずや。

一書に云。古國稚地稚之時。譬猶浮膏而漂蕩。于時國中生物。狀如葦牙抽出也。因此有化生之神云々。こは古事記の趣と全く同じ傳にて。此の國土の未だ堅まらずして。潮に漂蕩ひある狀の。浮膏に似たりしなり。さるを記傳にも。天地に成べき一の物の。虛空中に漂へりし如く解れたるは意得がたし。然虛中に漂蕩へりし物ならむには。猶假令つべき物も有るべきに。浮膏としも云へるは。必ず潮に洲壤の堅まらず。漂蕩へる狀の。水の上に膏の浮たるに似て有りしなるべし。本書に。譬猶游魚之浮水上とあるも。浮膏と游魚と異なるのみにて。潮に漂蕩へるは同じ狀の譬なり。もし天と地と別るべき物ならば。國稚地稚之國中などは何てか言はむ。

今辨云。こは第一に載られたる一書なるが。國稚地稚之時。譬猶浮膏而漂蕩は。本書に。洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也と云ひ。第一の一書に。一物在於虛中。狀貌難言と云へるに當りて。區ていへば。國稚地稚之時は。本書の洲壤。次の一書の一の物といへるに當れり。さて于時國中生物。狀如葦牙之抽出也。因此有化生之神は。本書に。于時天地之中生一物。狀如葦牙。便化爲神と云へるにあたるを。區ていへば。國中生物は。本書の天地之中生一物と云へるに當り。第一の一書に。其中自有化生之神と云へるは。葦牙の如き物の成れる由を略きて語り傳へたるなれど。其中と云へるは。此の傳へに國中といひ。本書に天地之中とあるに當りて。共に天地と成るべき一の物の。虛中に漂蕩へる中を云へるなる故に。記傳にしか解れたるを。「意得がたし」と難たるは。己が才の短き故に意得がたきなり。意得がたくは。其儘にさし置べき事なるに。其の才の短さを顧みず。「然虛中に漂蕩へりし物ならむには。猶假令つべき物も有るべきに。浮膏としも云へるは。必ず潮に洲壤の堅まらず漂蕩へる狀の。水の上に膏の浮たるに似て有りしなるべし。」など、

臆說を擧て。記傳の說をうたむと爲たるは。蠕螂の所爲なり。其は上に辨へたる如く、此の傳に國稚地稚之時と云へるは。本書の洲壤、第一の一書の。一の物とあるに當るを。それ在於虛中とあるを如何せむ。此を本書に。魚の水に游ぶに譬へ。此の一書。また古事記に。浮膏に譬へたるは。只だ一の物の大空に漂へる狀を。暫らく譬へたるなること。更に論ひなきものぞ。然るを一虛中に漂蕩へりし物ならむには。猶假令つべき物も有るべきに。と云へる。其の譬へつべき物。此の論者は何ほども思ひ得て有るべけれど。此を語り傳へたる古へは。漂ふといふに就て。浮膏の如くとも。魚の水に游ぶが如くとも。朴に譬へたりけむ。かく譬へたりとて。潮に洲壤の堅まらず漂へるとは何で定むべき。又「本書に。譬猶游魚之浮水上とあるも。浮膏と游魚と異なるのみにて。同じ狀の譬なり。」と諭しがほに云へれども。記傳。三大考。また予が眞柱のふみにも。此を異なりとは言ざるをや。また「天と地と別るべき物ならば。國稚地稚之國中などは何でか云はむ。」と云へれども。上に辨へたる如く。天と地とに判るべき一の物の中をさへに。天地之中とも。國稚地稚國中とも云へるを如何とする。

一書曰。天地混成之時。始有神人云々。是は次の一書の如く。天地初判と有るべきを。天地混成之時とあるは。快からぬ記しざまなり。然るは本書の初めに。陰陽不分。渾沌云々とあると同事にて。例の慨たき漢文飾の紛れ也。かゝる事のわきを熟く辨ふるぞ。古學の要にはある。唯天地初發之時と云ふ意と見て有るべき物ぞ。さるを記傳に云。「此の浮脂の如く漂蕩へりし物は。何物ぞと云ふに。是即天地と成るべき物にして。其の天に成るべき物と。地に成べき物と。未だ分れず。一つに淆りて沌かれたるなり。書紀の一書に。天地混成之時とある是れなり。」と云れたるは。何なることにか。甚も／＼意得がたき說ごと也。

今辨云。こは第三に載られたる一書なるが。天地混成之時とは。天と地とに成べき物の。いまだ判らず。混成て在りし時をいへるにて。本書に。洲壤浮漂。譬猶游魚之浮水上也といひ。第一の一書に。一物在於虛中。狀貌難言と云ひ。第二の一書に。國稚

地稚之時。譬猶浮膏而漂といへるを。言簡に書れしなれど。一の物の成り出て。いまだ天地と判らざりし時は。混成てありし事。上に辨へたる如くなれば。少かも故實に違へる事なき文なるを。「快よからぬ記しざまなり。例のうれたき漢文飾の紛れなり。」など云へるは。己が强說の破れつべき傳文なる故に。惡へるなれど。前に本書に便化爲神とある漢文を據として。「葦牙の如く成れる物は。たゞ神と成べき料の物なり。」と云へる。同じ漢文にても。彼はいたく故實を害ふ文なれど。此は少かも。故實を誤ること無き文なるをや。然るに故實を誤れる文を信じて。故實の徵となるべき文を惡へるは。兒心の進びなるを。「かゝることのわきをよく辨ふるぞ。古學の要にはある。唯天地初發之時と云ふ意に見て有るべき物ぞ」など宇斯ごろひて。記傳の說に打むかひたるは。此の子も。はや宇斯と云はれむとする心構へにや。近き頃は。世に自から大人と稱し。宇斯と稱れむと爲る人いと多かるを。それ大抵は鼠の輩にて。予が目には。猶いまだ猫とだに見えぬが多かるをや。さて本書の初めの文。漢籍を採て書れしには違ひなけれど。大かた世の古學者ども。人のいへば云ふべき事と思へるにや。事の意をも辨へず。聲に吠ると云ふが如く。「淮南子の文なり。」など其の本書をも見ずて。囂しく詈れども。此はこれかれ外の書をも採合せて。古傳を辨ふべき便と爲給へるにて。中には後の狡意も無きに非ねど。古天地未剖。渾沌如鷄子。溟涬而含牙。其淸者爲天。重濁者爲地。精妙之合摶易。重濁之凝場難。故天先成而地後定。然後神生其中焉。とある文などは。古傳說の。彼の國にも殘在を。語り傳へたる文なること。疑なき故に。撫ひ集めて。初めに記されたるなり。其は此の文に見えたる趣の。よく古傳の旨に符へるを以て然は知らるるなり。又この漢文をものして。故曰天地開闢之初と記されしを以て。旣く撰者の古傳を擧られたるも。天地の成れる事は。一の物の虛中に漂へるが。判れたりとの御心なりし事を知るべし。然るを論者。前にも。「天地の成れる初は。葦牙の如くなる物。萠騰りて成れりと云へるは。記傳に初めて見えたる說なり。」といひ。此に擧たる記傳の說は。いとよく聞えたる說なるに。「何なる言にか。いと〳〵意得がたき

說ごと也。」など云へるは。直からぬ心に。強て云ひ破らむと爲たる狂言か。もし實に意得がたかりしならむには。それ心の遲き故とは知らざるにこそ。憐むべし。

一書曰。天地未生之時。譬猶海上浮雲無所根係。其中生一物。如葦牙之初生泥中。便化爲人云々。天地未成時とは。聊か異なる傳へざまなれども。開闢とも。天地初判とも有と同じことにて。如件さまざまに記されたれど。皆異なるに非ず。正しくは古事記に。天地初發之時とある意なり。天地混沌。天地未成。天地初判。開闢。みな同じことゝ知るべき也。未成之時と云ふを。重く見て云へる說は。却て非なり。熟く合せ考へて悟るべし。

今辨云。こは第五に載られたる一書なるが。天地未生之時とは。文の如く。天も地もいまだ未生し時と云へるにて。天地開闢之時。天地初判。天地混成など有ると異にして。師の言に。天地初發之時とあるよりは。委く云へりと言はれたるが如し。然るを。「未成之時と云ふを。重く見て云へる說は。却りて非なり。」と云へるは。天之御中主神の成坐る先に。天地の本より有りしといふ。己が僻說の破るゝ傳へなればなり。殊に本文に。未生とある生の字は。謂ゆる眼字なるに。己が文には。二た所まで未成と書ることは。天地は元より有りし物なれども。未成は未だ成らざる時といふ。己が考へを顯はさむと爲たる。奸意を以て書るなり。其は前にも。「一とわたり珍らしきを擧られたりとも見ゆ。」と云へるも辭の類也。しかれども實によく學問たる人の。惑はさるべきかは。さて此の傳に。時の字の下に。生一物など云ふ語の有りけむが脫たるなり。然らざれば。其中生一物といふ事。聞えざればなり。斯て此の傳も。譬と云へるより。根係まで十字は。本書の洲壤云々也の文に當り。第一の一書の。一物在於虛中。狀貌難言。第二の一書の。國稚云々漂蕩。第三の一書の。天地混成之時と云ふにあたり。其の中と云ふより以下は。本書の。于時天地之中云々爲神といふ文に當り。第一の一書の。其中自在化生之神。第二の一書の。于時國中生物云々。有化生之神。第三の一書の。始有神人と云へるにあたりて。上に辨へたる如く。

各々文は異なれども。共に一の物より萌騰りて。天の成れる傳なる事は。違なきなり。

一書曰。天地初判有レ物。若二葦牙一生二於空中一。因レ此化神云々。又有レ物若二浮膏一生二於空中一。因レ此化神云々。こは髫華山蔭にも「古傳といへども。少づつ誤りたる事も有りしなり云々。」と云はれたる如く。正しき傳とは見えず。上に云へる一書どもに合せ考へて知るべし。葦牙の如くなる物は。聞えたれど。浮膏なせる物を。其に對へて。生二於空中一と云ふことは。外の傳へに曾て一つも無きことにて。甚意得がたくなむ。さて若二葦牙一生二於空中一と云は。本書に。天地之中生二一物一。狀如二葦牙一とあると同じことにて。天地之中とある即ち空中なり。其は今の現の如く。大空とさす處。天と地との中間を云なりけり。

今辨云。本書に天地之中生二一物一とあるは。洲壤の中より。大空に生出たる由なること。上に委く辨へたるが如くなれば。此の傳へに生二於空中一とあるは。天と地との中間をいへるに非ず。扨此に擧げたる傳へは。書紀の一書どもの中に。卓越て尊く正しき傳にて。少かも誤れること無れども。師の翁さへに。誤りたる傳への如く言はれたれば。此の論者などの力にては。甚意得がたく思へるは。然も有るべき事なり。此の文の意は。終の段に辨へたるを見よ。

かく論ふを。或人問けらく。さては天と云ふ物の成し初はいかに。答ふ。天地初發之時とあれば。此の時天も初めて成し物とは聞えたれど。何なりけむ。其の狀などは傳へなければ曾て知るべからず。然れど古くより。天地の別れし時など云ふ言のあれば。本は天と地と別れつる物にやあらむ。天之御中主神の成坐る先に。旣く天は成りつるなり。扨天のみならず。地も國土の堅まらざりし時よりの傳へにて。大地の初めて成りしことは傳へなき也。かの葦牙の如くなる物は。天地成て漸後に出來つる物なり。故正しき傳に。天地之中生二一物一。狀如二葦牙一とは有る也。凡て空中などあるも。天と地との中のことにこそ有れ。其を天地成らざる先は。虛空中なりと云は。天地の外は。今の現の空の如き物也とぞ思ふめる。其はいと有るまじき思ひやり也かし。さらば天地の外は。如何なる物ぞ

など云ふとも。更に假令云ふべきやう無し。今の現に。大空とさす處は。天地の中のことにて。其れ限りある物になむ有りける。熟く思ふべし〳〵。空は眞實の空中に非ず。暑き寒き氣の充たればなり。假令て云ば水中などの如し。

今辨云。大地の成初は。第一の一書に。一物在於虛中とあるこれ其の初にて。天の成初は。其の一の物より。葦牙の如く萠騰れるにて。其の傳は。上に辨へたる如く。いと多かるを。無と云へるは。我意を立むとの心か。學びの力の足ざるかの二つを出ず。然るを。「かの葦牙の如くなる物は。天地成りて漸後に出來つる物なり。故正き傳に。天地之中生一物。狀如葦牙とはある也。」と云へる。此の傳は。本書の文なれど。上に天地開闢之初。洲壤浮漂譬猶游魚之浮水上也。と云ふ文ありて。天地之中とは。洲壤の中をいへるにて。天地すでに成りて。其の中と云へるに非ざること。前に辨へたるが如し。また。「凡て空中などあるも。天と地との中のことにこそあれ。其を天地成らざる先は。虛空中なりと云ふは。天地の外は。今の現の空の如き物也とぞ思ふめる。其はいと有るまじき思ひやり也かし。」と云へるは。記傳に。「いまだ天も地も無き以前は。いづこも〳〵空しき大虛空なり。」と言はれしを。破らむと爲たるなれど。上に次々辨へたる如くなれば。此も蟷螂むしの所業なり。然るにても。斯くなぶり貌に言へるは。甚も禮なく。生ごしやくなる若者なるを。「今の現の空の如き物なりとぞ思ふめる。然らば天地の外は。何なる物ぞと云とも。更に假令云ふべきやう無し。」など云へるは。寢言などを聞く如くにて。何事を云ふとも分り叵き言狀なり。また「今の現に大空とさす處は。天地の中のことにて。それ限りある物になむ有りける。熟く思ふべし。」と云へるは。此の若者大空の限を知れるとにや。其の限こそ聞まほしけれ。孰思ひても。予はその限り知られずなむ。また。「空は眞實の空中に非ず。暑き寒き氣の充たればなり。假令て云ば水中などの如し。」と云へるは下に。漢人の云ふ如き言は。いふまじき由云へるに。此は漢人の說なるは如何ぞや。偖また「天之御中主神の成坐る先に。旣く天は成つるなり。」と言へるは。神の御言を僞と爲たる說にて。いとも忌々しく可畏き妄言

なり。其は顯宗天皇紀三年二月の處に。月神の人に著りて詔へる御言に。我祖高皇産靈有預鎔造天地之功云々。と詔へるよし見え。また四月の處に。日神の人に著りて詔へる御言に。以磐余田獻我祖高皇産靈。と詔へる由見えたり。此は日神の御言にも。其産靈神の。天地を鎔造ませる由を詔へりけむを。省たるなること。靈は上なる月神の御言に讓りて。倚かく神の御言に。産靈神の眞柱にいへるが如し。倚かく神の御言に。産靈神の天地を鎔造ませる由を託し給へれば。更に疑ひ奉るべき事なく。又古事記序に。參神作造化之首。とも見え殊に。「天之御中主神は。産靈神より前に成り坐る神なるに。此の神の成り坐るより先に。既く天は成りつるなり。」と云ふときは。産靈神の天地を鎔造坐せると詔へる。日神月神の御言を信ざるなり。其はこの若者のみならず。天も地も元より有りし物といふ論を立る輩。すべて何ばかりの思慮ありてか。神の御言を僞として。我意を立るにや。外國籍に率りたらむ輩は。今いふ限りに非ず。古學者がほして。古道を仰ぐげに見ゆる徒の。神の御言を信ずて。何を以て道の本を立むとする。掛まくも可畏き天皇命すらも。神の御言を僞りとして。信たまはざりしかば。大く御怒坐て。一と道に向ひませ。と詔へるをば知らざるにこそ。かゝる罪。犯さすまじき御心にや有りけむ。記傳に疾く。右の件の御故事を擧て。産靈神の天地を造り坐る證とせられ。予が靈の眞柱にも。委く記し敎したるを。只に爭ひ破らむとする狂心のみ進み逆上りて。眼もうち暗みたりし故に。此等の事を觀もやらで。大じき罪を犯したりしなり。論者もし實の心もあらば。疾々直からぬ心の限りを求あらはし。髭はいまだ有るまじければ。髮また手足の爪をも拔て。潮に潜き身潔ぎ祓ひ。かゝる論書を著せる。空けの罪を免し給へと。天神地祇に請祈まつり。學問のすぢを改めたらむには。其の罪の消まりなむ。若なほ少かも直からぬ心を殘し。改めむ事を憚りて爭ひもし。密々論ひも爲たらむには。大じき悔あらむものぞ。あはれ此の由ばかりは。早く論者に聞せまほしき物なり。漢人すら。過りては改むるに憚ること勿れと云へりき。學問の業には。殊に過つことも無にしも有らねば。過りたらむには。速に改めて。我が言誤れりと云ひて。怠狀を出す。是ぞ

眞のをゝしき大倭心なる。然るを其の過をあやまりと云ひかねて。諺にいふ蛙の面に水沃ぎたらむやうに。猶餘事を以て。勝てむなど擶ふるは。いと怯く汚き心なりかし。さて天と地との成れる初發を考へ知らむと思ふには。まづ上に擧たる。顯宗天皇紀の御故事を本として。三柱神の天地に先立て成り坐ることを知り。さて書紀第一の一書に。天地初判。一物在二於虛中一と云へる傳へと。月神の御託に。產靈神の天地を鎔造ませりと詔へる御言と。古事記序に。參神作二造化之首一とある語とに依て。まづ初發に一の物を成し出たまへりしが。それ判りて天と地とに成れりし物ぞと知る。是ぞ正しき古學にて。故大人の敎の趣には有りける。我が敎へ子ども。まづよく此の旨を心得てよ。

そもそも古事記曰。次國稚如二浮脂一而。久羅下那洲多陀用幣琉之時。如二葦牙一因二萠騰之物一而云々。こゝに如二浮脂一漂へりとある物。天地となるべき物の。虛空中に漂へるには非ずと云ふ故は。次の文に修二理固成是多陀用幣流之國一。と有るにて知べし。國稚多陀用幣琉とあるも。多陀用幣琉國とあるも。全く同じ言なるを。上なるは。天地混沌たる物の虛空中に漂ふことゝし。下なるは。潮に國土の漂ふことなりと云へるには。人是を諾はむや。下なるは國土の堅まらで。潮に漂ひ有るなること決きを以て。上の國稚云々も。潮に國土の漂ひ有しことなること知べきなり。

今辨云。浮脂の如く漂へりとある物。判りて天地と成れる事。上に次々辨へたるが如し。然るを論者。「次の文に修二理固成是多陀用幣琉之國一。とあると同語なれば。上の文に。國稚多陀用幣琉とあるを。混沌たる物の。虛空中に漂ふことゝし。下なるは。潮に國土の漂ふことなりと云ふを。諾はずと云へるは。人の言ざる言を。いへりと誣たるなり。其は修二理固成是多陀用幣琉國一とあるを。潮に國土の漂ふ事なり。と誰か云へる。記傳また三大考。予が靈の眞柱にも。曾て言はざる說なるをや。此は。「下なるは國土の堅まらで。潮に漂ひあること決を以て。上の國稚云々も。潮に國土の漂ひ有しことなること知るべきなり。」と云へる。己が僻說を强に人に信ぜしめむと爲る心に。誰も言はざる事を。言ひたりと誣するな

れば。枉れる心の。いと太き若者なりかし。

さて記傳に。國稚云々の下に。「國土は伊邪那岐伊邪那美大神の。始めて生成し給へれば。此の時には。未だ然る物は無きを。如此言へるは。成れる後の名を假て。其の始の狀を談れるなり。」と云れたれど。後の如く堅まりたる物にこそ有らね。猶國土と成べき物は浮れ有しなるべし。國稚とは則其漂へる土を指て云るなり。其は沼矛以て畫玉へりしに。一つの島の出來つるを以ても。國と成べき壤の淳れありしことは知るべきなり。さて國土は。二柱神の生成し玉へりし物にはあれども。其の成たる國土は。本漂へりし物の堅まりしなり。如此云ふを稚々の學者奇しむ事勿れ。深き故あることぞ。天神の御事依しに。此の漂蕩へる國を。作り堅め成せと詔へるにても。作り堅むべき國土の漂ひありしとは知るべきなり。本より無き物を。此の漂へる國とは。いかで詔はむ。大國主神の始レ作レ國などあるも思ひ合すべし。

今辨云。古事記に國稚云々と云ひ。是多陀用幣琉國とあるは。彼の一の物を云へるなること。記傳の說にて明かに聞え。はた其の一物に。地と成るべき物の。淆りたると云ふことも。記傳に浮脂云々の下に。此の浮脂の如く漂蕩へりし物は。何物ぞと云ふに。云々。天に成べき物と。地に成るべき物と。未だ分れず。一つに淆りて沌かれたるなり。書紀の一書に。天地混成之時とある是なり。と言はれたるを。論者も知りて。前に論へるに非ずや。然れば。後の如く堅まりたる物にこそ有らね。猶國土と成るべき物は有しと云ふ說は。論者の說にはあらで。師の說なり。さて國稚の下に。國土は伊邪那岐伊邪那美大神の始めて生成し給へれば。此の時は然る物はなきを。と云はれしは。此時いまだ後の如く堅まりたる國は無けれど。國土と成るべき物の。潮に淆りてあるを。國稚と云へると宣へる意なること炳し。然るを論者。この師說の。いさゝか言の足らざる所を伺ひよりて盜み取り。其を我物と爲て。前には天地と成るべき物の。一つに淆りて沌れたるなり。と云はれしを。云ひ腐したる事をばはたと忘れて。我物がほに取出し。師說を以て。師說の少か足ざるところを撃むと爲たるは。いとも奸ましく嗚呼なるわざ也。さて一沼

矛を以て畫玉へりしに。一つの島の出來つるを以ても。國と成るべき壤の浮れありしことは知るべきなり。」と云へるは、潮に國土の浮たらずは。二柱神と申せども。島と固め給ふべき由なしとにや。其は己が手に能はざる事なるを以て。神の御所業を疑ひ奉れるにて。夏の虫の氷を疑ふ漢意なり。其は下の文に。鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而引上時。自二其矛末一垂落之鹽累積成レ島とある。二つの鹽てふ字をなど見ざりけむ。此は潮の事なるをや。然るを論者。「天つ神の御事依しに。此の漂蕩へる國を作り堅め成せと詔へるにても。作り堅むべき國土の漂ひ有しことは知べきなり。本より無き物を此の漂へる國とは何で詔はむ」と云へれども此の文を以て國稚云々と云ひ。多陀用幣琉之國。といへる國は。共に師說の如くなることを知るべきなり。また「大國主神の始作國などあるも思ひ合すべし。」と云へれども。此は二柱神の生おきたまへる國の備はざるところを。經營たまへる由にて。國土は本より有りしと云證に。思ひ合すべき事に非ず。さて論者。國土は本より有りしと云ふ說を立むとは爲つれども。二柱神の國生給へる傳へを。說曲べき言に困れるに故に。「さて國土は。二柱神の生成し玉へりし物には有れども。其の成たる國土は。本漂へるものの堅まりし也。」と理も無きことを言ひて。「深き故ある事ぞ。」など云へれども。何ばかり深き故を知るべき。此は自からも。彼これ約らざる說の出來れるに爲方なく。由ありげに云ひて。遁れむと爲たるにて鬼面をものして。小兒を怖す類ひなりかし。また案に。此の論者むげに學問の力なきを。かく物々しげに云へるは。傍に腰おす人のあるを。力として云へるには非ざるか。もし然も有らば。其の腰おす人は。決めて甚じき漢意の人にて。少か古學の書をも見はつれる物から。其の漢意はなほ去あへずて。二柱の神の。國生坐ると云ふ傳へなどをば信ずること能はず。經營の事に說成したる說など有りて。此の論者も。それに率り。深き故ありと心得たるにや。其は二柱神の國生の事は師の說の外に。故ある說の曾て有るべくも非ざるを。深き故ありと云へると。天も國土も元より有りしと云ふ說を立たるは。產靈神の天地を造り給へると云ふ傳を。疑ふより。出たるごと聞ゆるとを。思ひ合せて。然は知ら

る丶なり。然るにても。「如此云ふを。稚々の學者奇む事勿れ」など大言を放たること。甚く思ひ上りたる狀なるは。若くは稍心狂ひては有ざるか。狂人の自から帝と稱し。王と稱する心ちぞする。其は此ばかりの學問の力を。いと猛きことに思ひて。人を稚々の學者など呼はる事は。氣達はずは。言ひ出まじき言なればなり。偖こそ下には。可笑くも非ぬことを。可笑ともをかしとは云へれ。

さて上に云へる如く。天地の成り初し有狀などは無く。此の國土を作り堅め玉へる初めより傳へたる。是ぞ眞寶の古の朴なる傳とぞ思ふ。爰にかの玉の御柱に。古傳に曰とて。「古天地未レ生之時。於ニ天御虛空ニ所ニ成坐ニ神御名者云々。」と擧たるは。著述者の諸の古傳を見明らめて。選びたる古史と云ふ書なりとか。この於ニ天御虛空ニ云々といへることと意得ず。古史傳といふものを未だ見ざれば。とかく論ひ難けれど。ふと打見たるには。自ら空を天と云は誤なりと云へるにも違ひて聞ゆ。何なることにか。古事記。書紀の一書にも。高天原に成坐る神云々。古語拾遺にも。天中所生神云々とあるものをや。

今辨云。予が眞柱の書に於ニ天御虛空ニとかけるを難めたる人。此の餘にも此れかれ有り。其は何れもやや學問のたけたる人々なりしかば。此の弱者などの意得かねつるは。諸なる事なれども。此は漢文に虛字實字と云ふこと有り。古言にも。虛語と實語との差別ある事を知る時は。疑ひ無き事也。是ばかりの事をだに。思ひ辨ふる事能はで。翁さび人を稚々の學者など云ふは。狂ならずや。古史の徵と傳とを板に彫ることは。今少し間あれば。此に其の由を記してむ。其は初發に。天地未生之時と書ける天は。謂ゆる實字實語にて。天のいまだ生らざる由なり。天御虛空とかける天の字は。謂ゆる虛字虛語にて。唯に大空の上と云ふ義なるを。師も云れたる如く。天つそらとは常にも云ひ。はた天御虛空といふ熟語は。古事記にも有れば。其を用ひて。如此は書り。さて記紀共に。高天原に成り坐る神と見え。古語拾遺に。天中ニ所生神と有ることは。予も人よりは。稍大きなる眼を持たれば。いと熟く見知れるを。かく書る事は。心ありての事にて。小兒輩の知ざる事なり。其は委くは。

古史徴に云へるを見て知るべし。さて靈の眞柱に。疑はしく思ふ事の有らむには。今の現に在る人の著せる書にて。殊に其の人は。自らの師とある人とは。相知れる人なれば。漢人も。疑はしきは問むことを思ふと云へる如く。條々にして問ひおこすべき物也。諸國の心直く心さとき人は。みな然する事なり。然るに靈相ば。互に學問の親族とも名告り相ふべき者を。斯おし隔て。強て中惡くせむと構ふるは。古の道を學ぶ者の。いと〳〵有まじき事なり。殊に吾よりは年も長く。また吾より年古く學びたりと云ふ事は。知りつらむに。其を少かも勞る心なきは。更に同好相交はるの道を知らざる者と云ふべし。大かた世に謂ゆる古學者ども。唯に口利く言はむ事のみを力めて。師友の交義などをば。曾つて考覈せざる故に。かく不屆にて。實はみな敎ふる人の罪なりかし。

さて次々云るが如く。天と云ふ物。かの葦牙の如くなる物の成れるにも非らず。唯天地の初發より。空の上にありて。可美國とは聞えたれど。何なる物ぞなど。更に論ひ云ふべきに非ず。さるを彼の三大考に。葦牙の如くなる物。天に成れりと云ふ說に依りて。現に仰ぎ奉る。日即ち天なりと云へるは。いとも〳〵意得ぬ私言なりけり。

今辨云。天を葦牙の如く萠騰れる物の成れるに非ずと云ふは。僻說なる事。上に次々辨へたるが如く。又初發より。空の上に在りし物と云ふ說は。神の御言を僞りと爲たる邪說にして。一と道に向ふべき罪なる事も。上に辨へたるが如し。さて。「天は何なる物ぞなど。更に論ひ云べきに非ず。」とは誰人の言出たる介ならむ。此はいと非力にして。師說を非とする黨の。云ひ出たる定めなるを。眞の學びを爲る人の誰か用ふべき。抑天は。天皇の本つ御國にして。其の大御祖神たちの。神留坐す御國なるものを。神の道の辱き事を尋ぬる學問に。孰く其の本の謂を伺ひ奉らで有るべきかは。然るを。「何なる物ぞなど。更に論ひ云べきに非ず。」と云ふは。六合の外は聖人存して論ぜずなど云ふ說に。率れる徒の心なるをや。漢人にも識あるは。聖人論ぜざるに非ず。知ざる也とも云へりき。然るをかく云ふは。書紀の始に。産靈神の事を省かれたるに就て。師の論れたる旨をば知らざるこそ。扨。「三大考に。現に仰ぎ奉る日即天

也」と云へるは。いと〳〵意得ぬ私言也」と云へれ共更に私言に非ず。種々證と爲べき事どもの有りて云へる公言なり。其の公言を私言と思ひ。意得がたく思へるは。負じ病といふ。難治の病を持たればなり。

この非言の出來つる本を尋ぬるに。三大考に云。「高天原は。虛空の上方に在りと見るは。一とわたりの事にて。誰も然思ふめれども。其高天原を所知看す。天照大御神は。今の現に虛空に見え給ふに。高天原と云ふべき物は更に見えず。又大御神は。大地を周りて。下の方へも至り坐すなれば。高天原上の方に在りと云ひがたし。たとひ高天原は。遠さが故に見えず。大御神は。御光の坐す故に。其の御形のみ見え給ふなりと云ふとも。地下に廻り賜ふをば。何とか云はむ。若しまた高天原は。異國にて云ふところの天の如く。大地を包みて。其の上下四方に周れりと云はむにも。彼の葦牙の如く萠上りて成れるにかなはず。然れば。如何考へ見ても。此の高天原の在處心得がたし。云々。

今辨云。この三大考の論。まことに然る言にて。少かも難むべき說なきを。論者のいふ所は。みな强說なり。其は次々に辨ふるを見るべし。

かく疑ひ思へる趣は。唯一とわたり。凡人の打見る所の。甚小く狹き事にして。奇しく妙なる神の御國の(高天原を云)神の御上をも慮りまつらざる稚言にぞ有りける。其は先高天原と云ふべき物。さらに見えずとて。甚訝しく思へれど。もと高天原とは。天の下一枚に高く頂く所にして。彼所ぞ高天原。こゝぞ高天原の終と云ふ處も無ればっ其と指ては云ふべくもあらず。唯日月の旋るところ。蒼々と見ゆる限り。卽高天原なりけり。然るは古言にも。天壁立極。天雲墜居向伏限など云へればっ今の如く蒼々と見ゆる處の。向伏て有るを。則ち天とは云へるなり。其をさらに見えずなど云て疑ふは。朴なる皇國の古へを慕ふと云ふものに非ず。小賢き今の世の人の漢心なりけり。熟く辨ふべし。

今辨云。天壁立極。天雲墜居向伏限。など云へる天は。何にも今の現に蒼々と見ゆる大空を云へるなれど。此は天地の初發のほどに。日の御國を天と云

人。高天原と云へるとは異にして。空を天と云へるなれば。やゝ後の言にて。大古の義に非ず。言の同じきを以て。混一に思ふは。學問の力の足ざればなり。さて大古に謂ゆる天は。葦牙の如く萠騰りて成れる物を云へるなる事。上に次々辨へたる如くなれば。其を知看すといふ。大御神の見え給ふに。其の住たまふ國の見えざる事は。有るまじき理なる故に。中庸が疑ひ考へたるは諸なる事なり。何に朴なるが善とて。疑ふべき事を疑はて有るべきかは。凡て世の生古學者ども。人が云へば言ふべき事と思ふにや。物の理を密に精く尋ぬるをも。小賢しと云ひ。漢意などいへども。然いふ輩。實の漢意と小賢とを何で知るべき。其は古を學ぶには。又古への如く。大らかには得有がたき事あれば。其を明らめずは。得有るまじき物なる故に。明らむるを。何で漢意といはむ。強て此を漢意と言むには。書を讀み學問する事も。古へにはなべて爲ざりし事なれば。此れをも小賢き漢意と云むか。また師の記傳を考へ著されたるをも。小賢き漢意の所爲と云はむか。扨「奇しく妙なる神の御國。神の御上をも慮りまつらざる稚言にぞありける。」と云へるは。吾れにはいたく長者にて。學問の叔父なる中庸に對ひて。甚も禮なき失言なりかし。

又日神の地下に周り玉ふも不審しく思へれど。そも天の向伏たる隨に周り玉ふなれば。日神天に坐すことは本より然り。撰者日を高天原に爲たらむには。地下に周る事不審しからずや。日の地を周ることとは不審く思ひ。高天原の大地を周ることは。いぶかしく思はぬこそ意得ね。其は神代より今に至るまで。高天原の動き旋るよし云へるは何にかは有る。然ばかり珍しき說を考へ出たりとも云ふべけれど。次々にも論ふが如く。其の證と引たること叶はず。又日と天と混雜したることも更に無ければ。私言なる事は明かなりかし。

今辨云。この件は殊に口利く言を巧て云へる故に。未しき人は。惑ふも有るべけれど。近く悟すべき事あり。其は論者。「日月の旋るところ。蒼々と見ゆる限り。即ち高天原なり。」と云へる。もし此の說の如くは。天稚日子が射上たりし矢の。高天原に坐す日神産靈大神の御許に到れるを。其の矢の到りし穴より。

返し下し給へるをば。何に解らむ。論者の說の如く。天つ日やがて大御神に坐むには。高天原は。必す日よりは下になくては。返矢の故事きこえざるに。日神の高天原より下に坐ますはいかに。若くは。神代には。高天原の上に坐しかど。後に下に降り給へりと云ふにや。さる傳への有るべくも非ず。かく迫たらむには。奇く妙なる理あり。と言ひ遁るゝより外に說あるべからず。さて中庸が「高天原を知し看す天照大御神は。今の現に虛空に見え賜ふに。高天原と云ふべき物は。更に見えずと云へるは。實は日神の地下に周り給ふを不審く思へるに非ず。天日を直に大御神としては。其大御神の地下に周り給ふまで能く見ゆるに。其の知し看す高天原の見えざるべき謂なし。」と高天原の在所を切に尋ねむとする心に。かく疑ひを起して考へたる由なり。然れば天つ日を高天原なりと考へ得たる上にては。大地を周る事を不審く思ふべき謂なく。其は元より。日の大地を周る事を不審みたるに非ざればなり。論者も。其意は飽まで察つらむを。强て言ひ破らむとして。利口に言を巧みたるは。憎むべき奸意なり。もし此の意を得知らずて云へるならむには。憐むべき不才なりかし。

さて。「高天原の動き旋るよし云へるは何にかはある。」と云へる是いと怯き難なり。其は日即ち高天原なると。中庸が委く考へたる如くにて。それ動き旋る事。日々に現に見る物を。など動き旋ると言はざらむ。書に見えざる事は得信まじとにや。然もあらば。漢字して記さゞる以前のことはみな信まじきか。又「日と天と混雜したること更に無ければ私言なり。」と云へれども。其は書に委く物記すことゝ成れるほどは。既に天と日とは別物と心得たる世なりしかばなり。又「其の證と引たると叶はず。」と云へれども皆よく當れり。其は叶はずと云ひて次々に辨じたるを。予がまた辨へ直すを見るべし。

玉の御柱に云。「天つ日は高く上に位を定めて。動き轉る事なく。地は元よりの儘に漂ひ旋り。月泉は地の底に成りて。もと地に屬て漂ひ旋れる物なるけにや。斷離れて後も。その如く地に屬て旋る事。今の現に見るが如し。」此はやゝ深く考へて打見るに。げにもと信らるゝやうなれど。彼の外國の說に因りて。推て古傳を然るさまに云ひなせる物

にて。定は强言なり。地は日を旋るなれば。高く上に位を定てとも云ひがたかるべし。さて漂蕩時とあるも。洲壤の漂ふなる事。上に云へるが如し。されど假に此の天地の漂ふことゝして云んにも。當時漂ひありしことにこそ有れ後まで係て。地は元よりのまゝに漂ひ旋り。」と云へるは强說ならずや。また天も本漂へりし地より萠上りし物なれば。此も泉の如く漂ふべきを。泉のみ地に屬て旋ること理り叶はず。

今辨云。この擧たる予が說は。外國の說に依て推て云ひなせるに非ず。古傳に本づき。今の現に正目に見つる實事に徵し考へて。云へる說なる事。眞柱の文に委く論へるが如し。然るを論者。外國人のみかかる事は知りて。皇國人は絕て思ひ得まじき事に思へるは心狹し。亦などてしか皇國人を劣めて。外國人をのみ勝れりと爲るやらむ。大倭心を人に進むる人の言とも覺えざるなり。凡て古學する輩。いさゝかも外國人の說に似るをば。忌惡ふ事なれども。其は外國より參來し事物をも。用ある事は取りて用ひしめ給ふべく。定め給へる神の道の本を。深く糺し明めざるによる頑心なり。能き序なれば論すべき事あり。其は天地に係れる大きなる事もて言ひたらむには。然る筋の事には疎き人にて。心得がてに爲べければ。近く己々が骸のことにて言はむに。皇國の古へは。人の骸を切り屠りて。腸の形狀を見明らむるなどの。むくつけき事は爲ざりしかば。心肝肺腸をも。只に波良和多と云ひ。伎母などのみ云ひて。其の狀はいかにとも。其の用は何なるぞとも知らで有りしを。山脇東洋と云ふ人。罪人の屍を割見て。其の形其の用をも辨じて。臟志と云ふ書を著はし。又賀川子玄子と云ふ人。產科の事をよく得て。年頃ためしたるに。兒の胎內に在るほどは。逆さまに在ることを知り得て。產論といふ書を著はし。委く其の事を記し置る後に。西洋なる國より。人體を委く分け見て。心はしか〳〵の狀にて。云々の用を爲し。肝は云々の狀にてしか〳〵の用を爲すと云ふ事。また兒の胎內に在るほどは。逆さまに在る事などをも。巨密に論ひ。圖をも書て曉したる書の渡り來れるに。彼の臟志。また產論に記せると同くて。委しきのみぞ異なりける。斯て今の醫の。心あるは。其の外國

の說をも用ひて。人體のわけを。なほ委くいふを。其は外國の說に因て。推て云ひなせる物にて。强言なりと云ひて宜からめや。此は目前に見むとすれば見らるゝ事の。近く小き事なる故に。誰も早く信用て疑ふまじきを。天地の旋などの事も。皇國人の朴ならむからに。深く道を尊む心より考へたらむには。始めの程こそ委くは物せざらめ。年久に勞きたらむには。何か思ひ得ずて在るべき。然して外國人の。其の筋の事記せる書をも讀て。よく古傳と今の現の實事に合せ考へて。違なき事の取用ふべき說を用ひて。なほ古傳を明むべき證とも爲さむに。其をいかで强事とは言はむ。予が眞柱に著はせる說を。外國の說に因りて。推て云ひなせる强言なりとおもへるは。猶いまだ古傳の旨を深く明らめ得ずて。肝稚さ故に。一向に外國の說に似るを惡ふ心の進むにぞ有りける。予なども若かりしほどは。然在しに思ひ比べて。然も有るべく思ひ給へらるゝ物から。心を平にして孰く思ひ辨ふへき事になむ。扨。地は日を旋るなれば。高く上に位を定めてとも云ひがたかるべし。」と云へるは。いまだ天地の旋りの狀を知らずて云へるなり。此は天象實義と云ふ書を著はして示すを待べし。さて大地は元よりの儘に。今も漂ひ旋るよし云へるを。强說なりと云へれども。今の現に實事に考ふるに。然有る物をいかで强說とは云はむ。然れど此も未天地の旋の狀を知らざる故の頑心なれば。今少し學問の力の進みたらむには。今の論ひを。吾が言ながら未しかりけりと思ひ辨ふべければ。論ひに反ばざるを。天も本漂へりし地より萠上りし物なれば。此も泉の如く漂ふべきを。泉のみ地に屬て旋ること理り叶はず。」と云へるは。予が說を强に言ひ腐さむと爲たる荒魂のすさびなり。其は天は本漂へりし大地より萠上りし物には有れど。何なる故由なるか。凡人なれば知らねども。今の現に見辨へたるには。夜見のみ地に屬き旋りて。天は旋らざる故に。旋らずと云へるなり。其を理に叶はずと思へばとて。何れに向ひて。如何とも難めがたき。產靈神の御所業なりかし。

さて高天原を日なりと云ふことの非說なる由は。神代より紛れなき歌詞にも。或は天走使。天離日など有る。凡て此れらの天を日としては。更に叶

はざるを以て悟るべきなり。猶云はゞ天の八重雲。天翔。天飛。天を覆へる。また神代紀に。天有二惡神一。名曰二天津甕星一云々。此等を以ても。衆星の係れる限り天なること彌々明なり。天香々背男など云ふ名も。天則日なりと云はゞ。香々背男はかの日の内に有るにや。いぶかし〳〵。撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命。この御名も。天を日としては解し難し。

今辨云。この並べ出たる天云々の天は。何にも大空を云へるにて。日の事には非ず。されど此は既く天の斷離れて後に歌へる歌。また語りたる言にて。其は阿米は元頂上に在りし故に。頂上を天と云へりし大古の言ならひの儘に歌ひつぎ語り繼し物なり。また阿米の在る方ゆゑ。空をも阿米と云へりと云はむも難なし。其は空を阿米と云ふに就て。其の阿米より降る物を。雨と云ふごと思はるゝをも對へ思ふべく。また倭と云ふは。一地の名なるを。大八島國を總ても夜麻登と云ふをも例と爲べし。さて神代紀に。經津主神。武甕槌神の御言に。天有二惡神一。名曰二天津甕星一。亦名天香々背男一とあるは。後に此國にて語り傳へたる時の語を以て。古へを語れるにて。例多かる事なり。然れば此も上なる。天走使天翔などの詞と同く。後の語り言にて。經津主神。武甕槌神の天に坐せる當時は。大空を天と云へりと云ふ證とは爲がたし。其は當時の言ならぬこと。古學に委からむ人は。名の趣と。亦の名をも擧たるを以ても悟るべきものなり。然るを。天の香々背男など云ふ名も。天即日なりと云はゞ。香々背男はかの日の内に有るにや。」と云へるは强言なり。其は人の世となりても。天云々と云ふ名は多かるを。此の論に據るときは。其をみな天に住ると云はむか。倩また大御神の。御自ら御名告坐る御名に。天疎日と係て詔へるは。凡て神の御言は。其の時々の言語のまに〳〵。御託し坐すこと常なれば。其の世に言ひ效へる枕言を置て。御名告坐ると知るべし。其は世々に御託し坐る。大御神の御言の多かるを考へ合せて悟るべし。皆その時々の語にて御誨し坐せり。

三大考には。凡て古言の叶はざるも論はず。かゝる神代の歌に。天則日なりとして叶はざることを捨置て。青山に日が隠らばと有る一句に窮したる

は。いと〳〵鳴呼がましき事になむ。

今辨云。こは予が眞柱のふみに辨へたれば。今は辨へざるなり。然るにても。「かゝる神代の歌に。天すなはち日なりと爲ては叶はざることを捨置て云々。いと〳〵をこがましき事になむ。」と云へるは黄口の失言也。中庸いかで是ばかりの事を思ひ洩すべき。此等の辨は彼の書に。「世の人日即天なりと云ふことを知らざるは。初めいまだ旋らざりしほど。天は頂上に在りし效ひにて。頂上を天と心得來れるから。旋る世に成て後も。なほ其の心にて。旋る物を日と云ひて。天とは別物の如く成れる也。」と云へるに準へて思ひ辨へらるゝ事なる故に。論ざりしなるべし。其は中庸のみならず。其の說を諾はれし師翁も。此ればかりの事は思ひ得給ひつゝも。其は論ずとも誰も思ひ得べき事として。三大考を正し閲給へる時。この事を云ひ漏すまじき由を。教へ給はざりしなるべし。然るに三大考は。師の訂正を經たる書なる事は。飽まで知ながら。いと〳〵鳴呼がましき事になむ。など云へるはいかに黄口の失言にあらずや。

玉の御柱に云く。「久方の天行月云々。また天原振放見れば度日の。陰も隱ろひ照月の。光りも見えず。」などやうに詠めるは誤りなり。」かく萬葉なる一二首を擧て。此は誤なりなど云るは。いと疎魯ならずや。何で神代よりの古言を細く論はざるぞ。古史傳とか云ふ書に。委曲に辨へたらむと。いと見ま欲くこそ。

今辨云。眞柱のふみに。萬葉集なる一二首を擧て。その誤れる由を記せるは。近き例を擧て餘を準へ知らしめむとの意にて。神代の歌などをも委く論ふ事は。古史傳に讓りて漏したりしなり。第一の圖の下に。多くは古史傳にゆづりて。此の書には其の大意をのみ云へり。と斷れるは此の故なり。然るを論者。「いと疎魯ならずや。」と云へるは失言ならずや。古史傳をいと見まほしくこそと云へる。然ばかり見ま欲くは。何て人に物問ふの禮を行ひて。直に問遣さざりけむ前にも。「古史傳と云ふ物を未だ見ざれば。とかく論ひ難けれど。ふと打見たるには云々。」と云て論ひたりしかど。人の說を云ひ破らむと爲る者の。なほ委き說ありと云ふ。其の委き說をも聞ず。ふと打見ていひ破ると云ふ事の有るべきかは。かゝる事を

こそ疎魯とは云へ。大凡世の學問する輩を見渉すに。善くも惡くも。其の師說をのみ守りて。他の說を信ず。また他に物問ふことを恥ぢ。又その師とある人は。我が言のみを聞しめむとして。敎へ子の中に他に物問ひ。他の說を諾ふやうの者あれば。甚く猜み惡みなどする。是大かたの世の學者の心なれども。甚も有るまじく拙き心なりける。其は人には各々得たる事と。得ざる事とあるを。其の己が得ざる事は。人の得たるに學ばしめ。弘く他の說をも學びとり。吾が言ばかりをな賴みそ。と敎へ立べき物なるに。然らざるは。然すがに己が力の足ざる事は知りて。他に見替られむ事を危ぶみ思ふと覺えたり。然れども其は云がひ無きことなり。など知ざる事は知らずと云ひ。得ざる事は得ずと云て。恥かしからぬ許に。知らでは得有るまじき事のやごと無きことを。一筋に力め學びて。他に見かへらるまじく極めざるらむ。然して我を信ずる者の少からむは。其は信ぜざる者の過にこそ有れ。吾が過に非ざるをや。予諸道に冠たる古道の學びを精窮して。この學の勤に於ては。人に讓るべくも覺えざる許に勤むる故に。歌文の事は知らずと云ひて。少かも恥と思はず。人の子が此の業に疎きを誹るなどをば。馬の耳に風吹く如く聞居るもこの故なり。吾が敎へ子どもの若き徒。よく此の旨を心得て。篤胤がほど辨へ知れる事とては。古道の故實よりほか無れば。餘りの瑣細しき事どもは。弘く他に學びてよ。また因になほ諭すべき事あり。其は玉がつまに記されたる。物まなびは其の道をよく擇びて入りそむべき事。と有る條に。「物學びに心ざしたらむには。まづ師を熟く擇びて。其の立てたるやう。敎への趣をよく考へて。從ひ初べきわざなり。智にぶき人は更にも云はず。素より智とき人と云へども。大かた始めに從ひそめたる方に。自から心は牽るゝわざにて。其の道の筋わろけれど。惡き事を得悟らず。又後には悟りながらも。年頃の習ひは。さすがに捨がたき業なるに。我といふ禍神さへ立そひて。左に右に强言して。猶その筋を資けむと爲るほどに。終によき事はえ物せで。生涯り非事のみ爲て身を終る類ひなど世に多し。かゝる類ひの人は。勉めて深く學べは學ぶまに〳〵。いよ〳〵惡き事のみ熾りに成りて。己惑へるのみならず。世の人を

さへに惑はす事ぞかし。返すがへす。始めより師をよく擇ぶべきわざになむ。」と言はれしを熟く讀て。余が說と行ともに。決めて善からぬ事の有るべければ。其はよく擇び捨て用ふまじく。心づける事の有らば。云ふべし。余を汝等に長なりとて。言ふべき事をな憚りそ。また用ふまじき事を勿用ひそよ。

又三大考に云。「記の神武天皇の段に。吾者爲日神之御子。向日而戰不良。とある。此れにて日と日神と別なる事を知るべし。日神とは日を所知看神と申す意にて。高天原を所知看神と申すに同じ云云。」此は何なる非言ぞ。日と云こと國の名ならば。高光日御子など有るはいかゞ解べきぞ。日御子と云ふことは有れど天御子と云ふことのなきを以て。日神も。天は國日は神なること明らけき物をや。日神御子と云むも同じ言なるを。聊か委く日神御子とは云へるなり。向日神と云はずして。向日と云へるは。常に唯打見て云ふ時は。日の神とは云はず。神代より日とのみ云へる例なるをや。さるを是れ等にて。日と日神と異なる事を知るべしとは可笑ともをかしき說なりけり。猶云はゞ。日の神とは日を所知看神なりと云はゞ。日照神なども云べき理りなるに。高光。天知。天照など云ふことは有りて。日知。日照など云こととの無きは如何。

今辨云。三大考の說いと明らかに。熟く辨へたる說なるを。論者のいふ所は。强に言ひ破らむと爲たる僻言なり。其は。「日と云ふこと國の名ならば。高光日御子など有るは。いかゞ解べきぞ云々。」と云へれども。此は高光日神御子と云ふ事ぞと直に解むに。なでふ事か有らむ。其は日の御子といふこと。宮簀比賣の歌。また吉野の國主等が歌を始め。歌には萬葉にも此れかれ見えたれども。古く常の語に言へることは見當らず。故考ふるに。歌はしらべを主とする物故に。此は日の神の御子とも。天神の御子とも。調べ合せ難き故に。比能美古と詠めるになむ有りける。然るを論者。かゝる謂を熟くも思はず。「日の御子と云ふことは有れど。天御子といふことは無きを以て。天は國。日は神なること明けき物をや。」と云へるは。笑ふべき强言なりける。其は日の御子と詠める所に。天の御子と詠ては。語あまりて調はざるをや。又「日の神の御子と云むも。日の御子と云はむ

も同じ言なり。」と云へるは然る言なれど。「聊か委く日神とは云るなり。」と云へるも違へり。其は日神御子と云ふは。正しき語の格りなるを。歌なるからに。調を合せむとして日子と云へるなれば。此は常の正しき言語の格を變たるにぞありける。然るを委く云へると。省きて云へるとの違のごとと思へるは未しきなり。又「向日神」と云はずして。向日と云へるは。常に唯打見て云ふ時は日神とは言はず。神代より日とのみ云る例なるをや。」と云へるもし此の說の如くは。爲日之御子向日而戰不良とか。爲日神之御子向日神而戰不良とか無くては叶はざる理りなるに。上に日神といひ。下に日とのみ云へるは。萬葉の歌に。「天の海月の船浮け桂梶。かけて榜ぐ見ゆ月人壯子」と云ひて。月と月神とを別たる類ひにて。日と日神とを別たる語なること炳し。然れば論者の說は曲解にて。三大考の說は正解なり。其の正解を正解と思はず。をかしとも可笑。と云へるは。萬づの物みな曲りて見ゆる病を持たる人の。直き物を見て。曲れりと笑ふ類なりかし。又「日神とは日を所知食神なりと云はど。日照神なども云べき理なるに。

高光。天知。天照なぞと云ことはありて。日知。日照など云ふことの無はいかに。」と云へる。此は殊に愚昧の論なり。其はまづ高天原を天と云ひ。日と云ふに就て。心得おくべき說あり。其は天の御國にて。其の御國を天とは云へども。日とは云はず。此の國土にては。日とも天ともいふ。其の差別を考ふるに。天と云ふ名は本よりの名なる故に。天の御國にても。此の國土にても云へるなれど。日と云ふは。本より の名には非ず。此の國土より見上れば。火に見ゆる故にいへる稱なれば。此の國土にては云へども。天の御國にて言はざる事は。然あるべき理りなり。斯在ば本つ名を以て。天照。天知と云言は云ふとも。日照す。日知るなど云ふ言は。古へには言ふまじき理りなりかし。「日知る日照すなど云ことの無きは如何。」と問はど。中庸もかく答へむとぞ思ふ。

又玉の御柱に云。「日即天なる事は。天照大御神は天に座ますを。日神と申すにて知るべく。また神武天皇の御兄。彥五瀨命の御言に。吾者爲日神之御子向日而戰不良と宣へるに依て考るに。天皇を天神の御子と稱すは常なるに。此の御言に日

神之御子と宣へるにて。天即日なる事を思ひ定むべし。「こゝに天神の御子として。日に向ィ戰ふこと不レ良と有むには。天と日と一つなりとも云ふべきを。却りて日神と有るを以て。天即日なることを思ひ定めよとは反對の說なり」何でかゝる言を以て思ひ定むる人のあらむ。可レ笑。こゝにしも天津神の御子とはなくて。慥に日神之御子と有るを以て。日即ち大御神と云ことを思ひ定むべき也。

今辨云。予が眞柱のふみに。五瀨命の御言を引きて。天皇を天神の御子と稱すは常なるに。此の御言に日神之御子と宣へるにて。天即日なる事を思ひ定むべしと云へるは。傍の例を引合せて心得させむと爲たる文例にて。天皇を天神之御子と云ふを。またかく日神之御子とも申すを以て。天と日と同じ物なる事を知れと敎へたるなり。然るを論者。こゝに天神の御子として。日に向ひて戰ふ事不レ良とあらむには。天と日と一つなりとも云ふべきを。却りて日神と有るを以て。天即日なることを思ひ定めよとは反對の說なり。」と云へるは。何てかく考徵の學に疎きや。凡て彼を擧て此れを徵すの學法は。其の異同ある所に眼を著て。相對するを以て其の異なるを知り。相反するを以て其の同じきを知る。これ常の事なるを。や。「いかでかゝる言を以て。思ひ定むる人のあらむ」と云へれども。心直く心さとき人は。皆思ひ定めて有るを。思ひ定めざるは。心遲く心直からぬ人か。さらぬは身の丈の矮きを思はず。爪立て見えぬ所は。口あきなどして。丈高き人と並ばむ事を思ふ輩のみなり。此を可笑と言はゞ。何ほども笑へと言まし。笑はざれば道と爲るに足らず。とは漢人も言へりき。

同書に云。「天とは即日のこと。夜見とは即月の事なるを。世人さしも思はざるは。考へにも云へる如く。其のいまだ斷離れざりし頃は。阿米は頂上に有り。夜見は下の方に在りし效ひにて。頂上を天と心得。夜見國は。地下に在りと心得來れるから。斷離れて後も。猶その心にて。現に見ゆる物をば比と云ひ都伎といひて。阿米夜見とは。別物の如くなれるなり。云々。」これいと理りなき說なり。天と云ふ物斷離れざるほどは。恒も頂上に見えけむを。其れ現に斷離れて旋りゆかむを。世人見ながら。何て木の如く頂上に在りとは思はむ。扨その

かみ見えざりし黄泉と云ふ物。初めて見えたらむも。聊けごとならねば。必ず其の傳への有るべきものをや。又天と云ふ物日ならむには。虚空に二つ無く紛るゝことなき物なるを。何て別物の如く誤る事の有らむ。されば本天の萠上りて成れる物ならむには。斷離れたる傳も有るべく。また其れ即日ならむには。旋り初し傳も必ず有るべきに。さる傳のなきは。初めに云へる如く。天の萠上りし物なりと云ふも誤り。其れ即日なりと云はもとより誤りにて。天は成りし初の傳も。成竟たる傳もなきなり。萠上りし物は。鈴木朗主の說の如く。必ず神に成べき料の物と聞えたるをや。

今辨云。こは三大考の說によりて。其儘に傚ひ記したるなるが。世に弘めて後に思へば。云ひざま惡かりけり。と悔る物から。爲すべ無りしを。此は女牛に腹を突れたらむも。斯やと思ふ心ちぞする。其は此の文。其のいまだ斷離れざりし頃は。阿米は頂上にあり。夜見は下の方に在りしかば。斷離れて後も。其上いひ習へるまゝに。頂上を天と云ひ。夜見國は地の下に在りと云ひ習ひて。現に見ゆる物をば。日といひ月と云ひて。阿米夜見とは別物の如く誤り來つるなり。と云ふべかりしを。いと惜き事なり。「さて天と云ふ物日ならむには。虚空に二つなく紛るゝことなき物なるを。何で別物のごとく誤ることの有む。」と云へるは。己が思ふ儘の理りを云へるなれど。此は眞柱にも云ひ。上にも次々云へる如く。誤り來れるを如何せむ。また天と夜見の斷離れたる傳への無き事を。不審み思へれど。是ぞ素朴なる神代の風なるを。いかにせむ。此の餘にもやごと無き事の。傳はらでは得有まじき事の漏たるがいと多かるをや。然れば其の漏たる事は。よく總ての事實を照し合せ考へて。悟るより外なき事ぞかし。さて天の萠上りし物なりと云ふをも。天即日なりと云ふをも。誤りと云へるは。共に大じき僻說なる由は。上に既に云へりき。また鈴木朗が說。古今未曾有の大惡說なり。其は上に次々辨へたるを見て知れ。

さて又天と云は。國土一枚に頂く所にし有れば。かの外國にて見明めたる如く。地球圓き物ならば。天も又圓く地を包める物なるべし。前に引る三大考に。「若し又天は異國に云ふ所の天の如く。大地

を包みて。上下四方に周れりと云はむにも。葦牙の如く萌騰りて成れるに叶はず云々。」と云へる。是れ天を葦牙の如き物の萌上りて成れる物と見たるより出來たる非說也。押並て頂く所天なることは。古傳に慥に見えて。かの蒼々と見ゆる限り。衆星の係れる限り。天なれば。自ら圓く地を包めるなるべし。故れ日神も圓き天を一旋りして。圓き地をのこる所無く知看すは。深き神の御思慮なるべし。

今辨云。この論者古書を解に。外國の說に似たる事を甚く惡ふ由なるが。地球といふ稱は。外國にて云へる稱なるに。其を用ひ。大地は圓く天は地を包める物ぞと云ふ說を用ひたるは。此は爭ひかねたるにこそ。此の爭ひ難き事を知りたらむには。今少し我意を止め。勤學びてば。日即天にて動かず旋らず。大地は日の下方につきて旋り漂ひ。月は地に屬て旋る物なる由をも悟りなむものぞ。さて三大考の說を非說と云へれども。非說に非ず。論者の說の非說なる事。また押並べて頂く所の。衆星係る所を天と云へるは。稍後の誤りにて。太古の義に非ざる事も。上に既に辨へたるが如し。扨日は動かず旋らず。大地の旋るなるを。然は知らて。日の旋るとしも思ふは。其の身の小さき物なる事を顧ざるにて。譬へば茶立虫の。己が住居る明障子を人の手して。遣みぞを通はすとは知らて。見はるかしたる桁梁などの。動き旋ると思ひたらむが如し。

さて天の成初し傳はなきぞと云ふを。人はあかぬことに思ふめれど。是ぞ不足ことなく。朴なる皇國の古の傳なるべく茂岡は思ふ也。天のみならず。潮の出來たる初の傳もなき也。唯この國土の潮の中に漂ひ育つるを。固め成し生成して。遠く長く國土となし玉へるを初として。語り傳たる也けり。如是みる時は。古事記。書紀にも疑ふ節なく。安く聞ゆる物をや。書紀にも。是の時天地相去未レ遠とあるは。不審きやうなれど。天の出來たるも。其の頃には未だ近きことなるべく。然ならむには。漸に放りゆく理もあるべきなり。

今辨云。天の成初めし事は。古事記また書紀の傳々に。いと明かに傳はれるを。我意の進みに見紛へたるなること。上に辨へたるが如し。さて。潮の出來

たる初の傳へもなし。」と云へれど。かの初發に生出たる一物。やがて潮に天と成べき物と。國土になるべき淫と。月夜見と成べき物と混りて生れる物なれば。潮の初の傳へなしとは云ふべからず。其は古事記に。二柱の神の彼の一の物を攪たまへる事を。鹽許袁呂許袁呂邇畫鳴而。引上時。自其矛末垂落之鹽。累積成嶋。とあるもて知るべし。偖論者の言に。「唯この國土の。潮の中に漂ひありつるを。固め成し生成て。遠く長く國土となし玉へるを初めとして。語り傳へたる也けり。」と云へるは。いとも奸ましき言狀なり。其は元より在りつる國土を。固め成し給へりと云はむには。生成たまへりと云ふは非なり。生成したまへりと云はむには。元より在りし國土を。固め成し給へりといふは非なり。然るをかく云へるは。國土は元より在りつる物と云ふ說を立は立ながら。國生坐りといふ傳へを。寓言ぞとは言放ちがたき故に。かく言を左右によせて。己が說をたて。扨國生坐るとある傳にも。背かぬ狀に聞ゆべく。「固め成し生成して云々。」と書る物也。故奸ましき言狀なりとは云ふなり。此は前にも。「國土は二柱神の生成し玉へりしものにはあれども。其の成りたる國土は。本漂へりし物の堅まりし也。如此云ふを。稚々の學者奇しむことなかれ。深き故ある事ぞ。」と云へる所に辨へたる說をも思ひ合すべし。「深き故ある事。」といへる。其の深き故とは。決めて二柱神の。國生坐る傳へを。經營のことに說き曲たる說なる故に。かく言を左右におぼめかしたるなり。書紀に。天地相去未遠。とあるにても。記傳。三大考。また予が眞柱の說の正しき事は知らるゝを。不審く思へるは。邪說を立たる故なりかし。

天説辨々下巻

平田篤胤辨

天説辨云く。又かの日と云ふ物。唯に天照大御神と仰ぎ見奉るべく。さて事もなけれど。三大考の疑をはらさむ爲に。聊か神の御上の同例どもを以て云むには。先づ現に見放くるところの日を。大御神也と云むは。今の現の火を即ち迦具都知神と云むが如し。本より然云て違へるに非ず。されど日を大御神の現御身に引當て不審しく思ふは。現の火を見て。かの祖神に斬れ玉ひし現御身に當ていぶかるが如し。迦具都知神も生れ玉へる時に。御陰見レ炙とあれば。則ち火の如くも聞ゆ。眞柱に。「生レ火とある火は。やがて火産靈神の事にて。此の神の御體のやがて火にて坐ましけむも知るべからず。」と云へるは。此の差別をいまだ慥に思ひ得ざるが故なり。

今辨云。こゝの論ひも。又おぼめかしたる言狀なり。實に雄々しく此の論ひを立むと思はゞ。「現に見放る所の日やがて大御神に坐ことは。今の現の火やがて迦具都知神なるが如し。然るに日やがて大御神に坐ことを不審く思ふは。現の火を迦具都知神ぞと云ふを。彼祖神に斬られ給ひしとある事實に思ひ合せて。火と迦具土神とは別ならむと不審るが如し。」とやうに言放つべきものなるを。「現に見放る日を大御神なりと云むは。今の現の火を。すなはち迦具都知神と云むが如し。」といひ。御陰見レ炙とあれば。火の如くも聞ゆ。」と云へるは。自も實に然りとは思はぬ物から。姑く試に云へる文法にて。人の疑を晴さむ爲にとて言ひ出たるに。似合ざる言也。其は「云はむは」といひ。「云はむがことし」と云へるは。言ひ放ちかねたる言なり。また。「本より然云ひて違へるに非ず」と云ひ。「火の如くも聞ゆ。」と云へる言も。猶いまだ決せざる言なればなり。是みな己も信ずること能はざる僻説を。人に誣むとする故に。かく文なし云ひて。人の心目を誑惑せむと爲たる物なり。かくて予が説を。「いまだ慥に思ひ得ざる故なり。」と云へるは。自は慥に思ひ得たりとの言なるを。然も有らばなど。「火の如くも聞ゆ。」など慥ならざる狀に言へる

やらむ。

大御神と生れまし玉へる時に。此の御子光華明彩。照徹於六合之內とあれば。今の現の日の如く聞ゆ。又須佐之男命の御荒びの時は。御裝のことも世の常の御體と聞ゆ。火神の斬られ玉へる段の如し。大かた此れ等を以て押量り奉るべし。水神罔象神なども同じ。神武紀に。火名爲嚴香來雷。水名爲嚴罔象女とあれば。則ち現の水火を香來雷罔象女と云て違へるに非ずと云也。されば現に見奉る所の日。いかほど大なる物にても。圓く見えても。角に見えても。現御身に當て奇しむ事勿れ。

今辨云。こゝの論も。また人の心目を誑惑せむと爲る文なり。其は論者の說を立むと思はゞ。大御神の生坐る所に。此の御子光華明彩。照徹於六合之內とあれば。今の現の日に坐ますこと炳焉を。また須佐之男命の御荒の所の。御裝の事を思へば。尋常の御體に坐せり云々。」と云ふべきを。「日の如く聞ゆ」といひ。「世の常の御體ときこゆ。」とおぼめかし言へるは。人の心目を誑惑せむと爲たるにて。實は自も強說なることは知れる故に言ひ放ちかねたるなり。

さて大御神の光華明彩。照徹六合之內とあるは。其の御形日の如く坐しと云には非ず。唯その御體の明彩く光り坐る由なり。然るを火神の御體の。火なりけむと所思るに合せて。大御神の御體やがて日にて。「現に見奉る日。いかほど大きなるものにても。圓く見えても角に見えても。現御身に當て奇むことなかれ。」と云へるは。己れのみ心と云ふ物の有りて。人には心のなき物と思ひ上れる狀の誣言にて。僅に文字を數ふる事を知れるばかりの。弱者の言とは覺えぬばかりの慢言なり。さて神武天皇紀に。火名爲嚴香來雷。水名爲嚴罔象女とあるは。此の時は殊更に。火水を清むべき神事を行ひ給ふ時なる故に。姑くかく名爲たる由にこそ有れ。火やがて迦具土神。水やがて彌都波能賣神なり。と云ふ徵と爲べき事には非ずなむ。其は名爲の字を用ひられたるを以て知るべし。上に。「三大考の疑ひをはらさむために。聊か神の御上の同例どもを以て云はむ。」など物々しく言へるは。遇に此の神武天皇紀の文を見得たるより。思ひ著たりと聞ゆるに。謂ゆる杓子定規なるは。いと傍いた

しや
鳥石楠船神の段に。古事記傳に。「こは船をさして申すか。されど正しき神とも聞ゆ。云々。」といとたど／＼しく云れたる。誠にたど／＼しく聞ゆる也。されどこも。火神水神などの例を以て押量り奉れば。此の神に限りて奇しきことはなくなむ。神代紀の一書に。次生ニ鳥磐櫲樟船一。輒以ニ此船一載ニ蛭兒一。順流放棄とある。これ舟を唯に云へる也古事記に葦船とあるも。即ち鳥磐楠船神也。葦にて作れるにても。楠にて造れるにても。海上を物を持運ぶ所。即ち神なればなり。

今辨云。これまた杓子定規の說にて。當らぬ引證なるが。古事記なる鳥之石楠船神。また書紀に。生ニ鳥磐櫲樟船一云々。と有るなどの事は。委く予が古史徵に論へり。かゝる未しき輩の。かつても知らざる事なりかし。但し。「古事記に葦船とあるも。即ち鳥磐楠船神也。」とは寢言には非ざるか。其は葦船を。磐楠船神とはいかで言む。さて。「葦にて作れるにても。楠にて作れるにても。海上をものを持運ぶ所。すなはち神なればなり。」と云へるは。古事記傳三の卷に。神と云ふ物のことを委く說れし趣を取て。己が說と爲たるなれど。此は祖師とする人の說なれば。然も有るべき事なれども。此の說を我物がほに盜して。石楠船神の下に言れし說を。たど／＼しなど。見下したる狀にいへるは。惡むべき事なり。

天地のことは。初より論へる趣にて明かなり。泉と云ふ所何處ぞと云に。此も鈴木朗主の說の如く。地中なるべくぞ思はるゝ。地中を黃泉國なりと云ふを。人は奇しむべけれど。海中に海津宮ありて。桂の木もあり井もあり。宮は本よりにて。傳へたる趣。此の國に異なることなし。地中なる黃泉國も然り。こも委く論はまほしけれど。いと事長ければ略きつ。さるは此たび。この天地のこと。かつ／＼思ひよれることを早く書とりて。朗主の。三大考の說をむげに承引れざることを悅ぼひて。もしは一つ二つ。かの主の己が說をうけひかれむこともあらむかとて贈るになむ。

文化十三年九月　　小林茂岳

今辨云。夜見國は地中なりといふ說は。鈴木朗またこの論者のみならず。此書を諸ひて穩なる說ぞと譽

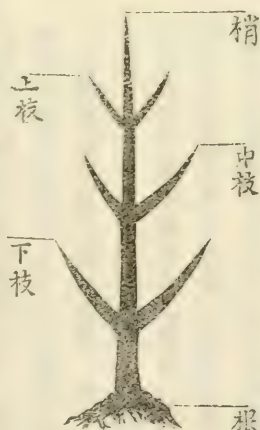
たる。太平なども此の說にて。往し年或る人の許にて。太平の自ら書る圖を見たるに。泉を地中に圖たりき。なほ其の外にも。此彼あれども皆非なり。此は先つ年。夏目甕麿が許より。靈の眞柱の。いまだ板に成竟ざるほどに。見まほしき由にて。黃泉考と云ふ物を著はせる由をもいひ遣せたるを。其の趣向は。夜見國を地の胎中なりとせる由なりしかば。眞柱の上卷を贈る序に。夜見を地の胎中としては。根國。底國。根之堅洲國などあるに。差支まじきか。と言やりしかば。其の返り事に。

夜見國を地の胎中なりとしては。根國底國根之堅洲國と云に。差つかひ有りと候へども。常に地下とさす所は。地の中心を。根とし底として云ふ詞にて。中心すなはち根也底也 大祓詞に。持可々吞氐やらひ給ふとあるも。蒼海の吞所より。地胎の內へやらひ給ふなり。古書に。夜見國の成始めのことの無きは。元この大地と一つ物にて。たとへば人の產るれば。胎內は其の體の中にあれば。別に產ると云ふことも無が如し。月夜見尊は。須佐之男命の。月國を知りたまへる御靈の神の名にて。須佐之男命と申す。御名の現身は。夜見國に坐なり。夜見はすなはち地の胎中に在り。月國の事には非ず。黃泉考いまだ片成にて。差上がたく候故に。其の趣を申上候なり。さて靈の眞柱に。古傳曰。次於下其如浮雲漂在物之根上亦生一物矣。因其物所成坐神之御名國之底立神云々。此の傳の如くは。少子黃泉考の說をすてゝ。御說に從ひ申度候。はやく下卷を拜見いたし度候。右の古傳何によりて參考したまへるか。いまだ思ひ得はべらず。書紀の一書に。天地初判。有物若葦牙。生於空中。因此化神號天常立尊。次可美葦牙彥舅尊。又有物若浮膏生於空中。因此化神國常立尊とあるは。天と地と。二つにわかれたる上にて傳へたる文意なり。漂在物之根亦生一物矣といふ參考の傳。もし此一書に依たまへるならば。事違ふべし。然るは又有物若浮膏生於空中とあるは。夜見國には非ず。やがて此の大地のことなればなり。また國常立尊を。書紀の一書に。たゞ一と所に。國底立とあるに依りて。天底立。國底立と。上下に別ちて。國底立尊を。夜見國の神と爲たまへる

は。いさゝか誣たるが如くにて。いまだ信用し侍らず。されど隱身の御說。甚妙にして。いかに考へても。破り試みる事能はず。

と難おこせたるに。其の答へを記したりしかど。眞柱の下卷を見たらむには。準へ悟るべく思ひて。其の答は贈らず。眞柱の下卷のみを贈りて。其の後も便につけて。眞柱に訝しき節はなきか。と問やりけるに。感伏へる由にて。一と事も問おこさざれば。彼の黃泉考の說は。捨つるならむと思へるに。此間この天說辨をおこせて。其の後の便りに。

天說辨の御答論。御きかせ可被下候。天說は大むね愚意に似たり。黃泉考いまだ淸書いたさず。押込おき候。とり出候て。御難うけたまはり度候。

と言おこせたれば。彼の黃泉考は。いまだ捨ずて有りけり。故その答へをこゝに記してむ。其はまづ凡て。夜見國を地中に在りと云ふ說は。此の國土に居て。己が身の小さきを思はず。想像れる說なり故に。「常に地下と指す所は。地の中心を根とし底として云ふ詞にて。中心すなはち根なり底なり。」と云へるなり。然れども。此はいと小さき思慮なりかし。神代の故實を考ふるに。然ちひさく思ひおきてゝ有るべきものかは。甚も可畏き申しすぎに似たれども。姑く造化の首を爲たまへる。三柱神の御上より。見坐しけむ心になりて。考へずは。眞の旨を悟り得まじき物ぞ。其はこの國土を暫く離れて。大虛空に翔り。此の國土を側より見たらむ心になりて考ふべし。いかで國土の中心を根とは言はむ。今假に圖を著はしてたとへば。大きなる木の。かゝる狀なるを。梢

より云ふときは。上枝。中枝。下枝。根ともに下とも根とも云ふべけれど。其は梢よりこそ然言はめ。此の木を遠く放ちて側より見たらむには。いかで上中下枝を根とは言はむ。實の下。實の根は。いづこならむ孰思ふべし。三大考。また予が眞柱に記せる夜見國の說は。この木を側より見て。其の根をさして根といへる如くにして。此も圖に著して譬

へば此を側より見て。眞の根を根と云へるなるを。大地の中心に在と云說は○印の處に座して。眞の根を知らず。◉印の處を。根と心得たるが如き說になも有る。扨大祓詞に。「持可々呑氐やらひ給ふとあるも。蒼海の呑門より。地胎の內へやらひ給ふなり。」と云へる事當らず。然るは彼の詞に。速開都比咩止云神。持可々呑氐武とあるは。咀て地胎の內へ呑納むるやうの事にて。呑門に在るほどを言ふに非ず。その地胎內をやがて根國底國と見るときは。次の文に。如此可々呑氐波。氣吹戸主止云神。根國底國爾氣吹放氐武。とあるをいかにとか言はむ。これ呑納めたる地胎內の外に。一と處いぶき放ちやる。根國といふ處あるの謂にあらずや。然るを甕麻呂が說は。可々呑氐武とあるを。咀て呑門のあたりに在るを云へると見。その氣吹放つとあるを。胎內へ呑納めたるを云ふと見たる說なれども。然る事ならむには。いかで氣吹放つとは云ふべき。氣吹放つとは。人ならむには。口にまれ尻にまれ。其所より放ち出すをいふ

○地◉根

言なるをや。又甕麻呂が說の如くは。其の地胎內へ呑納めたるを。直にその地胎內にてやらふとにや。さては。氣吹放といひ。持佐須良比失ふと有るなどをば。如何とも解くべきやう無し。人體によそへて說るに因りていはゞ。しか胎內へ呑納れたるまゝにて。外へ氣吹き放たずは。結祕腹滿たへ難からむとぞ思ふ。實は持可々呑とは。地胎內へ呑いれたるを云ひて。人の飲食を呑入れて。腹內へ納めたるが如く。氣吹放つとは。その地胎內へ呑入れたるを。根國へ放ち遣るを云ひて。此も人の腹內へ呑入たる物を。廁にへり出すと同じ趣にて。理もまた同じきを思ふべし。さて月夜見命は。須佐之男命の月國を知りたまへる御靈の名にて云々。といふ說は。夜見國を地胎內としては。月夜見命。須佐之男命と。同神なるにさし支ある故に云ひ出たる。無稽の說の如く聞ゆ。謂ゆる其の說を求めて得ず。したがひて此れが辨を作れるには非ざるか。其の據は覺束なくなむ。さて靈の眞柱に。夜見國の初發の事を。次於下其如ニ浮雲一漂在物之根亦生ニ一物一矣。因ニ其物一所成坐神之御名。國之底立神云々と記せるは。いかにも甕丸が

云へる。書紀の一書によりて記せり。故ては右史徵に記せる問答の文を。其の儘に記し出て示すべし。○問曰第三。月夜見成初の段に。次於其如浮雲漂在物之根亦一物生矣。因其物而云々と記出たれど。此は古事記。また書紀の一書どもにも。かつて見ざる文なるを。何によりて記るやらむ。甚いぶかしき事なり。答て曰。この發端の文は。神代紀七代の段第六の一書に。天地初判有物若葦牙生於空中。因此化神號天常立尊。次可美葦牙彥舅尊。又有物若浮膏生於空中。因此化神號國常立尊。とある傳へに依りて記るなれば。まづ此の文義を辨ふべし。其は此の傳に。天地初判と云へるは。天と地とになるべき彼の一つの物の混成て。浮雲の如く漂在が判るゝ初めを云へるにて。有物若葦牙生於空中とは。その漂へる物の中より。狀葦牙の如き物の生れる由なり。（さて此の物は、天となれる物なること、其れに因りて成坐る神の名にて明らかなるに、泥て師の考ありて殊に灼然し。）また又有物若浮膏。生於空中とは。かの混成て漂在物の中より。葦牙の如き物とは別に。浮膏の如き物の生たる由なり。其は何處に生れると云ふに。漂へる物の根底に生れり。其はこれに因て生り坐る神名を。國常立（國の底立といふと、義異なる事なし。）と申すにて論ひなし。但し文に。生於空中とあるを以て。予が根底に生れると云ふを。怪み思ふも有べけれど。かの漂へる物は。大虚空の正中にまづ生りて。さて葦牙の如き物は。その上つ方に生り。浮膏の如き物は。その底の方に生て。たゞ上と底との違こそあれ。側より空中を見たる心になりて云ふときは。上下ともに空中なる故に。生於空中とは語り傳へたる物なり。（然るを記傳に、此の一書を引て、此に葦牙の如くなる物に因りて成坐る神は天常立、浮膏の如くなる物に因て成坐る神は國常立と申すを以て、天地と分れたる事を知るべし、但し此には、浮膏の如くなる物と、葦牙の如くなる物と、本より別に生れる趣に云へるは。少か異なる傳なり、されど天と地との分れたる事は、此の傳へにて殊に著明く聞えたりと云ひて、その浮膏の如くなる物は、漂へる物の根底に生れるとの傳なる事を云れざりしは、浮膏の譬は、古事記にては、彼の一つの物の漂へる狀を譬へたる

故に、ふと其の方にのみ心ひかれ給へるなりけり。」その浮脂の如き物の。國土と成べき一の物にし。根底に生れることは。其れに因て生坐る神の名を。國常立といひて。天の底に生坐る神の名を。天之常立と申すに相對ひたるを以て思ひ定むべし。然もあらば。など本のまゝに。若二浮膏一とある譬をも記さゞると云ふも有べけれど。其は前にも云へる如く。形狀ある物に譬へては。心得誤まる事ある故に。その意を得て。廣く一つの物と記るなり。師說の如く。また三大考に圖る座位の如くならむには。いかで國之底立といはむ。（眞柱に圖る座位を見て曉るべし、）猶言はゞ古事記に。隱レ身也といふことゝ。天之常立神の下にありて。また國之常立神。豐雲野神の下にも有り。こは宇比地邇神以下の神等と。界を隔たるにて。天之常立神以上は別天神。國之常立神。豐雲野神二柱は。底國に生坐るにて。共にこの顯國より。その御形の見えまさぬ神ゆゑに。この顯國に生坐る。宇比地邇神以下と。別に坐ましを慥に語り傳へたるもの也。また伊邪那岐命の夜見國へ往坐る段に。黃泉神といふ神あり。此は師の翁もその成り初めを傳へなきを

疑はれたれど。予が此の考へに據るときは。其の初めの詳なるに非ずや。五柱の天神を。別天神と申すに準へば。國之常立豐雲野二柱の神は。別泉神とも申すべくなむ。（なほ古史傳に云へる說どもを見て知るべし。）かく考へ集めて。此の段の發端の文は。甚く明かに見別つべく作るなり。○以上は古史徵に記せる趣也。さて甕麻呂が難問に。國常立尊を書紀の一書に。たゞ一と所に國底立とあるに依りて。天底立。國底立と上下に別ちて。國底立尊を。夜見國の神と爲たるを。誣たるが如しと云へれども。一と所に有りとも。徵と爲べきこと有り。若干所に有りとも。徵と爲かたき事のあるは。古學の常なるをや。かくて隱身の說。甚だ妙にして。いかに考へても。いまだ破り試むることも能はず。と云へる。この說を破ること能はざる限りは。夜見國の說も。かつて破り得まじくなむ。また天說は大むね愚意に似たり。といへる言。いと〳〵訝し。其は此の人。眞柱のいまだ彫竟ざるほどに。甚く望みて。見まほしきよしいひ遣せたる故に。此の人の許へは。殊に早く見せたるに。感服したる由にて。其の後もをりふし消息とり

かはすに。外に天說ありとは言おこさず。然れば其はこの頃。この天說辨を見て。思ひつける闇合の說に非ざるか。然云ふゆゑは。もし實に元より其の說の有りしならば。眞柱をいち速く見たき由をいひて。見たる後に。余が說よりは外に。說はなきかと言ひやれるに。都に其の事をいひ遣さゞるべき謂なく。また此の人は。少ばかりの片成なる考へをも。よく人に見する人なればなり。此の頃の古學者には。とかく人の說を先見せまほしがりて。其の說によりて。吾が說を潤色せむとし。或は闇合默契など云はまほしくする人多し。甕麻呂は先頃の消息に。其の國邊の學者に。才識學者多しと評して。其の故は。人の說をきゝて。而にはナルホド〳〵と云て。心には云ひ破らむとするが多し。と云ひ遣せたる事もあれば。自らはさることの有まじと思へば。いと不審しく心得がたき事なり。假令その說。實に元より有りしにもあれ。この天說辨と同じ趣ならむには。見るに足らず。元より予は近頃の古學者たちの。少かなる疲考を。見まほしくは思はざる性なりかし。○さて論者茂岳が言に。「黃泉國の事も。委く論はまほしけれど。いと事長ければ略きつ。」と云へる。其の說を聞ざれども。予いま斷じて言はむ。かゝる怯き學問の力にて。何ばかりの考說かあらむ。其れもし世に出たらむには。一棒にうち碎かれて。散失するばかりの說ならむかし。

○是より以下は。天說辨の附錄に。予が眞柱の說を破らむとして。言へる說共なれば。事の因に辨へつ。

茂岳曰。玉の御柱の中に。古傳曰とて擧たる。鎭火祭の詞も。己がさかしらに。此彼新たに文のさまを革めたりと見え。違へる所あり。如此ばかり己が心に任せて物すとならば。いかなる僻說にてもいはるべき也。先かの鎭火祭の祝詞には。火結神生給氐。美保止被燒氐。石隱坐氐云々。又吾波下津國乎所知牟止申氐。石隱給氐。與美津枚坂爾至坐氐。云々とあるも。石隱坐とは。黃泉國に幸坐を云ふことゝ聞えたるを。ここに爲レ將レ生ニ火産靈神一而石隱坐而云々と文をかへて。さて石隱を。唯此國にて御身を忍び玉ふ事とせるはいかにぞや。此の國にてのことならむには。唯に忍而などこそあるべけれ。石隱

とあるは。八十坰手に隱り坐など云も同じこと
にて。必ず黄泉國に罷り坐るを云ること灼然き
ものをや。さて上に云るごとく。火結神生給氏。
御陰被燒氏石隱氏云々とありてこそ。理も聞え
たれ。為レ将レ生二火産靈神一而石隱坐而としては。
反て理なく毀へるもの也。かくまで古傳を己が
意に任せて選たる。古史と云書思ひやられたり。
今辨云。予古事記書紀のあるに。其を不足として。
新に古史を選べるに。世の心おそく心直からぬ輩。
また學問の眼高からぬ輩の。古史に作る文の本書に
違へるを見て。己が心に任せたる所為よなど。云べ
き事を知らで有べく思へるにや。其はとく知れる故
にこそ。古史徴のふみは著せるなれ。など眞柱の末
に附たる書目に。古史徴といふを擧て。其下に記せ
る趣を見ざりけむ。よくその趣を心得おきて。徴の
ふみを讀み。さて後に破り試たく思はむには。左も
右も云べきを。然る調もなく。立向ひたるは甚をこ
なり。物知らむ人の見ば。目しひたる法師の。蛇に
恐ざりし例をも引出べきものぞ。然るは凡て史を撰
ぶの法は。古書の各々某々に。詳にもまた略きても
記し傳へたるを。見集め子細に採摭ひて。紛れを去
り。正しき事實を撰び採りて。其を一連に見通すべ
く次序づるもの故に。本書のまゝには記し難く。文
をも革めずては。體裁を為さゞる故に。自らに一體
の文に作ずは。得有まじき物なり。和漢古今撰史の
法は然るものにて。司馬遷が史記を撰べる。太安萬
侶朝臣の。古事記を撰まれたる。舎人親王の書紀を
撰び給へるも。皆しか為て一書となしたる物也。然
るを論者は。古事記書紀も。元より今の文のまゝな
る。古書のみを採摭ひたるものと思へるにや。いと
も頑愚なる心なりかし。斯ばかりの事だに辨へ知ら
で。予が突立し眞柱に立向ひたるは。蚊と云ふ虫の。
牛の角を刺さむと為るたぐひなりかし。故今こゝに
古史徴に記せる趣をもて云むに。鎭火祭の祝詞な
る傳へを。大かたの人は。夜見國にて有し事實とお
もひ居るはいと麁なり。(既く師翁すらも、記傳十七
卷の五十丁にしか言れたりき。)其は古事記の黄泉の
段に。還二入其殿内一之間。甚久難レ待云々。燭二一火一
入見之時云々とあると。此祝詞に美保止被燒氏石隱
坐氏云々。隱坐事奇止氏見所行須時とあると。似た

る趣となるに○祝詞の傳へをば古事記神代紀の傳よりは見下す心に○美保止被燒氐石隱坐氐といへるを、夜見に往坐る事とのみ心得たるより○然は思ふにぞ有ける○故其祝詞の○麻奈弟子爾と云ふより以下の文を擧げて○其の心得誤るべき文義を論さば○其の文に○麻奈弟子爾火結神生給弖○美保止被燒氐石隱坐氐○（こは火神を生みて御保登を燒損はれ給へる故にそを治めむと思ほし坐て暫く石屋にこもり給ふなり夜は七夜日は七日と云より下の文をよく見て知べし）夜七夜日七日○吾乎奈見給比曾吾奈妹命止白給伎○此七日爾波不足氐○隱坐事奇止氐○見所行須時○火乎生給氐○御保止乎被燒坐伎○如是時○吾名妹命能○吾乎見給布奈止申乎○吾乎見阿波多志給比津止申給氐○吾名妹命波○上津國乎所知食倍志○吾波下津國乎所知牟止申氐○（以上の文を熟讀み味ひて、此事實は、與美津國にて有し事ぞと思ふ心を休むべし）石隱給氐○（石隱とは、もと石屋戸隱といふに同く、石屋に堅固く隱るゝよしなるを、此は其を與美津國に、神避往坐ることに移しいへる、古文なり、）與美津枚坂爾至坐氐所思食久○（妹神の御許を避坐して此の處まで至坐るが、下なる事どもを思食しつかれしなり、此の事實もし與美國にての事ならむには、此の文を何とか解釋むとすらむ、）吾名妹命能所知食上津國爾心惡子乎生置來奴止宣氐返坐氐○（與美國の途中なる、與美津枚坂より、立返り坐るとのことなり、）更生子○水神匏川菜埴山姬○四種物乎生給氐云々とあり○此の文義をよく〳〵見明らむべし○論者眞柱の文を難じて○「石隱を○唯此の國にて御身を忍び玉ふ事とせるはいかにぞや○此の國にて事ならむには○唯に忍而などこそ有べけれ○」と云へれども○此國にての事ならずは○與美津枚坂歸至坐氐云々○返坐氐とあるを如何とする○是ばかりの事だに知り得ずて○予が古史を思ひやらるべき物かは○

天地泉と三つ並びたる物ならば○古事記などの初めにも○天地泉の初發之時とあるべし○

今辨云○上代の人は○この論者の如き○さくじれる心は無りし故に○都知といふに豫美をこめて○大らかに語り傳へたるなり○あはれ論者○神世に生れたらましかば○天地泉初發之時と○思ふ儘に○言痛く語り傳ふべかりし物を○いと惜しき事なり○

水神。かの鎭火の祝詞によりて。專ら火をふせぐ物と云るもたがへり。

今辨云。すなはち本書に。心惡子乃心荒比曾波。水神匏乎持氐。鎭奉禮止事敎悟給支。と有るをいかにせむ。此を違へりとならば。その違へる由は云々と。斷はるべき物なるに。唯に違へりとのみ云へるは如何ぞや。

是より以下は。阿波國德島なる。春枝廣高といふ人の問に答へたる由にて。眞柱を論へる條々の中より。見すてがたき說どもを拔出て。因にこゝに辨へたるなり。

廣高問。平田篤胤といふ人の。靈の眞柱と云ふ書に。「天の質は清明して。たとへば水晶などの如き質と見えたり。三大考に。天津日の質は。火の精しき物ぞ。と云へるは非言也云々。」此の說いづれをよしとせんや。御敎へを待つ。答ふ三大考。玉の御柱ともに。證もなき推量ごと也。皇國人の思ひよるべき事に非ず。まして古こと學びせん人は。さる外つ國人の云はむやうなる事は心うくこそ。淮南子などの說めきていと小賢し。且日を天としての說なれば。まして云にたらず。

今辨云。予が眞柱に。三大考の說を非言なりと云へるは。龍の說を龍が論へるなるを。蚯蚓の輩いかで其の爭ひをきゝ別つことを得む。然るに己が力のほどを計らず。中庸また予が說を議し。共に立竝ばむと爲たるはいと早かり。諺にいふ。雁の飛を見て蝱もとび。鶴の飛を見て石龜のじた〴〵踏るといふたぐひか。凡て筆戰は彼を知り己を知りて後にものすべく。其の中にも。己を知る事なむ本なりける。我が敎子どもよく心得てよ。さて三大考に。火の精しき物ぞと云へるは。上代より此といひ來り。今現まに見るにも。火に見ゆる故に云へるにて。予が說の出ざるほどは。然も言べきものなり。また予が水晶の如き質ならむと云へるは。天照大御神の生坐さぬ以前に既に夜七夜日七日と云言ありて。天の明かりし事灼ければ。此を證として。暫く水晶を以て明かなる質を譬へたる也。然るを。「證もなき推量ごと也。」とはいかにぞや。また「皇國人の思ひよるべき事に非

ず」と云へるも。黄口の過言と云べし。故實を探ぬる學問なるものを。知らるべき限りは言はで有べきかは。誠に皇國人の思ひよるべき事と。思ひ寄まじき事との差別は。此の輩のよく知る所に非ざるなり。また「古學せむ人は。さる外國人の云はむやうなる事は心うくこそ。」と云へるも頑なり。外國人の言に似たりとも。言べき事をなど言はざらむ。もし外國人の言に似るを惡ふとならば。君父に事へ。師友と交はるの道を講習するをも。外國人の言に似たりとて。講習せで有べきか。偖こそ此論者の言は。すべて師友の道を知らざる言狀のみなり。此はみな師たる人の罪なりかし。また。「淮南子などの說めきて小賢し。」といへれども。淮南子に。天日の質を問答せることといづこにか有る。此の頃は。わづかに其書の片端をきゝて。己れ其を見たり貌に言ひさわぐ人世に多し。この弱者も實に見たりや。見ずやおぼつかなし。

廣高問。同書に。かの漂へる一の物の中より。かの葦牙の如く萠上る物天と成り。その跡に殘れる地と成べき物は。未だ堅まらず在し時。その底にもまた一つの物の芽生て。それ即ち泉國となれるを。後に地と斷離れて。今見放る月即ちこれなり。夜見の國は。かの一の物の底に凝成て。國之底立神はその底に成坐るなり。云々とありいかゞ。答ふかの漂へりし物より。葦牙の如く萠騰りしと云に對へて。又その底にも一物芽生てと云は。いみじき私言なり。かやうの有まじき非言も。本かの日を天。月を黄泉と云說によりて出來るなり。さて國之底立神は。その底に成ませりと云もいかゞ。萠上る物は天。垂下る物は黄泉にて。其の上下の底に成まさむには。天之底立神。黄泉之底立神とあるべきなり。そも〳〵黄泉と云は。天地に並べて。こと〳〵しく云ふべき國にあらず。唯海宮などの如く。此の大地の內にある國なりけり。さて現に見奉る月の神を。黄泉國なりと云ふは。太平大人の云れたる如く。忌々しく畏き云ひごとなりかし。

今辨云。かの漂へりし物の底にも。一の物芽生て。夜見の成れると云說は。日を天。月を黄泉と云ふ說によりて云へるならず。上に引て辨へたる。神代紀の

一書に。正しく其傳のあるによりて云へるなれば。私言に非ず。こを私言の如く思へるは。學問の力の足ざればなり。さて「國之底立神は。黄泉の底に成坐むには。黄泉之底立神とあるべき也。」と云へるは。いかに不學なりとても。餘りに事を辨へざる言なり。其は與美津國は。久しく國土の下方に付て在しかば。國土と一連なる故に。押こめて國といひ。天に對へて都知と云ふときは。海をもかねて云ふ如く。其處に成坐る神をも。國之底立とは云へるなり。また「黄泉と云ふは。天地に並べて。事々しく云べき國に非ず。」と云へるは。今見放る月。やがて豫美なる事を辨へざる故の言なれば。云ふに足らねども。太平の言に。月を夜見國なりといふは。忌々しく畏き事なりと云へるとか。此は太平のみならず。歌人はみな此の說を惡ひて。月を夜見とせむことは。いと可惜しき事なりと云へる人。これかれ有しかど。其は月をあはれと甚く珍る心より。忌々しく思へるにて。歌人の心なり。月やがて夜見國。月夜見命やがて須佐之男命なるよしは。眞柱にもいひ。古史傳には委くいへるを。其の中に。近く思ひ合すべき事を。一つ云はゞ。萬葉六の巻に。月を山の葉の左佐良榎壯子とよめる歌の下に。月別名曰ニ佐散良衣壯士一也と見えたるは。月すなはち與美乃國にて。須佐之男命の。佐須良波えて就坐し。知看す國なれば。その故事を文なして。月夜見を。佐々良衣壯士とも云へるにて。佐々良衣とは。佐須良波衣のつゞまれる言なり。此れを思ひ合せて。須佐之男命。月夜見命。同神なる事を知るべく。殊には月を。萬葉に月夜見とも。月讀壯子とも多く詠たれば。いかほど忌々しく思へばとて。爲すべなき事なり。和漢ともに。古く月をあはれと云ふは。忌ことなりと云へるも。夜見國なるゆゑに。神世よりあはれと云ふことを忌たりし。故實の殘れるにぞ有べき。然るを。あはれと甚く珍る歌人の多かるは。いと忌々しき事なりかし。さて此の論者は。太平の弟子と聞ゆるに。師の實名を云へること聞ぐるし。吾が師の大人とか。吾が藤垣內大人とか云ふべき事なり。かゝる事も。師父の禮をさへに。講習せざる故に知らざるなり。篤胤が弟子とあらむ輩。よく心得てよ。

廣高問。同書に。「伊邪那美命の火神を生むとし

給ふとき。石隱坐し給へるは。その御產の狀のいみじからむ事を。かねて知しめして。其を妹神に見せ給はじとての御所爲なり。云々又曰。伊邪那美神のこの往坐しは。その現御身ながら往坐るにて。死り坐て。御靈のみ往坐るには非ざるなり。」と云へり。此はいかゞ有らむ。答ふ伊邪那美神の崩御坐しことは。其御陵を始めとして。次々に見えたる趣き灼然きものを。現御身ながら行幸りと云は私言なり。

今辨云。古事記書紀ともに。伊邪那美神を。崩御ませる趣に傳へたるは。こよなき誤りなるを。誤りと知らざるは。書を見るの眼高からざればなり。予はやく鎭火祭詞なる傳に據て。此の事を悟り。其誤れる傳文を省きて。古史の文を。故其伊邪那美命者。因生火產靈神而遂神避坐也。於是伊邪那岐命詔曰。愛哉我汝妹命乎。替子之一木哉詔給而匍匐哭之時。於御淚所生坐神之御名泣澤女神。此者坐香山之畝尾之樹本神也。と作りしかば。或人の問に。此の段の文は。古事記に。乃匍匐御枕方匍匐御足方而哭時云々。故其所神避之伊邪那美命者。葬出雲國與伯伎國堺比婆之山也。(書紀には、葬於紀伊國熊野之有馬村、また伊弉諾尊、欲見其妹、乃到殯斂之處、是時、伊弉冊尊、猶如生平出迎共語、)と有て。伊邪那美命は。正しく崩御る趣なるに。此傳文の中に。たゞ。匍匐哭時の四字を存し留めて。文を作し。餘はみな除けるはいかゞと云へるに。予答けらく。其は神魯伎神魯美命の傳へ坐る。鎭火祭の太祝詞を讀奉りて。記紀なる傳文の。早く亂れたるなる事を悟り得て除けるなり。然るは彼の祝詞なる傳の趣は。(第十一段の傳に委く註せる如く)伊邪那美命の。豫母都國に往坐ることは。その御產の後の有狀を。妹神の御覽しゝことを耻恨まして。御面を合せ給はじと妹神の御許を離れ避りて。現身ながら往坐るにて。死坐して御魂のみ往坐るにはあらざるなり。この正しき傳へを一つ得たる上は。など餘の誤れる傳傳に心を殘さむ。其はまづ神避てふ語を。死ることをいふ古言の如く云ふ說の由來しは。いと舊きことにて。此は豫美と云ふに。西戎國の文章語なる黃泉の字をあてゝ。(豫美に、黃泉の字を配たることの非なる由は、靈の眞柱に委く云へり、予が此の史に、

黃泉の字を用ひざるは、此の由なり、)伊邪那美命は。其黃泉に往坐ると云へるより。(漢籍に黃泉と云へるは、人の死て往く處の如く云へるに心を轉されて、)其は死坐してのことゝ。非心得しつるまゝに。彼の神の離れ去り給へることを。男神の悔みて匍匐哭たまひ。その御涙に。泣澤女神の生坐るとの傳へを。やがて女神の尊骸の。御枕方御足方に。哭吟ひ給へることゝ思ひなして。何なるをこの中つ世人か。如此も言傳へたるより。なほ訛りに謬りを重ねつゝ。其の尊骸を葬し奉れるは此處ぞ彼處ぞ。(記に葬ニ比婆之山一と云ひ、紀に葬ニ於有馬村一と云へる類ひなり、)或は殯斂之處よなど語り傳へて。可畏とも可畏く。見るも聞くも。身の毛たつばかりなる。胡亂說どもの弘ごれるは。甚も慨く哀れなど云も更にて。かく辨へ云ふだに心痛きまでになむ。斯ばかりの事だに。思ひ誤る世となりしは。みな外國籍の渡參來し以來。その方にのみ引れて。實の有狀をばよくも尋ねざるに因ることなり。いでや神避と云ふ言は。避てふ言に。尊辭の神をそへて云へるにて。此は上の件の謂によりて。伊邪那美命に言始めて。餘神

をも。至りて尊かるをば。其の退去たまふ事を。稀にかく申しけむと思はる。其は記紀ともに。伊邪那美命のことは。神避。神退。神退去など記され。(なほ書紀には、見焦而退去、また所焦而終矣、など書れし所もあれど此れ等は神避てふ言を、死のことゝ非心得したる上にて書る文なれば、今云ふ限りに非ず、)餘には書紀に。素盞鳴尊の御荒びの所の一書に。稚日女尊乃驚而。墮レ機以ニ所レ持梭一傷レ體而神退矣。とたゞ一と所有るのみにて。此は文の狀の紛らはしき故に。死りたる事の如く聞ゆれども。身を傷ふばかりに驚き畏みて。其の所を退き避りたまへるとの事なり。(そは彼の本書に、天照大神、方織ニ神衣一居ニ齋服殿一云々、驚動以レ梭傷レ身由レ是云々、閉ニ磐戶一而幽居焉、とあると同じ趣なるを合せ考へて悟るべし、書紀に始に、至貴曰レ尊とことわり置れたると、稚日女尊にのみ、神退と書れしにて、至て貴き神に稀に申せる事なり、と云ふ說の意を辨ふべし、)此の餘には。神退。神避。など云へる例の一つもなきにて曉るべし。正しく死たるをば死と記して。記に天衣織女見驚而。於レ梭衝ニ陰上一而死。また中下天若日子寢ニ胡床一

之高胸坂上以死。また書紀にも。保食神實已死矣。また天稚彦云々。中レ矢立死などのみ有りて。神避。神退など書る例は。一と所も有る事なし。(但し舊事紀に饒速日尊の死坐る事を、神殞去と書つれども、彼の書は神避てふことを、死のことゝ思ひ誤れる世になりて、記せる書なれば、例とはなし難き上に、記紀なる神退、神避などの字をおきて、神殞去と書るなどは、いと憎さかしら也けり、)此れ等を考通して。記紀を記されし頃も。既に神避てふ言を。死のことと謬りつゝも。なほ弘く普くは言ざりしことを辨ふべし。如此考へ定めて。天神祖命の。大御口づから傳へ坐る。天祝詞の太祝辭に從て。問ひに云へる文どもをば除きたるなり。(是に就てなほ案ふに、書紀に伊邪那岐命の御往方を、本文に記されたれど、伊邪那美命の御往方を、本文に記されざる事は、其の忌はしきを嫌ひて、除かれしなるへし、其は彼の紀を撰み給へるほど、戸々家々に藏たりし傳どもは、何れも現身ながら、往坐る狀には傳へざりしなるべし、故れ其の說どもを一書に記して、本書には洩されしならむ、然る御心は難レ有けれど、など鎮火の祝詞の傳をば考へられざりけむ、いと可惜しくこそ、然ればば祝詞をば祝詞として、然しも心とめず、事實のかたには、只世に傳はる說をのみ用ひたりしは、いと古き事也けり)、あな可畏。伊邪那岐伊邪那美二柱の神の。一柱も崩坐しなば、此の世は忽に滅ぶべき物ぞ。あなかしこ。(或人又問、祝詞なる傳に依て、記紀の傳を正したる、其の說は然る言にも聞ゆれども、今の現に、熊野の有馬村に、その古跡を存し、また比婆之山も詳には有らねども、記傳に注されたる、伯耆國人の物語に、今出雲國の內、伯耆の界に近き處の山間に、たわの內と云ふ處有て、そこに伊邪那美命の陵なりとて冢あり、小竹など生茂れり、此の冢の草などをば牛馬も喰はず、牛馬を牽來て、草を飼むとすれども、此の冢のあたりへは牛馬よりつかず、退き去るなり、また此の冢の竹を杖につきて行く時は、蛇のたぐひよりつかず、蛇の居る處へ此の杖を衝立れば、すくみて動く事能はず、甚あやしき事どもなり、と云る事を記されたるを見るに、甚も畏き御稜威なり、比婆山に葬り奉れるといふ傳の、空說ならむには、かくは有まじき事なりいかゞ、答ふ

古書に見えたる事に就て、其の跡を作るは、世の常なれば、其はいと古き世に作れる古蹟にぞ有べき、空物語の事蹟をさへに、信しげに作れるも多かるをや、其のたわの内などの事蹟も昔人の然云へるより、やがて其の處として祭りもし、拜みもしつるまゝに、彼の御靈の移り坐して、然る御稜威を現はし給ふにて、世に例多かる事なり、其は師の、神の御靈を彼此に移し祠る事を、火を以て譬られしを熟く思ひて、其たわの內なる家をも、事實の信と、信ならぬとを論はず、畏みてよく拜祭るべきものぞ、〕〇以上は古史傳に記せる問答の趣きを擧たるなり。熟く讀み味ひて。伊邪那美神を崩坐さずと云ふこと。篤胤が私言ならぬ事を曉るべし。其はこの說は。天都神祖命の。大御口づから傳へ坐る。鎭火祭の太祝詞に據て云へる公言なればなり。但し鎭火祭の詞なる傳を。天津神祖命の御傳說ぞと云ふことは。予が始めて言ひ出たる說なれば。不審しく思ふ人も有べけれど。此は古史徵の首卷に委く辨へたるを見るべし。然れば予が此の說を聞ざるほどは。記紀の誤りをうけて。伊邪那美神を崩坐ると思はむも然る事ながら。かく

聞ても。なほ其の說を張たらむには。神の御言を僞りと爲るなれば。一道に向ふべく。思ひ定めて云ふべきものぞ。

廣高問。同書に。禍津日神直毘神は。天照大御神。速須佐之男命の荒魂和魂の神に坐すを。直毘神は。大御神に。禍津日神は須佐之男命に屬坐す。妙なる謂ありと云へりいかゞ。答面白き說の如くなれども。かゝることは臆說にて。心定ては云ひ難きことなり。

今辨云。予がこの說を臆說と思へるは。學問の力足らずて。其の證を得見つけざる故なり。然れば予が說を臆說と云へるは。自が臆說の過言なりかし。聞なく予が徵と傳との出たらむ時に。此の子もし耻てふ事を知らば。何とかすらむ。

廣高問。同書に。師說に。禍津日神は。黃泉の國の穢に因て生坐る故に。火に汚穢の有れば。此の神ところ得て荒ぶる故に。萬の禍おこるなり。と云はれしは。未た委しからず云々。此の神を。ひたすら邪なる神とのみ思はむは。あなかしこ。甚き非ことぞ。汚穢たる事の無れば。荒び給ふ

ことも無く。幸をさへに賜ふなり。と云へりいかゞ。答細き考へなり。されど猶よく考べし。とかく篤胤が病として。「試に云べきことも。それと慥に決めて云へること多ければ。其の心しらびして見るべき也。

今辨云。予がこの說をのみ。「委き考へなり」と云へるは。禍津日神を强ひて惡く邪なる神と云はむことを。然すがに罪得むことの可畏かりしにや。然るにても「猶よく考ふべし」と云へるは。負をしみなり。其はまづ。此ればかりの力にて考へたりとも。何ばかりの考へか出來べき。大かた世のもの學ぶ輩。古學を爲たらむには。心朴直になるべき物なるに。唯に口利く言む事をのみ勉むる故か。却りて朴直ならぬが多きなり。其は正しき證ありて。見るがまに開かまに理り炳き考へをも。人の說をば善といはず。「如何あらむ。猶よく考ふべし」。など伏をしみて。强ても云ひ破らむと構ふるは。いと〳〵有るまじき曲心なり。此の論文の中に。予が天之浮橋の說を。いかに有らむと問へるに。「如何あらむ猶考ふべし。」と答へたるなど。負惜みの殊に灼然きものなり。此は予斷じて云はむ。いかに考へたりとも。予が說の餘に。何の考へも出來まじければ。負をしみを止めて。伏ふより外有るまじき物ぞ。さて又。「とかく篤胤が病として云々。」と云へるは。甚生ごしやくなり。其は予も試に云べき事は。小兒輩の差圖を聞かでも。試に云へること。著せる書どもにいと多かり。然れども。正しき證を得たる事の。決めて違ひなく所思ることを。試にといふ事は得爲ずなむ。其は予が書を著はす心定は。廣く大きく。人にしかと眞の旨を悟さむ事を力むればなり。然るを試にと云べき事とのみ思へるは。世の生古學者どもの。何の考くれの考とて誇り喧ぐは。大かた萬葉の中なる歌を二三首考へたる。或は記傳にたま〳〵云ひ漏されたる事などの。僅に一ひら二ひら。多きは十枚ばかりの瘦考を書著して。其を猛き事に思ひ。はた其ばかりの物すら。いかゞあらむとか。なるべしとか云はては。通り難き說の多かるを見なれたる眼に。予が決斷の說を見たる故に。驚きて病ぞとは思へるにて。其は鼻かけたる猿どもの。たま〳〵鼻の具れるを見て。其を病ぞと思へるが如し。

廣高間。同書に。天照大御神の石屋に幽居るとき。高天原も葦原中國も。悉闇く常夜往までなりしと有るに。始めより天日は萌上れる初より。清明く透て中國も明かりしと云へば。天照大御神岩屋にこもり坐ても。明かるべき理ならむを。高天原の君と坐す大御神すら。神のあらびに堪たまはず。況て其の外の神々の御功もみな〱消て。光り坐さぬは。然も有べき事にや。答。高天原は火の憑つきてあるなれば。大御神生まさぬ先より明かりしなりと云ふ說。この岩戸隱りにて非ことなること顯れたるを。左右に云叶へむと爲たるみな強言なり。其の外の神々の御功もみな〱消てと云へるは。大御神を除て。外に高天原。葦原中國を所知看す神ましますにや甚いぶかし。又御光りと云ずして。御功と云へるも。何とかや紛らはしく聞ゆ。唯云叶へんと搆ふる故に。憶には云ひがたきなるべし。大御神すら。神の荒びに堪給ず。況て其の外の神々の御功云々。と云へるは。かの御荒びを恐み玉ひて。八百萬神も隱り玉ふにや。さらば高御産巢日神を始め。八百萬神の。天之安河原に神集ひに集ひて。事議り玉ふはいかゞ。猶いはゞ。大御神のあれまさぬ以前よりあかゝりしかば。火の憑つきてあるならば。大御神は。岩戸隱り玉ふとも。高天原は明かるべき理なるをや。

今辨云。此の段は。問も答も。共に生酔人の寢言を聞が如し。其はまづ此の問者は。總ての問語の狀を見るに。初學のいとたど〱しき人と見ゆれば。本書に云へる趣を約めて。言短に記さむとは爲れど。思ふ如くは書取りかねて。かく分らぬ狀に記したりと見ゆるに。答者は唯。予が說を云ひ破らむと爲る心のみ進み逆上て。眼もうち暗み。問言の本書のままなるや。否ぬやをも比校ず。ひたぶるに論へる故に。かゝる寢言はいひ出たるにて。此も敎への親たる人の罪なり。其は他の說を論はむとならば。其の書をかへさひ孰讀て。其の說の條々おひて。論ふべき物なるを。かゝる麁忽の事やは有る。況て此は太平の奧書に。太平に代りて。明らめ出よと云て記しめたりと有るをや。今稱る氏に恥ざる所爲なりかし。故今眞柱に記せる說を。其の儘に記して。この問答の

趣といたく異なる由を明すべし。

○或人問。前に天日は萠上れる初めより淸明く。透たる質なるが上に。火の寄つきて在る故に。いよ〳〵明く。且天照大御神の所知看してより。彌々益々明き也と云へる。此は古傳の趣の然聞えたれば。さも有らむを。大御神ハ幽居せるとき。高天原もて葦原中ツ國も悉闇く。常夜往までなりしはいかに。答ふこの時の事は。禍津日神の甚く荒び坐て。その高天原の君と坐ます大御神すら。堪たまはず幽居しかば。餘もろもろの神々も幸ひあへ給はざりけむ事知るべし。然るは天の萠上れる初めより澄明かる質なるは。産靈大神の造出たまへるなれば。其御靈に因り。其れに火の寄つきて輝るは。火產靈神の御靈に因る事なるを。其ハ神々の。各々その御功の止み給ひぬれば。闇かりしこと何か疑はむ。是によりても。天照大御神の御德の。大きなること想像り奉るべし。八百萬之神甚愛とあり。高皇產靈神さへに。大御神を出し奉らむと。千ぢに御心を碎き給へるをや。伊邪那岐大神の。不レ有二如此靈異之御子一也。と宣へるを孰く思ふべし。また此の時の傳へによりて。速須佐之男命。また其の荒魂八十禍津日神の。畏く坐ます事をも想像り奉るべし。さばかり尊く靈異に坐す大御神すら。しばしは堪給はざりしをや。然は有れ。然すがに其の禍を直さむとして生坐し。大直毘神やがて天照大御神の和魂に坐て。終には其の禍を直したまひ。有功之神となし給ひぬるは甚も妙なる御謂ならずや。○以上。靈の眞柱に記せるまゝの文なり。上卷五十一丁みるべし。然るを問答の言は。いたく此れと違へれば。いかに寢言の類ひならずや。故れ今辨を加へず。

廣高問。同書に遠西の人の製れる。測算の器を以て精くこれを量るに。日の徑云々。月の徑云云。地の徑云々。さて地より日の遠さこと云々。月の地を離るゝこと云々と云へり。答ふ古學する者の。しらで不足ことなきことゞもなり。されど古學天文混雑したる。三大考玉のみ柱などには用立べきこととなるべし。

今辨云この群の古學者流は。かく狹く心定たるもの故に。見るにも聞にも。傍痛き言のみ云ひあへるなり。其はまづ古學は。此れの大御國はしも。日の本

つ御國にして。その大御神の御末の次々所知看し。その御治めの大御蔭を蒙る徒の。古へを明らむる學問なるものを。其の始めはいかに。其の有狀はいかに有らむと云ふ事を。知らるべき限り明らめ知らずて有べきかは。大かた世の古學者流。日月の旋り。その大小遠近。その有狀などの事は。都に明らめざる故に。他より。今の現に日月は云々の狀なる物を。人體なる日神月神なりとはいかで言はむ。など難むれば。此を疑ふは小ざかしき漢意なり。角に見えても。丸く見えても。彼は即日神月神なり。と聲高く言罵れども。誰も心より伏する者なく。正史に見えたる古傳ぞ。と強言するに。姑く避て默する人と。頑者に諭したりとも。開辨ふべからずと。捨て取合はざる人のみなり。又しか誣る人も。裏にはみな快からず思ひつゝも。表にのみ然いひ居るめり。此は己己が心に問ひて知るべき物なり。此は申しにくき言なれども。師の葛花に。書紀の一書に。日月既に生るとあるを引きて論はれ。鼠蝕の闇中といへども。物を見る由などを云ひて。辨へは辨へ給ひながらも。なほ御親の心に快からず。不審くおぼしけむ故に。

三大考の說の出たるを悅ばして。跋に「かくてこそ。高天原も夜之食國も。いぶかしき隈なくは明らびぬれ。」と譽られけむ。其はくず花は。安永九年霜月の著述なるに。其れより十一年すぎて。寛政三年五月に。三大考の跋に。右の如く記されたるを思ひ合せて悟るべし。かゝれば。鈴屋風の學び爲む徒は。この公平なる御心に倣ひて。なほ委く弘く。正し考へ明らむべき物なるを。「古學者の知らで不足ことなき事どもなり。」と云ひて有るべき物かは。偖また予が靈の眞柱と。三大考とを。古學天文混雜したりと云へる。是またいと狹き心なり。其は遠西の人の見明らめていへる趣の。考へ得て。古傳と事實によく符るなり。故その符ることを採用ふるを。いかで混雜と云はむ。然るは前にもいへる。人の體內の有狀を。委く云へること。古へには有らざるを。遠西の人の見明らめたる趣は。現に人體を解き見るに違ふこと無ければ。其の說に據たらむに。もし此の論者の言の如くは。これ蘭說を混雜したるなり。人の體を如此くならず。と強ひて我意を立むか。先頃までは。世に漢學者ばかり。物知らぬ者なく思へりしを。此

の頃はまた。古學者ばかりもの知らぬもの無しと。云はでは得有られぬ心ちぞする。

廣高問。同書に。地は虛空に漂ひ。日に屬て轉旋るを。人の知らで。日の旋ると思ふことは。譬へば舟に乘て川を行くに。舟は其儘にありて。岸の移ると見ゆるが如し。天日は動かで。地と月とは旋るなりと。答ふ外國の說に因りて。此の地の旋るなりと云へる。さる說なくて。古傳にいぶかしきことなし。古まなびせむ者は。唯古人の朴に意得たる如く。今も然心得て。これが旋るならむ。彼れが旋るならむなど。こざかしき理屈言どもは耳に觸まじき也。

今辨云。予が眞柱に明らめたる如く。正し考へずては。古傳に不審しき事のみ多し。然るをいぶかしき事無しとて。我意をたて。眞柱を我も信ぬさまに云ひ。人にも信させじと爲る人に。唯に對ひて。古傳の不審き節々を問ひ試みばや。凡人の量り知られぬ事ぞと云ひて。遁るゝより外に。何の明らめたる答へも有るまじくこそ。其の凡人の量り知られぬ事なむ。やがて不審き事なるを。不審き事なしと云ふは。愚昧にしていぶかしと思はざるか。强ひて我意を立るかの二つを出ず。但しかく言へばとて。予が說にて。更に不審き事なしとには非ず。なほ不審き事は有れども。少なきを云ふ也。さて。「古學せむ者は。唯古人の朴に意得たるごとく。今も然心得て。」と云へるも。朴に過て及ばざる言なり。其はもし此の言の如くは。古へを考ふる事は。無益の業と云べし。古人の朴に效ふべき事と。また然は有りがたき事と有るを。かゝる未しき輩の。いかで其の別を知らむ。また。「此れが旋るならむ。彼れが旋るならむなど。小ざかしき理屈言どもは。耳に觸まじきなり。」と云へれども。今の現に。一わたり見る所は。天つ日の東にいでゝ。西に旋ると見え。よく委く考へ見れば。天日は旋らで。大地の旋ること灼きを。其の始めを考へたる書に。など其の由を論はで有るべき。然るを耳に觸まじと云へるは。師翁の玉勝間に。あらたに云ひ出たる說は。とみに人のうけひかぬ事。といふ條を物して。大方よの常に異なる。新しき說をおこす時には。よき惡きを云はず。まづ一とわたり。世の中の學者に。憎まれ謗らるゝものなり。或はお

のが素よりより來つる說と。いたく異なるを聞ては。善きあしきを味ひ考ふるまでも無く。始めよりひたぶるに捨て。採あげざる者も有。あるは心のうちには。げにと思ふふしも多く有る物から。さすがに近き人の說に從はむ事の妬くて。よしとも惡とも云はで。唯うけぬ貞して過すたぐひも有り。或はねたむ心の進めるは。心にはよしと思ひながら。其の中の疵をあながちに求め出て。都てを云ひけたむと搆ふる者も有り。大かた古き說をば。十が中に七つ八つはあしきをも。惡き所をばおほひ隱して。纔に二つ三つのとるべき所のあるを。取たてゝ。力の限りたすけ用ひむとし。新しきは。十に八つ九つよくても。一つ二つのわろき事を言たてゝ。八つ九つの善き事をも推けちて。力の限りは我も用ひず。人にも用ひさせじとする。こは大かたの學者のならひなり。然れどもまたまれ〳〵には。新なる說のよきを聞ては。舊きが惡きことを悟りて。速かに改め從ふたぐひも無にはあらず。舊きをいかにぞや思ひて。かくはあらじかとまては思ひみれども。自から定むる力なくて。疑はしながらさて有るなどは。新なるよき說を聞ては。かくてこそはと太じく悅びつゝ。忽にしたがふたぐひも有りかし。大かた新なる說は。いかに善くても。速には用ふる人まれなる物なれど。よきは年を經てもおのづからよく。終には世の人の從ふものにて。普く用ひらるれば。其の時に至りては。始めにねたみ謗りし徒がらも。心には悔しく思へど。遲れ馳に從はむも。猶ねたく人わろく覺えて。心よからずながら。舊を守りて。やむ徒がらも多かり。しか世の中の論さだまりて。皆人の從ふよになりては。始より速に改め從ひつる人は。かしこく心さとく思はれ。舊きにかゝづらひて。とかく滯れる人は。心遲く云ふかひなく思はるゝわざぞかしと記し敎へられたるなどを見ざる故にて。此れもをしへの親たる人の。かゝる師說は。まづ早く示し置ざる罪なり。大かた今の世に。古學者といはるゝ輩を見るに。纔に歌をひねり出す事をおぼえ。反切のことなどをやゝ心得ると。はや人なみに何の考へ。くれの考へとて。耳とりて鼻かむやうなる說を書しるして。誇り躁ぐは。みな師のかゝる敎へを。まづ早くこゝろえ置ざる故なりかし。

廣高問。同書に。月國は大地なる國の如く。外表方に有ると見ゆるなり。其は遠目鏡をあてゝこれを見るに。白く光りて見ゆる所は。此の地の海と同く。荒波の起さへ見え。彼のむら〳〵と見ゆる物は。陸の如く。山さへに見ゆればなり。答とるに足らぬ私言なり。月の中にある物。國と見えても。古傳に見えざることは取らず。

今辨云。こは殊に我意の甚しき言なり。そは古傳に見えざる事は。取らずと云はど。前にも云へる如く。人の腹内の形狀を見て。諭すをも。其は古傳に見えざる事なり。取るに足らず。然る物は無しと強て云はむか。古傳に云はずとも。現に然あるものを如何せむ。

廣高問。同書に日月は彼の一物の中より。萌上り垂下り成れるなるを。書紀の一書に。日月既生と見え。また今の世にも。二柱神の。直に今見放る。日月を生給へるところ得たるも間々あり。答。書紀の一書に。日月既生とあるは。正しき古傳なり。月を一の物の中より垂下りて。成れる物と云ふことは。古傳は云に及はず。今の世にも然意得たるは間々にもなし。唯三大考。玉のみ柱の撰者のみなり。

今辨云。日月既生とあるは。書紀の本書に。生レ海生レ川とある說の類にて。いと拙く錯りたる傳へなる事。三大考辨々にも論ひたるを。また取り出て。正しき古傳なりと云へるは。足痿人の立つことを忘れずと云ふ類なり。月はかの一の物より垂下りて。成れる物なる事の正しき傳は。前に委く論ひ示したるが如し。然るを。「古傳は云ふに及ばず。今の世にも然意得たるはなく。唯三大考玉の眞柱の撰者のみなり。」と云へるは漫言なり。其はこの群の人々こそ。僻める心にいひ破らむとは爲れど。故翁の三大考を諾はれしより以來。近頃まで。太平なども異なる論ひは無りし物をや。さて靈の眞柱を世に弘めたる以來は。ます〳〵此の說を信ずる者おほく。其の以前は。この江戸などにも。三大考を論ふもの彼れ此れありしかど。其れみな論ひを止め。はた諸國より。予が許へ眞柱の說を。諾へるよしを云ひ遣すもの。月々に夥しく。其のかへり言に倦たるまでなるを。然はしらで。「月を一の物より垂下りて成れる物と意得たる

は。三大考玉の眞柱の撰者のみなり。」と思へるは。目盲たる者の多く集へるを見て。世には目盲たる人のみあり。と思へる愚人の屬にて。いと頑なる心なりかし。

廣高問。同書に。月夜見命は。月には坐さず。月を所知看す神なること。萬葉集にも。「天海月船浮桂梶。懸而榜所見月人壯夫。」この歌。まさしく月と月神とを。異によく詠分ちたり。日即天。月即夜見なりとの考へは。中庸が始めていひ出たる說にて。萬世にわたりて動くまじき說なり。答。三大考に始めて云ひいでたる說。萬世にわたりて。動くまじき非說なり。

今辨云。萬世にわたりて。動くまじき非言なり。と云へれども。この辨々に次々辨へたる如くなれば。其の口もいまだ干かざるに。破れたるなり。此の論者の萬世は。いと短く。蜉蝣の萬世に似たるかも。

廣高問。同書に。老翁の御魂の座する處は。何處ぞといふに。山室山に鎭坐す也云々。あな愉快かも。こは篤胤が常の志なり云々。答ふ山室に千年の春の云々と云ふ歌を引て理りたれど。この歌は何となく。其の處を宿としたる意にて詠れたるなるべし。黃泉へ行くと云ふ事は。本より然思ひ定められたるなるべし。されどさきにも云へる如く。假令黃泉へ行ても。靈は通ふものと思はるれば。其の處に靈はありと云ふも。違へるには非ずかし。さてこゝの言擧げ。雄々しき魄なりけり。

今辨云。川柳點といふ俚き口すさびに。「歌人は居ながら日にやけて噓をつき。」と云へるは然る言にて。今の世下俗に。歌人と云はるゝ輩。蟻の如く多く。それ大概は。をそ言をのみ云ひ相ひて。其の噓を巧みにいひ得たるをよき歌と云ひ躁ぐを。此の論者も。その歌人の群なる故に。師の。山室に千年の春の宿しめて云々。と詠れし歌をも。己々が噓言と同じく。何となく詠れしをそ歌と思へるは。いと鳴呼なり。其は師の歌といへども。題詠など爲られたるには。遊技なる故に。俗の歌人なみの。虛言を言はれしと聞ゆるも多かれど。玉鉾百首をはじめ。歌集に見えたるにも。實事に係りたる歌は。情のまゝに詠出られて。かつて俗の歌人等のごとく。浮たる言は云はれ

ざるを思ふに。此も害事にかゝれる歌なれば。何となく詠れしに非ざる事知べし。然るを論者。「黄泉へ行くと云ふことは。本より然思ひ定められたるなるべし。」と云へれども。然思ひ定められたらむには。歌に千世のすみかを覔め得つると云ひ。山室に千年の春の宿しめて。と詠るべきかは。猶言はゞ。此は人死ぬれば。黄泉へ行くといふ說を。立られし後に詠れし歌なれば。後には。黄泉へゆくとふ說を廢て。千世常盤に。魂は墓所に居る。と定められたりと云はむも強言にあらず。また黄泉へ行ても。靈は通ふものと思はる。と云へれども。黄泉へ行ては。通ひ來ざる謂なる事。眞柱に。伊邪那美命の事を擧て。具に論ひたるが如し。「さてこゝの言擧げ。雄々しき魄なりけり。」となぶりがましく云へるは。猶いまだ。口の黄きを思はざる生ごしやくにて。其の師たる人の敎へざまの惡き故に。かくさくじり立るなり。

廣高問。同書に。師の翁の。人は死れば。その魂を善きも惡きも。みな黄泉國に往くと云はれし說の。いかに非說ならじやは云々。○玉の眞柱といふ書を讀て。いかにぞや思ふふしぶしを。ぬき出て問ひ奉る。いかで委く書つけて給はらば。いといとうれしき事になむ。

春　枝　廣　高

藤垣內大人

答。世の人死ては。黄泉へ行と云ふこと。古き歌どもに見ゆ。今の世までも語り傳へたることなれば。本より然心得べきなり。さて神こそ行かひ爲玉ひつれ。人は行ては再びかへり來べき所ならねば。其の證とすべきことも。神代を除てはあるべきに非ず。神代にては。かの伊邪那美神死坐て。黄泉へ罷りませる。これその初めなり。そを死坐るには非ず。現御身ながらいでませる也として。外に證據なしと云るは。强言ならずや。さて人死ても。此の世に靈とゞまりて事をなす例多かれば。靈は此の國に留まることもなきに非ざるべし。されど打まかせては。よみへ行くと心得ること。いと朴にて。古より云ならへることなれば。誤りとは云がたし。

小　林　茂　岳

今辨云。伊邪那美命の。豫母都國に往坐るは。死坐してには非ず。現御身ながら往坐るなる事。上に辨へたるが如し。さて靈の眞柱に。世の學者たちの。此の往坐しを。人の死ぬれば押なべて。夜見國へ行く證とすれども。此は現身ながらの往坐にて。殊には御産の有狀を。妹神の見行しゝ事を恥恨まして。往坐るなれば。此の故事をおきて。人魂の。夜見へ行くとふ證とすべき事なしと云へるを。强言なりと云へる。然もあらば。など其の證據を出さゞりけむ。只に强言なりと云ふとも。誰か諾ふべき。また古き歌どもに黄泉へ行くと詠み。今の世にも然云ふは誤りなること。眞柱に委く辨へたるに。其を見ながら。猶古き歌どもに見え。今の世にも語り傳ふなど。負をしみを云へるは。可笑き事なり。また「打まかせては。黄泉へ行くと心得ること。いと朴にして。古へより云ならへることなれば。誤りとは云がたし。」と云へれども。其は中古の誤りを誤りと悟して。大古の正説を云ひ悟すを。聞入れざるにて。負惜みの朴ならざる心なり。若しまけ惜みならず。實にかく思へるならば。眞柱に委く云へる如く。人は心の趣く所に。魂の留まる謂なれば。此人の魂は。かならず豫母都國に往とゞまるべし。予然る人を憐みて。靈の眞柱を突立て教へたれど。聞入れずは如何せむ。其は此の輩の欲するまに〳〵。一と道に往てよと云ふより外に言なくなむ。○扨春枝廣高といふ人は。予が著せる眞柱の書に。いかにぞや思ふふし〳〵の有らば。直に予が許に問遣すべき物なるに。太平に問へるは心足ざる態なり。同じ里にても。山蔭春里と云ふ人は。直に予が許へ問おこしたる物をや。予が著述に。予がいひ遺せる事を。太平いかで知るべきかは。知らざる故にこそ。答の條々みな非説なれ。また知らざる事を知れりと爲て。答へたる人こそ甚をこなれ。戎人も知れるをば知れりとし。知らざるを。知らずと爲とは云へるに非ずや。吾がをしへ子とあらむ徒。かゝる事は心してよ。

太平云。玉のみ柱の説。古事記傳の趣にいたく違へる事。又あつたねが新にいひ出たる説など。むげにして見果べき事ならねど。世の古學びに心ざして。古事記萬葉を見て。古の御手ぶりをも。知らまほしく志ざす人。かのみはしらの説

を見ては。大に惑ふ心になりて。妨げをなす事多ければ。おのれ其を辨へむと思ふに。あつたね固より。倭たましひ猛くをゝしくして。人を誘はむの心ざし頼もしく。又異國の卑く。異國のつたなきよしなどを云へる說は。宜しくおぼゆれば。まづ暫くあげつらひを止めて。此のまゝにて世に弘めむと。然もあらば有れと思へりしのみ。論ひおこする人多ければ。捨おきがたくに。西よりも北よりも。南よりも。不審きよし思ふをりふし。小林茂岳。古事記傳。また三大考にいへる天の說を書いでゝ見せける。その說正しく直き考へにて。三大考玉のみはしらなどの奇說をわきまへ正したるは。皆おだやかなる論ひにて。よろしければ。此の廣高の子が。いぶかしみ問ひおこせたる答へをも書て。太平に代りて。あきらめ出られよと云へりしかば。かく書て見せたるなり。猶此のうへにも考へ見て。又いぶかしみ給ふ事あらば。いひ遣せ給へかし。

文化十三年九月十日

篤胤云。こは上の件の問答のふみの後に記しあるを。其のまゝに擧たるなり。あはれあな長歎しきかも。大平の予が眞柱のふみを。かく甚く惡へる事よ。

文化十四年正月七日

○吾が師の大人。此辨書の草稿を記し竟たまひて。重恭ありやと召給ふに。稱唯して御前に出づれば。此を汝が同じ學びのはらからにも見すべく。寫してよと言はすに。畏まり書をへて。此なる太平翁のおく書を寫しつゝ。つら〳〵思ふに。此のおく書にも。辨へ給ふべき事の。多かるべく所思ゆるに。唯その眞柱のふみを。惡へる事をのみ歎かれたるは。太平翁の言なる故に。辨へ給はぬにやともおぼゆれど。己れ常に大人の傍に侍りて。見聞つる事どもを。少か此に記して辨へてむ。但し。師は意ありて。此の辨は漏されたりと所思るに。己れ辨へたらむには。汝黄口の小兒と在りながら。さし出たる事かなと。叱り給ふべけれど。己が稚き心には。日々に教へを受をれば。師の大人のたふとき事を知りたれど。太平翁の著述はいまだ見ざれば。其のたふとき事を知らず。殊には教へ子とある我が徒の心には。似なく尊く。思ひうべな

ふ眞柱の書をしも。むげにして見はつべくも非ず。など侮られしを。其の儘にきゝ居むことは。何にしても心よからず。腹のふくるゝ事なれば。師の叱り給はむなも。然もあらば有れど。荒魂の進びの止がたくてなむ。其はまづ太平翁は。戎人の謂ゆる。而從の人に似たるかも。然るはおのれ。師の執筆として。其の御傍に居れば。諸國の人々より贈れる消息。また師の贈られたる。消息の草稿などは。悉あづかり持たるに。往年靈の眞柱の彫成れるときに。太平翁へも一帙おくらして。如何ぞやと思ひ給ふ事の有べければ。示し給へと言ひ贈られし返り事に。只に感たき由を言おこせて。其の後もさらに師の許へ。眞柱の說をいかにぞや思ふと云ふことは。言ひ遣されず在りながら。遠き境なる人には。かく云はれたればなり。本居氏を繼て。その學風の長とある人には。いと有るまじき事のごと所思ゆ。さて我が師の說の。古事記傳の趣に。甚く違へる事を驚かれたる狀なれど。此は何のおどろく事か有らむ。其は記傳の說は。ひたすらに古事記に據りて解れたるを。其古事記にも。謬り錯へる傳への多かるを。師の正し明らめて。新に說れし故に。記傳の說と違へることの。かならず多かるべき物なり。記傳の說とたがふ說の無らむには。何の料にか。眞柱のふみを著さるべき。然るを記傳の說に違へりとて惡まるゝは。師の言はれたる。老婆があみだを信ずる心に似て。故鈴屋大人の玉がつまに。我がをしへ子に誡めおくやう。と有る條に。吾に從ひてものまなばむ徒も。己が後に。又よき考への出來たらむには。必わが說にななづみそ。我が惡きゆゑを云ひて。よき考へを弘めよ。總て己が人を敎ふるは。道を明らかにせむとなれば。かにもかくにも。道を明かにせむぞ。吾を用ふるには有りける。道をおもはで。いたづらに吾をたふとまむは。わが心にあらざるぞかし。と言ひおかれたるを。我か師は心とせられしを。太平翁は。此を心とは爲られざるなり。但し老婆があみだを信ずる如く。善くも惡くも。其師說を立むとするも。師に實なる心の一端なれば我が師の說の記傳の說に違へるを惡み。退けむとのみ爲られたらむには師の大人のこゝなる

太平翁の言を辨へられざる心に效ひて口を閉まじきにも有らねど前には三大考辨など著はし今また天說辨を作らしめて記傳の要とある說どもを言ひ破らむとせられたれば點止あるべきに非ず其は師の常に己れ等に言へるは吾はしたしく故大人の面諭を受たる者にはあらねど此の學に入りたりし初めより師の御楯となりてわれ篤胤を得しより惡言耳に入らずと言はむやうに有りてむまた師の說誤り言ひ漏されたる事は他に言はせじ己れ明らめて其の功をつぎ弘め。不肖の弟子とは言れじと思ひ定つれば。汝などもしか心得て有べし。不肖と云ふは。譬へば父の伐おける薪木を。子の負ふこと能はざる類ひを云ふことにて。師父の道を。繼ぎ弘むる事能はざる人をいふ。此は漢籍に見えて。漢人すら恥と爲たり。と諭し置れたればなり。さて「篤胤もとより。倭だましひ猛く雄々しく云々。異國の卑しく怯き由などを云へる說はよろし。」といはれたれど此も師の常に言るゝやう。予元より。異國のいやしく怯き由などを。齒牙にかけむの心は無れど。古道を說き諭すにつけては。此れ等の事をも。少か辨へおかでは。初學の輩の。古道に學び入る心を引立がたく。眠も覺めじく思ひて。戲れ心に記せるにて。譬へば蕎麥きりを饗せむとて。青海苔わさびなどを添るが如し。ゆめ己が異國のことを云ふを。事々しき業となな思ひそと言れき。然れば眞柱に。漢土天竺などの事を論せられたるは。我が師にとりては。何ばかりの事にも非ざるを。かく譽て。要とある古道の說に。甚く勤しまれたる事をば見辨へず。むげにして見果べくも非ず。など言れしは。戎人の謂ゆる。大をしらて。小を知れりと云ものか。殊に吾が業とする。古道の意を說るをも辨へざる人の。いかで異國の事を說けることの當否をわきまふべき。其はたゞ今の世の生古學者たちの。聲に吠るとか云ふ如く。故大人の御口をのみ眞似て。異國の籍を見もせずに異國を詈り。人の。異國の事を誇れる文を見ては。甚く悅ぶ倫とこそ思はるれ。扨西よりも。北よりも。南よりも。論ひおこす人の多きよしを言はれたる。此はこれかれに贈られし消息にも。かく云れつるよし。彼此の人々より。師家へ贈れるせ

をそこにも。言遣せたると。師の許へは。殊に國國より問ひおこす人の多く。己れ傍に在りて。その答へます事を認むるに。筆を措く暇なきまでなるとを合せて思ふに。太平翁は此の道の學をもて。本居家を繼れたれば。古學の疑を決むる判者の如く思ひて。問ふ人の多かる事は。然も有べくこそ。抑我師の。眞柱のふみを急ぎて世に弘められたる由を。かねて語り給へるやう。故大人隱り坐して後は。その教子たち。多くは歌文章の言かひなき事にのみ遊びて。要とある古道の講習をやめて。眠れる如く。腰痿たる如くなれる事の。慨たく憤ろしきに堪ず。いかで其の眠を覺してむと。種々に思ひ慮りて。眞柱のふみを弘めたらむには。心直く心さとく。志ざし厚き人は。悅びて寄來べく。心おそくこゝろ直からぬ人は。怒り謗りてむ。如此して古學者たちを起し立ずは。眠さめじ。眠だに覺たらましかば。此を悅ぶ人は。猶よき說をも言ひ出べく。怒れる人は。予が說を破らむと爲て。よき考へをも言ひ出べしと。思ひ設けての所爲なり。また師も云はれたる如く。新しき說を出

しては。とかく始めには。世の學者に。惡まれ謗らるゝこと常なれば。其はかの何某とか云へる。猿がう技する者の言に。愛まれて下手ならむよりは。憎まれて上手と爲らむと云へる如く心得て。心とは爲まじき物ぞと言れき。しか思ひ設られたる功も灼く。世の學者達の論するやうを聞くに。五人は悅びて譽れば。三人は半うたがひ。二人は甚く詈り謗る。かく譽ると誹るとの論にて。眞柱の本は。揩あへぬまで世に弘まる事は。師の思ひ慮りの。よくも時機に符ひけるよと。いと〳〵悅ばしき事になむ。近き頃は。何某とかいふ狂歌師の歌に。江戸の名高き學者たちの著述の書をみな詠める中に。師の眞柱をも。「其の音に驚く人の愚さよ。から鐵砲の玉のみはしら。」と詠めるを。師のいたく悅ばして。我がおもひ慮りの當れることと。此の歌にても知られたり。と言れたりしが。其の後に。齋藤彥麻呂ぬしの。此れに返歌したりとて。師に語らるゝを。傍に聞居れば。「驚かぬ人ぞなかなか愚なる。天地に響くあつたねが島。」と詠れしとぞ。何にも狂歌師などの。卑しき心には。師說

におどろき。眠さめて信ずる人の多かるを。愚なりと思ひ。また己れ等が虚言するに思ひ比べて。から鐵砲なりと思ふべく。此の歌によりても。眞柱のふみの。世に弘く行はるゝ狀は知らるれば。師はそこを悅ばれしなるべし。此れにつけて。己が預り居る。諸國の人々より贈れる消息に。心さとく心直き人々は。我が師の說をめで尊びて。見はつべくも非ず。とは爲ざる事を知るべき文の。いと多かる中より。一つ二つを拔き出て記さば。吉備の中國なる或る人々の許より。眞柱の書を讀て。いと〱感じたる由にて。「君ならで誰がふみ別けむひらたなる。稻の美都穗の國のふる道。」また「つき立てし玉のみはしら玉ぼこの。たゞしき道のしるべなりける。」など詠おくれるに添て藤井高尙ぬしのせをそこを見せたる。其の文に「平田氏の被著候たまの眞柱御覽被成候て。神代の事ども大略御承知も被成候由にて。拙子了簡如何と御問の趣承り候。先つ天地の初の樣子も。三大考より委く正しく被存申候。又人の死候靈は墓所に鎭り。よみの國へ行くといふ說は誤りなる事ども。古今に秀候說にて。感心不斜候。此の人は先年江戶にて交り申候。篤學無比頃候。故翁の門人數百人御座候へども。學問此人の半に及候ものも。有まじく被存申候。後世可恐と申事。如此人も出候故に思しられ申候。」とあり。此のぬしは。故大人の教子たちの多かる中にも。やごとなき著述も多く。世にいみじく稱譽せらるゝ人なるにかく言れたり。また阿波國の或人の消息に。「鈴屋大人の學び子。手を折て數ふるに。四方の國にこゝら多かれど。その神代の道のをしへ事を。うけらが花のうけ繼ぎて。天の下にとく人も聞えず。書かきて世にほどこらす人も無ければ。皇朝學びは。やう〱に消ゆかむとすめり云々。かの大人につぎて。天の下の倭心雄々しきは。篤胤の大人ならむと。人も我も賞歎し侍りぬ云々。」と見え。又此のほども。遠江國の或人の消息の中に。「上京の砌見受申候所。都にても。君の學風を信じ候者おびたゞしく。其の中に何某と申は。誠に君を尊ぶこと切にして。食に向ふをりは。まづ平田大人々々と云ひ手向て。後におのれ食し候程の丹心に候。また或人の家に。

大勢うち寄候席にて。くさ〲の談に及び。とても世の古學家の學風を一變させむ事は。江戸の牛田君より外になし。など申候ひき。其の席に何某も居合され候」など言ひ遣せたるたぐひ。今かぞへ擧るに暇なきまでにて。既に可畏き雲のうへ人すらも。「内日さす都をはじめ。天離るひなに至るまで。今より後は古學する徒も。この靈の眞柱を本と突立て。」とさへ宣へるものを。むげにして見はつべき事にあらず。など言腐されしを。師は辨へ給はずとも。をしへ子とある我が徒の。いかで其の儘にきゝ居るべき。これ重恭が。みづから口黄く。なほいまだ乳臭きことは知りつゝも。口を閉がたき由なり。さて小林茂岳が天說辨を。正しく直き考へにて。おだやかなる論ひなり。と言れたれど。みな非說なること。師の委く辨へられたるが如し。それに就てなほ言べき事あり。我が師の學風の。ひろく堅く高きこと。此れを仰げば彌彌高く。此を鑽ればいよ〲堅く。前に在るかとすれば。忽焉として後にありと云へる如く。深く妙なる說どもなるを。親く御教を受ざる人は。千眼千手にもおはさぬ物から。尋常の學者と等しなみに思ひ。遠きさかひに在る人などは。かく言向ひもすれど。其はます〲に已れをひくゝして。我が師をおし上るわざにて。燃る火をしめさむとして。油を沃ぐ類ひ也かし。其は此の辨書。もし風のたよりに吹おくりたらむ上にも。なほ負をしみの僻說を言たらむには。言ふべき事は何ほども殘し給へればなり。抑おのれ。いと〲肝稚く。いまだしともいまだしき學の力にて。かく辨ふるをば。さこそ人のをこなる所爲と云ふらめど。少かにても。師の恩頼に因りて。眞の說を聞ける故に。眞ならぬ說を。見わくる眼の具りたれば。かく辨ふるになも有りける。

今年の春を迎へて。十まり八つになれる。

川崎重恭

同年の正月

かく記して師に見せまつれば。此は汝が心やりの所爲なれば。他にな見せそ。匣の底にをさめ置けと言ふを。同じ學びの兄たち。中にも渡邊之望老翁の。こゝに記したりとも。何てふ斟酌

か有らむと。強にまをして。此に記す事とはなりぬ。

重恭

しもとのまに〳〵

こをしも。かく名つくるよしは。かの鐘もしもとのあたりのまに〳〵といへる。譬のごとく問ふ人の言のまに〳〵。大きくも小さくも答たるを。こなたにも留おきたるなればなり。もしたま〳〵もよみゝむ人は。その心を得てこれに說盡たりとな思ひそよ。

平田篤胤

靈の眞柱をよみて。言まほしく辞まほしきこと。ひとつふたつ書る　阿波國德島

山蔭春里

菅の屋大人のこの書はや。こはや此說はや。名におへる玉の眞柱なす。太しき大倭心はさらにもいはず。大海原なす廣き學びは。おぼろげの人の及びがたき所にして。玉くしげふたゝび。本居大人の世に出ませしこゝちぞする。あな嬉しきかもあな樂しきかも。かくなもいそしく深く厚く。天の岩戸の手力男なす力を震ひ。心を用ひて。考へ正されし中にも。黃泉國のこれまで有來し說なも我も人もおほゝしくかたへはうべなひ。かたへは疑ひながらも。さて過しを。この眞柱の太しき論ひの恩賴に。梓弓春の氷のとくる如く。魂のゆくへの安定をさへに。照月のまさやかに。あきらめし事のいとも〳〵賴もしくよろこぼしく思ふあまりに。かくなも詠いてける

奴婆玉乃夜見廼麻杼比毛。保賀良加仁。明由久道能。書仁見衣計里。

〔一〕さてかくまつぶさにさとされし書なる物から。又いはまほしき事。いふかしき事なきにしもあらず。そはまづ今の世のさまよ。百人が百人。漢意ならぬはなく。才あるも才なきも。心さくじり。小さかしきことのみ云ふを。この天地泉のくすしき說は。多くは人の腹ぬちに入がたく旣に荒木田久老のまなび子。何某とか云る生倭意のもの。かの三大考を言ひ破りしと聞つ。されば此はこの天地泉を示さむとする前の條に。まつかの地球渾天のはかりわざより始めて。日蝕月そくの理をさへにつばらかに論ひ。さてその天文家の云ふなる節々の。あ

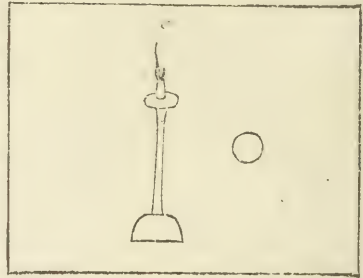
たりあたらぬことなど說きわきまへおき。しかしてこの皇國の古傳。天地泉の初發のおもむきをしめすときはたれも〱早くうけひき從ふべし。さるはなへての人情。かの蝕といふことの違ざるを見て。天文の理とはあらそひがたし。と諾ひをる故ぞかし。さればなへての世の人の腹ぬちに入らざる時は。あたらいそしくさとせしふみも。ゐぬにこがねの諺に等しかるべしとおもふはいかゞ。

答。これ信にさることなり。此は遠からぬうち。別に三大機象とのふ書を著はして。それに言はまく思ひて漏せり。さるは眞柱のふみは。たゞ古傳に本つけることを專と爲たればなり。

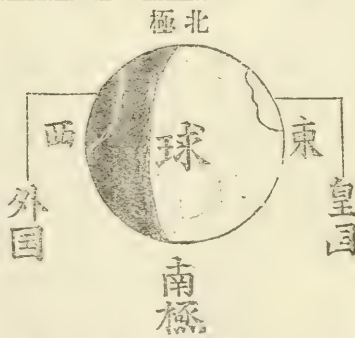
問さて。天はすなはち天津日のことにて。その天津日は旋ることなく。大地と泉とは旋ると云ふときは。かの蝕はいかなる理りにてあるやらむ。此は本より古書に其傳へはなしと云へども。天地泉を說くときは。この別も言では人の腹ぬちに入がたからむ。この理りはいかなるべき。

答。これまた信に然るべし。日蝕は日と地との間に月の旋合して。日の光を障るなり。月蝕は月と日の間に地の旋合して。日の光を障て月に日の光の映らぬなり。委くは此れも三大機象に圖を著して示すべし。

問天津日を。遠き西の人の製れる測算の器をもて。精く量り見たまひしとある。三十二萬九千五百里の大きさなるに。地の徑りはわづかに三千四百三十里とある時は。天津日もて。大地を覆ひつゝみめぐらすばかりならむ。しか思ひ見れば。日を隔つべき隈もなく。常に晝のみにて。ぬば玉の夜はあるまじきやうにも思はるゝはいかゞ

答。こは一と通りは然思はるゝやうなれども地の圓體なることを辨へたらむには疑ひなきことなり。其狀を近く譬へて言は一間に大きなる燭火を一つ燎したらむに。その一間の眞に隈なく明くなるめり。燭を天津日の大虛空を隈なく照るに譬ふ。(一と間はすなはち大虛空にたとへ燭火は天津日にたとへたり)さて拳はかりなる球を。手平におきて見るべし。(この球を大地にたとへたり)一と間は隈なく明かれど。其球の燭火に向へる處のみ明くて。火に背ける方は暗く。圖の如くの狀に見ゆめり。この影やがて。地

球も夜をなす有狀なり。さて其の球を手平におきたるまゝに燭火の閾を右旋に廻り試べし。何れに廻りても影のさすことは同じ。是にて大虚空はみな明かれど地球には暗き處の。必ず有る理を辨ふべし。

四地は東西に旋りて。晝夜をなすと云ふときは。日の東に見えそむるより地は東へ旋るが。さる時は。何に隔りかくろひて。日の西に沒ごとく見ゆるやらむ

答。これまた地は圓籠なる故にその圓く張出たる所に障てらるゝ理を曉るときは。更に疑ひなきことなり。此もまた燭火と球もて譬てむ。そは上の件の如く。燭火を中の間におきて。(これ天津日の象なること上に云へるがごとし)この有狀を試べし この球の皇國と印たる處を東と定め此處に茶立虫やうの小虫をおきて。外つ國と印たる西の方より、東へ右旋りに一と旋り旋らして見るべし皇國と印たる處燭火に向ふ時は明くなり。(この暗外國印の所は夜となる。)燭火に背ける時は暗くなるめり(此時外國印の所は晝となる。)さて此の球を西より東へ旋らす人を。神の御功もて大地を旋らし給ふに譬へその茶立虫を地球に住居る人に譬へたり(師說に人は譬へば人形の如く、神は人形をつかふ人の如しと言れし譬を思ひ出べし)斯て姑く此茶立虫の心になりて思ふに。己が住居る球を。人の旋らすことは得知らずて。天の東に出て西に沒るとぞ思ふめる。(本書に記せる、船に乘りて川を行く譬の意を思ふへし。)但しこの拳ばかりなる球に茶立虫の譬へは。たゞ其の理を大凡に云へるのみこそあれ信は地の大きさにくらべては人の小さなること。富士山に茶立むしを留たらむよりも。なほ小さかるべし。(かゝるを、

北極
東
西
球
皇国
外国
南極

富士山のしつかに旋りたりとも茶立むしの旋るとしも思はましや、然れば人の我が居る地球の、旋るとしも思はぬは、實は然ることになむ、されど神の道を學ばむと思ふ人はこの理をも辨へ居べきことならむかも）さて地球は右に云へる如く。西より東へ右旋り一轉して。晝夜をなし。如此く三百六十餘轉してその往く定道を。一度つゝ行て。天津日を一周めぐる。これ一年の運なり。（委くは三大機象に云ふべし）

五月すなはち夜見國と言ふときは。彼の國はいつも暗かるべき國なるを。さやかに月の明きを見れば。闇き國とも思ほえず。此はかの天文家の說の如く。日の光りをうけて。照輝くことわりなりやいかゞ。

答。こは信に天文家の說の如し。但し此の夜見國の光のことは眞柱下卷二十丁のうらに。其理を記したりき披き見たまへ。

六海つ神は雨を掌る物ならず。八大龍王雨止めたまへとよめるなもひが言にて。龍は海に住む物ならじとある。さもあらむとは思ひ侍れど。かの龍卷などいひて。海水を雲にまき上げ。虛空に昇り。大雨をふらすことなどは。眼のあたり。今のうつゝに見ることにて。物にもこれかれ記しあり。龍の形をまさめに見ずと云ふとも。大船をさへに。空に卷上くる事のあれば違はぬことなり。また海つ神のます所を。古書に龍宮ともいひ。またこの阿波國の鳴門わたりなる。御瓶と云ふ物をたゝけば。忽ちおとろ〳〵しく。神さへ鳴はためきて。大雨をふらするなどを思へば、かの萬葉なる龗に云てふらせつるとあるも強言ならず。然れば、海つ神は雨を掌らじともいひかたしと思ふを。此はいかがあらむ。

答。これまた一と通り然る論ひなり。但し眞柱に。海つ神を。雨を掌る神にあらずと云ひ。龍は海に住む物にあらずと云へるは。常を記たるなり。（そは海神は和邇神に坐まし、龗の神は萬葉の歌にも、我が岡の龗とあるを思ふべし是にて其定りの住處そ知らるゝを云ふや）然れども。神の御稜威の測がたき。其變を云ふときは。海神も雨をふらせ。龗の神の海に住むことも有るなり。（そは小さき池なとに、小蛇と化りてひそまり住み、忽ちに龗の形を現して、虛に昇れる例など、からやまと古へ今に最多かり、古くは豐後風

土記に見たる臭泉の故事なと思ふべし）故れ考へたまへるごとき事の何國にも見聞くことなり。眞柱に書紀なる龍宮の説をにくめるは。正に佛書に依りて。和邇神を龍神と替たることのうるさければなり。そは今の現の事實を見るにも和邇は海に住むこと。古事記（また書紀の一書）に海つ神を和邇とある傳によく符ひ。（この傳を正しと決めたる上は、餘のいぶかしき傳に心のこさず。）また靈の時々は海にも川にも地にも留まると見ゆるものから。其は變にて。常を云ふときは。我が尚のとよみ坐る如く。山に住む物なるに違ひなければなり。（なほ古史傳に委しく云へるを見るべし）

㊆迦具土金山毘古あれませしより。始めて火金ありといふことといふかし。火と金を掌賜ふ神にて。火金共に生給ふといへども。是より以前天地わかれし時。既に火土金はありしことわりにはあらしや。火水土金なくては。神と云へども作りたまふ由あべゝるからず。又土の神埴土を産給ひしも同しことわりにて。土も固より有しならむか。然らざれば。ひぢりこのみにては。神の踏かよひゆきたまふ。大地の道なかるべし。此はいかゞあらむ。

答。こはおもほえず古の意を忘られしが。其はまづひぢりこのみにては。神の踏かよひたまふ。大地の道なかるべしとは凡人にくらべての言と聞ゆ。天地の道を始め。はた國を生給へる御祖の大神に坐ますを。堅庭の踏かよふべき道なしとて。何か往來給はて有べき水をも潮をも。あゆみたまふべきものをや。（今の凡人すらに、それに似たることもするをや）また火金水土は本より有りけむを。たゞ其を掌給ふ神を生坐るとやうに解るは。世間になべて釋來れる趣にて。師の翁が記傳の趣もしか有れと。此等本より有し物ならましかば。其神等を生給へる事のいと物げなく、既に其物だにあらば。その神等は有るも無きも。さしもやうなき心ちして。神の功のいたく少く聞ゆめり。さてもなほそれに違ひなからむには然いふより外はなき事なから。火乎生給弖と見え。水神匏川菜埴山姫四種物乎生給弖ともある。この四種の物とあるを熟く思ふべし。直にその物を生み給へること著明く。はたこれより前に。火水埴なとの

有ける趣はさらに見たることとなきをや。また迦具土神を斬りたまへる御刀のことは。後に鐵を火に燒き。水をそゝぎ。土もて治て作れる。太刀の例をもて思ふべからず。彼の御刀は。稜威之尾羽張神と申して。武甕槌之男神の御祖に坐まし。天之安川原の水を塞上て。其處の岩屋に住坐して。天神の大詔命を承たまへるなどの事を思ふべし。

さて此の問ひ給ふ事に就て。この類ひのことを思ひ合せ給ふべき爲に、古史傳の中より。一つ二つ書出て見せまゐらす。

或人問ふ金山毘古神は。伊邪那美命の御吐物と共に生坐て。其吐物やがて金なりと言はゞ。其金は何の迦爾なりしぞ。答ふ。鐵 銅をはしめその餘あらゆる迦爾にぞ有りけむ。その由は天岩屋戸段に。金山の鐵を取り。香山の銅を取れるとある。その金山香山はおなじ山なることと彼處に云ふがごとく。さてその香山は。火神の御骸の化れる山なれば。此に由ありておぼゆればなり。また問ふ。鐵も此の時に始めて生出たると云ふこと。始に天つ神の二柱神に依し賜へる矛は鐵なるべき由。其處に云へるを違へるはいかゞ。答ふ。彼の矛は天つ神の國中の柱とせよとて賜へるなれば。産靈の御靈に成れるにて。おなじく鐵とは云へども。此なるとは本より別なり。然れば彼は彼。これは此れとして有るべし。さて此に生出たるはなべての鐵のはじめなりと知るべし。

また須佐之男命の。宇氣母智神を殺し給へるより。始て食物衣服の道の有し事の段に記せる。說

或人問ふ。是時より田殖の事。また經織る事の始れりといふ事心得がたし。さるは此時始めて。食物の道の始まりたらむには此れより以前に神たちは。何を食て坐ませるとせむ。また上に伊邪那岐命の御衣服のこと。また大御神の御裝束の事なともみえたれば。是より早く天地初發の時より。此事のなくてはいかゞなり。答ふ。そは一とわたりは誰も然は思ふことなれども いまだ古の意を得ざるものぞ。さるは世の初發の神たちは。何も世に異なる神德の坐ませば。食物は看たりや看さずやいかに有けむ知るべからず。又衣服のみならず。すべての調度も。皆その御所業に成具まして。關ることな

く。其は何を以ていかにして作りたまふと云ふこと。凡人の小き智もて測知べき際にあらす。其は上に化二立八尋殿一とある處に云へることをも思ふべし。(この化立と書る字に甚だ力あり深く思ふべし)さて此に大御神の始め給へる事共は。是より以後の衣食の道の起原にて。そは須佐之男命の。宇氣母智神を殺し給へるより事起れるは。もとより如此くなるべき幽き所由の備れる事なるべく。それはた産靈神の神靈に因ることとなるは云ふもさら也。さるを然定れる後の世の凡心を以て。世を初め賜へる神の御上を准へ想ふぞ。狹き漢意のうつれる世の人のならひなりける。大御神の右の種々を見行して。此の物等は顯見青人草の食て活べき物ぞと詔へる。大御言の意を熟思ひて。この幽妙なる理を辨ふべし。

[八]千萬の人の魂の行方。この國土の墓所にとゞまれば。すなはち神靈と云ふ物なるを。爰にひとつうれたき事もぞある。そはおくつきをかまふるに。その墓誌には世のならはしにて。釋某居士某信女としも誌すなる。また位牌と云物。もと佛家にはなき物にて。儒家の神主木立とてあるを。眞似たる物と見ゆれど。是れまたならはしとなり。それにもかの釋某を書きて。そを先祖の佛としも拜むなる。然る時は。やがてさか法師のかきつに入り。神靈も佛靈の如し。但し佛の名をつくとも。神國の人なれば。死ては清々しき神靈となるものならむかいとあかぬこゝちぞする。

答。こは其人々の平日の安心によることにて。いはゆる戒名にはよらぬことなり。佛風の號をつけたればとて。佛靈となるといふ謂はなきことにて號は何とつくるとも神靈なり。(其は亡靈を佛といふは俗の通稱にこそあれ、實はたゞに靈なり、靈なる故に神靈とは書くなれど、この神の字は神佛と對へ言ふ神の義にあらず、いはゆる虛字にそへたるもの也、)然れども。其人々の平日の安心によりて。其名に好き不好はあるべきものぞ。さるは漢風をよろこぶ人は。からふりの靈號をよろこぶべく。佛法を信ずる人は佛風の某居士某大姉を悅ぶべし。(靈となりて後に、心のかはりて常によろこべる事を、きらふまじきことわりなれば也、)又古の道を信ずる人の死て後に。

世の並に佛風の靈號をつけたらむに。心よくは有るまじけれど。生たる間の本よりの名あれば。戒名は戒名として有るならむ。（そは古學の徒など、各々實名は、己が好もしきまゝに、某彦、某麻呂などゝつき居るを又呼名とて、俗は俗風。醫は醫風に。何とか世の並に、漢字音の名を稱り居るは心にさしもふさはしとは思はぬものから扱あるが如くなるべし。）幽靈のたま〳〵現れて。人にもの言へることを。これかれ聞つるに。我は某信士ぞ某信女ぞと。死て後につけたる。佛法の名を名告れる由はいまだきかず。多くは世に在しほどの名を名告れるよしなり。此は浮たる事にあらず。心とむべきことにこそ。（また何日の佛ぞとさとすことあり。此は死て後は佛といふものぞと世に在し時思ひをるならひに依りてなるべし。俗に亡靈を佛といふは、靈の替言と心得べし。）扱神靈となりても。生涯佛心にて終りたる人の死て後に清々しき神心と成む事は。まづは有まじき理なれども。神のもと忌ませる事を。後には忌たまはず。もと忌たまはざりし事物を。今は忌たまふなどに准へて案ふに。世に在りし時と。好不好の變るまじきものにも非ず。此はその靈に卜問て定むべきものなり。（かくいふは、この問條の意をつら〳〵に見るに先祖の祭りを、世の並に佛風に物する事の、慨くなど有てのことにやと、己が心にくらべて、思ひ給へらるゝ故に、いふことなり、もしさもあらば、また問おこせ給ふべし、答ふべきことあり、こはさしはかりては言がたきことなれば、今は申さずなむ。）凡なへて世の愚人は。百人が百人ながら。中子をたのみ額をつき惑ひをるを。そが魂のゆくへよ。兼て念じおきつる。かの極樂は有らざれば。いづくをはかと尋てば。十萬億土の道ならむと。其墓にも鎮もり得ずて。うかれさまよふらむかし。但しさる愚人どもゝ。地獄極樂の無き理を悟りて。其墓に魂は鎮まるならむか。またはかゝる愚なる極みの人の。正しからさる魂は。消失ぬべきことわりならむと。

答。いかにも考給へる如く。さる愚人の魂は浮れさまよふもあるべく。又死て後に。始て地獄極樂のなき事を知りて。墓所にしづまるも有るべく。また上方すぢの一向宗などの如く。墓をさへに建ざるは。

そのいはゆる本山か。(この宗の人、その本山に心をむくること、信に一向なればなり)或は。我家にかしづける。阿彌陀の祭屋などに。鎭りもすべし。何れにも消失ることなし。

〔十〕心正しき人の靈。この土にとゞまり。子孫をも護る理りをもて思へば。其うからやからに。何ぞのをりには。さとしごとなど稀々には有りもすべき物なるを。さる事のをさ／＼なきはいぶかしき事也。此は人のみならず。社々に坐す神々もまたしかなり。上つ代には。人に着りて御誨などありしかど。今はかつてその事なきもいぶかし。

答。靈のさとしのこと。人ごとにこそ然有らね。人に依りてその亡靈の思ひかけずいちじるしく誨しなどすること。世にいかほどもあり。その人ごとに然らぬと。またしば／＼さることのなきは幽と明との隔りにて然は有りがたき由あることなるべけれど。其は幽冥に入て試ざるほどは。明らめがたきことなり。また神等の御誨の上つ代にはしば／＼有しを。今はすくなきことは。外國ぶりの心にうつりて。神をうたがひ。神と人との間の遠くなれる故なり。古の道の本の如く世に普くなりて。人の心の直くなりなば。神の御稜威も本のごとくならむかし。さて今もをりをり御誨言はあるをかつてなしとはたま／＼見聞もらされたるか。

〔十一〕此國土に。魂のとゞまる。とゞまらぬの事を熟く思ふに。そは其の人々による事にて。なべての事にはあるまじくと思ふ由あり。近くその事實につきて見るに。十まり五とせばかり以前に。おのが知れる人の心魂いちはやびて猛かりしが。それが死期に。したしき友等を枕方に集へて。誓言していへらく。吾さがりなば。地獄にまれ。極樂にまれ。幽冥のあるやう。一たびは天かけり來て汝等に告てむ。もし告ることなくは。何事もあらで。魂も消うせぬと思へと云ひて死りぬ。さて年月を經て。其友に逢ひて。いかにと問ふに夢にも幻にもかつて見えずと云へり。是らはかの儒者のいふ。魂魄ともに消うするといふ説に合へり。然るにまた近世の伊豫なる。みこたま明神。根津權現など云へは。死て後も生る時の姿にて。その君を諫め奉りしことなどもあり。又寃鬼の祟る事も世にまゝあり。

こゝを思へば世に卓越ていさをしき忠誠人。又心の柱の正しく動ざる人の靈は。正しくとゞまるべくそ思ふ。さては思ほえず。悲きめにて死たる寃鬼。又は船幽靈の類。或は强惡の限りなき者のつみなはれて死たる魂。或は頑愚人の佛を賴み死て。その極樂といふべき所なくてさまよふ類ひ。おほよそかくのごと。あしくて魂のとゞまると。よくて魂のとゞまるとの差別あるべし。此の外にすぐれたることなく。よくもあらず惡くもあらぬ。なべての人草はみな。心に神と留るべき柱のなければ。其の魂士とゝもに。消ぬべき理に侍らずやいかゞ。

答。上に云へる如く。靈となりて後に靈異の有無は實には。顯世よりは推量定めがたきことにて。必靈異あるべしと思ふ人の。思ひの外にしるしなく。なほなほしき輩の死て。いたく年經たる後に。おもひがけず。いみじき靈異を現すことなども多かれば。何れにも此は幽冥に入りて見ざる程は。その所由を定がたきことなり。そこの知り給へる人の。死際に言おける言の如くならざりしも。しか思ひ設たりし如く。天翔り來がたき故由などの有りて來ざるならむ。告に來ざるをもて。消失たりと定むるは。道の大義に違へり。其はもし親などのさる言をいひおきて死たらむに。其言の如くならぬは。消失たる也とて。祭らであるべきか(よし祭りたらむもさる念の有りては、眞情よりする祭ならで、漢風の飾りにする浮たる祭りなるべくこそ、)これに就て。常に弟子どもにさとしおくことあり。そは人の亡なりたる後は。おとづれなきを以て。消失たりとな思ひそよ。然いひなどせむは。人々に不孝を敎ふるに等し。道を學ばむと思ふ人のかけても言ふまじく。思ふまじき事なりと申す事に侍り。さるを儒者なむど生さかし立て。魂魄共に消失せて知ることなしといふ理を。うへ〳〵しく言ひちらすは。すべて道の大義を。辨へ知らざる故なりけり。(此れ等のことはおのが鬼神新論に、委く辨へおけるを披き見て辨へたまふへし、)然ればたまたまに靈異をあらはす事のある。その事實をとめて。おとづれのあるなしをゑらぶことなく。みな知こと有りて。ことによりてはしるしを現すことなる由を熟辨へ。しか言弘むるぞ道の大　義には有りける。さて問條にみこたま明神とあるは。和靈明神のこと

か

〔三〕佛はしめて渡り參來しを。國津神の御怒りあらむとて。退けむとせしは。守屋ノ大連の忠誠なる心なり。さるを佛をゐやまひ。此を世に弘めし馬子の輩は。神國のためには忠誠ならざる人々なり。この時佛法のひろまると。亡ふるとのさかひなれば。天照大御神の。天皇に佛を退けよと。御告の御さとしもあるべきを。さる事もなく。八百萬神たちも。手をつかねて高みより見そなはしおはしましゝはいかに言ひ甲斐なき事ならずや。いかに悲きことならずや。あまさへ守屋大連は矢に中りて命死き。然るに醜馬子の輩は。佛像を造り吾を勝しめたまへとこひのみ誓言して。つひに守屋を亡しぬ。さて後に難波の四天王寺を建たり。書紀に記されたるを見るにも。いとあぢきなく思ひ侍るなり。かれ倭姫世記に。佛を退けよと。大御神の御さとし有しとあるはいまだ皇國に。佛の渡り來ざる程なるを。ましで佛の參來し時にあたりて。是を退くべきみさとしなくては叶はざることわりならずや。又社社に坐す神たちも。御靈ましまさば。たゞ一と言の

御誨だにあるならば。誰かは乖き奉るものあるべき。このことわりはいかゞあらむ。

答。こはまづ天照大御神の。皇御孫命の御世を手長の御世と堅磐に常磐に。幸へ賜ふことはさらにも言ず。凡て外つ國々の皇國によりて事へまつらふことの本までを掌らする事を辨へおきて。後に辨ふべきもの也。其はその御前に白す祝詞に。皇神能見霽志坐四方國者。天能壁立極。國能退立限。青雲能靄極。白雲能墜居向伏限。青海原者棹柁不干。舟艫能至留極。大海爾舟滿都々氣弖云々。遠國者八十綱打掛弖引寄如事。皇大御神能寄奉波云々又皇御孫命御世乎手長御世登堅磐爾常磐爾齋比奉茂御世爾幸閇奉故云々とあるを以て。大御神の外國々の參來ることの本を知看す事は著明を分けて言ふ時はその外つ國々を仕へ奉らしめたまふことは。其荒御魂。八十枉津日神のあづかり知りたまふことになむ。（さてこの御尾前を大國主、少毘古那神の掌給ふ也、そは眞柱にいへり）これわが神道の中に、もとも奇異に妙なる理りの曉がたく明らめがたき事の限なるを。此の理りを明らめむとするには。眞柱に記せる。禍津日直毘の天照大

御神と須佐之男命の荒御魂和御魂に坐て。枉津日神は須佐之男命に。直毘神は大御神に屬坐すものから。また互に。その御靈の往かひます理りをよく辨へおきて。後に知らるゝ事になむ。かくて外國の參來る事の因縁は。須佐之男命。その荒御魂枉津日神を帥て（かの五十猛命やがてこれなり）外國々を廻りたまひて。皇國の地に歸り渡らして韓郷之島是有ニ金銀一若使吾兒所御之國、不レ有ニ浮寶一者未ニ是佳一也（書紀の一書に見ゆ）と詔て。舟に造るべき木を生し置き賜へることは。後の世に韓國を伐せ賜はむと。定置き賜へるなるを仲哀天皇の御世になりて。天照大御神の御誨しまして。西方有レ國金銀爲レ本目之炎輝種種珍寶多ニ有其國一吾今歸ニ賜其國一と詔ひて（書紀にも見えたるを、今は古事記の文を擧つ）神功皇后に韓を征しめ賜へることは、神代に須佐之男命の韓國之島云々と。詔ひ定めおかせることの結也。此を熟味へて。その御靈の互に往き通ふ理りを曉るべし。さて此時の御誨よ。天照大御神の御心者とあるは。全體の御名を詔へるなれど。實は荒御魂の御心なりしことの證は。大后の韓を征て還り坐し。難波に御舟を看むと爲賜へる時に。御舟海中に廻りて。進まざりしかば。卜へ給へるに。天照大御神の。我之荒魂不レ可レ近ニ皇居一當レ居ニ御心廣田國一（神功紀に見えたり）と誨ヘ給へるにて炳然し（仲哀天皇の神の御言を信たまはざりしかば、其神大忿らして汝者向ニ一道一と詔へるも、荒御魂の御すさびときこゆるをも、おもひ合すべしあなかしこ）さて外つ國の參來る因縁は。かく枉津日神の御心に因る事なるをそれはた惡き御心にて。惡き事を殊更にものし給はむの御心にはあらず。本より好き御心にて。皇御孫命の御爲に善らむ事をとてものし給ふなれど。（そは上に引る須佐之男命の、韓國之島は云々の御言をよく味ひ辨ふべし）其の善き事の中に惡き事いつぎ。惡事に善事のいつぐぞ此の大神の幸ひ賜ふ恩頼のしるしなる。（其は眞柱に此神の生坐る謂を記せる處又須佐之男命の宇氣母智神を殺し給へるに依て衣食の道の具れる理りなどを思ふべし）さて此大神の御心によりて。種々の物を得たまひ。新羅王を御馬飼と定め。百濟國を内宮家の國と定め賜ひて。大御稜威をかゞやかし。是より外つ國を從へ給へることは。いとも

めでたき事なるを。韓王が畏みのあまりに種々の物を貢進るとして。佛をものしつるも。朝廷の大御心をとり奉らむとの好心なれども。外つ國の從ひまつらふことの本は。枉津日神の御心なりし故に。彼善事に此禍事のいつぎ來てわざはひの本とはなれりける。此時しも守屋大連の此を退けむとせられしは。信に然ることにて。馬子等がこれにへつらひ事へて。弘めたりしは。頑愚のかぎりなることは云ふもさらなる事ながら。よく思へば此は顯事の上に論ふ定めにこそあれ。實はとあるもかゝるも本は枉津日神の御心にて歸賜へるなれば終にその歸たまへる如く行れたるにて。守屋馬子のうらうへなる所爲を論ふなどは。末の事になむ有りける。（凡て神の道を心得定むることは顯事と幽事と入交ふ理りをよく明らめおきて幽事より顯事にうつして辨ふべきことにこそ。）さて上に云る如く。枉津日神の御心とは申せども。それはた惡き事と知看しつゝ。ものし給ふにはあらず外國を皇御孫命に歸賜ふ。大き御靈のふゆの中にこもれる禍事になむありける。（此の理を深く思ふべし、熟く考ふべし。）さて佛法の參來し時に。

天照大御神その餘の神たちも。天皇に佛を退け給へと御誨もあるべきに然もなく見行しましゝは。いふかひなきことゝ佛の道を。惡む心よりは我も人もしか思ふことゝなるを。上の件言へることどもを深く思ひ。かつ枉津日神は大御神の荒御魂とは申せども。その所思看すまゝにはものし給ふこと得たまはでこ（上に引る文に、我之荒魂ハ不レ可レ近ニ皇居一と詔へる御言、をよくおもふべし、この御誨は和御魂の御心にて御自も荒御魂に御心おきて皇居に近づけたまひて、御荒びなどのあらむことを、畏みまして皇居に御心をそへたまへる趣の御言なるをや。）その荒び賜ふことの盛なる時などは。得堪たまはず畏み避け給ふばかり。いみじき御稜威に坐ませば（そは岩屋戸の段の故事をよく讀味ふべし。）彼の道を引入れて世に施らし給ふをば。和御魂の御心には。宜からぬことに所思看しつゝも。其のまゝに置きたまへることゝ察られたり。（大御神の全體の御靈の佛を忌たまふこと、其證あり下に引り。）大御神すら如此おはしければ。まして餘の神たちは。いかにとも爲給ふこと得たまはめや。（此も岩屋戸の段と合せ考へて思ひ辨ふべ

し〕此等を考へ通して。佛法の世に弘ごれる理りを曉るべし〇倭姫命世記に。屏佛法之息とあるは後の佛を好むものゝ加へたる文にて。屏の字の事は神道闕疑編といふものに。屏息訓點宜訓藏息不可訓斥息。所謂屏息者肅敬之至也。論語註云屏藏也。と云へるこれ正解にて。屏息の意は佛法を心によく信じて。その息を藏して。表に現すべからずと大御神のいましめ給へる由にて。如此文を加へたる事は。したに工める事の有りて。爲つるたぶれわざなり。世にいふ佛法を退けよと未然に詔ひおかしく申にはあらざるなり。（此こと委しくは、巫學談弊に辨へたるをやがて見給ふべし。）

〔三〕今の世神の忌給ふ髮長の輩が。社に仕へまつりて。遷宮導師などいひて。いかめしげに神の御鏡を衣の袖にうつしとりて。其事を執行ふなど。汚はしくふさはしからぬ物から。あなうるさ。斯る髮長な近よりそとも。御告だになきは。かしこけれど。御靈ありとしも。おほえ奉らぬばかりなり。但しかく兩部といふ御社には始より。神靈のうるさしとおもほして。鎭まりおはしまさぬ理りなるべきやいかゞ。

答。是また。佛法の弘まれる本の謂は。大御神の荒御靈神の御心なる事を辨へ知るときは疑ひなかるべし。そは彼の神の御心にて佛法を世に弘めたまひ。天照大御神の本つ大御魂すら。まづ打すておき給ふなれば。餘神たちも。その儘に忍びたまふことゝおぼゆ。然るにても。いとも穢き業のあらむには。忽に御祟もあることなれと。然らぬかぎりは。頭圓き人の仕奉りて佛經のからさへつりを誦立るなどは。をこなることには所思看さめど。それも好心をもてするわざなれば、大らかに捨おき給ふなるべし。然るは社々に付き居に。彼の別當遷宮導師など。頭圓くて佛經を誦しなどするこそ異狀なれ。神の御國に生れし人のしるしとて。心は何も變りなく。善麗き色には心のうつり。美味物をばうましとおほえ暑さ寒さを身にしる事も異なく。さて大凡は死人をとりおく事にはあづからで。却て生禰宜たちの。佛くさきしわざどもを打交たるよりは。いさきよきことも多かるをや。凡て神の御心は凡人の思ふやうにはあらずて。いとも大らかなる上に。人の短き齡にくらべて

こそ。千年五百年は、いとも遙けきことの如くおぼえて。かばかり久しき間をひろこり來て。御社どもの率られたまへば。本にかへる由あるまじく。あはれ神は坐まさぬことかもなど法師どもをば、蹴散して捨たまはぬやらむ。今の間に佛風のことをばはふり捨まほしなど。古の道に厚き心よりは。我も人も憤ろしく思はるゝことなるを。また熟思へは無窮に坐す神の御上にとりては。千年五百年ばかりの間は。ただしばしのほどなるべければ。凡人の道て思ふやうには所思看さぬ理なれば。しばらく其儘におきたまふにぞあるべき。（そは、天の下常夜往りし枉事に對ふばかりの事ならむには、神集々まして議ごちも爲たまふべけれど、佛法などの枉事は然ばかりのことにはあらず、神の御心にとりては、少けき禍事ならむかし。）さて餘神々の御社に。法師の仕へ奉るが多かれと。大御神の本つ宮には。いみじく佛風の事を忌たまふ御制にて。それやがて大御神の御心なることは。云ふもさらなるを。その惡ひたまふ事實のいちじるきを一つ二つ言むには。宇治左大臣頼長公の台記に。天養二年三月七日の處（此は玉がつまにも記しおかれき。）また三條内大臣實房公の治承元年に。公卿勅使を勤めたまひし時の記などを見て。そのいみじきことを知るべし。（此は巫學談弊、また玉だすきなどに委く記せり。）さて如此く大御神のきらひたまふ道のいつまでかは世に傳はり行べき。漸々にうすろぎつゝ終には滅び失なむこと。いふもさらなり。その思ひ合すべき事を言は知り給ふごとく延暦内宮儀式帳に。王臣家幷諸民之不レ令レ進ニ幣帛一重禁斷。若以ニ欺事一幣帛進レ人遠波准ニ流罪一（なほ延喜式また長寛勘文などにもこの旨見えたり。）と有て上つ代には。大御神宮に幣帛奉ることさへ叶はざりしかば。まして諸民の家々に。御靈代を齋奉ることなどは。かつて無りしを。中頃世の亂たりし時に（この亂は餘りに儒佛の道を、用ひたまへるより根ざしたることなり、そは別に論へり、）諸國よりの貢物も奉らで。宮人たちのいたく貧くなれるに所を得て。法師どもの立まじり法樂といふ事を始めて。その巻數の箱を諸國にくまりて。（その銘をば、兩大神宮諸神諸佛八大龍王守なと書りしとぞ）幣料を取れるが始めにて。これよりつひに。今の世の如く御祓箱弘くなり。や

うやくに法師の徒は退けられて。宮人より配ることとはなれりける。(されど御師といひ、檀家といひ、請と云ひ、坊入などいふ言はなほのこれり。)上つ代には。庶人なとの。大御神へ物奉ることはさらにもいはず。御靈代を家に齋奉るなどの事は。かつて無りしを。外國々の道の用ひらるゝにつれて世も亂れ。終に伊勢の兩宮まで佛法にまじこられましそれより御祓箱を配ること始まり。今は一向宗日蓮宗といふをのぞくの外は。大凡御祓箱をうけて御靈代と齋ひまつることゝなれるをおもふに佛法の弘まるにいつぎて。かく成り來しは。皆神の御心なりかし。かくて日に異に古學の弘まりて。此處にも彼處にも。外つ國々の道のきたなきことを辨へたる人の出來て。神事に佛風の事どもの交はれるをにくみて。そを古風に改めむとする人諸國に多く。またなへても佛道のつたなきことを辨へて。信ひかぬる人の多くなり行めれば。彼の道のおとろへゆく勢氣は既に見え來つ。(そは今の世の佛法を尊む人を見わたすに、むげにつたなき徒のみこそあれ、たま／＼智ある人の尊むもあるは、古の道の意をかつても知らぬ人々なるを、いさゝかも古道をきけるはさらに彼の道を信ひかぬを思ふべし、但しこは常を謂たにこそあれ、或いみしき古學者の、年老たりしかば日夜に念佛して死たりしなどもあり、此は魂に柱の立ざりし故なるを、さるたぐひの人もまゝ有げに見ゆるを、然はあらせし、その夜見道にはたどらせしと道反玉にたぐへてものしつるは眞柱を著れる本つ意なりける。)これ和魂直毘神の御靈の汚けき道はたちすて。淸々しき古の道のうまし道を。もそろ／＼に引よせ來まして。世の人みなに縫つけ給ふ。その糸口の見え來つるになむ。然るを今の間に。悉く止賜はむやうもがなと。人は思へど。然は有りがたきぞ神の大らかなる御心なりける。

〔西〕多由義俊。神祇伯資業王記をひきて云く。應神の時王仁等の儒士來り。文字始めて至る履中の御時より。能文字を書して。爾來有ニ史迹一云々履中以後。國史及家々乃留札ありといへども。唯其一代一代の記文にして神代幷に神武等のことは尋ね記さず。而して第三十四代推古の御時にいたりて聖德太子馬子以下に勅して。履中以後の事は國紀に

據り。其以前の事は口傳より得て。後世の事を以て。推古三種神器の本緣を記する篇を。即號して神代の卷とす。此功を稱して推古と諡し奉る云々。聖德馬子。佛法開基の手を以て口傳より撰せし神紀佛敎の風味を加へずしてあらむや。悲也哉。口傳廢れて。此書の意味本體となり。神代に奇說起り。法華經を以て龍宮をとき。黃泉の段に及ぶ云云。三十七代孝德の御時。蝦夷の火を以て國紀を燒く船史燼書を中大兄に奉る。然れども過半燒て全書にあらず。太子の書撰この時に亡びたり云云。入鹿の亂に史文亡びし翌年に生れし稗田阿禮に。古老の人々より。燒失せし國紀の起を。口授せしめ置たまふ。是天武の勅にて。やがて國史を修せらる聖意なりしを。崩御ましく〳〵。元明天皇の和銅の四年に、安麻呂に阿禮の口授を筆記せしむ古事記は安麻呂の手に成るといへども。阿禮の口授は聖德馬子の撰書の餘意ゆゑ。釋氏の意旨まゝ加はれり。文章博士理平記にいはく。古史文神事にして而意不適佛と記せしこそ。誠に千載の格言なるべし云々。聖德太子天下第一の佛眼を以て國史を創め。是に次くに舍人親王。釋敎を信する手を以て神代の卷を紀す。然とも此書どもに據ずしては。何を以てか。上古の事實を知らむ。續者奇妙に過たる文に於ては。用心して看ば。誠に無雙の寶鑑たるべし云々と見え侍り。此の說にては。神代の黃泉龍宮の事。その餘くすしくあやしき說は。かの聖德馬子の佛意を加へたるなりとせり。

さて此說を信ずる人もありいかゞ。

なほ此餘に聞まほしき事の侍れど、そは著はし給へる古史傳などの出るをまつのみ。

答、この義俊（俗名を多田兵部といひまた桂秋齋とも、南領子とも云ふ。）と云へるをのこは僞學利口の秀才ありしものにて。これが云へることは百千が中に一つ二つならでは信のことなくすべて己が臆度說の杜撰說を記しあれば。其心してこのものゝかける書は見給ふべし。かくて其臆度說をうらむとするに人のうくまじき事を思ひて。當時いまだ古書記錄の世に弘からて見し人の少なきを幸として。古記古文に見たるよしに託して。妄說を作り。己が妄り言の據となし。世を誣ひ人を詐むけるもの也。此の說

に神祇伯資業王記。文章博士理平記の文なと云ふも渠が妄作にて。資業王記にかゝるるゐの說さらになく。また理平記といふもの。篤胤いまだ見聞たることはなけれど。もし實に有りともそれらの說は。さわめて有るまじくおぼゆ。さるは此ほどの記錄の體を思ふに。かつてからやうのさかし立たる說はなければなり。疑ひなく此も義俊が妄說なるを。我說と云ては。人の信まじきことを思ひて。この記の名を借りたるものに違ひあるまじくこそ。然れば此說すべて秋齋が臆說なり。もし此等の說を信ずる人あらば。此の趣をさとし。はた古事記傳首卷に見えたる。古記典等總論書紀の論ひ。舊事紀といふ書の論などの條を熟讀おきてさとし給はゞ。それにて片付はべるへし。但しこの秋齋が說の中に。法華經を以て龍宮をときと云へるばかりは。少しくいひ得たり。然れども全くなきことを。法華經を以て書るに非ず。ただ和邇を龍と書替へたるぞひがごとなる。

上の件々こたひ參らすることゞもは。いといそがしきにとりあへず。筆のまに〳〵かいつけたればなほいひもらしたることも侍らむをいぶかしきことは。またかいつけて見せ給ひねかしあなかしこ。

さつきなかば

山藤ぬし御許へ

此一巻は。先に我師。故氣吹舍大人の。或人の問に答へられたる書留なるが。其說の尊きは云までも無れど。元より心覺と思しく。反故の裏などにさへ有て。讀難く足ぬ所も有しを。故有て己密に得つれば。何くれの書ども引合せ。人々にも問訂し。淸書して又なき寶と祕藏たる也。總て世の和學國學など稱て。歌作語譯を業とする輩。斯る大道の旨は知や知ずや。荷田大人の說に。今の神道を談ずる者は。皆陰陽五行家の說。詠謌を講ずる者。多くは圓鈍四教儀の解。唐宋諸儒の糟粕ならざれば。胎金兩部の餘瀝也。と云はれたりき。道の本體を知ざれば。事に臨て惑ふ心も出來べし。拙き己も。此師說に依て。靈之柱の立たるは。最も憘く忝き事にこそ。然ば古語に。海行ばみづく骸。山行ば草むす骸。大君の邊にこそ死め。安閑には在じ。の言擧も寶さる事にて。君に仕る者は。片時も此心得を忘るべからず。此寶をし。己一人祕藏らむも。最惜ければ。堅板に彫て書寫の勞に替へ。同志の人々に頒傳へむとす。然ど又密に思ふ旨あれば。百部を限て。板をば削廢るになむ。時は安政四年九月。かく云は碧川好尚

大道或問

氣吹舍先生遺草　門人　碧川好尚謹訂

或人問て云　皇國は萬國に優て尊き御國なる由。諸人一同に申唱候へ共。拙者不幸にして。いまだ其說を聞かず。願はくは其大略を承り。諸人の爲に笑ひ誹られん事を脫れ度候

答て云。御尤の御尋にて候。但し其大略と申候ても。一朝一夕の御答には盡兼候へば。大略の中の大略を可申候。乍恐　天皇の御血統は　天照大御神より御連綿にて。神代より數千萬年の今に至る迄。天下の大君に被遊御座候御事は。萬人の心得居候通にて候。然るに漢土を始め外國にては。君臣の差別無之。今日臣たる者も。明日は其主人を殺して王となり。或は王に位を禪らん事を望み候ても。其王不承知の時は。兵威を以て王にせまり。强て位を禪り受け。又は我が權威の强きにまかせて。王の位をおろし。幼年の者を王と致候類。數へ盡すべからず。是は外國代々の事を記し候物を讀て御心得可被成候。　皇國

に於ては。右の如き者は一人も無之。殊に君臣の差別。明白に御定り被爲在。　天子より五世までは。王號を稱する事を御ゆるしにて。臣下の列には無之候。但し今の世に。臣下の列なる家に。王號を賜り候は。神祇伯白川殿御一人に御座候。是は　天皇の御名代として。　天神地祇を御禮拜被爲在候故の御事にて。外に例は無之候。乍去前に申候。王號御免の御方々樣とは。又差別有之候。故に白川家は御代々。臣下の證據なる源姓を賜り候御事に候。すべて　天子の御子にても。源氏とか。平氏とか。姓氏を下され候へば。則臣下と被爲成候御定めにて。姓氏は輕からざる事にて。尤尊稱すべき事に候。右の如く　皇國は君臣の名分殊に正く。かつて外國の例は。取用ひ難き事は。申迄も無之。且君臣の唱は。萬國同樣に候へ共。實事に於ては大に相違有之候。其訣は。外國にて君臣の差別は。　皇國にて下賤の者を。一年半季の約束にて。小者中間に召抱候。主從の人情と。格別の相違は無之候。依ては自然。國王の位も輕く。上下亂雜至極に候。尤君臣の掟を嚴重に相立置候へ共。其掟を守り候者は甚少く。始終王の位を望み候者絶ず有之候。又　皇國を。神國。君子國など。稱し候事は。皇國にて自ら稱し來候唱には無之。他國より稱し候事に候。又天下を治め玉ふ事を。御マツリゴトと唱候は。神國の御風儀にて。神慮に依て。世を治め玉ひ。神祭を以て。第一と被遊候故に。御政事といふ文字を。御マツリゴトと訓申候。然は御祭事。御政事は。元より一ツにて候。是則神國と奉稱候。御いはれに有之候。今の俗人は。政の字につきて。神祭と。國を治る事とを。別のやうに心得候は。大なる誤にて候。昔漢土。宋の太宗と申候王は。皇國君臣の道正く。　天子は開闢以來。御一世なる事を承り。大に歎息。稱美奉り候事有之候。是は全く　天照大御神の神勅に　御子孫萬々世。天地と共に。長久に。天の下を治め玉へと仰られ候を。皇國の萬人。能々相守り候故に候。すべて　皇國の風儀は。古例を守るを第一と致候に付。萬事長久に候へ共。漢土にては。聖人賢人といふ者。自分の才智を以て。其時々法令を改め。古例に拘らず候事なれば。又其後の人も。追々に改め。更に舊例を守る事は無之候。是則王業の長久せざる驗にて候。乍恐　天照大御神

の御魂は。伊勢の内宮にまし〳〵て。御本體は世界萬國を照し玉ふ。日輪に被遊御座。皇國は其御誕生の御本國にて。天皇は其御子孫に被爲在候へば。世界萬國悉く　皇國に從ひ奉るべきは。勿論の事に候。猶　皇國は君國にて。萬國は臣國なる證據は。別に委く認候物有之候間。今は相略申候。

又皇國は武を以て本體とする事。自然の勢ひに有之候。其大略を申候はゞ。天地開闢の始め。皇產靈の神より。伊邪那岐。伊邪那美の神に。天の瓊矛を賜ひ。其矛を以て。滄海をかきなし玉ひしに。其矛より垂落る潮。自然に凝て。オノゴロ島となり。則其島に瓊矛を突立て。國中の御柱となし玉ひ候。又　天照大御神は。女神におはしまし候へ共。事ある時には。弓矢御劒を帶し玉ひ。又　天孫を。始て　皇國の大君となし奉り玉へる時は。三種の神器の內なる。御劒を授け玉ひ。大國主の神は。八尋矛を　天孫に御禪りあり。又　皇國武神の統領たる。鹿嶋。香取の大神は。伊邪那岐の大神の。御劒の御魂より生出玉ひ。又　神武天皇東征の時。天津神より。布都の御靈の御劒を賜り。天皇終に長髓彥を誅し玉ひ。又

仲哀天皇の御宇。三韓御征伐の御託宣あり。但し此時は三韓より。射向ひ奉る事は。更になかりしに。先づ熊曾の御征伐を止て。西方の國を伐玉へと。大神たちの厚き御さとしありて。三韓を伐從へ玉へる。などを思ひ奉るべき。事に候。今の人情を以て見れば。彼より射向ひ奉る事もなければ。先づ御使をも遣はされて。彼いよ〳〵從ひ奉らずは。其時御軍を起して。御征伐もあるべき御事と。思ひ奉る事に候へ共。大神たちの御心には。彼は元より　皇國に臣服し奉り。彼より服ひ參るべき事なるに。彼は驕り高ぶり居るを。惡み思召て。右の如く不意にも。御征伐の御さとしは。有し事と。恐ながら奉存候事に候。然ば世界萬國の中は。尺寸の土地も。　天皇の御土地ならざる所は無之。一人の民も。　天皇の御人ならざるは無之。乍恐攝政關白大樹公と申せども。　天皇の勅許を蒙り玉ひて。官位に任じ玉ひ候へば。是以　天皇の御臣下なる御事は。申迄も無之候。但し　天皇の御名代として。天下の萬人を御治め在せられ。下々の者は。近く御惠を蒙る事に候へば。　天皇の御次には。右の御方々を。尊び奉るべき御事に候。

殊に　東照宮は。數百年の亂世を治め玉ひ。夷狄を攘ひ。天下の惡政を正して。　天皇を厚く御尊崇被爲在。正き學問の始をも起し玉ひ。其御功德の大なる事は。申迄も無之。當時太平を樂み候も。皆この神の御恩德なれば。其御志に基き奉るべき事に候。其證據は。此神の御遺訓。百ヶ條と申候物の中に。

一神祇を尊崇し。心身を琢磨し。生涯怠るべからざる事

一日本國知行惣高の內。貳千萬石は。忠勤の大小名に配當せしめ。八百拾九萬石の處是を知行し。禁裡の警衛に備へ。四夷を撫べき事

一云々參勤の者には。城下郭外の固め。或は普請手傳。火災消防等の。諸役を宛べし。是全く我家の私用にあらず。禁裡警衛の將軍職たる故也

一臣。君を弑するの罪科は。其理朝敵にひとし。其從類所緣の者に至るまで。根を刈り莖を截べし。縱弑せずといへども。家來主人に對し。手向ひ致すに於ては。可レ爲二同科一事

一山川海濱等の諸運上金は。濫に是を用ゆべからず。皆　禁裡の御用費に宛べき事

一自他。身を神國に受る者也。儒佛仙等の。外國の道を信ずる者は。我が主人を差置て。忠を他人の主に勵すが如く。是本を失ふの理にあらずや云々

一當將軍家の格式は。鎌倉殿を準繩とす。云々然りといへ共。小松殿の志は廢すべからざる事

一武威充溢する時は。驕奢なしといへども。自然寶祚を輕んじ。其愼に懈る事。古より皆然り。是神國の本を失ひ。私欲の源に溯るは。其罪輕からず。必天罰を蒙るべき事

一親王家宮方は　天子に接して尊崇奉るべし。丞相卽闕の公卿等も。相繼て古法に違はず。無禮の働。麁末の振舞。仕間敷事

一禁裡　仙洞の崩御。后妃宮方の薨御は。天下の諒闇。國家の大變なり。上古は四海八音を遏密す。正朔五節猪兒。嘉筵等の祝席。最穩便すべし云々

一天子踐祚。及大嘗會の用費は。當家の當役たり。萬般略吝すべからざる事

右は百ヶ條の中。敬上に關る事のみを出し申候。其

外いづれも金玉の御ヶ條にて候。尤誰も心得候事にて。今更申迄も無之候へ共。外國の道々を。悪く學び候者には。稀に心得違の者も有之候哉に。承り及候間。聊御定めを申迄に候。然ば此御國に居る者として。 天皇の御勅諚に違背仕候者は。朝敵逆賊たるは。勿論の事に候。抑 皇國に於ては。上古より朝敵となりて。戰に勝候は。只北條義時。一人に候へ共。終には其從者なる。深見三郎に弑せられ。今に至る迄。逆賊と號して。人皆是を憎み申候。又足利尊氏も。一度は朝敵の名を蒙り候へ共。元來奸佞邪智の人に候へば。 仙洞へ願ひて 院宣を賜り。後には 天皇を奉じて戰ひ候故に。朝敵の名を脱れ申候。又清盛公。義時。尊氏卿等の人々は。暴悪無道にて。天下の土地。多分は一門從類の知行所と相成。乍恐天皇をも困しめ奉り候へ共。さすがに 皇位には。心をかけ不申候。漢土にて。周の文王と申候人は。表に仁義を飾りて。人を服さしめ。天下の土地。三分の二を領して。猶其君に從ひ居候へ共。後に其子武王に遺言して。時至らば疑ふ事なかれと申候て。終に其君たる紂王を亡させ候を。孔子は是を至徳と褒申候。右文王の行ひ候は。仁義の擬ものにて。實は逆意を含み候事は。武王への遺言にて。明白に有之候。清盛義時尊氏の如きも。漢土に候はゞ。至徳と褒られ可申哉。北條足利の時代は。儒道と佛道のみ流行して。其道を信ずる人多く有之。 朝廷も大に衰へ玉ひ。其尊きを心得候者少く候。故に。武威に恐れて。義時等の下知に從ひ候へ共。終に義時は。天罰を蒙り。從者の爲に弑せられ。其後父子相續纔に六世にして。高時の代に至り。一族七百餘人同時に自殺して滅亡に及び申候。然る所近年正名の學問。盛に行はれて。萬人 朝廷の尊き御事を心得候へば。北條の時代とは。大に相違致し候。萬々一逆臣ありて。其下知に從ふ者有之候共。天下是をゆるさず。後世迄も悪名の消る時は。無之事と存候。

問て云儒道と。佛道。流行致し候故に。北條足利の時代は。 朝廷も衰へ玉へりとは。餘り甚しき御説には無之哉。儒佛の悪き事。一ト通りは御説の如くにも可有之候へ共。猶外に深き意味ある事かと存候。

答て云。決して甚しき説には無之。尤深き意味など

は。更に無之事に候。抑漢土にては。王に賢子ありても。愚人なれば。庶人とし。臣下の賢人を撰て。位を禪り候事に候。是は賢子にても。惡王なれば。臣下の者の難儀に相成。且は擬賢人の爲に。天下を奪はれんかとて。始より他人に禪り候事の由。是を堯舜の受禪と稱し。堯舜をば聖人と唱來候へ共。此後の惡人どもは。是を例として。其君に迫り。强て位を禪り受候事と相成申候。又湯武の放伐と申事有之候。湯と申人は。其君桀王を。惡王なりとて追出し。自ら王となり申候。又武王の事は前に申候通り。其君紂王を弑して。位を奪ひ候惡人にて候。然るに右四人共に。聖人と稱し來候。尤其君たりとも。惡王なれば。天に代りて是を伐とか申候事故に。後世の惡人ども。皆是を例として。惡行を致し。首尾能主人の國を奪ひ候へば。諸人是を王と尊び。聖人と稱し。萬一事を遂ざる時は。逆賊と誹り候事に候。又湯武の事は。孟子に。齊の宣王といふ諸侯。孟子に問て云く。昔湯と云人は。其君桀王を追出して。位を奪ひ。武王は其君紂王を弑して。是も又位を奪ひ候と云事あり。臣として君を弑すとも。宜き事に候哉と尋しに。孟子答て云。仁義を賊ふ者を殘賊といひ。其殘賊の人を一夫といふ。然れば一夫の紂を誅するといふものにて。君を弑するといふものには非ずと申候由。然れども此時。實は孟子も申訣に困りて。苦しき答をばいひしなり。尤武王は前にも申候通り。其父文王と共に天下の土地三分の二を得たるは。誰より賜りて領したるや。是實は其君の土地を。攻取て領したるなり。然は則逆臣なり。其君たる紂王よりこそ。武王を征伐すべき事なるに。是をも赦し置候は。是又大なる恩にあらずや。然るに臣として君を伐事。惡逆に非ずして何ぞや。殊に紂王惡なれども。いまだ忠臣の諸侯。四十餘國從ひ居候へば。旁以一夫とは云べからず。其後武王の孫なる。康王の時まで。右の四十餘國は。猶殷を慕ひて。周に從はざりしを。儒者等は。周の世の頑民と申て。誹る事に候へ共。皇國に候はゞ。四十餘國の忠臣とて。稱美すべく候。是は漢土に生れたる。忠臣の不幸と可申候。

扨又　皇國の古代には君を弑し親を弑したる者。一人もなかりし事は。正しき御記錄に見えたる通りに

候。然るに漢土の道。世に行はれしより。蘇我の馬子。東の漢の直駒といふ者をして恐多くも　崇峻天皇を弑し奉り候。是　皇國にて。君を弑したるの始なり。此時の攝政は。聖德太子にて。儒佛の聖人と稱する御方なりしに。外國の風を信じ玉へる餘りにや。其罪をも糺し玉はず。然れども右直駒は。後に又惡事あるを以て。誅せられ候。但し　天皇を弑し奉れるは。此者のみにて。是より後には無之事に候。又親を弑したるは　推古天皇の御宇に。僧にて祖父を殺したる者あり。是は親殺の始なり。北條義時等は。湯武の惡逆を。よき事と思ひ候故に。恐多くも　天皇を遠き嶋へ。遷し奉るに至り申候。扨儒書の中にも。大學には格別。害となる事は無之。中庸論語には相見え申候。すべて人の行狀を愼む所などには。宜き事も有之候へ共。彼國の風俗にて。臣下なる者も。其行ひに依ては。王となるべき道理を。教へ候ものにて。孟子の書は殊に甚しく。かつて謀叛の心なき者にも。惡心を起させ候種と相成可申候。右の通りの書ごもにて候間。外國の如く。王の定まらざる國には。相應の書にも。可有之候へ共　皇國の如く。君臣の名分定まり候御國には。害となる事。甚多く有之。依ては主人ある者の讀候は　上へ對し奉り。不敬至極の事に候。すべて漢土の書は。文字を覺え候には宜く。又よく功者に。物をいひ廻し有之候へば。世間の小事に取候ては。調法の事も不少候へ共。人倫の第一たる。君臣の大義に於ては。前に申候通りに候へば。外國の學は。取捨の心得第一の事に候。萬事　皇國と。外國と。國風の違ふ所に。眼をつけ候はゞ外國の例は。取用ひ難き趣も。明白に相分り可申候。

扨又佛道は。人倫の行ひに外れたる道にて候。其故は人皆釋迦の立たる通りを守り候はゝ。第一に人種盡果て。無人の境と相成可申候。釋迦の實父も。始は其幻術手妻に。驚き伏し候へ共。後には世界の。人種盡るに至るべしとて。大に歎息致し候由。尤の事にて候。殊に釋迦は。父なる人に。我が足を戴かせ候程の無法にて。君臣父子の義理もなく。又いかなる惡事惡業致し候者も。念佛致候へば。其罪は消て。極樂淨土の。佛となると教へ候故に。惡人は幸として。惡事をなし。後世益々。暴逆無道の國と。

成果可申候。又今の僧どもの如く。自分勝手の説を立候て。高貢邪慢の所業のみ致し候はゞ。終に釋迦の立たる。地獄の三悪道に落て。苦を受可申事に候。委しくは儒道の事は。駁戎概言。葛花。西籍慨論などの書を讀み。佛道の事は。赤倮々。出定後語。同笑語。古今妖魅考などの書を。能々讀候はゞ。相分り可申。是々も。外に深き意味などは。無之事に候へ共。稀には意味ありげに。微笑致居候類の人もあるは。全く負をしみと申ものに候。右様の人は。能能心を平かにして。前に申候。書どもを讀可申候。又俗に。神儒佛と並べ唱候て。其奥意に至りては。いづれの道も。同事なりとて。「雨あられ雪や氷とへだつれど。落れば同じ谷川の水。といふ歌などを。證據に申者も。有之候へども。此歌は佛者の作にて。神佛は。元より一ツなりといふ。妄説をおし立候。奸僧の詠たる歌と存候。前に申候通り。神儒佛。各各其趣意。天地懸隔の相違に候へば。必其僞りに欺かれざる様に。能々眼を拭ひて。書物をば見るべきものに候。尤此方の學風にて。證據なき事は決して不申。右本書共には。一々證據を出して記し有之候。

右神佛を混雜致候。惡計の元は。神祇考に論説あり。又巫學談弊にも辨じ置候。

問て云。俗に神道と申候は。神を拜し。加持祈禱など。致候事を申候様に。心得居候處。右之御説にては。甚相違之様に被存候。

答て云。神道と申にも。種々有之候。第一に眞實の神道と申候は。前に申候通り。神國の神國たる　御國體を知り。神の成置玉へる事を。習ひ學びて。正き人の道を行ひ候を。實の神道と稱し候。すべて世の忠臣孝子。其外人の道に外れざる者は。皆眞の神道にて候。又俗に儒佛の道と。並べ唱候神道は。甚賤きものにて。多くは神を賣物にして。金銀を貪り。御國體の事などは。夢にも知らぬ者に候。世に是を。俗神道とも。鈴振神道とも。乞食神道とも唱申候。扨眞實の神道は格別にて。天下の正道を學び候故に。是を大道之學問。幽無敵の道と稱し候。すべて　皇國の道は根本にて。儒佛蘭等の道々は。枝葉にて候へば。學問は根元を尋學びて。枝葉のこともを知るべく。枝葉の事のみを。學び候ては根本の事は知がたく候。論語にも。君子は本を務む。本立て道生と

有之候通り。銘々身の根本たる。皇國の事を學び候て。先ッ其魂を。皇國人の魂となし。後に外國の事をも學び。宜き事は取用ひて。公道の助と致し可申事に候。右の如く。外國の横道に迷はざる樣に。心掛候はゞ。眞實の日本人と可申候。然るに。始に外國の事を學び候ては。先入師となると申候通り。まつ魂は。外國の人に成居候故に。皇國の正く尊き事は。更に知れず。殊に漢籍は。文辭を飾り。立派に書立候物なれば何事も尤之樣に思はれ。皇國の實事は。虛飾なき故に。却て淺々しく見え候て。何分腹に落難く。自然外國を尊び候樣に相成。萬一外國より。攻來候事あらば。夷狄へ降參致たく。思ふもあるべし。右樣の者有之時は。外國の廻し者を。養ひ置候も。同樣之事に候。すべて無學の人は。生れながらの道を。心得居候故に。質直にて宜く候へ共。外國の道々を。悪く學び候人ほど。世に恐ろしき者は無之候。かく迄申候ても。一度信じ候事は。改め難しと申候は。己が身の本たる。皇祖神の御恩をも。御國恩をも。知らざる者にて小人の限りにて候。尤己が生れたる國の事に候はゞ。頑に心得候も無レ據候へども我が國を差置て。外國の事を。本と致候はこ國に不忠の人にて候禮記にも君子は其先祖の美を論譔して。明に是を後世に著す者なり云々其先祖善ありて。知らざるは不明なり。知て傳へざるは不仁なり。是君子の恥る所なり。又美を稱して惡を稱せず。是孝子孝孫の心なり。とも有之候。尤惡事と知らずして。行ふを過と申。惡事と知りながら。行ふを惡行とは申候。論語にも過ては。改るに憚ること勿れと申候如く。宜からぬ事を心得候はゞ。速に改め可申。殊に何ほど。書籍には博覽の人なりとも。學問の本立ち不申候ては。學者とは難レ申候。然るに近來は。皇國の大道。大に開け。日を追て正道に復る人多く。當時大儒の人には。心得違なき樣に相成申候。

問て云。前の御說にて。儒佛等の趣意は。大略相心得申候。猶又皇國君臣の道。常に心得べき事の。大略を承り度候。

答て云。世に大忠臣と稱し候は。天皇の御爲に。力を盡し候人を申候は。云迄も無之。俗に皇國の三忠臣と唱候は。小松內大臣重盛公。萬里小路中納言

藤房卿。楠正成朝臣に御座候。いづれも　朝廷の御爲に。千辛萬苦被成候。御方々に有之候へば。今に至て益其功徳を稱美致候。右重盛公之事は。源平盛衰記に。

清盛公　仙洞を。鳥羽の北御所へ。遷し奉らんとて。軍兵をめし集め。既に院參せんと。せられし時。重盛公參り玉ひしかば。清盛公申されけるは。今度成親卿謀叛の事。實は　叡慮より出ると承れば。世の鎭る間。暫く　仙洞を。鳥羽の御所へ。御幸なし奉らんと思ふと。ありければ。重盛公是を聞玉ひ。落る涙を拭ひて。宣ひけるは。恐ある申狀に候へ共。御心を靜にして。重盛が最後の申條を。具に聞召べし。まづ世に四恩と云事あり。一には天地の恩。二には國王の恩。三には父母の恩。四には衆生の恩なり。是を知るを人倫とし。知らざるを鬼畜とす。其中に尤重きは朝恩なり。普天の下。王土に非ずといふ事なく。率土の濱。王臣にあらざるはなし。然ばかの潁川の水に耳を洗ひ。首陽山に蕨を折ける賢臣も。　勅命の背き難き事をば。存ずるところ承り候。つら〳〵上古を思ふに。

御先祖貞盛の。將門を誅せられしも。恩賞は受領に過ざりき。賴義が貞任宗任を滅したるも。丞相の位には昇らざりしなり。然るに此一門は　辱く　桓武天皇の。御苗裔とは申ながら。先祖に例もなき。太政大臣を極めさせ玉ひ。又重盛など。暗愚の身を以て。大臣大將の位に至り。國郡も半は。一門の所領となり。田園悉く一家の進止たり。是希代の　朝恩にあらずや。是等の。莫大の御恩を忘れて。濫に　君を傾け奉らん事は。　天照大神。正八幡宮の神慮にも。定めて背き玉ふべし。　朝恩に背く者は。近くは百日。遠くは三年を。すごさずとこそ申傳て候。其上　日本は神國なり。神は非禮を受玉はず。此一門代々朝敵を平らげ。四海の亂逆を鎭る事は。無雙の勳功に似たれども。面面の恩賞に於ては。傍若無人と申べし。　天子是を奇怪なりと思召候は。尤御理にて候。然る上は。退て事の由を陳じ申玉ひて。　天子の御爲には。彌彌奉公の忠勤を盡し。人の爲には。益々撫育の哀憐を致玉はゞ。神明も加護あり。　天子も思召直し玉ふべし。然るに　仙洞を傾け奉らん事。甚以然

るべからず。重盛に於ては。院參の御供仕る間敷候。父命を以て王命を辭せず。王命を以て父命を辭す。家事を以て王事を辭せず。王事を以て家事を辭す。と申本文もあり。然ば重盛は　仙洞を守護し奉るべし。重盛始は六位に敍し。今三公に列す。　朝恩を蒙る事。家に其例なし。身に於て過分なり。悲い哉　君の御爲に。奉公の忠を致さんとすれば。山より高き。父の御恩を忘れんとす。痛しいかな。不孝の罪を遁んとすれば。朝恩重疊の君の御爲に。不忠の逆臣となるべし。君君たらずといへども。臣以て臣たらずんばあるべからず。父父たらずといへども。子以て子たらずんばあるべからず。といへり。彼といひ是といひ。進退こゝに極れり。されば重盛が申處。御承引なくば。只今重盛が首を刎らるべく候。御運は既に末になりぬと覺え候。人の運命盡んとする時。かやうの事は思ひ立事に候。富貴の家。祿位重疊して。猶再び實るの木は。其根必ず傷る。とも申て。心細くこそ候へ。又邦道なくして。富貴きは恥なり。と云本文あり。されば重盛いつまで命いきて。亂世を見申べき。只今一人に仰付られて。重盛が首を刎られん事。いと安き事にこそ候へと申されければ。清盛公聞玉ひて。入道の計らひ。人望に背き。愚案の企にも候はゞ。何樣にも御計らひあるべし。とて内に入玉ふ。重盛公は舍弟の人々に向ひて。縱令入道殿こそ。老耄し玉ひて。無道の振舞ありとも。各こそ。惡事をも宥め申さるべき事なれ。と仰られ。又侍どもに仰けるは。重盛が申つる事ども。慥に承りつらん。されば重盛が首を刎られたるを見て。院參の御供には。參るべきなりと仰置れて。則小松殿へ歸り玉ひしが。父の入道は。猶も腹あしき人なれば。院參の事もやあらん。其惡行を塞がんと。盛國を使にて。重盛こそ天下の大事を聞出したれ。我を吾と思はん者は。急ぎ參れと觸られしかば。是を承る者ども。容易の事に騷ぎ玉はぬ人の。かゝる仰の下るは。實に子細の有にこそとて。洛中洛外の軍勢。我も／＼と。小松殿へ馳集り。都合二萬餘騎に及ければ。入道殿の御許には。軍兵一人もなくぞ成にける。清盛公は念佛して居られたる處へ。重盛公より。

眞能を使にて。僞て申されけるは。入道殿御院參あるべき由。仙洞聞召され。大に驚き思召。則重盛に。追討の院宣を下され候なり。昨日も申入候如く。父に向ひ奉りて。弓をひく事は。あるべからずといへども。重盛今官に居て。祿を貪る上は。勅命を背き奉り難し。入道殿此事を聞召されなば。御自害もあるべし。先づ守護し參らせよ。重盛かくて候へば。御命をば奉公に申替候はんと。仰付られ候と申ければ。入道大に恐れ後悔して。院宣の御返事。よき樣に奏聞せらるべしこぞ申されける。

右は讀易き樣に。文を約て記し候へば。本書と少か違へるを。異しむべからず候。抑重盛公の如きは。人たる者の鏡にて候。されば孝經諫爭の章に。昔は天子に爭臣七人あり。諸侯に五人の爭臣あり。大夫に爭臣三人あり。士に爭友あり。父に爭子あり。故に君父に不義の行ひあらば。臣子たる者は。厚く諫言して。正道に趣かしめよと。孔子も教へ置申候。尤漢土にては。三度諫て用ひざれば。去るといふ定めに候へども。是は元來。君臣の人情薄き國風なれば。左もあるべく候。皇國にては。死を以て諫言し。手討になし玉ふ迄も。去らざるが。臣たるの道にて候。又漢土にて。齊の桓公といひし諸侯は。管仲といふ者を用ひて。九度同列の諸侯を會して夷狄を攘ひ。其君周王を尊び。君臣の道の亂れたるを正し申候。尤右管仲が。始に君としたりし公子糾は。其兄の桓公に殺されたりしに。管仲は公子糾の爲に死せずして。又桓公に仕へ候は。正き臣道には無之候へ共。桓公は公子糾の兄に有之。且少なる過を捨て。後に大君臣の道を正し候へば。始の罪は深く尤むべきには非ず。されば論語に。孔子も是を稱美致置候。又公山弗擾といふ謀叛人孔子を招き候時。孔子の往んとせしは。縱令謀叛人の手に屬するとも。周王の衰へたるを。起さんとの心なりし事をも。思ふべき事に候。右の如く。君臣の道。定まらぬ外國にてさへ。孔子も王を崇むの敎を立候上は。皇國に於ては猶更の事に候。然るに太宰彌右衛門といへる腐儒の說に。凡諸侯の臣は。我が君ある事を知るのみ。豈公儀ある事を知らんや。云々といへるは。外國の風にて。論にも及ばぬ事に候。されば諸侯の臣たる人。

必右之如き妄言に惑ず。皇國正大の道を過る事なかれ。都て君の尊きを顯し候へば。我身も隨て尊く。且大道にも合ひ申候。管仲は桓公を祐て周王を尊び候に付。桓公も諸人に尊敬せられ。管仲も名を顯したるをも。思ひ合すべき事に候。抑　皇國にて　君と申奉るは。　天皇御一柱に相限り。其餘は皆臣にて候。扨其臣たる方々の中にて。又私に。君臣の約を結び候も有之。世祿譜代の人に候ても。君臣の道は同樣に候へ共。非常の節に至り候はゞ。少々意味違ひ候處可有之候。然は漢土の君臣と。似たる樣にて。又大小相違有之候。今假に名目を立て申候はゞ。天皇に仕へ奉り候は。大君臣の道と稱すべく。其以下の君臣は。小君臣の道とも可申候。扨大君臣の道に於ては。東照宮も。小松殿の志は廢すべからずと。仰置れ候通りにて候。又小君臣の道と申候は。萬一事起り候時。其君もしも。不正之念慮相生じ。後世の瑕瑾とも可相成儀は。命のあらん限り諫言して。是を止め。其君をして。不忠不義の名を蒙らしめず候時は。大君臣の道と同樣にて。萬代不朽之大忠臣と可申事に候。前に少々の違ひありと申候は。此處にて候。然は陪臣の向は。管仲が九合の功には習ふべく候へ共。仇を君とせし處などは。用捨あるべき事に候。扨君公の御上に。萬々一不正之御所爲有之時は。臣下の者。御諫言申候は。素より大小同樣なる事。申迄も無之候へ共。其內に小君臣の上には。別段心得ある事に候。尤此儀は君臣の道に限らず。父子兄弟之上も、右に准じ可申。又浪人百姓町人は。主從の約は結び不申候へ共。是又其心得は。武士に准じ可申。只　皇國の御人たる事を忘れ不申候へば。人道の本は立申候。右等の事。　皇國の人は。第一に心得居可申事にて。世の中に君臣の道ほど。義理の大なる事は無之。一日も此心得なくては。不相濟事に候。然は返す〳〵も。根本の學問を被勤候樣にとは。申事に候なり。穴賢

好尙云。正道を學び候。書籍之順を申候はゞ。日本紀。古事記等は。天皇の御紀錄にて。第一之本書に候へ共。初心の人には。解し難き處も多く候へば。先ッ玉匣。玉襷。古道大意。入學問答などを讀候て。道義の大概を辨へ可申。其うち分て。儒道の事を心得候には。森岡雜記。西籍概論。經

義大意。稜威雜語などをよみ。佛道の事には。出定笑語。正實直言記などの順にて候。いづれも。初心の爲に。讀やすく。書取候ものに候。且又幼童の素讀も。同くは漢籍をば後にして。まづ　皇國の漢文を習ひ可申。師家の。童蒙入學門。皇典文葉などより。始め可申事に候。抑師家の書等を。被讀候様。申候をば。如何敷事と可被思候へ共。大體世間儒流の者の著書は。簡單至事の分。正しからず。國學家と稱せられ候人々は。旨と雅言綺語を。心がけ候。作り物故に。文意情緒迂遠にして。大道の義理。明らかに聞取がたく。捷徑便利之書物。なき故にて候。是等の事は。師翁殊に委く。論辨致し置れ候物。有之候へども。爰に用なき事は。大略いたし候也。

牛頭天王暦神辯序

これの暦神辯といふ書はも。吾が師氣吹迺舍の宇斯の著はされたる書なるが。其はまづ。大御國の書は申も更なり。言さへぐからの書。また印度の書をも。青海原廣くわたりて考へ賜ひ。現世にありとある事らこと〳〵。八十隈路おつる事なく。隱世の事さへ。淺茅原都々婆々良々に論ひ賜ひ。並て世の正みちしらぬ痴人の。言の葉草の繁れるまに〳〵。蟹が行横さのみちに人惑はす。訥言の多なる中に。素戔鳴尊を。牛頭天王とまをし。櫛稻田姫命を。歳德神と稱し。備後の國の風土記には。素戔鳴尊の御子。八柱坐すを。八將神と號け。そを暦神と稱へ奉る事は。吉備の眞備公の所爲なるが。是よりして。世人まどはす占人。言好する巫祝等のみだり言。色々起りて。今し家相方位の事を。言痛く言擧る人。多になり行て。其のみだり言を。たはやすくは。得さけがたきよしまで。論らひ賜ひ。その因縁によりて。八所御靈と云ふ祟神の列に。吉備公の入坐るよしまで。考へ副られし書にて。古へ今の物學ぶ人等の。且ても得論り難き。甚も〳〵めづらかなる說にして。見るがまに〳〵。曲玉の。目輝く書にしあれば。一日も早く。遠近の同じ學の人等にも。見せまほしくおもふがまゝに。宇斯に乞ひ奉りて。櫻木に彫らしめて。世に弘むる事とはなりぬ。かく言ふは。筑紫道口。白浪よする志摩郡。名細き櫻井の里にすめる御民。

大神の臼杵千晉

牛頭天王暦神辯

平篤胤輯考　京祇園社執事江戸爲之謹校

○世に牛頭天王と申すは。健速須佐之男命に坐し。暦法家に謂ゆる天道神も。須佐之男命。歳徳神は。稲田比賣命。八將神は。この二神の御子に坐など言へども。斯しも附會せる事の本をし。詳に記し辯へたる書なくて。俗の方位家相を唱ふる徒の出せる書等に。人惑はしなる說どもの聞ゆるが傍痛さに。少か事の序ありて。其由緒を考へ著すこと左の如し。其はまづ。

備後國風土記に。疫隅國社。昔北海坐志武塔神。南海神之女子乎與波比爾出坐爾。日暮多利。

二十二社註式に。神社本縁記云くと引たる文は。正に風土記の文を引たるを。再引たりと見ゆるに。南海乃女爾加與比天。彼爾出坐爾。日暮多利。とあり。今は其によりて出字。多利の字を補へり。（下文みな、釋日本紀に引たると、其本縁記とを校して、其宜しきに從へれど、委くは云はず。）さて北海は。キタノクニ。南海は。ミナミノクニ。と訓べし。古書に北國南國など云べきを。北海南海など書たる例も彼此ありて。其は漢文を學へるなり。（文德天皇紀に、大奈母知、少比古奈神の事を記して、昔造此國、訖去往東海、と有るも、東方の國へ往坐る由なるを、おもひ合すべし。）さて武塔神は。タケアラキノ神と訓べし。其は延暦の內宮儀式。また延喜神祇式などに。塔云阿良々岐。と有れば。其の訓を借りて。荒氣の義に用ひたるなり（本朝神社考に、漢文に作りて引たるには、武塔天神と有り、餘の書にもしか有るがあれば羅山翁の見られし本には、然有けるにこそ、此はタケアラキノ天神と訓べきなり。）さて文の意は。昔し武塔神。南海つ神の女子を娉ふとて。北海より。備後國まで到り坐せるに。疫隅社の處にて。日暮たりとなり。（此社の事は下に云べし。）

彼所仁將來二人在伎。兄蘇民將來止云。甚貧窮。弟巨旦將來止云。富饒屋舍一百在伎。

彼所とは。疫隅社の處を云ふ。偖この兄弟二人の名は。未たその訓を知らず。故姑く字音を用ひつ。（谷川士淸が說に、素尊蘇生民於將來之寓言

也、と云へるは信られず、若し此の說の如くは、巨旦將來を、何とか說かむと爲らむ、）

爰仁武塔神。借宿處仁。借天不借。兄蘇民將來借奉留。即以粟柄爲座以粟飯等饗奉流。饗奉既畢。武塔神出坐。

富める者は儉吝にして。多くは義なく。貧者に。それに反する義氣の人あること。古昔も今の世に替らざる事。この故事にても知られたり。

後爾經年。率八柱子。還來天詔久。我將奉之爲報答。汝子孫在哉問給。蘇民將來答申久。己女子與斯婦侍止申。即詔久。以茅爲輪令著於腰上。隨詔令著。即夜爾蘇民。與女人二人乎置天。皆悉久。許呂志保呂保志天伎。

此の文の趣にては。武塔神の殺したる樣に聞ゆれども。神社考に引たるには。其の夜に疫病大行云云と有れば。武塔神の所爲とも所聞ざるなり。

即詔久。吾者速須佐能雄神也。疫氣在者。汝蘇民將來之子孫止云天。以茅輪著腰上隨詔令著即家在人者。將免止詔伎。

と見えたり。（日本紀纂疏に、一說云、進雄尊、借宿諸神、皆不許之、時有蘇民將來、巨旦將來者兄弟也、兄貧而仁、弟富而吝、進雄尊、先借宿巨旦、而拒之不容、蘇民驟出迎而甚勞之、饋以粟飯、進雄尊、大喜欲報之、其夕命蘇民渾家、帶茅輪、即有大疫、除蘇民家、皆遭殃亡、神且敎云、後世疫氣流行于天下時、一小簡書、曰、吾是蘇民將來之子孫、並爲茅輪、此二物係之衣袂、則必免矣、備後風土記、以是爲北海武塔神、通南海神女時事、武塔神、乃進雄命之別號、其祠見今在備後州、曰疫隅社、とあり、今の本文と異なり、考へ合すべし）

さて右風土記の說。古傳とは聞ゆれども。蘇民將來。巨旦將來など云ふ名の樣も異ければ。全は信がたき故に。古史成文には取ざれども。神名式に。備後國深津郡に。須佐能袁能神社と載され。忌部正通の神代卷口訣に。武塔神。在深津郡。須佐能袁能神社也。と見え纂疏にも。見今在備後州曰疫隅社。と有るなどに符合へれば。總ては妄誕の說に非ず。事の趣を按ふに。須佐之男命。かの高天原を逐れて辛苦つゝ降給へる時の事にや有け

む（上に引たる、簠簋なる一説に、進雄尊、借宿於諸神皆不許之時、云々と云へる趣を見ても、此時の事なりげに思はるゝなり）斯て蘇民將來と云ひし者は。今の疫隅社の邊に住りしこと。風土記に。疫隅國社云々。彼所仁將來二人住彼。と有るにて論なし。然るを簠簋內傳に。武塔神を牛頭天王と爲して。此の故事を。天竺の事と爲たるは。疑なく。吉備眞備公の所爲なり。と所思ゆる由あり。其は播磨國餝磨郡に。式外にて。廣峯社と云ふ有り。（此社を、神名式に、播磨國餝磨郡に、射楯兵主神社二座、とある社なり、と記せる書あれど、其は誤りなり）、當社の舊記に。元正帝養老元年吉備眞備公入唐。豊櫻彦天皇天平五年。歸朝之日。止此地偶佇立船舳。望乾維者。山後有山。峻高支天。深谷遠腰。穿崖岸之形。（今白幣峯是也）公所誘感情而凝眸。則有白幣。時々放光。公怪以徐々登臨也。老翁現出云。吾是素盞嗚尊也。爲守諸民保百王來臨此峯尚矣。雖然與時變衰知者幾少也。汝速歸奏帝。公輒下山發船赴京。奏此旨。帝忝被下綸命於吉備。而天平六年。賞經營之宿禱。と云ひ。（豊櫻彦天皇と申すは、即聖武天皇の御事なり）、播磨國峯相記と云ふ物に。吉備公歸朝日。於當山奉崇牛頭天王と見え。改曆雜事記に。聖武天皇天平五年三月十八日。吉備公歸朝於播州逢天王など有り。（この三部の書ともに、己いまだ其の本書を見ず、神社啓蒙を始め、餘書にも引たるを、再引たるなり、二十二社注式に、牛頭天王、始垂跡於播磨明石其後移廣峯、とも見えたり、吉備公の歸朝を、天平五年と云こと、國史なる吉備公の傳に、よく符へり）然れば須佐之男命を。牛頭天皇と爲たるは。吉備公の所爲なること。著明なり。其は唐土に往て。天竺の牛頭山に出る旃檀香の。熱病を治すること。或は彼國にも聞ゆる。牛頭山の事をも聞得しより。風土記なる武塔神の故事に。附會せられし事と見えたり。（天竺の牛頭山の事は、翻譯名義集に牛頭旃檀の下に、華嚴經云、摩羅耶山出旃檀香。名曰牛頭云々、正法念經云云、以此山峯狀如牛頭於此峯中生旃檀樹故名牛頭、大論云云々、白檀治熱病、赤檀去風腫云々、在

南天竺」と見え、唐土の牛頭山の事は、諸說辨斷と云ふ物に、牛頭天王の號は、天竺の神名にて、祇園精舍の守護神なり、素盞嗚尊を牛頭天王と號せる故に、其在所をも祇園と號す、天竺の祇園を表せるなり、また唐土にも、牛頭山と云ふ山あり、杜律集解に、上牛頭山の詩ありて、其頭注に、牛頭山在鄞縣、形似牛頭、四面孤絶、上有長樂寺、と云ひ、山上に、雙林寺と云ふ寺もある由なり、京の祇園の邊の寺號も、是より號けし物か、と云へるは、然る說なり」然らば。其の附會造說せる趣は。何と云ふに。簠簋內傳に。天竺吉祥天王舍城王。號商貴帝。仕帝釋天。蒙諸星探題。降娑婆世界。號牛頭天王。毘盧遮那化身、頭戴黃牛面。兩角尖如夜叉。相顏異他。故罔有后宮。(此文の樣を見れば、天竺と云ふを、直に天上の事と爲たるなり、然れば今の賣僧らが、愚俗の徒に、しか說法する事は、本據なき事には非ざりけり」時自虛空青色鳥來。啼天王曰。我爲天帝使者。天帝令我敎告。南海有娑竭羅龍王宮。第三女名頗梨采女。備麗容。至彼宮須請。天王歡趣南

海。厥道八萬里程也。未遷三萬里。人馬勞纏。(虛空より、青鳥來れりと云は、神世の鵲鴿の故事を思ひて作れるか、倩娑竭羅龍王は、諸の佛經に、大海底の北方に住む由なるに、南海龍王の名と爲たるは、佛書の學に精からぬ故なり」爰南天竺傍有一夜叉國。曰廣遠國。厥國鬼王名巨旦大王。天王到彼門請宿。鬼王不許。天王去至千里松園。有一賤女。天王問曰。汝有室宅哉。女曰。吾則巨旦婢也。東一里。曠野中有蘇民將來之庵。雖貧賤祿乏抱慈愛志。宜往彼求宿。天王向東到彼野中。見彼庵。主老翁也。天王問宿。將來笑曰。貧賤家豈留若干眷屬耶。天王曰。我獨宿則可也。時將來粱莖席。令坐天王。又持一瓢。瓢中粟不過半器。煮瓦釜而置檞葉。饗天王及眷屬。天王悅曰。汝志足哉大哉。感其志報千金。翌日天王爲至南海。將來曰。我有一寶船。名曰隼鷁。行速也。天王移彼船。須臾到龍宮城。(蘇民老翁が、船を奉れる事は、日子火火出見命の、海宮に往坐せる時に、鹽土老翁が、船を作りて奉れる趣を、思ひ寄せて作れる說とは、

一日見ば、誰も知るべし）、龍王快然。奉天王。移長生殿。合歡頗梨采女。鋪饗日久。已經三七餘歲。得八王子。一摠光天王。大歲神（本地藥師如來）二魔王天王。大將軍（本地、他化自在天）三倶摩羅天王。大陰神（本地、觀自在尊）四得達神天王。歲刑神（本地、堅牢地神）五良侍天王。歲破神（本地、大水神）六侍神相天王。歲殺神（本地、大威德明王）七宅神相天王。黃幡神（本地、摩利支天）八蛇毒氣神。豹尾神（本地、三寶荒神）以上者八將神也。其眷屬八萬四千六百五十四神（此一節は、風土記に、八柱子を率て、還來ませる故事を本に爲して、曆家に謂ゆる、八將神の本緣を造れるなり）。然后天王率后妃及八王子、諸眷屬、到廣遠國。入彼鬼館。與諸眷屬亂入沒敵彼一族。如薙沙搖。欲助彼賤女。而削挑木札。書急急如律令文。令彈指彼牒。收賤女袂中。然退此禍災矣（桃木札とは、謂ゆる桃板なり。急々如律令の文ともに、道家の用ふる所にして、天竺にては、夢にも知らざる事なるを、風土記の傳へに取合せて、作り成したる妄誕なり）、切巨旦屍。各配當五節。行調伏儀。報遠國于蘇民將來。然誓曰我末代成行疫神。曰汝子孫。不可妨得也。授二六祕文。末代衆生受寒熱二病則牛頭天王眷屬之所行也。若欲退此病則外不違五節祭禮。內收二六祕文。須信敬矣。（二六祕文とは、同書の別所に、急☆蘇民將來子孫、とあり、二とは、急☆をいひ、六とは、蘇民將來子孫の六字を云ふと聞えたり）、正月一日赤白鏡餅、巨旦骨肉也。三月三日蓬萊草餅、巨旦皮膚也。五月五日菖蒲結粽巨旦鬢髮也。七月七日小麥索麪、巨旦纏也。九月九日黃菊酒水、巨旦血脈也。鞠頭、的眼、門松墓驗、咸是巨旦調伏儀式也。至今世、神事佛事、皆學此爲法例也。（此れ等の說ども妄なる由は、人も多く辨へたる事にして、今更に論ふに足らぬ事なれば洩しつ）牛頭天王者。天道神也。頗梨采女者。八將神母。歲德神也。八將神者。四土用行疫神也。天德神者。蘇民將來也。金神者。巨旦大王精魂也。とある是なり。（上の件の文は、印本の簠簋內傳、一名金烏玉兎集の中より、此に要ある事のみを摭ひ、其文を甚く約めて、目易く記せり、神社考に引れしは、異本と見えて、稍異なる所々あり、印本の

解し難き所、また漏たる事どもは、其れに依りて少か補へる所もあり）、此内傳なる説はも。備後風土記に載せる古説を。翻按して。吉備公の始めて作れる説なるが故に。簠簋内傳を除ては。漢籍は更なり。佛書にても。僞なる物には。嘗てこの説見えたる事なし。然るに天野信景の。牛頭天王辯といふ物に。牛頭天王出佛説祕密心點如意藏王陀羅尼經（義淨三藏所譯也）凡天王有十種反身。曰武塔天神。曰牛頭天王。曰鳩摩羅天王。曰蛇毒氣神。曰摩那天王。曰都藍天王。曰梵王。曰玉女。曰藥寶明王。曰疫病神王。（以上牛頭天王爲疫病神者、出于此矣、）天刑星祕密儀軌。（三卷、不空三藏之所譯也、）有牛頭天王縛擊癘鬼禳除疫難之事。と云り。然れど此は共に。一切經藏目錄に載ざれば。僞經なるに。況て内傳に載せる事實なき上は。彼說もと天竺より出たる證とは成らず。（すべて佛經どもは、言もて行けば、一部も僞經ならぬは無れども、其が中に、天竺より渡せるを、唐土にて譯せるを眞經とし、唐土にて擬造せるを、僞經と立る事なるが、今引たる經軌どもは、唐土の僞經とも見ざるは、疑なく吉備公の造說ありし後の密僧らが僞作なり、其は總じて、密部の經軌どもは、彼の公の時より遙後に、空海法師が持渡り初めたる物なると、謂ゆる祕密心點經に、武塔天神といふ名を出せるとを思ふべし、此は正に風土記に出たる名なるを、眞の梵經に、此名の有らむ物かは、例を云はゞ、此は佛說十王經に、別都頓宜壽の事の有るにて、皇國人の僞作なる事の露れたるに同じ、また天刑星の儀軌と云も、眞の梵本ならぬ事は、この星を祭る事は、唐土の道家、及び五行家などの法にこそ有れ、佛法には無き事なれば、其の儀軌の有べくも非ず、然るに此の儀軌ある事は、凡て唐土に固より有來し、道家の修法の、やごと無きは、北辰の修法を始め、唐土の賣僧らが、多く盜み取りて、天竺の佛法にも其法ありと、其修法を僞れるが多かれば、天刑星の儀軌、また其類ひなる事論ひなし、然れば、右の經軌ども、義淨譯、不空譯、など有りとも、其はみな僞作者の妄言と知べし、然すがの信景、さる事の擇びもなく、此を引出たるは何ぞや、）さて吉備公の。さる造說をしも搆られしは。何の由ならむと云

ふに。此の公もと微賤より出て。元正天皇の靈龜二年二月に。遣唐使多治比眞人縣守に從ひて留學生として唐土に渡り。聖武天皇の天平五年に歸朝せるが。（靈龜二年より、天平五年まで、すべて十八年の留學なり）、同七年四月に、唐より將來れる。數の暦書を獻れり。然るに其の暦書どもに謂ゆる天道、天德、歲德、金神、八將神などの類は。もと彼國に正しき古傳の實神あるに非ず。いと古へより暦法家にて。造化生成の氣勢の。年々方位によりて。相生相尅に轉變ある趣を驗みて。假に然る名を命たる物なれば。其の出自の傳へなきを。此の公はしも。陰陽暦學をもて。家を興さむと欲るに就ては。其天道のたぐひ。何神某神と云こそ爲れ。我が神世の神等の如く。詳に出自を說がたき故に。風土記の傳へより思ひ著て右の造說をば搆へられけむ。（備後風土記の全書は、今傳はらねども、上に擧たる文の趣を察るに、天平五年に進れる、出雲風土記などに、然しも下るまじく、古びて見ゆれば、吉備公の歸朝ありし頃は、既に世に有るべく、よし其の頃いまだ世に出ざらむも、其

事實は、神世の古傳なれば、其の傳へをとりて、作れりと見むも難なし）然るは此の御世ごろは。別に天竺の事とし云へば。人の信なふ世なりしかば。彼の國の故事に執成し、素盞嗚尊を。牛頭天王天道神とし。南海神之女子と有るを。頗梨采女歲德神とし、八柱子と有るを、八將神とし。將來二人を。天德神、金神などに配て暦神と爲し。本地佛をさへに立て。五節は更なり。年中にある神事佛事も。皆これを法例と爲たる物ぞと。其道に重みを付られし物と所思ゆるなり。（近頃は別に家相方位の學行はれて、其を講ずる者多く、種々の書等も出來る中に、浪速なる松浦久信と云ふ人の著せる、方鑑精義といふ物に漢籍どもに、大歲神の在る方を甚く恐れて、其祟りの甚しき由を記せるに就て云へるは、大歲は歲星の精氣建し宿る方位にて、即ち天子に象る所なるに異朝は人の國にして、殺伐を行ひて王位に進むを我か朝は、神の御國にして。天神地祇の古へより、神孫連綿なし給ふ、天子正に萬民の父母の如し、かく相違あるが故に、異國に於ては、帝王に比する大歲は、もはら殺伐の

氣ありと云へども、我國に於ては、王皇に比する大歳の惠み有りて、更に祟殺ある事なし、是を以て聖武天皇天平年中に、吉備公唐暦書を得て、歸朝ありしのち、播磨國の廣峰にして、初めて暦神を祭られし時に、倭漢國例の異なる事あるに任せて、最吉方神に祭り革られしなり、其の暦神を、貞觀年中に、山城國愛宕郡八坂郷感神院の地へ遷坐ありて、今の祇園社是なり、此社の暦神なること、諸書に載たり、凡そ方道の氣、轉變する事なども有り、大歳の方例、和漢同じからざる事を察すべきなり、と言るは、實然る説なりかし。)斯て其の傳説を記せる物をば、窃に人を擇びて傳へつゝ、阿部晴明朝臣まで傳はれるを、彼の人のなほ種々の説どもを增加して一書と成し。簠簋内傳金烏玉兎集。と云ふ名をば付たりけむ。(此書の舊き註に簠簋抄と云ふ物あり、甚く拙き妄説どもを書散せるが中に、此はもと佛説にて、暦經三千百卷に説たるを、文殊菩薩が結集して、唐土へ傳來せるは、雍州の荊山といふ山の麓に、伯道上人と云者ありて。天地陰陽の至理を知らむと、小舟に乘り、大河に押出けるに、一人の童子浮木に乘り來て、伯道を導き、天竺の聖靈山と云ふ山に至らしむ、是文殊菩薩也、此の書を相傳して、伯道を供命鳥といふ鳥に乘せて、荊山に歸らしむ、是天竺より唐土へ傳へたる由來なり、其後吉備公渡唐して、日本へ傳へ來つるを、阿部晴明まで傳へたる由云へり、此傳説の本は、吉備公の造りて、言ひ置れし説なるべけれど、全は晴明の撰なることは、違ひ有るまじ、然るは吉備公の時は未た傳はらぬ眞言説をもて、作れる説も多く、殊に卷首に、吉備公后胤、阿部博士晴明撰、とさへ記せり、暦説を除ては最拙き物なる故に、名高き晴明の書には似ず、と思ふにや、僞ならむと云ふ人も有れど、然には非じかし)、さて吉備公のわざと。須佐之男命に。牛頭天王と申す名を託て、暦神と爲つるより延て、牛頭天王といふ名、世に弘まりて。備後國深津郡なる疫隅國社をも、しか稱し。總て彼の神を祭れる社をば、牛頭天王と稱ことゝぞ成れりける。(其は播磨國餝磨郡、射楯兵主神社二座、とある社、また近江國野洲郡、兵主神社も、須佐之男命に坐す

を、牛頭天王と云ひ、また近江國栗太郡綣村なる、大寶天王社、同郡下笠村なる、牛頭天王社、尾張國津島なる、牛頭天王社などはいふも更なり、神社啓蒙を見るべし、此等の外に、牛頭天王と云ふ祠の、諸國に多かること、今數ふるに暇あらず。）さて山城國愛宕郡八坂郷なる。祇園社は、播磨國峰相記に。吉備公於當山奉崇牛頭天王也。歷年數。爲平安城東方守護。奉勸請祇園荒町。以當社爲本社也と見え。（また廣峰山の古文章に、播磨國廣峰山者、祇園本社也、自今以後可停止守護使亂入之狀、依鎌倉殿仰執達如件、建保四年八月廿八日、信濃守判、と有りとぞ、此は其に神社啓蒙に引たり、廣峯の攝社に、白幣社と稱ふあり、此は吉備公の天王に逢奉れる所なりと語り傳へて、今は彼の公を祭れる由、諸書に見えたり、また地養社と云ふ有り、蘇民將來を祭れるか、祇園の蘇民社の本社なりと云ふ、○門人江戸爲之云けらく、峰相記に、祇園の荒町に勸請せり、と有るは、巷町の誤りならむか今下川原に、古宮といふ有り、巷社とも云ふ、播磨の廣峰より、始めて鎭坐の地と云ひ傳へたり）、二十一社記に。祇園社自播磨國廣峰遷坐。號牛頭天王也と云へ。二十二社本緣。二十二社注式にもかく見え。改曆雜事記に。貞觀十一年。始天王從播州遷坐十八年作社也とあり。（神社考に、貞觀十一年有託宣、奉遷山城國愛宕郡矣、とあるは、雜事記の說と、諸神記、また注式にも昔常住寺十禪師、圓如大法師、依神託、淸和天皇貞觀十八年、奉移山城國愛岩郡八坂郷樹下、其後昭宣公感威驗、壞運吉臺宇建立精舍、今社壇是也、と有るを、合せ考へて記されしか、備或書に、貞觀十八年に、疫神祟をなし、萬民病に沈む、時に其神輿を、八坂の御門、感神院と云ふ寺に置て、祇園といふ、神殿なき故に、昭宣公の殿を參らせて、神殿とす、是を精舍といふ、今に至るまで、神社作りに非ざるは是の故なり、と有り、然れば十一年に、まづ八坂郷に移し、其後十八年に、神殿を作れるなり、然るにまた注式に、從廣峯移北白河東光寺、其後陽成院元慶年中移感神院、とあるは、異說にて信られず。）さて其の祭神の事は。註式に。朱雀院承平五

年六月十三日官符云。應下以二觀慶寺一爲中定額寺上事。字祇園寺、在二山城國愛宕郡八坂鄉地一云々。神殿五間。檜皮葺一宇。天神　婆利女。八王子。右得二山城國解一偁。故常住寺十禪師傳燈大法師位圓如。去貞觀年中。奉レ爲二建立一也。云々と見え。（此の官符、及び上に引たる文どもに據るに、祇園社は、もと圓如法師と云しが、私に移し祭れるを、後に公邊の社と爲て、二十二社の列にも加られしなり、今も其社内に、藥師堂ありて、觀慶寺と云とぞ、偖天神とは、素戔嗚尊を、また武塔天神とも申せば、かくも言ひしなり、）園大曆に、康永三年閏二月廿一日の宣命、また康富記に、寶德三年六月十五日の宣命ともに、祇園天神乃廣前爾云々、と有り、共に下に引くを見るべし）、神社啓蒙に。中間牛頭天王。素戔烏尊、西少將井。稻田姫命、東八王子。と言へり）並に玉兎集の說に符へれば。正しき說なり。諸社根元記。諸社一覽なども、是に同じ。（また近頃見ゆる、名所圖繪と云ふ物にも、中央は、大政所、牛頭天王、素戔嗚尊、西の間は、稻田姫命、東の間は八王子とあり、然れば。今もかく傳ふるとしら

れたり、但し上に引く書等に、八王子と云ふは、天照大御神と、須佐之男命と、御誓ひのときに、互に生坐る、三女五男の神を祭れる由云へるは、信るに足らぬ妄說なり、偖西の間に坐す稻田姫を、少將井と申すは、神社考拾遺に、昔し疫病の流行し時に、少將井と云ふ所へ、此の神輿を留奉りてより號く、今も烏丸丸太町に有り、井は絕て町名になれりと云へり）然るを註式に。また一說を記して。中間牛頭天王。號二大政所一、[illegible]雄尊。西間本御前。稻田姫。一名婆利采女、一名少將井、本御前也、東間蛇毒氣神。婆竭羅龍王女、[illegible]女、今御前也、と有るは。諸神記も同しけれど。東の間を。蛇毒氣神とのみ云へるは違へり。（然るは此名は、玉兎集に、八王子の中に、最末の名なるを、龍王の女の名とし。今御前とあるは、稻田姫を、本御前也と云へるに依りて思へば、後の后也と云ふ意なるべけれど、さては稻田姫の一の名を、婆利采女と有るに合はず、然るは婆利采女と云ふが、龍王の女の名なればなり）さて祭禮の始は。日本紀略に。天慶五年六月廿一日。奉二東遊走馬十列祇園社一。依二東西賊亂御賽一也。とある是れ始めなり。（扶桑略記

に、天慶三年正月、將門叛亂、凡神社佛閣祈請事等、不可勝計云々、と有れば、然も有べし、然るを註式また諸神記に、圓融院天祿元年六月十四日、始御靈會、自今年行之と云ひて、此を祭禮の始めとせるは心得がたし、○樞覽に、承平五年六月廿五日、奉馬十列於祇園社、と有、爲之按ふに、樞覽に、右の事の見えたる以前、同年四月廿九日、賀茂行幸、爲賊亂平之賽也、と有れば、彼の純友誅伏の事に就てなるべくも聞ゆれど、又もしくは、同人誅伏の年にも、諸書異說ありと思ゆれば、承平五年とあるは、天慶五年の事を、錯傳へたるには非ざるか、)また同し記に○圓融院天延三年六月十五日○初公家自今年被奉走馬並勅樂○東遊○御幣等感神院○是則去々年秋○依御惱有此御願○今被賽也」是日太政大臣參向感神院○公卿上官供奉○中宮職奉幣同社○有東遊等○使亮從四位下藤原季平ともあり。(百錬抄にも此事を記して、天延三年六月十五日、公家始自今年、被獻東遊走馬等祇園社、依去年疱瘡時御願也、と見えたり、天慶五年の御祭は、東西の亂を治むる御願ありし、御賽の祭なるを、今年のは、常例と初め給へる由と通ゆ、諸神記、また註式に、天延三年六月十五日、始被奉走馬勅樂、東遊、御幣等、使左少將藤原理兼、左右御馬有五疋、左右近官人供奉、奉東遊歌曰、神風の八坂の里と今日よりぞ、君が千歲を計り始むる」と記して、此を臨時祭の始めとし、此の後中絕、崇德天皇天治以後、每年相續、と云へり)、さて諸神記○また註式に○此の年以祇園社爲日吉末社と云ひ○世々樞覽にも○今年以祇園感神院爲延曆寺別院○興福寺大衆大訴○とも見えたり○(また註式に、天延二年三月、彼官符、以愛宕郡觀慶寺感神院、爲延曆寺別院事、と云ひ、日本紀畧にも、天祿三年以祇園社、爲日吉末社と云て、月を云はず、天延元年五月七日、以祇園爲天台別院、と云ひて、爲日吉末社といふと、爲天台別院と云を、二樣の事に記せり、山城名勝志には、爲日吉末社といふを、天祿元年の事とし、爲天台別院と云を、天延元年の事とせり、また啓蒙には、山門慈惠記曰、天祿三年、以祇園爲日吉末社、とあり、何

れか正しからむ、さて此の事の起りは、今昔物語集に委く見えたり、彼の慈惠僧正が、我執より出たる事なり、彼の物語を見て知べし）、名所圖會に、元三大師は、神殿東の庇に在しが、安永七年に、繪馬堂の西に移せる由いへり）、是より後は。延暦寺につきて。彼の山の掟を受る事。となむ成れりける。（彼の山法師らが、日吉の神輿を振りて、京に亂入する毎に、祇園の神輿をも振り出して隨ひ、後には山僧等の我意に習ひて、其祭の時々、しばしば鬪諍を發しけるありさま、世々の記録を見て知るべし。）さて扶桑略記に。後三條院の延久二年十月十四日戊時。感神院。大廻廊。舞殿。鐘樓悉皆燒亡。但天神御體奉取出之。別當安譽身燋餘燗。翌日入滅。世人爲神罸。（世々樞覽には、是より前、後朱雀院の、長久二年十月十四日戊の時の事と爲て、上座安興爲奉取出御躰、入寶殿燒死了、於御躰者、自灰中出來。希代靈驗也と有るは、年を誤れるならむ、其は百錬抄も、略記と同じ年月日にて、感神院燒亡、御躰燒損、と記せるをや。さて續古事談に、祇園の寶殿の中には、龍穴ありとなむいふ、延久燒亡のとき、梨本の座主、其深さを計らむとせられしに、五十丈に及びて、なほ底なしとぞ、保安四年、山法師追捕せられけるに、多く寶殿の中に逃入たりけり、其中にみぞ有り、其れに墮入たりつるとぞ、と有り、いかなる穴ならむ、○此のことゝ名所圖會にも、記したるが、梨本の座主を、天台梶井の御門主と有り、孰れならむ）、十八日。以官使檢錄感神院。八王子四躰。竝蛇毒氣神。大將軍御躰燒失實否。（又百錬抄に、同月廿八日の處に、諸卿定申祇園燒亡事、とも見えたり）、同三年八月。祇園天神奉移新造神殿。など見え（此の八月に、日を記さゞるは闕漏せるにや）百錬抄に。延久四年三月廿六日。始行幸稻荷祇園兩社、とあるは、此の社に行幸有りし始めなり。（諸神記、また註式にも、此を當社行幸の始めと爲て、幣二前、加八王子八所、とあり、牛頭天王、少將井の二前に、八王子八所を加へて、都て三前に幣を奉られたる由なり、後拾遺集神祇の部に、後三條院の御時、祇園に行幸侍りけるに、東遊に謠ふべき歌召ければ、藤原經衡、千早振る神のその な

る姫小松、萬代ふべき始めなりけり」、とあり、祇園をかみのその、と詠めるなり、さて扶桑略記に、次の御代、白河院天皇の承暦元年十二月一日、行幸祇園、稲荷兩社、先帝之例也、と有るを始め、次次の御代々々にも、時々行幸あり、紀略、略記、百錬抄、帝王編年記などを見て知べし、また二十一社記に、白河院御時、有寵幸人、時人號祇園女御、依此人皈依、白河院令興隆給、從其行幸有之、又自院中被獻十列、已流例也、とあるは誤りなり、然れど祇園女御といふ名の由よし、また此の女御の皈依ありし故に、白河院の興隆し給へる事は、然もあるべし、また同抄に、四年五月十五日。諸卿定申祇園社御體燒損可奉造否事、權少僧都公範有夢想事。とあるは二年十月十四日に。燒損はれし御體の事なり。)何なる夢想にか有けむ、造られず成しと聞えたり、此次の御々代々にも、度々燒亡有りし中に、近衛院天皇の、仁平三年四月十五日の燒亡には、大政所さへに燒け給へるよし、百錬抄に見えたり。)偖また臨時祭の始は、百錬抄に。崇德院天治元年六月十五日。初有祇園臨時祭。とある是なり。(神社考に、祇園臨時祭者、六月十五日也、崇德院天治元年六月始焉、御禊儀式同、平野勅使殿上五位、奉東遊、有宣命、今日又有走馬勅樂、東遊歌云、「神風の八坂の里と今日よりぞ、君が千歳を計り始むる、とあるは、上に擧たる天延三年云々の處の、分注に注せる、注式諸神記などの説とも異なり、何によりて注されけむ、偖この時の御祭を、臨時祭の始めといふことは、康富記に、寶德三年六月十五日の臨時祭の宣命に、祇園天神乃廣前爾云々、天治元年與利始天云々、毎年の今日、恒例乃會日爾、東遊走馬、並神樂等乎調備氐、云々と有れば。此の時のを、其始と爲る事は明かなり、されどまた永昌記に、保安五年六月十五日、臨時祭の事を記して、天永二年、貞觀年中、有此例云々と有り、然れば、天永貞觀などに有しは、實に臨時にて、定例の臨時祭は、此時を始めさするにや。)御神樂の始めの事も。同抄に。二條天皇應保二年八月廿四日。稲荷祇園行幸也。祇園部屋顚倒、仍於殿上有議。遂臨幸。爲謝其恐被行御神樂。當社御神樂今度始之。

とあり。（蔀屋の顚倒たるに依て、神の祟ならむかと。恐まして、初めて神樂を奉られたる由なり。）また當社の祭に。御靈會と云ふ事も。同抄に。高倉院天皇の承安二年六月十四日。祇園御靈會。上皇有御見物。棧敷被刷之。神輿三基。師子七頭。去四日自院被調進之。とある是れ始めなり。（棧敷の二字を、塙本に、殊の字に作れるは、寫し誤れりと見ゆ、さて御靈會と云ふ事は、淸和天皇の貞觀五年五月に、神泉苑の御靈會、といふ事有りしより始りて、今宮の御靈會、紺笠の御靈會、稻荷の御靈會など、猶有りて、是より祇園の社にも、御靈會といふ事始まれり、此は別に記せる物あれば、此には洩しつ。）また安元二年六月十四日。祇園御靈會。少將井神輿不用前々路。自冷泉東行。自洞院可北行之由。被仰下之。內裡觸穢之間。難奉動賢所。仍所被改神輿路也。依觸穢所所無馬長。とあるは、神輿の路を替たる始めなり。（此は此前日に、二條の院の后妃、高松の院と申せるが、崩御有し故に、內裡觸穢とは云へるなり。）また槐覽に。順德天皇の建保六年三月廿九日。於祇園七番競馬とあるは。此の社に競馬を奉られし始めなり。また百鍊抄に。建保六年九月廿日　被行軒廊御卜。是依祇園寶殿靑耀事と見え。此の翌日に。山の大衆ども。日吉の神輿と共に。祇園の神輿を振奉りしかば。武士に仰せて防がしめ給へるに。及傷殺害の事ども有けり。また寛喜三年六月十四日。御靈會延引。依本社穢云々。神輿更無御逗留例。（槐覽に、六月七日、祇園入洛如常、而十日、社頭有餓死者、仍御靈會延引、云々と有り。）七月十二日。祇園御靈會也。本社之穢。昨日滿卅日了。所々殿上人馬長事。殊有沙汰。及卅騎。十月九日。被發遣公卿勅使。（權大納言隆範卿、）宸筆宣命。如法勅筆也。延久以後此例猶希。また天福元年六月廿四日。祇園御靈會也。少將井神輿。自東洞院北行。經大炊御門令向列見給。昨今內裡御物忌之間。無行幸故歟。なども有り。また世々槐覽に。建治三年十二月。始被寄附祇園社別勅願。云云とも見ゆ。また園大曆に。康永三年二月廿一日。今日祇園一社。奉幣宣命。天皇我詔旨止。掛畏幾。祇園天神乃廣前爾。恐美恐美毛申給波久云々。去

元德二年閏六月廿九日乃夜中。不慮之外爾。鬪諍出來豆。神民被殺害禮天。社壇遂令汚穢牟留由乎。社家注進之間。同年八月爾。造營假殿之天。奉遷神體計利云々。仍去年七月二日。因準延久以來之例天。遂正殿遷宮之儀云々。掛畏天神。此狀遠平久聞食天云々。護恤給倍止。恐美恐美毛申賜波久止申。と見え。また觀應二年三月十四日。祇園御靈會也。依內裡院中觸穢。無所々馬長又田樂。院並關白家。不被立神馬云々。少將井神輿。不用先々路。自冷泉院東行。自東洞院北行。大炊御門西行。至大宮。今度依禁中穢。難奉動座內侍所。不奉供內侍所。行幸他所之條。尙今御宇。承安比議定畢。其後每度奉渡。今度不奉渡。可背敬神之禮。依先例。被改神輿之道。有何事哉之由。有其沙汰。所被行也。など有るをもて。式外には有れど。此の社を重く尊み給へる事を知るべし。(また三座の中に、殊に少將井の神輿を、重みし給へる事、いまだ其由を考へず。)〇鐵胤云。上の件。建速須佐之男大神を。牛頭天王と稱し。(また天道神とも稱し)、奇稻田比賣命を。歲德神と稱せるなど。吉備眞備公の所爲なる由は。上に委く辯へ記されたるが如し。斯て此の公は。いと賢き人と。世にもてはやさるゝ事なるが。八所御靈の其の一所にて。祟神の列に祭らるゝは。世人の甚く不審み思ふ事なるに就て。其由を詳かに考へ明し。また此の公の出自家傳をも。諸書に徵して。此處に記し添られたるを。後に思ふ旨ありとて。此をば除きて。今は太昊古曆傳の。附錄の中に收られたり。(先に出せる著述書目には此の曆神辨の末にある由云へるに付て、今こゝの由を、ことわり記せるものなり。)

〇是れより下に載せるは。尾張人天野信景ぬしの著されたる。牛頭天王辨と云ふ書なるが。此書を此所に附たるはいかにと云に。先つこの己が曆神辨を著はしたるは。去し文政六年の事なるが。其後二年過て。ことし文政八年の冬に初めて天野氏の。此の書ありと云事を聞て。こを得て讀見たるに。己が曆神辨と。大概同じ趣なるに驚かれて。早く寶永の頃。學びの道も。未だ開けざる時なるに。如此しも明らかに辨へ置れたる事よ。此主の博識

に非ずは。何で如此はと所思るに就ては。敏に此書ある事を知らば。先つ此を擧て。己が考へをば次と爲べき事なるを。知らざりしこそ朽惜けれ。然れど互に。泄たる所あり。又異なる所も無きに非ねば。一つに撰び成さま欲くは思ゆれど。今更に暇いる事にし有れば。時も有らむと。此の儘ここに綴添へて。取捨は見む人の心に任せつ。斯て此の書。先輩の著書にしあれば。卷首に擧べき事には有れど。計らずも。曆神辨の成つる後に。見出たる事なれば。有りのまに〳〵序次たるになむ。かく云は。彼の主の功績を顯はし。はた己が。少か蹈襲の疑ひを避むが爲なり。然れば信景主の靈は更なり。及び此を見む人々。己が過ちの無禮をば。免し給へや。かく云時は。同し年のしはす廿四日なり。

平の篤胤

牛頭天王辨序

習合神道者流有レ二。以二我宗社神祇一爲二浮圖一。質二多垂跡一者。苾芻家之牽合也。（以二伊勢一爲二大日一以二八幡一爲二彌陀一類是也。）先安二胡神僊靈一。後配二神代尊命一者。巫祝之附會也。（以二牛頭榮山一爲二素尊一。以二辨財天一爲二倉稻魂一類也。）祭轉レ經誦レ呪。其業符籙會祠。或說二金編貝葉之事一。或以二烏龍赤鯉之術一。就レ中如二牛頭天王一者。殊失二其本一。故專依二我舊史一。差池愈甚而紕謬鶻突。使二人疑訝躊躇一。以レ故尋二繹管見書卷一。而考二其實一。略記レ之以與二我童蒙一。其於二左道非禮之論一者。有二先聖賢遺言一。在二學レ之莫一レ陷二于異端邪路一矣。

寳永改元穐分　後學　信景序

牛頭天王辨

感神院（號祇園社、二十二社之隨一也、）在山城國愛宕郡八坂郷。

按祇園寺（或呼祇園精舍、）舊觀慶寺感神院地也。朱雀院承平五年六月十五日官符。爲定額之寺。建神殿及佛宇。官符曰、檜皮葺三間堂一宇。繪皮葺禮堂一宇。安置藥師像一體。脇士菩薩二體等云々。神殿五間檜皮葺一宇。天神婆利女、八王子。五間檜皮葺禮堂一宇。右得山城國解偁。故常住寺十禪師。傳燈大法師位圓如、去貞觀年中。奉爲建立云々。

牛頭天王。（承平官符稱、天神乃武塔天神也、巫覡爲素戔烏尊、陰陽家爲天道神、爲泰山府君、）出佛說祕密心點如意藏王陀羅尼經。（義淨三藏所譯也、）凡天王有十種反身。曰武苔天神。曰牛頭天王。曰鳩摩羅天王。曰蛇毒氣神。曰摩那天王。曰都藍天王。曰梵王。曰玉女。曰藥寶明王。曰疫病神王。（以牛頭天王、爲疫癘神者、出于此矣、）天刑星祕密儀軌。（三卷、不空三藏之所譯也、）有牛頭天王縛擊癘魂、禳除疫難之事。（牛頭天王修法、在此儀軌、凡以牛頭天王爲婆斯亭廻國主、或爲部跋國王、或爲法界自在國王者、依經不同、簠簋內傳、爲廣遠國王、尾州津島緣起、爲豐饒國王、亦蓋依釋氏之書歟、牛頭梵語也、譯曰妙香、乃天部也、）大如意寶珠輪牛王守護神呪經。（阿謨伽三藏所譯也、）所謂牛王天子。其三昧耶形五大牛王雨寶陀羅尼儀軌。（傳曰、羅枳惹曩三藏之所譯也、）謂之者詳也。

按牛王天與牛頭神相類。蓋一體別名乎。又異邦大和山所崇眞武神（舊玄武也、）以眞仙通鑑、及明一統志考之。則其事似牛頭天王。其像類鍾馗。（鍾馗擊鬼、眞武亦脫劍跣足、天刑星像擊鬼、倭畫描鍾馗、多圖擊劍之者、蓋誤眞武乎、）眞武星（史記天官書、）道家以爲怪誕之說。鍾馗及天刑星、亦術家以爲說。（天刑星多見日若之書、又星乎、命海天刑星典奴僕天山星典疾厄、依書有異、頭書曰、命海天刑以下難解脫字乎、）按漢有逐疫神事。使十二神追惡凶。見東漢書志。其後巫覡道流。釋之和之唱之。作設種々說。祓除災殃。故混雜而習合、互無知其本乎。

婆利采天女。（官符、稱婆利女、大集須彌藏經等、所謂頗梨天女是也、巫覡爲奇稻田姬命、陰陽家配年德神、）

牛頭天王之妃也。安居院神道集。（舊七卷、今存三卷也、）引婆

利呆女經。然不知其經旨相承。或疑是立川一家僞書乎。按寶鏡鈔。立川聖教目錄不載之。則不可謂立川流之書也。然未見其經。又有八王子經。唯天刑星儀軌。有沙竭羅龍王第一女。爲牛頭天王之妃說。是歟。

八王子。（巫祝爲素戔烏尊之子、五男三女神、陰陽家配八將神也、）祕密心點經所謂。八部菩薩是也。（藥師佛所屬之八菩薩也、）法花經亦有八菩薩。法花懺法。八王行鬼王云々。淨度經云。八王子八節日也。祕謂經同之。八王使者云々。（按小朝熊鏡沙汰文有下延久三年六月、改造感神院八王子像之事上、然牛頭天王、婆利天女、亦安其神像乎、今祇園八王子、神輿一基也、神家爲五男三女者、似不合之、凡八王子號、依社不同、如日吉八王子、不可混之、）已上。祇園神殿三所御體也。

○改曆雜事記云。聖武天皇天平五年三月十八日。吉備歸朝於播州。逢天王。（語神現形者、釋氏、道家之事、吉備儒宗也、後人誣之乎、）峯相記曰。吉備公歸朝日。於當山。奉崇牛頭天王。（既倫縁起云、牛頭天王、降播磨印南郡法花山、逢法道仙人云々、是不謂吉備、按舊記、始崇西峯、圓融院天祿三年、遷御于廣峯云々、）二十二社註式曰。牛頭天王初垂跡於播州明石浦。移廣峯。其後移北白河東光寺。其後移感神院。（按改曆雜事記、清和天皇貞觀十一年、始移祀山城國云々、是蓋今東山瓜生山乎、）諸神根元抄曰。昔常住寺圓如法師。依神託。貞觀十八年。奉移山城國愛宕郡八坂郷樹下。其後昭宣公感威驗。壞運臺宇。建精舍。（○頭書曰、壞運臺宇四字難解乎、○稱祇園精舍、尾州津島社傳、京師祇園、貞觀年中以津島天王移云々、然舊記無此事乎、）按謂之精舍。則當時專不爲神社乎。夫牛頭天王者。西域所祭之神。而藥師如來之教令輪身。有衆病悉除功德故。我國昔日傳其修法禳除疫病者。與吉祥天女改過法并行之。遂宜流諸州。任々崇之修之。皆浮圖家之祭法也。其配素戔嗚尊者。蓋依備後風土記也。（風土記、有和銅、延長兩度撰、皆以土俗傳說記、間又附會漢土、胡竺之故事、專信不可爲我神代之事也、）意備後國沼隈郡輌浦。有疫隅社。俗云輌天王社。傳云。武塔天王。通南海神女地也。然不載神名式。則是亦依風土記說。建祠設說者乎。凡異域神。我國自古祭之者多矣。所謂摩多羅神　金毘羅神（摩多羅、一

作二曼拏羅一、金毘羅、一作二倶毘羅一、天竺神也、此二神、異名同體、見二阿含灌頂不空羂索等經一、溪嵐拾葉集、山家要略日吉記、及二荒山神傳、互有二異說一云々、及赤山溪神新羅韓神等祠。其爲二素戔嗚尊一。其他妙見。吉祥。辨財天。陀吉尼。大黑等。皆强爲二我國神一者。不二一二一。夫牛頭天王之祠。延喜以前建レ之者多矣。所レ謂廣峯。播州祇園。京師津島。尾州大寶牛頭近江等也。然式撰之日。不レ載二之於神名帳一也。若祭二素戔嗚尊一則朝家豈除レ之乎。且祇園社無二神階一者。蓋不二我國神一故乎。尾州津島、稱二正一位一、然本進之年月不レ詳、一社之傳習乎、

蘇民將來札。記二津島社條下一、故略二于此一、

御靈會。御靈會者、寃魂惡靈成レ厲祟レ人、故祭二其鬼一慰レ之、牛頭神、爲二疫病神王一、故祀レ疫流行時、祭レ之和二其神靈一每歲六月。祇園社出二于三所神輿一祭レ之二十二社註式云。圓融院天祿元年六月十四日。始二御靈會一。後堀河院寬喜三年六月七日、爲二神幸式日一、十四日歸二座本祠一、同三年六月十五日。始被レ奉二走馬勅樂東遊御幣等使一。勅使、左近衛少將藤原理衆云々、是臨時祭始也、此後中絕。崇德院天治以後相續云々。諸州天王社效レ之、季夏爲二祭祀一、是六月祓餘風也、今在々張二淫樂一施二戲藝一、謂二之祇園會一也、

日吉末社。至レ此專稱二神社一、一條院長德二年三月二十五日。加二二十社列一。後三條院延久四年三月二十六日。行幸。是始也、已上祇園社。後見殿蘇民祠護王地社、與官受福祠等之末社、今略レ之、

凡朝家自レ古爲二疫神祭一者。季春鎭花祭。神祇令義解、謂、大神狹井二祭也、是於二神祇官一行レ之、狹井者、大神荒魂也、季夏季冬道饗祭。義解謂、卜部等祭二于京城四隅道上一、祝詞式云、八衢比古、八衢比賣、久那斗云々、此三神、我國自二往古一爲二疫神一、別以二牛頭天王一、祭二祀之一者、後世禮典也、故不レ載二令式等一焉、及宮城四隅。畿內堺十處疫神祭等。神祇官。陰陽寮司レ之。見二令式、及朝野群載等之舊典一也、牛頭天王祭。本釋氏之修法也。其法見二天刑星秘密儀軌等一也、後世配二素尊一爲二神社一。故禮奠列二二十二社一焉。貞享御即位。七社御祈之時。錄二日吉下。北野上一。

津島牛頭天王社。尾張國海部郡、門間庄藤波里、社家者流傳習說曰。欽明天皇元年。崇二祭之一天王初降二西海對馬洲一。後移二尾張海部一。仍表二其舊地名一號二津島一。對馬、津島、古通二用之一、祠嵯峨天皇御宇立二其祠一。始祠在二柏森一、後移二居森地一、更移建二祠於今地一云々、官稱二日本總社津島牛頭天王社一。東鑑云、津島立符卷數、書二素戔烏社一者、後世祠官之私稱也、按此祠、舊史實錄無レ載二其故一者、社家有二神撰緣起、一妖妄附會之書也、

御蘆神事。每歲六月十五日夜、神主家行レ之、極爲二神祕一、然見二其所爲一、則六月祓餘風而、不二牛頭天王修法一歟、今在

在所漂寄、以束菅、爲牛頭天王立祠祭之、亦不甚乎、

楊札。（削白楊樹長尺餘、書蘇民將來子孫門戶字、上持疊紙、大書津島牛頭天王、某大夫字、京師祇園社、但以小箋書蘇民將來子孫也七字、若拾芥抄所載也、時疫及痘疹流行時佩之、今專者道家符章、善惡應殃篇、所謂安宅佩身、麻痘災瘟、免祈遣一切災殃者、似之、凡釋氏密呪、術士符籙之類、同之耳、）按備後風土記。武塔天神。謂蘇民曰。後世有疫則。汝蘇民將來子孫。以茅輪著之腰。將免云々。楊札書蘇民將來子孫者。蓋此遺習也。然風土記所記者不立符籙。只用茅輪。（茅輪、亦漢土陰陽家所用祓除具也）今津島祠官稱立符。出于諸州者。一宮納札（紙疊）符字（封中書神靈日種子、表書大）及卷數。（祈禱祓除數、而終書祝詞、）大概如此。而依其家有大同小異。見彼卷數。有書祕符字事也。然符內別無符籙字。祕以不顯歟。但（頭書云、事也二字不詳乎、）謂彼小封物歟。（封內亦不符字、）抑亡其傳歟。予固不所知也。頃日見濃州武藝郡神淵村。天王社所藏古祭文其楮尾。載楊札書式。仍寫之如左。○楊札表書云。△「除金翅鳥飛鳥井龍鳥四方鬼。」△「蘇民將來子孫唎呋哩鬼地鎮鬼。」△「五百一鬼千十鬼百鬼天上無明鬼大惡鬼王鬼根本流轉鬼。」○楊札裏書云。△「天狗爲福。」○文字如此唎呋哩等。寔似符字。是所謂天王祕符字歟。又祭文謂。謹上。東方牛頭天王。八萬四千之鬼神。（南西北方亦各同、按東鑑、有下疫癘流布時、被行四境鬼氣祭事上、是陰陽師之業也、謂東西南北鬼神者、蓋陰陽家鬼氣祭歟、）凡八萬四千六百五十餘神云々。又曰尾張國海西郡小島庄。云々。（津島、今在門間庄、有司簿籍、無小島庄、蓋往古庄名歟、但津島舊號歟、此祭文誤字過半則傳寫訛筆歟、）此祭文固虛誕妖妄。野俗之文字也。然上件之書式。及云云者。若有所傳焉乎。蓋是物所傳於津島詞官。而後誤傳誦之。俗巫之拙不辨文字。轉々更寫之以。至不可讀者乎。

寶永改元甲申秋社日　　閒津亭主謹志

明和二年乙酉仲春　　東圃寫

○追加（鹽尻出）

牛頭天王。牛頭とは華嚴經曰。摩羅耶山。出旃檀香。名曰牛頭。（正法念經にも、此事あり、）名義集云。此山峯狀如牛頭。於此峯中。生旃檀

樹。故名牛頭云々。大論曰。除摩梨山譯云離垢。無出旃檀。白檀治熱病。赤檀去風腫。云々。按ずるに。牛頭峯は。南天竺の山の號。離垢治熱の名香を產す。依て彼天王の神德を表して。牛頭天王と稱す。(牛頭は譯語也、梵語に非ず。)予牛頭辨に。此事を闕せし故に。爰に記し侍る。〇我か府下六月市井の家錢をあつめ。津島へ行き。祠官に依りて立符を請得て歸り。其町の辻に安置し。兒輩群聚して。燭を張り祭る。古へ所謂。辻祭の御靈の遺風也。今專ら牛頭天王と稱す。夫牛頭天王は。行疫の神なる故に。是を和め。疫氣を鎭する風俗の祭なり。〇牛頭天王の梵語。(密家の次第物に見ゆ)世に多く知る者なし。瞿摩。揭唎婆耶。提婆囉惹。(瞿摩は牛の梵語、揭唎婆耶は、頭の梵語提婆は天、囉惹は王なり。)凡そ諸天明王等は。もと天竺國の所祭にて。釋迦佛出世以前より有り。唐に。天地山川の諸祭。往古より有りて。帝王の

主り給ふがごとし。(〇銕胤云、此は見えたる儘を記されたるなり、然れば誤字あらむも計り難く、又本より違へる說も無きには非ねど、其は暦神辨に論はれたる處と、合せ見て辨ふべし、其餘に內外尊卑等の文義明らかならざる處も有れど、是れらは學問の道、いまだ開けざる頃の事なれば、其の心して見るべきなり、

伯家學則演義稿

學頭　平篤胤　謹

其はまづ天地の初發は○天地に先立つ主宰の三神○無始より天中に御坐して○鎔造化育の首を作賜へる事の由は○古事記に○天地初發之時○於高天原成神名○天之御中主神○次高御産巣日神○次神産巣日神○此三柱神者○竝獨神成坐而○隱身也○と見え○古語拾遺に○天地剖判之初○天中所生之神名○曰天御中主神○次高皇産靈神○(是皇親神留伎命也)次神皇産靈神○(是皇親神留彌命也)と有りて○神代紀もこれに同じ○高天原と謂へるは○天霧を廣く云ひ○天中とは○其の域を○詳に指たる語にて○乃ち天の中央を謂ふ○こは天霧の未成ざりし時には有れど○天の定まりし後に○其の中央と成れる所なる故に○其の名を初めに回らして○如此傳へたるにて○天中と云へば○今仰ぎ瞻て○天樞と見る所○決く其の域なり○此所に其の始を知す○獨神成坐して○主宰ませる神なる故に○天之御中主神と申す○蓋是の大神の御名○此より外に出る事なく○殊に所見たる事跡も無ければ○陰とも陽とも○測り難きが如し○然れども○其の天樞なる所より○天霧の○左旋する理を推て想へば○男神に坐こと知べし○然るに古語拾遺の異本に○二柱の皇産靈神を○此の大神の御子と申せる傳へあり○然ては古事記に○此三柱神者○竝獨神成坐○と有るに違へるに似たり○故考ふるに○天之御中主神は○素より獨神と坐して○寂然に○臭もなく聲もなく坐つれど○其の自然なる御德に因り○誰が生むと無く○皇産靈二柱の神の○成坐せる故に○此をも獨神成坐とは傳へたれど○實は天之御中主神の○爲こゝ無して○成給へる神に坐す由をもて○其の御子とも傳たる也○然て高皇産靈神を○皇親神留伎命と申し○神皇産靈神を○皇親神留美命と申すは○天皇命の○男女の○大元祖神に坐す由の稱なり○然れば此の二柱の神は○天之御中主神の○元産靈の御魂の○陰陽二神に分りて○成坐るにや有む○高皇産靈神は○男神に坐し○神皇産靈神は○女神に坐せば○是れ乃ち陰陽の分別たる始め、其の位の立たる本にて○此の二柱の神成坐てぞ○其の産靈に資りて○

天地と成べき物の。先初めて。大虛中に生出ける。其は神代紀に。天地之初判。一物在二於虛中一。狀貌難レ言。云々と有る一の物。やがて是にて。此物の生出たるも。分りて天地と成れるも。其の產靈の御德に因れる事なる故に。顯宗天皇紀なる。日神月神の御託言に。我祖皇產靈神は。天地を鎔造ませる績あり。とは宣へり。然て古事記の序に。夫混元既凝。氣象未レ效。無レ名無レ爲。誰知二其形一。然乾坤初分。參神作二造化之首一。と書れたる參神は。乃ち上の三柱を申せり。混元既凝とは。其一物の。初めて凝成れるを云ふ。無レ名無レ爲。誰知二其形一。とは所作たれど。實は其の形を知て傳へし神あり。其は此の造化の首を作たる三神の。知りて傳へ賜ひし事ぞ。と謂ふ意を含たり。其は此の下文に。太素杳冥。因二本敎一而。識二孕土產嶋之時一。元始綿邈。頼二先聖一而。察二生レ神立レ人之世一。と有る太素元始は。共に世の初を云ひ。杳冥綿邈は。共に甚遠く遙なるを云ひ。本敎とは。此の天津神たちの詔命にて。世の始の事どもを。詔敎へ給へるを謂ふ。先聖も天津神を申せり。立レ人とは。蒼生を生立給へるを謂ふ。總ての文意は。

世の始の事は甚遠く遙にて。杳冥しく詳ならず。知べき由なきに似たれど。造化の首を作坐る。天津神たちの。詔敎へ給へるに頼りて。國土を生み。神を產み。青人草を生立給ひし事をも。察に識るゝ。と云へる義なるを以て知べし。是乃ち古傳の來由なり。抑此の古始を知ること。尙彼序文に。稽レ古以。繩二風猷於既頽一。照レ今以。補二典敎於欲レ絕。とも。斯乃邦家之經緯。王化之鴻基焉。とも云る如く。道の根元ここに定り立ばなり。故まづ此の義を知りて。次に天地泉の成立を問ふべし。

凡天地泉。三箇の成立たる事は。神代紀に。古天地未レ剖。陰陽不レ分。渾沌如二雞子一。溟涬而含レ牙。及二其淸陽者。薄靡而爲レ天。重濁者淹滯而爲レ地。精妙之合摶陽。重濁之凝場難。故天先成而。地後定。然後神聖生二其中一焉。と有るは。上に出せる文に。一物在二於虛中一。狀貌難言。とあるつたへの精きにて。此を古事記に。國稚而。久羅下那洲。多陀用幣琉之時。有下如二葦牙一。萠騰之物上。因二其物一而。所成神名。宇麻斯阿志訶備比古遲神。次天之常立神。此二柱神亦獨神成坐而。隱身也。と有るに。相照し致ふるに。大虛

中に。然る言難き一物の生出て。陰陽混沌たること。雞子の如く溟涬りて。其の中に牙を含み。海月なす漂ひて在けるに。其の中より。狀葦牙の如くにて。清陽に燃明り。萠騰れる物あり。其物に因りて。宇麻斯阿志訶備比古遲神成坐し。其物まづ。大虛の上に位を定めて。天日の御國と成り。其の氣ざし。圓圓に餘り薄靡きて。天霏を成せる其の底に。天之常立神成坐し。その重く濁れる物は。下に淹滯りて。大地と成れる傳へにて。其の燃明り。萠騰れる物は。陽元の象。その淹滯れる物は。陰元の象なり。是を以て。其未剖れず渾沌たりし間を。陰陽不分とは云へり。然れば。彼の始めて成りし一物は。陰陽交合の有狀なる物なりけり。古事記に。上件の三神。今の二神を。別天神と稱し。竝獨神成坐而。隱身也と有るは。此の五神共に。誰神の生ると云事無く。竝自然の如く成坐て。此の國土に降り坐さず。高天原に神留り。御身を隱して御坐す。別なる天神等なる由也。如此て。泉津國の初發は。神代紀に。天地初判。有物若葦牙生於空中。因レ此化神。號天常立尊。次可美葦牙彥舅尊。又有物。若浮膏生ニ於空中一。因此化神。

號國常立尊。次豐斟渟尊とある。彥舅尊より上は。天地の判り初の傳へにて。上に云へるが如し。又有レ物と云より下は。古事記に。上件の別天神五柱の次に。次成神名。國之常立神。次豐雲野神。此二柱神亦。獨神成坐而。隱身也。と有るに相照して攷ふるに。彼渾沌たる一物の中より。物あり葦牙の如く。空中に生り。それ分離て天と成れるに。其淹滯りて。大地となるべき物の底に付て。また物あり。浮膏の如くして。空中に生り。其物に因りて。國之常立神。豐斟渟神。二柱の成坐せる義にて。是れ乃ち豫美都國の初發なり。其は國之常立神を。また國之底立とも申し。天之常立神を。また天之底立。とも申せるに相對ひ。豐斟渟と申す名。また宇麻斯葦牙と相對ひて。上と下とに。芽ぐみ生れる趣きの名なると。此の件の二神をも。竝獨神成坐而。隱身也と有るは。泉津國に成坐して。此の世に出坐さぬ故なるとを。想合せて知べし。然れば此の二神は。上件の五神を。別天神と申すに准へて。別泉神とも申す可くなむ。其は伊邪那岐大神の。其國に往坐せる段に。泉津神と有るは。此の神等と通ゆればなり。さて是國。かく大

地の下邊に付て成れる故に。天日の光を受ること無く。甚汚なく。醜めき國なりし故に。夜見國といひ。また根國底國とも云ひて。大地に付て在りし神世の間は。現に神の往來あり。然るを後に。大地より切離れて。今現に月と見るもの。やがてこれなり。元は大地に付たる。夜見國なるがゆゑに。萬葉の歌に。こを月豫美と謂へり。さてかく天地泉の初發を知りて。次に是の神國の創造を問ふべし。

抑皇大御國の創造とは。即ち是の皇國の創造をいふ。其は先づ上に引たる神代紀に。天先成而。地後定。然後神聖生其中焉。とあるは。是の國土に。神聖の成坐せる始にて。天日と月夜見との神は。二柱づゝ。何れも男神なるを。此の國土の神に。男女二柱なり。此の事を古事記に。上件豊雲浮神までを著せる次に。宇比地邇神と。妹須比智邇神と成坐し。次に角杙神と。妹活杙神と成坐し。次に大斗能地神と。妹大斗能辨神と成坐し。次に淤母陀琉神と。妹阿夜訶志古泥神と成坐し。次に伊邪那岐神と。妹伊邪那美神と成坐せる由を記して。次に上件自國之常立神以下。伊邪那岐伊邪那美神以上。幷稱神世七代。上二柱者獨神各々云一代。次雙坐十神者。各合二神而云一代也。とあり。神代紀も同じ趣なれど。宇比地邇神より訶志古泥神と云まで四代。男女八柱の神名は。實には伊邪那岐伊邪那美二柱神の。大地と共に漸々に。其の御體の成整ひ坐せるに就て。かく種種に稱白せる御名の傳はりて。然る四代の御名とは成れり。是を以て。彼の別天津神たちの大御言依しも。此の二柱の神に詔給ひ。古事記の序にも。陰陽爰開。二靈爲群品之祖。と云ひて。伊邪那岐伊邪那美神の故實のみぞ著しける。斯て此の皇國は。是の二靈神の御產坐せる御國にして。佗し諸蕃國の。比ぶべき類に非ず。そは古事記書紀なる傳へを採り合せて。其の大凡を云はむに。爰にかの天津神諸之命もて。伊邪那岐伊邪那美二柱の神に。かの大地の未堅まらず。婆々と在るを指して。是の漂へる國を。修固成せと御言依して。天之瓊矛と申すを賜ひしかば。二柱の神。天之浮橋に乘發まして。其の國の中なる處に。天之瓊矛を指下して。潮凝々に畫成たまひ。引上たまふときに。其の御矛の末より垂落れる潮。自づからに凝りて島と成れり。此を淤能碁

呂島といふ。二柱の神。その島に天降坐して。其御矛を。その島に衝立て。國中の天御柱と爲して。八尋殿を見立て。共に住たまひ。國生成さむと。互に率なひ坐て。始めて夫婦の御擧を爲し給ひ。まづ淡路の穗之狹別島を胞として。大倭豐秋津島を生まし。次々に。八島を生給ひし故に。御國の總名を。大八島國とは謂ふなり。然て後に。また六の島々をも生給へるが。是の皇大御國の域にて。其の餘に有ゆる島々は。悉潮沫の凝りて成れるよしの傳へなれば。諸の外つ國々は。いかに大域なるが有とも。皆陋しく瘠地なるべき謂にて。獨り是の大御國ぞ。皇祖二柱の神の。產たまひ修り給へる。祖國本國神國には有ける。宜しこそ。御國に生と生出るもの丶限り。萬國に卓越たりけれ。さて如此く。神國の義を明しおきて後に。蒼生の生出たる元始を問ふべし。(然て此の義を知りて次に天皇祖神の御依し及び大兆の淵源を問ふべし)二柱の神の大地の柱と衝立給ひ。御矛は自然の土主にて尺度の元も是より起れり其は委しく皇國度制考に論へり就て見るべし)シマと云はクニと云よりは大きなり其は古へ今の一郡一鄕ばかりの所をもクニと云へれどシマと云へることはなし其はシマはシマリの義にて廣くクニはクネの義にて狹し)

凡御國に。蒼生の生出たる元始は。古事記書紀拾遺には。其の傳を洩せれど。鎭火祭詞なる天津祝詞に。神伊佐奈伎伊佐奈美命。妹脊二柱嫁繼給氐。國能八十國。島能八十島乎生給比。八百萬神等乎生給比。麻奈弟子爾。火結神乎生給氐。云々と見えて。八百萬の神とは。多くの神を總云ふ古語なる事は。今更に云ふまでも非ず。然れども。此の謂ゆる八百萬の神は。石屋戶の段。御天降の段などに。八百萬神と有るとは異なり。其はまづ伊邪那美神の。豫美都國に往坐ざるまへに。二柱の神の生給へる神等は。神典を總て稽ふるに。風神を吹生坐るを始とし。火神。金神。水神。土神の五柱に限りて。此の外に。御子の列に入たる神は有ることなし。然るを此の詞に。國生竟まして直に。火結神より前に。八百萬神を生給ふと云ふこと。傳への訛なるかと思ふに。此の太祝詞は。彼の造化の首を作給へる天皇祖神の。越なく正しき御語なれば。故こそ有めと攷ふるに。

是ぞ顯見蒼生の祖神等には有ける。いでや二柱の神の御世より。既に蒼生の有し事は。伊邪那岐神の。泉津國より還給ふ時に。泉平坂の坂本なる桃に。汝如助吾。所有青人草之。落苦瀨而惚苦之時。可助と詔へるを始め。其坂にて。二柱の神相對立せる。御爭ひの時に。女神の御言に。吾汝國之人草。一日千頭絞殺と宣へば。男神こそを詔直して。汝然爲之則。吾當一日立千五百産屋と詔ひ。須佐之男命の涕哭の所に。人民多被夭折とも有にて知らる。然てかく致定めて。立却りて。彼の天神諸之命もちて。二柱の神に。修理固成是漂在國と詔して。天瓊矛を賜ひて。言依給へる事を考ふるに。彼の大詔命の御旨は。子細にこそ宜はね。彼の淹滯りて。大地と成べき物を。修り固めて。まづ國生むべき基を成より始めて。國土を産み。人草を生む事までを挂て詔へるにて。中にも人草を生出べき道を敎へ給へるぞ。主たる大御心には有ける。其は國生固め給はむ事を依し給ふは。人草を任せ給はむとの御心ならずは。何の要とかせむ。最も徒なる擧に非ずや。故二柱の神。その賜はりし產靈の任まに。まづ其御矛を。かの中なる所に指下して。畫成し引上給へれば。其末より垂落る潮。自づからに凝て島と成れるに。所思著せる趣に。其の男女の元の處を問かはし坐して。始めて夫婦の御界を作し給ひ。次々に國を生成し。然て是の青人草の祖神等を生給へる事は。天皇祖神の大御心を。其の御心となし給ふ二柱の神の。專要とある御成業になも有ける。其は上に引出たる御言どもは更なり。天照大御神の。穀物の種等の。始めて生出たるを御覽して。此の物等。顯見蒼生之。可食而活物也。と詔へるも。其の大御心を繼給ふ御言なるが。殊に其の皇御孫命に。可治葦原中國とて。天降坐しめ給へる事は。たゞに葦原中國とは詔へれど。實は其の國なる人草を。治め給へと詔へるに等しき。大詔命なるをも思ふべし。かく心定おきて。神世の傳を讀もて行くに。次に風神を吹生給へるを始め。次々神等の生坐る事狀の。左ゆき右ゆき。また各々某々に。其の御功德を持分たまふ事も。皆謂ゆる三神二靈の。青人草を愛しみ惠み給ふ大御心を。末々の神等まで。其の御心と爲し給ふに因れる事なり。此の義すべて。神世の御典

を讀む者の。伊都速く心得居るべき事なり。此の義を得知らで。神典を讀む人は。徒に文字を數ふる人こそ云ふべき。如此て次に。五行の神化を問ふべし。

凡五行の神化とは。風神。火神。金神。水神。土神。五はしらの神等の。次々に化出まし。かつ其の物々も。其の神等とともに。始めて世に顯はれて。行ゆる萬物に變化りて。靑人草の化育の用を爲すを云ふ。此の五種の物。及び其の神等の。二柱の神より分出せる由は。まづ神代紀に。二柱の神。共に大八洲國を生給ひ。然して後に。伊弉諾尊。我所生之國。唯有二朝霧一而。薫滿哉と宣ひて。吹撥はせる氣に。化爲せる神號を。級長津彥神。級長戸邊命と申す。此は風神也と有るが始にて。此は事の次第を思ふに。既に夫妻の御態によりて。大八島國は生竟給へれど。狹霧のみして。人草の住居すべくも非ねば。先其の狹霧を撥はむと所念入りて。氣吹ませる其の御靈の凝に。その御氣より風神の成坐るにて。此は夫婦の御態に預れる事には非ず。是をもて神代紀にも。化爲とは書れたり。然て風神化爲ては。既に國土の狹霧の晴しかば。乃ち夫婦の御態に因りて。八草の祖たる。八百萬神を生坐し。其麻奈弟子に。火產靈神を生給へり。此は火の神にて。亦の名を火之燒速男神とも申せり。其の生坐の詳なる趣は。上件に引たる太祝詞の續きに。麻奈弟子爾。火結神生給氐。美保止被燒氐。石隱坐氐。夜七夜晝七日。吾乎奈見給比曾。吾奈妹乃命止申給比支。此七日爾波不足氐。隱坐事奇止氐。見所行須時。火乎生給氐。御保止乎所燒坐支。如是時爾。吾名妹乃命能。吾乎見給布奈止申乎。吾乎見阿波多志給比津止申給氐。吾名妹能命波。上津國乎所知食倍志。吾波下津國乎所知牟止申氐。石隱給氐。與美津枚坂爾至坐氐。所思食久。吾名妹乃命能所知食上津國爾。心惡子乎生置氐來奴止宣氐。返坐氐。更生子。水神。匏。川菜。埴山姬。四種物乎生給氐。此能心惡子乃心荒比曾波。水神匏。埴山姬。川菜乎持氐。鎭奉禮止事敎悟給支。とあり。其の隱坐せる處は。出雲の國の。謂ゆる伊賦夜坂の石屋なり。此は火神を生坐す時に。其の御陰を燒れて。其御惱みの間を。夫神に忍び給はむと所思して。如此は宣へるなり。然るに夫神。さる事とは知食さ

ず。奇しき事に所思して。白し給へる七日の間を。待あへ給はず。見行せるなり。然るに女神は。なほ御惱みの間にて。御保止をさへに。見られ奉り給ひし故に。いたく恥恨み給ひ。長く下津國に神避りて。相見え給はじと。御心定して。如此なも宣ひ。其の石屋より。直に下津國に往坐せるに。其の途中なる。泉津平坂に至り坐て。ふと彼の火神の。心惡子なる事を。所思食つかして立返り給ひ。其の荒び坐さむ時に。鎭め奉るべき。四種の物を生坐して。其の鎭むべき方をも言敎へて。遂に下津國には往坐せるなり。水神とは。乃ち彌都波能賣神を申し。埴山姫とは。即ち土神の名なり。四種の物と云へば。匏川菜は然る者にて。水をも埴をも。生出給へる由なり。其の事の精しき趣は。神典を採合せて記さむに。伊邪那美神。已に火産靈神を生給ひて。其の御惱ありし間の御多具理に因りて。化爲せる神は。金山毘古神。金山毘賣神。こは金神也。火神の荒びを鎭むる神を生むと。泉津路より返坐して。其の御尿に化爲せる神は。彌都能賣神。こは水神なり。其の御屎に化爲せる神は。埴山毘賣神。こは土神なり。故御尿は。乃ち水の始め。御屎は乃ち埴の始なり。既に此の神等の神化を知りて。次に二神の妙用を問ふべし。

抑二神の妙用とは。上件の五神の中にも。別きて火神土神の妙なる用あるを謂ふ。其は神典を合せ考ふるに。火産靈神。やがて土神埴山毘賣神に御合ひて。稚産靈神を生しめ。此の神の御子に。豐宇氣毘賣神あり。此は五の穀物と。桑蠶などの元祖神にて。また其の幸魂の神二柱あり。一柱は木神久々能智神。一柱は野神萱野比賣神なり。此の二神を合せて。屋船神と申す。乃ち御殿の神。また宅神なり。故れ是の豐受毘賣神は。衣食住の元神に坐なり。然るに伊邪那岐大神。其妹伊邪那美神の。火神を生給へる事より起りて。泉津國に神避ませる事を。甚く御歎きまし。且御怒り坐て。愛之我那邇妹命乎。替㆓子之一木㆒哉と詔ひて。御佩せる十握劍を拔して。其子火産靈神を斬りて。三段と爲給へば。其御骸の三段に。大山祇神。大雷神。高龗神。三柱成坐せり。大山祇神は。あらゆる山神の御祖なり。如此て是の大山祇神。かの野神萱野比賣神と二はしら。山野に因りて

持別けて。生坐せる神八柱あり。其は天之狹土神。國之狹土神。次に天之狹霧神。國之狹霧神。次に天之闇戸神。國之闇戸神。次に大戸惑子神。大戸惑女神なり。此は坂處谷所などに在て。霧露霜などを發して。幸ふ神等に坐せり。已に此の神等の有功を知りて。

次に武神の出自を問ふべし。

凡武神の出自とは。世にも武士の祖神と稱へ申す。武甕槌神。經津主神。二ばしらの。生出坐せる出自の由なり。其は上件の如く。伊邪那岐大神。かの火產靈神を斬給ひし時に。其の御刀の刄より垂落る血。天上に激り上りて。安の河原なる。五百箇石村と化り。其の御刀の鋒より灑る血。其の磐石に激り越て。磐裂神成坐し。其の子に。磐筒男磐筒女神生坐せり。此は經津主神の御祖なり。また其の御刀の鐔より垂落る血も。其の磐石に激り越て。甕速日神成坐し。其の子に熯速日神生坐せり。此は武甕槌神の御祖なり。是の時の血激り灑きて。石礫木草に染たる故に。草木沙石も自然に。火を含む緣也とあり。火產靈迦具土神は。火の元靈の神に坐せば。其の血と有るは。乃ち世に有る淸火の初發なり。斯て其の御刀の名を。

天之尾羽張神とも。稜威之雄走神とも申して。此も神におはし坐す。是を以て後の國向ましの所には。稜威之雄走神の子。武甕槌神とあり。然て次に道饗の故實を問ふべし。

抑道饗の故實とは。謂ゆる道饗祭の故實の元の由なり。其は伊邪那岐大神。すでに火神を斬給ひて後も。なほ伊邪那美神の。神避り坐せる事の。御悲みに堪給はず。逢見まく欲して。泉津國に追往せるに。伊邪那美命。常の御有狀にて出向ひ坐るに。伊邪那岐神語ひて。悲二思汝一之故來。吾與レ汝所作之國。未作竟故。可レ還と詔ふに。伊邪那美命答へて。悔哉。不速來而。吾已爲二豫母都戸喫一。雖レ然。愛之吾那勢命。入來坐之事恐故。欲レ還。且與二豫母都神一相論。莫レ視レ我と白して。其の殿內に還入ますほど。甚久くて待かね給へれば。左の御美豆良に刺せる。湯津抓櫛の雄柱一つ取缺きて。一火燭して入見ませるに。蛆沸り盪けて。八人の泉津醜女ぞ副居ける。伊邪那岐命見畏みて。汚穢き國に到りけりと詔ひて。逃還り給ふ時に。伊邪那美命恥恨みて。何不レ用二要言一而。令レ恥二見吾一耶。汝已見二我情一。我復見二汝

情と白し給ふに。伊邪那岐命も恥て。族離不負於族と詔ひ。御唾し掃ひて。出返り給ふに。伊邪那美命。かの泉津醜女らを遣して追しめ。最後に。御身自も追來ましき。伊邪那岐命。種々の神態行ひ給ひつゝ。辛くして泉津平坂まで逃到まして。千引磐を。その坂路に引塞へて。其石を中間に置きて。伊邪那美命と相對立して。絶妻の誓を立給ひ。此より。莫來と詔ひ。其の衝給ひし御杖を投棄給へば。伊邪那美命。吾名妹命。汝如此言則。吾汝國之人草。一日千頭將絞殺。と白し給ふ。こゝに伊邪那岐命。我汝妹命。汝然爲之則。吾哉。一日當立千五百産屋。と詔直し給ひき。是以一日必千人死。一日必千五百人生也とあり。如此て伊邪那岐命。始爲族。悲及思哀者。吾怯也と詔ふに。伊邪那美命も。吾與汝已生國矣。奈何更求生乎。吾則留此國而。不共去と詔ひ。伊邪那岐命そを善めて。遂に散去ましぬ。其の謂ゆる泉津平坂は。今に出雲國の伊賦夜坂と云ふ處也。其の坂に塞れる石は。道反大神とも。塞坐泉戸大神とも。八衢比古。八衢比賣神とも稱し。彼の投棄給ひし御杖に。成坐る神の名を。來名戸之祖神とも。衝立船戸神とも。亦直に岐神とも申す。此久那斗神。八衢比古。八衢比賣三神は。謂ゆる塞神にて。道饗に祭る大神等なり。既に此の神等の有功を知りて。次に惡神等の所成を問ふべし。

凡そ妖神の所成し始めは。伊邪那岐大神。既に泉津國より還坐して。悔給ひて。吾は伊那醜目醜めき。汚穢國に至りて在りけり。故御身の穢惡を濯去はむと詔ひて。粟門また速吸名門を往見給ふ。然るに此の二門は。潮太く急し。故筑紫の日向の橘の小戸の。阿波岐原に到坐して。禊祓し給はむと欲して。投棄給ひし御帶に成れる神名は。道之長乳齒神。次に投棄る御衣に成れる神の名は。煩之大人神。次に投棄る御褌に成れる神名は。飽咋之大人神。また投棄る左の御手の手纒に成れる神の名は。奥疎神。次に奥津那藝佐毘古神。次に奥津甲斐辨羅神。また右の御手の手纒に成れる神名は。邊疎神。次に邊津那藝佐毘古神。次に邊津甲斐辨羅神。凡せて九柱なり。此は其の御身に著ける穢物を。脱棄給ひしに因りて成り。水陸に在りて。妖氣を作す神等なり。既に此の由を知り。かくて次に。禊祓戸の神等を問ぬべし。

抑禊祓の神事の始め。其の神等の事。上件の如く伊邪那岐大神。彼の國の穢物を。盡くに脱棄まして後に。上瀬者瀬急。下瀬者瀬弱と興言し給ひ。中瀬に墮かづきて。滌ぎ給ふ時に。大禍津日神を吹生給ふ。此はかの穢繁國の汚垢を。惡ひ給ふに因りて成坐る神なり。次に其の禍を直さむと爲て。大直毘神。次に伊豆能賣神を吹生給ふ。次に御鼻を洗ひ給ふ時に。成坐る神の名は。速佐須良比賣神。凡て四神坐す。故れ其大禍津日神。また大屋毘古神。またの御名は瀬織津比賣神。次に其の大直毘神。またの御名は氣吹戸主神。次に伊豆能賣神。またの御名は速秋津日神。また速秋津日子神。次妹速秋津比女神とも申す。此は水戸神なり。故是の速秋津日子神。速秋津比賣神二ばしら。河海に因りて。持別けて生坐る神の名は。沫那藝神。沫那美神。次に頰那藝神。頰那美神。次に天之水分神。國之水分神。次に天之久比奢母智神。國之久比奢母智神。凡て八柱坐せり。瀬織津比賣神。氣吹戸主神。速秋津日神。速佐須良比賣神。四柱は。謂ゆる祓戸神等に坐し。沫那藝神より下八柱は。水戸神の功を翼けて。世に水分り幸ふ神等なり。已に此の事を知りて。次に海神の初生を問ぬべし。

凡海神の初生の事は。上件の如く。伊邪那岐大神。すでに祓戸神等四柱を。吹生し給ひて後に。水底に洗濯き給ふ時に。底津綿津見神。次に底筒之男神と申す。二柱を吹生し給ひ。中に潜濯き給ふ時に。中津綿津見神。次に中筒之男命と申す二神を吹生たまひ。水上に浮濯き給ふ時に。上津綿津見神。次に上筒之男命。と申す二柱を吹生し給ふ。凡て六神なり。此はみな。海底に宮鋪坐ます神等にて。綿津見神は。廣く海を所治看し。筒之男命は。海路を掌給ふ趣なり。如此て此の三柱の綿津見神を。また大綿津見神と申し。また豊玉毘古命とも申す。其の御女に。豊玉毘賣命。玉依毘賣神と申す二神あり。兄弟ともに。天津神之御子の。御后と爲給へり。如此知りて後に。天日大御神。月泉大神の生坐を問ふべし。

抑天日の大御神。月泉の大神の生坐し。かつ其の域域を所知着す事本は。伊邪那岐大神。すでに御禊祓し給ひ竟て。左の御目を洗給ひしに因りて。天照大御神生坐せり。亦の御名を。天照大日孁命と申す。

次に右の御目を洗ひ給ひしに因りて。月夜見命生坐せり。亦の御名を。健速須佐之男命と申す。此の時伊邪那岐命。大歡喜して。吾者生々子而。於生終。得三柱貴子也。と詔給ひき。故其の天照大御神。質性に。光華明彩坐して。天地に照徹らせり。故伊邪那岐命。吾子雖多未有若此靈異之子不宜留此國也と詔ひて。即ちその御頸珠の玉緒。倉々に取動かして。天照大御神に賜ひて。汝命者所知高天原矣。と事依し賜ひ。是時天地相去ること未遠からず。故天之御柱を以て。天上に擧奉り給ふ。次に健速須佐之男命に。汝命者所知天下也。と事依し給ひき。此の神も質性に。光彩日神に亞ぎて。明麗く坐き。

然して天地泉の成立。及び其の運轉の大要を辨へ。

次に神世七代の定說。かつ其の神名の然る故よし。

さて天祖神諸の詔命に依て。皇祖二神の天柱を見立給へる所以を探り。

次に天祖神の。始めて太兆し給へる其の淵源。及び文字の初出を明し。

さて皇國の創造。その神國たる所以。かつ諸外國の陋劣たるべき故など

次に蒼生の元始。及び萬物の初生も。皇祖二神に出たる由を辨へ。

是より諸神祇の功德を探ねて。風火金水土。謂ゆる五行の神化。かつ火土二神の妙用。鎮火祭の故義。及び火忌の本緣を明し。

さて武神の二柱は。伊邪那岐大神の御稜威より成坐して。國の荒亂を治むる道の本たる事を知り。

次に塞神三柱の成坐し。且つその道饗祭の由來を問ふて。猥に外邦の鬼神を祭祀すまじき故實を辨へ。

さて妖神八柱の。泉津國の汚惡に因て成出て世に。災殃ある事は。此の神等の心より起る事なる由來を知り。

さて水分神たち八柱の成坐し且その神德を問ふて旱に雨を乞奉り霖に晴を祈る古義法驗を辨へ。

次に海神六柱の成坐し及び此の神たち海中を司ると海上を守るとの別ありて船を通はし外國を平治する等に其の祭なくて叶はぬ故實を明し。

さて日神月神の生坐し且その二神の天日の御國と月泉國とを知別給ふ事は神祖伊邪那岐大神の御任しに起れる事の由を知り。

次に武道の鴻基は日の神のその所知看す御國を守り給ふと始めて武備を裝ひ給へるに起れる事の由を辨へ。

さて皇胤の紹運は天照大御神と健速須佐之男大神と互に劒を喫ひ玉を吐て御誓ひ坐せるに起りて無窮に相續ぎ給ふ由を明し。

次に祭祀の起元は天照大御神の豊受毘賣神の御魂を祀り給へるに起りて此は人民の衣食住の道の本神たる由來を知り。

さて馭蕃の權輿はイサナキノ大神速須佐之男神に天下任給ひし□□固より盡く我が大皇の統御し。

次に顯幽の微旨皇御孫命の天降以前は大國主神この御國の主とまして顯幽相兼て治め給ひしを天津神の大詔命によりて顯事は皇孫命しろしめし幽事は大國主神しろし看す事に定まれる由を知て次に皇孫の御降臨を問ふべし。

さて皇御孫の御降臨とは御大祖皇孫邇々藝命の天降ませる義にて此は天照大御神の大詔命より起りて高皇産靈神專と其の事を執給ひ天上にして高御座に即奉り給へるが豊葦原の水穗國の荒振神どもを攘ひ向けて皇御孫命を大御神その天日嗣の高座に即奉り給ひて御國の大皇と爲奉り給ひて天降し給へる故を知りかくて次に大嘗の初式を問ふべし。

次に大嘗の初式とは皇御孫命すでに天降坐て大宮敷坐し大嘗きこし食むとして天つ水取の御政事あり悠基主紀齋庭など種々の式ありて皇神たちにも奉り給へる始を謂ふ。

さて神世の年歴とは皇御孫命の天降坐る年より神武天皇の御世までの年歴を書紀に一百七十九萬二千四百七十餘歲と有れど疑しければ其の正實を探ぬるを謂ふ。

次に鎭魂の玄義とは神武天皇已に。

凡神祇伯王家の御門葉に相列し神國士民の道を學むと志を立候徒は舊來御示敎なし置れ候御條目の最初に夫神道者萬國一般之大道古今不易之運用神武一體法令之出處也と御座候御趣意を恒に遺忘仕らず世に或は神道と申すは唯に神前に俎豆を列ね禮容を設け候樣の事とのみ非心得候者も是ある趣に候へ共惟神の古道乃惟神道神道乃帝道武道に是あり帝道唯一神武一體の御政道に候儀を大切に相辨へ其の義を諦

に相心得候に古事記書紀古語拾遺姓氏錄等の皇典に相據り先つ第一に天地の初發は天地に先立つ天祖天之御中主神高皇產靈神神皇產靈三ばしら無始より天中に御坐して鎔造化育を首を作賜ひ陰陽すでに開けて皇祖伊邪那岐伊邪那美二柱の神の群品の祖と爲たまひ候太素の古傳本敎の來由を識り然して天黃泉の成立せる由緣及ひ天柱を立て國土を堅め賜ひ候事かつ其の運轉の大要を辨へさて神世七代の定說及び其の神名の然る故よし且つ天祖神諸の詔命に依て皇祖二神の天之御柱國之御柱を立給ひ始めて八尋殿を化作し給ひ候こと及び太兆の淵原文字の初出を明めさて皇國の創造その神國たる所以かつ諸外國の陋劣なるべきゆゑを知りさて蒼生の元始及び萬物の初生も皇祖二神に出たる由を辨へ是より神祇の功德に及び候て風火金水土謂ゆる五行の神化及び火土二神の妙用を探ね。

さて武勇の元神（もとつかみ）鹿島香取二社の本緣を問ふて國の荒亂を治むる道の要を知りさて塞神三柱の出自かつ道饗祭の本義を探ねて猥に外國の鬼神を祭祀すまじき故實を辨へさて妖神八はしらの泉津國の汚惡に因て成出て世に災殃ある事は此の神等の心より起ること其を鎭むるの道を知り次に祓戸神四柱の出自及び禊祓の本義を探ねて天下の災妖を大祓に解除失ふ旨を明らめさて水分神八柱の出自及び其の神德を問ふて晴雨を祈る法を明し次に海神たち六柱（頭注云綿津見神は軍法の神）の初生を探ねて其の海中を知ると海上を守るとの別ありかつ船を通はし外國を平治むる等に其の祭なくて叶はぬ故實を辨へさて日月の主神の生坐しかつ其二神の天日の御國と月泉國とを知別給ふは伊邪那岐神の御依しに起れる事を明らめ次に武道の鴻基は日の神の始めて武備をなし賜へるに起りて守國の要道たる由を辨へ次に祭祀の起元は日の神の始めて豐受姬神を祀り給へるに起りて是天下の人民の衣食住の道の本神たる事を知りさて皇統の本起は天照大御神と速須佐之男命と劒を喫ひ玉を吐て御誓坐るに定りて無究に相續給ふこと。

さて顯幽の徵旨かつ萬國みな遂に皇國に臣從すべき本緣次に天孫の降臨及び大嘗の始め立后の初めかつ神世の年歷さて鎭魂祭の玄義及び郊祀の本元八神殿の故由。

○禁秘御抄の御習學專に候事と見えて不レ明ニ古道一能レ致ニ太平一者未ニ之有一也と有り古道とは皇極天皇紀に天皇順ニ考古道一而爲レ政也と記し給へる古道乃ち帝道神道なり當家條目に此道を神武一體法令之出處也と云こと是にて知べし卽謂ゆる惟神の道唯一の帝道是なり然て如此道の本義を辨明して今も武家より制し置るゝ政令やがて帝道神道古道なる故に當家條目に夫神道者云々也と記せる故よし上件の事ども。

ひとりごと

辨卜抄俗解といふものあり伊勢の度會延經といふ人の著せる辨卜抄に尾張の吉見幸和といふ人の俗解せるにて神祇大副吉田殿の御家流を論辨せる書なるかあけつらひ得たりと見ゆる說どもゝ見ゆれど中にはいたく心得誤りて謾りに誹謗せりと覺ゆる事どもの少からぬをかの流をくむ學者等のさる非說どもを知てや有らむ知らずてやあらむかの非說を知て答辨せざらむは其道に忠ならずといふべく其を非說と知らさらむは學の力なしと云べし抑彼御家の學風又その立たまへる行事の趣はも何ちふ人の始めたるかは知らねども中津御世に佛法をいと重きものに用ひしかば古の眞の道の埋もれ果なむとするを歎き愁ふるまめ心はありしかど一向に古意をのみ說つたへたらむには公私こぞりて然ばかり佛法をこのめる世にしあれば絕て用ふまじきことを思ひて彼道ざまにならひまたその法を変へ用ひもして後に古意の行はれむときをまちて改めむと姑く建られたることゝ思はるゝをかの家流を論ずる輩さる事情をば思ひも慮らで口を極めて誹謗するはいとも情なき事ぞかし然るはしか論ふ輩のたてたる趣きも自のこゝろにこそ佛意をきよく放れて眞の旨にかなへる神道行事としたり貌にほこり思ふめれどまことの古意をのみ探り索むる我が徒より見ればなほ佛意ものこれるが上に陰陽五行の腐れたる說に周易の趣をさへとりこめたる漢意もて建たるにてかたはらいたきことの多かるを今世の神道學者などさる事としも知らざるは我師の言に佛意をものせるはその毒あさくて現に知られ漢意をものせるはそのどく現に見えず譬へば陰症の傷寒の熱のあらはにしられざるごとくそのどくかへりて深しといはれたるが如しされば彼輩の吉田家の學風をそしるはたとへば百步逃たるものゝ五十步逃たる人を笑ふ類ひにぞありけるかの御家にて今傳へたまふ神道行事に佛法さまなる事の交れるはしばらく世風にならひて物せられしなる事彼御家の古書たる宮主秘事口傳抄といふが世に傳はるを見るに神事の故實にいさゝかも儒佛の意を交へたりと見ゆることなく殊に今傳はる延喜以前の古書ども中世のみだれに諸家には持傳へざりしを其古書どものあるやう世の神

職人などに神道神事とてつたへたまふ趣とはいたく異なるを以て舊くは眞の故實を傳へむとの御意なりしことと爲しされば世の神職人たちに古書の趣と異なる説をつたへ置たまへること深き心のなくてあらめや百錬抄に高倉院安元元年六月十六日蓮花王院總社鎮ニ座八幡以下二十一社其外日前宮熱田嚴島氣比等社本地御正體圖繪像但日前宮熱田宮御本地無所レ見仍只裝レ用レ鏡とあり今しこそ神職たちも佛意を惡ふことゝなりつれど彼の中頃は世とゝもに佛を好めること此にて知るべしまた名たゝる大社にも別當をおき本地堂を建たるがいまも存れるを以て中世より吉田家にて佛意を混合せる神道行事をものせるはふかくおもひて世風にならへる姑の術計なりしことを辨ふべしまた彼家をいたくきらふ輩もその傳へられたる延喜以前の古書によらでは道を明らむべき便なきを秘藏れたる古書をつたへられしによりてこそ古の道の趣をも伺ふことには有なれさるいみじき恩頼をは聊も思はざるは餘りに情なき態ならずや古意のまゝなる古書をもちつたへつゝそれと異なる神道行事の佛意なるを弘められしを以て後に眞の古意の世に顯はれむときをまちて改めむとのわざなりしことは明かなりさてかの辨卜抄にかの御家を天兒屋根命の末ならずと論へるは殊に非説なりさるは俗に吉田系圖とてあるは後人の僞作といふこと彼抄に論へるごとくにて平麿ぬしといひし人より以前の系は古書にうち符さることどもあれば信がたく覺ゆれど平麿ぬしは國史に伊豆國卜部とありてそれよりのちの系はいと正しくつたはりたり卜部なる人に天兒屋根命の裔ならぬは決めてなきことなるを辨卜抄の論者どもの學問の力足らずてさるふかき由緣をば探ねも知らず謾に口を開たるはいかに一偏ならじやは彼の御家の流をくむ人々の辨卜抄なる餘事の辨はさしおくとも出自をいひみだせるこの論はきゝすてがたきことなるに此をしも淸く辨ぜざるは是またいかなる意ぞも傍にきく我さへにいとも慨ろしく覺ゆるを然は思はざるにや彼の御家は元より神道行事に名高き故に謂ゆるひいきの引たをしといふごとく其流れをくめる輩の古く彼の御家より出たる由にて僞作せりと見ゆる書の多かるをいかて悉く撰びすてゝ妄書は世に傳へたまはざらむ由もがな古は四國の卜部とてい

と多かりし家々の皆亡なれる中にたゞ一家のこりて神事の宗源たる太兆の職業を傳へたまふやごとなき家をしも謾りに誹謗せしむる事はさる妄書どもの世に傳はるが多かる故ぞかしさて此につきてまた密におもふよしあり然るは今かく學の道の眞さかりとひらけ行はるゝにつきて國々なる社人たちも漸々に古書により本づきて神事せまほしとおもふもさすがにおほかるをかの御家を御本所などまをして尊むこゝろはありながら古意にたがへる神事どものおほかるをいと不足おもひなき手を出してもより／＼に事を計りて彼家を放れむとする徒多かるによりて彼御家事行ふ人などの嚴しくおきてゝ御家流の外なる異學をなせそと制してあながちに引付おかむとするを上べこそうけ貌はすれ本より正しき古書の實事によりてまなべることにしあればしか制する御家の流れこそ古書にたがへる中世よりの異學なれなどつぶやくともがらも國々には多かりと見ゆそは近きころ參河國の八幡宮の神主下總國意富比神社の神主などをはじめそのほかにもかの御家流を背きたるがあるを以て知られたりされば此後ます／＼眞の學問の明になりなむにはかの御家いかに制したまふともさらにそのかひなく今までの趣を改めたまはざらむ限りは次次に背くものゝ多くなりもて行て制しあへたまはじとおもひ慮られて傍にありつゝも心苦しく覺ゆるをいかで彼の御家の事とり行む人などのよくおもひて眞の學問を興したまひ中世にしばらく立たまへる神事を次々に直し改めたまはむことをまをして古學に拔群ならむ人を語らひて學師にたて神學館をひらき國々の社家に道は我が私の道にあらず朝廷の天下を治めたまふ大道なれば今より古學を用ひてやう／＼に中世より立行ひたる過ともを時のゆければ改めて古に復したまふ廣き厚き公平なる御心を知らしめたまはゞ各々心を安くして背き放れむと思ふ心はおのづからに止なむとぞ思ふ過ちては改むるに憚事なしとは漢人もいへり況て是は過を改むるに非ず中世よりしばらく行ひたまへる事をし時の至りて本の古風に復したまふなれば直き神の道を傳へたまふ御家になにか憚りたまふ事のあらむ然しては御家は古學を用ひ給ひてます／＼尊く古學は御家の光にあひてます／＼明になり神の御稜威もます／＼に古に立かへ

り國家の御守護いよ／＼倍々に驗然からむとぞ思ふ然はあれとその用ひ給はむ學師の古書のまに／＼正しく説をしふるを今までの御家説に違へばとて其説はなひろめそなど制し給はむには古學を用ひ給はむ證なくまた學師と有む人も是まで御家より傳へたまへる説をし古書の實事に違ふ事の有とて其を現にいひ學て恥見せまいらせむなどは神の道を守立む心ともなく詮なきわざなれば御家説また其行事などの違へるを眞の故實によりて申さむとならば他に知らしめず密に諫めまをして遂に止めたまふべく心を用ひかたみに私意をすてゝ一向に神の道にいそしまむとおもふ心を專として隔なくまけじ魂などさし挾まず語らひ申さむには天津神國津神たち相うべなひ御歡ましてます／＼に御稜威をふるひたまひ御靈幸ひ坐て道行はれ天兒屋根命より次々傳へたまふ神事の宗源たる御家業は天地と共に無窮に傳はりたまひなむをあはれ己がかく思ひとれる丹心をさる雲の上まで聞えあげむ事をし嚴矛の中とり持て白し顯はさむ其人もがな

午十一月三日　　篤胤花押

頼圀云午は文政五年壬午なり毀譽相半書上三十六才六行可併見

吉家系譜傳自序

この書をかく號くる由は。掛卷くも畏き。神と皇との御間とり持ち中らひて。綾に知えぬ皇神の。左あらば吉けむ。右らば凶けむと。誨へ賜はす御心を。知り辨ふる大兆の法を。靈幸はふ天神の。遠つ神祖の御代より。眞澄の鏡の眞分明に。一代もおちず仕へ奉り來まして。今も此の道の長上と。大詔命蒙ふり傳へ給ふ。卜部吉田の卿の家譜を。傳べせる書なる故にかく名けたり。抑この御家の纂記はも。然るやごと無き神事の宗源を掌して。その祕事はひめ事と。みだりに傳へ坐さぬ。家のあつき風にし有れば。共に世に現はし給はずなも有るめるを。尊卑分脈など始め。彼の家の系譜とて。圖載たるが多かるを。取ならべ視もて行けば。後に引出て論ふ如く。その系の區に妄なるは。悉その家ならぬ他人の。臆度りに作り構へし僞譜なれ故ぞかし。其は實に其の家より出し給へる譜ならむに。假令少かの錯亂は有とも其祖の御親の名を知らず。其の出自をさへに謬りて。世に弘布し給はむ物かは。殊に御紀にその氏を卜部と載され。雲上には。此の家にのみ神事の宗源たる大兆の道を傳へ給へる。是やがて其の本系の諦なる證にて。櫛眞智神の御裔と有らぬ者の。卜部に仕奉る事はも。かつて例なき古の道なるを。世に物識ぶる倫の。生狡意に心淺きが。然る由縁をば都に得知らず。辨卜抄ちふ物など書著して。かの中つ祖たちの心ならずも。世と共にしばし日の沒る國の。法を用ひし事の有るを。其にくしと嫌ふ心より。世の僞譜を云ひ破れる。其の論ひは然る言なれど。御紀なる平麻呂ぬしの。卒れる年の文のみ見て。その出自をしも。伊豆國の父も知えぬ。卑しき凡人にこそと。甚く罵り腐せるを。彼の雲上には未聞えず。御內なる物識たちも。未知ずや有るらむ。其を辨へ明せる說の聞えねば。其の御門下にいと古く。祖等が代より隨へる神主祝部の徒さへに。彼の辨卜抄に相率こりあひ口合つゝ譏り弘めて。背き奉らむなど謀ごち。神職とも有らぬ。訴訟など白し出て。公廷の御斷をこひ奉る倫ひも有りと聞ゆるは。最もかしこく悲しき事なり。爰に己はしも。彼の家に由緣なく。かつ其の家に傳へ給ふ。古き纂記は夢にも知らねど。

天地の神に幣おき。此の道に身を盡さむと誓ひ白せる身にし有れば。垣外ながら。然る論ひをし聞くに得堪ずて。年ごろ讀度れる書等の中より。彼の家の御系にかゝる事どもを。見得るがまに／＼抄出し。姓氏錄は更なり。中臣藤原伊伎卜部荒木田の系圖を始め。他し譜をも讀合せて次々にかく繼見れば。代代の次第の。いと諦にぞ所知たりける。此はし彼の家の遠祖神の。おのが然る心利の眞情をし。殊に阿波禮と聞し召えて。其の八意の御靈幸はひ。考へ知しめ給へるにや有らむ。しかは有れど。此は己が。今の荒魂の新に見得たる。謂ゆる岡目の八目とふ。矢猛心の言にこそ有れ。眞の御譜を見し人の。こを見てば。却りて岡目の片目なる。片羽に見ゆる事もぞ有るめる。其は元より眞の御譜を見知らぬ己が。餘の書に賴り證せる。また推量りの定なれば。何にかもせむ。爭で嚴矛の中とり持たむ人ありて。此をかの雲の彼方に氣吹上げて。漏落たる事の有むをば見直し書加へ。誤れる事をば。取直して。中臣系圖に云ひしごと。苟くも人の心を弃給はず。其來首の虛からぬは。なほ實を捜りて處分て給ひ。高く久しき御家の眞事を。今は弘く世人にも示し給はむ由もがな。

文政六年五月　　平篤胤 花押

吉家系譜傳

平篤胤謹撰述

參河國門人　草鹿砥宣輝
　　　　　　岩崎　兊健　同謹校
　　　　　　羽田野敬雄

○卜部氏正系

○天之御中主神　玄古太祖。諸神諸人之元祖。衆姓衆戸之分派皆悉無ㇾ不ㇾ此神苗胤ㇾ也

一津速產靈命　亦云二神速魂命一

此者火產靈神之御靈神也

二市千魂命　亦名天相命

武乳速命

此者添縣主祖也

三興台產靈神　亦云巳々登魂命　亦名天辭代主命

四天兒屋根命　亦云天津兒屋根命　亦云天兒屋命

亦名八意思兼神。（亦云天思兼神。亦云天八意命。亦云常世思金神。）亦名太詔戸命。亦名櫛眞智命。（亦云太麻等能智命。亦云太麻等能豆神亦云櫛眞命。）亦名國辭代主命亦云中臣神。此者娶ニ大石門別安國玉主命之女許登能麻遲比賣命一而所生也。

天表春命

此者信濃國阿智祝之祖也。

天下春命

此者秩父國造等之祖也。

五天忍雲根命　亦云天押雲命

六天種子命　亦云天多彌伎命　亦云天多彌伎根命

又六宇佐津臣命

七大御食津臣命　亦云御食津臣命

八伊香津臣命　亦云伊加津臣命

臣知人命

此者伊香連祖也

伊是理比賣

奈是理比賣

九 梨迹臣命　亦云梨津臣命

十 神聞勝命 ―― 十一 久志宇賀主命

十二 國摩大鹿嶋命 ―― 十三 大狭山命　亦云臣狭山命

十四 大雷臣命　亦云跨耳命

足中彥天皇之朝廷習二大兆之道一達二龜卜之術一賜二姓卜部一令レ供二奉其事一

天見通命

此者荒木田神主等祖也

一五 大小橋命 ―― 阿麻毘舍卿 ―― 阿毘古連

眞人大連 ―― 賀麻大夫　一云二雷子大連一

黑田大連

中臣常盤大連　氏上始賜二中臣連姓一。一云二常歯大連一

中臣伊禮波連　一云二阿禮波連一

中臣加多能古大連　氏上。一云二方之子大連一　常盤大連長男

鎌足公　内大臣正二位大織冠。改二中臣一始賜二藤原朝臣姓一

中臣久多連　左少辨從四位上　祭主神祇伯

中臣垂目連　小錦下小山中

不比等公　右大臣從二位。一云史。實天智天皇御子也。諸藤氏皆出二于此公一焉。

定惠　多武峯本願大和尙。十一歲入唐俗名眞人

中臣國子大連　氏上一云國形卿。一云國巢子。　常盤大連二男

國足　祭主 ―― 意美麿　祭主正四位上中納言左大辨神祇伯和銅四年薨。

東人　祭主從四位下神祇伯刑部卿

安比等　正六位上主船正

廣見　祭主正六位上神祇伯兼侍從

長人　正六位上中務大丞

豐人

豐足

清麿　右大臣皇太子傅神祇伯祭主正二位
延暦七年七月二十八日薨八十七

泰麿　正七位上

宿奈麿　阿岐守正五位下先レ父卒

子老　祭主正四位下神祇伯。
參議宮内卿左京大夫。

繼麿　美濃守正五位下

諸魚　祭主正四位上參議左大辨兼神祇伯近衞大將。
近江守延暦十六二月二十一日薨

老人　從六位上

今麿　祭主從神宮大宮司等補ニ大判事從五位
下大宰大判事。今藤浪家之元祖也。

智治麿　備中守從五位上

伯麿　山城大掾正六位上

良舟　文章生正六位上

良繼　式部少掾正六位上

正棟　内舍人從六位上。出家法名壹演。承和三年得度
受戒。貞觀七年九月三日任ニ權僧正一授ニ法印
大和尚位一同九年九月十二日入滅。贈ニ僧正一六
十五歲

貞棟　少判事

道棟　正八位上

中臣糠手子大連　常磐大連三男

中臣金大連　右大臣少紫位供ニ奉近江國朝
廷一合戰之庭被レ誅無レ後。

中臣許米連　被レ賜ニ朝臣姓一

大嶋　祭主中納言大貳神祇伯
此裔亦有ニ數流一略レ之

十六
眞根子命　自ニ三韓一歸朝之後留ニ于壹
岐島一母武内宿禰妹

日本大臣　神功皇后御世雷大臣使ニ于百濟一娶ニ彼土女一生ニ
一男一名ニ日本大臣一。歸化之後名ニ粟原連公一
寶龜十一七發酉。十三世孫右京人正六位上粟
原勝子君等十八人賜ニ中臣粟原連一

弟子命　弟子命六世孫意富乃古命雄略天皇御宇。東夷有ニ
不臣之民一專人強力押ニ防朝軍一於レ是意富乃古命
甲冑九重跨ニ進敵庭一無レ勞ニ官軍一一朝夷滅天皇
悅ニ其功一續更加ニ名字一號ニ中臣暴代連公一

日本大臣ノ弟子命子孫繁多載ニ于別卷一

十七
御身足尼命

十八
大田彦命

十九
酒人命　或作ニ佐賀彦命一

烏賊主命

二十 神奴子命　或神八子命云

母紀大磐宿禰女。○山背壹岐對馬等遠祖。山背歌荒洲田之元祖。自壹岐島遷居山背國歌荒洲田

廿一 忍見命

地。顯宗天皇三年二月。天兒屋根命十八世孫壹岐島司卜部宿禰忍見奉幣於高皇靈月讀宮。以主神事云々

廿二 太富命　母物部目連

十提命

廿三 吉彥　卜部伊吉宿禰

嶋主

盤余　敏達天皇御時。物部大連守屋。大三輪逆君。中臣磐余俱謀滅佛法。欲燒寺塔。並棄佛像。蘇我馬子諍而不從云々

廿四 乙等　卜部伊吉宿禰毋　紀國造押勝女

田耳　同母

博篤　同母

韓國　白鳳元年壬申五月從大友皇子戰。大伴吹負死

韓石

綾手

傳鑑　桓武天皇連徵叙位大法師。此時年一百一歲也。鑑一作鏡。

麻呂子

高定

子足　——　山麻呂

廿五 綱田　一作阿彌陀

廿六 古麻呂

廿七 宅麻呂　從五位上宮主。月讀宮長宮始把笏。伊岐島司又神祇官宮主。母下野守泰大魚女。

廿八 益麻呂　歌人。從五位下。大外記。神祇官宮主。天平寶字二年三月十六日卒。六十七。母中臣人足女。

眞次　宮主從五位下伊賀守鼓吹正。延曆十五年八月六日卒。母忌部首黑麿女。次一作繼

墨繼　伊岐島椽從六位上

墨氏　外從五位下

氏麿　月讀宮長官。神祇太祐。天長二年十月十一日卒。六十八。外從五位下丹波守從五位下秦眞成女。

氏成　月讀宮長官神祇權少副從五位下。左馬頭。承和十三年六月四日卒。五十九。

仙樹　天長十年六月壬戌。仁明天皇不豫。公卿陪候殿上。仙樹奉加持。而翌日瘳。因茲授僧都。

雄貞 月讀宮禰宜職。大宮主。外從五位下。實子貞本先ㇾ父卒。因ㇾ此以弟是雄爲ㇾ子

貞本 造兵司史。從五位下

尙貞 從六位上主水正

國雄 正六位下造酒正

宮雄 從六位上內膳正

千代麿 大皇大后宮宮主。外從五位下。— 忠則 宮主母神祇伯橘氏人女

忠岡 從五位下掃部正

春忠 正六位上正親正

是雄 本姓卜部。伊伎宿禰。宮司從五位下。兼丹波權掾。貞觀十四年四月二十四日。卒時年五十五歲。

月雄 讃岐掾正八位下。寬平八年六月十四日卒。五十九母大學頭和氣好道女。

篤胤云。本書此子孫甚繁而無ㇾ預二於吉家之系一故畧ㇾ之

三十 益業 松尾權祝。從六位上 — 三十一 業氏 同祝從五位下

三十二 宅基 司祝。右兵衛佐。從五位下

三十三 業基。眞雄。平麿 松尾祝月讀禰宜兼帶。平野社預

業孝 松尾社月讀宮兩禰宜職。神祇權少史。正六位上。貞觀五年九月七日。又改二卜部姓一。爲二伊伎宿禰一。

業冬 松尾社衣手社月讀宮祝。神祇權少史。正六位上

氏雄 主殿寮史從八位下

三十四 豐宗 平野社預 — 三十五 好眞 平野社預長上

三十六 兼延 平野社預從五位下

三十七 兼忠 長上從五位下。平野吉田梅宮社務。

兼國 神祇大副平野社 — 兼宗 神祇大副平野社

兼時 神祇少副平野社 — 兼友 神祇大副。正四位下平野複

兼衡 神祇權大副平野社 — 兼經 神祇少副平野社

兼頼 神祇權大副從四位下 — 兼文 神祇權大副

兼方 同 ─ 兼彦 同

兼貞 同正四位下 ─ 兼前 神祇權大副

兼遠 同 ─ 兼内 同四位

兼右 神祇權大副 ─ 兼尚 同

兼種 正四位下刑部卿 ─ 兼緒 神祇權少副

兼永 神祇大副正三位。實卜部兼倶卿子 ─ 兼隆 神祇權少副

三十八 兼親 長上從五位上侍從吉田社領 ─ 三十九 兼敦 長上神祇大副從四位下侍從上北面

四十 兼俊 長上神祇大副侍從 ─ 四十一 兼康 長上神祇權大副侍從從四位上

四十二 兼貞 長上神祇大副侍從 ─ 四十三 兼茂 長上神祇大副侍從

四十四 兼直 長上神祇大副侍從七朝侍讀。

兼名 從四位下右京大夫 ─ 兼顯

慈遍 大僧正南朝詔着直衣

兼維 從五位上民部大輔

兼好 左兵衞助。以二俗名一爲二法名一

四十五 兼藤 長上神祇少副正四位下 ─ 四十六 兼益 長上神祇權大副正四位下

四十七 兼夏 長上神祇權大副正四位下 ─ 四十八 兼豐 長上神祇大副刑部卿正四位下

四十九 兼熈 長上神祇大副正三位 ─ 五十 兼敦 長上神祇大副

五十一 兼富 長上神祇大副從二位 ─ 五十二 兼名 長上神祇權大副從二位

五十三 兼倶 長上神祇大副從二位 ─ 五十四 兼致 長上神祇權大副從二位侍從

五十五 兼滿 神祇少副侍從 ─ 五十六 兼右 神祇大副左兵衞佐。從三位

五十七 兼見 神祇大副大藏卿從二位 ─ 五十八 兼治 左兵衞佐大藏卿正四位下

伊勢物語梓弓

むかし。をとこ。うひかうぶりして。奈良の京春日の里に。しるよしして。かりにいにけり。

むかしとは。たゞに過にしかたをひろくいへるにて。文の發端を。かやうに書出すことは。からやまとの書におほかることにて。尙書といふ漢籍の序にも。右者伏羲氏王天下也。とかき出たるなどこれなり。(以上、臆斷によりていへり。)むかしといふにて。しばしよみ切るやうによむべし。といふ説あり。古意にいはく。此説よろし。○男とは。業平みづからの事にて。わざとむかしの。或男といひなされたるなり。さるは此ふみよ。大かたは。憚るべき事のおほかれば。(二條の后との事、また伊勢の齋內親王を姧せしことのたぐひ、)この頃の人の。たゞありにて。男女のかたらひせし事などは。さらにつゝむ事なかりし心にも。(此ころの人々の、みそかごとをつゝまざりしこと、總論にいへり。)しかすがに。つゝましう思はれし故にぞあらん。○うひかうぶりとは。初冠にて。童のはじめて。冠きることをいひて。則元服の事なり。(伊勢貞丈のいはく、古代の人は、みなさかいきを剃ることなくして、總髮なり、童子も中剃することなく、髻を結て、うしろへ長く垂ておきたり、髮の先をば、肩の下邊にて切るもあり、また婦人のごとく、さげ髮にしたるもあり、その父の好みによりてふたやうなり、さて元服の時は、髻を手一束半ばかりおきて、先をきり、冠をきするなり、元はかうべなり、初めて首に、冠えぼしをかぶる故、元服といふ、服は身に附ることをいふなり、)古き抄に。日本紀の孝德天皇の御卷に。初位を。うひかうぶりとよみ。またこゝに。しるよしゝて。とあるをもて。敍爵の事なりといへるはひがことなり。又うひを。よのつねに。うゐとかけるは。假名たがへ。萬葉集に。宇比とかき。また古今集物名の歌に。貫之の。そうびをかくして。我はけさうひにぞ見つる。とよまれたる。これうひとかくべき證なり。(以上本文、臆斷古意によれり。)○奈良の京は。大和國にて。元明天皇の御代より。

桓武天皇の御代まで。七御代の間。宮しきませる所なること。誰もしれるがごとし。京の字を。眞名本に。花洛。長安。京師などかけるをもて。古意にいはれしは。故はみやことよみけんかし。京の字。音にとなへば。しかは書じ。といはれたり。理はさることながら。こは中むかしより。字音のとなへ多くなりて。かへりて古言よりは。みやびたることに。いひなれたりと見えて。はやくよりしかよみ來り。すでに眞名本にも。文字をば。花洛。京師など書つゝ。よみをば。きやうとつけたるなどをもて思ふに。こはよみ來れるまゝに。字音によむべきにや。春日の里は。添上郡にて。ならのみやこの近きわたり也。○しるよししてとは。萬葉集に。領の字を。しるとよみたれば。領縁にて。則知行所といふにおなじ。下に。津の國うばらの郡。あしやの里に。しるよしゝて。いきて住けり。ともかけり。(以上、臆斷、古意によりていへり。)いとも上つ代は。しばらく置ていはず。藤原。奈良の朝のほどより。今の京のはじめつかたまでは。官位高き人の。封戸切封などのほかに。

所領の事はあらぬ制と見ゆるを。業平は。父は阿保親王にましませば。そのほどより。領傳られしにやあらん。(以上、古意によりていへり。)また按ふに。知顯抄に。業平母。伊豆内親王の御領に有ける所を。我所がほに下りければ。まさしき我所持ならず。と云ふ心にて。しるよしの言葉をつかへる也。といへる。もし此説の如くならば。母内親王の領給ふ所なり。(但ししるよしを、まさしき我所持ならず、と云ふ心にて、しるよしの言ばをつかへり、といふことはうけがたし、さるはしるよしといふこと、此所には此説のごとくにても、あふやうなれど、下に、あしやの里にしるよしゝて、いきて住けり、とあるには、さらにあはねばなり、されば、伊豆内親王の領所なり、といふ説をのみ、とらばとるべし、しるよしの説はとるべからず、猶よく考ふべきことなり。)○かりに往けりは。鷹狩にゆかれしなり。古書には。往の字去字などを。いぬるとよめり。俗には來るものゝ。歸るにのみいひなれたれど。只ゆくをいぬるといふ也。或説に。かりにいぬとは。假初にゆけるなり。といふ説の

あれど。文に。しのぶずりの狩衣を着たる。ともあれば。鷹狩なることとしるし。さてまた元服して。やがてゆきたるにはあらず。業平の。一生のことをしる者故に。まづうひかうぶりしてとは。書出したるなり。狩にゆかれしは。いつにてもあるべし。(以上、臆斷によりていへり、)その里に。いとなまめいたる女。はらからすみけり。このをとこ。かいまみてけり。その里とは。春日の里なり。○いとなまめいたる女とは。いとは古書に。最字また甚字などをよみて。則この字どもの義なり。なまめくは。その言のもとをとかんには。中々ちまたに迷ふべければ。今は。こゝの文にかなへるをのみいふべし。遊仙窟に。婀娜をかくよみたれば。媚ありて。うるはしき心にて。こゝによくかなへり。されば甚もうつくしい女。といふことなり。(以上、臆斷によりて、いさゝかおのが心をも加ふ、)○はらからとは。共腹の義にて。いと上つ世には。同服の兄弟姉妹をのみいひて。母のかはれるをば。ことはら(異腹なり、)といへりしが。このころには。すでにさるわかちをいはで。同服異服。なべて兄弟といへれば。こゝはたゞ姉妹ふたりすみてありし。といふ事なり。(以上、臆斷、古意によりていふ、)さてこゝに。はらからとかけるにても。業平の自記にして。實事なることの。一つの證なり。さるは。源氏などの如く。みながら作りたる物語ならましかば。こゝにはらからといへるなどは。何の用とかする。すべて作りものがたりは。その文にやうなき人などは。かきいでざることとなるをや。此物語は。それとことにして。その時實に。姉妹の女すみてありし故。その時のありのまゝを。書おかれしなり。或人のもたる異本に。女はら住けりとあり。そのもたる人。これをよしとして。こは若殿ばらなどいへる例にて。ことわりにかなへり。この段には二らからにやうなきをいかでいはん。こはからの二もし。衍なりといへれど。これも此ものがたりを。ひたぶるの作りものがたりのなみに。思ひなせるにて。あやまりなり。やうなしとて。實のことなれば。姉妹すみたらんには。いかでかくしるさゞらん。ことにこゝは。女ばら。などいふべき文の

いきほひにあらぬをや。臆(此男とは。業平朝臣なり。○かいまみとは。垣間見にて。物のひまより見ることなれど。轉りては。物のひまよりならでも。ひそかにうかゞひ見るをば。すべてかいまみるといへり。竹取物語に。やみの夜にも。みなかしこよりのぞき。かいまみまどひあへりといひ。大和物語に。久しくいかざりければ。つゝましくたてりけり。さてかいまめば。といへるなど。なほかれこれの書どもに。多く見えたり。(以上、臆斷、古意によりていふ。)おもほえず。ふる里に。いとはしたなくてありければ。こゝちまどひにけり。

おもほえずは。思ひがけぬなり。(臆斷、)○ふる里とは。則春日の里のことにて。桓武天皇の御代に。都を今の京へうつし給ひて後は。奈良の京は。ふる郷となりて。此等業平の。いくつになられしほどかはしられねども。二十四五歳の時としても。遷都よりこのかた。五十年に近ければ。いかにも大かたはあれて。古里といふさまにぞありけん。○いとはしたなくてとは。いとは最字甚字などの意なる事。すでに云り。はしたなくのなくは。辭の字にて有無の無にあらず。大氣なるをおほけなくといひ。荒きをあらけなく。と云ふが如し。(篤胤云、知顯抄に、はしたなしとは、たらぬ事もなく、よき事也、何も不足にたらぬをば、はしたと云、されば此女、年わかく、姿やさしく、みめすぐれて、いろめきなさけばみたれば、不足なしといふ意にて、はしたなきとはいふ也、といへるは、これもなきを、無の字の意と思へるにて、ひがことなり、また古意には、はしたなきは、端方なきといふ語をはぶけるにて、いはんにもはしなく、せんにもはしなきにて、俗に手足も出されず、といふにおなじ、古書に、無端とかき、眞名本に、間無とあるは、意相かよへり、或説とも、みな誤れりと云れしもいかゞあらん、)竹取物語に。みこは。立もはしたに居るもはしたにて居たまへり。日のくれぬれば。すべり出給ひぬ。此はしたにて。といふにおなじ。つくかたなき心なり。元眞集に。

我宿に植てだに見む女郎花。ひとはしたなる秋の野よりは。此ひとはしたなる。とよめるにて心

得べし。空穂物語に。いとはしたなき心をなして。あすら(阿修羅なり、)の中にまじりぬ。(なほ古書を多くあげて、證とせるを、今は其の要をのみあぐるなり、)これら。はしたも。はしたなきも。おなじ心なり。(以上臆斷、)○心ちまどひにけりとは。かくあれたる故郷には。すむべきさまにもあらぬ。うるはしきなまめいたる女の。わびしくおちつかぬやうにてあるを。かつはあはれぶ心に。いとゞ心ちのまどはれしなり。(以上、臆斷によりて云ふ、)

男。きたりける狩衣のすそをきりて。歌を書てやる。

その男。しのぶずりのかりぎぬをなんきたりける。よのつねの本に。男のとあり。鈴屋翁のいはく。こは眞名本に。男の。のもじなきぞよろしき。男のとては。云々して歌をかきてやること。女のしわざになるなり。といはれたる。眞にさることなり今はその説にしたがひて。のもじをはぶきつ。○狩衣は。伊勢貞丈の考に。古は狩襖とも。また布衣ともいへり。和名抄に。布衣。此間云褐衣。加利岐沼とあり。延喜式の彈正式に。裁絹絁爲獵衣ことを。禁斷せらるゝことと見えたり。これ布にて

制るべき物なる故。絹絁を裁て。獵衣とすることを禁斷せらるゝなり。狩衣は。もとは鷹飼の服なり。鷹狩の時。袖をくゝりて。弓手さしたる如くにして。鷹をつかふなり。嵯峨天皇。宇多天皇など。はなはだ鷹狩をこのませ給ひて。御みづから。御鷹を合させ給ひけるよし。嵯峨野物語に見えたり。されば公卿殿上人も。手づから鷹を合されしほどに。官位高き人のき給ふこととなれば。布をば用ひずして。唐綾文紗などの狩衣を用ひられしなれば。狩衣の品も花麗になりて。鷹狩ならぬときも。たよりよき服なれば。いつしか常の時にも。着すことゝなりし也。(こは秋草に見えたり、なほ委くは本書を見るべし、)といはれたり。此考によれば。古はもはら狩に用ひたる衣なり。さるから業平もこのをり狩衣をきて出られたる也。(頭書云鋏云此邊前後也)○狩衣のすそを裁て。歌を書てやるとは。則その切たるすそへ。歌を書てやられしか。又は歌にそへて遣すにてもあるべし。(臆斷、)こは此歌の。よせたる心をしめすなり。古は。其歌によせある草木の枝につけ。或は何ものにも書て。

歌の餘情をなしつ。（古意〇またおなじふみ頭書に
云く）
或説に。時に花の枝もなければ。衣のすそを切
て書たる。といふはいとわろし。何の枝は有と
も。此歌には。しのぶすりならでは由なし。（仍
て記者の。かく思ひよりて書たるそ。風流なる
物をや。）されば。源氏のあふひの卷に。扇のつ
まを折て書し事あり。又承保の比。殿上人。舟
岡の邊の櫻を見にまかりたるを。齋院より。糸
のもとにはくる人もなし。といふ歌の末を書て。
柳の枝に附ておくられしを。雅通といふ人。直
衣のすそを切て。かへし歌書てやりしは。こゝ
をまねびたるものなり。其時櫻は有しを。かく
衣のすそを切て。書るを思ふべし。此事は。古今
著聞集に有て。後の物ながら。事はふるき時の
事なり。
〇しのぶずりとは。鈴屋翁云。こは古今集の河原
左大臣の歌の。顯昭の注に。陸奥國の信夫郡に。
もぢずりとて。髮を亂したるやうにすりたるを。
しのぶずりといふといひ。契冲が勢語臆斷にも。

信夫郡より。むかし摺て出したる名物なり。とい
へるが如し云々。（以上、玉かつまの説）といはれ
たるか如し。さて又萬葉の歌にまたら衣をすらん
とて。ともよみたれば。いと上つ世には。物の色
を斑文に（頭書云古には衣を木草の花或は葉もて）
摺つけたるのみなりけん。と思はるゝを。延喜式
の頃に至りては。若草摺。小松摺。遠山すりなど
の名。さま〳〵見ゆるを思ふに。今の京の始つか
たより。巧みに物の形をする如くなりけんかし。さ
て摺衣は。御狩。或は歌垣等。其外にも着たりし
事。男女にかぎらずといへども。私には着ること
なかりしにや。延喜式の彈正式に。凡摺染成之衣
袴者。並不得着用。但緣公事所着。並婦女衣裙不在
禁限。と見えたり。しかはあれど。旅などには。
男も私に着しとおぼしければ。こゝに業平朝臣の。
きて狩に出られたるも私なるべし。また源氏關屋
の卷に。源氏の君の。石山詣の陪從の出立を。關
山より。さとくづれ出たる旅すがたどもの。色々の
あをの。つぎ〳〵しきぬひ物。くゝりぞめのさま
も。さるかたにをかしう見ゆ。とかけるは。紫式部

がころは。もはや式の定めのやゝくづれて。摺衣をも。誰しの男も着たりしことしるし。(以上、古意にしたかつて云ふ、)

「春日野のわかむらさきの摺ころも。しのぶのみだれかぎりしられず。

かすがの里の女なれば。やがてその野の紫ぐさにたとへて。目きたる狩衣も。折ふし紫にすりたるなれば。やがて若紫のすり衣。とつゞけ。しのぶ摺のしのぶといふことを。その女を。わが思ぶよしにとりなし。亂れすりたる紋の。數しらぬによせて。我戀の亂れにたとへ。しのぶの亂れ。かぎりしられずとはよめるなり。(以上、臆斷、古意によりて云ひ、少しく己が心をも加ふ、以下臆斷、)宇多法皇。春日社にまうて給ふ時。大和守忠房が。よみて奉れる。三十首の歌の中に。

今年よりにほひ初なる春日野の。若紫に手なゝふれぞも。紫に手もこそふるれ春日野の。野守よ人に若なつますな。

顯輔

昨日見し信夫の亂れ誰ならん。心の内ぞ限りしられぬ。(頭書云こは何に見えたるにか)

となんおひつぎて(いへりける眞)いひやりける。(ついでおもしろきことゞもや思ひけん。

臆斷に。おひつきてとは。俗に只今まゐらんと云こゝろを。追付まゐらむと云如く。やがての心なり。伊勢集に。奈良坂のわたりにて。おひつきておこせたりける。と云るにはかはるべし。(篤胤云、伊勢集なるおひつきては、追及てと同じ意なるべし、)或注に。人におひつきなとしたるとは心得べからず。彼女のゆきたる所を。したひ尋て遣す心なり。といへるは非說なり。姉妹すみけるを。かいまみてけりと云るものを。いかで彼女の行たる所を尋て。遣したるといふことを得ん。また或抄にも。なんは上につけて。おひつきてといふより。河原左大臣の歌を。女の返事に遣す。其言ば書なる心にいへりと。これ又ひが說なり。左大臣の歌は。返しにあらず。ついておもしろきことゞもや思ひけん。信夫摺に。春日野のわかむらさき。とよみかけたる業平朝臣の心を。作者(篤胤云、この在五中將の集を、かく物語にかきなしたる人をい

ふなり、」のおしはかりて。事の次よく。おもしろき事どもや思はれけん。といへるなり。（以上臆斷）といはれしはさることなり。但し。（篤胤云、おひつぎてを、やがての心なりといへるはかなへれど、俗に只今まゐらんといふ心を、追付まいらんといふ如く、と云りしはいかゞあらん、おひつぎては、追續てにて、則やがての心なるべし、さればきをにごりてよむべきにや、」また古意には、眞名本にとなん云りける、とあるをとりて、となんおひつぎていひやりける、とある本を、理りなき事なりといはれたれと、よくよみ味ふに、今本の方ぞ、理にざりける、○ついでおもしろき事ども。と云るより下は。この集を。かく物語ぶみにかきなしたる。後の人のつけそへたるなり。今は「　」の印して。これをわかちぬ。下の條々。みなこれにならふべし。

みちのくの信夫もぢずり誰故に。みだれそめにし我ならなくに。

是は。古今集戀四題しらずにて。河原左大臣の歌なり。もぢ摺は。戾摺にて。亂りすれるをいへり。

（知顯抄に、もぢずりとは、もちといふ、うすくあはらにおりたる布に、摺たるなりといへり、是も一說なれど、もちりすりのかたや、おだやかならん、篤胤云此歌にては、みちのくのしのふもちすり、といへるまでは、亂たといはんりやうに、いひいでたるのみなり、」○さて歌の心は。たれ故に。亂そめし我にはあらず。君故にこそ。亂そめたれ。といふ心なり。是はしのぶのみだれ。かぎりしられずとよめるは。此歌の心なんめりと。作者の。本歌に引て註するなり。下に紫の色こき時は。と云ふ歌の後に。武藏野の心なるべし。と注したるに同し。さて上にもいへる如く。此歌を。女の反歌とみては。亂そめにし。と句をきりても。我ならなくに。の詞かなはず。いかにとならば。我ならなくには。我にあらなくにと云を。つゝめたる詞にて。我ならぬにと云に同じければ。君が思ひ亂れたるは。我故には有まじきに。といふ心とはならず。定家卿の勘物にもかくありしなり。（以上、臆斷によりて、まゝ己か心をも加へたり、」○さて又此歌。古今集には。亂れそめにしを。みだれん

と思ふと有て。詞は少しのたかひなれど。心大にかはれり。古今集にての心は。いかなる誰ゆゑにも。いまさらに。心を變ずべきわれにはあらず。と云心なり。みだるとは。變ずるをいへり。萬葉第十四東歌(あづまうた)に。

伊豆の浦に立しらなみのありつゝも。つきなん物を亂れしめゝや。」此亂れしめゝやは。東の事は。五音通にして。亂れそめゝやなり。是と同し。（以上臆斷、）○論に云。定家卿云。河原左大臣源融。寛平七年八月薨。七十三。於在中將非幾先達如。といはれたるは。こは定家卿も。こゝの文に。融公の歌を。業平朝臣の本歌として。よまれたるやうに云るを。不審して註し給へる物なり。（篤胤云、古意にいはく、融公と、なり平朝臣とは、同時の人なるを、其みちのくのといふ歌を。本意とせしことおぼつかなしと、定家卿の書れたる、此疑を、深く思ひ定られたらましかば、此物語の旨をも得らるべきを、その頃は、世の亂つゞきて、古書を考る人なき時なりけり、といはれしはさることにて、是に始ぬことながら、この頃の人々、歌にはあやしうすぐれられたれど、學のすぢには、ゆきとゞかぬことのみ多く、この物語の云々、）又彼卿の歌に

春日野のかすみのころもはる風に。信夫もぢずり亂てぞゆく。」是また本意は。業平朝臣の。こゝなる歌をとりて。もちずりは。融公の歌の詞を。とりそへられたるも。右の心なるべし。又袖中抄の。第十八の卷にも。八つはしのくもで。といふ歌の注に。定家卿のいはれしと。同したぐひの說あり。（以上、臆斷によりていへり、）縣居翁の云く。融公と云々。

むかしひとは。かくいちはやき。みやびをなんしける。」

いちはやきは。心あまたありて。古にはいきほひ疾(と)く。たゞはしきことをいへるを。此書(ふみ)の頃に至りては。さとく甚しき事にも。轉しいへり。今爰に云るは。甚しき心なり。蜻蛉日記に。打ねたるほどに。かどいちはやくたゝく。又蟬の聲。いちはやうなきたれば。おどろきて。などいへる是なり。（以上、古意、臆斷によりていふ、）○みやびは

宮風にて。都の手ぶりをはじめ。何にても。風流なる事を云ふなり。いやしげなる事を。鄙風里風などいふを。むかへてしるべし。さて夫利の約めは。備なれば。延ては宮ぶり。約めてはみやびと云也。さてこゝにては。俄なる事に。かゝる歌よみて。やがておくりたるなど。いとさどき。風流なるとりなしよと。記者のほめたることばなり。むかし人は。といへる中に。いまのおとれるこゝろこもれり。下にむかしひとは。かくすける物おもひをなんしける。いまの翁まさに爲なんや。といへるは。くらべていひあらはせり。(以上、臆斷古意)

むかし男ありけり。奈良の京は（花落マ）はなれ。この京は。人の家まださだまらざりけるときに。西の京（長安マ）に女ありけり。

桓武天皇の延暦三年に。奈良の京より。山城國の長岡にうつらせ給ひ。おなじ十三年に。長岡より今の京にうつらせ給へり。この京とは。則今の京の事なり。○人の家。まださだまらざりけるときとは。都をうつされて。ほどなき事故。人の家居も。たちつゞかざりし時を云なり。○西の京とは。古意に云。朱雀門より。羅城門まで 大道を開かれて。是を朱雀大道といふ。此大道より東の方を。東の京といひ。(左京、又洛陽など書く是なり。)西の方を。西の京と云。(右京、また長安など書これなり。)こゝに眞名本に。西の京を。長安と書しは此旨なり。(以上古意。)○さてこの條は。業平朝臣の事實としては。人の家まださだまらずといふこと。かけあはぬとて。契冲はこの時。業平朝臣二十ばかりの頃にても。都をうつされてより。五十年におよふを。それまで首尾せざりけるにや。筆にまかせたるかといひ。縣居翁も云く。三代實錄によるに業平朝臣は。陽成天皇元慶四年に。五十六にて卒られぬ。そのとしより。逆にかぞふれば。延暦十三年は。凡八十七年はかりにして。朝臣の生れざる。三十年前の事なり。さてその頃の。皇朝の御勢にましませば。五六年の間には。東西の京の家居なりぬべし。かつ此朝臣のかよふほどの事は。十五六さいよりこそあらめ。彼是を合せて思ふに。四十年あまりのたがひあり。かくても朝臣

の自記なりと云べきや。たゞ此記者の。わざと時世をたがへて。業平朝臣の歌を。全く出しても。業平朝臣ならぬやうに。なせるものなり。故に年月のさだかなる遷都をいひ。かつ遷都有て。ほどなき時と見せんとて。人の家またさだまらざりし時。などゝ書たり。此條一つにても。この文の心は知べし。かくその本をおし極めて。事の實を知て後に。その文をとくべし。さることをばいはかくし。又云ひまぎらはして。とかんとすれば。一つもあたる事わりはなし。といはれたり。これ眞に理ある論ひどもにて。

翁

○さて又。いまひとたび。思ひ直して考る旨有。さるは古意に。その頃の皇朝の御いきほひにましませば。五六年の間には。東西の京の家居なりぬべし。といはれたれど。當時の事は。今よりは。しりがたき故よしなどのありて。實に此所にしるされたる如く。業平朝臣のわかゝりしほどまで。はかゞしく。家居の立つゞかざりし故。業平朝臣のその時のまゝに。かくしるしおかれたるも知べからず。知顯抄に。文德天皇の御時。冬嗣の大臣。閑院殿をつくりて。帝に奉りしより。東の京さかへ。人の家居もしきりにたつ。といへるも。妄說とはきこえず。(頭書云みたりに云る事とは□□なればより所のありけんかし)ふるめかしく。何とやらんよしありげなり。さればこの條の。うちあはぬやうに思はるゝ事も。今よりして。あながちにいひやぶるべきことにはあらずなん。いかさまにも。こは業平朝臣の書れし後の。つくりそへたる人の。おしはかりに。これらの言を加へたるにや。古意には。記者のわざと。時世をたがへて。かくうちあはぬやうに。書なせるなり。と云れたれど。こはあながちに。此書をみながら。業平朝臣のかけるにはあらず。といふ說をおしたてんとて云るゝにて。强說なり。みながら後の人の作たるにはあらぬ事は。こゝなるおきもせずの歌。古今集に出て。其の言書に。やよひのついたちばかり。しのびに。人に物らいひて後に。雨のそぼふりけるに。よみてつかはしける。とありて。こはこの物語の。いまだ人のさかしらのまじらぬほどにと

りて。撰者たちのてんさくして。あげられたるなるべければなり。されば此の條のうちあはぬ事どもは。さかしらせし人の。時世のうちあはぬ事までを。こまかに思はざりし誤にぞあるべき。此書すべてをよみわたすに。さる誤多く見えたり。そは其次々に云べし」

その女。世の人にはまされりけり。その人。かたちよりは。心なんまさりたりける。ひとりのみにもあらざりけらし。

世の人にはまさるとは。その容貌の人にすぐれてうるはしきとなり。或抄に。種姓をいふとせるはわろし。その容貌の。人にすぐれたるのみならず。心ばせは。かたちのうるはしきよりは。なほまさりて。やさしかりしといふ事を。かく言をかさねて。ほむるなるべし。かくかたちと心の。やさしかりしといへば。種姓はその中にあるをや。(以上、臆斷によりていへり」○ひとりのみにもあらざりけらしとは。夫ありし人といふ事なり。ひとりのみにはあらざりける。とたしかにいはで。あらざりけらしと。よくしらぬさまにいふが。一つの文法也。(臆斷に依ていふ」○さて古意に云れしは。眞名本に。獨耳にもとかけるを思ふに。此女。外にも思ふ男のありて。心のまさりたるとは。好色心なる反をいへるならん。そは此男を。まめ男と。打返していへると。おなじ心ばへなり。といはれたる説なり。たとへばうつ蟬の君の。まことを徹す心にはあらで。藤壺の后の。姿情たぐひなきものから。源氏の君のしひ言には堪ずして。なびくが如きをいふか。といはれたるぞかなへる。

それを彼まめ男。うち物かたらひて。

それをとは。その女をなり。「こはかの獨のみにもあらぬにあたれる語なり」○まめ男とは。眞名本に。實男とかき。日本紀には。忠誠の二字をまめとよみ。また古今集の序にも。色このみにむかへて。まめなる所には。といへるなどをもて。心の實なる人をいふなる事をしるべし。さて業平朝臣は。いみじき色このみにて。ぬしある女をも。奸けなどせる事の限りなきを。中々に實男といふは自ざれてかくいはれしにて。こは今の俗にも。多くあることにて。つねに醉ひくつがへる人の。み

づから此下戸がなどいひ。また腹あしき人を。かの心よしよ。など云ふとおなじ心ばへなり。これにて實ならぬ人の。みづからまめ男。と「いひ獨のみにもあらで。好色心なる女を。心なんまされりける。と」いへる心をさとりねかし。(以上、古意によつて、少しく己が心をも加ふ、)○うち物かたらひてとは。語相てといふことなれば。男の。思ふよしをいひはるかして。かたみにつゝみなく。かたらひたるとの事なるべし。

かへり來て。いかゝ思ひけん。時は彌生のついたち。雨そぼふるにやりける。

いかゞ思ひけん。とのみいひて。その心をあらはさねば。實の心しるべからず。といへども。文のさまと歌により。こゝろみに。その本情をあらはしいはゞ。容貌といひ。心まで人にまされる女の。ぬしさへあるに。からうじてかたらひはしけれど。かにかくに。かの女の夫ある事などの。心よからで。くるしく思へりしにぞあらん。○そぼふるとは。今の俗にも。そぼ〳〵ふる。しぼ〳〵ふる。などいふとおなじ。(此外の說ども、すべてとるにたらず、添ふる也といひ。壯降にて、さかんにふるなりなどいふは、すべていふにもたらず、)萬葉集十六の卷に。

　いやひこのおのれ神さび。青雲の。たなびく日すらこさめそぼふる。「此こさめそぼふると云にて知べし。また新古今集に。重之歌に。

　春雨のそぼふる雲のせやみせず。落る涙に花ぞちりける。」是も細雨の。さすがにやまぬにて。感はあるなり。(臆斷の說、)○古今集に。此歌の詞書に云。やよひのついたちより。しのびに人に物をいひて後に。雨のそぼふりけるに。よみて遣しける。とあり。是はこゝの文とたがへり。(篤胤云、こは撰者たちの、こゝの文を、あまりに省略にすぎて、心さへかはる計りになれるか、または古今集なるが、業平朝臣の、かきおかれしまゝに正しくて、こゝの心もまたなるが、のちの世人の、さかしらなるにや、)物をいひてとは。逢て語にはあらず。いひいてそむる心なり。(篤胤云、いひいでそむる心にはあるまじ、ついたちよりといへるにて、逢て語らへるなる事しるきをや、)また八帖に

は。後の朝の歌とす。然れ共歌のやう。後朝の歌にはあらず。爰に書るやうも。歸り來ていかゞ思ひけんとは。二月晦日の夜あひて。朔日の暮に遣すか。また日をへての心か。此詞の心を得るやうに隨て。歌の心もかはるなり。(以上、臆斷、)

起もせずねもせで夜をあかしては。春のものとてながめくらしつ。

古今集戀三。日をへて後遣はす心ならば。人を思ひてぬるともなく。おくるともなくて。よるはなげきあかし。ひるはまた春の物とて。つく〴〵とうちながめて。長き日を暮しかねる。といへるなり。詠に長雨をかねたり。また歸り來て。其日の暮などに。遣はす心ならば。諸ともに。こしかたの心つくしをかたり。ゆく末を契りなどして。はかなき短夜は。おくともなく。ねるともなしに。あけて歸りきて。なかき日の。雨さへそぼふるに。ひとりながめて。くらしわぶる。といへる心也。歸りきてといへるは。其日よみておくれるやうなれど。猶上句の心は。後日に遣はせるにや。からぶみ毛詩に云。寤寐思服。悠哉悠哉。輾轉反側。またいはく。言念君子。載寢載興。謙徳公集に。「よるはさめひるは詠めに暮されて。春のこのめそいとなかりける。六帖に。「ふして思ひおきてながむる春雨に。はなのした紐いかゞとくらん。千載集春に「つれ〴〵とふるは涙の雨なるを。春の物とや人のみるらん此等の歌を合せて見るべし。

むかし。をとこありけり。けさうじける女の許に。ひじき藻といふものをやるとて。

けさうは。繫相。繫念。繫心など云語。佛家の書に見えたり。萬葉集に。係念と云字もあれば。繫想の字音にて。こゝは男の。心を繫たる女を云なり。(以上古意、)○ひじきもは。和名抄に。鹿尾菜。辨色立成云。六味菜。(比須木毛、)とあるこれなりこは今の世にも。調じて食ふ藻にて。すなはち今も。ひじきと云ふなり。和名抄に。ひすきもとあれば。すとし相通ふ音にて。古へはひずき。ともいへるにや。(以上、臆斷、)古意にも、このひじき藻の説をとりて、さていはれしは、眞名本に、是を、嚢と書り、一本に、蕩と有も、ともに誤にて、毯の字なるべ

し、和名抄坐臥の部に、毯は毛席、以五色絲爲之と見え、賦役令にも、毛して織たる物を、貢まつるとあれば、皇御國にも、いにしへは、さる物を用ひたり、萬葉集に、しきもなす、しきにとりしきと竹取の翁の歌に、しきもあふ者ともよみ、又もありて、臥具をしきもと云に依ば、もしくはさる敷毯をおくりしにや、とおぼえつるを、猶しかにはあらじ、との說にしたがふべし、といはれたる、いかにもかゝる物をおくらん事、雅風たるわざともおぼえず、眞名本に、蒻裳とあるなどは、例のたはふれ書なれば、いふにもたらず、何くれと、文字の誤なんど考て、ものせられしも、さらにやくなきわざなるをや、)○扨ひじきもをおくれる事は。歌の詞をまうけん料にて。萬葉集四の卷に。高安王の。褁鮒を。娘子におくりて。云々とよまれし類なり。ひしきものには。とそへむ料におくられしなるべし。(以上、臆斷によりていへり、)おもひあらはむぐらか宿にねもしなん。ひしきものには袖をしつゝも。

おもひあらばといふ事。例の業平朝臣の。心あまりて。言はたらぬいひざまなれど。かばかりたえかたきおもひあらば。玉のうてなもかひなし。むぐら生たる宿に。敷物なくて。袖をひき敷物にしても。諸ともに〔諸ともに〕こそねめ、と詠るならん萬葉集十一に。、、、、、、、、、、、、、、、、、、、、此等の歌を合せて見るべし。

「二條の后の。まだみかどにもつかうまつりたまはで。たゞ人にておはしましける時の事とぞ。」(世のつねの本に。時の事なりとあり、今は眞名本に、與社とあるによれり、)

これも後の人の書加へたるにて。こゝにひじきもにそへて。しか〳〵と歌よみておくりたる。女とは。二條后の。また凡人にて居給へるほどの事なりし。ときゝつたへたりしまゝに。しるせるもの也。二條后と申は。御名を高子とまをして。

長良卿の御娘にて。御年、、、のとき。清和天皇の后にたゝせ給へり。業平朝臣とかたらひ給ひしは。こゝにいへる如く。凡人にて居給へるときの事なり。さて此次々に見えたる如く。此后と。業平朝臣とは。とし久しくかたらひけると思はれ

て。あまさへぬすみ出て。にげなんどせられしほどの事なれば。かたらひしことは。そのころ世に。かくれなかりし事と見ゆるを。後の世ならましかば。いかでさるいたづら事しける人を。后なとには立給はん。今の世には。下々に至るまで。さるみそが事せる女なとをば。あばめにくみて。親もゆるさぬみそか事しける人よ。などいひおとして。大かたは。婦とする人もなかんめるを。まして。天皇命におきてをや。さるをこのころには。さる論もなく。后にたて給へるなんど。今にしては。心得かたき事になん。」

むかし。ひむかしの五條に。おほきさいの宮おはしましける。西の對にすむ人ありけり。

ひむかしの五條とは云々。○おほぎさいの宮とは。このひんかしの五條にまし／＼ける故。五條の皇大后と申ける也。則文德實錄。嘉祥三年の所に。詔に曰。皇太夫人。移御東五條院。と見えたる此おほきさいの御事なり。御名を順子とまをし。閑院贈太政大臣冬嗣公の御女にて。仁明天皇の皇后にたゝせ給て。文德天皇をうみ奉り給ひ。此時の天皇命（清和天皇、）の御爲には。御祖母君になんまし／＼ける。下に染殿后を。また五條后とも云よし註すれども。五條の后は。順子の御事を申ならへり。又染殿后は。貞觀六年正月七日に。皇太后とまをしたれば。其よりさきの皇太后なれば。まぎれなく順子にましませり。西の對にすむ人ありけり。西の對は。おほきさいのまします。五條の亭の。西のかたなる對なり。そこに。二條の后のすまはれしなり。そは五條のおほきさいの御爲には。御姪にましますなるべし。

それをほいにはあらで。心ざし深かりける人。ゆきとふらひけるを。

それをとは。その西の對にすめる人の事也。○ほいにはあらでとは。心にかなふほどならぬを。ほいにはあらでとは云ふなり。本意の字の心也。穗に出など云ふ。ほにかよはして。註せる人あれど。漢語と皇國語と。混らずべき事にあらず。（以上臆斷。）また古意には。眞名本に。穗にはあらでとあるをとりて。さていはれしは。あらはにはあらでと云事なり。穗は草木などの事のみならず。何に

ても。ほにあらはるゝを云り。其は火の氣ののぼり。あらはるゝよりいふ語也。よりてこゝには。あらはならでの心にて。眞名本に。かくあるそよき。今本に。ほいにはあらでとあるはわろし。ほいは本意にて。心に思ふ如くなるを。本意にかなふといひ。心の如くならぬを。本意ならぬといへば。此事は。こゝにはかなはぬ言なり。鈴屋翁も。古今集の詞書にも。ほいにはあらでとあるを。おもてはれてゞはなうて。と譯されたる。縣居翁の說を。もちひられたるけなり。然れ共玉かつまにいはれしは。ほいにはあらで。此詞きこえず。眞名本に。穗にはとあるも心ゆかず。ほにはいでずなどこそいへ。ほにはあらでなどは。きゝつかぬここちす。なほもじの誤などにや。といはれたれば。定がたく思はれしなり。いづれにても。大かたにはきこゆるやうなれば。己がじゝえらみとりて。猶よき本の出來るをまつべき事也。○心ざし深かりけるとは。ふかく想をかけたるといふ事なり。○行とふらひといへるは。たゞに尋たりげにきこゆれども。かたみ（互）に深くいひかはして。かよひけるをいふ事なり。

むつきの十日ばかりのほど（眞ナシ）に。ほかにかくれにけり。

むつきの十日ばかりのほどは。正月の十日ころといふ事也。○外にかくれにけり。といひては。其女の。みづからかくれたる如くきこゆれども。さにあらず。しのびにはあれど。かよふ事のしけかれば。世のきこえなどをおもひて。おほぎさいか「たひかさなりてそれしかるべからずとて」御兄がた（二條后）などの。ほかへうつして。業平朝臣にあはせじ。とせられしなるべし。（古意に、外にかくれにけりとは、此密事をはゞかりて、男にしられしとするなり、さらずは、外にうつれりといふべし、といはれしは、女のみづからかくれたると思はれしか、こは誤也、）臆斷にいはく。またのとしのむ月に。こぞをこひてとあれば。此十日はかりと云。そのやがてさきにかよはれけるなるべし。古今集の詞書には。十日あまりになん。ほかへかくれにけり。とあり。

ありところはきけど。人(他眞)の行かよふべき所にもあらざりければ。なほうし。と思ひつゝなんありける。

ありところはきけどゝは。その女をかくしてある所をば。人にきゝてしりたれどなり。〇人の行かよふべきところならぬとは。大うちなどにや。またさらでも。よのつねの人の。行かよひかたき所なり。古意に云く。人を眞名本に。他の字をかきて。他人の住べからぬ所。といふ事をしらせたり。といはれたる。こはさもあらんか。〇なほ憂しと思ふとは。いたくけさうしける女を。他へかくされたるのみならず。そのかくし所はきゝながらも。人の往來(ゆきかよ)ひかたきところなれば。いよ〱うれはしく。かなしかりし月日をふるとなり。なほといふ事いとおもし。臆斷に云く。おもひつゝなん。といへるにて。程をへたる心あり。されば又のとしとは。次の詞にかけり。といへり。この說いとよろし。

またの年のむつきに。前の梅の花ざかりに。こぞをこひて。かのにしのたいにいきて。立て見居て見みれど。こぞにゝるべくもあらず。

また年のは。あくるとしのなり。〇前の梅とは。庭の梅をいふ。大和物語に。ひとりしていかにせましとわびをれば。そよとも前の荻ぞこたふる。とよめる。まへに同じ。さて男の家の庭前の梅をいひて。それにつきて。西の對にも。梅のあるをしらせたり。(以上古意、)さてよのつねの本に。前のといふ事のなきを。今は眞名本によりつ。〇こぞをこひてとは。梅の花のさかりなるに。こぞのころは。かのにしのたいにして。かの女と。はな見てたのしみけるよと。そゞろにこひしく。せめては。そのありし所にだにゆきて。心やらんとて。かの西のたいにいくなり。但し眞名本に。思ひ出てとあれど。こはこひてとあるかた。よろしかるべし。さるはこひてといふよりは。思ひ出ての方。少しこゝろうすく。ことにそれまでは。わすれ居たりしを。梅のさかりにもよふされて。ゆくりなく。思ひ出たるやうにもきこえ。また上に思ひつゝなん。といふにもかさなりて。いかゝなればなり。ことに古今集の詞書にも。こひてとあれば。かたくこひてのかたをとりつ。さてまたよのつねの本に

は。かのにしのたいに。といふ事おちたり。なくてもきこゆれども。あるかたおだやかなれば。眞名本。また古今集の詞書によりて加へつ。(以上、臆斷によりて、いさゝか己が意をも加ふ、)○立て見居て見とは。下に。とみかう見みけれど。といへる。これにおなじ。たゞめにてみるのみを云にもあらず。事わざに。せんかたなき時のしわざ。立て見たり居て見たりといふ。また立ても居ても。居られぬと云が如し。古今集の詞書に。またのとしの春。梅の花さかりに。月のおもしろかりける夜。こぞをとひてとあり。(以上臆斷、)

うちなきて。あばらなるいたじきに。月のかたふくまてふせりて。こぞを思ひ出てよめる。

あはらなるいたじきにとは。人のすまねばいたくあれて。戸さうじたゝみさへもなき所になり○月のかたふくまてふせりては。下に夜のほの〳〵明るに。とあれば。十五六日の夜なるべしと。臆斷にいへり。こは實にさる說なり。

○こぞを思ひ出てよめるとは。そゞろに。去年のたのしかりし事の思ひ出られて。この月やあらぬの歌をよめると也。たゞしこゝなる。こそを思ひ出てと云ふ言は。なくてあらまほし。(眞名本に、こぞをこひてとあるも、)いかにとなれば。梅の花さかりに。こぞを戀てとある戀ては。歌をよみて。歸るまでにかゝりたる詞なるを。こゝにもかくありては。中々につたなきふみ詞なれば也。古今集の詞書にも。こゝにはたゞ。月のかたふくまてふせりてよめる。とぞあなる。これよろし。さてこゝの文を。よのつねの本には。梅の花さかりにこぞを戀て。、。月のかたふくまてふせりて。こぞを思ひ出てよめゝ とあるを。眞名本に。梅のさかりに。こぞを思ひ出て、、。月のかたふくまてふせりて。こぞをこひてとあり。縣居の翁。眞名本のかたをとりていはれしは。よのつねの本なるは。亂れて所のたがひたるもの也。眞名本こそ。語の次第も。ことわりもあきらかなる。といはれたれど。思ふにこは。よのつねの本の方よろしかるべし。然るは。こゝの文のいきほひにては。戀てといふよりは。思ひ出てといふかた。少し情うすく。ことに梅の花さかりを見ぬまでは。思ひもかけざ

りしを。花のさかりにもよふされて。ゆくりなく。思ひ出たるやうにもきこえ。また上に。思ひつゝなん。といふにもかさなりて。いかゝなれば也。ことに古今集の詞書にも。こひてとあれば。かたかたよのつねの本によりつ。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ。我身ひとつはもとの身にして。

鈴屋翁の云く　此歌とり〳〵に解(とき)たれども。いづれも其意くだ〳〵しくして。一首(ひとうた)の趣とほらず。これによりて。今己が思ひ取たる趣をいはんには。まづ二つのやもじは。やはてふ意にて。月も春も。去年にかはらざるよしなり。さて一首の意は。月やは昔の月にあらぬ。月もむかしのまゝ也。春やは昔の春にあらざる。春もむかしのまゝの春なり然るにたゞ。我身ひとつのみは。本の昔のまゝの身ながら。むかしのやうにもあらぬ事よと。よめる也。昔とは。思ふ人に逢見たりしほどなり。本の身といふも。其時のまゝの身といふ事なり。さて身にしてといふは。身ながらの意にて。かくとぢめたる所に。昔のやうにもあらぬ事よ。といふ意をふくめたる物なり。にしてといへる語のいきほひ。上の句に。月も春も。むかしのまゝなるに。といへるとあひ照(てら)して。おのづから。ふくめたる意はきこゆるなり。此朝臣の歌。こゝろあまりて詞たらず。といへるは。かゝるを云るなるべし。文に。立て見居て見。見れど。去年(こぞ)に似るべくもあらず。といへるは。此ふくめたる意を。あらはしたるもの也。去年ににぬとは。月春のにぬにはあらず。見る我心ちの。去年に似ぬなり。契沖も縣居大人も。ともに此の歌をとき誤られたり。かの説どもの如くにては。してとゝぢめたる語のいきほひにかなはず。よく〳〵語のいきほひをあぢはひて。心得べき歌ぞかし。新古今集雑上に。清原深養父。「むかし見し春は昔の春ながら。我身ひとつのあらずもあるかな。とよめる歌は。此業平朝臣の歌を。註したるが如し。これにてよくきこえたるものをや。(以上、古今集の遠鏡と、玉かつま、からあゐの巻にいはれしとを、とりあはせて、こゝにはあけたるなり。)と云れたるにて。此歌の意。はじめてあきらかなり。また或人の云く。家持集

に。こそ見てし秋の月夜はてらせれど。あひ見しいもはいやとほざかる。此家持の歌にて。大意はよく心得らるゝ也。といへり。

とよみて。夜のほの〴〵あくるに。なく〳〵歸りにけり。

ほの〴〵あくるは。きこえたる如く。夜のあけかたの事なり。その人ゆゑに。所をしたひて。夜ふかくも歸らぬ心。尤あはれなり。(以上臆斷によりて云、)

むかし男ありけり。東の五條わたりに。いとしのびていきけり。みそかなる所なれば。かどよりもえいらで。わらはべのふみあけたる。ついぢのくつれより。かよひけり。

東の五條わたりとは。前條(さきのくだり)。大后の宮のおはし給ふ所をいへり。○みそかなる所とは。みそかは。ひそかといふに同しく。おもてはれてゝはなうて。ひそかにしのびて。かよふ所といふ事なり。○かどよりもえいらでとは。しかしのびて。通ふ所なれば。人の見ん事をおそれて。かと(門)よりはえのりかたければ。童のふみあけたる。ついぢのくつれより。かよへるなり。(頭書云わらわべのふみあけたるとはいへど、かならずしも、童のわざならでも、くづれといふを、文辭にあやをなして、かくいへる也、俗にいふ、犬むぐり、などいふとおなじこと也、)○ついぢは。築土(つきひぢ)といふ事を。音便にかくいふなり。土もて築たてたる垣にて。(今の俗には、木竹などをもてゆへるをのみ、垣といひなれたれど、ふるくは、土にまれ木竹にまれ、さかひとなしたるをば、すべて垣といへり、)今の世にある。土屛といふものゝ事なり。こは今もある事にて。よくわらわべのふみこはし。また犬なども。ふみあけおく事ある也。さてついぢのくづれたるとあるにつけて。縣居の翁の論はれし說あり。それにつけて。己もまた論あり。そは下にいふべし。

人しげ〴〵もあらねど。たびかさなりければ。あるじきゝつけて。其かよひぢに。夜ごとに人を伏てまもらせければ。彼男。いけどえあはでかへりけり。さてよめる。

人しけくもあらねど、は。かのついぢのくづれたる所は。大かたも人のゆきゝせぬ所にて。人のし

らぬよしなり。されどたび重りては。おのづから
に人もしり。あるじ耳にも入りけると也。臆斷に
いはく。六帖に。あふことをあこきか島にひくあ
みの。たびかさならば人もしらなん。賢木に。い
としのびて。たひかさなりゆけば。けしきみる人
にもあるべかめれと云々。といへるか如し。○あ
るじとは。則ち五條大后をいふか。また下の加筆
に。せうとたちの。まもらせたまひける。といへ
るによれば。高子の御兄等をいふか。この以下注
に及ばず。きこえたるが如し。○夜ことに人をふ
せて云々。こを眞名本も。よのつねの本も。人を
すゑてとあり。それもきこえたれど。こは縣居翁
の。古今集の詞書によりて。伏てと改られたるか
た。理たしかなれば。今もそれにしたがひつ。

人しれぬ我かよひ路の關守は。よひ〳〵ごとにうち
もねなゝん。

歌の意は。人のしらぬ所の。己が通ひみちの關守
は。いかでいかで。夜ごとに。しばしなりともね
よかし。ねたならば。その間しのんて入らふもの
を。といへる也。臆斷に。伊勢集に。逢坂の關を
よ。こそもりまされ暮るをなどて我賴むらん。返
しもりませとよるは猶こそたのまるれ。寢るまも
あらは越んとおもへば。とよめる。また藤のうら
ばに。あなかちにから思ふ事ならば。關守のうち
もねぬべきけしきに。おもひよはり給ふときゝな
がら。などいへるを。ひけるが如し。」

とよめりければ。いといたう心やみける。あるじゆ
るしてけり。

心やみけりとは。此歌をきゝて。二條后の。心や
ましくなけき給ふをみて。順子のあはれみて。ま
た〳〵かよふを。しらぬよしにて。おかせ給ふな
るべし。（以上臆斷）さてまたとよめりければ。と
のみにて。おくりたるほとはしるさゞれど。いか
なるつてをか賴みて。二條后のもとへ。いひおく
られたるなるべし。そはそのときならても。いつ
にてもあるべし。またもしくは。人かたりきこせ
まゐらせしか。

「二條の后に。しのびて參りけるを。世のきこえあり
ければ。せうとたちの。まもらせたまひけるとぞ。」

こはまた例の作者の註なり。三條后の御兄人（おんせうと）とは。

基經公（則昭宣公の御事なり、）と。大納言國經朝臣となり。以上二段は。清和天皇の御代となりて。まだ御代初の事なるべし。（以上。臆斷によりて云ふ。）〇まもらせ給ひける。と御兄たちの。みづからまもり居給へるやうにもあれど。こは人して。令守（まもらせ）給へるとの事なるべし。〇古意にいはく。せうととは。高子の御兄人たちならば。昭宣公と國經卿なり。此時の權威富貴を極めたる人の。姫君の住せ給ふあたりに。築土の崩れをさておくべきかは。又ゆるしたるあるじを。皇大后としも云にや。又太后を。あるじと申さん家を。荒されん物か。（篤胤云、このあたり文字脫たるべし、文義きこえず。）又后がねなる高子にまさば。ゆるすべきかは。皆あらぬ事なり。古今にても。本より誰ともなき。おところへ人の家と見ゆ。此文作れる人は。いと心深く。文かく事の上手なるを。さることわりたかへるやうに書ん物か。こは事の意をも得ぬ。後の人の裏書なりけり。さて下の。花の賀。大原野行啓などの時のさまを見るに。彼密事有て。世のとなへの侍るを。此物語にふゝみて作れる條も侍れと。此條者古今集に。さる衰へ人の家に。かよへるさまに見えたれば。實は誰とも知がたき人なるを。是には詞を加へて。紊たる也けり。といはれたり。篤胤いま是を論（あげつら）はんに。まつ今の世に。權威富貴をきはむる人々の。殊の外に重々しく。そのかまへなとはさらにもいはず。鼠さへも。入る事ならぬまでに。嚴重なるに目なれて。其心もて。當時（そのかみ）藤原氏の。權威富貴なりし事を思ふにいかにも古意にいはるゝ如く。その姫君の住せ給ふかまひの築土に。崩などのあるべき心ちせねど。こは今をもて古をはかるにて。いたくたがふ事あり。さるは中昔の書どもによりて。つら〳〵當時のありさまを考ふるに。權威富貴の人といへども。今とくらべ思ふに。こよなく重々しからで。しつそにしてありし也。されば。その住所の圍なども。今の如くならざりけん事。おしてもしるべく。しりへの方にて。人のさのみ目にたゝぬ所などには。人かよふ計りの。くつれのなかるべしとも云ふべからず。この頃の事かける書共に。何がしの大との家にありける女に。密（ひそか）にかよひけるなどいふ

ことの多きも。今の世の心もては。さらにそらごとゝさへ思はるゝをや。また后がねなる高子に。皇太后のゆるすべきかは。といはるゝも心得がたし。さるは。古意の趣にては。高子は早くより。后のまうけに。さだまりありし人のやうに思はれしならん。これこそ實によりどころなき說なり。二條后の。業平朝臣と。みそかにかたらはれし事は。またいとわかくて。后がねならぬほどのことなること。三段目の加筆に。たゞ人にておはしける時の事なり。といひ。下の六段に。いとこの女御の御許に。つかうまつるやうにて。居給へりけるほどのことゝ。いへるにてしるし。されば后に立給へるは。業平朝臣とのかたらひをば。御兄人かたなどの。いさめ給ひて後の事なるべし。下の花の賀。大原野行啓の段などの時のさまを見るに。かの密事故。世のとなへのありけるさまに。ふゝみて作れるなどまでは。心つかれたれど。今少しこまやかに考へて。此條などは。實に業平朝臣の自記なる事を。さとられざりしは。いかにぞや。

むかしをとこありけり。女のえうまじかりけるを。

年をへてよはひわたりけるを。

えうまじかりけるは。得得がたかりしにて。上の得は。今の俗にも。得かゝぬ。え行かぬなどいふ得なり。○年を經てよばひわたりけるとは。とし久しくかよひける。といふ事也。〈古意に、得かたき女を、年歷ていかでと、うかゞひありきたるに、やうやうにして、とやうにいはれたるは、說過られしなり〉○よばひとは。いと〳〵上つ世より。女にかよふことを。しかいへり。すなはち萬葉集に。夜這と書き。結婚とかけり。竹取物語に。夜はやすきいもねず。やみの夜にも。穴をくじり。かいまみまどひあへり。かゝるときよりなん。よばひとはいひける。源氏の玉かつらに。けさう人は。よにかくれたるをこそ。よばひとはいひけれ。などいひ。また枕草子に。夜ばひ星ともいへり。〈以上、臆斷、古意に依て、いさゝか己か心をも加ふ、〉○さてこゝのつねの本にはかくあるを。眞名本には。上に女の。といふ詞なくて。えうまじかりける人を。とあれど。こは常の本のかた。よろしければ。今はそれによりつ。然るを古意には。かれ

もこれもとりて。をとこありけり。女のえうまじかりける人を。とせられたるは。言かさなりて。なかなかにつたなかるをも。かへり見られさる非説なり。

からうじて（女心合而々）。ぬすみ出て。いとくらきにきにけり（居て往々）。

あくた川といふ川を居ていきければ。

からうじて（辛）とは。俗にやうやうの事して。といふとおなじ。〇ぬすみ出て。いとくらきに來にけりとは。人めをしのびて。その夜のくらきをさいはひに。つれて出たるなり。いてゆく事を來といふ事。古書どもに多く見えたり。〇あくた川は。延喜式に。攝津國島下郡に。阿久刀神社あり。此所の河を云つらん。（以上古意。）〇居ては。率の字將の字などをよみて。引つれて往たるとの事也。〇さて又眞名本に。からうじての下に。女心合而とあれど。かくては文詞。なかなかにつたなし。年久しく。よばひわたれる女とあれば。つれて出たるは。心あはせてなる事。更に云までもなし。こは今本に無きぞよろしき。またくらきに來にけりを。くらきに居て往けりとあるも。今本の方まされり。こは文詞のすぢを。よく味ひてしるべし。然るを古意には。かにかくに。眞名本をのみとられたるは。いかに思ひあやまられけるにか。

草の上に置たりける露を。かれはなにぞ。白玉かとなんをとこにとひけるを。

露をとへる事は。文にいとくらき夜とはあれど。うすおぼろに。露のひかりの見えければにぞあらん。臆斷に。かゝる道をならひ給はねば。露をもとひ給へるにや。といへる。ことさもあるべし。然るを古意に。いかなる人か。露をしらざらん。闇に露は見えさるを。かく書るは。いとも里はなれたる川べを。やみの夜ふかきに行が。いとゝものおそろしきに。雷のひかりの。をちこちの露にきらめくを。鬼の目などの。にらまへるさまにおほえて。問こゝろなり。はた次の事をいはんもとなり。といはれたる。此説おもしろくはあれど。少しうかち過たる説なり。さるは。こはいまだ。雷のなりいでざるほどの事にて。次にそのすさましきさまをいふとて。こゝをばとひけるをと。まづいひとちめたる文章のあやなり。また上田秋成が。よ

しやあしやには問けるをの下に。何とか詞章の。二句計り脱たるならん。かくては文章とゝのはずおぼゆ。といへるも。こゝの文章を。うまく考へさるによりてなり。さてとひけるをのをもじ。今本になきを。眞名本に依て加へつ。熟く文辭を味ひて。このをもじなくては。えあらぬ事をさとるべし。また白玉かの三字は。歌に依て。いま己がはじめて加へたるなり。こはこの言ばなくては。歌とかけあはぬ心ちのすればなり。もとも古き歌集の。辭書などの例を思ふに。歌にいへる事は。はし詞にははぶきて書るなどもあれど。こゝはさる類ともたがへばなり。されどこは己が心のおもむくかたなり。人をしひるにはあらずなん。

○露をなにぞととへる事は。臆斷に。かゝる道をならひ給はねば。露をもとひ給へるにや。といへり。（頭書云この處重複）然るを古意に。破りていはれしは。いかなる人か。露をしらざらん。闇に露は見えざるを。かく書るは。いとも里はなれたる川べを。やみの夜ふかきに行が。いとゝものおそろしきに。雷のひかりの。をちこちの露にきらめくを。物の目などの。にらまへるさまにおぼえて。とひ心なり。はた次のことをいはんもとなり。といはれたる。此說おもしろくはあれど。すこしうがち過たる說なり。こは上田秋成か。よしやあしやにいへるは。草の上におきたりける露を。是は何ぞと問までは。神なり雨降ともいはず。歌に。しら玉か何ぞととひし。と讀るを合せて。草葉の露を。玉かととひし文ならずや。かつ神なり雨もいたくふらば。草葉に露は堪まじく。さるおそろしさには。たをやめやがてそこにても。魂消んものぞ。さらばこは。何ぞとは。小夜の道しば。分ならはぬ心に。かばかりおき亂りたる露原を。ともせる松明。或は闇の雲間の。星の光などに。玉ぬきみだしたる如くも。そらめして問ん者。なまかしき女心。と見ばいかに。といへるぞよろしき。こは誠に。いまだ雷なり。雨もふり出ざるほどのことにて。こはかたみに。情ふかく思ひかはしたる男女の。常は人目をしのひ。心の如くもあらざりしを。かくほいとげて。つれ出て。人をはゞかる事もなく。語ひつゝたのしかる心に。たはふれ

て。露を玉か。などは問けるなるべし。なほ歌の所に云るを合せ見て。然る事をしるべし。さて次に。やがてすさまじくあれ出て。あまさへに。女を鬼にくはれたるさまをいはんとて。こゝをばまづとひけるを。とゝちめて。後をふくめたる文章なり。(秋成が説に、問けるをの下に、何とか詞章の二句計り脱たるならん、かくては文章とゝのはずおぼゆ、と云るは、文詞の章を、よく考へざるにて、こは誤なり、)〇さてとひけるをのをもじ。今本に脱たるを。今は眞名本に依て加へつ。さるはこのをもじ。こゝには千引石の。おもく力ありて。かくたのしかりしを。やがてすさましくあれ出て。あまさへその女をさへに。鬼にくはれたる。いみじきかなしさを云んとて。かくいひ置て。次をふくめたる文章なり。よく／＼文詞を味ひよみて。このをもじの。力ある事をさとるべし。

ゆくさきおほく。夜もふけにければ。

ゆくさきおほくは。心ざして行かたの。道のとほきなり。則眞名本には。行前遠くとぞあなる。(また思ふに、この物語しるしけんほどは、やゝ假字もみだれたるほとなれば、とほくとかけるとを、をとまがへて、つひにおほくとなれるか、とも思へど、こは今の俗にも、行先のたんとあるなどいふ事あれば、おほくにてもさまたげなし、)然るを古意に。今本に。行さきおほくとあるは誤也。かかる時に。心あてゝ。行さきの多きは。よくもこそあれ。眞名本に。遠くと有ぞことわりなる。と云れたるなどは。甚じき非説なり。

鬼ある處ともしらで。神さへいといみじうなり。あめもいたく降ければ。

この鬼ある處ともしらでは。あばらなるくらといふへ。つゞけて心得べし。(鬼とは、今の俗にも、ゑになど書なる、二つの角生て、とらの皮をとうさきとしたるものを、靑鬼、赤鬼などいふ類のものなるべし、古意に、今の童等のおそるゝ、ばけものゝ事にて、物語ふみに云、みな是なりと云しは、少したかひてきこゆ、)〇いみじうは。甚しく嚴しくなどいはんが如し。(古意、)時といひ處といひ。物すさまじきさまなり。清少納言にかきくらし雨降て神もおどろ／＼しうなりたれば物もおぼ

えずたゞおろしにおろす（臆斷）
あばらなるくらこ。女をば。おくにおしいれて。をとこ〇(はマ)弓やなぐひをおひて。戸ぐちにをり。
いにしへの卿には。公の稲を納めおく倉。必あり。それが今は稲を出しては。内むなしく戸をも放ちて。あばらにて有を。さいはひに見つけて。女を奥におし入て。我は戸口に用意しつゝ居て。夜の明るをまつさまなり。かゝる倉は。火をさけて。郷はなれたる河べなどにかまへてあるが。稲を出して。守人なき後は。鄙めく物のすめるなめり。是まことに田舎の有さまにて。こゝにかなへり。さるを倉にあらず。座也といふ說もあるは。いかにぞや。戸口とさへいへるをや。今の世にも。田舍には。さる倉のあるを。いにしへ稲かりて。倉につみおくには。彌里廻には多かりけん。（古意）
〇弓胡籙を。（やなぐひといふは、矢をもりて、背に負ふ器なり。）負ふとは。中頃の世には。仕ふる人は元よりにて。直人も。遠く行にも。夜行などする時にも。是を負たること。今昔物語などに。いと多く見ゆるなり。そのうへ。かく女を偷て行には。いかなる男も。弓矢刀など負はぬ人やはある。こは時世の有様に。かなへるのみならず。ここの文の勢ひを。得たる物なり。律令の行はれし世々には。私に兵器をたくはふることは。違令也しを。今昔物語の比にて。世の下りたるさまを見るに。延喜などの前より。制令おとろへて。諸國に私の勢をなし。盜人も多ければ　都の內にてすら。何人も。弓矢なぐひを負て。夜はありくこととなれり。（古意）さて弓胡籙をおふと云るにつけて。業平朝臣。此時近衞月なれば。といふ說のあれども。用へからず。作れる事なれば。たゞそのまゝに見るべし。もしきびしくいはゞ。貞觀六年三月に。左兵衞佐より。左近衞權少將に遷らる。此段の末に。いとこの女御の御許に。つかふまつるやうにて。と書たれば。染殿后の。女御にておはしけんほど。二條后は。童女にておはすべければ。あはぬ事なり。こは竹取物語に。此まもる人人も。弓箭をたひして。おもやのうちは。女ども。はんにをりてまもらす。女ぬりこめのうちに。かくや姬をいたかへてをり。おきなもぬりこめの戸

さして。戸口にをる云々。源氏（縮合）に。まつ物語のいてきたる。はじめのおやなる。竹取の翁に。うつぼのとしかげをあはせてあらそふ。とあれば。こゝは竹取をまなびて。書るなるべし。あばらなるくらは。（竹取に）ぬりごめのうちに。と云る心に同じ。（臆斷）

はや夜もあけなむず。と思ひつゝ居たりけるに。

臆斷に云く。○頭書云こゝはおく斷のこらず寫すべし

さて眞名本に。明何爲與とあるにつきて。古意には。それよろしと云れたれど。こは今本の方まされり。

鬼はや一口にくひてけり。あなやといひけれど。神なるさはぎに。えきかざりけり。やう〳〵夜も明行に見れば。居てこし女もなし。あしずりしてなけどもかひなし。

あなやは。女の。鬼にくはるゝときの詞なり。古語拾遺云。古語。事之甚切。皆稱阿那。とありて。こゝは女の鬼にくはるゝとき。一こゑあつとさけびたるをいふなり。（以上、臆斷に依て、いささか己が心をも加ふ、古意同じ、）○神なるさはぎに。えきかざりけりとは。女の。ひとこゑ。あつとさけぶこゑをばきゝたれど。雨ふり神のなりはたゝく音にまぎれて。喰れたる事をば。しらで有しとなり。○やう〳〵といへるは。はや夜も明なんと思ひつゝ居たる。といふ首尾なり。○あしずりは。文選に云く。子どものやう也。（以上臆斷、）こは今も子どもなどの。いたくなきいさちては。雨の足をさし出し。うちくろぶしをすりあはせて。なく事これなり。さてそのかなしかりし心を。則歌によみ出たるなり。

新古今哀傷在原業平「しら玉か何ぞと人のとひし時。露とこたへて消なまし物を。

こは女を鬼にくはれたるかなしさ。やるかたなく。よひの間の。いまだあれいでざりし程の。たのしかりし事の思ひ出られ。そを歌にはよめる也。一首の意は。よひのほどかたみに。いとおもしろくかたらひて。かの人の戯さへ云て。露を白玉か。なにぞなど問しほどは。いと〳〵たのしく。心ゆきて。今かゝるうきめを見んなどは。思ひもよら

ざりしを。これを思へば。かの露を。玉かなにぞと問し時。露と答へて。其露の如く。すぐに消たらんには。今かゝる悲みはせざらましを。其時しなざるからに。今かゝる憂目を見る事よ。となげきたる也。なほ深き哀もこもれる歌なるを。情はあまりあれど。かきとりかねつ。臆斷にいはく。
元眞集に。
　しら玉か露かとゝはん人もがな。物思ふ袖をさしてこたへん。」是はこの歌をとりてよめり。
「これは二條后の。いとこの女御の御もとに。つかうまつるやうにて居たまへりけるを。
これまた例の後人の。書入れたるなり。いとこの女御とは。染殿后の御事なり。二條后は。贈太政大臣長良公の御女。染殿后は。忠仁公の御女なる故に。いとこなり。(臆斷に依ていふ、)〇つかふまつるやうにてとは。まさしく仕へ給ふにはあらで。今の世に。へや子。なと云やうなる事なるべし。
かたちのめでたくおはしければ。ぬすみて。おひて出たりけるを。御せうと。ほり河のおとゞ。たらう國經の大納言。また下らうにて。うちへまゐり給ふ道に。いみじうなく人あるをきゝつけて。とゞめて。とりかへし給ふたけり。それをかく鬼とはいふなりけり。
かたちのめでたきとは。御容貌（かたち）のうるはしき。といふ事なり。遊仙窟に。可愛をめでたしとよめり。(臆斷に依て云、)〇堀河のおとゝ（大臣）は。昭宣公なり。ほり河の□□にすみ給へる故。ほり河の大臣と云るなり。官位高ければ。弟なれどもさきに書り。國經卿は。後に書ても。兄なれば。太郎とかけり。(以上、臆斷に依て、いさゝか己が心をも加ふ、〇さてこゝを眞名本には、堀河大將、太郎基經、國經大納言とあり、古意に、是を取て云れしは、大將太郎と有は、草書に、太政大臣と有しを誤て、其下に、基經の二字は、小書にて書べき例なるをも誤れり、かやうの高位の人は、かゝる物には、はゞかりて、名は本文には書まじき例をも知らぬものゝ、大事（書カ）にせる也とて、ほり河の太政大臣基經、國經の大納言、と書改られたり、これも然る事ながら今はしばらく、今本によりつ、こは人々の好みに從ふべし、)〇未下萠にてとは。奉公の年

龍少くて。また賤官なるをいふ。(古意)〇うちへまゐり給ふとは。則參內し給ふ途中になり。今本道の字おちたり。古意に。眞名本に依て。補はれたるぞよき。〇いみじくなく人の在けるをきゝてとは。あばらなるくらの內に。后の居給ひて。あめふり。かみのいみじくなりはためくに。えたへず聲たてゝなき給へる。との事なり。〇とゞめてとりかへすとは。業平朝臣の戶口に。夜のあくるを待てをりける間に。あばらなるくらなれば。何方よりも入りて。とりかへし。つれかへり給ふなり。〇それをかく鬼とは云なりとは。あからさまに御兄人等の爲に。取かへされたるとはしるしかたき故。かく鬼とはかこつけいへるなり。との意なり。

またいとわかくて。后のたゞにおはしける節の事とか哉。

こはきこえたるが如し。今本。ときの事なりとあれど。こは後の人のうら書なれば。眞名本に。事とかや。と有を取つ。

神樂歌考稿

平田篤胤撰

編者云本書は未成稿にて重複又は脫落等あり

師說に神樂歌を古今集に神あそびの歌とあり、神樂を加具良と云ふことは古書に見えずと言れ加茂大人も神樂は神あそびと唱ふべし、樂の事を後の物語にあそびと云り。かぐらと云は後の世の言にて古書になき言なりと云れたれど此はたま〳〵古書に洩たるにて、實に古言なるべくおぼゆ、其は神代紀に嚔樂を惠良岐と訓るに就て案ふに神樂を加具良と訓むことはもと神惠良岐てふ言の加牟は加具となり、惠岐の省かりたるに本つ語の其意を得て神樂の字を塡たるには非ざるか牟は久の濁音に轉り、其具に宇韻あれば惠の略かるべき語勢なり、さて惠良岐とは云へども語の本は惠良なれは岐も省りて加具良となるべき言の格をよく思ひ辨ふべし。

庭燎

此事は古史傳（第四十八段擧庭燎の處）に委く云り

美也萬耳波安良禮不留良之止也萬奈留萬佐幾乃可川良色川幾耳計里色川幾耳計利。

此の歌はもと葛の歌なるを庭火に唱ふよしは目次の處にいひき、さて歌の意は葛の下に言ふべし。

阿知女法

本方

阿知女　於々於々

末方

於介

本方

阿知女　於々於々

末方

於介

加茂大人說に於々於々は警蹕也、（御前追と唱ふ、）事の初なればかく云ふ也次の前張の末に本方安伊佐志ゝゝゝといふ志々志々は今も警命する時、しつしつといふにて此の於々於々と云ふ同じ、（さて應答には口を閇づ）於介を木名とするも僻事ぞここに其の一つをのみ云べきかはとあり、（此の外に阿知女は宇受賣命を轉ぜし言かと云人ありさも有

なむか然れば知を濁るべし神代紀に宇受賣命の神樂せし形をもて人長のわざを阿知女の作法とはいふならむ其の鈿女命のさまを八百萬神の笑ふをうつして於々於々といふかと言れつれど、此はわろし、云ふ人ありといはれし其の人は梁塵愚按抄を云ふなるべし、彼の抄にもさは宣へれど決めては信まじき說のよし寫本を見れば、以上愚案の及ふ所なり更に信用すべきにあらずと斷り給へるをや）信友云或本に謦蹕は神幸のとき御先を拂ふをいふ、また前駈とも云ふ今諸社に神幸のとき、または神供を獻上るとき、聲を發してオフと云ふこれをミサキオフともまたアジメとも云ふ（或說にオフと云は陽をすゝむる義なりと此說私意附會なり決して信すべからず）とあり、按に阿知の法は謦蹕の作法と云ふが如し、阿知女の言の義はいまた考へず、阿知女、於介、於、ともに謦蹕の言なるべしオフとあるは誤なり此本に於々於々とあるに從ふべしと云り、（今云信友が引る或書は神道名目類聚抄なるべし。）

採物九種歌

神樂の時に捧げもしまた人長の取て舞などする物を採物といふ次々擧たる九種の物これなり、さて其の種々に由ある歌を謠ふこれを採物の歌と云ふなり、此の歌どもは殊更に作れるもあり、また本より其れとはなく作りし古歌を其の歌として謠へるもありときこゆ其の由は其の歌の下々にいふべし。

○榊

かの石屋戸隱の時に五百枝眞賢木を根拔にして珠鏡白和幣青和幣を著て捧げまた八十玉串にも榊を用たりし由によりて此を捧奉ることの本を思ひ辨ふべし。

佐加幾波乃加乎加久者之美止女久禮波也曾宇知比止曾萬止爲世利計留萬止爲世利計留。

さかきばのかをかくはしみは榊葉の香を香はしさになり香をのをはとめくればに係れり、なほざりに思ふべからず（かの瀬をはやみなど云るをのたぐひよりは力あり心を著て味ふべし）さて榊のことは古史傳に委く注り）○とめくればは尋來ればなり○やそうちひとぞは八十內人ぞ也、（知を濁り

て氏人の意とする說は信じがたし〕　内人とは大宮につかへ奉る人を云ふ、神宮に仕奉る大内人に某内人といふが多かる卽是也、〔内人をウチンドと云は音便の訛言なり〕○まとゐせりけるは圓居せりけるにて麻登は麻呂と同言なるべくおぼゆ、然れば此は大内人たちの其處に集へる狀を云へるなり、〔因に思ふに纏も一所にまとふよしにて同言なるべく、又的も形の圓きより云へる名なるべし〕さて一首の意は榊葉の香のするがゆかしさに其の香を尋つゝ來て見れば八十内人の圓居して神を祭る場へ來つると詠るなり〔此の歌拾遺集の神樂歌にも入れり〕

末

加美加幾乃美牟呂萬也末乃佐加幾波ゝ加美乃美末戸仁之介利安比仁計利之介利阿比仁介利

かみがきのみ牟呂のやまのは、神垣の御室の山のにて、梁塵抄に御室とは神の社をいへば神垣とは枕詞におけるなりと宣へるが如し、〔加茂翁解に御室とは神の御あらかを云、さて神垣は其の社をひろくさすなりと云れしは然る言ながら、かく重ね云る例はなし、神なびのと有しを謠ふものゝ唱へ誤れるなるべし、六帖に行が上に又もゆけこま神垣やみむろの山とあるも誤なり神なびの御室は飛鳥の雷岳のことなり若くは他の社にて謠ふとき神垣とかへしにやと言れしは理にすぎたり〕○佐加き波は榊葉はなり、○かみのみ末戸仁之介利安比仁計利は、神の御前に繁茂り合ひにけり也、○一首の意は御室の山に立はやしたる榊葉はいとよく茂りて神の御座の御前までも繁り合ふとなり、〔此の歌古今集の採物の歌にも載れり、さて六帖に貫之かくらとあり〕

或說

本

佐加支波仁由布止利志天々多加與二加々美能美牟呂乎伊八比所女計武

さかき波仁由布止利志てゝは、榊葉に木綿取垂てなり〔木綿と云ふ物のことは古史傳第□□段に云ひ、取垂といふ言の由は同書の第□□段に委く註るを見るべし〕○たが與仁加は、誰が世にかにていづれの世にかと云むが如し、○かみのみ牟呂乎

は神の御室をなり、○伊波ひ所め計むは、齋ひ始けむにて、○一首の意は、榊葉に木綿を取垂て神の御室にさし立て齋ふことは誰の世に初つる事ならむと知たることを知らぬげに如此おぼ〱云は歌の常なり、

末

志毛也多比於介止毛加禮奴左加支波乃多知左可由倍幾可美乃支爾加毛

志毛也多比は、霜彌度なり、○於介止毛加禮奴、雖置不枯なり、○左加支波乃多知左加由倍幾は、榊葉の立榮ゆべきなり、○可美乃支爾加毛は、神の本根かもにて、根はかろく添たる言也、（そは師の大祓詞後釋に彼詞の磐根てふ言を解て言れしは磐根はたゞ磐にて、根は添ていふ言なり、屋を屋根、羽を羽根、杵を杵根、矛を矛根、島を島根といふ類なり云々、木をきねといへるは神樂の採物の歌に霜やたびおけど枯せぬ榊葉の立榮ゆべき神の木根かも、此のきねは、即上の榊をさして云るにて、神の木かもと云るなり、然るを後に是をあしく心得て詠る歌ありて、人皆覡巫のことゝ心得たるはいみじきひがことなり、榊の歌に覡巫をよむべきよしなく、又覡巫を立榮ゆとは云べき物かは、萬葉一に、崗の草根をいざむすびてな、十四に、久佐爾可利會氣、これらもむすぶといひ、苅といへればたゞ草を草根とよめるなり木を木根といふことも准へて思ひ定べしとあり）さて一首の意は神の木とて霜は彌度置けども枯れず立榮ゆる榊葉かもと祝て詠るなり、（此歌古今集にも採物の歌とて載られたり、）さて六帖第一にかぐら貫之「あしひきの山の榊のときはなる蔭に榮ゆる神のきねかも」「榊葉のとゝはにしあればながけくに命たもてる神のきねかも」神まつり、素西法師「神まつる卯月に咲る卯花を白くもきねがしらげたるかな」など詠るは正に覡巫のことに詠なしたり、師言に後に是をあしく心得て詠る歌ありといはれしは此の歌どもを言れしにや。

○幣

此は古史傳神代卷（第□□段太御幣の處）に委く註せる如く、すべて神に奉る物を云ふ稱なれども此なるは絹帛の御幣をいへり、其は歌にて知られ

たり。

本

美天久良波王加仁波阿良須阿女仁萬須止與遠加比女乃宮乃美天久良美也乃美天久良。

美天久良波王加仁波阿良須は、御幣は吾がには有らずにて、此の吾は天照大御神の吾なり其の由下に云ふべし、○阿女仁萬須止與遠加比女乃は、天に坐す豐遠迦比賣之にて、○一首の意は、吾が御手に執れる此の御幣は吾がには非ず天に坐す豐遠迦比賣神の宮に奉る御幣ぞと大御神の豐遠迦比賣神を祭り給ふ大御心を心として詠るなり、（豐遠加比女とは外つ宮の度相に坐す豐宇氣毘賣神を謠ひ誤れるにて、大御神の此の神を祭り賜ふ由は古史傳神代卷第□□段令レ織二神御衣一といふ處、また第四十□段祈祝々之乃處に師説を引て委く辨へたるを見て知べし。）

末

美天久良仁奈良萬志毛乃遠須倍加美乃美天仁止良禮天奈津佐波萬志遠奈津佐波萬之遠。

美天久良仁奈良萬志毛乃遠は、御幣に爲まし物をにて願ふ意なり、○須倍加美乃は皇神之にて、天照大御神を申せり、（加茂翁云すめらみことゝいひ又すめらきと云ふを思ふに只言によりたる音便なり、何れにいふも意同じけれど唱へのよろしきに任せてすめともすべともいふなり。）○美天仁止良禮天は御手に執られてなり、○奈津佐波萬志遠、此句梁塵抄本にはなづさはるべくとありて、註になづさはるとは馴むつるゝ心なりとあり此の意なるべし、（加茂翁の解にも此説を擧て、後世さも轉じ用ひたるなり、此の言の本は山路をなづみ來るまた船の澳になづさふなど萬葉にいひてとゞこほることなりとあり、いかにも此の言は那豆牟といふ言より轉れるなるべし、那豆牟てふ言の意は古史傳□卷に委く註せるを見べし。）扨此歌は前なる歌に本づきて詠るにて、○一首の意は、豐遠加比女を祭り給ふとして大御神の御幣を大御手づから捧げ給ふを御幣になりたらむには其の御手に執られてなづさはり奉らまし物をと御幣をうらやむ心に詠なしたるなり、（前の歌も此の歌も共に拾遺集の神樂歌にも載られたり。）

○杖

此を作れること石屋戸の段に見えざれども採物にあるを思ふに此れをも設備へたりけむが傳に洩たるべし、此餘にも杓荻なども傳へに見えねど採物にあり、

本

古乃津惠波伊川古乃川惠曾安女仁萬須止與遠加比女乃美也乃津惠奈里美也能川惠奈里。

古乃津惠波は此杖はなり、○伊川古乃川惠曾は何處の杖ぞにて、此は上の幣の歌と同じ趣なり。

神樂歌次第（諸本に次第の字なし今は古本に依れり）

○庭火（拾芥抄に神樂歌の目錄を載て庭火の下に宸筆本無レ之とあり、古本にも此目なくたゞ始に人長庭火の前に出來て樂人の才を試る式を記せる處に本末わかりて庭火の歌を謠ふことを記せり、そは美也萬耳波云々の歌を上下の句を本末にわかりて謠ふなりけり、さて此の歌は葛の歌にて梁塵抄に杓乃次に記され古本取物の目にも葛を出したれど其下に但不レ用レ葛と云ひ。末に此歌を擧たる所にも今世不用とあるを合せて案にもと庭火歌とて別には無りしを後に葛の歌を謠ふことを止てその一首を庭火歌とせられたるにて庭火歌とて別に出たる本どもは其後の定めを記したるなりけり今はその定によりて此歌を擧て葛の歌は擧ず體源抄に引る神樂證本にも葛は入らずと今井似閑も既くいへり。

○阿知女法（梁塵抄には阿知女作法とあり今は古今に作字なきを取れり。

○採物九種歌（拾芥抄には採物とのみあり、梁塵抄には採物歌とあり古本には取物九種とありて歌字はなし今は彼此合せ考へてかくは記しつさて採とかけるも取と作るも同じことなれど今は多きに就て採字をかきつ、

榊（諸本に此の字をかけるを加茂翁の解にのみ賢木とあるは心ありて改られしとおぼゆ今は諸本によれり）

幣、杖、篠、弓、劒、鉾、杓（片折諸擧）

韓神（弃頭亦號八枚手○拾芥抄も古本もこれに葛ありて十種なり然るに今葛を除きたる由は庭火の下にいへり）

書入云祝詞考に大祓の所に稱唯の分ち神樂次第抄に

見えたりとあり。

拾芥抄古本ともにこれに葛ありて十種なり然るを今葛を除たる由は庭火の所にいへるが如し古本に擧たる物は十種なるに取物九種とあるは葛をはぶきてのいひなり、さて體源抄に韓神取物外也とあるは誤なり、此は採物としては榊幣などの類と名のやう異なるに依て思ひ誤れるなるべし、然れどもこれ採物に違ひなきことと神樂次第考に委曲に云へる如くなればあやしむべからず、故今は拾芥抄の目錄また加茂翁の解の目に從ひて採物とは定めたるなり、さて片折諸擧を枃に隷したることは體源抄によれり其說は考にいふべし、また韓神の亦八枚手ともいふよしは體源抄に神樂の證本と云を引て韓神又號八枚手とあるによれり

○大前張四首あり、今は拾芥梁塵その外の本どもに此目あるによれりさて四首の字は私に補へり。

宮人、拾芥抄に宮の上に大字あり今は體源抄梁塵抄また古本にもなきによれり。

木綿志天、拾芥抄に四手と作り、今は古本また梁塵抄によれり。

前張、拾芥抄に大前張とある所に宸筆の本宮人由不志天前張之外不被載之といひ體源抄にも宮人以下三首爲大前張餘无とあればもと大前張と云は。宮人木綿志天前張の三首はかりなりしを、余の歌共は後に加へられたるか、またもとは宮人木綿志天前張の余の歌どもゝありしを、宸筆本體源抄な□□かけるほどは此三首をのこして余の歌を謠ふことは止られしか今定がたし、さる沿革のありし故に難波潟のあり所の彼此違ひあるならむ。

階香取、諸本に此次に井奈野和支母子の目ありて其歌どもを古本にてらし考るに階香取の一首にてそはしもとより長歌なるを本末にて謠ひわかちたるをその歌詞によりて井奈野腸母子などの名をつけたるなりけり故今は古本によりて階香取の一首と定め歌の狀を見るも階香取なること更に論ひなければ也加茂翁の解にも今定たる如くあるは此を思はれし成べしさて此古本に宮人木綿志天前張階香取以此號大前張と云ひまた階香取は世絕歌也雖然注今宮人由不志天前張以三首乎とあると拾芥抄に大前張とある處に宸筆本宮人由不志天前張之外不被載之と見え體源

抄にも宮人以下三首爲大前張とあるを合せ考るにもとは此に擧たる四首歌を謠ひたりけむが階香取の曲は絶廢て宮人木綿志天前張をのみ謠ひたりし故に宸筆本に此三首を載られ體源抄にも右の如く云るなるべしさてまた諸本に難波瀉と云歌ありて拾芥抄の目錄には宮人と木綿四手の部に入り、梁塵抄には木綿志天と前張の間に入り古本にも然有れど其裡書に難波方不入此譜以他本取出入とあれば上に引る宮人由不志天前張階香以此號大前此は後人の他本によりて加たるなることとしるし其は前張とあるに合せ考へて曉るべし、故今はその古色（ふるきこゑ）に從ひて難波瀉の歌は擧ずなむ○又拾芥抄の目に階香取井奈野の間面白と云ふ目あり諸本に此歌見ゆることなしいぶかしきこと也。

○小前張八首、古本に此綱目もなし今は拾芥梁塵其餘の本ども此目あるによれりさて八首の字は私に補ひつ

薦枕　志都野（しづや）志津夜乃小菅、（拾芥抄の目には閑野小菅とありて宸筆本作志都又小菅二字无とあり梁塵抄にもただ閑野とあり今は古本に志津夜乃小菅簾中抄に志津乃小菅などあるによれり。

礒等前、梁塵抄に磯等とのみあり拾芥抄に宸筆本も然るよし見ゆ今は古本によれりさて拾芥抄には﨑の字をかけり體源抄簾中抄ともに前字也、

篠波

殖春、梁塵抄には槻字をかけり今は古本及拾芥抄による、

總角、體源抄に角總とあり萬葉緯にも一本に然有るよし見えたれど誤也、

大宮湊田、蟋蟀、梁塵抄巷とあり拾介抄にも然有之、宸筆本に蟋蟀と有由見ゆ今はそれと古本によれり。

○雜歌、千歲、早歌。晝目、湯立、竈殿、酒殿、神擧

○雜歌、此綱諸本になきを拾芥抄にのみありて其の目は晝目、湯立、竈殿、酒殿、神擧、朝藏其駒と順次て星歌木綿作の次に擧たり、かくて雜歌とある處に宸筆の本に小前張之次被レ載レ之千歲早歌之外無之とあり此宸筆によりて雜歌を小前張の次に擧つ、但しその御本に千歲早歌のみありて餘の歌の無りしは混れ脱たるとおぼえたり故拾芥抄に晝目

湯立竈殿酒殿神舉を雜歌の部にいれたるによりてこの五首を本の順次のまゝ千歳早歌の次に擧げ合せて七首を雜歌とさだめつなほ神舉の次に朝藏其駒の二首拾芥には雜歌として修れたれど此の二首は宸筆本星歌被載之と同抄にあるによりて彼部に擧つ、

千歳法（諸本に法字なきを今は古本によれり此は阿知女法とある部のはやし詞にて歌といふには非ず故千歳法とは云るなり委くは考に云べし）早歌（千歳早歌諸本に蛬の次にありて共に小前張の部の如くなるを拾芥抄に已上二首は宸筆に雜歌に被ㇾ載ㇾ之と見え梁塵抄にも蛬の處に是までは小前張の曲なりと記されたるによりて此を雜歌の部とさだめつ、

晝目歌（諸本に歌字なし今は古本によれりさて是より以下神舉歌までの順次は拾芥によれり）湯立歌（古本には弓立歌と作り拾芥抄に湯立とかきて宸筆に弓立とあり梁塵抄にも弓立とあり今は拾芥により歌字を補へたるは古本によれり）竈殿遊歌（諸本に遊歌二字なし今は古本によれり）酒殿歌（この歌字も古本によれり）神舉歌（梁塵抄　此目なくて歌は弓立歌の末に混れ出たり、萬葉緯もその如くなるは梁塵にならへる也また古本には始の作法の處に弓立の次に次神舉とあれど末に歌を脱たり今は拾芥抄に依て目をあげ例によりて歌字を加へつ、

○餘歌

明星　得錢子　木綿作　朝倉　其駒　難波方

神樂歌次第

庭火

美也萬耳波安良禮不留良之止也萬奈留萬佐幾乃可川良色川幾耳計利色川幾耳計利

先人長庭火乃前仁出來云鳴高々々二度次不留末不々々々々二度次云今夜乃夜乃御神態乃人乃長佐左乃近伊衞利府佐乃將監已止人正伊六乃位乃上之奈某姓名懸多利男古山乃總檢校頻旦懸多利天下千壽萬歲可御坐支物聞支次云主殿寮佐々々々二度則主殿寮佐唯稱須仰云御火白久呂獻津禮又唯稱須次云男共令立之天女各乃才可試支體中多利則白加良唯稱須次云掃部寮々々々二度寮人唯稱須仰云膝突絡へ又寮人唯稱須次云御笛

可仕支男古召須則笛吹參候膝突天之庭火乃笛遠吹了人長仰云本乃方仁候へ仰云篳篥可仕支男召須同久參候膝突之旦庭火乃笛同前了仰云末乃方仁候へ仰云御琴可仕支男召須琴引參候膝突之旦琴仕了奴仰云本座仁候へ件三人人長乃命仁隨天兩方乃座仁着了天引琴之間仁人長仰云笛篳篥與里安倍隨天笛篳篥琴與里安波世多利次云御歌乃可仕支男召須歌人參候膝突之旦笏遠腰仁差之間仁笛篳篥乃音留了奴琴獨搔久之間合兩手天爲拍子天出音須其詞云美山仁波安良連布留良志止也末奈留庭火歌音留之間仁人長仰云本乃方仁候へ立膝突天着座了奴次末乃歌遠召須同前也仰云末乃方仁候へ次人長申云男共令立女天各乃才試了奴今八御神態可仕之狀申多利則自良唯稱了天歸座天着了次始御神態、

○採物八種各雄拍子九雌拍子十

掃部寮儲座次內藏寮儲饗從瀧口陣戸發物音參御前（こは人長の人の舞人陪從等を引卒て御前に參入るよしなり、）次各着本末之座次公卿執坏各着座兩三度了（これ迄は裡書の說によれり、）先ッ人長出來庭火之前云、鳴高々々二度次不々留々萬萬不々二度次云今夜之夜之御神態之人長左近衛府將監正六位上某、（これに依るに神樂の人長は左近衛府の官人の仕奉ること也、その本緣はいまだ考得ず、）男山之總檢校頻而懸多利千壽萬歲可御座物聞支次云主殿寮々々々二度則主殿寮唯稱須仰云御火白久獻禮又唯稱須次云男共令立旦各乃才可試支體申多利則自良唯稱須次云掃部寮々々々二度、寮人唯稱須仰云膝突給倍又寮人唯稱須次云御笛可仕支男召須則笛吹參候比膝突天之庭火乃笛遠吹了奴人長仰云本乃方仁候倍退出旦本乃方乃座仁着久次「仰云篳篥可仕支男召須同久參候比膝突之旦庭火乃篳篥吹了奴仰云末乃方仁候倍退出旦末乃方乃座仁着久次御琴可仕支男召須琴引參候比膝突之旦琴仕了奴仰云本乃方乃座仁候倍退出旦本乃方乃座仁着久件三人々長乃命仁隨

○三節祭、

○神樂之事供奉之緣也、神祇官の御巫は宇受賣命の遺跡なるべし、谷重遠云至今內侍所御神樂行此古事永世無廢絕矣○谷川云禁秘御抄云自一條院御時十二月有御神樂此謂寛弘二年也（古歌に黑闇

の天岩戸も解ぬへし小夜すみ人の歌ふ神樂に、舊事紀云命猿女君氏供神樂矣）信景云神宮有ニ巫女一振ニ神鈴一奏ニ神樂一是權ニ輿于猿女之祖一也（今按國史嵯峨天皇弘仁四年從四位下辨兼攝津守小野朝臣野主等言猿女之興國史詳矣其後不絕今猶見在夫猿女養田近江國和邇村山城國小野鄕今小野臣和邇臣等既非其氏被レ貢ニ猿女一熟搜ニ事緒一二氏之中貪人利レ田不レ顧ニ恥辱一拙吏相容無レ加ニ督察一也踐祚大嘗祭式云其御巫猿女等服者依ニ新嘗例一

を、（內侍所御神式と云書ある由なれど予いまだ其書をさへに得見ず、）神樂歌の古本に見えたる神樂歌の次第と其の裡書に記せる御前作法次第とを合せ考ふるにまづ掃部寮よりは座を儲け、次に內藏寮より饗を儲け人長たる人、舞人陪從等を引卒て瀧口の陣の戶より、物音發て御前に參り、次に各々本末の座に着く次に公卿坏を執て各々座に着き兩三度了りて、（以上裡書の文による、）先人長庭火の前に出來て鳴高々々と二度云ひ、次に不留乃不々々々々と二度云ひ、次に今夜の夜の御神態の人長左近衛府將監正六

位上某姓名男山の總檢校頻りて懸たり天の下（以下缺）

阿伊宇延於

佐邪 斯志士 須受 勢也是 曾蘇叙

那 邇爾 奴怒 泥 能

麻 美微 牟 米 母毛

良羅 理 琉流留 禮 呂

加賀 伎岐 久玖具 祁氣宜 許古碁

多陀 智知遲 都豆 弖傳 登杼

波婆 比毘備 布夫 幣閇辨 富煩

夜 由 余與

和 韋 惠 袁遠

伊布伎廼屋歌集

日向の國人大神貫道が淤能碁呂島日記なる圖を。わがをしへ子なる百川篤則に寫させて。つら〳〵見つゝ言擧しつるうた七首。

百八十の島のはじめと御祖神の。かきなし坐る島はこの島。

國中の柱と神の衛たてし。瓊矛のなれる山は此山。

この玉はその玉矛に天津神の。つけて賜へる御しるしの玉。

此のはしら衛かためてゆ神ながら。萬のわざははじめ給ひき。

神業のあとにならひて人みなも。まづ固めてよたまの柱を。

わが御世の事は能しも神ならひ。習ふぞ人の道には有ける。

物知りといふは誰が言靈幸はふ。神代の道の本はたどらで。

孝德天皇紀の大詔命によりて。

帝の道たゞ一つこをおきて。他し小徑によらめやも人。

玉だすきのふみのはじめによみて添たる。

たま襷かけて祈らな世々の祖。おやの御祖の神のちはひを。

いざ子どもさかしら止めて現人の。神に習ひて親を齋かな。

大扶桑國考のはじめに。

日むかしの大樹の本の神語り。よもの木草の言やめて聞け。

おなじ書の末に

四方八方の木草人草東の。大木の本にはひ靡かなむ。

春秋命歷序考のはじめに。詠てそへたる歌。

百八十のから言むけて大君に。捧ぐるみちのたね蒔まし。

おなじ書をかきをへてしりへに。

日の本の神の授けしからの道。から人いかで開き得めやも。ひのもと人ぞひらきそめける。

三五本國考のはじめに。

さひづるや戎のむかしを祖國ゆ。馭めし道の本を見せばや。

弘仁歴運記考の巻首によみて添へたる。
靈幸神世のみよの來經を多み。よみ佗る世を讀わきて見む。
天朝無窮暦のはじめに。
石の上ふりにし世々の日並つゝ。よみ明してむ神の御紀を。
屋代弘賢翁のもとめに依りて。度制考のえらびを始むる時に。
人はよしからにつくとも我が杖は。倭島根に立むとぞ思ふ。
赤縣の世々の人らのたかばかり。我が皇神のたけに正さむ。
五十音義訣のはじめに。
すみの江の神の幸ひを仰ぎつゝ。學びの祖の功をへてまし。
久延毘古神の像をうつして。此神者。足雖レ不レ行。盡知二天下之事一神也。と神典に見えたるによりて。
まさしかる事のしるしは天の下の。物識人やとひて知らまし。
道のために思ふ旨ありて。仕へを退きける時に。
雲となり或は雨ともふりしきて。神世の道に身をや盡さむ。
故鈴屋大人の。一家のなりな忘りそねみやびをの歌はよむともふみは讀とも。とをしへ置れたるに。
われもをしへ子等に。
皇神の道な忘れそうつそみの。世の業はひのよし繁くとも。
常おもふ心を。人のよめると云ひけるに。
さかしらに言擧なせそ石上。ふるき神世のみちはえ知らで。
いみ屋にこもりて。神の御さとしを請ひ給へる昔を思ひ。神にいのる事ありて寐ける夢に。御さとしのごと思ひてよめる。
爲せば成り爲さねば成らず成る業を。成らずと棄る人のはかなさ。
菅家遺誡の中に。凡國學之所要。自レ非二和魂漢才一。不レ能レ闞二其閫奥一矣。と宣へる御語の下にかきつけ侍る。
漢にさえやまとに魂と敎へてし。神の御語のたふときろ哉。

この神の御語かしこみ我も人も。能く習はなむ御國
學びを。

靈能眞柱の書を板にゑらしめて。世に弘むること
をよろこび思ひて。やがて其書の末にかきつく。

負けなく世の人草に幸ふかも。吾がつき立る靈のみ
はしら。

またこの書よまむ人にとて。

青海ばら潮の八百重の八十國に。つぎて弘めよこの
正道を。

古道太元顯幽分屬圖說の末に。

現身の世にある事の本はみな。此ことわりを尋ねて
知らゆ。

うつしよも隱りたる世も悉々に。この理りをもれず
ぞ有りける。

故由ありてよめる。

言まくも忌々しかしこし挂まくも。あやに尊きこれ
の皇神。

かしこけど我が大神と今日ゆけに。仕へ奉らな萬世
までに。

畏くもわが大神ともちいつく。赤き心をはしくしお
もほせ。

かしこけど我か大神よ禍津日の。御こゝろなごみ御
靈賜ひね。

犯しけむ罪とふつみをかゝ呑て。靈ちはひませわが
大御神。

わか草のつまが病も我が身をも。靈ちはひませ神な
らば神。

我魂よ人は知らずも知らずともよし。たま幸ふ神の
しらせばしらずともよし。

おもふこゝろを。

なすわざを己が力と人や思ふ。神の道びく身を知ら
ずして。

世人のよく云ふ言に。君を思ふは身をおもふと聞
ゆるが。心にかなはずて。

靈ちはふ神に仕へを思はずは。わが身の幸を思はま
しやは。

孔子聖說考のはじめに。

赤縣籍にかき惑はせし聖らの。をそとまことの品定
めせむ。

おもふ心を。

今し世にはゞかる加羅の學び草。吹きなびけ見む神の息吹に。

富士の山を。

から國ゆ振さけて見しこの花の。國の鎮めとなりし山これ。

祖國のおやの大木と赤縣人の。めで榮えてし華やこのはな。

日の本の國のひかりと咲はえし。華の祖木のもとつ山これ。

石笛を得たる時に。

其名をば皇國に著くいはふえの。音を大空に擧むとぞ思ふ。

ふく毎にゑまひふゝまひふる禍を。息吹きふきやる天の石笛。

三五本國考のしりへに。

諸人の見る目やいかに篤胤が。見てし非目か見る人も有む。

弘仁歷運記考は。天保七年の頃に。淸書したる書なるが。此ほど四十とせ許り。うらなく交はりける學びの友に。十年ばかりこなた著せる書どもは。かねて契りおける如く。其よしあし議し給はれとて。稿本の成るがまに〳〵。次々見せたるに。甚く嫌ひて。いと異しき學ぶりよとて返せるを。此人にさへ棄られたる事の悲しく。且は憤ろしくも思ゆるまゝに。同書の末に。

葦原のひとりをのこのひとり言。曾富騰よりほか知る人もなし。

こは字を。自から葦原一夫とつけたればなり。

神は我が神なり。われは神の人なり。

神はよし神と非ずも我やひと。人たる道を踐まで有らめや。

神は我が君なり。われは神の臣なり。

君はよし君と非ずも我やゝつこ。臣の道を行かであらめや。

神は我が祖なり。われは神の子なり。

祖はよし祖と非ずも我や子の。子たらむ道を盡さで有らめや。

人

人はよし人たらずとも我やひと。人たる道を知らで有めや。

古史を獻らむと。京へまゐ上る時に。神の御圖を伺ひけるに。仙風道骨本天成。復遇二仙宗一爲二主盟一指日舟成謝二巖谷一。一朝引レ頸向レ天行。といふ御さとしを得て。

せゝらきに潛める龍の雲を起し。天に知られむ（のぼらふイ）時は來にけり

思ふ旨ありて。いへのはしらに書つけゝる。

益荒雄の爲べき業を知らで有れや。手弱女もする歌作はなぞ。

ある人のいへにて。論語なる一以貫之といふこゝろを詠めと云へるに。

百重やへ凝しき山のやま道も。直にとほらば通らざらめや。

思ひを述たる歌の中に。

われながら轉ばしかねつ我が心。神のするてし千引石かも。

美作國津山の殿の齋き祭らず。大國主神の御像のうつしといふを得たるが。彼殿の此を始めて祭らしゝ年に。領する所を增賜はり。止みて久しき大富てふ事も。再たび興し給へりとて。其殿人鍬形氏が。ねもころにうつし得させたるを。文政四年正月十二日甲子の日より。我も祭りて。彼處の富てふ物を。餘りあるまで當り得て。此神の道をひろむるたづきとせむ事を祈るを。あはれ大神きこし受け給へとなむ。

これやこの津山の富をちはへます。名におほ國の主の神像。

むつきのはじめ。まなびの窓に鶯のなきけるに。

我か家の春はけふこそ來にけらし。庭なる梅にほゝき鳥なく。

おもふ旨ありて。家のはしらに書つけゝる。

花鳥を吾も哀と見ては有れど。あはれと歌ふいと無りけり。

文政の六とせといふ年の十一月四日の日。山室山の御墓にまゐでゝ。

束の間も忘れずあればけふ殊に。偲び申さむ言の葉もなし。

をしへ子の千五百と多き中ゆけに。吾を使ひます御靈畏し。

我か魂よ人は知らずも靈幸ふ。大人のしらせは知ら

ずともよし。

　おもふこゝろをのぶるうたども。

生れ出し身はひくけれど學びには。千萬人の上にたたなむ。

人もをし人も恨めしやるせなく。道思ふ故にもの思ふ身は。

蝨のかる藻に住む虫の我からと。ねにのみなかゆ道思ふとて。

かみ長のすめらぎ坐せば髮長の。大臣ありし御世も有けり。

山に住む人ぞかしこききたなけく。陋しき人の多かる思へば。

つらつらに思へば思ふ世の中に。人の一人もなきぞ悲しき。

世の中の人をば人と思はじよ。人としもへば世に在られずも。

此人は人にやあると熟く見れば。否ぬ毛ものぞ人の皮著る。

あれ出し身は下ながらこの道の。説を雲居のうへに傳へむ。

我家に化物かひて頑たぶれ。くされずさらを怖して見ばや。

くたれずと言擧すとも目のまへに。化物いでば魂上らでや。

　庭の蟇。

我か家の島に飼おける谷蟆の。つまとふ聲をきかくし好しも。

谷ぐゝの荒びも往かでこゝの岩。彼處の岩と狹渡るがよさ。

　わがまなびのまどなる梅にきて。鳴くうぐひすの聲さへに。心から急がしげに聞なされければ。

我庭に來鳴くうぐひす汝さへに。など其聲の急がしげなる。

　この頃は夜なかあか時と云はず勤しみつゝ。學び業のいとまなきをりなればなり。

　おもひを述る

あはれわが常磐にかへぬ眞心を。ときはに受む人の子も哉。

一つ松ひとり立るは百千ぢの。木々のみさをの堪ぬ也けり。

天保の二年といふ年の。五月のつきたち頃に。屋代翁の來まして。時鳥の歌はいかにと問はるゝに。學びのわざのいそがしさに。得きゝ侍らずと云むもさすがにて。昔を思ひ出て。歌人の數ならぬ身はと答ふる時しも。不々如々歸々とかしましく鳴わたりければ。取あへず。

あなかまし吾になゝきそ時鳥。凝しき道のふみをへなくに。

伴信友ぬしより。たにさく二枚に消息そへて。相知る人々の歌を。まくら屛風にはりつめて。行すゑ偲ぶ種とさせむと思ふを。いかで例の道々しからず。世の歌人風なる。みやびの歌をとこひおこされたるに。

思ひきや我かふみ習ふ道ならで。うき世の歌を乞はるべしとは。

君が知るあし原中の……………

或人世に道々さこそ云へ。歌つくり文かきつゞる業のみ。やごとなき事のごと思ひて。眞の道を問人まれなりと云ふに。からことを思ひて戲れに。

かき寫す角のふくれを愛る世に。眞の龍のつぬは振らじな。

うつし畫の龍めづる世は雲に飛ぶ。眞の龍の潛みこそせめ。

世に「上見れば及ばぬことの多かりき。笠きてくらせおのが心にといふ歌を。やごとなく言ひはやすがかたはら痛さに。

上見れば及ばぬ事の多かれど。かさぬぎて見む及ぶ限りを。

天保四年のくれに。己れにふるく屬まつへりしいきすだまの。ことし限り離るべくおもふよし有て。

學びには能く手まはると人はいへど。あしの廻らぬ歲の暮哉。

黃金はし足ずともよし足れりとも。學びの道のとほらずは如何。

道の爲に。しひて勉むること有けるをりに。

かゞじ物ひざ折ふせて道の爲。をろがみわりく足の痛さよ。

老子の………

諸々のよきに心のうつる世は。たゞ道のみぞ小徑ゆくなる。

わがにき魂のかたかきたるに。
萬世にゆきても見まし靈も幸はむ。我が言をよしと能く見むよき人のとも。
文化二年六月廿日の日に。をとつ年あかもがさにてうせたりし稚子の。三回忌てふ後のわざすとて。太田持兼ぬしの妻の。わすらればこそ思ひ出さめと詠るを。けに理なることに思ひ出られて。
偲ぶとは忘るゝからの言の葉を。我身の上と思はざりけり。
忘れねば思ひ出ねど然すがに。けふと思へば面かげにたつ。
又外より歸りし時など。未だ腰刀をもとらぬ間に抱き取りて。うらがしつる事など思ひ出られて。
劔刀身をも放たずたむだきて。泣なぐさめし稚子し所思ゆ。
さきの妻が靈のみはしらをよみて。
靈ちはふ神のまことをます鏡。かけてさやかにとける眞柱。
先妻の。をさな子二人を置て。なくなりける後に
阿波禮しる身こそつらけれ左右に。事の心を思ひつづけて。
赤根さす日は陰りなく照せれど。子を思ふ闇は明らざりけり。
おや心しるや知らずや子心に。わりなく人を思ふあはれさ。
思ふこと鶍の嘴のくひ違ひ。あなやうき世は住うかりけり。
天地の神はなきかもおはすかも。など此禍を見つゝ坐らむ。
人言を聞かぬもつらし聞くもうし。正にこたびは聞てあしかり。
常なるは實々しげに人もいへど。變れる事にまめなるは無し。
哀てふ事の限りを知れとてや。世の憂きことを吾に集へけむ。
うみの母がまた出來とも此母が。心くまりに豈しかめやも。
義勝が吾を守らふと牙をかみ。怒りつ泣つすさぶわりなさ。
しなとべの神に祈りて義勝や。其子たのむと呼ふは

かなさ。
親心斯くとは知らにつれなしと。恨みやすらむ其子
心に。
やごゝろに物思ふ吾を紫の。うつりごゝろと人は云
ふなり。
子を思ふやたけ心をこゝろなく。癡ごゝろとぞ人は
云なる。
五尺の身はみな膽のあつたねも。子を思ふ道に惑ひ
ぬる哉。
人に指さゝれぬ吾も子ゆゑにぞ。しれ者としも侮ら
れぬる。
癡者と人は云ともよしゑやし。子を思ふ道を盡さゞ
らめや。
人ごとをしげみ言痛み中々に。世に在がたく思ほゆ
るかな。
世の人を皆わが子ぞと思ひつゝ。など生の子をかく
思ふらむ。
あはれ我が心を掛ておだひしく。事治めする人のな
きかな。
夢に大名らしき人あり。前に事執る人もありて。
甚く我をいやしむる狀ながら。問ふことのあるに
や。猛くふるまひて呼立るを。いとをかしと思ひ
てよめる。
猫の身に虎の皮ける大名もち。おらび呼ぶとも我動
かめや。
おもふ旨ありて。
加羅國を段つき分てくる葛。くるや〳〵に引きや寄
せなむ。
よらずとも引かではおかじ大船の。八十綱挂てもそ
ろ〳〵に。
漢國をきだつき別つとるかしを。こゝに衝立おゑと
言まし。
事しりの祖ちふおやも靈幸ふ。神のむすびの結ひ得
てこそ。
いと青々しき人の。著述ものせりと云て。我は顔
に指出すがまゝ有るをみるに。片腹いたくて。
鳥のなき島にしあらば任他あれ。とり有る里の蝙蝠
やなぞ。
故由ありて
蒼蠅の空をとぶにもしかぬ身の。面がつ物は學びこ

そ有れ。
氏邇袁波は人自から知るものと。此書見てもしるくぞ有ける。

この頃世に。級戸の風ちふふみを著せる旨人の。甚く用ひらるゝ由をかたる人あるに。伊勢貞丈ぬしの。目しひ人千々人々と云れし言を思ひ出て。

目しひ人千人々々の世の中は。めしひのはかせ用ひらるめり。

斯て後に。級戸の風など「云ふ」妄なる書等を見て

旨目びと何で知らまし百足らず。八十の隈手の道の奥かを。

しるといはゞいざ言問はむ書の名の。級戸の風の色は如何と。

目あき人あまた旨に手を携れ。橋かき渡るそこひにや有む。

めしひやと博士と頼む家はしも。並て内翳を病む者と知れ。

此ころ言靈といふことを立て。いと喧がしく云ひ誇らふ人らありて。何くれと書どもかき著せるが。其は言靈の神ありとしも知らずして。其いふ言どもいと拙く。はた附會の事のみ多かるがかたはら痛くて。

馬糞こる石のことだま何かせむ。我が赤玉の眞玉し有れば。

いさゝか思ふよしありて。

今し世にいゆきはゞかる古への。道の眞中にたつ我やなぞ。

くらつぼに蹬蹈はり遠祖の。たけき其名をつぎたてよとや。

老猿のやれ肩衣つけて。皷案（ケンダイ）にふみをおき。かたはらにとちの實三つありて。子ざるあまたに講説する狀をかゝしめて。

朝三つの杼の實分て子をあまた。敎ふる猿の身こそつらけれ。

おのれ畏くも。皇神の道をとき弘むる事に仕へ奉らむと。此學びの業を開き初つるより。この天保の初め頃までに。凡四十とせ許りに成ぬるを。其はじめよりして。何くれとしりうごち。かき亂さむとする者どものかはる〲出たりしを。或は論

ひすて。あるは言むけもして。斯しも說き弘め來
つるを。今はたさる類の枉者の多かるを思ふに。
かくとき弘むることそ。己が業にはあれ。此道は。
高くたふとき皇大神の正道なるを。いかでかも妨
ぐる事を得むとは思ふものから。然すがに煩さく
憤ろしくも思ゆるまゝに。をりにふれてよみいで
たる。

四方やもゆ刺しくる風に色かへで。高根に立る一つ
松あはれ。

やま犬のそらに吠とも雲にのる。天の磐船たゆたふ
べしや。

さきつとし　尾張殿より。道い學びに功しき由を
めで給ひて。御米賜へるにかはりて。けふしも。
何らの御おきてに違へる事の有けむ。學びの業は
いさゝかも怠ることなきに。此のち賜はすとききこ
え給ふに。甚かしこく。むねつさふたがりてかく
なむ。

今はあさ三つの宷もなし老猿の。土をはみてや神習
はなむ。

朝三つの宷さへ召れつけふよりは。子らに土はめ道
敎へてむ。

三つのみは皆めさるとも我しなじ。新具蘇姫の坐む
限りは。

たのみなき人のみ多かるを。憤ほり思へるをりに。

人おほきひとの中にも人のなき。世に生れてし我や
何ぞも。

故由ありてよめる。

いぬ山にさゝやまかてゝ蔽ふとも。高光日のかげは
隱さじ。

おもひをのぶる。

今し世に問ふ人もなき久延彦の。足行かずも道にた
たなむ。

まが神いなほ人の耳ふたぐらむ。わが眞言をし開く
人のなき。

思ふ旨ありて。根ぎしのさとに家をうつすときに。
水戸殿へ御いとま申しに參りて。もの申す人に。

今し世にひく人もなき道の奥の。あだゝら眞弓張ず
も有らなむ。

天保七年夏より秋かけて飢饉にて。人々うゑに苦
めるをりに。松の根をほりて。松根白皮丸と云を

製りて。人々に與へけるに。

いざ子等うゑな變ひそ常しへに。松の榮ゆる御世にし有れば。

おのれ。安永五年丙申の歳といひけるとしのはづき。寒露といふせちに入れる日の生れにて。ことし天保七年と云としの。八月の二十日まり六日の日は。いはゆる本卦がへりに當れば。子ら孫らをしへ子など相議りて。世の習はしの如く。其日ほぎ言白さむと云ひいでたるに。子等の心は。けに然も有なむと諾ひて。

言靈の幸くるまにまに祝ひてよ。ともに千世へて神習はまし。

六十とせを一つの數に計へつゝ。玉の緒長く結びとめなむ。

おなじ祝ひにほぎうた贈れる人々にかへし。

むそとせの一世を過て又更に。うぶ聲揚るけふにも有る哉。

同じをりに錬胤。

若えます父の面輪にみな人の。ほぎの效しを見るぞ情しき。

さきつ年ごろは「かぐじもの膝をり伏せて道のため」云々など詠ることも有けるに引かへたる。今のしづけさを思ひてよめる。

秋はてゝ問ふ人もなき久延彦の。足あるかずも道に遊ばむ。

天保十二年と云としのむつき。江戸をたちて。故郷にゆく道すがらよめる。

青蠅のそらをさぶ世に恥る身の。おもてを照らせ玉桙の道。

おほそらに豐さか昇る朝ひこも。しばし林のかげ蔽ふめり。

高神の力憑までひたぶるに。我がほてさゝむ益荒雄もがな。

七十近き翁が歌には。似つきてしも聞えずなむ。

おなじをりしも。むつき十三日節分なりければ。

やよ鬼よ汝にや似るか江戸人の。吾をしおにと鬼逐ひしつ。

ふるさとに行くみちすがら詠る歌ども。

家をいで身を捨てこそ今し世に。いゆき憚る道にたたまし。

武藏野に棄られぬとも久延彦の。また秋の田に立榮えまし。

わがみちのつひに伸べき驗とて。しまし屈まる時も有けむ。

下野國仁良川に在けるころ。銕胤が許に。江戸につかはしけるせをそこのはしに。

ますら雄と健びし我も家にある。孫らし思へば涙ぐましも。

にらがはを立けるときに。

群鳥のあさたつ我を群鳥の。むらがり祝ふけふのまとゐか。

いにし寛政の七年と云ひし年に。江戸に出て。四十とせあまり七年を經て。ことし天保の十まり二とせと云年の四月。こゝに歸りて。けふみな月の晦日の日（これイ）に。

ふる郷の湊の水戸に禊して。わがきしきぬを脱ぞうてつる。

睦魂のあへる友とちおりかづき。祓ひ淸めしけふの情しさ。

ながつきのはじめのころ。甚くむすぼゝれたる事のありて詠める。

張る弓の放ちもあへず秋の田に。又たつ足もなき曾富騰かな。

ある處の紅葉を見て。

もみぢ葉に染る心もなには潟。蘆のかりねの夢の世なれば。

天保十三年正月の試筆に。こぞのむつき江戸を出る時に。「武藏野に ふむ道もなき久延毘古乃」秋田に立て言とひてまし。と詠たるが。その秋のころ。何くれとしりう言など聞えて。悲しくおぼえし事もありて。「張る弓の放ちもあへぬ秋の田に。云々とうち出たりしに。霜月になむ。君のいと有がたき仰せごと承賜はり。祿などおほく賜へるにそのしはすより。ことしのむつき始めまで。君の御世をし。千世に八千世と。神にいのり白せる事あり。其祈りのこと竟たる日に。はじめて筆をこゝろむるとて。

千世ませと君を祈りの久延彦が。古里にたつ春ぞのどけき。

青丹よしなら山風に四方八方の。草木も靡く春は來

にけり。
あをに吉し椅山がたの春霞。むさし野かけてたち蔽はなむ。

信濃國淺間山

八隅（さはみ）しゝわが大君高光る日の御子の。天地日月と共に限りなく。知し食ける（高知いきす一本）細矛。千足國中に神ろぎの。大山祇のいさをしく。國の鎮めと神ながら。並たて坐せる山はしも。多に有れども（かる中にイ）ちはやぶる。淺間嶽は眞篶かる。信濃國の國中に。神さび立り此國は。國ちふ國の其が中に。日高見（いや高きイ）の國國中の。山にしあるを此山は。その山國の上にしも。立てし有れば山の上の。山なる故に此山を。さしも高しと人しらず。また此山に神ながら。います神をも尊しさ。人は思はず其神を。尋ねも問はず夕月夜。おほに過ぬれ。此をしも。あやに慨たみ師木島の。倭の國は言擧せぬ。國には有れど此を思ひ。吾は言擧す此山の。その石根はも大地の。そきへの極み蹈こらし。其高根はも足引の。山のまほらと天雲の。そらかき分て進り立ち。高くたふとくときじくに。烟たち立つこゝをしも。阿夜に向しみ靈幸ふ。神世おもへば此山に。おはす神はも人の世を。堅磐常磐に榮えしめ。惠まひ給ふ山の神。大山祇（ぞイ）の宇都の御子。石長比咩の常しへに。在す御山は見れどあかぬかも。

反歌　四十ぢまり（一本かく別にあり）四つのよはひをもゝかへり

いつ速き淺間の山に神柄か。分て畏く思ほゆる哉。

高光る日の大御神の。御子の命のしろしめす。神の御國の道はしも。さはしるき道。まぐはしき道にしあるをさへづるや。諸からの道々を。むねと學びて痒こやし。醒めず好きもていぎたなく。有るらむ人は頑たぶれ。狂れて有れば今さらに。論ふにも足らず其が中に。いと眞さやかにさくすゞの。鈴の屋大人の見しあかし。弘め給へる神の道を。習ひてましを其門に。入たる人のいかなれば。むねとはあらぬ歌文に。宮人さびてもち鳥の。かゝらひをるを……

五十音義訣を撰み著はせる時に。五音を折句にしてよめる。但しら行はあづからず。

アマガタリ。イツラノコヱヲウツシヨニ。エリトヽノヘテオホヤシマ。ヤソモロビトノイヤトホニ。ユユシキカモヨエシトヨク。ヨリキテアレバワレモカ

ク。ヰヤビタフトミウムカシミ。ヱミムカヒツヽヲヂナクモ。カキミサグリミキヽノヨク。クリコトシツヽケヤケクモ。コトタマノヲノサダマリノ。シゲレルミチヲスグヤカニ。セバメヒガメズソノカミノ。マゴヱタヅネテミチノクマ。ムカシノマニマメヅラシク。モトツコトバヲハフラサズ。ヒキモヽラサズフルノヤマ。ヘナレルヨヲモホガラカニ。タテノコトヲシチヾハタノ。ツイデタガヘズテモスマニ。トリテノコシテナガキヨノ。ニツカムヒトニヌキノコト。ネギゾスヽムルノミゴトヤコレ。

反歌

天皇のかしこき史の本つ辭を。まづ解わけて經や綜なまし

天なるや乙棚ばたの織る機も。まづ經を綜て杼をや取るらむ。

　天保十四年と云年の夏の頃より。病に臥たりけるが。ながつき十まり九日の日。こゝちことによからず。今やしぬべくおぼえしかば。

思ふ事の一つも神に勤めをへず。けふや罷るかあたら此世を。

年まねくしたひ奉れる君に。始めて見えまつれる事の悦びきこえ申し。はた年ごろかき著はせる書ども奉るにそへて。

石の上ふりにし世々の學び草。つみ見む事を君にまかせて。

　土屋清道が。小竹眞篇ぬしより。故大人の「かくながら色もかはらで桃の花。もゝ世も千世も見る由もがな。」と書給へるを。ゆづり受たりとて見せたるが。歌をと乞まゝに取あへず。

かくながら面變りせで桃の花。百世も千代も見る人ぞよき。

　本居大平翁の六十の賀に。寄レ木祝。二首

木の國の有功の神の神奈備の。五百枝賢木のさかえませ君。

大八島くぬちこと／＼殖し木の。榮ませ君千世に八千世に。

　石原正明ぬしの。わたましの祝ひしける日。翠松因レ軒と云ふ題にて。

いにしへを互にかたる君えてぞ。軒端の松も色やそふらん。

幾千世を千世に契りて軒かこむ。松の緑のいろあらたなる。

北川の眞顔ぬしより。鴨にたにさく添ておこされたり。其詞に。此鳥よ。かねてみあへの料にとて。たくはへ置つるを。右衛門のかうが櫻鯛ならねど。あしきかもぞつくとて。いそぎ參らすになむ。味はひそこねずは。めし給ひね。と有て歌に。「來ますやと鳥梅ちる日までおきつ鳥。かもつきぬめり君を待まに。と有ける返し。

賜物の鴨とく島にいをさめて。へつくり待む君も來まさね。

また同人に。古史徵を贈りける時に。彼方より。古史徵といふふみ給はせけるよろこび申とて。物の名によめる。「ふみまどふ雪の越路よ嬉しくも。照らす春日に今ぞ解ぬる。とあるかへし。

蹈惑ふ雪のこしぢようれしくも。てらす春日の君が言のは。

ある人の求めによりて。師のみづから。其御像の上にものし給へる。師木島の山跡こゝろを云々。といふ御歌をうつしけるをりに。

志貴島のやまと心の人とはゞ。朝日にゝほふ花や見えまし。

國さかれる人の來ませるが。年經て歸らるゝ時に。

遠くよりきませる君を悅べる。昔にかはるけふのはなむけ。

山室山をよめる。

天の下に群山あれど山むろの。山にまされる山はあらじな。

やまむろの翁は道のおやなれば。花さへ花の祖にぞ有ける。

山室をあやに懷しみ麓なる。草のかき葉もうらやまれぬる。

あふみの茂彥。道に心さし厚くて。年ごろおのが事を。神に祈りなど。深く思ひ入れるに。ことし文化十四年丁丑十二月十日の朝。夢にめでたき歌を授かりたるを。日ごろ祈りつる神に奉るとて見せたる。その歌は。「花も實もむかしを思ふ春の來て。いろも變らぬ秋にぞ有ける。」とあるを吾も。

花も實もむかしを思ふ春の來て。色はかはらぬ秋ぞ久しき。

小島惟長ぬしのわく子の。初の幟たてらるゝに青龍刀といふ物を祝ひまゐらすとて。

萬世に御名を天にもひゞかせよ。龗の神のい吹く太刀ぞも。

をしへ子なる吉田□□が求めに依りて。清けき板に。己れ自から筆とりて。其家の祖々。うからやからの靈名をしるして。其裏に。

靈ちはふ神の御末の祖々の。いつく其子を守らであらめや。

又其中には。おやにも非ず親族にも非ぬ物から。祭るべき由ありて誌せるも有れば。其こゝろを。

はらからの脈(すぢ)異なるも睦魂の。あひて祭らば幸はざらめや。

鈴木易五郎が孫に。岩松といふ名をつけて。

言靈の幸はふしるし常岩に。榮ゆる松のよはひさだめよ。

中島丈助ぬしの木ノ國に歸るに贈る。

ふみわくる道こそかはれ睦魂の。互にかよふ君ぞともしき。

讀む書はみなからながら漢意。もたらぬ君が別れかなしも。

屋代輪池翁の。隅田川の古き橋柱のうもれ木を得られしを見て。

すみだ川八尋のそこの埋木の。うもれも果ぬ神の御世かも。

思ひきや千とせうもれし橋柱。をり得て君が家に見むとは。

京に上るとき。大津宿より大雨ふりければ。

心ある雨にも有かな大津邊に。旅のけがれを洗(身禊イ)ひこそすれ。

おなじをり。道を歩行けるに。こゝは牛道なりと。いとなめげに牛追の云をきゝて。たはむれに。

やよ牛よなれのみ行くか牛道を。吾をもうしと人は云をや。

京に在ける時に。下鴨の今大路秀名ぬしと魂あひて。其家に一夜とまりけるに。此家はしも。應永の頃作れるよしの棟札ある古屋なりと云はるゝに能見れば。實にその趣しるく思はれて。

室壽をいかに祝けむ千世ふれど。なほ萬世を經べき家かも。

或人のあらはせる。何の弘道とか云ふ書を見て。

玉鉾のさほしるき道はえ知らずて。しき山中の狹道ぞこれ。

しかすがに商人なれや人の幸。かき集めたるこの書みれば。

何道も捨ざる狀にかきとりて。商人ごゝろ直に見えけり。

まさみちを弘むるからに横道の。其枉りをしいはで有らめや。

京にありける時に。或家にかきおける歌ども。

細はしら小屋の醜屋に鈴の屋の。名につぐ鐸の名こそ惜けれ。

腐れ屋に鐸屋としも名をつけて。宮人さびす人ぞをこなる。

うごろもちかき抓みたる屎鵄の。そらとぶ鷲に心こそおけ。

あき人の宮人さびて歌は詠めど。商人ごゝろ隱しあへめや。

紙をくふ毛物が熊の皮ごろも。著たるはいかで包み果べき。

然すがに龍の子也と知てあれば。細せゝらきに住せ兼つも。

時得ては雲起すとふ龍の子を。ひたし兼けむ此くたれ屋に。

せゝらきに何で入れぬや大舟も。のむと云なる大魚の子を。

虻や蚊のいかにつくとも牛の角。さしあへめやも其牛の角。

人の七十賀の祝すとて。歌こひけるに。

萬世も千世もかぎらでありぬべし。心のまゝの齡かさねて。

文政七年の正月に。堀家政富ぬしの國に歸らるゝに。その御神に。こたびの事まをして。吾が爲にをがみて賜へとて。禮代の物などことづてゝ。馬のはなむけに。祝ひのみき酌かはしつゝ。詠置る歌どもをも贈る。

眞金ふく吉備にましつゝ東なる。吾をさへ守らす神の畏さ。

吾はもよ宇都の子えたり吉備津宮の。神の惠にうつの子得たり。

八百萬世にな忘れそ八百萬。世をとぞ思ふけふのこころを。

も丶千たび來まさむ君を春雨の。さそひ顔なる別路やなぞ。

同じ人のわく子輝丸ぬしに。藏板の書を贈る因に。

稚くともはや固めませちゝの實の。父にならひて倭心を。

芳はしき五百名を負て大前に。千世に仕へよ神ならひつゝ。

文政十一年九月十三日夜に。嫡孫の生れける時に□□晃彦ぬしの居あひて。「なが月の月の光のそはりつゝ。うまごのよはひ長き五百秋。」と詠て出しける返し。

いはゝれし言靈をしも長きよの。月の光とおひて經なまし。

河村□□ぬし。その遠祖の名を顯はし。家を興さむと志して。九とせがほど。江戸に下り居まして事はかり。文政十年の春。本意とぐべき時にあひて。國に歸らるゝに。馬のはなむけすとて。禮記なる。君子論ニ撰其先祖之美ニ云々。てふ語を思ひて。

遠つ祖のよき名と共に我名をも。世々に傳へむ此人あはれ。

かもの雲錦ぬしの。七十の賀せらるゝに。己もをりにあひて。京に上り居ければ。人の誘ふまゝに其むしろにまじらひて。

七十ぢの今日の祝をいや千たび。重ねむ君を吾もいはゝむ。

はじめて大平翁に逢はむと。紀國にものして。詠て出せるうた。

武藏野に漏墮てあれど今更に。より來し子をも哀とは見よ。

春庭翁にはじめて逢ひけるときに。

こひ／＼て有經し大人の面影を。其御子に見るけふの情さ。

宮川晁晧ぬしの。京に上らるゝをりに。

あはれ吾が赤き心を雲の上に。きこえむ道よ君ひらかなむ。

武藏野のをぐきがきゞし雲上に。はや言をへて早歸りませ。

こしの國なる細貝邦太郎が。上杉篤興して名簿をおこせて。おのが教子となり。はた余が一字をと請まヽに。篤資と負せつ。さるは。

名につねの心を見せてこの道を。篤く資よと思ふばかりに。

松浦道輔がしはし國にかへるに。其肩をうちて。

恙なくはや行て來と添てやる。わが言靈をたヾにな過しそ。

松田春平ぬしが。來しほどもなく。石見國に歸るよしをきヽて。

石見のや志都の窟も問はぬまに。そで別れなむ事をしぞ思ふ。

吉備の道の口上道郡百枝槻村にます。岩熊八幡大神の宮人。坪田中枝をぢなむ。ことし文政八年と云とし。其よはひ六十まり七つにて。業合大枝して名簿をおこせける時に。「をしへ子は我ぞまことのをしへ子よ。教へのおやに手をしひかるヽ。と有けるかへし。

山口はまづ手をひきつ神路山。引つひかれていゆき登らむ。

またかくも思ひつヾけヽる。

をしへずは親とや言はむ此人を。教子としも云ぞなめしき。

言靈の幸はふ國ぞ其よはひ。ひとヽ計へよ千世に子と見む。

上總國市原郡。賀茂大神宮神主。平田齋宮常富ぬしの養子。丹道ちふわか人。ことし文政八年十二月。其職の御許狀を請け。呼名を出雲と改め。はたおのが弟子となりて。名をもつけてと乞ふまヽに。常任と負せ。祝のうた添て與へける其うた。

加茂川や淸きながれの常とはに。神の任しを忘るなよゆめ。

土井忠隆ぬし。己がをしへ子と成りて。國に歸る馬のはなむけに。

淡路しま通ふ千鳥の音絶ず。おとつれ問はせ國へなるとも。

稻垣守勝ぬしの。殿より御目付といふつかさに召れたるをほぎて。眞澄のかゞみをまゐらすとて。

まさやかに見あかす物とます鏡。かけし心を照らし見よ君。

羽田野敬雄が家の書齋の額を。榮樹園とかきてと乞まゝに。其をかき。はた首尾に詞をそへて。歌にもよむべく書ておくりぬ。其うた。

古ことの道ふみ分けて榮樹園。香をかぐはしみとふ友や誰。

寺部宣光が。家號をつけてと乞ふまゝに。香案園とかき。歌をもそへて贈るそのうた。

橘のかぐのみ園にいほしめて。とこ世に神を齋くぬしこれ。

天に保つといふ御世の。四とせと云ふ年のはづきに。和泉利愛が。母刀自の齡を賀ふと。その本つ國伊豫にゆくを送りて。其前にとて氣吹き出たるほぎ言

言靈の幸はふ國ぞこれの御國は。

七十まり七つのよはひ今年より。一とかぞへて萬世に坐せ。

いはふその子のこゝろだらひに。

日向大隅薩摩の三國をしらす。大名もちと世に稱へ申す守の殿の。古こと學びを好み給ふこと聞て。御もと人吉井ぬしゝて。我が著はせる古史成文をはじめ。書どもくさ〴〵奉りしかば。名はとくきき知りて有きとめで宣ひて。御めし八丈と聞ゆる絹。ふた卷賜ひたりけるを。衣物に縫はせ著て。吉井ぬしがり。よろこび白しに參る門いでに。

ものゝふのいや丈の絹たばり著つ。いでいや猛き道にあえなむ。いでいや廣きかげを仰がむ。

後に聞けば。奉れる書どもは見給ひをへて。めでの御さかりに。此書はも。國人にも見せよとてその御國におくり給へる由なるに。憘しさ云はむ方なくて。

天皇のもどつ御國に古ことの。みち榮ゆべき時は來にけり。

　高玉安兄がむつの國にかへるに。

玉桙のみち遠ぐとも道の奥の。みちある國とふみ開きてよ。

をしへ子なる川崎重恭。その父千鳥菴のをぢが。七回のまつりする日に。吾もむつましき人なりしかば。片歌二首よみて。其前にとて贈る。

　その一。

千鳥のや天がけりてゆなゝとせとかも。

其二
波斯祁夜し其うみの子がけふの手むけよ。

尾張國の一宮眞清田神社にて。久しく止たりし短冊祭といふ事を。また始むる由をきゝて。句の頭ごとにその言をおきてよめる。
一速くのみや禱らむたにの戸に。さく花折て祭りある日は。

樋口英哲が國にかへるに。
ますら雄や越の名におふ白雪の。迹なき道にふみな入そね。
進りたつこしの益荒雄ます鏡。かけてとぎてよ倭ごころを。

法元御楯がその君のめしありて。ことに祿賜はりぬときゝて。
さつ人の幸賜はれる今日よりや。御楯の力いやましぬらむ。

松平冠山老侯の御女の。六つになり給へるが。稲目瘡にてうせ給へる後に。佛の法の尊きよしなどあはれに歌によみおかせるを見出まして。其を形木に彫らしめ。我にも賜ひて。これが歌よめとありけるに。辭み申せどわりなくて。
今や知るふるくぞとひし鷲の山。かゝる雲居の法の驗しを。

またひそかにかくもよみける。
ものゝふの八十氏人も惑ふめり。古屎鵄のかゝるしわざに。

和泉利愛が。新室を作りたる家見に行て。屋船神に。玉の色ちふ御酒たてまつりて。
百八十（八十色のイ）の玉はあれども久志のかみ。少御神の玉のいろこれ。
眞木ばしら太き心をふり立て。豊ほぎわたるいへぞ久しき。

農業餘話をあらはせる。小西藤右衛門篤好に與ふ。
くさ〴〵の聖なにせむ齋庭穗を。八束に作る田人し有れば。

天保四年といふとしのむつき二日の日に。宮負定雄。みちのほとりに。御かげ參りせる者のすげ笠に。大御神の御名かき奉れるを拾ひて。家にいつき。御祭仕へ奉りける其夜の初夢に。參宮し奉れる神の御にはに。神馬のいさみける狀を見たるよ

しを。年の始の祝ひに來て語るに。
皇神のその夜の夢や賜ひけむ。みちに幸ある歳のしるしに。

下つふさの國海上郡なる。千本松定倚をぢが。米の賀のもちひを。其子恭壽に持せおこしけるに。
八十ぢまり八つの齡を八十ぢまり。やそぢ數ふる此翁これ。

安藤直彦が弟。常藏童子が。はじめて來けるに。玉たすきをよましめて後に。世のかぎり此心をな忘れそとて與ふるしをりの歌。
いたづらに文字な數へそ數へずも。蹈行て見よ道の奥かを。

西田直養ぬしの。屋代翁と丶もなひ來られたるに。互にへだてなく。神世の道の語らひしける後に。あまた年うたがへりし事ども。春の氷のとけゆくが嬉しとて。「幽事の顯事のくすしさを。しり得る君ぞ云々。と詠みおくられけるに。取あへず。
我も友なしと歎かじかくり事。あらはに語る君を得つれば。

阿部米花君の許に。始めて參れる時に。彼君の。「むさし野や遠きいふきの山おろし。いかにふけばか音づれぬらむ。と云ひ出られたりければ。
音にきく（むさしのゝイ）掘兼の井やいかならむ。吾人なみに汲て見ばやと。

おなじ君の。しば／＼せをそこ賜ひ。みづからとひも來まして。其わぐ子のうひかうぶりし給へるに。歌よみならぬ己にしも。祝歌よめとしひらるるに。
ますらをの香はしき名をかむり山。高く傳へむ千世の初めか。

ことし天保の六とせといふ年の。五月の二十日まり五日の日は。楠正成朝臣の。身まかり給ひし五百とせにあたれるに。此朝臣の今はの時の言を。老子の死而不亡者壽。と云はれし言におもひ合せてその御靈の御前にとてよめる。三首。
天皇の御楯とましゝそのかみの。勇みおもへば畏きろかも。
きみの爲め謀らしゝ事遂もあへず。罷りし今日ぞ彌偲ばるゝ。
つるぎ太刀手に抜もちて言たてし。君が壽は常しへ

にこそ。
年ごろねかひ思へる大社の龍它神を。その社の上官佐草美清ぬしの。手づからもて來て賜へる事の。いと〳〵うれしく。そのよろこびきこゆとて。
そこたから御たから主と常石に。君が惠みをそへて仰がむ。
佐草美清ぬし。その子文清ぬしと共に。己がをしへ子となりて後に。國に歸らるゝ馬の鼻むけに。
八雲立ついづもの國は遠しとも。とりの通ひは常忘らすな。
平亭銀雞ちふ人はも。其七世の祖より。くすしの道をわざとせしを。今しは戯詞のふみかきすさぶと聞ゆるは。最あかぬことゝ思ひたるに。此ほど日ことの心得てふ物をかき。今はたこの救荒襍記をしるして。いかで一言をと請るゝに。とり見れば。然すがにおやの子なりけりと。思ひ給へらるる事どももあるに。
三世のみか七世もたりしいく藥。世に知らしむる此人あはれ。
柴崎直口が。其父の肖像を畫がきて。これに物書てと乞まゝに。この柴崎のをぢは。我がをしへ子の中にもむつび深く。古史を撰べるをりに。其家にてものせしことなど思ひつゞけて。
見し儘の其現し身の影にそひて。なほ古ことの道守らなむ。
播磨國印南郡曾根村なる。天滿宮神主曾根陸奥守直繼ぬし江戸に下れるをり。己がをしへ子となり。はたかの神木の切たるを。いさゝか持來てくれられたるが其うたをと乞はるゝに。
菅原の神のうゑてし曾根の松。笠きせてまし蓑きせてまし。
阿部正信君の別業に。稲荷祠をものして。神祇の歌をあつめ給ふに。己にもと有ければ。
にひ宮に太知ませば宇迦之賣の。御靈のふゆや彌增ぬらむ。
ゆゑありてよめる。
菊水の清き流れの末をだに。などやぶさかに汲にごすらむ。
梶山□□ぬし。浪速なる櫻宮のあたりを。たゞに見るごと寫させて。これに歌をと乞はるゝに。高

津宮の故事をおもひて。
千世ふれど移る色なきこの花の。さきの盛りを見る人やたれ。
甥なる大和田盛胤が子の。八つになれるに書て與ふ。
外へ出てをとなしくせよ家にては。能くもの習ひよき人になれ。
丹生清兵衛□□ぬしの。そのかみ其操を守られしことを賛てよめる。
蒙ふりし君が御言を千引石の。すゑてたもてる武士あはれ。
するがの國人。新庄道雄の肖像に。
よの涯り勤しみ成せる國つふみ。くにの鎮めの山と盡せじ。
彌生のなかばころ。梅津君のさくらの花盛りに。その林にてみき賜はり。人々と共に萬葉をよみける時に。
花細けふのまとゐにならの葉も。繼て榮ゆる時かたまけぬ。
この庭に此書みればよき人の。よしと能見し吉野し思ほゆ。
櫻ばな折かざしつゝ楢の葉の。名におふ道を語らくよしも。
花見つゝ此ふみよます此君の。やまと心は問はずても有む。
こゝち煩らひけるをりに。其病ひをとはして。穴門君より。鷹のさぎを賜はりければ。
畏きやあなどの君の賜ふ鷺。よもきが島のみつぎにや有む。
泉釜十郎に與ふ。
玉桙の道の長手をくるかづら。來る日のしげき人やこの人。
富士山の歌よみけるついでに。此山の。もと華の木なりしほど。漢土より見えしを。かの國人のめでゝ。扶桑木と名づけし。其名のかなを句ごとの頭におきて。
ふりさけてしのひし華のやまそ此の。くにの鎮めとほくや此山。
我はしも五尺まり五寸ばかりの長なるを。むげにひくき烏具那のごと。あなづり顔に云へる事知の。

たけ高きがありけるにたはむれて。

たなひらに吾を侮づる者あらば。踊りてかまむ其鼻づらを。

車屋寅吉。今の名は白石平馬が。神の道を修行に。山に入るによみて贈る。

文政三(庚辰)年十月十七日

寅吉が山にし入らば幽世の。知らえぬ道をたれにか問はむ。

いくたびも千里の山よありがよひ。事教へてよ寅吉の子や。

神習ふ人のよろづ世いのりたべ。と山人たちに言傳をせよ。

よろづよを祈り給はむ禮代は。我が身のほどに月毎に爲む。

神の道にをしくこそ有れさも無くは。さしも命の惜けくもなし。

宮比てふ詞の意を述て俳諧歌場の老翁をほむる詞ならひに歌。

美夜備さは宮比神の御いさをしに似て萬づのさま優はしく雄々しくそが中に自づからにをかしみ有て見る人これを感したひ人のなからひをも能くなごして事により時によりては狂言誇語をもうち交へて天地をも動かし鬼神をさへに哀れと笑はしとよもすばかりのいさをし有るを云ふ言になも有ける吾が友北川の眞顔のをぢはも宮比神のいかにその御靈を賜ひたりけむ言ひといひ作りと作る歌ごとに詞ごとに實ありて花やかに戲詞のをかしみはた自づからに備はりて面しろく世にたぐひ無き戲笑歌の歌仙になも有るを里人の諸人はさる美夜比翁としも知るや知らずや久方の雲のうへなる大宮人はもいと疾くきこし知らして或は誹諧歌場の翁とも或は歌垣宗匠ともおして稱號たまへるを我なみ久しき友がきの其をうれしとなも悦ばざらめや此をめでたしとなも祝はゝざらめや。

宮備をのみやひをかしと雲のうへゆ美夜人ほむる里人もいざ。

いはひ日は九月二十日まり八日の日にて兼題は菊なりときゝて。

わらはびて今さらにくむ菊の露おもの千々世とのみや榮えむ。

てうち〳〵吾も合へなむ美夜比をの宮ひさかゆる今日のまとゐに。

巴提便臣の贊

八隅知しわが大君高光る日御子の。天皇祖の大神の。壽詞のまにま齋庭穗を。萬千秋の長秋に。天津日嗣と聞しをす。御食の御わざに樫木の。つぎて仕ふる膳。巴提便臣はすめらぎの。詔命かゝふりさへづるや。百濟國に御使に。しほの八百重を恙なく。いこぎ渡らひ眞雪ふる。旅のやどりに其國の。虎ちふ神に櫃の寶の。たゞひとり子の幼子を。竊み取らえき此をしも。あやにうれたみ天によばひ。地に泣つゝ朝にはに。ふりつむ雪の沫雪を。くゑ散かし跡とめて。斯が住む山の巖岫の。窟にいたり汝はも。畏き神と人はいへど。わが稚き子を取れる仇。むくいに來つと雄たけびし。かの獸の敵を見て。吼とゞろこし大口に。噬まむとするを左手の。奥の手もちて舌をにぎり。岩にふみ伏せ右の手に。取れる八握の劒もて。さして殺して愛き子の。仇をすなはち報いたる。臣のいさみの阿波禮ゆゝしも。あはれ雄々しも。

かへし歌

戎人の神とも神とおぢまどふ。その虎の舌きりし臣これ。

文政の十年と云としの十一月。屋代輪池先生。ことし七十ぢになり給へるが。其年賀を祝ふと。富久者有智。遠仁者疏德てふ語をしるして。己にも賜ひければ。其字を。句ごとのかしらにおきて。文字の數ほど。かく十首をひねり出たり。其は己が素より此道に拙きことは。翁のよく知り給へれば。見直し聞なほし給ふべく。見む人その拙きを笑ひもすべし。笑ふ門には福内に入り。鬼外に去るちふ諺あれば。此ぞ翁の年賀をいはふ。言靈の幸はふ國のしるしにや有らむ。

ふちやいかにふかく有りともふることの。ふみかく君がふでにしかめや。

くちぬ名もくちぬよはひもくるかづら。くるやくるやにくり反しませ。

はかりなきはま松が枝のはるの色を。はしなく見ませはる來るごとに。

うら若きうしのよはひをうちゑらぎ。うたひ祝はむうからやからと。

ちゞのふみちひろにつみてちよ經とも。ちかひてみますちぎりゆゝしも。

をちこちのをぢらも賀へをちかへり。をとこにならすをぢのよはひを。

にひみづににごりをみそぎにしの海に。にげいなむ鬼をにらみ追ふ君。

はつはるのはつ子に賜ふはゝき木に。はえたる玉のはえ渡らさね。

そらにしるそのよはひはもそのかみゆ。そめしふみでのその文字の數。

とこしへにとひ見む君がとほしるき。とみ榮ゐをしとよほぎまつる。

ふりぬれどくちせぬ御代のはるの色を。うら若えつつちとせ見よ君。

をりに遇てにぎはふにはにはづかしき。そへ言ほぎてされる筆かも。

右二首はふくはうち。をにはそとちう十字を。折句にしたるが。此は鋏胤が代筆のついでに詠みそへたるなり。

文政四年と云年のむつき二日の試筆に。竹を書きて。それに書そへたる詞。および歌。

竹の中に塞りて通らざる物を布斯といふ。「節の字（一本ナシ）これなり。其」節と節との。○間（長き一本よ）を余と云ふ。ふるく笯の字を書り。かくて竹の笯と云も。天地の間を世の中と云も。全く同じ意なり。されば世間に。憂き節もあり。平けき世をふるはいさ易く。うきふしを經るはいさ難し。よく此節をつらぬき。息吹き通らふを。操を守ると云ふ。阿波禮この竹の直く高く。千世を經て。雪霜にいろかへぬ操を觀つゝ。神習ふ魂の眞柱を立てむよしもがな。一二三四。五六七八。九十。百千萬の笯をふるは。いとも易けし。

ひとふたみよ。いづむゆなゝやこゝのたり。もゝちよろづの憂き節も。伊吹き通して竹の子の。笯ごとに千世をこめ祝ひ。このとほしるき天地の。有らむかぎりの萬世を。いやをち反り我も子等も。いや常石に靈幸ふ。神を習ひて石の上。ふりにし道に遊びつゝ。言さへづるや四方の戎。よこさの道を言向けの。力を合せ新玉の。あらため行かな。をしへ子どもや。

反歌

をしへ子に親より長の高かれと。萬齢いはふ竹の子ぞこれ。

文政四年辛巳正月二日試筆

大江戸の御城を見さけて。

あづま照る神の命の若御子の。いや繼々にしきます。これの大御城。大地の。そこつ岩根につきたつる。いかし御はしら天たらし。國たらすもようべなく。外つ國べ(人の)ゆおぢまごひ。まゐ來もよ。天地の。そこひの極みまぎぬとも。かゝるいかしき大みきあらめや。

ふりし事を懐ひてよめる。

安見しゝ吾大王。高照る日御子の。いやつぎ〲に高みくら。高しりいます細矛。千足の國は挂まくも。あやに畏くいはまくも。ゆゝしかれども天地を。はじめ給ひし天津神。神皇祖神の神慮り。はかり給ひて二柱。御祖の神にもろ〱の。大御言以て此國を。つくろひなせと御璽の。天の沼矛をたまはして。依し給へる御よさしの。御命のまにま二柱。御祖神はその矛を。さし下しまし海原を。こをろ〱にかきなして。成れる島根を御はしらと。定め給ひて大八島。うみなし給ひ天てるや。日月の神を始めまし。萬の神を生給ひ。其神々の御わざをも。そのほどに神よさし。依し給ひて天津神。神の命へかへりごと。まをし給ふと常宮に。鎮もりませば葦原色許男神は八廣矛。つかし給ひて八島國。修理り給ふと島のはて。くにの極に葦菅を。うゑ生しつゝ國かため。百八十國の祖國の。國の眞ほらと神ながら。さだめ給へれこゝをもて。あやしきかもよくしきかも。天の下には人さはに。滿ては有れど押なべて。直くいたけく山のそき。野のそきまでになり出る。物のことご〱美しく。足らひてあればそこをしも。あやに畏み輕しまの。明宮に天の下。しらし給へる皇祖神の。日知の御代ゆまつろひの。大御ゆるしを蒙ふりて。花橘の木の末に(末にしィ)。かゝる黏鳥其鳥の。あやも知らえぬさへづりを。言さわぎつゝ泣子なす。したひ奉りて千萬の。からの國べゆ國つもの。常世にいます少名彦。神の御つぎとそこたから。寶の極み大船の。ゆたに積來て玉の緒の。絶ることなく其船の。乾かむ間なく立またし。すめら御門の御惠

みを。得てしもがもと鶉なす。いはひもとほり鶉じもの。頂ねつきぬき鹿じ物。膝をり伏せて朝廷べを。拜みまつり常磐に。いそはく見つゝひさかたの。遠き神代の皇神の。定め給ひし故よしを。あやにゆかしみ玉だすき。挂てぞしぬぶかしこかれども。

かへしうた

石の上ふりし昔をしのぶにも。餘りてくしき神の御いさを。

越國なる敎子。上楫篤輿がをしへ子。小川茂常の子が。よく學びの父がいたづきを助くる由をつてに聞て。

あはれわが伊吹きの孫よ。まなばしら。學びの父がいぶきをし。氣吹たすけて越路なる。石根木根をもふみさくみ。醜まなぶりのしこ言を。氣吹拂ひてそのいぶき。吹はやめずて天の下に。いぶきもとほし狹霧なす。もろ〳〵蕃のしこ言も。いぶき拂へと氣吹のや。學びの祖父江戸（あづまよりイ）よりぞ。こしち遙に一と息に。いぶきておくる氣吹言これ。

反歌

名にしおふ茂常の名を上楫の。直なる道にわすれで思へや。

田舍わたらひしけるほど人のせちに歌をこふがうるさくて。

强に歌をなこひそ篤胤かいふこと〳〵の歌ならぬかは。

下つふさの國諸德持村なる金杉龍藏か己かをしへ子となりてまつ其名つけてとこふまゝに常長とつけて。

つねなかと名は負せつも常磐に長々し世を神にならへと。

小林美呂か大和めぐりに出るを祝ひて

庭中の阿須波神に三輪すゑて祝ひてまたむはや歸り來ね。

仁王と云ものゝ繪に歌よめと云ふに

石戸開の神の御威に神ころひ神にらみする仁王をかしも。

光格天皇の神あがらせ王ひしを恐み〳〵悲み〳〵奉りて。

天照す神の日嗣の雲かくれ夜（世）は常世（夜）ゆくこゝちのみ

して。

或人に贈り給へる

新玉の年の始めに笛とりて萬の禍を吹はらはなむ。

言む術せむすべしらに極りて尊き物は書と子ならし

下戸を見て猿そと貶云人の顔の赤きぞ猿にかも似る

つくりうた

（銕胤云、此より下に記せるは、文化の初めごろに、人々のすゝめに依りて、題詠と云ふことを始められ、此方彼方の會席にも出られ、當座に詠まれたるなどもあり、かくて此は本よりいと若くおはしゝほどの業なるが上に、事を設けて作り出られたる物なる故にや、のちに悉く墨引て、反故と爲し給へるなり、然るをこたび彼の心として詠出たまへる眞歌を書集むるに付て、此のすみ引し給へるをも取出し見るに、實にも比ふべきには非ざれども、ただにやり捨むもいと惜ければ此儘にて、眞歌の後へに記し添むとす、されど一つに取總むも、かの紫の朱を奪はむかの思ひなきにしも非ざれば、今これを、つくり歌と名づけて、其件を別けたるなり、）

歳中立春

年なみはまだ冬ながら長閑にも。かすみ初けり春立ぬとて。

立春といふことを

打なびき春さりくれば出る日の。影もゆたかに霞たなびく。

竹間鶯

ねぐらする竹のまがきに夜をこめて春にかすめる鶯の聲。

夕　雁

さらでたに秋の夕べの悲しきに。なほ思へとや雁の鳴らむ。

待花と云ふ意を人々とゝもに。

春といへばすゞろに物の慉きを。思へば花を待にぞ有ける。

餘寒といふこゝろを

いづちにか霞たつらむ春來ても。山かぜ寒く雪はふりつゝ。

江　月

住の江に松もる影もくまなきは。月の桂も秋や來ぬらむ。

月學びの窓に入

侘しくも學ぶまどより隈も落ず。心ありげに月ぞさしくる。

山　鹿

わが袖におく白露や秋山に。つまとふ鹿のなみだなるらむ。

擣衣といふことをよめと人の云に。

うつ人はさしも知らじなから衣。もの思ふ袖の濡る物とは。

庭　菊

秋深みもみぢもけふは移ろひて。庭につれなく匂ふしら菊。

九月十三夜にことにあかゝりければ。

心ある人いかならむ我は唯。あはれのほかの言の葉もなし。

柴の戸をさしわづらひて見る月の。あかぬ眺に袖の露けさ。

同夜往來の人を見て

あはれ知る人はあまたもなき世哉。今宵の月に何急ぐらむ。

暮秋虫

おきて行く秋のかたみのきり〴〵す。葎が下に聲よわる也。

夜荻風と云ことを人々と共に

夜もすがら秋をこよひと音づれて。枕に寒きをぎのうは風。

谷落葉

殘さじと峯のあらしの吹よせて。つもるも深きたにの紅葉。

移ろふと見しを名ごりに山風の。誘ひ捨たる谷のもみぢば。

こからしに散りて哀そまさりける。秋より後のたにの紅葉。

橋落葉

木枯しにあらそひかぬる紅葉を。かけてや渡る峯のかけ橋。

初冬時雨

猶したふ秋のなごりの袖の露。けふおき替る初しぐれかな。

初冬月といふことをしひられて

冬の來てまた薄ら氷の池水に。をり得てすめる三日月の影。

寒草帶霜

かれ果て猶おも影はそれながら。見しにもあらぬ霜の下草。

江寒蘆

三島江にかれ葉亂れて氷りつゝ。それとも見わぬ蘆の群立。

なにはえや枯立あしにおく霜を。はらふも寒き浦風ぞふく。

氷初結

音さえし夜はの嵐のほど見えて。庭のいけ水まづ氷りぬる。

池水半氷といふことを

雪まじりおろすあらしの吹たゆみ。たえ〴〵氷る庭の池水。

浦千鳥

荒磯浪の音にたぐひて群千鳥。しばなく聞ゆつま戀らしも。

ゆふ汐は今みち來らしまそ鏡。みぬめの浦にちとりしは鳴。

さよ更て浦傳ひゆく村千鳥。いまおくしもに妻かこふらむ。

河上千鳥

大井川かは風さむみ友ちどり。鳴やしも夜の聲のわびしさ。

河氷

岩間とぢ流れもやらぬ紅葉を。しがらみかけて氷る山がは。

山雪

かゞみ山ちりも曇らぬ影見えて。あらしにみがく峯の白雪。

分いらむしをりもけふは埋もれて。雪にぞ迷ふ冬の山みち。

望山雪

よしの山きのふは嶺の花と見て。ふもとの里にふれる白雪。

川のゆき

大井川かは風寒みふるまゝに。ながれて氷る雪のしがらみ。

松浦がは降しく雪の瀬を早み。つもりもあへず白波ぞたつ。

社頭雪

嵐さへ草のかき葉の言やめて。寂しくつもる雪のしらゆふ。

みづ垣の木毎の雪の白木綿は。雲のあなたの手向なるなむ。

旅宿夜雪

いねやらでもの思ふ夜の草枕。あはれもともに積るしら雪。

刈しきし尾花も雪にふきませて。つるの羽衣かた敷にけり。

侘しさをいかにせよとて夜もすがら。草の枕に雪の降らむ。

寒松

しぐれさへ染かねてけり足引の。峯上に立る松のこずゑは。

染かねて常磐の松の名もしるく。氷る時雨を玉にぬきつる。

炭竈夕烟

炭竈のけむりを雪に吹ませて。ゆふべに寒きをのゝ山かせ。

わすれては夕べの雲と見るまでに。空に烟をまがふ炭がま。

浦の眺望といふ事をよめと。人に強られて。

わたの原夕浪とほく末はれて。空にたゆたふ海士のつり舟。

寒き江に獨つりす。と云こゝろを。

打きらしふる雪しのぎいを釣ると。すさの入江に唯獨のみ。

みゆきふる江は寒かれどうけ縄に。鯉えし心人しらめやも。

閑居水聲といふことを

世のさがを繁みこちたみすめる菴に。音づれ絶ぬ瀧の白波。

わくらはに訊來む人は水の音に。心すますと云やなさなむ。

漁　舟

誘はるゝ浪の往來にそこはかと。見るめ定めぬいさり火の影。

峯　松

峯こゆる嵐を友になみたてる。松のみどりは變らざりけり。

旅宿夢（かり寐の夢）

旅衣かざすかり寐にふる里の。友見しほどぞ嬉しかりける。

契逢戀といふ事を。人のよめとしひらるゝに。

うつゝともあらぬ假寐に契りてし。誠を夢と猶たどるかな。

忍　戀

現そみの人目をおほみ言とはで。忍ぶる妹しあやに悲しも。

おちたぎり岩かね通り行水の。よどみてそこに思ふ苦しさ。

責てかく忍ぶと何で知せまし。よしや此身は戀にしぬとも。

等思兩人といふことを。

沖に邊に藻刈るを舟のたゆたひに。物をこそ思へ二人妻ゆゑ。

人々と共に。人妻といふを題にて。

人つまの世の理はすべもなし。心はなどかむすばざらめや。

心にはまねく思へど人づまの。醜のしこ言すべもすべ無し。

後朝戀

しき妙の袖かへし子を別れ來て。心そらなり土はふめども。

むかひ風いたくな吹そ吾妹子か。袖の移り香散まくもをし。

別　戀

鳥の音におどろきながら東の間も。別れを厭ふ東雲のそら。

うき人の心にかなふ鳥がねは。またもの思ふ始めなりけり。

忘れじの末の契りはたのめども。猶悲しきはきぬぎぬの空。

不逢別戀

言とはで袖こそ別れ急がずは。跡追ひしきてしめ結ましを。

寄月戀と云ふを。

たのめつる人の形見とあし垣に。もり來る月の影も隔てず。

寄烟戀

下もえの烟のそらに立こめて。あはれと人の見む由もがな。

こと浦になびく習ひの夕烟。ひとの心をうはのそらにて。

爐邊の閑談といふことを長歌に。

風まじり。あは（あられカ）に雪ふり板ぶきの。黒木の屋根にたしゞに。あられはうてどその雪の。ふらくもしらず玉あられ。音さへ知らに靈あへる。友とかたみに埋火を。かきおこしつゝ群きもの。心のをろも淺茅はら。つばら／＼に四方山の。物語りつゝ冬ごもり。春さりこしとまどはしく。花のありかを。……

返歌

靈あへる友と談ればいとのきて。冬とも知らぬ埋火のもと。

氣吹舍文集一の巻

○玉がつま道のしるべの跋

神代紀古訓考のはしがきに。心さとく心直き人は。よき事きけばすむやけくおもぶくを。心おそくこゝろ直からぬ人は。よき事きけどもえさとらず。されども人にまけむ事をしいみてえうつらず。えおもぶかずて。生のかぎり。枯野の草のこぞのふるから。ふるきになづみて。淺みどり春の若葉のうらぐはしきをば。つむ事しらずてくちはつめり。とのたまへる。まことや。世にもの學ぶ人さはにあれども。おほくはかの目をいやしめて。耳をたふとむとかいふたぐひに。あだし國人。いにしへ人のいへることにのみかゝらひなづみ。我國人。ちかき世人のいへる事をば。よき事もよしと思はず。またよしとおもへるも。まけじたましひに。いひ破らむとさへして。そのこころやがて。學びの道にそむけるとしも。おもひたらぬ人のみおほきは。いかにちふまが心ぞや。こはから人も過をあらたむるとか。いとおごそかにをしへおけるを。然はあれ。そをしらぬかぎりは。いかではせむ。しりたらむには。すむやけくおもむくべく。こはもの學ぶともの。つねわするべからぬことにざりける。篤胤いはけなかりしほどより。こゝをしもみづから深くいましめつゝ。もの學びける。その幸ひなるかも。前をとつ年の秋の頃より。翁のをしへに入りそめて。古のくしくたふとく。とほしろき道になむたち入りぬれば。いかでこの眞の道を。なべての世人にもきかせばやと。まめに思ふ心から。翁のあらはされし書どもの。五百巻千巻おほかるが中に。玉がつまの書の。すゞろにかきつめおかれしが中より。道の妙なるおもぶきを。近くたとへてさとされしくだり。あるはわなみ初學のともの。まづはやくこゝろ得べきをちく〳〵つみいでゝ。別巻となさましと。このことを堤ぬしにはかりけるに。此ぬしはたおなじ比おなじ心に思ひまけられしほどにて。いざやとて。かたみに。このくだりかのくだりと論ひさだめて。かくはものしつるなり。あはれ〳〵心さとく。こゝろ直き人々。かれのゝ草の。こぞのふるから手折らずて。春の若葉のうらぐはしきをつみねかしと。まづしるべしてつみいでにたる。玉がつま道

のしるべぞこれ。文化元年しもつき平篤胤。

○稲生物怪録序

此ふみは、跋かける人の祕しもてるなるを。我朋友吉田何某が。そのひとのうからにて。ひそかに借りひそかにうつし。祕に藏め置たりしを。おのれまたひそかにかり。人にたのみて。祕に寫したるなり。よしさばれ。後見む人は、祕にもあらはにも。そは其人のまに〳〵。そも〳〵このものがたりよ。大かたの世の人は疑はじを。ものしれる人は信はで。うけがふ人を愚なりといはまし。己もこをうけがふ大よそ人の徒なり。もの知れる人は。をことやいはむしれものとやいはむ。そはとまれ。あとあるをいかにかはせむ。かばかり怪き天地の中にゐて。おのが身のあやしきをさへ。えしらぬ人のさとりなるをや。

文化三年九月十五日

○靈の宿替跋

あなおむかしこの文よ。あなおもしろのこの書よ。あはれこは。靈きはる內野の子が。世のものまなぶともがらのひがことを。くゑはらゝかし。うちきためたるかぶら矢ぶみぞも。あはれ世の人。このかぶら矢におどろきて。千入のゆぎのさつ矢とりいでゝ。かの燒鎌の利鎌もてはらふが如く。射ふせかりふせ。世に五月蠅なすしこ魂を。うち止めこせね。この書讀む五百八百のますらをの子よ。かくいふは。その菅の屋のあるじひらたの篤胤。

文化九年

○千島白波自序

此書は。去し丙寅の年。蝦夷の島へ。淤魯西亞人の。ゆくりなく來りて荒びたる故よし。また其後に。筑紫の長崎へ。エゲレスと云ける戎人の來て。禮なき事の有ける。其時の事狀。はた其事に就て。公儀よりの命令は更なり。國郡を領せる諸侯の。其家臣等に示されたる言。また此役に趣ける人々の。其家人。また朋友がり言おこされたる消息ぶみ。都て此事に與れる事どもを。次々に記し見ばやと。早くより弟子等にも誂へて。何くれと書集めたるを。屋代輪池翁も。同じ心に思ひ起されて。數多しるし持れたるが上に。最やごとなき御邊りの。常人は絕て知られぬ祕記をさへに。伺ひ得つれば。互に校合て誤りを正し。彌いそしむにぞ。慮らずもかく多にはなりに

けるo但し見聞くまに〳〵。廣く書集たれば。同じ文の重複れるも有れど。其の時の事情を知るべきものは。省かずして並べ擧げ。また地理の辨へがたきは。別に繪圖をも寫して。是が附錄としつ。其は彼地に跋涉れる。近藤守重ぬし。最上常矩などにも逢て。直ちに問糺しもしたるなり。然れど猶誤りも有ぬべし。扨此事どもを記せる序に。過にし元文の頃。仙臺の海邊へ。異國船のよりたるを始め。同じ類の事どもを。一つ二つ記し添ぬ。但し是らは因に擧る事には有れど。年の古さが故に。此卷の首に記しぬ。斯て篤胤謹て考ふるに。有ゆる諸越人の參來て。大御國に仕へ奉らふ事は。靈幸ふ神世より。定まれる制度なるを。時として理しらぬ。無禮首長どもの出ける世には。畏くも大御國を伺ひ奉りて。數千の船を浮べ。數萬の軍を集へて。襲ひ來れる事もまゝ有りけるを。固より道ならぬ逆事なれば。忽に官軍の勇に破られ。或は神風に吹倖かれなど。速に亡び失しは。必然あるべき道理なれば。此後しも。大き患ひとなるべき事は非むめり。然はあれど又つら〳〵思ふに。韓招し給ふから神の御心かも。小治田の大御代に。はじめて唐國へ大御使を遣して。其國の事をら。學ばしめ給へるより次々。其を慕ひ學べる人多く。往かふ事も重なりつゝ。彼の立すくむ佛の道さへ弘まれるに。古への武き御稜威は。自らに薄らぎて。漸に文を內にし。武を外にし。萬つかざりを好み。武士にも後見る。女々しき心もぞ出來にける。然りしより後は。本末の差別をも辨へず。書替す文辭にも。古への御制に違ひて。彼れを敬ふ事多く。殊に近ごろ。蘭學ちふ事も始まりて。其むれの人々は。紅毛人をも尊むめり。かゝる事の弊えにや。甚く大御掟に違へる人も。をり〳〵有りと聞ゆるは。いとも。憤ろしく。慨き事の極みなりけり。斯有れば。今より後に。もし戎狄らが逆事なし奉らむには。常に彼の國々を尊むめる人々は。己自に怖惑ひて。大きなる不覺あらむかと。竊に危ぶみおもはるゝなり。抑皇國内にて。皇國人どちの軍には。假令怯き事有らむも。互の勝負なれば。其は事にも非ねど。蕃人との戰ひに。道ならぬ女々しき所爲の有なむには。萬代までの嘲りを受け。畏くも大御國の。大御光を傷ふ理にし有れば。其罪輕からず。麁略に思ふべきに

非ず。若たま〳〵も。さる逆事せむ時は。古き例の如く。穢き奴ばら。暫時も留めず塵にして。皇大御國の大御稜を輝して。怖畏れしめ。御蕃と白して。常しへに貢物奉り。仕へ奉るべく物すべき事とぞ思はるゝ。いでや。敷島の大倭心を固むべき。心おきてを論はむにまづ。上つ代に大皇國より諸蕃國を馭め給へりし趣は。いと嚴重なる事と聞ゆるに。上の件云へる如く。中つ世よりこのかた。彼國を慕ひ羨み。尊卑の別をも知らぬ。猥なる輩の出來し上は。またおごそかなる御掟なくは有べからず。然るに時の往ければ。直日神の御心かも。さる御國の弊をや知看たりけむ。早く寛永の頃に。西に北に。戎狄らが國は更なり。都て諸越へ往かふ事を。嚴く制め給へるは。皇神の本つ御國。萬の國の君師たる。大御國の本因を思ほして。往古に復し給へるにて。いと〳〵尊く賢き大御掟なりけり。故下が下まで。此御掟を畏み奉り。猶蕃國どもに對ひての心得は。我が師本居翁の馭戎概言に。いと明亮に論ひ論されたれば。數度よみ見て知べし。凡書てふ書有しより以來。この書ばかり。愉快きふみは有ること無し。亦彼の戎人どもの。畏くも逆事せる事の。世々の御紀に見えたるを。唯一と目に見通すべく書集めたる。塙保己一檢校が螢蠅抄は。たより宜き物なり。又偶々にも此後に。さる事有むかの心しらびに記せるは。林友直が海國兵談と云もの有り。また都て萬國の風土を察べきは。山村昌永の增譯采覽異言。いと委く記せるものなり。猶萬國の事記せる書ども。また皇國人の。さる國國へ漂ひ流されて。親しく見たる記錄どもをも見合せて。よく其風體を考へなば。天の下國は多けど。我が皇國に比ぶべき美き國は無く。有ゆるから國々のいとも陋く。怯弱き程をも思ひ辨ふべし。しかして後に。事とあらむ時の心得は。自らに定りてむ。是なも武き大倭心の固めとは云べかりける。さて此記せる事蹟はも。己政とる身にし有ねば。えう無きに似たれども。心有む敎子ら。はた我子孫等の心得にもと。密に書集め祕藏くになむ。かく數卷と成ぬれば書名なくはあらざれば。千島の白波とは名付ぬ。猶見聞くまに〳〵。記し加へむとは思ふ物から。己が本業の急がしさに。先づ是にてさし置ぬ。時は文化の十年といふ年癸酉十二月。

○葉田明親の碑

こは。葉田十次兵衛藤原明親。後の名は。玉桙道弘有功老翁の墓ぞも。おほろかになせそ。墓守る法師よ。あやまりてけがしなどすな。鳥よ獸よ。さるはこの老翁。元より武士なれば。其道をならひ明らめられしことは。言まくもさらなり。有職故實の學をも。世のため君の御爲と。正し明して。漢の倭の。くさ〴〵の書讀わたり。往し文化六年といふ年より。己が教子となりて。年の八とせを。講説の會ごとに。一日も闕ことなく。有がよひ聽あきらめて。同じ殿に仕ふる人々。外に親ぶ友がきにも。古の道を説弘めて。吾が力と頼めるおなればぞ。然る賢き人なるけにや。神の廷に。何さまの用ひ給ふ道ありて召れけむ。四月五日ばかり臥せるが。今はまでも。神ならふ心たゆみなく。跡の事どもよく言ひをしへて。九月の十日まり二日の曉に。鎭魂の歌を稱へつゝなむ。此うつし世をば罷りぬる。あはれ此おぢ。齡は己に六ばかりも兄なれど。道の學問には。我を父とむつび給へられし物を。我をおきて罷れることのいと悲しく。年ごろ見しかほ聞し聲の。目に見え耳に留りて。いとやましかるに。其子親盈が。其志をつぎて。この學に入り。父の後の名を。予につけてと乞ふまゝに。かくなも負せて。石ぶみの裏と表とは。己書てむと。涙おし拭ひつゝ。みづから筆とりてなも。

玉桙の道弘めたる功ある。明親おぢの靈所これ

○山口忠雄の願に依て。加筆したまへるしぬびごと。

ちゝの實の父命。從五位下因幡守。大中臣忠榮朝臣の御前に。御子信太郎忠英。惶み惶みも。祖父命。從五位下讃岐守忠雄朝臣の。記したまへる誄文を。讀奉る事を。平けく安けく聞し食せと白す。我がうつの眞名子。汝忠榮命。現世におはせる時なも。遠祖の代々に仕奉り來しまに〳〵。此の皇神の定式の御祭は。更にも言はず。臨時の祭もよく仕奉り。天の下安らけく平に。五穀豐に。氏子取子。親族朋友に至るまで。禍事なく榮えむ事を。祈り申すこと。日毎に怠なく。往し年朝參して。從五位下因幡守の御任し蒙ぶり。大朝廷の御典の學問は。本居宣長大人の學風をしたひ。平田篤胤大人の敎子となりて。

晝夜と言はずはげみ學びたるに。遠き近き邊の人々訪ひ來て。その交はる友ごとに。みな古の道の義を論ひ明す人々なるが。また歌をも好みて。始は冷泉殿の御流を學び。後には古風の歌をさへに詠おぼえて。月ごとに日を定めて。友達を集へて詠かはし。常に空言なく。實心に親族を睦び。近き年ごろより。病に勞はりつゝも。語らふ事などありて。使を越せば。勞はしげもなく。速に使と共に行くなど。いさゝかも厭ふ色なく。實やかなりき。かゝるに。去年の十二月の中頃より。病重りしかば。妻子は更にも云はず。己も仕奉る大神の御前に祈り白し。何くれと心の及ぶかぎり物しつれど。漸々に重りもて行て。正月二日の日。病の床に在つゝ。信太郎を呼て。硯と紙筆を持て來よとあるに。やがて持て枕邊に至れば。我も皆と共に新年を祝はむとて。

今朝よりは煩はしさも忘れけり。千世の初日の惠いづれば。「みそら行く天津初日の御惠に。けさいさましき春をむかへつ。」と詠み出て書しめ。あくる三日の日の夜。戌時の頃に。常にかはらぬ聲にて。信々と二聲呼けるに。信太郎直ちにその枕邊によれば。何事にかあらむ。唱言をいと靜に。やゝ暫く唱へて。いさゝかも苦しき氣ざしなく。眠る如く。四十になれる今年の。正月の三日の日を。生涯として。過ぬる事の痛ましさも。惜さも悲しさも更に言ばに述べくも非ず。さる最期の際にも。神の道の尊き事を思ひ奉りつゞけて。祝言の歌よみて。信太郎に書しめたるぞ。いはゆる辭世の言葉となりぬるは。いといと哀なる事なりかし。と妻なる伊久子。信太郎。其外親族共。枕邊に泣腹ばひ。泣いさちる。魂よばひすれど。更にかひこそ無りけれ。斯て有べきにあらねば。野邊おくりの事ども取まかなひ。藤原正包に。何くれと物せしめて。大內臺に葬りぬ。この正包は。年ごろ昵近きて有けるに。跡の事どもをも賴み置つれば也。靈名はやがて。忠榮神靈と稱へて。先祖の靈等。また生の母の靈と共に。家の守護神と齋ひて。

已忠雄涙ながらに。靈前にむひかて。

靈屋に鎭り坐して子孫らが。行末永く守りましてよ。

礎の堅き勤の魂より。幸へ守れ靈の眞はしら。

逆ながらにかくまかなひ。かく詠出し父の心を思ひ

はかりて。我がうつの眞名子。汝忠榮命。此の靈屋に。平けく安けく鎭りて。常に突立し靈の眞柱の。礎かたき大倭魂をふり起して汝の眞名子。信太郎忠英が身を。健に成長らしめ。命長く。汝の跡を繼しめて。夜の守り日の守りに守り幸へ。堅石に常石に榮えしめたまへと祈りつゝ。跡に殘れる妻子らを始め。親族ども諸共に。種々の物を備へ奉りて。廣く厚く祭り仕奉る事の由を。耳彌高に聞取りて。守りたまへ幸へたまへ。

ここ祖父命の記したまへる詞をそのまゝに。信太郎忠英。かしこみかしこみも。御前に讀み上げ奉ると白す。

○石楠屋の祝言

上つふさの國。武射郡富田の里なる。大高氏はも。家内こと〴〵。元より石楠の。くすしく堅らなる。大和魂をゝしくて。外國々のをしへは好まず。神の道をし尊みて。あるじ秀明は。余が神習ふをしへ説をめでまなび。その學び屋を殊に作りたるほど。文政元年なりき。おのれ其家にものして。五日ばかり。神世のことごとしたりけるに。いかで此屋の名をつけて。と乞ふまゝに。やがて石くすの屋。とぞつけたる。さるは此木の香ぐはしく。名ぐはしきことは。今さらに云ふべくもあらず。其始は。から國をことむけたまはんうき寶にせむと。建速須佐之男大神の御心と。その御眉の毛をぬきちらし。生したまへるにて。木の多かる中にも。いとくすしく。つひには堅石となれば。名も石楠とさへ負にたるを思ひてにぞ有ける。

言靈の幸はふ國と石くすの。かきはにいはふ家の名ぞこれ。「萬世を石くすの木の石たゝし。神ならふ石くすの屋のぬし。

○大鐃人裘序

竹取。うつぼ。光源氏の類の物語ぶみはし。いみじき文かき人の。わざとたくみて。かきなせる物にしあれば。誰もかれも哀と思ふを。世つぎの翁たちのものせるふみどもはも。其世に見きける正ごとをし。まさやかに傳へまほしさ。ありのまに〳〵書取れる物にしあれば。實事を好む人を置ては。哀とは見る者なし。然るをわが友に。大石千引とふ人あり。此おぢ。歌もの語のみやびことは更なり。本よりまこ

その學びを好むまめ心に。殊に世繼のふみをら好みよみて。其ふみどもの註さくを物せんと。早くより勞きあかして。大かたに成つるは。此よなき世づきのはかせなりかし。然はあれど其書ども。卷のかずいと多くて。世に著さんことのたやすからねば。いかでまづ。卷々なる人々を別となへもて。かきたる限りを拾ひ出して。此をよまむ人のしるべとせんはいかに。とすゝめたるに。我はた同心に。かねて其しをりし置つれば。まづ大鏡のを世に著さまし。いかで序せよとて。やがてちり拂ひつゝ取出たるは。此ふみになむ有ける。己もとより。いかで〳〵と思ひわたれる事にしあれば。然らばとて筆をば取つれど。いまだ此ふみどもは。知きはめつと。思ふ計りはよみもあへずて。此はかせのものせる文に。何とかは言くはへむ。たゞ有のまゝに。其よしの正ごとを。一くだりかくなも。

文政六とせと云年のきさらき。

○農業要集序

わが鈴屋の本居宇斯の。敎への子らによみ遺された る歌に。

家のなりな怠りそね雅士の。歌はよむとも。書はよむとも。

と言れしは。實然る敎へにて。人として。家のなりはひ無き人なければ。殊にそを勤しむぞ。靈幸ふ神の御道には有ける。然れば。國民を治むる人は。國民をよく治むる道をむねと好き。武士の道もて仕ふる人は。武士の道を此よなく好き。なほ百のわざ。萬づの業。みな好きより。其道に至り深くなも成なむものを。世にさる人の希なりと聞ゆるは。最もくち惜き事にざりける。爰に吾がをしへ子に。下つ總の國松澤村に。宮負の定雄ちふ若男あり。しが父を定賢と云ふ。其村の里長なるが。其勤めに實なるは然るものにて。其暇には神習ふ道を學びて。其子をも然は敎へ立しからに。定雄はた幼かりし程より。大御民の業をし殊に好きて。萬づの種を。くさ〳〵に作り試みつゝ。人のえ知らざる作りざまをし。知り得るまに〳〵書しるして。かく一ふみと成ぬるは。最愛き男子になも有ける。西蕃のかしこき翁が語に。田つくる事はし。老たる農人に問へ。と云るは然る言なれど。其は尋常の事にこそ有れ。吾が神の道によ

く習へるは。まづ其家のなりを好きて。萬づに實に勤むるからに。齡こそ若けれ。老たる農人もめでつべき。農事をも悟り得て。かくなも綴り出たる也けり。然れば此書をし。かの老圃に問へと云へりし。から翁に示せてば。後世はかしこし。今より田つくる態は。この若圃に問へとや言むかし。阿波禮大御寶なるかも。定雄い。あな功しきかも。此若男い。かく言ふは。伊吹廼屋のあろじたひらの篤胤。

文政九年丙戌六月

○近淡海國の國友村なる。國友能當が造れる。鐵の鏡に添ふるふみ。

神世に鏡を作れる起原は。天照大御神の。天石屋に幽居り座せる時に。八百萬の神たち謀りて。天の香山の金を取りて。石凝姥命に造しめつ。とは誰も知れる物から。其神鏡つくれる事をし。神代紀の一書には。以二石凝姥一爲二冶工一。採二天香山之金一云々と見え。古語拾遺には。令下石凝姥神。取二天香山銅一以鑄上云々と記し。古事記には。取二天ノ安ノ河上之天堅石一。取二天金山之鐵一而。求二鍛人天津麻羅一而。科二伊斯許理度賣命一。令レ作レ鏡云々とあり。金といひ。銅と云ひ。鐵と云ひて。其說の區々なる中に。何れ正說ならむと云ふに。古事記に鐵とあるぞ正說なる。其はまづ神代紀に。金とあるは。加禰といふに廣く用へるにて。黃金のよしに非ざれば。何の金なりしと云こと。此紀にては知べからず。然るに後世の人は。後世に。銅もて鑄造りて。水銀すりつけて。光らしたる鏡に。常に目なれて在るからに。古語拾遺に銅とあると。此神鏡の事ならねど。神代紀に。白銅鏡といふ事もあるによりて。此神鏡をも。銅もて。鎔造れる物なりと思ひ定めて。古くも今も。別なる論ひは有ことなく。吾が師本居翁はしも。古今にまたなき。古學びの博士なれど。其著されたる古事記傳に。取二天金山之鐵一とある文を解きて。此は矛を作る料なる故に。鐵字をかけり。鏡ならば。鐵とは書じと云れたり。然れども己早く思ひけらく。神世の初めに。白銅など云ふ。合せがねの有べくも非ず。また直の銅はしも。何に磨くとも。水銀すり付ずては。底ねけたる如く。光る物にし非ず。然りとて。其水銀もて光らす態はも。神世の初めに。有けむ事とも覺えねば。劒刀などよく硎たるは。物の形の眞

澄にすみて。映るを思ふに彼の神鏡は。かならず鐵なりけむ。直によくとぎて。鏡のごとく炫く金は。鐵をおきて何かあらむ。是ぞ神世の有趣なる。然ればば古事記に。鐵とあるが正説ならむと。吾ひとり思ひ定めて。なほ次々に考ふるに。天津麻羅とは。天目一箇命の亦の名にて。こは倭鍛冶の遠祖なるが。此神と。伊斯許理度賣命と。二神にて。かの神鏡をば鍛ひ造れる由なり天堅石を取りとあるは即その質石の料なり。質石とは。謂ゆる金床の古名なり。然れば　古語拾遺に　鑄とあるに泥むべきに非ず。ことに鑄字は。鑄レ兵などやうに。古くは鍛ふる事にも用ひたり。斯てこの神鏡をもて。天照大御神を。天石屋より。謀り出し奉れる時の事を。神代紀に。是時以レ鏡入ニ其石窟一者。觸レ戸小瑕。其瑕於レ今猶存と見ゆ。然して後に。大御神の御孫。邇々藝命の天降り坐す時しも。大御神。その神鏡を。大御手に執り坐して。視ニ此寶鏡一。當レ猶レ視レ吾。可ニ同床同殿一。と敕へる御由緒によりて。邇々藝命より。千萬づ歳の神世の御代々を。同殿に御坐しけるに。人代となりて。神武天皇より十代に當り給ふ。崇神天皇の御世に。

御同殿に御坐す事を恐しとて。彼の神世に。神鏡を造れる神たちの。御末の人々に科せて。代の御鏡を擬造しめて。禁中に齋かせ給ひ。かの神鏡をば。天照大御神の御神體として。次の御世垂仁天皇の二十六年といふ年に。今の內宮には齋かせ給へり。かくて禁中に齋き給へる。代りの御鏡と申すは。謂ゆる三種の神寶の一つたる。內侍所の神鏡なり。然るに是より。九百四年のち。村上天皇の天德四年と云ける年の。九月二十三日の夜に。內裡燒亡ありけるに。內侍所の神鏡も、火に逢たまひき。此燒亡の事を。釋日本紀に引たる天德の御記に。瓦上在ニ鏡一面一。其徑八寸許。頭雖レ在ニ小瑕一。專無レ損ニ圓規並蔕等一。甚分明。見者無レ不ニ驚感一云々と記し給ひ。其御世の正しき書等にも。件御鏡。雖レ在ニ猛火中一而不ニ涌損一とも。雖レ在ニ大灰燼之中一。曾不ニ燒損一とも見えたり。抑々この內侍所の神鏡は。崇神天皇の御世に。かの神鏡を擬造しめ給へる御なるに。其の神異かくの如し。此をもて。伊勢の大宮に坐す。御神體の御鏡の。神威を想ひ像り奉るべし。偖右の天德御記の御文に頭雖レ在ニ小瑕一とある小瑕を。火に逢ひ給へ

る故に。付たる瑕のごと思ふも有なむか。然には非ず。こは其本つ神鏡を。上に引たる神代紀に。大御神を引出し奉れる後に。その石窟に入しかば。石戸に觸れて小瑕つきて。其瑕今に猶存と見えたる。其瑕までを。在のまに〳〵。崇神天皇の御世に。擬し給へるなり。其はもはら。圓規𦆅さへに損ふこと無く。甚分明なりと有るをもて。其瑕の燒損ねたる瑕ならぬ事を辨ふべし。扨掛まくは畏けれども。伊勢の大宮に坐す本つ神鏡には。その缺たる一片をも付て。納め給へりしと聞えて。景行天皇の御世に。日本武尊の。吾嬬の國を平治めに降り給ふ時に。伊勢の大宮に。御暇まをしに詣たまひしかば。其時の齋宮の姬御子。倭比賣命。すなはち日本武尊の御叔母に坐して。火打囊を賜へる事を。日本紀には。於レ是倭姬命取二草薙劍一授二日本武尊一曰。愼之莫怠也と見え。後にそを用ふる所には。以レ燧出レ火之向燒而得レ免。このみ有れど。古事記には。倭比賣命。賜二草那藝劍一。亦賜二御囊一而。詔下若有二急事一。解中茲囊口上と有れば。其劍に。火打囊を着て賜へるにて。後にそを用ふる所には。解二開囊口一而見者。火打有二其裏一とあり然るに此の火打は。かの神鏡の缺たる一片にぞ有ける。そは何を以て知なれば。後の物なから。源平盛衰記。三種寶劍の事と云條に。倭姬命。天叢雲劍を取りて。日本武尊に授奉りて。危からむ時に。此劍を以て防ぐべし。錦袋を拔きて。異賊を平よとて。錦袋を付られたり。と有りて。其を用ふる所に。凶徒ら枯野に火を放ち。四方より燃來て。遁れ難かりければ。佩給へる叢雲劍を拔て。打振たまへば。及に向ふ草。一里までこそ切たりけれ。爰に野火は止りぬ。其後に劍に付たる。錦袋を披き見るに。燧あり。尊みつから。石の角を取りて。火を打出し。野に付たれば。風忽に起りて。猛火夷賊に吹覆ひて。凶徒悉くに燒亡びぬ。此より叢雲劍をば。草薙劍と名けたり。彼燧と申すは。天照大神。我が御貌を。末の帝迄見せ奉らむとて。御鏡に移させ給ひけるに。取馳して打落して。三つに破たるを。燧に爲たまへり。彼燧を錦袋に入れ。劍に被付たるなり。今世まで。人の腰刀に。錦の赤皮を下て。燧袋といふ事は。この故なりと有り。御鏡の損はれたる由を云へる說こそ訛なれ。其燧をしも。御鏡の缺なりと云へるは。正しき古傳

の遺れるにぞ有ける。是をもて掛まくも畏き神鏡の。鐵にて御坐す事を辨へ。また腰刀につくる火打は。鏡の缺を象どりて作るべき。故實をも辨ふべし。然れどこは。己が始めて思ふ事にこそ有れ。さる故實を記せる書は見當らず。さて倭比賣命の。その缺たる一片を。劔にそへて賜へる事は。やがて大御神の神靈をわけて。御守となし給へる御心なること。申すもさらなり。斯の如く考へ定めて。後に思へば。延曆の內宮儀式帳に。正殿心柱造奉條に。鐵人形四十口。鐵鏡四十面。鐵鉾四十柄とありて。餘の所々に。鐵人形四十口。鏡四十面。鉾四十柄とあるは。一所にしか記して。餘をも准へ知しめたる物なり。同じ延曆のふみながら。外宮儀式帳には。金人形二十口。金鏡二十面金鉾二十柄と數所に記せり。此はうち任せて。加禰といふは。鐵のことなる故に。語のまゝに。金人形など書たるにて。是また黃金もて造るには非ずかし。其は延喜の大神宮式にも。此を鐵人形鏡鉾各四十枚。と數所にあるにて知べし。後の御世までかく神寶に奉らるゝは。鐵鏡なりしは。神世の舊き例を傳へ來れる御式なるべし。偖また上に引く。天德御記の御文に。其の徑八寸許。頭雖レ在ニ小ト環一專無レ損ニ圓規並蔕等一とあるに就て。わが友伴信友が。かの神鏡の御形を。想像し奉れる說に。今も尋常にあるが如き。圓規して柄ある御鏡にて。蔕とあるは即柄なるべし。字書に。蔕瓜當也。當底也華當也など見えて。草木の實のほぞと云ふ物なるが。實を摘とりては。蔕ながらやゝ着たる枝をもかけて云めれば。即鏡の柄のこゝろに假借して。此字を書せ給へるにて。頭とある所は。かの神鏡の柄を下として。其上の方を詔へる文なるべし。今も鏡作などの詞に。頭とも上とも云ひ傚へり。また鏡の柄を。古くは下とも云へりと思はる。そは禮儀類典に引れたる。大成錄の。樂人裝束のうち。鉾の製りざまを圖せる下に。柄長七尺三寸許。黑漆之徑一寸三分許。下有ニ石突一長二寸許。如ニ鏡下一とありて。其石突の所を。かく圖せり。如ニ鏡下一とは。如ニ鏡柄一と云ふが如し。思ひ合せて神鏡の御形の。今ある尋常の鏡のごとく。圓規して柄ある事を辨ふべし。かくて此神鏡を。神典に。八咫鏡ともある八咫は。古事記に。咫を阿多と訓べき由の註あるに。八咫と云ふ

は。八に阿の韻あるが故に。自づからに。ヤタと云はるゝ言の格なり。偖その八咫とは。上に引く御記に。徑八寸許とあるに依りて考ふるに。阿多は間と同義の言にて。手の啓たるまゝに。指の開たる間もて。物のたけを量る。古の名目にて。今もいく尋。いく束など云ひて物する定めの如く。小き物を量るに。いく咫と云へりけむ。神代紀に。猿田彦神の鼻長七咫とあり。いく咫と數へたる證と爲すべし。咫字を說文に。八寸曰咫と有れど。此方にては。往昔物を度る稱の。（錢胤云、この八咫の說、後には變られたり、其定說に、皇國度制考に、委く記されたるを見べし、）阿多と云ふに。借用ひたるに疑なし。然るを御鎭座傳記などに。八咫古語八頭也。八頭花崎。八葉形也。中臺圓形座也と云るに依りて。彼の神鏡の御形を。八花崎の鏡なりと云ふは非說なりとて。彼八葉にして。紐付たる鏡は。もと漢土の製をうつせる物なる由をも。委曲にわきまへ記せる書あり。然れば古の鏡は鐵にて。圓矩くうち鍛ひたる柄付の鏡にて。形は今用ふる尋常の鏡にかはる事なし。然れど鐵を鍛ひて鏡となす態はしも。難しとも難きわざなる故に。便よき銅鏡をのみ世に用ひて。鐵鏡の事は。たえて人知らず成にしを。己いにし文政二年に。かの水心子正秀とて。今世の良匠と聞ゆる刀鍛人に。八咫の五分が一なる鐵鏡を。二つ鍛はしめて其三月に。鹿島宮と。香取宮とに詣ける時に。祈事の祝詞にそへて。思ふがまゝに。我が古ことの學び世に行はれなば。其鏡を。八咫鏡に替て奉らむと白せる後に。また屋代弘賢ぬしなど。其餘の人々にも語りて。身守の鏡をも。三四面は造しめたり。是ぞ絕て久しき鐵の鏡を造る事をし。再興したる始なりける。抑世の片ゆきなる事識人はも。有ゆる事物を。みな漢土より傳へ得たるごと。言ひも思ひもする事なれど。我が皇大御國はしも。萬國の祖國なれば。實には。萬國に有ゆる事物ども。其本は皇國より傳へたるに。工夫を加たるが多かり。中にも鏡を造るわざ。漢土にては。黃帝かの西王母といふ神僊に會ひて。十二面の大鏡を造れるぞ始めなる。そは黃帝內傳。軒轅本紀。廣黃帝記など云書を。合せ考へて知べし。然るにその王母と云ふは。實は我が皇國の神にしあるを。彼國人の。かゝる漢名をば稱せるなり。此は己くはしき考ありて。志豆能石屋ちふ書を撰びて。數多の

漢ぶみを引き證せるを見べし。斯て黃帝の始めて造れる鏡は。決めて鐵なりけむと思ふ由あれど。其說ことに長ければ。此に記さず。彼國にも古く鐵鏡を用ひし事は。漢の劉歆が遺文を。晉の葛稚川翁の撰次せる。西京雜記といふ物に。哀王家以鐵灌其上。穿鑿三日乃開。有黃氣如霧。觸人鼻目。皆辛苦不可入云々。無餘異物。但有鐵鏡數百枚。と有にて知べし。又天寶遺事に。葉法善有一鐵鏡。鑒物如水。人每有疾病。以鏡照之。盡見藏府中所滯之物。後以藥療之。竟至痊瘥。とあり。また格致鏡原に引たる九國志に。宗壽建之族子。得古鐵鏡。下有篆文十二字。忽照見一青衣小兒坐酒樓上。令人訪之。青衣隨至曰。此神物也。終當化去。不若還我與之。剖腹納鏡而去といふ事も見えたり。其小兒は。眞靑小童君といふ神には非ざりしか。仙籍に。眞靑小童君は。嬰孩の貌なる故に。仙宮には號けて。小童君といふよし見えたるに。物色いと能く似たればなり。此事も。志豆能石屋にくはしく記せり。鐵鏡の靈異ありし事。なほ諸書に數見ゆれど。今は一二を擧つるなり。爰に近つ淡海の國の。

國友能當はも。其遠祖は大和鍛人にて。長包と云へるが。其子兼氏と云しもの。後醍醐天皇の御世に。美濃國多藝郡にうつりすみて。相摸國鎌倉に住る正宗が弟子となりて。志津三郎と稱へりし。名高き刀鍛人なり。代々その業を傳へ。其子孫近江にうつり住けるに。天文十二年に。異國より鐵炮といふ物わたり來しかば。此家にて。始めて此をうつし造れるに。其當り能かりしとて。足利家より。能當と云ふ名を賜へるなり。代々その名を稱るよし云ひ傳へて。今に公儀に。その職もて仕奉る人なるが。近きほど西洋なる國より。風炮とて。火力を假らず。風吹こめて放ち出る鐵炮の。いさゝか其形ばかり造れる物の渡れるを見て。固よりこよなき考工者にし有れば。なほ種々に考へ造り試みて。遂にいと奇異きまでなる。風炮をなも造り出ける。其工みの巨細なる事どもは。氣炮圖說とて。身づから記せる物あるに就て見るべし。猶この外に。形は常の鏡ながら。日向に照せば。裡なる繪やうの影うつる鏡を始め。人の目を驚かす。奇しき物ども。數しらず造り出たり。中に世の工夫者など云ふ。生靑き徒の。かけても及

ぶべき翁にあらず。斯て此をぢ。往し年ごろ四年ばかり。大江戸に來て在けるほど。己とは方外の人なる物から。互に物の道理を窮むる事をし。好み合ふより睦魂あひて。此よなく親しく交れるに。此をぢ書こそ讀まね。神の道を尊みて。其事をば。余がをしへを善として。問ひあかすにぞ。上のくだり記せる鐵の鏡の考へを。委曲に語りて。此を鍛ふる態は。いと〳〵難し。そは少けきは。然しも骨をるゝ事にも非ねど。大なるは。鐵をり反すとては。謂ゆる地あれの出來て。美しくは成がたきを。子よく考へて。大なるを難からず。造り出る事をし。工夫してよと云ひしは。去ぬる文政七年四月に。をぢが國に歸り行く時になむ有ける。其後しも國友よりは。をり〳〵は消息して。いと親やかに訪るゝを。己は例の事おほく。消息かく事の物うき性にし有れば。常に心にたえぬ物から。返事さへに。其度ごとには。贈らで過せしを。此八月の廿日と云ふ日に。七月の二十五日と云ふ日に書きて。早馬使に出せる。消息の來れるを見れば。鐵鏡を造るわざを考へ得て。いと麗しく造りいで。また鐵の弩をも造れる由しるして。彼神世の起原を。疾くかき記し賜ひねと云ひ遣せたり。爰におのれ。常は然もあらば有れ。こは速にせむと。やがて如此なも記しいでつ。但し鐵弓の。神世より有ける由は。前に記し洩せれば。今こゝに記し繼てむ。そは出雲風土記に。島根郡加賀郷。また加賀神崎の所などに。佐太大神。金弓箭もて。窟を射通しませる事あり。この金とあるは。即鐵なることと。鐵鏡を。金鏡とかけるに准へて知べく。また常陸風土記に。香島郡香島宮の條に。崇神天皇の御世に。奉られし幣物の中に。鐵弓二張。鐵箭二具とも見えたり。是を以て神世より。鐵弓をも用ひたること明なり。然るに中むかしの軍ぶみ等にも。鐵弓を射たりと云ことの見ゆるに付て。伊勢貞丈ぬしい。そを妄誕なりとて。云ひ破れる說あるは。神世に鐵弓ありし事を。知られざる故なり。己いにし年。少けき鐵弓を作らしめて。引き試みたる事有りけるに。丸木弓の引ごゝろに似て底つよく。力だに有らば。通し物には。此に越たる弓の有まじく覺えたりき。然れば。國友をぢが造れる鐵弩も。神世に本緣なしと云べからず。但し其弩はしも。前に考へて造れるもあ

れど。其は尋常の竹弓に造れりしを。今度なほ更に考へ改めて。鐵弓に造れるが。其當り。竹弓に遙に勝れるよし言ひ遣せたり。いかで其弩。見まほしと思へど。今はかく國放れるをいかにせむ。

國友能當翁の需めに應じて

文政九(丙戌)年八月二十七日

平田大角平篤胤 記判

○従三位松平榮翁老君の。八十八の御齡をほぎ申して。いと尊き掛軸を奉るにつけて。其由縁しるせる詞。

この一軸は。いにし文政六年といふとしの七月に。京にまゐ上りし時に。禁裡御取次。右近將監源武貞ぬしより。ゆゑ有りて賜はれる物に侍り。菊の畫は。掛卷もかしこき。當仙洞の遊ばせる宸畫に侍るを。中山前亞相君の申し賜はりて。賛の語をものし給へるなり。これ宸書なることは。印のおし方。又語のさまにても。顯はに知られ侍り。諸かく表装し侍る。謂ゆる一文字。又風袋に用ひたる錦は。祇園大神の御装束。かみしもに用ひし。二葉葵の和たへは。加茂皇大神の御装束にて。共に二十ちまり一とせ毎に。朝廷より調進なし給ふ。御のおろしに侍るを。ゆゑありて。その神人らより得て用ひ侍れど。中にもちひし小葵のにしきは。尋常のものに侍り。まこと然るかしこき物にし侍れば。したしき友の。此わざを知れるを家にまねきて。かく表装せしめたるなり。さるをこたび。御齡をことほぎまつる禮代に。獻らむと思ひよりはべるにつけて。いさゝか其由をしるし侍り。さるはこれの御上はも。今しうま人の限りを。御うからやからにもたせ給ひて。ひろき三つの御位を賜はり給へる。御福の貴さのこよなく。はた遠つ天皇祖命の。はじめて天降りまして。八千世おはし座せりし。三つの御國をしろし召せるに。まして琉球の國をさへに治め給ふ。御祿の大きなるは申すも更なり。そがうへに。御齡また雲の上に。たぐひなくおはし座すを。かの菊によそりて。八百とせの世をへしとふ。からおきなが故ことにほぎ合せ。ことし迎へ給ふ御齡を。彼さゞれ石の。いはほと成るべきもとゐとして。なほ限りなき南山の壽を。た

もたせ給はむことを祝き申すと。人數ならねど。御惠みのはし蒙ふる身にし侍れば。祝きのしるしと獻るを。御もと人たち。ほどよく專とりまをし上げ給へとなむ。阿那かしこしや。天保の三とせといふ年のやよひ。廿日あまり二日。

御画の菊によそへて。

百世草かをる垣根にしたひよる。心盡しの印さを見よ。

〇みやびてふ言のこゝろを述て。俳諧歌場の老翁をはむる詞。ならびに歌。

神樂歌に。稚ければ美夜備も知らずと云へるは。肝わかき若人に許せることにこそ有れ。八つか髭おひ垂たる人に。ゆるせる詞には非ざめるを。世にみやび男とて。歌をつくり文など物して。金戸おしはるともがら多かるに。それみな萬葉集に。みやびをさ云ふに遊士とかき。伊勢物語に。かりぎぬの袖をきりて。歌かきて女にやれるを。いち速きみやび男さほめしたぐひ。あるは。風姿閑雅などのもじに依りて。容貌づくり。したにごりつゝ。上べをかざらひ。或は彼の更科の日記に。此ごろの人は。かたち有さま。もの語りにある。光源氏などやうに。と云ひしさまに。月にうかれ。花にすきて。詩歌管絃をもてあそび。そを媒として。ついぢの崩れをうかゞふ類ひを。みやびわざの本意としも心得ためるは。片はらいたきわざにこそ。然る虚のみやび男多かる世にしも。北川の眞顔のをぢはも。おのれいと稚くて。まことの宮比のおもむきは更なり。しかいふ言のこころをさへに。能くも知らざりし程より。むつ魂あひて交はりつゝも。吾には二十ち餘りの兄にし有れば。よはひもては。父のごと親しみ思ふをぢにし有るを。此をぢのみぞ。まことの宮比をし得られたりける。然るは美夜備てふことばの本は。天宇受賣命を。大宮能賣命とも。宮比神とも。稱へ申せるより出たる言にて。かの天の石屋戸の神遊びに。こ神そい長つかへまつりて。比登布多美用。伊都牟由那々。夜許々能多理。毛々智余呂都と。六こと四つがひの歌をうたひて。巧みに俳優し給へるぞ。俳諧歌わざをき舞のはじめなる。さて此後しも。天の八ちまたに。御孫命をむかへし神の。いかめしきに立むかひて。目がち面勝ち。問ひあらはし給へるいさを

しに依りて。宇受賣てふ名をおひませること。古語拾遺に見えたるがごとし。かくて其かむあそびをし。掛卷くもかしこき。天照大御神。いともをかしと聞こしめして。彼いはや戸を。出まししかば。かねて設おきつる。新宮にうつしませ奉りて。此神。その御前にさもらひ坐て。その御心をとりまをし。仕へ奉らしゝ趣によりて。大宮能賣と申せる事も。古語拾遺また延喜式なる。この神の御前にまをす詞にてしるし。故ふるくは高きいやしき男女をいはず。宮づかへする人のかぎり。年ごとの正月と。十二月の初午の日ごとに。宮咩祭とて美饌備やかに。此神を祭れること。書どもにこれかれ見えたり。また宮比神とも申すよしは。まづ宮比とは。宮ぶりてふ言のつづまれるにて。里ぶりを。さとびと云ふに同じく。そのさまを云ふ辭なること。古ことの學びする徒は。たれも知れることなるが。其さまはも。常のもの言ひざまは更なり。立居につけておごそかに。自づからに。可笑みありてうるはしく。見る人これをめでしたひ。君にさもらひては。能くつねの御心をさしくみて。事をとゝのへ。或はあだし仕へ人など。君の怒りに觸たらむをりは。善く言してなごし參らせ。かつ其仕ふる人の。君をうらみ奉るまじく。美詞もて言なほし。宮すゝめに進めて。おのがむき〳〵在しめず。あるは。君のもの思ひたまはむ時など。そを休むべく。をりにより事によりては。綺語をもまじへてなぐさめ參らせ。まゐり罷づる人のえらびは更なり。何さまのいかきものにも。面がちむかひて怖ることなく。たゞし顯はし。またさるべき事にあたりては。人のはぢて。得すまじき戲わざをも。はばからず物して。なみ居る人をとよもし笑はし。親子。めをと。はらから。友がきの中らひも。いと睦まじく和やかなるぞ。まことの宮比の大かたなる。此神はも。さる御いさをしに御せる故に。みやびの神とも申せるなり。さる宮比のまことをし。世のつねの歌つくりたち。得しも知らずて。その詠いづる歌ども。たま〳〵に雄々しげなるは。面白からず。花やぎて見ゆるは女々しく。わざこと歌とてよみ出たるは。大かた陋しく。すべては實なき歌どもなりかし。そは此をこそ。歌はよまねど。世の中のこと。いさゝか思ひわきまへて。歌のよし惡し。きゝ分く

ばかりの耳をし持たれば。もたも得あられず。かくは言ふなり。北川の息長はも。宮比神の。いかに御たまを賜ひたりけむ。言いづる詞ごとに。詠いづる歌ごとに。實ありて花やかに。戯詞のをかしみ。はた自づからに備はりて。面しろく雄々しく。目にみえぬ鬼神をさへに。笑はしむべき。戯笑歌の歌仙になも有ける。里人のもろ人は。さるみやびをとしも。知るやしらずや。久かたの雲のうへなる。大宮人はし。いと疾くきこし知らして。あるは俳諧歌場のをぢとも。あるは歌垣の宗匠とも。おしてたゝへ名たまへるを。吾なみ久しき友がきの。そを嬉しとなも悦ばざらめや。珍たしとなも祝はざらめや。

みやびをの宮比をかしと雲のうへゆ。宮人ほむる里人もい邪。

其祝ひ日は。九月二十日より八日の日にて。兼題は菊によするときゝて。

わらはびて今さらにくむ菊のつゆ。おもの千ち世とのみや榮えむ。「てうち〳〵吾もあえなむ宮比男の。みやび榮ゆる今日のまとゐに。

文政十一年九月廿八日

○神明村の碑

天照皇大神豐受皇大神兩社神明宮」この二柱の大御神の。御神德の。廣く大きに御坐すことは。今更に云べくも非ず。古は國々に御廚とて。神領多かりしこと。神風鈔。また神領目錄などを見て知べし。即この處はしも。同書どもに。下野國に。二宮簗田御廚とありて。絹布綿など獻れる御領にぞ有ける。故是を以て。當昔より。此兩社を勸請して。神明宮と稱し。今に簗田十八箇村の。總鎭守と稱し奉り來り。此村を神明村と云ふ。こゝに村長なる。岩井田甚五右衛門福救い。古の道に志深く。其由を石文に記し建むと。余に其事しるしてと請ふまゝに。かく記せる時は。文政十二年八月なり。

○御笠殿社由來記

伊勢國鈴鹿郡庄野驛より。十町ばかり東なる。高宮村といふ所に。御笠殿とて。日本武尊の御社あり。こは尊の御笠を藏めし所と語りつぎ。また其よりやや放れて。白鳥塚とて。同じ尊の御陵あり。この邊おし並て。いにしへ能煩野といひし所にて。かの王の崩御ませる地なる故に。御陵ある也。延喜の諸陵

式に。能褒野墓日本武尊。在二伊勢國鈴鹿郡一とあるは是なり猶其あたりに。奉冠塚。奉裝塚など云ふもあるは。皆かの王の。御遺物を納めし所といふは。信に然るべし。抑かの王の御よはひ。いと若くまして。倭童男王と申しゝほどに。筑紫國なる。熊襲たけると云ひし荒えびす討とり給ひて。倭建男命と御名におひ坐せる。御いさをしは更にも申さず。其後に。吾妻の國々なる。惡き神。また射向ひまつる夷どもを。みな征伐け治め給ひて。大倭のみやこに歸り坐けるに。近江國の伊吹山なる。荒ぶる惡神をも取給はむと。其山にのぼり給ふに。其神あらき氣吹を起せるに。尊その惡氣にあたり坐て。御足こひ腫たりしより腦み給ひて。遂にこゝにて崩御まししかば。即此所に。御陵をつくりて葬め奉れるに。白鳥となりて。飛出たまへれば。その御陵をひらき見るに。たゞ御衣のみ存れる故に。こを白鳥の陵と申すことは。古事記。日本紀。熱田古緣起などに見えて。我が師本居翁の古事記傳は更なり。余が古史傳にも。くはしく考へ註せるが如し。斯てこの御笠を藏めし丘はも。いと古く御社たてゝ。彼王の御靈を祝ひまつりて。御笠殿とも。御笠社とも申し來り。その里にます。熊野社祠の神主鈴木氏なむ。往昔より持いつき奉り來ぬるを。御稜威いち速くおはし坐すは。この御笠はも。小緣の物にあらねば。殊に御靈のとゞまり坐る故にや有らむ。然るは古く。かさと云ひしは。世の常の笠はさる物にて。軍の時に用ふる甲をも。しか言ひし事。我がふみどもに。考へ明せる如くなれば。此御笠と申せるも。かならず王の御軍に出給ふごとに。冠たまへる御甲ならむと思はるればなり。さて此を御笠社とまをすより。人の體にいづる腫物。また瘡といふ病をなほし給ふと。世にいひ傳へて。其なやみ有る徒がら。近き邊りの國はさらなり。遠き國々よりもまゐで來て。そのよし願まをすに。いと速なる驗ありとぞ。この大神の。さる病どもを直し給ふと云こと。心得がたく思ふも有めれど。是なむ尊き神の御惠みにて。かの吉野山に鎮座す。水分神とまをすは。雨を掌たまふ神に坐すを。いつの頃よりか。唱へ訛りて。みこもり明神と申すにつきて。子なき者いのり申せば。懷姙らしめ給ふ神ぞ。と世にいひつぎて祈り申すに。必その

驗ある如く。笠をはれ物のことに云ひなして。人の眞心に祈り白すによりて。その御使ひ神などの。大神の幸御靈の。御稜威をし賜はりて。癒し給ふことと思はる。最も奇靈なる御わざなりかし。まして御足を損ひ給へりし。御古事のあれば更なり。斯ていにし文政六年八月のころ。己みやこに上れる時しもその御陵にまゐり。御笠祉にもまゐでゝ。拜み奉れるに。其邊りの老人共の言に。他病にても。腫もの或は。瘡など名けて。ねぎ言する人おほかるに。悉くその驗ありといふに。畏けれど。己があり經るやまひをし。腫物ならねど。其病ひに准へて願まをし。此病ども癒なむ後は。人づてにても賽し奉らむと。ねもころに祈り申して歸れるに。其病どもみな癒たれば。いかで人傳にても賽し奉らむと。常に心にかかる物から。よき傳なくて過しぬるを。今年その祉に仕へまつる。鈴木信房なも。大江戸に來て。わが敎へ子にさへなりて。此御祉の由よし書てと請るゝに。己としごろ信じ奉れる由緒もあれば。かへり白しの御初穗そなへ。なほ行末の事の祈りをも賴み。打いさみつゝ筆とりて。誰もよく讀み。よく聞ゆべく。有のまに〳〵御由來を。かく書しるせる時は。

文政十二年といふ年の九月。平田篤胤

〇池田瑞英老に贈られたる詞

池田の君の御もとに參らす

きのふの夕つかた。わくご瑞長のきみ遣せ給ひて。先ごろむすこを訪はせ參らせし時に。見せおこせ給へるおほん長歌を。いかに見てや有ると問はし給ふに。此ごろ十日あまりは。御おとづれも訪ひ侍らず。おのれは春さり來し此かた。例のしりなる病ひのいた起りて。道ゆきがてに。常は心にたえぬ物から。ほいなく怠り侍れば。ゆかしと思ひ給へられしほどにて。御有さまども。詳にうけ給はりていとうれしうなむ。しかは有れど。そが中に。またいといたく驚かれぬる事もぞ侍る。然るは今に。かの石野ちふしこ齒醫師が。しぞこなひつる齒ぐきより。洩いづるいきざしのやまで。名におふ多喜の安叔ぬし。今の世の口科と聞ゆる。山田うぢの療りわざにも。得くすゝりあへず。御みづからも。倭のからの。有ゆるふみども。さぐり見ましつゝ物し給へど。しるしなく。しがうへに。痙や起らむ。癎や出なむとおぼさる

る證もそはりつゝ。夜るひるとなくなやみ給ひ。かくしも經氣のもれ出て止ざれば。遂には身ぬちの經氣。みな出去りて。命はたもち難きことわりにし有れば。終り近きに有りとて。そをきゝ惡しきこと宣ふとて。御友どち族(うから)たちなど諌めまをせば。却りて。御心に叶はで。御やまひも募るげに見え給ひ。後の事など何くれと。宣ひのこし給ふよし。先ごろむすこが參れるとき。直に宣へる御言。またなが御歌のさまにも思ひ合されて。いと歎かはしく。かつ驚かれて。いかで今だゝに走りゆきて。見參らせばやと思へど。己れもまた。足ひき難きやまひ有るを何とせん。かれこゝにけふ此御うたを反し參らするついでに。とひ聞え參らすになむ。そも〳〵君とは。去年のむつき。孫むすめがもかさの時に。はじめて共に後かけて。こゑきゝ知れる友となり侍りしことは。さがな口には侍れど。今の世にくすしにでもと。頭まろめて。世をあざむく倫ひは。今いふ限りに侍らず。大醫よ學醫よと。世にもて囃さるゝ徒にも。葛仙公。孫眞人などの。謂ゆる大醫は。蓋し是あらんか。我いまだえきゝしらぬ中に。君はその父ぬしの。凡醫にまさぬ御種のしるしにや。その御わざは更なり。その學びも大かたならず。物し給へるうへに。易の學びにさへ長たまへれば。孫氏が謂ゆる。目なくして夜ゆくたぐひならず。古へにも恥給ふまじき。大醫となむ思ひ給へられてのわざにて。八千世に語らひ參らせんと。思ひまけてなむ侍りしを。思ひきや。交はり參らせて。いくだも有らず。然るしこ齒いしがしそこなひに。然るしこ病ひを得まさむとは。まことや君が。さるいみじきくすし學びの。奇しきやごゝろの思ひかねに。思ひ定めたまへる事にし有れば。果して宣ふごとく。其病ひは。不治の病ひにもやと思はれて。悲しなど云ふも更にて。舌あがり言いでず。腕たゆみて。筆のたてどもえ知られ侍らねど。また思ふひとふし有なるを。云はではいかでと。しひて利心ふりおこして。やをら筆とり。下にをぢ〳〵書つらね侍るを。したしき友のまごゝろと。中になめしき言の有むをば。ひろき大き御心に。見なほし聞なほし給ひて。うまくきゝとり給へとなむ。穴かしこしや。

げにも君の宣ふごとく。その御病ひは。いゆまじ

きかと思ひ歎かるゝよしは。西洋のえみじがともの說とて。或人の漫錄にあげたりし說を。若きほどに見侍りしなかに。或國に名醫ありしが。其國人の。いたく星家方相などの說を信じて。未來を懼怖し。その神氣をなやまして。禍ひを招くことを憐れみて。その妄說を除かむことを論つらふに。國王はさらなり。臣民ともに。その論を用ひず。彼醫ふかく思ひ慮りて。王におもき刑に當れる囚人を乞ふて。恐懼のよく神氣を亡ぼすことを徵し。心見むと云へば。王その言をきゝ入れて。一人の囚人を與ふるに。くすしかの罪人にむかひて云けらくは。汝が罪いとおもく。首を斫るべきに決まれるを。王そのいたく痛まむ事を憐れみて。我にいましが身をいため傷ふこと無して。死しめむ事を命せられぬ。我その術を知れり。針をもて脉をさし。少しく血を出さんに。聊かも痛みをおぼえずして死なむと云に。囚人をがみ謝して。痛む事なくは。心を安むじて死につかむと云ふ。醫すなはち。布をもてその眼をおほひ。その臂をいだし。芒針をもていさゝか刺すに。創つかず。また血をも出さず。別にひそかに陶器をもちひて。底に穴ひとつ穿ちて。其の中に水をもりて。穴より出し。こを椀にうけしめ。僞りて聲を發して。血既に出そめたり。人身はたゞ血十斤のみ。かくの如く。出ること十椀ならば。死せむといひて。一椀ごとに。其數を云しむ。囚人その水聲をきゝ。またその數を云ふをきゝて。信に血の出ると思ひ。漸々に衰へよわりて。十椀の聲をきくに至りて。果して死たり。もろ〳〵その骸を見るに。少しも傷ふ所なし。國王はじめて。彼醫の說は。眞實の理論にして。恐怖のよく精神を亡ぼす事を知たり。と見えはべり。是によりて思ひ侍るに。謂ゆる經路の精氣もれて。保ちがたしと思ひつめ玉はむには。漸々にまことに精氣耗散して。つひに覺悟し給ふごとく。不治に及びはべらむかと思ひはべり。
また大河內何某といひし人はも。名におふ猛きものゝふにて。朝鮮の役に。かの國にてふるまへりじ事ども。かき記せる物の中に。五寸七寸ばかりの切疵をおへること。數しらず。ふともゝよこ腹のあたりに。鐵炮玉をうけたる事もまゝ有しかど。

事ともせず。玉を拔たるまでにて。療治をも加へねど。皆おのづからに癒けるが。なかに一つ。頭甲をとほりて。腦にうち込れたる玉はぬけずて。其疵いえ合たれば。世のかぎり。頭にその玉のこもれるまゝに。百歳のよはひをこして。老死たりしと云ひ。其言にも。人その身に鐵炮玉をうけ。疵を受れば。まづ死やすらんと懼怖して。精神を耗散するが故に死ぬるなり。其怖れだになければ。死ぬる物に非ずと。常いへりときゝ傳へはべり。西洋人の説に。頭腦は。神經の會する本所なれば。こゝに少かも疵つきては。決めていくることわり無し。と云へるを。其方のもの學びする徒など。いたくほこれど。彼よりはやく内經に。頭は諸陽の會といひ。仲景翁の語にも。頭者身之元首。人神之所注。氣血精明。三百六十五絡。皆歸于頭。頭者諸陽之會也。とありて。いと大切なる所なるに。其腦中に。かの玉をうけてだに。勇み猛き人は。精神をうしなはず。また市中などに見る犬の多かる中に。脊骨を切られ。或はわき骨きり放たれて。腹わたをひきつゝ在るも多きを見はべるに。つひにいえて元のごときを。をり〳〵見はべり。此は勇氣の故にには非ざれど。死てふことを知らず。ただ痛みをうれふるまでにて。死を怖るゝ思ひのなき故ならんと思はれはべり。

さて去年の冬。とひ參らせし時まをせる如く。篤胤もいにし文政五年の秋にはべりき。君のごと。奥齒のゆるぎ痛みて。堪かねしかば。齒をぬくものに拔かしめたるに。なほ早くや有けむ。一日ほどは。血とまらず出けるを。辛うじて止めたるに。其齒のあとより。君が宣ふやうに。氣のもれ出て。數日ありしかど。身體諸器の官能をも。ほど心得て侍れば。元よりかの謂ゆる經絡の説を信ぜず。齒ぐきは。某の經絡のかゝる所ぞなど云ふことに心なく。たゞ彼拔たる穴より。氣のもれ出て。上氣のこゝち有るがうるさくて。先に申せる如く。をりふし鑄物せんとて。白蠟を煉たる時なりし故に。それもて其穴をふさぎ。別に一神方を用ひ。かねて修し得たる。靈根を固むる術を行ひ侍れば。十日ばかりにして。何事なく癒てはべりき。先ごろ此よし。つばらに申さむと思ひて參りしかど。君

にはたえて。人の云ふことは聞かず。人の藥をも用ひずと立給へるよし。をりにふれて宣ひ出たりし故に。さては我が方術をも。用ひ給はじと思ひ給へられて。たゞに蠟を用ひたる事のみ申して。歸り侍りき。案ふにおのれ。君とおなじ病ひなりしかど。經絡の說をし信せず。かのわき腹きり破られたる犬の。死を知らざる如く。恐怖に精神をへらすことの無りし故に。何事なく癒たりしが。彼此おもひ合すれば。經絡說の怖れをやめて。大河內氏の勇氣をまねび。犬の死を恐るゝ心なきにならひ給はむかた。勝りておぼえ侍るは。決めておのがひが心に侍るべけれど。君しばし。日ごろの學びを放下して。此御こゝろになり給はゞ。いかに侍らむ。○君はその御父うへの御心をつがして。其わざをなしはて給はでは。え有まじき任にあたり給へること。御著述どもにて知られ。かたへより思ふ所も。かならずしか志ざしたまふべきことに思はれ。また君をおきて。其わざをとげ得む人の。ことに有べしとも覺えはべらず。然るにその大業を。なしをへ給はざらんは。ほいなしとも。ほいなき事のきはみにはべり。君すでに不治の病ひとさだめて。他の醫藥をこばみ給ふときくに。かく申すはいかゞなれど。しばしまげて。我がみづから驗みて。しるし有ける藥石と。方術とを用ひ給はゞいかゞ。此は信用し給はんとは。思ひもかけ侍らねど。正しく己が身に。しるし有ける方術に侍れば。唯に手をつかねて死をまち。何くれととひ藥用ひ給はんにはまさり侍らんか。君の高き醫學の御力にて。不治とさだめ給へる病ひにし有れば。癒ざらんも知べからねど。こは謂ゆる。人事をつくして。天命をまつとか云ふにも叶ひ。かつ御歌によみ給へる。御父母の遺體を重みし給ふ旨にも叶ひ侍らんか。己はかねて申せる如く。むかしは人の病をもくすり侍れど。思ふ旨ありて。十年このかた匕とらず。我が身の病ひをも。人に託して。いさゝかも。我が思ふ旨をのべ侍らねど。もし用ひ給はんとならば。その一藥を調へて進らすべし。然れど其藥味をしらで用ひむ事は。いかでと宣はんならば進らせじ。然るはその藥をあかし申さば。いと易けき藥なるに。信用し給はじ。

されば藥は。御病ひいえての後にあかし申すべし。いと平々たる藥に侍れど。丸藥にし有れば。あやぶみ恐れ給はむか。然らば其丸を。おまへにて。己まづ何ほども。のみ心みて進らすべし。さる病ひにはよくきけど。少かも身にさはりなき物なる事。粳米も白虎湯に調じては。甚じき功あれど。常に食して害なきと。おなじ理りにはべり。かくまで申すも。君がつねに。御父の大業をはたさんと。つとめ給ふ御心ざしの尊く。かつ己もさる大業に志ざして侍れば。謂ゆる同病あひ憐れみ。ただに死をまち給ふと聞くからに。むつび參らせし日こそ淺けれ。心のむつびは。もゝとせの交りにも勝るべくおぼゆれば。もたもえ在られず。まごころの有のまに〳〵。きこえ申すを。いかであはれと聞き給へとなむ。穴かしこ。

もんじやうの十まり三とせといふ年のむつき。十まり九ぬかといふ日。

池田の君の御もとに白す

○春の紅葉のはしがき

わが師本居の宇斯の玉鉾百首に。「家も身も國もけがすな穢れはし。神のいみますゆゝしき罪を。」また「竈の火のけがれ忌々しも家ぬちは。火し汚るれば禍おこるもの。」と詠れし二首はも。玉幸はふ神世のまさ道。まつぶさに見し明らめて。火の汚るれば。伊都速き火牟須比神いち速びて。災のおこる道理をし。世に誨されし歌ごもなり。然るはこの神はし。掛まくも畏き。皇祖二柱の大神の。麻奈弟子に生ませる神にて。火のもとつ神にしませば。其生ましの時しも。御母の神の。御保登やかえて。岩屋をさして幽りませりき。其は後のさはりを治めむとの御わざにし有れば。是ぞ對屋のはじめ。汚れ火の始めには有ける。さるを御父の大神。いと異かる事におもほし坐して。其戸おしあけ御覽はせれば。女神いたく恥恨まして。つひに醜めき豫美都國に。神さかり往坐しけり。こゝに男神。いといたく歎かひまし。此の御子の生まさずは。然ることの有まじ物をと。かつ御怒りまして。十握の劒もて。火神を斬給へれば。その御靈の火ちりほびこりて。木草いさごは更なり。有ゆる物に。火をふゝむ事とはなりぬ。世の諺に。火神は。ことに産や。對や宍むらの汚れを惡

ひ。刄物を竈所におくことを忌まひ。火の穢るれば。荒び給ふと云なるは。この由緒による事なり。そは神の御ふみの傳へをし見れば。穢れはすべて。宍くしろ。豫美につくさふ道理しるく。御母の神は。その國に往まし。おのれ命は。その事ゆゑに斬られ給へれば。かの國につける事物をし。いたく惡ひ給ふ故に。荒び給ふになも有ける。かれ是をもて。御母の大神。その豫美道より歸りまして。また更に。水神。土神。ひさご。川菜をうみ給ひて。此荒ぶる御子の荒びせば。水の神はひさご。土の神は川菜をもちて。鎭めまつれと教へ給ひき。是ぞ火しづめ祭りの事の本なる。かくて此神の御社。こゝら有るが中に。山城國愛宕郡なる御社をしも。阿多古神社とまをす事は。古き人の言に。御母の神の。燒そこなはれ給へる故に。仇子のこゝろぞ。と言へるは然ることさにて。此御社を。火守の神と。世にもて齋くことは。火鎭めまつりの旨にもかなひて。げにも宜なるならひにこそ。然は有れど。さるに取りては。亦いとあかず。口をしき事もぞ有んなる。然るはこの大江戸はしも。四方八方の人ども。入來つどひて。天の下にたぐひ無き。眞盛りの里にし有れば。人のいへゐは。戸牖のきかひ。さり葺く萱も。きしらふまでに立つゞき。千萬づの事ども。足はぬ事なく榮ゆるからに。諸こしの戎學びはさらなり。遠き西なる。えみしの國の。もの學びさへに。起り榮えて。其さまざまをし好む倫ひは。彌日けにふえ弘ごりつゝ。神の御國の古へぶりを。惟神なる道とも知らず。からの徑もて。何くれと云ひけちて。血いみの汚れ。宍火のけがれを重くし給ふ。神のみかどの御定めをば。いと心せき此國ぶりの。ならひのごとと論ひかすめ。獸食ふとも。何ちふ汚れかは有らむ。我らが學ぶにし國まなびに。然る窮理は無きものをや。など言ひ弘むれば。知るも知らぬも。然るえびす心にうつり染つゝ。その所行にならふ徒がら。日にけに多くなりもて行くとぞ。信にさも有らむと覺ゆるよしは。年々に獸の宍うる店の。まち〳〵に建まさるにて知らる。此はしも。己がいと若かりしほどは。冬ひとへを着るばかりの。貧しきをのこの。寒さに堪えぬか。然らぬは。病人のくすりにとて食ふが。まれに有りしも。人には恥かくし在けるを。今しは病人

ならず。筑紫の綿あたゝかに。美麗しき衣。かさね着たる富人さへに。憚らず食ふことゝしも成ぬるは。外つ國ぶりに率これる故ならざらめや。其がうへに。處がらかも。對屋いさはり。産屋の汚れも避あへずて。中つ世に御おきて有りし。甲乙丙丁のついでも知らず。謂ゆる目かし口かしは更なり。かしこに行觸れ。こゝに來ふれて。互に汚れかはしつゝぞ有んめる。然れば此をしも。古の道のまに〳〵。種々まぎてば。秋の末より春かけて。獣うる間はさらにも云はず。中より末のもろ人に。甲乙丙丁の汚れにもるるは。多くも有るまじくぞ所思ゆる。然しもあまたの人の身と。家の穢れては。また自づからに。處をもけがす理にし有れば。火神の御こゝろ平穏ならず。御まもりなき時をまち得て。かの古くそとびの。天伎都爾と名におへるが。五月蠅なす喧ぎたちて。或はわろ者につきて火を放たせ。或は人に火の過ちなどせしめて。忌々しき災ひを引おこす趣なること。古き書にも何くれと見ゆるを。此まが者等はも。皇國にもとより。有りこし物にはあらず。立すくむ中子の道の渡れるより。出來し物なり。其は近く。林

羅山先生の說ごとに。我が邦にて。天狗としも云ふは。沙門の化れる物にて。或は佛ぼさち相を現はして。人を惑はし。或は山ぶし狐などにも化りて。人の福あるを禍となし。世の治まれるを亂さむとかまへ。火災をおこし。鬪諍をも起すものぞ。と云れしを以て知るべし。實にも今。この春の紅葉の。神異のくだりに。集めしるせる條々を見るにも。吾妻の遠のみかどに。學びの道をひらかれし先生とて。畏くも思ひ得られ在けりと。いと珍らしく。感かしき說となも思ひ合さる。然れば。古ことの學びせむ徒がらは。能くこの由よしを辨へて。大祓ひ。また火しづめ祭りの神わざはし。懈怠るまじき事にこそ。たゞに火をおろそかに過てる故に。水ながしとは成りぬとのみ思はむは。凡常のことにこそ有れ。古語に。よく古へをいふ者は。今にしるし有り。よく人の道を知るものは。能く天地の道をも知ると云へり。顯世のことを述むに。幽事のもとをし尋めずは。物識れる人としも云はめや。抑このふみ書つめし。重恭の子はも。我がふるき敎へ子にて。元より筆とるわざにさとく。常に然る意ばへをも思ひて有れば。

現にありし上の御おきては更なり。幽れて知られぬ物のわざをも。見きゝし限り。かき集へたる此ふみよ。見るにうち置れず。或はきも冷え。あるは歎かれ。或は尊き御惠みなど。具さま詳にかき寄せしは。石の上ふる事ならねど。生々の事知らが。さえまぐりに。書散せるさかしら書の。とり見るより。まづ眠らるゝ類ならず。ありの儘なる。實事を傳ふる書にして。實事のうへにて道をしる。我がいにしへ學びのたすけと成り。また後の世人の。この災事をしのがるべき。心ごめとも成なむと。此よなく悦びおもはれて。斯なも初めにいぶき添つる時は。文政の十まり三とせと云ふ年のきさらぎ。初午の日になも有りける。氣吹の屋のあろじ平の篤胤。

かく書をへて見れば。一つの考へめきて。端がきとしも見えぬが。我れながら傍いたく。ひとり笑ひせられて。

かきよする春のもみぢの端がきに。はしがきとしも有らぬおち葉を。

○遊林家別業詞并歌

文政の十まり三とせと云ふ年の。かむな月の十まり八日といふ日に。阿部米花君の。さそひ給ふに。したがひ參らせて。した谷谷中なる。林祭酒君の別業にまゐりぬ。けふは日より殊にうらゝかに。風もなし。己は。屋代輪池翁をまちあはせて。家を出たるは。未の刻なるべし。參りつきて問へば。阿部君はいと早くわたり給ひて。すでに人々と共に。薗の左りなる道より。見めぐり給ふほど也。屋代の翁は。元よりあないを知られし薗なれば。先にたゝして。右りなる道より行かば。山なかにて。彼の君たちに。めぐり逢はむと云はすにぞ。己そのあとにつきて。はひりを入れば。まづ芭蕉の原なるが。數しらずなみ立たれど。葉はみな既に黄ばみたり。こゝを蕉塢と云ふとか。

冬さむみ色こそうつれはせを葉の。ゆたけき蔭に我も肖はや。是より進みゆけば崗あり。蘇鐵をおほく植られたるに。こは寒さをいとふ物にしあれば。一もとごとに稻だはらをまとひて。圍はれたり。

たゝに見そてづから君がみの着せて。草にもかゝる冬の惠みを。なほ行けば。御はやしの。いと茂れる木のまに。楓のもみぢ。時を得がほに錦な

せり。人も見しかは知らねども。木の本に。落葉を焚さしたるあと。三ところばかり有りしは。いちはやく酒をあたゝめし。くせものゝ態にやあらむ。

もみぢ葉のおち葉は焚きもゆるさなむ。手折なもちそ君が見し木を。しかしも楓のしげかるなかを見わたせば。立まじれる櫻の木の。かぎり無くおほかり。

諸越の人に見せばや日の本の。はやしのさくら花さかむころ。此あたりより。眺めつゝなほ進めば。孟宗の竹藪あり。から國の虎ちふ神も出づべくしげれり。また其がたへに。畠もおほかり。御池よりわかるゝみぞの。川にひとしきが有るに。かけ橋を渡されたり。そを渡れば。のぼり道にて。漸々に高かるを。木の根にすがり。かつらに取つきなどして。彌たけよぢ登るほど。いとさかし。

岩根木根こゞしき道もふみひらき。見よとふ君がしるべなるらむ。のぼりつけば。祭酒君のいこはしのさずきあり。翁の思ひまけられしもしるく。阿部の君をはじめ。松平内記君。法印栗本ぬし。間宮ぬし。三島ぬし。鈴里ぬしなど。なほあまたの人々。煙ぐさくゆらしつゝ。山を見ておはせり。其さずきのさまは。岩にわだかまれるおほ木の根を。いしずゑに取なし作りて。わざと葺がやはおほはで。たゞをばしまをなむ寄られける。それより見おろせば。いや丈なる谷の上なりけり。ふりさけて。武藏野の名におふ。にげ水の逃るを。いづこまでもと。野をきはめて追見れば。日高見の國なる。にぎりい筑波の山。かへりて目のしたに在るごと見えて。彼にげ水と見しは。其峰よりおつる。みなの川の流れにや。とおぼえしもをかし。

御心をはやしの君のいこはしの。佐受伎の床のながめ厭ずも。折しも木末より。そと吹おろす風のむた。凌霄高上クル摺天莊。極埜低臨ス握飯山。と聞なさるゝ聲あり。あやし。此はこの嵩にさもらふ。山彦のうめきにや。さればこそ。だみ言のたゞ語なりけれ。後にきけば。元よりこの佐受伎の名を。摺天さうとつけ給ひしとか。さて行くさきにて。又めぐり逢はむとちぎりて。阿部の君など各々は。翁とおのが上りこし道を下り給ふを。翁とおのれとは。先にその君たちの。上り給へる道へと下りつ。ほそ道の

けはしきを稍下れば。御池よりわかれし小川を中に隔て
して（にてイ）。いほ二たつむかひ立たるが。丸木もて作られ
たり。ひとつはつぶらなす岡の上に。八かどに作り
て。こよなく足の高かるは。むかし有ける。足ひと
つ騰りの宮と聞えしも。大よそかゝるさまにや。な
ど思ひ出さる。さて此なたの橋より望めば。此あた
りのさま。いはゆる妹背のやまのさまを寫されたる
か。と思ひなさるれど。そは中々のさかしらなるべ
し。其いほどもに。みな額を掛られしを。其邊りの
目もあやなるに見いりて。とく其もじを忘れたるは。
我ながらいとむくつけしや。是より右りの方にやゝ
行けば。梅の木のいとしげく。立なみたる墟あり。
こゝを梅墟と名づけ給ふとか。好文とふあざ名もゆ
かしく。其はやしのもとに休らひて。

冬こもり花こそ見えね立よれば。いこひし君が袖
の香ぞする。是よりすこし放りて。いと清らに造
れる祠あり。さし覗けど。なにの神靈をいはひ給ふ
とは知られず。されどたゞならず覺ゆれば。ぬかづ
きて拜みぬ。梅墟に遠からぬ邊りなるは。和邇吉師
にやと思ふも。己がわたくしの推はかりにこそ。偖
かく見もて行くほど。阿部の君など人々は。とくさ
きに物して。尾花が原なるいほりの。むしろ三ひら
ばかり敷たるに。割籠（わりご）ひらき。酒のみておはせるも
心にくし。とく來よと招かるゝに。所せく居まじら
ひ。膝すりあひて。汲かはせる。得もいはずたのし。
尾花を題に。いづれも一首とあるに。例の山びこが。
舌たみたる口ぶりをいかにせむや。

招くまによりこそ來つれ冬尾花。かれなで久に見
むよしもがな。かゝるほどに。早くも黃昏になり
ぬ。およそこの薗ぬちに。いほりの七つ八つたちた
るなかに。池のまおもてに。二つ並べて大きく建ら
れしおもやあり。人々とゝもに入りて見れば。いと
やごとなきうま人たちの。色紙たにさくなど張まじ
へし。額をなむ掛られける。此はけふの御もてなし
にやあらむ。この御いほより。池のおもてを打見や
れば。その廣さはみづ海にもたぐひつべし。底ひな
き水のすみわたりて。彼なた此なたに。えださしも
とほれるさま。云ひしらずめでたし。世にもこの御
池には。いみじきをろちの。ぬしとなりて潛むとい
ふは。さもあらむかし。池がみなる所は。御いほの

をばしま近かるに。眞鴨あぢ鴨など。ほど近くうら安げにむれゐて。浮ねなどすめり。

をばしまに近くうき寢の水鳥は。かねてや君がかくならしけむ。こと〵きにや。吾は見ざれど。池のあなたに渡せる橋を。狐とふ犬をそ物の。人おぢもせず。いとしづかに渡りゆきつと。阿部の君のかたり給ふに。これがふる事のおもひ出られて。

おそましと人のかしこむ毛物さへ。來つゝ寢よとやゆるし置けむ。かくてその御いほに。みきたばりつゝ。くさ〴〵の事ども。亥の時ちかきまで語りあひて。諸ともにまかりまをして。御かなどを出れば。東のそらに月たかくさしのぼりて。歸り路のいとしろく見わたされしも。かたじけなかりき。

ひらたの篤胤

こは阿部の君の。その日ありし事どもを。かきて見せよと宣ひおこせ給ふに。わりなくてなむ。あはれ園の御あるじの御目にふれて。ひと言の御かへしだに。うけ給はらばや。

○風月集初編序

今は近むかしと成りぬ。北川の眞顔の翁はも。わが睦魂あへる舊き友にて。世にまたなき宮ぶり歌の。みやび雄なりしことは。己さきに。宮備てふ語の意をのべて。譽たる文に。つばらに言へれば。今さらに云はず。此翁のさる宮びをならふ人々。いや千人あるが中に。するがの府なる柴崎の直古をし。いかに思ひけむ。歌よむ事は。道の學びなくてはとて。己れにつけて學ばしめき。其は今より二十とせさき。文化八年と云ひける年になも有ける。故こゝを以て。其年の神無月に。直古が江戸より歸るに伴はれて。かしこに物して。古史の大業の本はし。此直古が家にてぞ成れりける。其ほどのあるじの情は。こゝに盡すべくも非ず。かくて年ふるほどに。翁は早くも。七十ぢを三四つ越たり。然れど猶其道のあと。繼しむべき息子がねも無りしかば。己この直古こそと勸むるに。をぢも然は思ひながら。此人はしも。國放れるうへに。元より家の業わすれぬ人にし有れば。此に來て。我が後を繼がむこと。叶ふまじと云ふに。家の業は。既におとなに成たる子あれば。其にゆづりて。師の道をつがむに。何でふ事か有らむと云へば。げに然る事なり。よきに賴みきこえ參らすと云

ふにぞ。折こそ有らめと待つほどに。駿府より新庄道雄來れり。これも己とをちと。二人がをしへに從る人なり。故この道雄が。國に歸る時に。その事ほぼ語りて。彼人にないひそと止めて。只何となく逢はではえ有らぬ事しあれば。下り來ませと言傳せるに。直古は何事とも知らで。はろ〲に己がもとへぞ下り來にける。こゝにわが思ふむねを語るに。身におはぬ事といなみ云ふを。何くれと誨せば。聽入れつゝも。なほ今より一トとせあまりは。家のなり遁ろひがたしと云ふに。をぢはなほ身づよなり。然ばかりの間なに事か有らむと。其よし老翁に語らへば。涙おとして歡ぶにぞ。己その中とり持て。まづ親子のむすび成しめて。此こと廣く人にも知せむ事は。直古が家のなり。其子にゆづりて後にこそと。三人にていひ合せたるは。前おとつ年の霜月にて。この事はしも。老翁がむすめ。□□□氏の妻なる。佐久子の外に。知たる人は有こと無し。かくて直古は。あくる年の二月まで。翁がもとにつかへ居しが。一トまづ國へものして。家のこととりすべてこそ。出こめといひおきて。三月のはじめに國へ歸りぬ。然るにその五月より。老翁やみつきて。六月六日の日になむ。七十まり七つのよはひにて。あたら此世を隱りいにしは。畏きや。幽事しらす大神の。さる宮風ことをし。きこし看さむと。其の御もとに。召給へる事とは。思ひ給へらるゝ物から。聲きゝ知れる久しき友の。長き別れの悲しさは。云む方なし。然は有れど。吾には父にもたぐひつべき齡なりしかば。此わかれは。然る事に思ひ宥めらるゝ方もあるを。世に在られしほどに。取結べる世繼ぎの。ひろめせざりし事の。ほい無しとも本意なく。くいのやちたび搔くどけど。其のかひ無く。去年の冬まで。長息てのみぞ有ける。然れどこは。己が睦ましき友を思ふ心の私にこそ有れ。生の子なる佐久子のなげきは。云ふも更なり。近く居そひて物問へる人々の。師を失へる悲みは。わが類ひならめや。闇にともし火きえたる如く。手まさぐりつゝ。歎きて在りと聞ゆるを。老翁のたまの天翔り見て。いかに哀れと靈幸へけむ。橋の照道。□□□の枝成など云ふ人人。內々の定めも。くみ知りてや有るらむ。いとまめに。宮風こゝろをふり起して。直古を國よりよび

て。人ごのかみに推立つゝ。翁がはやく。立置たる法のまに〳〵掟てゝ。此みやびに遊ふ宮風雄たちの。歌ども多く集へよせて。其歌どもの卓れたるをば。かく彫まきに撰びとゝのへて。世に傳ふる事と成れるに。己もさきのくい歎きは。とみにはるけて。悦びにたへず。有りしまごとを書つらねて。足はゆかねど。天の下のみやびを達に。聞え參らするを。いかで能くきゝ取まして。今より次々。彌千ぢの卷の出來べく。よみ給ひ出し給ひて。翁が立たるこの道の。幾久に榮ゆべく。互に我彼のへだてなく。共々にいそしみ給へと勸むるものは。伊吹廼屋の主。ひらたの篤胤

天保二年といふ年のむつき

〇幽郷眞語はしがき

今はむかし我が友に。木村何某と云へる人あり。呼名を力藏と云ひき。裝束の衣紋といふことを習ひて。ひろく人に交はる人なりけり。今指をゝりて數ふれば。文化三年といひし年の春の頃なりしが。語りけらくは。此ほど薩摩國しらす殿の御内なる。伊木何某てふ人に聞る事あり。そは彼國の霧島山より出る。明礬を製らるゝ所に使はるゝ小者に。何某とか云男有て。ある日おもほえず。彼山に鎭まり居ます。女仙の許に行たりしが。其後もをり〳〵に往來して。しか〳〵の事どもありける由。詳にきゝつと語れるを。己もとより。然るすぢの事どもは。おほろかに聞ながし得ぬ性なれば。いかで其をのこに。直に逢て問はゞやと思へど。國放れゝばせむ便なく。せめてはその伊木氏に。たゞに聞ばやゝと思ふに。其つてさへなくて過しぬるを。其後つねに此事の忘られず。年ふる間に。顯世幽世の。さかひ別なる故由をも。すき〳〵に委く思ひ得るに就ては。霧島山なる神界のことの。いかで〳〵と思ひわたりけるに。前のとつ年に。かの御内なる。大橋昌尚てふ人。初めて我門に入れるより。其紹介にて。其國の殿人たちも。次々にあまた名簿を遣せて。教へ子となれる中に。木村鈴滿と云る人あり。呼名を休右衛門といふ。歌もよく詠み。書つめたる物も。これかれ有りと聞ゆるに。彼をのこが。霧島山の。神のさかひに至れる實を尋ぬれば。其れいと正しき物語りなり。吾も久しく聞ながら居つれど。今師のかく問たまへば。國

に歸らむ後に。反さひさひ正して。書記し見せ奉らむと云ふに。返す〳〵勸めてやりつ。扨後に消息するごとに。何に〳〵と催がしやれるに。猶聞はてぬ事あれば。熟くとひ畢てこそと云を。いと待わぶる間に。悲しきかも。去年の五月に。鈴廼はしも身まかりぬ。故また誰にかも誂へむと。歎き居つるに。今としまた池田雍見といふ人の來れるに。此事を問へば。をろ〳〵聞たもてる事もぞ有るとて。やがて其事どもを記し見せて。猶國なる友にも問やりて。きこえ申さむと云しは。往し卯月の始なりき。斯てこの八月になりて。この幽郷眞語をもて來て。國なる友のもとより。彼女仙の事。かく書つけて遣せ侍りといふに。憘しなど云むは世のつねにて。取る手も遲しと披き見るに。奇くも此を記せるぬしの。殿の仰せごと承賜はりて。其邊り見巡らるゝ時しも。ゆくりなく其男に。この六月に逢て。問明せる事をし。かく詳にかき取られたる。文辭のあやに調へる。學びの力は云ふも更なり。其男のけはひ人がら。而もちさへに。今こゝに正目に見る如く。物せられし眞語の。いと辱く。三十とせ近く。神にさへこひ願申せる事の時のゆければ。神のゆるし聞え給ひて。かく知しめ給へるにこそと。尊く覺えて。むすこ銕胤をして。常に齋く神の御たなの前に捧げて。拜みぬかづき。謝まをさせつる事は。池田氏のそこに居あひて。見られたるが如し。然るは神世の神たち。既に顯幽わかりてこそ。現には見え給はね。神ながら常しへに。鎭まり坐ますことを。何か疑ひ思ふべき。然るを。今の凡人の。其御形を見奉ることなき故に。崩御ましつと思はむは。最も忌々しく愚なる心なりけり。抑神の御上は。神の御典を謹伺ふ儘に。最も尊く。いとも畏き御事とは。想やり奉らるれど。正目に拜み奉らむには、又殊に。其尊さの類ひなく。其御稜威の彌增りて。おはし坐さむとは惟ひ奉るものから。然る事ならざるを如何せむ。しかるをこの善五郎をのこ。又さきに寅吉と云へる童子の。あまた年。ある神仙に仕へ奉れるなどは。正しく神の許して。其界に入しめ給へるなれば。殊なる御靈を蒙れるにぞ有べき。斯て此童子は。御暇賜はりて後は。予が家に來れるを。數年とめおきて。懇に問ひこゝろむるに。我が古道の學びのうへに。思ひ得たる事少から

ず。是はた尊く辱き事にこそ。あはれ吾黨の人々よ。是等の眞語を承賜はりて。今しも神世の神々の。人の目にこそ見えまさね。堅石に常石に。御坐すべき理を辨へ。人の世となりての後も。千世萬世も長らふる。神仙の多く坐ます事をも知り。また幽世の有状の。靈く畏き事をも悟りねかし。故この書しるされたる八田ぬし。また此を傳へられたる池田氏にも。此悦び聞えがてら。少か此由をかき添るになむ。時は天保の二年といふ年の八月廿まり四日といふ日。

天保三年七月十五日カ

氣吹舍文集一の卷

○八家論

有客問予曰。夫聖不獨尊。理難單盡。故武王咨法於箕子。仲尼問禮老聃。故上聖亦必待師授而成功。上士常虛己以容人。孝弟忠信之目立。而天下之事可治。禮樂射御之法備。而揖讓進退之旨存焉。此所謂千載不拔之基也。而吾子所言大異此。其尤甚者。三皇太昊爲日本之神。觀外邦如附庸。言四海如聚粟。天豈特厚於日本。而薄於四海乎哉。夫妖言者。有先王之刑。亂道者。豈無後王之典乎哉。吾子以爲如何。予不堪大笑應之而曰。如客者。所謂膚受耳。目不能窺牆東。耳不能聽隱外。游泳於周孔之池。未見驪龍之變化。倉皇於程朱之林。未見鵾鶴之極天。夫亡其國則亡其君。亡其君則亡其父。周孔之遺教。未聞尊外之道。程朱之餘言。豈有卑內之旨乎哉。然世苟如吾子者固多。雖示以舊典之明文。闕以前賢之金言。尚憒々不能知。故予不得已。著書數百卷。以辨皇國之君師於萬邦。且論萬邦之臣弟於皇國。今夫

世之爲學者。特提徑之力。諧嫫之樂。牛思蛇神。生呑活剝。無所不至。而其實則空々者。豈可勝言哉。故予之曰。世學有大綱八。曰。神家不識神道。玄家不識玄理。鑿家不識鑿執。易家不識易藏。曆家不識曆式。日家不識日法。儒家不識儒非。佛家不識佛蘊（義イ）。吾子必居於此一矣。追次第問可答。客口呿而不閉。舌舉而不下。逡巡而去。近頃侍公侯之筵。屢問以叟所學如何。茫洋不知所對。故書此篇以爲引。蓋此適有所憤而言耳。古人有言曰。不憤不啓。苟有人。而憤予之此言。則亦將有所啓。然予未熟於戎語。字句恐有失錯。覽者恕之。　號　名讀

天保三壬辰歳八月

○香取志はしがき

高光る日の大御神の。御子命のしろしめす。これの大八嶋國はしも。萬づの國のもとつ神國にし有れば。天津社國津社と。たゝへ奉れる社の數は。八百萬づ。千五百萬づと。いと多なれど。其齋ひそめたる時世の。知られぬが多かるなかに。經津主大神のしづまり坐せる。香取の宮地とも。神代の御卷に。此神います。東國の楫取の地に在す。とあるにて。是ぞ神世よりの御社なり。と知られたりける。抑この大神はも。畏きや國の八十國。島の八十島生ませる。伊邪那岐大御神の。火牟須比神に。大御稜威をふるはしし時に。その御佩しの御靈と。天之安河なる石村とに因れる。くしびに妙なる謂によりて。鹿島に坐す。健御雷之男神と。ふた御すぢに生出まして。皇美麻命の天降ませる其かみ。神魯岐神魯美命の。御言かゝふり。鹿島の神と二ばしら。神御軍のきみとして。此葦原の中つ國に。いつ速振れる邪神らの。狹蠅なす響なひ。螢火なす光けるを。打きため。石根木根。草のかき葉の語とへるをも。言やめ逐ひて。つひに今の地に。鎭まり坐せる事のさまは。神の御典どもを讀見てぞ知らるめる。故是をもて古へは更なり。中今に至るまでに。鹿島の大神と。この大神の御社とは。吾嬬の國の大き社と。いと重き御あしらひにて有ければ。朝廷より下し給へる。古き文章どもの多く。今に傳はれるを。それ能くえらび調へて。世にその尊き故よしを。示せるふみの有ること無きは。其宮人たちの怠りにこそと。常口をしく思ひてなも

在けるを。此ほどの大神の御心なるかも。其神司の中に。小林重規ぬしなも。元より神の道にまめなる心に。慷慨りのこゝろを起して。然る文章どもと。社の古き傳へごとを考へ合せて。この香取志といふ書をなむ物せられける。實を傳ふるふみのさまを失へず。其語をかざる事なく。直情なるがめでたきは。更にも云はず。大かた世の神づかさ等の。神の御前に幣帛さゝげ。祝詞よむをのみ。其職のごと思ひほこりて。神の道の深き故よしなどは。都ても尋ねず。その仕へ奉る神の御傳へだに。得知らぬ倫ひの多かる中に。またかく道に實なる人も在けりと。甚おむかしく。歡ばしきにつきて。作りぬしの請るゝまにまに。其下がきを。くり反し熟くよみて。一つ二つの。思ふ旨をもいひ述て。いかで疾く板にゑりて。世に知しめ給ひね。と勸めたりしは。去年の五月なりけるを。此ほど既に。すり形木の成つれば。序をと云ひ遣されたるに。かつ驚きかつ悦ぼひ。其由を吾もかく。直有のまゝに書つらぬる時は。天保四年といふ年のきさらぎ。

○竹子の刀自傳

泉利愛が妻。竹子は。伯耆國會見郡尾高村なる。片山何某が女にて。五歳の時より。同じ國の米子の浦片原町なる。木山何某が養子となれり。いと幼かりし程より。書よみ手をかく事は更なり。繪をさへにかきならひ。七八歳ばかりの程は。中むかしの軍ぶみども好みよみて。闇によみ覺えたるもこゝら有けるを。父母よろこびて。京につれ上りて。何くれと習はしめ。玄妙と云ける法師の。筆法を得たるにつけて。其法をも習はし。利愛に嫁せたるは。十まり九つの時なりしとぞ。然るは利愛。その本居は。伊豫國宇摩郡野田と云ふさとにて。若かりし程は。讃岐國に。中山丈山と聞えし儒者の。萬葉ぶりの歌をも詠めるにつきて。から學びは更なり。詩を作るすべ。歌をよむすべをも習ひ。殊に他し人にも。習ひ集へる事どもの有るが中に。羅紗ちふ織もの。また更紗といふを物するわざも。かの西洋の人のにまさりて麗しく。なほ何くれと。仕覺たる事の多かるに。まして後の世のため。人のためともなるべき事をら。なし遺さむと。常にいそしむ眞心の。深きをめでし故なりとぞ。かくていもせ相謀りて。江戸に出たる

は。文政の口とせといふ年なり。その到り着たる時は。わづかにせに五百文ならで無く。元より西にも東にも。知たる人は無りしかど。かにかくして。龜井戸むらに借屋をなし。羅紗をおり。更紗を物するわざを。家のなりとたて。二人して。よる晝となく勞けるに。四年ばかりが程に。こゝらの黄金をあまし得て。町屋しきなど買得て。竹子が父母をもよび下し。仕ふる事となりぬるは。こよなき働きと云ふべし。然れどこは。人も有べき事にこそ有れ。さる勞きの中にも。常にかの。元より好める。書よみ手習ひなど捨る事なく。更紗おき織物しつゝ。妹背かたみに。詩歌俳諧歌など作りかはせるぞ。げにめづらしく覺ゆる。抑この利愛い。おのが許にはじめて名簿をおこせたるは。文政の十まり二とせと云ふ年にて。そは最上常德(矩イ)をぢが紹介なりけり。是よりしげく來かよひて。月日ふる程に。その心ざしのほども知られて。隔なく語らふに。竹子をも伴ひ來りて。わが妻。また娘にも近づけしより。此の子が人となりをも。見聞く事とはなりにたり。然るはその。かほ形の醜からず。たわやかに。宮仕へせる人にも。

恥まじき取なりは更にも云ず。さる文事など知たりげの。我はがほなる樣。またさかし立たるけはひは。つゆ見えず。たゞ尋常の女の言少く。愛けうある女にし有れば。わが妻むすめなど。こゆなく心あひて。往々に問かはし。往來けるに。去年のふみ月ごろ。利愛おとこ。公儀より仰せを受たる事の。去がたき事どもも有るを。しさして。其母の七十ぢを越たるが。伊豫國にあるに。對面せむとて。公儀にその由をねぎ申し。その承給はれる事を。なすべき代りを立て上りゆくに。家の事どもいひおけば。何に思ふ旨の有けむ。竹子云けらくは。家内のことは。事にもあらねば。氣遣ひなし給ひそ。然れど。公わたくし。何なる大事のあらむも知らず。女の心ひとつには。決めがたき事の。いで來まじきに非ず。さるをりは。平田のうしの御をしへを。こひ申さむと思ふを。此事かの宇斯に。ねぎ申して。立給へと云ひしと。利愛がいとまごひに來ていふにぞ。諾ひてたゝしやりぬ。然て後は。利愛が家に在りしにかはらず。節々に菓物せむざい物など贈りて。訪おこせば。此方よりも更なり。斯て七月廿二日の日なりけり。おのれ

妻と共に○孫延麿を引つれて○かしこの天滿宮にまゐでながら○立よれば○竹子は更紗の形おきて在けるが○甚く悦びて○けさなむ虫の知する如く○けふは珍しき客人の○おはすべく覺えしかば○魚あき人の來れるに○鮑さより○あゐなめなど買おきて○心まちし侍りしもあやしとて○せむざいなる○白うり茄子など○取あはせて煮とゝのへ○夫が在らぬ程は○人々の來ますとも○御酒は參らせじと○心おきてして侍れど○うしと刀自ぎみの入ましては○然る心おきては事にも侍らずと○もてなし聞ゆるに○吾も妻も○そのせむざひを見やりて○作りと作れる物どもの○かくしげり實のれるは○つくりわざにかしこき奴の○物せるにやと云へば○うち笑ひて○否とよ○彼ふ男どもの○かゝるわざは○穢がりて物し侍らねば○利愛とふたり○朝ゆふとなく○尻からげ水そゝぎ○こやしなどし侍れば○かく榮え侍りと云ふ○また床の邊に机をするて○己がかし置たる○玉かつま道のしるべを積おきたり○いかに見つると問ふに○いづこは有れど○あやしき事のたとへと云ふ條○人といふもの○今は無き世にといふ條など○きもにこたへて侍りといふ○實にさる事と云つゝ○其かたへを見れば○六韜をよみさして侍り○此は誰がよめるといふに○かほ打赤めて○目しひ人の垣のぞきして侍りと云ふ○いかにやといへば○未だよくも讀はべらねど○大かたは○人の不意に出る手だてのみ○と見はべるは○ひが目にやと云ふに○然れば兵は○詭道ここそいへ○と答へてやみぬ○生々の男ども○まさにかうは有なむや○かくて其邊りなるむすめ子どもの○竹子がりぬひ物しつけなど○ならひに來るがあまた有るを○誰かれと呼つどへて○杓とらせ○刀自ぎみに○此子らが○今樣を聞かせ參らせむとて○三弦とらせ○自から琴かき合せつゝ○謠にしめたる○最おもしろかりき○其曲をはりて後に○わが妻にさゝやきて○夫は月ごとに三度つゝ○男のまとゐし侍れば○いかで年に五度ばかり○女どちのまとゐして○宇斯の教へませる○宮畔祭をせまほしと申せるを○夫のきゝ入れて侍れば○歸りなむにはと○心がまへして侍りと○是のみいひと待どはきさまに語れるも○今思へば○あはれに悲しき事にこそ○かくする程に○其家を立出たるは○戌刻すぎにや有けむ○然るに利愛が○

公ごとの代り勤むべく。設置たる者の。過てる事どもありて。とみかうみすれど。用ひあへねば。其をやめて。殊に代りをたて。其外にも。利愛が在らぬをりに合せて。荒び起れる事なども。こゝらあり。其大きなる事どもは。吾がもとへとひ遣すを。さるをり〳〵は。むすこ篤眞をやりてぞ聞しめける。其程の竹子が心くばり。その和やかに。見直し聞なほし擬へる樣。また雄々しくも計らへる事など。こゝにかき盡すべくも非らず。そがうへに。其坊の間ちかき所に火災あり。そのいへも危かりしを。辛くしてのがれたり。程すぎて。其事の聞えしかば。篤眞に人そへて訪しむるに。其夜にいたく驚き噪げるより。また例のやまひの起れるとて。床に臥たるが。しひて起いでゝ物するついでに。我がこの病ひには。舊きえにしの侍り。とて語れるに。八歲の時かとおぼえたり。伯耆國米子のうらは。諸國の大舟のかゝる所に侍るを。夏のころ父母とゝもに。其を見むと。小舟にのりてこぎ出し。大舟にのり移りて。彼舟この舟と見けるに。過りて海水におち入りしかば。上なる人の。おどろき噪きは。云ふも更なるべし。かくて吾は。海そこに沈みて。一とたびうき揚れる時に。出むとすれど。大舟のつら並たる底なれば。出べき由なく。息をつめて。水中を見れば。碇を下せる繩の見ゆるに。其いかりに取つき。繩をつたひて浮揚りしかば。人々見つけて引あげて侍り。その時しも心をおちつけ。息をばつめて在しかど。鼻よりうしほも多くのみ。甚く驚きしと見えて。引上られたる時は。うつし心無りしを。辛くして助け得たりと。後に父母の。かたり聞えて侍るが。其より後なむ。ともすれば。其時のごとく。身體のすぢつまり。さし込むと云ふ病おこりて癒えず。此年に及びはべり。よし火災のありとも。身だに遁れなば。其餘りの物は。燒失ふとも。何てふ事かあらむと。常は思ひ設ながら。夫が居らぬ間なれば。かつ驚き。かつ働きもしはべる故に。かく舊病ひの起り侍り。然れどまた。快くこそ成はべらめと云りとぞ。然るに

下文ナシ

○竹子の刀自。鎮魂祭の詞

和泉利愛の妻。竹子の御たまに。氣吹廼屋のひらた篤胤。いま告る事あり。うまらに聞こしめせ。其と

じはしも。洞玉とおへる號のふさはしく。父のみの父の命。はゝそばの母の命。その比古遲につかへたりし。洞玉の赤き心の。くもりなきことは。云まくも更なり。その姿さへに。なよ竹の婉順に。はた織り衣ぬふわざは。呉はとり。漢はとりの綾にむかしく。そがうへに。歌よみ手をかき。詩つくる事さへに。其夫のをしへによりて。拙からねど。我はがほなく。其の夫が。世のため人のために。大き功績をなさむと。年まねくいたづくを。後方にたすけて内をゝさめ。比宮の神のみやびにならひて。出入る人の善あしをえらび。つかひ者らが。手のまがひ。足のまがひ有るをも。よくいつくしみ使ひて。己がむき〳〵。邪ごゝろ。穢き心有しめず。勤しめて。咎過あるをば。見直し和しつゝ。また壯士にまさる勇みもありて。利愛がなにはにものして在けるほど。家をまもりて。雄々しく計りごちし事どもの。始めをはりなど。己よく知りてし有れば。またたぐひ有まじき女にこそと。思ひたまひてなむ在けるを。いかにかもせむ。其ころ。元より身にもたるさくちふ病ひのさし發りて。いや重りに。おもりゆく由なるに。とひ來て見れば。床につきては在りしかど。いと悦びて。なにはに云ひやる事のよし惡など。何くれとゝひ語らひ。常ある病ひのおこれるなれば。然しもけしかる事とは見えざなるを。事によそりて。魂のゆくへの心得など。語り出たりしは。早く世をまかるべき。心のかまへにて在けるかと。今しおもひ出るに。かなしなど云ふも更なり。かくて利愛かへり來つれば。くすゝるわざも心とゞきて。ほども無く愈なむものと思ひたのみて在けるを。去年のしはす十まり二日といふ日に。利愛よりせをそこして。竹子はけふなむ。世をば罷りはべりと告おこせたるに。手にもたる物とりおとしつゝ。驚きて此はおよづれかも。たは言とかもと思ひまどへど。其の夫が手のあとまがふべくも有らねば。なま〳〵に聞おきてなむ。其ほど利愛がをぢなげに。やさかのなげきしつる事は。天がけり見ても知なむ。はた其いまそかりし時に。その惠みをかゞふれる内外の人らが。かなしみも更なり。吾が妻むすめなど。常にむつ魂ひけるは。朝にけにかたり出つゝ。しぬびあふめる。然は有れど。こはうつし世びとの。なき人しのぶ常のならひにこ

そ有れ。刀自はも上のくだりのごと。さかし女のくはし女にしあるを。かの病ひは。たゞに愈まじき事を。神のしらして。其の御かどに。さる風流女を。もちひ給ふ事のあるにあはせて。召たまひけむと思ひ給へらるゝに。利愛おもひ依りて。竹子は生れながらに。なほき正しき。神心もたりしかば。他國ぶりの靈まつりは。宜はしからず。いかで己に。古へざまの靈名をつけてと。ねもころに請ふを。われもうべなひて。あたし國邊の風聲女の。神仙のくらゐに至れるたぐひは。數へ出むも今さらなり。むかし難波長柄豐前宮に。天の下しろし食せる天皇命の大御世に。漆部造麿が妻の。みさを正しきを。神の感應えまして。神の道を得しめ給へるためしも有れば。其生れし國の産土神。その罷りし時すめる。龜井戸の里にます菅原大神。相はかりうづなひて。導き給ひなむ。此のことはし。すでに二所の神たちにまをせり。竹子の刀自。竹子のとじ。事あやまたず。其神たちの。その御しり方に從ひまつり。幽事しろし食す大神の御もとにまゐり。氣吹の屋のおきなに。神の御路のたふとき眞語を。きゝ持てる者にはべりと申して。其の御さだめを承賜はりをへて。また更に天がけり。此の比以呂に歸り來まして。世に在りしほど持齋ける。眞澄鏡を。その靈代と齋ひ置たるに。平けく安らけく。憑り鎮まり居まして。離遊ふことなく。世に在りし間の心をたがへず。利愛が身にそひ守りて。其のなさむ事ごもを。神等にも願白して。夜の守り日の守りに。幸ひ助けて。世のため道のために。功績を立しめて。生子を得しめ。其の八十つゝき。ゆたかに榮えしめて。とこしへに其のまつりを受給へと。八十日日は有れども。今日の活日の足日を。よき日と定めて。これの小床に。いづのさむしろ打しきて。奥山の榊木の枝を。うち折りもち來て。かくさし立て。利愛自から。禮代の御饗捧げて。齋ひいつき。篤胤はた。利愛が乞のまに〳〵。事まかなひて。今日より始めて。洞玉映見竹子刀自。とたゝへ名おふする事の樣を。平けく安らけく聞こしめせ。洞玉映見竹子戸主。洞玉映見竹子戸自。世のかぎりその夫にあかき洞玉の。竹子の刀自が比母呂岐ぞこれ。「いきのをに夫を思ひてし赤たまの。あかき心をわすらすなゆめ。天保の四とせさ

云年のうるつき

〇春秋命歴序考序

古人有言曰。天地者生之本也。先祖者類之本也。君師者治之本也。是大道之三本。而皇國則萬國之三本也。是以彼西戎之蕃。赤縣州。亦我神眞爲之君爲之師。而闢闢之。含養之。使蠢化蠕動始有倫理。穴居野處。方有敎養之國也。是故。政刑。兵陣。律暦。度量。文字。卜筮。醫藥。凡所以經綸天下。而百世不可刊。綱紀民用。而一日不可闕者。亦皆我神眞所授之道也。上皇太一之爲一也。盤古眞王之爲二也。三皇之御三才也。五帝之紹五運也。可以見矣。唐虞之世夏后之時。人質物朴。猶能道此道。依此敎焉。夏后氏亡而大道斯廢。撰聖乃出。殷纂周弑而六親不和。國家昏亂。於是乎始有儒矣。從是以來儒流之書日出。百氏之說益盛。視大道如異端。見神眞如物怪。以爲荒唐不經。非我所宗。其所以經綸天下。綱紀民用者。變爲覬覦之器。化爲虛僞之具。嗚呼天之未喪斯文也。神典之所傳。玄經之所識。與古籍之明文。先聖之至言。雖遭歷代之災亂。似一縷之不斷。而尚幸

有炳焉如日月。確乎不可扳者。造次顚沛思之思之。而神開我心。使我宗我所宗。若夫儒流百氏。猶子孫而詈先祖。枝葉而惡本根也。豈足復知大道皇國之所以爲三本哉。然其起伏與廢。亦復非一。而其存于今者。大抵有八家。曰神。曰玄。曰儒。曰佛。曰醫。曰兵。曰易。曰暦。雖然其在王公大人者。非吾輩所能知也。唯至於卑賤如余者。自成一家。則神家不知神道。玄家不知玄理。儒家不知儒旨。佛家不知佛意。醫家不知醫範。兵家不知兵機。易家不知易威。暦家不知暦式。而各游泳於一瀦。未見曠瀾之變化。彷徨於孤垤。未視崑崙之極天。夏蟲疑氷雪。井蛙怪江湖。生於此國。而無此國。仕於此君。而蔑此君。不知神眞君師之德。含養之恩。則一也。故吾爲之恐懼。著述考徵既軼百部。且踰千卷。又近者著太昊古暦傳。三暦由來記。古暦日步式。月步式。弘仁暦運記考。古史年暦編。古今日契暦。夏殷周年表。前漢歷志辨。春秋暦本術編。及此書。以闡古暦之眞式也。夫暦所以論天常志長久也。然秦古之世。年暦之數。紛紜不一定。孟浸無講明。其譌

實起于殷西伯周姫昌矣。蓋既有流派、奚不遡於原泉。苟有年曆、敢不推乎泰古。且以余觀之、何道不欲一定之。誰人不願講明之。而稍有識者。輙有蛇足之過。其不然者徒有蠡測之嘆。抑人長。而不知其年之經歷、我身之長短。雖曰不愚吾不信也。吾爲之憤悱。獨採春秋命歷序。祖述之憲章之。訂正錯簡補綴脫文。參伍之於弘仁歷運記。錯綜之於明文與至言。方始明神眞所授之道。實神典所傳之說。乃似日暦之結符節之合也。吾既回大澤於一步。極將墜於千仭。於是乎、足以爲金鈴本舌。而一振文教矣。不然與不知其年之經歷。我身長短者。莫以異焉。方今海内昇平。文物鼎新。上有擊壤之化。下有鼓腹之樂。博覽多通之才。典故考證之家。凡數十百人矣。然而一定之講明之者。蓋或有之。我未見之。則其數十百人。亦猶一凡庸耳。復安得論天常志長久者乎。雖然人々將曰。其所祖述憲章。亦惟爲讖緯之書。其所訂正補綴。亦皆取之乎臆斷。余雅謂。士君子待知己於千載。豈求善價於今日哉。苟有奉常道唯一之學。學顚圍無敵之道者。則將一目擊而思過半矣。彼凡庸之徒。雖提耳而曉之。不能使之遂信之也。我惟宗我所宗。亦豈求信乎不信之人哉。

昔從

太昊作甲暦甲寅歲。而來四千八百四十年

天保四年歲在癸巳孟冬九日庚子

太一在于中宮天禽日天禽時

○古易大象經傳序

余之於菅原道滿也。所以誇者一。所以喜者一。而所以大悲、所以大懼者。亦各有一也。夫天下之所是。不可以革我之所非。天下之所非。不可以替我之所是。壁立萬仭。獨步一世。立不易方。獨立不懼者。其惟縣居鈴屋二先生乎。余既篤信其道。從事於斯。奉自彊不息之教。守多識畜德之道。窮覽萬卷。著述百部。以拾二先生之遺。以稽大九州之古。徵之於神典。符之於古傳。然後涇渭无一滴之濁。燕石无十襲之惑。若夫太昊古易傳。三易由來記。欽命錄。象易編。亦其一也。從余受業之士亦多矣。授以此書。教以余說。乃能聞一以知二。積小以高大者。其惟菅原氏之子乎。蓋

有造父王良、而後有千里之駿足。有匠石公輸、而後有百尺之棟梁。不然則奔逸不應銜策、屈曲不從繩墨。今道滿也。其能非駑、其材非朽。不復顧天下之是非之、必須余之一是焉。二先生之有余。余之有道滿、皆余之功也、是余之所以誇也。余之爲易也。道滿在側。或默識神會若愚、或詰難辨論若寇。余視其可以成業。乃命解大象經、蓋此經也、太皞以來神眞相繼。所以垂教遺誡。使人欽天命之眞詰也。所謂无有師保、如臨父母者其是而已矣。然道滿未下筆。有故而去於新田山之下。余乃曰吾易北矣。未繼。道滿乃撰古易大象經、以請閲之序之。余披而讀之閲而批之。能述余之所既授、又發余之所未教。余乃端坐措手曰。吾易復南矣。此傳也。先詳卦象、能釋文意、祖述前言。憲章往行。而日讀日新。愈味愈旨。所以使人順天休命。安心修身者。亦猶臨于師保于父母也。其總論及附錄。亦皆據太皞眞詰而斥文周之妄辭。賴神眞之古道、而闢擬聖之陰惡。以裁成余書。以輔相余說。余初爲易。以爲天下若有是之者、則足矣。今也乃有道滿焉。凡易之附註未書車載驢負。未知其有幾百家也。今比之於此傳、譬如尺錦鮮於千丈之布。寸劍利於一尋之棒也。余嚮所艸欽命錄。象易編。亦將自絕編折揭。而委之於道滿焉。吾黨之小子。於易與其問之於道滿也。何必須余。是余之所以喜也。道滿生於上野國某藩。會徵讜言。乃上封事以爲片言隻句有用焉、則死可也。庶乎致命遂志矣。用事者。陰沮之陽放之。爾來流離之中顚沛之間。道滿親給薪水之勞。授句讀以代耕。困窮而不濫。講習而不倦。乃能撰此傳。庶乎反身修德矣。彼春秋大富。鞭策不懈。則其著撰豈推止於此哉。然今守遯世无悶之戒、更欽思不出位之敎。是天下果非道滿、道滿自是而不屑也。其豈惟道滿之尼哉。抑亦吾道之尼也。是余之所以大悲也。道滿信道篤。而信余。信余篤。而美余過分。傳中往々有擧余之行實者。及其請閲也、乃删之。誡而曰道滿止。女唯知有此。而不知有彼。知有我。不知有他也。天下之士其曰之何。道滿抑溺。而不肯從。曰。道滿之於道也、唯命是從。雖然此擧也。親炙既久。鑽仰彌新、道滿雖不敏、眞知其有師德矣。然而師則反

不レ知焉。安知二天下之士不レ有二是レ道滿非レ師者一乎。遂不レ從。而繕寫既成。是余之所二以大懼一也。嗚呼非下知四此傳之所三以爲二此傳一者上。豈能知四古易之所三以爲二古易一哉。皆從下太皞畫二八卦一。辛卯歳上而來。四千八百六十四年。天保五年歳在二甲午一正月元日丁亥。

○新庄道雄碑

新庄道雄。そのよび名を甚右衞門といふ。國府の江川町のさと長にて。いと舊き家なりとぞ。道雄をさなくて。父におくれたれど。家の業をつぎ勤めつゝ。母に事ふる道をつくし。其致へによく順ひ。殊によろづよりも。書よむことを好みて。大倭の。からのあまきの嫌ひなく。傍へに積おきて。しばし家を出るにも。ふところ放たで。讀つゝなむ行ける。中にも皇國のふみを尊び。實のみやびの歌にすきて。北川眞顔がよみ口をもまねび。其道にいたり深く。またの字を柏苑といふ。あはれこの道雄はも。安永五年といひける年の生れにて。己とおなじ歳なるけにや。殊にむつ魂あひて。四十ちばかりの比より。吾にもかたりて。駿河の國誌をえらび立たるを。一卷の稿成ることに。江戸へもて來て。己が思ふむねをも問ひ。かつこなたに記せる考説どもをも讀て。こよなく悅びほごばしり。己がわざを助けし事もこゝらあり。此人の道に雄々しく。いそしかる事は。その國誌にしるせる考説どもの。まめなるを見て知べし。さるをこぞの秋の比より。やゝ勞はる事のありしが。つひに重りもてゆきて。しはすの十日まり九日といふ日に。かの百足らず八十の隈道に。かくり去りぬと。子らがもとより告おこせたるに。およづれ言にや。とさへ思ひ惑はれ。悲しなどいふも更なり。道雄い世にありしほど。里の事どもよくおきてゝ。先に世の中なべて。たなつものに虫つきて。いやましにふえゆくを。防ぎ惑ひし時に。そを退くるみちを考へ。廣く世にをしへて。其害をやめ。また常にいはゆる。鰥寡孤獨の。よるべなき人らをすくひ。人のむつびの中だちなど。よくとり行ひつれば。遠き近き相知る人ら。またなき人に。したひ賴みて在けるを。ことし思ほえず。あたら此世をまかれるに。悲み惜まぬ人もなしとぞ。然るにこたび。子らをしへ子など相はかりて。其いしぶみ立て。世にその名しろを傳へむとす。いかで己に。その由をかきてと請

ふに。こは世の大よそ人の。なし得たる事もなきが。こと〴〵しき石ぶみたてゝ。名を求むる類ならねば。心のそこひ相うべない。かつ其子等の。心のをろも思ひやりて。また更に涙おしぬぐひつゝ。かくなむ。

はふむしもなけがしそねわが道に。雄々しきをぢが石ぶみぞこれ。

天保七年といふ年のかみなつき

[illegible]義家言序

上つふさの國市原の郡。ひき田のむらの名ぬし。立野良道をぢはも。十まり八つの歳より。父のあとをつぎて。文祿年間。東の國々御縄打の比より。代々其村々の地頭の。代官役をうけ給はりしをつぎ。其わざをまめにつとめて。其なりはひのいといそがはしき中に。古の道をこのみ學びて。己がもとへも來かよひつゝ。年間ふ人なるが。ある日此ふみをもて來て。年ごろつとめたる村長のことにつきて。子孫らのために。思ふむねをかき遺さむと記せる物なり。ひがことあらむ。見て給はれといふに。己もとより。然るすぢのふみ。世にあらせたく思ふをりにし有ければ。うべなひてよみ見るに。いとよき心おきてなる事どもなるに。いさゝか筆をも加へたるが。其ころ水戸の殿の。立原任主して。何にまれ國のため。民のためになるべきふみを。見得てしあらば。奉れと宣ひ出たる頃にて。己もさる仰せごとを。承たりしかば。其由を良道にかたりて。こをかの殿の御前にきこえ上けば。いかに有らむといふに。わが卑しき筆にすさめる物を。さる畏き御あたりへは。いかにあらむといふを。謂ゆる芻蕘の談も。とるべきは。捨たまはぬ公にしませば。わがはからひにまかせよとて。立原ぬしへ。消息のたよりにつけて。こをしも聞えあげ給へ。といひやりしかば。やがてまをし上たるに。はたしてめできこえ給ひしとぞ。かれ此よしを良道に傳へしかば。涙おとして悦びほどはしり。いかでこの由を。一くだりかきそへ給ひね。うみの子のつぎ〳〵。いやます〳〵に。家のなりをおこたらしめざる。守とはせむとこふまゝに。その有ける事のまことを。かくなもかきてあたふる時は。天保九とせといふ年の彌生。はつかまり七日の日

村をさのむらがり多きそが中に。こやむらをさのかゞみなるらむ

○經緯儀序

靈幸はふ神世のいにしへ。青海原しほの八百重をしろしめせる。健速須佐之男大神の。國の八十國。島の八十島見めぐりまして。其を區ち給へりし時に。から國々に。まかゞやく物の多なるを。あが御子のしらす國に。うき寶有らずは善からじ。と御言告らして。其浮たからに造るべき。杉と樟とをまき生し給へる事は。世に船らふ物のいで來し原にて。萬の國に。つくりと作り。成しとなし出る物のことごと。樟楫ほさず貢ぎ奉らしめて。その害なき事物は。大御國にもとり用ひ。こなたに餘ある物は。かれにも賜ふべく。御慮りませる神わざになも有ける。故ここをもて。石上ふるき御世より。ちかきほどまで。此方かなた。船のゆきかひ常にありしを。大船のゆたのたゆたに。寬けく永しといひける御世に。御おきて有りて。かなたに往かふことをし禁め給ひ。船の製りも易れりしかば。海つみのあから島かせ。吹くをり〳〵に。浮寶うきもあへなく。舟人さへに。澳津いくりに。うち交へらるゝ事あり。或はかの。佔野の舟の辛きめ見つゝ。伊那しこめ醜めき鬼の住むちふ島に。漂ひゆくも多かりと聞くに。いといたましき事と。諸手船。もろ人ともに思ふ物から。爲むすべ知らに。長息のみして在ふるを。與むらの增阯ぬしい。そこをしも。羅摩の船のかむかみつゝ。然る葦船の。あしかる禍を。免かるべき術を敎ふる。樟船のいとも奇しき測器と。この書をなも。宗の曾富船。いと明らけく作られたるは。百船千船もたらむ人々。しが船人とあらむ者の。底たから御寶ぬしと。めで辱なむべきわざにて。此は小綠のことに非ず。かの大神。また海つ御神の御心なることそ。舞船の云まくも更なり。抑このぬしはも。已まだ若くて。西洋なる。窮理といふもの學びせしほどの。親しき友にて。かたみに世のため。國のためになりなむ事をこそ。學びとらめ。と語らひかはせる中なりしを。其後しも此ぬし。日にけにいとなき公のつとめを承賜はりて。心ざせる如くは物せられず。已はた上代學びの。としに月にことしげく成もて來つるに。その家さへに。同じ大江戸ながら。端よりはしに放りつれば。其むつ魂はかよひつゝも。年まねく疎々しく過せしを。此月の十まり六日の日に。おもほえず

訪ひ來まして。その著せる量地弧度算法といふ。三巻のふみを賜へるに。年ごろ暇なかりし人の。いさしも知がたき是術をし。かく誰にも容易く知り得べく。物せられける哉。世の人々の著せる書らとは。しほ舟のならふべくもあらざりけりとかつ悦びかつ驚きつゝ。ふりにし事ども語り出れば。はや三十とせ餘りの昔なりけり。かくてまた。殊に此書とり出て。さきに約りたりける言實にと。思ひ立たる態なれば。いかで序文をとこはるゝに。稻船の何かはいなまむ。鳥船のとりあへず。二股小船。ふたゝびかへる昔のちぎりを。河船のもそろ〳〵に思ひ出つゝ。かくなも端がきせる時は。天保九年といふ年のしもつき。十まり九日といふ日なり。多飛良の篤胤

○酒折宮碑文のそへぶみ

此之大宮乃前神主。飯田正房止云毛。已登於耶自。鈴屋宇斯之教子爾氏。大人之手豆加良。小伎紙爾書給比斯。此壽詞乎賜波里氏。伊加傳石爾彫立氐牟登。志斯氐波在都禮杼毛。容易加良努事那禮婆。其事果佐傳那牟在祁流乎。今度其子正廣主。其志乎紹氐。思立奴流乎。名取忠貞。名取茂樹。太田寛。亦江戸人那賀良。今斯同所爾住留。櫻井長世那杼云人々。廣米伺事議里助都氐。如此那毛嚴伎碑爾立流爾就氐。此石爾宜波志久。已爾書氐登請遣佐禮多流爾。常石爾傳波里行牟。此人々之有功乎。感宇牟加斯武餘里。世爾著伎己我文乎之。拙伎乎毛思波傳。如此那牟。

天保之十年云歲之十一月

○調神社碑文

延喜の神名式に。武藏國足立郡に。調神社と載られたるは。此社にて。その祠る神は。社傳に。天照大御神と。宇賀之御魂命と。二座なりといふは。然も有なむ。そは伊勢の大御神の末社に。調御倉社といふありて。其祠る神を。稻倉魂命とあるを思ふに。この社はも。いにしへ國々に。伊勢の大御神の。御戸代の盛なりしほど。其御調の初穗を。取をさむる御倉なりしが。後に社となりけむ故に。大御神と。宇賀之御魂命を祭れるにや。と推量らるればなり。延元二年二月。那賀郡廣木吉原城主。一色範國ぬし。社をつくり改めて。神田五邑を寄られけるのち。貞和觀應といひし年頃に。兵火にかゝり。康暦二年と

いふ年に。佐々木近江守。源持清ぬし再興あり。其後またやゝ〳〵に。社そこなはれ來にけるを。小田原北條家より再興あり。天正十八年御入國の時に。社領七石を寄せ給へるよし。社記に見えたり。靈應いちじろく御坐すこと。往古より社木をきり採ること無ければ。喬木どもの生茂れるに。松の生ず。そは神のきらひ給ふ故なりと語り傳へ。また蠅と蚊とをきらひ坐よしにて。今に社の地内に。この二虫の入ざることなど。世に普ねく知れるが如し。然るに調神と申すを。俗に月神さまとし。誤りに誤りをかさねて。二十三夜に祭り崇むる事となり。また其よりして。此神の。ことに兎を愛み給ふと申し傳へて。氏子の中に。兎をころし。或はそを食ふ者など有れば。忽にその神祟りあること。いとも嚴然なりとぞ。此はしも神の御心の。いと異にかしこく。慮りがたき所なり。此等の事ども。村をさ星野□□が需めによりて。其社記の大よそを採り。且いさゝか己が考へをも。初めにそへて如此なも記せる時は。天保九年といふ年の二月。平篤胤謹識

〇出雲音はしかき

高山に登るに。ふもとの道の多かるを。人々の心々に。西より東より。己がじゝしをりしつゝ。登るめれど。至るみねの一つなるがごと。言の葉のはやしにわけ入る道。はた同じ趣にて。此守臣ぬしの。この一ひらのふみはしも。此ぬしの。登れる道のしをりになも有ける。此はしも。己がのぼり見し道とは。やゝけしきながめも有れど。世の並々なるが。さへまぐりにくしるべすと。醜の物しり中々に。よこさの道に。人まどはする類ひにあらねば。いかで疾くその山口をと。繁山のしくしくに。そゝのかし聞えて。まつかく目安ぶみに。すゝめ出せるになむ。

天保十一年といふ年のみなつき

ひらたの篤胤

諸岡一富石文

衣手之常陸國。信太郡宮地村那流。諸岡健藏一富登云人波母。其性直久正志久。皇神之道乎深久尊美。吉田二位殿乃。其御傳乎受賜波里弖。朝夕爾　天神國神乎拜美奉里。仕奉留事。一日毛怠留事无久。然能美那良受。二十歳許里乃若支程與里。遠近乃童部等爾。書讀美手習布事乎志。篤實爾導伎敎閉弖在祁

流爾、其學風乎慕比　從布弟子之數。二百餘里有登那牟。故茲爾其弟子杼毛相計里弖、師乃然留恩乎志報伊牟止弖。一心盡力弖。師乃續身乃世爾在留間爾。其功乎志石文爾勒志弖。後乃爾傳閉、遍久世爾毛開延志米牟登欲須留乎、爭傳已爾、其由書付弖登請遣勢多留爾、此者志毛頗弖是處爾、皇神之道乃彌日異爾、榮曳行辨伎祥爾許曾登　歡比感志美都々如此那牟。　天保之十一年云歲之九月

神祇官任學師平篤胤

○農業自得はしがき

ことしのむつき。江戸をたちて。故郷にゆく道すがら。病こと有りて。下毛野國河内郡。わが殿のしらす萱橋領なる。仁良川の御陳屋に居けるほど。同じ郡の下石橋村なるをしへ子。中山信義が來て。その近き邊なる蒲生村に。呼名を仁左衛門とて。農業にかしこき男ありとて。其有さまを語るに。己もとより。此わざを好む心に。いかで行ても問まほし。と思ひ度れる折しも。此をとこ己がこゝにある由をききて。こゝの事とる小林本宜とは。はやく相知る人なれば。伴はれて來にけり。いと嬉くて氏名を問へば。田村吉茂といふ。その村の里長にて。ことし五十まり二つになる叟なり。その語ることゞも。農事をおきては。更にしる事なき由にて。自からはやく草稿せる物どもを。もて來て見せたるに。詞は鄙びたれど。意あまりあり前に。津國の小西篤好が記せる。農業餘話の下書なりし時と。同じさまにて。西と東と國こそへなれ。其心を用ひたる趣はも。宇武岐の貝の。うまくあひ合ふ説どもにて。すべて百姓の守りと成へき教へ等なる中にも。種子の見つもり。日和の考へなどは。世にいまだ記せる書なく。此をぢが。年ごろ試み知れる事になむ有ける。かくてこを人にも見すべく。文のあやをもなして。と請ふに。己いひけらくは。かく實なるふみをし。世の學者らのふみめかさむは。却りて見おとりのせらるゝ態なり。此まゝにこそ直さめとて。くり反しよみ味ひ。心得かねたる事は。かへさひ問あかし。言たらず覺ゆるふし〲は。其鄉言もて書そへつゝ。ふみの名は。己かかく名つけて與へつ。抑田人は。國の本ちふことわりは。己がつねに心にかくる事にし有れば。若きほどより。其かたの書をもかき出て。世に傳へま

く欲せし物から。元より手肘に水沫かきたり。向股に泥かきよせて。鉏くは取れる身にしあらねば。謂ゆる畠におよぎを習ふ類なるを。彼からおきなが。老農にとへと云へりし言を思ひて。前にはかの篤好が餘話をものし。今はたこの吉茂が自得をも物する事は。徒ならめやも。農事をはじめ給ひし大神たちの。我が此わざを好む心に。御靈幸はひて。西より東より。この道のひじり。二人を得しめて。車にふたつの輪のある如く。古の道のまなびの。世にめぐり行はるべき祥を。示し給ふにこそ。阿波禮。世の百姓たらむもの。常にこの自得と。かの餘話とを。左右にとりもちて。西東そのつくりわざの。少異なる趣にこゝろをつけて。猶次々に。この道の奧所をたづね。世にあらはし傳へむには。誠に豐葦原の水穗の御國の。神の大御寶となも云べかりける。御寶ぬしとなも稱べかりける。故こゝに。田人にあらぬ己しも。まづ此をしへに賴そめて。かく勞き成せるは。「武藏野にふむ道もなき久延毘古の。秋田にたゝむつと物にせむ。」と思ふ意もこめて也けり。天保十二年といふ年の彌生。　いふきの屋の平田篤胤

○五德說亦云德行式

敬　欽。戒。忌。祗。肅。齋。謹。愼。謙。虔。遜。讓。恭。儉。勤。畏。順。共。弟。

義　理。廉。正。直。平。公。莊。善。純。一。良。淸。白。允。信。慤。貞。靖。恒。

仁　敦。厚。厖。篤。誠。周。忠。恕。大。和。孝。友。慈。睦。惠。泰。寬。弘。溫。

智　達。明。察。聰。哲。睿。淵。博。備。齊。慧。慮。謀。權。敏。聖。神。易。時。

勇　果。敢。强。愿。毅。剛。武。威。桓。栗。固。烈。發。猛。嚴。厲。節。重。立。

爰稽上神之世。敦厖純固。不識不知。道行而不敎。德有而無名。至於皇化外溢。文籍連貫。則始知有名敎之方。而其立名別物。散見書傳。未有統紀。今欲學者易知。彙而列之。建爲五類。一曰敬。人之所以事神也。臣之所以事君也。子之所以事父也。下之所以奉上也。所以尊其尊也。所以勉其事也。其屬十九。二曰義。所以修身遷善。不流於邪也。所以正道別理。動無差忒也。其屬十九。三曰仁。上之所以養下也。人

之所以群居和一也。所以親其親也。所以濟世利物。死而不朽也。其屬十九。四曰智。所以別是非明利害。識趣舍也。所以善爲謀。所欲必得也。所以達理知命。樂而不疑也。所以觀天下察百事。博聞多識也。所以通微入神妙宰諸物也。其屬十九。五曰勇。所以攻難堪苦。使事必成也。所以見義忘利。爲而無悔也。所以戡亂除惡。畏服衆庶也。其屬十九。凡人之德行。備此五類。其五名者。擧以目其類耳。非必統之也。凡德本於敬。立於義。成於仁。智以圖之。勇以行之。是其大較也。語其循環。則互相爲端。語其交通。則融會無間。敬與仁比。義與仁比。智與仁比。勇與仁比。義與敬比。智與敬比。勇與敬比。義與勇比。比者或相反。或相類也。各有其意。不暇悉說。學者思而得之可也。

右德行五類圖與同門鈴木朗相折衷而誌焉。

文化元年歲次甲子三月　名

○藏結のものかたり

傷寒論に。病脇下素有痞。連在臍傍。痛引少腹入陰筋者。此名藏結死。と見えたる。その脇下素有痞。連在臍傍。と云ふは。俗に疝積といふ病なり。その痛み少腹に引て。陰の筋に入るは。これ事にふれて。發動したるにて。こを藏結と名くる故は。その藏氣これがために結塞して。通せざるをもつていふなり。宋明の諸師も。皇國の諸先達も。さしもさだせず。説ひろめたるものもなけれども。つね多かる證にて。治すべからぬに似て。治するあり。治すべきに似て治せぬあり。また痛陰筋に入るとあれど。さもあらぬ有。醫にいたく恥見する病なり。すでに獨嘯の翁も。漫遊雜記に。一男子病腹痛。苦楚不可堪。四肢厥冷。額上生汗。脈沈遲食飲則吐。按其腹。痛連胸脇。遶臍入陰筋。鞕滿難近手。諸醫畏縮而歸。余曰是寒疝。應不死。作附子瀉心湯與之。夜死。余不知其故。沈思數日。偶讀傷寒論。其所謂藏結也。余當時汎然不精思。誤鑒如此。噫呼讀傷寒論。十五年甚哉。事實難周。と記しおきて。篤胤も甚く恥見し事三度あり。おとつとしの秋。三十歳ばかりの男。もとより疝積の病ありて。一日大いに發り。諸醫くすりを與へむと云ふものなし。その父走り來りて。予に診察を乞ふ。行てみるに。

腹裡拘急して。其いたみ陰に引き。手足厥冷。身體白汗いで。舌強ていふことあたはず。脈沈微なり。予その父に云ふ。こは古き醫經に。藏結と名くる證にて。古人もこれを必死に屬し。とても生くべき道なく。譬へば西に入る日の。ふたゝび中天に呼かへしがたきにひとし。といへども。あはれその夕陽にひとしき不治の病をも。生さむと力むるこそ。わが醫の道の意なれ。かつ人息のあるらんほどは。などか治を施さゞらむ。諸醫みなにげぬ。今はいかゞはせむ。一てだてなしてむとて。山田宗俊父の思ひつかれし。闕元の灸に。かねて附子湯大劑二貼をとゝのへ。自ら一貼を煮て飲しめ。なほおこたりなくこれを用ひ。また事あらば云ひおこしてよ。と云ひ置て歸りぬ。時は未の刻ばかりなり。その夜子の刻すぐるころ。門をたゝきて。晝のくすりはみな用ひをはりはべりぬ。今は手足もやゝ温まり。腹の痛みも。かるくなれるよし云ひおこせたり。いかで彼の證の見直すことあらんや。とは思ひながら。其夜は予もいたはることのありて。また診はむともせず。かの附子湯また二貼を送り。あくる朝行てみるに。昨日

とはかはり。苦痛も十に七八はへりて。今ほど粥二もりを喰ひたりとて。父のよろこぶ事限りなし。予はなほ更に悦ばず。こは張仲景の。死すと云ひおける證なるものを。いかで生くべき理のあらむや。といぶかしく。日々死ぬるをまつ心地しつゝ。これかれと意を盡しけるに。あやしきかなや。七日八日ばかりをへて。實に愈たり。しか快くなりては。病家にては。さしも思はぬさまなれど。はじめこれこそは必死の證よ。といへりしことの心はづかしく思ひたりぬ。又此彌生のはじめ頃。一婦人臍をめぐりて。腹大いにいたみ。裡急手を近づけがたく。冷汗脈微厥逆して。陰門の痛みことに甚じ。醫者病家あはてさわいて。如何ともする事あたはず。予に急を告ぐ。行てこれを診るに。また藏結の證なり。かたく斷りて歸らむとするに。袂を取て。さる必死の證あらむには。御藥咽に下りて。すなはち死すとも。更に遺憾の候はず。まげて藥を賜はれといふに。辭みがたく。少しく思ふよしもあれば。當歸生姜羊肉湯に。附子を加へて與へたるに。吐して受けず。こゝに於て。童便少しばかりを入れて。少つゝ與へ。大劑二

貼を服さしめ。三時ばかりにして。手足少しく温まり。腹のいたみも。漸に和らぎて。これも辛うじてまた愈たり。おのれこゝに思ふやう。さては藏結といへども。心きたなく。うしろ見すべき證にあらずと。ほこりかに思ひけるに。同年の八月。一男子。年三十ばかりなるが。素より疝積ありて。他醫の藥を服けるほど。甚く發りて。獨嘯の翁が記しおける證に。少もたがはず。前醫はこの證に恐れ。藥二貼をおきて。すでに斷りいへるよしなり。その藥を見れば。半夏瀉心湯に。茯苓を加へたる方なり。家内の人。ならびに予をすゝめたりし人も。甚く恐れて。死生いかゞあらんと問ふ。おのれ。これもまた。藏結なりとは思ひながら。前に二人を愈したりしに心つよく。ことに痛陰筋に入るの證もなく。精神も苦痛に合せては健にて。前の二人にくらべては。すこむる輕く覺えければ。その證危篤に似るといへども。さしも驚く計りの證にあらずといへば。前醫のくすりいかゞあらんと問ふ。予いふ。人のこゝろの同じからぬ事その面のごとく。醫者の病者にくすりを與ふるもまたしかり。此方更におのが心にかなはずといへば。いかに君の藥賜らむやと云ふ。いと易き事なりとて當歸四逆加呉茱萸生姜湯に。芍藥と甘草をまして。三貼をおきて云やう。病苦堪がたくはおはすらめど。あすは快くなり給はむと。たやすく云ひて歸りぬ。時は巳の刻ばかりなり。家内もおのが驚かぬを見て。始めて心おちつきたるさまなり。かくてその夜酉の刻すぐるころ。あはたゞしく門をたゝきて。かの予をすゝめたりし人より消息して。晝の病人また甚く重れるよし云ひおこせたり。予おもふやう。かの病人。さしもこと〳〵しき事のあるべき證とも覺えず。そはまた例の。さしこみたるにやあらんと。いそぎにいそぎ。走り行けば。人あまたつどひ。家内なきさわぎて。はや言きれたりといふ。いかでさる事あらむと。いぶかしみつゝ立寄り診るに。實に死にて。かくもはからひ見ばやと。施こすべきやうもなし。おのれこゝに於て。始めて驚き。さてはまた診察を誤れるなり。その誤れるが中にも。さきの二人は。必死ぬべきものに云ひたるは恥なれども。おのが藥にて愈たれば。恥かはしながらも。心苦しき事はなきを。こたびは夫と事かはり。死ぬべ

きものを。さしも重からぬ事に云ひて。死たるなれば。その心苦しさ。言む方なく。予誤れると思へば。人に顔見らるゝ心地して。殊に晝はあしらひよかりし人も。今は我を見下し居るおもゝちに思ひなされつけさ伺ひ候ひし程は。今ほど斯る事の有べき證には候はざりしに。此こそ急變と申すべけれなど。負じ言云ひて。鼠の逖ぐめるがごと歸りたるに。其夜は更に目も合ず。あすよりは。この業を止めてむなどさへ思ひ煩ひ。また思ひ直しもして。とにかくにいねかねて。傍なるふみでとすどり引よせて。この行先の心得にとて。記しつけおくなり。　文化四年歟

〇與埴辨

文政五年五月の始め。伊豆國の海邊に。伊岐理須といふ戎國の漁船より來て。其船人の言に。水の盡たるゆゑに乞はむとて。船を寄せたる由申せるなど世に聞え。また其船人共の。よく此國邊の。針路を知たる趣などをも聞傳ふるに。正しき漁舟とは思はれざる事共あり。殊に彼國人の年久しく。我が國を覦ふ由は聞傳へて在れば。拙き心にも思ふ旨ありて。「大君に神の依させる戎國の。はてては御國の御馬飼の國。」と密にうち詠めて在けるに。また此頃きけば。其異國人どもの中に。海中にて飲水を失ひ。數日海潮飲みたる故に。煩ふ者多ければ。其療治に赤土入用なり。賜はるべしと願へる故に。其地の赤土を。幾樽とやらむ贈りしかば。其土を用ひて。彼病人共を療しけるに。皆速に愈て歸れりと云沙汰もあり。これ實ならば。其邊の土民などの。事を辨へざる者ども。船のより着て。未有司の人々にも訴へざる間に。船中に。實に病人あるを見。かつ早く賜へと。切に乞けむ故に。何の心もなく贈れるなるべけれど外國人なとに。土を取する事は。宜からぬ例とする事なり。今の世にも。國中にてすら。老農など。互に我が作る田畠の土を。他人に取らする事は。吉からぬ例とするにても知べし。是を以て。今古き書の事實を。此に拾ひ擧て。其本の由緒を知らしめむとす。日本紀第三。神武天皇御即位前の。戊午年の所に。二月丁酉朔丁未。皇師遂東。舳艫相接云々。九月甲子朔戊辰。天皇陟彼菟田高倉山之巓。瞻望域中。印本域誤城、今據古本改之。時國見岳上。則有八十梟帥。神印本作師者誤也。又於女坂置女軍。男坂置男軍。墨坂置熾炭。其女

坂男坂墨坂之號由此而起也。（其字印本誤具、今據古本改之、）復有兄磯城軍。布滿於磐余邑。賊虜所據。皆是要害之地。故道路絶塞。無處可通。天皇惡之。是夜自祈而寢。夢有天神訓之曰。宜取天香山社中土。以造天平瓫八十枚。并造嚴瓫。而敬祭天神地祇。亦爲嚴呪詛。如此則虜自平伏。天皇祇承夢訓。依以將行。時弟猾又奏曰。倭國磯城邑。有磯城八十梟帥。又高尾張邑有赤銅八十梟帥。此類皆欲與天皇距戰。臣竊爲天皇憂之。今當取天香山埴。（今字上、印本有宜字衍也、）以造天平瓫。而祭天社國社之神。然後擊虜。則易除也。天皇既以夢辭爲吉兆。及聞弟猾之言。益喜於懷。乃使椎根津彥。（印本脱使字、今據古本及舊事紀補之、）著弊衣服及蓑笠。爲老人貌。又使弟猾被箕。爲老嫗貌。而勅之曰。宜汝二人到天香山。潜取其巓土。而可來旋矣。基業成否。當以汝爲占。努力慎焉。是時虜兵滿路。難以往還。時椎根津彥乃祈之曰。我皇當能定此國者。行路自通。如不能者。賊必防禦。言訖徑去。時群虜見二人。大咲之曰。大醜乎。老父老嫗。則相與闢道使行。二人得至其上。取土來歸。於是天皇甚悅。乃以此埴。造作八十平瓫。天手抉八十枚。嚴瓫。而陟于丹生川上。用祭天神地祇。則於彼菟田川之朝原。譬如水沫。而有所呪著也。天皇又因祈之曰。吾今當以八十平瓫。無水造飴。飴成則吾必不假鋒刃之威。坐平天下。乃造飴。飴即自成。又祈之曰。吾今當以嚴瓫。沈于丹生之川。如魚無大小。悉醉而流。譬猶柀葉之浮流者。吾必能定此國。如其不爾。終無所成。乃沈瓫於川。其口向下。項之。魚皆浮出。隨水噞喁。（項下之字、據三本補之、）時椎根津彥見而奏之。天皇大喜。乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹。以祭諸神。自此始有嚴瓫之置也。云々。十月癸巳朔。天皇嘗其嚴瓫之粮。勒兵而出。先擊八十梟帥於國見岳。破斬之。云々。十一月癸亥朔己巳。皇師大擧云々擊破之。斬其梟帥兄磯城等云々。

これ天皇、天祖神の御誨に依て。呪詛の事を知り給ひ、賊地の埴を取て。遂に賊を亡し給へる例なり、埴すなはち赤土なり。

同紀第五。崇神天皇十年の處に。九月丙戌朔甲午。以大彦命遣北陸。武渟川別遣東海。吉備津彥遣

丹波道主命遣丹波。因以詔之曰。若有不受教者。乃擧兵伐之。既而共授印綬爲將軍。壬子大彥命到於和珥坂上。時有少女歌之曰。瀰磨紀異利寐胡播椰。飫迺餓鳥殊志齊務苦。農殊末句志羅珥。比賣那素寐殊望。於是大彥命異之。問童女曰。汝言何辭。對曰勿言也。唯歌耳。乃重詠先歌。忽不見矣。大彥命（印本脱此命字、據古本補之）乃還而具以狀奏。於是天皇姑倭迹々日百襲姬命。聰明叡智。能識未然。乃知其歌怪。言于天皇。是武埴安彥將謀反之表者也。吾聞武埴安彥之妻吾田媛。密來之。取倭香山土。裹領巾。（印本有頭字、者衍也。今據水府本刪之）祈曰。是倭國之物實。乃反之。（乃字印本作則。今據古本及水府本改之）是以知有事焉。非早圖必後之。於是更留諸將軍而議之。未幾時。武埴安彥與妻吾田媛。謀反逆。興師忽至。各分道而夫從山背。婦從大坂。共入欲襲帝京。時天皇遣五十狹芹彥命。擊吾田媛之師。即遮於大坂。皆大破之。殺吾田媛。悉斬其軍卒。復遣大彥命與和珥臣遠祖彥國葺。向山背。擊埴安彥。爰以忌瓮鎮坐於和珥武鐰坂上。則率精兵。進登那羅山而軍之云々。更避那羅山。而進到輪韓河。與埴安彥挾河屯之。各相挑焉云々。埴安彥望之問彥國葺曰。何由矣汝興軍來耶。對曰汝逆天無道。欲傾王室。故擧義兵討汝逆。是天皇之命也。（印本討字上有欲字、者衍也。據古本刪之）於是各爭先射。武埴安彥先射彥國葺。不得中。後彥國葺射武埴安彥。中胷而殺焉。其軍衆脅退。則追破於河北。而斬首過半云々。

これ朝敵皇地の埴を取て。國を傾けむと咒詛せるが。忌瓮の神事に。賊の咒詛うち消されて。亡びたる例なり。右の事ども。委く文意をも註さま欲けれど。容易からぬ事なれば。たゞ本文をのみ記し出侍り。また漢籍にも。思ひ合すべき事あり。其は國語の晉語に。文公翟より齊に行くことを記せる所に。過五鹿乞食於野人。野人擧塊以與之。（五鹿ハ衞ノ邑、塊ハ墣也）公子怒將鞭之。子犯曰天賜也。民以土服又何求焉。天事必象。十有二年必獲此土。二三子志之。歲在壽星及鶉尾。其有此土乎。天以命矣。復於壽星。必獲諸侯。天之道也。由是始之。有此其以戊申乎。所以申土也。再拜稽首受而載之。と見えたるが。果して子犯が言の如くなりし事。春秋左氏傳。僖公が二十八年

正月の處に見えたり。此は柳宗元が評せる如くにも有べく。また本より神國にて。天神地祇の守護嚴重なるに。況て武備萬國に比類なく。神々しき御國なれば。「喧ぐとも國の御稜威に摧けなむ。底よりの國ゆよする白浪。」とは思へど。史記の三王世家。白虎通などに記せる。諸侯を封ずるに。其方の色に當る土を賜ひて。社に祭らしめ。謂ゆる社稷を重むずる由緒などを思ふにも。異國人に土を取らする事は。吉からぬ事とおほゆ。然るは外國々には。種々惡しき咒詛事も多かりと聞ゆれば。僞りて漁船の狀をなし。病人をも作り咒詛の料に。土を取りに來れるには非じか。とおぼつかなく思はるればなり。但し此は己が怯き心の惑ひならむかも。

文政五年五年十八日

○或方まで呈書案

明々年　日光御宮　御參詣之儀被　仰出候ニ付乍恐存付口上覺書

右　御參詣之儀を　御社參と御唱へ被遊候儀者宮號勅許之　御宮に取候而者聊不相當之儀歟與乍恐奉存候其故者先宮字者唐土之書に至尊所ㇾ居之稱と相見へ此方に而ミヤと訓じ候者御家之義に而正宮を申候又社字者夏后氏以ㇾ松殷人以ㇾ柏周人以ㇾ栗など相見へ候に因り候が此方に而は萬葉集を始め古書共に多く神地之森之事に用ひ來り候而神社と申候者則其森を申し候故社の字をモリと訓じ又神社と書候而モリと訓じ候事も有ㇾ之候さて社をヤシロと訓じ候は屋代之義に而假初なる義に御座候尤も上古に未ㇾ是等之禮典式不ㇾ被二相立一候間者弘く神祠を宮と申候事も御座候へ共三代實錄　清和天皇之御世之所に貞觀元年八月二日　勅二伊勢國一伊佐奈岐伊佐奈彌神改ㇾ社稱ㇾ宮云々と相見え候是は此節迄社と稱し候を改めて宮と稱し候樣にとの儀に而御崇敬の至に御座候是より以來宮號　宣下と申事も始り候而猥に宮と稱し候儀者不相成御式と相成候既に延喜之神名式に被載候社三千一百三十二座之內　伊勢兩宮之外に者荒祭宮瀧原宮伊佐奈岐宮月讀宮高宮鹿島神宮筥崎八幡宮而已宮と被記候而自余者此以前國史に宮と出候をも神社と記され宮中に被祭候神さへに神社とか神とか社とか有之事に御座候右樣重き御事には相成候へ

共　東照宮には乍恐數百年來之天下爭亂を御靜謐被爲遊候御勳功無比類に被遊御座候に付格別之　叡慮に依て宮號　勅許被爲在既に　宸筆之御額にも宮號を以て　御染筆被遊候事誠に　以莫太之御規模天地無窮之御盛事と乍恐奉存候殊に無上之御位階を御極め被遊例幣之　勅使御立被遊候而　朝廷之御崇敬他社に異なる義に有之善美を極め候　大御宮に被爲在常々　日光御宮と御稱し被遊候に右御大禮之　御參詣を普通之神社御參詣と同樣に　御社參と奉稱候儀者前々之御例にも可被爲在候へ共　朝廷より格別御崇敬被爲遊候御趣意に不相叶假令者御所號之貴人な屋形號に申候樣なる義にて無勿體御儀と奉存候間かゝる昭代之御しるしに改て　伊勢兩宮へ御參りを參宮と申候例に依て　日光御參宮と稱し奉り候に子細無之御事と本朝古道學相心掛候者共は內々申候事に御座候朝鮮人之參り候を舊くは來朝と唱へ候を後に改て來　と御稱し被爲遊候御例も有之候樣に傳承罷在候抑古道學之義は　東照宮駿府に御在城被爲在候砌御發基被爲遊候義に而私式に至まて乍恐其御餘澤に依て故實之原由をも伺ひ罷在候故朝夕共　御神恩を難有奉存候よりかく申出候事に御座候間不苦被思召候はゞ何分其御筋へ被仰立候樣仕度奉存候以上

文政五年九月　　名

屋代先生机下

○氣砲圖說序

掛まくもかしこき。これの皇大御國はしも。天地の初發の時に。天之御中主神。二柱の產靈神の命もちて。御祖伊邪那岐。伊邪那美命。國生造り固め給へる後に。我が生りし國はも。狹霧のみかをりみてりと詔給ひ。吹撥はし、御氣吹に。——志那都比古。志那斗辨神生ましぬ。此は風神なり。そも〳〵此神はしも。御祖神の生坐る神の多かる中の。御子の上とまして。其生れませる本の謂のまに〳〵。世のくもきりを吹撥ひて。萬物を幸へ給ふ御功は更にもまをさず。萬物を活し給ひ。言問ふことの。遠音にきこゆるも。みな此神のいさをになも有ける。抑々これの大御國はしも。神世に幽き故ありて。天神たちの異なる御德によりて。神の本つ國　萬國の祖國と定めたまへる御國にしあれば。さへづるやから國々の人ごもの。武國としも名づけたること〳〵く。雄々し

き健き國風なる事は。今さら云ふべくも非ず。かれこゝをもて。疎ぶる國。あらぶる人をとりきためて。世を治めます。兵の類なる器どもゝ。萬國に類なくぞ有ける。然はあれど。君は君。臣は臣と。元より堺のわかりて。定め給へる神ながらの道あれば。外國國の如く。世の亂るゝ事は無く。國の域は。おのづからも。外國の侮うくまじく。かしのみのひとり立て。いと嚴重に。神の城づき給へれば。外國の人どもゝ。高枕してうまいねすとも。恐れなき國とたゝへ奉れる如く。浦易の安國になも有るを。枝國の外國々はしも。御國と事かはりて。大かたの國々の域つゞきたれば。常に他の犯し侮をうけ。はた其國々の。こきしの統さへ定り無れば。下たる者の上を伺ひ。上なる者は下の犯をふせがむと。互に競ふからに。常世にいます神の御心と。其を防ぐ器をもくさくさ作り設けたる中に。鐵炮といふものはしも。云々

文政六年四月

或御方へ願書案

一云々

一家臣と家頼との差別有之候儀御承知之如くに御座候然るに　將軍御家臣之大名達　攝家方之御家頼と相成居候衆々數多有之候私儀もし御執持に依て御家來と相成候上三家三卿國守などの家に奉公仕候共右之例を以て其儘御家來と被成下置候儀相成申間敷哉

一神社へ位階を御贈り被遊候舊例相考へ候所最初は其所々にて私に祠ひ候社に候を後に其子孫又は信仰之者より言上に及び上にも其神功を被思召候て位階を贈られ官社にも被爲遊候が多く御座候此例を以て先師亡靈へ位階御執奏之儀御伺奉申上候所在命ならぬ者へ被贈下候義相叶がたき旨御示し被成下謹而奉承知候但此儀に付又いさゝか存念之旨申上試候位官相兼被下候義は在命ならぬ庶士の義に御座候得は官職之儀は被下置候儀相叶申まじく候共位階計りを被下置候樣御執成相叶申間敷候哉近例は伊豫國伊達遠江守殿家臣矢部清兵衛と申者無實之罪にて刑せられ候後嚴しき祟有之候故伊達家より被申上候て其亡靈へ位階被成下和靈明神と申す　勅額被成下候と申儀風聞傳承仕罷在候

一もし右之儀傳承之誤にも無御座候はゝ今般　御所

様より本居名神社とか本居靈神社とか御額被成下候儀相叶申間敷候哉但今時は親規之社造營など申儀は御禁制に御座候事奉承知罷在候故決して目立候様なる義仕候と申にては無御座候只々先師子孫之者の地内か又は門人共之内には社家も數御座候へば其社地などに小祠を造り近くは下御靈社地山崎垂加の靈を垂加靈社と祠り候體に仕候義に御座候夢々横行に致候義には無御座候

一右之御縁を以御額被下置候御懇命之筋を以後年に至り御願申上候はゝ位階御執奏被成下候様之御手續き相叶申間敷候哉

一先師儀在命中に　御所様江御縁之儀も無之故今般之願筋御開濟被遊がたき由御示し被成下謹て奉承知候左様御座候はゝ先師門人之内乍恐御家頼に被成候上は取も直さず先師やがて　御所様御家來と申筋にも可相成其上にて其者より御願申上候御縁を以て御計ひ被遊被下候儀相成申間敷候哉

一若し門人之内にては御縁薄く御座候はゝ先師子孫之者の内御家來に相成候はゝ如何候半

私本生先祖之儀は下總國々守千葉介平常胤末流之者に御座候て　吉野内裡江御方申上親子二代まで皇軍に從ひ討死仕候事系譜に記し傳へ候事に御座候先師先祖は勢州國司北畠殿江奉公仕皇軍に從ひ討死仕候者も數人有之候事是亦系譜に相見申候然る所不測に私儀先師學風に相從ひ段段深く相學び候所實に古今無比之正しき學風にて　皇朝之古道を説明され候事々心酔仕候て其志を相繼一日も師恩を忘れ候隙なく丹心に學事相勤候所今年九月二十九日は二十三回忌に相當仕候故願はくは此儀成就仕候て師恩の萬分一を報じ申度心底之儀御汲分被下何分宜御勘考可被成下可相成は御下紙被成下候様奉願上候

文政六年八月

○脇坂中務大輔殿江差出候内願書

多年來乍恐御徳義奉欽仰候旨兼御座候に付當春　薩州　榮翁様江御願申上候て彼　御方様より愚撰之書類御進上にて姓名御通し被下置且つ御目通り之儀をも被仰入被下候所早速御承引被成下去る四月二十五日御目通り被仰付御懇命之御意奉蒙且つ愚撰之書類追々御覽被成下候由にて撰述丹誠之段御賞詞等承之

難有仕合奉存候右に付猶又年來奉欽慕候旨趣申上度段も御伺申上候所是亦御聞濟被成下候事冥加至極難有仕合奉存候依之今般不顧恐内願之趣意左に奉申上候文面不調失言之儀も御座候はゞ寛大之御仁免偏に奉願上候

一本朝古道學之儀は今般奉入御覽候別紙去る文政三年二月御日付内藤年正人様ゝ門人竹内孫市より差出候辨書に相認候通り乍恐　東照宮様駿府御在城之砌御吟味有草創被爲遊候後　尾州敬公様其御道意御繼被遊候て神祇寶典類聚日本紀等之御撰被爲在其後　水府義公様殊に此御學事御精究被遊大日本史神道集成神儀類典等之御撰被爲在候以來右御餘澤海内に瀰滿仕候て荷田東麿岡部眞淵本居宣長抔夫々師弟相承仕候て此學事に從事仕追々精究種々著述仕候儀は乍恐全く

東照宮様御草創之御學意を憲章仕候本意に御座候て後來之門人等益々此學事相勵み追々考索精究之上　公儀御用にも相成候様可仕段師々精誠申遺し候事に御座候抑私儀者本居宣長門人に御座候て先年白川神祇伯王殿より學師之儀蒙仰殊に近來江戸執役所心添等被相賴罷在固より不肖凡陋之質に御座候得共先師等遺稿に相本付き。右遺言之儀堅く相守り多年之間此學事に勤苦仕り既に先達而奉入御覽候書類に相附し候著述目錄に相載候通り古史傳參考神名式印度藏志を始め種々草稿仕候事に御座候乍併上代之故實也希之傳説舊來紛擾之儀共多多御座候得者容易に考證相屆き兼候而未だ悉者清書不仕候得共古史傳并考神名式等者古道之故實神社之沿革等を相記し印度藏志は一切佛經悉く探索仕候て佛法之眞面目諸宗之立義を討覈仕候物に御座候得者右等を始め著述之書類追々考證相調ひ清書出來次第爲冥加御用に獻上仕度奉存候依之先般

御前ゝ奉入御覽候を御初例に被成下候而御同役御奉公中樣一同及ひ向來御新役之御方々樣ゝも考索相屆次第追々獻上相成候樣被仰付被下置度謹而奉願上候左樣御座候得は御役柄之御事故即右學事御用に相成候趣意勿論にて先師等生涯之志願精誠（義カ）申遺し候本懷に相叶且つ依託相受け罷在候私式も師孝之本志相達し天下之同學一統之大慶不過之冥加至極難有仕合可奉存候既に元祿年中に細井知名

と申候浪士有之中古亂世之時より古天皇方之諸山陵荒廢仕候而御在處不分明土民之攀躋等に相係り候儀を相歎私に年來探索集記仕候而其時之御役松平甲斐守様ﾆ　公儀御用に被成下候樣內願申上候處奇特之由御聞屆にて言上に相成り知名沒故仕候後も其弟細井知愼號を廣澤と申候者ﾆ被命候て尙又精細に御吟味被爲遂右一件之集記　御用に相成同十一戌寅年に至り諸陵之周垣を被　仰付被禁亂入候儀者于今難有御政道と世に申傳候事に御座候私祖述仕候古道學は神祇之故實相明し候儀專要に御座候得者可相成者右之振合に御開濟被成下考證相屆次第御奉行中樣ﾆ御用獻上に相成候樣被　仰付被下置候はゞ莫大之御善政乍恐後世迄も御餘德奉仰候儀に御座候間願意御取上之儀誠恐誠惶伏而奉仰願上候以上

文政十三庚寅年十一月

かくて後に立花知常ぬしゝて云々なむ答給ひける

○木村休右衞門春秋滿に與ふるしるしの書。

薩摩人の我が門に入たるは。御もと始めにて。學びの御心ざし深く篤くおはせば。其御國あたりに。古へまなびに志ありて。己がをしへに習はまほしく思はむ人有むには。其許とりつぎて。名づき誓詞のしるしなど。定めのごと計らひ遣せて。國遠ければ我に代りて敎へ導き賜はれど。賴み思ひたまへらるゝを。今よりのち其旨心得給へと。かくしるしのふみにものして參らすになむ。

文政十三年寅九月廿八日

○法元六左衞門御楯に與ふるしるしの書

其御國主の御內人の。我が敎へに隨ひ初しは。木村鈴麿主にて。此は道に心ざし深かりければ。其國邊りの敎授に賴み聞えて在けるに。先頃身罷りたれば。甚く歎き思へりしを。御許にも同く其志し厚くおはせば。爭で其許の成給はむ功績、また五百世坐なむ齡のうへに。彼の主が勞き遣せる功績。また其殘せる春秋をも加へ重ねて。無窮に其御國あたりに。古へまなびに志ありて。己がをしへに習はまほしく思はむ人有むには。其許とりつぎて。名づき誓詞のしるしなど。定めのごと計らひ遣せて。國遠ければ我に代りて敎へ導き給はれど。賴み思ひ給へらるゝを。今よりのち其旨心得給へと。かくしるしのふみにも

のして參らすになむ。

天保二年八月廿八日

○田中の元長が。あまたゝび訊ひ來て。いとせちに乞ふまゝに。辭みあへずて。書て與ふるあやせ棚の詞。

津國浪花なる花月庵のあろじ。田中の元長ぬしは。かの賣茶翁ときこえし翁のみやびを慕ひて。その手ならせる調度。又其せをそこなど。あまたもち傳へて。其わざに精しき人と。かねて泉利愛よりきゝてしあるを。春の頃より。此の大江戸へものして。利愛と共に。わが許へも折々に訪はれしかば。吾もこひて。まさ目に其わざを見たるに。世にこき茶うす茶とて。ものすとは其樣かはりて。いとたはやすく。みやびかなる業にぞ有ける。然るに此ぬし。大江戸の水の茶にあふが得がてなるを。あかず思ひて。さつきの廿日まり九日と云日に。かの名におへる。あやせの川の河水をこそ。試みてめと。そこに物して。茶を煎こゝろみられけるに。色も香もこよなう勝れたりけるを。歡びの餘り。其あたりに。彼梅若丸と聞えしわく子の祠あるに。手むけなどして。其後は。

此川水をなむ用られける。さて此あやせの川邊はも。いにしへねぶの木のおほくしみ榮えて。名にたてる所なるが。今はさもあらず。はつかに殘り生たる。其かな木を折とりて。茶棚の中棚にうちならべて。しもと机めかしう作りなして。そをやがて綾瀨棚とぞ名づけたりける。抑々茶のやまと名は。おほとちと云ふを。これがくさ〴〵の能あることは。古きふみらに多く見えたる事なれば。今さらにいはず。ねぶの木はも。たそがれ頃より。葉なみねむるが如く。あしたには葉のうち開けば。かく名におへるを。から書どもには。人のいかりを蠲るものなりとも。こを庭に植おけば。人をして忿らざらしむとも。また此葉のゆふべごとに相合ふ故に。合歡とも。合昏とも云ふと見え。またさる名よりして。をとこ女のかたらひにかけて。から歌に作れるためしも聞ゆれば。此棚とり出て。友のまとゐせむには。主のこゝろはさらなり。其いほに來つどふ人々も。おのづからに歡びあひて。萬づのもの思ひも忘られて。ねむり木のしるしと。あるは居ねむり。目さまし草に。或はめさまし。互にうらなくいく久しう。むつまじう語

らはなむ物ぞと。いとめでたくおぼゆるまゝに。庵
ぬしにかはりて。かく記せる筆のついでに。「ねむの
木のねむたくあらばおほとちに。目ざまし語れ茶の
み友だち。と戯笑歌しけるが。またかくなむ。「武藏野
の名におふ川の綾瀨棚。あやに床しき主にも有かな。
天保の三とせと云ふとしのみな月
代筆のついでに篤眞。
綾瀨川あやしき物かねぶの木も。目ざまし草の棚と
なりぬる。

○立言文

祖述三皇。索三墳之既隱。憲章五帝。探五典之僅存。論定八卦。拾八索之遺威。觀察九州。志九丘之全備。

或人問予於赤縣學之稽式。予答以斯言焉。蓋三皇也者。謂天皇氏。地皇氏。人皇氏也。五帝也者。謂太皥。神農。黃帝。少皥。顓帝也。於傳有焉。三墳。五典。八索。九丘。即謂上世帝王遺書也。恐其書耳。而此八氏。素非赤縣之所生焉。寔是我靑葦之神眞。恭承天祖之命。而君師于彼州。一執大同之制。而敎養於其民。始傳之道德。且授之典要者也。道者何。天爲地綱。神爲人綱。君爲臣綱。父爲子綱。夫爲婦綱。是也。德者何。曰敬。曰義。曰仁。曰智。曰勇。是也。典要者何。政刑。兵陳。律曆。度量。文字。卜筮。醫藥。凡所以經綸天下。綱紀民用者是也。抑我惟神之本敎。唯一之帝道。固此其道之質也。我先皇有鑒於茲。故假其名以爲皇猷之贊焉。學者或有云。祖述堯舜。憲章文武者也。予謂其說也。於彼土則或可歟。於天朝則。皇統素無以佗爲嗣之例。朝憲既無以臣代君之道。則公簡之格以可察哉。是故執之於三五之古始。以爲其學之道紀矣。語曰。太上立德。其次立功。其次立言。吾惟宗我所宗。而獨立其言者耳。亦豈敢强信乎不信之人哉。其詳者。見赤縣太古傳。可覩焉。于時天保四年。太陰在癸巳孟冬九日庚子。太一在于中宮天禽日天禽時

○鈴屋大人の肖像

大人の□□のころ自らの像をゑかきうつさむとおもひおこし給ひてをり〳〵鏡にむかひて物し給ひけるがやゝ月日へて書をへ給ひてそれがうへに師木島の倭心を人とはゞ朝日ににほふ山櫻花となんかゝれけ

るとぞかくて敎子どもそのかたを書て得させ給はんとこひけれどもむづかしとてうけひき給はずさらばそれをうつさんといへば世の師になかゝせそ筆のいきほひにまかせてまたくうつし取じたゞその道しらぬまめ〳〵しき人に書せよかしとつねのたまひけるとなん

〇すみれ草序

あがれりし世のみやびたりしさまと。古へ人のみやびなりし心とを知るには。其の古き世の物語書。讀むに及事なく。其書の多有中に。うらぐはしきは春野の菫。紫の源氏物語に及ものなく此は古へ今に。世の物知人のいひ定めて。動くまじき事になむありける。然るを彼物語はしも。大かたも世にたぐひなきまで。あはれ知れるいみじき。文かきのいみじく心して書るなれば。其むらきもの心の緒ろは。彌百會の。潮の底の眞淸水の。くみがてにのみ誰もすめれば。それ釋あかせる書どもぞ。五百卷。千卷多有ける。そが中に。むねとある說のみ。撰取てよろしき書は。湖月抄。又それに漏たる事。違へる事など考へ記し。はた紫の書よむべき。心得など。懇に諭せる書は。吾鈴屋翁の玉小櫛の書になむ有ける。然は有ど。彼小櫛にはしも。添ではえあらぬ系圖をば。妹が績苧の遑なきとて。書漏されたるなむ。我も人も殘多き事と思わたれど。繼て書さむとしも思たらで過しぬるを。吾たらちねの母の甥なる。北村久備。そこをしも慨み思て。いてや其鈴屋の翁が摘つる菫草。若紫の色も香も。我樫の木の繼て考へ。摘てむものと梓弓。思ひ起して。三千歲に。なるとふもゝの百たらず。やつをのつばき。つばらかに。いそしみ成せるこれの三卷よ。あはれ。世の物學ぶ。諸人に。見せま欲きは小櫛の書。其の小櫛の書に驚きて。若紫の香細しさを。たどらむ人の誰やし人も。摘ではえあらぬ。草はこの草。見ではえあらぬ。花はこの花。抑此花摘る久備はしも。止事なき殿の御內に。仕へ奉りて。其の仕への葉もしげ山の。いと繁くていつの間にか書は讀らむ。とさへ思はるゝ身。えがてなる暇を窺ひて。古書を好み讀み。何くれと書著せる本の多かるがうへに。此度此書を物せるにつけて思ふに。古人のいへる言に。我に書見る遑なしといふ人なむ。そは遑ありとも書讀ぬ人ぞ。と言おけ

る語の。實に然ることゝ思合されて。我族ながらに久備が。學の道に功しきを。美ざらめやも。言擧ざらめやも。文化九年といふ年の二月。かく云は吉備の中つ國。松山の殿人。平田篤胤

○

上總國本納に鎭座す式内橘樹神は倭建命東征の時に走水の海にて惡風にあひ玉ひし時命に代りて海に入給ひし后橘媛命の御舟を埋めて陵を作り后の御靈を祝申せる御社なり御社の右に大沼あり往年旱魃して此沼より御舟の帆柱出たりしを其の頃やごとなき御邊りの仰せにて荻生武郷をもて其木を伐とり奉りしを御琴に作らせ給ひしかば其音たぐひ無りしとぞ然るに津山の殿の御前君に少か其木を奉りしかば御琴瓜の筥に作らせ給ひて其由を書てと仰あるに畏りてかくなむ

文政十二巳年九月

○

これの上總國長柄郡金田鄕宮原村に鎭座まします御社は兩社にて大宮と南宮となり。大宮と申すは伊邪那岐大神日向國橘の小戸の檍原にて御禊祓し給ふ時に生坐る海神豊玉彥命の御女豊玉毘賣命に坐まし天照大御神の御玄孫日子火々出見命の后に立せ給ひ鵜草葺不合命を生せ給ふ。豊玉毘賣命の御妹は玉依姬命と申て葺不合命の后に立せ給ひて是神武天皇の御母に坐まし今上總國の一ノ宮と稱し奉る玉前神社是なり、此國に鎭座の事は景行天皇御代倭武命東夷を征伐し給ふ時に海上安穩の御祈ありて。金田鄕大宮臺に鎭座なし奉る其後天武天皇の御代白鳳年中に長谷川何某と云人美濃國より來て金田鄕のいまだ開けざる所を開發しける時に大宮を下山と云地へ移し奉り。延喜式神名帳に美濃國不破郡仲山金山彥神社名神大とある社は南宮大明神とも稱し本國の一宮たる故に大宮の相殿に勸請し奉りて若宮と稱す其後數の年を經て應仁年中に今の宮原村に移し奉る。抑々大宮豊玉姬命は海神に坐まして海上の難を救ひ漁獵を幸ひ給ふ事は世人の普く知る處。若宮南宮大明神は金山彥命にて金神に坐ませば。すべて金匠を業とする者の祭るべき神なる事も世人の普く知る所なれば今大略に其の御緣起を記して。氏子の人々に知らしむるもの也

○

小子儀元來是等之義に心を留不申不案內之筋に御座

候故懇意之和學好事家共へ問合せ共申候趣を先日申上候事に御座候然るに此御書付拜見仕候所甲陽軍鑑を始め諸書御參攷も被爲屆候上かの制札を實物と御極め被成候御樣子に相見え候江戸之好事家また古文章鑑定家などの申事は必至と頼みに相成候事にも無之候こと此儀に限らず毎々有之事に候へば然も可有之事に御座候願はくは御考證之被及候たけ委く御記し被成候て偖かく思ふはいかゞ有むと被仰越候はゞ又々承り合せ方も可有之候彼制札手跡も甚おもしろく天永云々之文も何か由ありげに相聞え候へばいかで實物とせまほしく辨慶の靈も相悦可申候へば何分右御考證拜見仕度事に御座候以上

十二月七日　　　　アツタネ

〇新修鷹經のはしがき

後普光院殿の。嵯峨野物語のはじめに。人臣の君につかふる事。みなちりにつきて。其所業をたしなむなり。我家にはまづ政道。次に和漢の才學なり。そのほか餘力あれば是をたしむ。余本朝の諸傳をうかゞへること。既に一萬卷にあまれり。これ世のしる所なりとあるは。げに然もおはしけむとおぼゆるにあはせて。是より下に。馬はむかし唐國よりわたりし時は。耳のけものといひて。すべて希なりしかば。帝王の御氣色よき。大臣公卿のほかは。のる事もなし鷹は仁德天皇の御代に。高麗より奉る。是を見しる人なし。くちとそいひける。と記されたるは。いとも必得がたくぞおぼゆる。そは神世に健速須佐之男神あらびまして。宇氣母智神をきり給ひしかば。其神の御身に。牛馬また五つの穀のなれるを。天照大御神これよりして御つくり田のこと始めたまひそののち大國主神いでましの時に片御手は御馬の鞭にかけかた御足はみあぶみに蹈みいれて。御歌よみし給へること。神の御ふみに見え。人の世となりては。崇神天皇の御世に。大毘古命やましろの國の幣羅坂にて。少女のあへるが。あやしき歌をうたへるに。馬をかへして問はせる事あり。是らにて。大御國にもとより馬の有りしことしるく。さて鷲くまたか大鷹こたか隼など。大き小さきによりて名こそかはれ。共におなじ類の鳥なるを。神世に大國主神。天の羽車大わしに乘らして。天がけり給へる事のあるは此

をならし使ひ給へるなり。其はかの鷹を愛たる老翁と。犬を飼へる老嫗とありしが。翁は愛鷹の神となり。嫗は犬飼の神となりしと云へる。風土記の古事にも思ひあはせて知らる。犬は。山狩にもちひ。鷹は鳥がりに使ひたらずは何の用とかせむ。かの言代主神の。鳥遊びし給へりとあるも。然る事とこそ聞えたれ。かくて垂仁天皇の御世に。高ゆく鵠をおひゆきて。捕へし人の名を山邊の大鷹といひ。仁徳天皇の御弟に。隼別皇子とまをすもおはせり。然れば鷹は此の御世にはじめて高麗の國よりわたり來し物といふこと。もはら信られず。抑いにしへ今の事しり人たち。ともすれば。御國にもとより有つる物をし。しひても外國よりまゐこしさまに云ひなすめるは。いかなる心にか。然るにこの鷹經はも。その御えらびありし御世もふるく。その御序にさるあやまり言は用ひ給はず。仁義敬勇智といふ。五つのいさをゝたくへまして。君子の翫びめづべき物と詔ごちませる大御言なむ。かしこしとも畏かりける。こを今かくたゞし物せる西野ぬしも。さる大御心をうかゞひ奉れるしわざにこそ。こゝに摺かた木すでになりて。己にはし書をと云はるゝに。かねて古今要覽にいはまく思へるをちく〲をつみて。そこはかとなく。かく記せる時は。天保の十年といふ年のさつき。

八十一翁屋代

氣吹舍筆叢上卷

目次

氣吹舍筆叢下卷

目次

氣吹舍筆叢上卷

門人 矢野玄道 訂正
平篤胤著 孫 平田胤雄 同
門人 井上頼圀 校

立志

安藤爲章の年山紀聞に。立志と云ふ條ありて。新千載集なる。藤原信良い歌に。

水ぐきの岡べの篠の一ふしを。此世に殘す言の葉も哉。

また續拾遺集なる。丹波經長朝臣の歌に。

仕へこし身は下ながら我道の。名をや雲井の代々にとゞめむ。

と詠れしをあげたる。誠にこの二首は。よく立志のおもむきに合へり。また同書に。讀古今集なる。紫式部刀自の歌に。

わりなしや人こそ人といはざらめ。みづから身をや思ひすつべき。

と詠るをあげて。此歌は自暴自棄の。いましめとも。なりぬべし。といへりしも。別にめでたし。大概の世人。少しものゝ心をわきまへたるは。學問に志をおもむけざるは。なけれども。何事にまれ。すぐれてめでたきは。其は昔人こそあれ。いかで今人はなど。吾から。思ひ捨て。はげみ學ばむとさへ。思ひたらぬは。いかにぞや。西戎人すら。舜何人ぞや。我何人ぞや。なども云ひ。また天地の間なる。萬物みな古のまゝと見ゆるを。いかで人のみ古におとるべしや。などいへる人さへぞあなる。上なる紫刀自の歌に。人こそ人といはずとも。と云へるは。いかにたけく心よき言の葉ならずや。かくたけき心なるから。いとめでたき書を作て。世にのこし。天地と共に美名をは傳ふるぞかし。たをやめだも。心ざし尙きは。かゝるを。まして大丈夫の。かくめでたき御代に生れて。生涯かの西戎國人もいやしめたる。飯袋となりて。朽はてむは。いかに口をしきことならずや。さてしかと志をかためたらむには。まづ專と道をまなぶべきこと。いふもさらなり。こは我翁のうひ山踏に。人として人の道は。いかなるものぞといふ事を。しらで有るべきにあらず。學問の志なきものは。論ひのかぎりに非ず。かりそめにも。其志あら

むものは。同くは道の爲に力を用ふべき事なり。然るに道の事をば。なほざりにさしおきて。たゞ末の事にのみ。かゝづらひ居らむは。學問の本意にあらずと云はれ。また學問は始より。其心ざしを高く大きに立て。その奥を究め盡さずは。やまじと固く思ひまうくべし。此志弱くては。學問すゝみがたく。倦怠るものなり。といはれしを。よく／＼心にしめて忘るまじき事になむ。孔子も云はずや。朝に道を聞て夕に死すとも可と。こを此所にしもあげたるは。篤胤男道なき身なれども。いかで／＼此こゝろばへを守りて忘るまじとの所爲になむ。哀れ同じ志の友もあれや。

俗に謂ゆる博識家

細川幽齋翁の說を烏丸光廣卿の聞書せられたる耳底記に學問は乞食袋の如くするがよし。と云はれし事。いとよきさとしの如くなれども。人に依りては。甚く學問の害となる事あるべし。然るは俗に博識家と呼ばれ。また自からも。しか云はれむと。つとめて博くのみ。讀わたり。ならひわたりて。謂ゆる挽臼藝とか。云ふらむやうに。更に是とゝりしめたる事もなくて。終るたぐひも有るは。專らこの乞食袋の如き。學問を。よしと思へる輩なり。そも／＼人の齡も。力も。限あるものなれば。世にありとある事。殘らず學び盡し。知り盡す事は。かなはぬわざなり。されば其もろ／＼の。わざに用ふる力を。よき一事に入れて。其道をはげみたらむには。その至る所をも極めましを。伊勢貞丈の書れしものに。鼠の物をかぢりちらす如く。萬の事を少づゝ。かぢりちらすは。何の道にも委からず。たゞその上皮をのみなめて。骨まで。とほりたる事はなし。といはれしごとく。實かたはら痛く。あたらしき事なり。然る輩の癖として。ひとむきに。力を入れて。學ぶものをば。狹しといひ。なづめりなど。いひおとし。我のみかしこく。知らぬ事なしといふさまに。もの云へども。他より見れば。みづからは。かへりていと近き事にも暗く。誤をのみ云ひ居るものなり。すべてこの。泥むといふこと。博識家の。人を誹るによくいふ事なるが。事の義をよく思はぬものなり。さるは己がよる筋の。ひがことをも知らず。他說と校もせで。たま／＼其ひがことを諭す者あれども。うつる事を知らず。ひたすらに。かゝづらひ居るなどをこそ。泥むとは云ふ

べけれ。もとも此たぐひの人も。俗には多かれども。よく他の道とも校べ見て。眞に其よるすぢの。よき事をしりて。それをむねと學ぶを。いかで泥むとは云はむ。中庸といふ漢籍にも。誠レ之者擇レ善而固執レ之者也。ともいへるにあらずや。さてまた大かたの世ノ人も。この博識の輩の。何事にもわたりて。少しづゝ覺え居るに驚きて。それが云ふをば。まづは信ずるから。いとゞ不熟々々なる事を傳へなとして。人を誤る事少からず。されば此博識と云もの。近き頃はことに多かれど。人の爲には。いと惡しきものなりけり。眞の博識ならむには。まづ眞の道をよく學びて。さて暇あらば博く學びて。道の羽翼ともなし。知りたる事は。しれりとし。知らぬ事は。知らぬとして。我もあやまらず。人をも誤らぬやうにあらむこそ。眞の博識といふへけれ。孔子も君子多乎哉不レ多也といひ。また家語には雖レ不レ能レ備二百善之美一必有レ處也。是故知不レ務レ多必審二其所一レ知などもいへりき。されど然る人はいとありかたく。大かたはかの謝二淛が謂ゆる。于レ紀濟レ惡者皆世所レ謂才子也と。いへる類の。博識家ぞ多かりける。

玄道案ふに。此は一時世に謂る博識家と稱ふ者の害あるを慷慨坐して。よの爲にする所有ての御說と聞えたり。そは師大人の博物を勉坐しは今更申すまでもなく。孔子聖說考を始め。數多の書にも其義を述誨され易大象にも。君子多識二前言往行一以畜二其德一と見え。宋洪邁も。孔丘氏が博識なりし證を論るなど實にさることなるに付てもよく正き道を學びつゝも博く物識るに非ずては天地幽顯の玄義をば通知する事能はざる理を觀察べきなり。

博識家の鹿相

今はむかしとなりぬ。ある博識の先生。おのれにさとされしは。そこは殊勝にも書よむ事を好まるゝよ。それにつけて。若き人の。こゝろえの爲に。きこえはべらむ。すべて學問は廣く書を讀にしく事なく。それにとりては。記臆あしくては書をよみてもかひなき事なり。むかし林道春は。おぼえ強き人なりしが。或とし都へ登る旅にて暴雨にあひ。道のほとりなる紺屋に立入りて。晴をまたれけるに。傍なる染物の控へ帳をとりて。讀れけるに。雨は晴しかば。都へ登り。さて歸り路にも。其紺屋にたち寄ら

れしに。紺屋は火災にあひて。さきに見たりし染帳をも。燒うしなひしとて。甚く歎きければ道春きゝて。其はおのれ闇におぼえたりとて記されしに。更に違はざりしとぞ。誠にもの學ぶ人は。かくこそ有るべきわざなれと語られき。おのれ其をりは。げにも此もの語りは。聞き覺えたる事なれど。道春にてとは無く。漢籍にありけるものをとは思ひしかど。とみに其籍を思ひ出がたくて。畏り閒居たりしが。後によく思へば。此は五雜俎に見えたる事にて。すなはち人の部に。閩林志避レ雨寓二染坊一得二其染帳一漫閲レ之匆匆而去越二二日一其家回祿索レ帳者紛然莫レ知レ爲レ計林復過レ之曰我能記レ之取レ筆疾錄不レ爽二一字一とある。これをおぼえたがへられしものなり。この先生なども。博識を專とつとめられし人なれば。五雜俎やうの。ちかきものは。讀れざるにはあるまじけれど。博覽にすぎて。かゝる事をも。いはるるなり。己はさる故にこそ。幽齋翁の云はれしことは。或は人をあやまる事の。有らむとは云ふなれ。漢土の書にも。まゝ天竺などの古事によりて。作れるならむと。思ゆる事もある如く。よしやこの古事。餘の書に道春の如く記したりとも。林志の林ノ字などより。思ひつきて。好事の者の造り云へることと疑なし。さて筆のついでなればいふ。此外にも漢國の古事。または佛書の古事などをとりて。作れる事。ふるくより。まゝあり。其は竹取物語なる。かくや姫の古事は。後漢書の夜郎國の古事をとりて。書るならむと思はるゝ類は。作り物語なれば。妨げなけれど。世に實の事として。傳ふる事にも。然る事まゝあり。またさらでも。戎人のうはべをつくりて。もの〳〵しく。さかしだちたる。しわざをこゝにもまねびて。然る僞わざせる類もあるは。いともかなしくうさき事なりかし。此はこゝに云はずとも。書くはしくよむ人は。誰も知るべければこゝには云はず。またおのづからにして他し國の古事と。全く同じやうなる事も。似たる事も少からず。廣き事物の中には然る事もなどか無からむたま〳〵他國の古事によりて作れる事も有るをもて。もとより別事なるをも。それにたぐへて。外國の古事によりて。作り出たるならむと。やうに思ふは。かたくなり。此は他國の書にのみ。なづめる學者には。常ある事なり。

玄道云。此レふみよむ人の紳にも書すべき語にて。我と彼と似る事は。蒙史湖亭涉筆。また彼此合符。和漢騈事などにも記したれど。猶盡せりとも思たらず。その他の物に散見するも少からず。又漢土にも。清人袁枚說に古事相類。書周櫟園作同書十卷。桐城方氏作古事比二十卷と云り。

さればよくその古事の本末をたゞし。僞り作れる事と。もとより似たる事の。かしこにも。こゝにも。有りし事を。よくわきまへて。或はざるをこそ。誠に活眼をもて。書を活し讀む人とは。云ふべけれ。

平維章

平維章が（篠崎金吾また東海といふ。）著せる。和學辨と云ふものに。今の神道者といふ者。多くは。ひがめるのみなり。歌學者もひがめり。それ故。儒者に物ならふ事を恥と思へりと云へり。誠に世にあまねくある。歌學者。また神道者といふたぐひは。今のかく學問の道の。ひらけたる世にすら。ひがめるも少からねば此平維章か。世に在りしほどは。漸く荷田大人の。古へ學を。いざなはれしほどにて。いまだあまねくは。ひろまらざりしかば。今よりも。なほひがみたりけむ事は。さもあるべけれど。さりとて儒者に物ならふ事を恥と思へりとは。笑ふに堪たり。さるはよのつねの儒者てふもの。皇國の事をよく知れる者ならむには。しかいふもゆるすべけれど。大凡は頭に腐字を冠らぬは鮮く。ひたすら漢土の事にのみ。力を用ひて。我國の事をば知らず。渠等に問ひて。よく知るゝ事は昔の魯の國は。今は何と云ふとか。禮樂とかいふ類の事を。問ふより外は更に益なきものなり。もとも我國の事をも少しは讀ぬにはあらねども。其はただ我國の書よまぬ。ものしり人のあらむやはと。笑はるゝの口をしさに。其口ふたがむとて。讀なればひがごと交りに。うはべをすましおくなり。然るはこの平維章が。かく我ざかしらに。ものいへども其あらはせる書どもを見るに。いとはかなくて。安房變して。アハとなり。美濃變して。ミノとなりなむどやうの。をかしきことのみ。いひ居るにても知るべし。かやうの輩に。神道者。歌學者。いかにひがめるとて。何のならふことのあらむ。齊魯の沿革。禮樂の空論はさばかり益も無き事なれば。問はぬなるべし。またさらでも。これらの事どもは。誰の耳

にもかまびすしく。聞ゆる事なれば。彼輩も大かたは。心え居ることなり。然るを儒者の心には。我徒こそ。何ことをも。よくわきまへたるものと。思ふべけれど。實にはいとせまきものにて。我國のことを大かたにも。こゝろえたるは。いと〳〵有りがたき。ものなるをや。この平維章は。さる痴儒者の中にも。ことに口わろく。直からぬをのこにて。我國の古をいやしめ。彼の幽齋翁の乞食袋のたとへを。いとありがたき説なりとよろこび。博學はあしとは。何人のいひそめしや。さだめて書を多く見る事のならぬ人の。云ひ出しならむ我夫子（孔子を指すと見ゆ）ほど雜學なるはあるまし。博學博文などいふは。夫子の詞ならずや。などいひまた或人もとがめたる如く二十歳よりまへに。漢のやまとの書ども。二千卷よみたりとて。やゝもすれば。誇れども。よしやさばかり多くの書を。よみたりとて。能くも辨へず。ひが事のみ。いひ居らば。何の讀たるかひかはある。むかし漢土に晋といひける代に。傅迪といひし者は。廣く書よむ事を。好めども。其義を解る事あたはず。然るしれ者の。人を侮りかろしむる僻ありければ。劉抑といふ者。これを笑ひて。書をよむ事多しとて。其むねを知らざるは。書簏といふものなりと云ひしとなり。

玄道云。此餘にも彼にて博覽を稱て。書廚とも。書府とも。書庫とも。書笥書簏など稱し事見えたり。この平維章なむども。この傅迪がたぐひの痴ものなり。長井宗定が撰みたる。本朝通記を。文に顛倒錯置ありとて。此書を見るごとに。嘔噦を發せむとすと云へるも。餘りなるいひすぎ也。もとも。この本朝通記といふ書は。こゝかしこに。漢籍をひきて。評論へることなど。大かたはあしく。其外にも。ゆきとゞかぬ事の多き物なれども。其は平維章などが。心のおよふところにてはなきなり。其はとまれかくまれ。この長非てふ人。世には漢國の事にのみ。力を用ふる人多き中に。陸奥のはてに居て。書籍も。さこそ得がたかりけむを。かず〳〵の書をよせて。かの通記ほどにも。あみたてたるは。その比にあはせ此人にとりては。甚しき功といふべく。またうひ學のほど。御代々の事を。ひとわたり知るには。便利より書なり。その功を思へば。顛倒錯置あるなむどは。

更に瑕ならず。たゞ其功をほむべき事なり。しか此人をそしれる東海が。何ばかりの事をか仕出たる。長井氏なむどを咲ふは。かの檜木には。あすならふといへる。木の類なるべし。

俗の先生また弟子となる人々の大かたのさま玉がつま。櫻の落葉の卷に。我が敎へ子に。いましめおくやうといふ條に。吾に從ひて物學ばむ徒も。吾が後に。またよき考のいできたらむには。必ず吾が說になづみそ。わがあしき故を云ひて。よき考をひろめよ。すべて己が人を敎ふるは。道を明らかにせむとなれば。かにもかくにも。道を明かにせむぞ。吾を用ふるに有ける道を思はで。いたづらに。吾をたふとまむは。吾が心にあらざるぞかし。と云はれしにつけて思ふに。今の世に漢學の先生。また何くれの師匠とて。人に物敎ふる人々を見るに。大かたは高くのみかまへて。己には更にひがことなしと。いふさまにもてなし。たまさかもおのがいふ說なす事の。ひがこと有るを。弟子のかたより。論ひ云ものあれば。甚くいみて物敎ふまじとしつ甚しき先生は。無禮なりなど。したゝかに尤めて。師弟のちなみをたち。なむどして。只嚴重に威をしめし。弟子には一言も言はせじとするたぐひも。まゝあり。さるから其弟子となる人も。師の前に出ては。ひたすら畏く苦くのみおぼえて。師のいふ事に。うべなひ難く。いぶかしき事ありても。問究る事あたはで。ひが事交りに捨おくから。終に學問の秀る事もなく。其うちに倦怠りなむとして。止る類もあまたあるは。此は師たる人は。もとより弟子も。いと云ひがひなく。つたなきわざなりそも〳〵人の師とある人の。その威光を嚴重にすべき事は。漢籍禮記にも。師嚴然後道尊などもいへる如く嚴にせざれば。弟子どもの師を輕く思ひ。師をかろく思へば。道をたふとばぬかたにもなり。道をたふとはざればおのづから。學問の怠りにも。なるはざなれば。弟子を嚴にあしらふも。さる事なれども。おごそかにすぎて。物問ふ事さへ。ならぬまでにするは。餘りなる事なり。夫が中には。弟子の論ひいふ說に。理しるき事ありても。あながちにいひけちて。信はず己がひが言を立むとするもあり。これらは。殊に心きたなきわざなり。弟子の中に己が說を改むるばかりのものゝ出くるは。

みづからの功も。しるき事なるをや。師となるばかりの人なりとて。多き事の中には誤る事もなどか無からむ。更に恥にはならぬ事なり。また人の弟子となる人も。師を尊ばず。聊にても不敬なる事などの。あらむは。いとあるまじき事なれど。實に眞心より師を尊みて。さて疑はしき事は。いくたびも。問ひ究め。信ひがたき事は論ひ試みもして。勤め學ぶをこそ。誠によく學ぶ者とは。いふべけれ漢籍にも。聽而弗レ問學不レ躐レ等也とも。當レ仁不レ讓二於師一とも博學レ之審問レ之云々なども云へりき。實に斯くすることそ。おのづから師を敬ひ。道を尊む意にも。かなふべけれ。然しても心狹く。我をいむ人ならむには。師弟のちなみを。たちたりとも。なでふ事かあらむ。然るは何事も。かしこまりのみ居ては。疑ひをあきらむる事さへ。かなはで。更に師と頼みたるかひなければなり。すべてこれらの事ども。漢籍には。論語に。孔子のその弟子をあしらひ。また其をしへ子どもの。孔子にむかひてのさまを考るに。孔子は更に。弟子にものいはせじなどやうにせず。その弟子どもゝ。己がじし。其志を述て。更に憚る事なきさまなり。中にも子路なむどが。いくたびとなく。孔子のひが言を。論ひ尤めて。少しも讓る事なく。孔子もそれを怒る事なかりしなむど誠によし。また孔子も以三吾一日長二乎爾一毋二吾以一也などさへ云へりき。己れ常に師たる人は。我翁の如く。孔子の如く。教へ子は。子路が如く。あらましかば。よかりなむと思ふ。されど人はいかにあるらむ。此はたゞ己が心ざしをいふなり。

子路か人となりをめづる

仲由字は子路といへるは。いと〱眞心に。をゝしく勇ましげなるをのこにて。孔子の弟子も多かる中に。この人のみ。あはれ相見て。もの語りしたらましかば。と思はるゝ人なるが。孔子に始めて逢ひけるとき。南山有レ竹不レ揉自直斬而用レ之達二于犀革一以レ此言レ之何學之有などいへるも。誤にはあるめれど。いとたけき心なり。孔子も此人をば。やむごとなきものに思ひしにや。かれが死けるとき。甚くかなしみて。われ仲由を得たりしより。惡言耳に入らざりしものをとて。いたみぬとなり。其いへる言にも。いとめでたき事も。多かるが中に。志を述べよと。

孔子の云へるに答へて。願車馬衣（玄道云或人の衣字は衍と云るはさる說にこそ）輕裘與二朋友一共敝レ之而無レ憾と云へるなど。わきてめでたし。己れまだ。いと幼りしほどより。漢籍をよみて。此の人のことに及べる條を。よむごとに。そゞろに。おむかしくのみ思ひしを。今も其心の。のぞこり難くて。かくなむ。

藏書家

俗に藏書家といふあり。然るは富る人の。書籍多くをさめ置く人になむ。さる人々の中に。其藏めおく書を人にも見せず我も。さのみよまで。つみおきて。翫美にそなへ置くあり。此はいふにも足らず。其が中には。いと心きたなき人もありて。人に見する事は。更にもいはず。かゝるめでたき書を。もちたりとだに云はで。其書の中なる。よき事を己ひとりにて。考へ得たるさまにものして。誇るあり又ただに。しはくのみして見せぬあり。そもそもこの人人よ。人の心の同じからぬ事。その面の同じからぬが如しと。漢人も云へる如く。己か心の。おもむくかたに。人をくらべいふは。あしかめれど。めづらしき書うるごとに。此書は何某が好むすぢの書なるを。はやく見せばやと思ひ出て。己が讀終るさへ。まちどほきものなるを。己ひとりのみ。讀ほこりて。人に見せぬなむどは。いとあぢきなき情にこそ。世に珍しき書をよみたるばかり。うれしきはなし。此は我のみならず。篤く書よむ事を好む者は。誰も同じ心なるをや。此事は我翁も玉がつまに。しるしおき給ひ。伊勢貞丈なども。秋草のすゑに。云はれたる事なるが。聊か憤ろしき事ありて。己もまたいふなり。

書籍をなほざりに讀む人の事

我が學のいろせなる。堤朝風のもとに。或人の來りて。何くれの物語りしけるついでに。朝風の。玉がつま。初若菜の卷に。人にかりたる本に。既によみたるさかひに。をりめつくるは。いと心なきしばざ也。本にをりめつけたるは。なほるよなきものぞかしと。云はれし條をとりいでて。これ見給へ。人に書かりたらんには。かくこそ心つくべき。わざにはあむなれ。いとめでたき敎へ言には。はべらぬかとて。見せられたるに。其の人甚く感じて。いかにも。これいとよき敎になむはべる。直に此卷を。我にかし

給はれかし。忘れぬ間に書ぬきはべらむと。云ひさま。そこを二重に。をりかゞめて。ふところに。ねぢこみて。歸りぬとぞ。朝風も。甚くあきれたりしとて。かくとものがたりせられき。世によき事を聞ても。めでたしと。思はぬ人もなけれども。なほざりに思ふから。かうやうのしわざもあるなりけり。

玄道云。古くも孝經もて親の頭を打という諺の聞え。近くは母の召たるを怒て。余は聖人の書を講せるを。と云し。儒者の事をも思合せて。よく愼戒むべきわざになむ。

誠に書は。一ひらよりは二ひら。ふたひらよりは。三ひらとよむがまに〳〵。力を得て。いとめでたく。尊きものなるを。なほざりにするなむどは。學問する者の。いとあるまじき事なり。法師どもの。書をもてあつかふを見るに。かりそめにも。直に。むしろに置く事なく。机におきて。いつもいたゞき讀なむどにも。耻づべき事なり。まして人に借たる書なむどは。いかにも〳〵。あしくならぬやうにと。心しらびして。みだりには。すまじき事なり。さるは藏書家といはるゝきはの人々こそ。書うる事も。心やすかゝれども。我かともがらの如く。はかなくまづしきものゝ。書を藏めおく事は。眞に〳〵難きわざにて。殊に皇國のふみは。漢籍よりは。こよなう得がたきを。辛うして得たるを。心なくみだりに扱はれたるは。いとこゝろなく。口をしきものなるを。さる事にも心つかで。物にさへ包まず。ふところに押入れ。また讀たるさかひに。をりめつけて。返すなむど。其人の心さへ。おしはからるゝ。心ちして。いとあぢきなきわざなりかし。かくいはゞ。己をいと吝と云ふ人もあらむか。然る人は。いかにともいへ。すべてものはかゝる少き事より。心せずは。えあるまじき事なり。これらの事ども。朝風の。からやまとの。書に見えたるを。書あつめて。讀者用意と名づけて。一卷あり志あつからむ人は乞ひて見るべし。

蚯蚓は口にて聞といふこと

芳村恂益といふ人の著せる。北山醫話てふ物を見れば。本艸謂桑柴火用以炙レ蛇則足自見不レ經之甚也云云龍有レ耳而不レ能レ聞魚有レ目不レ眠有焉而無レ用者也蚓之聞以レ口蟬蛬之鳴以二腹翼一無焉而有レ用者也何

特怪ニ蜿之無レ足而行一耶といへり。これに本草の說を。破りたるはよし。それにとりては。魚の目ありて眠らず。蚓の口にて聞く。などやうの事を信じて。ひき出たるはをかし。实に漢籍を信ずる人は。此たぐひの事を。常に云ひ居るなり。龍は耳もてきかず。角もて聞くなむど。やうの事を漢人はよく知りて云へれども。かやうの事は。其ものになりて。試みざれば。知られぬ事なり。己かく云はゞ。其は自の知らぬ事とて。人もしかあらむと思ふにや。漢國人は。よく知りたればこそ。かくは記し有るなれ。など云ひて。はては莊子が魚の水に浮きたるを見て。これ魚の樂なりと云へるを惠子が尤めて子非レ魚安知ニ魚之樂一とて。かたみに論へりといふ。古事の如くにも。おつめれど。其は何にもあれ。かたはら痛さに。えたへで。かくはものしつるなりけり。

水の色を黑しといふ事

蠡海集といふものを見るに。此は宋儒の書の中にも。殊に勝れて。物の理を狹く論へるものにて。實に蠡をもて海をはかるてふ名の。ふさはしき書なるが。その庶物類といふ條に。云へるは。草木之花雖レ曰ニ五色一然獨無ニ黑色一黑爲ニ水色一母之道也母但陰育ニ於中一故不レ現也といへり。この水の色を。黑しといふこと。此は此書に始て云へる事にてもなく。金木水火土を。五行となづけ。五味五色などゝ。すべて五つの數にみたしめ。萬の物に。この五行の理を牽強する事は。彼國にはやくより。有し事なれど。いみじきしひごとにて。いふにも足らねど。今その一つを云はゞ。五行と五色とを配合して。火の色を赤といふはよし。木を青といふも。まづよし。土の色を黃と定めたるは。當らず。土には青き赤き白き黑きあり。其ほか猶くさ〲ありて黃も土の一つの色なり。また金の色を白と定めたれども是にも赤黃その外も猶あり。然るを金は白く。土は黃なるが。眞の色なる事は。何として知りけむ。また水の色を。黑と定めたるなどは。別にしひごとなり。いかに見ても。水は黑からぬを。から人の眼には。黑く見ゆるにや。いぶかしき事なり。此はもしくは。いと深き淵なむど。のぞき見るに。藍の色の如く見えて。まづは黑きかたにも。見なさるゝ物なるが。然る事を思ひて。云へるには。あらじか。もしさもあらば。

赤青の類も。至りてこきは。黒きやうに見ゆるものなり。これらも黒しと云ひて可からむや。此外に五味五色などいへども。味も色も五つには限らぬをや。しひてかくひき合せずとも。ありなむを。いとうるさきしひごとなり。俗に無理いふ者の譬に。鷺を烏といふ事のある。それによく似たる事なり。花に黒色なき事は。何なる故とも。知がたきことなるを。陰陽五行の理をいふ者。すべて此類のみだり説を云ひ居るなり。禮記の學記に。水無當於五色とあるぞ。おだやかならむ。たゞ水は水色として置くとも。更に害なし。さるは水のみならず。外にも色は種々ありて。五つに限らねばなり。すべて五に數を合せて。其理をいふは。みな取に足らず。

玄道案に淸人晴嵐が五行問に論る説をも合考ふべし。さて玄道も古く此書を讀てその誣妄を笑し事有しにはやく吾老翁に此御説有しなりけり。

然るを皇國人さへに。かゝるあさましき事を。然ることに思ひて。したがひ居るたぐひも有るは。鷺を烏なりと云うを。うべなりと。いへるが如し。いと痛ましき事なり。

古眼今眼偏見活見

伊勢貞丈ぬしの隨筆に云はれしは。予書を見るに。古の眼今の眼といふ事をいふ。古の眼とは。古書を常に多く見馴て。古代の風儀を。よく見認りたる眼を云ふなり。今の眼とは今の世當時の風儀のみを見馴て。古代の風儀をば。かつて見知らぬ眼を云ふなり。古の眼をもて。今の世を見れば。今の古に異なること明に見ゆるなり。今の眼を以て。古代の事を見れば。古代の事をも。今の風儀の如く見成すゆゑ明ならず。疑はしき事多くて解がたし。云々また書をよみ。文義を解くに。只一方にのみ偏りて。外に通じわたらぬは。偏見なり此事には。あたれども彼の事には。當らず。これも偏見なり。文義を解くに。轉用傍通して。此事にも當り。彼の事にも當りて。滯り無きは。これ活見なり。偏見は才智の拙きと。淺學とにあり。活見は才智の巧なると。博學とにあり。又偏見は憤悱する事なし。活見は憤悱の勢ひありと。云はれしは。すべていとよき説にて。物學ぶ者のよく心得べき事と。思ふがまゝに。おのが爲とて書いでぬ。

漢土にて王の事を天子と稱ふ事

漢土にて王の事を。往昔より天子といひ來れり。此はつら〳〵考ふるにわが伊邪奈岐大御神の御故事をよこなまりて彼の磐古氏の雨の眼が日月となれるなといへる傳へある如く彼の國までに。ほの〴〵聞えたるなるを。西戎國の上古の王ども何のわきまへもなく。一國も領き居る者は。天の子とよぶ事と。ひが心得して。己が國語もて天子と稱れども。いみじき僭稱なり。そも〳〵天皇の御事を。天神御子と稱し奉る事は。實に今日のあたり。天にまし〳〵て。世を照しまします。天津日大御神の。御子孫にましますが故なり。其は神代の御卷に。天照大御神の。豐葦原水穗國は。我が御子の次々に治さむ國なりと詔ひて。皇孫命を此の御國に天降まさしめ奉り給ひてこの御國をしろしめしける故。國神たちの。かたより。我々とは同等には坐まさぬよしにて。事を別て尊み奉れる御稱なり。其は同じ御天降の條に事代主神この御國を避奉りたまひて。その御父大國主神に。此の國をば天ッ神之御子に奉りたまへと宣ひ。また猿田毘古神は。天の八衢に出むかひたまひて。天ツ神御子の天降ますと。聞きつるゆゑ。御前につかへ奉らむとして。まゐ向ひさもらふと。まをし給へるなどを始として。神武天皇の御段などには。國ッ神たち。みな〳〵天皇を天神御子と稱し奉れり。さればこの御稱は。天皇に限りて稱す御稱にこそあれ。戎國の王どもの名のり居るなどは。いともいとも可畏く。漫なるはざなり。西戎の王ども。すべて天子といふべき謂れ更になし。然るをいと後の御世となりて。漢籍わたりまゐきて。以來漸々に何事も彼の國の稱呼を。よしとまねび給ふ事となりてより。まねびたる。天子といふ號をば。天津神の御子と稱し奉るよりは。雅なりとして。終にしか稱し奉る事となりて。儀制令にも。天子祭祀所レ稱と見えまたその義解に。告二于神祇一稱爲二天子一凡自二天子一至二車駕一皆是書記所レ用至二風俗所レ稱別不レ依二文字一假如皇御孫命及須明樂美御德之類也など見えたり。古は神を祭りたまふ事など。すべて重き御政事の。をりなどは。いとゞ古意古言をもて。詔書をものし給へるに。此令を撰定給へる頃などより。かへりて神代よりの御稱は。よそげに俗たりと。思ふごとなりにたり。さて

また漢籍にのみ。なづみ居る輩は。天神御子と稱す御稱の。西戎國にまで及びて。其を竊み學び奉りし。天子といふ號の。また〳〵御國に返り來れるなる事を知らずして。かへさまに。天津神御子と稱す御稱は天子と書る文字へ。まうけたる和訓なりなどやうに思ふめり（但し己なども。いむさきほどしか思ひたりき）然る人は。いまだ本末を辨へざるものなり。よく古へ書を讀て。本をば知置くべき事なり皇國は萬國の元國にして。事も物も。みな御國より始めて。外國に及びたるなる事は。今更いふまでもなく。其を外國にて作りそへ。或は修飾などして。また〳〵皇國へ返り來れる事少からず。さるを元來皇國には無かりし事の。新に彼國より得たりと。世の人の思ひ居る類いと多し。其を一つ二つ云はゞ。まづ田といふ物を作りて稻種る事は。はやく神代に伊邪奈美大御神の田作る水の爲に池を造り玉ひ天上に日神の御田あり大地には須佐之男命の大須佐田小須佐田あり。また醫の事も神代に。大穴牟知神と。少彦名神と御心を合せ給ひて。病ををさむるみちを。定め給へる事見えたり。これら皆皇國より。外國へ傳へたるなるを。外國にて。くさ〳〵考そへて。また〳〵皇國へ傳へ奉れるなり。然るを大かたの人は。醫の事といへば。漢國の神農といふ王が。始めてなし出たる如く思ひ。田作るわざは。是も神農。后稷など云ふ者の。始めたる事とのみ思ふめり。

玄道案ふに上件の詳說は後に委く考定賜へるもの有れば就て見るべし

其ほか鍛冶のわざ。衣織るわざを。はじめ萬の業みな神代にわが皇神等の始め賜ひし事なり。すべて何事も。これらになぞらへて。知るべし。實に神代より無りし物の。新に外國より。渡りたる事も少からず。然るを神代より。ありし物のやうに。云ひなすは。ひがめるにて。いふにも足らず。何事も公平に論ひて。有し物をば。ありとし。無かりし物をば。なしとこそ。云ふべきわざなれ。

漢土の書に黃泉といふ事

漢土の古書ともに。黃泉とて。人の死て行く地の。ある如くいへるは。夜見の國の傳と。もはら同じ趣なり。然るから。古事記。書紀に。夜見に黃泉の文字を。あて給へるなめり。然るは左傳隱公が。元年

の所に。鄭莊公といふ者の母を。武姜といひしが莊公を産むとき。幸かりしとて此の莊公を甚く憎み。次の子叔段と云ふ者に。國を保しめむ事を思ひ。彼にすゝめて。莊公を殺さむとしけるに。叔段軍に負て他國へ出奔さりぬ莊公其母、武姜が穢きしわざを怒りて。城潁といふ所へ。はふらしやり。是に誓て云ひけらくは。不及黄泉無相見也といへり。此義は。母人とは此の世にては。是を限りに。あふまじきぞ。死て黄泉に至りて。ならでは見ゆまじとの心なり。然るに杜預これを註釋して。地中之泉故曰黄泉とのみ云へるは。言少に過て聞え難し。然るは黄泉とは地をほれば。黄に濁れる泉の出るによりて。號けたるなる事は。論ひなきものから。彼の國にも古へより。人死ては其の靈地下に歸き居ると。云ひ傳へたる故。莊公はその古傳のまゝに云へるものなり。此ほか史記などにも。黄泉とある所の註釋。みなこの類に。いひたらぬ說どもなり。己いま試に。杜預に代りて。此所を註釋せんには。黄泉者即謂人死其靈所歸地中及泉蓋古之遺諺也とやうにいはまし。黄泉の正き傳を。委く知らぬ人よりしては。

斯く云ふより。外なければなり。杜預には左傳の辦あれども。から人なれば。黄泉の事をば。よく知らざるなりまた孟子に。夫蚓上食槁壤下飲黄泉といふ事。見えたるによれば。杜預註の如くにても。よろしけなれど孟子なるは。たゞに濁水を飲むといふ事を。文なし云へるにて。莊公がいへるとは異なり。何れにも。莊公がいひざまは。古意に合へる言にて。夜見の傳へと同じおもむきなり。

酒の事を問へるに答へたる文

或人の酒の德ある事。また其はじめなどを。問ひおこせたるに。老翁の說どもによりて。いさゝか書つけて。おくりけるは古事記に明宮御宇應神天皇の御段に。須須許理てふ人の獻りし御酒に。天皇いたく御醉まして。須須許理が釀し酒に。われゑひにけり。事和酒咲酒に。われ醉にけりと御歌よみしたまひつつ。御幸まして。御杖もて。大坂にありし。大石をうち給ひしかば。其石はしり去りぬ。かれ諺に。堅石避醉人也。といふこと見えはべり。此所を我鈴屋翁の古事記傳に。袋。册子に。夜行途中誦文の歌とて。カタシハヤ。ツカセゝクリニ。クメル酒。手

ヱヒ足ヱヒ。我酔ニケリ。

玄道云。ツを一本にツに作り。クを一にノに作れり。さてはワガは朕之にて。セヽクリさは。須々古利の韓語にては非じかと按ふはいかゞあらむ。とある歌をひきて。云はれしは此を夜行の誦文とせる意は。堅石すら走り避りつるこさく。いかなるおそろしきものも。我を恐れて逃避りて。近づかじとの意にぞあるべき。と云はれつるは。然ることにて。此はかけまくもかしこき天皇の御所爲なれば。堅石といへども。しかはべらむことしるく。さらでも酒てふものは。いとめでたきものにて。人のむつびの。なかだちをなし。或は心地あしく。胸ふたがりたるをりなども。一杯の酒にも。こゝち清々しくなりて。諸のうさ悲しさをも忘らしめ。また平常は。いと女女しく弱き男も。酒のみては鼻息怒猪の如く。猛く雄々しくなるなど。いとめでたき物になむはべる。さるから。いと上つ世より。貴き賤き。よきにつけあしきにつけて。やむごとなきものに。もてはやしはべりぬ。抑この酒は。遠き神代の昔より。有ける物にて。まづ須佐之男命の。八しほをりの酒に。八俣の大蛇を酔しめて。斬り給へる事は。此の物の書に見えたる始なり。またその醸そめし神は。詳には知られはべらねど。日本書紀の崇神天皇の御卷に。八年の處に。高橋邑人。活日てふ人の。天皇に神酒を献りて。「この神酒は我がみきならずやまと在。大物主の醸しみき。いくひさ。いくひさ。と歌へる事見え。また古事記にも。息長帶日賣命（神功皇后）の大御歌に。此の神酒は。わがみきならず。酒の上。常世に坐す石立す。少名御神の。神壽。ほぎ。令狂。豐ほぎほぎ令廻献り來し神酒ぞ。不令澗令飲さゝ。と宣へるなどにて。少名毘古那神。大物主神の掌賜ふ事。しられはべる。此の事は尾張の横井千秋てふ人の。いさ委き考ありて。古事記傳にひかれ。我老翁もこの考に從ばれはべりぬ。按ふにこの二柱の神等。たゞに。掌賜ふのみならず。少名毘古那神の。造り賜へるならむも知るべからず。然るに書紀に。大己貴ノ命與二少彦名ノ命一戮力一心。經二營天下一。復爲二顯見蒼生及畜産一則定二其療レ病之方一。又爲レ攘二鳥獸昆虫之異災一則定二其禁厭之法一。是以百姓至レ今咸蒙二恩頼一と見えまた弘仁の私記にも。少彦神是造レ酒神也などもあれ

ば。此は古へより。然るいひ傳への。はべりけむかし然れど。この私記なる說をば。息長帶日賣命の御歌によりて。云へるには。あらじかとて。鈴屋の翁は疑はれ。また此神の見え賜へるよりは。遙以前に。速須佐之男命甚くあらびたまひて。天照大御神の大坐所へ。屎まり散し給へるを。天照大御神。とがめ給はずて。如屎は醉て吐散すとこそ。と詔直し給へる事あれば。其はるかのちに。見れ給へる神へ係いふは。心得がたしといふ人もあるべけれど。少名毘古那命は。その御名。御所業の。あらはに見えたまへるこそ。後なれども。其の時は外國より來り賜へるにて。神產巢日御祖神の御言に。此は眞にわが御子なりと宣へれば。既くより在ける。神なる事。論ひなし。然れば速須佐之男命の。あらびたまへるをりなどは。既に酒のありけむかし。さらでもゑひといふ言は。酒に限らねば。大御神の醉てと。詔賜へる事は。酒にかけて。心得ずてもありなむ。とまれかくまれ。酒をこの二柱の神の恩賴に。なれるもの。ならむとの考へは。動くまじうこそ。覺えはべれ。さてまた鈴屋老翁の說に。諸の外國は。みな少名毘古那神の。經營成したまへるものならむとの考ありて。實にめでたく。動くまじき考なるが其中に外國より渡參來つる事物の中には。皇國の助となり。實となるもあり。又害となる事も多し。是はた然あるべき趣なり。少名毘古那神は。書紀に。一見最惡ニ不レ順ニ敎養ニと。御祖命の詔ひて。初惡かりし神に坐せば。もはら此の神の經營たまへる外國々は。もとより惡き事多かるべき理なるをや。されど惡きより。善きを生ず理をも。また思ふべき物ぞかしと。云はれたるより。つら〳〵考へはべるに。酒はいとめでたき物ながら。甚く醉狂れては。いみじき。禍事をひき出で。またはからずも。無病の人も疾病を生じもし溝河などに落入りなどして。百年の命をうしなふ類ひ。昔も今も少からず。按ふに此は彼の善きと惡きとをかねたる神の。御靈になれる物なれば。其理ははべるなり。

　玄道云。此善と惡きとを兼給へる神といふは。大人の前說にて。後の定說に非ず。そは玉だすきに就て見るべし。

すべて此の神の始め給へる事。醫のわざ。またまじな

ひのわざなども。善き事もあり。惡きこともあるなどをも。思ひ合すべし。然れば酒好む人々は。よく此理を思ひ。其の心しらびこそ。あらまほしけれただし是らの事は。大凡の人の聞はべらは。神のいと妙なる謂れはべる事なれども。云ひけちて。何で然る理の。あらむものかは。などいひはべるべし。然れど神の理を。よく辨へたらむ人は。此に云ふをまたで。この理は。さとりぬべければ。さかしら人は。よしいかに云ふとも。たゞ君に聞えむとて。かくはものしはべるになむ。猶委くは吾が老翁の書ども。見そなはして。知り賜へかし穴賢

萬葉集に酒を讃し歌

前の條をこれに書記すちなみにいふ。萬葉集三の卷なる太宰の帥。大伴卿の。酒を讃られたる歌。十三首そが中に。

いはむすべせむすべしらにきはまりて。たふときものは酒にしあるらし

なか〳〵に人とあらずは酒壺に。なりにてしかも酒にしみなむ。

あな見にくさかしらをすと酒のまぬ。人をよく見ば猿にかも似る。

とよまれしなどは。別てきようあるかたにも聞ゆれど。此は老翁の云はれしに。歌は物のあはれなるかたをのみ。むねとして。かの欲のすぢは。ひたすらにうとみはてゝ。詠む物とも思ひたらず。まれ〳〵にも。彼の萬葉集の三の卷に。酒を讃たる歌のたぐひよ。詩には常の事にて。かゝるたぐひのみ多かれど。歌にはいと心づきなく。憎くさへ思えて。更になつかしからず。何の見どころもなしかし。これ欲はきたなき思ひにて、あはれならざる故なり。然るを人の國には。あはれなる情をば。耻ぢかくして。きたなき欲をしも。いみじき物にいひあへるは。何なる事ぞや。と云れたる如く。いかさまにも。雅の方には。最きようなき歌どもになむ。然はあれど酒このむ人々は。いと面白く。理に思ふらむかし。さるから。我がしる人の中にも。おのが酒のまぬを。あかぬ事なりとて。萬葉集にも。しか〳〵てふ歌もあるをや。など言はるゝ人もあるにつけて。或日己れ筆とりていひけらくは。篤胤は何事にも。いと〳〵拙く。口惜き事のみ多かるが中に。酒のまぬも。その

ひとつになむはべる。まだいはけなくて。秋田に在し程は。酒の粕もて漬たる。瓜茄子やうの。をし物をだに。頭痛く。顔猿の如くなりて。堪難くおぼえはべりしを。やう／＼十の歳を。むつなゝつも。越しける程にやはべりけむ。人まじらひをも。するばかりになりて。友だちどもの。大かたは酒のみてかしこの遊び。こゝのたはぶれにも。多くは酒にて。楽しみはべりけるを。さるをりのみは。己をばよそにあしらひ。篤胤は酒のまぬ人なれば。これを食ひて。心をやり給へなどいひて。肴をのみあたへ。酒杯をばおこさむとさへにしはべらず。おのれ／＼はかたみにさしかはし呑て。いと心よげに。さるかひ騒ぐなど見るに。いとねたく。且は羨しくて。あはれ己も酒のみてあらば。斯くよそには。せらるまじきを。さるにても。常は何事にも。睦じく。いひかはす。友だちにも。かくうしろめたく。見らるゝなむ世に酒のまぬばかり。悲しきはなし。いかで／＼己も飲ならはでやは。あらむと。いと猛く思ひおこしはべりて。それよりは強に飲むほどに。始は例のかしら痛く。苦くて。心地死ぬべくおぼえし事も。はべりしかど。なか／＼に生居るとも。酒のまで人々に可笑き者に思はれむは。いとやうなきわざなりと。固く思ひとりて。飲々つゝ辛うして飲ならひ。まづは人なみに酒の筵に交らふ事とは成りはべりにけり。然れどおのれ酒飲ては。甚悪き病の出て。甚く酔ひたるをりは。聊かも心にふさはぬ事はべれば。口論しまたは日比頗憎しと思へりし人などを見ても。好節なり酔のまぎれに。いかで腹いゆるばかり云ひてましと。思ひなりはべりて。きたなげに。詈り。われも怒り。人にも腹たゝすなど。甚あぢきなき事のみ多くはべりけり。かくても三年ばかり。謂ゆる上戸といふ者のつらにて。侍りけるに。或時また甚く酔狂れて。我が許に使ひける。奴僕の。人中にて。少か恥みせはべりし事の。怒りに堪がたくて。手足も折るゝばかり辛き目みせ。癈人の如くなしたりければ。父母のいみじく叱りはべりて。汝は酒飲みては。やゝもすれば。かゝる悪きわざあるこそ。いとあるまじき事なれ。かゝらば後は。なでふまが事を。為出さむも計りがたし。今よりは堅く酒飲む事を止てよ。さらずは。家には置くまじきぞ。なと厳しく

聞えはべる事の。世に畏ければ。まつしはし。うちやめてむと。其の後は飲まずなりはべりぬ。人みなは飲なれし酒。やむる事は。いと難きわざなりとて。末とぐる人はなしと。うけたばるに。おのれはもと飲ざりしけにや。さのみ心ぎたなくもあらで。いと清く思ひ廢て今ほどは幼かりし時の如くになむはべる。尤も其止たりし程は。辛うじて飲なれたるを。いかに父母の制め給ふとて。あたらしき事よと。いともく〱口惜くはべりしを。今思ふに。おのれ酒やめずは。父母の云はれし如く。なでふ禍事をか爲出て。いかなる辛き目みむも。知られはべらぬを。ことし二十餘り八つに成るまで。事もなくてすぎ來しは。ひとへに父母の賜になむはべる。然れど今とても心地むすぼれ。物煩はしきをりなどは。あはれ酒のみてあらばやと。思ひ出らるゝ事のはべるは。さすがに昔の餘波にやはべらむ。然るを穴提この心よ。なはびこりそと。常に戒めをりはべれば。今は大伴卿と心あへる人のはべりて。我を猿にかも似るなどいひて。男道なき者に。云ひ腐しはべるとも。我もまた。「猿に似ると猿賢にいふ人の。顔の赤きぞ猿にかも似る」また「いはむすべせむすべしらに貴しと。酒いほむるは何こゝろぞも」。などや云ひはべらまし。さて又大凡の酒飲人の。醉て惡き事ありても。醒ては更に其の事を覺えずといふ事なるが。己はよく覺え居りぬ。然れどしか云ひては。甚わりなく思えて。強に知らずとは云ひ逃れたりき。醉たる時の心には。醒たらむには。さこそ心苦しからむをとは。思へど。我とわが心を制めかねつゝ。非事をば爲たりしなり。然れど人はいかにあるらむ。たゞし此は聊か發露の心にも。かなひはべらむやとの心にて。かくはものし侍るになむ。と云ひ終りて筆を置ぬ。

酒多く飲人餅多く喰ふ人の話

また因に。石原正明に聞けりし。尾張の國にて。甚しく酒飲む者の話をこゝに記す。名兒屋のさとに。謂ゆる印籠といふ物の。緒じめなど云ふ物。また根つけなどいふ類の物を。彫る工を異しく得て。遠き國まで聞えたる男ありて。名をば。爲隆となむいひける。この爲隆いみじき大酒のみにて名兒屋のさとにて。猩々會となつけて數多の酒のみども集ひて。飲くらべけるに。此爲隆は九升六合といふ酒をのみ。

其の次は何某とやらむは。六升のみけるとぞ。また或とき名兒屋の里に。旅人ありて。宿の主に云ひけるはおのれは。酒好む者なるが。國を出しより。聊か勞る事ありて。飲はべらねど。今日は心地も大かたは宜しげなれば。酒もりして旅の憂ひを慰めばやと思ふなり。是につけて。主にたのみあり此里に大酒のむ人のはべらずや。侍らば招きて給はれかし。然はあれ一升や二升の小酒飲みは。なか〱に益なき事なれといふに。主まづ驚きながら此の里にも大酒飲の名を負る人のはべれば。其が許へ人はしらせ侍るべし。然れどいつも事多き男にはべれば。いかにやなどいひつゝ。爲隆が許へしか〱と云ひやりけるに。をりよくけふは事なくてはべれば。參りさむらはむと云ひ遣せたり。其よし旅人にいへば。甚しく悦びて。さもあらばいとよき酒を一斗。肴もいと旨き物とゝのへて給はれとて。何くれと取りまかなはしめて待たるに。程なく爲隆が來りてまづ初對面のゑさくなど終りて。さて四方山の物語しつゝ彼の用意したる一斗の酒を。互に差かはし。何の苦げもなく飲畢りて。さてしもいまだ事足らぬさまにて。

また五升とてあとらひ。此をもたゞ二人にて飲たるに。さばかり甚く醉しれたるけはひもなくて。夜もふけぬれば。爲隆は歸りぬとぞ。そのあくるつとめて。こたみは爲隆が酒と酒菜とを持て。彼の旅人屋に到り。旅人はいまだ出立ずや。きのふの夜のよろこびながら。今朝出立給はむ前に。名ごりの酒盛せむとて。訪ひはべると云に。彼の旅人はいまだ起出ぬほどにて。きのふの夜。其許の歸り給ひてのち。心地いたはる事はべりて。今朝は酒の心も侍らねば。またこそとて。爲隆をば歸しけるとぞ。此時。爲隆が云へるは。旅人はきのふの醉のまだ殘りたるにぞあらむ。さてはおのれ彼の人にのみ勝てありけりとて。甚く誇りけりとなり。まことや此の者どもは。彼の越前の忠輝少將の甚く酒のむ賤男の。醉ひ寐たる間に。其腹を剖て見給ひければ。心のあたりに。小き瓢のさましたる物のありて。其の物に飲たる酒の收りありしといふ事を。世にいひ傳ふるなる。何さまにも。然る物あらむも知るべからず。此は西戎籍五雜俎といふ書にも。余里中有レ人啖レ豚嘗至二半體二一日衆共執レ之縛二庭柱上一不得レ食久之覺二喉中有

レ物一蝦蟇躍出衆擊殺レ之自レ此不二腹能食一矣云々近
聞大原有二嗜レ酒者一亦然。と見えたるなど丶。同じ類
なるべし

玄道案に。腹中に異物有りし事。彼土の續搜神記
を始めて後の物には多く見え。近くは換香新話等
にも記せり。また上戸のこと。亭子院賜酒記。水
鳥記。いと近世には酒戰記等あり。その誡を云る
も酒誥。また抱朴子は更にて。いと多きを摘取て
前に記おける物もあり。

然れどもかやうの大酒のむなどは。まのあたり見ぬ
事なれば。吾には甚奇怪く信がたくて。大かたの學
者に。神代の談きかせたらむも。斯くぞあるらむと
思ゆるかし。然れどおのれ目のあたり見たる事に。
是に似たる事あり。然るは篤胤いまだ秋田に在しほ
ど我が家の菩提寺に。杉山本念寺といふ寺あり。其
山の内に少く庵して。文字はいかに書けるにか。名
をばぐわむこと云ひける法師の。おこなひをり。近
きあたりを物もらひあるきて。毎におのが家にも來
たりけるが我が父の。彼法師がかざりなきをあはれ
みて。何くれとめぐみ給ひしが。この法師。よにも
ちひ喰ふ事を好みて。若かりしほどは。七八升ばか
りの餅を喰ひけりとぞ。此のほうしの言葉には餅を
喰ふと云はず。呑むとのみいひけるが。己れ十を六
つ七つも越えける程は。七十に近かりけれど。まだ
すくよかなりしが。或時父の問給ふは。汝このほど
は。甚く年老たれば。餅のむ事も。昔しとは變りた
らむ。然れど今も何ばかりの餅をか呑むと問ひ給へ
ば。甚く年よりて。餅のむ事も。昔にはこよなう劣
りはべりぬ。されど三四升ばかりの餅は。殘しはべ
らじと答へぬ。さらば心見に呑てよとて。餅つかし
めて與へ給ふに。法師よろこびて。大根のしぼり汁
のみを付て。見るが間に。四升餘りの餅を喰ひたり
しなり。これらの事も。人の物かたりに聞たらむに
は。いかに奇しく信がたからむを。目のあたり見た
る事なれば。あやしとも思はず。篤隆などの大酒呑
むも。此法師の餅くふ類にぞあるべき。またこの法
師も心に餅の入る瓢または蝦蟇などのあるらむも知
るべからず。

孝經

太宰純が考訂して。板に彫たる古文孝經といふ書の。

漢土にも渡りて。知不足齋といふ者の。叢書に。藏めたる事を純が流を汲む輩。いみじく喜びて。我國の光なりなどいひて。誇る事なれども。此は何事にもあれ。我國の者を。西戎人の言ひさわぐをば。猛き事に思ふ漢學者の例の。俗習なれど。いと稚き事なり。己はかへりて。皇國の人にも。かゝる痴人はありけるよと。戎人の思はむ事も。心恥かしく思ふなり。

頼囧云。松澤老泉の經籍問答に。古文孝經春臺先生の校本清朝へ渡し候は。皇朝原來この一板に候や。答へて曰。予見聞するところ。元祿七年。大坂。油屋與兵衛と云人開板する本。今大坂の書林吉文字屋市兵衛方に存す。又清原家の原本。享保十五年の彫造なれば。既に春臺本に先だつこと三年なり云々。油屋清原の二本。春臺本より先に彫刻ありしに。先生の本のみ清朝へ渡候は。先生の大幸と云べきかと見えたり。

然るは彼の古文孝經といふ書は。今あるのは。彼國隋といふ代に。河間の。劉炫といふ者の作れる僞書なる事は。既にその代の儒者も云ひて。其の後唐宋の儒者にも。具眼の輩は。誰も用ひざるなり。此は公平に學問する人は。誰もよく辨へたる事なり。茲に彼の國の書なれど。かしこには既くうせたりし也。これ誰も取見る者の無かりしに依りて也。純は眞僞を分つ眼そなはらで。彼の書を尊みことごとしく序など書て。世に弘めけるより。終に彼の國までも及びしなり。さてかゝる僞書なる物を。いかにして叢書にをさめけるといふに。すべて叢書と云ふものは大方は善惡を撰ばず。何書にまれ古き小冊のちりぼひ失る事をいたみて。叢めおく物にて。彼の孝經も僞書とはいへども。今の清より見れば。いと古き物にて。殊に外國の人の序などもありて奇を好む者には。よきもてあそびなれば。叢書には收めたるものなり。ある人いはく。清紀太史曉嵐、簡明目錄云。古文孝經孔氏傳舊本題漢安國撰日本信陽太宰純音出自歙縣鮑氏云得於市舶今以日本所刊七經孟子考文證之彼國亦以是書爲僞本好奇者誤信之也今從子夏易傳之例不廢其書庶言古文者有以考其眞僞焉我邦以孔傳爲僞書彼邦人猶知

之而今之學者猶奉信之何也。といへるは。いとい
と感たき說なりかし。さてまた此の書の事を學令に。凡教授正業云々孝經孔安國鄭玄註と見えたれば。天長の頃は未孔傳鄭註ともに。僞書なる事を朝廷にも。しろしめさゞりしと見えたり。

玄道案に。此は唐朝に用ゐしまゝに。皇國にも用ゐさせ給へること唐の六典を見て知るべし。

其の後貞觀元年の詔命に。安國之本梁亂而亡今之所傳出自劉炫事義紛薈誦習尤難靡厭朱企更招疑義云々庶革前儒必固之失と三代實錄に有て。此事すでに。中村の蘭林。の。講習餘筆にも論ひ置きたり。純が蠹何事も强て先儒に異なる事を爲出むとするより。古文の孝經。また尙書。或は家語などを信ずる誤は。出來るなり。さてまたすべて孝經といふ書は。謂ゆる古文ならぬも。大なる僞書にて。更に孔子の語氣ならず。漢の代に作れる物なること論ひなく。此は我か友鈴木朗つぶさに辨へたり。己その說によりて。猶つらつら按ふに。孟子外書といふ物に。孝經といふ篇ありて。孟子曰。孝經者曾子傳於孔子諸弟子不得而聞也。といひ。また孟子曰。曾子之孝士之孝也。故孔子先以事親事君立身告之といへるはこの外書も漢の代の僞書と見ゆれば。孝經を實に孔子の書といふ證にとて云へるにて。此は彼の古文尙書を眞にせむとて。家語。孔叢子などを作り。夫に何くれと妄說いへると。同じ趣にて。孝經も外書も。同じ漢の代の人の作れるならむと。推量らるゝなり。然るを大かたの儒者どもも我さかしらにものはいへども。此の孝經を實に孔子の書なりとて。もて囃すは。いとゝ可笑き事なり。太宰純が序に。孔子の信而好古と云へる事を引て。二程子。朱子などの。此の書を疑て後人の擬作なりといへるを。叱りたれども。いかに古を好むとて。僞書なる物を。いかで。僞書とは云はざらむ。近き頃きくに。物部徂徠の。此の書を註釋するとて。ものせる艸稿ありて。徂徠は疾く。この書を漢の代人の。僞書なりといひおげりとぞ。是に始めぬ事ながら。活眼もて書を讀し。徂徠の見解は。實に卓越たるものなりけり。

古文孝經の序

因にいふ俗の漢學者流。口にのみは正名々々といへ

ども。其の著せる書どもを見るに。名を亂り内外の差別正しからぬ書ざまのみ多ければ。もしや廻船の風に漂流などし。または德夫が孝經の如く。いかなる舟の便にて。他國々へ渡り行かむも知るべからず。さては甚じく。外國人の笑を受る事にて。是いと歎かしき事なり。然るはまづ太宰純が孝經の序に。先王之道莫大於孝。仲尼之敎莫先於孝。云々。孝經有二本。其一河間王所得十八章者謂之今文。其一魯共王壞孔壁所得竹牒科斗文云々といへりこれ更に文かく法を知らざる物なり。もし我徒をして。試にこの序を書しめば。人之道莫大於孝。西土孔丘氏之敎亦莫先於孝云々孝經有二本。其一河間王劉德者所得十八章者謂之今文。其一魯王劉餘者壞孔丘氏之舊宅壁所得所謂竹牒科斗文。などすべて此の例にものすべき事なり。西戎國の王どもを。うちまかせて先王といふべきよしの。いかであらむ。たまたましかいふとも。其は語と所のさまに依るべし。大凡儒者の文章に。漢の事をいふは。西戎人の自國の事を云へると。同格なり。皇國人にして。漢國の事を書さむには漢人の皇國の事を書せる如くにある

べき事なり。純が序文も。こゝかしこに。我日本といへる事あるゆゑ。皇國人の漢文と思ゆれど。さなくば誰かは然おもはむ。中にも甚しきは。夫古書之亡于中夏而存于我日本者頗多云々豈不異哉などいへるは。彼の中華聖人の尊き國に絶たる貴書の。我が夷狄の賤き國に存りあるは。いとも異き事なりと云へるにて。斯く云は。此の男の癖なれども。餘りに西戎國へ諂ひたる書ざまにて見るに胸わろく。堪しがたくなむ。また日本享保と書るなど。殊に拙く。誰に憚りて日本と冠らせたるや。此は西戎國を主とし我國をよそにするものにて。例の狂れ事なり。本文の初に。日本信陽と書るは。此は西戎國の書へ。皇國人の手を入れたるなれば。日本と置きてもまづはよきを。信陽とはいかにぞや。かやうの國名皇國には何處にかはある。太宰は信濃國の人なれば。其を漢國に信陽といふ所ある故。それに混らして。漢めかさむとの心か。さやうに己か好事を。たてむとて。朝廷より命給へる國號を亂るなどは。何といふ狂事ぞや。按ふに西戎國人。純が孝經の序を見て。さこそ甚く笑ひつらめ。もし是を見て我國を貴べり

さて。喜べる戎人あらば。其はいまだ春秋を讀ざるものなるべし。然れば眞に孔子を學ぶとならば聊一行かき捨る物も。其心しらびして。尊内卑外の心を忘るべきに非ず。馭戎慨言に。鈴木朗の序に。是義一立而群物咸定是義一不立而衆弊隨生と云へりしは。眞に然る事なりかし。

物部茂卿の學問

皇國にも古より儒者多き中に。物部茂卿ばかり。見解大きく才すぐれたるはなし。然るは世の漢學者おしなべて。宋儒の說にのみ迷ひ居れる非事をためて。彼國の古辭に徵して解ことを敎へ。また義理を斷る事も。普通の儒者の及びがたき事はいふも更なり。俗の漢學者とも。宋儒の說をのがれて。古辭に徵して。その義を述べまた彼の國の文辭をも古のさまに。ものする事をおぼえたるも。皆この人の功によりてなり。然るを更に其の蔭を思はず。實に毛を吹て疵を求むる如く。此の人の非說をせぐり出して。誹る者の多きは。いかにぞや。甚しきに至りては。茂卿は考證の學なき人なりと云ひ。又は古文辭を知らざる男なり。などやうにいひ罵れども。是らみな茂卿の蔭に依りて。茂卿の非說を。見出るばかりには成れる也。然れば今の俗の儒者どもの。善說いひ出たらむは。云ひもてゆけば。茂卿の後說といはむも。ひがことならず。凡て物の最初を開く事は。いと難き事にて。其源とある漢國にてすら。心づかざりし事の。初めをひらきたるなれば。謬もなどか無からむ。尤も茂卿より先に。仁齋あれども。其の立たる筋もやゝ異あれば。今の大概の儒者の祖を。茂卿に係ていふも。非言ならず。茂卿の學問は。譬へば新に田を作るとて。大きなる鍬もて廣く堀りたるが。こゝかしこに。まだ取るべき土の殘りあるが如し。俗に儒者の茂卿の誤を見出て誇り騷ぐは。少なる金串もて。其殘りたる土どもを削りなどして。猛き事に云ひ居るが如く。心ある者誰か是を茂卿に勝れりと云はむ。斯く大じく其の蔭を蒙りながら。吾一人にて得たるさまに。己がじゝ云ひ居るを。傍より見るも。いと可笑く。此の輩心に願て恥かはしとも思はぬにやと。思ひ給へらるゝかし。さてまた茂卿を尊む人々は。更に茂卿の非事を知らず。彼人の云へる事をば善惡を云はず。固く執へて改る事なき人も。

まゝあり。是また拙く愚なることにて。茂卿の雄々しき魂をさへに。知らぬ人々なれば。返りて茂卿を尊ばざる人といふべし。井上金峨が經義折衷に。徂徠先生有特見乎斯云々孔門之教庶乎可復矣。江漢以濯之秋陽以暴之。皜皜乎不可尙已雖然乎余有取乎先生者特其所根由之說耳。惟其爲人有好奇癖以英邁之資發之言語文章間急于立家而不顧其說合與否此不可不議也世儒滔々尊崇先生而不識先生之於道何如四術四教皆束之高閣開元天寶左氏司馬一長衒口而發謂先生無一可非焉。何似鄕者信程朱者之言嗚呼此亦不知恥之甚可復醜焉。と云へるは公平なる論といふべし。あはれ道を學ぶ者にして。其人の勝れたる事をのみ知て。其短く過りあるを知らざるを。いかでよく學ぶ人とはいふべき。

玄道云。茂卿。太宰純等は。漢學の方にとりては微功も有なれど。國體を誤れる罪も甚くて。功罪相掩はざること。誰も知れる如く。かつ西籍概論にも說給へる如くなれば。此は姑大人の前說と見てあるべし。

また

徂徠の文集なる。舊事本紀解序にいへるは。不佞茂卿生也晚未聞我東方之道焉雖然竊觀諸其爲邦也天祖祖天

天を祖とすといふまでもなく。眞に天皇の御遠祖は天津神に坐せり。西土の如く。祖宗を天に配するなどいふ類の。紛らはしき事にあらず。

政祭祭政神物之與官物也無別

眞に徂徠の說の如し

神乎人乎民至於今疑之

天皇の御遠祖は眞に神に坐せる事いふも更なり。

此は古を學て知るべし。更に疑はしき事にあらず。

而民至於今信之是以王百世而未易所謂藏身之固者非邪。後世有聖人興于中國則必取諸斯已。杞宋弗徵孔氏之徒獨傳周禮而儒者廼謂先王之道是而已矣亦不深思也。といひ。また論語徵に。子欲居九夷といふ章に。仁齋の古義に論をまうけて。夫子嘗曰夷狄之有君不如諸夏之亡也。由此見之夫子寄心於九夷久矣此章及浮海之歎皆非偶設也。云々吾大祖

神武天皇をまをし奉ると見えたり。
開國元年實丁ニ周惠王十七年一
日本書紀の文につきていへば。この說の如くなれども。書紀の紀年は信じがたきゆゑあり。こは眞曆考を見て知るべし。
○玄道云。此の御說も前說にて。後には書紀の紀年をば正しとて。天朝無窮曆に詳に說給へるが如し。
到レ今君臣相傳綿綿不レ絕尊レ之如レ天敬レ之如レ神實中國之所レ不レ及夫子之欲ニ去レ華而居ニ夷亦有レ由也。といへるを。論語徵に破りていへるは。吾邦之美外ニ有レ在何必傳ニ會論語ニ妄ニ作無稽之言ニ乎
仁齋の說は。大かたの學者の每いふことにて。皇國を吳泰伯が後なり。また秦徐福が後なり。などいひて。悅ぶと同じ類の。いと俗たる說なりかし。徂徠のこれを破りたるは。尤なる事なり。○玄道云。三五本國考には。仁齋が說を取て從ひ給へり。さては此は前說にて。彼を後の定說とすべし。さて古義の說は。もと仁齋に昉るに非ず。已く性靈集。また神皇正統記。壒囊抄等に見えたれば。我か古き博士等のよく考て定られし說と聞えれり。
夫配ニ祖於天一
儒者より見れば。天皇の御大祖の。天津神に坐す事は。かく見なさるゝも理なれど。こは違へり。但し是を國美と思へる心は違はず。
以ニ神道一設レ敎
皇國にて。神を奉ずる事は。さらに敎の爲とて。設けたりと。思へるやうの。混らはしき事に非ず。但し儒者より見れば。かく思ゆるも理なり。
刑政爵賞。降レ自ニ廟社一。
是に似よりたる事もなきに。此は徂徠のおぼえ違へなるべし。
三代皆爾是吾邦之道卽夏商古道也
こは夏商の古道の。皇國の眞の道に似たるなり。是も儒者よりは。彼れに似たりと見ゆらむかし。志ある人は。古を學びて猿の人に似たるにて。人の猿に似たるにはあらざることをさとるべし。
今儒者所ニ傳獨詳ニ周道一
是はすべての儒者どもの大弊なり。いたましき事

なり。遽ニ見二其ノ與一レ周殊チ而謂レ非ト二中華聖人ノ之道ニ一亦不ル二深ク思ハ一耳。など云へる類ひ。ほかの書どもにもいひて今少しの事にて。眞の道に至らましをと思ゆる事多く。實に尋常ならぬ儒者なりけり。此の人によく古を學ばしめたらましかば。さこそ目覺しき說をも云ひ出ましを。さてこそ我が翁も茂卿ばかりの見解よき人も。世には有がたきを今少しにて。いかで眞の道をば。さとらざりけむいと可惜しき事なりと。毎に惜まれけると。我が學問の兄鈴木朗の語られき。

太宰純の嘉言

俗には太宰純を。徂徠にならべて云ふ事なれども。非言なり。純はその見識。徂徠にはこよなう劣りて。心ざまあぢきなく今の俗の儒者どもの。皇國を誹る首唱にて更になつかしからぬ男なり。然れども諺に澁柹も甘ぼしとなるといふ如く。さはいへ漢學には大じく功ありて。其が中には。誰も心得をりてよき事もまゝ云へりけり。然るは其著せる和讀要領と云書に。抄はぬきがきなり。抄書とは書を看るとき有用の語を抄するなり。すべて書を讀む者かならず數十張の紙を小冊子となして。奇字要語を抄すべし。これに五つの益あり一つには故事古語を記憶す。二つには他日の檢閱に便なり。三つには字を識る。四つには書學すゝむ。五つには抄するによりて。其の本書を看る事かならずくはし。蘇東坡が詩に。白首猶抄書といへるは。老に至ても抄書を止ざる事を云へる也。さて抄書せば。眞字にて整齊にかくべし。其のとき心のいそがはしきまゝに。草々にする事あるべからず。暫くまづ斯の如くして。後日に改寫せむなど思へども。日々に事多くなりゆけば改寫する暇なく。歲月を歷て看るに。草字にて胡亂に書たるは。己が手跡にても讀がたき事あり。ましてや人にも見すべき事あるとき。必人を誤らしむる也。端正に書たる物だにも。三寫すれば烏焉馬の誤あり。況や胡亂に書たるをや。學者これを愼むべし。と云へり。これいとよき敎なり。等閑に思ひすごすべき事にあらず。また學者は風雅の情なくはあるべからず。と云へるもいとめでたし。また文會雜記に。此人の人となりをいへる事。何くれと見えたり。其が中に褒べき事。または學者の學びてよき事のかぎりを。

今こゝに擧むとするなり。まづ書籍を校合する事いと〳〵精密く。おのが藏むる書をば。一畫のたがひ。片假名の一畫までも改め正し朝は六時すぎに起て。自ら机を羽箒にて掃ひ。いつも筆とりて机に向ひ。さて書を讀にも。まづ假名がきの書などをよみ。又は人の見せ置たる詩文をなほし。或は會業の下看をなしなど。いろ〳〵にしけりと也。此は倦つかれぬやうにとの。心しらびとぞ。夜になれば。晝用ゐし机をおきて。小机を出し。四つ時まで起居て。書をよみ。それも秋のころより冬の間ばかり。また寫ものするにも。倦ては寫し誤るとて。必ず餘のふみをよみなどしけるゆゑ寫し誤ることもなく。また文章を作くも平易にして。よく通ゆる事を主としたるなど。すべて學者の則となすべき事どもなり。弟子の敎へかたも嚴重なりけるゆゑ。弟子ども大かたは人がらよく。また家人をよく懷けて。其奴僕どもも甚よく思ひつきけりとなり。其の若かりしほど。徂徠に初めて逢ひて。その隨筆の謬を難たること。また或權威ある殿より賜はりたる。いりこといふ魚の腐りたるを甚く尤めて。返しやりたるなど。高き人とて諂ふ事なきは。いと猛き所爲なり。其の弟子なりし松崎君修が。その人となりを讃て。小學の嘉言善行に入るべき人の如く。おぼゆと云へるは。實にさぞありけむかし。然れども孔子の意を得ずて。國忠の志なかりしは。惜き事なり。

誤寫

大宰純が抄書するに。甚じく心すべきよしを云へるにつけて謂ふに。おのれ人にあとらひて。書寫させけるに。下照姫の下の字を。本書にほとやうに書ありければ。寫す人誤りて。百の字と心得て。おごそかに百照姫と書り。また埋木とある木の字の假字に。キとあるを誤て。中の字になしたり。然るを已も心づかでありけるを。また人に貸て寫させたるに。其の人本文の木の字は誤りなるゆゑ。傍に中の字を書けりと思ひて。やがて埋中と改め書て。更に道理もなき事となし。また久の字の假名を付て。久とやうにありければ。處の字に誤りたる事もありき。此は處と見誤りたるなるべし。此につけてたもふに。萬葉集を始め。古書はすべて寫本にて傳はりたれば。さばかり思ひかけざる文字に。誤れるも多からむと

思ゆるなり。手よくかく人などは。筆のよく働くままに。別て非が文字も書くものなれば。猶心すべき事になむ。

皇國人の詩文

俗に漢文を書き。詩を作る事の。から人の如く。めでたからずとて。甚く恥なる事に思ひ。また漢人の詩文を。よくする事を讃て。眞に及び難き事なりなど。いふ者あれども。思ふに非がことなり。さるはもし西戎人の。皇國ぶりの文をよくかき。歌などをよく詠もしたらむには。讃るも然る事なれども。漢文も詩も。彼の國の言語にて。彼の國の人のいふ事なれば。皇國人のよりはめでたしとて。更に讃るまでの事はなし。我が國語なるものを少し心を用ひたらむには。などかよく作らであらむ。また皇國人の詩文。から人のよりは惡しとて。更に恥ならず。ことに近き世となりて。徂徠。南郭などの起りしより。彼の國の名家の詩文にも。優るばかりに。作り出る發。夥し。よしまれに過る事ありとも。元來外國の言語なれば。何てふ事かあらむ。然るを南郭など。日本の昔人の詩を。經國集懷風藻などの中より。撰み出さむとすれども。よき詩の無さは。外聞あしき事なりと云へるは。誰に外聞あしといふ事にや。既に自も我が國の學者の。中華をみだりに文物國とおぼえ。中華の人は誰もすさまじき。學問ありとおぼえて。まつさきへ負てかゝるは。口惜き事なり。なかく\さにてはなし。唐人の中にも詩文の上手。澤山にはなきにても知るべし。と云へるには。似もつかぬ事なりかし。近きころ彼國の沈玉田と云者の。室直清。物部茂卿。太宰純。伊藤長胤。此四人の漢文を。こゝかしこ論ひて。寘正四先生序文となづけたり物あり。是らをも皇國人の漢文つくるに拙き故なりといふ人もあれど。彼の書に論へるばかりの事は。唐人の文章を。皇國人に論はしむともありなむ。

玄道云此も實にさる御說にて猪飼彥博が史記等の文を點竄せるを以ても觀つべきなり。

其は人の心の同じからねば。互に己が思ふとは違ひあればなり。試に皇國人の詩文を笑ふ西戎人に。皇國の雅文を作らせて見ばや。さぞ物笑ひなる事にて。今日はじめて漢文を習ひ書ける幼子にも劣りなむ。朝鮮にて新井白石の詩草を感て。小兒のよみならひ

に。まづ讀するにても。皇國人の詩文の優れたる事を知るべし。こゝに新井白石の陸奥の佐久間洞巖へ送られたる手簡に西土ならびに朝鮮の輩の。此方の詩文を見候て。よめぬ〳〵と申す事。いはれなきにしもあらず候へども。日本はよく〳〵人の才のうるはしく候へばこそ。かほどまでには。詩文を。もてあつかひ候事に候。其の故は詩文などは。此の國の本色の事にてはなく候を。たゞ〳〵學びにて。とりなし候事に候。偖又倭歌は日本の本色の物に候。琉球は南倭とて。此の國と同じ地脈の國に候故に。名歌も詠出し候者有レ之候西土の人は。年々長崎へ來り候て。日本口に通じ候者も有レ之況や朝鮮にては。倭學及第とて。日本の書ども學び候事。既に三百年來の事に候へども。歌一首の事は云に及ばず。一句にても詠なし候事は。ふつとならず候。彼の方の者どもの。ふつとならぬをもて見候へば。此方の人々よめぬまじりにも。詩文を取扱ひ候は。才のうるはしく候事知られ候。と申事に候。これらの事。また關係の大きなる所に候。と云はれしは。實に公平の論といふべし。偖この消息ぶみの中に。こゝかしこ〇印をつけたるは。本書になかりし事を。己が今加へたる也。然るはかゝる言なくては。きこえがたく。既く脱たりと見ゆればなり。

また

白石のせうそこに。朝鮮の者ども。皇國の學問する事。三百年に餘れども。歌一首は更にも云はじ。一句をさへに。詠出る事。ふつとならずと云はれしかど。其後〇〇の頃まゐ來ける朝鮮人の對馬國より船出すとて彼國の人々の送りけるに詩は事ふりて。めづらしからずとて。

歌闕

と哥よみしけるとぞ。此比既にかゝれば。今ほどはさこそは口調も熟つらめ。此ほか漢土人。琉球の人などの詠りといふ歌をも。これかれ見たるに。いと面しろきもまゝあり。然るを皇國人にして。我が國ぶりの歌文を知らず。かへらまに彼より拙しなどいはれむは。甚恥ならずや。大かた儒者なむどの國字文と。あなどりがほに物いひて。ものせるを見るに。言語の遣ひざまの拙き事は更にも云はず。いと〳〵かろき漢文を皇國もじして記せるが如き物にて。そ

れにをり〳〵は雅言のうちほのめきて。殊にその雅言の心を熟く得て書けるにあらざれば。更に其言の合はざる所に交へなどして。見るにかたはら痛く。實に老翁の云はれたる如く。彼のなく聲ぬえに似たりとかいふ獸のこゝちする。文章のみ多しかし。すべて儒者は。我國ぶりの文に描きのみならず。漢籍を皇國語のふりに點つけて。讀を見るに。是はたいと描くて。更に文意に合はぬさへぞ多かりける。學問せぬ人は。論のかぎりにあらねど。學問ぶ人にして。みづからの國の言語の。いひざまを知らぬなどをこそ。我より見れば恥とは思はるれ。

氣吹舍筆叢下卷

平篤胤著　門人　矢野玄道　訂正
孫　平田胤雄
門人　井上頼圀　同校

歌は公家の人々に及び難しといふ俗意

この條中へ〇を加へたるは斥非の文なりもと頭書又は傍書にてありしを上木するに就てかくは爲たるなり

太宰純が獨語といふものに云へるは。我父母ともに和歌を好みし故に。八九歲の頃より。三十一字をつらぬるすべを知り。十歲ばかりより。十二三までに。こしをれ歌およそ三四百首も詠けり。師もなく友も無ければ。歌よみたればとて。人に見する事もなく。書付て藏し置たるのみなり。其の時の心に。歌は詠得べき物とのみ思へり。十四五歲の時始て詩といふものを學びて。やう〳〵七言絕句などを綴るすべを知れり。其時愚心ひそかに思惟せしは。和歌を學びて。たとへ上手に成たりとも。公家の人々を越る事なるまじければ。いつも公家の下にかゞみなむ事口をし。詩は公家の制をうくまじければ。上手にさへ

なりなば。公家をも弟子にすべし。此の道におきては。天下に恐るゝ事はあるまじ。いざ歌よむ事をやめて。詩作る事を習はばやと思ひ定て。書つけ置たる和歌の反古を悉く焚すてゝ。一首も殘し留めず。それより詩を好みて。ひたすら學び習ふ事二十年を經て。漸々詩の道を明らめたりと云へり。また荷田在滿の國歌八論に云へるは。今の官家の人は。當然の理を論せずして。妄りに歌の緩急のみを論じ。ひたすらに緩ならむ事を欲す。(此の論に緩といへるは平易なるをいふと見ゆ)それ緩なるは大むね弱し。強きは大むね急あり。强にして緩なるを最とす。されど。さは詠出かたきならば。強くして急ならむよりは。むしろ弱にして緩なれとは云ふべし。ひたすらに緩なれとは。誰がいひ始めたるにや。今の官家の人を見るに。たま〳〵二三輩は。一首力ありて過失なき歌をよむ人あり。(こまかに見れば三百年來の歌に全く過失なきは千の中二三首ならでは見えず)其の餘の數十輩は。即妄に(然にはあらじ)緩を事とするの徒にて。其の詠る所を見るに。風情淡薄力なき事柳條の如し。(力なくとも柳條の如くならば見所ありなむ余を以て見れば八十の翁の足なへたる如し)かゝる歌を詠て。何の樂き所ぞ。余固陋なりといへども。しか如きの歌をば。執筆の下に詠出して。(壯哉)則數百首に滿しむべし。然るに彼の妄りに緩を事とするの徒。たま〳〵力ある歌を見ては則云く。(まことに笑ふべし)是地下風なり。歌にあらずと。其の是を聞く人も。(まことにしかり〳〵)我歌の却て彼より長せるをば知らず。只思へらく。歌の事に渉りては。堂上の人に企及ぶべからず。(此あたり殊に適當の論なり)と更に是を疑論する事なし。歌とのみ見ゆる物を。歌にあらじと云はむならば。何ぞ其の歌にあらざるといふ。當然の理を以て。是を責ざる。論辨には及ばずして。妄りに堂上といふ目を以て。地下に誇ること。大旨今官家の人の風なりと云へり。此の人々の見識の高きひくき論は。これ詠む人々の心に任す。されど大かたの俗人の心は。歌てふ物は。公家の人々には。絕て及び難き事と。一向に思ひ居れば。純がいへる趣を信ふめり。哀れ然る人に。我が老翁の都の四條に宿られしをりの記を讀せはや。さて又在滿の論文中に。頭もしくは傍に

論へるは。我老翁の書入れ置れたるなるを。其のまゝこゝにはしるせるなり。

詩文家のあらそひ

今の世に詩文家となのりて。其をもはらと敎ふる儒者多くあり。大かたは古文辭といふ事を唱へて。人を誘ふめり。夫に二つの別ありて。一方には古文辭といふ中にも。平易にして耳たゝぬ辭どもを摘出てものし。かた〳〵には奇僻く。耳遠き辭どもを拾ひ綴りて。文章かく事なるが。此の輩の互にその立たる筋を論ひいふを聞ける事ありしに。彼の平易なるを好むと見ゆる人の云へるは。そも〳〵文章の要は。理を明にし。言語を通ずる爲の物なり。されば古書よりいかにも平易なる成語をとりいて。その轉換に心して。後の世の俗に流れず。人の爲に見やすく。識りやすく。誦やすく。ものすべき事なり。然るを古書の中にも。奇僻にして人のさとり難き成語を拾ひ出して。ものするは。只その奇僻なる文辭をもて。人を驚かし誇らむとのしわざにて。いと心ぎたなし。さるから其の奇僻なる文辭をのけて。其の意味をたづぬれば。いと淺はかなる事のみなり。さる人おごろかしなる事して。人の翫弄を悦ぶ者は。其の見識いやしく。君子のあるまじき事なりと云ふに。一人が云へるは。其は一通り聞えたる論ひなれども。いまだ委く思はざるものなり。さるはまづ學問の要とする處は。つとめて古書を讀て古文辭に通じ。古人の言々句々。すべて己のが物となし。作文に臨みて。其我が物なる古文辭を。用に隨ひて書出すまでの事なり。さればうまく古文辭を知らぬ人の目より見たらむには。奇僻と思はるゝ事もあるべけれど。其はいまだ古文辭を我が物とするばかりの力なきに依てなり。さる人の奇僻なりと思ふ文辭も。みな古人の言語にて。更に我か輩の杜撰出たる事にあらぬをや。我か輩の文章を奇僻なり。讀難しなどいふ人々は。古書の語意を知る事も。いとおぼつかなしと云へば。先の人またいへるは。その奇僻なる文辭も。古人の言語なる事は論ひなき物から。すべて古言の中には。平易なると。奇僻しきとの別ありて。其の平易なる言語は。古今に通りておだやかに。人の耳驚くばかりの事もなく。奇僻しき言語は。古もしか有りし故に。つかふ事おのづから稀なり。是に依りて奇僻の辭を

拾ひ出て。ものする事のあしきを知るべし。然るをいかに古學する者なりとて。一向に奇き辭のみを撰出てものし。人の耳目を驚かし。其文辭の拙きを覆はむと搆ふるは。更に文章の本意に反きて。いとあぢきなき事に非ずや。と云へば。いやとよさにあらず。よし其奇僻なりと云はるゝ辭どもを避てものしたりとも。古文辭をもて綴りたる文章は。俗の人の讀がまにゝゝ。たやすく知る事かたき事なり。さればとてもかくても。俗人に耳遠くは。ほしいまゝに古語を取捨せむよりは。耳遠しといふ。辭をも避ずして。ものせむも何事かあらむ。など互に何くれと。己が得たる筋に論ひ定て。雨夜のしなさだめならねど。終に劣り勝りも聞定め難くて止たりき。此の輩の論へるやうを。つらゝゝ思ふに。何方にもほどほどに。得たるところ得ぬところありと聞えて。篤胤らが心には。何れよしとも定め難き事なれど。此は漢文の表のみならじ。雅文の事にもわたりて。同じ理なるべければ。今試に篤胤がかくもや有らむかと思ふよしを。少か云はゞ。平易なるを好む人の論へるやう。やゝ優りて聞ゆかし。されど後の論もひたぶるには捨がたし。さるは古書をよく讀て。其の文辭をおのが物となし。作文に臨みて。その我か物と成れる文辭を書出さむは。實に然る事にて。いと猛き心なり。然れども此の輩好みて耳なれぬ奇僻の辭を多く交ふるは。いと煩く實に惡き事なり。されば彼の世の俗に流れたる意辭の交るをば。いみじく心して。奇僻き辭をつとめては省き。云はでかなはぬ事には云ふとも。まづは古文辭の中にも。平穩なる辭にものして。あまり人おどしなるえせ文章を書出ぬぞ。文かく事の本意なるべき。孔子も辭は達して止と云へりき。

漢土の虱文華を好む

漢籍にて見たりしを。何にてか有けむ今とみに其の書の名を思ひ出ず。

玄道云唐陸勳が志怪錄に出たり

蘇隱とかいふ人の夜寢たりしに。其の被の下にてあまたの人の聲して。阿房宮の賦を。となふる聲の聞ゆれば。其奇しと思ひて。被をのけて見るに。大さ大豆ばかりなる虱のあまた居て。夫らが賦ひたるにてありしとぞ。眞や漢土は文質彬彬として。萬國の

師國とやらむ。高ぶりいふも灼然く。文明の化あくまでに行はれて。蝨すらしか文學に怠りなきは。儒者たちの聖人の國よ。中華よとて慕はるゝも。實に理にこそは有りけれ。是につけてまた按ふに。彼國新の王莽といふ者の代に。匈奴といふ國より。軍を起して。攻來ると聞えければ。其を防がむとて。臣下を集めて評議しけるに。校尉韓威と云ふ者すゝみ出て。いひけらくは。以新室之威而呑胡虜無異口中蚤蝨臣願得勇敢之士五千人不齎斗糧饑食虜肉渴飲其血可以橫行といひければ。王莽その言を壯なりと稱て。韓威を將軍となしたりといふこと。前漢書の王莽が傳に見えたりき。この蚤蝨を呑むと云ふ事。おのが今住む家の横手に。小路のあるが。こゝは人の往來も絕るふしなどありて。少しおくまりたる所なるが。乞食どもの處得て。いつも集り。物うちくひやすみなどする事なるが。それらがさる事しけるを。まのあたり見たる事の有しが。いと珍しくおぼえて。なほ見しほどに。いと胸わろく心地あしくなりて。其後は乞食どもの集ひたりと思ふをりは。顏をさへにえ出ずなりぬるを。漢土には既くより有りし事なりけり。然れどかやうの卑しく穢きしはざを。もとも譬には有れど。其君とある者に憚りもなく。いひ出るなどは。皇國人などの。かけてもあるまじき事なむめるを。さすがに國異なれば。何もいと異なるものよと。そゝろをかしきまでになむ。又墨客揮犀といふ書に見えたりとぞ。或人の語りけるは宋といふ代の大臣に。王荊公と云ふ者。王の前に出けるに其の鬚に蝨のはひあそびけるを。王が見て笑けるとなむ。さて王の前を退りてければ。王禹玉といふもの戲れて云へるは。しば〳〵宰相の鬚に遊びて。幸に御覽を經たりとて笑ひけりとなむ。皇國の人は身に蝨のつきたるなどは。甚く恥として。まいて鬚のまはりにはひ出などしたらむには。さこそめゝしく。人わろくも思はむを。漢人は更に恥とせず。蝨の人の身にある事は。天地の間に人あるが如し。などすまし置く故。蝨の事はもろもろの書に委しく記しありて。秦の王猛といふ者と。符堅といふものと。軍の事はかりけるに。王猛その身うちの蝨を捫りつゝ。物語しけりといふ事もありと語りき。是に依りて思ふに。捫蝨新話といふ書い

一名もさるゆゑよしありてつけたるなるべし。いかさまにも。然るやむごとなき大臣の鬚に。かの花見蝨とか云ふらむやうに。匍ひ登りたりとは。實に珍しき物語にこそはありけれ。

中村一匡のいへる言

中村一匡の云へるは。漢土の人ども。みづからの國の風土を。おのづからに天地の中を得たりといひ。皇國の風土。または天竺の風土などを。偏氣なりといふ。此は決てしか云ふべき理ある事なり。然るは皇國は萬國の元つ國にして。事も物も萬の國に勝れて美しく。天竺は皇國のいと〳〵西の方に在て何事もこよなう劣れるあしき國なり。西戎國はその中間にありて。大かたはあしき事がちなるが。さすがに皇國に近きけにや。またよき事も有るは。此は皇國のよきと。西の國のあしきとを兼交へたる國なるゆゑ。何事も優れたる皇國の風土。何事も劣れる天竺の風土を。共に偏氣と思ふも。理なりといへり此は眞に然る事なり。

金言

儒者は漢籍に。聖賢と云はるゝきはの人々の云へる言をば。更に異なる論ひもなく。金言といひてたふとみ。凡人の絶て云ひ出がたき事の如く。かたくなに心え。佛者は釋迦ちふ人のいへる言をば。わきひら見ずに。金言と云ひて信ふなれど。我は信はじ。抑この聖賢佛菩薩の金言といふものは。よく心とめて讀味ふに。大かたは誰も云ひ出べき言どもになむありける。其物々しく理ふかげに聞ゆるは。書にしるせるが故なり。凡てさのみ事々しからぬ事も。文に書しては。口に言ふとはこよなく變りて。何となく。もの〳〵しく聞なさるゝ物なり。まづ佛書の金言といふものは。すべて妄説なれば云ふにも足らねど。世の佛者どものもて囃す中に。けやけきものを。一ついはゞ妻子珍寶及王位臨命終時不隨者。といへり。此は彼の粟田道兼公の扇子にかいつけて。花山天皇を賺しまをせる文にて。誰もよく知れる金言なるが。これ眞にあさはかなる言にて。何の至りふかげなる事かはある。命の死ぬ時に至りては。妻子も。珍寶も位も。あるにかひなく。隨ひ往ぬ物なる事は。釋迦に聞ずとも。誰しの人か知らざらむ。さかやうの淺はかなる事を。誰しの痴人か云ひ出ざらむ。佛書な

る金言といふ物。妄說をのけては。大かた此の類にてあさはかなる事どもなり。さて又聖賢といふ者の金言も。佛書の金言に比ては。理なる事多かれども。是はた必しも人の云ひ出がたき言にてはなし。もし眞に凡人には絕て云ひ出難く。絕て思ひ得がたき事ならばこそ。其は人情に遠く背ける事か。さらずは佛書の妄說の類ひなるべし。この二つをのけては。誰も〱思ひ得て。いひ出べき言どもなるを。たゞびとより先に云ひ置けるのみなり。然る故に。己は儒者佛者の如く。聖賢佛菩薩の云へる事を。かたくなに信ずるは。信はずとはいふなり。よく其よきあしきを辨へ糺して。文辭に惑ふべき事に非ず。大かた儒者などの漢籍を讀に。餘り尊みすぎて。文義を悟りかぬる事多し。物部徂徠の譯文筌蹄に。經書といへども。草冊子を讀む心になりて讀めば。よみ安しと云へる事ありじやうに思ゆ。これ實にたけき敎へなり。また湯淺常山もいひけらく。聖人の敎てふ物は。名目を立て弟子ども固く守りて。大切にする所は。大かた今の子供に禮を敎ふる如く。飯は喰ひこぼさぬ物ぞといふに同じかるべし。道理の精微なる事は。更におぼえぬなりと云へるは。眞にすぐれたる見解の人々といふべし。

漢學する心ばへ

或人おのれに云ひけらくは。そこのものいふに。やゝもすれば孔子の語。ならびに漢籍をひきいで。云はるゝはいかにぞや。そのうへ常に漢籍をはげみ學ばるゝも心得がたし。古へ學に志を委ぬる人の。それをもこれをも廢ず。ものせらるゝは心ぎたなき事にあらずや。もし其許の書る物を。漢學者流の見たらんには。見よかし口には猛く我輩のひがごとを糺しながら。自らも漢籍の說にすがらぬ事は。かなはぬをやとぞいふべき。と云へるに答へけらくは。よくも難じ給へるものかな。君のしかのたまふにあらずは。いかで其の志を述はべらむ。己漢學するに二つのいはれあり。

いとも〱思ひはかり深く考へ出たることと。またよくいひとりて理に合ひたる事も少からず。撰びとり。また末々いさゝけき事にも。から事のうつりたる事ありて彼の國の學びなくては事ゆき難き事つね多し。此はまめに學問する人は此のゆゑよ

しを悟るべし。我か輩のから書よむ事は。俗に儒者などのひたすらに。彼の國ぶりをめでゝ。醉ひ狂れさわぐなどゝは。日を同くして語るべからず。中昔よりこのかた。天の下の御制も。多く漢ざまを用ひ給ひ。其の學すること。今は世に普く弘ごりて。甚しきに至りては。學問と云へば。漢學する事とのみ思ふ人さへ有るなれば。是も學ばでえ有まじく。また學問の羽翼となすべき事も。多きに依りて學ぶなり。またものいふに。漢籍を引出る事は。一つには儒者てふ者。大かたは心かたくなに。あぢきなきものにて。皇國の説をばうけひかず。その國の威光をさへに。いひ落さむとして。譬へば鼠の家を損ふ類ひなり。然れども彼の輩にも。いとしほらしき事あり。さるは經書といふかぎりに見えたる語をば。ひたすら恐み。中にも孔子の語には。一言も返す事叶はじと。固く思ひとりたるゆゑ。其かたざまの書を引いで云へば。いとさとしよく。殊勝にも恐り居るなり。實に君の云はるゝ如く。漢籍を引出ずとも。ありぬべきものなれども。たゞ人の耳に入りやすければ。暫く其の語をかるのみなり。煩しと思ひ給ふらめど。此の意をまた漢籍にて云ひはべらむ。禮記の郊特牲といふ篇に。迎猫爲其食田鼠也。といふ事あり。又說苑の雜言と云ふ條にも。騏驥騄駬倚衡負軛而趨一日千里此至疾也然使捕鼠曾不如百錢之狸といへり。實に此語どもの如く。皇國の古典。たふとしといへども。儒者を論すには。經書の語。孔子の語にしく事なし然れば經書と。孔子の語どもは。儒者の鼠に猫ともいふべし。かく便利よく。功ある漢籍を。などか讀ざらむ。蘇子由と云ふ西戎人いはく。善與人言者因其人之言而爲之言則天下之辨者服矣與其里人言而曰吾父以爲不然則誰肯信以爲爾父之是是故不若與之論曲直雖楚人可以與秦人言之而無害故夫天下之所爲多言以排夫異端而終以不明者惟不務辨其是非利害而以其父屈人也。と云へり。此の論まことに然ることなり。もとも其の論ひ公平ならば吾彼のわいためなき事なれども。大かたは我父をもては。人をさとす事かたきわざになむ。

出口延佳神主の神代紀を解るやう

日本書紀の。神代の御卷を註釋せる物。いと〳〵多

かるが中に。己が見たりしも。十部に近かるが。みな己がじゝ。見々に佛道。又儒道の意に說まげたる物なれど。己その書ども讀しほどはいまだ鈴屋の翁の敎を受たばらぬほどなれば。まづはさり〲に。おもしろくおぼえて。尤も諸の註釋の表裏なるに。少しは疑ふ心も起りて。此は附會にはあらじか。此は誤なるべし。などおほ〱しく思ひ出たるふしもありしかど。更に異なる論ひもなくてありしは。いひがひなき死眼にてありけるよと。我ながらいとあさましく。口をしきを。翁の敎に眼ひらきて。今より思へば彼註釋どもの。いと〱をさなく。はかなかりし事どもの。明に知られて。またとりあげて見ばやと思ふ註釋もなきを。其が中に解曲ざまの巧なると。拙きと有て。讀におもしろきと。おもしろからぬとの別あるは。その註釋せる人の才あると。才なきとの故にやあらむかし。我が見たりし中にては。渡會の出口延佳の神主の。周易をもて解る趣なむ。いとおもしろく。また解まげたるさまも。いと巧におぼえたりし。其は神代卷講述鈔とてあり。此は其の弟子なる。山本廣足てふ人の。延佳の講釋をきゝて。ひとむしろごとに書記しゝを拾ひ綴りて。延佳の删正たるなりと。おく書に云へり。其おもしろく巧に說て。人の信ずべきさまなるを。一條いはゞ。上卷の一書に。大己貴命與少彥名命戮力一心經營天下。復爲顯見蒼生及畜產。則定其療病之方。又爲攘鳥獸昆虫之災異。則定其禁厭之法云云大己貴命謂少彥名命曰。吾等所造之國豈謂善成之乎少彥名命對曰或有所成或有不成云云其後少彥名命云云至淡島而緣粟莖者則彈渡而至常世鄕矣云云初大己貴神之平國也行到出雲國五十狹狹之小汀而且當飮食是時海上忽有人聲乃驚而求之都無所見頃時有一箇小男以白蘞皮爲舟以鷦鷯羽爲衣隨潮水以浮到大己貴神即取置掌中而翫之則跳囓其頰乃怪其物色遣使白於天神于時高皇產靈尊聞之而曰吾所產兒凡有一千五百座其中一兒最惡不順敎養自指間漏墮者必彼矣宜愛而養之此即少彥名命也。とある條を解て云へるは。大己貴神葦原の中國の荒芒を平治せむとの志至誠にして。其妙神に通じたり。然どもその平治するの功。我が力なりとのみ知て。神助といふ事を

知らず。故に自負の慢心。往々にありたるなり。今の世とても。至誠には妙あるを。我力とのみおぼえて。神助と知らず。その凡見に及がたきは。少彦名命也。初大己貴神之平レ國也行ニ到出雲國五十狹々之小汀一且當ニ飲食一是時海上忽有ニ人聲一乃驚而求之都無ニ所見一とは飲食せむとするとき。はからざるに忽然として。其の妙神助なる事を。大己貴神の自知せられたるを。形容し出たるなり。その幽微にして。凡俗の眼に遮りがたき様を。形容すれば。蘿藦の皮を舟にして。鷦鷯の羽を衣とせられたると云ふなり。然ども大己貴神。自負の念なほやまず。半は信ずれども。半は疑ひ。恭敬の心なきを。掌中に翫ぶとかきたるは。よく形容したる物なり。跳ニ齧其頰一とは近づきて狎翫ぶの。自負の類を齧なり。跳るとは不測の妙の活動をいふ。その妙の出る所は。自然と云ふ事を形容して。天神に問ふといふにや。神皇産靈神は。諸神所化の産靈なれば。子といふなり。自ニ指間一漏墮とは其妙用恍惚として。掌握しがたきをいふなるべし。夫大己貴命與ニ少彦名命一戮レ力一レ心經ニ營天下一云云定ニ其療レ病之方一云云定ニ其禁厭之法一とは醫術と禁厭とは。不可思議にして。其妙凡見の及ぶ物にあらざるなり。げにも此の二道も。少彦名命より出たるならむ。大己貴命謂ニ少彦名命一曰吾等所レ造之國豈謂ニ善成一之乎とは。自負の意また言に出たるなり。或有レ所レ成或有レ不レ成とは。大己貴命の自負の意をおさへたる言なり。この言。大己貴命の病にあたりたるのみにあらず。萬代まで人々用ひて。つひえなきは。幽深の致ならずや。其妙は言語の及ぶへきにあらず。途適ニ於常世郷一矣とは。常世は神仙の秘區。俗の臻る所にあらずといへば。少彦名命の居給ふ郷には。假合たるなり。是は又大己貴神の病にして。自負の意勝により。少彦名神命は常世の郷に適給ふなるべし。緣ニ粟莖一とは。天下を經營は粟の實にたとへ。其上に自負の意あるは。粟の莖無用の物にあらずや。此の自負の意にひかれて。神助あるの妙を忘れたるは。少彦名命は粟莖に彈かれて。常世の郷に至り給ふなりといへり。此のさけるさま。言巧にして。こさわり灼然く。きこゆれば。漢意の人々信ふも理なり。篤胤もしばしば信ひたりき。

陽復記

延佳の著せる書あまた有りて。そが中に。陽復記といふは。此人のたてたる神道の大旨をしるせるにて。すべて周易によりてかけるものなり。則その名も慶安庚寅の冬に。一陽復りし月にかきたれば。陽復記と名つくるよし。みづから云へり。此の書承應の元年に。菊亭右大臣經季公のきこえあげ賜ひて。後光明天皇の叡覽にそなへ奉りしに。かゝる節にも。これ程の事思ひよりぬることこそ。奇特なれとの勅命ありて。甚く感おもほし賜ふあまり。延佳を正五位下の位になしたまひ。その子までを敍し賜ひ。またかかる者には同志の者こそあるらめ。それも共にとの勅命にて。延佳にともなひたる人々にまで。位を賜はりしといふこと。山本廣足がかく書に見えたり。眞や慶安萬治の頃は。亂世の風俗なほ存りて。學問の道いまだひらけざりしゆゑ。陽復記やうの書だも。大御目にとゞまりて。有がたき勅命をば蒙りぬる。是につけても鈴屋の老翁の著されし書ども。古事記の傳を始め。天皇のみそなはし賜はゞ。さこそ感おもほし給はめ。老翁の世におはしけるほどに。然る事もなくてありしは。いと口惜きや。もとも雲の上位たかきはの御方々にも。老翁に言通はして。物問ひ。まのあたり見えまして。教をうけ給へるも多かれど。經季公の如き人も。おはさゞりしは。返す〴〵くちをしかりき。

玄道謹案に天明の聖上古事記傳を。叡覽あるべしと大詔を。降賜へるを。搢紳家。庶人の書を云々とて拒て奏御せられざりしこと世にも申傳へかつ或人の文集にも云るが如し。されど密に叡覽ありて宸賞を賜ひしと昔吾友たりし豐島某に聞りきまた文政の聖明は此書を篤く叡感ありて恒に宸坐を離賜はざりしと。或物に云り。さるを師翁の未た聞賜はさりしこそいと〳〵口をしけれ。

井澤長秀が天沼矛を解るやう

井澤長秀の俗說辨に。或人問て曰く。唐の劍は日本に及ばざるか。長秀答へて曰く。何れの國といへども。日本に及ぶものなし。また問ふいかなる故に及ばざるか。答て曰く吾子知らずや。日本は天瓊矛の滴凝れる所の國なり。利劍その風土に依れり。文永弘安に蒙古襲來りしかども。天地徧滿の瓊矛にあたりて

碎け去りぬ。以上と云へり。天沼矛の滴り凝りて成れるは。淤能碁呂島なるを。長秀こゝに皇國のすべてへかけて云るは此頃のなべての神學者の誤なれば。尤むるにたらず。利劍その風土に依れりといへるは。實に然る事にて。いとよろしく。又蒙古が襲ひ來りしとき。神風にて彼賊船を吹破りたるを。天地徧滿の瓊矛にあたりて碎けさりぬと。いへるも例の理學者ぶりのいひざまなれど。大むねはかく云ひても違はぬが如くなれば。まづはよろしけれども。此にいとをかしき事あり。然るはこの天の瓊矛の古事は。天地の初に天神たちの命にて。伊邪那岐命。伊邪那美命に。此漂へる國を作り固めなせと。ことよさし賜ひて。天沼矛（沼とは玉の古言にて、玉もて飾れる矛をいふ）を賜ひければ。二柱神天浮橋に立賜ひて其沼矛を指下して。かきなして。引あげ賜ふ時に。其の矛の鋒より滴る潮。つもりて島となる。これ淤能碁呂島なりとある。（日本書紀の傳は、少し異なり、こゝには古事記によりていへる、）この古事を俗の神學者たちの解くやう。其說とりどりにて。定めがたしと雖も。其のあらましを云ば。此は人の上をもて天をいへるにて。則天人唯一の理を明にするものなりとて。まづ天神とは道の大原は。天に出づといふ事を曲言して云へるなりといひ。また伊邪那岐命伊邪那美命などのごとく。天に坐ての古事と。現國に坐ての古事とあるをば。國に坐ての事をば。已生と說き。天上に坐ての古事をば。未生と說きて。此未生といふは。實は人の上をもて。天に陰陽の理をいへるにて。二柱神の天浮橋に立とは。陰陽和合して動きそむるを云へるにて。沼矛を指下すとは。其の陰陽の動きて國土までに滿およぶ事にて。陰の潤を瓊とたとへ。陽の牙を劍とたとへて。天の瓊矛といふ。其瓊矛（實は陰陽）の露滴こりて。島となるとは。彼の陰の潤ひ。陽の牙の海水に感合して。自ら國土となる。これを曲言して瓊矛の滴こりて島となるとは云へるなり。とやうに說けり。井澤氏などが神道を說くも。もはら此趣なり。この說の如くならば。謂ゆる陰陽といふ物の。和合し動きて國土となる事は。皇國のみに限るまじければ。右の古事を曲言と見れば。此の理によりて皇國の劍のみ。自然にして利かるべきいはれなきに非ずや。もし實に瓊矛の古事によりて。皇國の劍は。萬國に優れたりと云はゞ。陰陽の理を述ていふは。

非說なり。强て瓊矛の古事を。陰陽の理をいへる寓言なりとせば。皇國の劒はこの古事あるが故に萬の國に勝れたりと云ふは非說なり。但し漢土を始め萬の國には。謂ゆる陰陽といふ物の感合なきにや。笑ふべし〱。すべて此の輩皇國の物も事も。萬國に勝れたる故を。神代の古事に係ていふは。善けれども。神代の實に奇異かりし事をば。あやしからぬさまに說むとする故。彼と此と齟齬て。かの頭かくして尻かくさずとかいふやうなる。拙きしひ說もいふぞかし。

普通の學者の皇國を神國といふ事

大凡の學者の皇國を神國などいふは。心得ぬ事也。然るはまづ神國と云ふ事は。もと皇國にていひ初めたる事にてなく。韓國よりまをせるなれども。實にふさはしき國號にて。

玄道云此も元西土にて古く稱そめし由亦縣太古傳に說給へり。

其は皇國は萬國の祖國にて。其初を神の生なし。つくり固め賜ひて。眞に異なる故よしあるによりて。神の御まもりもつよく。萬の國に勝れて。神の奇異き御所爲の。西戎國までに及びて。灼然かりしゆゑ。かくまをせるなり。然るを漢意の人々。の奇異き御しわざを信ずして。何くれと神代の古事を。いひまげて。其の說どもを聞ては更に奇異き事もなくて。諸の外國に異なる事なければ。皇國をことさらに神國といひ。皇統を神胤などまをし奉るいはれ無きに似たり。甚しきものは。皇統を吳の泰伯が後なりまたは秦の徐福が末なりなどいひて其の口もかはらぬに。本朝は神國なり。皇統は神胤なり。などさへぞいふめる。實に前後そろはぬ漫言なり。漢國人のみづからの國をたふとみて。神州といひ。また王の事を。聖子神孫などいふ事もあれども。皇國の儒者などの。神國神胤などいふは。然る心とも聞えず。何れにも心得がたき事なり。

伊勢家

伊勢貞丈は。謂ゆる有職の學。武士の道の學に秀られし事は。今さらいふまでもなく。實に古今にわたりて。比類なかむめり。然るを俗にこの人を誹る輩多かれど。大かたは謂ゆる諸禮家といふ輩。または此人の得られざる事を誹るにて。其はいふにも足らず。

この人の著されし書。すべて百二十餘部ありて。尤も大部なる物は少けれども。武士とあらむ人は。皆よく讀べき書どもなり。さて又この人の學問は。有職古實の事のみならず。道の事にも甚じく心を入れて。またよく學びの大本を心得られたり。然れば大凡の儒者などの。かけても及がたき人なりけり。さるは其の著されし書どもに。はし〴〵道の事にも及ばれたる事の多き中に。俗の神學者流の非說いふを矯むとて。著されし書に。神道獨語といふものあり。それに言はれしは。後の代にいふ所の神道は。漢土には儒道あり。天竺には佛道ありて。たゞ日本のみ道なきを恥かしき事に思ひ。儒佛の道をうらやみて。天照大神の敎の道と僞りて。神道といふ一道を作り出しゝなり。これ日本に道なきは我が國の貴き處なる事を知らざるによりての所爲なり。そも〳〵我が國の人と。漢土天竺の人と。おの〳〵其の性質を考るに。云云漢土の人の性質は。大抵多智巧曲殘忍なり。天竺の人の性質は。大抵愚癡貪欲放逸なり。日本の人の性質は。大抵廉直淳朴强勇なり。その性質の異なるに順て。風俗をなす事も又異なり。

我が國に儒道渡りて。上古の風俗一變し。佛道渡りて。また風俗一變し。其餘老莊百家の學入り。儒佛と混雜して。風俗いよ〳〵亂れ。これに加ふるに。後代保元。平治。壽永。元曆。元弘。建武。應仁。永祿。天正。文祿。慶長等の大兵亂の度ごとに。風俗變じ改れり。其風俗に掩れて。我が國自然の性質は。隱れて顯れず。明朝の謝肇淛が五雜俎に。莫狡於倭奴とあり。是は日本人ほどわるがしこき者はなしといふ事なり。後代かくの如くなりたるなり。上代はしからず。

漢土の聖人は。漢土の人の性質風俗に就て。敎の道を建たり。天竺の釋迦は天竺の人の性質風俗に就て敎の道を建たり。凡て敎の道は。その國民の性質風俗につきて建るゆゑ。其敎の趣おの〳〵異なり。また敎の道は。その國民の惡事を防がむ爲に起るなり。我が日本の人の性質風俗を防禁むべき惡事なきが故に。我が國の聖神は。敎の道を建給はざりしなり。されば敎の道なきは。我が國の尊き所なり。敎の道なしとて。なむぞ恥る事あらむや。何ぞ他國を羨む事あらむや。漢土には聖人の道ありながら。臣民と

して天子を弑し。王位を奪ふ事。世々に絶えず。此をもて漢土の人の性質風俗のあしき事を知るべし。天竺の人は禽獸にひとしければ。論ずるに及ばず。我が日本の人は。上古より今に至るまで。臣民として天子を弑し。王位を奪ひたる事なし。（蘇我馬子臣として崇峻天皇を弑せり。古今たゞこの一人のみ然れども王位をば奪はざりしなり）これをもて。我國の人の性質風俗の善なる事を推考ふべし。惡ならざる故。をしへの道を建るに及ばざるなり。然れば教の道なきは。我が國の尊き所なるを。後の代の人。其所に心づかずして。日本は。夷狄の國。（夷狄とは外國を指ていやしめ稱する詞なり。自國を夷狄と稱する事はなきことなり）なるゆゑ。道なしと云ひて。卑むる輩もあるに依て。恥かしき事に思ひて。何人の所爲かは知らねども。天照大神の教の道なりと僞て。儒佛の兩道。心學。理學を混雜し。牽強附會して。神道といふ一道を妄作せり（以上本文分註ともに貞丈の說なり）と云はれたる。誠にめでたく。此の餘にも道の事を言はれしには。鈴の屋の翁の說と。闇に合へる事も多くて。眞に世に有がたき人なりけり。また同書に。神學者流の神代の古事を說曲て秘傳口訣などいふを叱りて云はれしは。日本書紀は國史にて。上古の事跡を載たる書なり。教の道を載たる書には非ず。すべて史は直言を以て書く物なり。何ぞ曲言を用ひむや。曲言ならば。正史とすべからじ。直言を直に解ずして。曲て說て本文の文意の外の義を生ずるは。曲解なり。道を載ざる書を强て道を載たる書に紛らさむとて。曲て解くによりて。その曲やうに。秘傳口訣さま〴〵說き。奇怪の事を奇怪にあらざるやうに言はむとて。むつかしきこと。出來たるなり。漢土の史も。上世の事跡に至りては。古人の語り傳のまゝに記したる物なれば。疑はしく怪き事あり。疑しきも。怪きも。そのまゝに傳來れり。日本書紀の解も。かくこそあらまほしけれ（以上）と云はれたるも。いと〳〵感たく。なみ〳〵の人。いかでかく公平なる論をば云ひ出べき。かへす〴〵も。いと有がたき人になむありける。但しかく言はれしにとりては。いといとあかぬ事もまゝあり。さるは春草の弓矢の始の事といふ條に。神代に素戔烏（スサノヲ）尊と云神あり。云云常に惡事を爲す事を好み賜ひて。善事はひとつも無かりしかば。父母の神憎み怒り給ひて。素戔烏ノ尊を高天の原（高天原とは。神の住給ふ都のことなり。）より。根の國へ（根の國とは田舍の事なり。）追下し賜ふ。云云

と云はれたり。この高天原を都の事とし。根國を田舍の事なりと云はれしは曲解なり。俗に遍くある神學者流の云へるならば。尤むるに足らねど。此人にして。かゝる事を言はるゝは。いと〳〵心得がたく。有まじき事なり。高天原とは都のこと。根國とは田舍の事なりといふこと。何といふ古書に見えたるぞや。毎に證を古書にとりて。少かも後世の杜撰の說を用ひられぬ。此の人の說ともおほえざる也。そもそも高天原とは。人々仰ぎ瞻る天の事。根の國とは黄泉の國の事にて古書に見えたるが如く。更にかくれたる事なきを。かく本文に反きて。解曲られたるはいかにぞや。此を按ふに。古傳のまゝにいひては。奇怪なりとて。世人の信まじとの心しらひなるべけれども。其はなべて漢意の狭きならひなれば。然る人は信ずとも。なでふ事かあらむ。人の信ると信ぬとに。心のこさで。本文の文意の餘に義を生せず。怪き事は怪きまゝにこそ。あらまほしけれと。言はれし言をたてらるべき事なるに。然はあらで。世の人意に諂らはれたるは。いとあぢきなし。かく曲て解れたるを。神學者流の見たらむには。五十歩にして。百歩を笑ふ類とやいはまし。しかいふとも更に遁るべき辭はなき事なり。この人にして。かゝる心ぎたなき誤もあるはいと〳〵口惜き事なり。是につけても我が翁の歌に。

漢意なしと思へど書等よむ。人の心はなほぞ西戎なる

と詠れし歌のいとたふときや。さてまた貞丈。その隨筆に新井白石。また井澤長秀などの誤を論ひて。さていはれしは。凡博學先生と。予がごとき淺學小生と。これを比するに。鴻鵠と燕雀よりも。なほ大に違へり。然るに彼の先生等の誤りを。小生が見出す事のあるは。あやしむべきの甚しきものなりと云はれたり。然れど此は此の人の謙讓て。かく云はれしにて。實には長秀はさらにもいはず。學の筋は異なれども。白石にも劣るべき人とも。篤胤はおもほえずなむ。さる甚じき人のひが言を。おのが尤むるも。又いよゝ大に奇しければ。さこそや人の事々しと思ふらめ。然れど此は

吾が言は吾が言ならず鈴の屋の。老翁の教へし正語ぞこれあなかしこ。

軍學者の俗評

廣益俗說辨に云へるは。ある諸侯の許へ。他國より軍學者來りて奉公を望みけるに。彼諸侯召出さむと議せられしとき。近習の者がいはく。某このごろ軍學者の許へ尋ね候に。折ふし火を焼て居候ひぬ。心をつけて見候へば。よのつねの者の焚候よりは。大分の薪を費し候。此者つもりの拙さにては。軍學もさぞと申ければ。尤なりとて抱へられざりしといふ事をあげていへるは。これ理を辨へざる者の談なり。世にあらゆる事。一人にて全く得たる者なし。我得て彼失せるあり。彼得て我失するあり。譬へば隋侯の珠は室なれども。雀を彈くには泥丸にしかず。鏌鎁か劍は利しといへとも草を刈には。鎌にしかず。虎象たけしといへども。鼠を捕るには猫にしかず。猿よく木にのぼれども。水に入ては魚鼈にしかざる如し。其得たる所を取らずして。其得ざる所を誹るは。車を水にやり。船を陸におして用に足らずと云に似たり。文盲なる人の談ずる事。每々かくの如し。察せずむばあるべからず以上と云へり。是まことに然る言にて。大かた人の智は。種々ありて。大きなる事に明にして。少き事に暗き人あり。理ふかき事に明にして反りて理淺き事に明ならぬ人あり。然るを俗人は此理を思はず諺にいふ小刀に鐔をうちたる如き人。また米をかぞへて炊ぐとかいふらむやうなる。小ざかしき者をのみぞ感るなる。

萬葉集略解

萬葉集略解を。あかぬものなむめりとて。心とめて見ぬ人もあれどもいと愛たき書なり。さるは契沖阿闍梨。加茂の大人の說を始め。其餘もよき考をとりて。ほどよく書つめ。中にも鈴屋の翁の考。いと〳〵多く。やがて半に過るほどなり。其は一事の考には。其出たる最初にのみ契沖云とか。宣長云とかありて。ふたゝび其の事の出たるをりは。何某云てふ事を除きたれば。千蔭の考の如くなれ共。よく心付て見れば。すべて此例にて。よき考どもは。契沖師。縣居翁の考をおきては。大かた鈴の屋の翁の考へなり。たま〳〵千蔭春海の考へと見ゆるも。大かたは其考へより出たる考なり。よく讀て然る事を知るべし。我が翁の萬葉集を解れたる物は。たゞ王の小琴のみありて。是も纔に三まき四まきの考へを。少かづゝ

書おかれたるにて。いと殘り多き物なるを。この略解を作るをりは。千蔭と春海が許より。伊勢へひたすら文かよはして。問ひ明し。まだ彼部の中よりわざと翁の許へ。三たび四たびまゐ登りなどもして。問ひ極め。さて作終りて。翁の許におくりて。善惡を訂しをもこひさて此書は出來つるとなむ。されば我翁の萬葉集の考へは大かた此の書に出たれば。よく讀べき物なりけり。ことし此の略解を公儀に捧げし時、その賜物を千蔭より春庭君と。太平ぬしの許に。分おくりしは。實にしほらしくうべなる事なり。

鈴の屋の老翁をそしる人々の論

鈴屋の翁岩かくり賜ひてのち。かしこゝに翁を誹る人ども出來にける。此は掛まくも可畏けれど。神代に天照大御神天の岩屋戸にさしこもりましければ如螢火かゝやく神の處を得てさやぎける古事にひとしく、其が中に儒者どもの誹は己々が悶疾をためられて辛きめ見たる事の口惜ければ。誹るにて、此は彼良藥の口にくるしとか云類なれば。云にたらず。皇國學する輩の中にもつとめて老翁を誹る者あるは。すべて負をし忌の人々也。さるは我か翁の學問のいみじさよ他國人はしばらくおきて云はず。明宮に天の下しろしめしゝ天皇の大御代に。漢籍わたりまゐ來てのち。皇國に學問ぶこと始りてより。千年を二かへりに近かれど。此老翁はかり正しくめでたき學問のすぢを建たる人ある事なし。篤胤かく云はゞ。彼我家の佛を尊しと稱る類に。聞なす人もあるべけれど。さにあらず。尤もまだいといはなけなかりし程よりこの老翁に隨ひて。餘と競べ見ざる人には。まゝ然る類の人もあらむか。其はいかにも。あれ己はいといはれけなかりし程より。漢說にのみ耳なれ目なれ口なれて。大かた漢籍にいへる事のみうべなひ居りけるを。近きとし此翁の書ども讀て熟く味ひ試み。始て皇國の萬國に卓越て。尊き事をおぼえ。古よりもろ〳〵の識者。この老翁の如く正く物を辨へたる人の無りし事を知りそめぬ。かゝれば更になづみて。かく云にてはなし。公平にもの學びする人は。よくこゝを辨へ給ふらむ。さて翁の學問はしか大じき事なるを。彼の毛を吹て疵を求むるとかいふらむやうに。少しの事を見出して。誹らむとするは腹あしきわざにあらずや。しかも少かの事をいひて。

人を誹らば。天地の初りしよりこのかた萬國にあやまりなしといふ人は。いかで一人もあらむやは。譬へば我か翁の學問は。數丈にはびこりて。愛たく榮えたる松の木の如し。さばかり大きなる樹に。一葉二葉は枯葉もなどか無るべき。その一葉二葉の枯葉をもて。其木の榮をそしるは。ひがことならじやは。されば古學する輩の。此の老翁を誹るなどは學問の眞理もたえなむとぞ思ふ。然るはしか誹る輩。たれも〳〵此の翁の御蔭蒙らぬ者もなく。其一葉二葉の小疵を求め出して餘によきすぢを考ふばかりの眼になりたるも。皆この翁の賜はれる幸ぞかし。然るにさる事をば思はずて。よき事どもをば己れひとりにて考へ得たる如く。さへづりまはるは。其のした心さへ思ひやられて。いと片腹いたきぞかし。見よ見よさる輩のひがことのみいひ居るを。さてしか言まはる輩をよく尋れば。大かたは縣居の翁の敎子たちの殘り居る輩ぞ多かりける。然るは此輩よいかなれば誹るぞと思へば。我か翁とは同じ縣居の敎子にて。ひとつむしろに居たりしを。己々は歳たけ腰かがみて八束鬚しろくたえさがりなどするまで。何のなし出たる事もなくて居る間に。翁はいととく秀給ひて。數々の書を著し。其名天の下にとゞろきて。知らぬ者なく。其の弟子等にも優れたるが多くなりなどして。世に用ひらるゝ事をねたみての所爲なり此は大かたの人情にて己とひとしなみなりし人の。我より遙に立のぼりたらむには。嫉く思ふもわりなき中なれども。此の輩の翁の秀られしを嫉むなどは餘に己が身の分をはからぬものにて。俗の諺にいふ。鶴の飛ぶを見て。いし龜のじたむだふむとかいふ類なり。此の輩實に我翁の說にひがことゝ思ふよしあらばなどて世におはしける間に。嚴く論ひて。其ひが事を改めまゐらせざりしぞ。たま〳〵玉あられ論などの如き物もあれど。纔に二十枚ばかりの物を。三人四人して考へしるし。其うへきたなくも。其名を隱して畏々ながら。世にほどこらしけれど。一言もいひあてたる事のあるかは。三井高蔭の答にて。更に一ことも出ぬにあらずや。然れどこれらはまだしも。翁の世におはしける間に言へれば。少しく猛き所もあれど。世に居給へるをりは鈴屋老先生よ。翁は天下の模範。百世の師なる事疑ひなしなどいひ

畏て。物とひ實に奴顔婢膝ともいふべきさまに敬ひたるを。世人の其を知らずと思ふにや。此頃も聞くに本居は姦術僞學よ。宣長は不學文盲よなどいひて。人に消息せる者もありとなむ。いかに今は世に坐ぬとて。よくもかゝる狂言をば放ちけるよと。そゞろに可笑くもあり。またあはれ猛きをこ人とも思ふぞかし。此輩の所爲は。譬へばいと剛き犬の通る時は。弱き犬どもは耳をたれ尾を尻にかいはさみ。人の軒下などに深く潜みて。聲だにあげず。いと見苦しきものなるが。其剛き犬の遠く行すぎて影だに見えぬほど。やう〳〵軒下より這出て。大きなる聲して。猛々しく吠なむどするものなり。此輩は誠にこの弱犬のしわざに異なる事なし。かくても大丈夫といふべきやは。

縣居翁は道を敎へたる人にてなしといふ人の論

縣居翁の殘りの弟子等の中に。我翁を誹るとて。縣居翁は歌よむ事をのみ人に敎へて道を敎へたる人にてはなきを。宣長獨り縣居翁の始て說敎へられし道とて。古にしか云へる。ためしもなき事を。皇國の道。神代の道とていふは。憎き事なり。といひ誹る者ありとなむ。これ何といふ僻心得ぞや。よし古に敎へたる人なく。また縣居翁の唱へ始められたる事にてなしとも。古に徵例あるよき道ならむには。其徵例を追て。などかこれを弘めざらむ。いかで是をあしといはむ。抑縣居翁の世にたふとき人なる事は古道を唱へ始られたる功德あるによりてなり。歌を專と敎へられたるも。古言を說事を敎へられたるも。みな古道に入るはしだてにせむとてなり。然るは其著されし萬葉考の大考に。上つ代の天皇內には皇神を崇み賜ひ。外には嚴き大御稜威をふり起しまして。伏はぬ國をたひらげ。ちはやぶる人をやはしまし。天地に合ひて。とほしろき道をなし給ひ。治めたまひ。(時有て文を外にし武を內にすといふは他國の理屈ぶみのさだなり皇朝はしからず常に武をかゞやかすを本とすよりて古への御代はます〳〵榮えましたり)內ゆふの狹き事をば。見し直し聞し直し。おほしましゝかば。あを人ぐさも。皇神を敬ひて。心にきたなきくまをおかず。すべらぎを畏みて。身に犯せる罪もなく。まして臣たちは。海ゆかば水漬かばね

山ゆかば草むす屍大君のべにこそ死なめ。のごにはあらじと言だてゝ。雄々しき眞心をもて仕へまつれれば。我がすめらぎの御をす國を。天と長く地と平けく。聞しめせる故縁をも。つばらに思ひ得つべし。此を思ふに皇御國の上の代の事を。しりとほらふ事は。古き世の歌をしるゆ。さきなる物はなかりけりと言れたり。此をよく思ひて。歌を敎へられたるは。古道を學ぶ梯にせられし事をさとるべし。またにひ學に云はれしは。後の世の人萬葉は歌地。歌は女の翫ぶ戯の事ぞと思ひ誤れるまゝに。古歌を心得ず。古書をしらず。なまじひに漢文を見て。こゝの神代の事をいはむとする。さかしら。人多し。よりて其いふ事虚理にして。皇朝の古の道に合へるは。總てなし。まづ古の歌を學びて。古風の歌をよみ。次に古の文を學びて。古風の文をつらね。次に古事記をよくよみ。次に日本書紀をよく讀み。續日本紀以下。御代つぎの史らをよみ。式儀式など。或は諸の記錄をも見。西宮北山江家次第までに至るかなに書る物をも見て。古事古言の殘れるをとり。古の琴笛衣の類ひ器などの事をも考へ。其の外くさ〳〵の事どもは。右の史らを見思ふ間に知らるべし。かく皇朝の古を盡して後に。神代の事をば窺ひつべし。さてこそ天地に合ひて。御代を治めましゝ古への神皇の道をも知得べきなれどいはれたり。これらをよく思ひて歌を敎へられたるも。古言を說く事を敎へられたるも。みな神代の道を學ぶべき梯にせられし事をさとるべし。此翁の著はされし書共。歌意考。文意考。冠辭考。國意考をはじめ。ありとある書どもに。かへす〴〵深切に。この心ばへを說をしへられたるにて。更に論ひはなきことなりそれのみならず。弟子には。みな道を學ぶ事の。うけひごとを書しめられたるなどを思ふべし。故ありて淸水濱臣が許に。我が翁を始め。藤原宇萬伎橘千蔭。楫取の魚彥。村田春海。その餘も。其多くの人々の誓言をもたるが。みな同じ事にて。其文に。賀茂宇志理敎賜比布皇御國通上代乃道袁己痛顯敎斯奴倍里故名彌乎進呂良道爾赴奴比伊麻由後敎賜留言遂爾達里呂許流時毛爾有受波安駄志人爾私言勢自且宇志爾對比呂伊耶無久異伎之心袁思波自都呂此鳥計非爾達波婆言暮麻久恐伎天津神國津神多知知志食奈毛宍賢。とあり。かゝる誓言をさへに書おきなから。縣居の翁を道を

敎へたる人にあらず。とはいかにちふまか言ぞや。たゞし此はいと久しきあとの事なれば。老ぼれて忘れの病のしわざなりともいひなして。免すべけれど。朝夕に見るらむを。縣居の翁生涯いそしまれし。萬葉考にある事すら知らで居るは。餘りに師にまめならぬ輩なり。加茂の翁の御靈。この輩の言を聞給ひて。さこそ憎くもおぼさましを。たゝし此輩。萬葉考だに讀ざるにや。といといぶかしくなむ。さて漢籍說苑に。猛獸狐疑不レ若ニ蜂蠆之致レ毒也。といふ事あり。是につけて思ふに。縣居の翁古の道を尊み。其を重みし給ふに餘りて。その樣なる歌の敎へ古言の敎をのみし賜ひて。其の功もいまたなかばなるほどに。岩がくり給へれば。愚に實ならぬ輩には。かくこそいはれ給ふなれ。

また

縣居の翁。鈴屋の翁ともに萬の國に比ひなく。世にありがたき老翁たちなるを。さは知らで。たゞに歌よむ事を敎へたる人とし。或は古僻をとく事を得たる人々とのみ思ひ居る人のみ多きは。此は譬へば櫻の花のうるはしきを。めづるものとも思ひたらで。たゞに其の枝葉を愛たしと見るに均しく。漢人のいはゆる。不賢者識ニル其小ナ一とかいふ類か。あはれ愚にあさましき人々になむ。

我か翁の歌のをしへ方をそしる論ひ

我翁の歌を敎へられしに。古調近調と分て。まづ古調とは。萬葉集の中より寄僻しからぬ詞どもを撰びとりて。詠出るをいひて。此は縣居の翁の唱へられたるすぢにて。それに少し心ばへある事なり。また近調と云は。新古今集を撰ばれし世の。人々の歌にならひて。これも其の頃のあしき僻をば撰捨て。詠出る事なるが。此は新古今集の頃の歌は謂ゆる後の世ぶりの眞盛にて。實に優れてよければなり。この事はすべてうひ。山踏に委さにいひ置れたれば。披き見るべし。凡て論ひは此書につきたり。かく二つに詠わけられしは。實に達者のしわざにて。誰か企及ぶへき。今は我なみうひ學びの輩に至るまで。願はくは。しかし詠むとてものするも。みな翁のたまものなり。又此の事は始めを開くこそいとかたき事なれども。かく導き敎へられて後は。よく勤めなばたえて詠出がたき事にもあらじ然るにこの二かたに詠まれ

し事を。あしきわざなりとて。誹る人もあり。これも縣居の翁の殘れる弟子等なり。其の輩のいふを聞くに。古今と別てよむ事は。倭漢にわたりて。其の例なき事なるを。宣長はじめて。しいでたり。抑歌は己が情の見るもの聞く物につけて。詠出るわざなり。然るをふたかたに別て。一首は古風一首は後世風とて詠出ては。しひて其の風に詠かなへむとするにひかれて。己か情を述る事あたはず。たゞ詞のみはその世々のわいためありて。すべて似せものつくるしわざなり。縣居の翁の教へは然らず。そは新採百首の序に。しかじかと云ひ置れて。其古へ風とて教へられたるは。萬葉の頃より。花山一條院の御時などまでの風をひろくいひて。その間の情詞をうつし學びて。よめとの事なり。などいふめり。これらみなあながちに儲けたる説どもなり。然るは此の輩よ。若きほどより。縣居の翁につきて學びたれば始はにひ學。萬葉考などに教へられたる如く。ひたぶる古風に詠けむ事しるく。かくて縣居の翁世を去り給ひて後。おひおひ古へ風にのみものしては何となく俗人の耳にしたしからぬゆゑ。やうやうに一つ二つと後の世風の心詞をうちまじへけるに。さすがに世のなが人共なれば其の敎を受る輩なども出來て。先は一つの門戸をなしけるほど。我か翁の其の名。天の下に轟き。さて其の歌を敎へらるゝやう。加茂の翁の敎へられし古へ風の外に。また後の世風をも敎へ。其をきよく詠わかちて。おのれおのれが詠來れるとは。いと異なるに驚きなから。にはかに今までのならひを改めむ事も。さすがに口をしく思へるからやがて今までの口風を縣居の翁の敎といひなし。たゞしかのみいひては。人の信ざるまゝに。始めにものせられたる。新採百首の序に。いはれし事を據として。後によく考へ定めて。萬葉考にひ學などに云はれし説をば。いひ破りなむどもすめり。そもそも己が僞説をおし立むとして。かく其の師にまめならぬは。いかにらふまが心ぞや。さてもなほあかぬにや。彼の翁の書おかれし餘に。なほ深く妙なるいはれありて。口授に傳へられしさまにいひなし本居はさかひ遠くへだて居たれば。縣居の翁の歌の眞の說をば知らぬ人なりなどいひて。强てもてつくれど。此の輩のいふやう。彼の釋迦ちふ人の死ぬるとき。

迦葉といふ者に眞の心を密に傳へたりといふ事のあるが。よくそれに似たる云ざまなり。縣居の翁は。古へ風の歌よむ事をまづをしへ。それを梯として。古へ道を傳へむとの心なりしものを。いかでかは人撰して歌の道を密に傳ふる類の穢き所爲せらるべき。此は縣居の翁をたゞに歌のみ敎へたる人と。ちひさく思ひて。歌を敎へられたるは。古道を敎ふべき梯なりといふ事を知らず。皆己々が。歌の拙きを。よさまに執なさむと。辛うして考へたる遁辭にて。彼から人の謂ゆる。小人の過は文るとか。したがひて是が辨を作るとか云ふ所爲なり。ことに新採百首なるは。始の說にて。後に其の說を改めて。萬葉考などにしるされし物を。いかで口授には始の捨たる說を傳へらるべき。これにて其僞しるき物をや。此の輩さる穢き所爲を巧妙にとりなし云はむより。古今入り交りなる歌よみける人も古今にまゝある事なれば。たゞに此は己が輩の立たるすぢなりといひて。他をば誹らであるべき事なり。また我が翁の古調近調と別て詠れしを。和漢に例なき事とて誹れども。よきすぢならむには。古に例なき事を始むとも。なでふ事かあらむ。

玄道案ふに西土の詩は古く擬古詩といふも多く世に揩式ともなる唐李白杜甫ともに古風體詩あれば彼に例なしとはいかにぞや

此輩の言につきて云はゞ。昔に例ある事は從ふとの心なるべし。其の昔の例といふも。昔人の始めたる事なれば。今の人の始めたることなりとも。善き事ならむにはなどか從はざらむ。昔の例には從ふべく近き例にはしたがはじといふは。彼の耳を尊みて目を卑むとかいふ。癡こゝろなり。いかでか是を直しと云はむ。殊にこの輩のをこなるは。我が翁の新古今集の頃の歌を愛せられたる事を。云ひ破らむとて此頃の人々俊成卿。良經公家隆卿。定家卿などの歌をさへに。いと賤しくあしき歌にいひなす事なれども。其あしき歌とて。ひき出たるを見れば。さのみあしき事もなく。よしやあしかりとても。其の引出たるは二三首には過ず。其二三首のあしき歌をとらへて。摠てをあしとは。いかでか定めむ。二三首のあしき歌を執へて。其人の歌を皆あしと定めむには。人丸赤人。貫之を始め古へよりよき歌よみは一人もあるま

じきなり。歌のみならず。すべて物は多き方につきて。其善悪は定むべきものなり。また定家卿。家隆卿。後京極攝政などの歌をば。口を究めて誹りながら。俊成卿の歌を稱る者もあり。家隆卿。定家卿などの歌は。俊成卿のよりは。すこしこまやかに優れたる心もこもりてはあれども。專ら同じ趣なるをや。然れば俊成卿のよりは猶優美たりとこそ云ふべけれ。然るを俊成卿の歌を愛て。彼卿たちの歌を誹るにて。其心しられたり。强て爭ふ心の盛なるから。かやうに打合ぬ事をいひ居るなりまた古へ風近體とわけ詠ては己が情を述ることあたはで。似せものつくる所爲なり。たとへ詞は古へをまもるとも。心は今の世の人の心をいふ事なるを。心をも古へ人の心を守りて。我が思ふ事をいひ出ざらむは。是をいかで我が歌といはむとやうに云ふも。ひとわたり然ることの如く聞ゆれども。しか時代の風に狹められて。己が情を述る事あたはぬやうの者を。いかで歌よみと云はむ。其は己がさる癡心に比べ見て。人をかぎる也。此は歌のみならず文かくも同じ事にて。今の俗に書交す消息てふものは。漢文の格なる事もあれども。しかも全き漢文にもあらず。雅文めける事もあれども。雅文にてはなほあなぜ。何くれと入交りて。いと俗たる物なるゆゑ。雅文に消息かき交すをりなどはいつも古への雅文の風にならひて。ものするは。これ古へ風にも。今風にも。ものして事を辨へ。己が情を述る事ならぬといふ事もなきにあらずや。此は我が國風の文のみならず。から國の心言もてだに。殘る心なく詩にも漢文にもゝのして。己が心を述るをまして我國風の歌文におきてをや。然れば古調近調と別よむも。この如く古調を詠には。よく其の世ぶりの姿と詞をまねびて。己が情を詠出し。近調を詠もかくの如くせむに。いかで似せものつくる所爲といふべき。强て是をにせ者のしわざといはゞ。彼輩がいふ。萬葉集の頃より花山院。一條院の御時までをまねび詠も。似せものつくる所爲なり。かくいひもてゆかば。今の俗の卑けなる詞もて。今の人の思ふがまゝに。彼の俳諧の發句とかいふ物のさまにいひたらむを。眞の歌と云ひて。雅言もて作れる歌をば。皆にせものとやいはまし。殊にもの學ぶ事は。後世のあしき習を矯て。古へのよき事を己が身にな

らひまねばむとの事なれば。心も詞も古へ人の直きに移りたらむは。實に物學ぶ本意にかなへる事なり。彼輩のいふ如く。何事も古へ人は古人の心。今人は今人の心として古へにならふ心なくば。學問は益なきわざならし。

また

謂ゆる古風家ならで。別に一つの家おなし。歌をしふる輩ありて。それらが云へるは。歌てふ物は。いつの世にはかゝる風體によみけりと。後世より其代の歌のさまを見るものなり。然るは御代々の撰集の同じからで。今より見ても其差別著明きにても知るべし。然るをいつの頃の風。あるひは此集かの集などいひて。其風に詠かなへむとするは。非事なり。今世は今世の風にこそ詠べきものなれ。などいふめり。此は普通の歌よみの毎いふ事にて。かの二條家の正風體といふ事を固く守りて。歌の彌くだちにくだち來ぬる事を。えさとらず。猶かの掟に泥み居る輩なれば。論ふにも足らねど。少か云はゞ。まづ此輩のいふ趣を。たてむとならば。先にもいへる如く。彼の發句といふ物の調に卑くきたなげなる心詞を綴りて。卑き事をありのまゝにいひ出べきものなり。それまでもなく。卑賤き者の唱ふ流行謌といふ物にて。事すみなむ。さるは雅詞をつゞりて。眞の謌を詠出むとするには。古への集によらではかなはぬ事なれば也。偖しか古へによるとならば。其集どもの中にて。いかにも〳〵優れたるを撰みて。それによるとも。いかでこれをあしと云はむ。然るをいかに後世に。今の世の哥ざまを見する事を專とすとて。漸に卑く移り來ぬるをためむともせざらむは。云ひがひなき事に非ずや。とても後の世に今の歌ざまを見せむとの心ならばなどて今ひときざみ高く構へをなし優れて愛たき調にならひて詠出むとはせざる。しか猛く思ひ起してものしつゝも。なほ劣りたらむは。卑くかまへて卑く詠出たるには。いよなく優りたる事に有らずや。また御代々の撰集をひとわたり詠では大かたひとやうに見ゆれば、其の世の歌人たちは。心も詞もみなひとやくなりと思ふは。いとをこなり。然るは撰集どもは。それうけたまはれる人々の。心によしと思ふをのみ。撰み。或は少く改めなどもして。集められたるものなれば。大かたは揃ひ

たるやうに見ゆるは。然る事なれども其世の人々の家の集どもを見れば。皆それ〳〵に體をなして更にひとやうならず。此は歌は人々の情を述るものなれば。しかあるべき事にて。斯古今集のころの六家集などを見て。其の各ことなることを知るべし。勅撰の集といへども。人々の歌を撰み別て見れば。皆それ〳〵の體ありて。ひとやうならずたゞしその時代に依りて。集に優劣あるは。歌の盛なりし世と衰へたりし世との差別なり。今こゝろみに諸人の歌を。一人が好むまゝに撰み集めたらむには。今の世の歌人の哥は。大凡ひとやうに見ゆらむ。これにて其の理を知るへし。さかしらにのみ。もの云へども。かゝる事にも心づかで此の輩いかにいざなひ廻るとも。世の人の歌を。ひとやうならしむる事は。かなはぬわざなれば。其は思ひやみねかし。

我か翁を誹る人ありとも捨おくべきことさきの五條をものするにつけて。また言ふべき事あり。然るは我徒の中に。俗の直からぬ學者どもの。老翁をそしる事を腹たちて。彼の輩の許に消息を贈りて厳しく戒め。或は自ら彼等が家を訪ひなどもして。人多かる中にて。いたく彼等に恥見せなどする類まあり。いかさまにも己が師と頼む人を。すぢなく訕られたらむは。いと口惜ければ。實に理は然る事なれども。己心におもふやう有り。然るは彼の輩の我か翁を訕り開かするを信なふは。彼等に隨ひて學問ぶ類か。さらぬもいとなほ〳〵しき輩なり。實に心さとく直き人。彼のともがらの訕りを信なふ類の人には。いかに說きかすとも。覺る世あるまじければ曉さでも有りなむ。人はいかに云ふとも。己と其の善惡さを知る事あたはで。人の言ふにのみ任するは。我か心を人に預くといふものにて。然る輩を己か目より見れは。悲しくも。痛ましくもあるぞかし。かく男道なく愚なる輩を惑し掠て。善人のよき事言へるをよしと云はで。あまざへに訕るなどは。實に憎き事なれども。我か翁の尊く勝れまし丶事は。天下に隱れなく。心さとく公平にもの學ぶ人は。誰も知れる事なれば。彼の輩よしいかに云ふとも。其は譬へば牛の角を蟁蚊などのさすが如し何の疵となるばかりの事か有らむ。殊になべての人の耳にも早く入るわざに

て。己はかへりて嬉とこそ思ふなれ。又師を誹られて。うち捨おくてふいひがひなき事の有らむや。其は師に實ならぬ事なり。などいふ人もあれど。己また云ふべき事あり。其は今の世に古學者となのり。また歌を敎ふる輩。我か翁を訕れば愚なるきはの輩は猛く思ひて。何某は鈴の屋にもまされり。など云ひて隨ふから。自ら弟子なども多くなりて。かの潤屋とかいふすぢとなりて。心安く世を渡らるゝゆゑの所爲なり。我か翁の優れたる事を稱たらむには。誰か彼の輩に隨ふ者やらむ。然れば今の世に古へ學する輩。歌敎ふる輩。おのが榮を好まむとならば。我か翁を訕るに及く事なし。これ我か翁の高く大きなる所なり。卑き譬なれど拔参宮とか僞りて物もらふ類と思へば腹たつ事も無きに非ずや。そのうへ我か翁の御心をおしはかるに。何事も古へ道の大らかなるにならひ。見直し聞直し思ひ宥めむ事を好れたれば。打捨おかむこそ返りて翁の御心にはかなふべけれ然れども彼の輩より。我たてたるすぢを難じて書を著はし。または目のあたりにて。誹もしたらむには。其はよく理るべきものなり。此は翁もしかせられ。また西戎人だも師のあなづりをふせぐ事は。いみじき事にしたりき。また愚者の一得とか云ふらむやうに。彼の輩もしよき事をいひ出たらむには取るべし。强に我か翁の非事あれかしと。あなぐり求るから。希には云ひあつる事も。絕て無かるべしとも云ふべからず。

呵妄書之序

これの呵妄書はよ。我友平篤胤。かの漢學者太宰純が著せる辯道書の。いともすべなく。こちたきみだりごとゞもを。世人のさとるよなく。さることゝしも。思ひをれるもあるなどを。うれひなげかして。そをわきまへ。ことわりかゝせる書になもある。はやくより論らへる書どもゝ。これかれ有めれど。皆いまだしきまなびのともの。なまさかしらにおほゝしく。あげつらへるのみにして。中々にめとゝむべうもあらざりけるを。今はさるなほ／＼しきたぐひにはあらで。なにくれといとこまやかに。わきまへことわりてものせられつるは。こよなうめでたく。まこと。からやまとの書ども。うまらによみあきらめでは。いかでかゝはと。になくたふとくおむかしくこそ。さるはすべての論どものをゝしきに。人その心をもえずて。ひたぶるに。あらそひごゝろとな思ひそよ。そのあげつらひのおごそかなるは。彼書のみだりごとゞもの。けやけかるによれゝばぞかし。抑かくつばらかに。ものせられしことのいそしさを。うづなひゐづるあまりに。巻のはじめにそのよし書付ぬるは。文化元年三月。源朝風

呵妄書

平篤胤著

辯道書にいはく神武天皇より三十代欽明天皇の頃までは本朝に道といふ事未有らず萬事うひ〳〵敷候處に三十二代用明天皇の皇子に厩戸といふ聖明の人生れたまひ云々文明の化を施したまひ候往昔より皇國の學をもとなへて神典をも說敎へし百識者等西戎國に嚴重なるをしへの道有るをうらやみ皇國の古にもさる敎の道有りとていふは。皆僻言なる中に(其由は下卷に委曲にいへり)太宰純獨皇國の古には。道なかりしことを云ひ顯して是を辨ず。實に卓見とも云ふべきか。然れども此人。いたく西土の道に拘泥る心に道なきはいと惡しきとよと僻心得して。漢土に道有ることをたけき事に云ひて皇國をいひ貶さんとする心よりいへる說なれば是も倶に僻說をのがれず。殊に此人皇國の書籍をば。搔撫に少し計り讀ていへる言なれば。書中皇國の古をいへる。すべて輕卒たる事のみにて。甚々稚なく。更に云ふにも足らぬものなるを。然る故をも知らで其書をいたく信し居る人も多かれば。今其人々の爲にとて云ふなり。まづ爰に神武天皇より。欽明天皇の頃までといへれども委しからず。(普通の學者、神武天皇より以降の御代々をは、人皇といひ其上つ御世をば、天神七代地神五代とか云ひて、三元にかたどれるなど覺え、また私に記せる史どもにも、多くは神武天皇より記し奉れるを、みな然ることゝ思ひ、純も末に人皇云々と云き、爰にも神武天皇よりといへれど、是は漢國の歷史どもに彼國の古へはたしかなる傳說なき故、みな古へを略き書るを、よきことゝまねびたるいみじき僻言にて正しき御史には更になき事にて、誠に當らぬことなり、そも〳〵皇國の皇統は、天照大御神の天津日嗣に坐まして、天地と倶に常磐に傳はらせ給ふを、其本の始をば略き牟らより記すことのいかで有ん、こはさかしら心に神代には奇き說のみ多くして、漢めかぬをあかず思ひて略ける私事なりこは押なべてしか思ふことなれば、純に負せてとがむるとにはあらねども、序なれば云ふ也)皇國には天地初發の時より。孝德天皇(神武天皇より三十六代目)の大御代まで、道といふ名目かつて有らず(た

だ往來にのみ道といふてとはありしなり）また神道を一つの道に立ること。後世に起りて。太子の時には無きことなりといへるは。然ることなれども其後世といへるは。何時の頃を指していへるにか詳ならず末に眞言宗の佛法渡りて後の事と見え候といへるを思へば。空海歸朝以後をさすと見ゆれど是も違へり皇國の道を廣くさして神道といへることの始て見えたるは。日本書紀の孝德天皇の御卷に。惟神者謂隨神道亦自有神道也と有る是也（此前にも用明天皇の御卷にも神道と連接たる文字見えたれども、其はたゞ神を祭り給ふ事をいへるにて廣く道のことをいへるに非ず）儒釋流入せざりし前。天の下のこと行ひ給ふとして神道な口ずと云ふことなく。別て名目を設て稱ぶことも無かりしかども。儒釋の道をも取まじへて用ひ給ふこととなりてより。夫に別んとて。皇國固有の道を。神道といふことゝは成れる也。（神道と云ふ由は下にいへり）欽明天皇の大御代あたりまでは未上つ御世の御手風がちにて甚めでたく釋は流入しける始なり。儒道も實に稚々しくぞ有りけん。また聖德太子の始て書籍を讀み。學文し給へる如くいへるも違へり。用明天皇より十五代前。應神天皇の大御代（十五年）に。百濟國より。阿直岐王仁など來朝て。宇治稚郎子命さとり深くまし〳〵讀覺え給へるなどをば知らざるにや。純も書紀をば讀たらんに。是等の事は知らぬことは有まじけれど。一御代も後の事にいひなして。一向に皇國を鄙めんとする此書の趣意なり。然れ共書中皇國の古へをいへるゝ餘りに稚きを見れば。若くは書紀をば讀ずして後の世の法師どもが。聖德太子をば佛法最初とかいひて。いみしく尊けに。僞り作れる書どもの種々有るを讀て。夫等に據りて云へるにはあらしか。又聖德太子の官職を定め。衣服を制し給へることなど云ひて本朝に於て厩戸の功は制作の聖とも云ふべき人にて候など云ひて聖德太子の爲始め給へるがごとくいへるも甚く違へり。すべて陋識なる學者には。まゝ皇朝の古へには。官職も何も無かりし如く思ふ者も有れど是は書紀の推古孝德の御卷などを惡くこゝろ得過まりたるものにして更に云ふにも足らぬこと也かゝる輩はこの御代々々の頃までは朝夕の御食をはじめ何事も天皇御自爲賜へることゝ覺えたるなるべしいと〳〵

文盲なることとなり官職のことは神代よりありて所謂文官武官の差別も有りし也。八十伴緒と云ふは漢籍に百官と云ふがごとし今有る官名に辨掃部主殿主水靱負(此外もなほあまた有るか)など皆古への官名の殘れるものなり(但し位階は後に定めたるものなり)聖德太子はたゞ古へより有來し事どもを漢國ざまに文飾し改とられたるのみのことなり(又元より無かりしをあらたに始められたることもあるべしまた皇國の古には事は有ながら漢國の如くいと巨細に名目などをばものせず只大らかに爲來れることも少からず夫に名をものし給へるなども有るべし深く思はぬものは仁義孝悌の字に和訓なければ此事は無りしなと云ふがごとき固陋なる言も云ふぞかし正しく古を考ふべし)よく古書共を讀て知るべしさて文明の化を施したまひ候と有る其文明の化と云ふものこそ皇國の痼疾には有れ

近頃舊事本紀といふ書を太子の著述とて珍重する人有之候其書を見候に近世の人の僞作なる事證據明白に候

是は呵るとには有らねども爰に僞書なりといへる舊事本紀は今の世にある十卷のを云へるにあらず七十二卷ありて一名を大成經ともいふものゝことなり。然云ふ故は近頃と云ひまた近世の人の僞作なりと云へるにて知られたり今も行はるゝ十卷の舊事本紀も後世人の僞り輯たるものなれど中昔の僞書にして本朝月令(此書は延喜の中頃に勅撰の書なり)はじめ近世迄も大かたの物知人等みな惑て是を引證し八百年來の僞書にて中々純が輩の僞書と云ふことを知らるべき書にあらず始て僞書のよしいへるは桂秋齊なり舊事本紀僞書明證考と云ふ書一卷を著して是を辨じたり是より縣居翁(加茂眞淵大人書中みな同じ)または伊勢貞丈大人など僞書の由云れたり貞丈の舊事本紀剝僞と云ふ書一卷あり委く辨へられたり實に具眼の人々と云ふべしさて一名を大成經とも云ふ舊事本紀は黄檗派の僧潮音と云ふ者の僞り作れる書にて(此書のことも剝僞に詳なり)今の世にも往々寫本にてあり己も讀たりしに僞書と聞ざりし前なれど。妄作なりと思へりしほどの書にて杜撰云ふ計りなきものになん

凡今の人神道を我國の道と思ひ儒佛道とならべて

是を一つの道と心得候事大なる謬にて候

神道は吾が國の大道にして天皇の天の下を治め給ふ道なれば儒佛の道とならべ云ふまでもなく掛まくも可畏けれど上天皇をはじめ奉り下萬民に至るまで儒佛を廢てたゞ一向に神道を信じ尊まん事更に謬りにあらず純が世に在しほどまでは未唯一兩部の輩のみにして眞の道を說くもののある事なく神道といへば錫杖をふり或は鈴をならし大祓詞（俗に中臣祓といふは誤なり）を唱へ其外あやしきわざをのみ目なれし時なれば爰に神道といへるも專夫らをさして云へるにて實に神道を知りて云るにあらねば深くとがむべきにあらずといへども此書を讀む人々の皇國の道は實にかゝることよと思ひて謬らんことの長息はしければ辨ふるなり次々に云ふを見て眞道は俗人の思ふところとは大に異なることをさとるべし

神道は本聖人の道の中に有之候周易に觀二天之神道一而四時不レ惑聖人以二神道一設レ教而天下服矣と有之神道といふ事始て此文に見え候天之神道とは日月星辰風雨霜露寒暑晝夜の類の如き凡天地の間に有る事の人力の所爲に非ざるは皆神の所爲にて萬物の造化是より起り是を以て成就するを天の神道と申候

太宰のみならずすべて儒家者流のいはゆる神道は如何にも周易（上象傳大觀の章）に見えて爰にいへるごときことを神道といへり然れども皇國の道をも本聖人の道の中にありと云ひて同事に思ひたるは神道と書る文字に拘泥る大いなる僻言なり今其よしを委曲にいはんまづ皇國の道に云ふ神と周易の神道に神とさすものとはいたく異なり其故は周易に神と云は純が云へるごとく天地の間にあらゆる事どもの人力にあらずして自に行るゝ其靈妙なる處を神の所爲として神道とはいへるなり然れども實に神と云ふ物有りとていへるにあらずたゞ其妙なる處をさして假に設ていへる號みなり（周易繫辭に陰陽不レ測之謂レ神といひ說卦に神也者妙二萬物一而爲レ言者也といへるこれなり）其よしは人の云ふを待ずして儒書よむ人は皆よく知れることなりまた皇國の道に云ふ神は古事記書紀の神代の御卷に見えたる天地の諸の神々にて（また鳥獸草木山海其餘も尋常ならず可畏ものを神と云ることあり委くは吾翁の古事記傳に見えた

り）假に設ていへる稱號に非ず其神々のはじめ給へる道故神道とは云ふなり（古へに通せざる人はかく云ふを聞てもまづ疑ふべし）道の體を神妙さほめていへるにては無きなり（すべて皇國には、上古文字の無りしこと論ひなし然るに世に神道者なんど神代の文字一萬五千三百六十字ありしなど云ひて其文字とてまゝもて囃すものあるは皆彼輩の僞り作れることにて云ふにもたらぬことなり又書紀に神武天皇の御卷より年紀を立て子干を擧られたるを見よまた漢籍王充論衡ト云ふものなどに周時云々倭人貢ニ鬯草ヲまた成王之時倭人貢レ鴨など有るを見て神代より西土へ通信有りしことよなど思ふは古を知らぬ者のいまだしき心なり）然るに應神天皇の大御代に漢文字を傳へてより皇國の加微といふ物に神の字をあてゝ其をやがて加微と訓事とはなれるなりしか文字を當てはまた志牟とも云ふも自然の勢になんあるすべて皇國の言に漢國の文字をあてたるいとよく當れるは希にて或は九分まで當りて有れど一分は當らぬもあり或は半は當りて半はあたらぬもあり（禽獸草木の類には誤て更に異なる文字をさへ當たるも少からず）

加微と神などの類は人智に曉りがたく尊きを云ひて同じきが如く聞ゆれども體あるを云へると體なきを假に設て云へるとにて甚異なるものにても知るべし（周易に見えたる神道の神と皇國の神道の神とはかく差別あれど漢國にても實物をさして云へる事もままあり皇國にても漢文の意にたゞに其の徳を讃めて神劔神龜など樣に神の字をそへていへる事もあり思ひ混ふべからず）古へより百の識者等のみな古へを解誤れるはかゝる事に心付ず古意古言をば尋んものとも思はずたゞ漢説の理と文字とのさだをのみ旨として迷へるが故に眞の處を曉り得ざりしなり純が周易の神道と皇國の神道とを同じことなりと云へるも皆文字に泥めるが故なり（すべて皇國の古は文字によらずして解ざればさとりがたし）すべて少しにても似寄たることあれば強て西土を本なりと云ひていはゆる牽強附會を云ふは普通の神道者と西戎書籍にのみなづめる儒者どもの癖なるぞかし

聖人以二神道一設レ教とは聖人の道は何事も天を奉じ祖宗の命を受て行ひ候云々凡何事にも鬼神を敬ふ事を先とせしは人事を盡したる上には鬼神の助

を得て其事を成就せん爲にて候
聖人以二神道一設レ敎の七字をとけるやう爰には祖宗の命を受て行ふと云ひ又人事を盡したる上には鬼神の助を得て其事を成就せん爲にて候など云ひて實に神を敬ひ氣にて少しは道に叶へるさまに聞ゆるを次には庶民は愚昧なるものなれば鬼神を假て敎導すと云ひ又は民を導くには必上帝神明を稱して號令を出され候など云ふは一紙一表の中にして忽に齟齬せり然れ共聖人の道の意は次に云へる趣ぞ其意を得たる說さまには有りける（其よしは次に委く云ふ）
さて爰に聖人の道は何事にも天を奉じと云へるは然る事にて漢國人の俗として何事にも天の命とか云ひて天は賞罰正しく心も有るもの丶如くいみじく可畏きことに云ふことなれども天は諸の天津神等の坐ます御國にて（かく云ふを聞て漢意の人耳なれずとて不審ることなかれ）更に心なと有るものにてはなく（天則不レ言而信なといへるも大いなる空言にして漢國にても少し見解あるものは天命など云ふをば口口りぬ）彼の天命など云ふは皆古への聖人の云ひ出したる言にて所謂寓言なるをや（この事も末に委くいへり）また祖宗の命を受けて行ふと云ふも然る事にて皇國にこそあれ漢國などには更に無きこと也たま〳〵書經（說命の上）に夢帝賚二予良弼一と云ふ事見えたれ共是も史記の頭注に據るに殷人は鬼神を尊む風俗故武丁夢に托して傳說を擧たるものなり（外にもかゝる類まれには見ゆれど大概右の類なるべし）逆臣どもの君を亡し國を奪ふ時などに天の命を受たり祖宗の命を受たりなど云ふは皆かこつけの空言なりまた天地山川社稷宗廟の祭を重んじと云へるも社稷宗廟の祭などは先祖を祭るにて是とさして祭るもの有れば然ることなれども天地山川などを祭るは皇國にては正しき傳說有りて山神も川神も御名までもつぶさに傳はりて祭るなれば正しきを西戎國にては傳說なくたゞ心もなき天地山川を祭るにて譬へばいたづらに其座す宮殿を祭るが如くいはゆる虛祭と云ふものになん有りける
又士君子は義理を知て行ひ候得とも庶民は愚昧なる者にて萬事に疑慮おほき故に鬼神を假て敎導せされば其心一定しがたく聖人是を知しめしてをよそ民を導くには必上帝神明を稱して號令を出され

候是聖人の神道にて候聖人以神道設教とは是を申候

爰に士君子と有るは庶民と對へていへるを思ふに彼の成德の人とやらんを云ふにてはなくたゞ官高く威ある人を云ふと見ゆれば理きこえず譬位たかき人にてもいと愚昧にて義理の分らぬ人もあり又庶民といへどもいとさかしく義理に明なる者もあり賢さ愚なるは人々の生質にこそあれいかで貴賤の故ならんや譬へば漢國などにても王と有るもの丶愚昧にして臣の爲に國を奪はる丶も有また奴ながらも王の國を奪へるごときかしこきものもあるにあらずや然れば人の賢愚は貴賤にはよるべからず是のみは當らぬ說なれ共此條にいへること共皆よく當れり然れ共未くはしからず先づ天命と云ふは書經舜典に勅天之命とあるより始て甘誓に有扈氏云々天用勦絕其命今予惟恭行天之罰また泰誓に皇天震怒命我文考肅將天威また湯誓に夏氏有罪予畏上帝不敢不正など有る類すべて西戎籍にかゝることをいへるみな純が云る如く假に天命上帝皇天などを稱して號令を出し民の心を一定せしめ罪有る者を伐ち或は逆臣共の君を弑して國を奪ひ取らん爲に愚民を欺き催促せるものなりまた可笑きは武王が語に商罪貫盈天命誅之予弗順天厥罪惟鈞など云へるは欲深き者の途に落てある財を拾ひて獨祝して是神の賜はるところなり今是を拾はずんば返て神の憎しみを受べしなど獨免して私せるがごとくいと心ばへの似たることなり是等にても天命と云ひ上帝など云ふは皆聖人の作り設と云る寓言なる事をさとるべし（是につけて謂ふに或漢籍に天地之氣本無知也人稟無知之氣安得欲起而有知乎草木亦皆稟氣何不知又言貧富貴賤賢愚善惡吉凶禍福皆由天命者則天之賦命爰有貧多富少賤多貴少云々禍多福少苟多少之分在天天何不平乎況有無行而貴守行而賤無德而富有德而貧逆吉義凶仁夭暴壽云々有道者喪無道者興既皆由天天乃興不道而喪有道何有福善益謙之賞禍淫害盈之罰焉又既禍亂反逆皆由天命則聖人設教責人不責天罪物不罪命是不當也然則詩刺亂政書讃王道禮稱安上樂號移風豈是奉天之意順造化之心乎是知專此教者未能原人斯聚散於一生之義窒而不通以之

應レ知などやうの面白き事を云る男も有りけり又儒者の所謂天道天命は佛者の因果と異なる事なし腐儒の輩怒ることなかれ今其故を云ふべしまづ易文言傳に積善之家必有二餘慶一積不善之家必有二餘殃一臣弑二其君一子弑二其父一非二一朝一夕之故一其所二由來一者漸矣などゝ見え左傳にも禍福無レ門唯人所レ召など云ひ外の書共にも有り是らをしも尊き事に思ひ信し居なから佛者が因果を說を呵るもいとをかしき事ならずやその佛者の云ふ因果と云ふはまづ大日經と云ふものに諸法如二影像一云々皆從レ因業生と云ひ法句經と云ふものに福樂自追如レ影隨形など云る類なほあまた有りまた後の世に道士どもの作れる書に太上感應編など云ものをはじめかゝること共の見えたるは謂ふに儒佛に云へるを擬したるものか其は如何にもあれ儒者の天命釋氏の因果一致なること論ひなしよく考へて見よかし）天道天命と云ふを實事として迷へる人は論ひのかぎりに有らねど是を聖人の寓言と云ふ事をさとりては書經などを讀む毎に胸わろく思はず拳を握る計りの事多し純がこの條にいへる樣返す返すも當れる釋ざまになんある

近世理學者流の說に云々皆神道を知らざるものにて候

爰に理學者流を呵りて聖人の民を治る術にて假に鬼神を說くと云ふは皆神道を知らぬ者にて候と云ふは前の條に鬼神をかりて敎導すと云ひ上帝神明を稱して號令を出すといへるとは表裏の異說にして自語相違更に一人の說と思はれず彼唯我獨尊と高ぶれる男の言語にさも似たり初學の人はさこそ惑ふべし然れども一條の文につきて云ふへしまづ理學者をのみむげに神を知らぬ者のごとくいへれども然云ふ人もいかて眞の神を知らん知らさる故にこそ種々僻說もいへるなれ是はいはゆる五十步にして百步を笑ふとか云ふ類にぞ有ける

されば天の命鬼神のしわざは何の理何の故といふ事を聖人も知りたまはず只畏れて敬ふより外のことなく候

天の命と云ふは既にいへる如く皆聖人の寓言にて更に畏ろしきものにては無きを神の御所爲は可畏しともかしこく聖人は更にも云はず掛まくもかしこけれど現御身ながら神にましま す天皇にも神の御所爲は

何の故何の理と云ふとなく其御あらび給ふ折はしもひた畏れにおそれ給ひひた敬ひに敬ひ給ひてかしこみ和め奉るより外なく甚も／＼かしこく尊きは神の御所爲になんある

今の世に神道と申候は佛法に儒者の道を加入して建立したるものにて候此建立は眞言宗の佛法渡りて後の事と見え候吉田家の先代卜部兼倶迄も世に弘まり候と見え候云々

爰に吉田家の神道を破りていへること共大概は當れり然れ共かゝる淺まなる附會の説をとらへて皇國上古よりの大道を混じ議するは例の掻撫に古書を讀て後世に作りかまへたる妄説の雜書共にすがりていへるからの謬りなり人の説にのみ據りて己が意をもて濟すことなきは己が眼をもて書をよまず人の眼を借りて書をよむと云ふ物也何ぞ己が眼をもて古書をよみ己が意を以て濟さゞりけんすへて世の人我が好む所にのみ執着して我が道の外なるをば人の談るをきき或は其よりの書をば片ばし讀てひたぶるに廢せんとす謂ふにては學問者の甚く禁むべきわざなり（或漢籍に安二其所一レ習毀二所レ未レ見終二以自弊一此學者之大患也といへるは然ること也）よく廢すべく破るべきことを考出したる上にては兎も角もいふべし大概今の世に漫りに皇國の古を卑め云ふ者あるはみな人の眼をかりて書を讀める輩にて俗に云ふ耳學問とかいふ類の人のみぞ多かる辨道書世に行れてより一盲衆盲を引くと云ふ譬のごとく古をあやまれる人いくばくぞや人の師ともありし者のかく至りすくなき漫言のみ云ひて後のきゝをも恥ざりしにや此書我が國の道を辨駁していへる大略卜部家に云ふ處のみ多かればこは彼家にて作れる書に神道大意神代直指抄名法要集神道深秘などの類數十部あるをのみ讀て云へると見えたりいかで是等の俗書を讀て上古を知ることを得べき譬へば夷が國を見て京の談せんとするが如く更に當らぬことなりまづ神道と云ふに五つ六つの差別あり今其よしを委曲にいはん一つは周易に謂ふ所の假に設ていへる空名の神道此ことは既に云へり一つは法師どもの謂ふところの神道本地垂跡などゝ云ひて譬へば天照大御神を本地は大日如來と云ひ八幡宮の本地は彌陀稻荷の本地は十一面觀世音などいへる類すべて其の謂ふ所の妄りなること是に准へて

知るべし一つは吉田家にとなふる處の神道其趣は純がいへるごとく外には佛法と敵するがことくにて神道の名目をかり佛道を本として作れるものなり一つは出口延佳山崎垂加などが神人唯一と稱ふる所の神道是は吉田家の神道を本として作りたるものにて何れも宋儒の學を大いに學びたるゝなれば彼の佛めける事をばうるさがりて大概は除きたれどもなほまた理説を取り込み彼の少さき理に迷へる漢意に神代には奇怪きことのみ多かることをあかず思ひてや今よりして見れば奇と思はるゝ古事をみな今の事理にかなふさまに説成し造化の神氣化の神身化の神心化の神などの樣に更になき名目をさへ杜撰して其さしつかゆる處に至りては曲言の文など云ひて實に火を水と云ひなしたる妄説どもなりなは委く云はゞ法師どもの云ふ處の神道にも眞言僧の説と法華僧の説との差あり理學者流の神道にも三つ四つにも別るべけれどさのみは餘りくだ〳〵しければ爰にはもらしぬ何れも書紀の神代の卷を正意と立たるものなりその後桂秋齊と云ふ者いで此者才學の聞え有て專ら古實の學をとなへ大に兩部唯一の説を難破して古書の名をぬすみて妄りに僞本を作り其僞書を證として古を解るやういと〳〵妄説にして渠が著書ども更に用ふべきものなく兩部唯一の徒は佛意漢意に惑へるの誤りなれば其罪あさきを此秋齊などは實に憎むべきが中のにくむべき嗚呼の者になん有けるさて皇國大古よりの神道は更に彼等が云ふごとき狂言と等並にあらず前にもいへる如く神道と云ふ稱こそ後の世に負せたれども其道は天地の初發に生りませる皇神等の始め給ひて更に他國々の道のごとく人知の私に成れるものにはなく天孫邇々藝命の御天降の時天照大御神三種の神寶を授賜ひ（此三種の神寶は天皇の御代御代を傳へ給ふ御印の大御寶なるを俗に智仁勇の三德に比して作れるものなりなど覺えまた西土の傳國の玉璽といふ物と同じ如く思へるものもまゝ有れど僻ことなり谷重遠の云へるごとく彼の國の玉璽と云ふものは人作になりて蛸樂師にて彫れる印判も同じことなり可畏くも三種の神器は人作になれるものにてはなくいとも奇妙神靈くまします御ことはみな人の知れるがごとし漢意の人不審ることなかれ）此御國を治らしめ給ひて寶祚之隆當與天壤無窮と

詔ひし神勅のまに〳〵皇統は常磐に榮えまして動き給ふ事なく三種の神寶を宮中に齋き賜ひて天皇朝夕に尊崇まし〳〵（禁秘御抄に凡禁中作法先神事後他事旦暮敬神之叡慮無懈怠白地以神宮幷内侍所方不爲御跡萬物隨出來必先召臺盤所棚女官被奉云々世始同嚴御坐之間主上朝夕不放御本鳥仍臣申子獻緒被結御髻實此の故也など見えたり此御抄は順德天皇の御撰にしていと後の世のことなれどかくのごとしこれに准ひて上つ御世を思ひやるべし）天皇御自神祇を祭り給ひ御政事則御神事御神事則御政事にて（今のごとく御神事と朝廷の御政事と斯別れしはいと後の世のことなり今をもて古を思ひあやまることなかれ）何事も遠津神代に定まりし古事のまゝに守り賜ひてさかしらを加へ給ふことなく諸の臣等までも其本つ職を世々に守り來て奉仕ひまつり君と臣と互に和らぎむつましく（政の字にマツリゴトと云ふ訓あるも神を祭祀るよりいへる言と臣等の天皇に奉仕まつることゝを兼たる二つの意ありて委くは爰に盡しがたし）天の下の御民の行ひも直く正しく少しのをしへ説も無りしか共いと穩に治りしなり（後世になりて教の書めけるものこれかれあるはみな漢土を學びたる狂わざぞかし）是は道の純一なるが故にて儒佛の道渡り來てより世の中に漸々に邪智奸佞の者いで來て天の下は漸漢國の如く亂りがはしきことも出來にける古をよく學べるものは誰も知れる事也抑々學問をも爲る者の我が古をも知らず〳〵うか〳〵と有らんと云ひもて行けば我が先祖は如何なる人ともしらずあると同じことにて世に口惜しきわざにあらずや（或儒學に名高き男の己が先祖のことを文に作て例の古書を掻撫に讀て己が遠つ祖を取違ひ其文を板に迄ゑらせたるは學問者にしては花々しき恥辱にあらずや西土書禮記にも古之君子論撰其先祖之美而明著之後世者也以比其身以重其國家如此子孫之守宗廟社稷者其先祖無美而稱之是誣也有善而弗知不明也知而弗傳不仁也此三者君子之所恥也と見えたり戎人すらかくのごとし心有る人は少しは思へ）純が如きは末書にのみすがりて生涯さとらざりし人なれば是は爲んかたなし眞に道に志しある人は少しは辨へ度わざになん

巫祝といふは鬼神に給事する者にて國家に有らで叶はぬ者なる故に周禮の春官に云々周の代の巫祝の所作は如何なる體といふ事を今考ふべき様はなく候云々

今の世に神社に仕奉る御巫祝部など今よりして見れば如何にも西戎國の巫祝の體に大略は似たるものゝ如くなれども是は萬に漢國ざまを用ひ給ふことになりて後のことにて右にもいへる如く古へは然らず天皇御自神祇を祭り給ひて天の下を治め給ひ神事に預るは臣等といへどもみな官たかき臣等にて有りしなり後世御政と御神事と斯別れは爲けれど職員令に神祇令をもて首章とし延喜式五十巻のうち十巻は神祇式にて此篇をもて初篇と成し給へるにても古へは神事を重んじ給へることを知るべし漢國にても皇國の古へほどには有らざりけめど般の代などまでは神をば尊みしを周の代と成りて彼の周公旦と云ふさがしら男が般人の鬼神を尊むがすきたりとて己が賢をあらはさん爲神を輕しめないがしろにしてその仕る巫祝をも王道のいと片端となして賤しめたることなれどいと好からぬことなりすべて何事にも己新しきことを爲出して夫をたけきことにするは彼國人のならはし也と吾翁のいはれき神は尊むが上にも尊みて其眞心の至らぬを省つゝいつき祭るべきことにてこそあれいかで過たりと云ふことの有らんされど是は例の體もなき空名の神をまつることとなればしか蔑に思ふことゝ成れるも自然の故になんある道に志しあるきはの人はゆめ戎人のさかしらにならひて神を蔑にな思ひ奉りそさて周の代の巫祝の所作は如何なる體と考ふべきやうは無れども大略今の世の阿闍梨陰陽師禰宜神主神子山伏などの所作に似たる者ならんといへる是いたく違へること也周の代の巫祝は周禮(春官)に考ふるに大祝小祝の官もろ〳〵の神祇祭祠の事を主りまた喪事をも預かりつかさどるよし云へり生たると死たると清淨と穢汚きとの差別なくして皇國の意より見ればいともいとも穢らはしき國俗なり皇國のは禰宜神主はさらにもいはず兩部とか云ひて神と佛とを掌る阿闍梨或は山伏すら神事と喪事などの別はいと嚴重にして更に〳〵おなじからぬをなどてかく菽麥をわかつことあたはざるや知りもせぬ事まで知り顔に呼はりて漫りに辨說すれども己が任と

するところの經書にさへ昧くして是等の差別をも辨へず皇國の古などを論はんはいともをこなるわざにあらずや孔子も知レ之爲レ知レ之不レ知爲レ不レ知共云ひまた蓋有ニ不レ知而作レ之者一我無レ是也とも云へりき(是に附て論文の横なれば言痛しと呵る人あらめど序なれば云ふ純は吾が國の事をば知らずして知り貌に云るを今の俗にこれとは異にしてをかしき一種の漢學者と名のらる我が國のことを問れてもしらずと云ひて耻とも思はず西戎國の事を問ふにしらぬことまでを知り貌に言ふこそをかしけれもし君の命を承りて西土人と應對すること有らんに戎人の我が國の事を問はゞ我は自の國の事はしらずされどそなたの國の事はよくしれりと云ひたらば戎人は己が國のことをしらぬ痴人よとて手を打ていたく笑ふべし是大いなる國の辱なり孔子も己を行ふに耻あり四方に使して君命を辱しめざるを士と云ふへしといへるにあらずや然れ共辱しらぬ者は耻とも思ふまじこの者共に我が國の事をいかで學ばぬにかと問へば假字文のみ多くて俗なりと云りこれ如何なる俗意ぞやすべて漢籍のみ讀むものは未乳くさき小兒輩に至るまでもわづかに大學論語やうのから書を讀とはや我が國のことを學び我が國の書を讀などは俗なりと云ひてほこる其上を行て彼の左國史漢やうの物を見かぢれるものなどはなほさら高ぶり我が國をば外國のごとく心得西戎國を我が國の如く思ひてかの君などゝ云ふ者のかまへをなし何か人を眼下に見下し少しのことにも經書などを引出て漫りにほこらひ貌して我が國をあしざまに云ふなどいと〳〵胸わろし是は實に雅と俗との別をしりて云へるにてはなくたゞ我が國の文字もて書るは耳なれてめづらしげ無れは四角ばりたる文字をのみ讀て愚夫愚婦の耳を驚かさんとする者也かゝる者共に其俗也と笑ふ假字文をよましむるに大概は文義をさとることは更にもいはす純もいへるごとく吾伊(本ノマヽ)のみ云ひて更に讀こと能はず實に笑止千萬なるものなりすべて古への意も古への事も言をもて傳ふるものにて其言には國々世々のふり有て書籍には夫を有りのまゝに記し傳へて其書に依て世々の體と知らるゝ事にて「純等がとなふる古學といふも西土の古辭を徵として解る故に發明したることあるにてもしるべし」皇國の書は其の世々の言語を其儘に

假字書に爲たるは程正しきはなく漢文に書るは愚人の耳をゝどろかさんには好けれど異國の言もて記せれは其世の言葉のすべての云ひざまなどしるべきよしなし書紀はつとめて漢文の潤色にならひて書れたれは古意を謬れるにても知べし今の俗の人にて學問をもする人の吾は士なりとて學て位に在るを士といふといふ漢ぶみの士の字の注は知て居れど我が國我が職の名に負る佐牟良比と云ふ言すら知らぬものもまゝあり是皆皇國の書をば俗なりと覺えたる人々なり我が國のことをば知らず西戎のことをよく知りたり共更に要なく彼の椽の下の力持と云ふ類なりされば雅と俗との別を知て云ふにあらずとは此故なり人の耳を驚かすのみを雅なりとは云ふべからず實は自の國のは雅にして他し國のは俗なり雅と俗との言の意をも思へかし文字の義をも思へかし

今の人神道を學ひて不淨なる家の内に神壇を作り不淨なる衣服を着し不淨なる供具を獻じ云々今の神道家に云ふ所の神明は佛家に云如來にて候

神は敬して遠ざくとか云ふは漢國のさだなり皇國は神の生成し賜へる御國にして神の立賜へる道なれば漢士とはすべて異なること論ひなく天の下の人神胤ならざるは少く神國の人ならざるはなし然れば妄説の佛學空理をもて作り立たる西戎國聖人の道をはじめ穢汚き外國の教どもを廢てまづ皇國の古を學びて皇國の神の尊くましますゆゑ〻知り清々しき眞心もて殿に神を敬ひ近付てよく祭るぞ皇國の道なり其故は前にも云へる如く朝廷には神事をば御政の第一と定め賜ひて天の下を始め給ふ御事の本なれば其の大御心を心とする臣等天の下の百姓に至るまで己が家々の祖神其外他し神々をも齋き祀りて眞心に仕奉るぞ此大御國の遠津神代よりして古をしぬび遠つ祖を慕ふ孝心のあつき御國俗なればぞかし（是は異なる故よしある御國なれば自然にかく有るべきことなりかし左傳にも奉二粢盛一孝也孝禮之始也また孔子も孝德之本なりなどいへるをも思ふべし今の人少し漢籍をよめる者は狹智盛りになりて敬二鬼神一而遠レ之と云ふ語に拘て先祖より我が家に祭り來し神を廢して他に復し甚だしきものはいたく神をかろしめ詈り奉りて神の御像代をさへに打破りなどする如き無頼なる狂者もまゝあり穴かしこ漢國のさかしら心はび

こりて我が國の神を知ることあたはずみな西土に云ふ鬼神天竺乃佛菩薩などゝ同じ如くおもへるはいとも〳〵かなしきこと也）古を學ぶ時は其眞の神と云ふは前にもいへる如く俗人の謂ふ趣とは違ひて神道も巫祝も今の俗の神道者などの云ふことは異なるよしをも委曲にしらるゝことなり（嘉肴と云へども食はざれば其旨を知るべきよしなく至道と云へども學ばざれば其善を知らざるが如く古を學ばぬ人は知るべきよしなし）さて朝暮に神を祭り亂心する者もありと純がいへる實に然ることも有るべし眞の神を知らずして佛菩薩のごとく思ひ奉りて其上神のいたく忌み嫌ひ給ふ佛經の句を摘取り祝詞に擬へて杜撰したるもの（六根清淨の祓ひなどいふ類）をば法師どもの佛經を誦する如く神の御前に數篇となへなどして汚し奉ればなりまた普通の神道者流の云ふ處の神明は如何にも法師どもの云ふ如來めけることにていと忌はし然れども此輩はみな己々が好むかたに執着して佛を好める輩は佛說を出ることあたはず性理を學べるものは此理と云ふものをのみ牽強して外に妙なる理の有るをも知らず皆始に學べる垣内に迷ひて外あることを知らずして拘泥るものなり彼の聖人の道にのみ迷へるものゝ何事も聖人のいへるをばよしとして其糟粕をのみ舐りて其垣內を出ること能はず周易の神道と我が國の神道とを附會せるものなどみな同日の談にて彼の蒼蠅窓に觸るとは云ふ類なりされば兩部唯一の徒も其の好む處に迷へる不明は憐れむべきことなれ其腐儒者の輩我が國の事をば知りもせず漫りにわろくいはんとする無賴なる者よりは附會ながらも我が國の道と云ひ成して稱へんとするは皇國を尊くせんとての眞心わざなればまだしも殊勝なる志なり我は純が輩よりは惡しと思はずなん。

今の世には、巫祝の道を神道と心得候て、王公大人より、士農工商に至るまで是を好み云々巫祝にあらざる者は、知らずして少しも事かけず候、

今の世に。兩部唯一の輩の唱ふる巫祝めける事を。眞の神道と心得て。人々學ぶは大なる誤りといへるは、一通り然ることゝも聞ゆれども。己謂ふに。聖人の道を學て。純が輩のごとく無賴ならんよりは返て彼輩こそたのもしからめ其故は彼の輩の其云ふ處は妄說なれ其一向に皇朝をかしこみ神を尊み露ばかり

も我が國をあしさまに云はんなどの心はなく更に聖人の道をうまくさとれりとてはこる嗚呼人の穢汚き意の類にあらずされば彼の學をする輩をも然のみ叱るべきことにはあらずまた巫祝の道は鬼神に給事するのみにて吾れ人の知らずとも事かげぬことなりといへるも一通り然る事と聞ゆれども前にも云へる如く皇國の御巫祝部は漢國の巫祝と少しく似て大に異なる處有れば一通りは知らまほしきことなり純などは更に知らずして云へりし故に文字の同じきまヽに同じものよと心得て穢と淨とを彙掌る周禮の巫祝と淨き上にも淨きを好む我が國の巫祝とを同じ事に思ひ混へて僻言を云は既に事かけたるにあらずや何事も學びてのちに用なきは廢るに安きわざなれば及んかぎりは學びて。其止る處にとゞまり度わざそかし。

此神道は巫祝の傳ふる處にして極く小き道なることを人知らず儒は唐土の道佛は天竺の道神は日本の道なれば此三道は鼎の三足のごとく同等にして偏廢すべからざる事と心得候は口をしき事には云云（是より以下佛法をいへる事なれば爰にはもらしぬ其中に云はまほしき事共は末の部にいへり）

皇國の眞の道は天地の間に充滿て天地の斯有らんかぎり動きなき大道にして儒道は西戎國の古へ人禽獸と等並なりしとき聖人と稱を得たる魁首どものさがしらに成れるものにして（斯云ふ故は純が本書にも見えて下に出せり合せ考ふべし）甚も〳〵小き道なることを知らず我が國の大道の號を竊て妄說の佛道小き儒道を（斯云ふを狹智の漢學者いふかることなかれ）取まじへ理學者佛徒のいと小さく僞り作れる道を眞の道と思誤りて漫りに其道の小き事を論ひて廢せんとす其小き道は元自のとなふる小き道にならひて作れる故に小きことを知らず譬へば侏儒が侏儒を生て漫に其生る侏儒の侏儒なる事を誹るが如くいと可笑きことなり我が國の道の大いなる事は外國諸戎にとなふる處の儒佛諸子百家の枝葉の道々參來といへども餘すことなく少しも益有ことは朝廷にも用ひ賜ひて其體あたかも大海に衆川の流れて入るを餘さぬが如し（漢籍に大道不器と有るは此意なるべき歟）然るを其流入れる枝葉の道々をのみ學ぶ輩己が據る處の小川をしも大いなる事に云ひなしてかへさまに大海たる我が國の道を小さしと云ふは甚も甚

も漫りなりいかでか佛儒の二道を加へて鼎の三足に譬ふることとあらん彼二道は便利なることも有る故に枝葉に取り用ひられたるものにぞある純がともがら如何に口をしく思へるとも是はせん方なきことなり

凡天下國家は聖人の道を捨ては一日も治らず候天子より庶人まで是を離れては一日も立申さず候

皇國天地初發の時より儒佛の道渡り來ざりし前天の下のいと穩に治りしを儒佛參來てより漸くに外國に似たること共の發りしを純は知らざりしなり朴直順路なりし人の意も儒佛の道渡り來てより漸くに戎人意に移りしをも純は知らざりしなり然る故にかゝる狂言をも云へるなりけり

儒者の道は聖人の道にて候聖人の道は聖人の開きたまへる道にて候得共天地自然の道かくあらで叶はぬことを知しめしてかく定置たまひし故に是則天地の道にて聖人少も私意を加へたまふことは無く候道を開くといふは道なき野山に始て道を開く樣なる物にて候譬へば日本の名山に役小角が道を開きたりと云ふを今の人其道を履て云々

儒者の道は聖人の道なること誰しの人か知らざらん俗に我が家の佛尊しと云ふ譬の如く己が尊く思ふとて斯いかめしく聲高く呼はりたるこそをかしけれ聖人の道は聖人開きたれども天地自然の道とは如何にぞや天地自然に行るゝ道ならんには聖人開くべきよしなく果して聖人ひらきたらんには自然の道と云ふべきよしなしすべて聖人の道を天地自然といふは大概の人も然思ふことなれど甚しき僻言なり聖人の道は自然とは異にして天地の道を强ていとも小く細に修制り作したるものなり其故はまづ自然と云ふは何事も天地の成しのまに〳〵幾千萬の世を經ても變易ことなく自然に行るゝを云ふ號なるべし然れば天地をはじめ禽獸草木虫魚其外萬物各古へ生りし容を易ること無れば人も其如く自然の氣化にて生れたるまゝ貴賤上下の品をも別たず男女別ありなどもいはずして禽獸と同じさまにて（自然の氣化にてといへるより以下こはたゞ次の條に純がいへる趣に依てしばらくいへるのみなり皇國の古しへは正しき傳說有て是とは異なり思ひ混ふべからず）居たらんにこそ天然自然とは云ふべけれ（自然の字の義をも思ふべし）また可笑しきは君臣父子夫婦長幼の道みな天地に則

りて制りたると云ひながら君臣位を更る（受禪弑逆の類）こと有るは如何にぞや斯云ふを腐儒者のきかばをぼろげならぬ我が大道聖人の御所爲を凡の人のいかで知らんなど漫りに巧妙にのみ云ふらめど道理をば違ふことはなるまじきぞ（道理に違ひてはいかて自然の道といはん）古より天地位を更へ父子位をかへて父は子の子となり子は父の父となれる大變をば未きかず（大概儒者の道は一連り打開には理の極みときこゆれ其よく考へ見れば斯前後の合ぬ説のみ多し）兎ても角ても聖人の道を天地自然の道と云ふは當らぬことなり少しも私意を加へたることなしと云へれどみな聖人と云ふものゝ私意ぞかしすべて天地の生しのまゝの道より外に自然の道と云はなく外國の道々老儒佛諸子百家みな人爲に作れる道なり（或人問ふ然らば皇國の道は自然かと己云ふ皇國の道も自然にあらず然れどもまた人爲にもあらず前にもいへるごとく天地の神の制り賜へる道なり此道を委曲によく知らんとならばまづ神を知るべし其神をしらんことを思はゞ我翁の書どもを操返しよく味ひて見よかし）同姓を婚せぬ定などもこと〴〵しくほ

これども天地のまゝの道なりと云はゞ禽獸の如く人も初よりのまゝにて有るべき理にあらずや（此同姓婚のことは末に翁の説を引て委くいへり）禽獸と異ならんとて也と云へど姑く漢國の説を助て云はゞ人も禽獸も天地の腹中にわきたる虫にて天地の父母の心より見れば更に差別は有るまじきなり然れば人は萬物の靈など云ふも戎人の我譽に云へる言にて人は萬物の上と云ふ證據は更に無き事に非ずや（但し我が國の古傳説を信ずる人にしていへばこの説は當れる説なり）さて聖人道を開きたると云ふに付て役小角が名山靈地に道を創開きたりと云ふを譬に引ること實に譬に窮したりけん甚をかしきことなり是は理學者流の書に或人謂佛之理比二孔子一爲レ徑程子曰天下果有二徑理一則仲尼豈欲レ使下學者迂遠而難上レ至乎故外二仲尼之道一而求レ徑則是冒二險阻一犯二荊棘一而已耳と云へる説と同じ説なれど（純には口を極て叱られたる程子も黃泉に在て偶々純が說と同じきを悅ぶべし）是はみな例の拘泥るものなり聖人も一箇の人にて人の智慧は限り有りて甚小きものなれば聖人と云へども理の至極をば知り盡すこと能はず（中庸に

もかくいへりき）然るを腐儒など聖人の言聖人の所為とし云へば此上の理なしと漫りに信じ居るこそ愚なれ（今の俗に小さく志してもの學ぶ輩の聖人は更にも云はずまづ宋儒の學者にては二程子朱子などの說また漢學者の一流に古學と云ふが有り夫らはまた仁齋徂徠などが說とし云へば何を云へるもよしとして信じ普通の歌人等は古の名高き歌人の歌或は言說とし云へばすべての說のよさあしさをもいはずひた畏れに恐れひたすらに其上を行ことは及ばぬことよと思ひてたま〳〵人の言上を行んと學ぶなど云へばいたく驚きて胆を冷し居るも有り戎人すら舜も人なり吾も人なりなど云ひてはげみ學びたるものも有るをや是は彼の鴨の羽音に驚きて敗軍したる兵の類にてたゞ其音の大きく高きに畏れて也いと狼狽へたる痴人の所為にていとをかしきとならずや然るに此輩のなほもをかしきは音高き人をしか畏るゝに合せては普通の人を侮ることは小兒の如く普通の人の中にも己が才を覆して市人の股をくゞり居る者もまゝ有るものなり賤しむ金木で目をつくと云ふ俗の諺をも思ふべし漢國の兵書にも大敵をも畏れず小敵をも侮るべからずなど云へる言もありしなり俗には大かた大敵と見て逃げ小敵と侮りて手を負ふ學者のみ多きぞかし吾徒は吾翁の學問は始より志を大に高くして天地をもとびかけるばかりに心がくべしと云はれたる故に從て學ばんとぞすなるされど是は志の小さき人には倶に談を成しがたきことなれば然る人は是をば見すごし給へてよ）聖人の考へ洩せることいとも〳〵多きをやまた小角が名山靈地へ道をひらきたるを純は事ごとしく天性の靈智にてなどゝいへれども是は靈智なきとても誰か履分ざる者の有らんたゞ幾度となく其山に登り試て登るに安き道を定れる道とせんのみ然こゝろ見定て後に又他の人々も互に登り試みてのち終に夫と定めたるのみのことなり（是は人のひらきたる道なり自然の道ならんには小角が履開くことも得ずして自然に有るべき理也かし）この意を譬へば今人々の我毎にしく疊を或人一間に二枚しかんよりはたゞ一枚に制りてしかば便利好からんとて其如く拵へけるに思ひの外便利惡しくて元のままにて置けるといふこと何やらの書にてか見たりき（又或人語りけらく茶の湯をたしむ人の其席にての

すべての爲行を古の達人共の定め置る法を更てものするに何となく甚便利あしくて如何なる功者の入りたる人も元定め有る法を守るより外の事はなしと語りきこれも同じきこゝろばへなり）すべて其外何の道にもかゝる類のこと算ふるにたへずいかで靈智など云ひてこと〴〵しく呼はる計りのことならんやいかで然る小き自然の道有らんや一向に聖人の道を大きく尊きものに云はんとて返りて其道の小きを云ひ露すわざにあらずや天地萬物の理を知りてといへるも大なる空言なり然計り何の理をも知らるゝものと云はゞ易は無用の長物なりと吾が翁はいはれき常行不易の道を開きたまひてなどいへるもみな僞り言なり末にも人間の道かく有るべきすぢを聖人見付玉ひて開きたまへるにて候と云へれども果して聖人其すぢを見付てひらきたるとならば其眼力違はずて譬へば金を掘る者の金の脈を見付て掘あつる如く其道更に變易あるまじき理なるにたゞ書のみは古に書傳へしまゝにて傳はれども其道の全體の世々に變易有りて行はれざるは如何にぞやされば天地自然の道常行不易の道大中至正の道など云へるみな空響の妄言にて名山靈地の道の易ふべからず其外の業にも爲來れる法を易がたきことゝある夫にさへ劣れることなり聖人の道は急迫に人の成るべき中間を過ぎて人の小智の限に甚狹く作り定めたる道なり縣居翁のいはれましたには春は漸にして長閑き春と成り夏も漸にして暑き夏と成るが如く天地の行は凡て漸にして至るものぢや然るを唐人の云ふかことくならば春が立ば則（即字當乎いかゞ）暖に夏が立ば急に暑かるべしよつて人の打開には才覺有を開安くことわり安けれども然うは行はれざるものぢや天地のなす春夏秋冬の漸なるに背ける故ぢやといはれまた吾が翁のいはれますにも漢國聖人のしわざは君を弑し其國を奪へる大罪を覆ひ隱して世の人に信ぜられん爲に己が身の行ひをいたく飾り作りたる強事にて人のなるべき限りを過たるしわざぢやさて其敎も己が子孫の人に國を奪はれん事を恐れ又人のこれを奪はんことを恐るゝ故人のあるべき限を過ぎて甚しく設けたる強事ぢや然るを天下後世の人其智術をえさとらずして皆これにあざむかれ居るといふは誠に愚なることぢ

や漢國にても聖人の敎のまゝによく行ひたる人はいまだ聞えずそのよく行ふところはみな人々おのづから備へて生れついたるものなることをば知らずして敎の功ちやと思ふは甚愚なることぢや譬へば一丈の溝を飛越ろとて飛やうを敎るは聖人の道なり然れ共千萬人の中に一人もをしへの如く飛ことあたはずみなわづかに三四尺の溝をよく飛越るこの三四尺は敎を受ずとも元より誰もよく飛ところぢやさて此敎を學ぶ者の中に其德によりて五六尺ぐらゐは飛ものも有もせうがそれも終にかの一丈はとぶことあたはず又その五六尺を飛といふ者もいと〳〵まれなる事にてその餘は中々に飛損じて溝中に落入りあるひは脚腰を傷ひてもとの三四尺をさへもえとばぬやうになる者もおほく有るごとく聖人の道をしらうとて學問をする者おほくは邪智のみまさりて身のおこなひは返りて無學の輩に劣るもののみ世には多いといはれました此二翁の說を熟く考へ通して聖人の道は自然の道と云ふに足らぬことを曉るがよいてござる人々の年長け行まゝに智深くなり行くは春秋の漸に暖に漸に冷に成り行が如く常の行の有る限りは三四尺の溝を飛越る如くなるをこそ天地の道とも云ふべき事ぢや管の中より天を見て天を論じ井に住む蛙の海を知らぬ譬の如く狹く小き聖人の道を自然の道などゝ心得て夫を記したる書どもを仰くいひもてはやし居る人を見れば彼の世俗に云ふ火箱の中にて結飯を燒うとするが如く甚をかしい事てござる

惣じて天地開闢の始に人の生ずる處は久しき池に魚の生じ腐たる物に虫の生ずるが如く自然の氣化にて生じたるものにて候さる故に其時の人は貴賤上下の品も分れず皆同輩にて候是を平民と申候形は人にて候得共心は禽獸に異ならず男女一所にこぞり居て日を送り候

爰に西戎國開闢の初に人の生れることを云ひて自然の氣化にて生じたるものにて候と云へるは決定したる語にて彼の靈智ありとか云ふ聖人も未云はざることを目のあたり見たるが如く云へるは實に古人未發の論と云ふべし純は天地に先立て生れたりし人の心地して甚めづらし然れども是等はみな漢籍（淮南子三五歷記のたぐひ）の臆度の妄說のみ見なれたる癖よりして云へる妄說なり實は其時に生合し人にあら

ざれば知るべき由なくたゞ古への傳を守るよりほかなきなり皇國の大古は正しき傳説有りて明に知らることなるを戎國には早く其傳説をうしなひたまたま少しは正しき傳への有るをば今の事理に遠きをもて妄説なりと云ひけして取上げざればいかで其詳なることを知るよしのあらんや彼の聖人と云へ其其知らざる處に於ては闕如すとか云ひて西戎國上古の事をいへるも聖人の説にしては伏羲より以前を云へることを聞かず然るを純が斯計り委曲に云へるは自聖人にもまさりたると思ひてならめど實に説を作れるものなり孔子も述而不レ作と云へれば其據る所の聖人の意にも違ひたる強説にあらずや天地の初のことはいかで人の小きさとりもて量り知ることを得べき久しき池に魚生じ腐たる物に虫の生ずるをもて譬へたるは一通り打きくには實に然もこそと思はるゝ計りなれど然ることならんには今の世にも久しき池に魚生じ腐たる物に虫の生ずれば希々には自然に生る人も有るべきに然ること有りしを未きかずすべて漢學問計りする人は天地の間にあらゆることの理はみな知り貌に云ふことなれども皆大なる空言にていとをこがましくいと淺ましき事のみぞ多かる然れども純は漢籍に博覽なりと讃る人もまゝあれば暫く其に發して己口強には云ふまじ夫は後の世までも彼國の猥りがはしきを思へば實に斯有りしことも計り難ければなり依て次々の條はみな純が説のまに／＼論ふべきなりさて上下の分もなく形は人にて心は禽獸に異ならざりしとは實にも（もろこしの王どもはぼうふり虫のわくやうにたんとわいた人の中のにらであつたと太宰が云つたがこゝらを見ればそうかもしれんと思はるゝこれは畜生島にことならずといふ所でいふべし）西土は始よりして惡しき國俗なりしなり斯いはゞこは萬國同じ理なりといふ人有らめど皇國の古は正しき傳説有て更にかゝる類のことにあらざれば是は決て西戎國のみのことなりさて男女一所にこぞり居たりともなでふことか有らんかゝることまでも云ふは男女別ありと云ふ後世の定を天地自然の道と思ひせまれるが故なり

其内に衣食の求め無くて叶はざる故に誰教るともなく人々天性の智慧にて飢を助け寒さを禦く計略をなし候然るに人の性さま／＼にて賢き者あり愚

なる者あり強き者あり弱き者あり賢き者は能く飢寒を免れ愚なる者は飢寒を免るゝことあたはず強き者は弱き者の衣食を奪ひ弱き者は強き者に衣食を奪はる是より平民の中に爭鬪と云こと出來候

漢國の上古の人は形は人にて心は禽獸にことならずといへれば如何にも斯こそ有りつらめ其亂りがはしき有樣目のあたり見る心地ぞする皇國の大古より正しかりしことを西土人にきかせたきわざになん

此時幾億萬人の中に聰明叡智とて神妙なる智惠の人生れ出て彼愚なる者に衣食の道を敎へ爭鬪する者をばそれ〳〵に敎訓して暴虐をなさゞらしむ是より其邊の人漸々に歸服して何にても分別にあたはぬ事をば持往て尋問ひ爭鬪する者は其事を告訴て裁斷を乞求む其の體今の世に鄕里の子弟たる者其所の父兄長老に從ふが如しかやうに近邊の人歸服すれば其化漸々に遠きに及て遠方の人も歸服する故にいつとなく諸人こぞりて君長と仰き奉る上古の盤古燧人など云ふは是にて候

其後伏羲神農黄帝と云ふも亦皆聰明叡智仁德の至れる人にて天下の君となりたまふ自己より高ふりて民の君長となり給へるにては無く候此聰明叡智仁德の至れる人を聖人と申候此聖人上に立て天下の人に仰がれたまふを天子と稱し大君と申候へば天下の人はみな臣にて候是君臣の始にて候上に大君あれば下にも亦それ〳〵に君長を立て其下を治しむ皆君臣の道にて候

爰に伏羲神農といふ二人の王ども西土の酋長となれるも自己より高ぶりてなれるにはあらずと云へる然もあらんか然れども此中に黄帝とあるは心得ずこの王が名を軒轅と云ひて西土にて主を弑して國を奪ふことの始を闢きたる賊王なり（盤古より下神農氏の興るまでは弑して奪ひやしけん禪りやしけんこは傳へ無ければ知られず故に是を弑逆のはじめとす）漢籍史記に軒轅之時神農氏世衰云々軒轅乃修レ德振レ兵云々以與二炎帝一戰二於阪泉之野一三戰然後得二其志（注に謂二黄帝一克二炎帝之後一）と見えて此炎帝と云ふは西戎國にて農業醫藥のことを始たる神農と云へる王が子孫にして（漢國の上古の人は王と云へども其實名の傳れるは少く此炎帝なども先祖は農業のことを敎へたる故に神農と云ひ火德を以て王たりとか云

ひて炎帝と云へり是も實名とはきこえず斯して生の子の次々の王も炎帝とも神農氏とも云ひて實の名の正しき書に見えたるはなく數代同じ號にていとまぎらはしく天子とか云ふものにしてはいと亂りなる事になんある）軒轅が爲には混れなき主なり主不德にして衰へたるを輔佐て世を保たしめんとはせず奸佞にして民をなつけ此ことの始て軍器をさへ制り兵を振ふて君を滅し自立して王と成れるものを自己より高ふりて君長と成れるにあらずとは純が愚昧の者を欺かんとての强言なるべし但しは生而神靈弱而能言幼而徇齊長而敦敏成而聰明（主系問には登天すと有）など有るをもて實に善人と思ひて爰に斯ほめて書るか然もあらばいと愚昧なり假令書籍には如何ほど讃てありとも夫は戎人の己が古への名たがき玉ども故しか文りて書るにていはゆる虛叙と云ふものなり其飾の文辭を實事として信じ用ふべきものかは西戎國人すら以レ言擧レ人若ニ以レ毛相レ馬と云へる者もありき何事も其行の跡につきて其人の好惡は定め文辭の言よさに惑ふべきにあらず純等がほむる人にはかゝる類のこと有て諾ひがたき人のみぞ多かるさて純も爰に聰明叡智仁德の至れる人を聖人と申候と云ひ西土の字書の聖の字の注にも稱レ善賦レ簡曰レ聖敬レ賓厚レ禮曰レ聖など見えたれば聖人と云ふは漢土にて善人を云ふ號と聞えたり然れば盤古燧人神農などは民を敎へたる功あれば是は當れるを黃帝湯武などをしも聖人と云へるは如何にぞや（たゞし此聖人字も寡の字をおほきことにもすくなきことにも用ひ亂の字ををさむることにもみだるゝことにも用ひたるなどと同じ格にて善人にも惡人にも用ふ文字にや甚まぎらはし然れども字書にあしき人をも云ふよしは見えねば是は極て善人にのみ云ふ稱と見えたり然も有らば黃帝湯武がごとき逆賊に云ふべき稱にはあらじかし）强て是れ等をしも聖人なりと云はゞ秦の始皇漢の臣王莽魏の曹操晉の司馬懿父子宋の劉裕陳の武帝が輩其次々の王其聖人ならざるは無き也又種々の事を爲始めたる故に云ふといはゞ今爰に擧たる者どもも何くれと爲始めたる事あり殊に始皇などの始たる事は皇帝と云ふ號をはじめ其外の制度をも今に至るまで大概は用ひたり（西土の世々の制度始皇がはじめたることを大略は用ひながら聖人の道をのみ用ゆ

る臭にて始皇をば人の如くも云はでいと穢汚きものに識るもをかしきことならずや是は彼の穴に埋殘されたる儒者どもの迯吠に訕り初めたるを一犬ほゆれば萬犬其聲に從ふと云ふ譬への如くうかと叱り來るにこそあらめ）是等も聖人にや然は云ふまじ漢土にて黃帝湯武が類を聖人と云へるは此賊王ども子孫迄暫し天下をも有ちたれば其子孫の王共臣下共より尊みて然云はんもうべなるを皇國の人にして渠等に何の辱きこと有て諂らふことのあらんや戎人の僭稱を曉らず實に善き人と思ひて譽稱るは豈人の涎に辟たる狂言にあらずや故に吾が徒は何事も戎人腐儒の狂言に慣はず其行の跡に付て漢國人の善惡は定めんとす漢説に迷へる人ゆめ耳をな驚かしそ

人に父母なき者は無く候禽獸は乳哺の養を受る時父母を慕ふのみにて少し長じて離別すれば親は子を忘れ子は親を忘れて後には親となと食を爭ひ候人も本は禽獸の如くなりしを聖人是に親愛の情を示し孝敬の道を敎玉ひてより父子の道始り候

西土の人は本は禽獸の如くにして親と子との親みをも知らず親と子と食をあらそひなどしけるを聖人是に親愛の情を示し孝敬の道を敎へてより始て父子の道たてるとか然もあるべし更に無りし好き情を聖人に示されたるものなれば西戎國の人にしては聖人は上もなく尊きものになんある皇國の大古より父子の道正しく親しかりしことを彼の國人に聞しめ度わざになん

禽獸には雌雄牝牡の情のみ有て夫婦配偶の道なき故に父子同產交合して子を生み候人も本は禽獸の如くなりしを聖人婚姻の禮を制し男女の別を立て淫亂を禁し玉ひてより夫婦の道始り候

西土の人は本禽獸の如く夫婦配偶の道もなく父子交合して子を生みけるを聖人是に婚姻の禮を敎へて始て夫婦の道立しとか然も有るべし周公旦が此定をいみしく固くせしもかくみだりにて有し故ならん皇國の大古より夫婦の道の正しかりしことを彼國人にきかせ度わざになん

禽獸には同產の子數多あれども兄弟と云ふことなし人も元は禽獸の如く同產なるのみにて兄を敬ひ弟を愛することなく爭闘して相殺すことありしに聖人これを憂て長幼の節を制し兄弟の道を立玉ひ

ひ候
西土の人は元禽獸のごとく兄弟敬愛のこともなく爭鬪して相殺すこと有りしを聖人是に兄弟の道を敎へたるとか然も有るべし西戎國の人にしては聖人は尊きものなり敬ふもうべなり皇國の大古より兄弟敬愛の道正しかりしことを彼國人にきかせ度わざぞかし禽獸には朋友と云ふことなし人も本は禽獸の如く信もなく義もなく相奪ひ相爭ひ相殺し相害するのみなりしを聖人是に信義を敎へて朋友の道を立たまひ候
西土の人は本は禽獸のごとく朋友の信義もなく相奪ひ相殺しけるを聖人是に信義を敎へて始て朋友の道を立てたるとか然も有るべし皇國の大古より朋友の信義あつかりしことを彼國人に聞かせ度わざになん
君臣父子夫婦兄弟朋友この五つは人倫の要道なる故に是を五倫とも五典とも申候人間に此五つの道一つも闕ては天下治らず候
如何にも爰に云へる名目ども一事も闕ては人の人たる道をうしなへるにて天の下治ることとなし尊き哉皇國は格別のよし有るが故に大古より第一に君臣の道

正しく外國にても羨み稱し奉ることにて（皇國の僧侶然と云ふ者西土宋の大宗と云るが代に彼の國へ渡りて其王に逢て皇朝の無窮に傳はらせ賜ひて臣等までも官を世々にして仕奉ることを談りきかせけるに大宗がいみじくうらやみ奉りて其臣下に云ひけらくは世祚遐久其臣繼襲不レ絕此蓋古之道也と云ひて己が國をも子孫に永く傳へん事を願ひしこと彼の代の史に見えたり君臣定りなき國俗なればしかうらやみ奉れるも實にやんごとなきことぞかし）父子夫婦兄弟朋友の道も甚正しかりし故五倫五典などゝ言痛く名目を立てをしふるまでもなく人々行て常なりしに西土などは純が說の如く開闢より道の大本たる君臣の道さへ（禮記の禮器に爾時爲レ大と有りて此時と云ふは堯舜が受禪湯武が征伐の事にて君臣の義父子の道などは是に次よし見えたりこれらを諾ひ居る人は君臣の道を道の大本と云ふなとをばあやしむべし）輕忽なりし故かく名目を作りてをしへたれ其末の世に至りてもなほ正しからず大古よりの風俗の末末までも直らぬものなり其本亂れて末治ることとなしとはかゝる事よりぞ云へるならん

又人に欲なき者は無く候云々仁を本として禮義を行ふより外に道と云ふ物は無く候（二十二丁裏より三十五丁裏まで）

此間西土の上古の人仁義禮讓となく廉恥と云ふこともなくて禽獸の行ひのみせしを三皇五帝など云ふ聖人交る〲出て敎へたるによりて始て人と禽獸との別を知ること〻なり夫より堯舜など出て萬の制度をも定め其後夏殷周三代の王どものまた〲道を修飾せることなどいと〲委く論ひたり西土は斯有りけんてと論ひなし

禮記の樂記の中に致レ樂以治レ心と云ふ文見え候より外に治心の文字を見す候云々心は活物にて暫時もた〻居られぬ物なる故に何にても善き玩物をもてあそばしめされば必放逸してとゞめがたく候玩物いろ〲有る中に樂にしくものは無く候

是如何なることぞや前にも人の心は小兒の如くなる物にて候小兒に玩物をもたする如く人の心も內に何にても玩弄把持することなければ妄念妄想やまずは（聖學問答にもかくいへりき）など云り是れ宋儒の心を治むることを說るを强く剝せんとての强說なれども更に當らぬことなり如何ほど閑暇にて樂もせず玩物もなく居たればとて實に善き人のいかで放逸の心起らんやまた惡き人は朝暮に如何程樂を弄びたりとも其惡念の止こと有らんやは樂を爲つ〻も心の中には每時も惡事をば思ふべし純は人にも斯す〻むれば自は嘸かし樂も爲つらんを其心の無賴なるをもても知るべし是は純が心は閑暇無事なりし時はなほ色々無賴なる心も發りてたゞは居られざりし故に世の人もしか有らんと思ひてならめど彼のいはゆる杓子定規にて己が心のほどを云ひ露はすわざにあらずやすべて人の意も自に其言にあらはれ知らる〻事にて甚はづかしきことぞかし聖學問答に君と生る時は畏ろしけれ其死すれば畏ろしからぬは逆鱗に嬰る慮の無き故なりと云ひ外の女を迎へて妻とせんよりは內に有合せたる女にても妹にても有るにまかせて妻とするは便利なりなど云ひ又五常の意も廉恥の意も人には元來なきものにて聖人始て敎へて其情を人々備へたるが如く云ひまた獨語と云ふ册子を著したるが夫にいへるは和歌を學び上手に成りたりとも公家の人々を越ることはなるまじければ詩を作ることを習

ひて公家を弟子にすべしと思惟せしなど〻云へる類みな其眞心を呈露せるものにて其著書に算ふるにいとまなきほど見えたり是等の説をいとたけき事に信じ居る人ま〻あれど心ある人は誰も笑ふことぞかしこの條(二十五表より三十一裏まで) 片手に宋儒の學を廢し片手に釋氏の道を廢せんとしていへること共にて皇國のことを云へるにあらざれども是は見捨がたくてものしつるなり

凡堯舜の道の外に奇異なる道を立るは皆左道にて候禮記の王制に執二左道一以亂レ政殺と有之候左道の徒は先王の世には死刑に行る〻故に其説を口外に出すこともならず候と有ますが

是は堯舜が道より外なる道をば皆左道と云ふ甚固陋なる事なり抑々外國の道々は堯舜が道も老莊其外諸子百家の道も倶に戎人の私に制修たるものじやから實は何れ大道何れ左道と云ふ差別なく黄老の道より云へば黄老の道か大道で其外はみな左道じや佛者より云へば佛道は大道で外はみな左道じや(彼の徒の己が道をはた〻に道と稱へ儒其外の道をば邪道と號るを以てもしらる〻ことじや) すべて外國の道々は大道といふ左道といふもみな其道々の上に取ての私の説にて然云ふべき證據は更に無きことじや(然れは其世々々に用ひらる〻と廢らる〻とにて其世にての大道と左道との差別も無きに非ず譬へは黄老の道の行る〻時には其世は取りては黄老の道が大道にて堯舜が道をはじめ諸子百家みな左道とも云ふべきが如きもので外の道々も是に准ひて知るべき事で畢竟其世にての大道左道の別は用ひらる〻と廢らる〻との上にて定ることなり) 然るを漢國にて儒者なんど推張て堯舜が道を大道と云ひ諸子百家の道をば左道と申すは彼の國にては世々堯舜が道を用ゆる顔をして居るゆゑの事じや王制の文を引出して論ずるなども彼國で有るならば先相應なることなれ共皇國にいたしては更に當らぬとこじや(但西土の制度と云へども此方にて御用ひなさる〻ことは今云ふ限りではないでござる) 譬へば天竺の制度をもつて漢土にいつて漢人を制しても誰か其罪に服するで有ろ孔子も吾學二殷禮一有二宋存一焉吾學二周禮一今用レ之吾從レ周といふを以ても知るべきものじや異國の制度をもて掟やうとするは甚漫りじや更に禮記の文になづむべき

ことてない皇國の道より見ればから國のをしへをはじめ諸子百家みな左道なること論ひなし然るを腐儒者の狹き見識より何事にも堯舜の道周の代の定とか云ひて其外なるをば異端邪說と號て合せて皇國の道をさへに左道ぢやと云ひ一向に廢してしまはうとするは返す〳〵も固陋な事じや（是は漢籍共に必則二古昔一稱二先王一などある類を思ひての事で有うが此是漢國の事也皇國の人にしては皇國の正しき古を稱へてこそ道には叶ふべき事じや）抑々道の體とする處はただ君は君として下を惠み臣は臣として君に忠を盡し親は子を慈しみ子は親に孝行をいたし夫婦兄弟長幼朋友夫々にさう有るべき事の正しき所を差して道とは云ふべきもので是は人々みなかうなくては叶はぬ事まで產靈神の御靈に依り生れながらにして誰もよく辨へ居ることでも然れ共其眞の道の正しいといふは獨皇國のみの事で諸蕃國はさうでない別て漢土などは元來酷惡の國風なる故に湯武など云ふもの共が出てまづ其大本たる君臣の道をさへ破りて君を殺して君を奪ひなほまた弑虐の罪を遁れう爲に天命など云ふことを取込み亦々其道を飾修して君臣の道などはなほも嚴重に作り添て種々の道のことを書籍に記しきびしく制度をたてゝ有る但し夫は君を弑し國をうばう程の奸智ある者どもの立たる制度なる故其文面はよく立派に行屆いて居る（或漢籍に歷觀二自レ古巨盜姦臣强叛猾逆一率多高才博學之士也と申たは漢人の語にしては聞きところあることじや）扨一旦己れが奪ひ取てはまた人には奪はるまじきやうにとて智慧の限りをふるつて作りたる道である事故に殘る所もなきが如く至て尤もらしく書籍には記し有れども其書は無用に世に傳はるのみで守るものなく是は其立たる制度を自破りたる輩の云置たる事故に用ひぬのでござる今の世の人にても自は放蕩惰弱にして人の不身持を直さうとかまへ尤らしく意見を云たればとて誰か其云言を用ひませうぞ（孔子も其身不レ正雖レ令不レ從とは此意で有ませう又不レ能レ正二其身一如二正レ人何一とも申したぞ）聖人の書も是に等しいでござる（或人異國の書にして取るべきは唯醫藥と筮の書のみと云るものも有りし）上に用ひ給ふ處は其便利なる處を摘取ていさゝか用ひ給ふのみの事じや（是は彼の人をもて言を廢ずとか云ふたぐひて

有う）然るを儒にのみ拘泥たる輩僻心得をいたして其儒道をば皆がら皇國に用ひやうと思ふは何事じや撫レ我則后虐レ我則讎など云ふ類の穢らはしき言は皇國にては聞さへいま〳〵しき言じや書たからざまのことをもいさゝかは御用ひなさるゝを見て堯舜の道でなくては治らぬなど云ふは甚以て稚い事じや皇國に御用ひなさるゝ處は聖人のさだめの百分が一にも足ぬ事じやもし悉く御用ひなさるゝ事ならば然う云はゝ云はうか（是も西戎人て有るならば然も有るべきことなれども皇國の人にしては漢國のことゟ御用ひなさるゝなどは餘りにいかゞしき事でござる）又一筋に聖人の道を行はうと思ふ人は行ふても見るがよい（禮記の內則なども見れば彼の一丈の溝を飛越る事を教る類にて實に生きたる心地もすまいと思はるゝ程のことと然るをもしも彼のをしへのごとく行ふものは世々に一人と有ることなし）すべての行ひ一筋に堯舜の道にならはうとする人は其は混れなき左道の人じや彼の敎のまゝに行はうとしては差支る事か有て兎ても出來ぬ事でござる（或人傍に在て云ふには然云ふは女が我意を立うとての固陋て有う堯舜の道を行ふとて何としてその所爲をみな行はんとのことで有うたゞ五常を守り五倫を正しくせうとのみのことじやと云ふ拙者の云ふには前にも云如く其名目のことこそはなかつたなれとも實物は有て是則堯舜が道のわたり來るいなより固有の道で今人の行ふ所は更に堯舜が道の功てない其目名の事共を置ては禮樂容飾或は君臣位を更るなどの類堯舜が道を强て行うと云へば是等じや此等の事を行うとする者は左道の惡者にして實は顚狂なる事論なしでござる）扨堯舜が道を一筋に取立て大道じやと云ひ皇國に今行はるゝ所を堯舜の道に違う故に左道だと云ふ是を譬へて云はゞ人の家に寄食してゐる居候が折節は主人に代りて家事をも取賄ひなどするか（堯舜の道を皇國に用ひ玉ふは此意なり）後には己が寄食人なる事を忘れはてゝ主人を差して寄食人なりと詈る（堯舜が道を大道と云ひ皇國固有の道を左道といふ意）が如く甚をかしき事でござる然に儒者らが云所を道理と思ひ信ずる人が同じく皇國の道を左道だなどゝ云は彼の寄食人が本の居候を忘れ吾こそは主人と云を聞て實に主人だと思居るが如くをかしいでござる吾が徒より見れば主人と寄食人との差はいとよく分りて誰も誤る

事は無き事されば皇國の道より見れば堯舜の道をはじめ諸子百家みな左道なること論ひなし所を執二左道一以亂レ政殺と禮記に見えて然る徒は死刑に行はるるかと穴可畏穴かしこ純なにとて今少し委しく王制を引ざりしぞ其を引出ては自の勝手に惡しき故で有うが己今具に引出て其好む處の王制に據て云ふでござる扨其王制の文に云はく　折レ言（古をそしる）破レ律（中華といふ）亂レ名（京を勝國と信陽）改レ作（から風にせんとする）執二左道一以亂レ政殺と有りてこれ等の罪を犯すものは不二以聽一と見え（家語に孔子もかく申た）また同く王制に行レ僞而堅言レ僞而辨學レ非而博順レ非而澤以疑レ衆殺と有るをも純みな安んじて犯して居る其れはまづ折言と云ふは古をそしるたぐひ破律と云ふは漢國をは蕃國と云ふべき御定なるを中華と云ふなど亂名と云ふは京を洛陽（勝國）と云ひ信濃を信陽と云ふたぐひまた改作とは何事をも漢風にせんとすることなどを云ふ左道を執りて政を亂ると云は風俗を變じ國家を危くせうと謀るもので皇國の御制度にては此の罪名を謀反と謂ふ例て賊盜律に謀反及ひ大逆者皆斬と見えてゐる純も心は漢國の人で有うとも體は皇國の人に混れ無れば皇國の律令に違背は成るまい然れば皇國の御制にても禮記の制にても其罪をのがれやうとするに陳ずべきよしなく幸にして罪を免れたりと云ふべきものだ抑儒者と有るものゝか程迄にも我が國の事に疎いと云は實に奇怪と申すべきものでござる世の人の罪を正さうとして引出したる王制を以て却て己が罪を己と正したるは彼の所謂吾が室に入て吾が矛を執り吾を刺すとか云ふ類とも云ふべき事彼らか謂ゆる天命の然らしむ所でがな有う

今の人聖人と云ふ名をだにしらず云々聖人の德は日月の如くなる物にて候云々聖人の道も其如く云云是則聖人の德の廣大無邊なる驗にて候

此條に聖人と云ふものゝ德に日月をもて譬へたるは彼の國の書にも元より云へることなれど實に勿體なきことなり然れども純も日月の御德の廣大にして尊きことを少は知りけるなり然るに其尊き月日の生れませる然かも正しき傳說有る御國に生れて其故よしをも知らずてすごせしはいと憐れむべきことと也西土などは純が云へる如く禽獸のごとくなる國俗にて有りしことなれば聖人始て出て敎し時は實にも尊く思

ひつらめまた一人つゝ賦りなへさる故に其世の人も恩を受るが常に成りて是君の悪みぞと云ふ事を知らず候と云へれど純などは一人賦りなへられたる人なり其故は元來心に仁義禮孝悌も無りしかど聖人の敎によつて人らしく成れるやうに見えはた自もしか云へればなり世に聖人と云ふ人は如何なる人とも其道は如何なる道とも尋る人さへなき中に純か斯ばかり難有きものに云へるも聖人の道を聞て始て人らしく成れる故になんある我が國にもかゝる癡人もまれまれには有りける然る故に己が尊き心より人にも強んとするものかされど夫までにはあらずたゞ人寄の假本尊にこそあらめ

秦漢以後歷代の天下諸子百家の道にて治めたるは無く候是を物に譬れば聖人の道は五穀にて候諸子百家は醫藥にて候五穀は人の性命を養ふ物にて天下の人上より下まで一日も是を絕してはならず候然れども五穀を多食して腹中に滯り或はそこねたる物をくひて脾胃を傷れば病となりて人を脳し候其時は醫藥にて治せされば五穀も人の命を取候云先王の道は大中至正にして天下萬世に通行する道にて候へども末の世になりて悪き人出て悪く用ふれば弊出來て禍亂の端となり候は人の咎にて道の罪にはあらず候譬へばにへざる粥を啜り餧たる飯を食て脾胃を傷り病を得て死する者あるは食する人の咎にて米の罪にあらざるが如くにて候云云諸子百家はみな左道なれども國家を治る道にて候云々

此條聖人の道をば五穀にたとへて外の道は皆左道として醫藥にたとへ云へること是は漢國にも或王が臣下に儒と釋と道と何れをか貴しとすると問ひけるに其臣下答へけらく釋は黃金のごとく道は白璧のごとく儒は五穀の如しと云ひければ其王が然も有らば儒は賤しきかと云ひければ其臣下また答へけらく黃金白璧なくともなでふことか有らん五穀なくては豈一日も有らんやはと云ひければ其王いみじく喜びたると云ふこと見えたり是と似たる譬也然れども此戎人も純も倶に己がよる所の儒道に拘泥せる例のいみじき僻言なりまづ純が爰に譬へばにへざる粥を啜り餧たる飯を食て云々など云へるは彼の國も世々聖人の道にては治れることなきを心中にはづかしく思へるか

らの遁辭なり大中至正とも云ふべき眞の道は自然の如く行はれて更に純が說のごとく用ふる人の善惡によりて治りもし亂れもするが如き定りなきものにてはなく其全體は譬へば美麗なる玉の如く玉はもてる人の善きあしきによりて美麗の質を變る事なきと同じ意なりたゞ道は人々日々に行て廢べからざる處は五穀に譬へるも然る事なれど道の全體を五穀に譬へるは當らぬことなり（五穀を多食して腹をそんじ或は人の命を取り或は餒或はにへざる粥のことに道の全體にては大道と云ふにたらず）さて是は眞の道の上のことなり聖人の道はこれと表裏にて純が其全體を五穀に譬へたるは自然の過りなれども多食して腹中に滯り餒もしにえざる處もあるがごときはよく似たり（但し五穀のしばらくも放るべからさることに譬たる意は更にあたらず）この趣は彼國世々の史に見えて論ひなし然る道を大中至正の道とは如何にぞやしばらくもはなるべからざる處をもて云はゞ我が國の道こそ五穀にて則飯の如く他しの道々をも用るは譬へば飯にそへたる飣のごときものなり其飣にはうまき口當りの物も有なれども飯に易く常に是を喰ふときは大に腹を損ふことなり別て漢土聖人の道などをのみ甘んじ喰ふ時は純がごとく自が生れし國の大君をしも憚かりもなく罵り奉り或は上を畏れぬ心よりして終には軒轅湯武馬子明智が如き所爲をも成すべし全體は美玉の如き我が國の眞の道を飯として外國の道々の飣をも用の足るほどは學び度わざになん小兒の甘き物を好むが如く聖人の道をのみ好む輩には折節狂風は有るぞかしまた諸子百家は醫藥にて候或は國家を治る道にて候など云へるは陰に聖人の道は旣に病るを治めずして未病ざるを治むとか云ふ言をふくみたるものなるべし謂に聖人の道は未病ざる人を病しめて其をまた愈さんとする道にて譬へば自の手して火をはなち自また其火を救はんとするか如し大中至正の道など云ふは更に／＼當らぬことなりかし

純また申たには偏屈なる儒者は諸子百家を異端邪說と名づけて其書を讀ざる故に其道を知らず一概に取るべき處なき樣に存候云々畢竟諸子百家も佛道も神道も堯舜の道を載されば世に立こと能はず候と申た

偏屈なる儒者のみならずその偏屈ならぬとほこれる純も堯舜が道の外なるをばみな左道なりと云へるにあらずや是名こそ異れ同く異端邪說と名づけたるものなり其書を讀ざる故に其道を知らずなど云へれども其見たりとほこる人も見ぬものと同く斯偏屈なることをのみ云ふは返りて見ぬ人こそましならめ總ての道を堯舜が道を戴されば世に立こと能はずなど云たは實に大笑に堪たることだ（然れども此書に斯云ふかと思へばまたほかの著書には凡禮義には定れる體なしとも其世に居ては其世の禮義をかたく守るを君子とするとも云へりしは更に見識定らず醉人の心地すされど今は姑く此書によりて云ふ）先に浮屠氏のことを云た所に彼の輩が奴僕を使ふは君臣の道弟子を養ふは父子の道また法兄法弟あるは兄弟の道衆僧を和會して學問するは朋友の道また佛事に某々の儀式あるは禮梵唄聲明は歌鐘磬喋鼓を鳴すは樂にて釋氏も禮樂を捨ては其道行はれず儒者より見れば今の僧侶は皆先王の道を受るにて候などゝ申た此固陋又云へきやうなしてござる是らは皆聖人の道を借ざる他の國々にも某々に道は有ると云ふ事の證據には當れとも何として純が云ふごときことにあたらうぞ是は人々常の行ひ己が尊ふ聖人の書に記し有る事共と似たることのあるを見て斯く思つたもので此胸中の狹きことを思ひ計るべしてござる少しく似たる處あるをもて斯く云うならは佛者よりも（揚墨が道よりも）諸子百家何れの道々よりも其外の道々を差してさう云ふべき物ぞ其故は諸子百家の道何れも五常を廢て君父を弑し盜賊をせよとをしへたる道はなき事故何處も同じ筈のことでもなほその道々の書を見て知るがよい其內擬石王人の敎のみはうはべこそ立派にたててあるけれ其其行ひの跡に就て道を見れば右に段々申す通りのわけじやに依つてこれこそ人に君をころし國をぬすむことをゝしふるの道と云ものでかやうのことをもわきまへんで諸道何れならす石王人の道をいたゞかされば世に立事あたはずなどやうの强事を云ふは譬へば小兒の我が家の上に照る月を見て是は我かいへの月と云ふが如くの甚稚き事でこざる月は至らぬ隈なく萬國を御照しなさるゝ者をどうして我家ばかりの事だと云ませう純が說は此通りでござる天地の間の萬國漢土に言通せざる國如何

ほども有ませう聖人の化流沙の西に至らずと云ふ言もある萬國上古よりの人も活物で自然にすべてのことを知つて成し來たるものた然るを純か云ふごとくならば聖人道を作らぬ以前は萬國の人生れたるまゝにて木偶土遲人の如く動きさへせずに居たるものと思つた樣子だなんと愚昧ては有りませんが禮なども天竺にては貴人には右の肩をあらはし掌を合せて對ふを禮とし又舊年阿魯亞の國に漂流しける人の談を聞けば彼の國にて王と有る者に見えての禮は兩足を揃て王の前に出し兩手を重ね臂を張て居るに王起て其重ねたる掌の上へ自の指をあつるを戴て背るが彼の國の禮なりと云へり漢國にては起て禮し我が古への禮には四拜八拜など云ふこと有つてみな座して手を拍つことを敬と爲たりし（周禮註疏春官に大祝云云四曰振動云々註に鄭大夫之動讀爲董云々振董以兩手擊也釋文に云々今倭人拜以兩手相擊如鄭大夫之說蓋古之遺灋と見えたる是なり 松下見林の倭當作倭と云へるが如し字書を案るに灋は法に同し是らよりして思ふに漢國にても古は手を拍つ事有りしなり）すべて是に准へて知るべし國々の禮各異なり然れども其敬の心をあらはすは同じことなり必しも堯舜が敎の如ならされば道にかなはぬなど思ふは更に云ふにも足らぬ狹見なり世に漢學に迷へる者どもが彼の國の書どもに中華は萬國の師なりなどゝ戎人の狹き心より云出た漫言を聞て如何にも然ることと心得漢國の敎に有らざれば諸事を爲し得ぬことく一向に思ふ樣子だが甚しき愚なりから國の敎と云ものは我が皇國の正しき上より見れば知れたることをことぐしくをしへたるものだ此事は（湯淺常山の說に聖人の敎と云ふものは名目を立てゝ弟子どもに固く守らせ大切にする處は大かたはたゞ今の子共に禮を敎る如く飯は喰てぼさぬものぞと云ふに同じかるべし道理の精微なる事とは曾て覺えぬなりと申た純と同じ流れの學者にもかゝるおもしろき見解の人も有ます）強て堯舜の敎に有らざれば道をば知らずと云ふは例の文辭に迷つたる癡心が譬へは爰に衣冠正しく粧たる人とまた外に癡人が一人ある此衣冠正しき人か出て件の癡人に對つて云ふには汝空腹に至つたならば則當に食を喰ふかよからうと敎へた處が癡人が聞て大に悅び是は忝なき人でござる此の人の

教にあらずば吾は飢て死ぬべき所で有つたとていみじく尊く思が如く是は癡人なるが故でござる空腹に至れば當歳の嬰兒といへとも母の懐を開て乳をさぐるではないかされは教を受すとも知れたことなり此衣冠正しき人と云は擬聖人ともの書物にたとへ癡人と云は純を初め其道を奉する輩を云ふのでござる先にも賀茂翁の説を引と申た如く春秋の漸に暖に漸に冷に成行くこゝろにて聖人の教の如く急速に迫りて教へずとも人たるもの誰か漸くに其爲すべきたけのことを知らずに居ませう今の世に稚立より書を讀て文義をさとる迄に至らざるうちに讀書を廢め或は又更に書を讀たこともなきものも時至れば相應に五常五倫の道をも行つて士に立行をも思ふべき事でござる（或人申には今の世學問もせぬ人も相應に道にはづれたる事もなきやうに行ふは聖人の道渡りてより千有餘年行はれて世に偏滿せるが故だ是儒學の功にあらずして何ぞ答へ云ふ其は儒者の常談て一通りは誰もさう思ふやうなれども深く思はぬ僻言なり儒の道の渡り來らざる古へ人の所（本ノマヽ）其いと正しく自ら道に叶つて居るは何故で有うまた云ふ然らは學問は廢よとの事か拙者云ふには學ふべし〳〵世には生れながらの眞心もてするに學問せずとも何事か有らんと云人も有れど是は彼の子路と云者の云たる言と同じく心地よけには聞ゆれ共僻言た其はまづ誰も身に行たる五倫五常の道は學ばずとも知つて居ようが其身の本たる親先祖の事を知るには學問てなくては知ること能はず人として人の大事は如何なるものとも知らてをらんも世に口をしきわきなれはつとめはけみて學ぶへき事勿論也然れば漢國の學はまづ後にまはしてまづ古へを學んてよく身の大事を取り又よく古への正しき御代の意を辨へ其眞心を正く固くして後漢國の事をも學びて古へ學の奴に使ふべきものでござる我が翁もかく教へられた）禽獸すら鳥に反哺の孝あり鳫に兄弟の義かあり猿に父子の親あり又虫にも蜂蟻などには君臣の義もありなど云ふことどもの漢籍にも何くれと見えて有る是等も堯舜が道の及んだと云もので有うか人として堯舜が教に有らざれば道を知らずと云ふのは國に對し先祖に對し禽獸にも劣つたる不法者と云ふべし純など則これでござる

さて又前に申たる純か説の堯舜の道に非れは世に

立事能はす候とある其文の續きにされば中華の古代も日本の今の世も天下はいつも堯舜の道にて治り候云々諸子百家を悦び或は佛道或は神道を好むは其國家の亂るゝ端にて譬へば病なき人の妄に吐下攻擊の藥を服するが如くなるべく候とある此中華の古代と限つて云たはいとをかしきことた堯舜か道は西土にては古代に計り益ありて後代には益なき道て有うか夫を大中至正の道とは何ことだ彼の頭かくして尾を出したる譬へのごとく純爰に至りて大きなる尻尾を出したでそれに付て思ひ出たるをかしき談かある或山寺にいつの頃よりと云ふこととなく年久しく庵主と成つて住たる老法師か有た所が朝夕佛に仕へることいとまめやかて讀經の聲しゆもくの音たゆることなく解怠ないに仍て聞傳ふる人毎にいみじく尊き聖たと云ていとやんごとなき者に譽尊んたと云ことてござる然るに此法師或夏の夕つ方佛に對ひ讀經して居たる所か谷間より吹上る風のいと心地よく涼しげに覺えてそゞろに眠りを催し手にしゆもく持たるまゝ我を忘れて打倒れ其所に寢てしまつたで近きあたりのもの共此法師に物取せやうと申て打群つて來て見たればいと大なる狸が尾を出し衣着て打伏して居たに仍て人々始てこの法師の老狸て有たることを知つたと云ふ物語りがある純も是と同日の談と云べくいとをかしき事てござる堯舜が道を功あるさまに云はうとのみすれどもさすかに彼の國の世世に聖人の道と云を用ひて治つたることなく亂りがはしきを思へは古今に渉つて大中至正の道とうけばりては云ひかねたと見える然も有るべきことだ未くはしくは考へ通さゞれども漢土の世々に五十年とよく治まりたることは有るまいとぞ思ふ漢土の古代は治つたと云も覺束なく況て其後の事は上に段々に云やうの如くなるものを今何國に用ひたりとも何の益か有らう强て歡ひ好むときはたゞ國家の亂るゝ端にて譬へば病なき人のみだりに吐下攻擊の藥を服するが如く更に益なきのみにあらず終には廢人となることありよく〳〵心すべき事てござる

純また樂のことなどをも委曲に辨へたりげに申たなれども彼か著したる和讀要領などに皇國の音聲を侏離鴃舌ときゝなし漢國の音聲を正しいと云たるが如

き僻耳にては何事も覺束なきことて（禮記樂記にも知レ聲不レ知レ音者禽獸是也ともまた不レ知レ聲者不レ可ニ與言一レ音不レ知レ音者不レ可ニ與言一レ樂ともある）此人詩文の師とならうと云て勵みたるほど有て詩を賦り漢文を書ことをよく得たる所は皆人も知たる如く實に一つの門戸をなしたてござる然れはとて其學のすぢも道にかなひたる如く思ふはいと愚なる事だ禮記學記にも記問之學不レ足ニ以爲ニ人師一と云ひ（また外の漢籍にも記問文章不レ足ニ以爲ニ人師一以ニ取レ學外一也とも云つたことかある）詩文の如き技藝をよく得たればとて何で有う是は俗間に時行歌を作り或は豊後節の文句を作る事を得たる者など丶同等の事にて更に國用には益なきことでござる然るを何ぞ道の師とする程のことで有ませう是らのこと少し心を用ひた事ならは誰しの人にも出來さうなこと技藝に名有ることは心ある人は恥とする事でござる（さて此もの詩文のことをおいては然のみこと〲しく譽立るほどの事はない元祿寛保の間は未學問の道大いにひらけざる時代なる故に純なども物識の頭數には入りたりとも當時や學問の道大にひらけ其眼をもて渠らが唱へたる古學とかいふ說どもを見るにいと片腹痛き杜撰のみ多くいとをかしき物でござる今の世にも鈍才なるものには渠等が學風を愛慕ふものもまゝ有れど是は以前の高名が世に流れ來りて人々未その說の稚をさとらさる故だ見よ〲此後漸々と渠等が學風の廢行くことを今の俗に己儒者たからとて實には道を尋んものともせず其身もち放蕩惰弱にして詩文をのみ主といたしたゝ博覽多識とよはれて誇らんことのみかまへ妄りに人の子弟をさへも其黨に引入れ返て道をたづね律義なる學者をば見識狹しなど云ひてかたわものゝ如いひなし世間の風儀をそこないあはれ始皇が居たならば穴にもと思ふ計りなる儒者どもの世に多き皆純が輩の流せる惡學風てござる）譬如何ほどすぐれたる人にても稀々には誤りなきには有らねども純は第一に大本立ざる學文故に僻言のみ多いでござる扨又經濟のことを云つたにも諸ひ難きことのみ多い（但し經濟のことを云つたにも理非はさし置きすまぬことあり孔子も不レ在ニ其位一不レ謀ニ其政一とも云へり純が黨の儒者にも經濟を云へば天下を玩ぶこゝろ有りと申て生涯云はなんだものも有

り宜なる事でござる）宋儒の學を唱ふる儒者をば聖人の旨に違つたといひ口を極て呵つたなれども彼宋儒流の輩といへとも大概は純が如き僞儒にてはなく春秋の意を守りて我が國を貸み山崎闇齋淺見絅齋などの云つた說にはいとも勇ましく猛く雄々しき皇國魂の言も多いでござる夫は純が（淺見安正の說に云云）學風は是らと表裏にてもしや昔元の世祖が如く皇朝を襲ひ奉らうとて西戎より攻來ることも有るならば中華の天子に射向はんこと東夷として有るまじきことぞなどいひ觸て歸命投化とこゝろ得甲を脫て西戎の膝下に屈まり國を賣らんとするものはかやうの儒者て有ると思ふかゝるものをば佛者すら師子身中の虫と號て甚も〳〵悄む事でござる（仁王經といふ佛書に乃是位寺護三寶者轉更滅破三寶如師子身中虫自食師子非外道也と云へり純はよく此虫に似たり）人學ばされば道を知らずなどいふ言も有れど學文も純がことく學ては大に國の害となることで更に學文もなき農夫山賤の類は一向に我が國の尊き物なる事を思つて外に餘念なき物でござる（或漢籍に僞儒奔競營名不如保細民之廉耻と云るは然ることた譬へば汗牛充棟の書は更にもいはす十三經廿一史諸子百家古今小說の書五千餘卷の佛經みな闇誦したりとも國忠の志なく大本たゝさる學者は書淫蠹魚の類にて農夫山賤にもはるかに劣れるものと云へし）或人の申ますには辨道書の文意は小角復友人書中の語を編次してものせり 親族 正名は伊藤氏が釋親考を取り和讀要領は羽倉氏の讀書指要を取たのたと申すまた或書にも聖學問答には西小角か說を生剝にしたることのみ多いとていたく訶り又或書にも辨道書中に釋氏のことを云つたは增穗大和が八部書の說を編次したのたとも云ました實に然も有らば井澤蟠龍が云たるごとく彼の信天翁といふ鳥の類にして純は學者の風上には置ましき穢らはしきをこの者でござる（井澤長秀か說に他の說を以て我が說として誇るは志士のあへてなきことゝす弊習また歎くへしよつて思ふに丹鉛總錄に信天翁は鳥の名澱中に有り其鳥魚を喰へともみつから取ること能はず魚鷹の取て落せるものあればひろひて喰へり蘭廷瑞が詩に荷錢荇帶綠江空唼鯉含鯊 淺草中波上魚鷹貪來飽何曾餓死信天翁とあり他の說を我が說とする

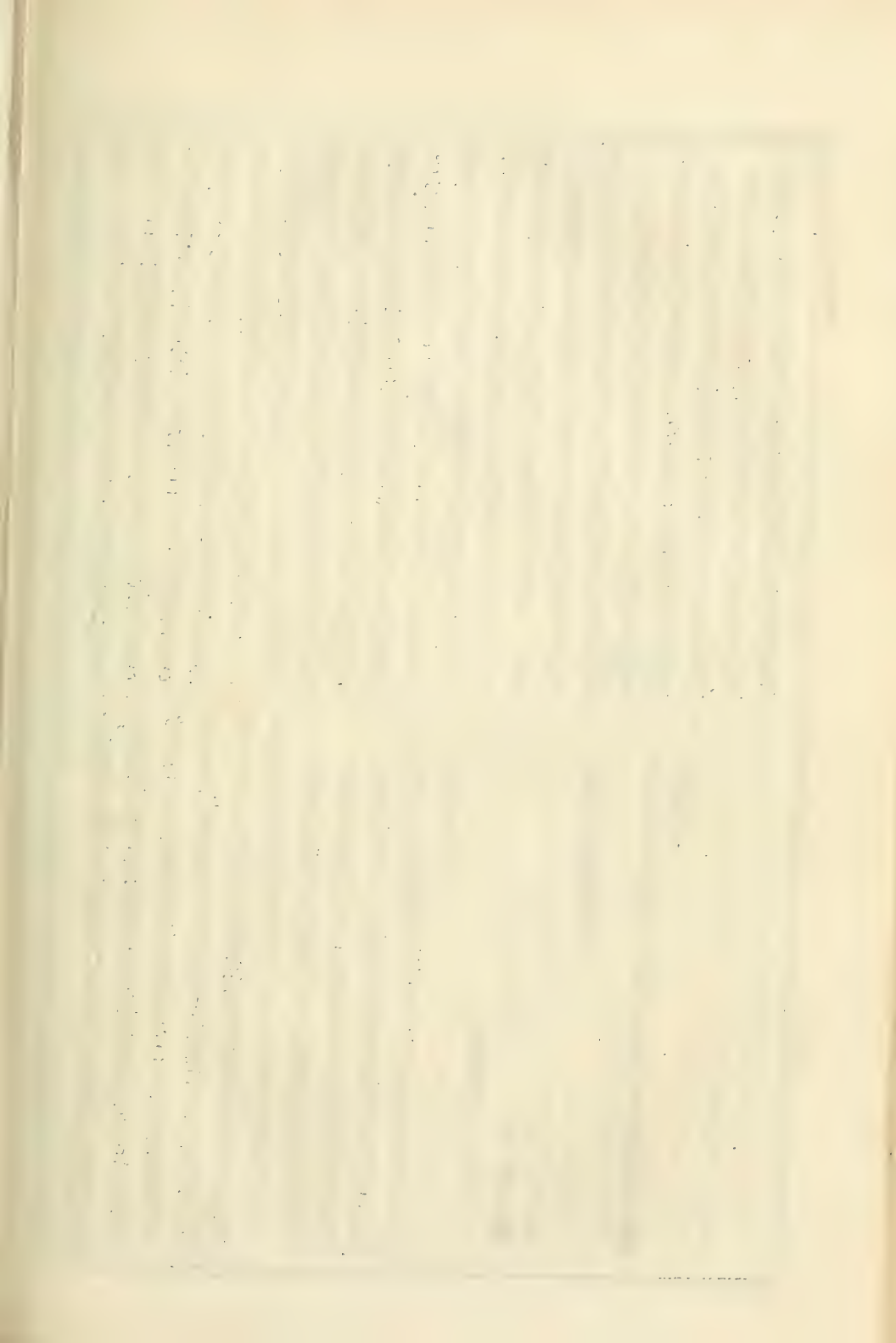
者はこの信天翁に相似る事と申たこれに付て己また謂ふにこの風の學者俗間に多く有るものなれど然るものは決て學文もふみしめたることなく語相て見ると未しく心も淺々しきものた其者どもは人のよき說をぬすみて己が說なりとほこり他人に談るをきくに自らの說か人の說かの差別はよくきゝ分つて譬へば雞鼠が磐石の傍に在て我れこの磐石を負て來たりぬと云たかことく大概は水きは立てきゝ分るものにて心有人は皆笑ふ事でござる其上にもをかしきは爰にきいたことをかしこに語りかしこにきいたるを爰に談りなと其さま腹あしき晩母が人の間言をいひあるくが如くあかもの知り顏に立まはるものにもまゝあつたかかやうのものを俗には才子といふなり一體本に養ふ處なきもの故其よき說を語りきかせたる人を既く忘れて又其人に其考を己がものにしてをこがましく談ることも有るのたかにかくにこの癖は心汚きわざと云中にも甚愚なることでござる）かゝる穢汚心の有りながら己れ道を得たり氣に一向に孔子を信じ候孔子も我に印可して下されなど申たは餘りに押の強い事てござる純がごときものに印可する孔子ならば更に好人とは云はれまい是は或漢籍に欲レ譬レ僞者必假レ眞と云た如くみな愚人を誘はうとてのたばかりごとじや實に孔子を信ずることならば其敎をこそ守るべき事有に更に其意とは異にして今の世の賊僧どもの己が道の五戒をば更に持あたはずして漫りに釋迦を尊み顏すると同じことなり憎むべし〳〵

此書の論どものなかにまゝ春臺が意をしばらくたすけて論へることもありまた俗に耳なれたることのまに〳〵論ひなせるも少からぬはこは心ありてなり讀ん人其こゝろして見わかち給へねかしとぞ

眞菅舘のあろじ

平篤胤

享和三年癸亥十月

編者云本書は未成稿にて如何しき所あれども其儘掲載せり讀者之を諒せよ

天柱記序

予少壯しほどより天文曆數の學を好み當時既に其概略を知る因て按にこの天照日を始め月星のかく運行は以何なる神の御業にて如此旋り又以何なる靈機に因て如此終古に違ざる者なるや甚も奇きに就てなほつら〳〵按に凡て世に歷史てふ書は何れの國のも其國の開闢よりの事を記たる者なれば何れの國の歷史にか必此等の事を審に記たる書あらむと其を搜し索るを以て我事として支那印度の書を始として西極なる蕃夷の書まで遍くこれを求しかど所謂癡人の夢を語るの譬の如く一つも取るに足る者なしこれに因て己が思ふ所も果さず憤ろしき年月をぞ送りける然るに近頃になりて氣吹屋翁の著されたる靈眞柱てふ書を見るに及で忽驚きて神風の八重雲を吹拂ふことの如く積疑まさやかに晴渡りて始て天地の運動て萬物の成就れるは悉皆產靈神の產靈の御靈に資ることを知る阿夜訶志古かゝる尊き御恩賴を蒙りて生成れる身にて其御靈を敬奉ることをも知らす又皇大御國は大地の最初に成りて萬國の根本なれば御國の古事學は萬學の基原なることをも知らずして夷國の書等を貴き物に思ひつゝいそしみ讀けることぞ淺ましき阿波禮氣吹屋翁の奇くも思得られて世の開けし初より神等の次々に生出坐しゝ次第までを審に說著給ひしにぞ信淵が愚なるも天地の生成れる趣をかつ〳〵も發明ることを得たり既に年來の疑も晴て嬉み思ふ心すさみに益々天地の眞理を究めて其運動の數を推量り伊邪那岐神の事跡に證りて產靈神の功業を徵し今の現在の有狀を以て徃し天造の草昧を悟り其新に考得たる事どもの有るを辭にも述べ圖にも畫て此書をば綴たり其を天柱記としも名しは產靈神の御功德を述ればなり嗚乎この天之御柱之記よをぢなき信淵が作りたれど實に天文學の基礎にして曆數術の根源なりしかはあれども世の中の庸人の讀たらむには容易くは曉り得ずして或は鑿りたる妄說なりとし罵り譏るも多かるべくはた其中には唾はきて投棄るも有りぬべし然れども古道に志篤く心敏く直からむ人は或は棄ざるも有ぬべし文政二年の春の初め上總國山邊郡小西村の隱士佐藤信淵書

天之御柱之記

天文地理暦數等の學を事とするものは先づ詳に此天地の初發の有狀より其運動く靈機に資て萬物の生成れる實理を知らずはあるへからざることなり而るに其天地開闢の事を說けるは何れの國なる書等も悉皆荒唐にて取に足るもの有ること無し特り御國の古傳のみは何れも實徵ありて絕て疑べきもの無く八百萬年を歷ると雖も異議あるまじき傳なり是れ皇大御國は大地の初に成就て萬國の宗國たるが故なり玆に平田翁の古史の首を擧て初學の友の爲に粗その理を論ひ御國の古傳說の正しき證を示す見者熟く考へ合て產靈神の天柱を築立賜ひし大功業の甚も尊くして神世よりの古傳のおぼろけならぬを悟りね

古史云古天地未成之時於天御虛空成坐神之御名天之御中主神次高皇產靈神次神皇產靈神此は古史の第一段の文にて最も太初を云へるにて天地の未だ成ざる以前の事なれば何もかも無くして只空き大虛のみにてありし也然るに其太虛の中に天御中主と申す大神の坐まして此天地を造賜はむと欲し起し給ひし由にて此大神の如此欲し召す御靈に資て次の高皇產靈神皇產靈の二柱神は生出坐せし趣也此產靈と申すことは凡て物を生成すことの奇く妙にして測るべからざるの御靈を稱へたるにて此二神は即ち天地を造賜ひし御神にて凡て天地間に在りと有る神等を始め萬物の生成れるは悉皆この二柱神の御靈に資て成就れることなりさて上に云へる天之御中主神は事跡の傳らねば其功德を伺奉るべきのたづきも無きに就て按に阨日多と云る國の書に太古の世に祁邇布と云る大神ありて此神の御口よりして一箇の卵を吐出給へる其卵は即ち空き大虛空にて今の天地も月星も皆此卵の中に在りと云へり此は蕃國の古說なれども緣ありげなる傳にて或は少彥名の神世より語傳たる古言にも有るかも抑も天地の有狀に就て心を潛めて考るに此大地の年毎に北に運り南に動て寒暑の往來する其奇なる靈操に資りて萬物の發育れるは皆是れ伊邪那岐伊邪那美二柱神の國之御柱を築立て鎭固給ひし御靈による事は論ふにも及ばず(此事詳に下に見えたり)然れ共其御功業の成就りしは其以前に二柱の產靈神

の天之御柱を御立て先づ天津國を鎮固たまひて六合の正中に定めたる産靈の御靈によることにて（詳に下に説けり）又其産靈の大功德も其本を原れば悉皆天之御中主の大御靈に資ることなれば此の御中主の大神は信に諸神の始祖に坐して天地の太元なること疑なきものなりかゝる尊き大神の事跡だに傳はらぬは恐くは彼阨日多にて上代よりの傳の如く此六合の裏には高皇産靈神皇産靈神二神以下八百萬の神等悉くに神留坐せども此天之御中主の大神ばかりは六合の表に坐ますかも知るべからず御國は萬國に勝れて神を敬ふ御國風なるに絕て此神の御社ありとも聞えぬは甚も異きことなりける

爾大虛空之中一物生而其狀難言浮雲之如無根係之所而漂蕩之時自其中狀如葦牙初生於泥中而有萠騰之物因其物而始成坐神之御名宇麻志阿志訶備比古遲神次天之底立神（此は古史第二段の文也）前段に云へる如く天之御中主の神の御靈に資て先づ彼二柱の産靈神の生出坐して而此二柱の産靈神の妙なる産靈の御靈によりて天御虛空の眞中に一物は生出しなり此一物は後には數多の星や大地などの分れて生るべきものなれど太初の事なれば未だ渾沌て分れさるが故に其狀は何とも譬へ言ひ難くして浮雲の根係る所の無きが如く太虛中に漂在りし也玆に二柱の産靈神は天瓊戈を指下し彼物を攪給ひて許袁呂々々然にかき回し給へは御手のまに／＼旋轉る其運動の神機にて其中に混淆りし重濁物の限は分散事極多く雨霰の下る如く悉皆脫去て無數の星とは成れりける又其物の中よりして葦牙の生初る如く萠上りたる物有て其物に因て始て生坐る神の御名を味葦牙彥舅神と申し又次に生坐るをば天之底立神とぞ申しける扨二柱の産靈神は其御戈を引上て彼の一物の正中に衝立て終古に移動かぬ天中之御柱とは爲賜へり此御柱を築立て鎮固給ひし御功德に資りて一の物は凝結ひて漸に天國とは成れりける此は今の現在に見放所の天照日即ち是也又其葦牙の初生る如く萠騰りたる物は天國より斷離て漸に大地とは成れる也又此葦牙彥舅神は此大地と共に萠騰りて生坐れば專ら大地に寄添て國土を全く成就す事を知らし給ふ神なるべし平田翁は此神を必ず少彥名神なるべく云はれたるは實に妙なる考也又此天之底立神は地の萠出て斷離れたる其跡に殘

坐して天國を凝成す事を知らし給ふ神なるべし平田翁の此神を天津國玉神なるべく云はれたる是亦妙なる考也○信淵つら／＼按に世の中に生出る萬物いづれも久しきを經る時は大抵は變化る物也然れども天地運動の靈機に於ては八百萬千萬年を歷ると雖ともも絕て變化の有るべきに非ず星象などの變りだも數多の年を經る時は又其故に復る也此天地の運動の神機に至りては二柱の產靈神の殊更に御靈を幸給ひ永く久しくいそしみ坐て成就れりし大功業なればなり故に今を以て古を證し百世の後にも差ふことの無きものは其れ唯天地のみ因て現在の定例にて神世の天造草昧を推し其運動の數を以て全天地の眞理を究るに先づ世に土星てふ星には其星より分生りたる小星五つ有て各常に其本星の外郭を旋り木星てふ星にも分生の小星四つ有て亦各々其本星の外郭を回り大地にも亦分生たる月てふ物ありて常に大地の外郭を旋る是に因て按に凡て分生たる物は必ず其本物の外郭を回るは產靈神の天地經始よりの定例也ける然れば此大地も諸の星と同く共に二日を中心として常に其外郭を旋るを見れば其初は日より分出たる物にて日は最初より六合の正中に在て萬有の根元なるを知る且又彼一物より嘗に種々の物の分出たるのみならず今の現在の日を觀るに其居處は動なけれど常に自ら旋回て大地の二十五日餘にて一周に滿るなれば此產靈の大神も彼伊邪那岐伊邪那美二柱神の大地を修し賜ふ時の如く必ず御戈以て攪回給へるなるべきの例は第五段の文義にて灼然しきものなり故に予新に此說をなして事跡の傳らざるを補へり○我平田翁は世々の名高き博士等も絕て知らえぬ幽事までを奇くも能思得られて最も貴き大人なれども此段をば鈴屋翁の說に從はれて彼浮雲なす漂へる物より葦牙の生初るが如く萌上りたる物は漸に騰て天と成り其跡に殘れる物は漸に地と成ると說れたれど此は未だ考の精しからざるにて實は然にあらず彼天と成るべきの一物は最初より大虛の正中に生出たるにて又其物よりして葦牙の如くに萌出たるは即ち地と成るべき物なり阿米とは即ち天照日の事にて日は六合の正中に在て衆星も大地も共に運旋ふ樞軸なれば此大地より日の生出ると云ふ事は絕て有まじき理なり況や漸に騰り六合の正中に至りて其所に位を定むるの謂あらめ

や西原晁樹が豐雲野神の考はいとめでたき考なれども彦舅神は彼萠上る初に寄添て天へ上り坐して坐すなどゝ誤られたるも此萠上りたる物の即ち是れ地と成るべき物なることに考の及ばざりし故なり大人等の如此誤られたることは此の段の萠騰とある騰の字に泥まれたるにて熟々天地の初發に溯りて心を潛めて想像に先づ大虛空の眞中に彼浮雲なす物ばかり唯一つ有けむ時その一物よりして地と成るべき物の稍芽み出たるを天神御覽して萠騰と詔らせまじきの言にもあらじ天地分れて後こそは上下の差別も有るべけれどなほ渾沌たるの時の事なれば此の騰の字は輕く取りて出の字の如く見たりとも文義に於て害なしなほ深く考るに其萠上る物に因りて生坐せる彦舅神は即ち少彦名神に坐せば其萠上りたる大地に此神專ら寄添給ひて終に全く造成賜ひしも一つの徵とするに足れるをや又天を阿米と云ふを阿志母延の約とするに彼一物よりして數多の星や大地の葦牙の如く萠出在の義とするも聞えさるの說にもあらず兎に角に今の世となりて天照日を仰見て此も最初は大地より萠上りたる物なめりと疑ふ族も有るべけれど此大地も諸の星と同く常に日の外郭を旋るを見れば理も亦自明なり

次又有物生於空中因此而成坐神之御名國之底立神次豐斟渟神云々此は前段に云へる葦牙の如く萠騰たる物は天國より斷離れて漸に地と成らむとして其未だ成らざるの間に又其物の下方に月と成るべき物の芽出たるなり又國之底立神は其成れる物に因て生坐せるなれば其物に寄添坐して下津國の成就れることを司り給ふ神なるべし此大地の下方に成りたる物は即ち根國底國とも夜見國とも云へるは是なり此下津國は後に穗之瓊々杵命の日向の高千穗の二上峯に天降坐せし時に始て大地より斷離れて今の現在に見放る月とは成りしなり其を都幾と呼ふことは大地の下方に久く附着て有りし義なるべし又ての豐斟渟神は月中に坐すか大地に殘給ひしか今知るべからずと雖ども御名の義にて按に萬の物事を凝成らせ組接し給ふことを知らし給ふ神なるべし其詳なることは平田翁の古史傳に就て求むべし○信淵つら〳〵按に最初に產靈神の攪回給ひし神機に資て阿米の中に混淆れる

物の次々に脱去るにも其質の重濁れは輕清る物よりは早く分出て愈重きは愈早く其最重濁て最早く脱去りたるは二十八宿等の衆星なり又其稍晩く分出たるは土星木星火星等なり大地は土星木星よりも其質の輕清ければ遙後に分出しなれどもなほ其中に汚穢の混れる有て如此一團の凝結物と成て大地の下方垂下りて終に一箇の泉津國とはなれるなり又茲に云へる大地より月の分出たるごときのことは餘の星にも有ることにて木星より分生りたる小星四つ土星よりも分生りたる小星五つありて月の大地を旋るがごとく各々其本星の外郭を回る是れ前に云へる凡て分生りたるものはその本物の外郭を旋るの定例なりなほ土星木星等の下に說けるを考合してその理を曉るべし

次國地稚在之時成坐神之御名宇比地邇神次妹須比地邇神次角機神次活機神次大斗能地神次妹大斗乃辨神次淤母陀琉神次妹訶志古泥神次伊邪那岐神次妹伊邪那美神云々この宇比地邇神より訶志古泥神までの八柱を平田翁は伊邪那岐伊邪那美二柱神の御異名なりと云はれたるは甚妙しく尊き考なり彼其狀の言難かりし一物より地と成るべき物は萠出また其萠出たる物より月となるべき物の垂下りて其跡に殘りたる地と成るべき物に始て土象を成しなほ稚々しかりし時に男神の成坐せるを宇比地邇てふ御名を稱し又其漸に沙土の形の生れる時に女神の成坐れはかく須比地邇てふ御名に負給へるなり此二柱は始て此大地に生坐る神にて宇比地とは即ち初土の義也此以下の神の御名も國土の初と神の初との形狀を次第に配り當て負せ奉りしものにて實は伊邪那岐伊邪那美二柱神の御異名也（其詳なる說を見まく欲せば平田翁の古史傳に就て見よ）神の御軀も既に成竟て遘合せまく欲給ふ御心も芽坐して交にいざ〳〵と誘ひ催賜ひしにぞ始て伊邪那岐伊邪那美てふ御名に負給へるなり

爾其天神諸之命以而詔伊邪那岐命伊邪那美命二柱神修固成是漂在國而賜天瓊戈而言依給矣故二柱神立天之浮橋而指下其瓊戈而畫給青海原則鹽許袁呂許袁呂然畫鳴而引上之時自其戈之末垂落之潮自然凝積而成島是淤能碁呂島也二柱神於其島天降坐而以其天神所賜之天瓊戈衝立其島而爲國中之御柱而見立天之御柱云々此は二柱の產靈神既に天之御柱を衝立て天國を修固給ひて彼天國よりして初め葦牙のごとく萠出て

斷離れたる物を御覽給ふに尙未だ固らずして空中を漂回り且其物の表に而足らせ訶志古けなる男神女神の生りて坐すを見給ひて乃ち此二柱神を召されて天瓊戈を賜て是漂在國を云々して修固成せと言依給へる也故に二柱神は天神の詔命のまに〳〵天國より天之浮橋に駕らして發せ給ひ彼海月なす漂ひ回る物に近よりて其物の運行まゝに寄添つゝ天瓊戈を指下して鹽こをろこをろに攪回給ひしかば御手に從ひ轉樸と旋り今の現在まで旋るが如く常に十二時に一周する物とは成れりける扨其御戈を引上給ふ時に戈の末よりして垂落る潮自らに凝積り淤能碁呂島の成れるに因て先此島に天降坐して其天神より賜はりし御戈を其島に築立て國中之御柱と爲し以前に產靈の大神の天を修り給ふ時に天國に衝立て六合の樞軸となされたる天之御柱に效ひて立給ひしとなり是より以來今の世に至て大地の旋回に定例ありて絕て毫釐の差も無く晝夜ありて人と物とを養育すは悉此二柱神の御柱にて鎭固給ひし大功德に資ることとなり又大地の運動に大運小運の差別あり大運は高皇產靈神皇產靈二柱神の大靈機に因て運ることにて上に云へる如く凡て分生たる物は必ず其本物を旋るの例なれば六合の中に在と有る物は皆日よりして分生て共に日の外郭を回るを云ふ大地の日の外郭を運回は大約大地の三百六十五日三時弱にて一周する也此を大地の大運と云ふ其間に北にも移り南に轉て暑寒の往來して萬物を育成すの理は詳に大地篇の下に說へし又小運とは伊邪那岐伊邪那美二柱神の靈機にて即ち大地の自ら旋回て十二時に一周し晝と夜とを爲すを云ふ是亦詳に大地篇の下に說へし又天之浮橋を平田翁は神の御量もて造出給ひて事ある節は其に駕りて虛空を乘給ふ物にて此世なる物にては水を乘る船の如き物也かく虛空に浮漂はし翔て往來する物ゆゑ浮橋とは云ふなりと說かれ且古事記萬葉集等を見るに神世には此物に駕せられたるは數々の事なればせめて一箇は存れるも有るべきに絕て其傳はらさるに就て熟々これを按に天磐船と云ふも同物の由にて多年を經たりとも腐朽亡へきの趣ならねば虛空の中にのみ在りて此國土には無き物たるは知られたり因て又深く考に今の現在にも時々虛空に現はるゝ彗星てふ物は或は此物にて日の御光を受るのかとも思はるゝなり彼彗星

てふ物は其形狀も運行も五星衆星とはいたく異りたる物なればなり尙再考て其詳なるを說へし〇鈴屋翁は天之御柱と見立の見を見送見宥見届など云ふ見に取られて凡て事を身に引受て己か任とするの義なりと云はれ此御柱を立て殿を造ることを御親ら與り所知ることゝろなりと說れたるは此は未だ考の精しからざるなり彼大人は次段に天之御柱を行迴逢とあるに泥まれて如此は云はれたれど熟按に見立と云ふは效と此との二義を兼たる意の言にて今の俗も然云ふ辭なり此段の見立は殊更に其意の深きのにて上に云へる如く產靈神の天國に築立て鎮固給ひし天之御柱に效此て見立給ひし上なれば直に此御柱を天之御柱と詔らせ賜ふとも文義に於て害なし

信淵云さて玆に約說たる古史の第一段より第五段に至り天地の未だ生らざりし時より其大抵成就れりし迄の事跡は悉に神代より語傳たる古說なり天地開闢の事を記せし書は何れの國にも多に有れと御國の如く正しき傳あらめや見よ〳〵一つも異議すへきの事ありや如此き尊き實の傳を聞もし見もしても心おそく心直からぬ庸人は尙速けくは受ひかて疑思も有べければ尙も精く今の現の天地の有狀に就て六合の中に在りとある諸物の理を究めて先つ最初第一に分出たる衆星を始として次に土星次に木星次に火星次に大地次に金星次に水星と大陽までの圖說を作り其物每に詳に論ひて產靈神の大御靈の掛まくも畏きことを示す讀者よく〳〵天地の運動く曆數と予か考得たる趣と少も違なきを見て神代の傳說の世に勝れて尊きことを悟りね・

渾淪一氣從日東旋圖

圖缺

左に畵たる圖の如く日は六合の正中に在りて永く移り動く事無し然れども產靈の大神の最初に衡立給ひたる天瓊戈を樞軸として常に自ら旋轉るものなり此は天神の攪回給ひし妙なる產靈の神操に資りて西より東に運動き大抵大地の二十五日半程にて其回り一

周するなり如此日は瞬息の間斷も無く恒に自ら旋轉を作す而已ならず彼六合に充塞て昊々たる大氣を始め在りと有ゆる衆星等も初は日より吹出たるにて皆悉に日の旋る其勢に帶掣れて旋風の吹旋す如く終古に運回るなり然れども日を離るの遠さに從ひ旋轉の勢ひ漸々に緩になりて恒星二十八宿等の在る處より外になりては日を距ることの極遠ければ殆ど動き無きに近し又其大氣の日に從ひて旋らひ回るの理りと日を距るの遠近に因りて運行に遲速あるとの數を知らむことを欲せば今の現在に天象の目的と成るへき列星と土星以內水星までの各自の運歩を測量は直ちに實徵を得らるゝなり蓋し試に其大略を云はゞ先つ日は六合の中心にして衆星皆これを旋る日も天柱を樞として自ら常に運回し大地の二十五日半に其旋り一周す「其次は水星なり此星日の第一郭に在りて最も日に近しと雖も日の旋轉よりは遲くして大約八十八日不足にて日の外郭を西より東に一周す「其次は金星にて金星は日の第二郭に在りて二百二十四日半餘りにて一周す「其次は大地なり大地は日の第三郭に在り三百六十五日三時程にして日の周圍を一回す「月は地より分りたる物なれば常に大地の外圍を旋りつゝ大地に從て共に旋るなり（用法記云二十七日七時四十三分にめぐる則皇國の二十七日四時不足にあたる）「其次は火星なり火星は日の第四郭の中に在て六百八十七日不足にして一周す「其次は木星なり木星は日の第五郭に在り四千三百三十二日半程にて日の外圍を一周し十二年には少し寡し木星にも此より分れ生りたる小星四つ有りて月の大地を回る如く常に此星の外圍を旋りつゝ本星に從ひて運行するなり「其次は土星土星は日の第六郭に在り大約一萬七百五十九日餘にて一周す二十九年半程也此星にも亦分り出たる小星五箇ありて常に本星の外圍を旋りつゝ從て共に日の外郭を西より東に運行する事也「此土星より以外は日を距る事甚遠ければ旋轉の勢ひ漸漸に衰殺して列宿の在る處になりて大約一萬八千年程を經ざれば一周せざるに至る以上諸星の運行に遲速交會等の有るを能く審に測量り定るを暦數術とは云ふなり又土星より列宿の在る處までの間は極めて遠き事なれば五星てふ者の餘にも百年二百年或は五百年千年餘にて一周する星は幾百千も有るべけれど

凡人の眼の及ぶべきに非れば强に量り知らむ事を求るは却て蠢きことなるべし西洋の夷人等近來八十年餘に一周する星を發見して鏇棘奴斯と名けしと云

此處に全天旋回圖を入るゝなり

圖缺

或問曰天道左旋は古よりの通說なり然るに吾子ひとり東旋とす若し東旋なるものならしめば則是右旋なり天道果して右旋なる乎答曰天地の運動を左右を以て論ふことは天地の全體を知らざるの誤なり予詳にその實理を說て初學の惑を辨せむ元來この天道左旋とは漢土の夷人の云ひ出せる說なり漢土夷は古より其の性何れも固陋にして己が狹き心もて天地の理を量り定るを好む既に彼土に尊み用る周易など云ふ書を始め陰陽五行等の說を見るに南方を離火とす故に暖なり北方は坎水たり故に寒しと云へる如き南も亦道より南に行けば漸々に寒き事を知らず唯その鼻の前なる小知見にて萬物の理を推究めむと欲す信に蠢き國風にぞありける今こゝに云へる左旋右旋も亦これと同理にて赤道より北にて右旋と見ゆるは赤道以南にては左旋に見えまた赤道以南にて右旋と見ゆるは赤道の北にては左旋に見ゆるなり予はこの理に明なるが故に右とも左とも云はずして只西より東に旋るとするなり予が東旋と云へるすら實は憶なるにも非れども地上よりして見る所の西より東に進步なれば先づ假に東旋とは云へるなり又問曰今吾子が明說を聞き且この一氣旋轉の審かなる圖を見て始て天道の東運を知る因て熟々考るに最初御虛空の正中に生れる浮雲なす一物を產靈神の攪回して如此東方に運回給ふに赤道の北よりすれば即是れ右旋なり若し赤道より南に坐してものさせ給ふことなれば却て是れ左旋なり然ればこの二柱の大神何れの方より攪鳴給ふなるべき答曰南に坐して攪回給ひて南より北に向て御戈を衝立給ひしなるべし予れ天象を熟視るに北方には星甚多く南方には星甚少し此その證とも爲すべきものなり又問曰南方は產靈神の坐ませしが故に散去りし星少く北方は御戈の向ふ方なれば星の多き

は實に然らむ天之御柱すでに南より北に向て築立給ひし事なれば彼伊邪那岐伊邪那美二柱神の此大地を鎭固るにも亦南方に坐まして攪回給ひたる乎答曰伊邪那岐伊邪那美二柱神は北方より攪鳴賜て北より南に向はせ給ひ御戈を衝立給ひし也故に皇大御國は赤道より北に在るなり又問曰皇御國の北に在るを以て伊邪那岐伊邪那美二柱神の北方より御戈を立しとは實に其理なり扨其衝立給ひたる御戈は即ち大地の旋回る樞軸なりと云はれたれば北極下に在るべきの理なり古史の第五段に云許袁呂許袁呂然畫鳴而引上之時自其戈之末垂落之潮自然凝積而成島是淤能碁呂島也二柱神於其島天降坐而以其天神之所賜之天瓊戈衝立其島而爲國中之御柱而見立天之御柱化作八尋殿而共住給矣故其其瓊戈後著化小山矣と有りこれに因てこれを見れば二柱神の御戈を衝立たるは淤能碁呂島にて淡路國の西海に在り此地北極下よりは五十五度程も有りて絕て旋轉の樞となるべきに非ず然れば吾子が考も未だ盡さゞる所の有るにあらず乎答曰卿等は天地の最初よりの實理に暗きを以て此疑も有る筈のことなり抑も大地の未だ成就らざりし時は其質潮に泥の混れる物にて其狀を譬ふるに海月の水に浮べる如く大虛の中に漂ひて天國の旋轉に牽掣れて其外圍を運回れり玆に伊邪那岐伊邪那美の二柱は天磐船に駕らして其運り行くに從て御戈を以て攪回しつゝ御虛空の中を乘回り給ひて其御戈を引上給ふ時に其戈の末より垂落る潮の自然に凝て小島と成れる即ち是れ淤能碁呂島也玆に二柱の大神は始て浮橋より其島に天降坐せし事にて此島しも成らざりし以前は苟も天降坐すべきの土地も無かりし事を知るべし故に先づ此島に御戈をは衝立て共に住給ひしなり彼天瓊戈と申すは瓊を飾りしものなれども其本質は銕なるを以て潮と泥と銕との相混れる靈機にて大地は漸々に凝り結べり其凝結び固り成れるに從て漸々に大になりて御戈も後は地中に沈み跡に小山の成れるのみ其後無數の年を歷て彼二柱の大神は國土を生むと欲給ふに及て氣候良和の處を撰び赤道以北三十度より四十度程の間にぞ定め給ひける扨此オノゴロ島は初め北極下に在たるべけれど既に國土を生給ふべき御處も定まる上は此島をも其處へ國引に引坐せるなるべし國を引坐せるの例は古史第七十六段に詳に見えた

り然れば伊邪那岐伊邪那美の二神此島をば引移し賜ふと雖も國中之御柱たる天瓊戈の動かすべきならねば今に埋れて北極下に在りて大地の自ら旋轉て十二時に一周して終古に違はざる樞軸は即ち是れ也又此大地の固まり成れるは畢竟は此御戈の銕氣に資れることなれば其氣大地に充滿て何れの地にも此物多く是ぞ宇都志枳青人草の一日も無くては叶ふまじき最も要物なりける又この銕を打延はせば自然に尾首の有るは即ち御戈の本末の徵にて彼羅針てふ物の南と北に指すも皆此御戈を衝立賜ひて常磐に堅磐に無動の軸となされし御璽に因る事にてその北と南に必ず指すは本と末とを現すなり尚この銕と羅針のことは地柱紀原に精く論ひおきたり校合せて皇祖神伊邪那岐の大神の青人草を愛寵給ふ提く尊き御意を悟り且又御國の古傳の世に勝れたることをも知るべし

衆星篇

此衆星の運動は甚穩にして移動こと無きが如くなるを以て恒星とも呼ぶなり既に上に云へる如く凡て分生りたる物は必ず其本物の外郭を旋るは天地草造よりの定例にて六合の中に在りと有る物は其初皆日より分出たる物なるを以て天御虛空に列張する所の紫微太微天市の三垣並に二十八宿等の恒星を始として其次なるは土星木星火星大地金星水星に至るまで各各其星の在所の日を離るゝ遠近に從て運行に遲速はあれど何れも皆日の外郭を旋ることなり而其旋ると云ふは常に西よりして東に進行きて少時も間斷の無き者なり西洋人は此諸星の進步の道路なる六合の圓周を三百六十度として其各自の經歷の早晚を測量るの法とす御國も亦近頃はこれを用ひられて其一度を百分とし又其一分を百秒として物せらるゝことは成れり此は蠢爾き夷狄國にて定めたる法なれども甚便よき法なり按に少彥名の神世より常世の國に遺りたる古傳にも有るべし而其太初に產靈神の御戈以て攪回給ひし妙なる神機にて日の旋轉に因りて中に混れる星等の自脫て散去るにも悉に次第ありて其質の重濁りたるは分出ること早く其稍重からざるは脫去ることも稍晚し且其早く脫出たるは日を離ることと最遠く其稍晚く分出たるは日を距ることも稍近し日を距るの近きものは其運行こと速にして日を離るゝの

遠きものは其運行こと遲く愈近ければ愈速に愈遠ければ愈遲し是亦天地草造よりの定例なり而此恒星と呼ぶ者は日より最初第一に分れたるなれば日を離ること極めて遠し故に日の外郭を旋るの運行も亦極めて遲きを以て西洋の弟谷尼斯と云へる夷人の二萬五千九百二十年にして其旋り一周するの考あり予亦これを試む事を欲し上總國長柄の武廟山に於て年々これを測量せしに此恒星てふ者も其進歩の疾きも遲きも有りて且又中には北に行も南に移るも有る者にて齊一なるべきものならねば必しも二萬五千九百二十年に一周するの定にもあらず試に盆の水に數多の粟子を浮べ攪回して其旋回を觀るに倘其中には疾きも遲きも有り況や宇宙の鴻洞なる悉く一齊べきに非るは決し然れども今の曆局に於ても毎年五十一秒づつの歲差を加へて曆法に合するを見れば列宿の日の外郭を旋るは年々五十一秒づゝにて彼夷人が考たるに近き事にて總て恒星二十八宿等の運動は甚も徐なる者なりける且又精く其理を究るに六合の間は悉く元氣充塞て少も間隙なき者なり人は其氣中に生息するを以て如此氣の充盈たるとは絕て覺ざる事譬は魚の水中に生息して絕て水を知らざるが如し其氣の充塞て有るを知らざるが如し其氣の充塞て有るを知らざるを以て此六合に空虛を以て名るに至れり假令空虛と云ふと雖も實は皆元氣の充盈て有るなり而其六合中に充盈たる元氣てふものは如何なる物ぞと云ふに元是れ太初に天御虛空に生れりし所の其狀の言ひ難かりし一物を産靈神の攪回給ひしに資りて彼物よりして吹出たる氣のみ故に日の西より東に旋回に從ひ此氣も亦沃灢旋動て瞬息の間も休止あること無し彼恒星二十八宿並に五星大地等の運行するも悉皆此元氣の旋回に牽掣られて西より東に進行なり然れども旋回の大本たる日こそは旋り剛健にて大地の二十五日餘には一周することなれども餘は日を距るの遠きに從ひ漸々に旋轉の勢ひ衰殺て列星の在處に至ては一年に僅五十一秒程の移動とは成れる也然るに世の天學者この天地の運轉は全く産靈の大神の産靈の神機に資ることを知らず種々さくじりたる妄言を吐き自ら妙なる考を得たりとしかしこげに論ふは此は勉强は勉たれど畢竟は皆ひがごとにて己が愚昧を著すのみ又西洋の夷人等は恒星を悉く一箇の日なりと

云ひ又恒星に大小あるは大地を距るの遠近に因ると云ふが如き皆稽も無き虚説也凡て六合の中なる物は悉皆日より分出て日の外郭を旋る者也且日に近き物は其運行疾く日を距るの遠き者は其行くことの遲きの理は既に上に云へるが如し因て彼恒星を測量するに大星にても遲きも有り小星にても疾きも有り星の大小は大地を距るの遠近に非ずして大は固より大に小は固より小なるを知る彼五星の中に於ても火星は大地に近けれども小く木星は火星より地に遠けれども大に見ゆるはこれ其證なり又この恒星を以て日とするが如きは愚なるも亦既に甚し彼夷人等の如此さくじりたる空言を吐出せしは穢き底邊の國に生れて遙に御國に遠ければ産靈神の御口づから傳賜へる古言を開奉るべきたづきも無く彼衆星の運行にも甚徐にして變り無く五星などゝは異なるを見て如此杜撰なる空論を發せるのみ然れども年々東に移りて五十一秒づゝも進歩事なれば則ち日の外郭を旋るにて是れ其初は日より分出たる物なるの證也又此無量の恒星を見て天神の御意をも知らず指たる用も無き物と思ふ族も有べけれど此は掛卷も畏きことにて論ひ申すも畏けれども初學の朋の爲に粗其趣きを説になむ

抑も此天地は何の爲にとて造成せる物ぞといふに悉皆天之御中主の神の靈くも尊き御意より出たることにて此大神はひたぶるに青人草を痛く愛惠給ふ御靈に資りて先づ二柱の産靈神を生賜て既に上に説ける如く終に此天地を造給ふに至れり故に六合の中に生りと成れる物在りと有る品は悉く青人草を養育ふか設にあらざるは無し況や此天御虚空に列張所の星宿に至りては甚も貴き要用の物にて此恒星の辰宿てふことの無からましかば暦數術の基原なくして年月の紀すべからざることは更にも言はず其餘第一の要務とすべきは大洋を渡りて常世の國に往復せむとするに此物を以て準的とせざれば絶て船を行るの術なし阿波禮皇大御國は大地の最初に成りて萬國の本國なり皇御麻命は萬國の總主に坐して大地を全く所知べきの君なれば大船を四方の海に出して萬國を治給ふべきの理は説得て古史傳と靈眞柱とに詳なり然るに御國も近來になりては頻りに自ら謙遜せ給ひて船を出すことは禁られたれど上代の例を考奉るに皇祖伊邪那岐大神詔建速須佐之男命曰汝命者所知青海原潮

之八百重焉事依賜矣これ豈僅に此大八洲國のみを保守れとの詔命ならむや全世界を悉く所知給ふに非れば固より皇祖の御意に背けり其後須佐之男大神も吾御兒の所知國に浮寶あらずば佳からじとて杉樟等を生し賜ひて浮寶に爲れと詔給ひしにて船を出して常世國に通ふは神の御心なること知られたり且又産靈の大神の妙なる産靈の御靈に資りて萬物の生出ると天地の物を成すは一方に偏りて國土の寒暑にも強きと弱きの差別ありて形狀も性味も同しからず寒地に多きもの熱地に少く溫氣に宜しき者は冷氣に宜からず且藥物の疾病を治し穀類の飢餓を救ふ必南北相通はし東西相交ふにあらざれば人民夭折の患を免れ難し故に萬國の蒼生を敎育ひて有無を平均するは船より便なるはなく船路の準的を指南して往來を自由にするは星より良はなし然れば御空の衆星を能く見知り能く測量り此を以て目的とし船を大海に浮べて常世國に往復するは天之御中主の大神を始め高皇産靈神皇産靈の二柱神の此現見青人草を愛み養給ふべき尊き敎にぞ有りける阿夜提天御虛空に森羅れる星象を仰見るに美麗くも列ねさせ給ふもの哉則ち是ぞ産靈神の御意より如此は成されし者なるべし今は御國の御法度にて常世に船を出すことを嚴く禁給ひしなれば船のことは先づおきて唯此恒星の測量を圖にも書き辭にも述るは初學の朋友に産靈神の御恩賴の甚も尊く辱きを知らしめむことを欲するのみ

銕云此より二丁余父君御自筆の寫

傳へたる諸書。淮南子を始め。何どて專と地動の說にて傳へざると言ふに。此は尋常の人の容易に其の實義を曉り得まじき事なる故に。姑く常の視る趣をもて說傳へし者なり。故今も古人の然る用意に效ひて。前後の注說みな其本文のまゝに。日の行る趣をもて說を成たり。（其は孰にても歲時の來經を說くに至りて、其測量にさし支ふる事の無ければなり、）然れども天象曆法の本義を知むと欲する者は。其實境を知ず在べきに非ず。故此に世の天學家の考竅せる成說どもを折衷して其の大略を載さば。日は六合の正中に在りて。其居を徙すこと無れど。其所に居つつ自然の神操に因りて。西より東に旋運すること無窮に休まず。（此の旋運一轉する間の日數を、大抵大

地の二十五日半ばかりに當ると云ふ說有れど、此は未諦には非らず。）其は自己の旋轉を作す耳ならず。六合に充塞する大氣を始め有ゆる衆星もみな日の旋る勢ひに掣れて旋風の如く運行す。然れども日を離るゝ間の遠きに從ひ旋轉の勢ひ漸々に緩になりて。彼の二十八宿等の在る所より以外は。日を距こと甚遠ければ。殆動なきが如し。今其の旋運の次第を圖に著して示さむに。日は六合の中心にして。上に云ふ如く大地の二十五日半に一旋し。日に甚近きは水星なるが。此は日の第一郭に在れど。日の旋運よりは遲くて。大約八十八日足ずにて西より東に一周し。（第□條水星の本文に春分を以て奎婁に效はれ、夏至を以井鬼に效はれ、秋分を以て角亢に效はれ、冬至をもて斗牛に效はると云るは大凡そ此の日數と合へり。）其の次は金星なるが此は日の第三郭に在りて。二百二十四日半餘りに一周し（第□條金星の本文に

圖缺

正月甲寅をもて晨に東方に出で、二百四十日にして入り、入りて百二十日にして夕に西方に出て、二百四十日にして入り、入りて三十五日にして復東方に出づと有るに違へる如なれど、甚き相違には非ず。）其の次は大地なり。此は日の第三郭に在りて。三百六十五日三時ほどにて。西より東に日の周圍を一周し。月は常に大地に屬ひて其の外圍を二十七日四時足ずに回り。（月の大地に屬ふことは、其の元は大地より判り成れる物なるが故なること、古史傳に委曲に說たる如くなればなり。）其の次は火星なり。此は日の第四郭に在りて。六百八十七日足らずにて一周し。（第□條火星の本文に、出入無レ常也と有るは其測量を略せるなり。）其の次は木星なり。此は日の第五郭に在りて。十二年に一周し。（或は四千三百三十二日半ほどにて一周する故に、十二年には少か足ずとも云へり、脩此の小星四つありて、月の大地に屬ひ回る如く常に此の星の外圍を回るは、月の大地より判りたるに准へて思へば、其の四星も疑なく木星より判りし物と見えたり。）其の次は土星なり此は日の第六郭に在りて大約一萬七百五十九日餘りにて一周

す二十九年半などなり。(第□條鎮星の本文に、二十八歳而周と有るに、一年半ほど多かり、偖此の星にも分出の小星五つありて、常に本星の外圍を回ること木星の小星に同じ。)此の土星より以外は日を距こと甚遠き故に。旋轉の勢ひ漸々に衰廢して列宿の在る所に至りては大約一萬八千年ほどを經ざれば一周せず。(抑天道を左旋と云ふは古昔よりの通説なるを今しも東旋と云へば、是れ即ち右旋なり、天道果して右旋なるかと云むに、天地の機運を論ずるに左右をもて云ことは陰陽の□り旋る勢こそ元より然れ、實には天地共に西より東に右旋すること、古史傳に委曲に説辨へたる如くなるが、近き物は旋り速く遠き物は旋り遲き故に、大地は我等が住にて一年に三百六十度の自轉さへに有れば

○周の成王の魯國に賜ひし璠璵と名る玉は白玉なりとぞ孔子の此の玉を歎美せること諸書に見ゆ○石腦油の凝結せる物は干漆なり。干漆の精粹なる上品は琥珀なり○空青の中に水を含みたるあり含水青と云最貴品也此の水眼疾を治すること極て妙也故に本草逢原と云書に天下有ニ空青一無ニ朦目一といへり○皇國產の黄金一寸角四方六面にて秤量一百七十五匁。銀一百四十匁。銅は七十五匁銕は六十匁。きたひたる銕は七十匁。鉛は九十五匁錫は六十三匁。眞鍮も六十三匁。サハリは七十匁。水銀は一百四十五匁。土は十三匁。青石は三十二匁。美石類は一百十二匁。寶石類は百十六匁。本質玉は百二十匁。硝子は九十五匁。水の中等なるは八匁。七分五りん是れ其の大約也○鉛は諸金の細粒なるを聚合凝固す。水銀は諸金の堅塊なるに滲徹して分散粉碎とならしむ。故に水銀と鉛の相反することと炭火と氷柱との如し○磁石は天沼矛の分精にして地柱より蒸沸して發生せるものなり故により銕氣を活動し羅針をして正く南北を指しむるの妙を現す。凡そ此の物は銕山の近傍には大抵ある者也且此物天沼矛の分精なる辨は天柱記と鎔造化育論に委くす○磁石の銕を吸ざる者を玄石と云ふ磁石を產する處には此物も共に生する者にて皆是神代にいざなぎの神の大地に衝立て地柱と爲玉ひし沼矛より發生する所也故に磁石の中にも此物の中にも自然に銕砂を孕みある者にて其性の銕に近きこ

と知べし○土錠銕は殊に此物に近き也。銕の自然に塊を爲て生ずるを土錠銕と名く。出羽の雄勝と武州の秩夫にあり。目銕も性に因て烊化し易きと極て烊化し難きとあり○熟銕鋼銕を猛火に烊化すれば熟銕にかへる熟銕は鍛鍊の度を重ぬるに從ひ其性漸々に剛をなし○鋼銕は此に反して鍛煉を重ぬれば其性次第に柔をなす　夫鍛煉の度數適宜ならざれば其物の用をなす事能はず乃ち甲冑は銕を折鍛ふる事十五度。刀劍も此に同じ。剃刀は十三度。菜刀は四度。魚刀は八九度。牛刀は十二度。薄刀は十度。鉋は十一度。小鋸は十七度。大鋸は十四度。釿は十度。と云ふが如き此其大畧なり○銕屑を煉製して丹藥と爲すときは甚靈妙なる神藥にて人の衰弱を強くし種々難治の諸病を療すべし○鉛膏疾瘡の劇き痛みを治し鉛液眼疾の諸患を治す○白石脂は眞鍮をみがきて黄金色ならしむ○石鐘乳を以て石を接續しかつ石を種々小大各異の形狀に造成するの妙用あり○太一餘糧は山國には大抵ある者也。其の形狀は禹餘粮に似て岩石に附着す石に附ざる者は大概禹餘粮なり。かつ太一の石質は禹餘粮より硬く此を破れば銕色の光あり中の粉は黒褐にして黄白色に非ず和州生駒山の太一は名産にて頗る大なる者也水鉢洗手盥等に爲べき者多し土俗「イハツボ」。「ツボイシ」。「コロビイシ」。○出と云ふ出羽の仙北にては龍の劍すり石と云ふ。○出羽の加良氣の谷及び越前の寒水の瀧等は種々の器物を投し置ときは三年にして悉く化して石となる

莫臥兒國の始祖其名を答墨兒藍と云ふ韃靼部中北高海の東境なる沙加待國の王都撒馬兒罕の地にて生たる人なり英武絶倫にして兵を用ること神の如く其始は群盗たりしか戰は必ず勝ち攻れば必取り向ふ處敵する者なく漸々印度諸邦を蠶食し北印度より中印度を併せ西洋一千三百九十六年我應永三年丙子の歲を以て帝號を稱し其後又西印度を破滅し遂に三天に主たり亞瓦刺に都す。

鎔造化育論

松菴　佐藤信淵撰

天地未生之時。有天御中主神高皇產靈神神皇產靈神。而爲造化之首矣。故此三神稱皇祖天神。即造物之主也。所謂皇祖天神。篤愛人類。不啻滋息也。更欲使之修道成德。爲聖爲神。以得昇天之榮也。故鎔造斯天地。乃以天爲神聖之居。以地爲人類之居。別有幽界。此人類諸活物靈魂之居也。天地開闢之初。一物生於虛中。而其狀難言。譬猶浮雲之無所根係焉。此物因產靈之神機。而成斯全世界云。（天地開闢事實。詳于古史傳。）蓋天者即指日輪。地者即是世界也。幽界者。即薰園中也。（薰園者、日輪光炎、溫煖大地、蒸發氣之所成也、其說詳于第五章。幽界者雖在薰園之中、冥冥乎無容、漠漠乎無聲無臭、固非現世之可以見聞者也、故名之幽冥。）天上界者神聖之本處。則其寰內宏麗壯嚴。非現世之所以可思議也。大地者雖爲人類之本處。而畢竟修道事天。可以爲賢哲之戒場也。是以人世必用之物。悉發生于地上。以使蒼生保續性命。修成道德。恒有餘裕。是皆上天所賜之修業料也。故不勤事天之業。而徒素飡者、終必蒙神罰。可不敬哉。幽界者靈魂之居處。而辨明在世中之功罪。細諸活物之精魂者也。故往往置審事臺。以闔實取服。其統會總治之處名大冥府。幽冥大神之所都也。（幽冥大神、即大國主神也、亦名大名持神、亦名大物主神、此神避現世之政、而治幽冥之事實。詳于古史傳、）出雲國八百丹杵築宮即是也。其他世界之廣也。靈魂之衆也。小冥府之數不可勝紀焉。然其太政統轄於出雲之大社云。凡人類在世間。行善積德。得爲哲人君子。沒後必爲神昇天無有可疑者也。（尙書仲誥曰、天旣遐終大邦殷之命、茲殷多先哲王在天、詩下武篇云、下武維周世有哲王、三后在天是也、）夫勸善懲惡。天地開基來之天憲也。故修德者受昇天之寵。則行暴者蒙嚴獄之罰。不俟論也。然而善惡之報。不在現世。而在身後者。總活物體魄。皆是四資之妙合。現世之假質。而得於其母者也。唯靈魂得于其父者也。得于父者屬于天。得于母者屬于地。屬于天者死則

歸于天、屬于地者。永久不能離大地矣。故雖有哲人。肉體不可以離地也。必俟魂魄分判。而後可以得昇天矣。（此理尚詳于第四章。）是所以褒貶黜陟。皆在身後也。

右第一章

太初之時。上皇太一之、鎔造斯天地也。執天瓊戈以攪回彼物。使宇內之大氣。渦焉自西旋東。因其運動之神機。所混淆之重濁質。泌發分散。如霰之降。滂沛乎萬道飛走。以止于幽遠之極焉。（朱熹曰、六合外、必有硬靭皮矣、實知言也、何者宇內一箇大卵形者也、又亞弗利加洲、阨日多國古史云、太古有大神名却尼希、此神自口吐出一卵、此卵內即全天地也、此說雖頗荒唐、而或神世古傳乎、外國亦我少彥名神之所開、則有不傳于皇國而傳于彼者、亦未可知也、然彼土多沿革、且經年所極多、其神名及事實應多訛謬、勿論也、予熟按此等諸說、彼吐一卵者、或我天御中主神乎、夫天御中主神。爲造化之首者也、然皇國中、未曾聞有此神之祀廟也、由是觀之、此大神或仕六合之外者乎、若夫不然、則皇國之崇神國、而無此大神之祀廟、非可異之最甚者乎。）而其最初。飛散距離最遠者。即衆星及彗星搖星等也。其次水星。其次金星。其次大地。其次火星。其次木星。其次土星。重濁悉分判。而精粹凝結于正中者即日輪也。衆星質最重濁。故最初分泌。距日極遠。水星頗輕清。故最末分生。在日輪之近郭。其他金星大地火星等。各從其質輕重清濁。分出自有遲速。是以距離亦各有遠近而不同也。即是天造之序也。及日輪既凝定。乃以戈衝立之。以爲天柱云。自是以來。諸星皆日輪爲中心。自西運動于東。盤古悠久。無有休止也。名之曰太一之元運。（信淵云、此太一之元運、及伊弉諾之私運、皆是予近來所發明、而古人之所未知也、故其論之破格也、在初聞初見者、決知爲其脫空而排之、爲杜撰而詈之者甚衆矣、然於講明鎔造之神意、精究天地之眞理者、必有讀了後、直不知手之舞之足之蹈之者、夫、矧且非無一二可證者也、玆聊論載、以示來學、古典曰、初大地之漂蕩也、皇祖天神詔伊弉諾伊弉冉二神、賜天瓊戈、而修理焉、二神乃駕天浮橋、指下其戈、而攪回

水土、廼引上之時、自其戈鋒所垂落之潮、自凝積而爲島、即自凝島也。二神天降于其島、乃以皇祖所賜之戈、衝立其島、而爲地柱、以觀立天柱云、夫二神修理大地之神法、即皇祖修理日輪之神法也耳矣。大地因二神攪回之妙機、而自西旋轉于東、以分世界之晝夜、日輪旋轉以運動宇内之大氣者、即因皇祖攪回之神機、可以察也、且又觀曰衝立戈於其島、以見立天柱、則皇祖亦嘗有衝立戈於日輪而爲天柱之舊例、亦不俟論而可決者也、故予生萬歳之後、新作此論、講究地柱之玄義、推明天柱之神理、以補神代之闕典者、非敢立異好奇也。唯是繼續產靈之神意、參贊天地之化育、業不得不然也、且其精究天地之神意、推步諸天之運動、事實可證者、數理可算者、或論辨之、或圖解之、別定爲書、名曰天柱記、從事于天文暦術者、宜參考。）太一之元運。有二箇定例、而爲終古不易之天紀矣。凡分生者。必運回其本物之外圍。且從其距本物之遠近。而運行必有遲速。故其距離遠者。其行遲。近者速也。而其運動也。皆必其本物爲中心。恒自西運行于東也。此二者。天造自然之常例。即天文暦術之所基原也。如既論于上。宇内萬星。悉日輪之所分出也。故皆日輪爲中心。常回其外圍。且從其距離之遠近。而運動各自有遲速者也。抑此大地。及五星衆星。轉回所以無休者。即皇祖天神攪回之神機。所牽聯乎日輪旋回之勢也。元運轉回大氣之迅。急於旋風之猛烈也。然從距日之遠。而其勢漸緩。至衆星之遼遠。則庶乎無運動焉。故日輪者。萬物之基根。群動之大元也。是以最初。定位於大圓之正中。以統轄宇内萬星之運動矣。而其自己旋回也。凡二十六日餘一周焉。（今以精好望遠鏡、熟視日輪、外而有種々阿紋、或如龍蛇者、或如禽獸者、或如諸活物者、眞黑色頗鮮美也、恒起于東方之端、漸西移步、凡十三日許而沒于西方之端、沒後十三日許復現于東方之端、如初、就是量之則其旋回一周日時數可以等。）日輪外圍。第一郭曰辰星天。即水星運動行環之所在也。諸天星中。此星最近于日輪。而其回日輪也。凡一百一十六日餘一周。（以日輪與大地相距一萬分之比例、量日輪此星相距之遠近、有三千

八百七十七分、又以恒星天度、計此星行環與日輪在位之距離、凡三十三有奇、是其最遠點、)「諸星其質與大地同。非有自己光輝者也。而其所以有光輝者。是皆受日輪之遍照。而發光輝也。故日輪出地。則至不可見焉。(唯金星上之合伏、有晝見也、以之可知、金星行環、最近于大地也、)第二郭曰金星天。即太白星行環之所在也。(太白星行環、距日輪比例、七千七百三十八分、又其恒星天距離、最遠點四十八度少弱、此星大地相距、二千二百六十二分、是上合伏之時也、)金星回日輪也。二百二十五日。是天紀也。然此星或有五百八十四日許一周。水金二星行環。共在大地行環之內。故有上下之合伏。而無與日輪對衝。(凡星介于日輪與大地之間、曰下之合伏、日輪介于星與大地之間、曰上之合伏、又大地介于日輪與星之間、名對衝、)第三郭。即大地行環之所在也。大地行環舊呼黃道。(黃道、赤道。斜傾說詳于第二章、)大地回日輪也。三百六十五日三時弱一周。別有一附星。名月輪。即大地所分生也。故恒旋大地之外圍。凡二十七日三時弱一周。(月輪一周自己之行環、二十七日二十二刻、而自合朔至合朔、二十九日五十三刻、其多於一周、二日三十一刻者、大地亦三十度東移故也、又大地月輪距離、大地全徑三十徑。四分徑之一、)月輪回大地者也。故有上之合伏與對衝、而無下之合伏、(月輪上合伏 即合朔也、故掩日光、或有爲日蝕、對衝即滿月也、故或入于大地影中、有爲月蝕、)第四郭曰水星天。熒惑星行環之所在也、此星凡七百七十九日餘一周。(日輪距離比例、一萬五千二百三十四分、)此星及木星土星行環。皆在大地行環外。故有下之合伏對衝。而無上之合伏也。第五郭曰歲星天。即木星行環之所在也。此星凡四千三百三十二日六時一周。(日輪距離比例、五萬二千零一十六分、)此星有四附星。即是所分生也。故其旋本星也。猶月宮之於大地也。(本星小星距離、以本星全徑量之、第一近星、二千八百三十三徑半、其回本星也、一日九時餘一周、第二小星、四千五百零八徑半、凡三日六時半餘一周、第三小星、七千一百九十二徑、凡七日二時餘一周、第四小星、一萬一千一百四十九徑半、凡十六日八時半一周、)第六郭曰土

星天。塡星行環之所在也。土星凡一萬零七百五十九日三時半一周。(日輪距離比例、九萬五千三百七十七分、)此星有如環者、而繞焉、(環輪薄、而幅廣。受日輪之遍照、而有光輝、無異本星也、其環大以本星全徑量之、二徑四分徑之一、又本星輪環相距、亦同環之幅、其圍繞本星、而運行或縱、或橫、或面圓、當其正面圓之時、則星與環之隔間、或有見恒星、然非用至精至微之望遠鏡則不可見也。)且有五附星。即所分生也。故回本星。猶月之回大地也。(第一近小星、距本星本星全徑、九十六徑半、其回本星也、一日十刻許一周、第二小星、一百二十三徑半、凡二日九時許一周、第三小星、一百七十三徑半、凡四日六時半許一周、第四小星四百徑、凡十六日許一周、第五小星、一千一百七十二徑半、凡七十九日四時有餘、而其回一周。)第七郭曰恒星天。恒星距日輪在位。極遠非測量之所可及也。故其運動亦甚遲、年々東行。僅五十一秒。大約二萬六千八百八十年許一周焉。(七十年二百十九日恒星東移一度、故一百年間、天象東行、凡一度二十五分、)是皆天地運動定數、而曆法之所基原也。)夫恒星運動。極靜。雖經歲月。而無大移動。抑此察者之。羅列于大圓中。森然成象。猶棊盤之有條理也。大地及月輪五星。日夜變纏度者。猶棊子之布散也。周天既有條理。於是乎辰宿井然。推步不擾。以使世界萬國之人類。審天地經緯之度數。與物産使水路。以交錯有無。無所不給。是皇祖天神。鎔造天地之神意也。

右第二章

天地圍周。三百六十度。南北二極相距各一百八十度。其中線曰赤道。赤道至二極。各九十度。其爲形南陜長。而北濶短。團々乎如雞卵。故宇內諸星行環。亦卵圓而非正圓也。是以其回日輪。亦有近點有遠點、運動各不同。舊稱黃道即大地行環也。蓋黃道。東西赤道爲交處。南北斡傾各二十三度半。其極南爲夏至、極北爲冬至。東交爲春分。西交爲秋分。春分之日。大地在黃道之東交。(即是春之晝夜平等、)其後漸南移。凡九十三日六時餘。至極南處。即夏至也。(俗曰夏之日留、)其後轉北步。又九十三日六時餘至西交。即秋分也。(秋之晝夜平等、)其後愈北移。凡八十九日不及。至極北處。即

冬至也。（俗曰冬之日留）冬至後轉南步。又八十九日不及。再復東交。大地一周。三百六十五日三時弱中。其在赤道南。一百八十六日五時餘。在北一百七十八日九時許。而其在南日數。多於在北。七日七時許者、大地行環。北短南長。所謂卵圓而有遠近故也。（以日輪大地距離一萬分之比例約之、最遠點、一萬零一百七十四分、即夏至也、最近點、九千八百三十四分、即冬至也。故冬夏二至、有三百四十八分之差也、又以測量器量日輪大徑、夏至之徑、三十一分三十秒、冬至之徑、三十二分四十七秒、可以知其遠近也、）月輪及五星行環。東西黃道爲交處。南北各自有斜傾。故大地行環。南北各八度間。或有時交蝕。是以此十六度間名蝕道所謂二十八宿星象者。列張于此蝕道而紀經度也。大地資產靈之元運。三百六十五日三時弱。轉回黃道。且其轉回中。更有自己運動。恒十二時旋回一周。又其一周中。嚮日輪半面爲晝。背日半面爲夜者也。凡居地上者。大地之運動。不可得而見也。故測日輪之運動而推算之耳矣。日在六合之正中。而無移動也。故大地運行于黃道。則居地上者。視日輪之運行于黃道也。然是不視正當而視反對也。乃大地在北之初宮。則視日輪在南之初宮者也。且又大地。終古轉輾東旋。然而居地上者。而知其東旋。而唯視日月星辰之西行也。譬之猶駕大船者。其船東則視陸地山嶽等之悉西者。大地之東旋故也。（水星行環東西黃道爲交處、南北斜傾七度少强、其卵圓距日輪、遠點近點差八百零七分、金星南北傾斜三度三十三分卵圓遠點近點差五十二分、火星南北斜傾一度五十一分五十七秒卵圓遠近差一千四百十三分、木星南北斜傾一度十九分五十八秒遠近差二千四百九十八分、又木星附庸小星行環東西木星行環爲交處南北斜傾各有遠近而其最遠小星之傾一度三十一分二十二秒故其運行或正線或南緯或北緯或正行或逆行或合伏或對衝或交食且卵圓遠近各有不同其最遠小星之差二十七分譬猶五星之於日輪月輪之於大地也、土星行環南北斜傾二度三十分三十六秒卵圓遠近差五千四百六十八分又附庸小星無異于木星之附庸星也、唯其相隔甚遠不可詳其數爾矣、且又五星皆有正行有逆行有疾行有留滯有晨見有夕

見其精密理天柱記詳之、月輪行環、東西黄道爲交處、南北斜傾、各六度、其極南、極北、六度處俗名龍脊、又其東西交處、名龍頭龍尾、此交處毎月輪一周、逆退于西、一度四十六分、故大地元運一周間　交處西退十九度十八分四十三秒、凡十八年二百三十四日西退一周、又卵圓遠近差、以大地全徑約之、一徑四分徑之三也、且又以其南北斜傾移動之行道、配當大地一周四時、而加之以黄道正線之行、則月輪運行有九道也、其數其理及圖說其天柱記詳之、）皇祖天神。竭至微至精之妙機。列之以恒星之成象、而天地之經緯。非然可紀焉。纏之以七曜之異政。而時刻之分秒。煥然可測焉。（知本國他國距離度數法、先製本國毎日日月星正昇曆、而測他國正昇、察其遲速高下之差、則可知也、知南北甚易、晝測日輪南中之高度、夜測恒星南中之高卑、則自分明也、知東西頗難、以大地之轉輾旋囘也、故必得精好時規審察本國他國正昇遲速之差、而後可知也、凡西行一度、則時候四分、東行一度、則速四分、是其常例也、若不得精好時規、則測月離亦可知也、西距一度、則月離後、二分零八秒、東距一度、則先二分零八秒、是月輪者、一日一夜間、一十三度、三十六分東旋故也、其精密之理、天柱記詳之。且其製正昇曆法　亦天柱記論載焉、）上古伊弉諾神。詔須佐雄神曰。汝治蒼海原潮之八百重焉。其後須佐雄神曰。蠻夷有奇貨。皇國無舟舶。則不可也。於是乎生樟云。且少彥神修理外國。皆是贊成造化也。神意之所在可以知也。（西洋人講明諸天運動之理、究極微妙、其測量推步之精密也、天文曆術之洞悉也、實徵明證、絕非支那印度諸邦之可比者也　彼歐羅巴距皇國極遼遠、言語所不通也、惡能知皇國之古典哉、然其喩理也、推數也、符于我產靈之神機者何其奇也。且其測量推步諸術、皇國之不傳者、審備于彼土不亦可異乎、蓋皇國上古、以神治神、天地往還頻數無虛歲、故曆術不俯而事之足乎。抑亦歷年悠久失其傳者乎。按神代紀、外國皆屬我少彥之所造、則此神之遺傳者乎、若夫不然、則非人力之所可及者多焉。故彼土人雖能推究運動之數、而未知所以其運動之機、悉出于我皇祖天神產靈之元運也、是以不

能通曉于諸星運行、悉爲日輪旋回所牽接者之理、而或曰日月星皆施大地、唯金水二星旋日輪、種々謬妄不可勝紀也、至百餘年前、骨弊留邇窮須者、祖述上世之古說、而發日輪居于渾天之中央、而終古不移動之論、彼土亦始知大地及諸天皆旋轉于日輪之外郭也、然而骨弊留邇窮須、亦爲再興古說者、則今予以所謂彼古說、爲當我少彥神之遺傳者、亦可知非無稽之言也、故予作世書及天柱記、最初序皇國上世古傳說、以明辨皇祖高皇產靈神、鎔造天地之神功、而紀諸星運動之曆數、悉用西洋人之推算也、昔孔丘氏從郯子、而學古官事天之學、無常師、苟有補益乎濟救含靈之業、則和漢戎狄何異之有、今予此書周採撫群言、融會貫通、以折衷於鎔造之神意者也、讀者執于己之先入、而勿作適莫之看也、）書曰堯命義和、欽若皇天曆象、日月星辰分宅四方、以驗萬化。敬授人時。堯曰咨汝義和。朞三百六十六日。以閏月定四時成歲。允釐百工。庶績咸熙。然是時代失大昊氏之眞式、故無知皇祖天神鎔造之神意。則有天文曆數之學不明。測量推步之術不精也。故分方與時。使各驗其實、勉以審夫推算之差、而以閏月成歲也。雖不良法。使民天從時勤、在璿璣玉衡。以齊七政矣。蓋舜初攝王位。整理庶務。首察璣衡。以齊日月五星之纏度。者曆象受時、萬機之大本。政事之所當先也。主國家者可不盡心哉。

右第三章

初大地之漂蕩也。皇祖天神賜天瓊矛於伊弉諾神而修理固成焉。所謂天瓊矛者。形全像玄牡云。且又諸國往々立祠廟置此形而敬事之。是惟皇國之風習哉。雖逖矣蠻夷之邦祭之者甚多也（續高僧傳曰玄奘三藏至劫比他國俗事大自在天其精舍者高百餘尺中有天根形極偉大謂諸有趣由之而生王民同敬不爲鄙辱諸國天祠率置此形大都異道乃有數百中所尊者自在天爲多云、由是觀之印度諸國之敬事玄牡遠過于皇國其俗之淳朴也可尙哉又支那國其俗驕慢而修飾外容故鄙辱之雖不敬事而稱爲天根則其內心知玄牡之爲天地根者也）是玄牡者天地萬物之根本。故凡物牝牡不具。則不能滋息。天地之生物也。必備牝牡。草木猶

有之。而況於血氣之類乎。初伊弉諾伊弉冉二神天降乃造有自凝島。合接歡喜。以產育神人庶物。亦唯自瓊矛形狀而按出大慇懃之事矣。（二神造大地及合歡產神人庶物之事實其詳于古史）爾來牝牡相感。產靈神揮發生々不息。故云之天地之大德。蓋天地之發育萬物皇祖天神至心愛人之所爲。而人之生兒孫。其實天地之所生也。何則天意欲人類之蕃息也篤矣。故濃厚牝壯相感之情。而深切男女交接之樂。是以合會天下之大愉快無有勝于此者也。故人常恒作其念。亦靈氣運動之所催促。而皆係於神機之橐籥者也。故男女搆精而孳爲胚胎。其實天地搆精而胚胎之理也。先哲數究胚胎之理。男子有精而無卵。女子有卵而無精。故女子之卵必得男子之精。而後化生也。（凡卵者雖非同類得諸活物之精則能化生焉予曾見一女子合罧犬而孕者與蝦蟆所魅而姙者然則女子少壯者不可不戒愼畏懼也）蓋冥府之投於靈魂而託子於人。必先依于其父身也。其父得靈氣之促乃遂交接之歡喜以泄射其精而後懷孕于母體。是玄牡所以爲有生之根也。故夫婦集宿一處則事天之一事也。（增壹阿含經寶品曰佛告比丘識神來受胎父母共集一處與止宿父欲意盛母不大慇懃則非成胎母欲意盛父不大慇懃則非成胎父母集在一處無患識神來趣然後有兒諸比丘當作此學由是觀之釋迦如來亦交接之學頗得其妙者也故欲行聚首之神事而產兒者如浮屠氏之法而非男女相與必盡大慇懃極中大歡喜則背天地之神意者也）而冥府之倚魂託子非疎放私託。悉奉天命。有可託之緣由。而託者也。然乃產育兒者。可不愛養哉。凡兒者雖其父母之所產。其實皆上天之所託也。所謂男子之精。梵語呼之歌邏羅。（大寶積經音義曰哥邏羅初受胎時父之遺泄也華嚴經音義曰哥邏羅此云薄酪謂初入胎如薄酪也對法論曰哥邏藍此云凝滑父母不淨合和如蜜和酪泯然成於受生一七日中凝滑如酪上凝膏也）予曾取新歌邏羅精究其質。凝滑薄酪中。有纖微活物。運動焉。其形頗類蝌蚪。謂是靈魂既得生氣者乎。此物乘發射愉快之勢灌注子臟。鑽入卵內。以爲胚胎者也。（自初受胎經三十日許則人形略成大如棗）天造靈妙。信不可思議也。就是察之。精

也者。上天之靈氣也。卵也者大地之靈質也。故活物之得于父者魂也。得于母者魄也。其死也靈魂歸于天。體魄歸于地也。是故父代天者也。母代地者也。是以天地大父母。父母小天地。天地父母其本一。所以其恩無異也。故人身者靈魂爲之生氣。而四資爲之體軀也。其投生也有命。存生也有命。消滅也有命。而不能自由者也。故其存生中。修道成德。濟世安人。以勉事天。則沒後必爲神無疑也。故歌邏羅者上天之靈氣。可以聖。可以神。不可讒泄。必得良媒。而後可以從事也。人得天地之正氣而生。與萬物不同也。既爲人須盡得人之理。然後稱其名也。況夫婦者人之大倫。不可不盡禮者也。上古伊弉諾伊弉冉二神。肇開合會之神事。垂統於終古。是肉體之始也。（所謂肉體地之物也。故人類不脫肉體。則不能昇天也。）爾來世々承繼其業。生々不已者。亦所謂靈氣運動之所促。以至于今矣。故天地之道。造端乎男女合歡。參乎鎔造之化育。玄牡之用。其義大矣哉。

右第四章

大地者資生之原醅。水土各半者也。然日輪之光炎。蒸炙之。不知幾萬年。故漸含火氣。煦温釀沸。其蒸發之氣。薰充乎大地之周圍。恰如煙霞之作環也。名之曰薰圍。即風氣也。至是土水火風之四資。始得判其氣質也。大地既發薰圍以來。譬猶玻璨之招募天火。日光之餘氣。先承于此物。而徹透于地上。其炎熱之強不啻百倍也。所謂薰圍者。成日光蒸散潮泥。風雲霞靄亦皆由焉。（日本書紀曰伊弉諾伊弉冉二神、既生大八洲。曰、我所生之國唯有朝霧而薰滿之哉、乃吹撥之氣化爲神、號曰級長戸邊命、是風神也、由是可知、薰圍即伊弉諾大神之氣息也、故天地間所化生之庶物、不呼吸此氣、則不能生息也、所謂級長戸邊命者、主宰使萬物呼吸此氣、而滋息生長蕃夷之徒未知鎔造之神意、故曰濛氣、或曰霧環。或曰半水、皆濫名耳矣。）此氣之環繞大地也。高至數千里之外。故日輪既沒。降地平下二十度餘之間。尚得辨物象者。昊天返景。照此物之上端。曉天亦同焉。凡人民及異生草木金石。皆生育于此薰圍中。若不能呼吸此氣。則悉亡滅矣。（高山近日而寒冷強、平地遠日而炎暑酷、世人或有訝者、試以玉

板、招天火於炭、炭甚近玉板、則火不發、是所以高山暑氣、不如平地之酷之理也、薫闍招煦溫之妙、易靈爐水土之機、造物之神業、讃歎感伏、實無可名稱之辭者也、）夫日輪之光燄、赫灼煦溫大地、於是乎、四資之氣質。千變萬化。其相混合。以發生諸種之鹵鹽。（初伊弉諾伊弉冉二神奉將天命修理大地之時、執天瓊戈、攪動鹽泥、而以旋回之、其音鳴凝々焉、而後衝立其戈旋回作渦之正中、即是地中之柱者貫串南北之二極、而爲大地運回之樞軸也、夫天瓊戈之爲質也、鉅鍊爲本體、瓊瑤爲外飾、而其金鐵也、瓊瑤也鹽泥也、漸混化鎔合、大地得以凝固結定矣、故大地之所以成就者、皆是鹽氣之所凝結、而由伊弉諾大神之唱言也、是以地中含有鐵氣、甚多、其他瓊瑤金石、草木活物等之化生、亦畢竟、皆出於此戈靈氣與日輪光燄、之煦溫釀化也必矣、因試鍛鍊鉅鐵、以製盤針、則必指南北、其必指南北者、从地柱之本體也、凡分生者必皆从其本物之正體、是皇祖大神、天地鎔造之定例也、夫盤針雖微物、而爲地柱分身也、既爲地柱之分身、則所以从彼瓊戈之、貫串南北二極之本體也、蕃夷之徒、雖有論吸針指南北之理者。而不知有天柱地柱之神理也、不知天柱地柱之神理、則不知天地之全象也、故其所講究之諸說、漆桶掃帚、悉屬于摸索之妄見矣、夫皇國者萬國之本根也、故其古傳說皆產靈大神之遺典、而識鎔造之神理也、是所以其究理學亦殊絕神妙非夷狄之可企及也、）

鹵鹽之成物甚奇哉。煬煉久。釀生硬鹼二鹽。凝于水結於土。其凝結終作魂。小塊砂石。大塊巖岩其他萬品。皆二鹽之所成也。大地成就之理。喩之人身。巖岩骨幹。土壤皮肉。河海血液。草木毛髮。煦溫之靈氣。活發運動。遂發育活物。以成今之世界。故此土水火風。天地萬物之正體。非此四資之外。則有天地萬物也。此四者洋々乎充盈於六合。或凝或散、或合或離。以消長萬物。故物雖繁庶。大則土石生植活物之三。其消長所以係于硬鹼二鹽之合散者。因彼土石生植活物呼吸薫闍也。若不呼吸其氣。則皆屬消散矣。是識妙合水土二資能使之凝結以化生彼庶物也。予嘗行製煉術。變革物質。分其所含有之諸品。沙之汰

之以得辨識萬物皆土水火風之爲所化也。（此究理之諸説詳于鎔造論衍義）彼土石生植活物種屬。雖有億兆之品類。而至行法分判其質則皆歸于四資也。其土水火風之四資雖奇結妙凝變出萬物。然示非其自性。而有能成物之妙理。其成物也必得日輪所照射造化之靈氣而後能之也。夫爲四資之主宰。而能化育萬物。彼日輪之精氣者何等物。爲如斯之妙也探索煉究蓋亦有年近來取得萬物所含精粹之一物矣。其爲物也鹽狀瑩明。輕虛恰如茅華柔英之飄飛也。其性極透竄。蓋靈氣脱亮者乎未果可知也。而比之他揮發諸鹽類。大異靈者也。故命之名曰造化靈鹽。水脱此氣則不能爲水之用。土脱此氣則不能爲土之用也。然則今予稱造化靈鹽而爲四資之精神萬物之性魂。可知非迂論也。唯怨者苦心勞勤而取得此鹽片時皆消散無術乎貯矣。就而可察非可留于人間之物也。予嘗精究此物及調和之鹽類或作硬鹽或作麗鹽共得其自在天地成物之理。始得見其蘊奥矣。因知硬麗二鹽者即造化靈氣依託於鹽質者。萬物消長所以悉係于此鹽之合散

也。且四資之中。風火有氣而無質者也。故能混合土水之質。而爲揮發運動之妙也。土水有質而無氣者也。故能含畜風火之氣而爲化育消長之用也。水本質氷也。土本質泥也。以火加水則作風。以風加土則發火。土之含火者硫黃也。含風者燄硝也。水之含風者鹵也。含火者油也。故日輪者造化之元也。土水火風四者。成物之資也。（言四元者未爲得其義也。五行相生相剋之説不可必與、何則土水火風者。上天成物之質料也、故可稱元者唯有日輪耳矣。）天地成物之理鎔造論衍義雖既盡精微。玆附小論以示初學。夫天地之成就也悉鹽氣之所凝固也。予以製煉術。精究之。萬物之質。其自初發至成長無非鹽氣所致者也。且鹽類亦多。（鹽者日輪光炎蒸炙薫園之所發也。其氣先生于薫園之中而其質成于地上者也。天成爲鹵人生爲鹽海生曰鹺山生曰鹻煖國生於海寒國生於山即風氣之所化也、又炎熱之國有時雨天華天華者其色淡白透明類薄氷其形恰如白蓮花之散亂于風也。即是所謂鹽氣既發于薫園之中而未成質者也 乃下至地上則皆消滅矣、）而爲之硬麗一

而爲言者以二性自然氷炭之異。功用之極殊之故也。凡鹹鹺。多含畜造化靈者其質鬆。少含靈氣者其質硬、此二者同出而異其功。同是産靈神之妙用所以不得不然者也。但硬鹽者。其質緻密凝堅。其所以凝堅者性粘厚固結也。是以防止腐敗之力甚強。使含之庶物經久而存在也。或欲消散之而雖烈火煆之不容易解釋矣。鬆鹽者。其質膨虚芒鍼。其所以芒鍼者何。性鋭利透竄也。是以增進生氣之勢甚劇凡物活動者。含有之故也。或欲貯藏之而雖密器封之不可須臾止留矣。巖石金玉等硬鹽之凝結于土質也。故雖歷千歲而不朽也。然以含鬆鹽之少無運動之性焉。其成長亦極遲矣。(金類岩石中硬鹽最多者也、故雖過火而不崩壞也、黄金最硬鹽之純者也、是以煆之烈火其性愈加硬是其所混錯相半、其金土石質、因煆化而消除故也、又玉類者天地之至寶而神明之所愛君子之所佩故其化生也精華爲專而釀成焉、是以靈氣蒸育之機或過于熟化凡諸物過于熟化者必含鬆鹽故寶玉之質過于至堅而却脆煆之火則悉解散矣。又玉之不能渾厚完成者即大青曾青綠青等畫彩其池孔雀石青田石瑩明石之類是也、)生植類含硬鹽少於金石。鬆鹽多於金石。是以其成長早而腐朽亦速。然木比之草則硬鹽多。故腐朽遲於草。且雖過霜而不枯也。(葉無硬鹽故過霜則枯落也、葉有硬鹽者、經年不凋、即青精杜仲栢枇杷桃葉珊瑚金松羅漢松山茶八角金盤之類是也)草硬鹽少而頗有鬆鹽是以滋蔓雖速而過霜則大抵枯矣。根有硬鹽者。翌年腹生。其無硬鹽者。皆一年限而腐朽也。(草類中頗有硬鹽而不枯者、藜蘆、吉祥草、胡蝶花、麥門冬、橐吾、馬蹄辛萬年青之類、皆小草耳矣、水草則有昆布、水松、海帶、羊栖菜、海萠、海蘊等、其他尚多。水草比之陸草、則硬鹽頗多、又長春藤、五味忍冬、萬年蘿、蔓生鉤吻等之類、非木非草、一種間物、而所謂蘿類也)種兒者草木共含硬鬆二鹽。更含畜造化之靈氣。是以生々不已也。然種兒不時播。而經歷多年。則靈氣脱去矣。故有種兒久藏之法也。凡草木種兒將結也。造化之靈氣。維持保護焉。各使其物釀成自己之精魂。精魂既成。則先抽之蒂當是時胞育其種兒之精氣爲前驅而發華英其華謝而後。菓實

結于跡也。故華者草木共有揮發透竄之香氣。是皆膬鹽之所爲。夫菓實之胞衣者也。是以華者大抵其謝速矣。（凡草木半燒爲炭者經久而不朽、是草木少得火化之間、硬鹽湊合故也、是以炭者其質近于石矣、若夫自然地火、以薰燒之、則變爲化石也。是自然地火以多硫黃礬石等之硬鹽也、是自柔輭而出于强堅者也、又再燒黑炭而爲白灰、則消散而歸于土質也、是炭得火化太甚、則硬鹽變而爲膬鹽故也、是乃自有形而入于無形者也、又草木半朽而有膬鹽者、乃生蟲、夫蟲者雖微少而活物也、活物必有血魂、凡有血魂者、必有情慾也、是自無情而趍于有情者也、凡物自無情趍有情者、皆昇進也、假令雖爲冬蟲夏草也、一爲有血魂者、而死、則皆屬活物、凡有情欲者、死後其魂可得昇進、）活物者膬鹽之妙合於水土之精者也、故含靈氣最多、是以其生也、則運動其成長亦甚速。而造化之神機。或走或飛。千狀萬態。愈出愈奇。然以含硬鹽之少、無有堅固質。其存生亦不長也、然而於其種類之中。硬鹽最少者昆蟲也。昆蟲之質甚脆弱也。故氣候催冷。則大抵老衰。遇霜則枯死腐朽。悉歸于土質。然其精魂不滅。而留淹乎死處土中。翌年逢濕煖之氣候、則復生息滋蔓焉。又水族之困旱渇而枯死消滅者。再得潤澤而復生亦其理同焉。是以有作蟲魚法也。又蟲類中有硬鹽者。或蟄于幽穴。潜于深淵。而禦寒氣。得長生者亦有之。水族比之昆蟲。則生氣頗强。於禽獸則不敢畏寒氣也、是其脂膏極多故也。何脂膏即火之假質。其種類于硫黃、所以堪寒而不傷也。且又脂膏得火化、則凝結爲石。故有造石法也。（是自動物而入于靜者也。硬膬之變化妙用。由是可熟察也、）凡活物不能長生者。死則其魂依于水土。纔年存生者。死則其魂入于薰園。魂之依于水土者。復生於水土。其入乎薰園者。非託父胎母。則不能再生。薰園即幽界也。凡活物精魂。以漸昇進。其至入于幽冥。則近乎爲人類也。視犬馬之性近于人之性。則其趣亦足以推察。夫一元之靈氣。分判爲土水火風之四資。二種之鹽質。聚結爲土石生植活物之萬品。皆是皇祖天神産靈之神機。枯者如盡。而種兒永無絶。死者如消。而精魂未曾滅。

也。故稱此天地曰無盡藏也。而彼三種之於人世。或爲食物衣服。或爲宮室器物。或爲藥料玩好。或荷重致遠皆爲不可闕之要物。故此三種必用。既備。而後人類可以得蕃息其天地化育之理。物產製煉之術。鎔造論衍義詳焉。（鎔造論衍義三編先年予所著也、上編論寶玉丹青諸金半金諸石諸鹽瓷器瓦塼等、土石類之製煉術、中編論穀菓綿糸藥物脂油造釀諸紙染料材木器物炭墨名花等、生植類之造製法、下編論魚鼈禽獸脂油昆蟲皮革羽毛骨角齒牙甲筋染料、及珍禽異獸蟲魚畜養法、其他藥品活物類之造製。通計九百八十九條、全部八十五冊開物製煉之法論也。）抑斯大地雖爲資生之原醋。而至極南極北之界。則雖造化之神機有不可爲者也。何則赤道北。距七十度以外。自秋分至春分、無異常夜也。南距七十度外亦同之。自春至秋半年常夜也。海水悉凍結冰雪作山。勿論乎寒氣之酷烈也。故赤道南北三十度內諸國。氣候恒溫熱而物產極豐饒南北兩極近傍。恒寒烈唯有冰雪爾。（天地運動之理、氣候寒熱之論天柱記詳之。）由是觀之。則知萬物之發育。悉出於日輪之光燄也。夫日輪者造化之大元。炎熱之基本也。故定位於大圓之中央。以溫煖宇內。以使大地化育無窮之品物也。蓋日輪寰內所謂高天原者。即諸神之本處也。太古之世。皇祖二神主之。之賦天命。以行造化之政事。及天地既成。天照皇大神。繼皇祖而統治天上萬機之大政。（天照皇大神治上天之大政事實。古事記、及日本書紀等、古典所載甚詳、世人所皆能知也。）博愛蒼生。維持保育之慈惠。無所不臻好生靈德。洋溢乎六合。且又皇祖產靈神。帥八百萬之天神。以補佐其神事。於是乎。日輪之光燄。益赫々明々。造化之靈氣。氤氳熏燸大地。是以品物之繁生。人民之滋息。百倍乎太古之時矣。天下蒼生之性命者。皆皇大神之所賜也。可不仰哉。可不敬哉。

右第五章

鎔造化育論

序說

此書は萬物の製煉術を講明する書なり。然るを如此題くる由は天皇祖神篤く人類を慈愛し此を蕃息せしめ。更に實德を積しめて神と爲さんことを欲して。天地を鎔造し萬物を化生して。乃ち天を神聖の居處と爲し。地を人類の居處と爲し給へる根元の道理より說出せばなり。抑人世必用の諸物悉く地上より生ずることは生民の養料と爲賜ふが故なり。然れとも其諸物再ひ人工を以て製煉するに非ざれば。殆と用べからざる物多し。故今此を講明して人類の養料を豐饒にし鎔造の神意を繼ぎ。天地の化育を賛せんと欲す。其は既に日輪あり。且地球あれば風火水土の四資も亦自然に分判するの理なり。何となれば天造草昧の時に方りて。先づ阿米は宇宙の精粹資始の大本なるが故に。最初に位を六合の正中に定め給ふ。是即日輪なり。而後に尚混淆せる重濁一沌を分出し。以て資生の基根と爲し給ふ。是即地球なり。(此天地開闢の事實及ひ日輪地球諸星等公運私運各々不同の暦數は、予が先年著せる天柱記に詳に論じたるを以て茲に此を贅せず、若夫天地の基源及び日月諸星運動の理天文地理暦數等の學を明にせんことを欲せば彼書に就て求べし、抑も日輪天國の寰內は神聖の本處なれば何なる莊嚴の境なるか詳に思議すべからずと雖ども。古事記日本書紀等に載する所を以て其の大概を知べし。(按するに大倉姬命は幽冥大神大國主神の公主にて殊に嫡后須勢理姬の所生なれば、其富盛にして衣服器玩の美を盡せるに論なく、且つ世に高照姬とも下照姬とも稱すれば、其容儀極て艶なること知べし、然れども天國に到るに及ては、自ら其鄙風を愧たる、また登美長脛彥は中洲の大柄を握り武備精銳比類なかりしも、天孫饒余毘古命の天羽々矢の偉然たるを見て、大に恐怖せる趣等を察るに、天國の殷盛なることを知れり、また望遠鏡を以て其外形を視るに猛火炎燄勢ひ原を燎くが如く、彌邇くべき所に非ず、然れば假令升天の願ありとも爭か天門に入て神域の壯麗を見ることを得んや、必ず德を修めて神位に昇り皇祖天神および幽冥大神敕許の神通を得て、而後に期望すべきのみ)而して其所發の

炎光を以て遍く六合を照映し。且以て世界を溫暖す。此に就て推究するに日輪は神聖和樂の本處たる而已ならず。火氣を宇内に賦與し以て造化の發端を爲す者なり。地球も亦萬物を發育するの原醋たる而已にあらず。人類德を修て天命を俟つの境域たることを必せり。(此事平田翁の古史傳に委く論じられたるを見べし。)天地既成せる以來日輪は公運の時數を以て恒に自ら旋回し。所謂猛火の光燄を放ちて六合を遍照す。地球も亦彼公運に牽聯せられて日輪の外圍を運動し。而して又私運の時數を以て常に自ら旋轉し。以て地上の晝夜を分つこと。天柱記に詳說するが如し。且又地球の本質は水土各半に混したる者なり。然るに日輪の炎燄を以て照積こと悠久なるが故に。其中自然に火氣を含畜し。漸々煦溫釀沸して。遂に薫圍を蒸發す。是に於て土水火風始て氣質を判つことを得て。以て萬物を發育するに至る。是を今四資と名く。さるは此の四物の資となりて。萬物を生ずることと下に論ずる如くなればなり。故に此四資は即是天地萬物の本原にして。此の外に別に天地の質あるにあらず。其は此四資常に宇内に充盈流動し。判れては復混り。混りては復判れ。更に凝り互に結び。以て萬物を化生す。是を以て萬物繁庶なりと雖ども。其類を統て大別すれば。土石生植活物の三種にして悉皆四資の奇結妙凝より變出する物なり。熟々土水火風の互に混和して。萬物を發育するの理を精究するに。最初に彼日輪より分出たる一沌の土水既に上に說たる如く。日輪の光炎を以て照し積れる熱氣に因て。漸々熬煮吸乾せられて。風氣と爲て蒸沸し。霧の如く霞の如く薫り充ち。地球の外邊を圍繞せり。此を假に薫圍と名く。地球に此物圍被せるより。日輪の光暉先つ此物に映じ照透して後に地上に達す。此を近く喩ふれば。彼硝子の板を以て天火を招く理りの如く。日輪の炎熱は愈よ强く地に徹す。是以て土水火風混合凝結いよ〳〵甚しく。乃ち風氣の土水に凝たるは鹵と爲り鹻と爲り燄硝と爲り芒硝と爲り礬石と爲る。且又水土の火氣の水土に結たるは。脂と爲り硫と爲り礁石と爲り礬石と爲る。且又水土の能く其質を調和する處には。風火の氣も亦能く含畜し。鹵鹽脂鹼消石硫黃礬石等自然に多く湊りて。乃ち土質を凝結す。其脆弱に凝りて塊を爲したる者をば輭巖と名け。結定する

の堅固なる者をば。硬石と名く。此を人の身體に喩るに。先づ巖石は骨幹となり。土水は皮肉血液と爲り。草木は毛髮と爲り。萬物漸々化育する中に四養の妙合變化に因り。且又照温の靈機に頼て。草木の腐壞する際より昆虫を發生し。水泥の温釀する間より魚介を化育し。活物愈蕃息して飛禽走獸蛇龍の類までも森然として發育し。遂に今の現世と爲れるなり。且又所謂巖石中に含む所の諸種の體氣數多の年所を歷るの間に地柱靈氣を釀成し。其精華を發するに及ては珠玉と爲り寶石と爲り。又其凝固の極堅きは金銀と爲り銅鐵と爲り。或は其性流瀝するは鍾乳と爲り石髓と爲る。或は靜より動に赴き或は無より有を出す。變化百出勝て紀載すべからず。然れども皆四元より原基する者にして。悉く人類の徳行を修め性命を保するの養料なり。故に此土石草木活物の三種は或は食物衣服と爲り。或は居室器械と爲り。或は藥物玩好と爲り。凡そ人世の營爲に於て闕べからざるの緊要たり。是以て地球人類の本處たりと雖とも此三種豐饒にして而後に蕃息することを得べし此を鎔造の概略とす。視るべし皇祖天神の人類を愛することの極めて懇到至仁なることを。

予製煉術を行ひて諸物の質を種々に變革し。其中に含畜する所の諸品を各々別々に取分て熟々性氣を沙汰し。萬物皆四元の妙合して化生する者なることを明に辯し得たる故に。兒孫の爲めに其趣を畧說す。

先づ分離術の最も試み易き者にて其端倪を言はゞ。素燒の蒸露罐に土石生植活物の中何にても一箇の物品を納れ。烈火を以て此を蒸餾すれば。先初に滴り來る者は淡水なり。其より漸々火を強くして此を煅ば。淡水盡て精液至り。脂油に硫氣の混したるを滴來す。此に益々炭火を加るときは其液次第に粘稠に爲て終には糊の如くなる者を瀝出するに至り。其物質の燒盡て滴る液の絶するを度として止む。而後に其火を去て罐を冷し。其餾滴したる液を見れば油質の者ありて上に浮み凝定す。世は脂油に硫氣を混じたる者なり。故に今假に名を命して硫脂と云ふ。此硫脂を取去れば其下は精液なり。此は即ち水に屬す。又其液下を視るに沈底する者あり。此を熟視すれば即ち鹵質なり。此を假に名て鹵鹼と云ふ。此三種の上中下に分る所以は。硫脂は水より輕く。鹵鹼は水

より重き故なり。又其罐内に燒殘りたる渣滓は悉く土質なり。總て一切の物質を燒煆して分離するに其理大抵皆（頭注云大抵といへば皆はいかゞ皆といはば大抵はいかゞ）同じ。右の如く分離したる四品の中にても。水土の二種は論ずるにも及ばず。其餘の二種を審諦するに硫脂は火の假に質を爲たる者にして。鹵鹼は風の假質なり。土石生植活物の種屬億兆の品類ありと雖とも。法を以て其質を製煉すれば。悉皆土水火風の四質に復る者なり。而して此四質なる者の更互凝結して能く萬物を變出すと雖ども。自ら其性よりして揮發運動を能して物を成すの妙ある者に非ず。此に就て彼四質の主宰として萬物を發育するには如何なる異氣ありて斯の如きの妙を爲すやとかの四質の假質たる諸物を取て再三此を煆化燒煉して試るに。其物を成ことは毎に天日より賦する所の造化の靈氣を得て能するなり。故また其靈氣如何と探索するに諸物各々含む所の精粹なる一物あり。其質瑩明にして虛輕なること茅花英の翻飛するが如く其性極て透徹なり。是則造化の靈氣なり。按ふに此物も亦生氣の脫殼なるべけれど他物に比するに大に靈異なるを以て假に此を造化靈と名く。（頭注云造化靈と云時は靈はやがて神魂にて生活のものなれば靈液などの例を思ひて靈質と名けばいかゞあらん靈の質なれば也）水も此を脫すれば水の用を爲すこと能はず。土も此を脫すれば土の用を爲すこと能はず。此に因て此を視れば此を造化靈と名て四元の精質萬物の靈質と稱はむも强說に非ずと知るべし。予製煉術を行ひて此物を取るに。毎に鹵鹼類より多く此を得て。硫脂は此に次ぐ。水土の二質には此を含むこと少し。何となれば。此物を將來する所の原由は即ち天日より發越する所の炎熱の精氣にして鹵質に依託して假に質を現したる者なればなり。又彼鹵鹼は風の假質と云ふと雖とも其凝結するは悉く日輪の炎氣に因る是れ鹵鹼は其性既に薰園中に發し水土に託して質を成すが故なり。（既に上に說たる如く、薰園は地球を圍繞すること外郭の如き者にて、其厚さ大約二十度の外に至る、是を以て日輪既に沒すと雖ども、地平より二十度餘り下る迄の間は、尙能く物を見ることを得るなり、是即日光の薰園を照す餘光なり、日出の前も亦これに同じ、俗に此を薄明と云ふ、

故に地上千里許り高さ迄は薫氣恒に薫り充て日輪地球を照すと雖ども、先づ此薫氣の濛々たるに受け，其より千里許の薫園を照透して而後に地上に達す、其千里許の薫園を日光の照透する間に薫氣化して鹵氣を醸生すこれ鹵鹸の質には靈氣を含むこと最も多き所以なり、且又地上に生息する者は皆此風氣中に化育するを以て鹵氣を含まざる者あること無し．是鹵氣を含むそれに非ざれば風氣中に存する事の能はざるが故なり、）（頭注云変聞えず）○予近來四資變化の理を講明し。萬物消長の機を推窮し。竊に天地生々の玄旨を窺得ること有り。因て其義を茲に説示さんことを欲すれども。其趣頗る縹緲荒唐たるに類たれば。蒙者此説を聞かば彈指して容ざるべく。苟も幽冥を默知する人に非ずば會得すべき事に非ざるを以て。唯其概略を述んと欲するに。此れ亦風を抓み影を捉ふに似たり。然れども四資の變化に通ぜざれば。天地の造化に暗く。萬物の消長に達せざれば。人世の經濟に疎し。此緊要の大事を講ぜずんば。學者天意を奉將し。人世を安集するの憲章あること無んと。則ち卑にして邇き者より導きて。高に登り遠に至るの階梯を爲さむとす。其は天地生々の玄機に於てその最も易曉者は土中に風を含めば則ち火を發し。水中に火を含めば則ち風を起すの理なり。此二件を能く了解すれば則窮理學の端倪を得たるなり。既に窮理の端緒を得れば其より萬物消長の理を工夫し漸々此を推究めて造化の妙を知るに至るべし夫風火は氣有て質の無き者なり故に能く物質に透徹依託して揮發運動の妙を爲す。水土は質有て氣の無き者なり。故に精氣を煦畜含藏して化育消長の用を爲す。而して其發生も成熟も悉く上天賦與の靈氣なるもの主宰たるは論なし。且又鹵鹽は靈氣を含むこと最多きが故に金石草木を始め昆蟲飛禽走獸等に至る迄其生長するも枯死するも悉く鹵氣の有無と多少とに係ること既に上に論ずるが如し。予術を行て諸物の質より此物を取て精く其性味功用の妙を爲す所以を思ふに鹵鹸も亦二種の差別ありて其性の懸隔すること實に氷炭の相反するが如し。而して天生を鹵とし人生を鹽とするの論は闕からず。先づ其第一種を固鹽と名け。第二種を鬆鹽と名く。鹵鹻に此二種の異性あることも。天地生々の靈機の妙用にして。然せざるを

得ざる理わるが故なり。頭書云此をわけること先つ諸物に含有する所の固鹽を法を以て分ち取るに。即結固して凝塊す。此堅塊を爲す所以は其質の粘硬にして重實なるが故なり是を以て固鹽は能く諸物の腐壞を止め。枯死を防くの性有り。故に此を消散せんことを要めて。烈火を以て燒煆すれども容易に解釋せざる者なり。金石類には此を含畜すること多き故に。能く千載を經て腐敗すること無し。然れども膬鹽を含むこと少きを以て。生氣運動の性なく。成長すること甚遲し。又膬鹽は芒脆にして鋭利なる者なり。此鋭利なる所以は其質輕虛にして芒發するが故なり。是を以て膬鹽は諸物の生氣を增し。運動を進るの性あり。故に此を貯有せんことを要て。密器を以て閉藏すと雖ども。容易に耗散する者なり。活物は此を含畜すること多き故に。能く暫時の間に生長することを得す。然れども固鹽を含むこと少きを以て硬堅重實の性なく消滅すること甚た速し。抑も此二種の鹵鹻は同く是れ風氣の化したる假質なり。然るに其を分別するに及では右の如くに性氣相反することは如何なる緣由ありて然ると云ふこと。沈潜反覆して此を原るに。即ち是れ天工の玄妙不可思議なる製煉術にして。此二種の鹽あるに非ざれば。則ち萬物を發育して人類をして生を養ひ死に喪するに恒に餘裕ありて其德行を成就せしむるに足らざるが故也　予不敏也と雖も竊に造化の玄機を窮めんことを欲し。種々に鹵鹽を製造し。（頭注云變化豈得㆑盡乎）「以て變化を盡せり」嘗て試に所謂靈資を以て此を鹵鹽に混するに。少しく混すれば則ち凝固充實し。多く混ずれば則芒發虛膨す　凝固充實する者は其質緻密にして重硬なり。即ち金石類に所含(ふくむところ)の固鹽是なり。造物の主これを用て經久すべきの物を製す。又芒發虛膨する者は其質鋭利にして輕脆なり。即活物類所含の膬鹽是なり。（頭書云造化靈に依て固と膬とに別ると云ふときは固鹽膬鹽と別にすべからず唯に鹵鹻とのみ云てあるべくおぼゆ）　造物主此を用て運動すべきの物を製す。固鹽に少く膬鹽の混したる者は木類なり。膬鹽に少く固鹽の混したる物は草類なり。且又靈氣の固鹽に含たるは多年を經ると雖とも脫去すること無く。膬鹽に含みたるは暫時の間に消失す。是れ膬鹽は其質虛膨輕疎にして固鹽は堅硬充實なるがゆゑなり。凡

そ此二種の鹵鹻右の如く其性氷炭相反すと雖ども元は即ち一箇の鹵質なり。只是日輪の精氣を多く混すると少しく混するの神機のみにて。其性の相反すること斯の如きに至る。近く喩て其理を詳に示さんに。彼木類は其質金石よりは輕虛にして水に納れば即ち浮ひ。腐朽することも亦速かならずとせず。然れども此を燒て炭と爲すに至ては。水に納れても即ち沈み。百千年を經ると雖ども。腐朽すること無き者なり。何となれば火も亦日輪の分氣なるを以て。此を燒く間に岡鹽凝結するが故なり。然れども炭を取て久しく火に燒ときは。岡鹽變して朧鹽と爲り。須臾に日輪の分神を脫去す。終に解釋して土質に復る者なり。初學の徒能く此等の理を會得すれば。即造化の玄旨を窺得るに至るべし。予が製煉の術も他なし。唯是天地の神意を奉るのみ。彼朧鹽の靈氣脫去するに從て。鹵氣鹽質の共に皆消失するも實に耗散して盡るに非ず。元來薫園中の物なるを以て乃ち風氣に復るのみ。是皆皇祖神魯岐神魯美命の造物の妙機にして。枯たる者は盡るが如くなれども種兒は曾て絕すること無く。死する者は滅るが如くなれども。靈魂永く消せず。然れば此の天地の玅用を稱して造物者の無盡藏と云へるは實然なり。

上に論じたる如く。硫黃明礬鹵鹻等の岡鹽土質を凝結すれば巖石と爲り。其巖石中に含める所の靈氣精英を發するに至ては則ち玉類を出す。又其玉の渾成すること能はざる者は諸青と爲る。蓋し玉類は精華を主として產するを以て。釀熟の熱化太過して其性却て輭脆に屬す。故に火に煅ときは其質即ち解散す。是以て玉を造るには。火化を用ずして琢磨に從事す。又岡鹽の醇厚に凝結したる者は金類なり。故に此を猛火に煅ときは則ち其性愈よ堅硬を益す。是れ此物に混雜する所の半金(頭書云半金の語いぶかし)及ひ土石等の煅化に因て分離消散するが故也。是以て金類を製するには鞴藥を用て鎔煉する也。又固鹽に少しく朧鹽を混して土氣に妙合したる者は木類なり。木類は岡鹽頗る多きが故に。其質堅實にして重く且能く經久す。然れども朧鹽を含むことも。金石よりは頗多きを以て。成長することも早く。腐朽することも亦早し。而して其寒に堪へ霜に遇ふと雖ども枯ること無きは皆是れ岡鹽の所致なり。又此を燒て炭

と爲て百千年も腐朽せざることは。是れ燒て炭と爲すの間に。風火の化にて多く固鹽を含畜するを以て。其性石類に近き者となり。土質の燒けば瓦磚と爲ると其理異なること無し。又其落葉することは葉には固鹽なければなり。葉にも固鹽を含みたるは四時葉の凋むこと無き者なり。花は固墟なく騰鹽多きが故に。其謝すること甚速なり。菓實初めは固鹽を含む。然れども其長成するの間に。固鹽の氣漸々脫去輭化して。其熟するに及ては騰墟と水質のみなる者多し。只売ある者は熟すると雖ども。能く固鹽を保全す。是れ売ある者の實は即ち種兒なるが故なり。凡そ種兒は小大に拘はらず固鹽騰鹽共に多く。且又造化靈を含畜し生々不休の神氣あり。故に時を以て此を蒔けば即能く發生す。若又此を貯て多年を歷るときは枯死腐朽して土質に復ると知るべし。然れども亦固鹽多き處に藏すれば千歲を經ても生氣脫せざる者なり。草類も亦然り。又騰鹽に少く固鹽を混し土質に妙合して發生する者は草類なり。故に草は騰鹽多くして繁衍成長すること甚速なり。然れども固鹽を含むこと少きを以て其質輕虛輭脆にして氣候の寒きに堪ること能はず。霜に過ふに至ては即ち枯て腐朽するなり。或は固鹽を含有して霜に傷れざる者ありと雖ども。能く成長するは有ること無し。總て草は根に固鹽ある者は。枯るゝと雖ども。翌年暖氣至れば。宿根より新芽を發して再復繁茂すること故の如し。若し根にも固鹽の無き者は。皆一年限に腐朽して消失す。宜く種兒を取收めて其物を絶すること勿れ。草も花及び菓實等は木類に大抵異なること無し。旣に上にも云へる如く。凡そ種兒には天地生々の神氣を含畜するを以て其の種兒を生せんとするの前には各自に精氣內蒸して己が神氣を醸成し。生氣旣に充て乃ち菓實の蔕を抽つ。是時に當て揮發透寶なる精氣先つ前驅して英花を秀發し。而後に菓實其跡に結ぶ。故に草木の花には。揮發透寶なる騰鹽ありて必ず香氣を含む者なり。又鹹鹺火硝硇砂等の騰鹽に。生々の靈氣を含みたるもの。水土の精に妙合すれば則ち揮發運動の活物を生じ。或は走り或は飛び神機愈よ出て愈よ奇なり。其活物の中に於ても固鹽の最少き者は昆蟲なり。故に氣候の寒を催すに從て。漸漸衰弱老廢し。霜下るに及ては靈氣脫去して乃ち死

し。終に腐壞して土質に復る。然れども其魂魄は尚消滅すること無き者にて。其死たる處の土中に留り翌年氣候の溫熱を得れば。則ち故處に細虫を生じ。漸々に復蕃息す。又蟲類の中にても頗る固鹽を含みたるは。寒氣至り霜降ると雖ども。或は幽穴に蟄し。或は深淵に潛みて。年所を經歷する者も亦これ有。鱗介類は昆蟲よりは生氣强く。血液脂膏も亦多し。故に寒氣に遇ふと雖ども其性命を失ふに至らず。禽獸は血液脂膏殊に多く。寒に堪る事最强し。脂膏は火を含むこと硫黃の如し。故に固鹽に非ずと雖ども頗る凝固の性ありて能く寒氣を防止する者なり。凡そ金石草木の類も、天地生々の靈氣を稟て產する者なるを以て。皆各自に性魂あれども極て無知なる者なれば。容易に活物に昇進すること無し。然れども金石よりは草木類は活物に變じ易し。其昆蟲に化し易きを以てなり。活物も昆蟲魚鼈等の屬は。其物死するに至つては。生魂大抵水土の中に歸り。又水土の中より化生す。多年風氣中に寒暑を經歷して。其性を煉りたる者に非れば。水土を脫離して其魂薰園に皈ること能はず。是よ蟲魚鼈は活物の最も卑下なる者なるがゆゑなり。禽獸以上に至りては。其死するときは則性魂悉く風氣中に皈る。故に活物も禽獸と生るゝことを得るに至ては。漸々昇進して人類に投生するの理あり、又人類に至ては。生氣脂膏共に多く。血脉運動整正にして。全軀筋骨雄健なるは論なし。且又聰明睿智衆物の數理を究め。德を積み道を修て。天地の化育を賛け。明果英斷高く神明に通ず。實に是れ宇內の精英にして萬物の至靈なり。此身は暫時四元凝結の假質たりと雖も。靈魂脫売して體を離るに及ては即ち天に上て神と爲るべきの者也勉哉眼前の細利を募り須臾の小樂に耽り。天地の神意を蔑如にして神と爲るべきの大業を失ふ事勿れ。

○予此書を著して。天地の大德を講究し。四資の變化を辯明し萬物の製煉を精詳にし讀者をして直に其事に從へば即ち其功を成ことを得しむれども。造化靈を取るの一法に於ては姑く秘して此を著さず。何となれば。予が此の物を取て時々用る所と云ふは。唯是れ此を鹵質に混和して堅硬充實ならしめ。以て金石類に含むの鹽を製し或は虛膨輕疎ならしめ。以て活物類に有るの鹽を作り。鹵質を自在に變化して。

兒孫等に造化の妙機を講するのみ。其他世界の人事に於て此物に用あること無し。殊に此物は天地生々の靈氣。萬物の精神たれば。苟も道を學びて天地の神意を知り。天意を敬ひ行て。天下の蒼生を救ふの人に非ざれば。此を取るに其の恐れ無きことを得ず。且又材徳無して其術を縱にすれば。或は慢心を生ずることも有り。是を以て此一法は秘する所なり。況や天意を知て此を行ひ世界を濟救せんと欲する人に至ては。固より自得するの事にして。豈此信淵が傳を俟たんや。抑も此の造化靈なる者は即ち天日より不斷に薫園中に照射賦與する所の炎氣にして。彼の四資に假託して暫時の間其質を現したる者なり。故に予製煉の秘術を盡して此を取得たるも。永く貯るに術なく。密閉なる硝子中に此を蠟封固藏すと雖ども。半日許の間には大抵脱去て風氣中に皈る。其性の透竄なること實に言語に絶したる者にて。固より人間に貯置くべきの物に非ることを知る。元來日輪の精氣なるを以て熱を好み寒を忌む。故に氣候寒冷なれば則ち伏して衰廢するが如く。温熱を得れば則ち透竄の勢氣殊に甚し。是を以て炎熱の國土には此物多く。寒冷の土地に此物少し。故に赤道下の諸國には物産甚多く。兩極下の土地には雪と氷のみ多し。此に因て此を視れば。天命を分賦するは産靈の神機に賴り。萬物を發育するは天日の炎熱に係ること論なし。而して萬物地中に備足すと雖ども。金玉の錯雜の多き。草木の種屬の繁なる活物の族類の衆なる此を人世の日用に供するには。再三も再四も辨別して精く製煉するに非ざれば。人類性命を保續するの料に充ざる者多し。故に國土に物産有と雖ども。製煉術を知らざれば。貨財を隆興して天下の大用を辨ず可らず。然れば億兆の人民を濟救せんと欲するには先づ此術を講して資用を豐饒にして而後に教化施すことを得べし。是故に明君は大道を修めて天命を敬ひ。身を儉し行を愼み。勉て國家の貨財を富厚にし。下民をして生を養ひ死に喪するに餘裕あらしめ。而後に學校を立て教化を施し。法度を嚴にして其の民を警戒す。是以て賢材雲の如く起て國勢益々隆盛なり。又暗君は大道の要を聞くことを勉めず。故に天命の畏るべきを知らず。身を儉せず行ひも愼まず。放佚淫樂を縱逞し。政事を荒怠して。唯美酒佳肴の飽

ざると。淑女の得がたき而已を深憂として。敢て國事を慮ること無し。上たる者斯の如くなれば。下には此より甚しき者あるは無道國の定弊にて。群臣も亦競て諂佞を専務として。唯其君を己が存分に愚弄し難きと。權柄の失ひ易き而已を深憂として。敢て匡格を議する者の無きに至る。ゆゑに。國體日々に頽敗し。邦内年々に衰耗し。下民飢寒に困窮して。妊婦は自ら墮胎して。其兒を殺害する者幾千萬と云ふことを知らず。夫れ國家に主たる者は。上天より格別に寵を蒙りて世に生れたる者なり。當に天意を恭み行ひて天下の蒼生を安んじ。以て其の寵靈に答ふべし。然るに政事を荒壞して。年々數萬の赤兒を殺害せしむ。是れ國君の自ら殺すに非すして誰が罪ぞや。人類は皇祖大神の極て慈愛する所なり。故に萬物を發育して保續に饒多ならしむ。然るに經濟の大道を講明せず。鎔造の神功を廢翔し。人類をして飢寒に困せしむ。此豈に天吏の職ならむ哉。國家に主たる者は能々此理を熟察すべし。假令其始を克せずと雖ども。前非を悔て自ら行を改め苟も其終を善すること有らば。天罰猶免るべし。唯是れ務て蒼生を濟ふべし。國家に主として邦内の人民を救ふことは難事に非るなり。能く己が私慾を抑へて。身を儉し行を愼み。經濟の要道を講究して。盛に人材を教育し。物產を興し。交易を通じ。法度を嚴明にして國を經緯せば上下富豐人類漸々に蕃息すべし。是以て國家を富し兆民を安集せんことを欲する者は。必ず先づ鎔造化育の神意を精究するを要とす。○地球は人類の本處たることは段々に審に論するが如く疑ふべき者あること無し。然るに聞ならく西洋の夷狄等一箇の邪說を妄作して。此の地球は禽獸の居處にして。人類の居住すべき本處に非ずとして其の說に。禽獸は生るれは則ち自ら能く行動し。身に羽毛爪甲具るを以て衣服履鞋を用るに及ばず。隨處に食て以て生育するが故に、稼穡の勞も倉廩積蓄の煩も無く。また供爨器皿の用も無し。便に隨て休息するを以て宮室を構るに及ばず。嬉遊自ら適し常に餘閒あり。既に貧富尊卑の殊なる無れば。豈に功名勢利の慮あらんや。唯是れ熙々逐々として日に其欲する所に從ふのみ。人類の生るゝは大に此に異なり。母先づ甚だ苦痛して赤躶にて出產す。口を開けば便ち哭く。

既に世に生るゝの難を知るに似たり。初生嬰弱移歩すること能はず。其壯なるに及ても。自ら經營せざるときは食物あること無く。身に羽毛なきを以て衣服を製し。室家を作らざれは。風寒雨露に堪ること能はず。故に農夫は四時泥中に辛苦し。百工は終年手足を休息すること無く。商客は山海の間に艱難し。士人は神思を其の職に殫究す。人類は生涯愁苦して以て死に至り。禽獸は終身嬉遊して以て樂を極む。是れ地球は禽獸の世界にして人類の居處に非されはなり。故に地球を以て人類の本處とするは禽獸と群を同ふせんと欲するなりと論ずと聞たり是もし信ならば。大に眞理を亂る邪說なり何となれば天皇祖神篤く人類を愛育し。此大地を造て居處と爲し。凡そ人世必用の諸物を全備し給ふ神恩極て廣大なるに。其大德を忘却して或は此を苦界とし。或は此を禽獸界とするに至るは是其煦育の洪功を廢却するに非ずして何ぞ。若し夫鎔造の神意を講究し天地の化育を參賛して以て世界を經營せば萬物豐饒し。蒼生皆腹皷を打て世界に餘の歡樂あらんを焉ぞ禽獸界苦界と云て戻を上下の神祇に獲べけんや。是故に予此書を著して經濟の精微を究極し。世界の貨物を富饒にし。以て億兆の生民をして餘の豐樂あらしめんと欲し。先づ最初に外道妖惑の邪說を闢き。以て大道の要を明す。若夫れ地球を以て禽獸の世界と爲は。則ち上下の神祇積年資生の神機を勞して此人世に發育する所の珠玉寶石丹青金銀硫黃明礬鹵礆[illegible]硝臭麻木綿藍葉紅花蘇木茜草紫根黃蘗其他香料藥品等皆是人類有用の物たり。而して禽獸に於て何の用かある。且夫人類初生の間柔弱なるは豈に人類のみに限らむや。萬物の初生皆然り。況や萬物の至靈にして天地に參すべきの大器なれば。晩成するは論ずるにも及ばず。赤裸にて世に生れ衣服に文章を繪き。器玩に美玉を飾り。且又宮室に良材を彫刻し。金璧を結搆する者は。貴賤賢愚の等を明にして德を勸る所以なり。禽獸は至卑至蠢なれば德を修る者あること無し。是以て終身唯其羽毛にて風寒雨露を禦ぐのみ。且其稼穡畜積供爨等の勞なしと雖も。食物を營求するの苦み無きことを得ん乎。彼餌を貪て罟獲陷阱に納るを見れば其の情を察するに足れり。此に因て此を視れば禽獸の地球に在るや。食物は足らず。求る所は得るこ

と難く。小は大に食はれ。弱は强に役せられ。終身困苦して死するのみ。斯るを大地は禽獸世界たりと爲むや。抑西洋の夷狄等斯の如き邪說を吐出せること熟々其の本意を察するに强ちに惡を人に勸めんとには非ざれども。國土偏僻にして大道の要を聞くことを得ず。鎔造の神意に通ぜざるを以て其蠢愚を知らず。邪妖に陷ることをも辨へず謾に蠻猾なる妄說を作れるのみ。また印度國の敎法は大地は苦界なり。此天地を捨て別に極樂の淨土ありなど說く故に。其說に惑ふ者は。或は佛と成らんことを欲して參禪を以て要務とし。痛く肉食妻對を禁し。子孫を斷絕する者甚多く。或は佛に媚て一向に極樂淨土に至らんことを願ひ神祇を崇敬することを知ざるに至る。夫れ天皇祖神人類を愛育して萬物を生ずるに。肉食は滋味の最美なり。且又男女の道は快樂の至極にて人類の蕃息するは此道あるが故なり。然るに美味と男女の道とを禁じて。人類の種兒を絕するは是大地を無人曠荒の野と爲して以て禽獸の栖居と作さんと欲するなり。此れ豈に天地の神意ならん哉。且又極樂淨土と云を願ふ者は。皇祖鎔造の天地間に生れ。其發育し給ふ物品を以て祖先以來飽までに食ひ煖に衣て成長しながら忽ち其大恩を忘れ。此天地を輕視して沒後他境に遷り去らん事を謀るにて。天神地祇に反逆を存ずるなり。殊に知らず彼の淨土の說は印度人一時の戲說なることを。玆に天地の人類を愛育する其大略を論するに。青山綠水の勝景なる。春華秋英の馥郁たる。美酒鮮肴の滋味ある。綾羅錦繡、輕煖なる。器玩金玉の煒燿たる　一も人類に可ならざる者なし。恩顧の懇到なること至れり盡せりと謂べし。然るに何等の怨ありて右樣の叛心を萌せる。彼の印度敎の原を發せる婆婆悉多瞿曇氏も亦天祖の產靈に因りて此の大地に生育せるに非ずや。然るに人類を(頭書云人類をのをは恐らくはの丶誤ならむ)　種を絕斷し其魂魄をも誘ひて此を他境に引導し。以て大地を荒野と爲む事を募るは。何ぞ其不義の甚しきや。予熟々これを按ずるに。印度敎を作れる瞿曇もしくは天稚彥が殘魂の再び體を受たるには非ざるか若それ彼に非ずは此の大地に人類の蕃息するを忌惡ふべき理なければなり。其は神代に彼の天意に叛して此大地に主たらん事を謀り產靈の神の天罪（罰カ）を蒙り

其意を果さずして死せれば。其靈永く黃泉に放逐せられ。無窮に彼界に沈淪して在れど。其殘恨の靈なほ此の大地の幽冥に潛伏し。間を伺て印度なる一國王が妻に託生し。己が宿怨の深きに任せて。右の如き邪說を開基せしを。其の後天刑を受たる惡鬼等往往此に黨し。所謂幽冥中に於て一藩の妖界を造り。數多の愚人を勾引するも知るべからず。故に西洋印度の二敎は皆悉く邪魅の說にて大に眞理を亂る者なり。初學の輩彼徒に誘はれ誤て魅界に陷ること勿れ。大道を講する者の少きを以て世人邪魅の爲に迷惑せらるゝ者甚だ多し故に今爰に造化の妙機を精究し。以て天地の洪恩を詳明にす。若能く勉强して此說に從事すれば。人世の豐樂今に百倍すべければ。人々自然に鎔造の大德を欣戴して。此天地を除きては別に極樂と稱すべき國土なきの眞理を會得すべし。〇天柱記に說たる如く。大地の旋りに產靈神の定給へる大運と伊邪那岐命の定給へる小運との差別ありて悠久磐古移動あること無く。地球旋轉して日輪の光炎を受け。雲行き雨旋して品物流形し。世界萬國皆三物(頭注云三物の御頭書に曰△何々の」正臣謹て案するに三物は產物のあやまりならんか)に富み。飢寒と疾病の患苦を免れ。人々嬉遊歡樂して。其の天年を保全することを得る者は。皆是れ產靈神の大德に賴る。我人斯の如きの洪恩を蒙りて此の世界に住ながら。無尊ては忠恕の道をおこなひ。こゝろを盡すの功を積みて。覆載生育の萬一にも答ることを務ざれば豈天罰の畏れ無きことを得ん哉。予此のことを念ふ每に總身慄々として毛起す。然れども喜ぶべきことは。神明の人類を愛したまふこと苟も前非を悔て道を修るの志を發せば則ち天赦速かなり。故に道を修んと欲するには。己が欲せざる所をば此を人に施すこと無く。勉て義に從ひ善に遷るを要とすべし。以往の惡行あるを畏れて改るに憚ること勿れ。若夫れ一箇の妄見を發し舊惡既に多きを以て今に至て其行を改むるとも免るべきに非ずとして。愈々惡行を增長するを此を名て愚人と云ふ愚人は必ず天罪を受く。或は惡事は行はずと雖ども。己れ貨財に富たるを榮として。人の困窮を見ながら急救を惜みて施すこと無く。益々財貨を積畜するを勉むる者を名て貪人と云ふ。貪人も亦必天罰を受く。何となれば。

珠玉金銀米穀衣類器械牛馬等の諸物は、皆是天地の生ずる所にして。都て人類を養育する料なり。然るに私心を以て蓄積し。以て世界の融通を塞ぐ。其罪至て大なり。故に貪人と愚人とは妖魅を罰するの嚴獄に逐墮せしめて、千歳盡る期なきの痛苦を受しむ。畏れざるべけんや。是以て志あるの士は心を盡し性を知るべし。能く其性を知るときは則ち天地の心を知る。能く天地の神意を知て此に敬事することを務れば。則ち道德を成就す。若夫れ天地の神意を知らざる者は。假令ば慬慎にして不義惡業は爲さずと雖ども。神明に敬事するの功德なきを以て、其人生涯糞尿の納器たるに過ざるのみ。幸に天地の寵靈を得て、萬物の靈と生れ。而して生涯糞尿の嚢と爲て死することは恥べきの甚きに非ず乎。且又死して冥府に逝て幽冥大神の神廳に至らば何を以て復命せんとするや凡そ人類の世に生るゝは先づ上天より冥府に天勅ありて。新生再生各々に賦命あり。幽冥大神乃ち其天命を奉し其靈魂を神廳に召し各々此に警戒を示して現世に至らば必ず務て道を修めて能く其德を成就し。而後に來て復命すべき由を諭し給ひ。各々其誥命を領承し冥府を辭して胚胎する故に人々皆其心裏に仁義禮智の性あらざる者なし。是以て心を盡し性を知れば則ち天地の神意に通達するなり。然れば其沒するに及ては靈魂再び冥府に逝て其神廳に復命し、幽冥大神能く其人の在世間に行ふ所の功罪を檢明し。仁義を行ひ人類を濟ひ。道德を成就せる者をば功を錄して上天に奏聞し皇祖天神其成德ある者をば美として此に褒賞するに神通を以てす。於是乎靈神各々勅許の神通を得て天に上り地に下ること共に自在にして。始て諸神の席に列することを得るなり。又其天命に違背せる者をば罰ずるに種々の嚴刑を以てす其天刑を蒙るに及ては千萬億歳を經ても脱すること能はず是を以て罪多き靈魂は自ら其の天罰を畏れて冥府に復命すること能はず。遂に糞圍中に漂蕩す。此を名て遊魂と云ふ。禽となり獸となり虫となり。中にも佛法に歸依せる者は多く屎鴟とぞなるめる。此の亡命の遊魂等常に朦々昧々として濛氣中に群りて種々變を爲すこと有り。幽冥大神より毎日三度の熱刑を行ふ。然れば遊魂も甚だ苦痛する者なり。此妖魅等の三熱の苦刑を受る仔細などの詳なることは伊

吹酒舎翁の大祓妖鬼論に見えたり。蓋し此游魂も亦自ら能く前非を悔て善事を行ひ。人世に功あるに及ては。或は勅許を蒙て邪魅中を脱する者も亦是有り。然れども一度魅道に陥りて日々三熱の酷苦を受け。後悔して善を爲さむよりは。此世に存生の間に天意を敬ひ行て世界の蒼生を濟ひ。上天の賞美を蒙るに如んや。既に上に說たる如く大地は元來人類の德を修め魂を煉しむるの道場なり。故に造化の神意を盡すこと論にも筆にも及ぶことを得ず況よや天地成物の理悉く皆人類をして生を營み德を成さしむるの妙機に非る者無き事を。是を以て人類に生を營み德を成しむるは即經濟の大道にして。實に天地の神意なり。蓋し人世に生るべきの靈魂極て多きが中に。既に世に生るゝに及ては富貴なるも有り貧賤なるも有り。或は勇壯强健なるも怯懦柔弱なるも有り。或は美麗なるも醜陋なるも有り。或は聰明睿智なるも。又は甚愚癡曚昧なるも有りて。同く人類たりと雖ども。其各々異なる所以の者は皐祖天神の神慮に於ては至仁至慈萬魂平等にして其天命を賦與するは無偏無黨なりと雖ども。教化要錄に說たる如く靈魂も由來すること種々ありて。一旦世に生れ出れども功業無くして空く復命したるも有り。或は功業なりと雖ども神と爲るにも至らざるも有り。或は罪ありと雖ども悔て行を改め刑するに忍びざるものも亦これ有り。或は牛馬及び其他の禽獸活物等より昇進したる者も有て。其靈の醇粹なると溷濁なるとは自然に幽冥に於て差別あること必せり。故に富貴に生るべきの靈魂は固より神祇の寵を蒙るの理あり。是以て人君は上下の神祇最鍾愛する所なり。されば國家の主たる者は天地の神意を己が意として。天地に代つて蒼生を安集すべきは固より其天職なり。既に論じたる如く人類は未此世に生れざる以前に。何れも冥府に於て上天の明命を受たる者なれば。人々皆心裡には其覺ありて善を爲せば褒賞を蒙り。惡を爲せば刑罰を受くべきの天理を知る。然れども善を務る者は少く。惡を行ふ者の多きことは。衣食の足らずして飢寒の身に迫るに堪ざればなり。是故に人君天地に代て蒼生を救ふの專務は。道を學び身を儉し物産を興し。財貨を饒かにし。下民をして生を養ひ死に喪するに餘りあらしめ。而後に學校を立て教化を施し。節制

を嚴にして國事を經營せば。兆民各々其豐樂に安堵して。人々始て其本心を行ふことを得べし。所謂物產を開き貨財を饒にするの要道を講明する者は即此鎔造化育論なり

文政七甲申の年七月既望

南總隱士　佐藤元洋甫撰

鎔造化育論

凡例

凡此書三編總て是れ物產を開き。製煉を精くし。化財を豐饒にし。邦內を富實し。下民を安養し。武備を精銳にし。國勢を隆盛にするの良法にして。經濟の要論なり。既に序說に云へる如く。一切の諸物は皆是れ土水火風の變出にして。其質は悉く土石生植活物の三種に統す。而して此三種は人類に於て或は食物衣服と爲り。或は宮室器械と爲り。或は珍寶藥劑と爲る。是皆人世の必需にして。一も闕べからざるの要用たり。博地衆民ありと雖ども。經濟の法に明ならざれば。國勢漸々衰耗して或は爲すべからざるに至る。國家に主たる者は心を盡さゞる可ん乎。我が祖父不昧軒翁曾て經濟學の世に明ならざるを憤り先考玄明窩翁に命し。遍く四海に遊歷し以て其業を修めしむ。先考遂に道路に卒す悲哉。此の信淵が孜々として此學を講窮するも。只だ是れ父祖の宿志を述るのみ。今此書に著す所は。上編には土石類の製煉術を論し。中編には生植類。下編には活物類を論ず。

且又庶物の極て繁多なる。毎物に製造の精密を説べからざるを以て。或は彼に詳に此に略する者有り。或は此に精く彼に疎なるも有り。或は其種類の中に於て例と爲すべき一二を擧て其他は論せざる者も亦これ有り。然れども讀者前後を錯綜し。能く玩索して其理を推究し一隅を以て三隅を反せば。物として製すべからざるもの無し。凡そ天下の事件一理に就て能く工夫せば。萬理朗然として皆會する者也

凡上編に講明する所の土石と稱する者は。既に序說に論たる如く固鹽土質を凝結したる者にて。即ち硫黄及び諸礬鹵鹹砒硇玄精鹽藥等固鹽の氣土質に混して凝結すれば則巖石と爲る。其岩石に含畜する所の造化靈なるもの。數多の年所を歷るの間に漸々醸化變出して種々の物を發生す。而して其物の既に成るに及ては。各々性質同しからざる者なり。本草諸書には諸土金石玉石石類鹵石を分て其性味功能を論載す。是醫藥に供するを以て主とする者なり。然るに予が鎔造化育論は天地の神意を恭行して。水陸の物產を開發し。世界の財貨を富饒にして。天下の蒼生を濟救するの業なるを以て。頗る趣意の異なる事有り。乃ち寶玉類。寶石類。金質類。鑄石類。鍛冶類。半金類。硫黄類。鹵石類。石灰類。礬石類。砥石類。丹青類。陶冶類。の十三種に分ち以て諸物製煉の法を精究す。且又和漢物產家の金玉を論する者。皆金類を以て初に叙し。玉類は此に次ぐ。蓋し金類は人世日用に於ける必需の最たる物にして。玉類は不急なるが如し。然りと雖ども玉は天地の至寶神明も亦甚だ此を愛し。其美なる事世界此に比す可き者なし。唯だ其れ仁者の心のみ此物に比する事を得べし。是以て皇祖大神此を有德の服玩に飾り以て其心の美麗を表せむことを欲す。故に山神海靈をして醸化の妙機を盡し至精至華の寶光を發せしむ。是仁者を尊寵して人類に德を勸る所以なり。故に億兆の君師として經濟の大道を行ふに珠玉の用極て大也。こゝを以て此書には開卷第一に先づ寶玉の製造法を論じ。而して寶石を以て此に次ぐ。寶石も亦元來玉の種屬なるが故なり。蓋し神代は美玉多かりしこと古事記日本紀等に詳なり。然るに中葉以來玉の純美なるもの絕て世に稀也。出雲の玉造出羽の秋田陸奥の津輕等に玉に類する者ありと雖ども未だ精粹の寶光を顯さ

ず。此豈に德を修る者の鮮きが故に非ざる事を得んや。若し夫れ時に至り運應じ。眞主興て大道繇に行はれ。賢人君子多く世に生れ。治教上に隆に風俗下に美なるの會に遇はゞ。上天歡喜す。山海も亦焉ぞ精華を發するを惜ん乎。必ずや琳瓈璵璠瑾瑜瑤瑛琰然として委積山を爲す事有らむ者なり。

凡中編に講する生植と稱するものは。固鹽鹺鹽共に混じて土の精に和し。生々の靈氣に揮發せられ森然として化育する者なり。而して其中に於ても固鹽多きは木類と爲り。鹺鹽多きは草類と爲り。彼草木の繁庶なる本草には木類を山果。夷果。味果。香木。喬木。寓木。諸竹。灌木に類を分ち。草類は山草。芳草。濕草。毒草。蔓草。水草。石草。諸穀。諸菜。諸果等の類を分ち。以て其能毒を論ず。然れども此書に講究する所は物產を興し國土を富すを主とするを以て。乃ち木類を食果類。材木類。脂油類。紙料類。藥物類。香具類。染料類。器物類。名花類。雜木類の十種に分ち。草類をば百穀類。釀造類。諸菜類。服料類。藥物類。染草類。薦席類。花草類。雜草類の九種に分ち。以て製造の法を說示す。其撰次の他書に異なる者は即ち是れ趣意あり。

凡下編に講する活物と稱する者は。鹺鹽水土の精に妙合し。造化靈の揮發運動に賴て化育したる者にして。或は走り或は飛ひ。或は霧環中に呼吸して水土中に納るれば氣息すること能はず死する者あり。或は水中に氣息して水を出せば死する者あり。或は水陸共に氣息して死せざる者も亦これ有り。其の巧妙の神機は固より思議の及ぶべきに非ず。而して其種も亦甚だ多端なり本草には。昆蟲龍蛇諸魚龜鼈蚌蛤禽獸を分ち。而して蟲に卵生化生濕生あり。魚にも有鱗無鱗あり。禽に水禽原禽林禽山禽あり。獸に畜生。野獸。鼠類 寓怪等あり然れども此書は其水陸諸種を以て類聚せず。鮮用類。乾脯類。脂膏類。皮毛類。骨角類。藥物類。任重類。玩好類の八種に分ち。以て物產製造の法を講明す。讀者それ是を思へ。

校合一過　松浦道輔花押

凡そ物産を出す事最多きは印度諸國及び印度海の諸島を第一とす而して亞墨利加諸國これに次ぐ然るに蘭學の世に入るに及て好事の族其實否をも糺さず競て西洋物産の精妙を稱す夫れ物産の發生するは悉皆日輪の光炎に係ること序說に論載せるか如し彼歐邏巴の諸國は赤道を距る事四十度以下より六十度以上の間に在るを以て寒冷物産甚だ少く其衣食にも足らざるに困む是以て其製造の物品も精好なるは鮮し彼地の夷人等持渡りて交易する貨物は大抵他邦より買取來る者なり予も亦初めは其來由を詳にせずして好事家の虛吹に驚き物産製煉の良法を得んことを欲し蘭肚氏の門に出入すること七八年先づ予が從來嗜む所なるを以て彼國大炮鑄造及び點放の法火術等を論して其理を精究したる書三四部を得て此を閱するに何れも甚だ無調法なる者にて炮術の彈丸より基原したるの眞理をも詳審すること能はす我家の炮術より視れば實に小兒の戲に類す其の後又金銀銅鉄錫鉛汞銀等製煉の書を讀しに是亦悉皆藝窓の論にて銀に硫黃を和して黃金を製すべしと云ふに至れり「所謂癡人の夢を說くか如く言語に絶したる謬忘也」其他藥物製煉の法露水精液露滴油等性氣甚透竄にして一時即功あるに似たりと雖とも畢竟此等の鎖徒にて篤癃積痾の全治すべきに非れば此を用るも用ふる事無きも醫家の本事を輕重するに足らず且其疾病を論するは內景を說く事精密にして遺策なきか如くなれども其治療を議するに至ては博にして要すくなし故に蘭學の醫士に風癱鼓脹勞瘵癥癖等を治せしむるに別に奇異なる手段も有る事無く傷寒疫熱脚氣難産等を療するに至りては遙に皇國流の下に出つ何となれば蘭說の醫籍を觀るに艾葉を燒て造化の靈氣を增長するの法も無く又毫針を刺して揮發の神氣を激厲するの術も無し此二つの者は共に魂を反し魄を復するの神法也然るに西洋の夷人等未だ此を知らす況や烏頭天雄等を內服するを畏れて棄たる河揚の皮を用ひ以て壞症熱を治せんことを期望するに至る其醫事に於けるも迂也と謂はざる事を得ん乎此に因て此を視れば好事家の蘭學を尊崇するは唯是れ人に傚るに至らざる所を以てするに過ざるのみ是を以て西洋の物産學は予が取らざる所なり然れども天象星度の測量と航海操舶の熱練に至ては予も亦退行する事啻に三舍の

みにあらず何となれば大洋を横行して萬國に通津するは彼等か衣食を營求するの専業なり而して皇國に於ては官より嚴く禁錮する所なれは予亦これを講明する事能はざるを以てなり。

凡そ亞墨利加諸邦及ひ印度諸邦其他爪哇渤泥蘇莫太剌呂宋等は其他赤道下に密邇たるを以て物産極て豐穰にして物品製造亦精好也然れども是土人の他國に勝れて才智あるの故にも非す氣候極て炎熱なるを以て萬物皆上品に發育して製煉を勞せさるも自然に精好也是以て此諸地は從來飢寒の患ある事無く人民繁庶にして上下皆富豐也然れども兵勢甚だ怯弱にして漸々西洋人に併せらる抑此諸國の人民繁盛武器衆多にして其兵勢の怯弱なる所以は上下富饒を榮として恒に嬉遊を事とし共に長生の樂を貪りて死を畏るゝの甚しきか故也又歐羅巴は此に反し土地荒涼に人民貧窶にして恒に衣食の足らさるに困窮す是以て上下經營を事として巨舶に駕り大海に航し遍く世界を横行し苟も利のあるを見ては敢て危險を顧ず是れ恒に貧窮に困むを以て死の畏るべきを知らざる者也夫れ國人死を顧すして進取を經營せは兵威の强盛を致す所以也又皇國の土地は赤道下を距る事三十度より四十度の間に係り氣候寒熱各半なるを以て北狄の如く荒涼ならすと雖とも南蠻の如く豐熟なる事能はず故に經濟の要道を行ひ物産を開き交易を通し財用を豐かにして國事を營まざれは或は飢寒の患なき事能はす夫れ皇國は萬國の根本なり然るに物産の發育すること蕃衍たる蠻境に如ざるは如何なる故ぞと疑惑して輿地圖に就て熟按して始て其理を會することを得たり總て是れ伊邪那岐伊邪那美二柱神の深く遠き神慮より出たり其事實は詳に天柱記に記したれども茲に其理を略論するに皇國を寒熱の中間に盤踞せしめ環らすに大洋を以して萬國の往復共に自在ならしめたるは四大洲を總治する皇帝の畿内なるか故也初め伊邪那岐大神速須佐雄神に詔して曰く汝は青海原潮之八百重を知らせと速須佐雄神も亦詔曰く韓國の島には貨物多し吾兒の御す國に船あらずんは佳からじとて杉樟等を多く播生したる等を合せ考へれは神意も亦察するに足れり然則ち皇國の土地の寒も熱も共に酷しからす大洋中に特立する者は宇内を鞭撻するの元首にして世界第一の形勝たる事を知る然りと雖

とも猶慮らざる事能はざるは皇國の形勢四方皆海なるを以て他に往も便にして他より來るも亦便なり故に強盛を致すことは甚易し故に怯弱を致すも亦難しと云べからず何となれば國家の大患は土地の惡しきに在らずして經營の勉めざるに在ればなり經濟に從事する者は可不察哉可不察哉

鎔造化育論異本

佐藤信淵撰述

序說

此書は萬物の製煉術を講明する書なり然るをかく題(なづ)くる由は天皇祖神篤く人類を慈愛し此を蕃息せしめ更に實徳を積しめて神と爲さん事を欲して天地を鎔造し萬物を化生して天を神聖の居處と爲し地を人類の居處と爲し給へる根原の道理より說出せばなり抑人世必用の諸物悉く地上より生する事は生民の養料に爲賜(なしたま)ふが故なり然れとも其諸物また人工を以て製煉するに非ざれば殆と用がたき物多し彼(かれ)是を講明して人類の養料を豐饒にし鎔造の神意を繼て天地の化育を贊せむと欲す其(それ)は既に日輪あり且大地あれば風火水土の四資もまた自然に分判する理あり何となれば天造草昧の時に方りて先つ阿米は宇宙の精粹資始の大本なるが故に最初に位を六合の正中に定め給ふ是即日輪なり而して後になほ混淆せる重濁の物一沌を分出して資生の基根と爲給ふ是即大地なり（此の天地初發の事實および日輪大地諸星等の公運私運各各不同の暦數は予が先年著せる天柱記に詳に論じたれば此に贅せず若し夫れ天地の基源および日月諸星運動の理また天文地理暦數等の學を明にせむと欲せば彼の書に就て求むべし）抑日天宮の寶內は神聖の本處なれば。何(いか)なる莊嚴の境なるか思議すべからず其外形もまた詳に知り難しと云へども其內境は古典に載する所を以て其大槩を知られその外形は望遠鏡にて大抵は知られたり。（按に大倉姬命は幽冥の大神大國主神の公主(ひめみこ)にましてことに嫡后須勢理毘賣命の所生なればその富盛にして衣服器玩の美を盡るに論なく且つ高照姬とも下照姬とも稱すれば其容儀の極て艷なる事知べし然れども天國に到りては自ら其鄙風を愧たるまた登美の長髓彥は中洲の大柄を握り武備精銳比類なかりしも天孫磐余毘古命の天羽々矢の偉然たるを見て大に恐怖せる趣など察するに天國の殷盛なることを知れりまた望遠遠を以て其外形を視るに猛火炎焰として勢ひ原を燎が如く嚮邇くべき所に非ざるを知る然れば空行の仙ら升天の願ありとも現身にして爭でか天門に入て神域の壯麗を見ることを得むよく現世に其德を修めて神德に昇り皇祖大神

およひ幽冥大神勅許の神通を得て後に期望すべきのみ）而して其の所發の炎光を以て遍く六合を照映し且つ世界を溫暖す此に就て推究するに天日は神聖和樂の本處たる而已ならず火氣を宇內に賦與して造化の發端を爲し大地もまた萬物を發育するの原醅たる耳ならず人類その德を修めて天命を俟つの境界たること論なし（此等の事ども平田翁の古史傳に詳に論せられたれば委くは云ず）天地既成せる以來天日は公運の時數を以て恒に自ら旋回し彼猛火の光焰を發して六合を遍照し大地は彼の公運に牽聯せられて天日の外圍を運動し而して私運の時數を以て常に自ら旋轉して地上の晝夜を分つなり（此事委くは天柱記に記せるを見べし）且又大地上の本質は水土各半に混じたる物なり然るに天日の炎焔を以て照積(てりつむ)こと悠久なるが故に其中自然に火氣を含畜し漸々に照溫醸沸して遂に薰團を蒸發す是に於て土水火風始めて氣質を判す事を得て萬物を發育(生力)するに至る

是を四貲と名く抑この四物は是(これ)天地の本原にして此より外別に天地の質あるに非ず故に四貲と名く蕃人らも稍(やゝ)この理を悟りて四大また四行また四元なと稱(いふ)めりされど其名義よくも當らず其は此四貲常に宇內に充盈流動し判れては復混り混りては復判れさらに凝り互に結びて萬物を化生す是を以て萬物繁庶なりと云へども其類を統て大別すれば土石生植活物の三種にして悉く四貲の奇結妙凝より變出するものなり爰に熟々四貲の互に混和して萬物を發生する理(ことわり)を精究するに初(はじ)め彼天日より分出せる一沸の土水既に上に說けると如く彼光炎の照積たる熱氣に固て漸々に熱煮煦乾せられ風氣と成て蒸沸し霧の如く霞の如く薰り充ち大地の外邊を圍繞せり此を假に薰團と名く其は古典に本據する所有りてなり

蕃人らは此を濛氣また霧環など名けたれど爭(いかで)か此を濛と云むやまた環としも云むや

大地に此物の圍被せるより天日の光陣まづ此物に映し照透して地上に達す其は譬へば玻瓈の天火を招く理の如く地に徹透すること愈強し是を以て四貲の混合凝結すること倍々(ますます)酷(はなはだ)しく風氣の土水に凝結せるは鹵と成り醎となり焰硝と成り芒硝となり火氣の水土に凝結せるは脂となり硫となり礬石と成り磐石となる且つまた水土の能く其質を調和する處には風火の

氣も亦能く含畜し鹵鹽脂鹼消石硫黄礬石等自然に多く湊りて土質を凝結す其脆弱に凝りて塊を爲たるを輭巖と名け結定するの堅固なるをば硬石と名く

此を人體に喩ふるに先つ巖石は骨幹の如く土水は（缺字有歟）皮肉は血液の如く草木は毛髪の如く萬物漸々化育する中に四資の妙合變化に因り且また煦温の靈機に頼て草木の腐壞する際より昆虫を化し水泥の温釀する間より魚介を生じ活物愈々蕃息して飛禽走獸蛇龍の類までも森然として發育し遂に今の現世の狀とは成れり

斯て謂ゆる巖石中に含める諸種の鹽氣數多の年所を歷るの間に地柱の靈氣を釀成し其精華を發するに及びては珠玉と成り寶石と成りまた其凝固の極めて堅きは金銀となり銅鐵となり或は其性流瀝するは鐘乳となり石髓となり又その汚毒の結定するは砒石と成り礬石となる或は靜より動に赴き或は無より有を出す變化百出勝て記載すべからず

地柱のこと我が神洲の古傳にのみ有て蕃人らが曾ても知らざる所也委くは平田翁の古史傳及び余が天柱國柱紀を披き見て知べし

然れども皆四資より原基する者にして悉く人種の徒行を修め性命を保ずるの養料に天皇祖の賜へるなり故に此土石草木活物の三種は或ひは食物衣服となり或は居室器械と爲り或は藥物玩好の物と爲り凡そ人世の營爲に於て闕べからさるの緊要となる是を以て大地は人種の本處たりと言へども此三種豊饒にして後に蕃息することを得べし此を天地鎔造の槩略となす視つべし天皇祖神の人種を愛することの極めて懇到至仁なる事を

なほ此本原を知らむことを要せば神典を學びて知るべし

予製煉術を行ひ諸物の質を種々に變革し其中に含畜する所の諸品を各々に取分て熟々其性氣を驗み萬物みな四資の妙合して化生する理を明に辨し得たる故に天地の化育を賛するに心有む人の爲に其趣を略説すまづ分離術の最も試み易き物にて其端倪を云はゞ素燒の蒸露罐に土石生植活物の中何にても一種の物品を納れ烈火を以て此を蒸餾すれば先づ初に滴り來る物は淡水なり其れより漸々に火を強くして此を煆ば淡水盡て精液至り脂油に硫氣の混じたるを滴來す

此に益々炭火を加るときは其液次第に粘稠になりて終には糊の如なる物を灑出するに至る其物質の燒盡て滴る液の絶するを度と爲て止む而して後に其火を去りて罐を冷し其餾滴したる液を見れば油質の物ありて上に浮み凝定す此は脂油に硫氣を混したる物なり故に今假に名を命じて硫脂と云ふ此硫脂を取去れば其下は精液なり此は即水に屬すまた其の液下を視るに沈底する物あり此を熟視すれは即鹵質なり此を假に名けて鹵鹼と云ふ此三種の上中下に分る所以は硫脂は水より輕く鹵鹼は水より重き故なりまた其罐内に燒殘りたる渣滓は悉く土質なり總て一切の物質を燒煆して分離するに其理皆同じ右の如く分離したる四品の中にても水土の二種は論するにも及ばず其餘の二種を審諦するに硫脂は火の假に質を爲たる物にして鹵鹼は風の假質なり「注土石生植活物の種屬億兆の品類ありと雖も法を以て其質を製煉すれは悉く皆土水火風の四資に復る者なり」而して此四資ちふ物は互に凝結してよく萬物を變出すといへとも其自性より揮發運動を能くして物を成すの妙ある物に非す此に就て彼四資の主宰として萬物を發育するには如何なる異氣ありて斯の如き妙を爲すやと彼四資の假質たる諸物を取て再三此を煆化燒煉して試るに其物を成ことは毎に天日より賦する所の造化の靈氣を得て能するなり故また其靈氣を如何と探索するに諸物各々含む所の精粹なる一物あり其質瑩明にして虛輕なること菊花英の翻飛するが如く其性極めて透竄なり是れ即造化の靈氣なり姑く此を靈質と名く

案ふに此物もまた生氣の脫殼なるべけれと他物に比するに大に靈異なるを以て假にかくは名くる也水も此を脫すれば水の用を爲こと能はず土も此を脫すれば土の用を爲こと能はず此に因て此を視れば此を靈資と名けて四資萬物の精靈と云はむも強說に非ずと知べし予術を以て此物を取るに鹵鹼類より多く此を得て硫脂これに次ぎ水土の二質には此を含むこと少し何となれば此物を將來する處の厚由は即ち天日より發越する所の炎熱の精氣にして鹵質に依託して假に質を現じたる物なればなり又かの鹵鹼は風の假質と云と雖ども其凝結するは悉く天日の炎氣に因るこれ鹵鹼は其性既に薫園中に發し水土中に託して質を成すが故なり

既に上に說たる如く薰圍は大地を圓繞すること外郭の如き物にして其厚さ大約二十度の外に至る是を以て天日既に沒すと云ども地平より二十度餘り下る迄の間は尙能く物を見ることを得るなり是即日光の薰圍を照す餘光なり日出の前も亦これに同じ俗に此を薄明と云ふ故に地上千里許りの高さまでは薰氣恒に瀰り充て天日大地を照すと云へども先つこの薰氣の滯々たるに受け其より千里許の薰圍を照透して而して後に地上に達す其千里許の薰圍を日光の照透する間に薰氣化して鹵氣を釀生すこれ鹵鹻の質には靈氣を含むこと最多き所以なり且また地上に生息する物は皆なこの風氣中に化育するを以て鹵氣を含まざる物あること無しこれ鹵氣を含む物に非されば風氣中に存する事の能はざるが故なり

一予近來四資變化の理を講明し萬物消長の機を推究し竊に天地生々の玄旨を窺得ること有り因て其の義を此にとき示さむと欲ふに其趣すこぶる縹渺荒唐たるに頽たれば蒙者もし此說を聞かば彈指して容ざるべく苟くも幽冥を默知する人に非ずは會得すべき事に非ざるを以て唯その概略を述むと欲するに是また風を抓み影を捉ふに似たり然れども四資の變化に通ぜされは天地の造化に暗く萬物の消長に達せされば人世の經濟に疎し此緊要の大事を講せずは學者天意を奉將し人世を案集するの憲章あること無らむと則ち卑にして邇きものより導きてたかきに登り遠きに至るの階梯を爲むとす其は天地生々の玄機におひて其最も曉り易き者は土中に風を含めば則ち火を發し水中に火を含めば則ち風を起すの理なり此二件をよく了解すれば則ち究理學の端倪を得たるなり既に究理の端緖を得れば其より萬物消長の理を工夫し漸々に此を推究めて造化の妙を知るに至るべし

一夫風火は氣有りて質なき物なり故に能く物質に透徹依託して揮發運動の妙を爲す水土は質有して氣なき物なり故に精氣を煦畜含藏して化育消長の用を爲す而して其發生も成熟も悉く上天賦與の靈氣これか主宰たるは論ひなし且つまた鹵鹽は靈氣を含むこと最多き故に金石草木を始め昆虫飛禽走獸等に至るまで其生長するも枯死するも悉く鹵氣の有無と多少とに係ること既に上に論ずるが如し予術を以て諸物の質

より此物を取て精く其性味功用の妙を爲す所以を思ふに鹵鹼もまた二種の差別ありて其性の懸隔すること實に氷炭の相反するが如し（注）而して天生を鹵とし人生を鹽とするの論は關からず

先その第一種を固墟と名け第二種を騰墟と名く鹵鹼に此二種の異性あることも天地生々の靈氣の妙用にして然せざる事を得ざる理あるが故なり其はまづ諸物に含有する所の固墟を法を以て分ち取るに即ち結固して凝塊す此堅塊を爲す所以は其質の粘硬にして重質なるが故なり是を以て固墟は能く諸物の腐壞を止め枯死を防くの性あり故に此を消散せしめむと要して烈火を以て燒鍛すれども容易に解釋せざる物なり金石類には此を含畜すること多き故に能く千載を經て腐敗すること無し然れども騰鹽を含むこと少きが故に生氣運動の性なく成長すること甚はだ遲しまた騰鹽は芒脆にして鋭利なる物のなり此鋭利なる所以は其質輕虛にして芒發するが故なり是を以て騰鹽は諸物の生氣を增し運動を進むるの性あり故に此を貯有せむと欲して容器を以て閉藏すといへども容易に耗散する者なり活物は此を含畜することおほき故に能く暫時の間に生長する事を爲す然れども固鹽を含むこと少きを以て硬堅重質の性なく消滅すること甚速しそも〳〵此二種の鹵鹼は同くこれ風氣の化せる假質なり然るに其を分別するに及びては右の如く性氣相反すること如何なる縁由ありて然ると云ことゝ沈潜反覆して此を尋ぬるに即ち是天工の玄機不可思議なる製煉術にして此二種の鹽あるに非ざれば萬物を發育し人類をして生を養ひ死に喪するに恒に餘裕ありて其德行を成就せしむるに足ざるが故なり予不敏なりと云ども竊に造化の玄機を究めむ事を欲し種種に鹵鹽を製造し曾て試にかの謂ゆる靈資を以て此を鹵鹽に混ずるに少しく混ずれば則ち凝固充實し多く混ずれば則ち芒發虛膨す凝固充實する者は其質緻密にして重硬なり即金石類に所含の固鹽是なり造物主是を用ひて經久せしむべき物を製すまた芒發虛膨する者は其質鋭利にして輕脆なり即ち活物類に所含の騰鹽是なり造物主是を用ひて運動せしむべき物を製すまた固鹽に少しく騰鹽の混じたるは木類なり騰鹽に少しく固鹽の混じたるは草類なり且また靈氣の固鹽に含たるは多年を經ると云へども脱去すること

なく臘鹽に含たるは暫時の間に消失すこれ臘鹽はその質虛膨輕疎にして固鹽はその質堅硬充實なるが故なり

予が製煉の術も他なし唯此天地の神意を原ねてその化育の德を贊參せむと欲するより出たり

凡そ物の香氣あるは火と土との精の混合するより激發するなり神典なる土神は香氣の元なれば能く此神の神德を推究し得れば萬物香氣を發するの理は自得すること難きに非ず其はまづ硇砂を灰を合して其變化を試むべし糞尿の氣その鼻を衝くこは何となれば硇砂は糞尿の精粹なる物にて灰は火の滓にて此二物は香氣を發する根原なるか故なり是より推究して其捷經を知べしまた龍腦迦羅等は木脂なれば脂中には火氣も自然に混合する故のみに非ず凡そ香氣は寒に伏して熱に起る然れども熱を以て香氣を激すれば經久すること能はず是香氣を含畜する物には臘鹽多きが故なり

但し彼臘鹽の靈氣脫去するに從ひて鹵氣鹽質の共に皆消失するも實に耗散して盡るに非ず元來薰園中の物なるが故に即ち風氣に復るのみ是みな皇祖天神の造物の妙機にして枯たる物は盡るが如なれとも種兒は嘗て絕すること無く死する者は滅するが如なれとも靈魂永く消せず然れば此天地の妙用を稱して造物者の無盡藏と云へるはさることとなり

上に論ずる如く硫黃明礬鹵鹹等の固鹽土質を凝結すれば巖石と爲り其巖石中に含める所の靈氣精英を發するに至りては則ち玉類を出すまた其玉の渾成すること能はざる物は諸靑と爲る蓋し玉類は精華を主と爲て產するを以て釀熟の熱化大過して其性却りて輭脆に屬す故に火に煆ときは其質は即ち解散するなり

是を以て玉を造るには火化を用ひずして琢磨に從事して造る事なり

また固鹽の醇厚に凝結したる物は金類なり故に此を猛化に煆ときは則ち其性いよ〳〵堅硬を益ことは此物に混雜する所の半金および土石等の煆化に因りて分離消散するが故なり

是を以て金類を製するには鞴橐を用ひて鎔煉するなり

また固鹽に少しく臘鹽を混じて土氣に妙合したる者米類なり木類は固鹽頗る多きが故に其質堅實にして

重く且つよく經久す然れども腥鹽を含むこと金石類より頗る多きが故に成長すること早く腐朽することも亦早し

然して其寒に堪え霜に遇ふと云ども枯ること無きは皆是固鹽の所致なりまた此を炭と爲て百千年も腐朽せざる事はこれ燒て炭と爲すの間に風火の化にて多く固鹽を含畜するを以て其の性石類に近き物となりて土質の燒けば瓦礴と爲ると其の理同じまた其の落葉する事は葉には固鹽無ればなり葉にも固鹽を含みたるは四時葉の凋むこと無なり花は固鹽なく腥鹽多きが故に其謝する甚速なり菓實花めは固鹽を含ず然れども其長成するの間に固鹽の氣漸々に脫去して輭化して其熟するに及ては腥鹽と水質のみ多し只壳ある者は熟すと云へども能く固鹽を保全すこれ壳ある物の實は即ち種兒なるが故なり凡を種兒は小大に拘はらず固鹽腥鹽共に多く且また造化靈を含畜し生々不休の神氣あり故に時を以て此を蒔けば即ち能く發生す若また此を貯へて多年を歷るときは枯死腐朽して土質に復ると知へし

然れどもまた固鹽多き處に藏すれば千歲を經ても生氣脫せざる者なり草類もまた然なり

また腥鹽に少しく固鹽を混じ土質に妙合して發生する者は草類なり故に草は腥鹽多くして繁衍成長すること甚速なり然れども固鹽を含むこと少きを以て其質輕虛輭脆にして氣候の寒きに堪ること能はず霜に遇ふに至りて即ち枯て腐朽するなり

或は固鹽を含有して霜に傷れざるも有と云へども能く成長するは有こと無し總て草は根に固鹽ある者は枯ると云へども翌年に暖氣至れば宿根より新芽を發して再復繁茂すること舊年の如し若し根にも固鹽なき者は皆一年限に腐朽して消失す宜く種兒を取收めて其物を絕すること勿れ

草も花および菓實等は木類に大抵異ならず既に上にも云へる如く凡そ種兒は天地生々の神氣を含畜するを以て其種兒を生せむと爲るの前には各自精氣內蒸して己が神氣を醸成し生氣既に充て即ち菓實の蒂を抽つ是の時に當りて揮發透竄なる精氣まづ前驅して英花を秀發し而して後に菓實その跡に結ふなり

是を以て草木の花には揮發透竄なる腥鹽ありて必す香氣を含む者なり

また鹹鹺火硝硇砂等の臘鹽に生々の靈氣を含める者水土の精に妙合すれば則ち揮發運動の活物を生じ或は走り或は飛び神機いよ／＼出て愈奇なり其活物の中に於ても固鹽の最少き者は泥虫なり故に氣候の寒を催すに從ひて漸々に衰弱老廢し霜下るに及ては靈氣脱去して即ち死し終に腐壞して土質に復る然れども其魂魄はなほ消滅すること無く其の死たる處の土中に留まり翌年氣候（以下ナシ）

此は故眞吹屋翁の自筆の稿本を摸寫せるなり椿園の爲に故翁の按文たまへるなりとぞ

賴　圀

雜稿拾遺

人皇氏沒とある沒は字書どもに終也沈也など註し。興沒出沒など熟語して。出現せる物のまた隱沒するに云ふ語なり。然れば人皇氏兄弟九人各々三千三百歲が間を在世して國造り固めて後に。共に天にまれ地にまれ元の幽界に隱沒せる由なり。（天皇氏地皇氏に沒とは無れど此に準へて知べくまた此より後の諸氏に沒と云へるもみな此の義也、此を我が神典には隱身また長隱など云へり、實に神典に天神地祇の世を始むる業に勞き坐して、神界に御身を隱し給へる趣いと能く似たり、）字彙に沒の字の註に。曹子建七啓翔爾鴻翥。濈然鳧沒縱輕體以迅赴景追形不逮と云へるは。此の人皇氏の隱沒に甚よく符へり。（誠に神人の出沒は此七啓に云へる趣にて彼の測られざる陰陽を神ならしむるは即神の妙用にて陰陽の神なるには非ず、儒者ら鬼神者二氣之良能、また鬼神者造化之迹也など云へれど、實には二氣者鬼神之良能、造化者鬼神之迹也かし、神人出て造化を成し、神人興りて二氣を發せり、神の格る度るべからず、上古の神人たち度るべからず出興して度るべからず隱沒せり、あゝ其の隱沒せる幽界や何處ならむ、人は得索ねずぞ有りける、豈其を道を知るとしも云むやも、）然るを後世の書等には沒を死の事に執成たる說興りて。今は沒と云へば必死のことゝ思ひ定めて異議なきが如く成たれど古書を讀み故實を知むと欲する人は古義を尋ねて後說に誤らるゝ事勿れ。（沒を死と思ひ誤れる事は、古くは此なる神人たちの如く隱沒せるが多かる故に、そを有のまゝに沒と云へるを、其より轉りて死せる人をも沒と云事始まり、其語の弘まれる後に其の心をもて古の隱沒せる神人をさへに沒とし云へば死の事と思ひ過まる世とは成れり、斯て歹に從ひ、勿に從ふ歾の字の沒と同音なるが有るを思ふに、沒の字もと死に用ふる字ならぬ故に、殘骨也とある歹に從ふ歾の字を造れりと思はる、字書に歾音沒盡也死也と有を思ふべし、然るに沒を死に用ふる事なほ止まず、歿の字をさへに作れり、然れど此は俗也と字書どもに云へり、我が皇國にも相似たる例あり、そは石隱とは神たちの石屋に隱り給へる事も有しを云ひ、神避とは神たちの所を避り給ふ事に云ふ

語なるを、後に轉して死の事をも石隱神避など云ふ事となり、其より延きて古の實に石隱り、或は所を避る事に云へる神避をも共に死の事と思ひ成して、今は其過りを改め難くなれり、沒と云ふを死の事と思ふ誤りの改めがたきも此に同じけれど、眞の古學に志あらむ人は能く心得て在るべし。）

三皇の皇は春秋運斗樞に。皇光也。弘也神化潛通煌々盛美不可勝量也と云へる義なり。（白虎通に皇者君也、美也、大也、天人之總美大之稱也、時質故總稱之也、號之爲皇者煌々人無違也と云へるは、後の議也、運斗樞の説に就て云はゞ、皇天とは伏羲氏の傳に委く言ふ如く、天日の稱なるを、其の天日の萬物を生成含養する德化に似たるが故に皇と稱せる由にて是ぞ古意に叶へる説なりける。）

天皇氏を十三頭人皇氏を九頭と有るなどは。實には兄弟のしか有しに非ず。我が皇神たちの數に分形し坐るに準へて思へば。三皇の兄弟と云ふも決めて分身なるを。人その神化を知らず。同形の兄弟なりと思ひて然は語り來れると所思たり。其は靈准聽に。地皇十二君皆女面。人皇九男相像とも有るを合せて辨ふべし。（凡人すらも眞一の道を修し得たるは、分形の儘也、其は抱朴子に所謂分形之道、左君及薊子訓、葛仙公。所以能一日至數十處、及有客座上有一主人與客語門中又有一主人迎客而水側又有一主人投釣、賓不能別何者爲眞主人也、守一成則能分形爲數十人、衣服面貌皆如一也と有るを思ふべし、況て三皇は國土萬物を成立せる天靈地眞なる物を然る分形のなどか無らむ。）然ればこそ此を各々一神と爲たる傳説は遺たれ。

帝出乎乾、悅乎兌、見乎離、戰乎震、役乎坤、成乎艮、勞乎坎、齊乎巽、八卦成列天地之道立焉。

此は本書に帝出乎震、齊乎巽、相見乎離、致役乎坤、説言乎兌、戰乎乾、勞乎坎、成言乎艮と有れど。天地定位の章と相照して考ふるに。此は古説にて元は必ず今改むる如く有けむを後人かの姫昌が易説に符さむと欲して本書の如く僞文せる事疑なし。其の辨こゝに煩ければ難ずる人を俟て答へむとす。（然れど此の學に見高く、英哲ならむ人は下に注ふ説どもを見ば自づからに會得せむ物ぞ。）さて帝とは天日を云ふ。其は尙書及び周易の

緯書どもに。孔子曰帝天稱也。また帝者天號也。と言ひ。禮記の註疏に。據其在上之體謂之天因其生育之功謂之帝也など有るを。毛詩大雅に。皇矣上帝臨下有赫。監觀四方と有るは正に日を指して上帝と云へるに思ひ合せて。此の章に謂ゆる帝も。天日を指たる事を辨ふべし。(然るをかの邵雍朱熹らを始め帝者天之主宰などのみ云へるは精からず、なほ帝とはもと天日の號なるを、王者の天地に合する德ある人に轉用せる謂又凡て帝と稱し王と稱するなどの委しき事は、太古傳に記せるを見て思ひ明すべし。)扨帝出乎乾とは。旦に日の東方より出初るを云ひ。悅乎兌とは日の既に東南辰巳の間に上れる稚晝の頃は兌の方位に當るを。壯陽の少女を見て悅する趣に兌澤の卦德を合せてかく言ひ。(かの後天の卦に兌を西に配せるを本書の僞文に、此の語を其のまゝに用ひ、かつ諸注家も其に依りて、强て其の義を西に說叶へむと爲たれど總て笑ふに堪たる說等なり、偖また說言すと有れど言の字いと謂なく拙し衍なり刪去べし。)見乎離とは南方に高くさし見れたるを言ひ。戰乎震とは。稍下りて西南未申の間に至れるは震の方位に當るを陰陽戰ひて震雷を爲す卦德に合せてかく言ひ。(かの僞文に相見乎離と有れど相の字衍なり、其は別に相對し相並ぶ物の無ればなり、又乾を西北隅に居ながら、下文に戰乎乾言陰陽相薄也と釋せるは何ぞや、乾より西北に在りとも陰陽相薄り戰ふ理の有むものかは。)役乎坤とは西方に沒るまで。萬物生養の道に役せるを云ひ。成乎艮とは西北戌亥の間は艮の方位に當るを此所に沒終たるが。功成れる狀なるを艮山の萬物を成出る卦德に合せてかく言ひ。(彼僞文に、致役乎坤成言乎艮と有致言ともに衍なり、此は既く然言ひし人在しと覺えたり、偖かの文王が卦位の如く坤若西南の隅に在らば豈役すと云ふ謂有むや。)勞乎坎とは北方に深く隱沒せるが勞して休へる狀なる故に云ひ。齊乎巽とは東北丑寅の間は巽の方位に當るを。坎に勞して休へる如き日德のことに齊ひて。再東方より出初る勢氣有を巽風の萬物を終始する卦德に合せてかく言へり。(但し此は日々に出沒する趣に就て云なれど、此を一

年の間に取ても此の運びに違ふ事なし、）

齊七政とは。五行大義に。夫七政者乃是玄象之端。正天之度王者仰之以爲治政。故謂之政即日月五星也。尙書考靈曜七政曰日月者時之主也。五星者時之紀也。天有三百六十五度四分度之一。布在四方。日日行一度。月日行十三度四分度之一。五星者歲星。熒惑。鎭星。太白。辰星也。共爲七星之道。（此の五星は五行の本星なるが故に、また木星火星土星金星水星とも云ふ、なほ北斗の七星をも、二十八宿をも七政と云ふこと有れど、此の七政は然らず、思ひ惑ふこと勿れ、）北斗爲七星者。北斗天樞也。一至四爲魁。五至七爲飄。合有七也。居天之中當崑崙之上。運轉所指隨二十四氣。正十二辰建十二月。春秋合誠圖云。斗一星名樞。二名璇。三名璣。四名權。五名衡。六名開易。七名標光。（黃帝斗圖云一子生人所屬二丑亥生人所屬、三寅戌生人所屬、四卯酉生人所屬、五辰申生人所屬、六巳未生人所屬、七午生人所屬也、遁甲經云、第一水、二水土、三木土、四金木、五金土、六火土、七火、所以子午各獨屬一星其餘並兩辰共屬者子午爲天地之經斗一七亦是斗之經、建所用指也、自餘非所指者故並兩屬故六十甲子從第一起甲子以配之往還周旋盡其數矣、）北斗領二十八宿。一星主四時魁起室。剛起角。以次分屬若人行年至室而五星行到此宿者隨星吉凶也。

干の十なる支の十二なる故よし。及び其の數の事は五行大義に。干有十者。應天地之大數也。故以天干極於十。十主日十日爲一旬也。支十二者。天有四時之氣。以三月成一時。故一時九十日也。支象於月。十二月爲一歲也。干數者甲九。乙八。丙七。丁六。戊五。己九。庚八。辛七。壬六。癸五。（太玄經云甲己九者甲起甲子從子故九、己爲甲配、故與甲俱九、〇乙起乙丑從丑故八、乙配於庚與庚俱八、〇丙起丙寅從寅故七、辛配於丙與丙俱七、〇丁起丁卯從卯故六、丁配於壬與壬俱六、〇戊起戊辰從辰故五、癸配於戊與戊俱五也、）支數則子九。丑八。寅七。卯六。辰五。巳四。午九。未八。申七。酉六。戌五。亥四。（太玄經云、子午九者陽起於子訖於午陰起於午訖於子故子午對衝而陰陽二氣之所起也、〇寅爲陽始申爲陰始從所

起、而左數至所始、而定數、故自子數至申數九、自午數至寅亦九、所以子午九也、○丑未爲對衝自丑數至申數八、自未數至寅亦八、所以丑未八也、○寅申爲對衝自寅數至申數七、自申數至寅亦七、所以寅申七也、○卯酉爲對衝自卯數至申數六、自酉數至寅亦六、所以卯酉六也、○辰戌爲對衝自辰數至申數五、自戌數至寅亦五、所以辰戌五也、○巳亥爲對衝自巳數至申數四、自亥數至寅亦四所以巳亥四也。陽數極於九子午爲天地之經故取陽之極數自丑未巳下各減一、從八至四、理自可知也、)支有十二。以對衝同數。故自九至四。干唯有十。以配合同數故自九至五支從地故數畢於陰以四禺也。干從天故 數 畢於陽以五奇也。五則止於五氣四則極於四時。上不過九者陽之極數也。五行及支干之數。 相則倍之。王則十而倍之。休則如本因。死半之。以此四而孳。數乃無極。此竝從氣增滅氣盛則多。氣衰則少也。欲知天道以日爲主。六月當心行。分而爲十二月與日相當。天地重襲。後必無殃。日正月建營室。二月建奎婁。三月建胃。四月建畢。五月建東井。六月建張。七月建翼。八月建亢。九月建房。十月建尾。十一月建牽牛。十二月建虛。

天道はなほ曆道と云ふが如し。六月當心行とは。中心を當て行く由にて。其の中心は即ち離午の正中張星の宿を云ふ。其は下文に。六月建張と有にて灼然なり。(誤りて心を心宿の事とな思ひそよ。)分而爲十二月とは。孟春正月の節に營室に建し始つるより六箇月の間に張宿まで來りて。此より分りて。季冬十二月の節に虛に建すまで。また六箇月の間にて凡十二節を爲すよしなり。與日相當云々とは萬のことを爲すに。日の某々の所に在る時日に相當りて行へば。天地の神靈重襲して。其事を遂しめ終に殃無らむとなり。日正月建營室と云ふより以下は。二十八宿の方位にて著ければ注に及ばず。(但し日の字を本に星とあり、高誘注に、星宜言日、明堂月令孟春之月、日在營室仲春之月在奎婁、季春之月在胃、此言星 正月建營室、字之誤也、と云へるに從ひて改めつ。)さて此の本文は更なり。前後に擧る本文及び註に引出る諸書にも。日を周行する物と爲たる語等は。

常に視る有趣を以て云へる說にて。實には日の周行するにあらず。大地元より圓體なるが。右旋しつゝ。冬夏に南北に浮沈するが故に日輪及び斗星などの左旋するごとく所視なること。既に天柱五岳考に說著せるが如し。（大地の圓體にして、冬夏に南北に浮沈上下する事の古說は、素問、尙書考靈曜、河圖帝覽嬉、同括地象などに見えて、實には日の出沒あるに非ず、我が乘れる大地の旋動するなれど、凡人其の義を覺らず天象のみ動くと視るは大船に乘りて川を渡るに舟は動かで岸の移ると視るに等しと古人の說たるが如し。）然らば古昔より天文及曆法を傳へたる諸書淮南子を始め。專と地動の說にて傳へざるは如何と云ふに。此は尋常の人の容易に其の實義を曉り得まじき事なるが故に。常に視うくる趣を以て說傳へし者なり。故是の書も古人の然る用意に効ひて前後の注說みな其の本文のまゝに。日の行る義をもて說を成たり。其は日行の說にても。地動の說にても歲時の推步に至りて。然しも甚き參差の無ればなり。（史記の天官書に、天道命傳其人不待告、非其人雖言不著と云へる正義に、天道性命告非其人雖言不著、爲言說不得著明微妙曉其意也。有志事則傳其大旨、微妙自在、天性不須深告語也と云へり、日輪に旋行なく、大地の旋行する實義に於ては信に此の言の如くにぞ有ける。）

天地元氣起於子。乃人命之所生于此也。男從子左行三十。女從子右行二十。俱至於巳。乃許男婚而女娉矣。男從巳左行。女從巳右行。並至其年數而止。是男女行年之所至也。

此の條は宋の張君房が元氣論に。人の行年命を誨せる古說なり。（但し其の說中に、傅會の語等あるをば皆省き文をも改正して擧たるなり。）五行大義にこを年立とも行年とも言ひて。年立從六申而行。男從丙寅左行。女從壬申右轉。並至其年數而止。即是行年所至。立於其處也と有れど。故實に合ざれば用ひず。然れど宋より以來は。彼も此も大義の說をのみ用ふる事は。玄家の古說を知らざれば也。（また同書に、孔子元辰經云、若甲子旬男從丙寅、女從壬申、甲戌旬男從丙子、女從壬子、甲申旬男從丙戌、女從壬辰、甲午旬男

從二丙申一、女從二壬寅一、甲辰旬男從二丙午一、女從二壬子一、甲寅旬男從二丙辰一、女從二壬戌一、皆曰二行年一、此並候病之法。非レ通二常用一とも云へり、然れば從二六甲一而行といふ行年は後人の心と候病の爲に設けし法にて常用の古法には非ず、是を以て聖劑總錄には、臨產の事にのみ用ひたりき、）然れど大義に年立行年と云ふ言の義を。年立即是行年。常行不レ息。故謂曰二行年一。今之一歲年。住二於此一故謂二之年立一。以二其今年立二於北辰一也と釋たるは古意にかなへり。抑今取れる本文の。故實に合ふと云ふよしは。淮南の天文訓に。北斗之神有二雌雄一。仲冬始建二於子一。節從二一辰一。雄左行。雌右行。仲夏合レ午謀レ刑。仲冬合レ子謀レ德。陽生二於子一。陰生二於午一と有る。北斗の分行に法れる。行年なること疑ふ隈の無ればなり。（此の天文訓の文義委くは太昊古曆傳に注ふを見るべし。）なほ想ひ合すべきは。乾鑿度に天道左旋。地道右遷。陽唱陰和。男行而女隨ふと見え。黃帝北斗圖に。一名貪狼。子生人所屬。二名巨門。丑亥生人所屬。三名祿存。寅戌生人所屬。四名文曲。巳未生人屬。五名廉貞。辰申生人所屬。六名武曲。巳未生人所屬。七名破軍。午生人所屬とあり。（また孔子元辰經に、一名陽明星、二名陰精星、三名眞人星、四名玄冥星、五名丹元星、六名北極星、七名天開星とも見ゆ、なほ同經また遁甲經、春秋佐助期、春秋合誠圖などにも異名あれども所狹き事なれば此に漏しつ、）春秋佐助期に。七星之名。並是人年命之所屬。恒思二誦之一以求レ福也とも所見たり。（北斗圖以下の諸書は。都て五行大義に引たるを再引たるなり。）さて本文に。天地元氣起二於子一。乃人命之所レ生二于此一也と云へる文義は。上の條々にて著ければ注せず。男從レ子左行三十云々とは。上に說たる本命年の或は子或は丑を論ぜず。男女共に子を初行年として。男は左旋女は右旋すれば。男は三十。女は二十にして。俱に巳に至りて合す。これ男女の婚媾を許すべき行年ぞとなり。（秦越人の難經第十九難に、男子生二於寅一々木陽也、女子生二於申一々金陰也と有る語の、徐靈胎が解釋に、紀天錫が說を引きて、生物之初皆本二於子一子者萬物之所レ始也、自レ子推レ之、男左旋三十而至二於巳一女右旋二十而至二於巳一是男女嫁娶之數也と云へるも即ち是義

なり、上に論へる五行大義の行年說は、難經の此の文に依りて杜撰せる說なるを、蕭吉は心つかで斯かれ載たるにや有む、）

山海經郭注云。義和蓋天地初生主日月者也。故啓筮曰。空桑之蒼々。八極之既張。乃有夫義和。是主日月職。運轉之於甘水中。出入以爲晦明。瞻彼上天一明一晦。有夫義和之子。出于暘谷。故堯因此而立義和之官。以主四時。其後世遂爲此國。作日月之象。而掌之沐浴。以効其出入暘谷虞淵也。所謂世不失職耳。

此の條は浴日于甘淵と有る所の郭璞が注文なるを殊に標出せるなり。（但し其の元文に運轉之於甘水中の七字、下文浴以の間に入たるは錯亂なれば訂しつ、然るは下文に其後世遂爲此國云々と有るは、義和の生める子等が、後に赤縣州にて、其の母の所業に効ひて日月の象を作りて云々せる由なれば、運轉之於甘水中とは云べき由なし、其は甘水は其の本國に有ればなり、然れば此は其の母義和の本國甘水中にて運轉せし義なること、前本文に浴日于甘淵と有るに相照して能く其の趣を辨ふべき事なりかし。）義和蓋云々は啓筮の古說に據れる郭璞が言なり。啓筮とは。古易の繇文の類なる古書の名と聞えたり。空桑とは即扶桑の別名なること。既に扶桑國攷に云へり。郭璞が意啓筮に八極既に張り。空桑の蒼々と榮えし時より。其域に義和と云へる女子ありて。日月の職を主りて甘水中に運轉せしめ。出入して晦明の狀を爲たる義なれば。浴日于甘淵と有るは此の事にて。其の實は彼の帝俊の妻となりて生める十日の子等を。甘淵に沐浴せしめつゝ。日月の晦明を效ひ知らしめたる事そと謂へる意なり。

歲星得度五穀孳。熒惑順行甘雨時。鎭星得度他無災。太白出入人民昌。辰星順行少疾喪。主春者張星昏中則可以種稷。主夏者火星。昏中則可以種黍菽。主秋者虛星。昏中則可以種麥。主冬者昴星。昏中則入山可以伐木具器械。王者南面。而坐視四星之中。而知民之緩急。春夏民欲早作。故令民先日出而作。是謂寅賓出日。秋冬民欲早息。故令民候日入而息。是謂寅餞納日。春迎其來。秋送其去。無不順矣。

此條は尙書考靈曜の散文を集めて綴れり。○本書なほ春政不失。五穀孳。（本文の歲星云々に當れり、）初夏政不失甘雨時。（本文の熒惑云々に當れり、）季夏政不失地無菑。（宋均注に菑謂土不稼穡と有れど、本文の鎭星云々と有る文に據りて致ふれば菑は災を誤寫せるなり、）秋政不失人民昌。（本文の太白云々に當れり、）冬政不失少疾喪。（本文の辰星云々は此の文に據て補へり、）五政不失。五穀稚熟。とも有り。（宋均注に晚熟曰稚、詩曰殖稚菽麥と云へり、）星備に立春歲星王七十二日。其色白光角芒。土王三月十八日其色黃而大。立夏熒惑王七十二日色赤角黃。土王六月十八日。其色黃而大。立秋太白王七十二日光芒無角。土王九月十八日其色黃而大。立冬辰星王七十二日。其色白芒角。土王十二月十八日其色黃而大。星當王相有芒角。休則闇。廢則內虛と云へり。○主春者張星云々は。本書なほ鳥星爲春候。火星爲夏期。虛星爲秋候。昴星爲冬期。とも見え。天文訓に先王之政。四海之雲至。而修封疆。蝦蟇鳴。燕降而達路除道。陰降百泉則修橋梁。昏張中則務種穀。大火中則種黍菽。虛中則種宿麥。昴中則收斂蓄聚積伐薪木と云へる四時中星の說なり。○出日納日の事は尙書堯典に、寅賓出日。平秩東作。（安國云歲起於東。而始就耕、謂之東作、東方之官、敬導出日。平均次序東作之事、以務農也、）日中星鳥。以殷仲春。（日中謂春分之日、鳥南方七宿、春分之昏、鳥星畢見、以正仲春之氣節、轉以推季孟則可知也、）日永星火。以正仲夏。（永長也謂夏至之日、火蒼龍之中星、擧中則七星見可知、以正仲夏之氣節、季孟亦可知、）寅餞納日。平秩西成。（餞送也、日出言道、日入言送、因事之宜也、秋西方萬物咸成、平序其政、助成物也、）宵中星虛。以殷仲秋。（宵夜也、春言日、秋言夜、互相備、虛玄武之中星、亦言七星皆以秋分日見、以正三秋、）日短星昴。以正仲冬。（日短冬至之日昴白虎之中星、亦以七星竝見、以正冬之三節、）云々と有る是なり。斯く中星を定めしより歲差の起りし事。天經或問地の卷を見て曉るべし。

元始天尊稟自然之氣。生於太元之先。沖虛凝遠莫知其極矣。一日九變神於天。聖於地。其夫妻者陰

陽之始。陶鎔造化之主。天地萬物之祖。乃盤古眞王。
太元聖母是也。
此條は莫知其極矣と云ふまで。隋書の經籍志道書部に。道經云と引たる文を取れり。其の以下の本書は次々に云ふべし。〇元始天尊の名義は。初學記に。大玄眞一經云。無宗無上而獨能爲萬物之始。故名元始。運道一切。爲極尊。而常處三清。出諸天上。故稱天尊也と云へり。(漢武帝内傳、また雲笈に引たる諸書に、元始天王とも稱せり、)〇生於太元之先云々。太元は次條に謂ゆる太極なり。其の太極より先に。かの上皇太一に出る自然の氣を稟て生じ。大虛に沖居して。遠きを凝成する靈德の極は。測り知ること能はざる由なり。(乃ち我が神典に。獨神成坐りと云へる事の趣に通えたり、)〇一日九變云々は。三五曆紀の文なり此は陰陽造化の產靈にし有れば。分身合體は更なり。大身小身變化固より自在にて。天に在りては。萬物を引出すべき天道を發し。地に在ては萬物を生成すべき地道を起せるを言ふ。(此は下文に、陶鎔造化之主云々と有る文、また神聖の字義を釋たる古說どもを參攷して知るべし、)〇其夫妻陰陽之始云々は。任昉が述異記。羅泌が路史に取れり。前條に引たる淮南子の文に。一而不生。故分而爲陰陽と云へる如く。天陽地陰と分るべき。太元太極より。先に生ぜしを思ふに。是男女の形を成せる始めなるが。又有ゆる萬物に。陰陽の道あること。此の二眞の神德より。出る事なる故に。かく傳へしなり。然れば此の陰陽と云ふに。夫妻男女の始と。有ゆる萬物に陰陽の道ある始とを兼たる說なり。(其は陰陽とは、天地萬物の牝牡を總たる名なる故に、天地の陰陽を男女とも云ふこと。易の繋辭傳に、男女搆精萬物生と有るにて著く、素問にも陰陽者血氣之男女也と云へり、また人の男女を陰陽と云ふ事、今の本文にて著し、此は常に心得て在るべし、)然れば此は上皇太一の混體よりして。陰陽二眞を分體し給へるにて。其の陶鎔造化の神業は。此の二眞の主とる故に。天地萬物之祖とも申せるなり。(陶鎔とは、陶は土もて物を造るを云ひ、鎔は金を鑄て物を作るを云ふ、無中に有を出す事、土金を陶鎔して物を出すに同じき故に陶鎔

造化の主とは云へるなり〕

老子四星。周伯。王蓬。絮芮各一星云々。此星等のこと張衡が靈憲に所見たる耳にて。天文訓天官書は更なり。其の後の天文書類にも。絶て其の議に及ばず。然は有れど張衡かく慇懃に。五緯の間に錯りて。其見ゆること期なく。其の行に度なし。審に察せよと云へるを思ふに。必浮たる言に非ず。古傳に承る所有りてかく諦に記せる事と通ゆれば。後生天に事ある時ごとに。心をつけて窺ふべし。(最上常矩子是の說を見て云けらく、西洋人の近き年ごろ見出たる由にて□□□□と名くる二星あり、八十年餘に一周すと云ひ、彼方にては舊く五星を五金の精と云ひ來れるを近頃その二星を見出たる故に七金の說を立たり、其の二星若くは謂ゆる周伯等の星には非じかと云へり、然も有べくや、尚下に附錄する佐藤信淵が說をも合せ考ふべし〕

暦法易理その道異なるが如しと言へども。易を云へば暦法かならず是に從ひ。暦を云へば易理がならず是に從ひ。其の理密合して相離れざる道なるが故に。易法を學ぶ者は必ず暦理をかね學び。暦法を學ぶ者は必易理をかね學びて。其理を參考せでは叶はざる事なれば也。さて其の暦法の興りを聊か言はむに。此はもと天皇氏に始まりて。太昊氏に成り。黄帝氏に至りて大成せる道なり。其を易の稽覽圖に天地開闢。五緯各在其方。至伏羲氏乃合故暦以爲元と見え。同く始開圖に。天地開闢元暦名月。首甲子冬至。日月五星。俱起牽牛など有るにて知るべし。(此の二文共に說郛に引たるを再引たり、始開圖の文を古微書には尚書考靈曜とて出せり、また漢書の律歷志に伏羲甲子元暦といふ有り、唐の馬總が通暦に、太昊木德王、始有甲暦五運也とも云へり、此の外の證文また計ふるに暇あらず、稽覽圖に故暦と云へるは即天皇氏の暦なり、俗に漢土の暦學する徒、暦とし云へば、黄帝にのみ係て伏羲氏の暦法を問ふ人なく、偶に伏羲氏の暦てふ事を聞知れる人あるも早く其より以前に天皇氏に興れる事を知たる人は有こと無し、此の由來は太古傳に委しく論ふを見て知べし〕漢書の律歷志に。伏羲氏始作八卦。三畫以象二十四氣。黄帝因之作調暦。禮稽命徵に。黄帝時大撓正五行甲子など云へり。此は伏羲氏の甲子暦に

因循して。其を正し調へたる義なり。然るを誤りて大撓作二甲子一と云ふ說の出來しより。古說胡亂に成て。甲子曆法ともに黃帝の時に大撓と議りて始めて作れる事となも訛り來にける。（大撓は諸書に大堯、大眞、大塡などあり。風國の君なりし故に風后とも稱し、伏羲氏の道を傳へて黃帝に師たりし人也）易を學ぶ者は必ず曆をかね學び。曆を學ぶ者は必ず易をかね學びて參互攷究せでは其の蘊奧を盡すこと能はず。（但し易とは云へど周文以來の擬易を云ふに非ず、太昊氏の古易を云ふ也、曆とは云へど周文以來の後曆を云ふに非ず、太昊氏の古曆を云ふなり、其は各々別に著せる書等を視て見べし）然れば古曆傳に出せる本文に。帝張二四維一運レ之以レ斗と有る如く。斗柄の建に節氣を成し。七精の運氣。自然に交互し行はるゝ趣を。易とも曆とも云へるにて。今姑く自然とは云ふなれど。實は自然に非ず。其の易威を立たる天皇氏。やがて天皇太帝なれば。乃ち是の天帝の運行し賜ふ易曆をまづ八卦に摸せるぞ古易曆の本なりける。□に□の差を生じたれば。其儘には用ひ難きを强ひて用ひむと欲するは其術に拙く。治曆家の奉する漢曆は當時の氣朔に合せむと欲して。蔀首を引上たること巧なるに似たれど甚猥なり。彼此概して其得失を定めむに。共に其の疏闊は免れねど。むしろ猥ならむよりは拙しとも古式を守れるを勝れりとぞ云ふべき。

何月にても丁未の日に誕生の人なれば。甲辰旬なり。其の甲辰より十一十二に當る甲寅乙卯は彼の孤に當るが故に凶とし。五日六に當る戊申己酉はかの虛に當るが故に吉とす。又戊辰の日に誕生の人なれば。甲子旬なり。其の十一十二に當る甲戌乙亥は孤なれば凶とし。其の五日六日に當る戊辰己巳はかの虛に當るが故に吉と爲す類なり。餘は此に准へて知るべし。（但し此は年月日時につけて用嫌する日なり）

七曜常は各其の行道異にして遲速あれど。太昊氏作曆の時しも偶に其行道の相近く運り合たるなり。後も時々然る事あり。其は彼の三代以前にも。往々七曜共に見えたる事を記し傳へ。漢の武帝が改曆の時に。日月如二合璧一五星如二連珠一と有るも。此の類なること著し。そは共に甲子蔀首の歲ならぬを以て。實の七精反初に非ざること知られたり。其の年頃は諦

に覺えねど。己が十一二歲ばかりの事とおぼゆ。數月がほど五星皆現はれ見ゆと。人々の言ひ罵れる事ありき。近く此事を語りて老人等に問ふに。記えずと云ふ人のみ多かる中に。最上常德翁のみ然すがに天文曆算の學を好むけにや記え居て。天明四五年の間にて在りしと云へり。然も有らば。甲辰乙巳に當る年にて。七精反初の歲には間遠き年なるをも思ひ合すべし。

蒙古より皇國を襲ひたてまつらむとせし時の騷がしく。かつ神異の多かりし趣など塙保己一の螢蠅抄といふ物にかき集めたるを見て知べく然るに猶こりずまに此後にも時々入寇せる事の有ける。其時ごとに神異ありて退けゝる中に。弘安四年より百三十八年のち。稱光院の天皇の應永二十六年に襲來せる時の神異ぞ殊に嚴めしける。此は人のよくも知らざる事にし有れば。因にこゝに記してむ。其は後崇光院御記に。應永二十六年六月二十五日の條に。抑大唐蜂起の沙汰あり。出雲大社震動。また西の宮荒夷の宮震動。また廣田の社より軍兵數十騎出て東方へ行く其中に女騎の武者一人大將の如し。神人これを見奉りて其後狂氣を爲すよし社家より注進なり。八幡の鳥居風吹ずして顚倒。また北野御靈西方をさして飛び。御殿の御戸開くと云へり云々。

河圖括地象の文に。天有九部八紀とある九部は謂ゆる天の九野。八紀は八方と聞ゆるが。天文家にて九野を九州に配すと云ふは。もと大九州に配する義なるを漢土内なる小九州に配して。九野の星變によりて。其の野に當る州郡の災異を占ふ法をさへに立たれど。此は後の議なり。拘はるべき事にあらず。此の事はやく五雜俎の地の部にも論あり。其の論大九州の事に及ばざるは未しけれど。其の大約は論ひ得たる說なりかし。(其の說は同書に天無私覆地無私載。今分野以五星二十八宿皆在中國僅以畢昴二星管四夷與域計中國之地僅十之一、而星文獨占十之九也、偏僻甚矣、歷攷前代五行志某星變則某郡國當其咎然不驗者什常七八也、況近來山河破碎愈無定則矣と云へる如く彼の國の私言なれば取るに足らず、)

天經或問曆法條云。古今以冬至定曆元爲歲首後人不復有偏執游移從丑從寅也。方密之。揭子

宣。同余推測辨正。以爲萬世定法。其法當以天爲定盤。以黄道爲定圈。以道淺深定宮。以冬至爲歳首。以日躔一日爲定度。以日到宮紀日。以月到宮紀月。以星到宮紀星。如此則無歳差。如此則無氣盈朔虚。如此則無閏月。

此の天經或問は明の萬暦といひし。四十年ばかりの年間に。游子六と云ふ人の撰める書なり。此の人の天學は西洋より渡れる熊有綱と云ふ者に受たりとぞ。(其は方密之が序に、天經或問、閩中游子六、所約以答客者也、概言暦象、取太西之質測、以折世俗之疑、往年良孺熊公、作格致草、原象原理、廻隱閩中、而子六受焉云々と云へるにて知るべし。)〇古今以冬至定暦元爲歳首云云。天皇太昊二氏の古暦は更なり。其の後の諸暦もみな冬至の子をもて暦元を定め。そを歳首となす事も既に云へりき。(其精き事は太昊古易傳を見て知るべし。)〇方密之。揭子宣同余推測辨正云云。余とは游子六なり。方密之。揭子宣の二人は。子六が同好の友なりし事は。此の二人が序を見て知るべし。(其の中にも方密之は、巻首に皖桐方密之先生鑒定と有れば、子六が畏肅せる人と見えたり。)斯て此の三人同じ心に。推歩測量して。正義を辨論し。萬世の定法にせむと欲して。此の暦法を立たる由なり。〇其法當以天爲定盤は。其の自注に。所謂靜天也。靜天即在動天之外と云へり。(外の字を本に中と作るは誤寫なり。)靜天とは謂ゆる常靜天。動天とは謂ゆる宗動天なり。此の天をまた恒星天とも謂ふ。そは衆星二十八宿これに係れるを牽製ねて恒に左旋する天なれば也。然るに其の外廓に一天あり。此の天常に靜にして動く事なき故に常靜とは謂ふなり。(此の天の常靜なるを觀じて、其の下に恒星を牽製して左旋せしむる宗動天ある事の著明に知るゝ道理本書に精く說たり就て見るべし。)さて此の天象を圓郭定盤に作りて度をもり。其の中に動天二十八宿の圈盤をおく由なり。(此は文には見えねど、下に以星到宮紀星と云へるにて推量られたり、)〇以黄道爲定圈とは。自注に嵌動天之中始終不改徙者也とあり。黄道は乃ち日の運行する道の名也。(天地の實體より云ときは、日の運行するに非ず、

地の西より東へ右旋に運行するにて、黄道實には大地運行の道なり、然れど古へより人の視る趣によりて、日の運行と云ひ來れる儘に今もかくは云ふなり。）かの靜天定盤の中に動天の旋盤を置たる其の中に此の黄道の定盤を嵌るゝ由なり。○以十二宮爲定節氣は。自注に依地爲盤以分子丑以氣分宮。不以日分宮也。と有り。右の黄道定圈に。三百六十五度四分度之一を刻めるを盤と爲して。子丑寅卯辰巳午未申酉戌亥の十二宮に分けて。二十四氣をもて其の十二宮に分配し。三百六十五日四分日之一を以て宮を分るには非ずとなり。（依地の二字もし誤字には非ざるか通えがたし。）○以道淺深定宮は。自注に所謂北道長。南道短。隨多寡而分也とあり。赤道中帶より北は深く長く。其南は淺く短ければ。其多寡に隨ひて十二宮を定むる由なり。○以冬至爲歳首は。かの黄道定圈なる子の宮に冬至あり。そを歳首と爲す由なり。

傳へ聞たる言に。川邊氏眞曆不審考といふ書を作りて師の眞曆考を難じたるが。同じ里なる故大人の弟子なる新井在雄といふ人にものして。大人の許に送りしかば。師やがて其の辨をかきて。在雄に賜ひしを。また川邊氏に見せたるに其の答は無りしとぞ。此の事の因に按ふに。師の直毘靈を難じて麻賀能比禮といふを著せるも。名は隱したれど尾張人にて市川多門□□號を□□といひし醫にて。鈴木朗。石原正明などが前の師なりしと此の人々にかねて聞たり。殊に彼の麻賀能比禮は正明がとり次て師の許に送れるを師かの葛花をかきて正明に賜へるをまた市川氏に送れるに。是も答へは無りしが。後に正明に前の論は己が屈かざる事も多かりしと語れりとぞ。また是より後に鈴木朗。予が靈の眞柱を怒りて吾を憎み始め。其より引きて太平の翁をすゝめて。三大考辨を書しめ。また小林の茂岳といふ者に力をそへて天說辨を書しめき。かく按ひ續くれば。尾張の國には。出る穢をば打むと搆ふる人多きか。然は有れど然る人々の在りしゆゑに。師の眞曆不審考辨また葛花もいで。予が三大攷辨々また天說辨々の二書も出て。いよゝ益々道の輝りの明かにぞ成行くめる。然ればしか打出る人の有るなむ。いみじき道の幸な

りける。」

駿河國の名義

賀茂の翁の冠辭考に。萬葉三の卷に。打緣流駿河國云々。二十卷に。宇知江須流須流河乃禰良波云々。よする。えする。音の通ふを思へば。此の二つもはら正からで實は打ゆするするがとつゞけ成けむと云れしは然る說也。（されど其のゆするてふ語を釋しに、打泔る泔る髮と云ふ意のつゞけならむ、髮を櫛梳るとき用ふる水を、ゆすると云へばなり、と言れしは信られず、）其はまづ由須流と云ふ語は。動くことゝ響むことゝに用ふ語なるが。此の國名につきては。二つのうち何とも思ひ定めがたし。其の動く方にいふは古き物語ぶみなどに。ゆすり立。ゆすり出。など云へる是なり。また地震がゆり來と云ふも。ユスリのスの省かれるにて動く意。ゆらかす。ゆらぐ。など皆是より活用ける語なり。（また俚言に人のうま寢せるを覺すとて。ゆすり起す、ゆり起すなど云ふも是なり。）さて響む方に云ふは。物語ぶみらに。ゆすりて笑ふ。世の中ゆすりて。など云へる是なり。（俚言に、此の意なるゆすりてふ語は、今聞えざれど、試に云はゞ、わろ者などの、人にしひ事いひかけ、響み苛ちて、物を貪り取るなどを、ゆすると云ふは少か此の意ばへに叶へり。）扨動く方のゆするに就て。駿河てふ名の義を釋かむに。古く仙覺律師が萬葉集註釋に。今の浮島が原と云ふは。南海の中に。浪にゆられて在けるを。蘆柄の明神。うち寄させ給へり。と申し傳へて侍る。然れば打よする駿河の國と云へるは。此本緣にもや侍らむ。と云へる說あり。よするを。寄の義に見たる說こそ稚けれ。此は古く彼處の動き漂へる證となるべき古說にて。今も駿河の鄕の西邊に大沼ありて。此の沼の淺き地に苗を植渡すに。八月九月の頃に。水湛え風吹て浪こゆれば。其の田は稻の生たるまゝに。五十歩も百歩も浮島の如く動りて。風のまに／＼流れて。駿東郡の方に止まるを杭うちて。動り流るゝ田をつなぎ停むるよし。其の國人らに聞たり。然れば其の邊ふるくも然有けむ故に。今の駿東郡あたりの一と所を。打動る動る所と云ひしが。ユスはおのづからにスと約まりて。スルカと云ひ。少さき一と所の名より鄕名となり。郡名となり。終には國名とも成れるにや。少けき一と所

の名のしか弘ごれる例は。今數ふるに暇あらず。（かく見るときは駿河の字は借字にて、河は所の義也、所をカと云ふ例は、在所住所隱所など是なり、また大須賀、横須賀、蜂須賀、白須賀など云ふ地名も、賀は所の義と聞えたり。）また響む方に云ふ。ユスルに就て云ときは。謂ゆる富士川の。世に名高き荒川にて。ともすれば水かさ益り漲り。川の邊ゆすり流るゝ故に。打響る響る河といひ。其の甚しき邊の地をしか名けたるが。是またユスはおのづから約まりて。スルガと呼ならへるかと。伴信友と云ふ者云り。水音にユスルと云ひし例は。萬葉七の卷に。大海之磯本由須理立波之云々。古今集に。紀の川ゆすり行水のなど詠める是也。（かく見るときは、駿河の字は正字也、響むと動ると、同義の語なる由は、萬葉十一の卷に爲名山響爾行水之云々と詠める歌を、古今六帖に、ゐな山ゆすり云々と詠たるにて論ひなきなり。）打よする駿河の國名。かく二タかたに思はれて。定めかね侍れば。其の二つの考へを書つけたり見む人宜きを採るべし。

駿河國の圖帳なる圖板の字の考へ

駿河國民部省圖帳とて殘欠せる物のわづかに傳はれる。廬波羅郡仙南の下の文に。公穀二千束。假粟七千束。山貢減ニ其半一。川料五千鱗。内匠料板五十駄云々と有るを異本に料板の間に圖の字入りて内匠料圖板と有れど圖の字決めて衍にて。藏本異本ともに内匠寮の寮の字を同音ゆゑに料と誤まり。料板の間に杉の字か松の字の有けむを脱せしなり。かく云ふ由は是より下の文の貢物に圖書寮油烟三十駄。兵庫寮の鹿狐皮七十駄など云ふ文あり。此は圖書寮に貢する油烟。兵庫寮に貢する鹿狐皮と云ふ事なるに准へて。松板にまれ杉板にまれ内匠寮に貢する常の板なることを知り辨ふべし。抑圖板と云ものもし有なむには。當國の處々の地圖を記せる板が。貢して後に寮にて圖を記す料の板か。何れにても内匠寮に貢すべき物に非ず。圖書寮にこそ貢すべけれ。然れば圖の字ある本は誤なる事著し。杉にまれ松にまれかの内匠寮に常の板を貢せむ事はかならず然るべき物なり。然れば彼の圖の字の處はもと蟲損または。落字などにて白紙なりけむ故に。例の如く□として有しを後に寫す者のさかな態して圖の字とは爲たりけ

む。其は內匠寮式は更にも云はず。圖書寮式にも圖板といふ名は有こと無きを以ても辨へ知べく。なほ駿河の國の圖帳のみならず。志摩。筑前。攝津。因幡。備前。美作。備中。尾張などの圖帳も少かづゝ。殘りたれど。圖板といふ名の見えざるをも思ふべし。若さる物ありて駿河より貢りけむには。餘國にもかならず無くては有るまじき事なるをや。

巽は東北の間に位し風㊍にして水氣を持ち。北坎の水德を相けて。其を東木に鼓舞し傳へて火を生ぜしむる卦なり。○兌は東南の間に位し澤㊌にして水氣を持ち。東乾の木德を相けて其を南火に皷舞し傳へて土を生ぜしむる卦なり。○震は西南の間に位し雷㊋にして火氣を持ち。南離の火德を相けて其を西土金に皷舞し傳へて水を生せしむる卦なり。○艮は西北の間に位し山㊏にして金氣を持ち。西坤の金德を相けて其を北水に皷舞し傳へて木を生せしむる卦なり。

變易とは終古に天地の位を定め居つゝも。其中より四時をなし生成變化し出る德用を云言にこそ有れ。天地の位を轉革する如き大變を云ふに非ず然るに易の名と卦名とを混合して。君臣の位を轉革する事に取成せるは。姫昌が逆意の祕旨なるを。䌷案に非ずして何ぞ。けだし此は革の卦の彖傳に天地革而四時成。湯武革命。順乎天而應乎人。革之時大矣哉と云ひ。乾鑿度に孔子曰。天地□□通氣君臣不變不能成朝など云るは。其の旨を承順□□說なりかし。易學をせむ人よく變易と變革との差別を辨へて右の類なる說等に見惑ふこと勿れ。

御靈會

淸和天皇紀貞觀五年五月二十日。於神泉苑修御靈會。勅遣左近衞中將從四位下藤原朝臣基經。右近衞權中將從四位下兼行內藏頭藤原朝臣常行等監會事。王公卿士赴集共觀。靈座六前設施几筵盛陳花果恭敬薰修延律師慧達爲講師演說金光明經一部般若心經六卷命雅樂寮伶人作樂以帝近侍兒童及良家稚子爲舞人大唐高麗更出而舞新伎散樂競盡其能此日宣旨開苑四門聽都邑人出入縱觀所謂御靈者祟道天皇伊豫親王藤原夫人及觀察使橘逸勢文屋宮田丸等是也並坐事被誅寃魂成厲近代以來疫病死亡甚衆天下以爲此災御靈之所生也始自京畿爰及外國每至夏天秋節修御靈會往々不

斷或禮レ佛說經或歌 且舞令里貫之子靚粧馳射膂力之士袒裼相撲騎射呈藝走馬爭勝倡優嫚戲遞相誇競聚而觀者莫不塡咽遐邇因循漸成風俗今茲春初咳逆疫百姓多斃朝廷爲祈至レ是修此會以賽宿禱也。廿二日天皇御雅□院召見神泉苑御靈會無蕫雅樂寮奏二音樂一とあるこれ御靈會の事の見えたる始にて會の趣も詳に記されたるが。靈座六前と有て崇道天皇以下五前ならで無は決めて一人を記落せり。其は誰ならむと思ふに後に八所の御靈とて此なる五御靈の外に吉備大臣。藤原廣繼火雷天神の三靈あり。其は諸神記を始め數の書に見えたるが。火雷天神とは菅相丞の御靈を申せば此は後也。然れば吉備公か廣繼を落されけむ。さて是より御靈會といふ事流行て祇園の御靈會。今宮の御靈會は更なり。扶桑略記承平八年九月二日の處に西東兩京にて岐神を御靈とも號して祭れる事あり。日本紀略に寬弘二年七月十八日絹笠御靈會也去年廣隆寺別當松奧造小屋於門外所奉移也而有靈託奉造內匠寮依今日奉奏(奏一本作レ祭)也と見え。百錬抄に寬治八年四月九日今日 稻荷御靈會也 云々など有り。此は右の御靈たちの祟いち速きを畏みて祭れるが廣く流行りてかゝりしと知られたり。かくて上の件八人の御靈を上御靈八所といふ。又下御靈八所といふあり。其は諸神記に聖武天皇。稱德天皇。淡路廢帝。光仁天皇。桓武天皇。崇道天皇。平城天皇。嵯峨天皇。を擧て此社事於二鎭座年記一者不二分明一也と云へり。此中に崇道天皇のみは然る事に覺ゆれど餘の天皇たちを御靈と齋ひ奉られたる事はいかなる由ならむ心得がたし。さて上御靈八所の七所は寃魂の厲を成べき由 詳なれど 吉備公の 寃魂を結びて 厲を成ことは詳ならぬを熟攷ふるに。まづ諸神記に寶龜元年十月己丑朔日皇太子(光仁)即位右大臣眞備恚隱居。寶龜六年上啓致仕薨時八十三歲とあり。此は古記によりて記つらめど。己未だ其書を見ず。故國史を採て考ふるに。稱德天皇神護景雲四年八月四日に崩御しかば。從一位左大臣藤原永手公。正二位右大臣吉備眞備公など。其餘の群臣と共に策を禁中に定め。遺宣と稱して光仁天皇の白壁皇子と申して御せるを皇太子に立奉れる由見えたるが。其翌月の九月七日に眞備公上啓して骸骨を乞れたり。さて十月朔日に光仁天皇即位あり。此日群臣二十七人に位階を授け給ひ。

永手公の從一位なりしを正一位に叙し給へるに吉備公には叙位の事なく。其月の十三日に彼の上啓の詔報ありて中衞大將を解して大臣をば帶せしめ給ふ。さて二年二月己酉に永手公の薨せる所に定レ策遂安二社稷一者大臣之力居多焉。及レ薨天皇甚痛二惜之一と有りて。弔賻し給へる詔命に今讀奉るも涙拭ひ敢ざるばかり惜み歎き給へる御詔どもあるを。吉備公の薨られし時には然も有らず。然れば光仁天皇の皇太子に立給へる所に吉備公も永手公などゝ共に策を禁中に定たりと有れど實には然らず。其は水鏡に神護景雲四年八月四日稱德天皇うせさせおはしましにしかば。位を繼給ふべき人も無て。大臣以下各此事を定めたまひしに。天武天皇の御子に長親王と申し人の子に。大納言文屋淨三と申人を位に即奉らむと申人有き。又白壁王とてこの帝のおはしましゝを即たまへらむと申人々も有しかども。なを淨三をと申人のみつよくて。既に即給ふべきにて有しに。淨三我身其器ものに協はずとあながちに申給ひしかば其弟の宰相大市と申しを。さらば即申さむと申に大帝うけひき給ひしかば。既に宣命を讀むべきになりて。

百川永手良繼此人々心を一つにて目をくはせて。竊に白壁王を太子と定め申よしの宣命を作りて。宣命使をかたらひて。大市の宣命をば卷隱して。此の宣命を讀べき由を云しかば。宣命使庭に立て讀をきくに。事俄に有るに依て。諸臣たちはかゝらく。白壁王は諸王のなかに年長給へり。又先帝の功有る故に太子と定め奉ると云由を讀を聞て。此大市を立むと云ひつる人々淺ましく思ひて。とかく云べきかたもなくて有し程に。百川やがてつかさを催して白壁王を迎へ奉りてみかどゝ定め奉りてき。此の帝の位に即給ふ事は。ひとへに百川のはかり給へりし也と有を思ひ合せて知られたり。其は永手公などの中に吉備公の無きは是ぞ正しき傳へなるべし。然れば光仁天皇の即位し給へる事は元より吉備公の甘心せられざる事故に快からず。天皇も後めたく思召し。左大臣を始め群臣も快からず思ひけむ狀を見て其位に在事も快からず思へりしかば。いまだ即位もなく朝廷も靜ならぬ間に辭職の上啓をば奉られけむ。斯て中衞大將を免され大臣は帶せしめ給へれど。位を上給ふ事も無りしかば。光仁天皇の御代になりては內に恨を含み

つゝ五年ありて寶龜六年の　に薨られたるが。其寃魂の結ばりて厲を成せる事の有けむ故に。八所御靈に加へて會られけむかし。

紫野今宮も御靈會を爲せし事はまづ帝王九代記に一條院天皇の正曆五年六月二十七日。爲疫神修御靈會。木工寮修理職造神輿二基安置北（篤胤云北は紫の字の誤か）野船岡山窟云々招伶人奏音樂。士人士女賫持幣帛不知幾千萬人。禮了送難波海。此非朝儀起自巷說と有るは此に祭られたる事また此會を修せられたる始と聞えたり。（朝野群載にも此事見えたり、又諸社一覽には祭六月十四日と有り。）また長保三年五月九日於紫野祭疫神號御靈會依天下疫疾也。是日以前神殿三宇瑞垣等木工寮修理職所造儲也。又御輿内匠寮造之京中上下多以集會此社號今宮。（扶桑略記にも此時の事を記て京師庶人於紫野行御靈會道路死骸不知其數天下男女夭亡過半と見え、諸神記にも長保三年五月九日被遷坐疫神紫野京師衆庶行御靈會被遷此所事依靈夢之告也と見えたり。）また寛弘三年五月九日於紫野有祭疫神事件祭長保年中所始行也。世號今宮祭など見え。（日本紀略にも寛弘二年五月九日紫野御靈會なり、東西二條坊十別佃男已有其數日者雨下今日廻晴神明之驗也と云ひまた同書に寛弘五年五月九日紫野御靈會諸司諸衞調神供東遊走馬十列等参向とも見えたり。）諸神記に被安置紫野日。刀禰請歌於藤原長能二首「白妙の豐御幣を取持て祝ぞ初る紫の野に。また「今よりは荒ぶる心坐ますな。花の都に社定めつ。（此歌は後拾遺集に出たり。）後三條院延久四年四月社解曰當社大明神者永承七年五月二十九日依神託被崇敬加之每年五月五日祭禮之時被獻内藏寮幣使也云々（百錬抄に後冷泉天皇永承七年五月二十九日大安寺東寺新造神社行御靈會依可止疫疾御示現也、世名曰祇花衍園[花]社と有るに符へり、或本に祇花園神とある花の字は衍なり。然るを塙本に祇衍園社とあるは傍に花の字の衍なるよしを記せるが本文に成れるなり。）件位記事。弘安二年五月十五日被授從二位之由社解文無相違。同五年後四月二十二日被奉授正一位奉行頭左中辨藤原忠光上卿中院中納言具通卿也とあり。（神社啓蒙に案當社神官以今宮爲大神

宮。自稱署神祇官考本朝史冊未見以當社為大神宮。以神官預神祇官之記文也と云ひ、神社便覧に頃今宮神輿前以錦而包數尺札書其上曰今宮大神宮傳聞神位各有高下也。何世何歳有勅許而賜宮號耶、更難心得耳 と云へるは實に然る説なりかし、)偖此の神に夜須良比花の祭といふ有り。此の始は百錬抄に久壽元年四月近日京中兒女備風流調鼓笛參紫野社世號之夜須禮有勅禁止と見えて禁止せられたるが。後には勅許有しと聞えて。四季物語に三月十日餘り五日の日。紫野の根國の神社に花を奉る。(此の社を根國の神社とも云は諸神記に紫野今宮素盞嗚尊云々と有れば此の神の根の國に往坐る謂による事にや、)其日は安らにはてよ。安らに果よ。としば〳〵歌ひて花を手折て。官のをのこ館に集ふ事也。春の氣に上一人より下末々まで中らせ賜はず。安らかに果よとの事なるべし。と有て今に至るまで此の祭ありて鎮花祭と云とぞ。(鎮花祭と書て夜須良比花の祭と云ふことは、狹井の社の鎮花祭は令義解に在春花飛散之時疫神分散而行癘為其鎮遏必有此祭故曰鎮華とある祭に效へる成べし、鎮花祭の事は古史傳狹井の社の處に委く注すを見るべし。)大竹政文と云し人の筆記に紫野の今宮に鎮花祭と云ふあり。三月なり其時の謠曲あり。神樂の早歌の類と聞ゆ。其歌の本は寂蓮法師が眞蹟なり(寂蓮は藤原の俊頼朝臣の子にて元の名は定長と云し人なり、建仁二年七月二十日卒すとぞ、然れば古筆と云べし、○建仁は建久の誤か、)社司の家に傳へて祭時に壁に掛るとぞ其歌は「高雄山阿波禮也ける勤かな。安らひ花と鵶うつなり。(鵶は讀がたし、)なほ此の餘に謠曲の詞は更なり。節博士をさし本末拍子調子までを委く記せれど煩しければ省きぬ。また百錬抄に正元元年五月九日紫野今宮祭也。自院廳　騎獻馬長此事中絶年尚今年被興行依疫疾御祈也ともあり。

神名式とは延喜式五十卷の中の第九第十の卷を云ふなり。此は朝廷より幣帛を奉り祭しめ給ふ社々宮中京中畿内其外諸國の神社の號を載されたる帳にて。社の數總ては二千八百六十一社あるを。其社によりては祭る神の二座三座四座五座六座七座八座なるも有る故に御座の數總ては三千一百三十二座有。(九座

と云はなし十座と云は下に引る水主神社十座のみなり。)また此を二つに別ちて大四百九十二座。小二千六百四十座と[illegible]。大とは大社と定給へる神を申し。小とは小社と定給へる神を申す。社の名の下に大の字ある社これ大社。大の字なきは皆小社と知るべし。(然るを今の世の人などは宮造の大なるを大社といひ、社の小なるを小社と心得たるは妄也、其は俗人のみならず。神主祝等さへに然心得たるが多かり。)さて大四百九十二座とある下に三百四座(並預ニ祈年月次新嘗等祭之案上官幣ニ就レ中七十一座預ニ相嘗祭ニ)一百八十八座。(並預ニ祈年國幣ニ)と記されたるは大四百九十二座にかく二別ある由也。祈年は登志碁比と訓て二月に其年の豊稔を祈り給ふ御祭なり。月次とは月次の御祭をいふ。新嘗とは新嘗祭とて。九月　日に其年の新穀を奉り給ふ御祭也。三百四座の神等は大社の上に祈年祭月次祭新嘗祭等の時も神祇官の案上に官幣を捧くる祭に預り給ふ由なり。(官幣とは神祇官の廳にて造しめ給へる幣帛をいふ。)山城國乙訓郡大歲神社。(大月次新嘗。)など記されたる社社是也。(祈年てふ言を記されざるは帳に載れる神社として祈年祭に預り給はぬはなく紛るゝ事の無れば也。)就レ中七十一座預ニ相嘗祭ニとは三百四座の中に七十一座の神々は別に相嘗祭にも預りたまふ由にて山城の國愛宕郡出雲井於神社(大月次相嘗新嘗)など記されたる社々これなり。相嘗とは天皇命始めて高御座に即座せる翌年の十一月　日に御世所知看して始めて大嘗聞看す事の重き御禮あり。其の時に天皇命と相に大嘗奉る御祭に相預り給ふを云ふ也。(俗に相伴といふ心ばへなり。)其の七十一座の神社の御名は御祇式大嘗祭の處に並擧られたり。(さて相嘗を新嘗の上に記されたるは相嘗は重く新嘗は輕ければなり。)一百八十八座(並預祈年國幣)とは大社の中に此の座々の神等は月次相嘗新嘗などの祭に預り給はず祈年祭の時も案上の官幣に預り給はず。國幣に預り給ふ由なり。國幣とは國々の國司神主に令せて其國々にて幣帛を造しめて奉らしめ給ふを云。(いと上れる世には國造の各々預り掌れる業なるを國造を止め國司を置給へるよりかくなれり。)扨小二千六百四十座とある下に四百三十三座(並預祈年案下官幣)二千二百七座(並預祈年國幣)とあるは。小社二千六百

四十座にかく二別ありて中に四百三十三座預ニ祈年ノ案下官幣ニとは此座々の神々は祈年祭の時に官幣を案上に捧げず。案下にて祭られ給ふ由なり。(然れども上なる大社の中の一百八十八座と下なる二千二百七座の並預祈年國幣とあるよりは重き御あしらひなり。)さてかく社に大小を立られたる差別は如何と云ふに光仁天皇の寶龜二年二月十三日の太政官符に大中小社差別事太政官符神祇官幷五畿七道諸國司應早ク定ニ置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣鳥居並四至ノ內地町數事。正一位三位以上爲ニ大社ト從三位從四位以上ヨリ爲ニ中社ト。正五位從五位以上爲ニ小社ト。大社四至限ニ九町。三間檜皮葺正殿一宇(高一丈二尺在板敷戶一本)堅魚木八丸長五尺徑九寸千木四支長一丈三尺瑞垣一重方二丈高七尺珠垣二重方各五六丈高八尺。內外鳥居二基(內一本高九尺口徑八寸外一本高一丈口徑九寸)三間檜皮葺幣殿一宇(高一丈一尺在板敷戶一本。)五間草葺拜殿一宇(高八尺)五間板葺直會屋二宇(高八尺)萱葺板倉二宇。三間草葺屋二宇(在戶二本)左右板葺廊二宇(各高七尺)五間外舍二宇(高八尺)五間馬屋二宇。中社四至限八町チ。三間檜皮葺正殿一宇(高一丈一尺在板敷戶一本)堅魚木六丸長四尺徑七寸千木四支長一丈瑞垣一重方二丈五尺高七尺珠垣一重方三丈五尺高八尺。內外鳥居二基高八尺徑七寸。三間板葺幣殿一宇(高七尺戶一本、)三間板葺拜殿一宇(高七尺)五間外舍二宇。小社四至限四町。二間板葺正殿一宇(高八尺在板敷戶一本)堅魚木四丸(長四尺徑七寸)千木四支長八尺瑞垣一重(方二丈高五尺)鳥居一基(高六尺徑六寸)三間草葺拜殿一宇(高七尺)三間板葺舞殿一宇(高七尺)五間雜社二宇(高七尺)右被ニ左大臣宣ニ偁奉勅諸國神社正殿雜舍並四至町數所定如レ件宜仰ニ在國司ニ以ニ正稅物數ニ令ニ造進ニ自レ今以後不レ可ニ違失ニ若有ニ破損ニ者應レ令ニ社司修造ニ無ニ其勤者科ニ大祓ニ解ニ却見任官ニ宜承知依レ宣行之符至奉行。正四位上行大辨兼右兵衛督藤原朝臣百川右大史外正六位上阿倍志斐連東人寶龜二年二月十三日と有もて知べし。(この官符を下し給へること度會家行の類聚神祇本源に見えたり、此書のことは第　段の微にいへり。)但し此の事御紀にも類聚三代格にも見えず。後に聞えざる御制なるに就きてなほ考るに。此は其の社の位階に依て四至の限。正殿の大小をも定

られたる故に遂て行はれざりしと所思たり。(制め給へるまでにて遂行はれざる事も多く、其の格は三代の格にも御紀にも漏されたるが傍の書に見えたるも彼此あり。)其はまづ神に位階を授奉らるゝ事いと上古に制なき事は言ふも更なるが。天武天皇紀白鳳元年七月の處に高市の社の神牟狹社神村屋神の皇軍を助奉り給へる事を記して勅登二進三神之品一以祀焉と見えたる。品とは位階を云るが若然らばこれ神社に位を授奉り給ふ事の物に見えたる始と云べけれど。此は必しも位階には非ずてたゞ其社の班列を上給へるにも有べし。(此は師も既く玉がつまにしか言はれたりき。)正しき神階の事は。石原正明が冠位通考に云へる如く。四品以上四階(こは文德天皇紀に天安元年六月壬辰在備中國四品吉備津彥神授二三品一と有によりていふ。)五位以上十四階。正六位上一階すべて十九階なり。(但しこは令條の制度には非ず、後に次々定給へる事也、)其は先づ品位を授奉り給へる事の見えたるは。聖武天皇紀に天平二十一年十二月戊寅遣五位十人散位二十人六衞府舍人。各二十人迎二八幡大神於平群郡一是日入京即於宮梨原宮造新殿以爲神宮云々。因奉二大神一品比咩神二品一左大臣橘宿禰諸兄奉レ詔白レ神曰。天皇我御命仁坐申賜止申久云々豐前國宇佐郡斥坐廣幡乃八幡大神爾申賜止勅久神我天神地祇乎率伊左奈比天云々障事無久奈佐止勅賜奈我良成　禮波歡美貴美奈母毛云々恐家禮登毛御冠献事乎恐美恐美毛申賜久止申とある是始なり。(天平二十一年は天平勝寶元年なり。)さて孝謙天皇紀に天平勝寶二年二月戊子奉充一品八幡大神封八百戶(前四百廿戶今加三百八十戶、)位田八十町(前五十町今加三十町)二品比賣神封六百戶位田六十町とあり。(祿令に凡食封者一品八百戶二品六百戶云々田令に一品八十町二品六十町とある制度の數に符へり。)此は冠位通考にも此時は神田神封を寄らるべき事種にて尊卑の階級とまでは所思食ざりけむ。元より然る格式を立られたるにもあらず堅固の別儀なりと云へるが如し。(通考にまた言く此の時代は萬つに位階を立る事を多くせられたる時にて外位を內官に叙し勳位を勳功なき人に賜ひ上正六位上を叙し、僧侶に二色九階を置れたる皆この頃なり、されば其うつりにて加此も有しなり、位田

と云は奉公する人に賜ふ俸祿なり、神々は朝参行立を爲給ふにも非ず、上直下退し給ふにも非ねば位田の有べき由なき事なりと云へり、是亦さる説なり。）斯てたゞの位階を授奉られし事の見えたるは稱德天皇紀天平神護二年四月甲辰伊豫國神野郡伊曾乃神越智郡大山積並授ニ従四位下一。充ニ神戸各五烟一。久米郡伊豫神野間郡野間神並授ニ従五位下一。充ニ神戸各二烟一とある是始也。（通考に天平勝寶年中に八幡神に品位位田を奉られし後、寶龜延暦弘仁天長を經て承和の頃まで神に位階を奉られし事をさ〳〵無りしとやうに言るは此事を考へ漏せる也。）さて光仁天皇紀に寶龜二年十月戊辰詔充ニ越前國従四位下勳六等劒神食封二十戸田二町一と見えたる頃より事起りて次々諸神に位階を授奉られし故に。彼の大中小社差別の官符を行ひ給けむ。（上に擧たるを熟々讀み辨ふべし。）然るに此の事御紀にも三代格にも見ざるは。此の後の御代御代承和嘉祥貞觀元慶の頃に神階の叙位加上いと多有しかば。其叙位加階あるごとに彼の官符の如く位階相當の殿宇又四至の限をも改めむ事は容易からず。煩はしければ。遂行はれず。宣ひ出たるまでにて廢られけむ故に御紀に記し漏れ格の典にも載ざりけむを其の案のまゝ〳〵に殘れるを摭ひて神祇本源に載せるならむ。（此の事にかぎらず餘事にもかゝる類これかれ有り。）斯在ば律にいはゆる大中小社の稱はその古例を古に據られ。彼官符なる大中小社の稱は大中小社の定めは用たれど旨別なりと知べく。神名帳に大小とあるは律なるとも官符なるとも異にして此も稱は古に據ながら唯に大と小とに別て御會釋ひ坐す由なる事を辨へ某の神社とある下に大の字あるは大の御會釋なる神等（また某神社幾座並大と見え、某神社幾座就中某神大とあり、此由をもよく心得おくべし。）大の字なきは悉く小の御會釋なる神等と知るべし。（然るを世人宮造の大なるを大社といひ、宮造の小なるを小社と心得たるが多有はいと謾なり、そは俗人のみならず神主祝等さへにしか心得たるが多かり。）神名帳は比類なき寶典にて此は天祝詞二典姓氏錄風土記を始め其餘の書等にも見え給さる神等また古書に御名の漏たるも其國々に功有し神等の社々を載されたる帳なれば。熟く明めずは得有まじき物なり。（今行はるゝ印本三あり、何れも誤字脫字も有り訓を

誤れる事は殊に多かり、予が本は伴信友が本に度會延經同氏延賢同氏清在荒木田正身同久老、また京人上田百樹などの異本を見る毎に書入たる本を悉く書入れなほ京極宮の御本に禁裡御本一古本を書入たる本、卜部兼倶自筆本に古寫本を校合たる本其外五本又契冲本に加茂の神庫の本を書入たる、また鈴屋大人の本に數本を校合せたる本を借りて寫したるに其後又古本二を見て校合せて正したる本なり、古史傳に多く引き用ふるを見む人今の印本に異なる事もあるを異む事なかれ。)發端に天神地祇惣三千一百三十二座社二千八百六十一處云々と有る旨を心得ずては末々思ひ惑はしき事の出來めり。(俗の事識者てふ人々の學問ぶ狀を傍より見れば道に志す人の然しも務めずても有べき遠く少なき事をのみあなぐり求めて近く大なる事をば務べくも思ひたらず、かゝる事をしも容易く近き事として、自も知らむとはせず初學の徒にはまづ早く敎し置べき事ぞとも得知ざるはいと麁略也、吾黨の小子よく此旨を思ひてよ。)其はまづ座と云と社と云とを辨ふべし。社と云こと今は其宮を云と心得たる人多けれども然らず。

社とは神の住せ給ふ屋代の義にて本の茂り並樹る。所謂社地を云ふ言也。社二千八百六十一處と書れたる處の字の義を思ふべし。又萬葉に母里と云に社の字を書き或は神社と書るも此の由なり。(なほ古史傳に委しく註へるを見るべし。)座は玖羅と訓て神の坐ます御座を云ふなり。神名帳に載されたる社數都ては二千八百六十一社あるを此社によりては祭神の數座なるも有る故に御座の數三千一百三十二座まします由なり。(一つ宮に相殿に坐も有り、或は別宮を搆へて坐せ奉れるも有り。)さて大四百九十二座。小二千六百四十座とは上の件三千一百三十二座の神等を大と小とに別て御會釋ある由にて所謂大中小社の由には非ず。其は大中小社のこと衞禁律に闌入大社門者徒一年中社小社各減㆓二等㆒と見え。此の文を法曹至要抄に引て案稱㆓大社㆒伊勢大神宮八幡宮也中社者加茂住吉社之類也自餘小社也而闌入之時皆得其罪但中小社有所減而已と見たるに帳に大四百九十二座と有て大は伊勢大神宮八幡宮に限らずはた中社と云は一社も無れば也。故考ふるに律に所謂大中小社はいと古より自然る階の有りしを律の御撰の時に其儘に

用られけむを（此は四時祭式に凡踐祚大嘗祭爲大祀祈年月次神嘗新嘗賀茂等祭爲中祀大忌風神鎭花三枝相嘗鎭魂鎭火道饗園韓神松尾平野春日大原野等祭爲小祀と有も元より此級々の有しに依て定められたると聞ゆるをも思ひ合すべし）位階を授奉り給ふ事始りて後に其位階に依て大中小の階を定られけり。其は光仁天皇の寶龜二年の太政官符に大中小社差別事太政官符神祇官并五畿七道諸國司應早定置天下諸社大中小神殿雜舍瑞垣鳥居並四至內地町數事正一位三位以上爲二大社一從三位從四位以上爲二中社一正五位從五位以上爲二小社一大社四至限九町三間檜皮葺正殿一字（高一丈二尺在板敷戸一本）云々

伴信友說に竊に謹て按ふに。日本書紀には皇統の年紀までをも記されたるに。天智天皇紀。天武天皇紀と次第て。大友の天皇を皇統に立られず。はた事實もおほゝしく記されて。此の御事のみ。事實も年紀も。うち合ぬ事の見ゆるはいかにぞや。然るに大友の天皇は。慥しく天智天皇の御位を承繼給ひしこと。古き書どもに其の證明らかにして既に大日本史には其の事實を證して皇統に立て紀し給へり。是れによりて謹て案ふに。天武天皇大友天皇を亡ひて後御位をば知看つれども。（天武天皇は天智天皇の御弟大友天皇は天智天皇の御子に坐ませり）實は御心よからぬ御所爲なる故に。（御紀にも此趣きほの〲見えたり）其の犯し過ち給へる御事の後の世に。つゝましくおもほして。まづ御世繼の史には。大友天皇の御事をば。天皇の御位には即せ給はざりつる狀に。記し置せまほしく。裏に所思看し。はた素より大御心足らひ給へる御慮として御世繼などの正しき傳へを。史に記さしめ給はむの御心坐ませる故に。川島皇子等に詔命せて。帝記及び上古の諸事を記し定めしめ給ひ。また稗田阿禮に勅語して。帝皇日繼。及び先代の舊辭を誦習はしめ給へるなるべし。然るに其事を果し給はざるほどに。崩り給ひしかば。（此間持統天皇の御世十一年、文武天皇の御世十年を經たり）元明天皇其勅語の徒にならむ事を可惜しみ給ひて。太安萬侶ぬしに詔て書記さしめ給ひて。和銅五年に進らせ給へる物すなはち古事記なり。其の後五年を經て。元正天皇の養老四年に。日本紀を奏上らせ給へり。其は天武天皇の御子とます、舍人親王を總裁

と爲て修撰せ給ひしも。彼天武天皇の裏の御心を繼て書さしめ給へる物なるべし。(此の後諡の制いできても大友天皇には諡を奉られず。)此は其の元天武天皇漢國ぶりの枉心に。かしこき大御心の率られ坐まして。云々の御所爲を行ひ給ひける御過なるを。正しき御史の日本紀に。此事のみおほゝしく記されたるは。大御國の直き御手ぶりともなく。畏けれどあかず口をしく思へりしに。(如此ばかりには非ねども。上古よりの天皇たちの。正しからぬ御行ひの坐しを。分明に日本紀に載されたり。さて天武天皇の皇子の脈は廢帝にて絶たまへり。阿那かしこ。)此頃篤胤が日下部勝臬ぬしの舍人親王の書き給へる。大和國藥師寺の塔の。檫銘につきて論ひたる書を見せたるに。其を見れば既く此事を論はれたり。(藥師寺は天武天皇紀に、九年十一月壬申朔癸未、皇后體不豫爲皇后誓願之、初興藥師寺云々と見えて。此の時に興られたる寺なるが、檫銘は舍人親王の書き給へるよし。慥しく言ひ傳へたり、檫は和名抄に佛塗中心柱也、俗云心乃波之良とあり、)其は其銘文に維清原宮馭宇天皇(天武天皇の御ことなり、)即

位八年庚辰之歳。建子之月。以中宮不念創此伽藍云々とあるを論ひて。臬謹按銘稱清原宮馭宇天皇即位八年庚辰之歳則其元年在癸酉。而日本書紀以壬申爲之年。史與銘已爽一年。然倶是盡敬贈皇之製作。(信友云盡敬贈皇は舍人親王の御事を申す文なり。)而自相矛盾者何也。其作銘先於史蓋十數年矣方浮屠落成倉卒所製是以傳當時之實焉史則奉勅所撰實爲國家之盛事躬爲總裁宜潛心殫思以撰錄焉故幽微回迂爲君父諱避此其所以遞不同也何據知其然耶凡立皇太子則必書紀中之通例也而天智紀不書或稱東宮或稱大皇弟者未知爲何人也至天武紀始書天智天皇元年立爲東宮即知其指天武也。懷風藻大友皇子傳曰年二十三立爲皇太子又曰會壬申之亂天命不遂時年二十五今泝數之其立爲皇太子在天智九年矣(信友云懷風藻は序に、天平勝寶三年辛卯十一月作れる由見えて、かの壬申より八十年ばかりの後に記したるものにして、日本紀奏上れる養老四年よりは。僅に三十三年を經たる頃に書きたるものなり。)然而天智紀文志而晦焉凡元年末必書曰是年也太歳云々而唯天武紀至二年始書。是其變例也(是年也大歳癸酉とあり。)天

智十年辛未十二月乙丑天皇崩經壬申之亂明年癸酉二月癸未天武即位其中間若曠位然猶近江朝廷非大友而誰在祚乎是婉而成章也（信友云和銅四年奏進の古事記の序にも、天武天皇の御事を、歲次大梁月踵夾鍾清原大宮昇即天位とあり、大梁は癸酉、夾鍾は二月なり。即位の歲月は紀と合り、此は殊更に即位の大禮を行ひ給へるにて、實に天皇の御位を得て大政し給へるは、前の年の壬申よりの御事なるから、紀元を改め立られざりし以前は事實のまゝに、壬申を即位の元年として、彼檫の銘にも記されつるなり、然るに紀を撰定のときに議ありて、即位の紀元を改られたるなるべし。）天平寶字二年勅曰自近江大津宮內大臣已來世有明德翼輔皇室者歷十帝年殆一百餘是而言天朝以大友公然列敘世數則其於負扆亦何所疑焉按水鏡大鏡及其裏書皆曰天智十年十二月五日大友陟帝位雖非正史亦可以證又神龜元年詔曰白鳳以來朱雀以前古書或以爲壬申或謂歲在癸酉其言紛紜叵得縷說意是大友之紀元已然則壬申年既係于大友在位至明年癸酉乃爲天武元年故吾曰銘之所勒固得其實焉史之所書頗繫諱避也夫史者國家之大器後世之龜鏡也若有諱避則是私之也苟私之也則天下之大事滅矣船爲總裁奚叨用私爲春秋哀公十二年經書孟子卒昭公取於吳故不書姓是魯史之舊文傳曰諱國惡禮也孔子答楚葉公以子爲父隱爲直在其中矣當時元正在位帝是天武之孫臣子之於君父有愛敬惻怛之情欲言而不能言者也苟每敢直書則硜々然小人哉故贈皇放周史之舊法從仲尼之聖敎而作天武紀不亦美乎云々とあり此の文巨細に論ひて實に論れたり。又漢意にて論へる事も中々に當時の意も然ぞ有りけむと想ひ像られて阿波禮なり。古へ學せむ人の知り留おくべき事にこそ。

食鹽の始の即考

正しく燒鹽と云ふことの見えたるは應神天皇紀に三十一年秋八月詔群卿曰官船名枯野者伊豆國所貢之船也。是朽不堪用然久爲官用功不可忘何其船名勿絶而得傳後葉焉。群卿便被詔以令有司取其船材爲薪而燒鹽於是得五百籠則施之周賜諸國とあるが始なれども是より前仲哀天皇紀八年正月の處に幸筑紫時岡縣主祖能鰐聞天皇車駕云々參迎于周芳沙麼之浦而獻魚鹽地云云以逆見海爲鹽地と見えたるは此の地を鹽燒地

と定られたる樣に聞ゆ。正しく神代に今の食鹽の有し證は古語拾遺に大地主神の田人が牛の完を食したるを御歳神怒りたまひて蝗を放ち給へるがまた其蟲を避る禁術を教へて宜以二牛完一置二溝口一作二男莖形一以加レ之以二薏子蜀椒。呉桃葉及鹽一班二置其畔一と有る鹽は正にいまの食鹽にて大地主神とは大國主神(亦名大己貴命)の事にて是は天孫降臨よりは遙に以前の故事也。また倭姫命世記に垂仁天皇の廿五年に大神宮鎭座の地を求め巡り。伊勢の國に至り給ふ處に。二見國に御船留給天坐時佐見都日女參相支汝國名何問給支御詔毛不レ聞御答毛不レ白只以二堅鹽一多御饗奉支倭姫命慈給堅多社定給支時乙若子命其濱乎御鹽並御鹽山定奉とあるも應神天皇の御世よりは遙に前なり。倭姫命世記の此處の文などは大神宮本記とて雄略天皇よりは前なる古書を採用したる文なれば證と爲すに足れり。さて堅鹽をキタシと訓むは用明天皇の御母を書紀に堅鹽媛とあるを古事記には意富藝多志比賣と有り。書紀にも堅鹽此云二岐拖志一と訓註有れば也。(萬葉五の卷山上憶良の歌に、堅鹽乎取都豆之呂比と有る堅鹽を略解にかたしほと訓たるは誤りなるべし、)斯てキタシとはきたひしほと云ふ言にやまた是より延て考ふるにかねをきたへると云ふも堅むる由にて同語なるべし。

本教外篇上（本教自鞭策）未許他見

上士立徳以敎變之中士立功以法革之下士立言以辭闢之　胡致堂崇正辯ノ序ニ見ユ

樹之根本者在地而從上受養其幹枝向天而蔭人之根本者向天而直天承育其幹枝垂下成人之智者知上帝成人之學者學上帝因以誨蒼生焉　賢者士之常善者福之府

牧童有憂厭此山而遠望彼山如美可尋憂焉近彼山則近不若遠矣牧童々々易居者寧易己乎汝何往而能離己乎○　憂樂由心萌心平隨處樂心幻隨處憂

㊄佛法に死生に流轉せずとて○人また種々の物に再生する事を卑めども○其佛たち菩薩たち種々の物にも人にも生れて勞苦す○これやはり死生に流轉するに非ずや○

㊁人の世に（生しめ給へるも世に從ひて）必本より員數の定まり有ぬべしされどそは幽政に因る事にて人間にて察知すべき由なき也　凡人さノ中々

幽冥大神カ大社神カ

㊅（後世に浮屠氏が）本地を立てより以來○眞の神はいみじく鎮まりて○本地にまかせ玉ふ○故にその本地と立たるものその神と名乘りて種々のことありし（を偽せり）（又美作國云々此に入る）（但し其の本地佛といふものの○アミダ○觀音○地藏など○もとより無きものなるに○後人の作れる經文の旨なる事實を見せなどする事は妖魔のわざ也（此は古今妖魅考に依て見るべし）○但し稀々には眞の神の示現もあり○そは天下の大事にわたる事也○（△イ下に入る）（應永卅一年）蒙古襲來のときに廣田（大神）の神威など是なり○（此に看聞日記を引いて入るべきか）（本地を立て○經をよみ佛あしらひにすれば○神は去りて妖鬼その神その本地佛と稱して人をたぶらかすこと○今世に稻荷と稱して狐を祭るに○其狐いなりと稱して種々のあやしきわざをなすもてしるべし○○神は元より人の心のまに〳〵從ひ玉ふものなるに○況て惡神の荒び盛なる故に暫く妖鬼のするがまに〳〵○人の好むが隨見てゐ玉ふなり○（まに〳〵）「本地を立ては實の神はおはしまさず○みな妖鬼らが色々の事をなすなり○」（削るべし）○眞の神（等）は決して佛法ざまのことは好み玉はず○そは佛法をば惟祖惟宗たる（伊勢）大御神の嫌ひたまへばし○其御心に違ひて佛を好みては大御神へすまぬわ（正き皇神）

けなれば也。（△イ上に入る）（又ミノ（ミマサカ）、國中山高野社に。猿（大蛇）が住ひしことも邪神の入かはれる證なり。（此に今昔物語を引て入るべきか）

㊅大國主（大）神。（百方謀りて己命を殺奉らむとせられしかば已事を得ずその御祖大神の詔を奉て）その兄弟の八十神を亡し玉へり。此は神の御所爲なり。神習ふといへど習ふべから（きにあらず）ず。さては神ごろふなり。

（又へ）あまたの姫神によばひ（なカ）玉へるも習ふべからず。

大國主神の。（そ）あまたの神によばひ玉へるは。あまたの御子生坐んとてなり。其は萬國を造り玉ひ治め玉はんとてなり。人もさる勢ありてせんはさることなれど。さもなき人のたゞ淫にふけりて。多くの女にあはむは。神ごろふにて道にあらず。（此分はよく人の惑思事なれは辨へおくなり）兄弟を亡ぼすことも甚だ心すべきことなり。

㊄人心の秘藏せる事は（にはいかにりさも）。大國主神（ウナデノ森の神も知り玉ふべし）（よく）知り玉ふ。そは（一切萬生の事を）悉く御自ら知玉ふに非ず共。數多の神に問（訊）ねて知り玉ふ也。谷ぐゝ（及天下の事）をよく知れる）。くえ彦に問（賜）へるもて（も）知べし。（其上に太兆の卜事あり世に）狐を使ひ犬神を使ふものすら人心の秘藏する事を知る。況て神はしろしめさで有るべきか。飛鳥昆蟲萬物の靈あるもの（も）悉く大國主神に（物）白す。（駿臺雑話茂卿筆記など引て入へくや）さとりてふ獸の事をも思ふべし。人として人の隱惡をいふは。幽神の大權を僭する也。但し司人として人の惡罪を正すは。やがて大國主神の御心なれば（此は事別也）天の下の事をよく知れる久延彦を使ひ玉ふなり。　○其上に太兆もあり。

㊈高位は（敢て）望むべからず。位高きほど苦多し○そは位高きは天神の德を行ひ（天職を襲行ひて）民を治めしめんとなればなり。されど生得たる位を下りて苦を遁れんとするは。また天神の命に背くなり。然ればその生れ得たる天職をよく守りて有より外なし。もし吾より求めず（なカ）天命にて生得たる位より（も）高きに上らしめ玉ふはまた（はむにはは）辭せず（すべからず）。其天職を盡すべし。外國の説には。高位を避て遁るゝを道とすれど。（そは）非説なり。「此事は（以下削りては）吾天神の御前に出ても白すべし。」

㊆神道。人道。君道。臣道。（義）父道。（親）子道。夫道。（別）婦道。兄道。弟道。友道。（師道）（別に委しく記すさければ此所には云はずなどある可し）

㈧仁(うつくしみ)智(さとり)。敬(つゝしみ)。義(ことわり)。勇(いさみ)。君(上)は更也（王公貴人を始め）士(さむらひ)。農(たびと)。工(たくみ)。商(あきびと)。ともに某々に此の五つを全く修して。功德を天下に立るぞ人の道にて。神習ふには有ける。

㈣外國々に上帝。天帝。梵天王。閻魔王などいひて。種々の事實あるは。大國主(大)神の分靈。幸御魂。奇御魂の御わざなり。上帝。天帝といへばとて。別天神たちは御身を隱して坐ませば。決して外國へも御形を現はし玉はず。殊に幽事は悉く大國主大神に委ねおき玉へば世に現はれ玉はず。

㈡火(ノ中)は物を燒べく。水は火を滅すべく生賦(うみつけ)ませる。是その物の性也。さて水神土神に火神の荒びたらんには。水神。土神鎭め奉れと教へ誨し玉ひきとあるは。水土の性の率に導き玉へるにてこれ敎なり。されば人も善を爲べく。生賦玉へるこれ人の性なり。其性の善(よろ)しきまに〳〵導くこれ敎なり。

㈢(上)人魂は。善人の魂は天上に昇ること。舊く天がけりと云へるを證とし。惡人の魂は。夜見に行くこと(知)根國の佐須良姬の事にて說べし。善惡の魂ともに此の世に在りてしるしあることは。鈴屋(翁)の燈火を遠くへやるに光の殘ることに譬ふべし。さて終には善魂は天に復命し。惡魂は遂に殘らず夜見に逐はるべし。

末段の一條此に入るべくや

㈤よします(東洞)云。吾は醫を學びて醫をせず。天下の醫に醫をなさしめむといへりとぞ。吾も云く。吾は道を學びて未だ道を行ふこと能はず 天下の道を好む者に道を行はしめむとするなり。

㈩邪神すでに成學しては仕方(己事なえず)がないから。先姑く其儘におきて禍を爲しめ。其禍を用に立て人草の人爲(所行)の節に當りてたじろくか否を試し見たまふなり。善人の禍に逢ふを救ひ玉はぬことは。富しめば德を害はん事を思してなり。またたま〳〵救ひ玉ふことも賞し玉ふこともあり。(又)惠み玉ふ者ほど禍を其ままに救はずおき玉ふなり。惡人の福を得るは惠まず捨置き玉ふなり。

㈦人の善惡きは。かにかくに此の世の人よりは（諦に）判がたし。さるは伴善雄などは。惡き人（だ）と(所)思るに疫病のわざに用ひ玉へり。そはせき(き)の病に申かへたりと云へるは。ひくゝ賤しきわざの方なれど。よく用ひられたる樣子なり。然れば此世にの

これる事實などの。善人めきて見ゆるも神の御心に合(かな)はずて。永殃を與へ玉ふも有べし。世の人にても生涯善人の聞えありし人も。百世の下に掩ふべからぬ惡事の露顯する人もあるもて知るべし。

㊂皇美麻命は現事を知看て。現民の賞罰を掌り玉へば。幽事知看す大國主神は(大典頼按)。幽靈の賞罰を掌り玉ふこと言まくも更なり

下㊉枉津日神の御心によりて。既に外國の説と神とわたりては。邪説ひろこり邪神災をなす。これやがて人の智を磨き。善難に其徳を煉る道具となれり。凡て神の御所爲は斯の如(く廣大深遠なる)ものなり。

㊀天地萬物に大元高祖神あり。御名を天之御中主神と申す。始なくまた終もなく。天上に坐まし。天地萬物を生ずべき德を蘊し。爲事なく寂然として(謂ゆる元始の時より高天原に大御坐す)。萬有を主宰し玉ふ。次に高皇産靈神。神皇産靈神あり。天之御中主神の神德を持別けて。天地萬物を生し。天地萬有を主宰し玉ふ。靈(明)妙不測の産靈の德を具へたる。我人本生の祖父母神に坐ます。二(皇)祖(天)神既に天地を鎔造して。伊邪那岐命。伊邪那美命を産生して。國生固め。人草をも生しめ玉ふ。これ我等が本生の大父母神に坐す。大父母の二神既に人草を生み。然して後人草を惠み玉ふと萬物をも生み。風火金水土の神等を始め。數多の神たちを生玉へる中に。天照大御神は。其和御魂。直日神と供に。天日を知し看し。月夜見命は(其荒御魂禍津日神と供に)月夜見國を知看して(有ゆる千萬國々に幸福へ賜ふ事終古窮極る時ある事なし)云々

ノ上(二)産靈大神(天地萬物に本生靈明の大父母ありて天上に坐て万有を主宰し給ふ御名を産靈大神と申す)は。天地萬有の眞主なり。天を生じ。地を生じ。人を生じ。神を生じ。物を生じて其を主宰し。其を安養し。我人の本生の大父母にて。心身性命すべて此の大神の賦賜物なり。天地間の万の事物。この大神の神德によりて安立す。我人の極めて(造次顛沛も)欽崇(し奉らでは之有まじき大神なり。

ノ下(三)西土に謂る陰陽二氣は鬼神の良能なり。(から國の)詩に云く有物有則と云へる則(のり)は即ち理をいへり。必まづ物有りて後に理あること知べし。理いかで物を生ずべき。設へば法制禁令は治世の則なり。然るを(此を謂)君と爲て可ならんや。天神いまだ萬有を生ぜざるより。其無窮の靈明必ず先づ萬物の理を

包函し。其の（包）函する所に依りて諸物を造るなり。夫のものの自から物を生ずることを能はず。別に造物の主あることを知べし。凡て世に生らむ人ちふ人は大國主神を師さしまたイザナキノ命を師さし又ムスビノ神を師さし又御中主神を師さすこれで成神也

（儒生云く。天地萬物に一大靈明の主ありて。主宰たること經書に數々見えたり。其は詩に皇矣上帝臨下有赫監觀四方求民之莫といひ。書に惟皇上帝降衷于下民若有恒性といへり。此書は古文にて信ずるに足らぬこと師翁鬼神新論に已に辨へ給へるか如く伊藤長胤も論するが如し程明道も只其主宰謂之帝といひ朱熹も帝者天之主宰是已といへり然れども上帝始めて天地萬物を造るといふ說は未だ此を聞かず。大抵まづ我が身ありて後に我が神ありて。我身の主となる。此身あらざれば此の神なし。然れば天地有りて後に天帝有りて主宰たることを疑なし。

答ふ天に主宰あることを覺れば大端已に定まる。既に此を知れば。天帝有りて後に天地ありし事も亦知り易し。然るは無始の神有りて後に始まる事物あり。吾身の先に父母ありて我を生み。必ず天帝の衷を我に降すことを有り。我が靈性を賦すると。我身を生ずることを無くば。この神身何に從りて成む（譬へば）。それ天地はなほ一宮室の如し。宮室かならず主の製造することを有て後に成る。況て天地の大なる。此を主る神無くて自から成らむや。此を以て天地の主宰の原より萬有の先に有しことを知るべし。もと無始の神にして固より然る由ありて天地萬物を化生し。其國に君たるが其主宰たること猶かの開國の人の如し。もし天地の先に此の神無く。既に天地有りて後に此の神ありと云はゞ。此天地は何に從りて成り。其後に上帝は何より來り。かつ誰か此を立て主宰とせるや。

（儒生云く。大極すなはち天地の主たり。

篤胤云ふ。大極とは（かの宋儒の）理氣の混じて未だ分らざるを。假に稱たるにて。彼國の古人も。大極に靈明知覺ありとは說かず。既に靈明知覺無れば。いかで萬化を主宰せむ。故に漢籍にもたゞ上帝に事ふると言ひて。大極に事ふるとは言はず。

（儒生云ふ。上帝は理氣の上に在りて。天地を肇めて主宰たること。既に承りぬ然れども。世間の萬事みな上帝の所爲に非ざるは無しと云ふときは。善

惡また萬有の不齊に至りてもみな上帝の心なるか

篤胤云。天地の運行萬物の化生みな天帝の全能に係らざるは無し。然れども善惡の事を論ずるに至りては。此を委曲に本教の古傳に考ふるに(一に是を)天帝に混歸すべからず。天神は至善なり人は上帝に生ぜらる然れば中庸に。天之命謂之性。從性謂之道といへる如く。至善の性靈を賦せられたれば。必ず至善なるべき者なり。然るに惡を爲すは固より(妖鬼に変こられたる因に依り)人の自造る所にして。天帝の命に反する者なり。豈善と惡と共に天帝の命の所爲と謂(へけ)むや。上帝の好するは善。惡ふは惡にて。實は其の賞罰の本を司りて。明に勸懲し賜ふなり。漢籍に。作善降之百祥。作不善降之百殃。といひ。福善禍淫といへる說と。相發して辨ふべし。

(一)儒生云。天帝は萬善の宗にて。惡を爲す者は自から天帝の賦命に背くと云ふ說は承りぬ。但し天地至廣にして物類甚だ繁し。其を悉く天帝の生じて。天帝の主宰する所とせば。彼の至微至細の物も其陶冶搆撰を經(て成)むか。また煩にして勞に過ることと無らんや。

篤胤云。天帝の萬物を生ずる。大小に因りて難易あるに非ず。悉く天帝化功の妙なり。至尊にして褻ることなく。至明にして煩なく。至能にして勞なし。其は工匠の室を作るに。木石を資り。器械を利し。心力を費し。時日を重ねて漸々にして成り。既に成れる後その存毀を定ること能はざる如きに非ず。天帝は無物より萬有を生じ。此を保存安養して壞れ(毀傷せ)ざらしむ。此の世界もし天帝頃刻も顧ざれば全無に歸す。其は譬へば日光は日より生ず。日無ては日光存(ある)ことなし。少時も照さゞれば天地黯然として色なし。此を以て萬物の存するは。天帝安養の恩に係らざること無きを知べし。天日照を發すれば六合同く光り。至偏至穢の所。糞泥腐草といへども照さざる所なし。然れども天日何の煩勞か有らむ。天帝の無物より萬有を生じ。其を保存安養して壞れ(毀傷せ)ざらしむれども煩勞なきこと是に准へて覺るべし。

(一)儒生云。天帝既に人を生じて。萬物を生ぜるは。人用に資すと言はゞ。百千の種族の人用を爲さゞる物多く。或は反て人に害を爲す物あり。此を生

するはいかに。

篤胤云。天地間にもと一物も人に益なきもの（はあらざる）〔へきを〕なし。たゞ人の智識淺陋にして。いまだ此を用ふる道を知らざる也〔なるべし夫〕。天帝の物を生ずる。牛馬は以て人の勞に代るをはじめ。禽獸虫魚草木金石の類みな以て人を養ひ人の用となる。卜部の家説に中臣鎌子連の語に。神道は天地を以て書籍と爲すと見えたりとぞ。（此）實に然る語なり。物性隱微かつ（萬）物（の）用廣博奥妙にして。傳授する所無れば。其性味生尅を究むること能はず。故に其實用を得ざる物の多きのみ。若その人を害するを論ずれば。猛獸おほくは嬰兒を害せず。害を被るは人のまづ彼を害するの意あるに繇りて。物自保せんとして。人を害して自避るなり。（昆虫の殃）〇非常の害は人皆以て天災と爲す。人をして天の怒を畏れしめて。戯るゝ事なく。豫め悔改めて宥を求めしむ。これ暫く殃ありて。反て永福を獲るなり。其は天帝人を哀憫し。恩もて此を慈み。威もてこを懼れしむ。苦事の警醒人をして耽樂恣肆なく。躬を責め行を脩むることを知り。顯世に戀著することなく。幽世眞福の域にのぼることを思はしむるのみ。其は彼の慈母の兒に乳を斷ちて食を習はしめむと欲するに。必らず乳に苦味を加へて嗜まざらしめんと爲るが如し。況て天帝の物を生ずる〔給ふ〕は人を養はんと欲して〔爲〕なれば。一物も人を害するもの〔敎はなき道理なり〕なし。惟人仁主〔天帝天神カ〕の命を犯すに迨びて。物はじめて人の命を戕（賊）して其の毒を肆にす。然れば物の人に害を爲すは。天帝の威に代り有罪を討し。無罪を警むるゆゑん（とも云ふべくや）のみ。嗟人あえて天帝の命に順ひて善を成さずすなはち〔して徒に〕天帝のゝ意に順ひて。福を成さむことを（のみ）欲するは（豈）惑ひならずや。

儒生云。然も有らば天帝この物を用ひて。不善人の罪を討するは可なり。善人も其害を受るはいかに。儒には直に氣數の遭（遇）する所と爲す。もし盡く天理に屬せば〔を裁判〕。恐くは現窮りて究詰すへからず。此の疑ひ剖たずは。恐くは天下に說きて其信を動すこと無らん。

篤胤云。神道は無窮なり。不測なり。人々の明悟〔智〕は限りあり。吾人ともに一人の私見を以て。天帝の大

權を窮はんと欲す。これ螢光をもて。禰慈山の八面を照さんと欲するが如し。横遭の害は善人に及ぶべからず。然れども善人惡人の辨は。吾人のよく定むる所にあらざるなり。善の十分その一二を缺けばいまだ善人となさず。かつまゝ節を昭に飾りて。(躬)行を冥に敗り。或は始め善にして。終に惡(く)。また實は惡にして善に類し。或は己を善名に居して。人を罪阱に陷るゝ者あり。惡の十分わづかに一二を染するもすなはち惡人たり。如何となれば善は全に成り。惡は一に敗る。其を國法に譬ふるに。百款も獨其一を犯せば。便これ罪人にて。王法の宥さゞる所たり。吾が輩の人を觀るは。たゞその外行を觀るのみ。天神に至りては乃その底裡衷曲を併せて悉くこれを瞭る。吾人は其一時を見るを。天帝は直に其の畢世を照す。吾は儔衆に見る。天帝は直に其閒居を照す。一念の不善によりて德の址傾く。善惡の界その微なること斯の如し。いかで(衆)人の羨むところは。天神の誅する所なるを知らん。所謂人の君子は天の小人なるも。孰かよく其を辨(ふ)へん。

(儒生云。人顯に小善を爲すとも。天帝なほ其隱惡を譴せば。人その惡者たることを知らん。然るに其を譴めず。復りて其に世福を加ふるは如何ぞや。其身を譴せず。其子孫を譴するか。また若くは其惡名を世に留めて。萬年も滌がざるは其を罰するなるか。或は心勞の繫きが(その冥)罰なるか

萬胤云。子孫の善惡は自から子孫の賞罰あり。父は惡者なるに子は善者なるあり。父は善者にて子は惡者なるあり。胡ども父の僭をもて。移して其子の善者を責め。父の德を以て曲て其子の惡者を祐くべき。況て世には子も孫も無きものあり。其善惡の報ひは誰かこれに當るべき。(頭注書入云たさへば將軍)然れば凡そ子孫の遺福遺禍は。たゞ祖父の餘慶餘殃と謂ふべきなり。其本身の功と罪とは。決めて代る者なし。善惡の名とその自慊自歉の心とに至りては。固よりまた此が一分を罰すべし。第その報の正に非ず。僅に其報の餘なり。抑々人としてはまづ此の生は何より來り。死は何に歸り去ると云ふことを。能く辨ふべし。その生れ出たるは。產靈大神その靈性を分降し賜ひ。其性素より義理に遵ひ。其賦賜へる性は初に負くこと莫からしめ玉ふことは。譬へば舊く皇庭より國々の司を御任し

坐て、其の他を治めしめ玉ふに。符篆を付し。殿最を課せ。事ありて將軍を向け玉ふに。しるしの物を賜ひて命せたまふがことし。斯て其任竟て復命して。御しるしの物奉りて。大御言を承るが如し。人死れば形骸は土に歸り。其靈性は(萬古)滅ぶる事なく。必ず幽冥大神の御判を承けて。天國に復命す。天地の初發より一人も産靈(大)神の善しき靈性を賦賜はらぬはなく。顯幽相判たるより。一人も死て幽冥大神の賞罰の御判を承ざる者なし。人の善を爲すに微瑕なきものは有らず。人の惡を爲すも微善なき者は有らず。幽冥大神は至公至明にして。其(の)善者の或はやゝ世善を受るは。其細けき過を煉りて。其德を玉と成し賜ひ。德行の純全なるに迨びて。始めて天國に復命白さしめ玉ふ(あり)。惡人は少しく世福を獲ることは。其微德を酬ひ玉ふなり。益々惡を恣にして。絕て悛改せざるに至りて。重罰を與へ遂に冥獄(に降る)を遁れず。譬へば醫者の病を視るが如く。病療すべければ苦口の藥を進め、必ず救ふべからぬ者は。藥を用ふることなく。其好嗜を恣にせしめて禁めず。此は幽神暫く不善を恕し。其惡を盈しめて罰を降すなり。豈こを祚ひ玉はんや。幽神まゝ世福を不善の人に加ふることは。恩德を以て其心を激發し。恩を知り遷り改めて。再犯さゞらしめんと欲す。然るに終に改むることなきは。永罰を降すことまた宜ならずや。恩を受ること愈深ければ。罪を負ふこと愈重し。萬に救ふべきなし。惟死後に罰するのみならず。生前にても多くその罰に罹る者あり。總て思ふに善を賞し惡を罰するは。たゞ幽神に在りて。輕重遲速(こそあれ)毫釐も差はず。(天地剖判以來)いまだ顯に其惡を恣にして。幽神相應の罪譴を加へざる者は有ざるなり。

○儒生云。人の善惡賞罰すでに免るべからざるときは。産靈神の人を生じ玉ふに。何ぞ善者を多く。惡者を少くせざる。もし善者は多く得べからずは。何ぞ篤く賢哲の君を生ぜざる。君仁なれば仁ならざるはなく。君義なれば義ならざるはなけむ。

篤胤云。父母の子を生ずるに。皆(其)賢なることを欲せざるはなく(よく善人)を(模)範として正道を訓ふれども。不肖なる者あり。こは其子の過なり。いかで妄に其父を咎むべき。人の性に原より異稟なく。至善の靈性を賦予へ。明悟の智を賜ひて。善惡を分

たしめ〇愛欲の能を賜ひて〇趨避に便ならしむ〇知能各々具りて〇其を自恣にすることを聽し玉ふ〇たゞ（頭注書入云性善荒魂和魂加邪心かの妖神等の附るところ）（此改むべし）其原罪の染いまだ除かざれば〇本性（は善と云ども荒魂の荒びと禍神の厄に因て其）の正已に失ひ〇明悟一度昏からは〇愛欲やがて僻かむ〇趨み避るの路の漸く岐るゝ所以にて〇善惡の分を爲す者一なり〇形軀は（此を）父母に受け血氣に清濁あり〇氣を禀る所以これなり〇禀たる氣はすなはち靈性の器具にて〇或は良易伸和なる者あり〇或は躁虐暴戻なる者あり〇生平擧動多くこれに背きて出づ〇善惡の分を爲す者の二つなり〇（さて）人の居所は五方風氣同じからず〇習尙もこれに因りて異なり〇見聞既に慣ひ習ひやがて性となる〇善惡の分たる者の三なり〇善惡既に分れ〇功罪おのづから定まり〇幽神の賞罰これに隨ふ〇これ必然の理なり〇産靈（大）神をして〇人に性を賦予へ玉ふに〇善を爲に定めて〇惡を爲すことを得ざらしむるが若きは〇（皇祖天神）造物主の全能の能はざる者なしといへども〇願ふに然して善人たらしめば〇善を爲す者は天神の功にして人の功と謂ふべからず〇（故に）賞罰は神明（の鑚鑰）爽はず〇（その）善惡は人の自造（に任せ賜ふなり）を聽くこと〇けだし如此きのみ〇篤く賢哲の君生せさ（を出さ）るも〇また此をもて推案ふべし〇抑々（皇）帝王士庶同くこれ一禀なり〇然れども（皇上）帝王の力は擧ざる所なく〇能く善を爲せば功德甚大也〇苟くも惡を爲せば罪眚も亦甚大なり〇これ天神の（何の故ぞ）善惡を賦予ふに非れども〇世主の自ら善惡を爲す也〇上に至尊の畏るべき有を知らずして〇恣意妄爲する者は（心）極の建ざるなり〇（苟も此如くは）民はた何にか從はん〇風俗浸漓〇亂賊踵を接き〇自らこの慼を貽して〇天神に責望し〇斬むことを有と將と謂ふは（蓋）通論に非ず〇

〇儒生云〇氣質と習慣と同じからずといへども〇不善者改めて善に之くは〇固より要道を欽崇する也〇

篤胤云〇禀氣と習慣の善惡は〇これを二人馬を馳らしむるに譬ふ〇一は良馬〇一は覂馬なり〇（覂之音捧、馬之有逸氣不循軌轍者曰覂と字書に見えたり、）良馬は控勒を煩はさず馳騁意の如し〇覂駕は銜勒法あればまたよく聯鑣並進む〇若し善く御せず〇その奔騁に任ずるは〇此れ盡く馬の過に非ず〇又御者の過也〇靈性の形軀に於る〇主人の馬を勒するが如し〇己（れ）

に克て禮に復り。自強て息ずんばっ自ら氣質を變化し以て成德に抵る。これ善く馬に御する者なり。苟も然らずと爲し。情に任せて放逸し。俗に隨て非を成し。十誡を蔑にして聞ことなく。三仇の遞に引に任せば。また何ぞ至らざる所あらんや。然れども此は改る事能はざるに非ずして。改る事を欲せざるのみ。自畫る者は多く。自奮ふ者は少く。故習に沈淪する者は多く。圖新を砥礪する者は少し。所謂馬を勒めて崖に懸り。鞭鐙咸く失し毀啣綯轡首を決し。胷を碎く。(に至りて)それ誰をか咎めん。皆怙終改めずして。然る事を致し而して反て。惡の改むべからず。善の遷るべからざを疑ふは過なり。

○儒生云。天帝人を生じ善を爲しむ。然るに。人顧て惡を爲す。天常は權あり。何ぞ盡くこれを殲して。世間の爲に善類を保全せざる。こは能はざるか。若欲せざるか。

篤胤云。天神は(一切)能はざることなし。然れども不可あり。若必ず惡人を擧て。盡くこを殲さば。誰か法綱に罹らざる者ぞ。恐くは將に了遺あること靡らんとす。天帝は至公なり。尤も至慈なり。その人を愛する。悲愍は慈母の子を育するが如し。子不肖なりとも此を弃絕せんや。且つ天神の惡人を容るゝ所以の者は。その慈悲已こと無の心なほ其改めん事を望む。世もまた初め惡を爲し。終に善なる者あり。始は蒙昧無知に因りて汚下に陷り。繼てまた人の啓廸と。自己の奮勵とに因りて。尊明(良)に躋る有り。若し(罪に)陷罹をして。即(此を殲)滅せしめば。將に法の自新の路無らんとす。大父母の慈愛心に非ず。況や縱惡忌むこと無きは。生前も多く顯戮あり水火刀兵猛獸暴死の灾の如し。死後また永却沈淪の報あり。何ぞ必しも電光石火の世に於て。遽にこを殲滅せんや。

○儒生云。善惡の報固より忒はざることは聞えたり。然れども。冥々の中を孰かよく見るべき。且つ一惡人幾善人を害する事を知らず。胡ぞ昭々に懲して儆提する所有らしめ。その善者も必ず報を昭々に食て。激勸する所有しめざる。庶くは人皆善を爲して。敢て惡を爲さゞらんか。

篤胤云。善はかならず祥を降し。惡は必殃を降す。或

は生前。或は死後。これみな幽神の兼用する所の權にて。大抵善の極みには必ず賞し。惡の極みには必ず罰す。若し一善を行をすなはち賞し。一惡を行ふをすなはち罰せば。一生の行ひ。一日の間に善惡參らんか。倏にして賞し。倏に罰せば。幽神彰癉の權(それ錯綜屑越せざらんや況や。一善事を爲すもいまだ善人と爲に足らず。かならず勉躬勵行ひ終にいたりて變ぜざる(を)。始めて稱して善人と爲す。すなはち一惡を行ふも。或は後日に省改せば。いまだ便ち惡人の籍に入らず。かならず終に改圖せず方に下流たり。方に衆惡の歸する所たり。重罰せざることを得ざるなり。かつ善に隨ひ其をり〳〵に賞せば。善を爲すもの世福を希覬するの想なき事能はず。その德脩もかならず。便純ならず。故に必ず德行純粹世に顗覦なく。惟本分を盡して神に事へて方に眞德を爲し。方に天神の品たり。幽神方に其德を償ひて賞を行ふへし。況や世福甚だ褊り。甚だ微なり。また甚だ永からず。(此)聖賢の注愛する所に非ずば。其愛せざる所の者を取りて。以て純德厚善の人に報施せば。甚だ此を薄するに非ずや。故に幽世の眞福至純至大至永久なる者をもて。此に報じて幽神賞善の心始めて慊す。聖賢の願もまた始て滿足す。また人は貧窮拂逆の境に處すれば。多く自ら懲創刻責し。努力して善を爲し。稍富貴福澤に遇へば。多く解惰を生じ。或は傲を長し淫を滋すに至る。富貴をもて善を賞すれば。また惡に反して此を惡に速くにあらずや。世苦甚だ微なり。死に至れば已む。然且つ惡人の擺れざる所なり。其惡を懲すに足らず故にかならず報ずるに身後永遠堪がたきの萬苦を以てして方に相稱ふの刑を爲し眼前の善惡をして輙ち報應を見せしむ人々知ことを得るといへども然れども其小なる者を知て終に其大なる者を知らず其近き者を知て終にその遠者を知らず豈幽神人草を陶冶するの意世道を主持するの權衡ならんや惡人の多く善類を凌虐するを論ずるが若き案ふに金は火に鎔せざればその眞赤を見ず幽神不善の人を容して世に在らしむるは或はもてその改圖を望み或はもて善人を鍛(錬)してその德器を成しむ倘その磨涅を受て磷緇すれば眞德にあらさる也烈火もて金を試み。艱難もて德を試む。仁

を成し義を取て死するものあり。義の爲にして。若難を被るものは。すなはち眞福その已に天國を得て處死せざると爲るなり。これ神道の奥妙。豈人意を以て測度すべけんや。世人或は死後の事渺茫として據なきをもて。激勸するところなし。故に昭々の中に幽神また顯にもつて人に示すものあり。大德のかならず祿位名壽を受け。極惡のかならず凶咎災患に罹るが如き。屢これを懲し。屢これを言へり。其間已に然る。未然らざる。當に然るべき。然る所以。また知べき。知べからざる。見るべき。見べからざる。此を善惡の二字。賞罰の二種にすべ。天國地牢の二路。たゞ人自ら取遲速の間。幽冥の界ひ。衡の平なるが如く。毫も輕重することを得ず。鑒の公なる毫も強妍を些たりとも容れず。吾何ぞその見ざる所を以て。其至當至公至微至妙の者を疑ふべけんや。

○儒生云。人の善惡の齊からざる。生前賞罰いまだ盡ず。必身後に在と云ことを通えたり。然れども或は謂ふ。人の靈魂は精氣のみ。氣聚れば生き。氣散すれば死す。安ぞ身後また賞罰あらん。人の靈氣或は精爽散せざる者あるも。形軀すでに無し。苦樂何の受る所あらん。賞罰何の施す所あらん。

篤胤云。氣は神の御息にして。頑然冥然として。宇內に瀰漫し。全く知覺なし。物に在りて變化の料を爲し。人に在りては呼吸養身の需を爲すのみにて。靈性に非ざるなり。また人は氣中に在りて。晝夜呼吸して。暫時も停ことなく。幾萬の更易なるを知らず。(醫書に、人の呼吸晝夜に萬千六百或說)百息とあれど、予いまだ、試みざれば(正くはえ知らず、)もし人魂をして。氣たらしめば。魂もまた更易あらん。魂更らば人々倶に更り。旦晝の已は暮夜の已に非ざらん。いかで然る理の有るべくも非ず。況や人の氣中に寓する。呼吸餘有り。何に緣て盡ること有らん。すなはち氣の盡るか爲にして身死せんや。設し人の靈は氣と同く散ずるならば。儒らが先師と稱して孔子を祭り。またその祖先の神を祭るは。何の事ぞや。先師祖先の神靈は。其身と與に早く亡びたらんをや。然るに祠を立て像を設けて。敬を致し禮を盡して。祭祠するはいさをこなり。見るべし氣は是氣。靈はこれ靈。判然として二つたる

事を。然るを混じて一と爲して。分別せざるべきや〔は惑の甚に非ずや〕

○儒生云。人魂の呼吸の氣に非ること通えたり。然れども或は人の精氣と一なるか。

篤胤云。もし人の精氣をして。靈明と一たらしめば〔なりせ〕凡そ人の精氣強壯なれば。其靈明才學も亦これと與に強壯なるべく。人の精氣衰弱すれば。其靈明もまたこれと與に衰弱なるべし。今人を見る毎に〔徵に〕氣の強壯のときに當りては。其靈明才學反て衰弱たり。氣或は衰弱に至りては。其靈明の用。義理の(更)張主さらに強壯なるを覺ふ〔ゆ〕。此をもて(了)〔下ニ入ル〕知るべし。いはゆる魂はすなはち生活の機。運動靈覺の原なることを。(了知るべし)。生物三種あり。下なる者は生れて覺なし。草木是なり。中なるは生物にして靈なし。禽獸これ也。上なるは生覺靈(頭書云生氣覺氣靈氣カ)の三能ともに備はる。人類これなり。故に魂も〔凡生物に〕また三種あり。一を生魂〔物〕となし一を覺魂〔物カ〕と爲し。一〔物〕を靈魂〔物カ〕と爲す。生魂〔物〕は草木の發育生長を助け〔これにて有始有終ものとす〕。覺靈〔類是にて〕は禽獸の觸覺運動を助く。二の者は形に囿し質に根し。(大かた)物に隨て生滅す〔有始有終とせる中に或は終元も〕。いはゆる有始有終ものの〔のもあり〕是れなり。人の靈魂の若きは〔に至て〕。神妙の體たり〔にて〕。原より形に落ず質に根せず。自ら更易聚散の殊なし。故に人身と倶に生すと云ども。必人身と倶に滅びず〔のみ〕。〔此も〕いはゆる有始無終ものの是也〔にて〕。是をもて人の靈魂ひとり異なる所有て〔物にし〕。身に合ふも亦生き。身を離るゝも亦生き。(尊卑貴賤大小輕重こそあれ)聖賢不肖英雄凡夫を論せず。賦界二つなく〔く〕。善否に因て性體を變易せず。故に永在〔存〕また二なきなり。獨その受る所の善惡の報殊に甚し(きなり)。けだし人の靈魂は原より一身の主たり。形骸百體は靈魂の從役なる者なり。善惡その行を異にして。其功と罪と總て主に歸する者といへども。形骸は土に歸し。主は自存して滅亡せず) 必ず幽世に入て。幽神〔神〕のその賞罰を審判す〔裁を仰〕ることを聽き。(然後)天帝に復命するなり。

支道を以て觀るに草木類は死して後靈無きこと勿論なりされど或は桂又木を伐て祟を得ることありされど此は物の據と云て禽獸類は外國にては知らず我には古代より死て靈と顯る事枚擧に堪えず西人の有始有終させるは皇國にては用がたし支那にては虎の死靈を倀と云ふて靈を現したる事諸書に多く見え其他いと〳〵夥き事也

○儒生云。天地の間は順逆の二境を離れず。人の世

に經る苦樂の二情に離れず。然も苦樂の遭に當りて身のこれを受るは。その五官百體の用あるを以てなり。故に耳は聽を司り。目は視を司り。口は喫を司り。鼻は臭を司り。四體は覺を司る。死すれば一具の白骨立ごころに僵仆を見る。形軀受る所なく。苦樂施す所なし。神は滅せずといへども。安ぞ朽腐て土に歸したるものゝ。また別に苦樂を受ること有らん。

篤胤云。身後は論ふまでもなく。即ち生前に受る所の苦樂も。並に形骸に繇るに非ず。實には靈神に繇るなり。身の有によりて神始めて知覺あるに非ず。けだし神の有によりて身始めて知覺するなり。則ちその苦樂の加はる神もと此を受るなり。試に觀よ人の生時およそ五官の順境に遇へば。其神情おのづから懽忻暢適し。苦境に値ては轉々拂鬱を生し忽然として死す。豈耳目口體倶に備はらずや。然も主翁舍を出て破宅徒に存し。司明者は眼まづ地に落ち。司聽者は聞根體を去り。美色を目に列し。美樂を耳に奏すといへども。豈よくそを見聞せんや。これ何を以ての故ぞ。苦樂の緣はもと神に在りて形に在らず。必ず神在て形始めて能く知覺するに非ずや。そはねむりて眼を闔たるに。夢に種々の物色を視るもて知べし。これ世眼は闔るといへども。自然に見ること有に非ずや。故に身沒する後に人々の神自ら用ふる所有て。現耳無して能聽き。現目無して能視。現舌無くして能嘗め。苦樂必ず受る所有て。泛々然として附着する所無に非ざるなり。かつ思ふに生世の韶華。その富貴佚樂軀殼のこれを受るや。懽然として自適す。忽ち一の拂意憂愁の念に轉ずれば。心焦して死せんと欲す。此苦すでに形軀に關らず。豈靈神獨これを受るに非ずや。若貧窮勞病の無聊。四體の痛楚患難の無底なるも。忽ち一の道德樂境の念を生ずれば。便ち神清く氣定り。怡然閒適し。自らその一身の痛を忘るゝを覺ふ。此の樂既に肉軀に關らず。豈神の爲に非ずや。是をもて身の生るゝも。身の死るも。神明常に存し。必ず白骨と倶に朽ざる者ありて。賞罰の必加はり。苦樂のかならず受て。その肉軀の有無に藉らざること明けし。人能く靈神の滅せざるを知れば。其生を善くする所以と。其死を善する所以とを圖らずは有べからず。苦樂の必受るを知れば。

生前に於て永樂の圖を爲し。永苦の路を離れざるべからず。あゝ苦樂の因善惡幾希の間。畏れざるべけんや。畏れざるべけんや。

○儒生云。人の靈神永く在て。世物と同く朽(くち)ず。善惡これを生前に敷し。罪福これを身後に定め斯れ善に遺恨なく。惡に漸緒なく。以て人心を厭ふ(む)べし。然といへども善本より當に爲べし。必しも希冀ありて後に爲に非ず。惡は本より當戒むべし。必しも畏懼をもて敢せざるに非ず。只賞罰を執て趨避を爲すが如きは。是釋氏報應の說。吾が儒の善道とせざる所也。姑く此を置て論ぜずは如何に。

篤胤云。縱爲所なきも必ず畏るべきあり。畏るゝと畏れざると。此乃ち君子小人の分なり。夫世の陷溺愈深く。罪を造ること彌々甚き所以の者は。正に生死の大事(大事)明ならず。身後の審判を論ぜざるに縁りてなり。凡て人の四末を念へば。永く罪を犯す事なし。四末(大事四あり)は人々免れざる所なり。其は身死(去世)。審判(冥)。永賞(眞)。永罰(眞)(なり)(頭注云此四も彼國にてさだめる目なれば也)けだし人の惡を肆にし(昭)著することなき所以。時々四末(大事)を思念せざるの故のみ。善を作して縱ひ一も懼るべき無きも。固より以て戒めざるべからず。然も幽神至公の法。もとも明にせずは有べからず。人の究竟もて知ざるべからず。人に善を爲しめんと欲して。示すに善の歸宿を以てせざれば。人を導くに坦夷の路歩履の法を以てして。其路の(行)止まる所を指さゞるが如し。將に(かくては)漫々何の足を措く所あらんとするや。身後の結局善は必賞し。惡は必罰することを知るか如き。またたゞ恐懼をもて惡を避ざ。希冀(し)て善を修むるに非ず。かならず己が職分を盡して神明に奉(つか)へ。吾人の大父母を悅ばしめんと欲す。これ更に眞徳純備たり。世豈多く見むや。

然るに此理の必有を信せず。其事の實據を(も)信ぜず。また佛教の謬說(或は佛教の謬說なども)。人或は聞くに厭ふ所なるを以て。遂に併せて天津國夜見國の至理を詆り。誕幻下俚の談と爲し。置て此を道ふことを樂まざるのみ。あゝ(嗟呼)(あり)崑山の璞あに至珍に非ずや。第(たゞ)礁砆を(混して)市る者(有故に)混贋前に價ひ人をして崑玉を併せて(此を…にする)また疑を致さしむるのみ。善かならず爲ざるべからず。惡必避ざるべからず。天津國。夜見國の賞罰おのづからこれ必

有り。これ産靈(大)神の天下萬區を制馭し玉ふ大權なり。若これを置て論ぜずは。惟上至至公の賞罰僅に明ならざるのみならず。且つ人究竟の着落なく行善の門を塞さ。小人の忌憚なきを長ずるに幾からさらんや。けだし上帝の妙體寔有たりといへども。第聲もなく臭もなきの至り。耳目の以て覩聞すべきに非ず。其靈明の極もと邊際なく。六合の内六合の外。在ざる所なく。有ざる所なく。「其降世に當りて(頭書云降世などの字耶蘇の語に似たり削りて可也) 又天に在り。天に升るに及びて。また世を離れず。かつ降て世に在りといへども。きた豈先に靈明の主たり。後にすなはち形聲の人たらんや。(變化出沒固より窮極ある事なく) 聖體自然に終始遷變あることなし。降世のさき仍みづから天地を制馭し。萬有を主張す。産靈大神のその天地を陶鑄し。(かつ制馭し)萬物を搏捖(し主張)するや。生々化々始有りし以來。始なく。終なく。其妙理たゞに滄海の浩蕩たるが如きのみならず。豈消滴をもて此を測るべけんや。要するに(尊)信の一字は道を得るの原なり。功の首なり。萬善の根なり。眞信(を)得過せば天地の大主宰。萬民の大父母たることを知り。驩然として其敬畏愛慕の誠を動し。(大)教誡に遵行し。吾身の何よりして生し。吾性の何よりして賦するを返勘し。今日は何の昭事を作し。他日は何の歸復を作すに宜しさ。眞々實々時に及びて勉圖し 。人子の親に事るに。朝夕溫清するが如く。敬を起し。孝を起し。此を督し。此を勞すといへども。亦たゞ命これ從ひ。敢て少しも猜疑過望有らず。是の如くして後に此を孝子といふ。若敬畏の心なく。徒に神道の奥義を探究するは。譬へば天つ日の光に沐し。いまだ其照臨の徳に感せず。徒に瞠目して之れを覩て。強て其光耀の原を窮せんさ欲すれば。其目かならず眩瞀を致して。反りて其明照を受ざるが如し。(現に仰觀る)日それ窮むべけんや。日窮むべからず。(然を)況や天地の日に旋轉する(に於て)をや。天地(まづ)窮むべからず。また況や産靈大神の。天を生し。地を生ずる(造化を爲たまふ靈妙の神德に於て)をや。産靈(大)神の天を生じ。地を生じ。人を生じ。萬物を生じ玉ふことを知らば。その一心に欽崇して。萬有の上に在べきを知りて疑ひ無るべし。」

（十二下）（頭書云以下は上に書すべし）人は（放逐れて）夜見に入りては決して再出せず。そは伊邪那美命スサノヲノ命佐須良毘賣命なごをもて知べし。且伊邪那岐命が。彼の國よりこなたへ（妖）物の來らぬやうに、かため爲玉へれば也。然らば大國主命の行て歸り玉へるはいかにさ云に。あれば身にかゝれる禍を祓ひに往ませるなれば是は事別也。大國主命の身にかゝれる禍は。何の枉ならんと云に。イザナミ（ノ命）。スサノヲ（ノ命）の禍のなごり也

〇第一

世人の言に歳をとると云ひて拾ひ得たる如く云へごも實は歳を失ふ也けり然るは日三十日經るを月といひ月十二經るを年といふなるが天日東に見えて西に沒れば年と月と吾人の壽とを既に一日を失へるなり身日々に長じて命日々に消え往くこゝをもて世人は歳をとると云へども實は歳を失ふなりとはいふなり頭書云漢人朱熹か勸學文に勿レ謂今日不レ學而有二來日一勿レ謂今年不レ學而有二來年一日月逝矣歳不二我延一嗚呼老矣是誰之愆漢人の言に。年若き人を春秋に富むと云も若者は經行べき春秋を多く持たればなりあはれ時の往くは永く去りて追ひ留めんとするに留まらず時の來るは未だ至らざるに招き迎へむと思へご迎へられず。誠に驅る矢の隙を過るが如し。凡そ形ある物を失へる（は又も）得るときあるべし。たゞ時は否らず。今日一日をたゞに失へば。いつかとりかへし補はん。愚人はまた明日の日があると思ふなれども。明日は又明日のわざがある故に。今日失へる日の補とはならず。來日の（日力は僅かに來日の）事爲を足らすのみ。（頭書云年は寶なり）いかで今日の失を補はん。春已に至れば。冬の失時を補ふことを得ず。老すでに至れば。少年の失時を補ふことを得ず。然れば時日は徒に費すべからず。されど時々は。人の爲に閑をつひやすことあり。そも陰徳なればよし。夫れ物の吾が有と爲りて用に便なるものは。吾が齢に及くはなし。吾と同く生て。我と同く終る。他人にうばゝるゝことあたはず。時として吾に隨はざることなく。處として我に左右はざることなし。かれ智者は日の大寶たることを知りて。一日も空くついやすことを惜み。片時も寶として恒に日の短きが如くおほえ寶によく道にいそしむ者は。珍寶を懷にして旅に曠野を走るが如し。蹈知らぬ旅の曠野にて日すでに暮れむとするに。往き就くべき所の遠近を知らざらんに。いそがで

やは有べき。一日の功は吾が無盡の善を致すべく。無量の愆を免るべし。是故に君子は日を寶として敢て輕く過さず(頭書云日は寶也。)

〇第二人於今世惟僑寓耳

或人問。古道よりは更にも言はず。諸越の說にも人は萬物の長といふ。然れども又つらく鳥獸の上を察ふに。人に較べては反て辛苦なく所(を)得たる狀なり。然るは鳥獸多くは生るゝと自ら能く行き働き。その住よき所に就て。住あしき所に就かず。身に毛羽の衣生そなはりて。織縫ふこともなく。時々新らしきを脫き替ゆれども。自ら勞くこともなく。稼穡を務めず。供爨の事なく。使のまにく食ひ。使のまにく息ひ。大造に嬉遊して。常に餘りの閑あり。また其間に貧しき。富める。(或は)尊き。卑きの殊なく隨分ありげに思はれたり。日々に其欲する所に從ふ。」以上(頭書云削るべきか)

「(さるを)人の生るゝは。母まづ痛み苦しみ。身胎を出て口を開けば。すなはち泣く。己におのづから現世の苦を知るに似たり。さて生れたる程はいと弱く歩むこと能はず。三年ばかりにして方めて懷をいで。壯なるに從ひて苦勞を覺え。農は四時稼穡に辛み。工は日々某々の工に勤動し。士は晝夜神を劇し思を殫し。(いはゆる君子勞心、小人勞力といふもの是なり。)五十年の壽あれば。五十年の苦あり。かつ疾病といふ事さへ有りて。醫書に一日の病三百餘病といひ。諺にも四百四病などいへども。多端なること實に數ふべからず。其藥は口に苦しく。なほ昆虫飛鳥の災。鬼神の祟り。鬪戰橫死の難あり。たとへ太平の世といへども誰が家か全く事なき家あらん。財貨ありて子孫なく。(或は)子孫ありて才能なく。(或は)才能ありて身に安逸なく。(或は)安逸なれども權勢な(きなどにて。)身を終るまで愁へ多く。日一日を過せば墓に近づくこと一步なり。終に大き愁苦の極に至り。死期來りて生涯を結ぶ。貴賤貧富この苦を遁るることなし。けだし此はたゞ外苦を擧るのみ。人々其內苦は誰か他より此を知らん。凡そ現世の辛苦は眞の人道なり。その快樂は假の快樂なり。其煩勞は常の事なり。」頭注云大塊我を生し云々 また或は酒色に溺れ。或は功名に惑ひ。或は財貨に迷ひ。各々己が欲に牽れ。誰か本分に安んじて外を求めざる者なく。よし此に天下の大を與ふるとも止み足る心無るべし。されば(顯明の)人道だ

に人なほ未曉らず。況て幽冥の道をや。（こゝを以て）既に儒に從ひ。又老に由り。また釋に從ひて。道心を決めんとするに。また別に門戸を立て。新說を張る者多く。各々互に正道正道と稱へども。天下（を流覽するに大）道は日々にます〳〵乖亂して。上たるは下を陵ぎ。下たるは上を侮り。父は暴に子は逆に。君臣相怨み。兄弟相賊し。夫婦相離れ。朋友相欺き。世間擧りて。詐り諂ひ誑き誣ひつゝ。眞心なる者いと〳〵眇きが如し。熟々世の有狀を觀るに。大海中にて暴風荒濤に遇ひて舟。悉く壞れたるに。溺たる人々海中に浮つ沈みつゝ各己助からん（しか驗に急なる故に）として傍人を觀（顯）ることなく。碎板を執り。敗籠を持し。手の値る（あた）まに〳〵人の持るをも奪ひて。命生むと辛む間に。遂にみな死するが如く。實に憐むべき狀也。天（皇）祖神の人をかゝる愁へ辛みの處に生じ玉ふは。人を愛しみ玉ふ事返りて（△カ此に入るべし）鳥獸に如ざるに似たり。是いかなる神慮ならん。答ふこの顯世は人の本世に非ず。天神の人を此世に生じ玉ふは。其心を誠にし德行の等を定試みむ爲に。寓居せしめ玉ふなり。鳥獸に厚くして人に薄きには非ず。（頭書云鳥獸は神のすて給ふもの也小は大に制せらるゝ事）（上下に說る如く我人を此世に娩出して）試擧りて幽世に入れば。尊は自ら尊く卑は自卑し。人の本世は顯世に在らず。幽世なれば也。本業も亦彼世に在り。天（皇）祖神は人の心顯世にのみ在て。是をもて（眞）鄕と爲し。たゞ今世の卑事に泥みて。幽世の昔が本世なることを知らざるを憫み悲み玉ふ。故に余壽を此世に置て。幽世を（御）遙望し。神智はしめんとてなり。よく此旨を明にせば。（顯）萬の疑ひ悉く解釋して。天（皇）祖神を恨むるの說あること無らん。凡そ道を行ひ世を救ふ人は。生涯その作す事ごとに。苦辛に非ざるはなし。

「誠に此論（刪去べし）は人を實德に導き。人欲を沮して虛浮に殉せず。意を堅くして忍びて苦辛を受しめ。窮に處して灑せしめず。志を強くして本分に歸し。尊類を卑類に別つ皆眞論なり。」

○第三常に死候を念ず

道に志ざす者は。恒に死期の候を思ひ。常に其事を講習討論して。その未だ至らざる先に。豫て處置を爲し。其期至たらんには安んじて其を受べし。人に生死の兩端ある事。天に南北の二極ありて旋るが如

し。神の人に命終るの日を知しめざるは。日々に怠ることなく徳行をつみ。其期に備へしめんと欲してなり。生る人の明に知らるゝ事は。死ばかり明に知らるゝことなく。知られざることは。死期ばかり知られざる事なし。貴賤を論せず人たるもの誰か此事無るべき。世の大に惑へる人は。死期を思ふこと遠きが如し。（頭書云慈圓和尚の歌人べし枕草紙に遠くて近きものゝ中の事）人の日々に終りに近くこと。譬へば旅人の舟に乗りて川を過るが如し。坐立臥食すれども。停りて行ざるが如くなれども。其身晝夜移りて止むことなく。二の船相並ぶ。其間各々彼をもて行き動くことなし。吾をもて住み止まるとなせども。實は倶に行くなり。江水は源ありて。下流こを洩せば。上流これを増し。江永く存して。涸ざれども。此生命は江の水のごとくならず。燭の如く恒におのづから消化して。燼滅するに至る。人少なるときは長を冀ひ。長じて壯を冀ふ。然れども實は死に近づくなり。さるは已に壯なる後は隨て老ゆ。老るの後は隨て死ぬればなり。然るに世人の念々言々行悉く吉に向ひ。吉に即き。死期を念ふをば不祥となし。凶となして。甚く此を諱む事甚しと云ども。（削るべきか）こは現世にある程のしばしの道にこそあれ。道に志しては常に死期を思へば心を恣にする事なし。凡そ人の欲を恣にすることは。大概死の近きを忘れ壽をたのむに由るのみ。抑々（世業の小事を）人の世に任る（事）景の如く夢の如し。然るに人欲の世業を營む事永久の居の如し。それ天祖神人を生じて萬物に上たらしめ玉ふに。其壽はかへりて樹木鳥獸に及ばざるは何の意ぞと云に。愛み憐み苦を省き咎の少からん事をおぼしてなり。故に死は凶に非ず凶の竟れるなり大人は明に天神の我に顯世を借して寓居せしむる事を知り幽世の常居たることを知るかつ此世の壽たとへ數百歳を保つとも此を幽世に往きて無窮なるに比べては須臾にしてその短きこと言ふべけんや（頭書云道の邊の墓多くは少年）但しその須臾の間はすなはち吾が身後の賞罰の基となる故に愼まずはあるべからずアハレ年の富ると身の強とを恃むべからず見る所の死凶幼者は老者より多く強者は弱者よりも多し人の身と靈神とは金をもて陶器に藏すが如し此身は陶器也碎け易し何ぞ稚きと老とを論ぜんや道に志ざす者は

常に此を念ふべし此を念へば徳行に甚利あり。故に今ほど其形狀を掲げ諭さん。凡そ人の將に死せむとするや。先づ疾に遘ひて醫療祈禱驗なく。こゝに親族友がき蓐邊に居よりて。言ひ遺すべき事あらば附囑せよといふにぞ。病者惟長息のみして思ふは。年ごろ蓄たる田宅財寶も死しては我が有に非ず。徒に他人の物となりなん。妻子朋友是より永く相集ふことを得ずと悲しく。曩の愛せる物ども今皆いたく心を傷ましめ。たゞ幽憂の思ひ膺に塡るのみなり。これ死際なり。「死はたゞ靈魂と身體と別るゝなり。すべて物二つ相合へるは。靈と身との親切なるに及くものなし。相合ふこと密なれば。分るゝこと甚だ難し。假そめの友と岐に別るゝすらなほ悲しきを。況て一生同體の交なる靈と身との別なるをや。斯て見るがまに徧身色を失ひ。貌變り。目深み。鼻稜り。足冷え。脈亂れ。心悸み。四體に汗を流し。その靈と身と別るゝに至りては痛苦の極かへりて痛苦なきが如く。しばし蒙々昧々たり。阿那傷しきかも。哀しきかも。抑々人は母の痛を以て顯世に生れ。己が痛をもて幽世に入る。これ死期なり。(頭書云ハクコツ凡世間に水むけ泣聲呼こゑ漸々に遠くきこゆれども歸りかだく)靈と身と既に別るゝに至りて。身は蓐床に遺りて知事なく。靈は身外に出れば忽に痛苦を免れて。夢の如く現の如く吾にも非ず幽界に入り。既にして神を正し。目を定めて見れば(早くも)產土神の御前に侍ひ即ち伴はれて。(頭書云產土神の御前に至り先正して後に幽冥大神の廳に出すか)幽冥大神の神庭に參至りて。吾が一生に爲たる事と行ひと逐一に判斷して遺す事なく。是に於て顯世に在りし間の諸の罪過先詳に知られ奉り。神道を淆亂し。神明を抗侮し。異端を尊び。詐僞をもて。世を欺き。神を誣て。畏るる事なく。君々たらず。臣々たらず。親々たらず。子々たらず。夫々たらず。婦々たらず。士々たらず。友々たらず。兄々たらず。弟々たらず。伯叔々々たらず。姪娣々々たらず。農々たらず。工々たらず。商々たらず。表は廉にして裡に貪り。外は正に飾りて内に邪を隱し。過犯あれども改めず。正しき義理に若はず。心中に藏せる非道の謀。(欲。念。)すべて人の眼に及ばざる事どもゝ一々發れて蔽ふべからず。千五百萬の神々。千五百萬の靈々。萬物。自

の心も共に犯せる罪過の證となりて。辭せんとするに逃るゝ事能はず。天神の本敎に背へる罪のつもりのくさ／＼を。幽冥神の神庭に判斷し玉はゞ。天神に獲たる罪をはた誰にか祈らん。又誰か是を救ふ事を得む。在世に持たりし財寶はすでに無して。其を得たる罪のみ遺り。汚穢の樂すでに過ぎて。樂める咎のみ存り。傲矜の氣すでに散じて。唯に其罪を留め。限なき殃苦を受け。懊惱痛哭して永く身に脫せざらん。豈悲からずやも。斯て神判既に終りて。善人は幽世の大神集へ率ゐて天上に參上り。天神に復命白さしめ賜ひ。永々此國土の幽世に侍しめて其處を得しめ給ひ。天上に往來しつゝ。各々某々の功績を爲さしめ給ひ。惡人は理のまに／＼遂に豫美都國に逐はれて。限なき殃苦を受け。懊惱痛哭して永々身に脫せざらん。悲むべし。憐むべし。

○第四常に死候を念じ死時の審に備ふ

常に死候を念ずれば五つの大益あり。其一は「心を斂め。身を撿して。死後の殃苦を脫る。然るは終を知ればすなはち始を善くす。死を知ればすなはち生を善くす。家財の乏しきを知れば用度に節あり。壽命の長からざるを知れば。いかで虛く日を費さん。然らざる者は霧中を行くが如く。前後を知らず惟目下を見るのみ。智者は然らず。常に死期の來らんとするを思ひて。前後を見て心を斂め。身を撿す。幾載の敎誨百端もて其心を移さんとするも。致すこと能はざるを。たゞ此念のみ是を致す。其二は「淫欲の德行を害ふを治む。然るは淫欲の炎。心に發すれば德危く。彼の炎に燒壞らる。死候の念は彼の熾焰を滅す。故に色欲を懲戒するには最上の良藥たり。是に就て古歌に。（頭書云散木集に見えたり）月の鼠と云言あり。そは俊頼朝臣歌に。我がたのむ草の根をはむ鼠ぞと。思へば月のうらめしきかな。また淸輔朝臣の奧儀抄に。「草の根に露の命のかゝるまを。月の鼠のさわぐなるかな」といふ歌あり。此は世間の趣の譬へに。曠き野を行く人の。あまたの惡獸に追れて逃たるに。深き阱におち入りぬ。阱の中ほどに草のわづかに在るに落かゝりと。取すがりて見れば。底に大蛇あり。脊は紺青綠靑を塗たる如く。腹は朱を塗たる如く。眼は金鋺の如くに鑠めき。口をはりたる其舌を見れば。焰の樣に霹めき。生臭き息の熛なる

を吹かけつゝ。おちば食はんと待うけたり。上らんとすれば阱の口に悪蟲どもあり。また取つきたる草の根を。白き鼠と黒き鼠と代りてかはる〴〵嚙み切りて。既に根は絶なむとす。然るにその草葉の末よりいさゝか滴たる露あり。いと甘ければ片手にうけてそを嘗つゝ。喜びに苦を忘れてなむ有ける。人の曠き野を行くは。吾人この顯世に生れたるなり。悪獸の吾に迫れるは。死べき期の迫り近づくなり。阱の底なるをろちの食はんと待たるは。死たる後の苦なり。草は吾がこの生命なり。白き鼠は日なり。黒き鼠は月なり。日月夜晝の來經行き。吾人の生命の減少すること。彼鼠がたのめる草を乾切る如く間なきに譬へ。甘き露は世の虚樂にふけるに譬へたり。此はもと異國籍の譬なるが。與儀抄をはじめ數多の書に記せるを。校合せ見て文を引直して舉たるなり久安百首に。「のどけかれ月の鼠よ露の身を。やどす草葉のほどのなき世に」と詠る如く。年月日の來經行くをのどけかれ止めたしとは思へども。ひま行く駒のたとへの如く過安く。(ア、コレ誰が失ぞやと。歎く)時の至ることいと早し。俗人の常にいとなむ所は。多くはかの草葉の露を甘しと嘗るわざなれば。阱の底なる苦を思ひ。德行をつむ日の少きを惜みてつとむべきわざなるを。哀きかも愚人の甘むじて此を取ることよ。其三は「財貨功名富貴を輕ずるなり。それ財貨功名富貴は我が有に非ず。我に隨ふ物に非ず。現世に在る間の借物のみ。故に幽世に從ふことなし。然れば何ぞ戀愛するに足らん。幽世には財を用ひて爲事なく。又財を重ずる事なく。たゞ尙ぶ所は德行也。むかし或國に男ありけり。其男友三人をなんもたりける。其一人をば吾よりも愛尊ひ親び。其一人をば己が如く愛睦び。其一人は交りいと薄くして。稀に面を見るのみなりき。然るに彼男事に坐せられて。窂屋に囚へらるべきこと出來りき。こゝに其男とく上なる友がり徃きて。其事を歎き救ひ待させよと言ふに。其友のいへらく。今日は他人と遊樂ばんと約りたれば。汝を救ふ暇なし。かれ衣一襲と輿一つとを贈らん。といふ彼男にこの衣を著し。此の輿に藏められよといふ。彼男いたく憂ひて。中なる友がり徃て。我が厄を救はんことを乞ふに。其友のいはく。今日はたま〳〵遠方に行かではえ有らぬ事

あれば救ひがたし。されど汝の囚らるゝ牢は其途なれば。其門まで送るべし。內には吾入ること能はずと云に。彼男ます〳〵窘み。さきに交を結べることの悞を悔み。既にして彼の交り薄き友の。素より忠實なる事を思ひ出て。彼もしくは我を救ふことあらんかと思へど。常に交を深くせざりしことの心怍かしけれど。やむことを得ず。其友がり行て。まづ二人の友の交を負ける由をいひ。また日比みづからが交を薄くせる事の悞を咎めて。そを心に介むことなく。願はくは吾を救ひ玉へと云ふに。其友のいひけらく。汝もとより吾と交り寡かりき。然れど吾は恒に汝を思へり。勿憂ひそ斯ばかりの事は吾よく任むといひて。即ち國主の所に往つ。此友はいと異に國主に寵まるゝ人なりしかば。一言にして赦されにけり。彼男の事に遇へるは。人の死期に至りて。幽世大神の。まさに吾が一生の善からぬ行を判斷り玉はんとする期なり。三人の友の中に。一は財寶なり。二は親戚なり。三は德行なり。財寶はたゞ吾に葬服と棺槨とを與ふるのみ。親戚朋友はたゞ吾を墓所に送るのみにて內ることを能はず。たゞ德行隱德は。人常に

甚だこれを重みせざれども。却てよく身後の急を保んじ。吾を救ひ。火も燒こと能はず。水も漂はすことを得ず。盜人も負て趨ることを得ず。年を重れども損ずることなく。何物か斯ばかり堅く久しき物あらん。故に善く富を持つものは此を實す。況て德は水火盜賊を畏れず。彌々久しければ彌々固く。相脫離せず、生死我に隨ふ。これ人の大本業たること必せり。「其四は我が倨敖の心を攻め伐つなり。倨敖の氣は諸德の毒液なり。敖なる者は其道心固より敗る。故に常に死候を念ずれば。自ら昧まし自ら己を爽はしめず。孔雀といふ鳥。其羽五彩至て美はしけれど。たゞ足醜し。日に對して尾を張れば。日光晃耀して五彩の輪を成す。そを見て自ら喜び倨敖已ず。忽ち俯下して足を視れば。其輪を斂め意を折て退く。敖者何ぞ此鳥に效ひて足を見ざるや。足は人の末なり。死後なり。死するときに。心の聰明。身の美貌。衣の鮮華。勢の高峻。財の豐盈。各名の盛隆。種々皆安くんか在るや。何ぞ汝が輕妄の輪を收めざるや。嗚呼行世の際は尊卑あり。死の後は尊卑なし。誠に象戲に著なり。棋局に運るときは。將卒位を異にし道

な異にす。然れども事畢り局を覆すに及ひては。雜位同道なり。目は見ざる所なく。惟己を見ず。己を見るに道あり。鏡をもてこれを照す。人は識ざる所なし。惟己を識らず。己を識るに道無らんや。死後の念これなり。

其五は妄畏せず。而して安く死を受るなり。天祖神一物を造るごとに。各々己を愛するの心を賦し給ふ。此は靈蠢を論はず物々これあり。死を畏れ生を欲するの性。人々均きなり。然して生死ともに天神の命なり。人自ら死を求むるは。即ち不可なり。強ひて生んことを求むるも即不可なり。それ死候は須臾のみ。嚴なりと雖ども速に畢る。何ぞこれを懼るべき。(頭書云沙石集死だから生たりと云るたとへ)狂者と嬰兒と死を懼れず。吾反りて能はざるは。彼は愚にして我は智あればなり。愚は人をして安からしめ。智は人をして安からざらしむ。何ぞ其智を用ひて安を慮らざる。そは我が一生中に日々刻々に。眼の視るところ。耳の聞くところ。口の喫ふところ。鼻の嗅くところ。四體の動くところ。才の論ずるところ。心の愛するところ。理に合ふと否とを將て。一々籍計して漏すことなく。爽ふことなく。凡そ善と惡と悉く審察して按判せば。孰か懼れざらんや。旣にこを懼れば。必ず助けてもて心を斂め。もて行を愼むべし。迂なる哉世人たゞ墳墓棺槨を堅固にして。身後幽世の嚴審を論せず。何ぞも死尸に厚くして。精靈に薄きや。輕くすべきを重くして。重くすべきを輕くするなり。然れども親をあつく葬るはおのつからこれ人情必しも此を非とは云べからず。此世は一生のみ。身後永常の苦樂みな今より此を造る。愼むべし。夫よく死候に備ふる者は。萬法すべて三和にあり。三和とは。天に和し。人に和し。己に和す是なり。凡そ罪を天神に獲たるは逃るゝ所なし。心を神教を守るに立て。吾が前非を悔責し。その神寵を致すは。此天を和するなり。「凡そ人と爭はず。敖狠讐あらば。すなはち恕宥和睦して好く此を待つ。此人に和するなり。「凡そ醜念邪情をもて。心靈を汚亂することあらば。すなはち洗ひ滌ぎて。善志を修して。道に歸る。此己を和するなり。

(第五希言而欲無言(頭書云敬ニ入ル後言先行)

孔子の言ふことを無らんと欲せるは。言は人をして我

意を知らしむるのみ。人すでに肯通すれば何ぞ言はん。孔子言て人を誨へ。人知れば其言の功止む。博雅の言は言約にして用廣し。粋言を金鋌に比す。微にして貴重し。是をもて孔子罕に言て言無らんと欲す。言無れば人類も鬼神に通し。いはゆる人以レ習レ言師レ人。以レ習二不言一師レ神ニ是なり。凡そ不肯者は言に行を顧みず。行に言を踐なず 言一たび口を出ては追て復含むことを得ず。鳥は籠を出れば此木より彼木に飛ぶ。言は口より出れば此舌より彼舌に傳へて還らず。故に智者は多くは默し希に言ふ。愚者も未だ言ざれば賢者と異なることなし。惟舌と音と其愚の微を爲すのみ、凡そ器之小而虚則其聲揚。器之大而充則無レ音。小人中無學問惟徒言多耳。君子充實而美斯無言也。善行は善言の證たり。行は音無して言なり。天神の人を造るに。手足耳目を兩にして。其舌を一にする。多爲多視多聞にして。言少きを示すなり。其舌また此を口中の奥深に置て。齒をもて城の如く。唇をもて郭のごとく。鬚をもて樑（壘カ）のごとく。三重に此を圍む。甚く警めて言こと無らしめんと欲してなり。人の生死すべて舌に由る。士は言を謹まされば德を成さず。人の人を稱譽するには多聞をもつてす。未だ多言をもて稱譽することを聞かず 言は善といへども多ければ人これを病む。善言も多くすべからず。況んや虚言妄言誹言をや。〔但し寡言を勸むるは。世の流を拯扶するのみ。言無んば禽の世のみ。人は言をもて鳥獸に別ち。賢はこをもて愚に別つ。天下何物か舌より佳ならん。百家の高論も舌無んば孰か世を論せん。聖賢 道に達するも。舌無んば何をもてこを振はん。「天神地祇の德惠、造化の眇も。舌無んば孰かこれを究めん。奥微の通じかたきも。舌をもて講じてこを釋すべし。舌無んば官吏も獄訟を審にすることを能はず。商賈も交易することを得ず。舌をもて友相交はり。男女合配し。舌をもて神樂音を成し。敵國を和し。大衆聚りて宮室を營み。城郭を作るも皆これ舌の功なり。聖賢を讃し。天神の重恩。造化の大德を誦謝するも。孰か舌の功に非ざらん。また天下何物か舌より醜ならんや。諸家衆流舌無んば孰か世俗を亂らんや。主道に逆ふ邪言淫辭も。舌無んば何をもて天下に普からん。冒天の荒誕妄論。下民を紛欺するも。舌無くば孰かこれ

を云はん。知り易く從ひ易き大道至理も利口をもて辨じて毀りつべし。舌無くは商賈何ぞ詐謁することを得む。何ぞ官に諍訟あらん。舌の誘諛をもて故友相疏み。夫婦相離れ。舌の淫褻邪音をもて欲を導き。心を溺らし。友邦讐を作し。家敗れ。城壞ち國滅るも。みな舌の愆なり。神を侮り。天神を誣ひ。恩に背き。大德に違ふ。孰か舌に非ざる。此舌の禍を流すこと無れば世々安樂なり。是をもて觀ふに。舌は人の用ふるによりて善となり惡となる。是故に默するに及かず。希言の敎を立つ。」惡言の來るときに。惡語をもて此に報ずるは。火の熾んとするに油をそそぐが如し。善言をもて此を迎へば。火漸く延て薪を徙すが如し。豈我が善をもて彼が善を致すに非ずや。正心は必ず正言を發す。正言は未だ必しも正心に由らず。鸚鵡よく言ひて平時は人と異無れど。忽に攫擾に逢へば。すなはち禽聲を揚て其啼々に復る。詐正人よく仁言を僞し。平時は人と異無きも。俄に拂逆に値へば。すなはち邪情に轉じて其偏本に還る。（頭書云栗田關白）詐は久かるべからず。矧やよく恒ならんや。行は古の道を行ひ。言は今の詞を言ふのみ。

口を戒むるに言を以てし。耳を戒るに聞を以てす。讒を聽く者無れば讒なし。故に讒人と讒を聞者と罪の孰か重きを知らず。眞言は始終相結び。僞言は始終不類なり。眞なる者は明燭の如し。たとへ此を掩藏すれども隙に乘じて光四方に出つ。富者は人に財を贈り。仁者は人に言を贈る。凡そ衆に利なく。身に補ひなきは。悉く妄言なり。事の言ふべきに過はば。言の言はざるに勝るを度て後に言へば悔なし。凡そ眞論は人の曉り易からんことを欲す。淡にして且つ簡なるに若くはなし。仁を體するの言は眞。義に從ふの言は直。禮に由る言は誠。信に敦き言は益。たゞ智の言は時矣。言よく如此くならば。談じて旦より夕に至るとも。此を多言といはじ。希言といはん。人は言に於ては鐘の音に於るが如し。大にこを叩けば大音。小にこを叩けば小音なり。若無レ叩而音其妖鐘己。人は言はん喋々をもて希言を勸むと。

（第六齋素正旨非レ由二戒殺一（頭書云第四條）

漢土も三代より以前は佛敎入らず。太牢をもて上帝に事へ。殺牲の戒なし。然れども祭の前に。散齋あり。致齋あり。齋は酒を飲まず。葷を茹はず。今も

然り。これ齋素の義は釋氏に由らず。始より殺牲の故に非ざること明なり。抑儒に祭に當りて齋するは。心意を齋一にして。明神に對するなり。「齋に三志あり。其は世に今日賢にして。先日不肖たらざる者あること少なし。今日は道に順ひて。昔日かつて其道に違はんことを求むる者あること少なし。其道は本教の史冊に傳へ。此を犯す者は神道の罪人なり。上たる人は罪ますます重し。人已に善に遷るといへども。前に犯せる罪を麤略に思ふべけんや。そは曩に爲たる罪犯し他は知ざらんも。我は時にそを記えて愧もし悔もせずば。いかで身後に其罪を免るゝことを得む。凡て德行の人は自もて滿足させず。自ら賢に居て過なきに誇らず。己が短を悶るを明さし。己が長を親るを旨とす。よく己を責る者は。人我を俊傑と稱すれども。己に愧怍して足ざる所を詳にす。人その備を謂へども。己は勤敎なほ虧ることを覺ゆ。詎ぞ徒に言に謙するのみならん。心に深く自ら羞恥づ。故に食を貶し減して。淡素を喰ひ。一身の用みづから粗陋を擇びて。他人の其罪を審判するを須ず。躬自ら懲詰して少しも恕さず。自ら責めて己が舊惡また新罪を贖ひ。旦に夜に惶々れて神壇の下に稽顙して己が汚を洗ひ。神明の惻恤して。免宥し。再び鞫せざらん事を冀ふ。これ齋素正旨の一なり。

夫德行は人類の本業なり。其說を聞て悅びて事とせんと願はざるはなし。然れども彼私欲まづ己が心を簒ひて擅に主となりて。德の居るべき地なく無らしめて勇猛を逞くし妨難を爲して得行はしめず。大かた平生行ふところ私欲の役に供す。是をもて義の命する所に因らずして。唯欲の樂む所に因り。其面を睹れば人なれども。其行を觀れば禽獸と何ぞ擇ばむ。「若し人を其性を人にして。其形を禽獸にせんとせば。寧死すとも欲せざらんを。今は其形を人にして。其性禽獸にして安むずるは何ぞや。「それ私欲はすなはち德義の(仇カ寇カ)讐にて。智慮を塞き蒙まして。德と交る事無らしむ。人の病疾此より深きはなし。他病の害は身軀に止まる。私欲の毒は神性を殘ひて身後永久の憂苦を受しむ故に其私欲を遏るにはまづ其本身の氣を約すべし。道を學ぶ人寡欲を願ひて身の養を豐にするは。火を滅せんとして薪を加ふるが如し。成人の飲食を欲するは。たゞ德行をつむ程の命を存へんとなり。

凡人の命を存へんと欲するは。たゞ飲食せんとなり。誠に道に志ある者は。飲を服するは渇を愈すの藥と思ふべく。食を服するは。飢を愈すの藥と思ふべし。多饕飲食の人は血氣過强して。五官の欲その惡を肆にし。色欲尤甚だし。豐味腹に恣ならずば。色欲何に從て發らん。淡飲薄食すれば色情潜に餒ゆ。一身すでに理れば。諸欲を約し。自ら理に服しむ。心の眞に達するを阻するは。身樂より甚きはなし。身樂は靄霧を重ね心才を晦まして。外脱を得ざらしむ　故に學に意あるは。先づ心を身外に拔かむ事を要すべし。身はこれ囚神牢なり。家財に愛し用ふれば我心を誘損し。垢土に纒縛して。其精氣を天上に冲することを得ざらしむ。心をよく身外に拔けば。百凶盡く熄む。心の阻礙を脱して。天に任せ命に游馴すべし。古賢餓を甘むじ。餒を求め飽を求めざるは。仇に似て實は親むなり。此齋素正旨の二なり。

本世は苦世なり。樂を索むるの世に非ず。天神我を此に寘きて促々焉たり。其道を修せんと務むるに暇あらず。豈樂を索むる暇あらんや。德行の樂は心魂の本樂なり。此樂は神明に倖し。飲食の娯は身體の竊偸なり。此娯は禽獸に同じ。愼まざるべけんや。積善の樂は身心に大利あり。豐膳の樂は身心に大損あり。惡者は人の樂を觀て。己れこれ無れば此を嫌妬す。善者は人の樂を視て反りて此を憐惜し。己を讓めて德行の勉め彼が如く懈惰せざらん事を思ふ。世人の災は他なし。心病て德の佳味を知ざるのみ。其味を覺えば膏粱も輕すべし。此二味は人心に出入して。同く住すべからず。此を內にせんと欲せば。必先彼を出せ。二猫同日同時に生れたるあり。一は富家のいたく愛する家に畜れ。一は貧家のさしも愛せざる家に畜はる。富家の畜へる猫よく肥えて容美しといへ共。飽食安佚に效ひて鼠を捉ことなく。然して常に愛して制することも無れば膳なる魚をとる。貧家に畜へる猫は。身軀に體輕く晝夜走て鼠の跡を覷ぎ。鼠を獲る許多なり。豈たゞ猫のみならんや。人も悉く然なり。皆養ひに係るのみ。此を養ふに佚甑飫飽をもてすれば。必ず善に進むことなく。此を養ふに煩勞儉約を以てすれば。身後の望むところを悞らず。凡そ人珍膳美味に習へば。禮義の事を思ふに暇あらず。精理微義に習ひて飲食の甑を思ふに暇

あらざるなり。此齋素正旨の三なり。

○第七　（頭書云〔責カ〕第五條）

或人神道の自省自素の事を問へるに答へけらく。此事に二等あり。其一等は。朝ごとに諸神の御前に向ひて。神の我を生じ給ひ。我を養ひ給ひ。我を教へ給ふまでの。量なき恩德を謝し奉り。次に我が成人の道を成さむ事を禱りて。妄念することなく。妄言することなく。妄行することを無らん事を誓言し。夕に至りてもまた嚴に自その日刻々に思へること。談れることを行へること。神理にかなへりや。妄ありしや。否を察し省み。無れば功を神明に歸し。恩祐（みたまのふゆ）によりて今日過無りし事を謝し。また誓ひ白して。將來も繼續（かへりみる）て過無らん事を祈りもし。過ある時は。自いたく悔い。其過の輕重に從ひて。みづから責めみづから罰し。神の見直し聞直し坐て。宥め給ひ赦し給はんことを祈り。將來はかならず改め。かならず絕せむ事を誓ひ。每日每夜これをもて常となし。此をもて己が師となし。自ら己が判を爲て。一日も怠ること無れば。罪過を犯すこと漸々に消耗するなり。如此して自ら己が證と爲ときは。犯せる過を辭ぶことなく。犯せる罪を文ることなく。自ら己が判を爲せば。己を欺くことを欲せず。豈他人の誹責を待むや。まづ内心を治め。次に其表を言に行に攻れば。功序を得。全を得實を得るなり。すべて人の罪過は。獨自責るにしかず。正き人の慚懼は。己よく知て此を改め。不正人（ただしからぬひと）は。其罪過を人の知らむことを念ふて。或は愧ぢ。或は憚り。其行を改めむ事を念はず。惟隱さむことを圖る。縱へ人をば欺き朦まして。是なりと曰はしむるとも。古歌に「なき名ぞと人にはいひて有ぬべし。心の問はゞいかゞこたへん。」心の良（まこと）あれば非なりと曰むには。正心を何と欺かむ。況て神明の照覽を何と欺かむや。孔子曰欺レ天乎と。いへるこれなり然れば則ち夜に入たらんには。一日の事いかにと僉察して。詳に責問ひ。今日は心の何病を治め。何の欲を禁止し。何の汚を洗滌し。何の醜行を改變し。幾ばかり德に移れる。今日は昨日より善なりしや否と。詳審に責問ひて。怒心も滅除すべく。惰心も振翼すべく。慾心も懲化すべし。如此く自ら貶し。みづから褒めて。過なきに至る。蓋これ初等にて。立志の初はなほ混濁いまだ澄まず。惟そ

の大非を戒るなり。方に進みてよく其非を省みるの法は。善に近ければすなはち微細の過といへども巨細に察す。譬へば久しく濁れる泉を。清さむと欲するには。先づその粗石を除き。水己に靜りて後に小石を去り。水すでに澄めば。微細の土沙の水底に沈だるをも汰すべし。善に進むも如此くなり。すべて善を行ふものは。念に言に行にたゞ妄ありや否を。審にするのみならず。旣に善ありや否を察し。善あらざればみづから悔み自ら責めて。誡を犯せるが如くし。善なきを以て愆とするなり。善の盛なるに至て。始めて神習の域に入るべし。何につけても心を誠實に置かむ事を念ふべし。然るを世に道を談ずる者。佛道には空を說き無を侗び佛即是心。心即是佛といへば。恐るべき物なく。その高玄を談る者は。翅無して上天するが如く。かつて人の行ふこと能はざるを以て道と說く。儒道には實物の神を信せざる故に。其行を誡むるも只々表を謹みて內心を禁むる事なく。論に論をかさねて多くは行の虛實を顧みず。我が神道に於ては然らず。現に見えこそしたまはね。神明常に頭上に在て。我が行ふ事々。我が言ふ言々。我が思ふ心々を。照に覽まし。聰に聞まし。察に知り給ふ事を辨へて。上にいふ如く愼み進み勤めて。祓戸神たちに祈り。日々に掃ひ。日々に除く。然るは風中に塵埃なきこと能はず。人も過なきこと能はず。故人の世にある。過無をもて德となさず。善に進むをもて德となす。それはたとへば農夫の田を作るに。猪鹿を驅り。荊棘を拔き。草を取り。小石を拾ひ去り。地形すでに平げて。種を殖ず貢奉らざらんに。此を良農とも云はむや。我人ともに神明の農夫なれば。よく此道の田を治りて。神敎に功を立ざらんは。未だよく神習ふ人とせず。豈たゞ現在の家業をいとなみ。非禮を爲ざるをもて神習ふとせむや。凡て本敎の旨は。人の罪惡を論ずるに。不善行の罪たることは。更にも言はず。善行の乏しきを不善行として。俱に悔い俱に改むべし。蓋善を爲ことは吾が力に成べきことにて。吾が分に成ざる事はなし。斯の如く己を審にすれば。道に進むこと無疆なり。

〇第八善惡之報在身之後

或漢學者問て云く。天は至公至正にして。善を行ふ者惡を爲すもの。共にかならず吉凶報應あり。今人

の言に。天堂地極（獄カ）善惡の報全く見世に在りて。本身に加ふ。身後には有ことなし。佛氏のいふ天堂地獄輪廻六道の說は論ふに足ず。本教はいかに。答ふ。成人道を世に行はんと欲して。常に終身の苦辛を脫ざるはなく。世人常にみづから苦を稱す。地獄の狀と謂はんも可なり。いかで天堂と謂はむや。世は壙野の如し。うち見るに皆荊楚。いづれに逝てか身を刺ざらん。此を免れむと圖るは。忍て此を受るに如ず。免れんと欲せば。幽世を尋ぬべし。此顯世に於ては免るべからず。然るは此世は譬へば千尋繩の如し。急密締結を作し。糾纏盤互して。群生に一々こを解しむ。群生まづ盡く其生命を解くとも。繩の締結は盡く解ざるなり。君子は其患に屈せず。其心を毅にし甘むじて其憂苦を受く。故に君子小人德等しからず。憂患殊なりといへども。困苦せらるゝは均きなり。漢學者曰く。今日相晤し談論飮嬉するも樂に非ずや。生もし苦ならば。世人なぞも死を願はず生を欲するや。富庶康逸榮華のものゝみに非ず。貧窶裸裎臥淩跳氷。また街市に乞ひ。また諸耋々。目盲。耳聾。偏體。衰憊。もしくは老病。痾毒。晝夜地に偃れて。傷痛間あらざる者も。生を欲して死を欲せず。これ樂地に非ずば人々かく愛戀して捨去るに忍びざる。（頭書云。病あるものも癒るをたのみて死を欲せず貧困辛苦あるものもいつか善からんと思ひていかさまにも死を欲せず。且つ善惡の報は。天下萬國各々君主ありて。賞罰を行ひ。また士を選びて四方に居しめ。律を定め法を設け。民心を綱紀し。賞賜をもて此を正し。刑僇をもて此を齊くす。これ善者は榮樂し。惡者は危辱して。實に勸懲と爲すに足れり。何ぞ後世の遐く。かつ遲きを待むや。答ふ余いまだ始より。此世は苦のみ有て竟に樂なしと云はず。唯此世の樂は天祖神の。仁人の德に酬ると稱するに足らず。此世の苦の如きも。また天祖神の不仁に殃すと稱するに足らずと云ふのみ。故に身後に至りて善惡の報を盡して。大きに天神全能の淵旨を顯宣するなり。今其端倪を擧て悟さば。それ天の禎祥妖孼を降すこと。多く善惡に合はず。まして其德慝の輕重に合はんや。かつ世の權を柄るもの。賞罰偏私あり。縱ひ公平たるも。其褒貶の當不當は。たゞ耳目の及ところのみ。民の庸情妬憎する所あれば。其善

を泯し其悪を揚げて。壅蔽達することなし。親愛する所はこれに反す。上に在る者何ぞ法意を失はざらんや。唯他人のみならず。己もまた己を掩ふ。雋徳の精多くは内に含して外に露はれず。外に發する者は徳の餘のみ。成人は彌〻誠あれば彌〻隱す。隱すのみならず。己が徳を覺えざるなり。人と己と知らざれば。疇に從りて此を褒せん。悪慝の本は素より心に醸して外に洩れず。外に見るゝは慝の末のみ。悪者滋〻熟すれば滋〻匿す。匿すのみならず。己が悪を覺えざる也。人と己と知らずば。誰に從りて此を貶せん。此を知るは只神明のみ。徳は姑く報して盡さず。悪も暫く容して未報せず。來世を待つ。幽神の神鑑按審爽ふことなし。人情として生を願はざる者なきは別に故あり。そは幽世に善悪の二報あること。本教に明白なれども。世人そを辨へず。（これより論じ直すべし）また古より人死して復生する者あれども。（蘇カ頭書云古より明に說たる說の無ればなりよりて說べし）死後の事情を知らず。其事情を知らざる故に往ことを願はず。譬へば他郷（語らば人みな）より還れる人。彼處の樂地なることを。知らば即其の地にゆかんことをねがはん。もし往けるもの一人もかへるなくば。たれかゆくことを欲せん。そは狐は獸の中に智あり。偶々虎窟に入る。いまだふかきに至らず。輙ち驚きて出走る。そは窟中なる百獸の跡を見るに。入る跡ありて出る跡無ればなり。死もまた人の虎窟なり。故に此を懼る。死を懼れば生を願はんこと何か疑はん。「儒者云く。身後の患は姑く置て。願はくは來世の喜樂を聞かん。答ふ。天上の大事は。其經典に據るに非ざれば。此を測ること能はず。其經を察するに。一を聖域といふ。過なしくて全徳あるなり。世道は聖人より盛なるはなし。聖人の世に行ふ。なほ過寡きをもて功と爲す。況むや其次をや。天上に居る者は。已に其域に臻れば。安穀にして惑ひなく。屈することなし。中正にして倚らず。過なきなり。顯世の人は少より老に詣り。わづかに二三の徳行を辨ずる事を得れば。民仰ぎて賢と稱す。孰か道徳の大全を辨せんや。天上の成人の如きは。道純なれ（ば脱カ）徳備はる。是をもて聖域といふ。」二を太平域といふ。危懼なくして恒に恬淡なり。見世には三仇あり。（頭書云三仇の說妙なり） 其一は本身。その二は世俗。その三は鬼魔。この三者ともに我を害ふ。本身は聲色臭味を以てし。怠惰放恣婾佚を以

てし。間に我を內に溺らす。世俗は財勢功名を以てし。戲樂玩好を以てし。顯に我を外に侵す。鬼魔は倨傲魅惑を以てし。我を誑き我を眩し。內外より我を伐つ。我その間に于て。防守に亟し抵拒に迫り。自ら暇息に遑あらず。嗟乎區々たる一心。上は天命を畏れ。下は不虞の變に懼れ。左は險難に覆るに恐れ。右は佚欲に迷ふに憚り。前は往年積累の愆に怵し。後は來世未決の大凶に愓し。內は己に悚し。外は人に驚く。誰か得て皇々たらざらんや。志を立て正を存し。天命に率循し。其の功高しといへどもすなはち仇の寃對なり。死に至て方めて止む。生時に功いまだ成就せず。また安寧ならず。既に天域に升れば。戰陣已に休み。功績已に立ち。干戈を釋て。特りその榮賞を享け。恬として無事なり。故に太平域といふ。」三を樂地といふ。憂苦無して永樂なり。世人憂を求めずして憂しば〳〵至り。勤めて樂を尋ぬれども得ること罕なり。憂すでに至り。力めて雪がんことを求めて。反りて熾なり。樂すでに來るときに。愼んでそを留め。而して樂いよ〳〵速に滅す。眞に苦世たること何か疑はん。今人八十歲を上壽とす。

頭書云論よろし

然れども得るもの鮮し。縱ひこれを得るも。此を幽世の常世なるに較ぶれば。長といふに足らず。また八十の中全く樂を享ることを得むや。其實數を計へて。世樂の妄を著さば。嬰兒の時は知覺なく。孩提の年は竟に樂なきなり。七十以後は大概身疲劣りて。目昧く。耳重く。口は味を知らず。既に享樂の具を失す。即ち樂事に逢ふも以て樂むことなし。八十の中その初と末とを十年づゝ除きて。聊か樂むべきは六十年のみ。それ人寤るときは能く樂しむ。寐るときは樂むことなし。世人懈惰に習ひ。夜寢の上になほ晝眠に耽る。故に晝夜十二時の中を半に過ぎて寢をなす。是をもて案ふに。六十の內に醒てかつ樂むは三十なり。三十の內その幼時を計るに。藝業を習ひて樂む暇少く。壯に至りて其家任を承け。其稼穡を易め。其妻孥を鞠ひ。萬事に酬應す。曷ぞ喜樂せんや。或は暇日少く樂まんとすとも。其間に孰か父母兒女の病喪に遭ざらんや。孰か水旱饑饉瘟疫の災に値ざらんや。誰か身に疾病瘡痏傷殘楚痛なからん。此皆樂の時に非ず。かくの如く展轉淘汰すれば。三十年中にやう〳〵三年ばかりも樂む日有ば幸なら

ん。一生の樂み日もまた希ならずや。顯世の憂苦多く。樂少きこと是をもて觀るべし。「天上の如きは罄て憂なく。全く樂たり。此世の樂は微少にして。樂み我が苦中に入る。彼所の樂み廣大にして。我その樂中に入る。是をもて樂地といふ。」

四を天鄕といふ。冀望無してみな充滿するなり。「人類はもと天民なるを此世に客流する故に。其全福ただ彼所にあり。此をもて此世にては欠缺あり。欠缺あれば希冀あり。希冀あれば。其全福なきこと明なり。全福は冀なきなり。吾人の本國は天國にて。產靈大神はすなはち吾が世人の大父母なり。而るに吾が儕みづから本國を忘れて。嚴尊の大旨に逆ひ。ただ蕩流して世に殉ひ。卑賤の務めを悅ぶ。心ある者深く歎恤せざらんや。旣に天鄕に歸れば。「大小の欲遂ざること有ことなし。福を享べき所。漸次にこれを分取するに非ず。惟合併して全くこれを受く。庸て冀望することなし。けだし天上の君子。分外は得て圖らず。得て望まず。故に福を享る者といへども。巨細品級ありて。都てみな充滿す。此を比するに大小甕の如し。各々佳液をもて飽滿斟酌す。故に增加することなく。顗頷することなし。衆人は伴侶たり。昆弟たり。相視ること皆己が身の如くなり。常に其所願を得れば。其得ること能はざるを願ふことなし。是をもて天鄕といふ。」

「五を定吉界といふ。變なくして常に祥なり。それ世界の人は。德かつ備はることなく。安かつ恬なるなく。樂かつ永きなく。克してかつ足こと無にあらずや。云々。人の己を知こと無は。天神の愛する所か。惡む所か。世事旣に畢れば吾が吉凶始めて定まり。復更に動くことなし。また世務を逐ふ者は。江流の上に步行するが如し。安隱の處の吾が跡に印すべきなし。此心乍に道に向ひ。乍に非道の事を思ふ。本心すら持すること能はず。世態恒に轉ずること輪の如し。何の德か非無らん。何の安か危無らん何の靜か搖無らん。何の樂か憂無らん。何の隆か殺無らん。何の峻か墮無らん。何れに往てか復無らん。故に本世を反覆無常の世といふ。世特に無常をもて常となすのみ。本世に獲る所の福祿は。惟暫く借る耳也。吾是が主となること能はず。天上の吉福の如きは。是即ち大定不易。吾が恒に恃むべく遠く據る所なり。

是をもて定吉界といふ。

「六を壽無疆山といふ。人均く死せずして常に生るなり。それ本世の生は死に近し。日々に消化して遲留すべからざればなり。今天下萬國の人民を見るに鳥獸と等し。諸種の生類百年以後大概みな死して。新なる者迭に生ず。其生死の數正等なれば。本世は生域と思ふも。こを死域と云て可なり。其生時は短く。死時は長ければなり。神靈天に升る者の若きは。固より常生不亡なり。是を以て壽無疆山といふ。壽疆無れば。諸福もまた永久なり。これ天神の仁人に報ずるなり。さるは仁人は德盛んにして死に至る。其志を立て云く。吾をして常に世に生しめば。即ち常に善を行ひて止じと。故に天神これに常生常德を賜ひて。其志を實しめ給ふ。」

根國に逐はるゝ者も。嘗て滅亡せず。然れば此をも常生と謂ふべきに。然云ざるはいかにといふに。彼は神罰を受たる罪人なる故に。その痛苦の萬端なるに勝ず。再死してその殃苦を息めんと求むれども。死すことを得ず。然れば常生たるに似て。實には常死なり。こは彼の生りし時に其志を立るも。常に世に生き常に其欲の任にせんことを思へる故に。際期の一念を死後まで延き。永存して滅せず。現世に犯せる罪惡の刑報を受たるなり。これ則本教の法。一世の善惡を報ずるに。萬世の吉凶ある大指なり。

梵士竊に天國根國の說を聞き。加ふるに輪廻變化の事實を撫ひて。遂に梵敎を造作して云く。天國を天堂と稱し。根國を地獄と稱し。善にして天堂に升り。惡にして地獄に入る者も。若干の年を經ては。また世に還生すること有りと云へり。若し天國の賞福を受る者も。後に其福を失ひて。復この世に生じ。更に凡民となるを知らば。全福に非ず。必ず心に憂苦あり。何ぞ至福と稱せんや。さては天祖神善を勸むるの善法に非ず。また道に向はんとする者は。吾縱へ道の爲に至善なるも。我が大事終に安定にして移らざることを得ずといはん。また根國に入り刑罰を受る者も。後に其禍を亡ひて復この界に還り。更に世人となるを知らば。後の喜慰を生ずべければ。何ぞ至禍と稱せむや。さては天祖神惡を沮むるの善法に非ず。また道に向はむことを思はざる者は。吾縱へ道に逆ひ根國の刑罰を受たりとも。若干の年を經て

は復この世に出れば。然しもつゝしむに足らずといはん。是佛氏の事情を知らざる一なり。」夫樂みの時は過易ければ短しと思ひ。苦みの日は度り難ければ長しと思ふ。樂の甚きは一日一刻に當り。苦みの甚しきは一刻一日に當る。なほ盛なれば。樂は一年一日に疑はしく。苦は一日一年に疑はし。（頭書云畸人傳に云々。）忻の日は長からず。患の日はいと長し。其は浦島がこと。これ幽世の百年は顯世の一日たるを證するに足れり。（人に代りて地獄の苦を受けんことを、天神に祈りて、祈（月カ）の如くなれることあり。）是をもて天國根國の年日の長短。同じからざることを知べし。是佛氏の事情を知らざる二なり。

我人の德業德報兩世一功のみ。今は行路たり。後は詣域たり。今の世人の位は淆亂す。居る所の位に因て其德否を徵すべからず。善者は頻に患苦し。惡者は多く安樂す「司馬遷が論のごとく。顏回盜跖が倫の如き。世々多くこれ有り。」愚者はいふ。世に德慝なし。或は禍福偶命に非るはなしと。皆僻なり。智者は知る。善者の位なきは。用て其德を增して其功を繕するのみ。終に天殿靈庭に結すべし。そを憫恤すべからず。惡者の位を得るは。用て其釀して其尉を厚くするのみ。終に最下の處に寘かんとす。殊に憐むべき（しカ）に足る。譬へば樹木の如し。隆冬の時佳惡異りなり。其時に非ざるが故なり。常に菀枯二木あり。同く苑に植ゆ。俱に花葉なく。俱に果實なし。一は根存し液注き。生意（氣カ）勃然たり。一は根已に朽ち。液已に乾き。凄然として死す（枯たりカ）。春夏既に至れば。菀木は萠蘗を生じ。花葉を發き實を結ぶ。枯木は斫截してそを爐爨に付するのみ。吾人孜々業々として本教を勤奉すとも。豈すなはち榮富ならんや。豈即ち身に疾無らんや。家に虞無らんや。教を奉ぜざる者と大に異なる無し。何ぞ其時を竢ざるや。德業の生根内に充たば。など身後に於てこれを見ざらん。是世は眞に人の冬たるのみ。來世に迨びては其春夏なり。善惡者の受るところ始めて分明ならん。善者は其身神に於て大光輝を生じ。目には此世に見ざる景光を見。耳には此世に聞ざる聲樂を聞き。口鼻には此世に咲嗅せざる味香を咲嗅し。四體には此世に覺えざる安逸を覺え。冬已に往て春夏に至れば。無量年の榮茂替ること無らん。惡者已に天神の重恩に負く。

故に天神に厭惡せられて。其身神變じて黒醜を成し。貌相は鬼魔に類し。不材の枯木の如く。遂には地獄に棄られて。其苦痛萬端言の及ぶ所に非ず。前世の小患已に畢りて。後世の大患限りなし。

儒生云く。論によりて竊に思ふに。吾が學ぶ經書の趣きと。御國の神典の趣きと相符へり。但し御國の古傳全く存するゆゑに幽世の說詳備たることを致す。儒書は早く秦火に遇ふ。故に殘缺多して後の世の報應具に明ならず。因て儒者は疑信半混ず。然れども今存する經典に據りて。其說を推明得こと有らば。また本敎と互に相發するに足らん。然るは詩に。文王陟降在帝左右といひ。書に。殷多先哲王在天といへり。然れば善人の身後に天國の福報あること燦然として白かなり。善人既に天に在れば。歷代の惡人の奸曲なる。根國あらずは安にかこを置かむ。此樂地あれば此苦地あり。此賞あれば此罰あり。天國。根國を相有無するに。天國を信じ根國を信せざるは。晝を信じて夜を信せざるが如し。本敎の說實に信ずるに足れり。答ふ。固より嘗て之をいへり。天神は前後世の禍福の原。豈世福をもて德に報ゆること能はざらんや。子思子世を德に誘ふに。世人の位を重じ壽を嗜むを見て。即ち人の期望する所の報を指して。これを揚厲す。但し是をもて常となし。是をもて主報と爲べからず。故に仲尼の位無き。顏回が壽無きも。其德無しと云ざるなり。もし幽世に報なく。現世の位と壽とを至報となさば。正位の後に立る所の功德。何をもてこを償はん。余竊に賢者を觀るに。位彌々峻ければ。壽彌々修く。其心彌々勵く。其身彌々勤む。是によりて意ふに。天神彼に施すに世福をもてするは。其德の功に酬ふるに非ず。惟これ其功を廣むるのみ。德に酬るは固より後に在り。黄白は深坑に出し。珍珠は海底に探り。諸珍寶物これを險所に擧く。矧や德の至寶たる。此を安樂に得べけんや。身に務を作ことなく。閑居安靜は養生の道に非ず。何となれば閑居なれば厭飫して飲食その養を得ず。身を勞すれば餧ゆ。餧れは粗淡の飲食といへども。常に其養を得るなり。財を貪るものは。彌々得て彌々得んことを欲し。德に進む者は彌々德あれば。彌々德を圖る。豈財を積むに多きを厭はず。德を積むに寡を願ふべけむや。故に苦を憚り勞

を避けて。成人の道を成すものは希なり。安樂は道德の賊なり。止水の蛆を生ずるは。流れず動かざればなり。瞬息の輕勞を以て無窮の重樂を致し。瞬息の輕樂を以て無涯の重苦を招く。神明の爲にし德義の爲にして窘難を被る者はすなはち眞福すでに天國を得たり。いまだ現國を離れず。曷ぞ天國を得たりと謂ふ。已に其買を積めばなり。また神明の爲にし德義の爲にして。人或は讃め。或は崇め。或は祠り。或は碑すとも。眞福となすに足らず。はた是によりて矜傲を萠生し。反りて德を敗るに至らんことを懼るべし。人或は毀り。或は辱め。或は讐すとも。吾惓々として節を操りて悔なきは。是上品の德のみ。天神の酬かならず重からん。讐をもて讐とせず。讐をもて己が德を賚るなり。金も煉ること無ければ精美を成さず。香も爇くこと無ければ郁烈を生ぜず。君子の德も小人の窘難を得ざれば。其成就を致して天下に鴻聞することなし。西洋に掌樹といふ木あり。性凡木と異にして。よく重きに任ず。重きに任ずれば曲る。凡木の曲りは曲りて下に向ふ。掌樹の曲は曲りて上に向ふ。故に戰に勝て功あるものは。班賞に掌樹の枝あり。けだし勇は敵に遇へば自然に奮增す。奮增せざるは勇に非ざるなり。凡そ德は患を以て砥と爲して磨厲す。劬勞を畏れずば何の功か成ざらん。苦を視ること樂の如く。樂を見ること苦のごとく。苦樂の爲に動されず屈せられず。而して反りて精粹なるは。德者の常樹たるのみ。是故に成人の道は。勞困を習ひ歡ぶこと。俗人の安樂を求め喜ぶよりも甚しく。身を卑しめて憂苦を常とし。淡を食ひ麤を著し。身心を煩し。道を談じ德を勸め。博く陰隲を脩め。邪教謬言を闢き。本敎の正傳を證し。萬の計謀義の爲の故に生死樂に違ひ苦に就きて。一日も志を拂ふの事に逢ざれば。自ら省察し罪を神明に得て棄られむことを恐れ。もし此をもて衆人に怪み笑はるれば。益々此道の尊きを知る。彼の笑はざれば以て道とするに足らずと云るが如し。人の爭ひ競ふ所は財のみ。位のみ。功名のみ。喜樂の資のみ。爭競の薪を除かば。彼の鬪亂の火何に從りてか熾らん。苦を苦とせず樂これ避けば。苦かへりて樂とならん。且つ苦旣に習はゞ樂まざること無らん。

○第九妄に未來を念ふて自凶を招く

世間に至虛至妄なるは。星家の言と解夢の說となり。その偶に中る事も有をもて信ずる人多かれども。闇夜に終夜礫を打つに。一二の中るあり。然れどそは偶中なり。況て星家の輩は種々の巧術ありて擬ふ。いかで合ふ事の無て有らめや。然れども終に合ざる者は多し。此に人あらむに。そを十たび試みて。二三度白をもて黑とし。晝をもて夜とすること有らば。即その人の盲人たることを知る。かの星家解夢の輩は白黑晝夜を混じて。晝夜紛紜たらしめて徵するに足る者あることなきを。世人これに眩瞀せられて。信ずるはいかにぞや。多妄をもて妄とせず。徵するに二三の偶合をもて信徵とせむか。そも〳〵(吉凶は是非の應のみ吾に是非すること無ればおのづから吉凶を爲ことなし豈)吉凶あるは。自らこれを招ぎて星に強るなり。星家既に人の善惡を知らず豈人の禍福を知らむや。人吉を冀ひ凶を忌む。惟吉を迎へ凶を避るに道あり。惡を改め善に遷るのみ。世人惡に染て洗ふことを思はず。善を見て行ふことを圖らず。僥倖して禍を免れ福を受むと欲す。星家人に與ふるに福を以てするとも。神明これを與へたまはず。人なほ此を得むことを望むか。世人の禍福吉凶を錯り指すこと久し。富貴を以て福となし。貧賤をもて禍となし。生をもて吉とし。死をもて凶と爲さゞるはなし。この吉福凶禍のごときは。忠臣孝子も遇ひがたく。また避がたきなり。若し君父國家の難に値ひ。此を拯はではえ有まじき時に。星家に問ふて吉ならば吾往き。凶ならば吾往かじと云むか。大小萬事みな然して行はんか。そも〳〵善惡是非の可否は。たゞ賢智の人のみよく此を審明にす。もし疑あらば然る人に就て問ふにしくはなし。彼の星家人に大福を許しつつ人に少財を索む。何ぞみづから富貴にして。肆に居り門を望むの勞を免れざるや。又人の未來數百年を知るといふ。然らばなぞも其足下を知らざる。さるは我ともに踐む地の下には多く金寶の埋もれたるあり。何ぞ察りてそを貪ずして人に求むるや。かく言はゞ彼また命に非ずは得て取らずと言はむ。もし果して命にあらざれば取ること得ず。命あれば辭することと能はずば。安ぞ推算を用ふることを爲む。彼等も豈明にその虛たり誕たるを知らざらんや。知りつゝ(此を業とすれば吾いかで彼が別に神明に寵れて未

來の禍福を知れりと云ふを信はむや然るを）自を欺き人を欺き。强て此僞術を信せしめ。僞言して某人我が星命の說を信せず。時日を簡ばずして死すと云ひて。萬人の深く星命を信じたる人の事々差ひ。時日を簡びたるも死ぬる事あれど。其は言にいでず。偶に其言に符ふに似たるを擧げ。人の聽を眩す。然るを愚人は正理を信ぜずして彼等が言を信す。かつ星家の說は。彼いはゆる聖賢の徒の言ひ出たる說に非ず。陰計あり。邪法あり。また妖魔妖狐のたぐひ瞑に其事を佐けて陰事を推得せしめて人を迷はす事を作す。是をもて正人は彼等に問ひ求めず。何ぞ信從するに足らむ。

天神人の晝に勞するを恤み。夜は寢しめて息はしめ玉ふ。（もし人夢をもて夢とせず。强て此事を謂はんと欲せば。天神の人を慈みたまふ御旨に負きて。みづから孽を作ざらむや。）爰に人ありて。我を二度三度虛言をもて誑かしたらんには。其後に實言をいふとも譏にすなはち信せじ。然るを世人彼が徃年々の禍福を語る事の偶合するを信じて。未來の禍福を語るをも必ずその如く來る事と信ずるは。彼が授くる孽を安むじ受るにて。彼に問ふは。やがて自ら禍を求むるにぞ有ける。然るは已久しく今世の人おほく星命の說を信じその大害を受て。此を覺ることなきを見て。いと片原いたく。いかで說を述て悟さばやと。思ふに。世人この俗習に安むずることいと舊たれば。撮土をもて江の流を逆に塞く如く。容易くは悟しがたからんと思ひて。默止ありつれど今いさゝか論はむ。抑人體（ひとのみ）の安きと危きとは。咸く心に賴るものなり。故に醫書にも。心者君主之官神明出といひ。また心君とも心王とも云めり。その體中に居ること國土に君あるが如し。人もし憂懼の時に值へば。すなはち體肢に流通する血氣とく胸膈の間に聚まりて。其心を守護すること。たとへば四方八方に分列せる兵士らが。國に變あるを聞て。卽に都に赴きて其君を守護するが如し。是をもて人懼るゝときは。面色靑く白く肢體搖動す。こは彼の流通の血みな心臟に聚りて肢體に在ざるが故なり。若し惶懼太甚なれば。血氣心に迫り聚まり鬱して遂に心氣を絕せしむ。故に懼に因りて死する者あり。そも〳〵人の貪り惜むもの。生むことを貪るより切なるはなし。恐

れ懼るゝ事は。死を懼るゝより切なるはなし。我も人もかく測りがたく知がたく奇しき中に在りて。物思ひの止がたければ。其危事は信じ易し。故に此を聞ては其眞僞を繹ふまでもなく。駭き懼れて止ることを得ず。恍聞の音。惚見の影にもしば〳〵心の大傷を生ず。此病もとも治し難く。此を療すれば愈々增し。此を消せんと謀れば愈々長ず。故に曰く。知らずして忽に災を受る者は至災なり。諺に此を信ずれば有り。信せざれば無とは。正に此等の虚妄の事を云ふなり。實に身にかゝる災は。たとへば信せずとも決めて遁ること能はず。然れども彼虚妄の事は。當に吉福あらんと云を喜びて厚く信ずるとも。吉福は喜悦のよく招く所に非ざれば得ることなし。唯凶禍の事は懼に因りて其驗を爲し災を生ずる故に。當に凶咎を得べしと云を信ずれば其人かならず憂へ懼る。憂懼の深きは病患を生ずること響の聲に應ずるが如し。然るは惡神は人の透間を見て災せんと伺ふ故に星家の説を聞て恐れ患ふるを見て其透間に附入りて災をなす。善神は御わざ常にて殊更に人に福を與へんとは爲たまはず。故に星家の説を信じて喜悦すればとて。其人徳行あるに非ざれば福をたまはず。故に喜悦のよく招く所に非ず。邪神は常に人に禍ひせんと窺ふ故に星家の説を信じ懼れ患ふるを伺ひ其虚に入りて禍をなす。正神は世に人に施し玉ふ功德常に平等にて。殊更に一人を惠みて福を與へんとは伺ひ玉はず。星家の妄説を信じて喜悦するとも吉福の來らざること是をもて知るべし。世の然る妄説を信ずる人みな云く。吉はいまだ必しも然らざれど。凶は悉く驗ありと云は此故なり。そも〳〵吾人の地を行くに。其踐む所はわづかに一尺に足らず。然れども一尺の木を絶高の所に置て。吾人をして此を踐しめば。目眩めきて墮べく。其木を平地に置かしめば。疾く其上を趨るとも恙なし。これ何の謂ならん。木高きに在れば狹く。地に在れば廣くなるに非ざれど。天神の吾を生じ吾を養ひ玉ふに。從容ならしめたまふ。然るを高きに上れば惶懼甚しく。血氣心に鬱逼して亟なり。故に一尺の外に餘地あれば。即ち安行するなり。かつて西學の人に聞ける事あり。古へ或國に名醫ありけり。國人いたく星家妖妄の説を信じて神氣を患へ病しめ禍を招く事を憐み。其妄

說を除かんことを論ふに。國王臣民ともに其論ふことを用ひず。彼の醫ふかく慮りて。王に重く刑ふべき囚人を乞ふて恐懼のよく神氣を亡ふ事を徵し驗みんといへば。王すなはち許す。醫かの罪人を引出さしめて謂ひけらくは。汝が罪いと重く首を斫るべきに決れり。然るに王その鉅痛を憐み我に汝が身を痛め傷ふこと無して殺さんことを命ず。吾は醫にて其術を知れり。針をもて脈を刺し徵漸に血を出さんに。少しも痛を覺えずして死ぬることを得んと云ふに。囚人拜み謝びて痛むこと無は意を安むじて死に就むといふ。醫すなはち布をもて其眼を蔽ひ。其臂を出して芒鍼をもていさゝか刺すに創つかず。また血をも出さず。別に陰に陶器を用て底に穴一つ穿ちて。其中に水を盛りて穴より出し此を椀に承しめて。僞りて大聲を爲して。血已に出そめたり。人身はたゞ血十斤のみ。かくの如く出ること十椀ならば死せんと云ひて。一椀ごとに其數を言はしむ。囚人水聲をきゝまた其數を云をきゝて信に血の出ると思ひ。漸々に衰へ弱りて十椀の聲を聞くに至りて果して死たり。衆その體を見るに少しも傷なし。國王始めて彼醫の說は眞實の理論にして。駭き懼るべき言の輕々しく發すべからず。輕々しく聞くべからざることを信じ。嚴法を設けて星命の說をいふことを禁じ。國民のそを信ずることを戒しめて其國に行はずなりしとぞ。

阿波禮神は大慈にて犯罪あるを罰し給ふ中にも。その御慈みの御心に預てそを知らしめて苦しめ給はず。未來の凶禍を藏し給ふ。然るを妄人かへりて其陰事を鑿り索めて。其罪を疊ね其禍を速にし其吉を重ねしむ。迷人なほ悟らず未來を卜して其吉を喜び其凶を懼れずば可ならん。是故に古人しば〳〵卜して傷はるゝ事なしと云もあれど。卜ふと卜はざるとは吾に在り。懼るゝと懼れざるとは我に由らざるなり。死期の至ると聞て懼れざるは。達人も此を難しとすれば。況て凡人の恐れざらめや。故に卜はざるに若ざるなり。殊に今の卜は古の卜に非ず、古は疑を決するにのみ用ふ。今はただ僥倖これ求むるのみ。善惡の分は審にし易し。二善の中に孰れか善なるを指すは難し。かれ此を決するに卜筮を以てす。卜筮は二善の孰れか善なる者を訊ふのみ。(こゝを以て春秋に易不㆑得㆓以占㆒㆑險也といひ、洪範に、有㆓大疑㆒謀

及二汝心一謀及二卿士一。謀及二庶人一。謀及二卜筮一といひて、古の卜は最後なり、今の星命を問ふは最先なり、今の卜は古の卜に非ざること是をもて知るべし。」二善の孰か善なるを訊ふこと無して。徒に卜するは不可なり。況て星命を問ふて天神の首誡を犯さんや。若し命は天神の上に在り。天神の定むる所に非ずと云はゞ。過犯の甚しきなり。若し命は天神の下にありて。天神の定め給ふところと云ひて。小人をして小財を取り。小術を造作して。測量すべからしめば。天神を侮ること淺からざるなり。人心すら測るべからず。然るを神の深旨のいかで測るべけんや必ず俗の五星方位諸家虚誕の浮說を聽ことなかれ。

（人は此世を罷りて。善人は善神となりて、世にある程の修行のまに〳〵大キクモ、少サクモ、其ほど〳〵に神功をなし、幽神の御供して、天にも至り、富貴を得べし、惡人は惡神となりて、大キクモ、少サクモ、其惡行をなして幽神に惡事の方に使はれて、疫を流行し銅湯をのむことなどに使はれ、然れども此うつし世の修行の地にて、惡かりければ、遂によもつ國に逐はるべし、そを顯世の狀にてたとへば、火付、盜人ばくうちなどの惡者を、暫く其方の用に用へて、遂には首をうち切るが如し、また幽世にも穢多乞食の類もありと見ゆ」また改まりたるは免し玉ふこともあり牢名主」大神たちも苦勞あり、また堪がたき難もあり、況て人の神になれるをや、吾は本教の神典によりて道を說き、もし誤れる事あらば、死後天神に糺して、人に託して改めしめんのみ。）

〇第十富て貪吝なるは貧屢よりも苦し

得ることを貪りて財を聚むるものは。蟻の所行を效ふなり。蟻は小身をもて大勞に任じ。夏は力を勤め。急に穀食を籍して冬の儲と爲し。其垤に入れて背て出さず。吝人の情此に異ならず。徒に富をもて人に上たらんと欲するのみ。暑となく寒となく。殖貨厭はす。積をもて增々積み。彌々得て彌々欲す。財の用に於る。履の足に於るが如し。度に適するのみ。短なれば拘迫し。長なれば傾倒す。衆人云く。身の榮辱は財の盈耗に在り。財愈多ければ。人愈々我を重んず。貧人終身辱を受くと。噫嘻寡欲は貧匱に非ず。多欲は貧匱なり。財多きは富足に非ずして。寡欲は富足のみ。然るは財を積こと盛んなりとも。其

欲に滿ずば薄しとせん。これ窮に居るに非ずや。貧者も本分に安むずれば富なり。昔金を百兩に充むことを欲して。食を減じ衣を服ずて聚むる者ありけり。辛うして九十七兩をたくはへたるが。仍三兩足ざることを憂ひて常に歎くあり。其隣に貧者ありて。其難きを心苦しく思ひて過しけるに。一時おもほえず金三兩をまうけたりしかば。甚く悅びて。隣の富者に持行きて與へけるとぞ。財は逃僕を習ふのみ。繩をもて急にこれを縛るといへども。繩を偕にして走り。人を置て守らしむれば。守者財を攜へて遁る。それ善は得る者の心を善するものなり。財は人欲を煽し。驕矜を培し。謙遜に反し。諛諂を速にし。直言を拂ひ。侈泰を振ひ。邪念を誘ひ。善に非ざるの甚しきなり。財と德とは共に存せざるの物なり。得ことを喜びて其を用ひざる多し。むかし一富家あり。甚吝なり。後に其財を減せんことを恐れて。其資產をも皆鬻きて數萬金を得て。一巨鋌となして土中に埋め。自ら林下の苦葉を拾ひて食ひ居けるが。旣にして盜人その金鋌を埋めたる所をしりて竊みて去る。かの吝人その藏したる所に痛く哭きて止まず。一人そを慰めて云く。汝金ありても悉くそを用ひず。今一つの巨なる石の金鋌と等きを覓めて。彼金鋌に代えて土中に埋めば同し。何ぞもしか痛く哭くや。汝先に若干萬金を持たるも。藏めて用へざれば。或は石。或は金。土中に在りて何ぞ異ならんと云へりとぞ。財を守る者は。內には奴僕を嫌ひ。外には盜人を防ぎ。親戚朋友鄕黨倶にこを避匿し。こを厭惡し。夜も敢て寢らず。利を得るの未だ暢ざるを恨み。食を節し饑るも餮せず。惶々逐々。自ら勞し。自ら苦むのみ。已に吝む。胡ぞよく人に捨せむ。吝嗇の汚は親む人なし。旣に死するの後。人その財を利す。貪と吝と相隨ひ。貪なれば必ず吝。吝なれば必貪なり。壹兩の金を得れば十兩に盈むことを思ひ。十兩を積ては百兩に盈むことを思ひ。盈ればすなはち滅缺せんことを恐る。是をもて常に不足の心止ことなし。財の美は用に在るのみ。徒に觀をなして神像の如くすべきや。これ汝の物を獲たるに非ずして。物反りて汝を得たるなり。財主は財を使ひ。財僕は財に事はる。或人富て財を愛すること身命よりも重くす。俄にして病む。治療に嗇む久くして。增々劇し。

熟寢して醒ず。其友に醫あり。哀みて醒さむことを謀り。家人をして病床の前にて。彼がたくはへたる金銀財寶を分つ狀を爲しめ。醫すなはち病者の耳に就て大に其名を呼て云く。汝の睡りて顧みざる故に。汝のたくわへたる財寶を人みな分ち取らむとすと。云へば。病者この言をきゝて。迅醒めて立て云く。吾が財を分たんとするは何者ぞといひて。病少しく間あり。醫の云く。今病已に愈ゆ。たゞ腹弱し。一丸の藥を服せばすなはち瘳えんと云ふに。病者その丸の値を問ふ。醫云く。わづかに銀壹匁なり。病者怒り詈り此れ盜人と何ぞ異ならんと云て出さず。醫あきれて退けば。立ごころに死けり。吝嗇の人大かた斯の如し聚むる所の金。よく死後まで携ふることを得むや。

本教外編下

本教五訓志(誌カ)

○仁恕を專(本カ)にして憎妬を平にすべき事　體一

○智慮を明にして愚痴を除くべき事　左足二

○敬謙を本として傲慢を伏すべき事　左手三

○義貞を正くして貪淫を止むべき事　右手四

○勇敢(勤)を務として懈怠を禁むべき事　右足五

仁――恕　智――慮　敬――謙　義――貞

勇――忠(勤カ)

○天祖神すでに現世の隱事は大國主神に委ねたまへり然れば上帝の出て彼是現世の幽事を世話やきたまふべきいはれなし然れはから天竺の書に上帝のわざあるは大物主のわさなるべし

○伊勢と大社の佛道にまじこられたまへる古事なきこといと尊し三輪は率られたる事あり此は奇魂なればなり

○神はすべて其功を隱に爲たまふ然れば人も陰德に行ふべしこれ神習ふなり

○上代の行事によりて空言をおこし其空言によりて中古の行事を撫ひて付す

○神は實に和光同塵なるものなる故に人の所爲に從ひたまふなり一言主神のこと其後神たちの位階を得たしと宣へるにて知へし然れば神等の中古佛法を好みたまへるも和光同塵なりさて和光同塵は云ひもてゆけば神は人の爲に生れたる物なればなり

○神の心人。人の心神。中古の書どもに正しき天堂極樂地獄に行たる說どもありそは天魔の其時々さる處とも作りて見するにぞ有ける

○伏傲以謙

○傲者過分之榮願也。其端甚多。綜統有四以爲善從己出不歸上帝一。知善從上帝出而因己功二。伐有所實無三。輕人自爲異於衆人四。自滿。自用。自驕。自誇。好勝人。好異好名戲侮人。爭鬪。不恭敬。不孝順。飾罪。詐害。皆傲之屬也。

○傲爲百罪之王一入於心罪惡萬端群從之善德萬端俱去之傲反謙謙爲萬德根。根毀矣德安積。故傲雖一罪萬罪總焉。

○物有決然相滅者。莫若德與傲。蓄傲于心德不能入有德在心傲亦滅之。

○修心以攻欲爲急攻欲有先後不先攻傲。而攻他欲他欲不去。傲去他欲易除矣。

○上帝惡傲何故萬善萬福皆上帝賦予傲者以天賦爲己自有世人皆上帝所育。皆所慈愛。傲者心々事事惟願尊己盡人類欲凌轢屈抑也。

○傲入心心自遂翳正平之義忽盡亡失。他人爲善雖大必厭惟己所爲雖小自喜。人有功輕之抑之。己有功。張大之。視己左上視人悉在己下。人有成事必謂有缺自矜其德欲人信欲人譽我有責其過者必甚怒每事自用自信獨於己事則不信己。而信之自審無才德有以才德譽之者輙棄所自信甚信彼言。傲者之情一々如此自欺之至也。

○夫人有善固借之于天有才知固學之于人所知雖多所未知尤多。想下下有地獄以罰有罪甚可畏有鬼魔能煽惑我心殘害我身非上帝祐我我不能防之獸勇於我禽捷於我草木花可視實可食各有用我我不能有用於物物皆能無用我我不能無用物我不謙矣。想上上有天神其性情靈于我我恒賴其保護以避世患又上

有上帝人不能奪其能不能悔其智不能違其義不能枯其仁孰得外之又孰得强之不去傲存謙乎。

○僕者以主貲市易不染指則忠否則賊善言美行能才上帝所賜我貲可以售天堂永福廣上帝榮名誨勸人爲善而輒自伐以圖己榮染指矣盜罪曷逃乎。

○人最善而不以善歸上帝乃最惡也。將使物歸己僭爲物主魔之徒也才德智能原出上帝妄謂己有爲己榮何異穿窬乎。試除不屬己者則當除才除德除能除智復且除己而可視有屬己者無矣。

○自矜其德者非因有德矜德乃因矜德行德也。昔兩人登幽神堂祈祝幽神。其一才智榮名過人。其一無賴也。才智者進謝曰幽神獨厚我俾我異于他人焉。無賴者皇悚遠跽不敢仰視拊胸籲號曰嗟乎幽神憐我罪人幽神判之曰才智者以德取傲傲存而德亡。無賴者以罪取謙謙至而罪滅。德反爲罪惡反爲德以德自傲不如以惡罪自謙矣。傲與德兼德全滅況與罪兼乎謙與罪兼。罪全滅況與德兼乎。

○水之原海而已。江湖皆流也凡德之原上帝而已。善念昌言美行皆流也江湖復歸海故能環轉不窮。才德受而復歸上帝故能生成不毀人有才德勿自恃生虛喜而輕他人須念非自我來悉惟上帝惠既能與即能不與雖己與又能復取。我其寄也何與而驕哉。

○我原非從我出。我存非我自存。我且不能爲我。況我所有奚能爲我乎。性命受之上帝。則才德功績性命之采飾我曷與耶。有眞德則榮讃益報兼配之。榮讃歸上帝益報歸我矣。若以榮讃自歸抔益報俱失也。故誠德之士有美德善功聞讃譽。則瞻仰上帝。而頌謝轉歸之。是以功德愈盛益報愈定焉。

○我原云々

○人不先自欺孰得欺之不先自喜孰得喜之。萬口之共尊不敵一念之自貶也

○土自生荊棘不能自生百穀人情自向惡非天帝助祐不能自善故爲善之譽宜歸天帝不應自居也善之合否我難自定。心雖純清我自不能知也。故凡人今世爲善如夜作工。夜作之工不至白日美惡不分。人爲之善不質之天帝孰能豫定其眞僞乎。

○傲者以爲異於人。如自立山巓視其下衆鳥有地也。不知我遠視人謂衆鳥人亦遠視我謂一鳥在山。焉

○吾人者人耳何以異于人。異于人者非人也。上則天神。下則獸。上者不能同。下者不欲同。與人何異乎。

○人欲異于人者多。知所以異于人行所以異于人者寡矣。異者非常之謂也。志言行異於常即異也。富貴美譽安逸人所同欲也。富貴知不永久之物不以得失分憂樂則異人。美譽知爲速過之風不損善以取之不陰心以圖之則異人。安逸知與禽獸等。人旣異于禽獸不宜同樂。圖爲善以生心樂勿爲形樂則異人也。若求世所等求得世所等得何異之有。

○爲天帝爲善是則與天帝也。行善右手所爲勿使左手知是眞陰德也。

○夫汚眞德虛天報者莫名譽若矣。露德求名之罪甚於乏德。故其避世譽也甚於世人願得世譽也。

○智者如日自有光。常存不變風霾雲霧障而不消。愚者如月借光於外隨外聚散以爲消長。眞德常榮卽有毀者不能掩不能滅。僞德榮於人口隨譽聚散用爲消長何足自恃哉。

○行善而無心名譽則名譽隨之作實德輕虛譽也有二美焉。有心名譽則名譽去之喪實德重浮名也有二辱焉。故榮名隨德如影隨形。我向影取之則愈去我背影避之則愈來。何者名從德生隨德至。避譽存德。名何自去。逐譽敗德名何自來乎。

○人有重寶不欲寄人。必十襲藏之。天下之實寶。貴莫如德藏德之器。堅莫如心邪魔不窺盜賊不竊。隨索隨得。人口無鍵之櫃我寄之人口能永存哉。寄之人口。則得與不得不在我惟在彼。彼稱譽則得。毀誣則失奚爲我有哉。

○鳶賤鳥也。高飛向天非欲向天見腐鼠而欲搏之故高飛以伺便也。好名者高出衆人上望假榮虛譽之腐穢物飾行相矜而取之。夫鳶得腐鼠能救其饑尚爲有益。人得虛名不滿其心。又賈其德不亦賤於鳶乎。

○面譽者如鏡無不似也無不反也我在左彼在

右我在右彼在左若以爾爲智知爾不喜譽而弗敢爲譽也始以諛入之既以受諛諂之蜂也口甚甘尾乃毒取其蜜受其螫也。

○遇艱難而不失其正者多値稱譽而不失其正者寡矣稱譽者多而諫責者寡則驗天帝之怒也。

○純德不待譽我有不足故以譽言補之如天體周圍誰稱其周圓日有陰晴故稱日以晴月有盈闕故稱月以盈人情大抵如是。

或曰名譽隨德如鼓應桴必提名譽恐脩德者懼矣曰有德欲人知之本非罪也德耀顯於人前俾視爾善行而讚美在天也惟以德自歸及以善圖名是爲罪矣。

○夫名譽非可願愛之物惟有益於人始可願愛夫我有其德令人見我德讚頌上帝知爲萬德之原觀我善行各自警策懈怠欽從訓誡是於我事上帝愛人眞心大有利益如是則名譽足貴也。

○水之分流有淺深大小入海則等水耳無復知孰深大孰淺少也。人在世水流地也其貴賤淺深大小也。至終時則入海矣豈有貴賤哉。

○世位尊貴人誤以爲眞福而實非眞福也。乃惟福影耳眞福者獨善人宜有之尊貴則善與惡俱得有之豈可謂眞福哉。

○成萬物有四行土水氣火是也成萬罪有二行好貴貪財是也人當伐善時不見在己上者惟見在己下者追求貴時不見在己下者惟見在己上者

○好大者欲伸於他人之上而自屈于傲情之下欲爲他人之主而先爲其欲之奴矣。

○好貴者不自覺其至險至危。夫身登峻嶺不重則必傾足搖目眩飄然浮雲可復定乎高位非易居也。厚其仁深其智吾身重而後能安之。且居高位者百責聚焉。以一身委百責之中險危極矣。

○好貴者不自度其能否未得時謀望。既爲心患已得時竊據更爲心患至於失位愈更爲心患其始謀望時言行無不求媚於人僞爲謙讓或如不欲得者諂諛百出屈己拘人也。既處高位身心最險。有位爲惡其勢既便。又無從旁畜止者是以在位彌久造罪彌深迨既失位。而受居位不善之

永罰其愚又極矣。居貴任以治人最難爲之事而無自識其難惟爲一時之假榮不復覺終身之眞辱也。

○居高位非大人所以爲大人以世情量世物不於其身於其礎耳猶侏儒於無極之臺不得爲長人納防風於不測之淵不失爲長人也故辨高卑者獨量其身勿兼其礎。

○居高位者極能見小人也若使不在高位孰知小人哉。

○一國古俗有大功者得立像一賢功最大也未立像或問故答曰我願人問何故不立像不願人問何故立像矣。

○謙者何自居賤自居下也。人思上帝之大。己之眇其心下上帝即下於人斯謙已謙爲德根。凡德不絕於是根則暢達焉蔥茂焉不則摧折焉枯萎焉謙德須臾不可離謙者先善以引善配善以固善隨善以掩善不則傲且取釁以入全奪我矣。

○紅爐之炭不以灰蒙之須臾而滅。盛滿之德。不以謙掩之須臾而亡矣。

○雖過謙下不必自疑畏若有絲毫上人之心正可畏也。譬如入門門高而我過屈奚害。軒然直行或擊其首。心下於萬人何害乎。心上於一人有害矣。

○傲者相爭不息。謙者自處最安。傲者求上。誰不求上故皆爭謙者求下誰則求下故獨安。謙居下。下不復墜矣傲居高危哉。

○問曰學孰大答曰學爲小者大。問學小。曰願不見知於人願見賤於人賤慢窘迫天下以爲鄙惡親疎憎厭而欣然樂受不怠前修則入大學矣。

○謙心者注美德美智之器也。他器愈注愈滿。愈注愈虛愈虛上帝愈授之故謙者如貧而日富。如賤而益貴如愚而大智如世人而實天上人也。

○動上帝之至慈莫若謙慈心遇貧者則動。富則否。傲者自視滿足故上帝棄廢不與。謙者自視貧乏故上帝哀憫付足焉。

○消上帝之威怒亦莫若謙。謙言能消人怒化讐爲友矧謙心乎。豈不足感上帝之慈心而消其怒哉。

○眞福有八端。其第一曰神貧者眞福爲已得天上國也不以功德自歸悉歸天帝不自滿足不恃

己不凌人身居人上心居人下此神貧也存此謙心必上昇受享天國○

○欲修德者邪魔必厭惡圖我恒投邪念穢感以攻我我欲存我德防其害莫若謙下冀祐於天神上帝勿恃己德力傲者恃其德力當之故屈謙者知無德可恃惟望祐於天神以此敵之故易勝矣○滿世界皆罟網機阱鬼魔所布用以陷人世之險危隱且多人孰能避之乎能不陷鬼險者必謙而已○

○恃上帝者必甚明乎實理勿自恃己智人自信自恃己智自爲魔何必待魔來紛欺之○

○智者始于識己終于識上帝夫我與我最近我未識最近之我安識最遠之上帝恃知逃二不知則能成智知己則生謙爲衆善之始知上帝故多所畏爲衆善之成此二知也不知己故生傲爲衆罪之始不知上帝故無所畏爲衆罪之成此二不知也○

○智之至者謙愚之至者傲也○謙擇內擇得擇本傲擇外擇聞擇大焉○謙擇谷故有豐盛之福傲擇山故有險荒之禍○謙擇勝己傲擇勝人○謙擇實傲擇葩○謙擇味傲擇色○謙擇眞傲擇似謙擇義性傲擇義形謙擇死後永福傲擇目前暫便謙擇下故安靜而人盡欲上之傲擇上故養爭而人盡欲下之夫傲所擇俱虛謙所擇俱實孰爲智爲愚哉○

○交謙者則習其謙交傲者則傚其傲熟思己罪過勿思人罪過移視人之目反而視己從人勿從己○

○蜂之輕也風能飄之知風將至豫抱砂石自鎮欲保謙德者莫若念己罪過抱以爲石○虛念之風不能散我德矣自省一日罪過可保終身之德況終身之多罪乎○故欲存謙辟傲視己而已○

○孔雀文鳥也人視之輒自喜展翅尾示人忽見其趾醜則厭然自廢斂其采禽獸猶知以微惡廢全美人欲以微美掩全惡乎○

○入古學門者初年智二年奮三年愚何者初學人之心如已得者未臻堂奧虛憍悍氣纐然自智也敬業稍窺道妙駸々嚮往志不可遏道蘊彌深德精彌堅自顧無幾矣此後其詣益深其識益超還照虛靈

竟同無知。蓋實德愈充虛氣愈去。譬鐘之空虛氣必滿。徐縁佳液液入。如許氣出如許佳液漸實。虛氣隨盡。無所容矣。佳液既實。愼自奉持。勿使虛氣得復入之。

○人進德彌深。其視己彌空。賤己彌甚。知幽神之至精。識其罪過之多。善行之微。彌明也。是以不曰已至。反覺未始。德路甚長。至今未始蹈。今速行補往日之怠可也。

○登謙德之極域。有七級。一曰識己罪人。二曰痛悔於內。三曰曉告於外。四曰願人信我實有罪。五曰傳聞於人。議者忍受。六曰辱我慢我怡然不慍。七曰深願侮慢之我加。

○謙者有德不欲露。畏傲也。傲者有罪不欲露。畏辱也。而德罪自露。各不可隱也。

○德非謙不成。故以保護爲急。觀己觀所短。觀人觀所長。謂己不如人。以己之微善較人之大善。自責其怠。自勵其德。以養謙。是智者也。觀己觀所長。觀人觀所短。以己之罪較人之大罪惡。辭己之罪。以養傲。是愚者也。

○他人善惡最爲難斷。蓋事之善惡原本心意。不先照心意之邪正。安能正斷事之善惡乎。夫人心秘藏非幽神無量之鑑。不能窮探之。故其眞僞善惡獨幽神能悉審而正判焉。凡以外貌微跡輙斷定隱惡者。皆僭幽神之大權全能。傲罪孰甚乎。

○平妬以恕

○妬者傲之密侶。相求不離。計念人惡。訾毀人非。幸人之有災。凡此諸惡皆妬之流也。

○仁人見人善必信之。見人惡必解之。如蜂然。花雖苦取之作甘。妬者不然。見人惡必嗤之。見微過以爲重罪。見人善必疑之。如蛇然。花雖甘食之作毒。

○毀之害甚于盜。盜損財物。人所甚輕。毀損善名。人所甚重焉。

○邪魔誘人於惡。不能使人明行。不使人知。害止其人。未大焉。造毀者掩人之顯德。使人疑之。不復慕之。計人之隱慝。令人見之。或而從之。害尤廣。宜避之。

○夫人以平心決斷人事。猶患多誣。何況妬心極能翳心目。不使見眞僞乎。

○思人汚行。汚其心。言人汚事。汚其口。如竊人

汚物而以示人妬者見人好德高才多能可讚可效厭聞之厭聞之有隱過微疵則津々聽之汲々叩之仇々洩之。

○毀人者虐於毒蛇蛇一齕傷一人毀者一言傷三人已一聞者一。受毀者一。覆邦家疏友朋離昆弟間父子皆由讒言。

○讒人者。設次以陷人而屢自陷。寓言曰。鰐者爲萬魚王一日病萬魚來問安獨鯛不至鰐遂獻讒曰大王病我輩皆至鯛獨否誠可恨鯛適至聞後言便進問病鰐大怒問後至者何鯛曰大王疾萬魚徒來一問安於大王疾曷瘳吾則偏走求良方頃得之即來何敢後鰐大喜問用何藥曰當用生剝鰐皮乘熱盖大王體立愈耳鰐便搏鰐如法用之。

○造讒者愼勿聽之與爾言人過與人言爾過也譬之販者以他貨售此方轉以此貨售他方。

○榮之實功德而已。智者厚其德豐其功榮名自隨故他人所有所得不羨亦不妬妬者願得榮名而無榮名之本故其求榮惟欲辱人以榮己抑人於下自抗其上塗人以濁自居其淸臨深爲高損人自益而已矣。

○盛德令名皆幽神之恩也妬者忌人有之是忌幽神授之故爲幽神所惡顯世或免罰不可免幽世之永罪焉

○夫妬者人在上妬其上人己等妬其等人不己若又妬其或己若。

○幽神至公至善不計人善惡日月均照霜雨均潤以賜爲心焉妬者至私至惡喜人凶憂人吉以奪爲心惟願幽神顧己棄人。慈己怒人豐于己嗇于人與幽神之正相戾焉。

○仁者知幽神愛人如己故見人凶惡如己凶惡痛憫欲拯之見人德福如己德福悅樂而讚美幽神爲諸德福之原且愈愛其人故以人德福爲己德福妬者反之自有人亦有不爲福自大人亦大不爲大自有人盡無。自大人盡小乃爲有爲大矣。

○夫憂樂好惡同者爲友惟邪魔甚惡人吉喜人凶妬者悉同之不亦魔之徒乎夫邪魔雖不妬之不妬魔妬者妬其同類人不己甚乎。

○幽神所喜德莫過于仁愛所惡罪莫過于妬也仁必忍必慈必不妬不傲。雖盡洞天徹地之奧理是德不在諸德俱虛。似而實非也仁之無所得也雖

稱述天神地祇之事、仁乏猶鐘磬而已。

○「一賢者見人貧、則曰娩哉我安得輕世如是人也、見人富、則曰娩哉我安得守德如是人守財、見婦女盛服修飾、則泣曰娩哉修心悦天帝、安得如是人脩容悦世乎、生平如此、迫死兩目炯々如星、其友恠之、思其故、忽聞有聲曰、是人生平見人、未嘗不爲善於己、故生之日獨受善、故死之日不受晴也。

○「有長者、僕役甚衆、家令請曰、役大衆、講擇其有用者、餘罷遣之、因兩藉其名、以進、主閲竟曰、此有用者我須彼、此無用者彼須我、悉留不遣。

○凡諸不靈之物、無不知其同類者、矧靈人哉、上帝初造天地、特生一男一女、爲人類公父公母、令人相視如昆弟、不相妬憎傲慢焉、況上帝衆人之大父、大小人悉其所生養愛育之子也、大父所愛人子、曷敢憎慢之。

○「相愛之德、甚益我也、人孤則負、合則勝、有一國主、集衆子、命牽一馬至前、令長子捉尾駢齊拔之、力甚費竟弗得。更令幼析而漸拔之、輒盡、乃戒之曰、爾等愛合、即有大力、不能勝爾、爾分則負焉。

○無相愛之友、善惡不見、世樂悉亡矣。

○人相愛有三、其一習愛、同居同業同時同議等。相習生愛也、是者易聚易散、鳥獸亦有之、固非上帝所責我也、其一理愛。知我人同斯人也、不友愛任卹、不能成世道、不能立世事、不能備世變、是故恒求己所愛人、及愛己之人、此人間之事爲愛也、亦非上帝所責我也、其一仁愛。仁者知人與己俱上帝之子、故愛之而願其得福、孰爲福、生時能識上帝、行實德、死時升享天福、則眞福大福也、仁者先自眞愛上帝、轉以上帝之愛愛人、故望人識愛上帝、以享生死眞福、冀改諸惡、脱永殃、否則惡之、是謂仁愛、乃上帝所責於我焉、以是相愛、眞友也、非除貪妬傲淫諸惡情、不心契于上帝眞道實德、雖合于外事、弗能得焉、不愛造人之天帝、不能善愛天帝所造人也。

○仁者與哭者哭。與病者病、與樂者樂、合于衆以化衆、此之謂也。

○交智者與德者、不可交忿者與傲者。

○交友之道九、其一心相和。而相是非。相愛惡也。其二心相通。其心盡傾於友、無所遺、悉同擬議焉。其

行惠報友之惠勿過爾能及友之力故與友宜揣爾所能與友所能勿因益友而損己勿因過愛而害友焉。其四勸責。人孰無過爲眞友見友過勸責之。責毋侮辱如明鏡醜直示其人則人亦弗怨之視過不責譽言可疑矣。其五於友不求非義爲友不行非義人愛在前友愛在後故爲友不可害人爲友不可讐人。其六患難不忘棄友貧不忘情反富乃可與俱享矣其七不露友秘意其八隱友惡其九友所求即予

○熄忿以忍

○忿怒衆惡之門也闔之而衆德安其居故忍在心如長在家百役無不欽哉無不謐靜忍主一去心怒目瞋舌譁面厲手奮身顫百役盡亂矣。

○易怒者如居草舍失火立燼今日大富明日大窮矣。怒火不戢財力悉費精力悉耗是自焚也又如水煮物釜中薪盛火熾百沸不止。初湧去浮沫不止清汁俱盡不止釜實乾焦更不止釜幷破裂

○忽怒者人情也畜怨則罪人矣

○凡邪魔陷人于罪密求可乘之隙可乘之隙莫如怒時盗入人室必竢冥暮風雨交作也欲陷人於惡必窺人怒時詈言虐行害人害已皆基于此故邪魔最喜人怒一人怒不止得一人因得衆多人何故怒有敵或遷焉展轉相牽相陷矣

○人奪爾財榮財榮已失矣忍而害止爾怒而復讐自又敗心德虛功力失天報也奪爾財者絕爾於富籍爾怒復讐自又絕於善人之籍彼奪地上暫福自又奪天上永福彼害爾物爾又害己害孰重讐孰眞乎

○人有訴爾者曰盲人觸我我甚怒之爾必曰彼盲者曷能避。爾則有目能避。不避則爾過矣怒人心目不識理形目不識人爾不知避之宜自怒何怒彼哉

○入聖之道恒從人不從己受人害不怨不思復讐。

○翳人心目者莫如怒理雖甚明心怒不能見之先所已明心怒復暗。故人斷決諸事最忌者一躁也怒也

○怒暫狂也以酒醉。以怒醉等也狂人醉人之言之行不若義。故曰最不可共計事者三。色貪。酒醉。忿怒。怒時所行怒解必悔故必怒時且勿思且勿言且

勿行

○無動必先誦本國字母數過然後命人行事

○易怒者於無怒時宜備防怒之藥或人得水晶器稍屢視○則一命碎之見者甚惜之問故王曰我信善之第我甚易怒此物甚易壞若有人壞之我必怒今豫絕其端無使怒害我我怒害人也

○或問忿怒悉惡○悉宜絕否○曰否○不當怒而怒○自犯罪也○當怒而不怒不欲救人罪也○其罪等故怒其罪謂愛其人見非義而心不動非能忍也惟過柔耳忿怒從於理後則爲義役勿過柔刑當其罪甚助於義若在理前而僭爲主斯過於虐甚害仁義矣

○怒人如治病醫者愛人○故怒其病求攻之仁者愛人故怒其惡治其罪求改之令人不然怒惡之人不怒人之惡原惡不改於人怒惡先染於己

○遇難不能忍所行善無益○凡懷怒時所爲善事雖大上帝必厭棄之○爾以慈施人上帝以慈施爾以虐施人上帝以虐施爾○故不與人合不能與上帝合

○爾不赦人上帝不赦爾○爾赦人上帝乃赦爾爾得罪於上帝人得罪於爾孰多乎人得罪於爾無幾也爾得罪於上帝無數也赦人之無幾以得上帝赦爾之無數不便乎

○愛愛爾者最安惡人亦能之能愛讐爾者能惠惡爾者乃爲上帝子也

○人有讐爾者宜思有兩讐人一○魔一○人可愛○一可避○一明攻於外○一暗攻於內爾以形福勝人故人欲奪其福以讐之愛勝魔故魔欲奪其愛以令讐爾○爾能愛讐兩讐俱勝也

○修德者皆急于識己過識過斯能改過矣夫人皆重愛己故不能盡識己過也

○夫忍者善人之甲胄也欲行善無忍者如在嚴陣之中無兵甲○能不受傷哉

○凡世所謂凶禍者忍德能轉爲吉福凡世所賤所畏者忍德能變爲可貴可愛物也○世所賤惡無過貧窘○疾病○恥辱○損失○患害○忍人能樂受之則以償其罪責以贖其罪刑以增積其德以市天上國也其直豈世間珍寶可論哉

○過難而委命者多過難而堅忍者寡以力服國者多以忍服己者寡服己者鬼魔亦畏之

○以忍御難者能避難。人有難大都由上帝降罪罰遇難而忿者愈觸上帝之怒而罪苦愈重。忍增德故感上帝之心而罪赦。罪赦而苦除夫世間所謂苦辱非正苦辱惟係人意意以爲辱則辱不以爲辱不辱矣特以罪惡爲正辱舍此悉非辱也

○大容之人者能以平心愉色忍受大難者是也故易怒者驗其量狹婦女量狹故易怒難解。

○上帝有無量忍人之有罪者即當罰滅而尙寬容以竢悛改人愈忍量愈寬似上帝爲天人也。

○天日之處雲不掩其光風不撓其靜終古如一惟下處自晦自晴自寒自暑。大容之人事變而心常一世亂而心靜身難而心不憂。挾心之人倏怒倏愛倏憂倏樂如樹葉隨風變動。故大容人以一心御多事小容之人以多變御一心

○有喪子者極憂。一賢慰之曰偏求諸方有遭喪不哭者得三人以來我能令爾子復生其人以爲易得偏求之竟無一人以復賢者曰既爾何用過慟爲。獨爾受此患也哉

○理爵國之俗男子遇患不衣。婦人衣。以爲遭世難而悲憤非男子事正惟女情耳

○眞忍必愛所忍者貌忍心怒非忍德乃怒翳也力不能復讐姑忍之。即不復有復之心則有復之罪矣

○凡以惡言犯爾者以忍當之則激而歸其原自先爲惡而爾效之哉

○爾尙未能自治己如己願安怪人不悉如爾願。今人愛辱能不言謂忍矣然而口寂而心喧色愉而胸慍此爲不忍其害尤深。與其黠畜而蘊無寧口發而散。

○夫苦難不論大小不論由人由物皆上帝有意分予焉智者明於此理値苦難弗視由人由物不辨有故無由惟視難所從來之原即服而忍之。人人無不自知以惡念惡言及非義之行犯天道是以値苦難則私念曾所爲惡不難忍所値苦也或訾一賢者人告之答曰我尙有他大罪彼人未知使知之何訾我止此乎

○一賢者尊貴富厚當世無比。忽七子皆殀身復病癘。前相欽重者謗爲罪人。賢者恬然忍受憂不見色口無怨聲心無慍意恒曰赤身出母腹固當赤身歸矣。帝予帝取。悉如帝意惟念上帝贊頌而已如是

者十有四載○尤人怨天未嘗萌心出口原上帝之意加此患若者非以罪罰欲標其忍德爲世儀也○十有四載後除其患倍歸其富貴安樂而盛德榮名施万方也

○上帝或安爾或病爾○安時樂○病時愁○是喜上帝有仁而不喜上帝有義○且不願以爾心從上帝心但願上帝心從爾心也○豈不邪乎盜者以罪受獲仁者以無罪蒙難○爾願誰之如乎

○眞福八端其第八曰爲義而被窘難者乃眞福爲其已得天上國也

○世人之心悉在圖樂忽值患難能不憂不怒哉○世患不虞而至則傷深豫視之則傷微○夫患之至最定特至期未定耳○爾莫若於患未至時思其將來備忍以當之勤以練之○卒備器習武常在平時設志以待故敵來而應之情卒遇敵戰栗消膽力於不試也○是故智者常習忍常以忍備患日夙興恒念今日必有嫚我害我人值事則定心受之

○昔有一賢者其若時甚易怒因屛居忽怒自破一器自謂曰我只避人未避己己在怒在不如人間習忍以攻怒情遂歸○故曰怒以忍能勝之以避不能勝之○

○一賢者令忍世患箴曰竄流○云何○曰凡安靜之所○即爲本鄕○謂安靜者不在其所正在其人也○智則旅遊○愚則竄流○著痛○云何○痛小任之微忍矣○痛大忍之大榮也○痛悛非痛悛爾自痛矣○能薄力微云何○曰以此不能害人以此不敢慢人不亦美乎○失財云何○曰財亦或有時失爾○今失財非失吝幸矣○縱不失吝去其妄行之質豈非幸歟○爾失財彼他人所先失以爲爾得乎○失目云何○曰已絕邪情欲之途○目諸情欲之媒○諸慾詭之利也○失子云何○曰哭不能不死者之死不愚乎○失良友云何○曰更求之求之失一友更無他友者恥也○失賢妻云何○曰賢妻最易得矣慈父母既失不可復得賢妻屬可再致之福也

○或有問于余曰○書云天道福善禍淫○又云惟上帝無常作善降之百祥作不善降之百殃○是以善者蒙福惡者膺譴理有固然奈何事有不然○或遭不虞之災○或冒非分之福顚倒孔多參錯過半○無乃增君子之疑起小人之倖○天道不平厥難久矣是誠何謂曰善者蒙福惡者蒙禍斯義正矣確矣○夫人之眞善

眞惡誰能决判念想言行咸若天理。此爲眞善。微有不然豈眞善也善非全不成若不善一缺已足夫全善了無微缺之人世間有之乎。今人視形上帝視心烏知人所稱善非上帝所稱惡者耶且爾謂此人甚能作善若之非是余謂上帝至明無暗至公無私甚能識善惡若之必是也爾信人之隱善疑上帝之顯義余信上帝之顯義疑人之隱善孰是乎。即是人果善矣。爾謂若爲不幸上帝不宜加之。抑知上帝用若以加善人乃大可幸乎。嗚呼世人神目當昏如瞽者往觸一人怒而詈曰爾瞽耶。人非瞽也己則瞽也。見若加善人疑天不明天非不明人則不明也。欲明禍福之理當先明禍福之眞爲。眞禍未有及善人眞福未有被凶人者也。何者世間之事不過三種眞福眞禍非福非禍者。生則積德死永樂眞福也。生作罪則死永苦眞禍也。夫人自不願爲善爲惡。而上帝强之乎理無有自有應受天樂之功德而上帝拒之有應受地獄之罪過而上帝不加之亦乎理無有則曷可謂上帝以眞禍加善人以眞福加惡人歟。若其餘貧富賤貴病安壽夭等斯本非禍非福也富貴安樂用以建德

蒙永樂乃福。用以助惡蒙永罰乃禍也。因富以敬上帝周貧人則富爲福若因富而縱欲害人則富爲福也因貧以怨上帝貪富人則貧爲禍。若用以抑情增忍則貧爲福矣。諸如此類可概推也。第兩者之損益人每不能自豫定之獨上帝無量之鑑乃能定之行人遇岐路未歷其中。未造其末特見其始安危夷險莫得定也世間苦樂兩岐愚人特視苦樂之始不審其中與末妄謂樂者爲安夷苦者爲險危從彼避此急々如鶩智人不敢信始亦不妄測其中與末歸明於上帝待上帝之自決焉。故世人於上帝宜如病人於良醫病人特願除病得安而已。若所服藥味爲甘爲苦。惟醫者所爲病人敢自取舍哉智者無不願得眞福亦無不求得眞福也。然所以得之道。或苦難賤辱。或安樂榮貴弗敢自心聽命于天時或順意謂上帝慂勸我之恩。時或逆意謂上帝儆戒我之恩。故順逆無常修勵惟一。種々世途悉以增德也。凡愛上帝者順逆萬端皆助其福不肖者不然順來不以勸善逆來不以懲惡。故順逆萬端皆歸於禍焉。夫古今修德者莫不因輕世福之念成就其聖賢世人犯罪者亦莫不

因重世福之念受欺惑於邪魔則世福者陷善之阱。聖賢所懼引惡之梯邪魔所據人以爲實德之報謬莫太矣。使上帝必以世福酬德。行德者。遂希世報與工人冀直何異挾貪心以行德即存德虛形豈存德實性哉

○善人之受苦驗上帝之愛也上帝所愛者必譴責之在上帝責外必在其愛外終不能爲其子也。下民有罪。上帝不能不刑今宥死後必不宥也。今刑徵且暫。則家刑耳。死後刑重其永迺國刑焉。故上帝今怒必欲永責今責必欲永恕故今責徵慈今恕徵怒也。假令父有兩子一愚。一慧。愚者時々嬉遊。了無譴怒。慧者時々勤敏。則督責之童兒之情。但見目前無志目後以爲厚愚薄慧不知父無望於愚者慧則重有冀也世人之情何異愚童富貴壽。謂天厚之窘貧賤夭。謂天薄之不知今福後福不幷享。上帝所欲豈報於天者先畀之於世以苦鍊化其過滓增其功德也恒豈於世福無患難恣其非義而不見譴責者。上帝所棄於天約永罰於地獄也。如醫然。病可爲。則進苦口之藥。多所禁忌其重不可救。乃悉惟所願不禁焉

○父以難事責於子君以危事託於臣孝子忠臣必不謂君父惡我害我蓋乃貴我重我以我爲孝子忠臣故也上帝人之共主公父。以艱難遣我而不遺彼以驗其愛我重我於彼也。不遭艱難者。正爲最無幸人明徵上帝因我怠惰忽忘我耳。修德者知不戰不能勝戰不危勝不榮故願得所忍難以建孝子忠臣之功于上帝焉

○夫玉琢之磨之夫金鍛鍊之離劾之無不攻治如譬焉以成名器人不經病苦不甞媿辱不試諸艱難而成天 上所用德器者無有焉不窘於世其德不誠也

○世之苦樂無常樂訖苦繼之苦終樂續之一時之苦令忘多年之樂。微獨令忘往樂往樂之念。亦增今苦一時之樂亦令忘多年之苦非徒令忘往苦往苦之念亦增今苦故曰吉時勿忘凶凶時勿忘吉吉時念凶不陷。凶時念吉不隕也

○人之事世者先得微樂後責大苦先得暫使後加永難事上帝者先受微勞後蒙大安先承暫苦後享永樂爾願事誰乎。兵士先致死而後蒙戰勝之賞。農人先以苦種後以樂收。萬事盡然。爾

修德必先負德修之勞與克己之苦與不德者之忌與鬼魔誘惑與上帝之德試。德既大成然後可享心淨之樂望天之報焉今人僅行微善心若上帝願安樂祈富貴不與則怨尤。望世報自徵必負怨尤。呈大傲上帝當降祥耶降殃耶

○蹇驢邪行得鞭知當正路行。正路行見鞭知當速行。凡上帝所譴責者。欲使正路速行而已。惟德福者即謂德之報應得難者也或曰無幸而偶值禍災者緣前世之因而今世生果報未嘗反思目前之罪試迄不悛改艱難往往相繼今人之苦永久不釋不息。何足異哉

○上帝恒以苦難加善人（幽神ノ世人ヲ治メ玉フ禍神ラガ常ニ善人ニ苦難ヲ加フルヲ見テ居玉フハ何也。以煉其過滓增其功德因得豈報於天也且使不溺於世樂物久煮不撓動則膠於釜而失色味。善人久安。不以難撓動之恐漸陷於世樂也

○靈神與軀殼體最親情最異也神喜理身喜欲故神之所願身之所惡。身之所求。神之所避恒爲敵讐也以道德助神身必負而屈於理乃所以効天神也以逸樂助身神必負而從于欲乃所以効地獄矣上帝以諸苦難加爾豈樂爾難哉以此殺身之强減形軀之力使知服於神從于理爲役勿爲主不至陷神於罪惡。人衰時乃彊是以誠德君子遭患即不能樂之。强勉安忍。弗敢直求上帝去之去與留未知孰爲己益故也

○金入火生光草入火生煙苦難一也遇之而以感頌上帝愈清矣。惡人遇之怨而怨尤意濁矣。世苦自無善惡。惟我忍則爲益而徵上帝之愛不忍則爲損而徵上帝之怒故曰目前之苦苟化爲善。則爲前罪之終不化爲善。而尚爲惡則爲將來永苦之始也

○解貧以惠

○凡情早發晩息者莫如財貪之情試幼稚之人他情未發而即如求得求多也老耄之人他情俱息貪心愈深。財貪諸惡之根也。樹之幹枝葉花實受養於根人之傲妬忿饕淫怠諸惡情受養於財也古賢有言財於邪情猶糞於草木草木失糞則萎得之則滋邪情無財易消有財資之易動速長矣生金之地最瘠不能爲五穀之田愛財之心最荒不能爲善念美德

之田
○吝者世人所乘之車也心弱酷虐輕上帝忘死候
四輪也奪攫不施舍兩牛也貪婪御夫也乘此何歸歸
于鬼域焉惡者莫大于貪財貪者値盆酎之勢心沒
沒焉
○饑不生奸窘不生淫因貪而受罪未見焉。飽思
奸豈恣淫因富而受罪者可盡計哉貧人見劫不
避遇盜不畏富者見大人恐謀之。見小人恐
竊之驚怖之聲恒注其耳今人俱豔富之我勞疾貧
之我安何哉
○夫財富極能消人勇力令柔弱如女人貧能忍
大苦力能負重任一富則勇力膽氣俱消微苦微勞悉
不能當矣
○石人勿求之言吝人勿求之情夫世富悉上帝恩
賜矣賜我不賜彼修心奉事以謝之善施周急以
報之可矣貪吝者彌富彌忘上帝矣
○眞友福時不識僞友禍時不匿既失財則愛財者去
愛爾者留眞僞乃見焉天世之富無大於良友失財得
友以小富易大富何足痛哉頭書云俊賢行成
○謀財者聚時甚勞得時甚憂失時甚痛矧務聚財而

不犯義者鮮焉
○好財者身命好時視財甚平潤懿美至其末命財不
我隨獨聚財之罪我隨乃覺其刺焉好財者死念最苦
也
○眞福者我身心保有之富之福者弗在保有反在
散用在離於我安可謂我之眞福哉
○金之貴賤從人意。人貴之則貴。人不貴之則瓦
礫何殊焉惟德不然自有之價重之不增輕之不消。
○世間相抗立者。相爭鬪者。分上下者不過於大
夫中一點地上耳。有尺寸之壤蟻王得之必分邦
國郡邑大小尊卑以爲寛然有餘也。而實湫隘甚矣
路狹往來者相觸故生爭。世富路甚狹。如兩人相遇穴
中非彼退我不得進世富最貧。如一物而爾人交
欲得之非是人無我不得有。非多人貧我不得
富惟德最富欲取者。俱取而不減其路最寛欲行者
俱容而不相觸矣
○世財如僞友安則從我危則遺我矣。有人以貪
吝積得大財忽遘疾畏死呼求抹于財不得乃怒
之曰無情之物平生愛爾事爾。爲爾日不息。夜不
寐今我値患爾不抹我爾不從我而將從他人

乎。我先遺爾遂以散施貧人財既散而貪吝息死乃最安矣。

○世財如流水也先已過多方今及此方小頃則流於多方也不暫留上矣未及我時非我水也及我而用。以灌我田以洗我汚我水也不用而遽逝。又非我水矣。世財先已經多人今經我也。亟用以敬上帝周人遷善則我財也。匿而不用旋屬他人豈我財哉別世之時財從世不從爾豈爾財正世財耳。

頭書云水不流則虫沸。金不用則惡生

○以其所得知足者大富也實富也不知足者大貧也實貧也故貪吝者如富未嘗富矣。

○人所當愛有四其一上帝也人愛所趣向美好而已萬物之美好上帝付與之故悉聚於上帝其美好踰於萬物之上無量無際矣。夫上帝萬物之大父母。萬物之初造後存。悉賴上帝無方之慈能保護之其恵又甚大。須臾不能離之其可愛也豈涯際所窮言說所喩哉。

○其二我也我者非我形軀也。我靈神也善愛己者必重靈神德。輕形軀之樂若愛形軀似愛己實惡己也惡形軀似惡己而實愛己也。

○其三人也。愛人者恕而已。己所不欲勿施於人即所謂愛人如己是也愛人如己者則先己而後人焉不能正己。而欲正人過愛人矣貪妬傲淫諸情不能無諸己而欲無諸人豈非愛人惡己授人况己哉。欲愛人如己須先知愛己。先知愛己後可知愛人如己矣

○其四則本身也愛本身則猶愛役奴欲其供事靈神而反因得財。故不免于事物也財消所須物亦消

○有兩人隣居。一甚富。一甚貧。富者日事煩擾憂慮。貧者日出傭工。夕時直歸。自給而已不求其已。歌樂不輟富者異之曰彼貧恒樂我富恒憂何故。遂召貧者曰多年比屋知子寡于財豈于德欲相拯濟今貸錢若干萬緡任徃市易約若干歲歸我以母錢足矣。貧者感謝不已。既得財憂慮不間弗復歌矣。彼富者而後知己憂生於貪彼樂生無貪也貧者亦自知得物失安樂持其貲還還之歎樂如初

○一賢大富自覺財念甚阻於德修輦金投之海曰惡物我先溺爾不俟爾溺我

○勿勞躁圖衣食。爾天父知爾輩皆須得此也。爾盍視空中鳥。不蠶繅。不耕獲。而上帝衣之食之。爾輩不貴於鳥乎。焉忘爾哉。且爾靈神暨爾身命。倶大於衣食。上帝已賜爾大者。獨靳爾小者哉。惟爾先求天國及天國之義。而衣食諸物上帝多益爾矣

○君子永貞一心。奉事上帝。有餘力。或以求財。必用正道。上帝無不與之。夫富由上帝賜也。所以得之道上帝自已定矣。爾從其道。易得焉。惟爾欲爲富不望之于上帝。不求之以正義。特特巧計欺人。恃威強奪人。亟欲得而不計如何得。得之不安享之。不樂失之。最速何足怪哉

○値取財之時。宜思非義之財。一取即得罪上帝也。財不償。罪不得去。罪不去。永劫之殃。亦不能免。而妄取之。險哉。爾既得財。宜思爾去世之時。財不隨爾。特取財者。財之罪隨爾。財樂遺之他人。聚財之罪。永劫自負。愚哉。深思此理。貪吝自消。

○貪吝者。不止貪財吝用而已。亦有貪智吝才者。取非其財。謂之貪。圖知非理之事。測人上之理。謂智貪矣。前知禍福夭壽及諸未來事。悉屬上帝無量知能。天神不與焉。矧人類哉。爾欲以數定之以陰陽干支測之。不亦智貪乎。財貪奪人之財物。智貪僭上帝之智能。罪孰重乎。人上之理。強求測之。最險。惟從天命最安。勿問星命。勿信夢卜。勿選年月日時。測吉凶未來。諸法悉以邪魔惡心。傳流天下。以網人示罪。故凡信行諸術者。無不得罪上帝。功德悉敗。死後不免永罰。目前所願免之患。以此更深。上帝因所犯罪罰之。或曰星家推算屢驗。何也。答曰此上帝所以罰智貪之罪也。愈驗愈以爲可用。愈用又愈陷於罪。今世以罪罰罪。後世尤增無涯之刑僇焉

○君長代上帝治民者也。故違君上之義命。猶違上帝之命。若爲君而以義委命。猶爲上帝委命。乃大幸矣

○貪財者。正爲財役。非主也。非自獲財。惟獲於財。主喜役亦喜。主憂役亦憂。此忠役也。財消爾心亦以憂消。財長爾心亦以樂長。且以傲長其爲財役。甚明矣

○塞饕以節

○夫上帝所自造之物。皆有定理（趣）。造人之靈。使能明實理。蹈實善。因而事上帝。升受天國永樂焉。

造人形軀使爲神靈之役輔之爲善矣。知形軀不食飲不生。故造多味以養之人食飲以養身俾有力輔神於善意合上帝之意。食飲爲德。且必不踰節。身王而諸德建矣。若食飲圖樂意悖上帝之意即食飲爲非義且必踰節身王與德機俱銷矣

○義思道行悉由靈神生。邪思回行由形軀生。兩情如敵寇。相攻互鬪。其一强。其一弱矣。益此必損彼。益彼必損此豈養形軀者兼養其情欲形軀增强其邪情回行日繁日盛靈神替弱。其善念義行日少日微矣

○夫邪魔侵敗我心德悉由我形我形詎非我敵邪。我厚養之實養我敵而自以爲養我也謬孰大乎

○夫饕者怠惰之母也。恣饕者腹首俱重目冥神昏惟思寢寐道慮德願沈淪不振道德之慮無由自入有益之業悉不暇爲也。就食時須念食飲之後尚須務道德誦念之神業也。以此意豫度量食飲多寡乃可令得中不過節矣

○饕患過節酒最大。酒譬之雨焉。徐々零。故入土深。能增土膏若猛而驟。無益于澤土脈蕩盡矣。節飲之酒能養和消憂增力。外形與內靈咸益焉。過節者反是。形與靈皆溺於酒濤。顚倒迷瞀。目無視。耳無聽。心無明。體無覺。百骸亂營。形與靈。皆束縛於酒困於桎梏盡失其所爲人矣。故曰犯淫者。生而猶死。酒醉者猶死而殄也死者無生善惡幷止醉者善念悉去。惡念愈生。嘉言懿行盡亡而妄言回行群出焉。醒時所必弗敢爲醉悉爲之。故曰酒醉者闔門於諸善而開門於諸惡也

○離智者於道莫女與酒若也。酒過節則奪心鈍五官昏靈神煽淫欲洧舌。朽血弱體銷精神減壽命

○酒柔魔也。甘毒也殆罪也。服之者非特犯罪全是罪也。自以爲飲酒而實飲於酒也。

○今人設席豐盛。(頭書云與古道異也)以爲優賓榮己。實則慢賓辱己也。以豐厚待客者。以淫根投其腹中矣。且意彼喜厚厭薄。故厚奉之。正以訕其侈奢無節廉耳。豈非慢乎。

○醉者人所自喜之暫狂也。人靈而自承酒醉。是自承爲狂人。辱莫甚焉。

○酒淫薪也。恣酒不恣淫鮮矣。凡有志絕淫守貞者。皆視酒爲貞德之毒也。

○酒入適心。心者諸情欲之地也。心血以酒熾。諸情俱熾。殆滅者復生。已生者增力。皆勃發焉。是以酒盛者喜怒。淫欲。酷虐。傲怒。諸情皆縱理。心爲酒烟蒙蔽。不能盡用其力以防之。罪益增。德益消矣。夫酒爲諸德之敵。諸惡之媒。而人不知以節用之。哀哉。

○酒能傷心紀。又損神智。故令人健忘昏愚。念慮不精微。故不能澄徹奥遠之理矣。

○聖賢德士與天神同福者。皆由減耗食飮之樂。忍飢渴之苦。僅乃致之。爾終年務饕嫖。與聖賢異行。能與同報歟。奚啻不蒙天報。且緣微體之暫樂。致全身之永殃。不思甚哉。

○人于萬類中。上帝獨爲之大其身。小其口者何。非徵其宜節食飮乎。禽鳥薄食者翼長大。能迅疾且高飛。多食者如雞鶩。最肥恒地居。翼不能擧其身。人心之翼念慮願欲也。食飮多則身厚。念慮願欲皆重濁。其勢下墜。不能自擧向上。食薄者身輶疾。氣淸。五官有力。心靈明朗。念慮精微。能通豁奥理。能思天事。願欲淸潔。不染下土塵垢。而心自向于上帝。冀天上之常命。識上帝及己益明焉

○飢渴性疾也。用食飮之藥治之。而令上帝所賜以救性疾者。自用以傷性喪德。可不愼哉。

○節士就食宜思。並設兩容也。肉身一。靈神一。各食其味。芻豢蔬菜。養肉身之味也。節德養靈神之味也。食飮以節。形飽於形味。神飽於神味。各得其養。皆安靜受益焉。食飮無節者。肉身有餘之患。靈神有不足之患。皆受損焉。

○夫節者。滅我淫火。拒彼邪魔。勝其煽惑。破其計謀。箴砭私欲。使服於理。祛形之濁嫖。致心之淸樂。抑傲揚謙。悔罪啓心晴昧。策怠惰。減寢寐。令人富於時。保身之安靜。消身之邪氣。延壽期。感上帝之慈。蒙罪赦。釋罪罰。消諸惡。憎諸德也。人情之貪多。以應口腹之嗜。以節克之。

○淫欲之火。以饕爲薪。饕旣克。淫欲自滅也。故節謂之貞德之旌。絕饕者。貪吝淫諸情并息。心愈靜。于妄念愈蠲。于穢欲愈思。道益明。精進益速焉。故節德謂之智母也。

○節。諸心與身疾之良藥也。無論修道克己之士。試察萬國人。雖甚愚無知。凡遇不虞之變。或畏天殃。欲感格上帝。求罪之赦。旱禱雨。雨禱晴。戰禱勝。與

夫一切禳禍致福興作大事皆知減粗食飲持齋最虔故其間有能濟大事者無不減損肴味以齋食自苦而成就焉。

○節德之行不一或絕諸稱美味或食飲甚薄不至飽或獨食菓核飲水或獨食蔬菜不下鹽豉膏油或絕酒肉而齋素。皆節根之技也未審德與否者視趣向之志縱不爲惡特愛己之情耳。若以贖罪責克邪情助德修此則上帝所愛眞節德也。眞節德者旣戒食飲過多又戒過少既以節克多食之過又以智克少食之不及令就中也。食飲過多則肉身距遠。不若于理過少則肉身弱不能輔神于德行其害一也眞節德齋素之食無傷生滅性不及損身沮義行斯智士之齋已故曰肉身須以味衞之勿隕亦須以齋抑之勿抗也不去心之罪汚獨以齋食勞身何益哉戒人所可食之味不戒所不可爲之慝可謂德歟

○儒生問曰稽古聖賢之齋也正以滌除難免之瑕穢蠲潔其心以虔事上帝也佛教入中國之後。不然皆勸食齋素不茹葷其意則戒殺生也。蓋曰前後萬世之人與諸畜生轉輪變化前世爲鳥獸者今世或爲人今世爲人者後世未必不爲鳥獸因信此說謂殺鳥獸者其陰禍無殊殺人故戒殺鳥獸無殊殺人其說正邪。其志意善惡如何。

○答曰夫不殺生不爲德亦非罪殺生不爲罪亦非德仁德以愛上帝爲主次則愛人廣此仁俾及物愛物亦眞仁之徵印也。若特向物之愛是爲仁影豈眞仁哉

○夫鳥獸疑爲人類轉生。愛不忍殺斯因矜愛人故矜愛鳥獸也則其矜愛人必倍至矣今不忍殺生者皆然乎憐恤鳥獸酷虐人民過捕獲生物損貲贖之收養之放釋之至小民之困苦饑寒者行乞者曾不及顧跡之甚遠乞之甚悲恬然漠然莫損半菽也即有施予豈緣愍其患正以杜其煩擾耳一錢半字投擲於地令俛拾之視人如犬邪。或益以詬辱。豈施予哉。嗚呼譎哉邪魔妄迷惑人心必假善迹令人以德貌自安自足不復求眞德也不悟慈愛物不足爲德不慈愛人足爲罪不悟上帝不因殺鳥獸罸我而因不愛人甚罸我悲哉非獨此也。凡信輪廻之處。貧人生子或慮養育之難嫁娶之費輙殺之曰吾生爾貧爾願爾

死卑託生貴富家爾禮也痛哉中土聖賢言親親而仁民。我西國論殺至親之罪甚於殺人之罪奈何哉以僞慈之貌飾殘賊之心借虛誣之言掩散殺之辜緣貪吝之情忘父母之慈謬敎大乎。則此諸被殺之小兒非輪廻轉生之一言爲之方斧方刀也哉。語悉愛人慈人行悉憎人害人實襲羊皮懷狼心也。

○夫信輪廻轉生之說旣不足迪善董惡亦返逆阻行善之途平開恣惡之路何者欲爲惡者。持此言懲之不欲爲善者持此言勸之彼將曰爲惡無他殃爲善無他酧乎禽獸者方其爲禽爲獸適其姓己矣安樂於我矣。夫安知前身之爲人後身之爲禽獸而以爲苦故或有不忍愁苦壓命自殺之人未聞有不忍愁苦自殺之禽獸也。禽獸豈不安樂於我乎。縱轉爲禽獸曷足畏哉若是輪廻因果之說豈不令人行善益怠行惡益無忌乎。世有懼變鳥獸而置所願爲之惡行所不願行之善者余未見其人也信輪廻者。冐內求諸心實究圖之自足爲證何至溺所聞以自欺乎

○道德之士遭世之不虞之變必反諸己曰上帝降我此苦用以罰我罪策我怠矣猛省過僭嚴督其勸勤於善痛悔改圖之或疑所循習非正所行善非眞。則虛心質之天帝望開牖其愚懲之聖賢先覺求引翼其行是因世患致眞福也信因果者不然遇世之變不反諸己不省行事不疑道術惟曰前因不善受今果報矣目前顯明之罪惡棄置不顧不復改圖而轉目視未經之冥世未犯之虛罪豈非邪魔陷人萬罪之穽而不令自覺之至計哉。因果之說可謂勸善懲惡者乎。

○夫據因果之說甚惡人當轉爲甚惡獸也則習殘殺者當爲獅虎之屬其次者當爲馬牛屬矣夫論性彼鳥獸諸類皆安于本性也論性即馬牛之屬生平受束縛草食之苦。耕駕負任之勞。正於諸獸中爲最苦耳獅與虎人獸皆畏避之生平閑放。略無愁苦其安樂不十倍馬牛歟。夫據義即最惡人當受最重罰據輪廻法即最惡人受最輕罰豈上帝全智所建生死大道公義。正惟愚人所爲悖道非義之蠢計耳

○夫彼論畜道者自知先爲人類今以罪故罰爲畜

乎。如曰不知必也以畜性自適不自知罰矣且不願變其本性易之人性也不自知罰其所以受此罰之心與罪又安能痛悔悛改哉罪不痛改不去罪不去變畜之緣不滅。變畜之刑奚能自釋止哉豈非論畜道竟無法可轉爲人乎。或曰以受苦難贖罪消刑未聞艱難之任足感上帝之心贖罪消刑也。彼論畜道者不謂艱難不識善惡無意堅忍其艱難以贖罪焉能蒙罪之赦釋刑僇而轉爲人類耶如曰自知昔嘗爲人今以罪罰爲鳥獸心也以爲大苦難其靈神居鳥獸形中不勝憂懣哀悲苟冀一死則能脫乃形而轉生爲人必不以見殺爲患其親見殺猶破猩狌見天川企足引領惟恐遲々也又曷爲戒殺之乎。若云能覺憂樂必亦能覺善惡知建功犯罪也假令最惡人習殘殺既轉爲獅子虎狼既知爲前生作虐今生受罰矣又復肆其毒害搏攫援噬。而增其罪死後又變爲何物乎。虎狼爲知善惡之物必亦知畏知望也盍建懲惡勸善之法盍與之明師引之循善避惡乎。盍立之官司以定其褒貶賞罰乎既不能然任其增惡必不當復轉爲人豈不令世人日少禽獸日多哉然而禽獸不靈于人人不能知前生之事則禽獸之不知而自適其性必矣是畜道爲樂境也

○人所爲善惡靈神爲主。形軀共之其報應也則靈神與形軀僉受義矣世之富貴安樂貧賤苦難悉屬形物。故皆爲形軀之禍福非靈神之禍福也若以爲德與罪之報。彼爲善爲惡之形軀宜當之。今人形軀徂謝。卽殮瘞數日則腐朽。永年不復離於棺槨則爾所言轉生他處者固非彼爲善爲惡之形質。乃再造之形質耳。夫爲善建功之形質腐朽於此不爲善不建功之形質蒙福於彼此形質犯罪。彼形質受殃人聞之愀然不忍豈上帝公平之義哉

○人行事欲知眞善與否在其志趣也爲善以尊上帝之命行德爲德之美則眞善實德也以冀名冀財詎眞德正屬傲貪矣以世之富貴安樂定善德之報令行善作德者因而冀望之是爲善德之貌實貪傲之性也。善德之性以忒志先喪。不免永殃。矧蒙吉祥之報哉。況世間諸罪惡之根抵有三。一好財一好貴。一好安樂。人所爲大小罪惡悉此三根萌也。拔此三根功德乃成。爲善。而以轉生富貴安樂處定

其報則用其絕於善者以報善也。是因爲善而投之褒善。陷之於萬罪之窄也上帝酧實德之報必不其然

○夫正道易明雖愚夫自能悟之輪廻之說萬國之民未有能悟者聖賢明道之士又皆刺譏之勸人勿妄信焉正道至公上帝欲人々知之是用隨時隨處見明驗著顯跡今數佛教未入諸國之所紀開闢以來未見未聞有一人輪廻者也

○輪廻之說原有之。則自開闢以來。一靈神所經世界甚多所見事所識人甚多竟無有一人能記一事能識一人而佛氏獨記其事識其人豈衆人皆善忘佛之徒獨善記邪抑佛氏獨宥而餘人皆愚乎我明知已及衆人皆不記不能明知彼一人獨記何必疑已與衆皆善忘而不疑彼一人語爲誑語乎。上帝定善惡之褒貶固以罰已犯之惡賞已建之功德亦以董未犯之惡廻未建之功德也若輪廻之變實上帝所設用以勸善懲惡必也若令全不能記憶善亦不足勸惡亦不足懲終何益於我邪。

○若言前生爲某家之子今生我者非眞父母惟託生之父母更誕人有靈神有形軀靈神者上帝自無中造有之與父母無預也惟有骨肉之身由此男此女得之故爲我父母也夫今生之肉身異於前生之肉身也前生之肉身由彼男女得之故實爲我父母今生之肉身由此男女得之曷獨不實爲我父母歟若今身之父母非眞父母乃託生之父母前身之前又有前身前身之父母亦不能爲我眞父母也縱有生而爲此言者正爲邪魔惑人心棄父子之妖語豈輪廻之實徵哉

○或曰輪廻爲虛誕是也。敢問生死正理何如。余曰靈神肉身兩者締結成人也肉身既成就。上帝從無中造有一靈神付與締結之人之性始全焉。此肉身之前未嘗有此靈神也是以凡人之靈神。初生時絕無知識後隨目所視耳所聞。日漸滋。而增知增識焉。人既死後雖甚惡者其靈神萬世不能散滅又不能轉生輪廻乃隨死候之所就或善或惡遂入其報應之境耳既入此境永不能出所受苦樂甚大無極非世間苦樂所能比其萬一且非人心所能思世理所能諭也此則上帝所以訓萬世聖賢之信於己傳於人不易之正道也其他岐說悉邪魔誘

不肖之人傳貽於世以紛亂人心使淪溺于罪耳。其計甚秘。稍似實理非上帝牖明我心難以盡識盡避焉。蓋乾坤有主宰人物之主世間有善惡之人必有賞罰善惡之定法定所。所謂天堂地獄是也。邪魔懼人篤信此理必能去惡歸善則令佛氏雜之誣語多端俾人雖信有天堂地獄不以爲甚可畏望而輕忽之又作瑜珈邪法謂損少財物即天堂可倖致地獄可倖免焉。又兼輪廻畜生之說俾人謂天堂地獄之說俱當無憑特寓言勸誘而已夫既不信實有天堂地獄。則無所畏望於死後去死後之畏與望。即世法之賞罰必不能稱人之善惡使人肆于惡怠于善豈不日深悲哉。

○坊淫以貞

○淫者何樂穢娛而不自禁之勢也。邪魔攻道念其車孔多淫車爲一豈食飲華衣裳閑而多寐念擾易熾四輪也事順物裕雨馬也怠惰苟安三僕也

○淫欲心火也此火一發善念德願義行悉燬焉。其薪酒食。其飫倨傲。其標譏言。其煙穢名。其燼惡疾矣。

○妨人之智行亦莫如淫情也凡智者之行必踐四級而後成事焉一謂明照明照者明所欲行之事合義否也二謂量議量議者既明合義因而斟酌就之。三謂決定決定者酌議以後審實應作。四謂命令命令者既定于義申命行事也

○鳥獸無靈而情慾有節也雖雄牝牡交合以生子繁育種類故特用正色不論媸妍孳尾之時淡歲一過猶爲貞潔矣。獨人類者上帝予之靈心附之理銜使御形欲形欲合義則縱之。否則控之顧自倒置使形欲反御而爲主靈心服從之嗟夫。

○人盡知德之美且益第以爲無樂故畏之避之亦盡知淫之醜且損第以爲特有樂故甘之從之形軀者人之卑分。其樂鳥獸樂也靈心者人之尊分類天神形軀行汚有樂而靈心行德無樂乎果爾是明使人淪欲厭德。豈上帝至平之義哉

○世間有樂燭淨心得之得嘗此樂者遂以世樂爲大苦悉厭棄焉。

○身貞心貞。貞乃爲德身貞心浮非貞德乃貞貌矣且淫醫矣凡視婦女而願之其心已犯奸矣夫初發之念。是不在我雖聖賢難悉免之又非我所能豫坊不爲罪也淫念動。我或樂想之或欲從之乃爲罪焉若不樂不從。而惡之敵之豈惟不損貞

德。其貞德彌堅貞功彌大焉。古有人學道志欲守貞淫念繁生。其師賢者問之曰爾願我祈上帝除此念否。對曰否勿祈去之。惟祈賜我坊勝之德力足矣。問故答曰德不受攻不成將不欲鬪者不欲建功受賞矣

○他情外來。淫情內出我此身形自爲其媒其攻最繁。凡邪魔以傲妬貪諸情攻而不勝以淫攻鮮不勝焉。世人不染他惡者尚多有之不染淫者幾乎。故淫爲邪魔巨網世人幾爲羅盡也

○此本身上帝所賜以育子孫傳生人類上帝所爲事必有節從節則善。違則惡矣。一夫一婦正也外此則悉皆邪淫。若心樂想之身行之則違正犯罪也上天之樂不得。下獄之苦不免焉

○夫婦之欲亦有節焉。志爲生子。行不過當。則正。志爲樂邪矣

○淫罪多端男淫最大。凡罪皆名以某罪獨此罪者名爲不可言之罪。于此罪行者汚心言者亦汚口矣罪惡上帝悉惡之而惡此罪尤甚。殺人淫男二罪恒呼天求罰也蓋乾男坤女。是爲生理。一夫一婦是爲人道。淫女者滅人道罪矣。淫男者。反生理罪中之罪矣。女淫以人學家男淫家所不爲更下焉。

○淫念初發力微。以善念亟坊之易勝也兩情相反人心不能兼懷之善念在淫念無自入矣

○淫情攻爾恃己德力必難敵之恃上帝之能祈求默祐又加心功乃能敵焉自心之功淫念方萌輒思曰我心則上帝所樂居之處道德之守也我以淫念汚之上帝去之道德盡亡而向來行善之功績悉虛我曷堪以穢樂微賈易此至寶貴重物乎

○守城者無急於守門守貞者無急於守耳目耳目門輒闢。內德易泄外惡易入謹守之內美無由自泄外汚無由自入焉

○袨服者傲之旗淫之室也

○貞者何絕淫慾之願也。其級有三。下則一夫一婦之貞也夫婦特行正色而不過節身心言行皆絕於非分之邪欲是也。中則鰥寡之貞也。一配既歿。其一守節。不復嫁娶向後身心言行並無正欲是也上則童身之貞也從生迄死時々刻々心潔於色願形清於色行是也

○眞福八端其一曰心淨者乃眞福爲其己得見上帝也

○貞人者邪魔甚瞋恨之此亦足徵貞德之至美且大功也西有名士自幼守貞邪魔深忌焉四十年攻伐弗克勝之後乃稍變爾時在人入城日暮就路傍一廢宅宿。深夜有群魔入中一巨魔據高座覈諸從魔功績差等之或曰我曾令某所人作亂相殺或曰我曾鼓烈風壞海舟沈其人或曰曾誘人行盜竊劫掠各陳所行惡狀巨魔俱以爲懈怠功責之最後一魔曰我曾以淫念誘某貞士逮今四十年不克昨更竭愚計誘惑之乃得視家中一童女手拊其背也巨魔踴躍而起拊其功勸令更盡力無弃成勞宿者娶勝怖懼審畢魔散厥明往見所謂貞士某告之貞士乃深悔更加精進遂辭家弗敢與女人偕居焉

○婦沒得更娶正妻不得娶妾也禁娶妾有明據開闢之時上帝既造成萬物乃造一男一女爲人類宗祖人類之始生育最急何不以一夫配多婦令速生乃上帝特以一夫配一婦者明徵伉儷爲正禮此即上帝生人之直道其外萬収悉皆邪淫即人自生曲矣故上帝甚惡之夫人生之初。世界空曠上帝且不使犯一夫一婦之正今人充滿世界而反以一夫配多婦爲不犯正不大謬惑乎

○人類男精於女故論生人之性男多於女縱不多必不少矣今使一男配二女必也三分生人之率。而男一女二可也過二以上即男生當愈少女生當愈多矣苟爲不然不將使世有曠夫而無女可配乎

○夫女性易怒易妬多疑多慾。爾既娶妻又娶妾若愛之勝於妻妬爭計謀不息矣縱不勝於妻。而妻愛以分故滅愛滅亦生妬即妾及妾之子及爾俱被妻憎焉是令妻犯憎妬之罪妻特尊妾特寵。爾不相丁其亂不已兩婦爲讐兩婦之子豈得相合是一家犯罪罪悉由爾爾之負罪不已重乎。爾娶一妻而父子夫婦兄弟三大倫俱廢尚曲解爲不犯正道哉

○夫上帝令人結婚欲夫婦待相眷顧之益也其一病其一事之憂則慰之有子共養之教之。夫積婦藏有子孫以遺之假使一夫而有多婦豈不睠顧乎。分則必消婦各私娶以遺其子將必竊凡教孩幼。太半由母衆婦之子。教亦廢焉幼稚之心如新瓦器。初盛之味或甘或苦一爲所入。洗滌甚難爾子若女從幼至壯習耳習目更有何事父好惟色。母爭惟色欲其貞心不亦難乎

○凡牝不能自養子者。必牡佐之。皆以一配一而已。試觀鳥生子一覆翼。一求食更分其任焉。

○人有子娶二婦淫罪不免矣

○策怠以勤　本教支妙諭　神教觀義

○怠者何德行之厭憂也。恣諸慾須暇閑遊多寐皆其支也淫慾饕餮盜竊妬嫉戲言浪笑惡謀訕謗諸情皆其流也

○凡物或無生無覺如日或有生無覺如草木或有生有覺。而無靈如鳥獸或有靈而無德如凡民或有德如聖賢皆足策我怠激我勤也日無生無覺當開闢之初上帝命之晝自東而西。夜自西而東。日終古不違不息也今日盡日行。明日復然。月已與爾偷寢寐。使月能言必曰昨者我勞疲於爾也今我作爾息邪不婉歟

○有生無覺之物如草木草木者初生微眇。覺致鴻鉅或經寒暑摧折。風雨飄搖。或采摘華實。剝斷條幹。迨至其時芽蘖華實宛然如昔。且有加焉。未嘗怠本事矣。觀其眇末。孰信鳴鉅。睹其孳藏。孰信鮮茂。然而不覺致然者積漸故也夫物固未有忽然底極者。凡大事嘉績上帝不欲忽成之必繼之難々事成彌艱人視之彌重守之彌謹矣亟成者弗良良者必弗亟成也獸逾大孕逾久成長逾遲。致大者蔑弗小。致安者蔑弗危怠者將不行而至不圖而勝不滌而淨不造而成不求得豈能就哉欲行德者必遇敵讐必遭窘難若爾勇者遇艱苦增膽力以勝之可也事惟初難稍習則易剖核之堅食仁之甘是以世間善事。非中心優裕強毅者悉不能成之矧克己積德最難事哉。凡害成事者莫心亟若也語曰歲克欲夙致心淨必亟者不能徐竢漸積尚未肇始輒欲見終亟造弗獲自誘不能因生怠棄事全廢矣

○一賢少年好學。而資性魯鈍。以爲憂戚視井幹堅石繩跡甚深自謂曰石性甚堅繩甚細以種漸能深之雨滴無力密落鑿石我性雖鈍恃天帝之祐怠孰勤豈不能練精之以此一念痛自激發漸致盛德當世莫或勝之

○有覺無靈者如蟻爾怠者盡視蟻盡思其道路法其智慧無主無師。無師夏時知斂藏夏後之食蟻行悉足愧怠者。爲勤敏者儀也夏時收藏

示不失營業之幾也。先備異日之用示遠慮備豫之智也爲物微眇取義于謙愈謙愈智也群蟻相助示其實行仁愛也往來不絕示其恒毅作業不息也嚙穀之芽俾不萌生朽壞示能豫絕險幾訓人克己去私無滋蔓也陰時匿穀示無益之時斂藏德美以避失墜也晴時曬曝示有益之時顯明其善德用以勸化衆人令讚事上帝也身負重任示其慈愍不辭勞罷也共收共用示其公共不貪不吝也蟻行若此至美矣其行之也無主師可從無師傅可習無刑戮可畏無賞賚可勸我儕有本性之靈可用有上帝之默牖可據有先聖賢訓箴實行可聽從。有地獄之永殃可畏有天堂之永報可望而頹然自廢。坐失今世積德立功之幾不思將來患不欲當目下暫時之微勞以免身後永世之苦不甚愚哉

○世人之勤敏於俗事亦甚足愧我之怠於上帝事也。世人勤名利圖安樂靡所弗至不惜勞苦不計歲月至其行德致道事上帝遇微勞輟之遇他務奪之非甚暇本欲廢。不能營他業之日不舍之商賈梯航遍山海蹈水火走天際逃貧趨富求以護命因而失命者甚衆度海之舟。九沈一浮彼九者不足懼沮之此一者顧足誘勸之以大勞致微樂以微樂又屢致永年之苦殫竭既久得聚財忽死遂不獲暫享之。我儕以微勞能致永年之樂費一而得萬力微功鉅勞暫享永倘懶營之彼就死而勤。且樂。我就命而怠且厭。彼勤於損。我怠於益不甚羞歟。

○德士之事上帝建功積德之勤敏勞苦敵邪惑之勇毅甚足警我怠勵我勤也凡聖賢修德者皆曰敵邪魔之誘惑煽惑忍小人之忌妬誹謗譏當疾病匱乏之患克性欲輕世俗食飲薄陋。少眠多醒。少笑多哭。痛自刻責仇視其身謝世娛樂輕身命重道德恒泣悔所犯過羞愧所未行善故實修之士其勞苦無輟時經云凡欲以仁心事上帝者必受苦難窘迫也

○一國王甚信佛其一臣甚信上帝王強之背上帝禮敬佛不從曰臣今日不忠上帝明日安能忠大王乎

○生人至寶無貴于時凡物皆不可爲我物獨時實爲我物也怠能奪我時仇之邪魔也夫時爲重寶

者何故。物少爲貴時已過不可返未來不可求。物無有疾過迅行如時者既過百年一刻埒焉將來之時在前人視之最長既過而在後必視之甚短矣且雖百歲之壽以死後無限年視之尙未足一息爲長哉恒聽定時鏡聲即反諸己上帝定我生期今過一時矣以此念自策其怠激於善行也賤時貴世寶者有地獄永殃矣貴時賤世寶勤善行者有天堂天報故嗇財小人之罪嗇時君子之德也

○上帝賜我時以使行善改惡建功可並天神子天堂可免此大苦於地獄云々夫時悉上帝惠爾終身黽勉事之尙不足酧矧即用之以行非義悖神命哉時刻愼勿輕費之虛言虛行時甚不還上帝所賜以行善建功虛費之上帝必嚴鞠致罪人之命時刻而已矣時者失命也盡用之事上帝行實德學正道則以今世之命續身後之命命永々不既矣怠於善者身後之命不能享今又用其時故上帝奪之如栽木者久待不實則不摧之爲薪乎是以怠人者今世與後世之命並失矣

○成就萬事者恒毅心而已怠能奪之。故事敗功滅前業悉廢矣善始未善也善終善也終年之惡足消于一末日之善終年之善足喪于一末日之惡一生之業孰爲急非終日之業乎凡柔者業未訖先止焉。

○夫怠者之心。甚分故其願慮事業。不能恒久如一也。覺御心有微勞則遺之隨欲肆遊無顧焉怠者之心業欲和于一猶膠破瓦器不得堅固隨復散焉

○夫閒暇怠惰之窩侶諸惡之母也邪魔邪感穢欲之鵠也。鳥生以飛。人生以勞。上帝鳥傳之兩翼。人傳之兩手也。鳥飛弋人何篡焉。棲乃援弓射之矣。水沸蠅去之。溫且寒。則就之流水生嘉魚潦水生蛙蛇室曠易朽縮克於美液惡者莫能入之萬物盡然。人營業時。邪念無所自入故邪魔去之暇時乃就而煽惑焉傷其心命虛其功德亡其天報矣

○怠者好閑又不耐閑故以閑爲樂復以閑爲憂既樂且憂遂蕩於萬欲焉

○夫耳目口鼻皆節於聽視食齅即寢寐亦節。其中念象亦清潔矣急者之耳目諸官皆恣於行其寐口之念慮形象。能無穢汚乎

○或曰我事甚繁無晷刻暇而邪念穢欲不獲衰止何故。曰世之煩勞。上帝以爲甚閑明目人不見實理謂之瞽世之智慧上帝以爲愚煩勞於世事之人上帝以爲至閑也譬諸兒童以竹爲馬泥爲室跨馬造室自視甚勞不獲閑。人視之不甚閑乎凡造作事業非向于上帝及顯上帝之榮名及身後之永命非益己德乃益他人之德雖世俗以爲大事急事眞智人視之亦皆兒童跨竹之類耳矧上帝及天神乎

○人擇術所須視者三其一善也。善業雖多但以克人欲修正道事上帝務豫備身後永年之事至爲急也其一有益也務閑事以除閑不甚可笑乎能消此日之憂致此日之樂未遑爲益業也業既畢必遺益於心德增我實學乃足爲敵閑之益業耳其一不奪心也內業者本業。德士瑩精圖之。其于外事借心不寄心即務外行無傷內心恒懷向上帝向道德之眞慮耳。雖息於外務不已於善慮謂之靜謐弗謂閑暇也此則息於外務之爲至務矣

○獨暇者能識上帝非懈怠之暇也。靜謐之暇也。獨居時乃最不獨何也獨居則寂於外務善慮道願益密益純我心恆偕上帝詎獨乎

○夫怠者之害遲遲遷善其一也勿遲遲歸依上帝云云人壽期悉由上帝非人可爲也

○有德士上帝賜之寘觀世人之情初見一人盛水于罌此入彼出纖悉不存天神解之曰是爲行善于此造惡于彼者善行所積功德旋以惡行毀敗之次見兩人橫抱一長大木欲入上帝殿也爭先莫肯後進並不能入焉示傲人者皆不能入天堂也次復見一人採薪累積之。既積欲負以行。覺力不及姑置之復採而益之天神解曰此則怠人之邪情罪惡甚多覺今難克難改姑待來年改之。而其罪又多他罪增他惡後欲改不愈難哉。故明日一言正鬼魔之言也

○備死後永年之事生人至急矣豫備者爲大智死期已至靈神欲行邪魔來肆攻。上帝涖聽訊鞠始求正道行善備德克惡悔罪祈上帝豈不甚難哉善營事者事急先之事緩後之心德及身後之事最急矣最後之可謂智乎。

○近死之時阻碍尤多身之疾病楚痛妻子之依戀世事

之別離所犯罪惡之畏慮死後訊鞠及求殃之怖懼。皆擾我心最深臨終之時邪魔之攻伐更堅。心慮更昧歸善改惡之意豈易至哉云々生忘上帝死上帝使忘己生時簡忽上帝死時上帝必簡忽之

○一商人鳩聚數載積財甚豐或問何法致之答曰非義之財不使入我門今日所能造不待明日自所能造不委他人也能用此三箴自修必於暫時可就大德矣

○今世人勤俗事怠善德其故有三一則心無主可敬從一無道可履蹈。一無罰可畏無賞可望也。何謂無主天地有宗主人能識之敬事之即善有所趨向有所據依故行大小善之根悉在信識天壤中有主。虔誠奉尊之。萬世聖賢行道德之箴以事萬物眞主爲本欲行善而舍此眞主。善無根本似而實非或則微眇。無報於天矣。人心無主如天無樞舟無舵進退無度。行動淆亂無準焉故不識眞主爲諸惡之根源也何謂無道可履蹈。夫正道必出於上帝亦自趨向於上帝也。弗知所從出所趨向安能知道乎。夫生人之亟務莫如求正道爾娶妻求賢女買田求沃土百凡世物

世事亡不求精良盡其靈智計畫。不辭勞苦不惜時與費冀得之。獨求道即否無論善惡不辨正邪輒取之物有眞贋盡意求眞道更有邪正何不盡意求正焉市贋物則失微價。循僞道則失上帝失眞德失天報失功勳而終必不免上帝之怒受上帝之殃所失孰大乎何謂無罰可畏無賞可望邪魔者我輩之劇寇也。其計慮所向全在喪人德淪人於罪惡其所用籌策至酷者在令人誤信善德身後無應報罪惡死後無罰殃也我輩皆勤愼於小事怠惰於大事所以然者惟不知實命實福所在也。世人言曰人與獸至竟如一兩者之勢均矣凡物絕息之理一也人無加於獸皆以土摶捖而成卒歸於土誰知人靈上陟而獸魂下降世人誤信此言故恣於萬罪怠於諸善也云々除應報之望更有何法以勸衆善警衆惰乎

○世有知者魔或不能令信德行無身後之應報則又設一策誑之曰。行善而望天報此非德乃利矣爾行德不冀天德不尤精美乎此言似高遠引人進於至德其實使人離於實德誘人恣行諸惡者何者行德爲德此物此志洵美矣第非聖人弗及

此也即聖人之行德也其大意悉爲上帝爲德矣亦何嘗不望於死後之報況衆人乎非望益安能策怠當行德之苦謝隨世之樂非畏害安能去惡克己哉今信有主有報者。獨難勗于精修。況去主去報歟是以德行所忌惟世報之望而已以德望報於世德性遂虛此與非德乃利矣若天堂正爲衆人之本鄉永命之所天神及聖賢之境界。人昇之能見上帝之本體定於善不能受害凡人心所願美好悉得于此所上帝生人令行善者冀望之願得之求就之。正大德耳而反以爲利眞邪魔欲令人溺惡怠善之誣語耳邪魔陰網非一使人或脫于彼復絓于此焉。

○或曰向聞天堂地獄之說竊謂此實至理萬不可疑。又聞上帝至言極能策人於怠廻人於善弗敢不實信之今世所由致疑者。聞天堂爲諸福樂所地獄爲諸苦難所未知其福樂苦難之態云何與世間福樂苦難是同是異。世又特知能覺苦樂者爲有五官故。未知身內神靈既離本形不能視聽齅嘗覺知云何復能受苦受樂使人明悟其實信天堂地獄之賞罰因而行善改過棄異端事上帝不甚易歟

○答曰上帝所以造人何爲乎則使之據所賜理心善事上帝而後歸於天境得見上帝本體享其福樂以是得其性之全福焉夫人有神靈有形軀兩相締結。成爲全體惟神與形體性既異作用亦殊所享福樂各從其類耳。身以形用不能覺知其所福樂皆形福樂。不必盡暢於神靈也。神者神用。其所福樂亦神樂福樂。亦不必盡適於形矣夫靈神者一身之宗主其作用則有明悟愛欲此二能者實爲神靈之手足也。明悟者審物理辨事宜別善惡之端使人知所趨避欣樂効動以求實理如水流行常運不已故稱神靈之足運動之謂也此爲生人最要之能最先之用故人性所願欲無急於明悟實理矣。愛欲者。愛惡。異望。善怒也。既獲所欲獲則安靜慰樂享受之如山屹峙不復移易故稱神靈之手握固之謂也二能既滿吉福豈不完滿乎

○靈神既飽飫於眞福其光輝吉樂之末因達於肉身肉身之福據其本性亦備足矣此非口舌可詳今姑以世所謂福者畧喩之夫外身精神強固百疾不侵氣度舒和。體貌麗美。內之神心靈明睿智。事物萬理澄徹會通。視聽言動。不爲物引克積於德大定於善

加以富厚○尊貴○顯榮安樂、此則世所謂身中身外吉祥善事者○夫此種々諸福在此塵世也、則暫福也居世之人、又僅獲其纖毫耳○在天則永居天堂者正得其眞與全矣蓋肉身一入此境無受損害常生不死○百體强固全備四肢相稱○無餘無虧發大光明七倍於日、周旋六合不待俄頃透出入石了無留礙非若今之肉身饑思食渴思飮寒思衣勞思逸必有待而然也○若其靈心悉得洞曉無復疑礙大定於善無復更易寓於靜天○靜天之境高峻盛麗固非世主珍寶玩好瓊宮瑤臺所可彷彿其萬一與天神及萬世之聖神相爲伴侶相爲兄弟相親相愛如一身心其是其非共愛共惡人所願惟上帝所願分外之願自不復容自不復起凡巨細願無或不遂有所欲爲賴上帝之全能無不能爲此其富足安逸尙矣居天堂者皆是上帝鍾愛之子○天神契慕之交○尊與榮又孰大乎

○曰人形軀旣死入棺入墓腐朽無存安能又受若此之福耶曰血肉之軀今雖速朽歸復於土亦有日復生而與本神靈俱升於天堂受慶福也此則上帝親言不必他論以理論之亦有確然義據蓋靈神肉身兩相締結始成一人○凡一物相合莫如靈神肉身之最爲親切也○當其結合惟恐相離迨旣相離其欲復結以成全人矣故靈神獨立未合肉身之時雖享天堂之榮福然其性之自然猶未悉得慰滿焉上帝許一日諸神聖之神靈與原身復結滿其性願受全性之榮福亦不宜乎人爲善惡靈神不能獨作必藉肉身爲助故褒貶賞罰宜與受之然若使靈神獨受賞罰則上帝至公至平之義必不出此矣

○所謂復生之肉身非上帝更爲造一肉身乃與神靈原結合之肉身也蓋人生時靈與身共爲善惡故天帝約令復生之日共受其報苟離于原身更造一身而加之以原身所爲善惡之報此猶罰無罪有罪賞無功棄有功豈上帝至公至平之義哉是以目下形軀雖或焚成灰燼或朽成浮虛化歸於土上帝自有全智全能初能于無中造成天地萬物今亦能於無中造成衆人靈神取灰燼浮塵變成人之原身何謂不能乎○今生所闕損一切皆蒙補益增減適中氣力狀貌全獲壯盛端嚴美好○上帝以大能潤飾之無一切病患無復死非若今時重濁之體無翼而飛不行而至神透一切堅實之物悉能透

達無レ有ニ滯礙一穿レ山入レ石其他上帝所レ惠聖神之能德莫レ可ニ數計一

○天堂安ニ於靜天九重天之上一最爲ニ淸朗一地獄置ニ於地中最下之處一最汚暗也其苦難之態固非ニ口舌可レ罄ニ其萬一一也

○曰地獄中受レ苦者其肉身亦復生否。曰。衆聖神之肉身後生時地獄之人亦同復ニ其原身一也

○一國臣民多下敬ニ信上帝一者上主新即レ位介曰諸臣偕レ我事レ佛者官位如レ故否悉逐去。諸臣中有下不レ背ニ上帝一者上皆棄レ位去有下戀ニ官位一者上內信ニ上帝一外若ニ王命一向レ佛禮ニ拜之一王遽命去者悉還ニ官レ之其外順ニ王命一者盡逐レ之曰爾曹不レ忠ニ于天地大主一而忠レ我乎今向ニ微利一棄ニ大主一遇レ利豈不レ棄ニ小主一乎

書入ニ曰ク（張紙）

人於レ我無レ取。我於レ人有レ取。我於レ人無レ益。人於レ我有レ益。於レ是乎知。我道之最大焉

アッタネ語

能攝生者。當ニ先除ニ六害一。一曰薄ニ名利一。二曰禁ニ聲色一。三曰廉ニ貨財一。四曰損ニ滋味一。五曰屏ニ虛妄一。六曰除ニ嫉妬一。

右養生要訣

室松岩雄
保持照次
信田重並　校

本教外編下終

明治四十四年六月十五日印刷
明治四十四年六月二十日發行

定價金貳圓也

著作權所有
不許飜刻複製

編輯者　室松岩雄
東京市麹町區飯田町五丁目八番地
發行者　三里半七
東京市神田區松下町七、八番地
印刷者　横田五十吉
東京市神田區松下町七、八番地
印刷所　横田活版所
東京市京橋區南鍋町二丁目七番地
製本者　由美直之助

東京市麹町區飯田町五丁目八番地
發行所　一致堂書店